

金井東裏遺跡

《近世・弥生・縄文時代編》

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)単独7軸道路整備推進事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

金井東裏遺跡

—近世・弥生・縄文時代編—

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)単独7軸道路整備推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一八

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



金井東裏遺跡

《近世・弥生・縄文時代編》

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)単独7軸道路整備推進事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2018

群 馬 県 渋 川 土 木 事 務 所

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本報告書は、群馬県渋川市金井に所在し、上信自動車道の金井バイパス建設工事に伴い発掘調査された金井東裏遺跡(近世・弥生・縄文時代編)の調査報告書です。本遺跡の発掘調査は、群馬県渋川土木事務所の委託を受けて、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成24年9月から平成27年10月にかけて実施したものです。

金井東裏遺跡は、榛名山の東側山麓末端に位置していますが、同山が6世紀初頭に噴火した時に堆積した火山灰層の中から、古墳時代の冑を装着した人骨が全国でも初めて発見されたため、マスメディアでは連日にわたって大きく報道されると共に、多くの研究者や一般市民の方々からも大きな注目を集めました。そして、その後の金井東裏遺跡をはじめとした周辺遺跡の調査により、当地域が古墳時代首長の拠点であったことも判明しつつあります。

金井東裏遺跡では、こうした古墳時代の調査成果だけでなく、その上位面から検出された近世以降の溝状遺構は、当時の土地区画状況を示していますが、当遺跡に近接した江戸時代の土地区画を残すとされる金井宿の地割とは異なっており、その再検討を促す資料となるでしょう。また、下位面からは2～3世紀の弥生時代集落が検出されていますが、大規模になることが想定され、前述した古墳時代の基盤を形成するものとして注目されます。さらにその下位には、6,500～3,500年前の縄文時代前期～後期の集落も存在しており、当遺跡が古来より生活適地として人々に利用され続けてきたことも明らかとなりました。

本報告書は、古墳時代を除く近世以降・弥生時代・縄文時代の調査成果についてまとめたものです。こうした調査成果は、当地域だけではなく古代東国の歴史を研究・解明するためには必要不可欠なものですが、学校・社会教育や生涯学習の教材としても広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書の作成に至るまで、渋川土木事務所をはじめ群馬県教育委員会、渋川市教育委員会、ならびに地元関係者の皆様には多大なご指導、ご協力を賜りました。本報告書の上梓に際し、関係者各位に心から感謝を申し上げて、序といたします。









平成30年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 野 三 智 男

例 言

- 1 本書は、(国) 353号金井バイパス(上信自動車道)単独7軸道路整備推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「金井東裏遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の所在地は、群馬県渋川市金井1721番地・他である。
- 3 当遺跡の調査面積は、20,990㎡である。
- 4 事業主体 群馬県渋川土木事務所
- 5 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 発掘調査の体制及び期間は下記の通りである。
 - (1)発掘調査担当
 - ・平成24年度：友廣哲也・麻生敏隆(上席専門員)、杉山秀宏・山中 豊・宮下 寛(主任調査研究員)
 - ・平成25年度：友廣哲也・関根愼二(上席専門員)、杉山秀宏・都木直人・須田正久・山中 豊・宮下 寛(主任調査研究員)
 - ・平成26年度：友廣哲也・菊池 実(上席専門員)、須田正久・山中 豊・小野 隆・石坂 聡(主任調査研究員)
 - ・平成27年度：山中 豊(主任調査研究員)、原 雅信(専門調査役)
 - (2)発掘調査期間
 - ・平成24年度：平成24年9月1日～平成25年3月31日
 - ・平成25年度：平成25年4月1日～平成26年3月31日
 - ・平成26年度：平成26年5月1日～5月20日、平成27年2月4日～3月3日
 - ・平成27年度：平成27年9月18日～10月19日、平成28年2月3日～3月17日
- 7 当報告書作成に係る整理事業の体制及び期間は下記の通りである。
 - (1)整理担当
 - ・平成25年度：飯森康広(専門員(総括))
 - ・平成26年度：大西雅広(上席専門員)、石田典子(主任調査研究員)
 - ・平成27年度：石坂 茂(専門調査役)
 - ・平成28年度：石坂 茂(専門調査役)
 - (2)整理事業期間
 - ・平成25年度：平成26年2月1日～平成26年3月31日
 - ・平成26年度：平成26年12月1日～平成27年3月31日
 - ・平成27年度：平成27年4月1日～平成28年3月31日
 - ・平成28年度：平成28年4月1日～平成29年3月31日
- 8 報告書作成関係者
 - (1)編集 石坂 茂
 - (2)執筆 杉山秀宏(第1章1・2)、石坂 茂(前掲以外)
 - (3)石器・石製品観察表と写真撮影 津島秀章(資料2課長)、石田典子(主任調査研究員)
 - (4)縄文・弥生土器観察表と写真撮影(下記以外含む) 石坂 茂
 - (5)近世遺物観察表 徳江秀夫(資料部長)、大西雅広(上席専門員)
 - (6)金属製品遺物観察表 関 邦一(補佐(総括))

(2)平・断面図中のスクリントーンは、以下の内容を表示している。

 叩き床状の硬化面、 焼土・被熱痕、 草木根や小動物の攪乱、 地山埋没自然礫、
 Hr-FA、 Hr-FP、 炭化物、 崩落痕


(3)平・断面図中の遺構略称およびローマ字表記については、以下の内容を表示している。

○住：住居、P○：住居柱穴、○坑：土坑、○P：ピット、○竪穴：竪穴状遺構、○配石：配石遺構、○集石：集石遺構、○焼土：屋外焼土遺構、○埋設：屋外埋設土器、○溝：溝状遺構、○方周：方形周溝遺構、P＝土器、S＝石器または自然石。

5 遺物実測図の表記内容については下記の通りである。

(1)縮尺については各図右下に表示してあるが、表示縮尺と異なるものが混在する場合は、表示スケールの上位に当該遺物番号と縮尺を別記した。

(2)土器断面図中の記号およびスクリントーンは、以下の内容を表示している。

▲接合痕、●繊維含有、 赤色塗彩

(3)石器実測図中のスクリントーンは、以下の内容を表示している。

 磨り面・摩耗面、 石材の節理面、 方向性のある使用痕

6 遺物観察表の記載については、下記の通りである。

(1)土器の色調や胎土夾雑物の粒径については、農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1997年度版を用いた。

(2)縄文原体の分類・表記法については、山内清男博士の「先史土器の縄紋」に準拠している。ただし、複節縄文や直前段合攪り縄文などの文章スペース的に記号化が困難なものについては簡略化し、観察表冒頭の「縄文原体分類一覧」にその内容を記載した。

(3)縄文・弥生土器の胎土については、A類～K類までに11大別し、さらに各類を48に細分してアルファベット＋数字記号により欄内に記載しているが、その分類内容は観察表冒頭に表示してある。尚、各分類はルーペ使用の肉眼観察による相対的なものである。

(4)出土位置の「+」表記は、当該遺構の床面や底面からの浮上高をcmで表示した。

(5)計測値の()表記は、推定値を表す。

(6)各遺構内から出土した遺物のうち、その遺構には伴出し得ない明確に時期の異なる混在遺物については、遺物包含層や遺構外からの出土遺物として一括した。

7 各遺物写真の縮尺は、おおむね実測図と同縮尺としている。

8 本書中に掲示した地形図等については、国土地理院発行の2万5千分の1地形図及び5万分の1地形図を使用しているが、その詳細については各図のキャプション末尾に記載してある。

9 本報告書を作成するにあたり、発掘調査時点で土坑およびピットに比定した遺構について、その規模・形状・埋没土層・出土遺物等の内容を詳細に検討した結果、小動物や草木等の非人為的土壌攪乱に起因すると判断されるものを欠番とした。また、一部の土坑とピットの名称・分類に混乱があったことから、その種別変更と先の欠番の内容を併せて別表1・2に記載した。

別表1 土坑の内容・欠番等変更一覧

区	番号	時代	位置		変更内容		区	番号	時代	位置		変更内容		区	番号	時代	位置		変更内容	
			座標X	座標Y	種別	新番号				座標X	座標Y	種別	新番号				座標X	座標Y	種別	新番号
1	212	弥生	57892	-75496	欠番		7	401	縄文	57725	-75548	ピット	485	7	493	縄文	57780	-75515	ピット	509
1	220	縄文	57884	-75502	欠番		7	406	縄文	57726	-75546	欠番		7	498	縄文	57785	-75522	ピット	510
1	222	縄文	57880	-75504	欠番		7	411	縄文	57726	-75547	ピット	486	7	499	縄文	57779	-75521	欠番	
1	223	縄文	57882	-75506	欠番		7	413	縄文	57716	-75555	欠番		7	500	縄文	57776	-75526	欠番	
1	226	縄文	57870	-75502	31住柱穴	P3	7	414	縄文	57717	-75554	欠番		7	501	縄文	57776	-75525	欠番	
1	227	弥生	57863	-75501	欠番		7	415	縄文	57727	-75550	欠番		7	502	縄文	57777	-75520	ピット	511
1	228	弥生	57862	-75502	ピット	462	7	416	縄文	57722	-75548	欠番		7	503	縄文	57776	-75519	ピット	512
1	229	弥生	57863	-75508	欠番		7	423	縄文	57723	-75545	欠番		7	504	縄文	57777	-75518	欠番	
1	230	弥生	57855	-75505	ピット	463	7	427	縄文	57736	-75543	欠番		7	505	縄文	57776	-75518	欠番	
1	231	弥生	57856	-75505	欠番		7	430	縄文	57794	-75520	ピット	487	7	506	縄文	57776	-75516	欠番	
1	232	縄文	57855	-75504	住居	83	7	431	縄文	57793	-75519	ピット	488	7	508	縄文	57773	-75520	欠番	
1	233	弥生	57854	-75512	ピット	464	7	432	縄文	57792	-75511	ピット	489	7	509	縄文	57773	-75520	欠番	
1	234	弥生	57864	-75504	欠番		7	433	縄文	57792	-75518	欠番		7	510	縄文	57774	-75514	欠番	
1	235	弥生	57863	-75504	欠番		7	434	縄文	57791	-75518	ピット	490	7	511	縄文	57774	-75514	欠番	
1	236	弥生	57864	-75506	ピット	465	7	435	縄文	57791	-75520	欠番		7	513	縄文	57730	-75547	欠番	
1	239	弥生	57856	-75505	ピット	466	7	437	縄文	57790	-75520	欠番		7	514	縄文	57721	-75544	欠番	
1	241	縄文	57861	-75501	ピット	467	7	438	縄文	57789	-75520	欠番		7	515	縄文	57722	-75544	欠番	
2	34	弥生	57919	-75496	欠番		7	439	縄文	57789	-75520	欠番		7	516	縄文	57722	-75544	欠番	
2	115	縄文	57933	-75946	欠番		7	440	縄文	57788	-75520	欠番		7	517	縄文	57767	-75517	欠番	
4	275	弥生	57987	-75491	ピット	468	7	441	縄文	57788	-75520	欠番		7	518	縄文	57713	-75545	55住柱穴	P21
4	279	縄文	57983	-75500	ピット	469	7	442	縄文	57789	-75521	欠番		7	520	縄文	57723	-75550	ピット	513
4	281	縄文	57992	-75493	欠番		7	443	縄文	57789	-75521	欠番		7	521	縄文	57724	-75551	欠番	
4	289	縄文	57991	-75499	欠番		7	444	縄文	57790	-75521	欠番		7	522	縄文	57723	-75552	欠番	
4	290	縄文	57991	-75499	欠番		7	445	縄文	57790	-75521	欠番		7	523	縄文	57724	-75549	ピット	514
4	292	縄文	57986	-75505	欠番		7	446	縄文	57792	-75521	欠番		7	524	縄文	57723	-75553	欠番	
4	293	縄文	57989	-75496	ピット	470	7	447	縄文	57791	-75522	欠番		7	528	縄文	57751	-75537	欠番	
4	295	縄文	57991	-75498	欠番		7	448	縄文	57791	-75523	欠番		7	530	縄文	57787	-75	欠番	
4	297	縄文	57989	-75490	欠番		7	449	縄文	57791	-75524	ピット	491	7	531	縄文	57788	-75526	ピット	515
4	300	縄文	57988	-75497	欠番		7	450	縄文	57789	-75523	欠番		7	532	縄文	57789	-75525	欠番	
4	312	縄文	57992	-75488	ピット	471	7	451	縄文	57789	-75523	欠番		7	533	縄文	57793	-75521	欠番	
4	313	縄文	57989	-75484	欠番		7	452	縄文	57786	-75524	欠番		7	534	縄文	57791	-75510	欠番	
4	315	縄文	57982	-75503	ピット	472	7	453	縄文	57789	-75522	ピット	492	7	535	縄文	57789	-75511	欠番	
4	316	縄文	57994	-75488	欠番		7	454	縄文	57788	-75522	ピット	493	7	536	縄文	57790	-75513	欠番	
4	317	縄文	57993	-75489	欠番		7	455	縄文	57787	-75522	ピット	494	7	537	縄文	57790	-75525	ピット	516
4	318	縄文	57988	-75497	欠番		7	456	縄文	57786	-7555	欠番		7	538	縄文	57586	-75817	欠番	
4	319	縄文	57984	-75505	欠番		7	457	縄文	57785	-757585	欠番		7	539	縄文	57786	-75524	欠番	
4	320	縄文	57983	-75505	欠番		7	458	縄文	57784	-75521	欠番		7	540	縄文	57770	-75524	住居	82
4	321	縄文	57991	-75485	欠番		7	459	縄文	57784	-75585	欠番		7	541	縄文	57788	-75510	欠番	
7	140	縄文	57697	-75540	欠番		7	460	縄文	57787	-75523	欠番		7	542	縄文	57768	-75524	欠番	
5	143	縄文	57701	-75540	ピット	461	7	461	縄文	57788	-75523	欠番		7	543	縄文	57786	-75520	欠番	
5	144	縄文	57697	-75537	23住柱穴	P2	7	462	縄文	57787	-75521	ピット	495	7	544	縄文	57787	-75524	欠番	
5	145	縄文	57700	-75548	23住柱穴	P1	7	463	縄文	57786	-75519	欠番		7	545	縄文	57782	-75523	欠番	
7	350	縄文	57775	-75527	ピット	473	7	464	縄文	57787	-75519	欠番		7	546	縄文	57758	-75536	欠番	
7	353	縄文	57772	-75525	ピット	474	7	465	縄文	57581	-75518	ピット	496	7	547	縄文	57786	-75525	欠番	
7	354	縄文	57771	-75525	ピット	475	7	466	縄文	57781	-75517	ピット	497	7	548	縄文	57778	-75515	ピット	517
7	355	縄文	57775	-75523	ピット	476	7	467	縄文	57781	-75517	ピット	498	7	549	縄文	57778	-75514	欠番	
7	356	縄文	57773	-75524	欠番		7	468	縄文	57782	-75517	ピット	499	7	550	縄文	57728	-75543	欠番	
7	360	縄文	57773	-75526	欠番		7	469	縄文	57783	-75517	ピット	500	7	551	縄文	57727	-75543	欠番	
7	363	縄文	57767	-75528	ピット	477	7	470	縄文	57783	-75517	欠番		7	552	縄文	57725	-75541	欠番	
7	364	縄文	57766	-75527	ピット	478	7	471	縄文	57786	-75523	欠番		7	553	縄文	57726	-75542	欠番	
7	365	縄文	57766	-7553	ピット	479	7	472	縄文	57785	-75522	ピット	501	7	554	縄文	57722	-75537	欠番	
7	367	縄文	57765	-75529	ピット	480	7	475	縄文	57794	-75521	ピット	502	7	555	縄文	57722	-75537	欠番	
7	369	縄文	57771	-75524	ピット	481	7	476	縄文	57783	-75521	ピット	503	7	556	縄文	57772	-75777	欠番	
7	370	縄文	57775	-75521	ピット	482	7	477	縄文	57785	-75520	欠番		7	557	縄文	57780	-75526	欠番	
7	373	縄文	57729	-75524	欠番		7	478	縄文	57785	-75520	ピット	504	7	558	縄文	57757	-75537	欠番	
7	377	縄文	57728	-75523	欠番		7	479	縄文	57788	-75521	ピット	505	7	560	縄文	57785	-75515	欠番	
7	379	縄文	57743	-75539	欠番		7	480	縄文	57786	-75522	ピット	506	7	561	縄文	57785	-75515	欠番	
7	380	縄文	57744	-75538	欠番		7	481	縄文	57787	-75520	欠番		7	568	縄文	57757	-75526	欠番	
7	384	縄文	57744	-75538	欠番		7	482	縄文	57787	-75520	欠番		7	569	縄文	57560	-75525	欠番	
7	385	縄文	57744	-75538	欠番		7	483	縄文	57789	-75519	ピット	507	7	570	縄文	57750	-75530	欠番	
7	386	縄文	57720	-75549	欠番		7	484	縄文	57784	-75518	欠番		7	586	縄文	57772	-75519	埋設土器	2
7	387	縄文	57720	-75549	欠番		7	485	縄文	57784	-75518	ピット	508	7	588	縄文	57770	-75523	ピット	518
7	388	縄文	57721	-75549	欠番		7	486	縄文	57785	-75518	欠番		7	590	縄文	57745	-75539	欠番	
7	390	縄文	57718	-75550	ピット	590	7	487	縄文	57787	-75519	欠番		7	592	縄文	57784	-75521	欠番	
7	391	縄文	57713	-75555	ピット	483	7	488	縄文	57786	-75521	欠番		7	593	縄文	57786	-75524	欠番	
7	392	縄文	57725	-75550	欠番		7	489	縄文	57786	-75520	欠番		7	594	縄文	57789	-75553	欠番	
7	394	縄文	57725	-75552	ピット	484	7	490	縄文	57780	-75518	欠番		7	598	縄文	57789	-75509	欠番	
7	396	縄文	57726	-75550	欠番		7	491	縄文	57781	-75518	欠番		7	399	縄文	57727	-75548	欠番	

目次

序	(8)遺構外の出土遺物・・・・・・・・・・	112
例言	4. 縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・	143
凡例	(1)竪穴住居・・・・・・・・・・	143
目次	(2)竪穴状遺構・・・・・・・・・・	230
挿図・表・写真図版目次	(3)土坑・・・・・・・・・・	230
	(4)掘立柱建物とピット状遺構・・・・・・・・	296
第1章 発掘調査の概要	(5)配石遺構・・・・・・・・・・	305
1. 調査に至る経緯・・・・・・・・・・	(6)集石遺構・・・・・・・・・・	315
2. 調査の方法と工程・・・・・・・・・・	(7)屋外埋設土器・・・・・・・・・・	317
	(8)焼土遺構・・・・・・・・・・	319
第2章 遺跡の立地と環境	(9)溝状遺構・・・・・・・・・・	320
1. 地理的環境・・・・・・・・・・	(10)遺構外の出土遺物・・・・・・・・	323
2. 歴史的環境・・・・・・・・・・	5. 旧石器時代の調査・・・・・・・・	384
3. 基本層序・・・・・・・・・・		
第3章 遺跡の調査内容	第4章 自然科学分析	
1. 検出された遺構の概要・・・・・・・・	1. 金井東裏遺跡の近世人骨・・・・・・・・	386
2. 近世以降の遺構と遺物・・・・・・・・	2. レプリカ法による弥生土器種実圧痕	
(1)墓坑・・・・・・・・・・	の同定・・・・・・・・・・	400
(2)土坑・・・・・・・・・・	3. 縄文時代炭化種実の放射性炭素年代測定	
(3)ピット状遺構・・・・・・・・・・	(AMS測定)・・・・・・・・・・	408
(4)溝状遺構と自然流路・・・・・・・・	4. 縄文時代黒曜石製石鏃の蛍光X線分析による	
(5)畠状遺構・・・・・・・・・・	石材原産地同定・・・・・・・・	410
(6)遺構外の出土遺物・・・・・・・・		
3. 弥生時代の遺構と遺物・・・・・・・・	第5章 調査の成果と課題・・・・・・・・	420
(1)竪穴住居・・・・・・・・・・	遺物観察表・・・・・・・・	423
(2)壺棺墓・・・・・・・・・・		
(3)土坑・・・・・・・・・・	報告書抄録	
(4)掘立柱建物とピット状遺構・・・・・・・・		
(5)集石遺構・・・・・・・・・・		
(6)溝状遺構・・・・・・・・・・		
(7)土器集中出土地点・・・・・・・・		

挿図目次

第1図	発掘調査範囲と調査区名称 (「渋川市都市計画図其8」1/2500使用) 2	第54図	2区2号住居 78
第2図	遺跡の位置 (国土地理院1/25000「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用) 5	第55図	2区2号住居出土遺物 79
第3図	周辺の遺跡分布 (国土地理院1/25000「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用) 7	第56図	2区12号住居(1) 80
第4図	遺跡の基本土層 12	第57図	2区12号住居(2) 81
第5図	墓坑(1)[1区39号、7区1・3～5・38号、8区11・13・29・32・ 36・37号] 16	第58図	2区12号住居出土遺物 82
第6図	墓坑(2)[8区12・14・15・17・18・20・21・24・26～28・33・34 号] 18	第59図	2区12号住居(3) 83
第7図	墓坑(3)[8区16・19・22・23・31・35号、9区2・6・7号、10 区8～10号] 20	第60図	4区4号住居(1) 84
第8図	墓坑出土遺物(1)[1区39号、7区1・3・4号] 21	第61図	4区4号住居(2) 85
第9図	墓坑出土遺物(2)[7区4・5号、8区12号] 22	第62図	4区4号住居(3) 86
第10図	墓坑出土遺物(3)[7区38号、8区14・16・17・19・20号] 23	第63図	4区4号住居出土遺物 87
第11図	墓坑出土遺物(4)[8区20・23・26・27号] 24	第64図	4区8号住居 88
第12図	墓坑出土遺物(5)[8区28・29号] 25	第65図	4区8号住居出土遺物 89
第13図	墓坑出土遺物(6)[8区29・33・34号] 26	第66図	4区27号住居 91
第14図	墓坑出土遺物(7)[8区34・35号] 27	第67図	4区27号住居と出土遺物(1) 92
第15図	墓坑出土遺物(8)[8区36・37号、9区2・6・7号] 28	第68図	4区27号住居出土遺物(2) 93
第16図	墓坑出土遺物(9)[9区7号] 29	第69図	4区33号住居 94
第17図	墓坑出土遺物(10)[9区7号、10区8～10号] 30	第70図	4区33号住居と出土遺物(1) 95
第18図	墓坑出土遺物(11)[10区10号] 31	第71図	4区33号住居出土遺物(2) 96
第19図	土坑(1)[1区54～62・67・69号] 35	第72図	7区44号住居出土遺物 96
第20図	土坑(2)[1区63～66・68・70～72・80・82～85号] 36	第73図	7区44号住居 97
第21図	土坑(3) [1区73～75・77～79・86～90・93～96・99・100号] 37	第74図	7区1号壺棺墓と出土遺物 98
第22図	土坑(4)[1区101～105号、2区1～3・5号、3区7・9・10号、 4区4・6・8号] 39	第75図	土坑(1)[1区211、2区31・32・36号] 100
第23図	土坑(5)[4区11～13・16～18号、5区52号、7区121・123・125・ 129・131号] 40	第76図	土坑(2)[2区33・35号、4区267・268A・268B・273・328・984号、 7区375・527・529・565・566・571・576・730号] 102
第24図	土坑(6)[7区98・124・126～128・130・132～135・165・166・ 169・171号] 42	第77図	土坑出土遺物(1)[2区31～33・36号、7区529・565・566・571・ 576号] 103
第25図	土坑(7)[7区167・168・170・172・174・258～260・689・690・ 794～796号、8区650・996・997号] 43	第78図	土坑出土遺物(2)[7区730号] 104
第26図	土坑(8)[8区651・652号、9区146～152・253～256号、10区242・ 243・245～247号] 45	第79図	ピット[2区28・29・31～33・39・42・45・46・69号、7区313・ 314号] 106
第27図	土坑(9)[10区244・248～252号、13区155～162号] 46	第80図	2区1・2号掘立柱建物 107
第28図	土坑(10)[13区163・164号] 48	第81図	集石と出土遺物 109
第29図	土坑出土遺物 48	第82図	4区30号溝状遺構 110
第30図	ピット[1区82号、7区366号、9区102号] 48	第83図	4区30号溝状遺構出土遺物 111
第31図	溝状遺構(1)[1区34～36号、2区5・6号] 51	第84図	土器集中地点と出土遺物 113
第32図	溝状遺構(2)[2区1～4号] 53	第85図	7区のグリッド番号と弥生時代遺構の分布 116
第33図	溝状遺構(3)[3区12・13号、4区7・8・18～20号] 55	第86図	7区遺構外出土弥生土器のグリッド別分布(1) 117
第34図	溝状遺構(4)[4区9～11・17・24・28号] 56	第87図	7区遺構外出土弥生土器のグリッド別分布(2) 118
第35図	溝状遺構(5)[4区21～23・29号、4号流路] 57	第88図	7区遺構外出土弥生土器のグリッド別分布(3) 119
第36図	溝状遺構(6)[4区14～16号、5区33号、7区37号] 58	第89図	1区遺構外出土器 121
第37図	溝状遺構(7)[7区42号] 60	第90図	2区遺構外出土器 122
第38図	溝状遺構(8)[7区43・44号、8区3号流路] 61	第91図	3区遺構外出土器 122
第39図	溝状遺構(9)[8区2号流路] 62	第92図	4区遺構外出土器(1) 123
第40図	溝状遺構(10)[9区39・48・49号] 63	第93図	4区遺構外出土器(2) 125
第41図	溝状遺構(11)[9区50・51号] 65	第94図	5区遺構外出土器 125
第42図	溝状遺構(12)[10区45号] 66	第95図	7区遺構外出土器(1) 125
第43図	溝状遺構(13)[10区46号] 67	第96図	7区遺構外出土器(2) 126
第44図	溝状遺構(14)[10区47号、1号流路] 68	第97図	7区遺構外出土器(3) 127
第45図	溝状遺構(15)[13区40号] 69	第98図	7区遺構外出土器(4) 128
第46図	溝状遺構(16)[13区41A・B号] 70	第99図	7区遺構外出土器(5) 129
第47図	溝状遺構出土遺物 70	第100図	7区遺構外出土器(6) 130
第48図	7区5号畠 71	第101図	7区遺構外出土器(7) 132
第49図	遺構外出土遺物 72	第102図	7区遺構外出土器(8) 133
第50図	弥生時代の竪穴住居分布図 74	第103図	7区遺構外出土器(9) 134
第51図	1区29号住居 75	第104図	7区遺構外出土器(10) 135
第52図	1区29号住居出土遺物 76	第105図	8区遺構外出土器 137
第53図	1区30号住居と出土遺物 77	第106図	9区遺構外出土器(1) 137
		第107図	9区遺構外出土器(2) 138
		第108図	10区遺構外出土器(1) 138
		第109図	10区遺構外出土器(2) 139
		第110図	13区遺構外出土器 139
		第111図	遺構外出土器(1) 141
		第112図	遺構外出土器(2) 142
		第113図	縄文時代の竪穴住居分布図 144
		第114図	1区31号住居 153
		第115図	1区83号住居 154

第116图	2区14号住居	154	第184图	8区75号住居出土遺物(2)	225
第117图	1区31・83号、2区14号住居出土遺物	155	第185图	8区76号住居と出土遺物	226
第118图	4区34号住居	156	第186图	8区78号住居と出土遺物	227
第119图	4区34号住居(1期)	157	第187图	8区79号住居	228
第120图	4区34号住居(2期)	158	第188图	8区79号住居出土遺物	229
第121图	4区34号住居(3期)	159	第189图	10区1号竪穴状遺構	230
第122图	4区34号住居(4期)	160	第190图	土坑(1)	
第123图	4区34号住居(5期)	161		[1区213~219・221・224・225・237・238・240号]	245
第124图	4区34号住居(6期)	163	第191图	土坑(2)[2区37~41・43・46・48・50・118号]	246
第125图	4区34号住居出土遺物(1)	164	第192图	土坑(3)[2区42・44・45・47A・47B・49・51・53・76・91・92・107・120号]	247
第126图	4区34号住居出土遺物(2)	165	第193图	土坑(4)[2区106・108~114・116・117・119・122・136・137・983号]	248
第127图	4区35号住居	166	第194图	土坑(5)[4区269・276~278・294・296・301・314・333・334・341号]	249
第128图	4区35号住居出土遺物	167	第195图	土坑(6)[4区270~272・274・282・283・286・287・298・307~310号]	250
第129图	5区16号住居と出土遺物	168	第196图	土坑(7)[4区280・284・285・288・291・299・302~306号]	251
第130图	5区17A号住居	169	第197图	土坑(8)[4区311・335~340・342号、5区138・139・141・142・981号]	252
第131图	5区17B号住居	170	第198图	土坑(9)[7区346・347・564・591・732・735~737・745・747~749号]	253
第132图	5区17A号住居出土遺物	171	第199图	土坑(10)[7区351・352・357~359・361・362・366・368・378・383・622・691・692号]	254
第133图	5区17A・17B号住居出土遺物	172	第200图	土坑(11)[7区381・382・389・393・395・397・398・410・418・420・421・424・985号]	255
第134图	5区18号住居	173	第201图	土坑(12)[7区400・402~405・407~409・417・419・425・426・428・512・620・621号]	256
第135图	5区19号住居	174	第202图	土坑(13)[7区429・436・507・519・525・526・572・580~584号]	257
第136图	5区18号住居出土遺物	175	第203图	土坑(14)[7区559・562・563・715・729・731・738・739・744・751・752・786・986~990号]	258
第137图	5区19号住居出土遺物(1)	175	第204图	土坑(15)[7区579・585・638・686・708・758号]	259
第138图	5区19号住居出土遺物(2)	176	第205图	土坑(16)[7区567・573~575・577・578・673・678・681・704・705・709・710・712~714・716・717・776・788~791・793・823号]	260
第139图	5区22号住居と出土遺物	177	第206图	土坑(17)[7区587・589・595・596号]	261
第140图	5区23・24号住居と出土遺物	178	第207图	土坑(18)[7区597・601・606・609・610・612・615・618・623・624・629~631・642・693号]	262
第141图	7区49号住居	179	第208图	土坑(19)[7区619・632・633・637・639・640・644・661・662・664・665・674・676号]	263
第142图	7区49号住居出土遺物	180	第209图	土坑(20)[7区641・643・645・648・656・657・667・682・683・685・688・694・992号]	264
第143图	7区54号住居と出土遺物	182	第210图	土坑(21)[7区647・649・654・655・658~660・663・669・675・701・711・719号]	265
第144图	7区55号住居と出土遺物	183	第211图	土坑(22)[7区668・670~672・700・707・725・726・742・746・753・754号]	266
第145图	7区56号住居	184	第212图	土坑(23)[7区766~769・771~774・782・784・792・882・883号]	267
第146图	7区56号住居出土遺物(1)	185	第213图	土坑(24)[7区884・885・920~922・924・929・930・937・942・947・958号]	268
第147图	7区56号住居出土遺物(2)	186	第214图	土坑(25)[7区933・944・945・952・959~961・966・968・975・982・991号]	269
第148图	7区57号住居	187	第215图	土坑(26)[8区720~722・724・741・797・798・828・831・834・866・867・888号]	270
第149图	7区57号住居出土遺物	188	第216图	土坑(27)[8区723・830・836・848・852・853・855・856・859・862~864・879・880号]	271
第150图	7区58号住居	189	第217图	土坑(28)[8区799・801・802・805・807・808・810・812~815・818~822・835・837~840号]	272
第151图	7区58号住居出土遺物(1)	190	第218图	土坑(29)[8区827・829・842・843・845・850号]	273
第152图	7区58号住居出土遺物(2)	191	第219图	土坑(30)[8区846・868~870・872~877・898・906・910号]	274
第153图	7区59号住居(1期)	192	第220图	土坑(31)[8区886・887・889~894・897・902・904・913号]	275
第154图	7区59号住居(2期)	193	第221图	土坑(32)[8区895・899・908・909・911・914~918号、9区995号]	276
第155图	7区59号住居出土遺物(1)	194	第222图	土坑(33)[10区321~327・329~331号、13区343~345・349号]	277
第156图	7区59号住居出土遺物(2)	195			
第157图	7区60A号住居	196			
第158图	7区60A号住居出土遺物(1)	197			
第159图	7区60A号住居出土遺物(2)	198			
第160图	7区60B号住居と出土遺物	199			
第161图	7区61号住居	200			
第162图	7区61号住居出土遺物	201			
第163图	7区62号住居	202			
第164图	7区62号住居出土遺物	204			
第165图	7区63号住居と出土遺物	205			
第166图	7区64号住居と出土遺物	206			
第167图	7区67号住居	207			
第168图	7区71号住居	208			
第169图	7区71号住居(1・2期)	209			
第170图	7区71号住居(3期)	211			
第171图	7区71号住居出土遺物(1)	212			
第172图	7区71号住居出土遺物(2)	213			
第173图	7区80号住居	214			
第174图	7区80号住居出土遺物(1)	215			
第175图	7区80号住居出土遺物(2)	216			
第176图	7区82号住居と出土遺物	217			
第177图	8区69号住居と出土遺物	218			
第178图	8区73号住居と出土遺物	219			
第179图	8区74号住居	220			
第180图	8区74号住居出土遺物(1)	221			
第181图	8区74号住居出土遺物(2)	222			
第182图	8区75号住居	223			
第183图	8区75号住居出土遺物(1)	224			

第223図	土坑出土遺物(1)[1区213~215・218・219・221・225・237・238号、2区37・38号]	278
第224図	土坑出土遺物(2)[2区38・39・41・44~51号]	279
第225図	土坑出土遺物(3)[2区53・76・91・106・110・116・117・122・136・137・983号、4区270~272・274・276・282・284号]	280
第226図	土坑出土遺物(4)[4区269・277・285・287・298・301・303号]	281
第227図	土坑出土遺物(5)[4区291・299・305~307・310号]	282
第228図	土坑出土遺物(6)[4区308・311・333・336・339号、5区138・139・141号、7区966・988・989号]	283
第229図	土坑出土遺物(7)[7区346号]	284
第230図	土坑出土遺物(8)[7区346・347・351・352・361・362・381~383号]	285
第231図	土坑出土遺物(9)[7区389・393・395・397・410・417~420・424・426・436・507・512・562・564・572号]	286
第232図	土坑出土遺物(10)[7区567・573・577・578・580~582・585・589・596・597・606・609・615・618~620・624号]	287
第233図	土坑出土遺物(11)[7区629・633・637~639・642~644・647~649・655・657~660・662・664・669・672・675・681号]	288
第234図	土坑出土遺物(12)[7区663・670・673・674号]	289
第235図	土坑出土遺物(13)[7区682・683・686・688・694・705・714・716・729号]	290
第236図	土坑出土遺物(14)[7区709・717・725・726・736号]	291
第237図	土坑出土遺物(15)[7区732・739・747・748・751~754・768・772・776・786・789・885号]	292
第238図	土坑出土遺物(16)[7区788・791・920・922・929・930・933・959・960号]	293
第239図	土坑出土遺物(17)[8区721~724・798・805・822・830・831・839・840・842・843・846・850・853・859・864・873・876・879・887号]	294
第240図	土坑出土遺物(18)[8区862・867・889・893・909~911号]	295
第241図	土坑出土遺物(19)[8区892・914・916・917号]	296
第242図	7区3・4号掘立柱建物	297
第243図	ピット(1)[1区467号、2区70号、4区151・249・250号、7区291・295・346・352・362・393・394・454・488・492号]	301
第244図	ピット(2)[7区494・497~501・506・508・510・512・518・519・532・537・541号]	302
第245図	ピット(3)[7区549・582・584・591号、8区402・403・406・432・445・559・562・573号、9区594号、10区169・224号]	303
第246図	ピット出土遺物[1区467号、7区291・295・346・362・454・488・492・494・497~501・506・508・510・512・518・519・531・532・537・541・548・549・582・584号、8区402・432・562号]	304
第247図	配石(1)[7区1・3号]	306
第248図	配石(2)[7区2・4~7号]	308
第249図	配石(3)[7区8~10号]	310
第250図	配石出土遺物(1)[7区1・2号]	312
第251図	配石出土遺物(2)[7区3~5・9号]	313
第252図	配石出土遺物(3)[7区7・8・10号]	314
第253図	集石と出土遺物	316
第254図	1・2号屋外埋設土器	318
第255図	焼土遺構と出土遺物	319
第256図	2区32号溝状遺構	320
第257図	7区55A・B号溝状遺構出土遺物	320
第258図	7区55A・B号溝状遺構	321
第259図	7区のグリッド番号と竪穴住居分布	327
第260図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(1)	327
第261図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(2)	328
第262図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(3)	329
第263図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(4)	330
第264図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(5)	331
第265図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(6)	332
第266図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(7)	333
第267図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(8)	334
第268図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(9)	335
第269図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(10)	336
第270図	7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(11)	337

第271図	1~3区遺構外出土土器(1)	339
第272図	1~3区遺構外出土土器(2)	341
第273図	4区遺構外出土土器(1)	341
第274図	4区遺構外出土土器(2)	342
第275図	4区遺構外出土土器(3)	344
第276図	4区遺構外出土土器(4)	345
第277図	5区遺構外出土土器(1)	347
第278図	5区遺構外出土土器(2)	348
第279図	7区遺構外出土土器(1)	348
第280図	7区遺構外出土土器(2)	350
第281図	7区遺構外出土土器(3)	351
第282図	7区遺構外出土土器(4)	352
第283図	7区遺構外出土土器(5)	353
第284図	7区遺構外出土土器(6)	355
第285図	7区遺構外出土土器(7)	356
第286図	7区遺構外出土土器(8)	357
第287図	7区遺構外出土土器(9)	358
第288図	7区遺構外出土土器(10)	360
第289図	7区遺構外出土土器(11)	361
第290図	7区遺構外出土土器(12)	362
第291図	7区遺構外出土土器(13)	363
第292図	7区遺構外出土土器(14)	365
第293図	8区遺構外出土土器(1)	365
第294図	8区遺構外出土土器(2)	366
第295図	9・10・13区遺構外出土土器	366
第296図	遺構外出土土器の系列・器種別組成(1)	371
第297図	遺構外出土土器の系列・器種別組成(2)	372
第298図	遺構外出土土器(1)[石鏃・楔]	374
第299図	遺構外出土土器(2)[楔・石匙・削器]	375
第300図	遺構外出土土器(3)[削器・錐・打斧]	377
第301図	遺構外出土土器(4)[打斧・石核・磨斧]	378
第302図	遺構外出土土器(5)[磨斧・石錘・砥石・磨石類]	380
第303図	遺構外出土土器(6)[石皿・石棒・石製品]	381
第304図	遺構外出土土器(7)[石製品・多孔石]	382
第305図	遺構外出土土器(8)[多孔石]	383
第306図	旧石器時代調査トレンチ内の柱状土層図	384
第307図	旧石器時代調査のトレンチ配置と柱状土層作図地点	385

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧(近世・弥生時代)	8
第2表	周辺の遺跡一覧(縄文時代)	10
第3表	墓坑規模一覧(近世以降)	15
第4表	土坑規模一覧(近世以降)	32・33
第5表	溝状遺構規模一覧(近世以降)	50
第6表	竪穴住居規模一覧(弥生時代)	73
第7表	土坑規模一覧(弥生時代)	99
第8表	ピット規模一覧(弥生時代)	105
第9表	集石規模一覧(弥生時代)	109
第10表	遺構外出土の未掲載土器数量時期別一覧(弥生時代)	114
第11表	竪穴住居規模一覧(縄文時代)	145
第12表	竪穴住居出土土器の型式別数量一覧(縄文時代)	146
第13表	竪穴住居出土土器の器種・石材別数・重量一覧(縄文時代)	147~152
第14表	土坑規模一覧(縄文時代)	237~244
第15表	ピット規模一覧(縄文時代)	298~300
第16表	配石規模一覧(縄文時代)	305
第17表	集石規模一覧(縄文時代)	315
第18表	焼土遺構規模一覧(縄文時代)	319
第19表	遺構外出土土器の型式別数量一覧(縄文時代)	324
第20表	遺構外出土土器の調査区・器種別の数・重量一覧(縄文)	368
第21表	遺構外出土土器の器種・石材別の数・重量一覧(縄文時代)	369

写真目次

PL.1	1. 1区近世遺構の調査状況(北東より)	11. 1区103号土坑
	2. 7区弥生・縄文時代遺構の調査状況(南より)	12. 1区103号土坑埋没土層
PL.2	1. 1区39号墓坑	13. 1区105号土坑
	2. 1区39号墓坑人骨出土状況	14. 2区1号土坑
	3. 7区1号墓坑	15. 2区2号土坑
	4. 7区1号墓坑遺物出土状況	PL.10
	5. 7区3号墓坑	1. 2区2号土坑埋没土層
	6. 7区4号墓坑	2. 2区3号土坑
	7. 7区5号墓坑	3. 2区3号土坑埋没土層
	8. 7区38号墓坑	4. 2区5号土坑
PL.3	1. 8区墓坑分布状況(南より)	5. 3区7号土坑
	2. 8区11号墓坑	6. 3区9・10号土坑
	3. 8区11号墓坑人骨出土状況	7. 3区9・10号土坑埋没土層
	4. 8区12号墓坑	8. 4区4号土坑
	5. 8区13号墓坑	9. 4区4号土坑埋没土層
PL.4	1. 8区14号墓坑	10. 4区6号土坑
	2. 8区15号墓坑	11. 4区6号土坑埋没土層
	3. 8区16号墓坑	12. 4区8号土坑
	4. 8区16号墓坑人骨出土状況	13. 4区8号土坑埋没土層
	5. 8区17・27・28号墓坑	14. 4区12号土坑
	6. 8区18号墓坑	15. 4区12号土坑埋没土層
	7. 8区19号墓坑	PL.11
	8. 8区20号墓坑	1. 4区13号土坑
PL.5	1. 8区21号墓坑	2. 4区16号土坑
	2. 8区22号墓坑	3. 4区16号土坑埋没土層
	3. 8区23号墓坑	4. 4区17号土坑
	4. 8区23号墓坑人骨等出土状況	5. 4区17号土坑埋没土層
	5. 8区24号墓坑	6. 4区18号土坑
	6. 8区26号墓坑	7. 4区18号土坑埋没土層
	7. 8区27号墓坑	8. 7区128号土坑
	8. 8区27号墓坑人骨等出土状況	9. 7区130号土坑
PL.6	1. 8区29・32号墓坑	10. 7区124~126号土坑
	2. 8区31号墓坑	11. 7区124号土坑埋没土層
	3. 8区33号墓坑	12. 7区126号土坑埋没土層
	4. 8区34号墓坑	13. 7区132号土坑
	5. 8区34号墓坑遺物出土状況	PL.12
	6. 8区35号墓坑	1. 7区133・134号土坑
	7. 8区36号墓坑	2. 7区134号土坑埋没土層
	8. 9区2号墓坑	3. 7区135号土坑
PL.7	1. 9区2号墓坑遺物出土状況	4. 7区165号土坑
	2. 9区6号墓坑	5. 7区165号土坑埋没土層
	3. 9区7号墓坑	6. 7区166号土坑
	4. 9区7号墓坑遺物出土状況(No.30・31)	7. 7区166号土坑埋没土層
	5. 9区7号墓坑遺物出土状況	8. 7区167号土坑
	6. 10区8号墓坑	9. 7区167号土坑埋没土層
	7. 10区10号墓坑	10. 7区168号土坑
	8. 10区10号墓坑遺物出土状況(No.13)	11. 7区168号土坑埋没土層
PL.8	1. 1区54・55号土坑	12. 7区169号土坑
	2. 1区56号土坑	13. 7区171号土坑
	3. 1区57号土坑	PL.13
	4. 1区58号土坑	1. 7区174号土坑埋没土層
	5. 1区59号土坑	2. 7区258号土坑
	6. 1区62号土坑	3. 7区258号土坑埋没土層
	7. 1区62号土坑埋没土層	4. 7区259号土坑
	8. 1区63~66号土坑	5. 7区259号土坑埋没土層
	9. 1区68号土坑	6. 7区689号土坑
	10. 1区69号土坑	7. 7区690号土坑
	11. 1区70号土坑	8. 7区794号土坑
	12. 1区72号土坑	9. 7区795号土坑
	13. 1区79号土坑	10. 9区148号土坑
	14. 1区85号土坑	11. 9区150号土坑
	15. 1区85号土坑埋没土層	12. 9区254号土坑
PL.9	1. 1区86号土坑	13. 9区256号土坑
	2. 1区87号土坑	14. 10区242号土坑
	3. 1区88号土坑	15. 10区242号土坑埋没土層
	4. 1区89号土坑	PL.14
	5. 1区90号土坑	1. 10区243号土坑
	6. 1区93号土坑	2. 10区244号土坑
	7. 1区94号土坑	3. 10区245号土坑
	8. 1区95号土坑	4. 10区245号土坑埋没土層
	9. 1区96号土坑	5. 10区246号土坑
	10. 1区101号土坑	6. 10区246号土坑埋没土層
		7. 10区247号土坑
		8. 10区247号土坑埋没土層

	9. 13区156号土坑		
	10. 13区157号土坑	PL.22	8. 同左(No.10)
	11. 13区157号土坑埋没土層		1. 4区4号住居(東より)
	12. 13区158号土坑		2. 4区4号住居埋没土層(A-A')
	13. 13区160号土坑		3. 4区4号住居1号炉
	14. 13区161号土坑		4. 4区4号住居3号炉
	15. 13区163・164号土坑	PL.23	5. 4区4号住居遺物出土状況(東より)
PL.15	1. 1区34・35号溝(北東より)		1. 4区4号住居遺物出土状況(No.16)
	2. 1区34号溝埋没土層(A-A')		2. 4区4号住居掘方(東より)
	3. 1区35号溝埋没土層(A-A')		3. 4区8号住居(東より)
	4. 2区1～3号溝(北西より)		4. 4区8号住居炉
	5. 2区1号溝埋没土層(A-A')		5. 4区8号住居炉埋没土層
	6. 2区2号溝埋没土層(B-B')		6. 4区8号住居遺物出土状況(東より)
	7. 2区3号溝(東より)		7. 4区8号住居遺物出土状況(No.5)
	8. 2区3号溝埋没土層(B-B')	PL.24	8. 同左(No.4)
	9. 2区6号溝(北東より)		1. 4区27号住居(東より)
	10. 2区6号溝埋没土層(A-A')		2. 4区27号住居遺物出土状況
	11. 3区12・13号溝(東より)		3. 4区27号住居柱穴P1
PL.16	1. 3区12号溝埋没土層(B-B')		4. 同左(P5～P8)
	2. 4区7・18～20号溝(東より)		5. 4区27号住居柱穴(P2～P4)
	3. 4区18号溝埋没土層(B-B')		6. 同左P2埋没土層
	4. 4区19号溝埋没土層(C-C')		7. 4区33号住居(北より)
	5. 4区20号溝埋没土層(D-D')		8. 4区33号住居柱穴P5
	6. 4区8号溝(南より)	PL.25	1. 4区33号住居遺物出土状況(北より)
	7. 4区8号溝埋没土層(A-A')		2. 同左
	8. 4区9～11号溝(東より)		3. 4区33号住居遺物出土状況(No.2)
	9. 4区9号溝埋没土層(E-E')		4. 同左(No.16右・No.18左)
	10. 4区10号溝埋没土層(E-E')		5. 7区44号住居(南より)
	11. 4区11号溝埋没土層(E-E')		6. 7区44号住居埋没土層(A-A')
	12. 4区10・24・28号溝(南東より)		7. 7区44号住居炉
	13. 4区14～17号溝(西より)	PL.26	8. 7区44号住居柱穴P6と出土遺物
	14. 4区14号溝埋没土層(A-A')		1. 7区1号壺棺墓(西より)
	15. 4区21～23号溝(西より)		2. 7区1号壺棺墓埋没土層(東より)
PL.17	1. 4区21～23号溝埋没土層(A-A')		3. 7区1号壺棺墓(南より)
	2. 7区37号溝(南より)		4. 7区1号壺棺墓(南より)
	3. 7区37号溝埋没土層(B-B')	PL.27	5. 7区1号壺棺墓底面部の掘り方(西より)
	4. 7区42号溝(東より)		1. 2区31号土坑
	5. 7区42号溝埋没土層(B-B')		2. 2区31号土坑埋没土層
	6. 7区43・44号溝(南より)		3. 2区32号土坑
	7. 7区43号溝埋没土層(B-B')		4. 2区32号土坑埋没土層
	8. 8区2号流路(西より)		5. 2区33号土坑
	9. 8区2号流路埋没土層(A-A')		6. 2区33号土坑埋没土層
	10. 8区3号流路(西より)		7. 2区36号土坑
	11. 8区3号流路埋没土層(A-A')	PL.28	8. 2区36号土坑埋没土層
	12. 9区48号溝(南東より)		1. 4区267号土坑
	13. 9区50号溝(東より)		2. 4区267号土坑埋没土層
	14. 13区40号溝(東より)		3. 4区268号土坑
	15. 13区40号溝埋没土層(A-A')		4. 4区268号土坑埋没土層
PL.18	1. 1区29号住居(北東より)		5. 7区527号土坑
	2. 1区29号住居埋没土層		6. 7区527号土坑埋没土層
	3. 1区29号住居炉		7. 7区529号土坑
	4. 1区29号住居遺物出土状況(No.5)	PL.29	8. 7区529号土坑遺物出土状況(No.5)
	5. 1区29号住居遺物出土状況(No.2)		1. 7区566号土坑
	6. 1区29号住居遺物出土状況(No.6)		2. 7区566号土坑埋没土層
	7. 1区30号住居(南西より)		3. 7区571号土坑
	8. 1区30号住居埋没土層		4. 7区571号土坑埋没土層
PL.19	1. 2区2号住居(南より)		5. 7区576号土坑
	2. 2区2号住居埋没土層(A-A')		6. 7区576号土坑埋没土層
	3. 2区2号住居埋没土層(部分)		7. 7区730号土坑
	4. 2区2号住居炉	PL.30	8. 7区730号土坑埋没土層
	5. 2区2号住居炉埋没土層		1. 2区1号掘立22号ピット埋没土層
	6. 2区2号住居遺物出土状況(南より)		2. 2区1号掘立30号ピット
	7. 2区2号住居遺物出土状況(No.5)		3. 2区1号掘立32号ピット
	8. 同左(No.4左)		4. 2区1号掘立43号ピット
PL.20	1. 2区12号住居(南より)		5. 2区1号掘立33号ピット(柱痕部分)
	2. 2区12号住居1号炉		6. 2区1号掘立33号ピット埋没土層
	3. 2区12号住居2号炉		7. 2区1号掘立44号ピット
	4. 2区12号住居3号炉	PL.31	8. 2区1号掘立68号ピット
	5. 2区12号住居柱穴P2		1. 2区2号掘立26号ピット
PL.21	1. 2区12号住居柱穴P6		2. 2区2号掘立26号ピット埋没土層
	2. 同左P4		3. 2区2号掘立34号ピット
	3. 2区12号住居柱穴(P7・P8)		4. 2区2号掘立53号ピット
	4. 2区12号住居遺物出土状況(南より)		5. 2区2号掘立64号ピット
	5. 2区12号住居遺物出土状況		6. 2区2号掘立65号ピット
	6. 同左(No.1)		7. 2区2号掘立74号ピット
	7. 2区12号住居遺物出土状況(No.7)	PL.32	8. 2区2号掘立76号ピット
			1. 2区28号ピット

	2. 2区28号ピット埋没土層		6. 5区23号住居柱穴P2
	3. 2区31号ピット		7. 7区49号住居(北より)
	4. 2区31号ピット埋没土層		8. 7区49号住居埋没土層(B-B')
	5. 2区39号ピット	PL.43	1. 7区49号住居埋没土層(A-A')
	6. 2区39号ピット埋没土層		2. 7区49号住居遺物出土状況
	7. 2区42号ピット		3. 7区49号住居炉遺物出土状況
	8. 2区42号ピット埋没土層		4. 7区49号住居炉埋設土器(No.3)
PL.33	1. 2区69号ピット(1号掘立関連)		5. 7区54号住居(南より)
	2. 2区69号ピット埋没土層(1号掘立関連)		6. 7区54号住居埋没土層(A-A')
	3. 7区313号ピット		7. 7区54号住居埋没土層(B-B')
	4. 7区313号ピット埋没土層		8. 7区54号住居炉
	5. 7区13号集石	PL.44	1. 7区55号住居(南より)
	6. 7区13号集石遺物出土状況(No.1~3)		2. 7区55号住居(北より)
	7. 7区17号集石		3. 7区55号住居埋没土層(B-B')
	8. 7区21号集石		4. 7区55号住居遺物出土状況
PL.34	1. 4区30号溝(西より)		5. 7区56号住居(南より)
	2. 4区30号溝埋没土層(A-A')		6. 7区56号住居埋没土層
	3. 4区30号溝遺物出土状況		7. 7区56号住居遺物出土状況
	4. 4区30号溝遺物出土状況(No.12)		8. 同左
	5. 4区30号溝遺物出土状況(No.1)	PL.45	1. 7区56号住居炉
	6. 1区2号土器集中地点		2. 7区56号住居炉埋没土層
	7. 同左(No.1)		3. 7区56号住居出入口部埋設土器(No.1)
PL.35	1. 4区1号土器集中地点(西より)		4. 7区56号住居柱穴P2
	2. 4区1号土器集中地遺物出土状況(No.1)		5. 7区57号住居(南より)
	3. 同左(No.2)	PL.46	1. 7区57号住居埋没土層(A-A')
	4. 9区3号土器集中地点(No.1・2)		2. 7区57号住居埋没土層(B-B')
	5. 同左		3. 7区57号住居壁柱穴の状況
PL.36	1. 1区31号住居(南より)		4. 7区57号住居遺物出土状況
	2. 1区31号住居炉		5. 7区58号住居(東より)
	3. 1区31号住居炉埋没土層	PL.47	1. 7区58号住居張出部
	4. 1区31号住居柱穴P3埋没土層		2. 7区58号住居周礫の状況(西壁近縁)
	5. 1区83号住居(南より)		3. 7区58号住居周礫の状況(西壁近縁)
	6. 1区83号住居柱穴P1埋没土層		4. 7区58号住居炉
	7. 2区14号住居(南より)		5. 7区58号住居炉埋没土層(D-D')
	8. 2区14号住居埋没土層		6. 7区58号住居炉掘方
PL.37	1. 2区14号住居炉		7. 7区58号住居遺物出土状況(No.11)
	2. 2区14号住居炉埋没土層		8. 7区58号住居遺物出土状況(No.26)
	3. 4区34号住居(南東より)	PL.48	1. 7区59号住居(南より)
	4. 4区34号住居(北東より)		2. 7区59号住居埋没土層(B-B')
	5. 4区34号住居(北西より)		3. 7区59号住居遺物出土状況
PL.38	1. 4区34号住居炉		4. 7区59号住居遺物出土状況
	2. 4区34号住居北西壁側の周溝・柱穴		5. 同左(No.1)
	3. 4区34号住居南東壁側の周溝・柱穴	PL.49	1. 7区59号住居遺物出土状況(No.1)
	4. 同左		2. 同左(No.2)
	5. 4区34号住居柱穴		3. 7区59号住居炉
	6. 4区34号住居遺物出土状況		4. 同左埋没土層
	7. 4区34号住居遺物出土状況		5. 7区60A・B号住居(北東より)
	8. 同左(No.17左・No.32右)	PL.50	1. 7区60A号住居埋没土層(A-A')
PL.39	1. 4区35号住居(北西より)		2. 7区60A・B号住居遺物出土状況(北東より)
	2. 4区35号住居炉		3. 7区60A号住居遺物出土状況
	3. 4区35号住居柱穴P4・P5		4. 同左
	4. 4区35号住居遺物出土状況		5. 7区60A号住居遺物出土状況
	5. 5区16号住居(西より)		6. 同左
	6. 5区16号住居遺物出土状況(No.6)		7. 7区60A号住居柱穴P9
	7. 5区16号住居柱穴P1埋没土層		8. 7区60B号住居柱穴P2
PL.40	1. 5区17A号住居(北より)	PL.51	1. 7区61号住居(北より)
	2. 5区17A号住居炉		2. 7区61号住居埋没土層(B-B')
	3. 5区17A号住居炉埋設土器(No.14)		3. 7区61号住居遺物出土状況
	4. 5区17A号住居埋没土層		4. 7区61号住居柱穴P10
	5. 5区17A号住居遺物出土状況		5. 7区62号住居(南より)
	6. 同左(No.1)		6. 7区62号住居遺物出土状況
	7. 5区17B号住居(北より)		7. 7区62号住居遺物出土状況
	8. 5区17B号住居遺物出土状況(No.8)		8. 同左(No.13)
PL.41	1. 5区18号住居(北東より)	PL.52	1. 7区62号住居炉
	2. 5区18号住居埋没土層(B-B')		2. 7区62号住居炉掘方
	3. 5区18号住居遺物出土状況		3. 7区63号住居(西より)
	4. 同左(No.13)		4. 7区63号住居炉埋設土器(No.1)
	5. 5区19号住居(東より)		5. 7区64号住居(東より)
	6. 5区19号住居埋没土層		6. 7区64号住居遺物出土状況
	7. 5区19号住居炉		7. 7区64号住居遺物出土状況(No.9)
	8. 5区19号住居炉埋設土器(No.1)		8. 7区64号住居炉
PL.42	1. 5区22号住居(東より)	PL.53	1. 7区67号住居(北より)
	2. 5区22号住居柱穴P1		2. 7区67号住居(A-A')
	3. 5区23号住居(北東より)		3. 7区71号住居(北西より)
	4. 5区23号住居柱穴遺物出土状況		4. 7区71号住居埋没土層(A-A')
	5. 5区23号住居遺物出土状況(No.1)		5. 同左(B-B')

PL.54	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区71号住居遺物出土状況(北西より) 2. 7区71号住居遺物出土状況 3. 7区71号住居炉 4. 同左埋没土層 5. 7区80号住居(南より) 	PL.64	<ul style="list-style-type: none"> 8. 2区983号土坑埋没土層 1. 4区271号土坑 2. 4区286号土坑 3. 4区277号土坑 4. 4区277号土坑埋没土層 5. 4区291号土坑 6. 4区291号土坑埋没土層 7. 4区298号土坑 8. 4区298号土坑埋没土層
PL.55	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区80号住居埋没土層 2. 7区80号住居遺物出土状況(東より) 3. 7区80号住居遺物出土状況(No.1) 4. 同左(No.17) 5. 7区80号住居遺物出土状況 6. 7区80号住居壁柱穴(北壁近縁) 7. 7区82号住居(東より) 8. 7区82号住居埋没土層(A-A') 	PL.65	<ul style="list-style-type: none"> 1. 4区303号土坑 2. 4区306号土坑 3. 4区311号土坑 4. 7区346号土坑 5. 7区351号土坑 6. 7区362号土坑 7. 7区357号土坑 8. 7区357号土坑埋没土層
PL.56	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区82号住居遺物出土状況 2. 同左(No.1) 3. 8区69号住居(西より) 4. 8区69号住居張出部(南より) 5. 8区69号住居張出部(西より) 6. 8区69号住居炉 7. 8区69号住居炉埋没土層 8. 8区69号住居炉掘方 	PL.66	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区395号土坑 2. 7区417号土坑 3. 7区424号土坑 4. 7区426号土坑 5. 7区507号土坑 6. 7区507号土坑埋没土層 7. 7区573号土坑 8. 7区583号土坑
PL.57	<ul style="list-style-type: none"> 1. 8区73号住居(南より) 2. 8区73号住居遺物出土状況(東より) 3. 8区73号住居炉埋没土層(No.1) 4. 8区73号住居炉埋没土層 5. 8区74号住居(北より) 6. 8区74号住居埋没土層(B-B') 7. 8区74号住居遺物出土状況 8. 同左 	PL.67	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区578号土坑 2. 7区578号土坑遺物出土状況 3. 7区615号土坑 4. 7区615号土坑埋没土層 5. 7区619号土坑 6. 7区619号土坑埋没土層 7. 7区629号土坑 8. 7区629号土坑埋没土層
PL.58	<ul style="list-style-type: none"> 1. 8区74号住居炉 2. 8区74号住居埋没土層(C-C') 3. 8区75号住居(南より) 4. 8区75号住居遺物出土状況(西より) 5. 8区75号住居遺物出土状況 6. 同左 7. 8区75号住居炉 8. 8区75号住居炉掘方 	PL.68	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区631号土坑 2. 7区631号土坑埋没土層 3. 7区632号土坑 4. 7区632号土坑埋没土層 5. 7区633号土坑 6. 7区633号土坑埋没土層 7. 7区639号土坑 8. 7区639号土坑埋没土層
PL.59	<ul style="list-style-type: none"> 1. 8区78号住居(西より) 2. 同左(南より) 3. 8区78号住居壁柱穴 4. 8区75・78号住居 5. 8区76号住居(南より) 6. 8区76号住居埋没土層(A-A') 7. 8区76号住居遺物出土状況 8. 8区76号住居柱穴P3・P5・P7 	PL.69	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区648号土坑 2. 7区648号土坑埋没土層 3. 7区658号土坑 4. 7区622号土坑 5. 7区663号土坑 6. 7区673号土坑 7. 7区670号土坑 8. 7区670号土坑埋没土層
PL.60	<ul style="list-style-type: none"> 1. 8区79号住居(北より) 2. 8区79号住居埋没土層 3. 8区79号住居遺物出土状況 4. 同左 5. 8区79号住居遺物出土状況 6. 同左 7. 10区竪穴状遺構(南より) 8. 10区竪穴状遺構埋没土層(A-A') 	PL.70	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区674号土坑 2. 7区674号土坑埋没土層 3. 7区688号土坑 4. 7区688号土坑埋没土層 5. 7区692号土坑 6. 7区693号土坑 7. 7区704号土坑 8. 7区704号土坑埋没土層
PL.61	<ul style="list-style-type: none"> 1. 1区215号土坑 2. 1区215号土坑埋没土層 3. 1区218号土坑 4. 1区218号土坑埋没土層 5. 1区225号土坑 6. 1区225号土坑埋没土層 7. 1区238号土坑 8. 1区238号土坑埋没土層 	PL.71	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区705号土坑 2. 7区714号土坑 3. 7区714号土坑遺物出土状況 4. 7区714号土坑埋没土層 5. 7区717号土坑 6. 7区776号土坑 7. 7区786号土坑 8. 7区788号土坑
PL.62	<ul style="list-style-type: none"> 1. 2区38号土坑 2. 2区38号土坑埋没土層 3. 2区44号土坑 4. 2区47号土坑 5. 2区45号土坑 6. 2区45号土坑埋没土層 7. 2区48号土坑 8. 2区48号土坑埋没土層 	PL.72	<ul style="list-style-type: none"> 1. 7区791号土坑 2. 7区882号土坑 3. 7区922号土坑 4. 7区922号土坑埋没土層 5. 7区920号土坑 6. 7区975号土坑 7. 7区989号土坑 8. 7区989号土坑埋没土層
PL.63	<ul style="list-style-type: none"> 1. 2区51号土坑 2. 2区53号土坑 3. 2区91号土坑 4. 2区91号土坑埋没土層 5. 2区110号土坑 6. 2区122号土坑 7. 2区983号土坑 	PL.73	<ul style="list-style-type: none"> 1. 8区722号土坑 2. 8区820号土坑 3. 8区827号土坑

	4. 8区827号土坑埋没土層		10. 7区518号ピット
	5. 8区840号土坑		11. 7区518号ピット埋没土層
	6. 8区840号土坑埋没土層		12. 7区519号ピット
	7. 8区846号土坑		13. 7区519号ピット埋没土層
	8. 8区846号土坑埋没土層		14. 7区532号ピット
PL.74	1. 8区853号土坑		15. 7区532号ピット埋没土層
	2. 8区862号土坑	PL.81	1. 7区537号ピット
	3. 8区859号土坑		2. 7区537号ピット埋没土層
	4. 8区859号土坑遺物出土状況		3. 7区541号ピット
	5. 8区862号土坑		4. 7区541号ピット埋没土層
	6. 8区862号土坑遺物出土状況		5. 7区549号ピット
	7. 8区876号土坑		6. 7区582号ピット
	8. 8区894号土坑		7. 7区582号ピット埋没土層
PL.75	1. 8区889号土坑		8. 7区584号ピット
	2. 8区889号土坑埋没土層		9. 7区584号ピット埋没土層
	3. 8区891号土坑		10. 7区591号ピット
	4. 8区891号土坑埋没土層		11. 8区402号ピット
	5. 8区892号土坑		12. 8区402号ピット埋没土層
	6. 8区892号土坑埋没土層		13. 8区403号ピット
	7. 8区898号土坑		14. 8区403号ピット埋没土層
	8. 8区898号土坑埋没土層		15. 8区432号ピット
PL.76	1. 8区906号土坑	PL.82	1. 8区432号ピット埋没土層
	2. 8区906号土坑埋没土層		2. 8区445号ピット
	3. 8区915号土坑		3. 8区445号ピット埋没土層
	4. 8区915号土坑埋没土層		4. 8区559号ピット
	5. 10区327号土坑		5. 8区559号ピット埋没土層
	6. 10区327号土坑埋没土層		6. 8区562号ピット
	7. 10区324号土坑		7. 8区562号ピット埋没土層
	8. 13区343号土坑		8. 8区573号ピット
PL.77	1. 3号掘立321号ピット		9. 8区573号ピット埋没土層
	2. 3号掘立598号ピット		10. 9区594号ピット
	3. 3号掘立531号ピット		11. 9区594号ピット埋没土層
	4. 3号掘立531号ピット埋没土層		12. 10区169号ピット
	5. 4号掘立385号ピット		13. 10区169号ピット埋没土層
	6. 4号掘立547号ピット		14. 10区224号ピット
	7. 4号掘立548号ピット		15. 10区224号ピット埋没土層
	8. 4号掘立550号ピット	PL.83	1. 7区配石確認状況(東より)
PL.78	1. 1区467号ピット		2. 7区1号(中央)3号(左側)配石(北より)
	2. 2区7号ピット	PL.84	1. 7区1号配石
	3. 2区7号ピット埋没土層		2. 7区3号配石
	4. 4区151号ピット		3. 7区3号配石石材配置状況
	5. 4区151号ピット埋没土層		4. 同左
	6. 4区249号ピット		5. 7区3号配石構築・掘方状況(A→)
	7. 4区249号ピット埋没土層		6. 同左(←B')
	8. 4区250号ピット		7. 7区2号配石
	9. 4区250号ピット埋没土層		8. 同左
	10. 7区219号ピット	PL.85	1. 7区2号配石構築・掘方状況(B→)
	11. 7区219号ピット埋没土層		2. 同左(←A')
	12. 7区291号ピット		3. 7区2号配石遺物出土状況(No.7)
	13. 7区295号ピット		4. 7区2号配石調査風景
	14. 7区295号ピット埋没土層		5. 7区4号配石
	15. 7区346号ピット		6. 7区4号配石掘方状況(A-A')
PL.79	1. 7区352号ピット		7. 7区5号配石
	2. 7区352号ピット埋没土層		8. 7区5号配石掘方状況
	3. 7区362号ピット	PL.86	1. 7区6号配石
	4. 7区362号ピット埋没土層		2. 7区6号配石掘方状況
	5. 7区393号ピット		3. 7区7号配石
	6. 7区393号ピット埋没土層		4. 7区7号配石埋没土層
	7. 7区394号ピット		5. 7区8号配石
	8. 7区394号ピット埋没土層		6. 7区9号配石
	9. 7区454号ピット		7. 7区10号配石
	10. 7区454号ピット埋没土層		8. 7区10号配石掘方状況
	11. 7区488号ピット	PL.87	1. 7区15号集石
	12. 7区488号ピット埋没土層		2. 7区19号集石
	13. 7区494号ピット		3. 7区31号集石
	14. 7区494号ピット埋没土層		4. 7区31号集石(部分)
	15. 7区501号ピット		5. 7区31号集石掘方状況
PL.80	1. 7区501号ピット埋没土層		6. 8区29号集石
	2. 7区506号ピット		7. 7区18号焼土
	3. 7区506号ピット埋没土層		8. 7区18号焼土断割状況
	4. 7区508号ピット	PL.88	1. 7区1号屋外埋設土器
	5. 7区508号ピット埋没土層		2. 7区1号屋外埋設土器検出状況
	6. 7区510号ピット		3. 7区1号屋外埋設土器埋没土層
	7. 7区510号ピット埋没土層		4. 7区1号屋外埋設土器掘方
	8. 7区512号ピット		5. 7区2号屋外埋設土器
	9. 7区512号ピット埋没土層		6. 7区2号屋外埋設土器検出状況

	7. 7区2号屋外埋設土器下部状況	PL.147	1区213~215号・218号・219号・221号・225号・237号・238号土坑、2区37号・38号土坑出土遺物
	8. 7区2号屋外埋設土器掘方	PL.148	2区39号・41号・44号・45号・47~51号・53号・76号・91号・106号・110号・116号・117号・122号・136号・137号・983号土坑出土遺物
PL.89	1. 2区32号溝		
	2. 2区32号溝埋没土層(A-A')		
	3. 7区55A・B号溝	PL.149	4区269号・270~272号・274号・276号・277号・282号・284号・285号・287号・291号・298号・299号土坑出土遺物
	4. 7区55B号溝埋没土層(A-A')	PL.150	4区301号・303号・305~308号土坑出土遺物
	5. 7区55B号溝埋没土層(E-E')	PL.151	4区310号・311号・333号・336号・339号土坑、5区138号・139号・141号土坑、7区346号(1)土坑出土遺物
PL.90	1. 2区旧石器調査状況	PL.152	7区346号(2)・347号・351号・352号・361号・362号・381~383号坑出土遺物
	2. 同左	PL.153	7区393号・395号・397号・410号・417~420号・424号・426号・436号・507号・512号・562号・564号・567号・572号・573号・577号・578号土坑出土遺物
	3. ローム層堆積状況		
	4. 同左	PL.154	7区580~582号・585号・589号・596号・597号・606号・609号・615号・618~620号・624号・629号・633号・637~639号・642~644号土坑出土遺物
	5. ローム層下部礫		
	6. 同左	PL.155	7区647~649号・655号・657~660号・662~664号・669号・672号・673号土坑出土遺物
	7. ローム層堆積状況	PL.156	7区674号・675号・681~683号・686号・688号・694号・705号・709号土坑出土遺物
	8. 同左	PL.157	7区714号・716号・717号・725号・726号土坑出土遺物
PL.91	1区39号墓坑、7区1号・3号・4号(1)墓坑出土遺物	PL.158	7区729号・732号・736号・739号・747号・748号・751~754号・768号・772号・776号・786号・789号土坑出土遺物
PL.92	7区4号(2)・5号墓坑、8区12号墓坑出土遺物	PL.159	7区788号・791号・885号・920号・922号・929号・930号・933号・959号・960号・966号・988号・989号土坑出土遺物
PL.93	7区38号墓坑、8区14号・19号・20号(1)墓坑出土遺物	PL.160	8区721~724号・798号・805号・822号・830号・831号・839号・840号・842号・843号・846号・850号・853号・859号・862号・864号土坑出土遺物
PL.94	8区20号(2)・23号・26号・27号・28号(1)墓坑出土遺物	PL.161	8区867号・873号・876号・879号・887号・889号・892号・893号・909~911号・914号・916号・917号土坑出土遺物
PL.95	8区28号(2)・29号墓坑出土遺物		1区467号ピット、7区291号・295号・346号・362号・454号・488号・492号・494号ピット出土遺物
PL.96	8区33号・34号(1)墓坑出土遺物	PL.162	7区497~501号・506号・508号・510号・512号・518号・519号・531号・532号・537号・541号・548号・549号・582号・584号ピット、8区402号・432号・562号ピット、7区1号配石出土遺物
PL.97	8区34号(2)・35号・36号墓坑出土遺物	PL.163	7区2号・3~5号・7号・8号配石出土遺物
PL.98	9区2号・6号・7号(1)墓坑出土遺物	PL.164	7区9号・10号配石、7区19号集石・8区29号集石、7区1号・2号屋外埋設土器、7区18号焼土、7区55号溝状遺構出土遺物
PL.99	9区7号墓坑出土遺物(2)		
PL.100	9区7号墓坑(3)、10区8号・10号(1)墓坑出土遺物	PL.165	1~3区遺構外出土遺物(1~32)
PL.101	10区10号墓坑(2)、7区131号土坑、2区3号溝、4区7号溝、8区3号流路、8区遺構外出土遺物	PL.166	1~3区遺構外(33~40)、4区遺構外出土遺物(42~65)
PL.102	1区29号・30号住居、2区2号・12号住居出土遺物	PL.167	4区遺構外出土遺物(66~98)
PL.103	4区4号・8号住居出土遺物	PL.168	4区遺構外出土遺物(99~131)
PL.104	4区27号住居出土遺物	PL.169	5区遺構外出土遺物(132~155)
PL.105	4区33号住居出土遺物(1)	PL.170	7区遺構外出土遺物(156~190)
PL.106	4区33号住居(2)、7区44号住居、1号壺棺墓、2区31~33・36号土坑出土遺物	PL.171	7区遺構外出土遺物(191~221)
PL.107	7区529号・565号・566号・571号・576号・730号土坑出土遺物	PL.172	7区遺構外出土遺物(222~244)
PL.108	集石、4区30号溝状遺構出土遺物	PL.173	7区遺構外出土遺物(245~271)
PL.109	土器集中地点、1区遺構外(1)出土遺物	PL.174	7区遺構外出土遺物(272~301・303)
PL.110	1区遺構外(2)、2区遺構外(1)出土遺物	PL.175	7区遺構外出土遺物(302・304~333)
PL.111	2区遺構外(2)、3区遺構外、4区遺構外(1)出土遺物	PL.176	7区遺構外出土遺物(334~358)
PL.112	4区遺構外(2)、5区遺構外、7区遺構外(1)出土遺物	PL.177	7区遺構外出土遺物(359~391)
PL.113	7区遺構外出土遺物(2)	PL.178	7区遺構外出土遺物(392~421)
PL.114	7区遺構外出土遺物(3)	PL.179	7区遺構外出土遺物(422~457)
PL.115	7区遺構外出土遺物(4)	PL.180	8区遺構外出土遺物(458~484)、9区遺構外出土遺物(485~491)
PL.116	7区遺構外出土遺物(5)	PL.181	9区・10・13区遺構外出土遺物(492~502)、遺構外出土石器〔石鏃(1~31)〕
PL.117	7区遺構外出土遺物(6)	PL.182	遺構外出土石器〔楔(32~43)・石匙・搔器・削器(44~65)〕
PL.118	7区遺構外出土遺物(7)	PL.183	遺構外出土石器〔削器・三稜石器・石錐・打斧・石核・磨斧(66~99)〕
PL.119	7区遺構外出土遺物(8)	PL.184	遺構外出土石器〔磨斧(100)・石錘・砥石・磨石類・石皿・石棒・石製品〕
PL.120	7区遺構外出土遺物(9)	PL.185	遺構外出土石器〔多孔石〕
PL.121	7区遺構外(10)、8区遺構外出土遺物		
PL.122	9区遺構外出土遺物(1)		
PL.123	9区遺構外(2)、10区遺構外、13区遺構外出土遺物		
PL.124	遺構外出土石器		
PL.125	1区31号・83号住居、2区14号住居、4区34号住居(1)出土遺物		
PL.126	4区34号住居出土遺物(2)		
PL.127	4区34号(2)・35号住居、5区16号住居出土遺物		
PL.128	5区17A号住居出土遺物		
PL.129	5区17B号・18号住居出土遺物		
PL.130	5区19号住居出土遺物		
PL.131	5区22号・23号・24号住居出土遺物、7区49号・54号住居出土遺物		
PL.132	7区55号・56号(1)住居出土遺物		
PL.133	7区56号(2)・57号(1)住居出土遺物		
PL.134	7区57号(2)・58号(1)住居出土遺物		
PL.135	7区58号(2)・59号(1)住居出土遺物		
PL.136	7区59号(2)・60A号(1)住居出土遺物		
PL.137	7区60A号(2)・60B号・61号(1)住居出土遺物		
PL.138	7区61号(2)・62号(1)住居出土遺物		
PL.139	7区62号(2)・63号・64号・71号(1)住居出土遺物		
PL.140	7区71号住居出土遺物(2)		
PL.141	7区71号(3)・80号(1)住居出土遺物		
PL.142	7区80号住居出土遺物(2)		
PL.143	7区82号住居、8区69号・73号・74号(1)住居出土遺物		
PL.144	8区74号住居出土遺物(2)		
PL.145	8区75号住居出土遺物(1)		
PL.146	8区75号(2)・76号・78号・79号住居出土遺物		

第1章 発掘調査の概要

1. 調査に至る経緯

上信自動車道は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジ付近と長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジ付近とを結ぶ地域高規格道路であり、計画延長は約80kmである。

金井バイパスは、この上信自動車道の一部を構成し、整備区間は約1kmであり、南は渋川市入沢付近で渋川西バイパスに、北は渋川市金井地内で川島バイパスに接続する予定である。この金井バイパス建設に伴う発掘調査が本事業である。

本事業に伴う埋蔵文化財調査は、平成22年5月11日付けで群馬県県土整備部監理課建設政策室から群馬県教育委員会文化財保護課)以下、県文化財保護課)に、事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて照会があったことに始まる。県文化財保護課は、事業地全線において埋蔵文化財の有無及び内容を確認するための試掘確認調査が必要であることを回答し、その後、事業主体である渋川土木事務所からの依頼を受け、県文化財保護課が試掘・確認調査を実施した。試掘の結果、遺跡調査区北端(13区北部)を除いて、すべての用地から縄文時代～古墳時代の遺物が確認され、発掘調査が必要と判断された。

尚、金井バイパスの事業地内には、試掘確認調査実施前に東裏遺跡と金井丸山遺跡の2カ所の周知の埋蔵文化財包蔵地が把握されていた。これらの遺跡は、切り通し法面からの遺物採取等による把握のため、その範囲は局所的なものであり、本事業に伴う試掘確認調査の結果を踏まえ、渋川市教育委員会において埋蔵文化財包蔵地の見直しが行われた。

その結果、平成24年7月3日付けで渋川市教育委員会から埋蔵文化財包蔵地の把握について報告があり、県教育委員会は平成24年7月9日付けで埋蔵文化財包蔵地の変更を決定した。その内容は、包蔵地の範囲を東裏遺跡と金井丸山遺跡を含む範囲に拡大した上で金井丸山遺跡の名称は削除し、遺跡名称を金井東裏遺跡とすることになった。

こうした調整を経て、渋川土木事務所と文化財保護課

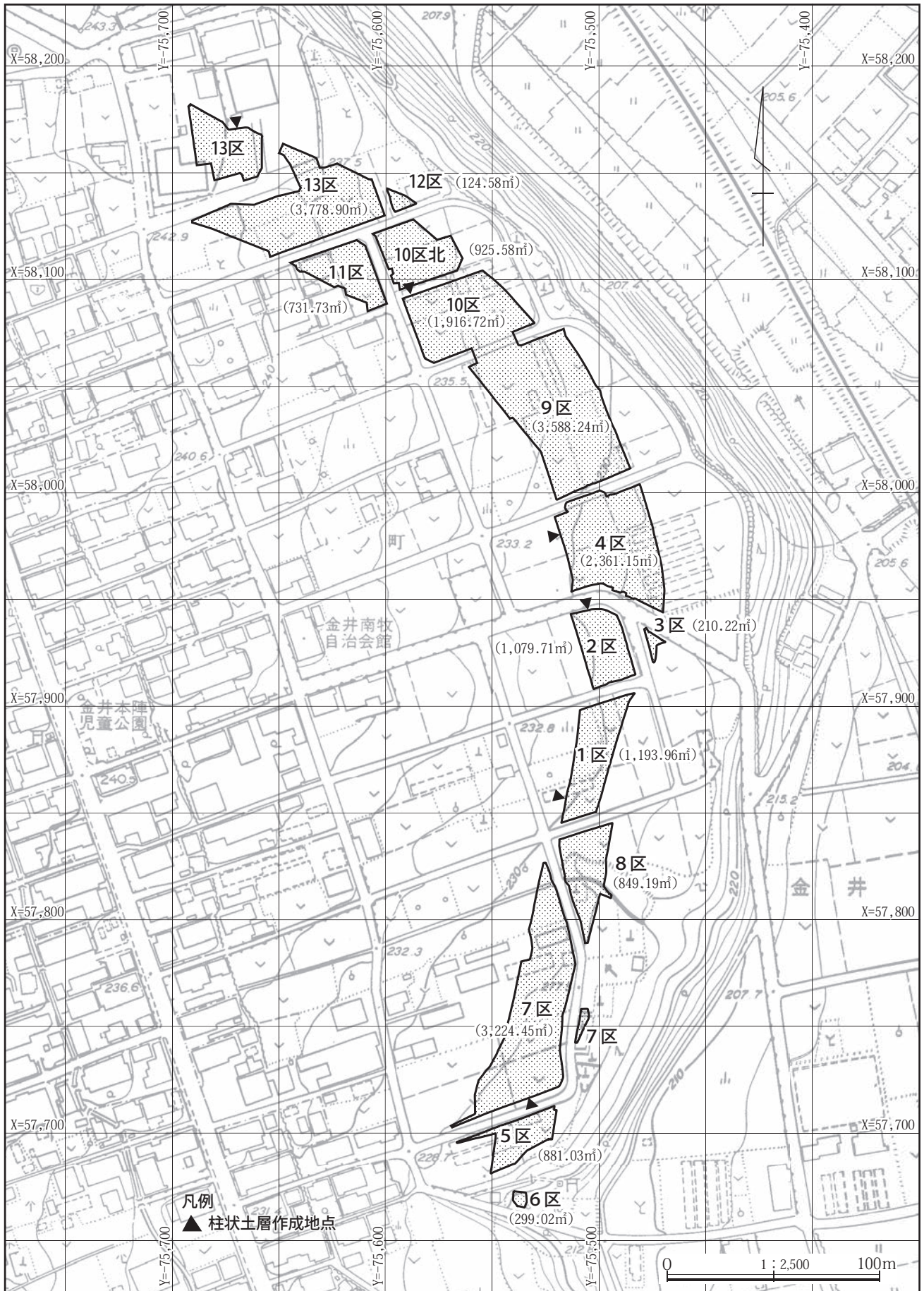
による発掘調査実施の最終的な調整が行われ、金井バイパス路線内の20,990㎡を対象として、平成24年9月から公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の方法と工程

発掘調査の対象区域内には、除外地の農道や市道が走行し、これにより調査範囲が分割されることから、第1図のように各区画を単位に1～13の調査区を設定した。各区の調査は、1～9区の13,536.13㎡・10区南部の1,916.72㎡、12・13区の3,904.38㎡を平成24年9月3日～平成26年3月31日、7区の一部546.28㎡を平成26年5月1日～20日、9区橋脚部の221.21㎡を平成27年2月4日～3月3日、9区北側橋脚部の243.80㎡を平成27年9月24日～10月2日、4区橋脚部の61.20㎡を平成27年9月29日～10月19日、10区北部の925.93㎡を平成29年2月3日～3月17日の合計6次にわたり行ったが、諸事情により一部残地となった11区の731.73㎡については、平成30年度上半期に実施する予定である。

県文化財保護課の試掘調査により、6世紀の中葉と初頭に噴火した榛名山二ツ岳の約2m厚の降下軽石層(榛名山二ツ岳伊香保テフラ、以下Hr-FPと呼称)と約40cm厚の火山灰層(榛名山二ツ岳渋川テフラ、以下Hr-FAと呼称)などの堆積が重層のかつ良好に確認され、古墳時代を中心とした複数文化層での遺構存在が想定された。本調査にあたっては、これまでの当地域や周辺域における考古学的調査成果も踏まえ、各テフラ層の直上及び直下面での近世・古代の遺構や更に下位での弥生・縄文時代遺構の存在を考慮して、複数面に及ぶ文化層の調査計画を策定し、各文化層には上位から順次第1面・第2面等の名称を付すこととした。また、地表面下2mを超える深所調査に対処するため、調査経費上の問題を考慮して約60度前後の法面勾配を確保した明かり掘削方法を採用した。さらに、この多面調査により生じる多量の掘削排土の置き場所については、基本的に調査対象地内に設定せざるを得ないことから、同区域を分割して掘削・排土・調査・

第1章 発掘調査の概要



第1図 発掘調査範囲と調査区名称(「渋川市都市計画図其8」1/2500使用)

埋め戻し等の作業を交互・順送りに繰り返しつつ実施することとし、併せて工事工程との兼ね合いを加味して上述したような各区の調査着手順序を決定した。

第1面の調査は、現在の地表面からHr-FP層直上までの層厚40cm前後の表土(I層)掘削を大型重機で行い、その後人力による遺構確認作業や遺構掘削調査について遺跡掘削請負による発掘作業員が行った。また、各遺構の埋没土の観察や写真撮影等は当事業団の調査担当者が行い、各遺構の埋没土層堆積図(セクション図)や遺構平面図、遺物出土状況図などの測量図作成は測量業者委託により行った。結果的に、Hr-FP層を掘り込んだ近世以降の墓坑や土坑・溝状遺構等が多数検出されたが、奈良・平安時代の古代遺構は皆無であった。

尚、写真撮影や図面作成および遺構掘削調査等の業務分担に関しては、以下の各文化面調査においても同様である。

第2面の調査は、層厚2m前後のHr-FP層(II層)を大型重機により下部約10cm厚を残して掘削・除去した後に、直下の黒色土表層(III層)までのHr-FPを鋤簾や移植ゴテ・竹べら・手箒等により丁寧に除去した。この結果、多数の馬蹄痕とともに5世紀後半の竪穴住居が埋没途中の窪地として検出されたが、同住居についてはさらに下位のHr-FA層(IV層)の堆積も確認されたことから、第4面にて調査することとした。

第3面の調査は、層厚約40cmのHr-FA層(IV層)が火砕流や火山灰などの複数のテフラ堆積層により構成されることから、各層内での人為的痕跡の存在を考慮して、人力により上位層から順次平面的に掘り下げる層位的な調査を行った。その結果、4区と同層内から冑を着装した人骨や武具類および祭祀跡・人の足跡・馬蹄痕の検出を見た。全国で初めての重要な発見であることから、県教育委員会と県土整備部との協議・調整を経て、急遽平成24年12月12日に現地説明会を実施し、一般公開することとなった。同説明会には、平日にも関わらず2600人を超える見学者が訪れ、その様子はマスメディアでも大きく報道された。

第4面の調査は、Hr-FA層を人力に掘削・除去した後に、層厚約30cmの黒色土(V層)上面にて遺構確認を行ない、4区や9区からは周提帯を伴う5世紀後半の竪穴住居や墳丘墓・畠等の多数の遺構を検出した。この両区に

ついては、古墳時代の冑着裝人骨を検出した第3面の調査成果を含め他に例を見ない重要な遺構・遺物が存在することに鑑み、県土整備部と県教育委員会との協議の結果、平成25年12月に道路設計を変更して保存措置を講じることで合意した。ただし、両区内の道路橋脚設置部分526.20㎡については保存措置が困難なことから、V層以下の弥生・縄文・旧石器時代に相当する文化面全ての調査を実施した。

第5面の調査は、黒褐色土のVI層内を遺構掘り込み面とする弥生時代遺構の存在を想定して人力による同層の掘り下げ調査を進めたが、約20cm厚の薄層で色調的にも遺構内埋没土との識別が困難なことや古墳時代住居との重複もあり、結果的には下位の縄文時代遺構調査と一部併行して実施した。遺構としては、竪穴住居を始め方形周溝遺構・再葬墓・土坑・溝状遺構などを検出した。

第6面の調査は、上述の通り弥生時代遺構調査と一部併行するものであったが、特に4・5・7・8区を中心としたVI層下位～VIII層上位までの層厚約70～80cmの間に、弥生時代～縄文時代の遺物が多量に包含されていた。これに対処するために、国家座標値を基準にして5m×5mのグリッド網を調査区域全体に設定し、人力による掘り下げ調査を行いつつ各グリッドを単位にして出土遺物の記録・取り上げを行った。この調査過程で縄文時代後期～前期にかけての遺構検出を併せて実施し、竪穴住居・土坑・ピット・配石・集石等の多数の遺構を検出した。後期に比定される配石のように、灰黄褐色土のVII層上面にて確認した遺構もあるが、その多くは遺構確認が容易な褐灰色土や暗灰黄色土のVIII～IX層上面での調査となった。

第7面の調査は、X～XIX層にかけた関東ローム相当層内での存在が想定される、旧石器時代の遺構・遺物調査である。385頁の第307図に掲示したように、全調査区の合計48個所に5m×2.5mのトレンチを適宜設定し、層厚約1m前後のローム層調査を行ったが、各区共に石器の出土はなかった。今後の参考資料として、各区のトレンチ壁面にて堆積土層の柱状図を作成し、全調査を終了した。

第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

金井東裏遺跡は群馬県渋川市金井に所在し、JR上越線の渋川駅から北西方向へ約3kmに位置している。また当遺跡の立地は、県中央部に位置する榛名山の北東麓末端にあたり、その標高は230~240mである。

榛名山は、中期更新世に形成された直径約25kmの成層火山体(古期榛名山)と、その山頂部に発達する後期更新世~完新世の溶岩ドーム群(新期榛名山)からなる複雑な地形を呈した火山である。古期では西側の掃部ヶ岳(1,449m)を最高峰として、北側の烏帽子岳や南部の天目山などの複数の外輪山があり、カルデラ床には榛名湖が存在する。新期では、カルデラ形成後にその中央部に噴出した円錐形溶岩ドームの榛名富士(1,391m)が存在し、さらにその東側は相馬山溶岩ドームに覆われてカルデラ地形が不明瞭となっている。また、6世紀に大規模な噴火を起こした榛名山二ツ岳(1,343m)も東側山腹に発達した溶岩ドームであり、山頂部には3つのピークが認められる。ちなみに、榛名山二ツ岳の6世紀代の噴火は2度にわたるが、同第1四半期の1回目の噴火では、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)と呼称される、水蒸気爆発による多量の降下火山灰や火砕流堆積物が、東方向を主体として堆積し、当遺跡の北西5kmを北流する沼尾川をはじめ登沢川・大輪沢川などの川筋を埋めている。また、同第2四半期の2回目の噴火では、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)と呼称される軽石が、北東方向を中心にして大量に降下・堆積し、上記の河川と共に利根川上流域の丘陵・低地部を埋め尽くしている。

古期の成層火山体には、放射状の侵食谷が多数発達しているが、その中でも南西側の榛名川、南東側の榛名白川、北東側の沼尾川の侵食谷はかなり大規模であり、山頂部近くまで侵食が進んでいる。また、山麓部には広大な扇状地が発達しているが、これらの扇状地は主に古期の榛名火山の成長に伴うものや、榛名カルデラの形成に伴い噴出したとされる約5万年前の白川火砕流に伴うものと、新期の火山活動に伴うものに区分される。古期の火山活動に係る扇状地は、その後の著しい侵食を受けて

深い谷が形成されているが、標高450~900mにかけた西~東山麓では発達した緩斜面が形成されている。一方新期では、南東山麓に流下する榛名白川沿いに、相馬山付近を給源とする約2万~1.5万年前の陣場岩屑なだれ堆積物と河川堆積物が造る扇状地が発達している。特に、陣場岩屑なだれ堆積物の上面には、更新世末から完新世にかけて形成された榛名白川やその他の小河川の扇状地が発達し、これらの上面は比較的平坦で比高10m以下の浅い侵食谷が形成されている。

榛名山の北麓側は、東流する吾妻川を挟んで子持山と接し、また東麓側では前橋台地と共に南流する利根川を挟んで赤城山と接している。当遺跡の立地する地点は、吾妻川が利根川に合流する地点から北西に3kmほど遡った吾妻川の右岸側にあたり、同河川の下位段丘面との比高差は約25mである。当遺跡の周辺地形は、約5万年前に吾妻川や利根川により形成された河岸段丘の「長坂面」に比定されているが、北西側から南東側へと平均勾配7%前後でかなり傾斜しており、吾妻川左岸の段丘面とは様相を異にしている。当遺跡に堆積するローム層内には、約1.3万年前の浅間総社軽石(As-Sj)や約1.8万年前の浅間大窪沢軽石(As-0k)までが確認され、その下位は直径50~100cmの大形亜角・亜円礫を含む砂質土が堆積する。こうした状況を考慮すれば、「長坂面」との関係は不明瞭だが、少なくとも北西に約700m離れて北流する登沢川の扇状地形成による地形改変の影響を受けていると考えられる。

現在の当遺跡周辺では、6世紀に噴火した榛名山の火山灰・軽石が、地表下に少なくとも2m以上の層厚で堆積し、保水力や地味の悪い畠地帯形成の要因となっている。また、この噴火は古墳時代には甚大な被害を及ぼしたことも判明しているが、逆にこの火山噴出物の分厚い堆積が当時の生活面の保護機能を果たしたことにより、他地域では検出不可能な「青着装人骨」をはじめとした被災人骨や馬匹の放牧地等の発見をもたらしている。

参考文献

下司信夫 2013『詳細火山データ集：榛名火山、日本の火山』産総研地質調査総合センター



第2図 遺跡の位置(国土地理院1/25000「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用)

2. 歴史的環境

第3図に、金井東裏遺跡の近縁に分布する近世・弥生時代・縄文時代の代表的な遺跡をプロットし、番号を付した。当該番号は、第1・2表の遺跡番号と同一であり、以下の本文中で取り扱う場合には、遺跡名の後に()で記載した。尚、記載の都合上、第3図の範囲から外れてプロットできない渋川市内の遺跡も取り上げている。

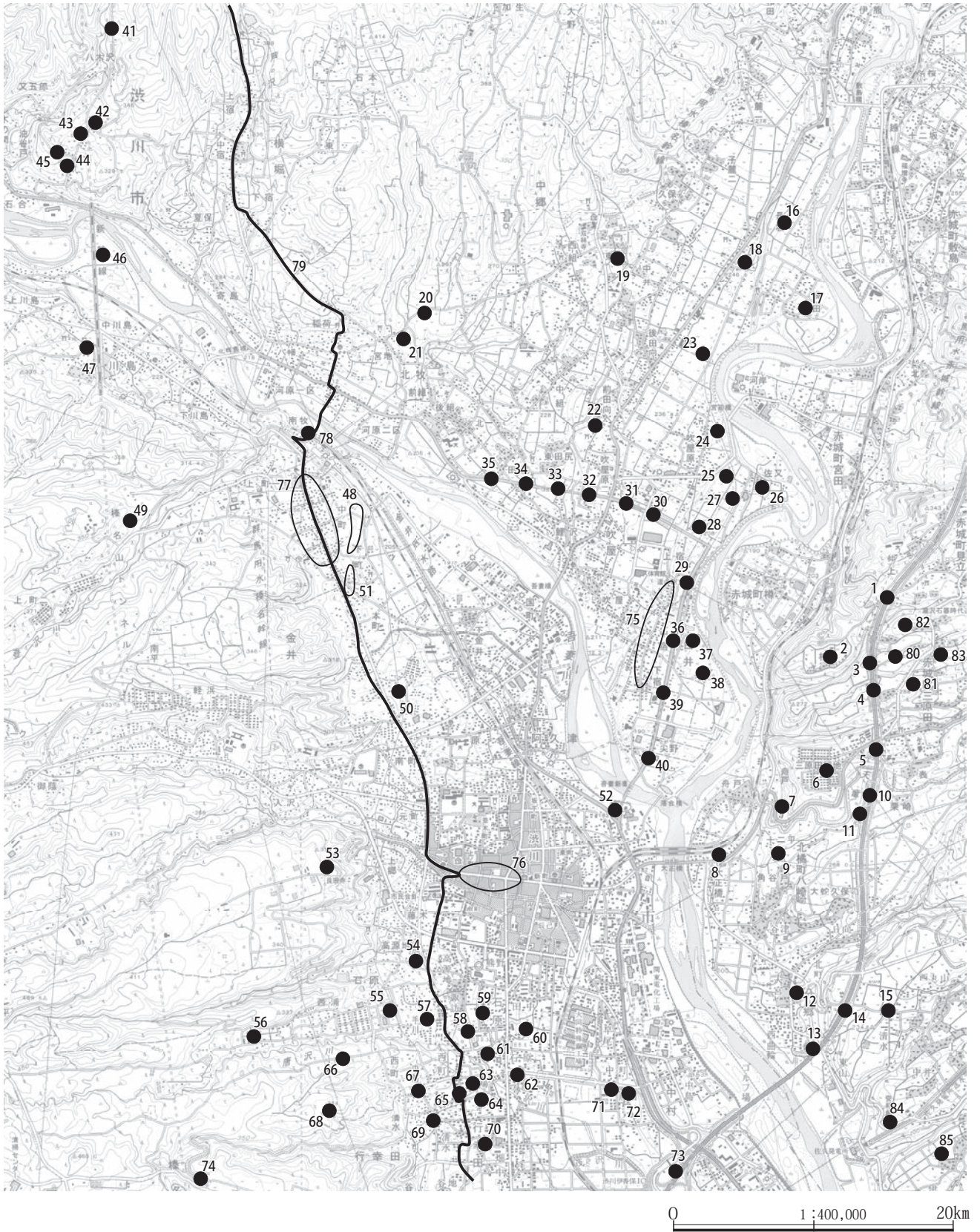
(1) 近世

金井東裏遺跡(48)が所在する渋川市の旧金井村は、17世紀初頭に高崎藩領から安中藩領を経て、天和元年(1681)に幕府直領となった歴史を持つ。寛政8年(1796)の「金井村明細帳」では、家数157軒、人数757人と記録されている。また、嘉永7年(1854)の「金井村年貢割付状」によれば、田地20町余、畑地161町余が記載され、近世の時点では畑地が卓越する地域であったことがわかる。元和8年(1622)頃には、越後と本庄とをむすぶ三国街道の宿駅の一つとして、本陣や脇本陣を置く宿長300間の金井宿(77)が成立したとされ、参勤交代に伴う諸大名や商人・旅客などの逗留により、かなりの賑わいを見せたことが記録されている。金井宿を南北に貫く三国街道(79)は、その北方約500mにて吾妻川に架けられた杓ヶ橋により渡河するが、その右岸側に位置する南牧村の川縁には杓ヶ橋関所(78)が設置され、江戸を中心とした「入り鉄砲に出女」に象徴される人や物の往還に重要な取締りがなされる要衝地でもあった。また、同時に金井宿はその北方に位置する南牧村から祖母島村へと通じる吾妻道の宿駅としての役割も担っていた。

金井東裏遺跡における近世の遺構は、6世紀第2四半期に噴火した榛名山二ツ岳の降下軽石(Hr-FP)の上面にて検出した、土地区画に関連する溝状遺構や畠跡と考えられる畝状遺構、銭貨・煙管などの副葬品を伴う墓坑、機能・用途が確定できない土坑等である。この溝状遺構については、先の金井宿の地割との関連性が想定される。また、土坑に関してはNo.57・62の遺跡や吾妻川対岸のNo.16・18・23・28・30・31等の遺跡からも確認されており、その走向が現況の畠地割に並行しているものが少なからず認められることから、畠作農耕に関連した遺構の可能性が想定される。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺跡立地については第1表に掲示したが、25遺跡を数えるにとどまる。この背景には、前項の「1. 地理的環境」で既述したように、層厚1~2mにおよぶ榛名山二ツ岳降下軽石の堆積が、遺跡の確認を困難にしており、高速道路などの建設工事に伴って発掘された遺跡が大半を占める。前期前半段階は、縄文時代晩期末葉の遺跡動向とも関連して皆無の状態であるが、前期後半から中期にかけてようやく集落が形成されるようになり、中村(73)、有馬、有馬条里などで確認されている。立地的には利根川の低位段丘面上に占地し、次の古墳時代へと連続する言わば拠点的な集落形成と考えられるが、中村遺跡の場合、中期後半の3軒の住居を圍繞するような複数条の溝が存在し、環濠集落の可能性が窺える点で注目される。前半期に特徴的な再葬墓は、第3図の範囲外の北側に存在する南大塚遺跡や押手遺跡(20)で確認されている。後期に入ると遺跡・集落数が飛躍的に増加し、榛名山麓端部や利根川右岸段丘上の当遺跡をはじめ、中筋(69)、有馬廃寺、有馬条里、有馬などの遺跡や、樽(7)、田尻(8)、群馬用水分郷八崎(15)、下遠原(84)などの遺跡で集落が確認されている。全体的には吾妻川や利根川の右岸地区での集落形成が顕著に認められるが、利根川左岸の赤城山西南麓地区の田尻・群用分郷八崎・下遠原の各遺跡では、剣・鏃などの鉄器が竪穴住居内から出土しており、後期集落内における鉄製武器・製品の普及・保有状況の一端を物語ると共に、利根川を挟んで対岸に立地する有馬条里遺跡の礫床墓副葬品と対比されるものとして注目される。墓に関わる遺物の確認事例は少ないが、有馬遺跡では方形周溝墓の主体部である礫床墓や壺棺墓内からガラス玉や鉄剣などの副葬品が出土している。こうした礫床墓は中村、田中(60)でも確認されており、礫床の上部に木棺が載ることを含めて当域における地域的な埋葬様式として把握されている。他の方形・円形周溝墓については、空沢(163)、神宮寺西、押出、田ノ保(13)でも確認されている。古墳時代への過渡期には、赤城山西南麓での集落立地も活性化するようになり、代表的事例として分郷八崎(14)や三原田三反田(81)、水泉寺地区遺跡群(85)などがある。また、利根川右岸の子持山麓域では僅少だが、白井北中道Ⅲ(27)と中



第3図 周辺の遺跡分布(国土地理院1/25000「金井・伊香保・鯉沢・渋川」使用)

第1表 周辺の遺跡一覧（近世・弥生時代）

番号	遺跡名	時代	遺跡の内容						備考
			集落		墓		水田	畠	
			弥生	近世	弥生	近世	近世	近世	
7	樽遺跡	弥生	●						
8	田尻遺跡	弥生	●						
12	北町遺跡	弥生	●						
13	田ノ保遺跡	弥生			■				弥生：周溝墓
14	関越分郷八崎遺跡	弥生	●						
15	群馬用水分郷八崎遺跡	弥生	●						
16	上白井西伊熊遺跡	近世							近世：土坑・耕作坑
18	中郷遺跡	近世							近世：土坑・耕作坑
20	押手遺跡	弥生			◆■				弥生：再葬墓・周溝墓
23	吹屋遺跡	近世							近世：土坑・耕作坑
24	吹屋伊勢森遺跡	近世							
25	白井十二遺跡	近世		◎					
26	白井佐又遺跡	近世		◎		▲			近世：掘立柱建物・土墳墓
27	白井北中道Ⅲ遺跡	弥生	●						
28	白井北中道Ⅱ遺跡	近世							近世：土坑
29	白井北中道遺跡	近世				▲	◎		近世：墓坑
30	吹屋犬子塚遺跡	近世							近世：土坑
31	吹屋中原遺跡	近世							近世：土坑
33	吹屋三角遺跡	近世							中近世：溝
34	中郷田尻遺跡	弥生	●						
36	白井丸岩遺跡	近世							近世：土坑
38	白井掛岩遺跡	弥生	□						
46	川島久保内・馬場遺跡	近世		▽					近世：神社跡
47	南大塚遺跡	弥生			◆				弥生：再葬墓
48	金井東裏遺跡	弥生・近世	●		▲	▲	◎		弥生：壺棺墓, 近世：墓, 土坑
50	金井前原遺跡	弥生	●						
51	金井下新田遺跡	弥生・近世	●						
52	東町関下遺跡	近世					●	▽	
54	高源地東Ⅰ遺跡	近世							近世：耕作溝
55	石原西浦遺跡	近世		◎					近世：建物址
57	手川西遺跡	近世							近世：土坑
59	石原久保貝道遺跡	弥生	●						
60	田中遺跡	弥生			■				弥生：礫床墓
61	石原東古墳群	弥生	●						
62	石原東遺跡	弥生・近世	●						近世：土坑
63	空沢遺跡	弥生			■				弥生：円形周溝墓
69	中筋遺跡	弥生	●						
70	行幸田畑中遺跡	弥生	●						
71	中村日焼田遺跡	近世					▽		
72	中村久保田遺跡	近世					▽		
73	中村遺跡	弥生・近世	●		■		▽	▽	弥生：周溝墓
75	白井宿	近世		◎					
76	渋川宿	近世		◎					
77	金井宿	近世		◎					
78	杓ヶ橋関所	近世		◎					吾妻川の渡し
79	三国街道	近世							
81	三原田三反田遺跡	弥生	●						
84	下遠原遺跡A～D地区	弥生	●						
85	水泉寺地区遺跡群	弥生	●						

凡例
 【集落】 ● 竪穴住居を伴う集落遺跡 □ Hr-FA下位 ◎ Hr-FP上位 ▽ As-A下位
 【墳墓】 ◆ 再葬墓 ■ 周溝墓 ▲ 土坑墓
 【水田・畠】 ● 近世洪水層下位 ▽ As-A下位

郷田尻(34)がある。

当時代の水田や畠などの生産址については未確認であり、規模や内容を含めて今後の調査課題となっている。ただし、当遺跡を含めた吾妻川・利根川右岸地域に見られる集落形成の優位性は、古墳時代に顕在化する水田可耕適地の有無あるいはその広狭に関連性を持つと考えられ、次時代への継続的な集落立地が顕著なことを含めて特筆すべき事象と言える。

(3) 縄文時代

草創期 当期の遺跡は、No.25・28・30・31・33・39等が存在し、隆起線文・爪形文・多縄文土器や有舌尖頭器などの石器が出土している。いずれも利根川右岸の旧流水域に接した河岸段丘上に立地しており、こうした傾向はサケ・マスなどの季節的河川漁撈との関連性を指摘できるが、竪穴住居等の居住施設を伴わないことから、前

時代的な遊動的な生活形態が想定される。

早期 当期では、小規模ながら竪穴住居による集落形成が明瞭になり、一地点における定着性が強まる。赤城山西南麓や子持山南東麓、榛名山東麓などの広域に立地が認められ、第3図にはプロットされていないが代表的事例として井草Ⅰ式～稲荷台式期の竪穴住居6軒を検出した城山遺跡がある。一時期1～2軒での小規模集落が特徴的で、河床礫を用材にした石組み屋外炉の存在も注意される。その他に、第3図内には22遺跡の存在を確認できるが、土坑を検出した白井大宮(37)、大中子(56)、南原(74)以外は、全て土器・石器等の遺物出土のみである。立地は草創期での河岸段丘上とは異なり、丘陵部に移行する傾向がかなり明瞭である。これは後述する前期の立地動向と重複しており、気候温暖化に伴う植生変化に連動した初期定住化が、相同のエリアを生活領域とした結果と考えられる。ただし、住居構造の脆弱さや短期的利用、それに断続的な複数期にわたる集落形成などから、季節的あるいは短期間での移動と同一場所への回帰行動が想定される。

前期 子持山東麓地区での発掘調査や赤城山南麓での遺跡分布調査の成果により、当期の集落立地が他期を遙かに上回って最多となることが明確となっている。その中でも、関山・黒浜式期に顕著な増加現象が認められ、諸磯Ⅱ式期にピークを迎えつつ同Ⅲ式期には漸減に転じて、十三菩提式期では集落形成が皆無な状況となる。第3図の区域外の遺跡が多いが、近隣における花積下層式期の集落は三原田城(5)、見立相好(2)、三原田仲井(82)、上三原田中坪のみであり、続く二ツ木式期でも見立峯を始め上三原田大宮、上原・三角、芝山の4遺跡を確認するとどまる。中葉の関山式期に入ると見立十三塚、諏勝保沢中ノ山、諏訪西(3)、三原田諏訪上(80)を始め18遺跡で、次いで黒浜・有尾式期では中畦(4)、三原田諏訪上、上三原田大宮、分郷八崎(14)の他に14遺跡で集落が確認されて増加傾向が顕著となる。関山式期には、深い掘り込みや炉・柱穴を伴う定型的な住居構造が確立するが、集落規模的には2～3軒による小規模なものが主体的である。また、各住居単位での拡張や建て替えの痕跡もかなり高頻度で認められ、1地点での居住期間がかなり長期に渡るか、あるいは一定期間を空けて反復的に同一住居を利用する状況が窺える。諸磯Ⅰ式期の

集落は三原田三反田(81)の他に3遺跡と少ないが、同Ⅱ式期には集落形成が最多となり、白井十二(25)や吹屋伊勢森(24)を含め18遺跡を上げることができる。当期集落も小規模だが、他地域の安中市中野谷松原遺跡では大型住居や掘立柱建物、墓坑群などを伴う環状集落が形成されており、遺跡・集落数の増加に象徴される人口増加に対応した、地域集団の統合機能を担う拠点集落が出現する。次の諸磯Ⅲ式期では集落数が漸減し、滝沢天神(14)、滝沢日向堀(29)の他に3遺跡を数えるのみで、十三菩提式期では皆無となる。こうした衰退現象の背景については、気候変動・資源の枯渇・社会構造の変化などが指摘されている。

中期 初頭の五領ヶ台式期～阿玉台Ⅰ式期では、前期末の文化的衰退現象がそのまま継続し、集落形成は赤城山西南麓域の三原田三反田(81)と滝沢江戸久保のみにとどまる。集落数が増加に転じるのは阿玉台Ⅱ式期以降であり、同域を中心に房谷戸(10)、三原田(6)、中郷(18)と、第3図にプロットされていないが近隣では上三原田東峯、道訓前を始め9遺跡を数える。注目されるのは、三原田、上三原田東峯、道訓前などの遺跡では、後半段階に出現・形成される大規模環状集落地への先行立地や環状集落形態のアウトライン決定が、阿玉台Ⅱ式段階に確認されることである。ただし、集落規模は一時期2～5軒程度で、小・中規模集落が主体を占める。勝坂Ⅲ式期以降の後半段階では、集落数が爆発的な増加を見せ始め、拠点的な大規模環状集落の形成を伴いつつ加曾利E3式期にピークとなる。山麓末端の台地・丘陵部では、三原田、上三原田東峯、道訓前などの遺跡で大規模環状集落が形成され大きな画期を迎える。このような大規模環状集落は、一義的には一時期10～20軒による集中的居住の長期にわたって繰り返し行われた痕跡の累積結果であるが、同時に一定範囲の同族的単位集団を統合する拠点集落でもあり、相互に5km前後の間隔を置いて分布している。350軒弱の竪穴住居を確認した三原田遺跡を基点にすると、上三原田東峯遺跡は北東へ2km離れ、道訓前遺跡は南東へ4km離れて立地する。しかし、こうした大規模環状集落も柄鏡形敷石住居形態が確立・普遍化する加曾利E4式期には解体し、集落・遺跡数の減少と分散化を伴いつつ、多分に呪術的性格を持つ柄鏡形敷石住居の出現と共に、一時期2軒前後の小規模集落を主体と

第2章 遺跡の立地と環境

する構造へと変容を遂げてゆく。同期の集落遺跡には、三原田、中郷、空沢(63)の他に2遺跡があるに過ぎない。

後・晩期 中期末葉の環状集落解体に連動した集落・遺跡数の減少傾向は、さらに明瞭となる。後期前半段階では、少数ながら赤城山西南麓域の北町(12)、県指定史跡の小室敷石住居跡、前中後、滝原と、子持山東麓域の浅田(17)、吾妻川・利根川右岸の金井下新田(51)、高源地東I(54)等の遺跡がある。その中でも前中後遺跡は、称名寺式期～堀之内2式期の柄鏡形敷石住居が存在し、その張出基部の左右には延長15mの弧状列石が配置されると共に、その下に4基の土坑墓や配石墓が付随している。また、これに類似した弧状列石を伴う堀之内2式期～加曾利B1式期の柄鏡形敷石住居が、浅田遺跡でも1軒確認されている。こうした弧状列石や集団墓を随伴する柄鏡形敷石住居については、地域集団の葬祭儀礼を執行・統括するリーダーが居住する特別な住居＝「核家屋」

とされ、一集落の範囲を超えて地域集団全体をも統率する機能・性格を持った人物の存在が想定される。次の加曾利B1式期以降には、集団墓が特定集落から分離・独立して墓域を形成する傾向が明確となる。押手(20)や国指定史跡の滝沢石器時代遺跡では、配石墓や石棺墓群が上位の列石・配石と一体化するが、後期後半～晩期中葉にかけて同一地点に継続的な配石を行い、葬祭・儀礼場へと変容している。一方後期後半～晩期の集落は極めて痕跡的であり、第3図中にプロットされる遺跡は存在しない。現在、金井東裏遺跡と同様に上信自動車道建設に伴う吾妻川右岸の遺跡調査が進行中であるが、当遺跡の約20km上流域に位置する東吾妻町の唐堀遺跡では、同河川の低位段丘上で晩期前半の集落が検出されている。こうした状況を考慮すれば、今後低位段丘面の調査を通じてその実態が明らかになると考えられる。

第2表 周辺の遺跡一覧(縄文時代)

番号	遺跡名	時期別の遺跡内容						備考 (住居数)	番号	遺跡名	時期別の遺跡内容						備考 (住居数)	
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期		
1	見立溜井遺跡		△	●	●	△		前・中期8	39	白井南中道遺跡	△	△	△					
2	見立相好遺跡			●				前期2	40	白井二位屋遺跡			△					
3	諏訪西遺跡		△	●	●			前10・中期2	41	井戸上遺跡			△					
4	中畦遺跡		△	●	○	●		前期8	42	下小野子上手遺跡				●			中期1	
5	三原田城遺跡		△	●	△			前期9	43	鱒谷戸遺跡				△				
6	三原田遺跡			●	●	●		前・後期数軒, 中期300以上	44	後久保遺跡				△				
9	西ノ平遺跡			●				前期1	48	金井東裏遺跡			●	●	●		前14・中20・後期3	
10	房谷戸遺跡I				●			中期18	49	二本樋遺跡				△				
11	房谷戸遺跡III			△	●			中期1	51	金井下新田遺跡			●	●	●			
12	北町遺跡			●	●	●		前・後期1	53	土原遺跡			△					
13	田ノ保遺跡						△		54	高源地東I遺跡			○	●	●		中1・後期1	
14	間越分郷八崎遺跡		△	●	○	△		前期11	56	大中子遺跡			○	○				
15	群馬用水分郷八崎遺跡			●	●			前・中期2	58	諏訪ノ木遺跡		△	●	△	△		前期1	
16	上白井西伊熊遺跡			●	○	△		前期6	59	石原久保貝道遺跡				△				
17	浅田遺跡					●		後期	62	石原東遺跡		△		△				
18	中郷遺跡			●	●	●		前14・中108・後期1	63	空沢遺跡		△	●	●	△		前1・中期25	
19	池田沢東遺跡			△	△	△			64	行幸田寺後遺跡				△				
20	押手遺跡			●		●	○	前1・後期2	65	空沢西遺跡			○	△				
21	丸子山遺跡			△	△	●		後期1	66	新井野遺跡			△					
22	八幡神社遺跡			△					67	行幸田西遺跡				△				
23	吹屋遺跡			●				前期7	68	行幸田城山遺跡			●	●			前・中期13	
24	吹屋伊勢森遺跡			●	△	△		前期5	69	中筋遺跡		△	●	△	△		前期2	
25	白井十二遺跡	○		●				前期12	72	中村久保田遺跡				△	△			
26	白井佐又遺跡		△	△	△	△			74	南原遺跡遺跡		○						
27	白井北中道III遺跡			●				前期6	80	三原田諏訪上遺跡		△	●	●			前21・中期4	
28	白井北中道II遺跡		△	△	○	△	△		81	三原田三反田遺跡		△	●	●	△		前9・中期1	
29	白井北中道遺跡		△	△	△	△			82	三原田仲井遺跡			●	●	△		前期8	
30	吹屋犬子塚遺跡		△	△	●	△	△	前期1	83	上三原田日向遺跡			△	△				
31	吹屋中原遺跡		△	△	●	●	○	前・中期3	84	下遠原遺跡A～D地区			●	●			前7・中期10	
32	中郷恵久保遺跡			△	○	○			85	水泉寺地区遺跡群			●	●			前期4	
33	吹屋三角遺跡		△			△												
34	中郷田尻遺跡				△	△	△											
35	吹屋糺屋遺跡			△	△	△	△											
36	白井丸岩遺跡		△	△	△	△												
37	白井大宮遺跡		○	△	○	△												
38	白井掛岩遺跡			●				前期1										

凡例
 ● 竪穴住居を伴う集落遺跡
 ○ 土坑等を伴う遺跡
 △ 遺物包含層のみの遺跡

参考文献(第1・2表の遺跡番号と対応)

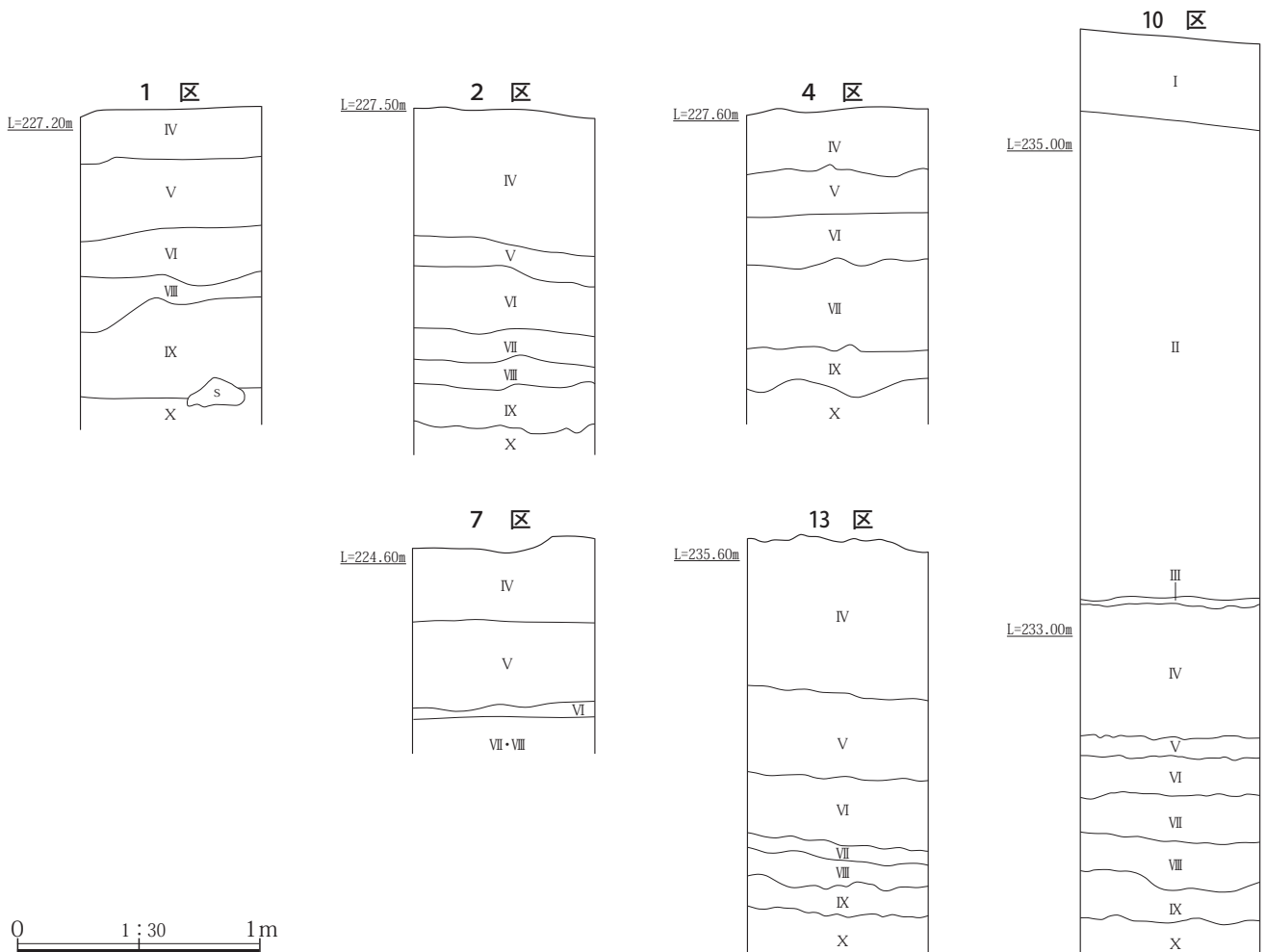
- 1『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会 1985
- 『見立溜井Ⅱ遺跡』赤城村教育委員会 2005
- 2『見立相好遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』赤城村教育委員会 2005
- 3『中畦遺跡・諏訪西遺跡』(財)群埋文 1986
- 『横野地区遺跡群Ⅰ 中畦遺跡・諏訪西遺跡』赤城村教育委員会 2000
- 4『中畦遺跡・諏訪西遺跡』(財)群埋文 1986
- 『横野地区遺跡群Ⅰ 中畦遺跡』赤城村教育委員会 2000
- 5『三原田遺跡第1～3巻』群馬県企業局 1980・1990・1992
- 6『三原田遺跡第1～3巻』群馬県企業局 1980・1990・1992
- 7『旧敷島村の遺跡 附樽遺跡』赤城村教育委員会 1998
- 8『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教育委員会 1999
- 9『西ノ平遺跡』北橋村教育委員会 1996
- 10『房谷戸遺跡Ⅰ』(財)群埋文 1989
- 11『北橋村村内遺跡Ⅲ』北橋村教育委員会 1995
- 12『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教育委員会 1996
- 13『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教育委員会 1996
- 『田ノ保遺跡Ⅲ』北橋村教育委員会 2001
- 14『分郷八崎遺跡』北橋村教育委員会 1986
- 15『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・粟久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』渋川市教育委員会 2012
- 16『上白井西伊熊遺跡-縄文時代以降編-』(財)群埋文 2010
- 17『年報18』『年報19』(財)群埋文 1998・1999
- 18『中郷遺跡(1)・(2)』(財)群埋文 2008・2010
- 19『池田沢東遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会 1989
- 20『押手遺跡発掘調査概報』子持村教育委員会 1987
- 21『丸子山遺跡』子持村教育委員会 2005
- 22『年報11』(財)群埋文 1992
- 23『吹屋遺跡』(財)群埋文 2007
- 24『吹屋伊勢森遺跡』(財)群埋文 2006
- 25『白井十二遺跡』(財)群埋文 2008
- 26『白井佐又遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会 2005
- 『白井佐又遺跡Ⅱ』渋川市教育委員会 2010
- 27『白井北中道Ⅲ遺跡(1)・(2)』(財)群埋文 2009
- 28『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
- 29『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・1998
- 30『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
- 31『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
- 32『中郷恵久保遺跡』(財)群埋文 2006
- 33『吹屋三角遺跡』(財)群埋文 2007
- 34『中郷田尻遺跡』(財)群埋文 2007
- 35『吹屋靴屋遺跡』(財)群埋文 2007
- 36『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・1998
- 37『白井大宮遺跡』(財)群埋文 1993
- 『白井大宮Ⅱ遺跡』(財)群埋文 2002
- 38『白井掛岩遺跡』渋川市教育委員会・技研コンサル株式会社 2016
- 39『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・19998
- 『白井遺跡群-集落編Ⅱ-(白井南中道遺跡)』(財)群埋文 1996
- 『白井南中道遺跡』子持村教育委員会 1998
- 40『白井遺跡群-古墳時代編-(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997・1998
- 『白井遺跡群-集落編Ⅰ-(白井二位屋遺跡)』(財)群埋文 1994
- 『白井二位屋遺跡Ⅲ』子持村教育委員会 2005
- 『白井二位屋遺跡4』(有)毛野考古学研究所 2012
- 41『渋川市小野上地区埋蔵文化財分布図 市内遺跡詳細分布調査報告書』渋川市教育委員会 2011
- 42『渋川市小野上地区埋蔵文化財分布図 市内遺跡詳細分布調査報告書』渋川市教育委員会 2011
- 43『渋川市小野上地区埋蔵文化財分布図 市内遺跡詳細分布調査報告書』渋川市教育委員会 2011
- 44『渋川市小野上地区埋蔵文化財分布図 市内遺跡詳細分布調査報告書』渋川市教育委員会 2011
- 45『渋川市小野上地区埋蔵文化財分布図 市内遺跡詳細分布調査報告書』渋川市教育委員会 2011
- 46『川島久保内・馬場遺跡』渋川市教育委員会 1997
- 『市内遺跡Ⅸ』渋川市教育委員会 1997
- 47『渋川市誌 第二巻 通史編・上』渋川市 1993
- 『群馬県史 資料編2 原始古代2』群馬県 1986
- 48『年報32』(財)群埋文 2013
- 49『群馬県遺跡台帳Ⅰ 西毛編』群馬県教育委員会 1972
- 50『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』渋川市教育委員会 1989
- 『金井前原Ⅱ遺跡』渋川市教育委員会 1997
- 51『金井下新田遺跡』『年報』34・35 群埋文 2015・2016
- 52『東町関下遺跡』(財)群埋文 1998
- 53『群馬県遺跡台帳Ⅰ 西毛編』群馬県教育委員会 1972
- 54『高源地東Ⅰ遺跡』(財)群埋文 2006
- 55『西浦遺跡』渋川市教育委員会 1986
- 『石原西浦遺跡Ⅱ』渋川市教育委員会 1995
- 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教育委員会 2014
- 56『市内遺跡Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ』渋川市教育委員会 1991・1992・1993・1994
- 57『市内遺跡Ⅹ』渋川市教育委員会 1997
- 58『諏訪ノ木遺跡』渋川市教育委員会 1981
- 『住宅市街地整備総合支援事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 諏訪ノ木Ⅱ遺跡』渋川市教育委員会 2000
- 『諏訪ノ木Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ～Ⅸ遺跡』渋川市教育委員会 2001・2003・2004・2006
- 『石原東遺跡D区・諏訪ノ木Ⅴ遺跡』(財)群埋文 2005
- 『市内遺跡17～19』渋川市教育委員会 2004～2006
- 59『市内遺跡Ⅵ・Ⅸ』渋川市教育委員会 1933・1996
- 『石原東遺跡F区』渋川市教育委員会 2001
- 『市内遺跡16・19』渋川市教育委員会 2003・2006
- 60『田中遺跡』渋川市教育委員会 1999
- 『渋川市内遺跡Ⅺ』渋川市教育委員会 1999
- 61『石原東古墳群』渋川市教育委員会 1997
- 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教育委員会 2014
- 62『石原東・中村日焼田遺跡』渋川市教育委員会 1991
- 『市内遺跡Ⅳ』渋川市教育委員会 1991
- 『石原東遺跡・中村日焼田遺跡・中村久保田遺跡』渋川市教育委員会 1993
- 『石原東遺跡(Ⅱ)・(Ⅲ)』渋川市教育委員会 1994・1995
- 『石原東遺跡D区・諏訪ノ木Ⅴ遺跡』(財)群埋文 2005
- 『住宅市街地整備総合支援事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 石原東遺跡E区・F区』渋川市教育委員会 2001
- 63『空沢遺跡』渋川市教育委員会 1978
- 『空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡発掘調査概報』渋川市教育委員会 1980
- 『空沢遺跡第3次・5次～10次』渋川市教育委員会 1982・1985・1986 1988～1991
- 『空沢遺跡O地点』渋川市教育委員会 1987
- 『市内遺跡Ⅴ・Ⅵ・ⅩⅢ』渋川市教育委員会 1992・1993・2000
- 64『市内遺跡Ⅵ』渋川市教育委員会 1993
- 65『空沢西遺跡』渋川市教育委員会 2003
- 66『渋川市内遺跡16』渋川市教育委員会 2003
- 67『市内遺跡Ⅴ』渋川市教育委員会 1992
- 68『市内遺跡Ⅰ』渋川市教育委員会 2008
- 69『中筋遺跡』渋川市教育委員会 1987
- 『中筋遺跡第2次・5次・7次～9次・11次・12次発掘調査概要報告書』渋川市教育委員会 1988・1991・1993・1995・1996
- 『市内遺跡Ⅲ・Ⅳ』渋川市教育委員会 1990・1991
- 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教育委員会 2014
- 70『行幸田畑中B遺跡』渋川市教育委員会 1995
- 『市内遺跡Ⅶ』渋川市教育委員会 1994
- 71『石原東遺跡・中村日焼田遺跡』渋川市教育委員会 1991
- 『石原東遺跡・中村日焼田遺跡・中村久保田遺跡』渋川市教育委員会 1993
- 72『石原東遺跡・中村日焼田遺跡・中村久保田遺跡』渋川市教育委員会 1993
- 73『中村遺跡』渋川市教育委員会 1986
- 74『市内遺跡Ⅺ』渋川市教育委員会 1998
- 75『子持村誌 上巻』子持村 1987
- 76『渋川市誌 第二巻 通史編・上』渋川市 1993
- 『群馬県史 通史編5 近世2』群馬県 1991
- 77『渋川市誌 第二巻 通史編・上』渋川市 1993
- 78『渋川市誌 第二巻 通史編・上』渋川市 1993
- 79『三国街道 群馬県歴史の道調査報告書 第3集』群馬県教育委員会 1980
- 『群馬県史 通史編5 近世2』群馬県 1991
- 『渋川市誌 第二巻 通史編・上』渋川市 1993
- 『子持村誌 上巻』子持村 1987
- 80『三原田諏訪上遺跡Ⅰ～Ⅳ』赤城村教委 2004・2005
- 81『三原田三反田遺跡』赤城村教委 2001
- 82『三原田仲井遺跡』赤城村教委 2004
- 83『上三原田日向遺跡・上三原田大宮遺跡・上三原田中坪前遺跡・見立峯遺跡Ⅰ』赤城村教委 2002
- 84『下遠原遺跡A・C区』渋川市教委 2008
- 85『水泉寺地区遺跡群』北橋村教委 1990

3. 基本層序

当遺跡は、山麓性の扇状地形により北西から南東方向へと緩傾斜しており、地表下の堆積土層も一様ではない。ここでは、各地点の堆積土層を総合的に観察し、基本土層として集約している。以下、各土層の説明をするが、第4図のように10区を除いて、堆積土層の大半を占めるⅠ～Ⅲ層を除去した状態の柱状図を掲載している。Ⅳ層については複数枚の火砕流や火山灰により構成されるが、その詳細は平成30年度刊行予定の「古墳時代編」報告書を、また関東ローム層相当のX層以下の詳細は、旧石器時代の調査概要を記載した384頁と第307図をそれぞれ参照されたい。

- Ⅰ層：表土層。現代の畠耕作土で、下位のⅡ層の軽石を多量に鋤込んでいる。層厚30～50cm。
- Ⅱ層：6世紀第2四半期に噴火した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FP)層。層厚1.8～2mに及ぶ。

- Ⅲ層：灰黄褐色土(10YR4/2)。下位のⅣ層上位部分が植物の生育・腐植作用により黒色土化。層厚4～12cm。
- Ⅳ層：6世紀第1四半期に噴火した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)層。層厚10～50cm。
- Ⅴ層：黒褐色土(10YR3/2)。4世紀前葉の浅間C軽石(As-C)や5世紀代の榛名有馬テフラ(Hr-aa)を含む。層厚10～40cm。
- Ⅵ層：黒褐色土(10YR3/1)。弥生時代遺構の掘り込み面が存在すると想定される。層厚5～30cm。
- Ⅶ層：灰黄褐色土(10YR4/2)。いわゆる淡色黒ボク土層。縄文時代中期末～後期前半の遺構掘り込み面が存在すると想定される。層厚10～40cm。
- Ⅷ層：褐灰色土(10YR4/1)。総社軽石(As-Sj)に由来する軽石を含む。縄文時代前期の遺物を主体に包含し、当層上面が同期の遺構確認面。層厚10～25cm。
- Ⅸ層：暗灰黄色土(2.5Y4/2)。総社軽石(As-Sj)に由来する軽石を含む。ローム漸移層。層厚10～50cm。
- X層：にぶい黄色土(2.5Y6/3)ローム層。



第4図 遺跡の基本土層

第3章 遺跡の調査内容

1. 検出された遺構の概要

第1章の「調査の方法と工程」にて既述したように、当遺跡では6世紀代の榛名山二ツ岳の2度に及ぶ噴火に伴う層厚約2.5m前後のテフラが堆積し、時代や時期の識別に際して指標となると共に、古墳時代の地表面や弥生・縄文時代の文化層を保護する役割も果たしている。当報告書では編集の都合上、このテフラ上面を掘り込んで構築された近世遺構と、テフラの下位に存在する弥生・縄文時代の遺構について、その概要を記述する。

尚、前述したように約20mの路線幅で延長1,200mにわたって調査を行っているため、現況の畑地割や市道・農道を基準にして12の調査区(1～5・7～13区)を設定している。これらの調査内容の記載に当っては、各種遺構の所在場所検索の煩雑さを回避するために、各調査区を単位にして時代別・遺構種別毎に行った。また、11区の調査内容については、調査・整理事業との関連で、平成31年度に刊行予定である。

近世以降 表土のⅠ層内に遺構の構築面があると想定されるが、その識別・確認が困難なため6世紀第2四半期に降下・堆積したⅡ層の榛名山二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の上面にて遺構確認を行った。

調査遺構の種別・数量は、墓坑37基・土坑132基・ピット3基・溝49条・畝1区画等があり、その分布はほぼ前調査区にわたる。墓坑内からは、埋葬人骨とともに陶・磁器類や煙管・簪・銭貨等の副葬品が出土している。

当遺跡内では、6世紀中葉の火山災害直後から近世に至る間には目立った人為的活動痕跡は認められず、約1千年間にわたる断絶期が存在したことも想定される。

弥生時代 明確な文化層は確認できなかったが、基本土層のⅥ層内に遺構の構築面があったと想定される。各遺構の調査にあたっては、その埋没土がⅥ層と類似した黒褐色土であるために同層中での検出が困難なことから、下位の灰黄褐色土のⅦ～Ⅷ層内で実施した。調査遺構の種別・数量は、後期を中心とした竪穴住居9軒・方形周溝遺構1基・再葬墓1基・土坑20基・ピット86基・集石4基・溝1条・焼土遺構1基である。この他に遺構

以外の包含層から土器・石器類約32,000点余が出土し、各種遺構と共に2・4・7区を中心に確認されている。

特筆されるのは、中期段階の住居をはじめとする遺構が極めて希薄であるにも関わらず、包含層を含めた出土土器数量は12,000点を超えることである。こうした状況を考慮すれば、竪穴住居のような明確な掘り込みを伴わない何らかの居住施設、例えば平地式建物のような遺構が存在した可能性もある。また、当該期の土器からイネの籾圧痕が検出されており、陸耕を含めたイネ栽培が行われていた可能性も考慮される。吾妻川流域には、当遺跡を含めてそれに近接した河岸段丘や山麓緩斜面に前・中期の遺跡立地が相当数確認されており、当流域は群馬・長野県域とを結ぶ主要ルートの一つと考えられる。

縄文時代 基本土層のⅦ層～Ⅸ層までの淡色黒ボク土や褐灰色土中を中心にして、竪穴住居37軒、土坑425基・配石10基・集石4基・ピット324基・屋外埋設土器2基・焼土遺構5基・溝状遺構3条などの遺構が確認されている。主だった遺構の時期別内訳は、竪穴住居の場合、関山Ⅱ式期を中心とした前期14軒、加曾利E2・E3式期を中心とした中期後半20軒、称名寺Ⅱ式期を中心とした後期前半3軒であり、前・中期が主体を占める。土坑は全体の55%に相当する236基に明確な土器が伴出せずに時期不明だが、住居と同様の細別時期を中心として前期97基、中期後半67基であり、後期前半については堀之内2式期を中心として14基となる。他に、住居は確認できないものの早期中～後半に3基、後期後半の加曾利B式期に8基の土坑が存在する。

各遺構の分布エリアは、7区を中心に4・5・8区の4地区に全体の90%以上が集中しており、弥生時代遺構に比べてより南側に偏在する傾向を持つ。

旧石器時代 第1章にて既述したように、保存措置が図られた4・9区を除く全調査区の48個所に5m×2.5mのトレンチを適宜設定し、X～Ⅸ層までの厚さ約1mのローム層調査を行ったが、石器等を検出することはできず、ローム層の堆積状況を記録するに留めた。

尚、トレンチ配置やローム堆積状況については384・385頁を参照されたい。

2. 近世以降の遺構と遺物

当遺跡では、ほぼ全調査区にわたって当該期の遺構が検出されているが、その内訳は墓坑37基・土坑132基・ピット3基・溝49条(自然流路4条を含む)・畠1区画等である。各遺構の検出面は、第Ⅱ層の6世紀第2四半期に噴火した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FP)上面であるが、実際の掘り込み面は現代の畑耕作土化している1層内に存在すると考えられる。出土遺物によりある程度帰属時期の判明する遺構は墓坑のみであり、他は近世～現代までの時間幅が想定される。

尚、各遺構の分布については、別添の全体図1・2に掲載してあるが、10区北については各遺構ともに皆無であることから、全体図を含めて割愛した。以下、各調査区と遺構種別を単位として、その詳細を記述する。

(1) 墓 坑

第3表に掲示したように、1・7～10区において人骨の出土をはじめ木棺に関わる木片・鉄釘や煙管・火打金・古銭・陶器・磁器などの副葬品から墓坑と判断される37基を検出した。調査区別に見ると、1区：1基、7区：5基、8区：25基、9区：3基、10区：3基となり、8区を中心とした分布状況が窺える。この8区では、25基の墓坑が10m×10mの狭小な範囲に長軸を南北方向に置いて相互に近接・重複して密集し、集団墓地形成の様態が特徴的である。また、調査着手前段階の当該地点は現代の墓地にもなっており、かなり長期間にわたる墓地の継続的利用が想定される。8区ほどではないが、7・9・10区においても墓坑が1箇所にとまる傾向が認められ、墓域としての区画意識が看取される。これらの全体的かつ詳細な分布状況については、調査区を単位にして別添の全体図1・2に掲示してあるので、そちらを参照されたい。

埋葬時期については、古銭や磁器を主体とした明確な伴出遺物により、ある程度判定可能なものが25基にとどまり、他の12基は時期不明である。尚、副葬古銭の大半を占める寛永通寶は、寛永13年(1636)に铸造が開始されて以降、明治時代中頃まで貨幣として流通・使用され、また昭和に入っても墓に副葬される事例が知られてい

る。こうしたことを踏まえれば、各種の寛永通寶により埋葬時期決定することは困難であるが、少なくとも各铸造年代を把握することにより、その上限年代を確定することは可能と言えよう。この場合の内訳は、①江戸時代の17世紀前半を上限とするもの：3基、②17世紀後半を上限：14基、③18世紀前半を上限：5基、④18世紀後半を上限：1基、⑤19世紀後半を上限：1基、⑥大正時代を上限：1基となる。更に、伴出する磁器の製作年代を加味した場合には、①17世紀後半：2基、②17世紀後半～18世紀前半：3基、④18世紀前半：1基、⑤18世紀後半～19世紀前半：1基の合計7基がいずれも江戸時代に帰属することになる。状況的には、墓坑の多くが江戸時代に築造されたと想定されるが、磁器に関しても時代を超えて使用されることから、決定要件とすることはできないだろう。

形態としては、部分調査による形状不明な3基を除いて、掘り込み確認面での平面形状が方形を含む隅丸長方形形状のものが15基と全体の44%を占め、次いで楕円形状を基調とするものが11基(32%)、円形状が8基(24%)となる。

規模に関しては、隅丸方形・長方形の場合、長辺が①50～99cm：1基、②100～149cm：8基、③150～199cm：4基、④200～249cm：1基であり、②グループを主体とする傾向が明瞭である。楕円形状では、長軸が①50～99cm：1基、②100～149cm：6基、③150～199cm：3基であり、隅丸方形と同様に②グループが主体を占める。円形状では②100～149cm：1基、③150～199cm：2基である。規模の面で見れば、各形態ともに②グループを中心としており、特に隅丸方形や楕円形状の墓坑については、木棺を伴う葬法との関連性が想定される。

隅丸長方形や楕円形状墓坑の主軸方位は、26基中その73%に相当する19基が、西および東方向への偏差が20度以内に収まる。

各墓坑の埋没土は、基本的に土坑・溝状遺構等と同様に、締りに乏しい表土に近似した黒褐色土と軽石粒(Hr-FP)との混土層であり、ほぼ一括埋没している。

尚、各墓坑から出土した人骨の鑑定内容については、第4章の「1. 金井東裏遺跡出土の近世人骨」を、またその位置・形状・規模等については第3表を参照して頂きたい。

以下、各調査区を単位にして各墓坑の記述を行う。

A. 1 区

概要 39号の1基が存在するのみである。

写真 PL2・91 **観察表** 425頁

重複 無し。

形状・規模 長径159×短径132×深さ109cmの楕円形状を呈する。

方位 N9度Wで、僅かに西に偏る。

埋葬状況 頭位を北方向にした仰臥屈葬状態の1体が検出された。

性別・年齢 30歳代の男性人骨と推定される。

副葬品 銭貨6点と磁器1点の他に用途不明の金属製品1点がある。磁器(第8図8)は備前の染付碗であり、人骨腹部の右脇に横転した状態で出土した。

所見 埋葬時期については、裏面に「文」字(以下「文銭」と呼称)を持つ第8図6の寛永通寶の初鑄年代が寛文8年(1668)であることから見て、少なくとも同年を遡ることはないと考えられる。また、上記磁器の年代が

17世紀後葉～18世紀中葉であることを重視すれば、江戸時代に帰属する可能性が高い。

B. 7 区

概要 7区の北側に1・3～5・38号の5基が存在し、1号を除いて他の4基はX=57791～57793、Y=-75523～-75525の範囲に集中している。各墓坑から人骨が検出されているが、遺存・埋葬状態が明瞭なのは各1体を検出した1・4号の2基にとどまる。

写真 PL2・91～93 **観察表** 425・426頁

重複 5号が4号の上位に構築されている。

形状・規模 1号が長径96×短径83×深さ13cmの隅丸方形である以外は、全て長径145～197×短径80～90×深さ30～77cmの隅丸長方形を呈する。

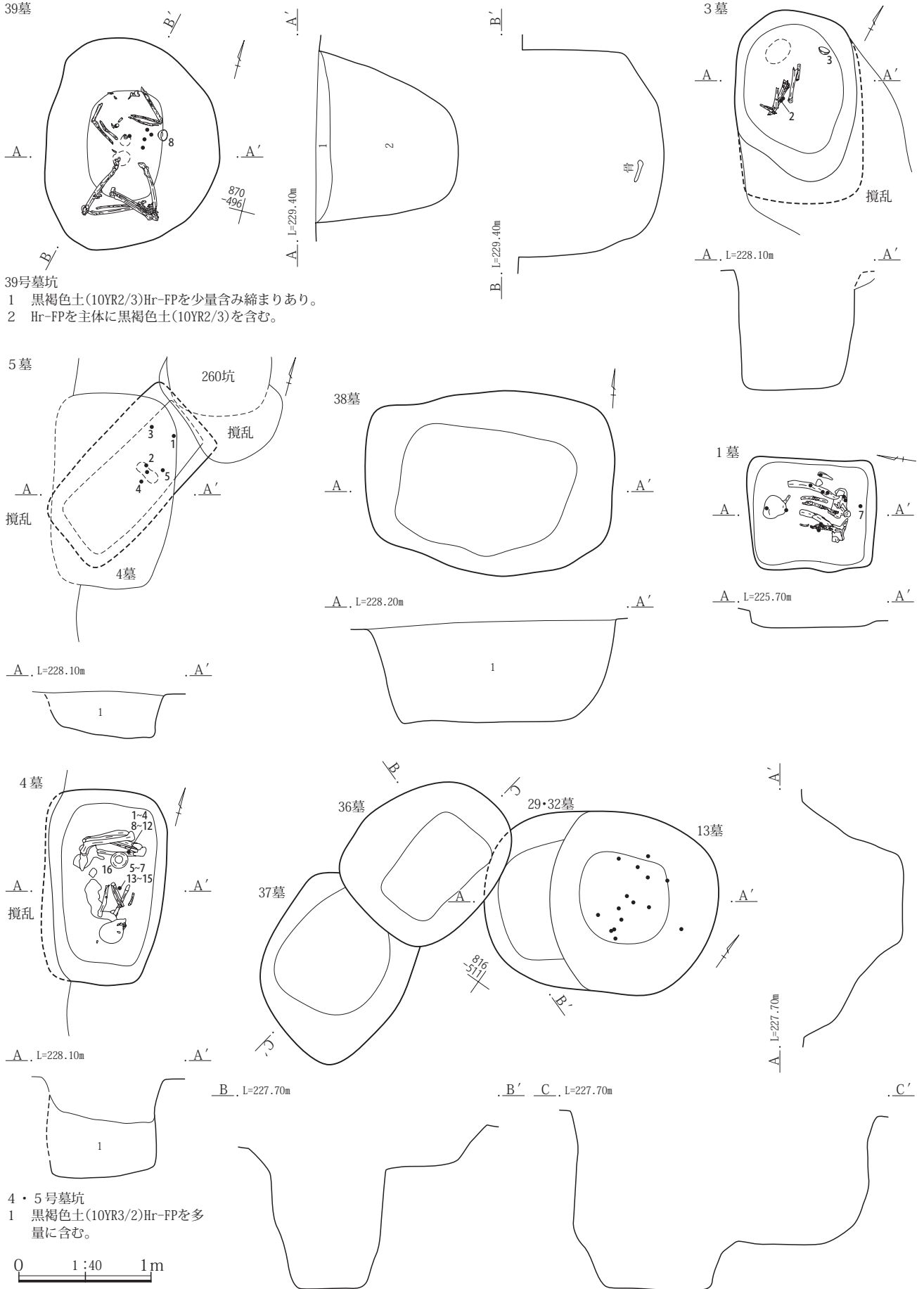
方位 3・38号はかなり大きく西に偏るが、他は西偏7～12度の範囲に収まる。

埋葬状況 1号が頭位を北方に向けた仰臥屈葬であり、4号が顔面を東に頭位を南方に向けた横臥屈葬と想定さ

第3表 墓坑規模一覧(近世以降)

区	番号	掲載 図版	位置		主軸 方位	形状	規模(cm)			人骨 有無	伴出遺物	銭貨の種別				
			座標X	座標Y			長径	短径	深さ			古寛	新寛	四文	背文	背元
1	39	第5図	57869	-75496	N9度W	楕円形	159	132	109	有	銭貨6,磁器1,金属製品1	3	2		1	
7	1	第5図	57775	-75525	N7度W	隅丸方形	96	83	13	有	銭貨6,砥石1,鉄釘14		6			
7	3	第5図	57795	-75523	N30度W	隅丸長方形	(146)	(96)	74	有	銭貨3,陶器1					
7	4	第5図	57791	-75525	N11度W	隅丸長方形	145	(84)	77	有	銭貨17,磁器1	7	2			8
7	5	第5図	57792	-75525	N12度W	隅丸長方形?	(134)	(71)	30	有	銭貨5	2	3			
7	38	第5図	57793	-75528	N83度W	隅丸長方形	197	138	69	有	磁器1					
8	11	第5図	57826	-75509		不明	不明	不明	32	有						
8	12	第6図	57815	-75509		不整形	169	140	41		銭貨6,鉄釘19	6				
8	13	第5図	57816	-75509		不整形	136	126	78	有	銭貨1,金属製品1,鉄釘17		1			
8	14	第6図	57815	-75511	N35度E	楕円形	180	123	30		銭貨8,磁器1	3	1			4
8	15	第6図	57814	-75507		不整形	103	97	54							
8	16	第7図	57812	-75509	N8度E	隅丸方形	146	129	80		銭貨1,火打金1,金属製品2,鉄釘2		1			
8	17	第6図	57812	-75511	N2度W	楕円形	(120)	不明	90		鉄釘6					
8	18	第6図	57808	-75506	N61度E	楕円形	113	87	24							
8	19	第7図	57812	-75508		不整形	143	142	81		銭貨9		8			1
8	20	第6図	57809	-75508	N0度W	隅丸長方形	207	102	70		銭貨12(聖元通寶1),刀子1,金属製品2,鉄釘2	7	1	3		1
8	21	第6図	57815	-75508	N0度W	楕円形	106	122	114							
8	22	第7図	57814	-75510	N88度W	楕円形	198	144	60							
8	23	第7図	57815	-75509	N0度W	楕円形	155	142	104		銭貨5,煙管1,金属製品1,鉄釘6		5			
8	24	第6図	57811	-75506		円形	87	73	54							
8	26	第6図	57810	-75509	N8度W	隅丸長方形	192	86	83		簪2,鉄製金具1,金属製品1					
8	27	第6図	57810	-75510	N20度W	隅丸長方形	156	不明	51		銭貨2,金属製品1,鉄釘2	2				
8	28	第6図	57810	-75511	N16度W	隅丸長方形?	不明	不明	55		銭貨2,煙管2,金属製品3,鉄釘1	1	1			
8	29	第5図	57816	-75510		不明	不明	不明	不明		銭貨20,金属製品4,鉄釘2	1	19			
8	31	第7図	57814	-75510	N50度W	楕円形	不明	110	75							
8	32	第5図	57816	-75510	不明	不明	不明	不明	40							
8	33	第6図	57810	-75510	N5度W	隅丸長方形	133	75	63		銭貨10(天禧通寶1,大正9～11年1銭硬貨4)		3	1		1
8	34	第6図	57811	-75511		円形	138	113	83		銭貨22,磁器1,鉄釘3	1	21			
8	35	第7図	57813	-75510		円形?	(128)	不明	73		銭貨6(文久永寶5),金属製品1,鉄釘2			5		1
8	36	第5図	57815	-75511	N10度E	隅丸長方形	126	117	139		銭貨3(鉄寛永2以上),煙管1		2			1
8	37	第5図	57814	-75511	N0度W	楕円形?	不明	108	95		金属製品1,鉄釘3					
9	2	第7図	58028	-75523	N8度E	楕円形	139	92	50	有	銭貨6	6				
9	6	第7図	58025	-75522	N7度W	楕円形	170	130	70	有	銭貨6,火打金1	2				4
9	7	第7図	58024	-75522		円形	168	156	67	有	銭貨29,磁器2	9	10			10
10	8	第7図	58079	-75538	N10度W	隅丸長方形	100	71	13	有	銭貨6		6			
10	9	第7図	58081	-75544	N13度W	隅丸長方形?	(100)	(70)	不明	有	鉄釘3					
10	10	第7図	58081	-75541	N11度W	隅丸長方形	125	86	52	有	銭貨13(鉄寛永1),煙管1,磁器2,金属17	2	11			

第3章 遺跡の調査内容



第5図 墓坑(1)[1区39号、7区1・3~5・38号、8区11・13・29・32・36・37号]

れる。やや残存不良だが、3号も横臥屈葬と考えられる。
性別・年齢 1号は年齢不詳の成人男性、3号は30歳代の女性、4号は40歳代の女性、38号は40歳代の男性と推定される。

副葬品 各墓坑ともに、寛永通寶の銭貨あるいは陶磁器を副葬しているが、その数量や種類には若干の差異がある。その出土状況について遺存良好な1・4号で確認すると、銭貨の場合は両墓坑共に腹部～脚部にかけて右脇に、4号の磁器は銭貨と同様に右脇に正位の状態で置かれている。また、銭貨と磁器を伴う遺存不良な3号でも、4号と類似した様相を呈している。他に、1号では唯一砥石を副葬するが、その出土位置は折り曲げた脚部の下位に当たる。尚、4号から出土した寛永通寶17点のうち、第8・9図1～4・8～12の9点は相互に鑄着して出土しており、後述する8区12号で確認されているような平織り布で包まれていた可能性がある。また、副葬品ではないが、1号から木材の付着した鉄釘14点出土しており、木棺を伴う埋葬が想定できる。

所見 埋葬時期については、いずれの墓坑も確定することは困難であるが、1・5号は副葬された寛永通寶に寛文5年(1665)を初鑄とする「新寛永」の存在により、また4号は寛文8年(1668)を初鑄とする第9図8～15の「文銭」の存在により、当該年を遡ることはないと考えられる。3・38号は、第8図3の瀬戸・美濃碗や第10図1の備前染付碗が18世紀前葉～中葉の製作であることから、同期に比定される可能性が高い。また、5基の分布状況から判断すると、東側に隣接する8区の墓坑群とは約20mの距離を置いており、それらとは別単位の墓群を形成すると考えられる。

C. 8 区

概要 現農道を挟んで7区の東側に隣接し、11～24・26～29・31～37号の25基が存在する。これらの分布域は、X=57808～57826、Y=-75506～-75511の18m×5mの狭小な範囲に密集・重複している。人骨が検出されているのは、11・13号の2基のみであり、他は副葬品や形状・規模等から墓坑の認定をした。

写真 PL 3～6・92～97 **観察表** 426～431頁
重複 半数以上の15基に重複関係が認められるが、埋没土層による相互の新旧関係については把握できなかつ

た。ただし、近年までの土葬墓慣習に認められる掘り込み深度の深・浅を旧・新の時間的關係に置換できるならば、13→32←36→37→31→35←16号、14←37号、17→34→33→28→27←26号という構築順序が想定され、ゴチック体の番号が最新段階となる。また、11号は2号流路により切られている。

形状・規模 最多を占めるのは楕円形状のものであり、14・17・18・21～23・31・37号の8基がある。長径の規模は不明の2基を除いて①100～149cm：3基、②150～199cm：3基となる。次いで隅丸方形1基を含む隅丸長方形が、16・20・26～28・33・36号の7基であり、長辺の規模は不明の1基を除いて①100～149cm：3基、②150～199cm：2基、③200cm以上：1基となる。不整形円形を含めた円形状のものは、12・13・15・19・24・34・35号の7基であり、長径の規模が①100cm未満：1基、②100～149cm：5基、③150cm以上：1基となる。一方、掘削深度が80cm以上のものは、楕円形4基、隅丸長方形3基、円形2基であり、楕円形や隅丸長方形のものが高深度となる傾向を看取することができる。

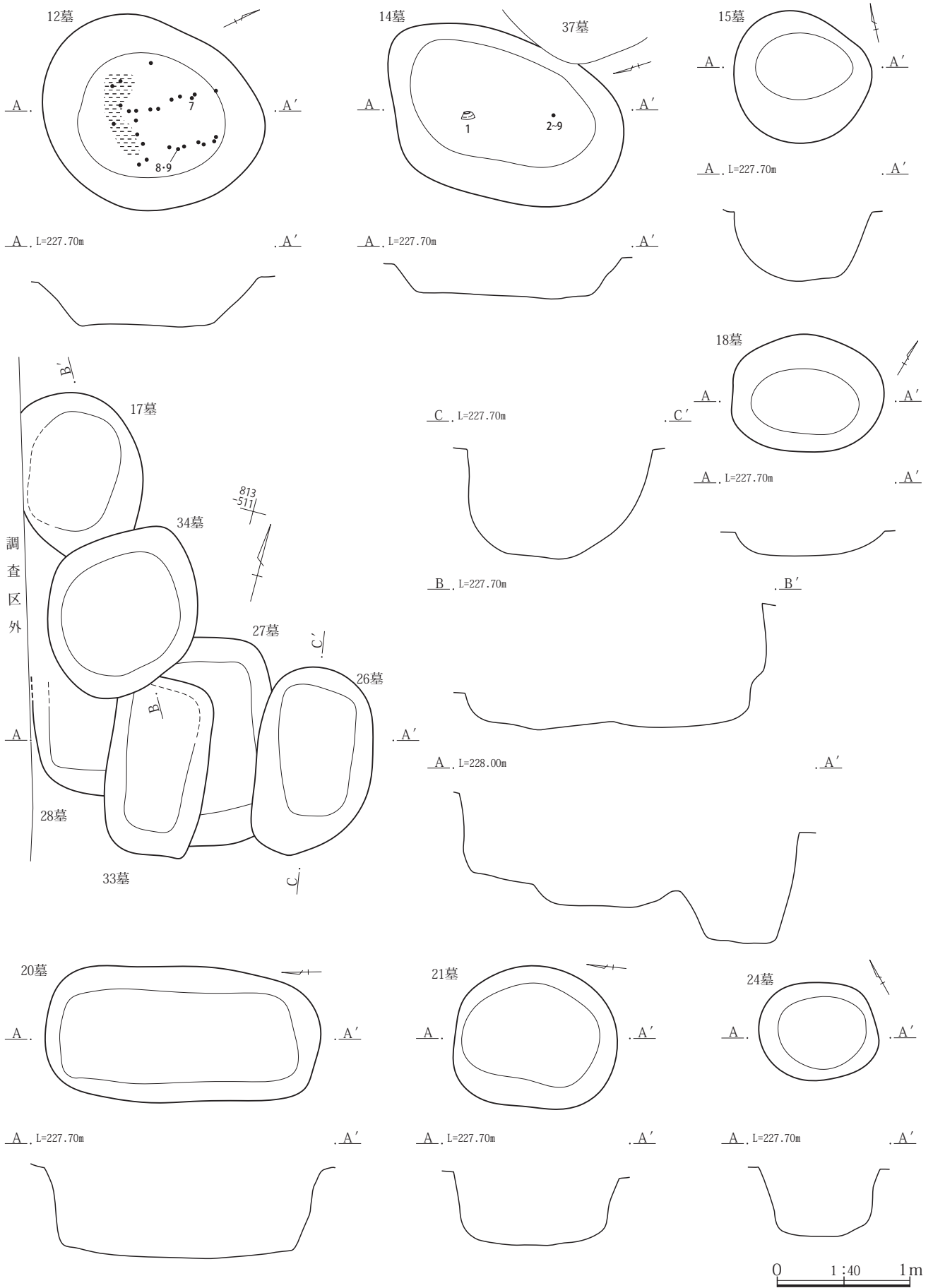
方位 隅丸長方形・楕円形状墓坑15基の中で、14・18・31号を除く他の12基は、0～20度以内の東・西偏に収まる。

埋葬状況 11・13号の人骨は破片で出土しており、詳細な埋葬状態は不明だが、共に1体を埋葬している。

性別・年齢 11号は40歳代の男性と推定されるが、13号は不明である。

副葬品 11・15・18・21・22・24・31・32号の8基には、副葬品が伴わない。寛永通寶などの銭貨を中心として、陶磁器・火打金・煙管・刀子・簪の他に形状・用途不明の金属製品を副葬している。銭貨の枚数は、13号の1枚を最少として、最多は34号の22枚であるが、各墓坑ごとのばらつきが多い。12号の第9図1～6の寛永通寶は、相互に鑄着して出土し、平織り布に包まれていた可能性が高い。20・33号では、宋銭の「聖元通寶」や「天禧通寶」を混じえる。各墓坑ともに人骨の遺存状況が不良なため、副葬品の配置関係は把握できない。20・26号は、当遺跡の中で唯一刀子や簪を副葬する墓坑であるが、簪を伴う26号の被葬者は女性の可能性が高い。他に、23・28・36号は煙管を副葬している。また、副葬品ではないが、12・13・16・17・20・23・27～29・34・35・37号の12基

第3章 遺跡の調査内容



第6図 墓坑(2)〔8区12・14・15・17・18・20・21・24・26～28・33・34号〕

から木材の付着した鉄釘が出土しており、木棺を伴う埋葬が想定できる。

所見 埋葬時期については、いずれの墓坑も確定することは困難であるが、副葬された寛永通寶等の銭貨や磁器の製作年代を参考にすれば、35号は万延元年(1860)の四文銭「文久永寶」により、12・27号は寛永13年(1636)の「古寛永」により、13・16・23・28・29・34号は寛文5年(1665)の「新寛永」により、14号は寛文8年(1668)の「文銭」により、19号は寛保元年(1741)の「元銭」により、20号は明和5年(1768)の四文銭により、36号は元文4年(1738)の「鉄寛永」により、33号は大正11年(1922)の硬貨により、各々当該年を遡ることはない想定される。全調査区を含めて、33号のように大正時代まで下る遺物を出土する墓坑は存在しない。こうした点については、当該地点が現代まで墓地として利用されていたことと、関連すると考えられる。尚、14・34号は、第10図1の備前染付碗や第14図23の備前白磁碗が17世紀中葉～後葉の製作であることから、共に江戸時代に比定される可能性が高い。17・26・37号は時期不明である。

D. 9 区

概要 当区の中央部からやや南寄りに、2・6・7号の3基が存在する。これらの分布域は、X=58024～58028、Y=-75522～-75523の狭小な範囲に近接している。各墓坑ともに人骨各1体が検出されているが、7号は遺存状態が悪く、埋葬状況は不明である。

写真 PL 6・7・98～100 **観察表** 431・432頁
重複 相互の重複はないが、6・7号はほぼ隙間なく近接する。

形状・規模 2・6号が楕円形状、7号が円形状を呈する。長径・深さの規模は、2号が139×50cmとやや小振りであるが、6・7号は170×70cm前後を測る。

方位 楕円形状の2基ともに、10度以内の東・西偏に収まる。

埋葬状況 2・6号ともに頭位を北にして顔面部を西に向けた横臥屈葬である。

性別・年齢 2号は10歳代の男性、6号は30歳代の男性、7号は性別不明の10歳代と推定される。

副葬品 寛永通寶の銭貨や磁器・火打金などを副葬している。7号では、当遺跡で最多の銭貨29枚と備前染付碗

2点(第17図30・31)を副葬している。

所見 埋葬時期については、いずれの墓坑も確定することはできないが、副葬された寛永通寶の銭貨や磁器の製作年代を参考にすれば、2号は寛永13年(1636)の「古寛永」により、6号は寛文8年(1668)の「文銭」により、各々当該年を遡ることはない想定される。7号は上記の「文銭」や17世紀後葉～18世紀中葉の備前染付碗により、江戸時代に比定される可能性が高い。

E. 10 区

概要 当区の南東隅に、8～10号の3基が存在する。これらの分布域は、X=58079～58081、Y=-75538～-75544の狭小な範囲であり、相互に約2mの間隔を置いて近接する。各墓坑ともに人骨各1体が検出されたが、10号を除いて他は遺存状態が悪く、埋葬状況は不明である。

写真 PL 7・100・101 **観察表** 432・433頁
重複 無し。

形状・規模 形状が確定しない9号を除く8・10号は、隅丸長方形形状を呈する。長径・深さの規模は、8号が100×13cm、10号が125×52cm前後を測る。

方位 8・10号の2基共に、西偏10度前後に収まる。

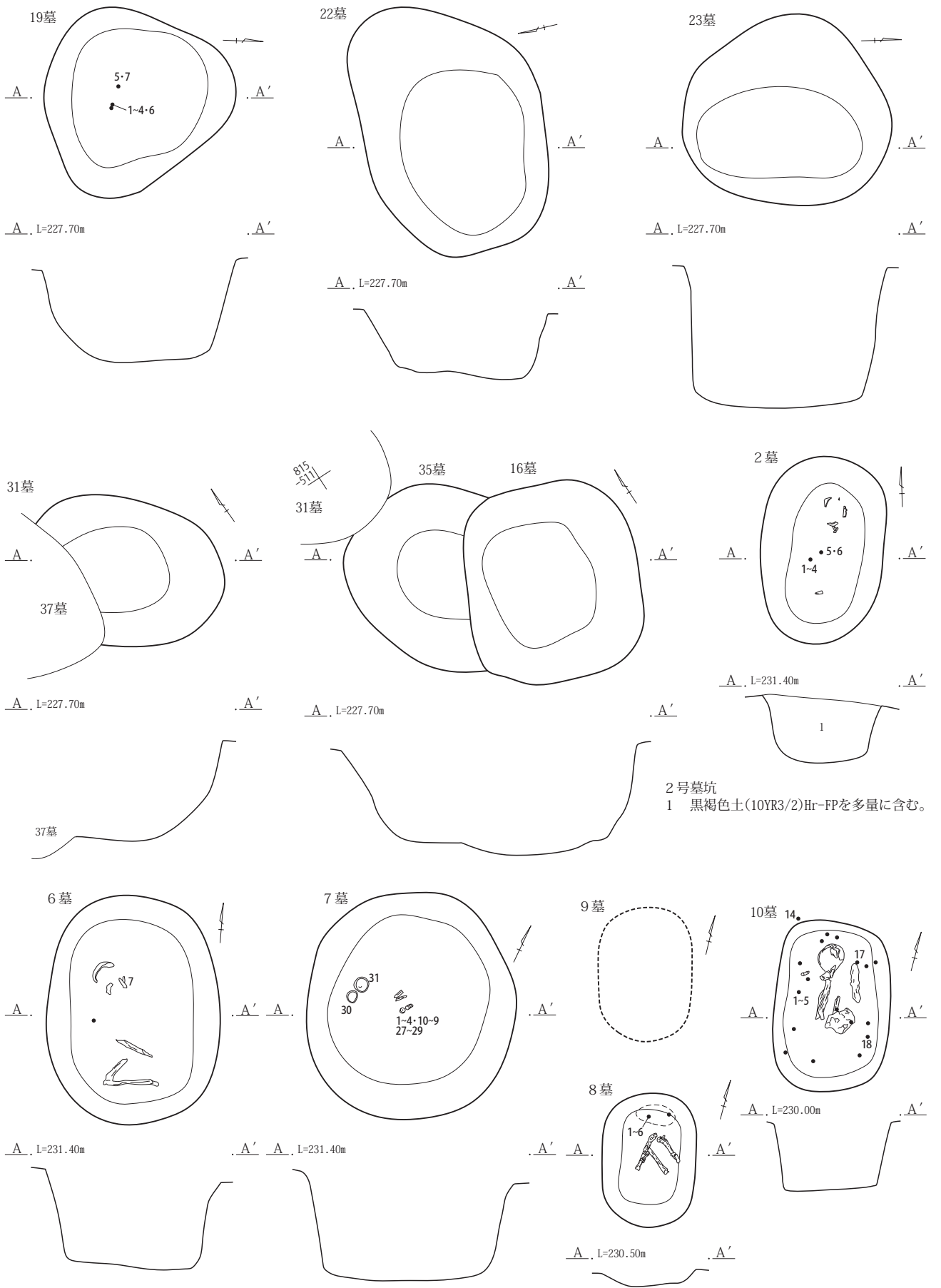
埋葬状況 8・9号は不明だが、10号は頭位を北にして顔面部を西に向け右側を下にした仰臥屈葬である。

性別・年齢 8号は30歳代の女性、9・10号は40歳代の男性と推定される。

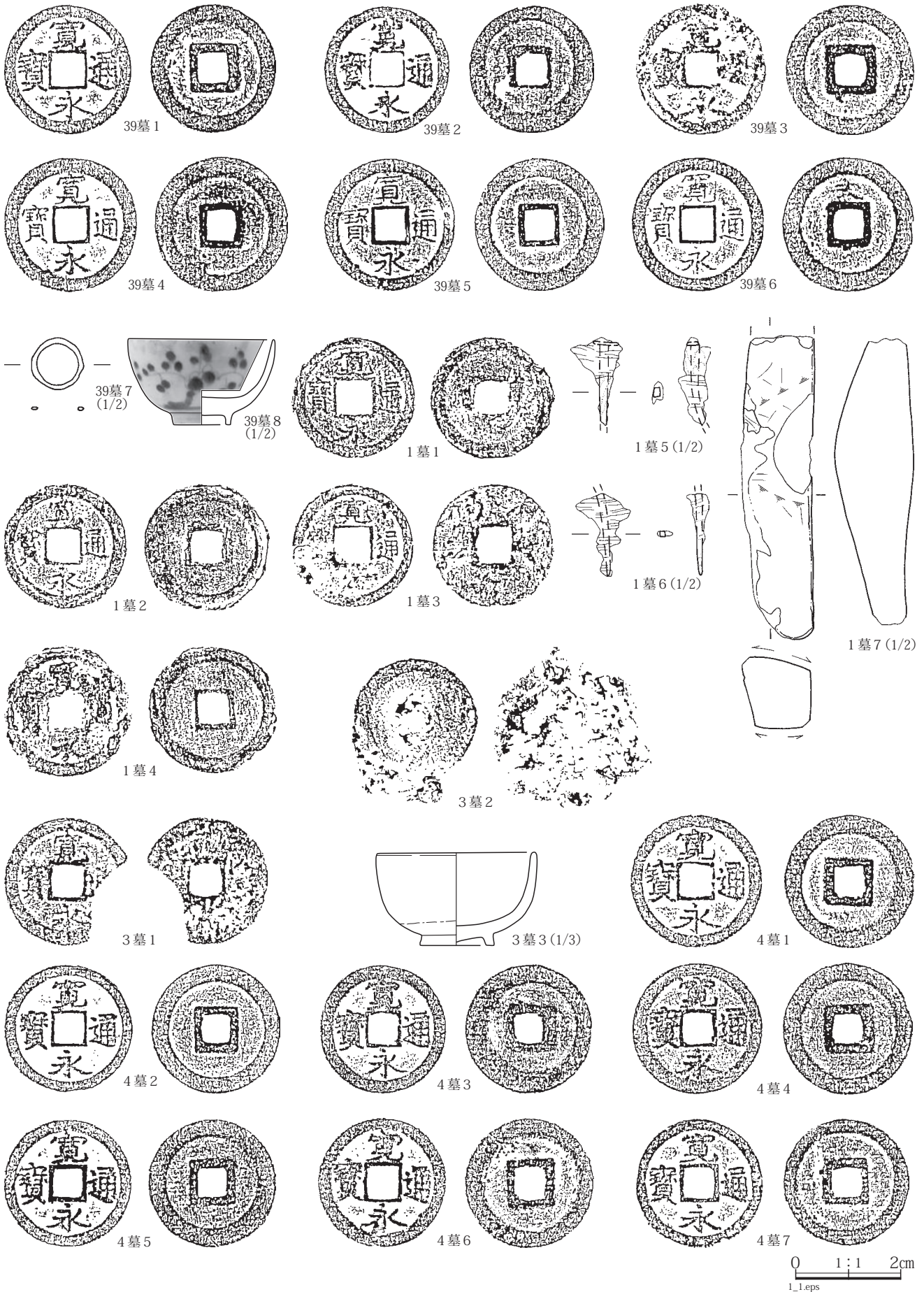
副葬品 8号では寛永通寶6枚のみであるが、10号は銭貨13枚や備前染付鉢・蓋各1点(第18図13・14)と煙管1点などを副葬している。また、寛永通寶の4点(第17図2～5)は、副葬品ではないが、8号から木材の付着した鉄釘3点が出土し、木棺を伴う埋葬が想定できる。

所見 埋葬時期については、いずれの墓坑も確定することはできないが、副葬された寛永通寶の銭貨や磁器の製作年代を参考にすれば、8号は寛文5年(1665)の「新寛永」により、当該年を遡ることはない想定される。また、10号は元文4年(1738)の「鉄寛永」や18世紀後葉～19世紀中葉の備前磁器から見て、江戸時代に比定される可能性が高い。

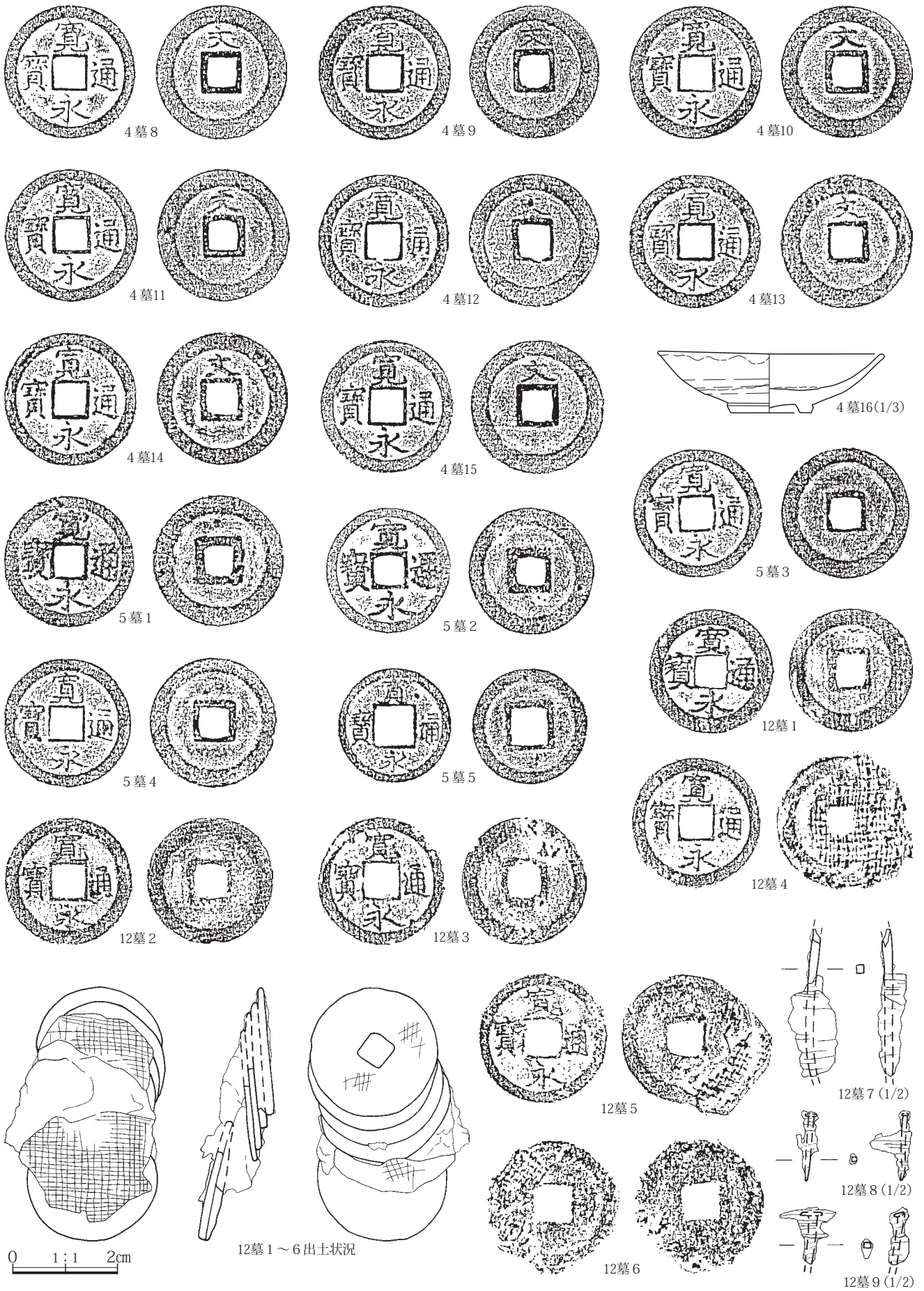
第3章 遺跡の調査内容



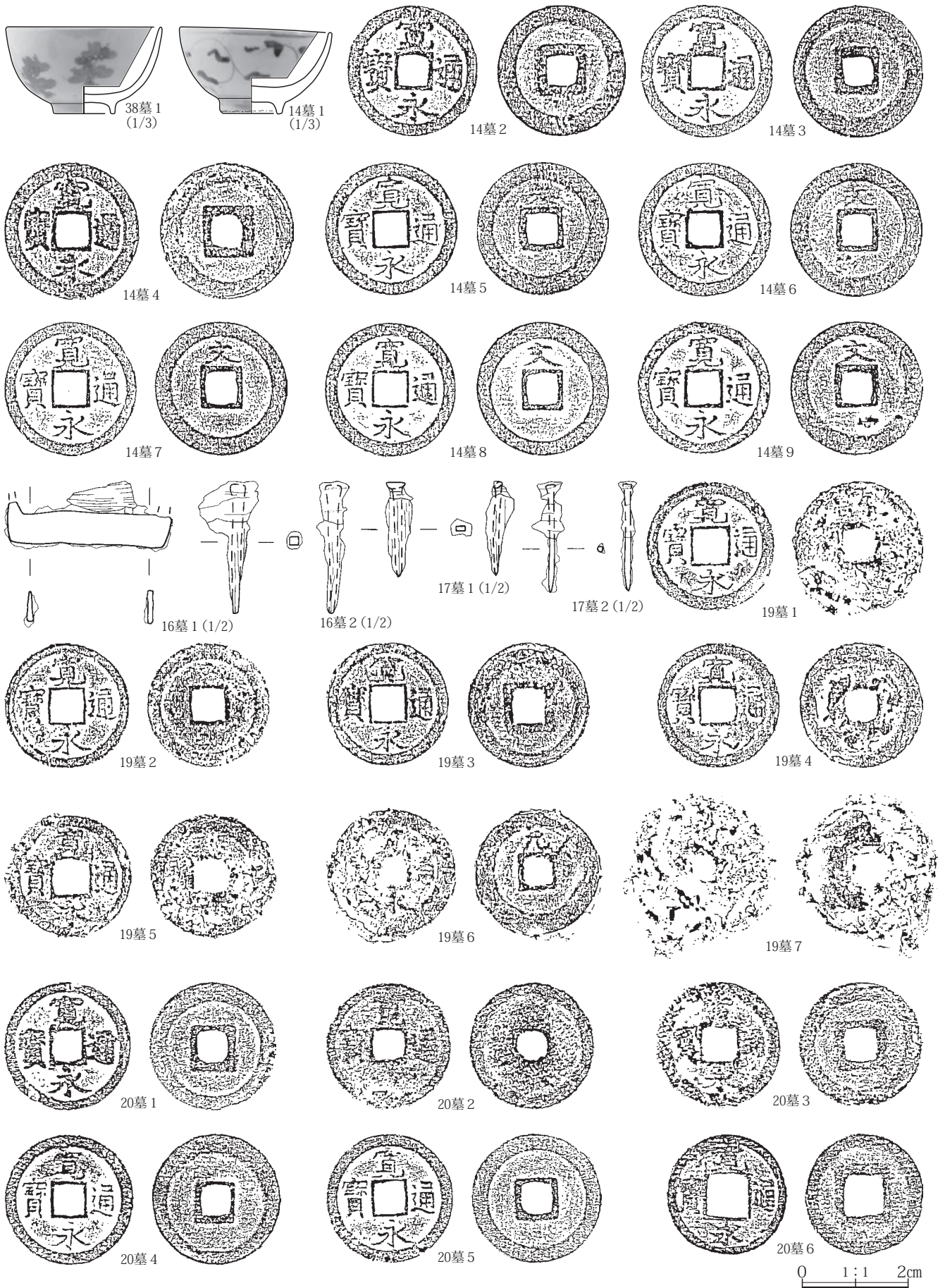
第7図 墓坑(3) [8区16・19・22・23・31・35号、9区2・6・7号、10区8~10号]



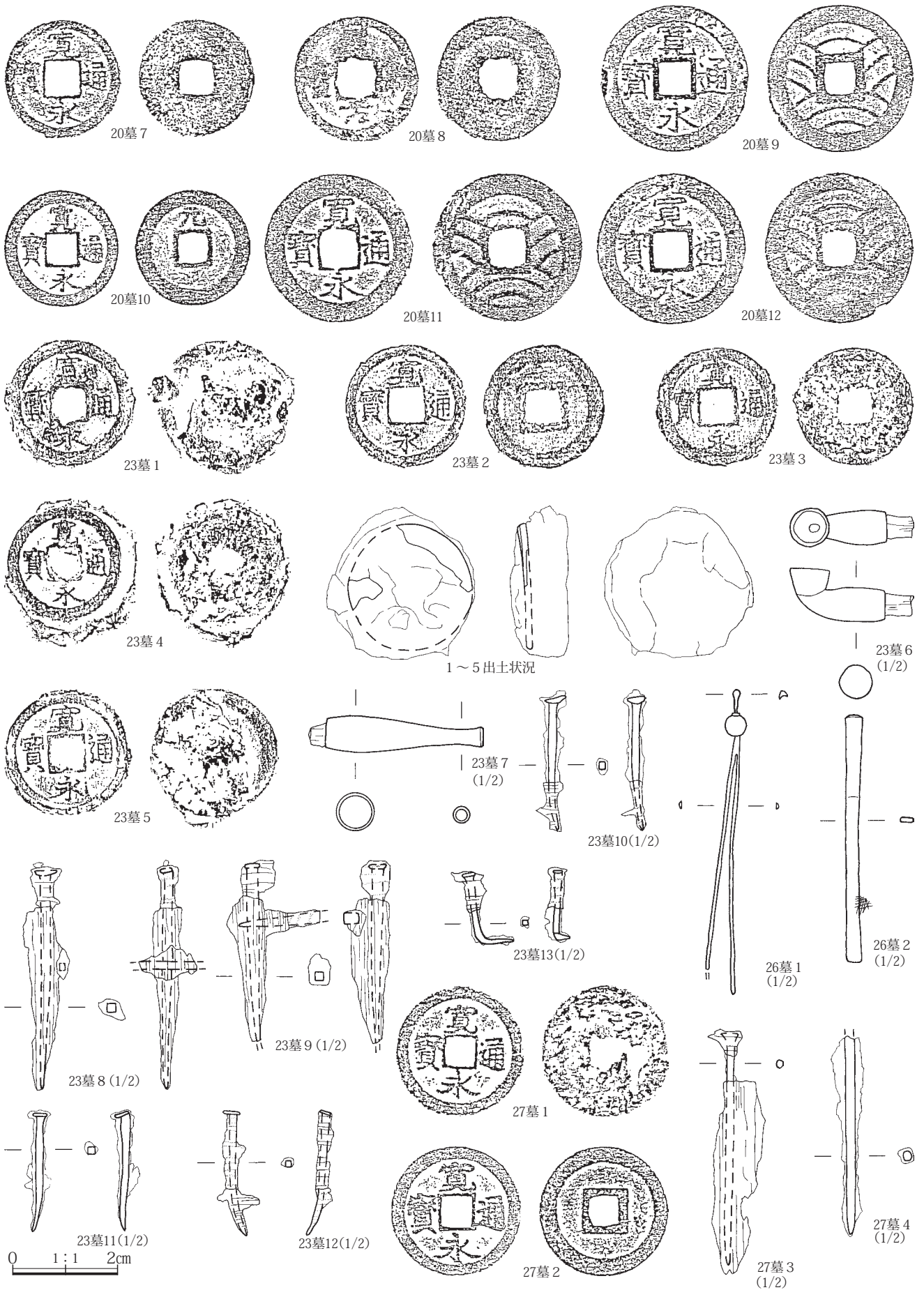
第8図 墓坑出土遺物(1)[1区39号、7区1・3・4号]



第9図 墓坑出土遺物(2)[7区4・5号、8区12号]

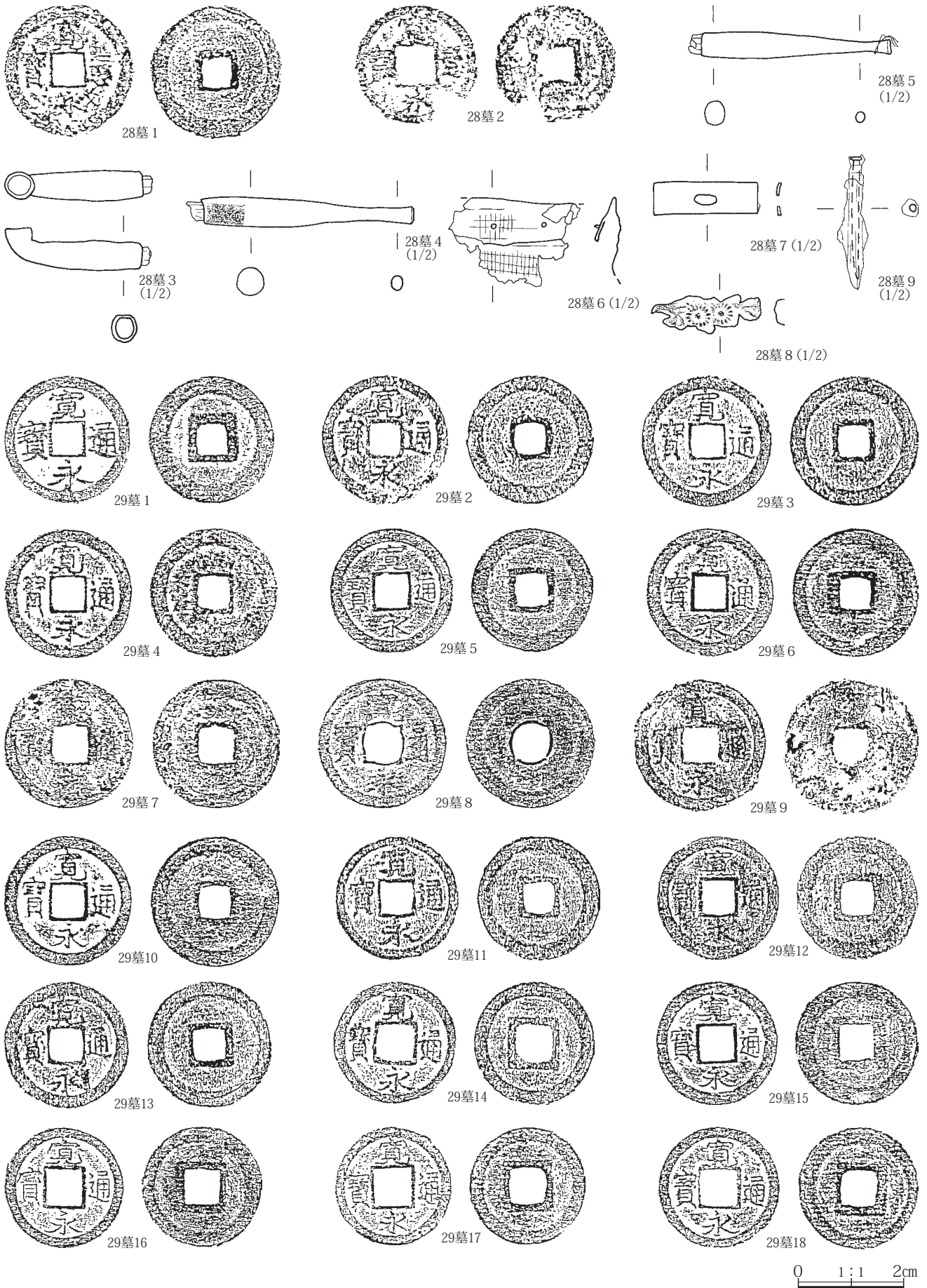


第10図 墓坑出土遺物(3)〔7区38号、8区14・16・17・19・20号〕

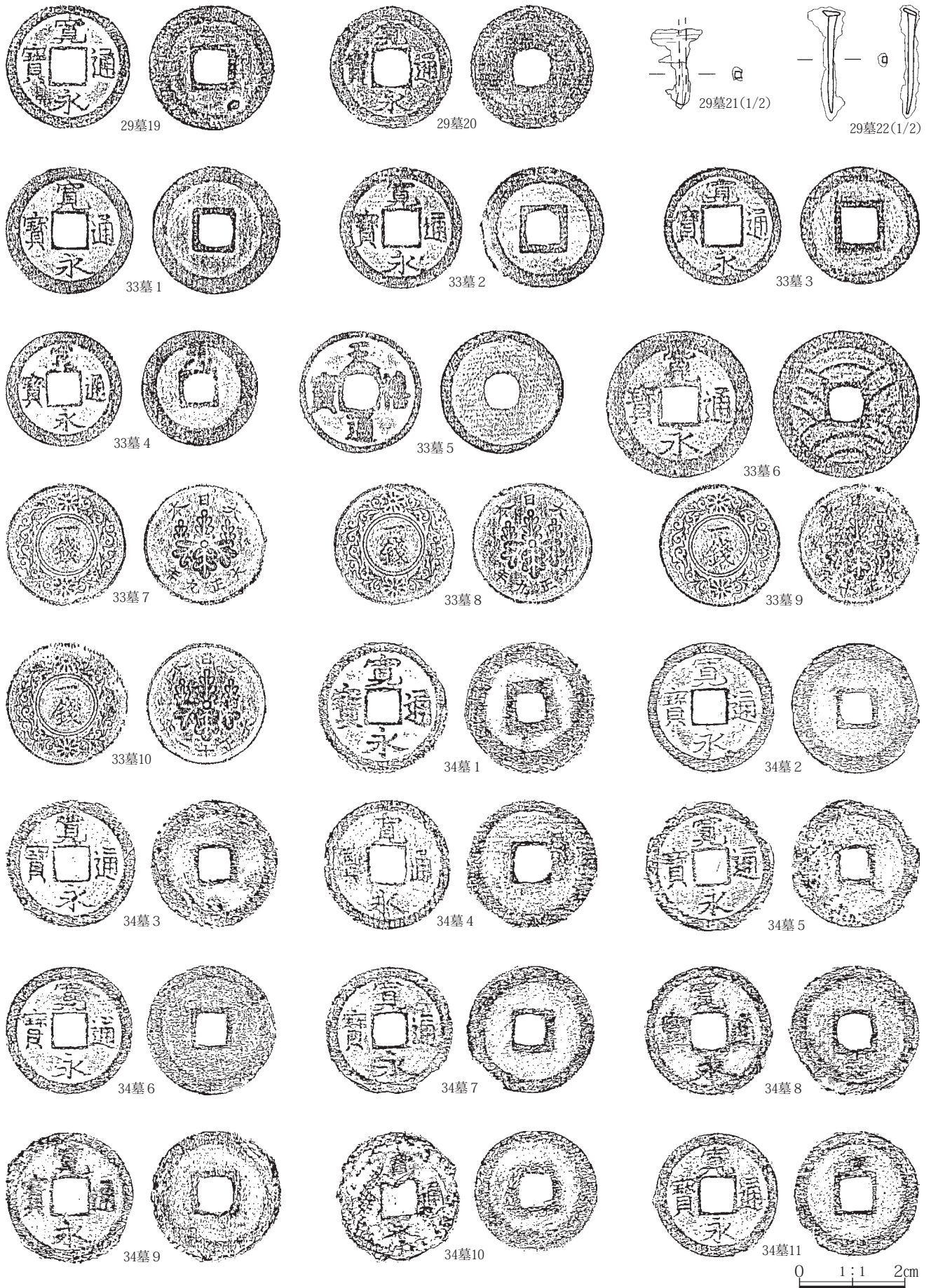


第11図 墓坑出土遺物(4)〔8区20・23・26・27号〕

2. 近世以降の遺構と遺物

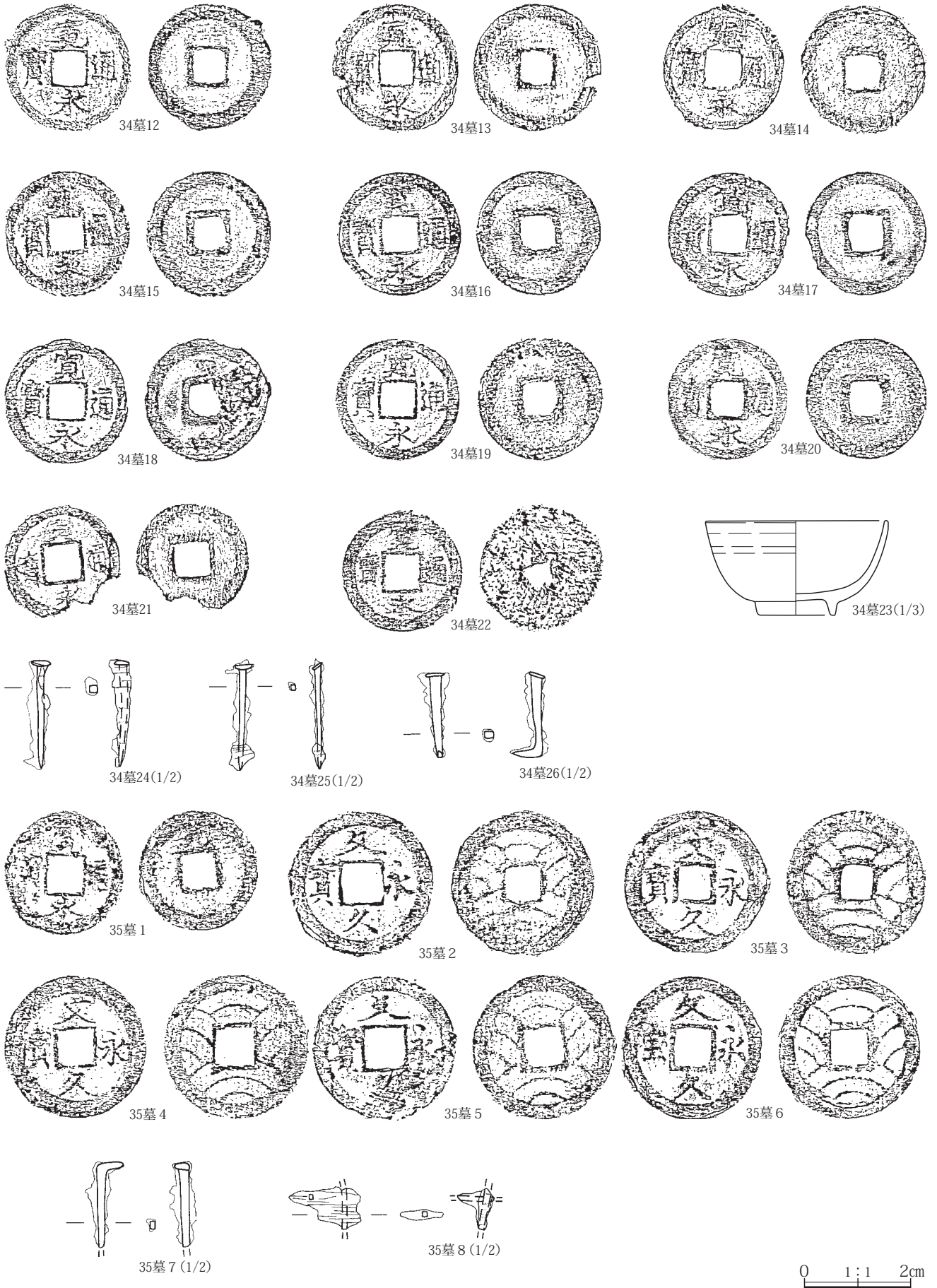


第12図 墓坑出土遺物(5)〔8区28・29号〕

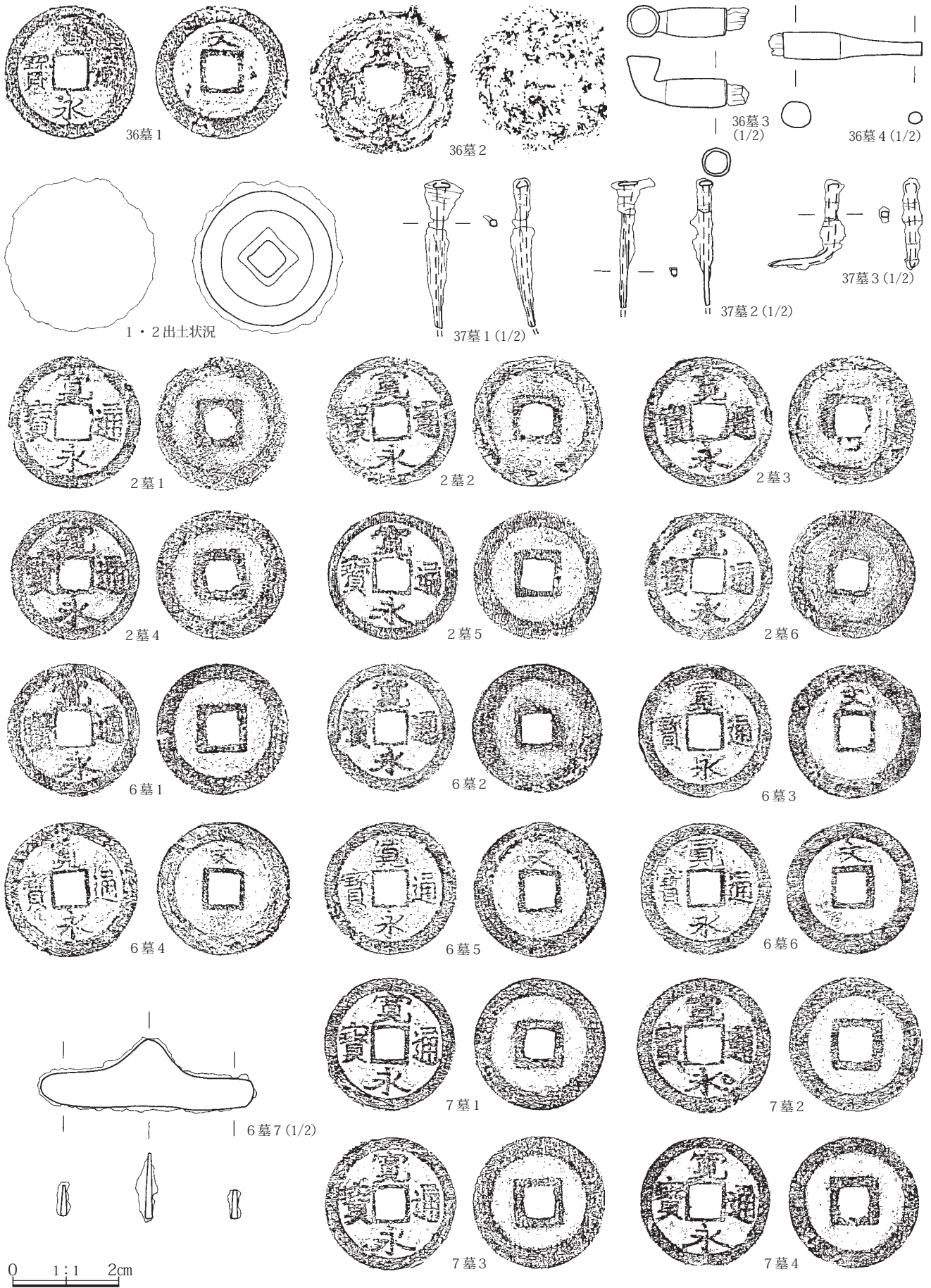


第13図 墓坑出土遺物(6)〔8区29・33・34号〕

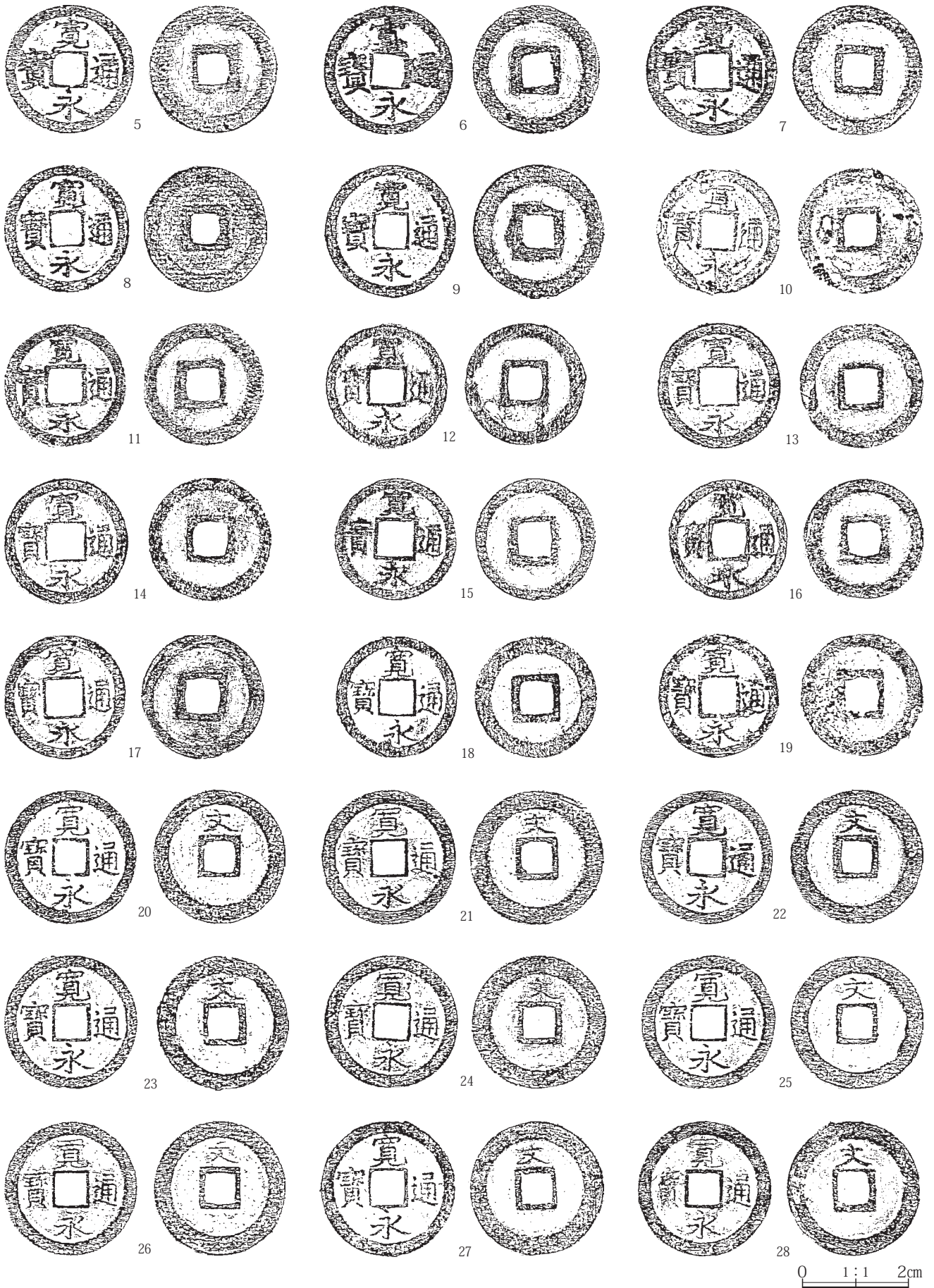
2. 近世以降の遺構と遺物



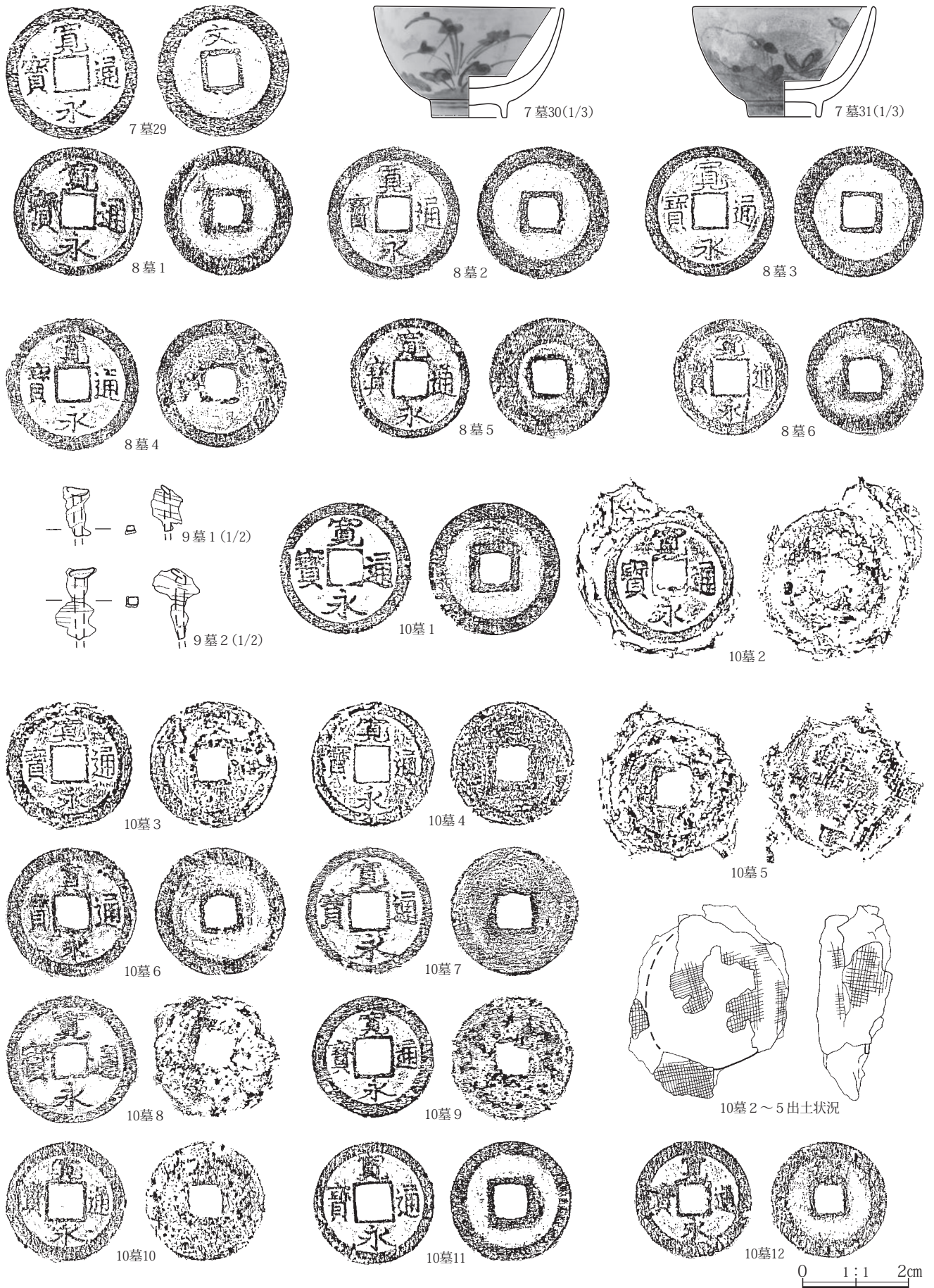
第14図 墓坑出土遺物(7)[8区34・35号]



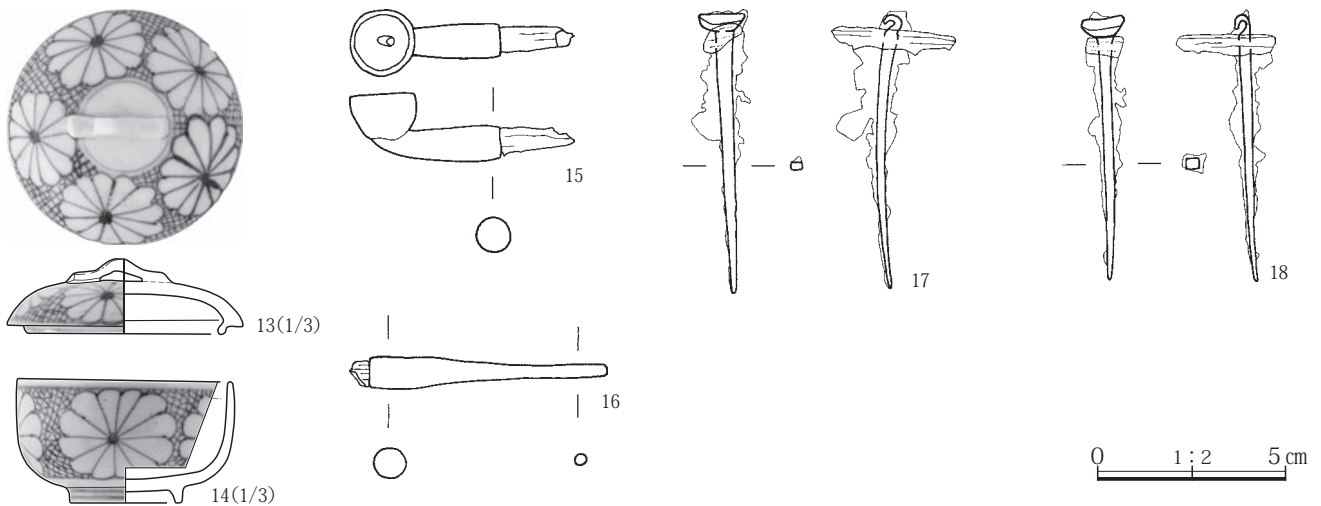
第15図 墓坑出土遺物(8)〔8区36・37号、9区2・6・7号〕



第16図 墓坑出土遺物(9)[9区7号]



第17図 墓坑出土遺物(10)〔9区7号、10区8~10号〕



第18図 墓坑出土遺物(11) [10区10号]

(2) 土 坑

12区を除く各調査区にわたって132基を検出した。調査区別に見ると、1区：46基、2区：4基、3区：3基、4区：9基、5区：1基、7区：32基、8区：5基、9区：11基、10区：11基、13区：10基となり、1・7区を中心に分布する傾向が看取される。各土坑の規模・形状等については第4表に一括してあるが、ここでは記述の煩雑さを避けるために平面形を基準にして以下のように分類しておきたい。

●A類：平面形が、整然とした掘削による幅1m前後の細い長方形＝「細長方形」を呈し、断面形は底面が平坦で垂直に近い壁面を持つU字状となる。長さにはかなりのバラエティが見られることから、次のように細分する。

- ・A1類：長径2m未満のもの。
- ・A2類：長径2～4m未満のもの。
- ・A3類：長径4～6m未満のもの。
- ・A4類：長径6～9m未満のもの。

●B類：楕円形状のもの。

●C類：隅丸方形を含む隅丸長方形のもの。

●D類：円形状のもの。

上記の平面形分類に基づいて、全体的な土坑の様相を見ると、A類の細長方形が87基と全体の66%を占め、次いで楕円形を基調とするB類が18基(14%)、隅丸長方形のC類が16基(12%)、円形状のD類が8基(6%)、形状不明が3基(2%)となる。

規模に関しては、先ず最多数を占めるA類での様相を細分類別に見ると、A1類：22基、A2類：35基、A3類：8

基、A4類：9基、不明：13基を数える。4m未満のA2・A1類を主体とすることが明瞭であり、両類を合わせれば57基を数えると共に、不明14基を除いた全体の78%を占める。また、A4類の中で最長のもは、7区127号の8.7mであり、A1類に比べてその差異は大きい。B類の楕円形状における長径は、①1m未満：5基、②1～1.5m未満：6基、③1.5～2m未満：5基、不明：4基を数え、1～2m未満のものが主体をなしている。C類の隅丸長方形では、①1m未満：1基、②1～1.5m未満：4基、③1.5～2m未満：5基、④2m以上：1基、不明：2基を数え、B類と同様に1～2m未満が主体となる。D類の円形状では、①1m未満：3基、②1～1.5m未満：3基、③1.5～2m未満：2基を数える。一方、各類の掘削深度については、A類の場合、各小分類にかかわらずバラツキがあり、8～112cmとかなりの差異が認められる。B類では11～83cm、C類では14～90cm、D類では9～61cmの差異があり、A類と同様に長径規模に関係なく深浅が認められる。

埋没土の状況については、各類ともにHr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土を主体に1～3層が堆積する点で共通している。ちなみにA類では、1層での埋没が58基、2層が19基、3層が6基、4層が2基、不明が2基であり、3・4層埋没がA2類を主体とする点で注意を要する。B類では1層が13基、2層が5基であり、1層での埋没を主体とする点はA類と同様だが、1・2層のみで3層以上の多層埋没が存在しないのが特徴的である。C類では1層が10基、2層が4基であり、B類と同様の傾向を示す。D類では1層が5基、2層が1基、不明が2基と

第3章 遺跡の調査内容

なる。以上のように、3層以上での多層埋没するケースはA類に限定されており、その機能・用途を考える上で重視すべき要点であろう。

帰属時期については、墓坑のように時期判別が可能な伴出遺物に乏しく、確定することは困難であるが、後述

するようにその埋没土は現在の畝耕作土を含む第I層とは明確に分離されることから、少なくとも現在を遡ることは確実であろう。また、江戸時代に設置された「金井宿」の地割に関連すると想定される、溝状遺構の走向に規制された状況も看取されることを考慮すれば、近世にまで

第4表 土坑規模一覧(近世以降)

区	番号	掲載 図版	位置		主軸方位	形状	規模(cm)			形態 分類	埋土 層数	群別 区分	備考
			座標X	座標Y			長径	短径	深さ				
1	54	第19図	57856	-75505	N72度E	細長方形	395	86	58	A2	2	I	
1	55	第19図	57857	-75504	N72度E	細長方形	638	110	41	A4	1	I	
1	56	第19図	57852	-75503	N74度E	細長方形	642	78	33	A4	1	I	
1	57	第19図	57855	-75511	N82度E	細長方形	285	67	53	A2	4	I	
1	58	第19図	57855	-75514	N82度E	細長方形?	(100)	89	36	(A1)	3	I	
1	59	第19図	57851	-75501	N63度E	細長方形	325	62	11	A2	1	I	
1	60	第19図	57851	-75505	N12度E	細長方形?	126	44	13	A1	1	I	
1	61	第19図	57848	-75507		円形?	143	(68)	9	D	1	I	
1	62	第19図	57847	-75511	N0度W	細長方形	222	74	37	A2	2	I	
1	63	第20図	57848	-75514	N13度W	細長方形	414	115	19	A3	1	I	66号に切られる
1	64	第20図	57847	-75515	N21度W	細長方形	(237)	77	18	(A2)	1	I	65・66号と重複
1	65	第20図	57846	-75514	N13度W	細長方形	(162)	93	30	(A1)	1	I	64号と重複
1	66	第20図	57849	-75514	N14度W	細長方形	(296)	107	14	(A2)	1	I	63号を切り,64号と重複
1	67	第19図	57860	-75498	N65度W	楕円形	86	67	24	B	1	I	
1	68	第20図	57861	-75499	N9度W	細長方形	305	63	17	A2	1	I	80号と重複
1	69	第19図	57863	-75498	N10度W	細長方形	265	62	15	A2	1	I	
1	70	第20図	57863	-75497	N13度W	細長方形	(610)	105	18	(A4)	2	I	
1	71	第20図	57866	-75498	N87度E	隅丸長方形	215	163	24	C	1	I	
1	72	第20図	57868	-75501	N71度E	細長方形	266	92	51	A2	1	I	
1	73	第21図	57863	-75504	N75度E	細長方形	660	54	12	A4	1	I	74号と重複
1	74	第21図	57863	-75509	N70度E	細長方形	320	(59)	15	A2	1	I	75号を切り,73号と重複
1	75	第21図	57864	-75505	N72度E	細長方形	770	86	8	A4	1	I	74号に切られる
1	77	第21図	57865	-75511	N80度E	細長方形	(238)	138	63	(A2)	1	I	78・79号を切る
1	78	第21図	57865	-75510	N80度E	細長方形?	109	(84)	32	A1	不明	I	77・79号に切られる
1	79	第21図	57865	-75507	N70度E	細長方形	373	86	50	A2	2	I	78号を切り,77号に切られる
1	80	第20図	57862	-75498	N85度W	楕円形	156	126	23	B	1	I	68号と重複
1	82	第20図	57879	-75509	N75度E	細長方形	145	59	24	A1	1	II	
1	83	第20図	57879	-75507	N70度E	楕円形	(67)	58	26	B	1	II	84号に切られる
1	84	第20図	57879	-75506	N0度W	楕円形	120	69	22	B	1	II	83号を切る
1	85	第20図	57880	-75503	N73度E	細長方形	348	80	34	A2	2	II	
1	86	第21図	57885	-75501	N81度E	細長方形	190	75	18	A1	1	II	
1	87	第21図	57858	-75509	N69度E	細長方形	334	66	8	A2	1	I	
1	88	第21図	57886	-75495	N78度E	細長方形	200	71	37	A2	1	II	
1	89	第21図	57886	-75492	N70度E	細長方形	194	67	27	A1	1	II	
1	90	第21図	57887	-75492	N69度E	細長方形	162	63	18	A1	1	II	
1	93	第21図	57884	-75497	N0度W	楕円形	175	75	38	B	2	II	
1	94	第21図	57887	-75498	N75度E	細長方形	236	56	37	A2	1	II	
1	95	第21図	57885	-75500	N79度E	細長方形	215	67	50	A2	1	II	
1	96	第21図	57880	-75508	N80度W	楕円形	92	53	11	B	1	II	
1	99	第21図	57881	-75497	N8度W	細長方形	155	70	23	A1	1	II	
1	100	第21図	57882	-75498	N51度W	楕円形	118	69	20	B	1	II	
1	101	第22図	57882	-75501	N80度E	細長方形	(96)	48	19	(A1)	1	II	102号を切る
1	102	第22図	57882	-75500	N80度E	細長方形	278	58	23	A2	1	II	101号に切られる
1	103	第22図	57891	-75489	N24度W	細長方形	247	78	37	A2	3	II	
1	104	第22図	57894	-75491	N35度E	隅丸方形	125	115	14	C	1	II	
1	105	第22図	57887	-75501	N9度W	隅丸長方形	95	70	18	C	1	II	
2	1	第22図	57924	-75488	N75度E	楕円形	(156)	81	68	B	1		4溝を切る
2	2	第22図	57939	-75501	N23度W	楕円形	105	83	81	B	2		3溝と重複
2	3	第22図	57939	-75507	N88度E	楕円形	(152)	92	72	B	2		3溝と重複
2	5	第22図	57939	-75511	N15度W	細長方形	272	98	18	A2	1		
3	7	第22図	57921	-75473	N0度W	楕円形	121	93	48	B	2		19・20溝と重複
3	9	第22図	57929	-75474	N43度E	細長方形	(378)	145	36	(A2)	2		10号に切られ,12溝と重複
3	10	第22図	57929	-75476	N45度E	細長方形	(151)	115	57	(A1)	2		9号を切る
4	4	第22図	57984	-75480	N77度E	細長方形	147	92	79	A1	4		19・20溝と重複
4	6	第22図	57986	-75475	N83度E	細長方形	(228)	119	50	(A2)	2		
4	8	第22図	57966	-75474	N15度W	細長方形	243	123	47	A2	1		
4	11	第23図	57957	-75474	N16度W	隅丸方形	165	135	40	C	1		8溝と重複
4	12	第23図	57985	-75483	N62度E	細長方形	174	52	80	A1	2		
4	13	第23図	57980	-75493	N81度E	細長方形	(187)	73	58	(A1)	1		
4	16	第23図	57971	-75512	N13度W	細長方形	225	111	65	A2	2		
4	17	第23図	57978	-75513	N16度W	細長方形	553	108	45	A3	3		
4	18	第23図	57977	-75507	N13度W	楕円形	153	124	53	B	1		

2. 近世以降の遺構と遺物

区	番号	掲載 図版	位置		主軸方位	形状	規模(cm)			形態 分類	埋土 層数	群別 区分	備考
			座標X	座標Y			長径	短径	深さ				
5	52	第23図	57683	-75544	不明	不明	(208)	190	73	不明	1		
7	98	第24図	57734	-75532	N75度E	細長方形	550	123	60	A3	1	Ⅲ	
7	121	第23図	57735	-75545	N71度E	細長方形	617	90	83	A4	1	Ⅲ	
7	123	第23図	57736	-75541	N66度E	細長方形	253	65	32	A2	1	Ⅲ	
7	124	第24図	57738	-75542	N16度W	細長方形	170	93	80	A1	1	Ⅲ	
7	125	第23図	57740	-75542	N17度W	細長方形	180	56	8	A1	1	Ⅲ	
7	126	第24図	57743	-75543	N20度W	隅丸長方形	130	94	50	C	1	Ⅲ	
7	127	第24図	57739	-75540	N18度W	細長方形	870	90	63	A4	1	Ⅲ	131号と重複
7	128	第24図	57736	-75539	N22度W	細長方形	270	70	12	A2	1	Ⅲ	
7	129	第23図	57736	-75531	N77度E	細長方形	700	100	73	A4	1	Ⅲ	
7	130	第24図	57742	-75538	N18度W	細長方形	291	91	55	A2	1	Ⅲ	
7	131	第23図	57746	-75537	N75度E	細長方形	(500)	168	22	(A3)	不明	Ⅲ	砥石1点.127号と重複
7	132	第24図	57738	-75522	N9度W	細長方形	536	79	60	A3	1	Ⅲ	
7	133	第24図	57745	-75517	N12度E	細長方形	(160)	68	40	C	1	Ⅲ	134号と重複
7	134	第24図	57746	-75517	N72度E	細長方形	(247)	105	71	(A2)	1	Ⅲ	133号・5号島と重複
7	135	第24図	57748	-75522	N12度W	細長方形	540	97	29	A3	1	Ⅲ	5号島と重複
7	165	第24図	57749	-75541	N82度E	細長方形	176	93	55	A1	1	Ⅲ	
7	166	第24図	57751	-75536	N76度E	細長方形	309	115	108	A2	3	Ⅲ	
7	167	第25図	57753	-75529	N86度E	細長方形	260	(120)	112	A2	1	Ⅲ	2基の重複か
7	168	第25図	57757	-75516	N86度W	隅丸長方形?	(174)	134	74	C	1	Ⅳ	
7	169	第24図	57772	-75536	N73度E	細長方形	198	81	43	A1	2	Ⅳ	
7	170	第25図	57768	-75516	N68度W	細長方形	291	72	47	A2	2	Ⅳ	
7	171	第24図	57779	-75522	N78度E	細長方形	155	91	41	A1	1	Ⅳ	
7	172	第25図	57777	-75513	N76度E	細長方形	154	88	36	A1	1	Ⅳ	
7	174	第25図	57727	-75511	N67度E	細長方形	271	98	45	A2	2	Ⅲ	43号溝を切る
7	258	第25図	57795	-75795	N4度W	隅丸長方形	134	110	68	C	2	Ⅳ	
7	259	第25図	57789	-75520		円形	98	92	54	D	2	Ⅳ	
7	260	第25図	57793	-75525		円形	79	78	32	D	1	Ⅳ	
7	689	第25図	57799	-75519	N19度E	細長方形	176	75	52	C	1	Ⅳ	
7	690	第25図	57799	-75516	N80度E	細長方形	203	108	71	A2	1	Ⅳ	
7	794	第25図	57790	-75530	N84度E	細長方形	144	97	74	A1	1	Ⅳ	
7	795	第25図	57790	-75531	N83度E	細長方形	(107)	94	41	(A1)	1	Ⅳ	
7	796	第25図	57793	-75532	N7度W	細長方形	143	113	75	A1	1	Ⅳ	
8	650	第25図	57811	-75495	N56度W	隅丸長方形?	174	(116)	35	C?	不明		651号と重複
8	651	第26図	57801	-75506		円形	180	(170)	45	D	不明		650号・3号流路と重複
8	652	第26図	57800	-75506		円形	198	(150)	39	D	不明		
8	996	第25図	57801	-75501	不明	不明	不明	不明	19	不明	3		997号と3号流路を切る
8	997	第25図	57801	-75502	N81度E	隅丸長方形?	(80)	60	25	C?	不明		3号流路を切り,996号に切られる
9	146	第26図	58059	-75506	不明	不明	(105)	70	60	不明	1		147号に切られる
9	147	第26図	58059	-75506	N38度E	楕円形	(62)	(59)	32	B	2		146号を切る
9	148	第26図	58064	-75540	N77度E	細長方形	214	88	35	A2	1		149号と重複
9	149	第26図	58064	-75542		円形	118	107	40	D	1		148・152号と重複
9	150	第26図	58062	-75543	N70度E	細長方形	226	53	34	A2	1		
9	151	第26図	58062	-75543	N73度E	細長方形	335	90	57	A2	1		
9	152	第26図	58064	-75542		円形?	80	(43)	21	D	1		149号と重複
9	253	第26図	58017	-75524	N78度E	細長方形	158	64	40	A1	1		
9	254	第26図	58019	-75512	N74度E	楕円形	137	88	47	B	1		
9	255	第26図	58038	-75513	N74度E	楕円形	176	150	75	B	1		
9	256	第26図	58043	-75503	N67度E	楕円形	97	64	31	B	1		
10	242	第26図	58087	-75584	N79度E	細長方形	297	114	83	A2	3		
10	243	第26図	58088	-75581		円形	132	115	61	D	1		
10	244	第27図	58085	-75580	N83度W	細長方形	245	111	33	A2	1		
10	245	第26図	58090	-75571	N60度E	楕円形	182	132	83	B	1		鉄製品1点
10	246	第26図	58089	-75571	N70度E	細長方形	310	81	63	A2	1		
10	247	第26図	58096	-75560	N23度W	隅丸長方形	150	94	61	C	2		
10	248	第27図	58100	-75551	N30度W	隅丸長方形	173	150	64	C	2		
10	249	第27図	58086	-75550	N68度E	細長方形	194	83	56	A1	1		
10	250	第27図	58067	-75581	N78度W	隅丸長方形	188	176	90	C	1		
10	251	第27図	58081	-75535	N20度W	楕円形	108	85	33	B	1		
10	252	第27図	58083	-75534	N19度W	隅丸長方形	132	105	25	C	1		
13	155	第27図	58133	-75628	N65度E	細長方形	159	76	14	A1	2		
13	156	第27図	58134	-75622	N64度E	細長方形	400	92	37	A3	2		
13	157	第27図	58137	-75166	N64度E	細長方形	524	107	59	A3	2		
13	158	第27図	58141	-75608	N62度E	細長方形	450	108	54	A3	2		
13	159	第27図	58130	-75600	N50度E	隅丸長方形?	(109)	112	75	C?	2		
13	160	第27図	58126	-75615	N60度E	細長方形	309	99	46	A2	3		
13	161	第27図	58116	-75633	N68度E	細長方形	257	(110)	68	A2	1		
13	162	第27図	58120	-75654	N68度E	細長方形	198	87	40	A1	1		
13	163	第28図	58122	-75650	N66度E	細長方形	686	107	44	A4	2		164号と重複
13	164	第28図	58126	-75649	N67度E	細長方形	116	99	37	A1	2		163号と重複

遡る可能性もある。

以下、調査区別に各土坑の内容を記述するが、その分布状況については別添の全体図1・2に揭示してあるので、そちらを参照されたい。

A. 1 区

概要 1区のはほぼ全域にわたって、54～75・77～80・82～90・93～96・99～105号の46基が存在する。詳細に見れば、東西方向に走行する34号溝の南側に分布する54～75・77～80・87号の27基と、35号溝の南側と北側に近接して分布する82～86・88～90・93～96・99～105号の19基とに群別される。前者をI群、後者をII群とした場合、I群では細長方形のA類が23基を占め、B類の楕円形状が2基、C類の隅丸長方形とD類の円形状とが各1基となる。II群では、A類が12基、B類が5基、C類が2基となるが、D類が欠落する。注目されるのは、両群ともにA類の長軸方向が、34・35号溝の走向に平行または直交する関係性が認められることである。このことは、同時にA類土坑の相互間にも主軸方向の「直交」という二方向性が存在することを明示するものであり、当該土坑の機能・用途を考定する上で注視する必要がある。尚、各土坑からは伴出遺物は検出されなかった。

写真 PL8・9

重複 63～66・68・73～75・77～80・83・84・101・102号の16基に重複が認められ、新・旧の構築状況が存在する。

形状・規模 上述したように最多を占めるA類の様相を見ると、I群では不明6基を除いてA2類：9基、A4類：5基、A1類：2基、A3類：1基の順となり、長辺4m未満のものが主体的である。A4類の最長土坑は、75号の7.7mを測る。各類の短径×深さは、A1類：44～100cm前後×13～32cm、A2類：59～92cm×11～58cm、A3類：115cm×19cm、A4類：54～110cm×8～41cmを測る。II群では、不明1基を除いてA2類：8基、A1類：5基であり、A3・A4類などの長大な土坑が欠落する。各類の短径×深さは、A1類：44～100cm前後×13～32cm、A2類：56～80cm×8～50cmを測る。各類の短径・深さは、I・II群にかかわらず、大きな差異は認められない。一方、B～D類はI・II群別での差異が乏しく、B類の7基は長径86～175cm×深さ11～38cmを測る。C類の3基は長径95～215cm×

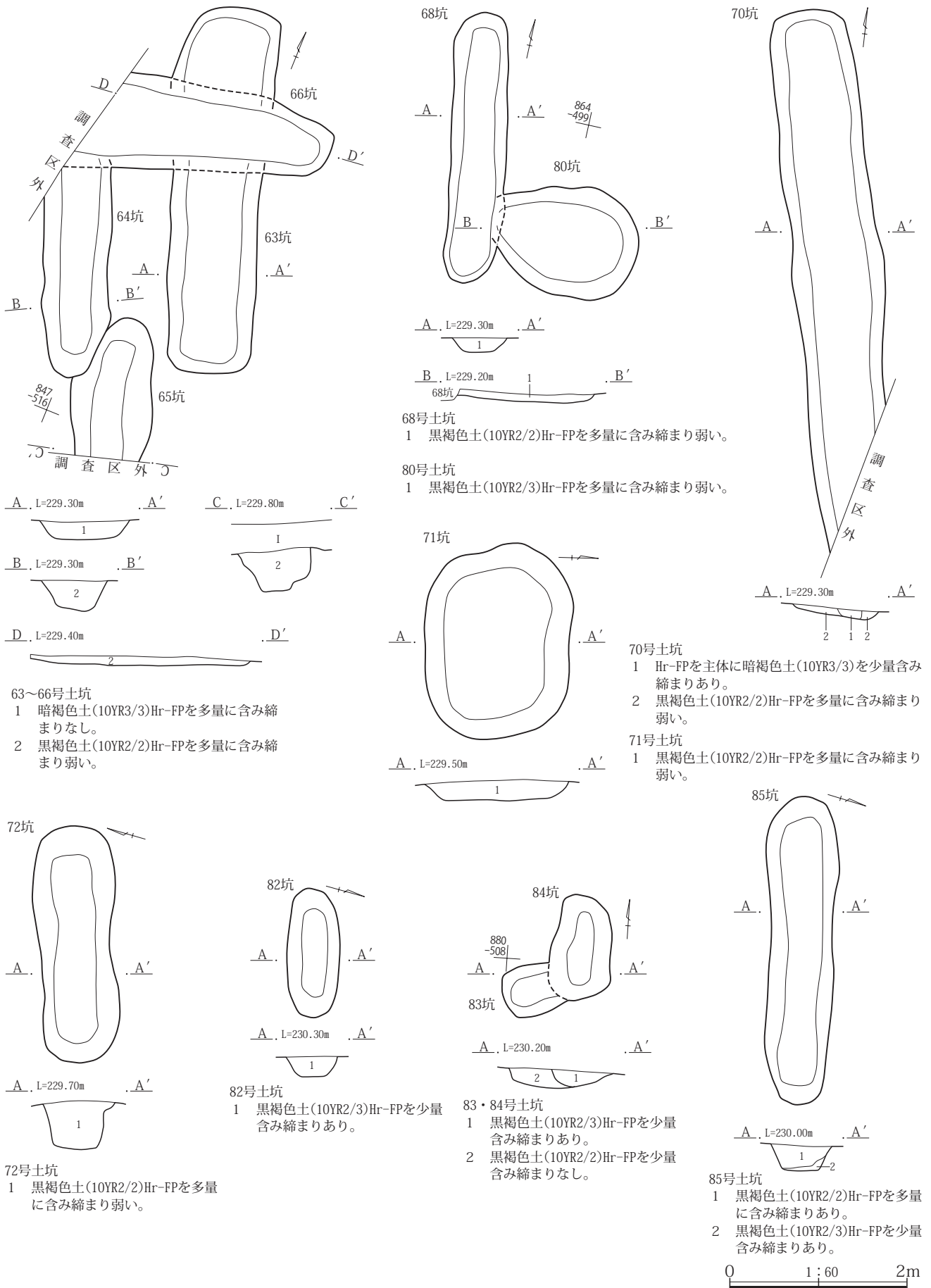
深さ14～24cmを、D類はI群内に1基のみであるが長径143cm×深さ9cmを測る。

方位 A類の主軸方位は、I・II群別での差異はなく、大きく2つのグループに分類されるが、II群内では①グループが主体的である。①グループは、34・35号溝の走向方位N72～75度Eとほぼ類似した方位を持つ54～59・72～75・77～79・82・85～90・94・95・101・102号の24基であり、N63～82度Eを測る。②グループには、①グループの方位と90度前後異なる60・62～66・68～70・99・103号の11基があり、N12度E～N24度Wを測る。B・C類では、A類の①グループ近似した方位を持つ71・83号や、②グループに近似する84・93・105号もあり、これらはA類と有機的な関係性を有することも想定されるが、他については特定の方向性は認められない。

埋没土 A～D類ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の1層で埋没しているものが主体を占める。A類では1層26基・2層5基・3層2基・4層1基を数え、B類は1層6基・2層1基、C類は1層3基、D類は1層1基を数える。3～4層での多層埋没は、A類にのみ限定されている。尚、調査区境界に位置する第19～21図の1区58・65・77号や第22・23図の4区6・16号、第25図の7区996号、第26図の9区146・147号では、その埋没土層断面上位に現在の畠耕作土を含む層厚30～50cmの第I層が堆積している。

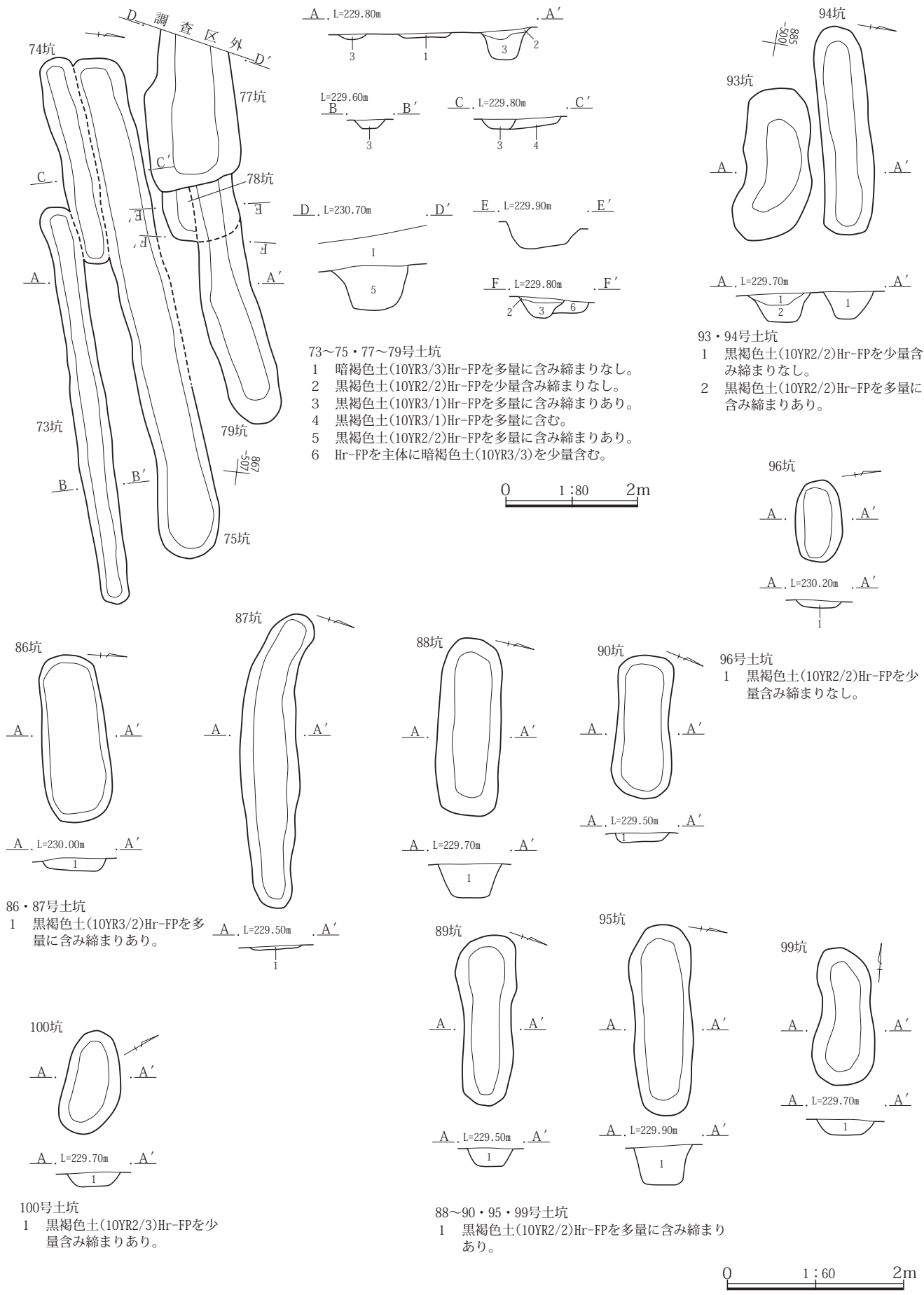
遺物 各土坑ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各類土坑の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。ただし、A類については、その主軸方位の近似性において、34・35号溝との強い関係性が窺える。この両溝は後述するように、約10間幅に相当する16～17mの間隔を置いて東西方向に走行するが、全体図3に示した江戸時代の「金井宿」の地割を残すとされる現在の土地区画と近似した状況を呈しており、これらの溝状遺構が土地の区画境界の機能を果たしていると考えられる。こうした点を重視すれば、その区画走向に規制されたA類土坑が江戸時代にまで遡る可能性は皆無ではないだろう。また、土坑内の埋没土層観察では、現畠耕作土を含めた第I層とは明確に区分されることから、少なくとも現在を遡ることは確実であることも、留意する必要がある。他のB～D類についても、A類と同様に時期確定できないが、I群内の71



第20図 土坑(2)[1区63~66・68・70~72・80・82~85号]

2. 近世以降の遺構と遺物



第21図 土坑(3)[1区73~75・77~79・86~90・93~96・99・100号]

号は39号墓坑の南西2mに位置しており、伴出遺物は無いものの隅丸長方形の形態も考慮すれば、墓坑の可能性もある。尚、A類の時期や機能・用途については、第5章においてあらためて詳述する。

B. 2 区

概要 2区の北側を中心にして、1～3・5号の4基が存在する。形態別では、細長方形A2類の5号、楕円形状B類の1～3号となる。

写真 PL9・10

重複 1号は4号溝を切り、2・3号が新旧関係は不明だが3号溝と重複する。

形状・規模 A2類の5号は長径272×短径98×深さ18cmであり、B類の1～3号は長径105～150cm前後、短径81～92cm、深さ68～81cmを測る。

方位 A2類5号の主軸方位はN5度Wであり、1区の②グループと近似している。B類の3基は、1・3号がN75～88度Eとかなり近似しているが、2号の状況も含めれば、基本的には等高線の走向に直交するように構築された可能性もある。

埋没土 Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土により、1・5号が1層、2号が2層で埋没している。

遺物 各土坑ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各土坑の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。

C. 3 区

概要 7・9・10号の3基が存在する。約210m²の狭小な範囲でもあり、9・10号は調査区鏡界で寸断されて規模が不明である。形態別では、9・10号が細長方形のA類、7号が楕円形状のB類となる。

写真 PL10

重複 7号は19・20号溝と重複し、9号は10号に切られると共に12号溝と重複する。

形状・規模 B類の7号は長径121×短径93×深さ48cmであり、A類の9・10号は短径115～145cm、深さ36～57cmを測る。

方位 B類7号の主軸方位はほぼ真北を向き、A類の9・10号はN43～45度Eを測る。このA類は、1・2区と同類の主軸方位とは異なっており、注意を要する。

埋没土 各土坑ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土により、2層で埋没している。

遺物 各土坑ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各土坑の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。

D. 4 区

概要 6・8・11～13・16～18号の9基が存在するが、中央部南側の21～23号溝と同北側の10・17～20・24号溝に挟まれた範囲に、8・11号を除く7基がまとまっている。形態別では、細長方形のA類が7基、楕円形・隅丸形状のB・C類が各1基を数える。

写真 PL10・11

重複 4号は19・20号溝と、11号は8号溝と重複するが、ともに新旧関係は不明である。

形状・規模 A類の7基は、A1類の4・12号とA2類の8・16号、A3類の17号に細分されるが、短径および深さは各類とも大差なく、短径52～108cm、深さ45～80cmを測る。B類の18号は長径153×短径124×深さ53cm、C類の11号は長径165×短径135×深さ40cmを測る。

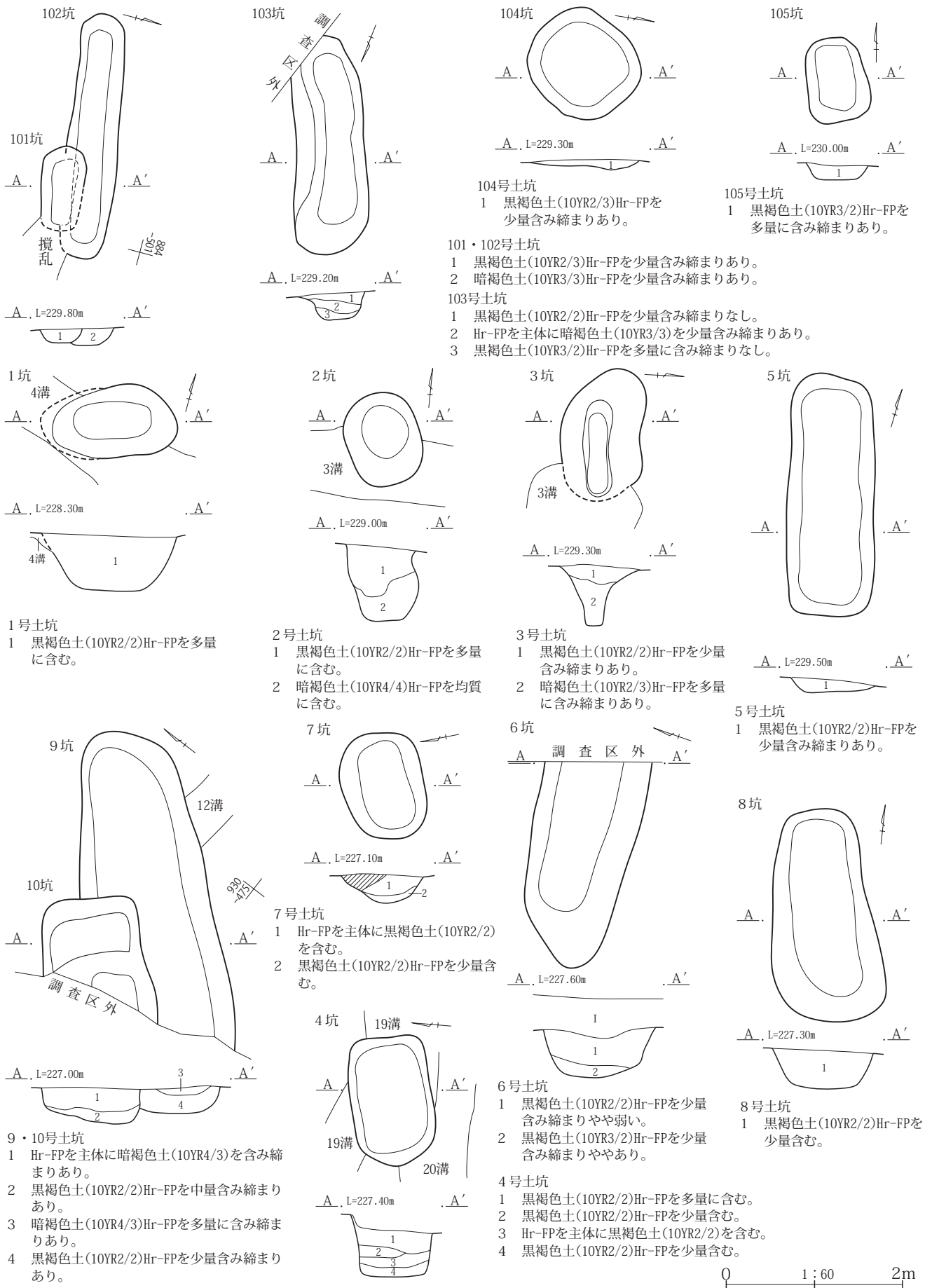
方位 A類は1区でのあり方と同様に、相互に主軸方位を約90度前後異なる2つのグループに分れる。①グループはN62～83度Eの4・6・12・13号の4基であり、②グループはN13～16度Wの8・16・17号の3基を数える。B・C類の2基は、N13～16度WとA類の②グループに近似した方向性を有しており、何らかの関連性を持つ可能性もある。

埋没土 B・C類は、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の1層により埋没している。A類の8・13号も同様に1層であるが、6・12・16号は2層、17号は3層、4号は4層で埋没しており、A類に多層埋没するケースが多見される点は注意を要する。

遺物 各土坑ともに、伴出遺物は皆無である。

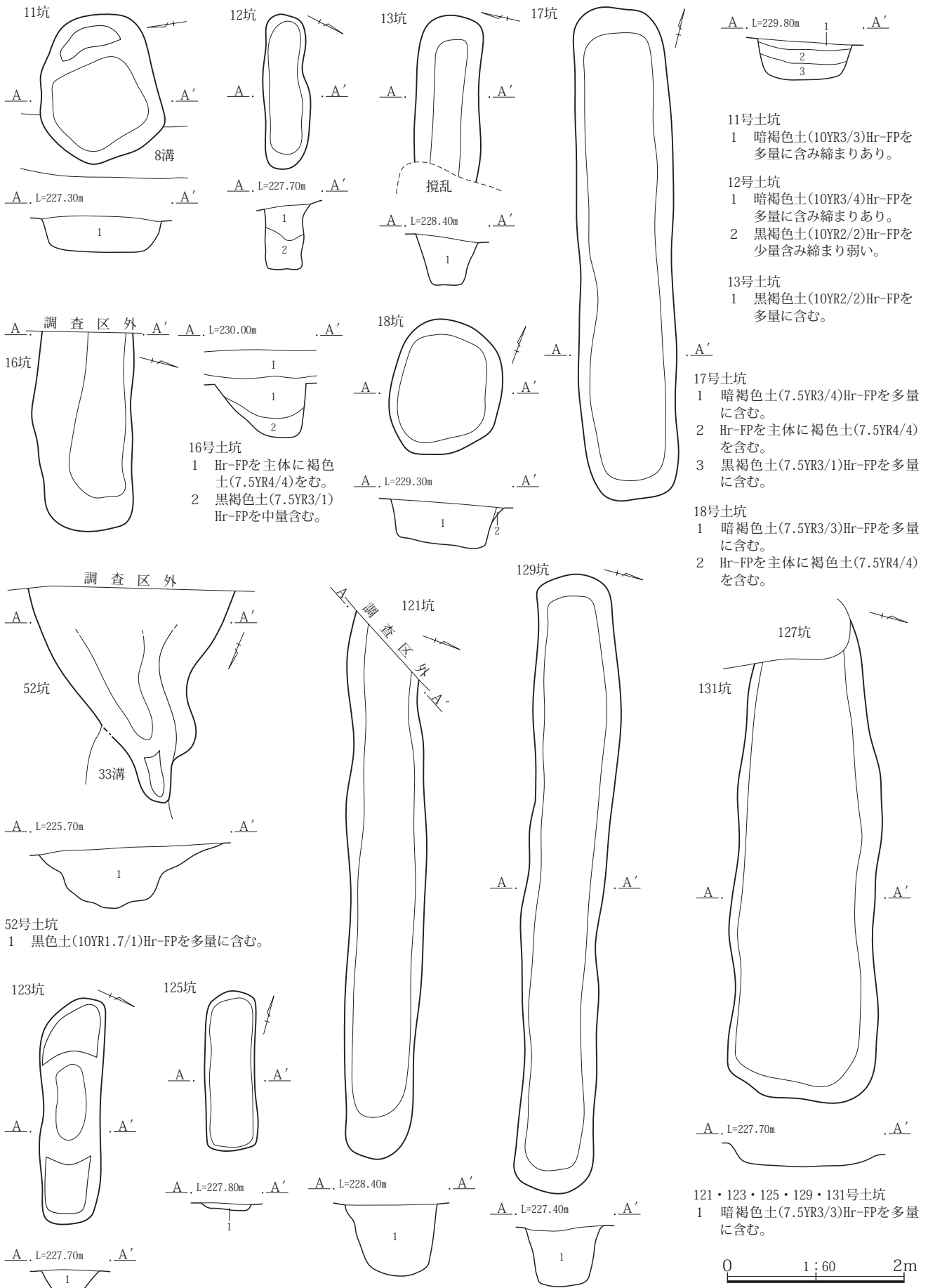
所見 各土坑の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。尚、4区では1区で見られた溝状遺構との有機的な関係性が顕著には認められないが、中央部で断続的に走行する14～16号溝の走向方位は①グループに近似したN69～70度Eであり、当該方向が全体図3に示した現在の地割ともほぼ合致していることから、相互の関連性を窺うこともできる。

2. 近世以降の遺構と遺物



第22図 土坑(4)[1区101~105号、2区1~3・5号、3区7・9・10号、4区4・6・8号]

第3章 遺跡の調査内容



第23図 土坑(5)〔4区11~13・16~18号、5区52号、7区121・123・125・129・131号〕

E. 5 区

概要 南端の調査区境界で、形状不明な52号の1基が存在するのみである。33号溝の一部の可能性がある。

重複 走向が不安定でやや蛇行する33号溝を切っているが、当土坑も不定形であり、33号溝の一部となる可能性が高い。

形状・規模 調査区外に延びているために平面形状や長径は不明だが、断面形がV字状で短径190×深さ73cmを測る。

方位 平面形や走行方向が判然としないため、不明。

埋没土 Hr-FPを多量に含む黒褐色土の1層で埋没している。

遺物 伴出遺物は皆無である。

所見 前述したように、土坑ではなく33号溝の一部分である可能性が高い。帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。

F. 7 区

概要 総数32基が検出されているが、様態的には中央部を東西に横走する42号溝を境にして、その南・北側での分布状況が異なる。南側をⅢ群、北側をⅣ群と呼称してその内容を見ると、Ⅲ群には98・121・124～135・165～167・174号の19基が、Ⅳ群には168～172・258～260・689・690・794～796号の13基が存在する。Ⅲ群では細長方形のA類が17基を占め、他にC類の隅丸長方形の2基が存在し、B・D類の楕円形と円形状とが欠落する。またⅣ群では、A類が8基、C類が3基、D類が2基を数えるが、B類が欠落する。注目されるのは、Ⅲ群のA類がその主軸方向に関して相互に約90度前後異なる2つのグループに分離される点である。こうしたA類における状況は、1・4区でも確認されており、当遺跡ではかなり普遍的な様態とすることができる。尚、砥石を出土した131号以外は、各土坑ともに伴出遺物は認められなかった。

写真 P L 11～13・101 **観察表** 433頁

重複 127号と131号、133号と134号が重複し、174号が43号溝を切っている。

形状・規模 最多を占めるA類の様相を見ると、Ⅲ群では不明3基を除いてA1類は124・125・165号の3基、A2類は123・128・130・166・167・174号の6基、A3類は

98・132・135号の3基、A4類は121・127・129号の3基を数える。尚、A4類の最長は127号の8.7mである。各類の短径×深さは、A1類：56～93cm×8～80cm、A2類：65～120cm前後×12～112cm、A3類：79～123cm×29～60cm、A4類：90～100cm×63～83cmを測る。Ⅳ群では、不明1基を除いてA1類は169・171・172・794・796号の5基、A2類は170・690号の2基であり、A3・A4類などの長大な土坑が欠落する。各類の短径×深さは、A1類：81～113cm×36～75cm、A2類：72～108cm×47～71cmを測る。各類の短径・深さは、Ⅲ・Ⅳ群にかかわらず、大きな差異は認められない。C類の126・168・258号やD類の259・260号に関しては、Ⅲ・Ⅳ群別での差異に乏しく、C類では長径130～170cm前後×短径94～134×深さ50～74cmを、D類は直径79～98cm×深さ32～54cmを測る。

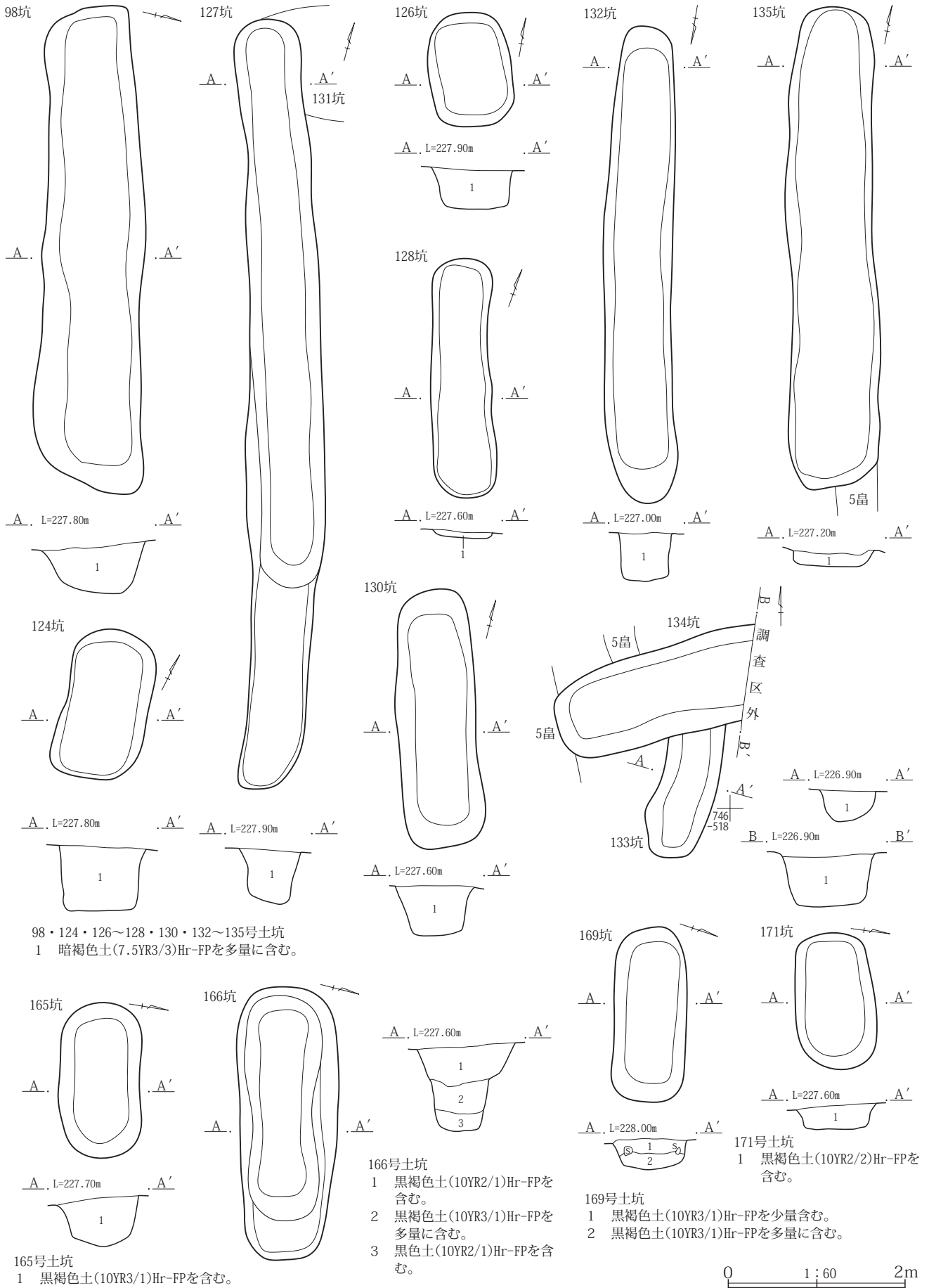
方位 A類の主軸方位は、Ⅲ・Ⅳ群別での差異はなく、大きく2つのグループに分類されるが、Ⅳ群内ではほぼ①グループのみで構成される。①グループは、N66～86度Eの方位を持つ98・121・123・129・131・134・165～167・169・171・172・174・690・794・795号の17基である。②グループは、①グループとは90度前後異なったN9～22度Wの方位を持つ124・125・127・128・130・132・135・796号の8基がある。尚、Ⅳ群のA2類170号の方位はN68度Wを測り、他とは大きく異なる。C類では、A類の②グループ近似した方位を持つ126・258号が存在するが、126号についてはA1類124・125号の主軸方向線上北側1.5mに近接しており、相互の関連性と共にその分類がC類→A1類に変更される可能性がある。このような主軸方向線上の連続性は、A4類127号とA2類128号にも認められ、構築の同時性を示すことも考慮される。他のC類については、規則的な方向性は認められない。

埋没土 A・C・D類ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の1層で埋没しているものが主体を占める。A類では1層20基・2層3基・3層1基を数え、C類は1層4基・2層1基、D類は1・2層共に各1基を数える。1・4区での状況と同様に、3～4層での多層埋没がA類にのみ限定される点は、注意を要する。

遺物 131号から砥沢石を素材とする砥石1点(第29図1)が出土した他は、各土坑ともに伴出遺物は皆無である。

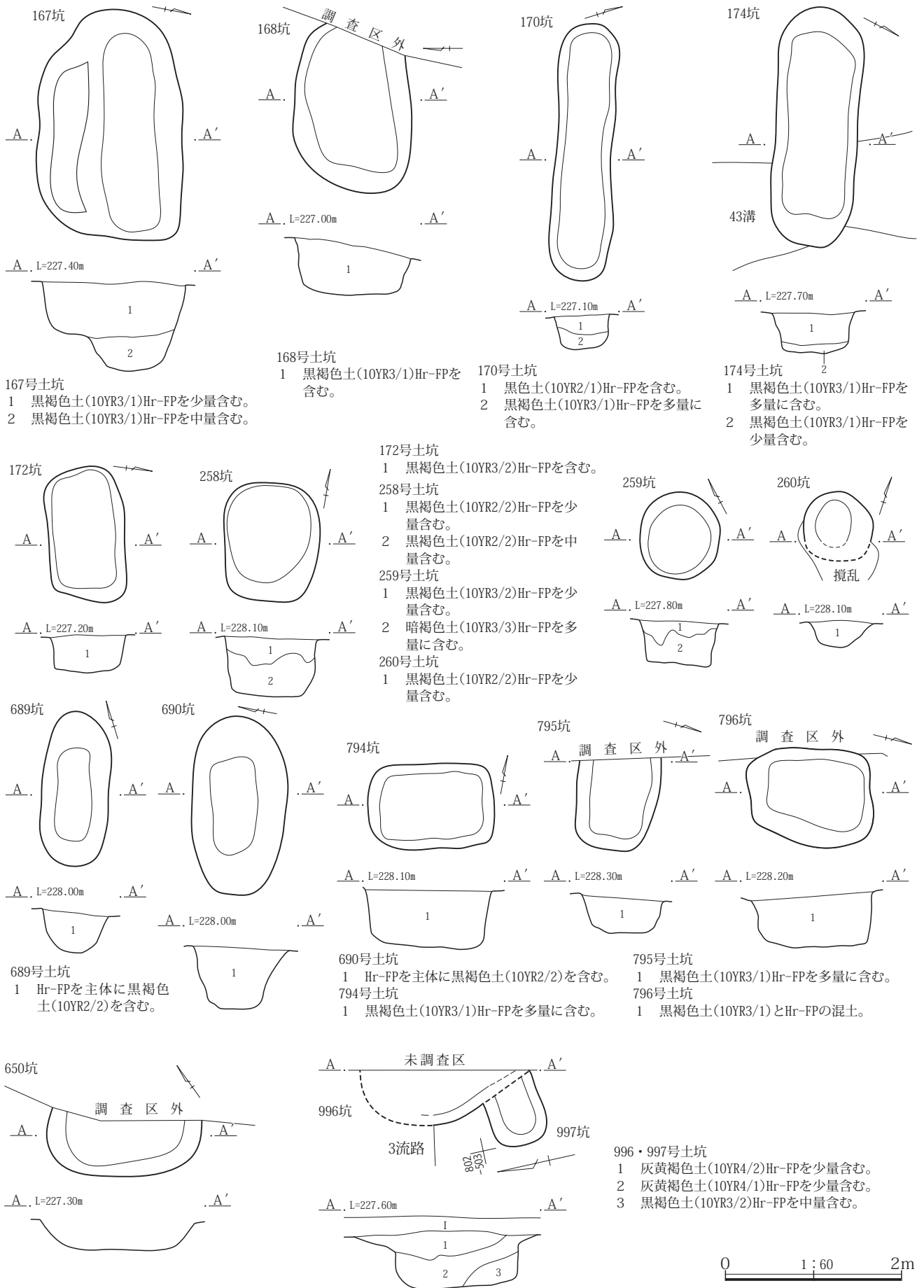
所見 各類土坑の帰属時期については、時期判別が可

第3章 遺跡の調査内容



第24図 土坑(6)〔7区98・124・126~128・130・132~135・165・166・169・171号〕

2. 近世以降の遺構と遺物



第25図 土坑(7)〔7区167・168・170・172・174・258~260・689・690・794~796号、8区650・996・997号〕

能な伴出遺物が存在しないために確定できない。ただし、Ⅲ群のA類については、全体図3における現在の畠地境界と対比すれば、①②グループともに約15m幅の東西方向の区画内にほぼ収まっており、土地区画に規制された状況を窺うことができる。また、後述する5号畠状遺構の畝間の走向も、②グループと同様に区画内に収まっていることから、1区で既述したように江戸時代にまで遡る可能性も想定される。尚、Ⅳ群の北側に密集する土坑の中で、C・D類の258～260・689号については、伴出遺物は検出されなかったものの隣接する3号墓坑の存在から、墓坑の可能性も考慮される。

G. 8 区

概要 総数5基が、墓坑群の南・東側に約6m離れて検出された。隅丸長方形のC類と円形のD類が各2基、形状不明が1基であり、A・B類が欠落する。尚、各土坑ともに伴出遺物は認められなかった。

重複 996・997号ともに3号流路を切るが、997号は996号に切られている。650・651号が重複する。

形状・規模 C類の650・997号ともに形状や規模が確定できないが、D類の651・652は直径180～198cm、深さ39～45cmを測る。

方位 C類と想定される650・997号の主軸方位は、相互に異なり、N56度WとN81度Eを測る。

埋没土 C・D類ともに埋没土の状況は不明だが、形状不明の996号ではHr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の3層で埋没している。

遺物 各土坑ともに伴出遺物は皆無である。

所見 各土坑の帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。

H. 9 区

概要 総数11基が検出されている。北端に密集する148～152号の5基と、南側の50・51号溝に近接する253・254号の他は、散在している。50・51号溝は現在の東西方向の畠地割と近似した位置に存在しており、148～152号の位置についても畠地境界となる現道幅員の南端に近接している。ちなみに、両者間の距離は約50mである。形態別に見ると、不明の1基を除いて細長方形のA類と楕円形のB類が各4基、他に円形のD類が

2基存在し、隅丸長方形のC類が欠落する。尚、各土坑ともに出土遺物は検出されなかった。

写真 PL13

重複 148・149・152号が重複し、147号が146号を切っている。

形状・規模 A類はA1類が253号の1基、A2類が148・150・151号の3基を数え、両類の短径×深さは、A1類：56～93cm×8～80cm、A2類：53～90cm×34～57cmを測る。B類の147・254～256号では、長径97～176cm×短径64～150×深さ31～75cmを、D類の149・152号は直径80～118cm×深さ21～40cmを測る。

方位 A類の主軸方位は、細分類に関わりなくN70～78度Eの範囲に収まる。当該方位は、50号溝のN71度Eと近似しており、両者が何らかの有機的关系性を有していると考えられる。B類でも先のA類と近似した方位を持つ254～256号が存在しており、両者の関連性も考慮されるが、長軸方向が等高線と直交するように配置されている可能性もあり、断定できない。

埋没土 A・B・D類ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の1層で埋没しているものが主体を占める。A類の4基すべてが1層埋没であり、B類では1層3基・2層1基を数え、D類の2基は全て1層で埋没している。

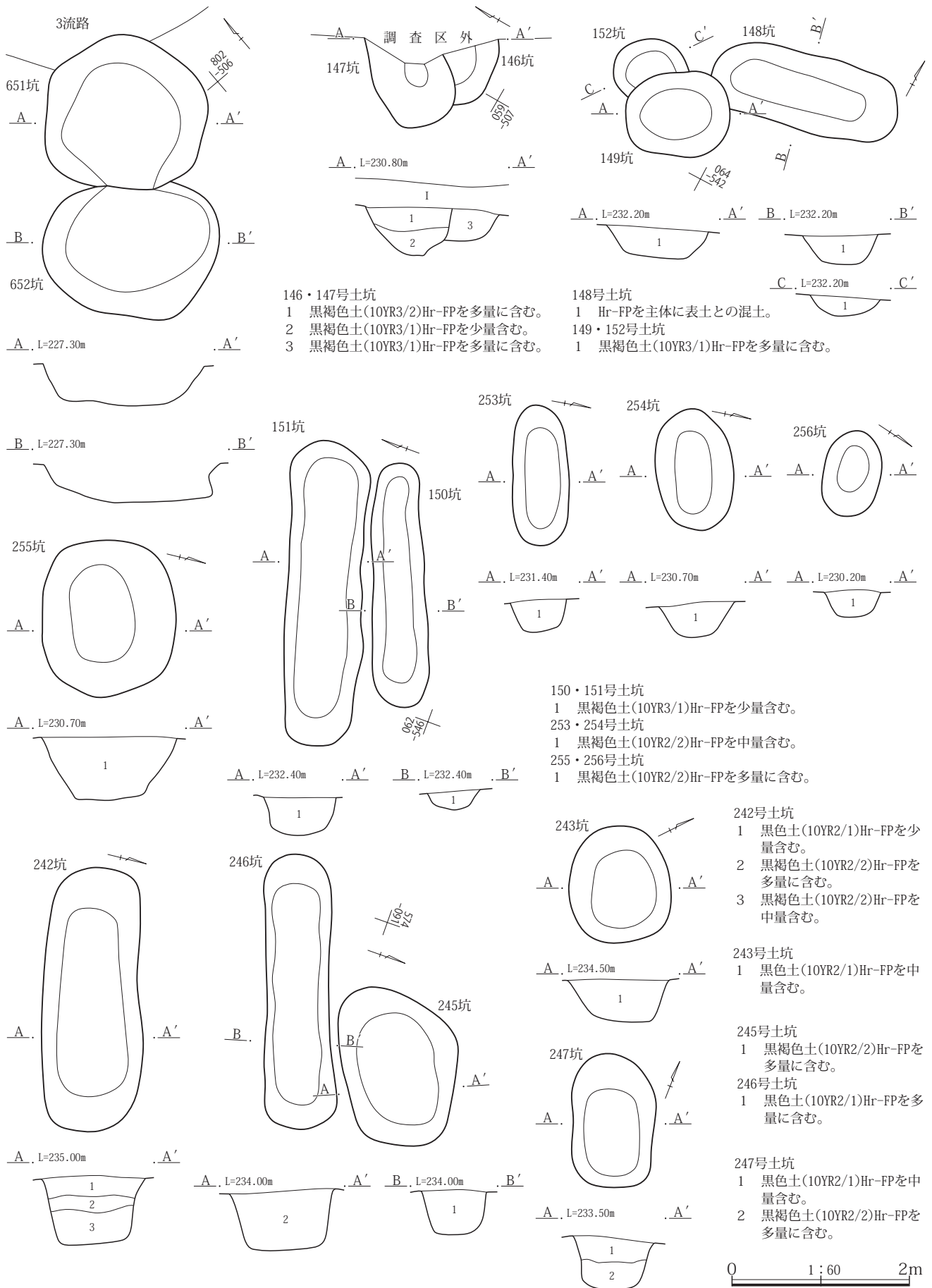
遺物 各土坑ともに伴出遺物は皆無である。

所見 各土坑の帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。A類については、その主軸方位が現在の畠地境界と関連する50号溝および道路の走向と近似していることや、それらの境界付近に隣接している点に注意を要する。

I. 10 区

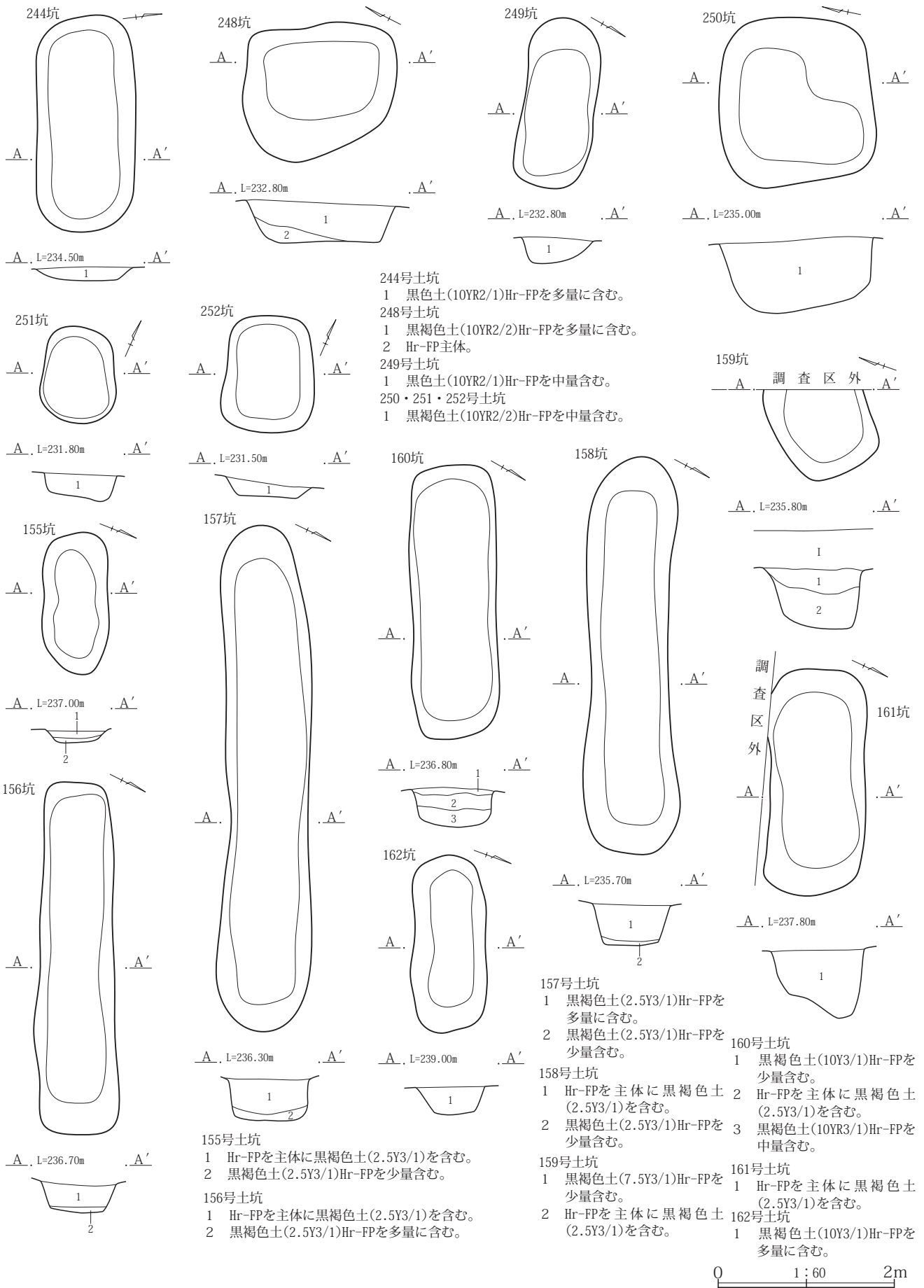
概要 総数11基が検出されている。南側に隣接する9区とは、幅員約4mの現道を挟んでいるが、基本的に両区に存在する溝状遺構の走向方位には類似した様相が認められ、相互に関連した状況を看取することができる。各土坑の分布状況は、東西方向に走行する46・47号溝の南側に近接した250～252号の3基と、45号溝の南北両側に近接する242～249号の8基に分散している。45号溝やその南側に位置する46・47号溝は、現在の畠地割とは一致しないが、相互に約10間幅に相当する16～19mの間隔

2. 近世以降の遺構と遺物



第26図 土坑(8)〔8区651・652号、9区146～152・253～256号、10区242・243・245～247号〕

第3章 遺跡の調査内容



第27図 土坑(9) [10区244・248~252号、13区155~162号]

を置く。形態別に見ると、細長方形のA類と隅丸長方形のC類が各4基、楕円形状のB類が2基、円形状のD類が1基を数える。尚、用途不明の金属製品1点を出土した245号を除いて、各土坑ともに出土遺物は検出されなかった。

写真 P L 13・14 **観察表** 433頁

重複 相互に近接する245・246号があるが、重複関係を持つ土坑は無い。

形状・規模 A類はA1類が249号の1基、A2類が242・244・246号の3基を数え、両類の短径×深さはA1類：83cm×56cm、A2類：81～114cm×33～83cmを測る。B類の245・251号では、長径108～182cm×短径85～132cm×深さ33～83cmを、C類の247・248・250・252号は長径132～188cm×短径94～176cm×深さ25～90cmを、D類の243号は直径132cm×深さ61cmを測る。

方位 A類の主軸方位は、244号を除いていずれもN68～79度Eの範囲に収まる。当該方位は、45号溝のN76度Eと近似しており、A類が45号溝の走向に規制されていると見なすこともできる。B類ではA類の246号と隣接する245号が、これと近似したN60度Eの方位を測ることから、両者の関連性が想定される。C類ではN19～78度Wとかなりのばらつきがあり、特定の方向性は認められない。ただし、252号のようにN19度Wの南北方向に主軸を持つものはB類の251号と共に、47号溝の東側に集中する8～10号墓坑との関連性に留意する必要がある。

埋没土 A～D類ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の1層で埋没しているものが主体を占める。A類は1層3基の他に3層の多層埋没が1基あり、他類とは異なる。B類では1層2基、C類は1層と2層が各2基、D類の1基は1層で埋没している。

遺物 245号で機能・用途不明の板状鉄製品1点が出土している他は、各土坑ともに伴出遺物は皆無である。

所見 各類土坑の帰属時期については、時期判別が可能な伴出遺物が存在しないために確定できない。A類については、その主軸方位が45号溝の走向と近似していることから、両者の相関性が指摘できる。また、47号溝の東側には8～10号墓坑が存在するが、それらの東側2mに近接する楕円形や隅丸長方形の251・252号は、人骨や副葬品を伴出しないものの、主軸方位や規模・形態的

に墓坑の可能性が高い。尚、別項の「4. 溝状遺構」にて詳述するが、東西方向に走行する46・47号溝と9区50号溝とは、約40間幅の70～71mの間隔を置いており、10間を単位とした地割状況を看取することができる。

J. 13 区

概要 総数10基が検出されている。各土坑の分布状況は、南側に散在する159～161号の3基と、中央部で東西方向を点列状に配置された155～159・162～164号の7基に分かれる。1・4・7・9・10区で認められるような地割と関連した溝状遺構は存在しないが、各土坑の主軸方位は南側に約75m離れている46号溝の走向とも近似している。形態別に見ると、隅丸長方形のC類1基の他は、9基の全てが細長方形のA類となる。尚、各土坑ともに出土遺物は検出されなかった。

写真 P L 14

重複 A類の163・164号が重複し、新・旧の時期差の存在を看取できる。

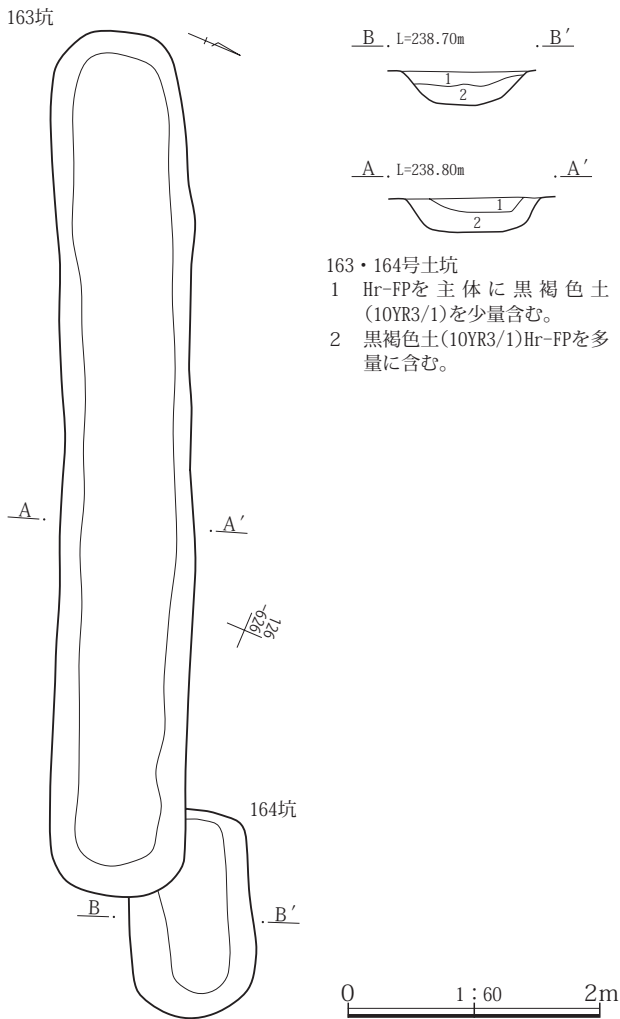
形状・規模 A類はA1類が155・162・164号の3基、A2類が160・161号の2基、A3類が156～158号の3基、A4類が163号の1基を数える。各類の短径×深さは、A1類：76～99cm×14～40cm、A2類：99～120cm前後×46～68cm、A3類：92～108cm×37～59cm、A4類：107cm×44cmを測る。C類の159号は短径112cm×深さ75cmを測るが、形状が不明確であることから、A類に分類される可能性もある。

方位 A類の主軸方位は、いずれもN60～68度Eの範囲に収まる。当区内に地割と関連した溝状遺構は存在しないが、南側の10区46号溝のN73度Eと近似しており、地割方向に規制されている可能性が高い。

埋没土 A・C類ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の2層で埋没しているものが主体を占める。A類は1層2基・2層6基の他に3層の多層埋没が1基ある。C類の1基は、2層で埋没している。

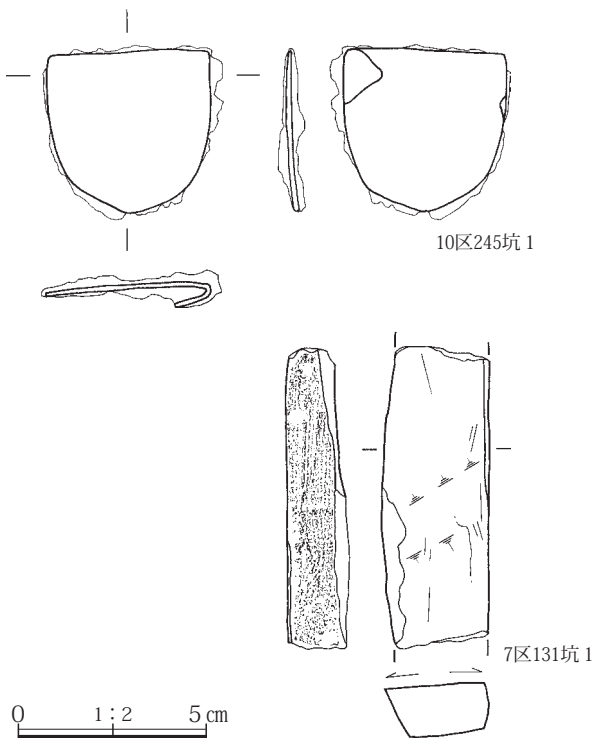
遺物 各土坑ともに伴出遺物は皆無である。

所見 各類土坑の帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。A類については、その主軸方位が1・4・7・9・10区で認められた「①グループ」の一方向のみで構成されているのが特徴的である。また、西側の163号から東側の158号にかけて各土坑の配置がほぼ直線的であり、注意を要する。これらの北側1mには、



163・164号土坑
 1 Hr-FPを主体に黒褐色土(10YR3/1)を少量含む。
 2 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを多量に含む。

第28図 土坑(10)〔13区163・164号〕



第29図 土坑出土遺物

東西方向の現在の地割境界が存在しており、各渡航の配列もこのような土地区画境界に沿って設置されたことを示唆している。

(3)ピット状遺構

1区82号・7区366号・10区102号の、合計3基のピット状遺構を検出した。形状はいずれも円形状を基本として、規模は長径40~680cm×深さ29~35cmを測る。Hr-FPを多量に含む黒褐色土の1層で埋没している。当該遺構については、調査段階で「ピット状遺構」と命名したものであるが、各ピットともにその周辺部に類似した遺構が存在せず単独で立地していることから、本来的には「土坑」として扱うべき遺構と考えられる。

以下、各ピットの内容について記述するが、いずれからも伴出遺物は検出されなかった。

●1区82号ピット

位置 X=57876 Y=-75495

形状・規模 不整楕円形状を呈し、長径68cm×短径47cm×深さ29cmを測る。

●7区366号ピット

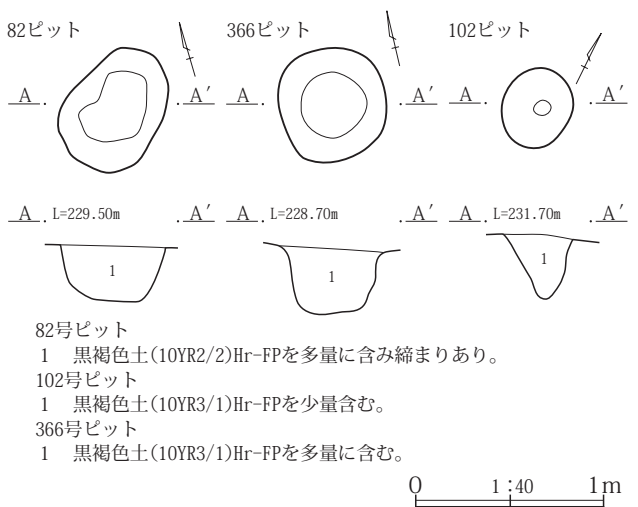
位置 X=57813 Y=-75528

形状・規模 円形状を呈し、直径62cm×深さ35cmを測る。

●10区102号ピット

位置 X=58044 Y=-75533

形状・規模 平面形が円形状で、断面形が楕円状を呈する。直径40cm×深さ34cmを測る。



82号ピット
 1 黒褐色土(10YR2/2)Hr-FPを多量に含み締まりあり。
 102号ピット
 1 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを少量含む。
 366号ピット
 1 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを多量に含む。

第30図 ピット〔1区82号、7区366号、9区102号〕

(4) 溝状遺構と自然流路

12区を除く各調査区から主に人為的な掘削による45条の溝状遺構と、4・8・10区から湧水や雨水により形成されたと推定される4条の自然流路を検出した。溝状遺構について調査区別に見ると、1区3条、2区6条、3区2条、4区18条、5区1条、7区4条、9区5条、10区3条、13区3条を数え、4区を中心に分布する傾向が看取される。自然流路は4区1条、8区2条、10区1条を数える。各溝状遺構の規模・走向方位等については第5表に一括してあるが、ここでは記述の煩雑さを避けるために、現在の土地区画との関係や断面形状を基準にして以下のように分類しておきたい。

- A類：現在の土地区画境界と類似した方向性や直線的な走行性を持つもの。
- A1類：A類と同様に直線的な走行性を持つが、現在の土地区画境界とは関連性がないもの。
- B類：断面形が葉研状を呈し、走向がやや蛇行する。
- C類：断面形がU字状を呈し、走向が蛇行する。

上記の分類に基づいて、全体的な様相を見ると、C類が21条(47%)と最多を占め、次いでA類が12条(27%)、B類が9条(20%)、A1類が3条(6%)を数える。

規模に関しては、まず最多数を占めるC類の様相を見ると、最大上幅が①1m未満：11条、②1～1.5m未満：6条、③1.5～2m未満：2条、④2m以上：1条、不明：1条を数え、1.5m未満のものが主体をなしている。A類では①1m未満：5条、②1～1.5m未満：6条、③1.5～2m未満：1条を数え、C類と同様に1.5m未満が主体的である。B類では②1～1.5m未満：6条、③1.5～2m未満：1条、④2m以上：2条を数え、1m未満が欠落する。A1類の3条は、ともに1m未満となる。一方、最大掘削深度ではA類：9～52cm、A1類：30～36cm、B類：35～124cm、C類：11～84cmを測るが、B・C類が比較的高深度となるのに対してA・A1類は浅くなる傾向が認められる。

埋没土の状況については、各類ともにHr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土が主体的に堆積する点で共通しているが、A・A1・C類では1～2層での埋没に対して、B類では2～6層の多層埋没が顕著であり、その機能・用途を考える上で注意を要する。また、B・C類の中に

はその走行が蛇行・断続的なものも存在しており、先の自然流路と同様に湧水や雨水により形成されたものが含まれている可能性が高い。

帰属時期については、墓坑のように時期判別が可能な遺物を伴出するものが2区3号、4区7・10・16号の4条や8区3号流路等にとどまり、確定することのできないものが多数を占める。ただし、先述の墓坑や土坑と同様に、その埋没土上位に現在の畝耕作土を含む第1層の堆積する状況が、1区3号、4区7・8・19・20号、7区37・42号、8区2・3号流路にて確認できることから、少なくとも現在を遡ることは確実であろう。また、江戸時代に設置された「金井宿」の地割に関連すると想定されるA類の存在を考慮すれば、近世にまで遡る可能性もある。

以下、調査区別に各溝状遺構と流路の内容を記述するが、その分布状況については別添の全体図1・2および同図3・4に掲示してあるので、そちらを参照されたい。

A. 1 区

概要 1区の中央部を東西方向に走行するA類の34・35号と、北端を南北方向に走行する同36号の3条を検出した。等高線を斜位に横断して直線的に走行する34号とそれに類似する35号は、相互に約10間幅の16～17mの間隔を置いて並走するが、全体図3に掲示したように現在の東西方向の土地区画境界とも近似した位置を走行しており、何らかの有機関係性を窺うことができる。34号と同様に等高線に斜行する36号は、現道を挟んで北側に隣接する2区の6号溝と同一の走行性を有することから、一体の溝として把握できる。また、その走向方位は全く異なるものの、走行はA類と同様に直線的である点は注意を要する。各溝の上位→下位方向は34・35号が西→東、36号が南→北であり、基本的に地形の傾斜方向へと下っている。尚、各溝からは伴出遺物は検出されなかった。

写真 PL15

重複 無し。

形状・規模 当該区ではA・A1類のみであるが、断面形状はともに壁面勾配の緩いU字状である。規模は、A類が最大上幅44～96cm×深さ9～36cmを、A1類が最大上幅66cm×深さ36cmを測る。底面の平均勾配は3～5%であ

第3章 遺跡の調査内容

り、ほぼ地形の勾配と一致している。

方位 34・36号の主軸方位は、N72～75度Eを測りともに近似するが、36号は大きく北寄りに振れてN15度Eを測る。両者間には、平行・直行等の関係性は認められない。

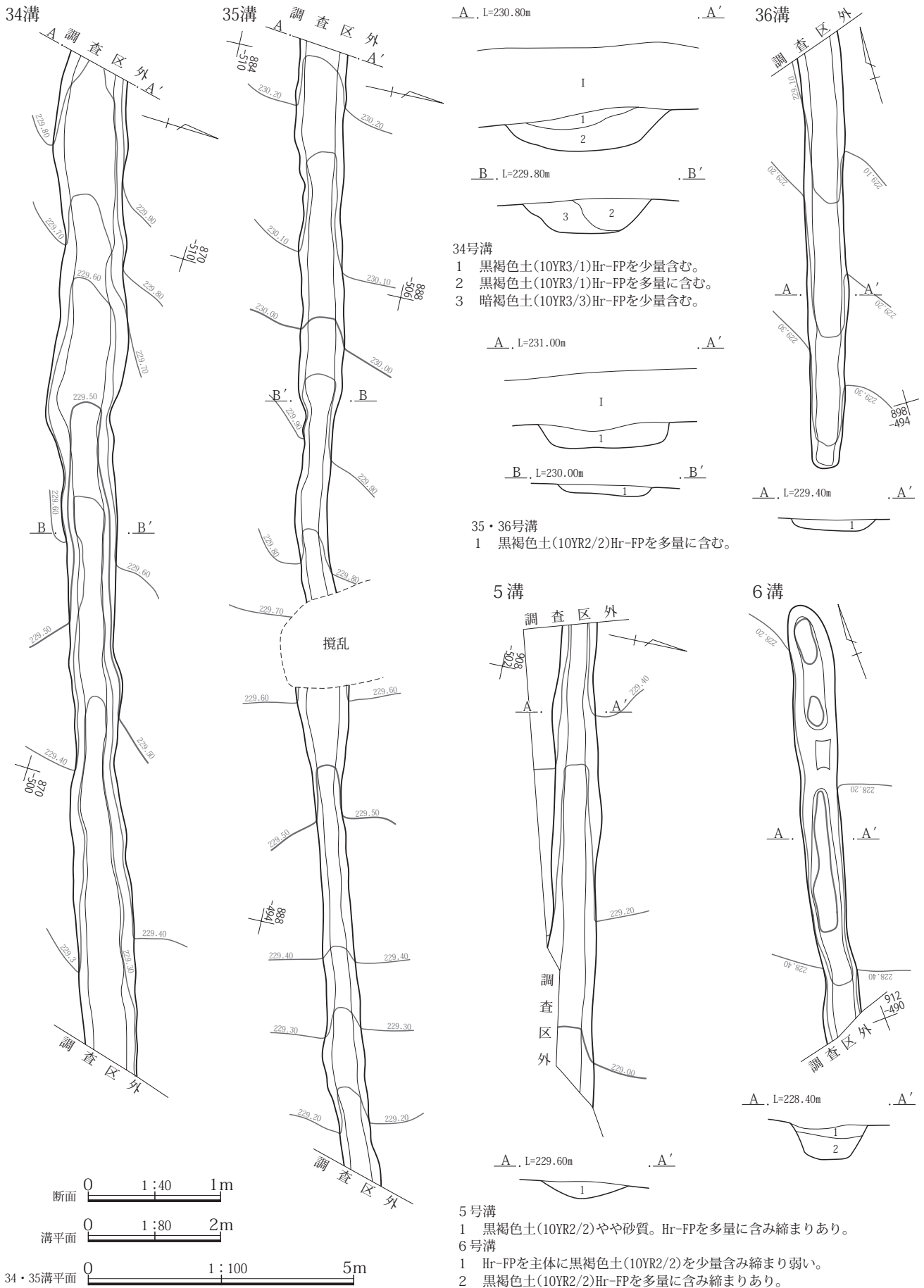
埋没土 35・36号は、Hr-FPを多量に含む黒褐色土の1層で、34号は同2層で埋没している。流水の痕跡を示す土層堆積はなく、水路等の機能は考え難い。

遺物 各溝ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各類の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。34・35号の走向について、全体図3に掲示した現在の土地区画境界と対比すると、その方位はほぼ同一となるが、位置的な関係には違いが認められる。例えば、34号の場合は地番「B1807-1他」の南側境界線から約4m北側にずれ、35号では同じく地番「B1807-2他」の南側境界線から5～6m

第5表 溝状遺構規模一覧(近世以降)

区	番号	位置		走向方位	規模(延長:m,他:cm)					勾配	分類	堆積土層	備考
		座標X	座標Y		延長	上幅	下幅	深さ	落差				
1	34	57866	-75495	N72度E	19.32	70~136	30~96	10~23	57	3	A	3	
1	35	57885	-75489	N75度E	21.60	48~100	20~62	2~9	110	5	A	1	
1	36	57897	-75493	N15度E	6.56	41~66	20~44	18~36	33	5	A1	1	6号と同一,全長21.8m.
2	1	57942	-75492	N78度W	12.04	54~78	8~48	9~47	77	6	C	2	
2	2	57939	-75490	N71度E~N83度W	22.64	42~114	9~88	19~79	104	5	B	2	
2	3	57937	-75489	N83度W	17.84	42~130	17~80	18~74	97	5	B	5	鉄釘1.2・3坑と重複.
2	4	579249	-75485	N87度E~N66度W	11.12	57~170	7~58	12~33	84	8	C	1	13号と同一,全長17m.1坑と重複.
2	5	57908	-75495	N78度E	7.24	52~72	26~38	9~20	48	7	A	1	
2	6	57911	-75488	N15度E	6.58	41~66	20~44	18~36	29	4	A1	2	36号と同一,全長21.8m.
3	12	57930	-75469	N72度W~N87度E	6.06	48~80	25~58	9~21	29	5	C	2	13号に切られる
3	13	57928	-75471	N65度E	5.82	48~78	30~54	3~14	36	6	C	1	4号と同一,全長17m.12号を切る.
4	7	57986	-75475	N80度E	4.40	152	26~50	30~66	10	2	C	1	銭貨・煙管・守り本尊各1.
4	8	57948	-75475	N7度E	16.39	37~64	16~34	14~30	3	1	A1	1	
4	9	57986	-75491	N65度W~N88度E	8.85	48~78	20~40	23~84	8	1	C	1	10号と重複
4	10	57983	-75483	N74度E~N74度W	33.20	74~180	28~112	35~124	234	7	B	5	鉄製品2.14号を切り9・11・17・24号と重複.
4	11	57984	-75491	N81度E~N68度W	8.65	46~114	14~40	24~41	47	5	C	2	10号と重複
4	14	57980	-75484	N69度E	8.02	70~120	30~70	44~52	39	5	A	2	10号に切られ16号と重複
4	15	57978	-75492	N70度E	5.90	54~75	28~45	17~30	27	5	A	1	
4	16	57980	-75484	N70度E	7.82	26~58	7~35	11~12	不明	不明	A	2	鉄釘1.14号と重複.
4	17	57986	-75486	N88度E	5.04	36~62	12~40	3~19	22	4	C	1	10号と重複
4	18	57985	-75477	N76度W~N70度E	6.00	40~84	17~40	14~43	10	2	C	2	
4	19	57984	-75474	N81度E~N74度W	(8.6)	34~118	5~34	3~35	43	5	B	2	
4	20	57982	-75474	N88度W	11.00	76~115	12~68	22~70	49	4	B	2	
4	21	57971	-75476	N61度E	3.96	38~60	9~28	14~16	23	6	C	1	4号流路に切られ23号と重複
4	22	579703	-75476	N56度E	4.02	60	22	16~26	50	7	C	2	4号流路に切られ23号と重複
4	23	57966	-75472	N63~78度E	42.76	120~250	18~90	27~98	248	12	B	2	4号流路に切られ29号を切る.21・22号と重複.
4	24	57987	-75501	N68度W	11.60	34~68	12~26	6~37	45	4	C	1	10号と重複
4	28	57988	-75509	N70度W	6.68	36~52	8~20	7~16	32	5	C	1	
4	29	57965	-75503	N74度E~N80度W	5.40	82~130	22~40	46~54	32	6	B	3	流水の痕跡
4	4流	57972	-75472	N64度E	(14.5)	840	820	5~23	不明	7	1	1	21~23号を切る
5	33	57685	-75545	N39度W~N71度E	4.62	28~123	14~88	11~26	26	6	C	1	
7	37	57718	-75527	N1度W	34.23	75~138	36~105	80~104	81	2	B	1	
7	42	57752	-75505	N70度W	36.44	93~375	44~195	12~76	239	7	C	3	
7	43	57714	-75537	N40度W	21.60	74~133	18~106	1~16	79	4	C	1	44号と重複
7	44	57714	-75539	N25度W	17.02	47~104	25~72	3~13	64	4	A	1	43号と重複
8	2流	57815	-75497	N81度W	18.50	1056~1229	28~182	203~292	122	7		9	11号墓坑に切られる
8	3流	57802	-75501	N47度W	12.05	208~368	35~225	22~53	72	6		3	陶器Ⅲ1.996・997号土坑に切られ,651号と重複.
9	39	58049	-75501	N65度W~N80度E	16.81	62~98	35~70	2~22	92	5	C	1	
9	48	58001	-75519	N58度W~N86度W	15.09	63~145	27~100	9~17	88	6	C	1	49号と重複
9	49	58003	-75502	N80度E	11.18	53~117	27~81	2~11	47	4	C	1	48号と重複
9	50	58014	-75491	N71度E	32.85	49~124	20~76	3~25	124	4	A	1	51号と重複
9	51	58015	-75491	N72度E	36.29	21~42	4~14	2~16	158	4	A	1	50号と重複
10	45	580881	-75548	N76度E	44.14	30~92	5~52	3~27	248	6	A	2	
10	46	58069	-75553	N73度E	32.01	26~137	13~64	2~40	182	6	A	1	
10	47	58080	-75539	N75度E	16.25	46~105	14~60	6~33	108	6	A	2	1号流路と重複
10	1流	58076	-75534	N75度W~N60度E	58.16	117~486	45~316	15~51	336	6		1	47号と重複
13	40	58049	-75590	N48度E~N67度E	32.14	95~299	13~127	22~77	152	5	B	6	水流の痕跡
13	41A	58113	-75641	N66度W	8.54	88~141	11~81	8~11	55	6	C	1	
13	41B	58110	-75641	N77度E	12.00	不明	不明	18~49	58	5	C	2	水流の痕跡



第31図 溝状遺構(1)[1区34~36号、2区5・6号]

北側にずれている。これは、現区画の間隔が15m幅であることも、その差異が生じる要因の一つと考えられるが、いずれにしても両溝が現区画の直下に位置しないことは、その埋没土上位にI層が堆積することとも整合的であり、時間差の存在を明示している。その一方で、走行方位が合致している点は、A類の機能が地割に関係していることを示すと共に、現土地区画が江戸時代の「金井宿」の地割方向をとどめている可能性が高いことを示唆するものだろう。

尚、A類の時期や機能については、第5章においてあらためて詳述する。

B. 2 区

概要 北端部を中心にして、東西方向を主体に走行する6条を検出した。内容的には、A類の5号、A1類の6号、B類の2・3号、C類の1・4号に分類され、A類は南側に、B・C類は北側に偏在している。6号については、1区で記述したように同区の36号と一体のものであり、延長21.8mを測る。各溝の上位→下位方向は、南→北の6号を除いた全てが西→東であり、基本的に地形の傾斜方向へと下っている。走行状況は2・6号を除いて蛇行・断続的であり、自然的な要因による形成も考慮される。尚、3号から鉄釘1点が出土した他は、各溝ともに伴出遺物は検出されなかった。

写真 P L 15・101 **観察表** 433頁

重複 3号は2・3号土坑と、4号は1号土坑と重複する。

形状・規模 A・A1類の5・6号の断面形状は壁面勾配の緩いU字状であり、A類の規模は最大上幅72cm×深さ20cmを、A1類は最大上幅66cm×深さ36cmを測る。薬研状の断面形状を持つB類の2・3号は、最大上幅114～130cm×深さ74～79cmを測る。断面U字形状のC類1・4号は、最大上幅78～170cm×深さ33～47cmを測る。底面の平均勾配は、A類が7%、A1類が4%、B類が5%、C類が6～8%を測り、ともにほぼ地形の勾配と一致している。

方位 走向方位は、A類の5号がN80度E、A1類の6号がN度15Eと相互に異なり、両者間に平行・直行等の関係性は認められない。B・C類は蛇行する2・4号を除いて、1・3号はN78～83度WN72～75度Eを測り、と

もに近似した方位を有する。

埋没土 各類ともに、Hr-FPを多量に含む黒褐色土の1～2層で埋没するが、3号は5層の多層埋没である。この3号には流水による僅かな砂礫の堆積も認められるが、他の溝を含めて水路のような機能は考え難い。

遺物 各溝ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各溝の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。5号の走向について、全体図3に掲示した現在の土地区画境界と対比すると、現道と平行してその北縁から約2mずれて位置している。また、1区の34号とは20間幅の36mの距離を置いており、ともに土地区画との関連性を示すものとして注目される。

C. 3 区

概要 当該区は、現道を挟んで2区の東側10mに位置する狭小な面積であり、東西方向に走行する12・13号の2条を検出した。いずれもC類であるが、13号についてはその走向から判断して、2区の4号と一体のものと考えられ、全長約17mを測る。各溝の上位→下位方向は西→東であり、基本的に地形の傾斜方向へと下っている。尚、各溝からの伴出遺物は検出されなかった。

写真 P L 15・16

重複 12号は13号に切られ、9号土坑と重複する。

形状・規模 12・13号ともに断面形状は壁面勾配の緩いU字形状を呈し、規模は最大上幅78～80cm×深さ14～21cmを測る。底面の平均勾配は5～6%であり、地形の勾配と一致している。

方位 12・13号ともに蛇行しており、一定した方向性を持たない。

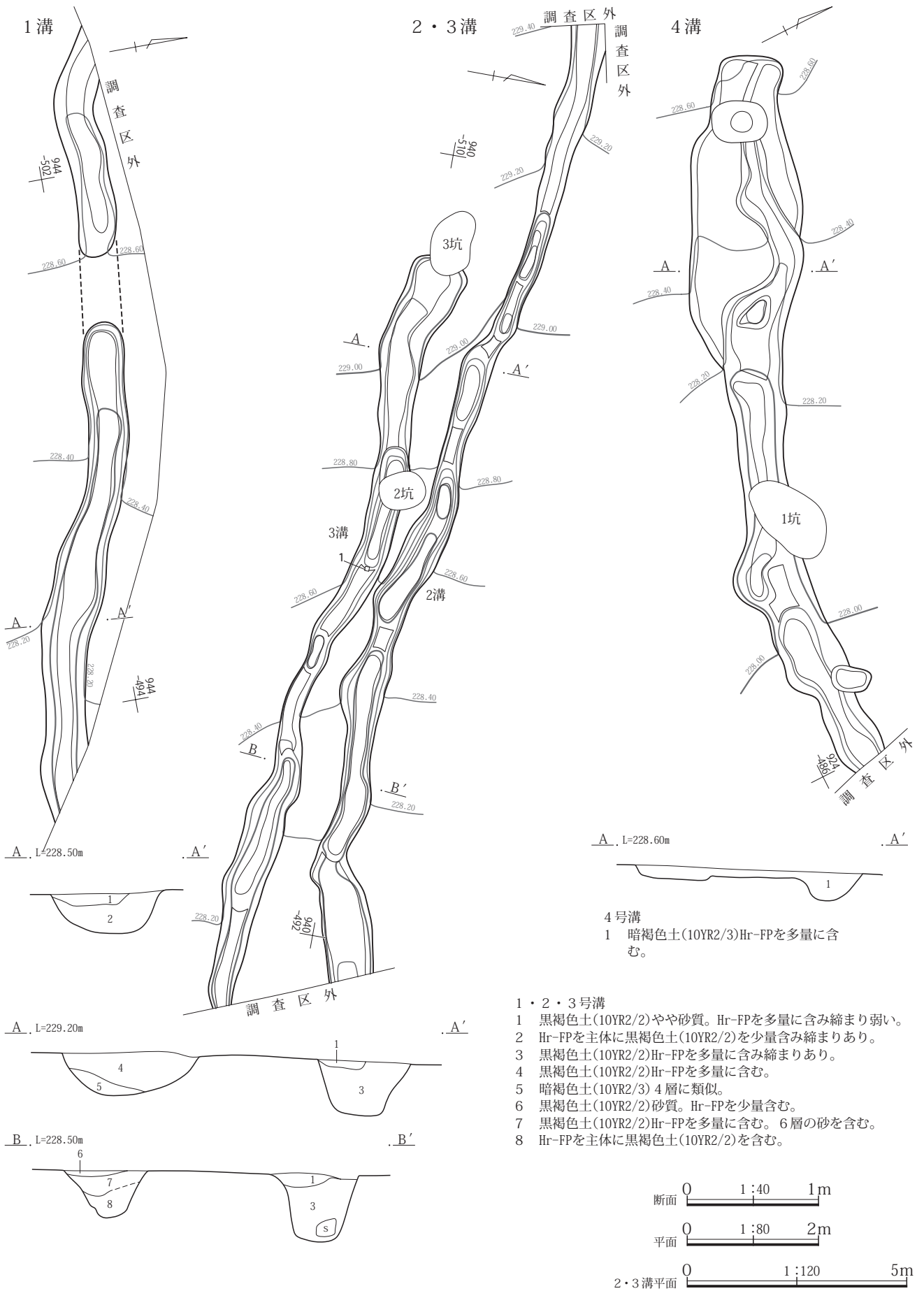
埋没土 Hr-FPを多量に含む黒褐色土や暗褐色土の1～2層で埋没し、流水の痕跡は認められない。

遺物 各溝ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各溝の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。

D. 4 区

概要 南側と北側の2地点を中心にして、東西方向に走行する18条と南北方向の1条を含む19条の溝と1条の自然流路を検出した。溝の内容は、A類が14～16号の4



第32図 溝状遺構(2)[2区1~4号]

条、A1類が8号の1条、B類が10・19・20・23・29号の5条、C類が7・9・11・17・18・21・22・24・28号の9条に分類される。A・A1類を除いたB・C類の分布状態を見ると、南側では21～23・29号の4条、北側では7・9～11・17～20・24・28号の10条が存在し、北側における相互の著しい重複に注意を要する。A類の14～16号は、北側の溝とも一部重複するが、その走行は直線的で様相を異にしている。また、相互に近接する15・16号は、その延長方向がほぼ同一であることから、一体の溝の可能性が高い。各溝の上位→下位方向は、北→南の8号を除いた全てが西→東であり、基本的に地形の傾斜方向へと下っている。尚、7・10・16号を除いて各溝ともに伴出遺物は検出されなかった。

写真 PL16・17・101 **観察表** 433・434頁
重複 9～11・14・16・17・21～24号の溝と4号流路等に切り合い・重複関係が認められる。また、8号は11号土坑と、19・20号は4号土坑と重複する。

形状・規模 A類3条の断面形状は壁面勾配の緩いU字状を呈し、規模は最大上幅58～120cm×深さ12～52cmを測る。A1類1条の断面形状はA類と同様であり、最大上幅64cm×深さ30cmを測る。薬研状の断面形状を持つB類の5条は、最大上幅34～112cm×深さ35～124cmを測る。断面U字形のC類9条は、最大上幅20～50cm×深さ16～84cmを測る。底面の平均勾配は、A類が5%、A1類が1%、B類が4～12%、C類が1～7%を測り、A類やA1類はほぼ地形の勾配と一致しているが、B・C類における差異が際立っている。4号流路の規模は幅8.4m×深さ23cmで、深度が浅いためにその走行が途中で不明瞭・痕跡的となる。

方位 A類はN69～70度E、A1類はN7度Eを測る。B・C類については、南側の一群では蛇行する23号に走行距離の短い21・22・29号が付随し、北側では10号を基軸に7・9・11・17～20・24・28号等が絡み合うように蛇行しており、ともに一定の方向性を持たない。

埋没土 各類ともに、Hr-FPを多量に含む黒褐色土や暗褐色土の1～2層での埋没を主体とするが、10号は5層の多層埋没である。この10号と29号には、流水による僅かな砂礫の堆積も認められるが、他の溝を含めて水路のような機能は持たないと想定される。

遺物 7号から1086年初鑄の元祐通寶・煙管の吸口・

金属製の守り本尊が各1点、10号から用途不明の鉄製品2点、19号から鉄釘1点が出土した。

所見 各類土坑の機能については確定できないが、流水の痕跡が乏しいことから、少なくとも恒常的に流水を保持するような水路的な状況は看取できない。ただし、A類の14～16号とA1類の11号を除いた各溝は、その走行が蛇行・断続的であり、底面の勾配や深度が一定ではないことと共に、10・23号などの流水による砂礫層の存在なども加味すれば、季節的な大量の雨水の侵食による形成や改変も考慮される。帰属時期については、不明なものが大半を占めるが、7号から出土した守り本尊は、型押しによる製法が想定されることから、近・現代にまで下る可能性が高い。A類の14～15号については、1区34・35号のように連続した走行ではないが、おそらく掘り込み面からの掘削深度が一定ではなかったために、Hr-FP上面での痕跡が一部消失して不連続となったことが想定される。また、全体図3に掲示した現在の地番「B1828-1」の南側土地区画境界線と対比すると、北方に約3mずれて位置するものの同一の方向性を持つことや、前述の1区34号とは約60間幅に近似した102mの距離を置いていること等を考慮すれば、土地区画との機能的関連性が想定される。

E. 5 区

概要 当該区は、現道を挟んで7区の南側8mに位置する狭小な面積と、現在の畠耕作に伴って東側2/3が削平されていたこともあり、蛇行するC類33号の1条を検出したのみである。伴出遺物は検出されなかった。

重複 52号土坑と重複する。

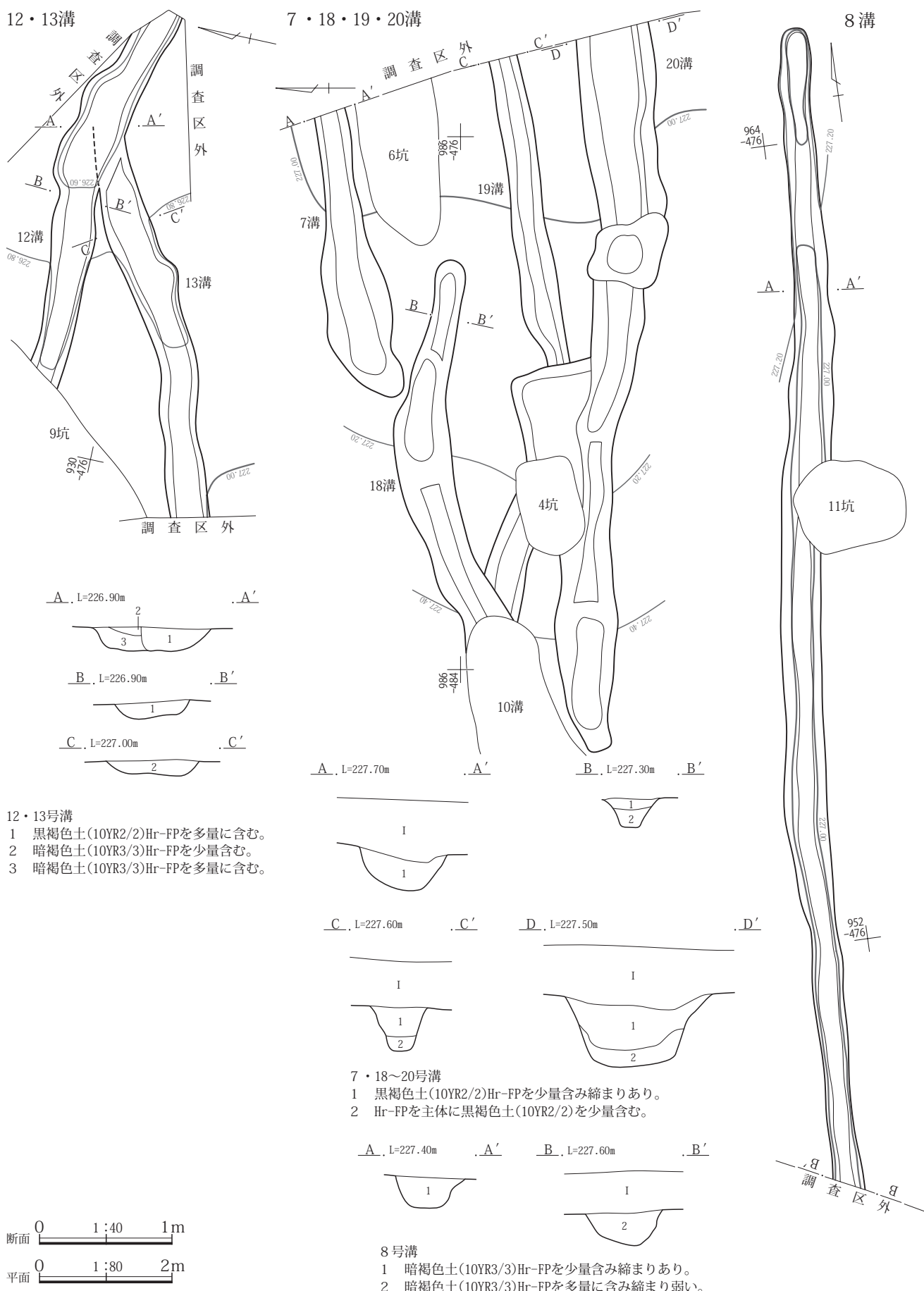
形状・規模 断面形状は壁面勾配の緩いU字形を呈し、規模は最大上幅123cm×深さ88cmを測る。底面の平均勾配は6%であり、地形勾配よりも緩い。

方位 蛇行しており、一定した方向性を持たない。

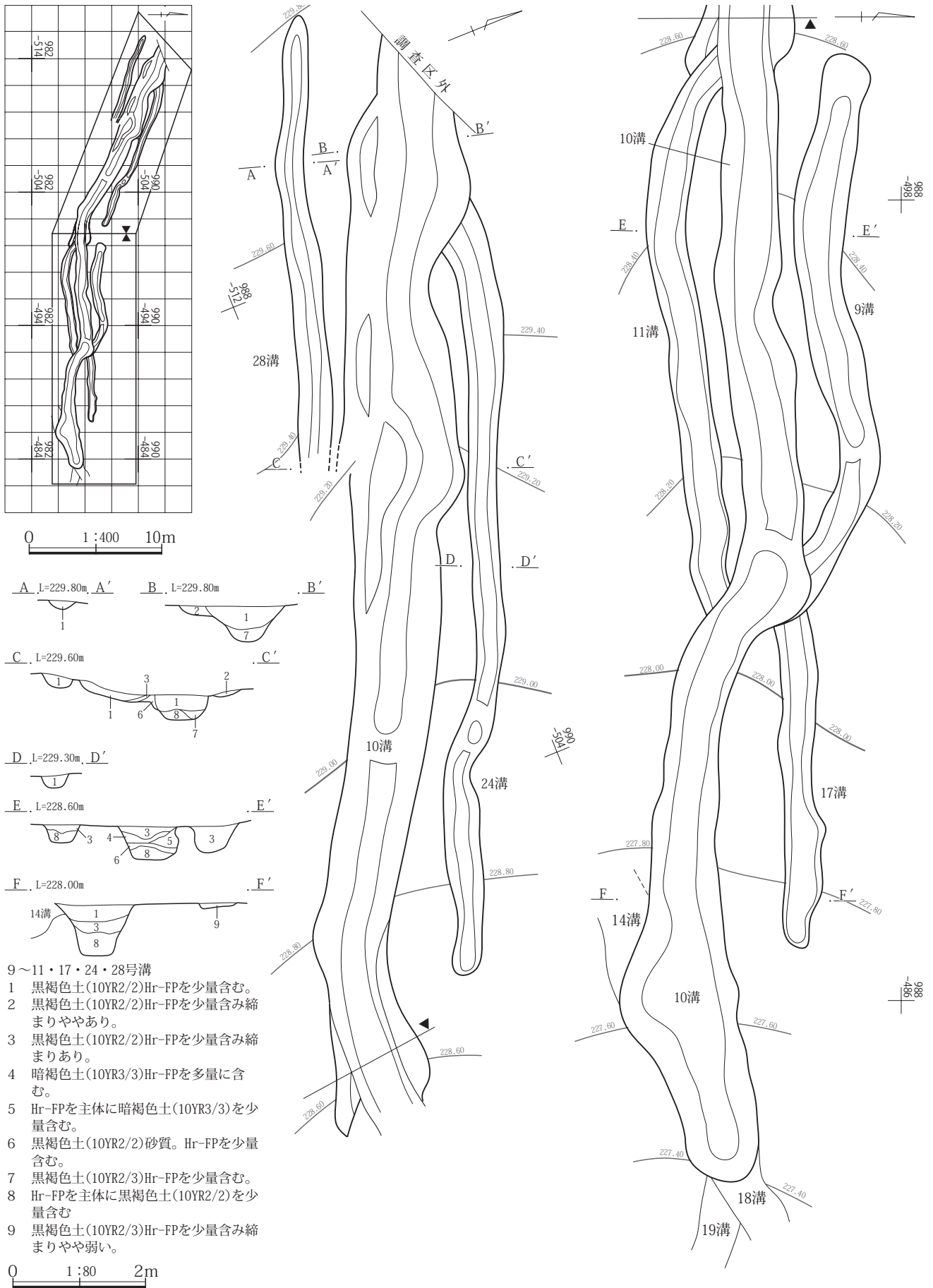
埋没土 Hr-FPを多量に含む黒色土の1層で埋没し、流水の痕跡は認められない。

遺物 伴出遺物は皆無である。

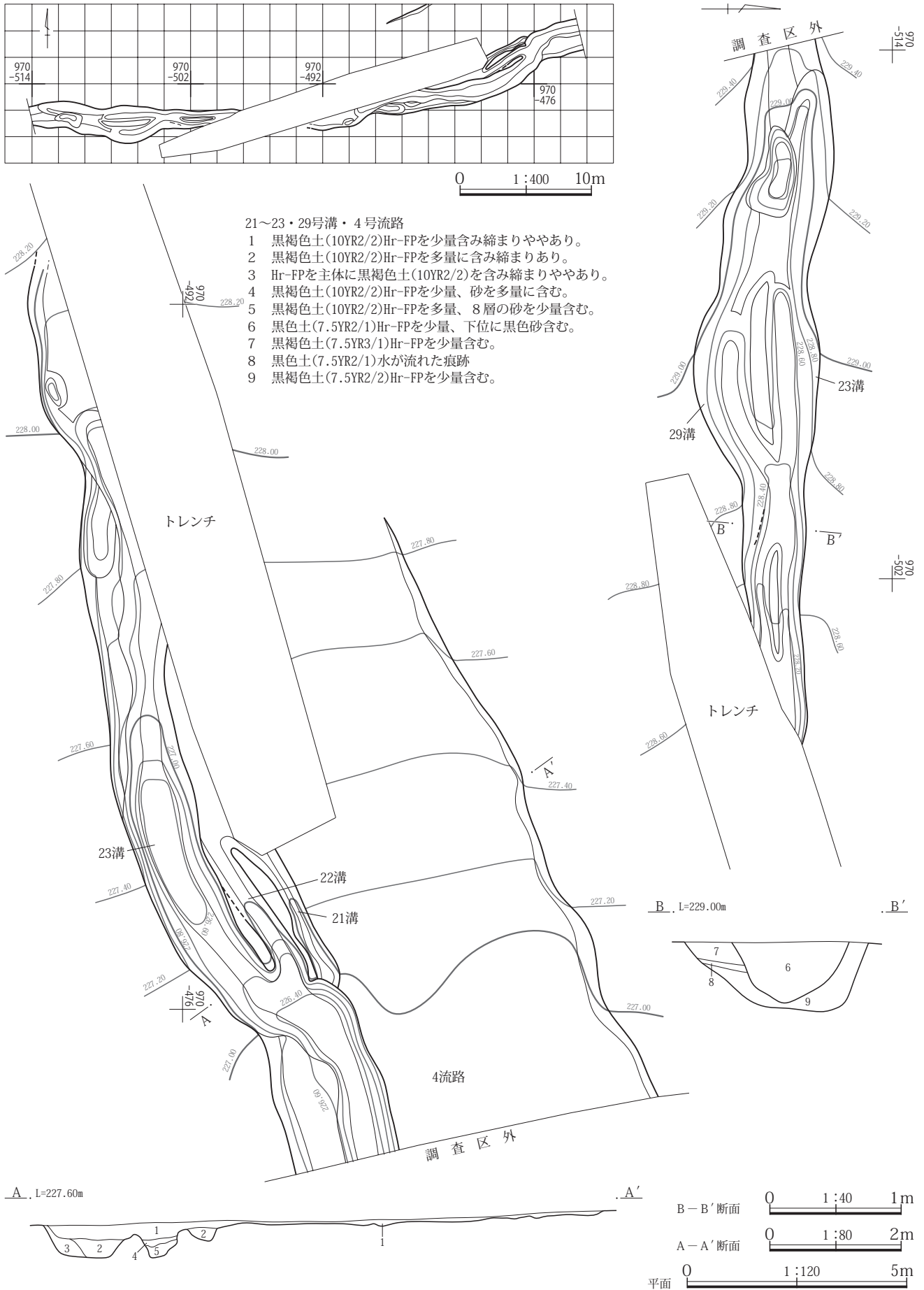
所見 機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。尚、蛇行する走向と底面の勾配や深度が一定ではないことから、自然的要因による形成も考慮される。



第33図 溝状遺構(3)〔3区12・13号、4区7・8・18~20号〕



第34図 溝状遺構(4)〔4区9・11・17・24・28号〕



第35図 溝状遺構(5)[4区21~23・29号、4号流路]

F. 7 区

概要 南半部を中心にして、37・42～44号の4条と、北端部に8区2号流路の一部を検出した。溝状遺構の内容は、A類が44号の1条、B類が37号の1条、C類が42・43号の2条に分類される。各溝の上位→下位方向は、42・43号が西→東、37・44号が北→南であり、ともに地形の傾斜方向へと下っている。尚、各溝ともに伴出遺物は検出されなかった。

写真 P L 17

重複 43・44号が交差・重複する。

形状・規模 A類の44号は、深度が浅いために断面形状も不明瞭であるが、規模は最大上幅104cm×深さ13cmを測る。葉研状の断面形状を持つB類の37号は、最大上幅138cm×深さ104cmを測る。断面U字形のC類42・43号は、最大上幅133～375cm×深さ16～76cmを測る。底面の平均勾配は、A類が4%、B類が2%、C類が4～7%を測り、基本的に地形の勾配と一致している。

方位 A・B類の44・37号は走行が直線的であり、前者はN25度W、後者はN1度Wを測る。C類は、やや蛇行して一定の方向性を持たないが、およそN度40～70Wを測る。

埋没土 各類ともに、Hr-FPを多量に含む黒褐色土や暗褐色土での1層埋没を主体とするが、C類の42号は3層の多層埋没である。尚、いずれも流水の痕跡を留めた砂礫層の堆積は認められない。

遺物 各溝ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各溝の機能・用途や帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。44号の走向について、全体図3に掲示した現在の土地区画境界と対比すると、最も近接する地番「1728-2」の西側境界線から西方に約1～3mずれて位置するものの、類似した走向方位を持つ点で、土地区画との関連性が想定できよう。

G. 8 区

概要 溝状遺構は皆無であるが、2・3号流路の2条を検出した。2号は上幅12m、深さ3mの規模を持ち、その痕跡は全体図3に掲示した現在の土地区画にまで残存している。また、3号は現道の下位に潜り込みその走行が不明瞭となるが、現道下の2号から分岐している可能性もある。埋没土層下位には、流水の痕跡を示す砂礫

層が挟在しているが、その様態からは平常時での少量は多くなかったことが想定される。おそらく、西方約1kmの榛名山麓東端部からの自然湧水により流路が形成され、それに季節的な大量の雨水が流入することを契機にして、その規模を拡大したと想定される。各流路ともに、西→東方向へ流下している。尚、3号流路から陶器皿1点が出土した。

写真 P L 17・101

観察表 434頁

重複 2号が11号墓坑により切られる。3号は996・997号土坑に切られ、651号と重複する。

形状・規模 2号は、断面形状が斜面勾配のゆるい葉研状を呈し、最大上幅12.29m×最大深度2.92mを測る。底面には、流水の侵食によるかなり激しい凹凸が認められる。3号は、斜面勾配のゆるいU字状の断面形状を呈し、最大上幅3.68m×最大深度53cmを測る。底面の平均勾配は、2号が7%、3号が6%を測り、基本的に地形の勾配と一致している。

方位 2・3号ともに若干蛇行しているが、前者はN81度W、後者はN47度Wを測る

埋没土 2・3号ともに、上位層はHr-FPを多量に含む黒褐色土や灰黄褐色土で埋没するが、下位層には流水により堆積した砂礫層が認められる。

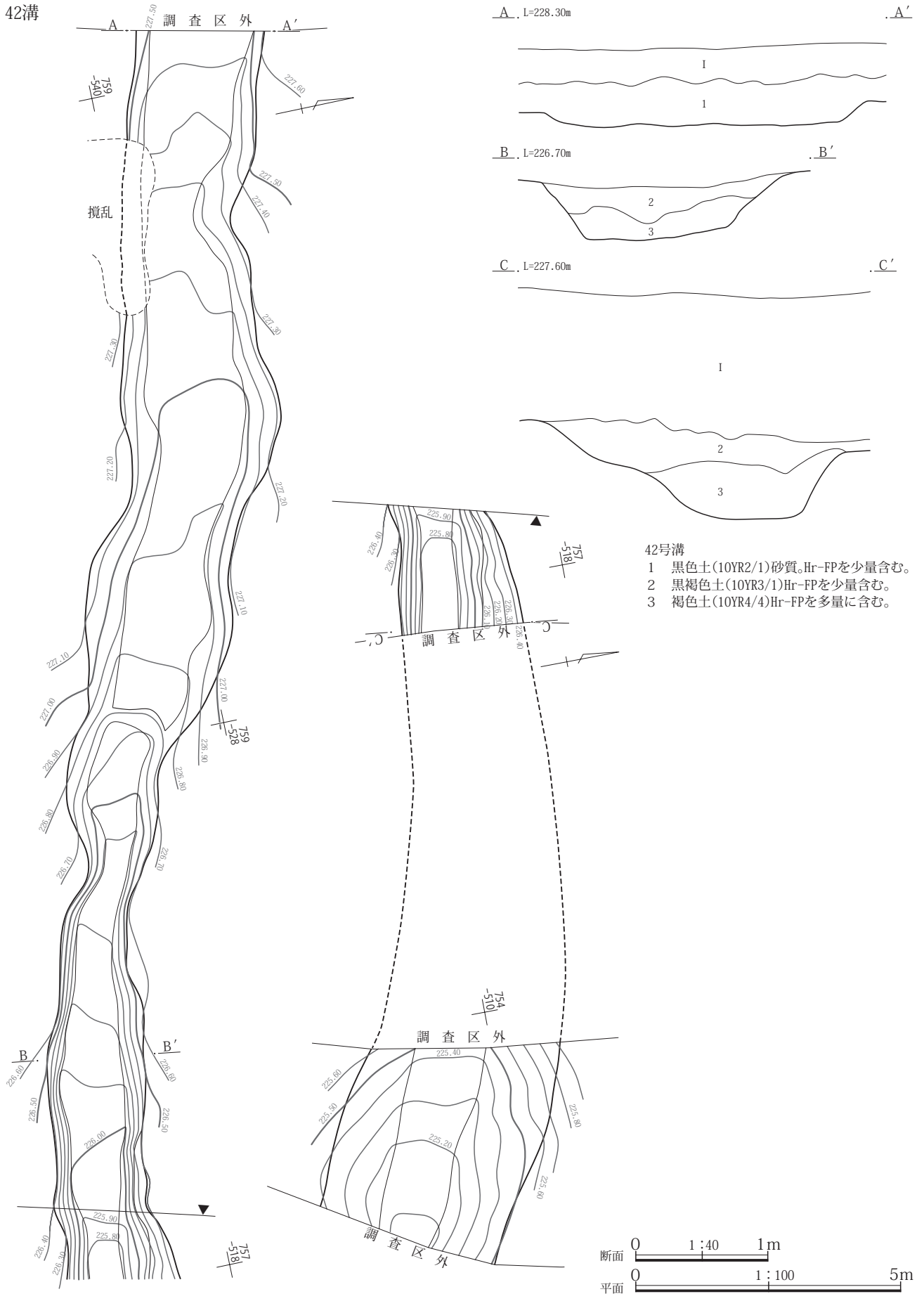
遺物 3号の埋没土中から、17世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃陶器の皿1点が出土している。

所見 2・3号ともに、湧水や雨水により形成された自然流路と想定される。その形成時期については確定できないが、3号から出土した陶器皿の年代を重視すれば、江戸時代にまで遡る可能性がある。

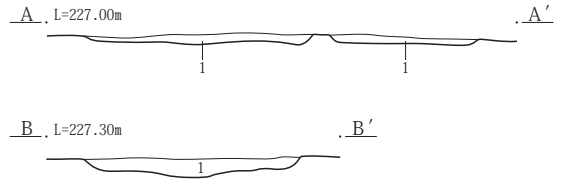
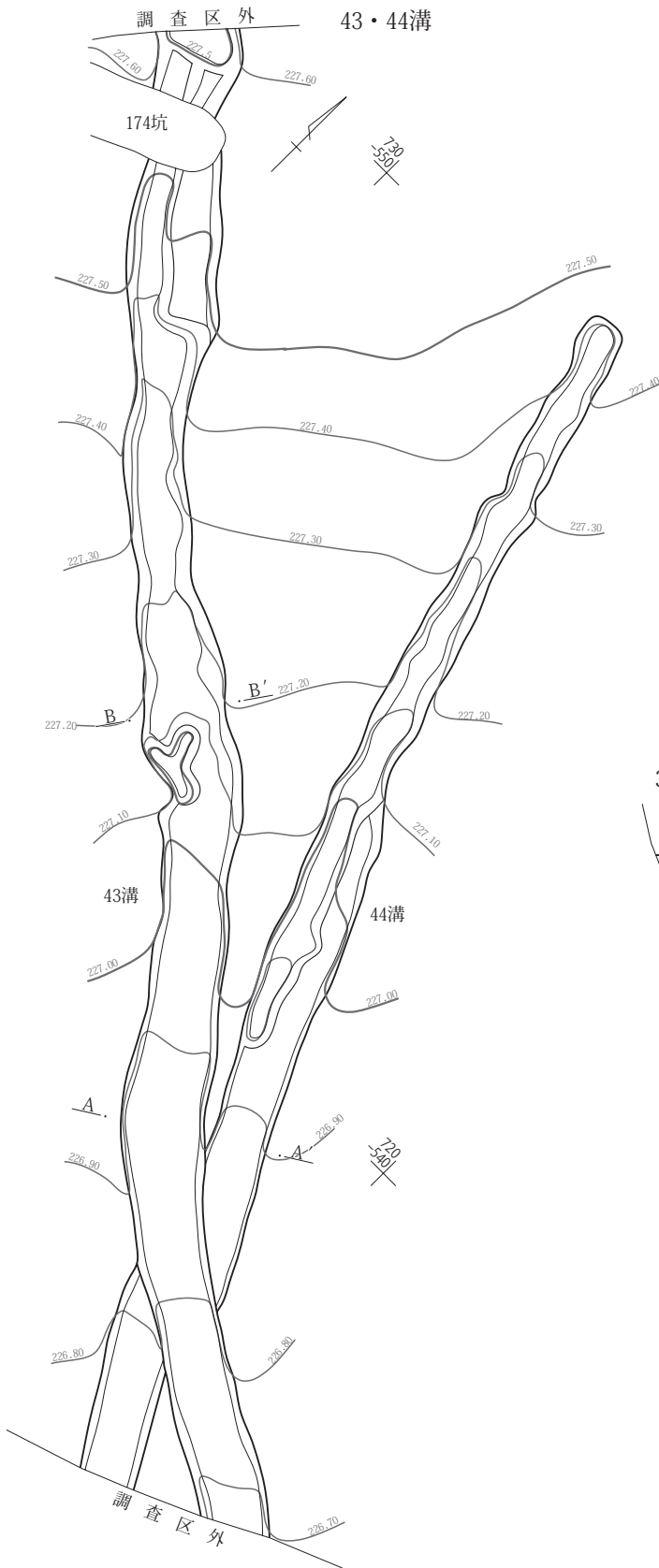
H. 9 区

概要 当該区の南半部を東西方向に走行するA類の50・51号とC類の48・49号、中央部東端を東西方向に走行するC類の39号の5条を検出した。相互に一体化した50・51号は、等高線を斜位に横断して直線的に走行するが、全体図3に掲示したように現在の東西方向の土地区画境界とも近似した走向を有しており、何らかの有機関係性を窺うことができる。C類の39・48・49号は、等高線に直交して窪地部分をやや蛇行し、かつ断続的である点を考慮すれば、雨水などの流水により形成された自然流路の可能性もある。各溝の上位→下位方向は、基本

42溝

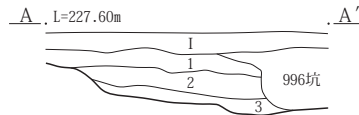
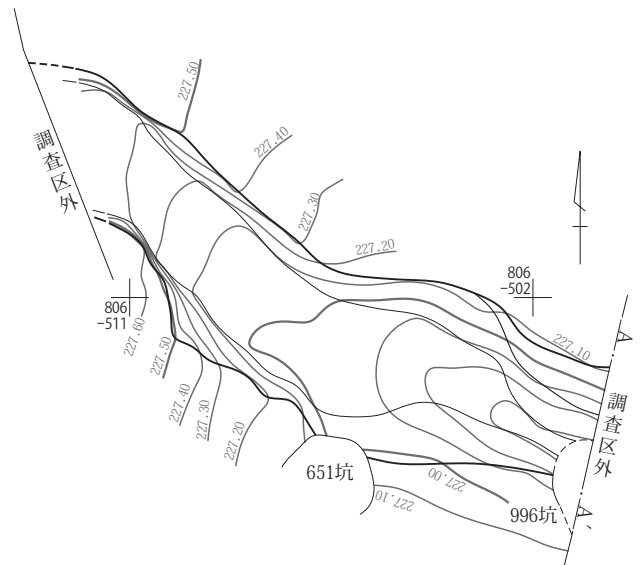


第37図 溝状遺構(7)[7区42号]

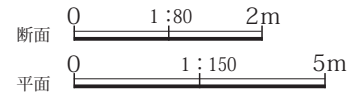
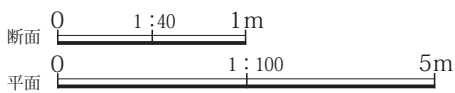


43・44号溝
1 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを少量含む。

3号流路

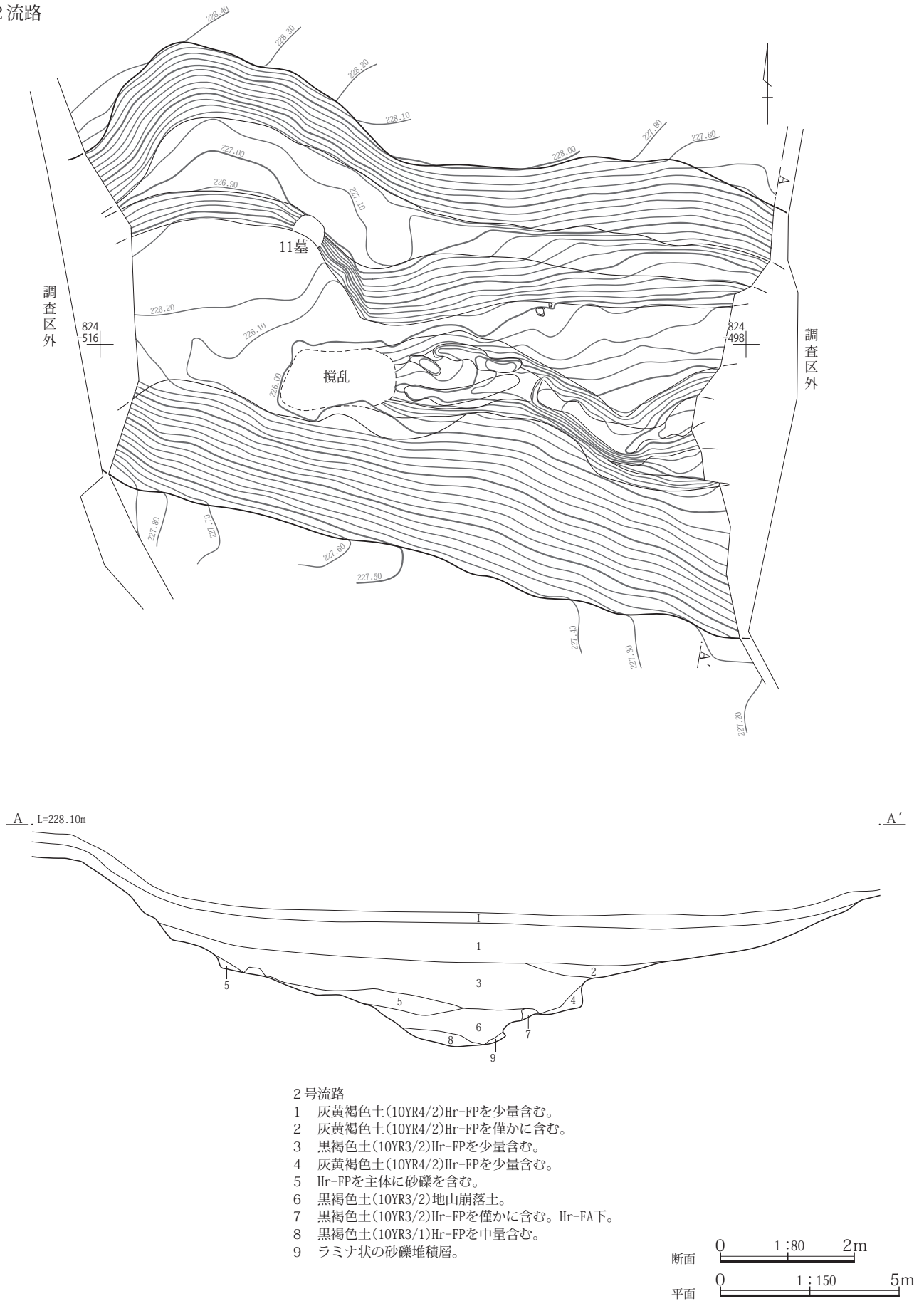


3号流路
1 黒褐色土(10YR3/2)Hr-FPを少量含む。
2 黒褐色土(10YR3/2)Hr-FPを中量含む。
3 Hr-FPを主体にラミナ状の砂礫層を含む。



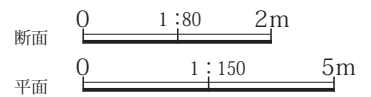
第38図 溝状遺構(8)[7区43・44号、8区3号流路]

2 流路



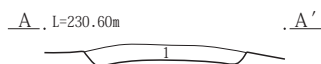
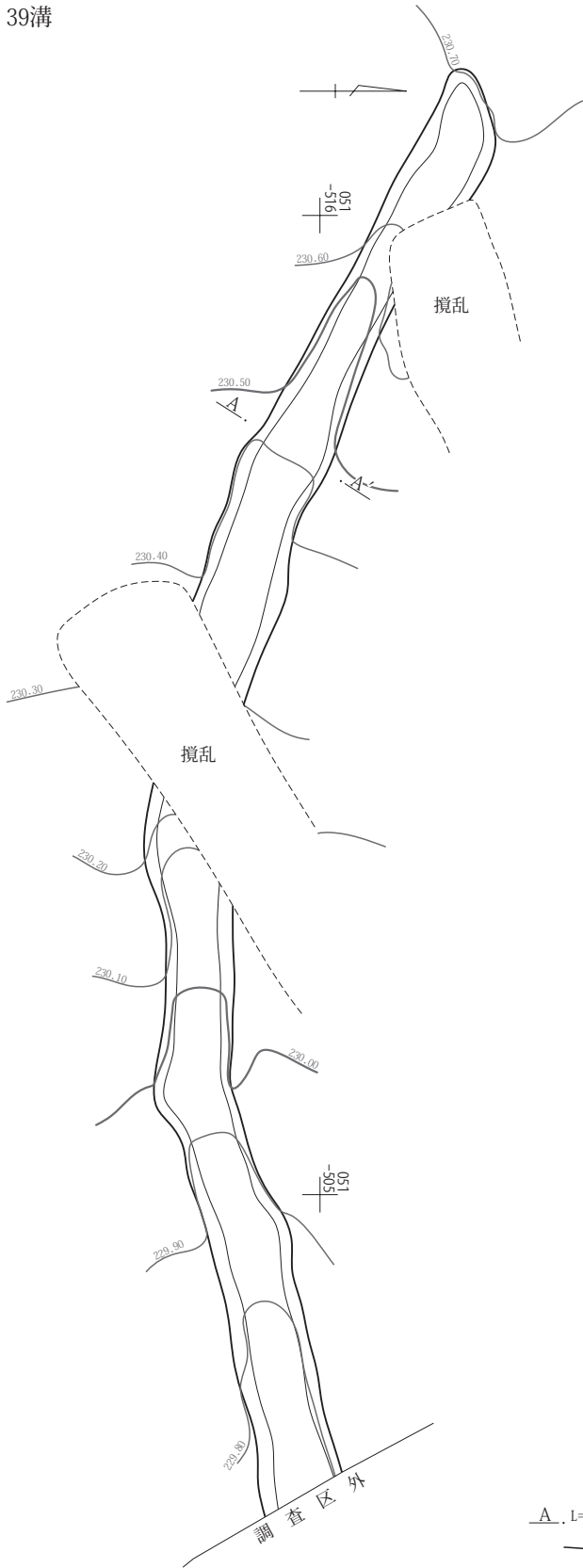
2号流路

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)Hr-FPを少量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)Hr-FPを僅かに含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)Hr-FPを少量含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2)Hr-FPを少量含む。
- 5 Hr-FPを主体に砂礫を含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/2)地山崩落土。
- 7 黒褐色土(10YR3/2)Hr-FPを僅かに含む。Hr-FA下。
- 8 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを中量含む。
- 9 ラミナ状の砂礫堆積層。



第39図 溝状遺構(9)[8区2号流路]

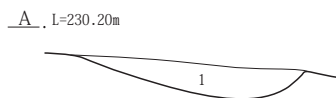
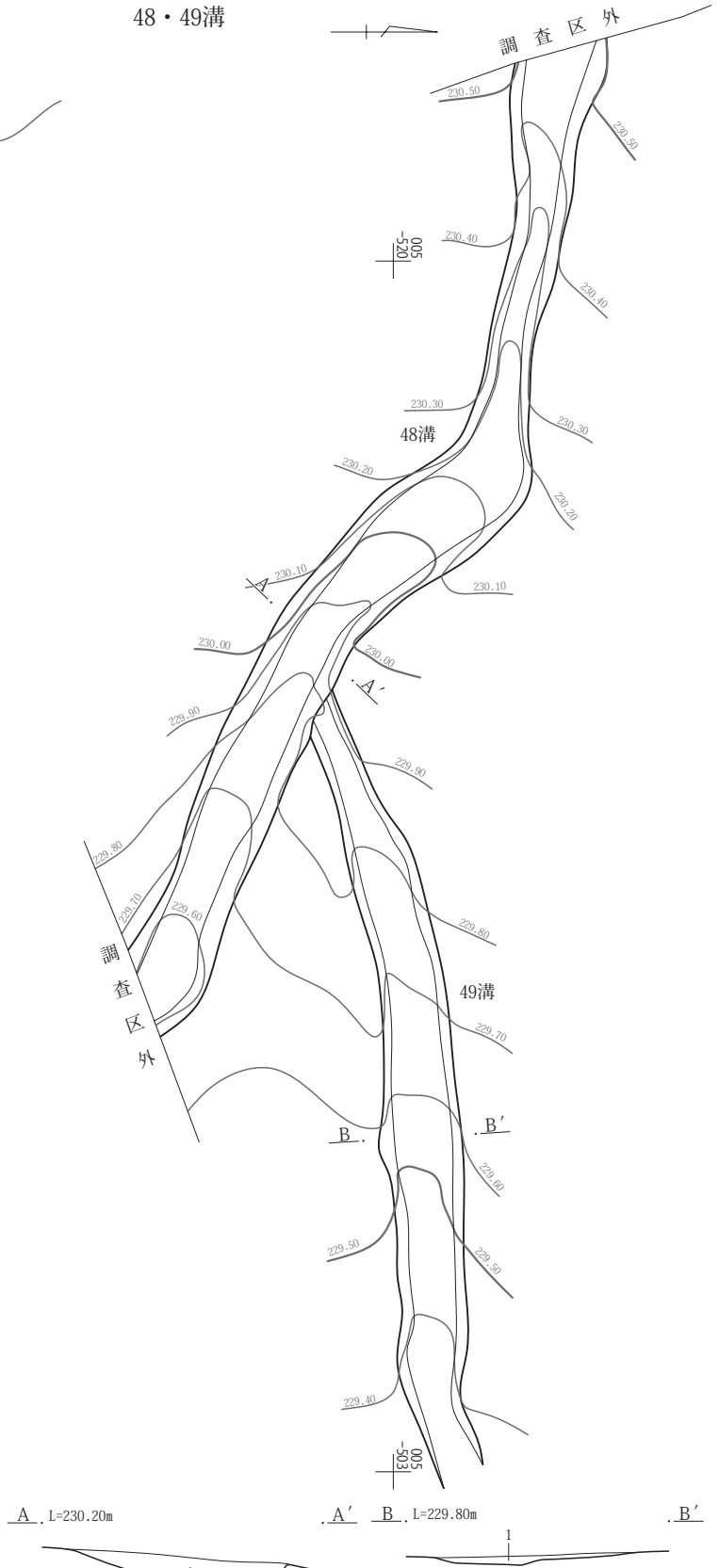
39溝



39号溝

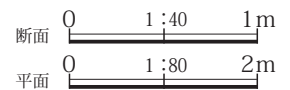
1 黒褐色土(10YR3/2)Hr-FPを多量に含み締まり強い。

48・49溝



48・49号溝

1 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを少量含む。



第40図 溝状遺構(10)〔9区39・48・49号〕

的に地形の傾斜方向と同様に西→東へと下っている。尚、各溝からの伴出遺物は検出されなかった。

写真 PL17

重複 48・49号および50・51号は相互に重複する。

形状・規模 A類の50・51号の断面形状はともにU字状であり、50号の規模は最大の上幅124cm×深さ25cmを測る。C類の39・48・49号は、最大の上幅98～145cm×深さ11～22cmを測るが、49号は途中で痕跡的となる。底面の平均勾配はA類が4%、C類が5～6%であり、ほぼ地形の勾配と一致している。

方位 A類の50・51号の主軸方位は、N71～72度Eを測りともに近似するが、C類の各溝は蛇行して一定の方向性を持たない。

埋没土 各溝ともに、Hr-FPを多量に含む黒褐色土の1層で埋没している。流水の存在を明示するような土層堆積は認められない。

遺物 各溝ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各類の帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。50・51号の走向について、全体図3に掲示した現在の東西方向の土地区画境界と対比すると、その方位はほぼ同一となるが、位置的な関係には違いが認められる。例えば、地番「A1838」と「A1848他」の南側境界線を連結してそれとの位置関係を比較した場合、約5m南側にずれている。こうした点は、当該溝が土地区画との関連性を否定するものではないが、少なくとも現在の土地区画とは直接的な関連性を持たないことを明示している。また、後述する10区の46・47号溝とは約40間幅の70～71mの距離を置いており、両者の関連性を看取することができる。

1. 10区

概要 9区の北側に隣接し、東西方向に走行するA類の45～47号の3条と、1号自然流路の合計4条を検出した。46・47号はともにその走行が途切れているが、走行方向や位置関係から見て、相互に時間的な新旧関係を持って近接並行する一体的な溝の可能性が高い。また、全体図3に掲示した現在の東西方向の土地区画境界とも近似した走向性を持っており、地割との関係性が窺える。自然流路を含めた各溝の上位→下位方向は、基本的に地形の傾斜方向と同様に西→東へと下っている。尚、各溝

からの伴出遺物は検出されなかった。

重複 47号と1号流路が重複する。

形状・規模 46号は西半部で最大幅170cmを測るが、土層断面Aラインでは識別できなかったものの、47号と重複してその幅員を広げている可能性が高い。46・47号の断面形状はともにU字状であり、それらの最大規模は上幅105～137cm×深さ33～40cmを測る。45号の断面形は壁面勾配の緩いU字状で、最大の上幅92cm×深さ27cmを測る。底面の平均勾配は、各溝ともに6%であり、ほぼ地形の勾配と一致している。1号流路は、断面形が壁面勾配の緩やかなU字状を呈し、最大の上幅4.86m×深さ51cmを測る。底面の平均勾配は、溝・流路ともに6%でありほぼ地形の勾配と一致しているが、1号流路の底面は大小様々な凹凸が形成されている。

方位 A類の45～47号の主軸方位は、N73～76度Eを測り共に近似するが、1号流路は蛇行して一定の方向性を持たない。

埋没土 各溝・流路ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土の1～2層で埋没しているが、1号流路は1層下部に流水による砂礫層が挟在している。

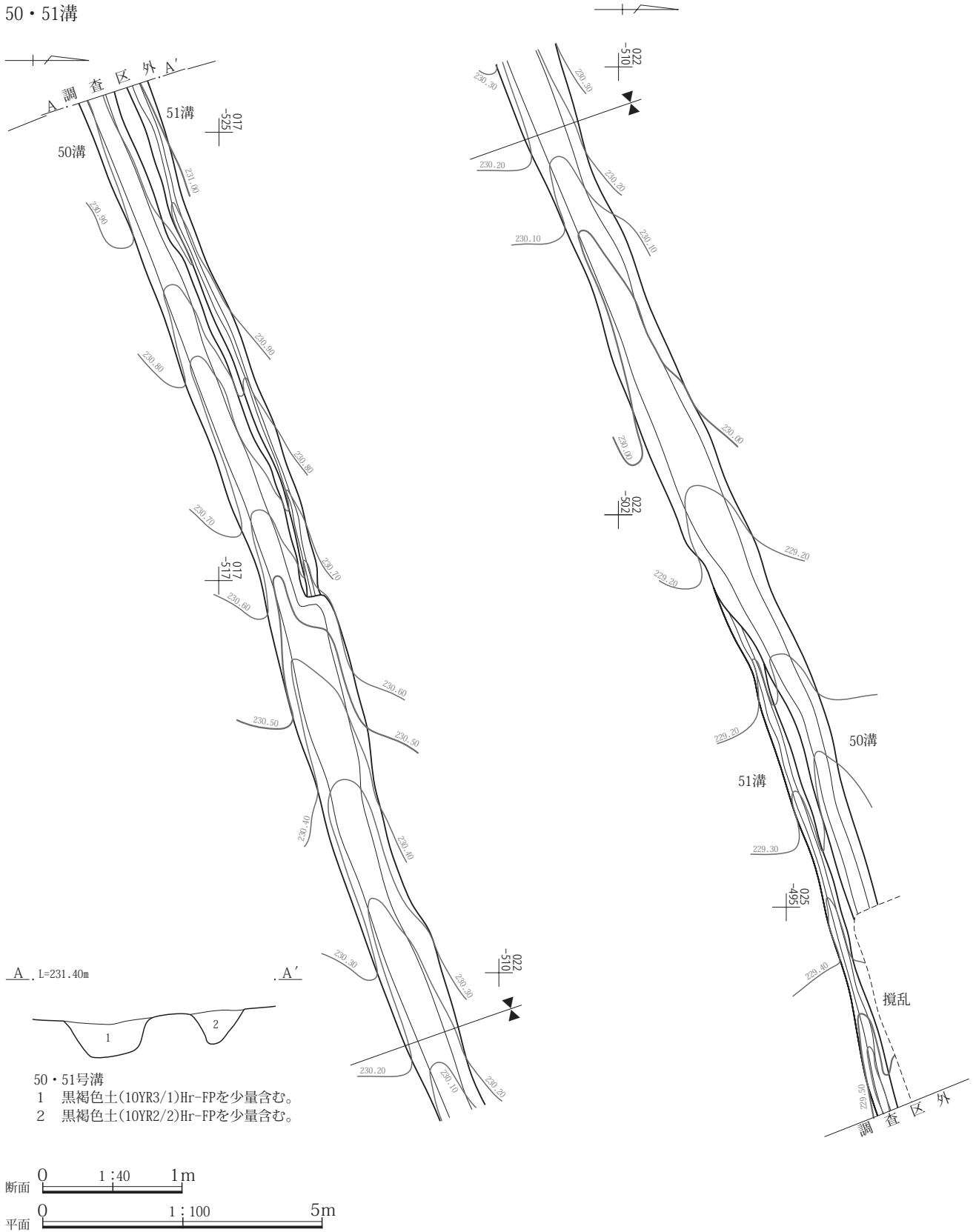
遺物 各溝・流路ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各溝・流路の帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。45号や46・47号の走向について、全体図3に掲示した現在の東西方向の土地区画境界と対比すると、その方位はほぼ同一となるが、位置的な関係には違いが認められる。例えば、地番「1879」～「A1883」の南側境界線との位置関係を比較した場合、45号では北側に約5～9m、46・47号では南側に8～10mずれている。また、「H. 9区」の項にて前述したように、9区の50・51号溝とは約40間幅の70～71mの距離を置いており、両者の相関性と共に土地区画との関連性が想定される。

J. 12・13区

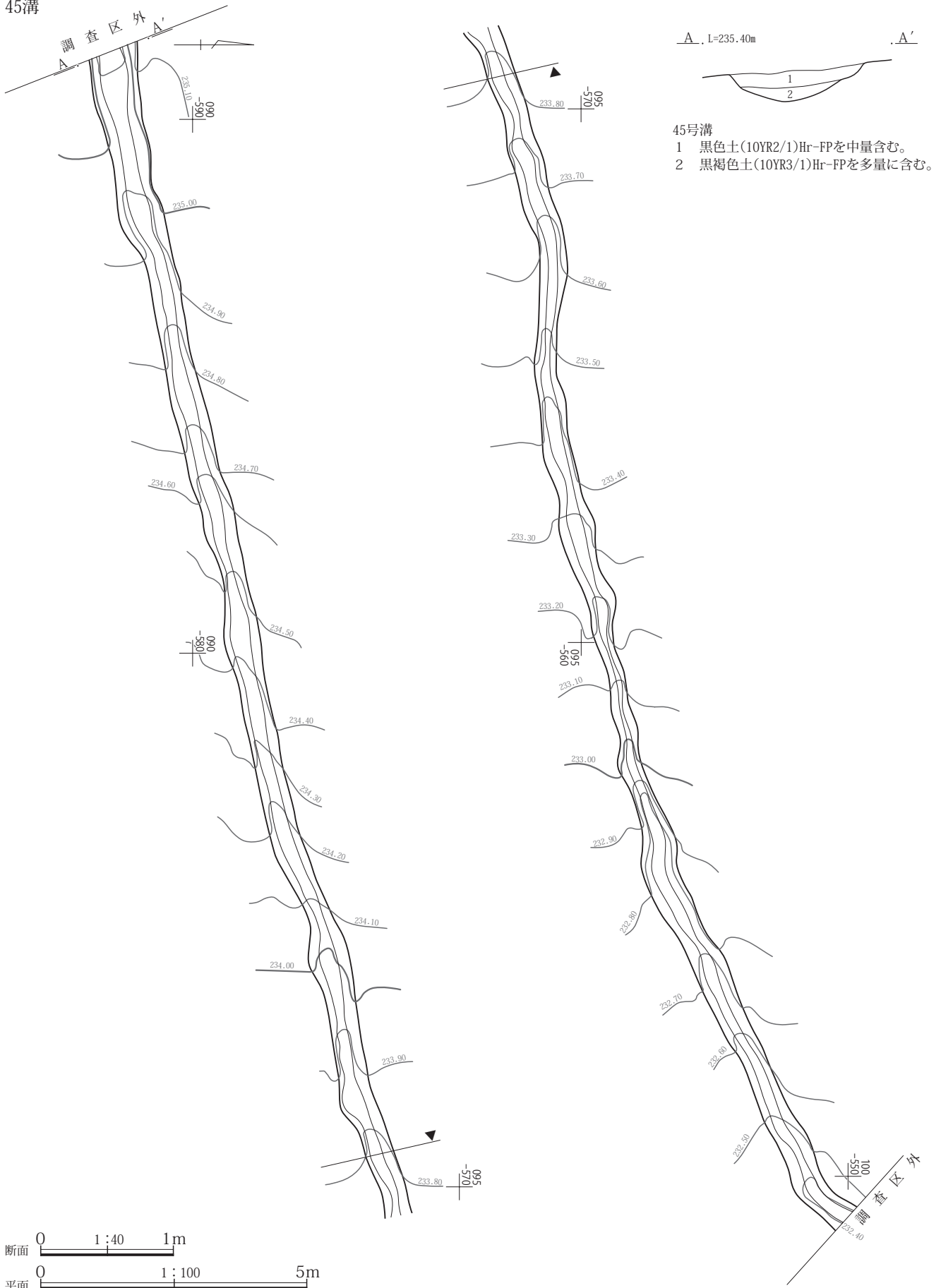
概要 12・13区をまたいで東西方向に走行するB類の40号と、C類の41A・41B号の3条を検出した。各溝は共にその走行が現道の下位に潜り込み、相互の関連性が不明確であるが、位置関係から見て一体的な溝の可能性も想定される。また、それらの蛇行・分岐状態や流水による砂礫層の堆積状況から見て、人為的な開削ではなく湧

50・51溝

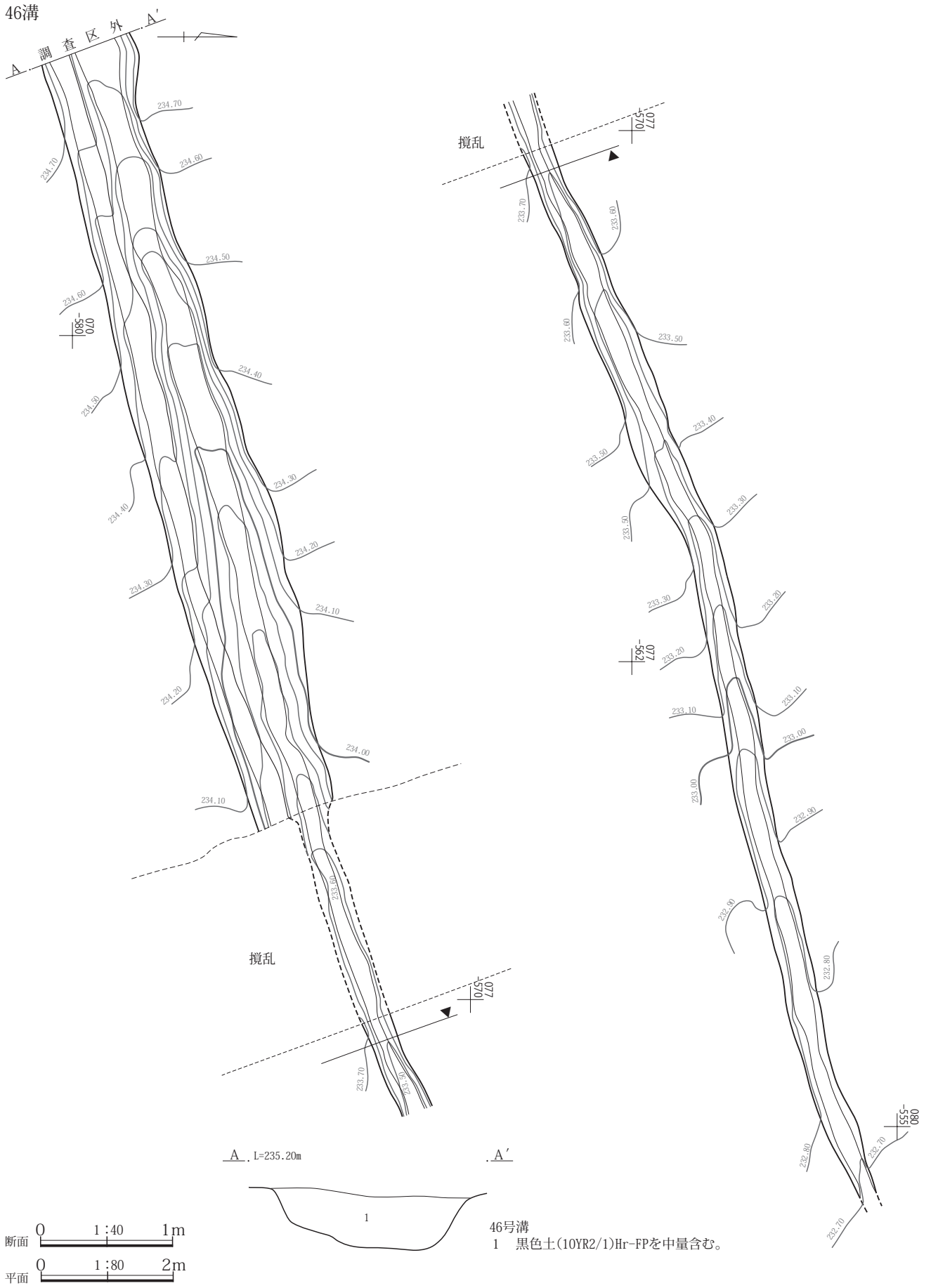


第41図 溝状遺構(11)〔9区50・51号〕

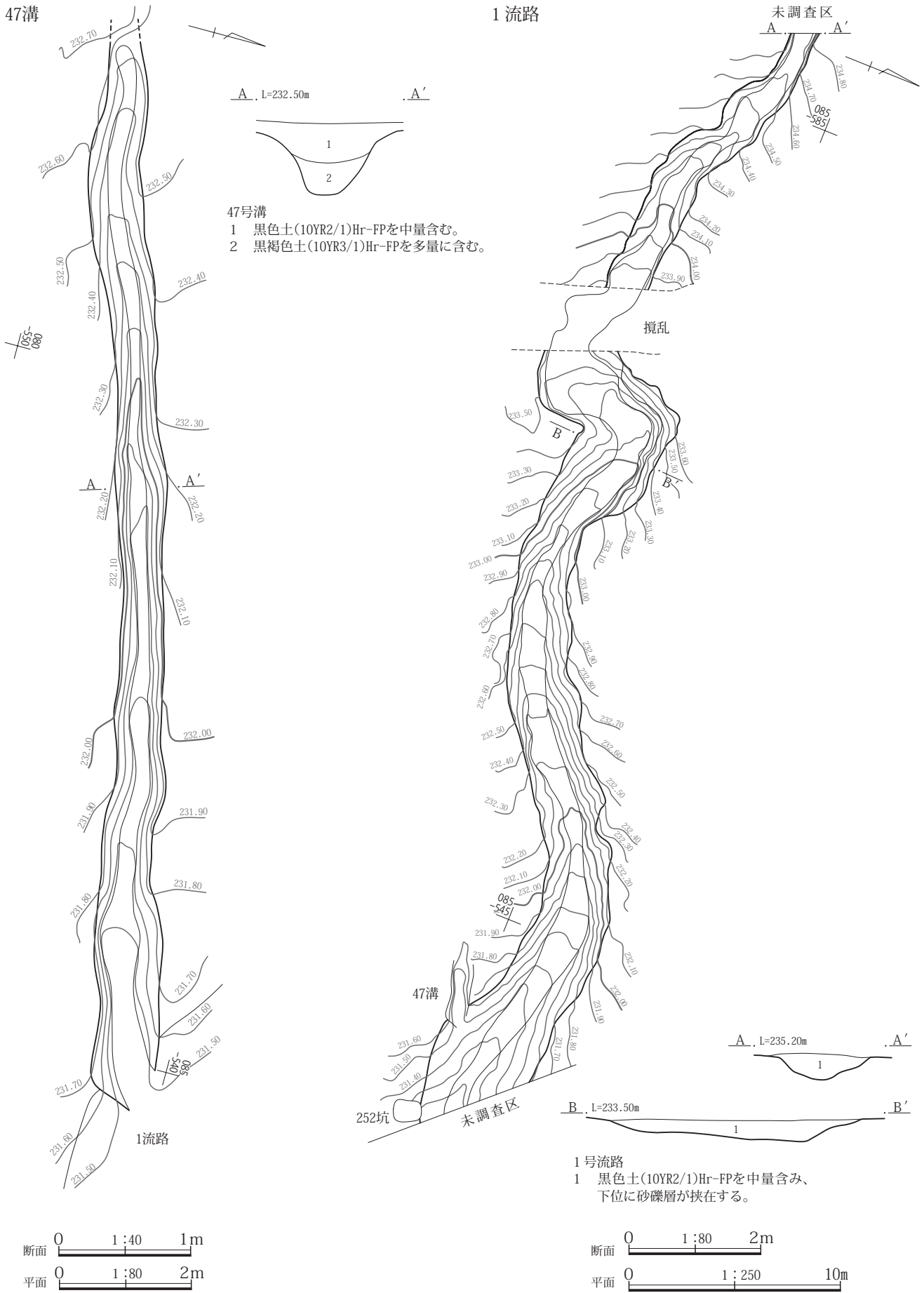
45溝



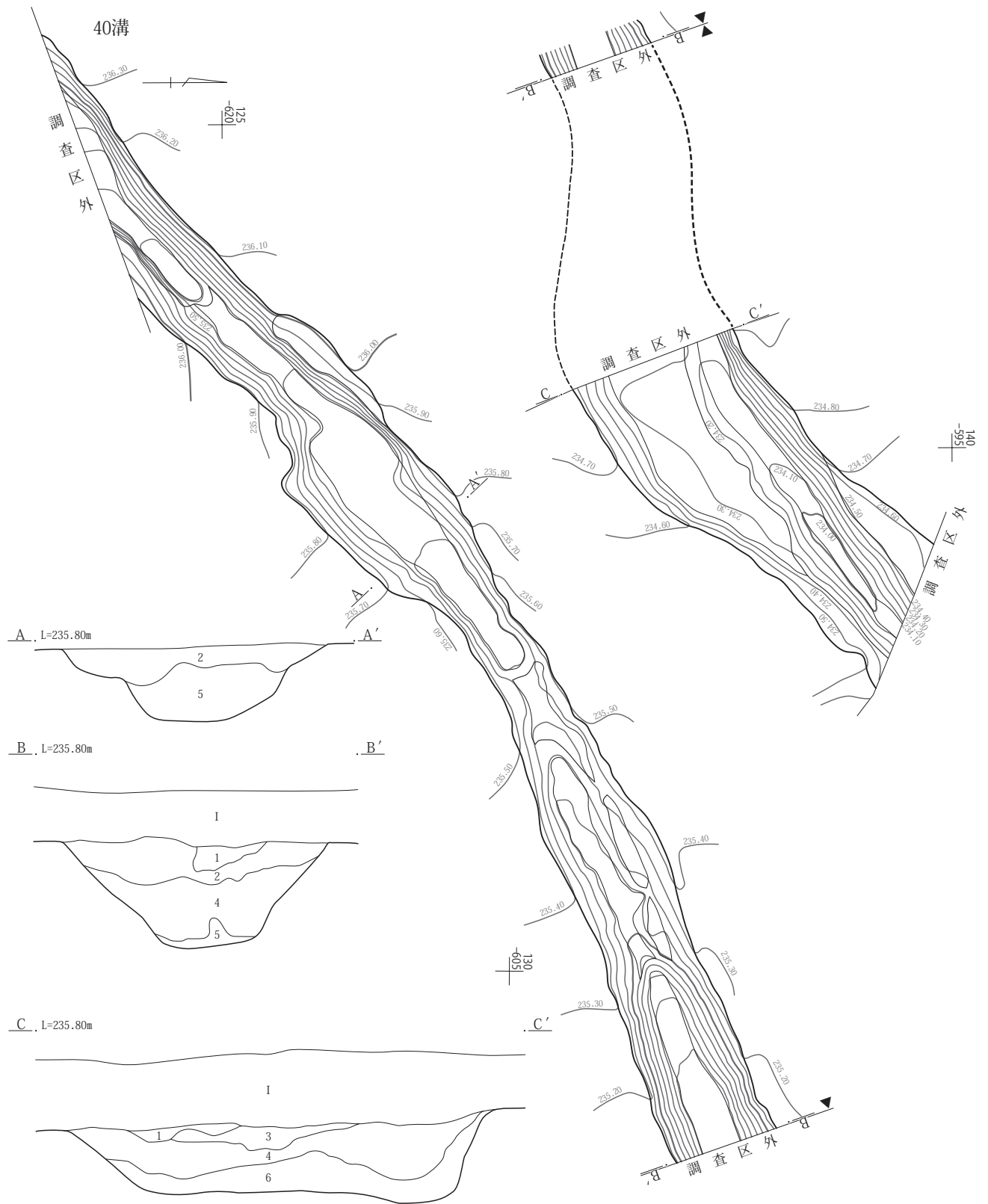
第42図 溝状遺構(12) [10区45号]



第43図 溝状遺構(13) [10区46号]

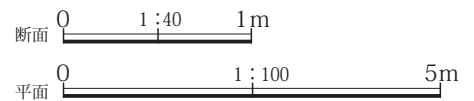


第44図 溝状遺構(14)〔10区47号、1号流路〕



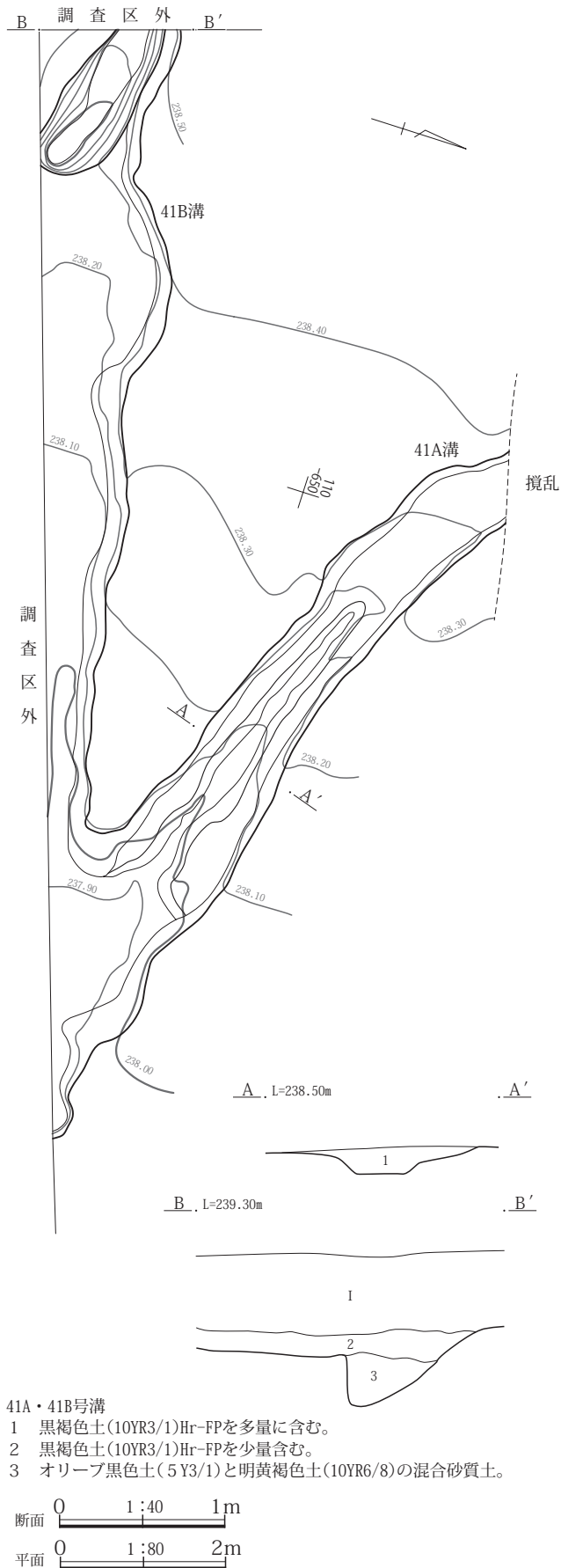
40号溝

- 1 オリーブ黒色土(5Y3/1)と明黄褐色土(10YR6/8)の混合砂質土。
- 2 黒褐色土(2.5YR3/1)Hr-FPを少量含む。
- 3 オリーブ黒色土(5Y3/1)と明黄褐色土(10YR6/8)の混合砂質土。Hr-FPを少量含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)Hr-FPを多量に含む。
- 5 オリーブ黒色土(5Y3/1)と明黄褐色土(10YR6/8)の混合砂質土。
- 6 Hr-FPを主体に黒褐色土(10YR3/1)を含む。



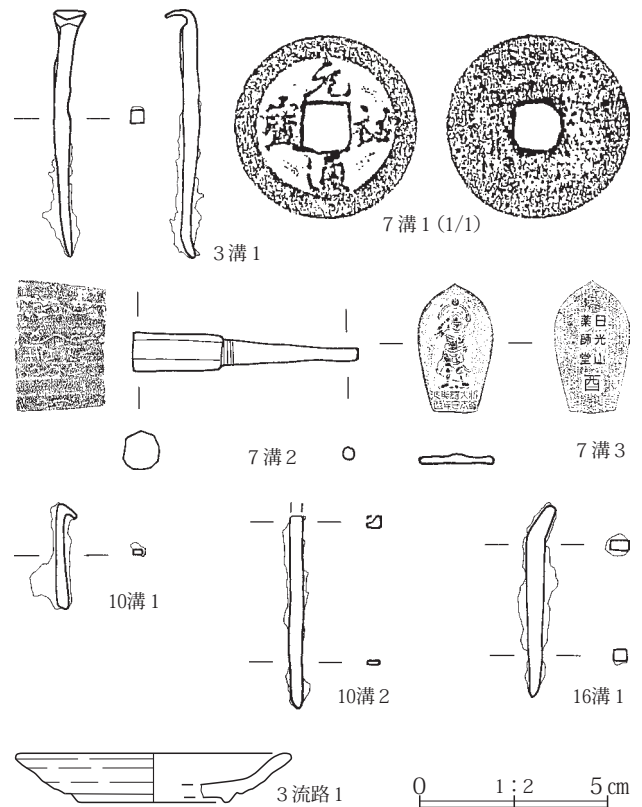
第45図 溝状遺構(15) [13区40号]

41A・41B溝



- 41A・41B号溝
 1 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを多量に含む。
 2 黒褐色土(10YR3/1)Hr-FPを少量含む。
 3 オリーブ黒色土(5Y3/1)と明黄褐色土(10YR6/8)の混合砂質土。

第46図 溝状遺構(16) [13区41A・B号]



第47図 溝状遺構出土遺物

水や雨水などの侵食に伴う自然流路の可能性もある。各溝の上位→下位方向は、基本的に地形の傾斜方向と同様に西→東へと下っている。尚、各溝からの伴出遺物は検出されなかった。

写真 PL17

重複 無し。

形状・規模 40号は断面形がV字状や薬研状を呈し、最大規模は上幅299cm×深さ77cmを測る。41A号は断面形が壁面勾配の緩やかなU字状を呈し、最大規模は上幅141cm×深さ11cmを測る。底面の平均勾配は、各溝ともに5～6%であり、ほぼ地形の勾配と一致している。

方位 検出延長の短い41A・41B号を除き、40号は蛇行して一定の方向性を持たない。

埋没土 各溝ともに、Hr-FPを多量に含む黒色土や黒褐色土を主体として埋没しているが、40号は6層埋没の中に流水による複数の砂礫層が挟在している。

遺物 各溝・流路ともに、伴出遺物は皆無である。

所見 各溝・流路の帰属時期については、伴出遺物が存在しないために確定できない。また、上述したように人為的な溝状遺構ではなく、自然流路の可能性が高い。

(5) 畝状遺構

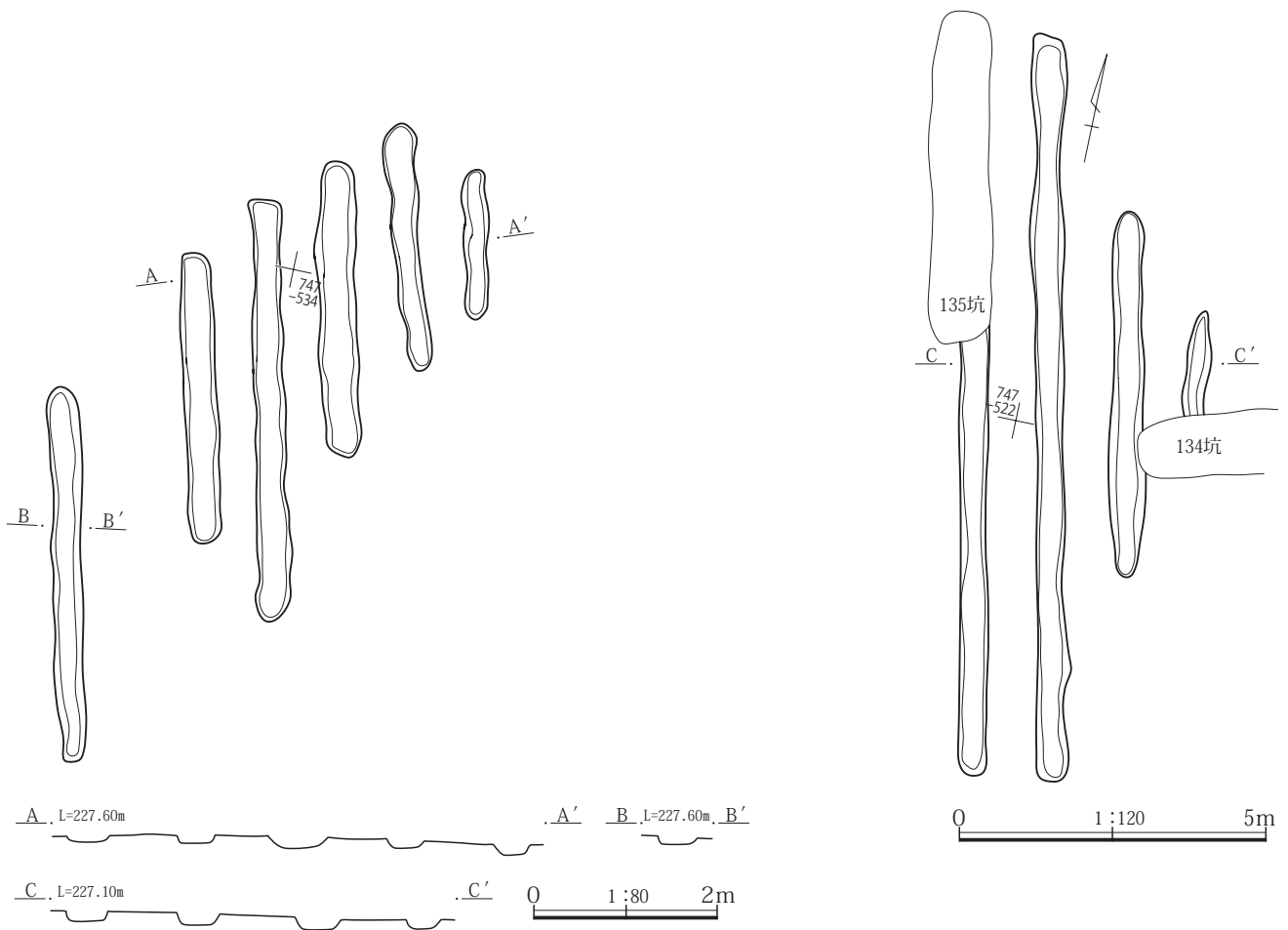
7区南半部のX=57734~57753、Y=-75519~-75548にかけた約200㎡の範囲から、Ⅱ層のHr-FPを掘り込む畝の畝間と想定される溝10条を検出した。約8mの空間部を置いて、西側の6条と東側の4条とに分かれるが、その走向や一定範囲での集中状態から見て、同一畝内の畝間と考えられる。当該畝の耕作土や畝本体は、現代の畝耕作に伴う上層からの攪乱を受けており、検出することはできなかった。尚、Ⅱ層下位にて検出した古墳時代の畝状遺構との通番処理により、「5号畝」の名称を付している。

各畝間の規模については、若干のばらつきが認められるが、延長2.4~12.2m、上幅40~60cm、深さ10~20cm

を測る。また、畝間相互の中心間隔は110~130cm前後であり、その走向方位はN13度Eを測る。

他遺構との関係で特筆されるのは、A類に分類した細長形状の土坑の存在である。東側の畝間では、A類土坑の134・135号土坑との重複が認められるが、当該畝を囲繞するかのように北側には131号土坑、西側には123・127・128号土坑、南側には129号土坑が位置している。こうした状況は、A類土坑が当該畝の耕作範囲の区画と何らかの関連性を有することを示しており、その機能・性格を考定する上で注目される。

帰属時期については、出土遺物が皆無なこともあり確定できないが、状況的には近世~近代の時間幅の中に収束する可能性が高い。



第48図 7区5号畝

(6) 遺構外の出土遺物

8区を中心とするI層内から、銭貨11点、鉄釘4点、用途不明鉄製品1点を検出し、観察表を434頁に掲載した。以下、各種別を単位にしてその概要を記載する。

銭貨(第49図1~11、P L 101)

いずれも8区から出土した寛永通寶であり、1~5は寛永13年(1636)を初鑄とする「古寛永」、6は寛文5年(1665)を初鑄とする「新寛永」、7~11は寛文8年(1668)を初鑄とする裏に「文」字のある新寛永の「文銭」である。当該区では、近世~近代にかけての墓坑25基が検出され

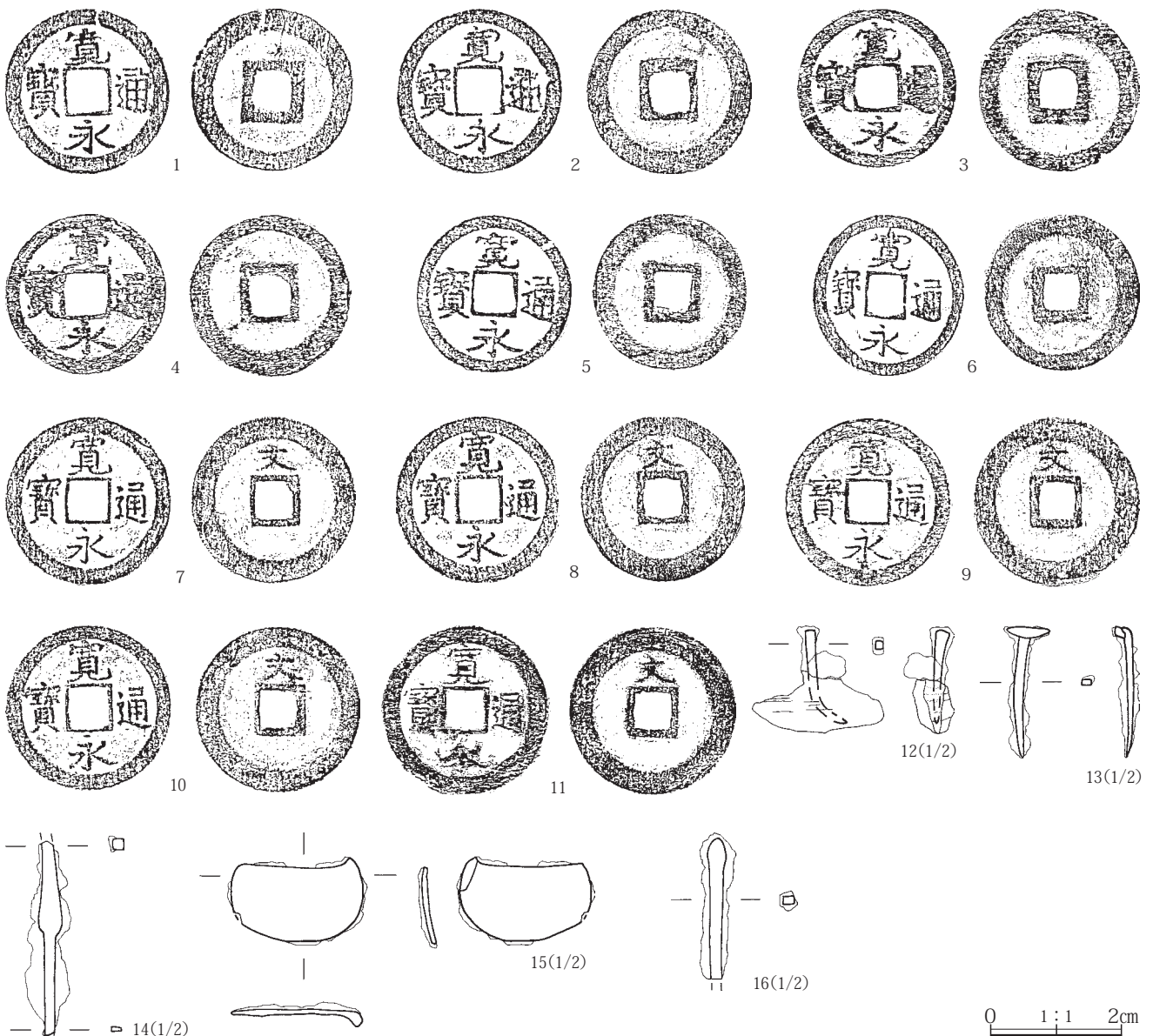
ており、各銭貨もこれら墓の副葬品に関連した遺物の可能性が高い。

鉄釘(第49図12~14・16)

12・13は8区、14は2区、16は9区から出土した。いずれも断面形が正方形の角釘であり、12・13には針葉樹板目材の木片が癒着していることから、棺桶等に使用されていた可能性もある。

鉄製品(第49図15)

蒲鉾形の板状鉄製品であり、両端に耳状の突起を有するが、片方は欠損している。これとの類似品が10区の245号土坑から出土している(第29図1)。



第49図 遺構外出土遺物

3. 弥生時代の遺構と遺物

1項の概要で触れたように、層位的に弥生時代の文化面を確認できる訳ではなく、当時代の遺構検出は上位の古墳時代遺構の調査過程で重複関係を有するものや、V層下部からVII層上面にかけての遺物包含層の掘り下げ作業中にそのプランを確認したものが主体を占める。

遺構の種類でみると、竪穴住居9軒、方形周溝遺構1基、壺棺墓1基、土坑20基、ピット状遺構86基、集石遺構3基、溝状遺構1条、焼土遺構1基、土器集中地点3箇所を検出した。この他に、V・VI層を中心にして遺物包含層が存在し、114頁の第10表に掲示したように中期と後期の土器片がほぼ拮抗して3万点以上を数える出土状況を呈している。また、僅少ではあるが中期初頭の土器片も64点認められる点で注目される。尚、各遺跡の分布については、別添の全体図5～7を参照されたい。

(1) 竪穴住居

1・2・4・7区から9軒の竪穴住居が検出されているが、古墳時代住居との重複やその一部が調査対象区域外に存在するケースもあり、全体形状や規模が明瞭に把握できるのは4軒にとどまる。伴出土器の型式を単位にした時期別内訳でみると、第6表に示したようにいずれも後期の樽式期に帰属するが、詳細に区分すれば同式1期1軒、2期3軒、3期5軒となる。総体的には、2期に集落規模の拡大が始まり、3期には更にその規模が拡大している状況を看取することができる。

竪穴住居の形態は、1・2期にやや不整形な隅丸長方形や隅丸方形が認められるが、3期では整然とした掘り込みを持つ長形状を呈する。住居の主軸方向と地形との関係は、長軸が地形の等高線に直行するように構築さ

れる傾向にあり、同方向の下位側に出入口部が設置されることとの相関性が窺える。

規模については、VI層あるいはVII層内での確認長となるが、規模不明な1軒を除いて長辺10～11m未満で短辺6～7m未満の大形住居3軒と、長辺5～8m未満で短辺3～5m未満の中形住居4軒、長・短辺3～4m未満の小形住居1軒の3タイプが認められる。埋没土層断面で計測した最大掘削深度は、基本的に住居外形の規模にかかわらず65～80cmを測るものが主体を占め、当時代における竪穴住居の高深度掘削傾向を示している。

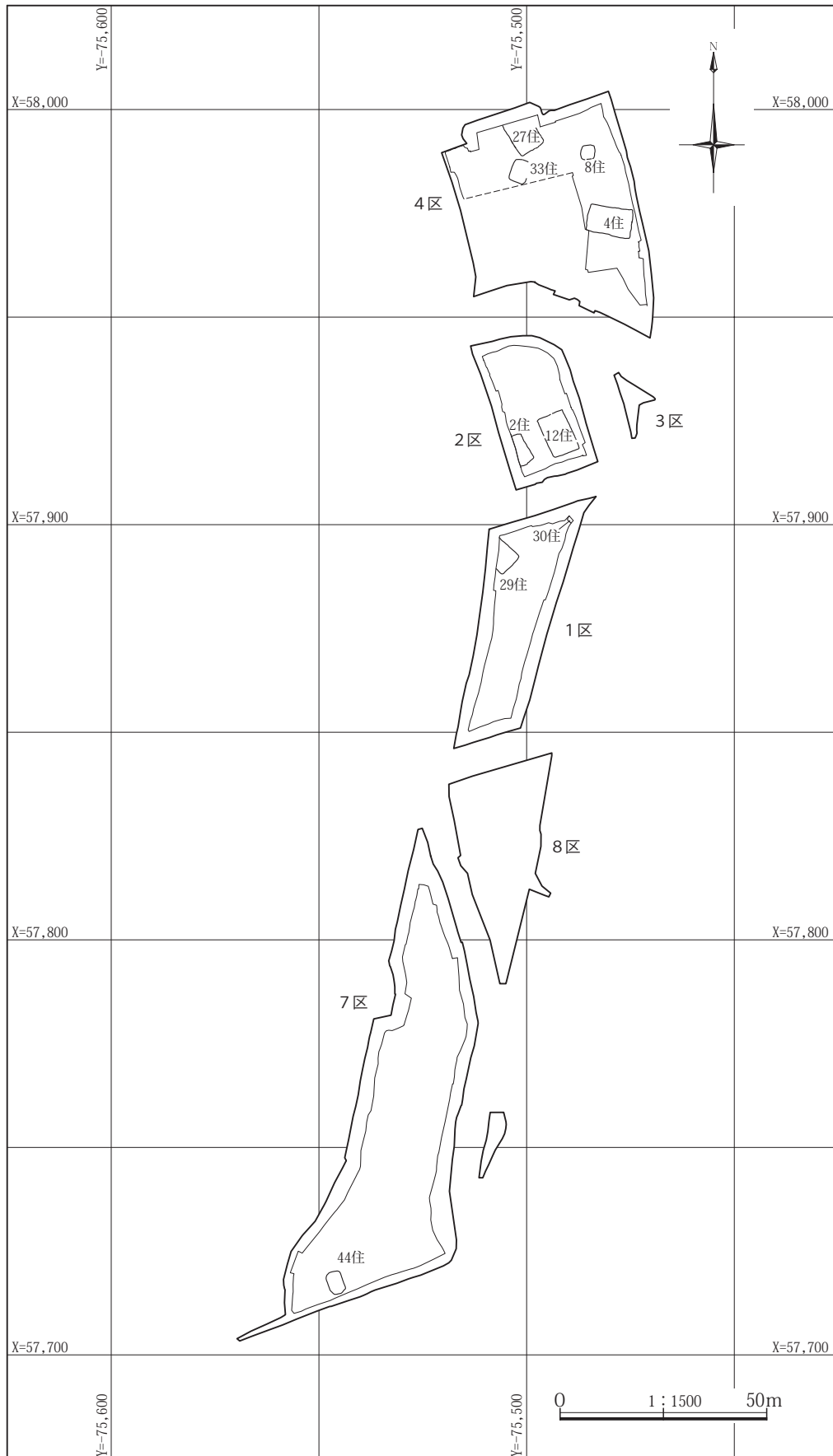
柱穴の配列については、先の大形タイプが住居の長軸方向に並行して3本×2列の合計6本の主柱穴配置を基本形としている。また、中・小形タイプは住居外形の対角線上に4本を配置している。柱穴の掘り方規模は、住居外形の規模によりかなりの差異があり、平均値で比較すれば、小形タイプは長径23cm×短径21cm×深さ42cm、中形タイプは長径34cm×短径23cm×深さ39cm、大形タイプは長径52cm×短径42cm×深さ47cmとなる。基本的に、外形規模に応じて柱穴規模も大きくなる傾向にある。尚、柱穴内の柱痕検出については、皆無と言っても良い状況であるが、2区12号住居ではP2～P6の5本の主柱穴に、断面長方形の角材または板材と推定される柱痕が確認されている。その大きさは、長辺26～47cm×短辺6～13cm×長さ40～66cmを測る。

炉は床面を長径60～80cm、深さ6～10cmの楕円形状に浅く掘り窪めただけの掘込炉であり、住居規模によりその設置数は異なる。小・中形タイプは床面中央部から奥壁側にやや偏在して1基を設置するのに対して、大形タイプは奥壁側中央部に1基を配置する点は小・中形タイプと共通するものの、他の2基を反対の入口側に偏在させつつ左右の壁際に振り分けて設置している。いわば、奥壁側の炉を頂点にして三角形に配置するという特徴

第6表 竪穴住居規模一覧(弥生時代)

区	番号	位置		主軸方位	形状	規模(cm)				面積 (㎡)	時期
		座標X	座標Y			長径	短径	最小深	最大深		
1	29	57895	-75507	N47度W	長方形	(670)	610	45	70	不明	樽式3期
1	30	57900	-75490	不明	長方形?	不明	不明	60	65	不明	樽式3期
2	2	57920	-75500	N35度W	長方形	746	(335)	70	73	不明	樽式3期
2	12	57925	-75490	N23度W	長方形	1003	675	69	78	67.66	樽式3期
4	4	57977	-75480	N80度W	長方形	1029	673	63	80	70.10	樽式3期
4	8	57992	-75485	N3度E	隅丸方形	343	330	70	73	10.43	樽式2期
4	27	57994	-75500	N32度W	長方形	(667)	439	55	75	不明	樽式2期
4	33	57985	-75500	N20度E	隅丸長方形	557	415	36	49	(21.78)	樽式2期
7	44	57720	-75548	N20度W	隅丸長方形	555	368	44	74	18.42	樽式1期

凡例：()内は残存部位での数値または推定値を表す。



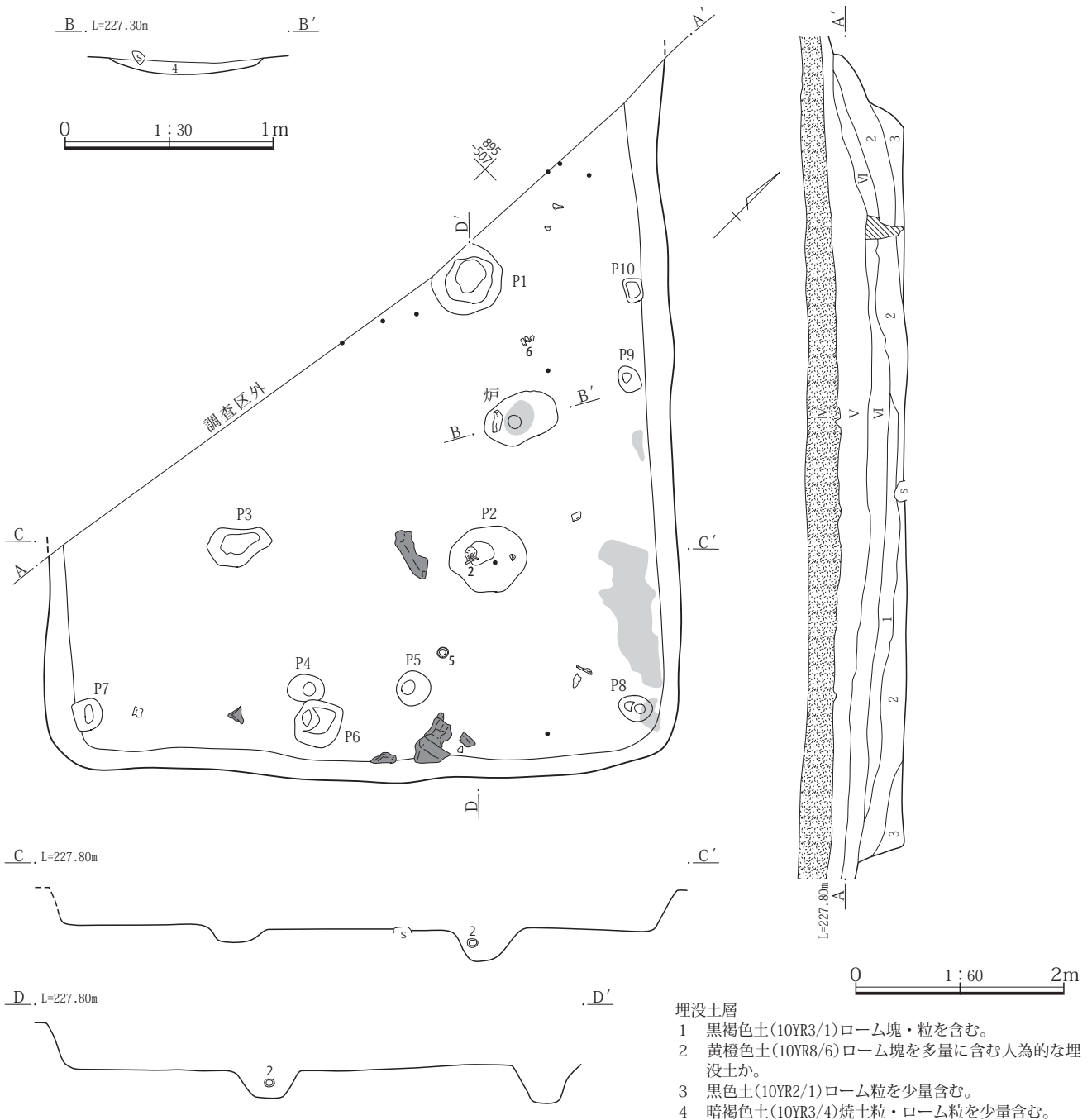
第50図 弥生時代の竪穴住居分布図

を持っている。

出入口部は、先述したように長軸方向の下位側に設置される点で、各住居とも共通している。その様態は、支柱穴に類似した楕円形や円形状の深度約50~60cmの小ピット2基が並列配置される。小・中形タイプではそのピット間隔が50cm前後、大形タイプは約100cmであり、かなりの規格性を認めることができる。

各竪穴住居の分布動向は、1期が7区の南端に、2期

は4区を中心にして、3期が1区北側から2区にかけて各々分布しており、調査面積が狭小であるために確定的ではないが、時期によって主分布域が異なる可能性が高い。特に、時期が下るに連れて2・4区に集中する傾向を窺うことができるが、当該区は5世紀後半の古墳時代集落が形成される地点でもあり、両時代の集落が類似した地点に立地する背景について注意を要する。以下、各調査区を単位にして、各竪穴住居の内容を記述する。



第51図 1区29号住居

●1区29号住居

位置 X=57895 Y=-75507

方位 N47度W 面積 不明

写真 PL18・102 観察表 435頁

重複 無し。

形状 西半部が調査区外に位置するため確定的ではないが、斜面地の等高線にほぼ直行して南北に長軸を持つ長方形を呈すると想定される。各辺は、ほぼ直線的に走向する。

規模 長辺長は不明だが、短辺は6.10mである。埋没土層断面での掘り込み深度は、45~70cmを測る。周壁面は、約70度の勾配で掘り込まれている。

床面 埋没土層内のVI層の堆積状況から判断すれば、VI層下位~X層上位にかけて掘り込んで、床面を構築すると想定される。柱穴に囲繞された中央部にはかなりの凹凸面があり、炉の周辺部を含めて叩き床状の硬化面が認められる。尚、掘り方等は確認できなかった。

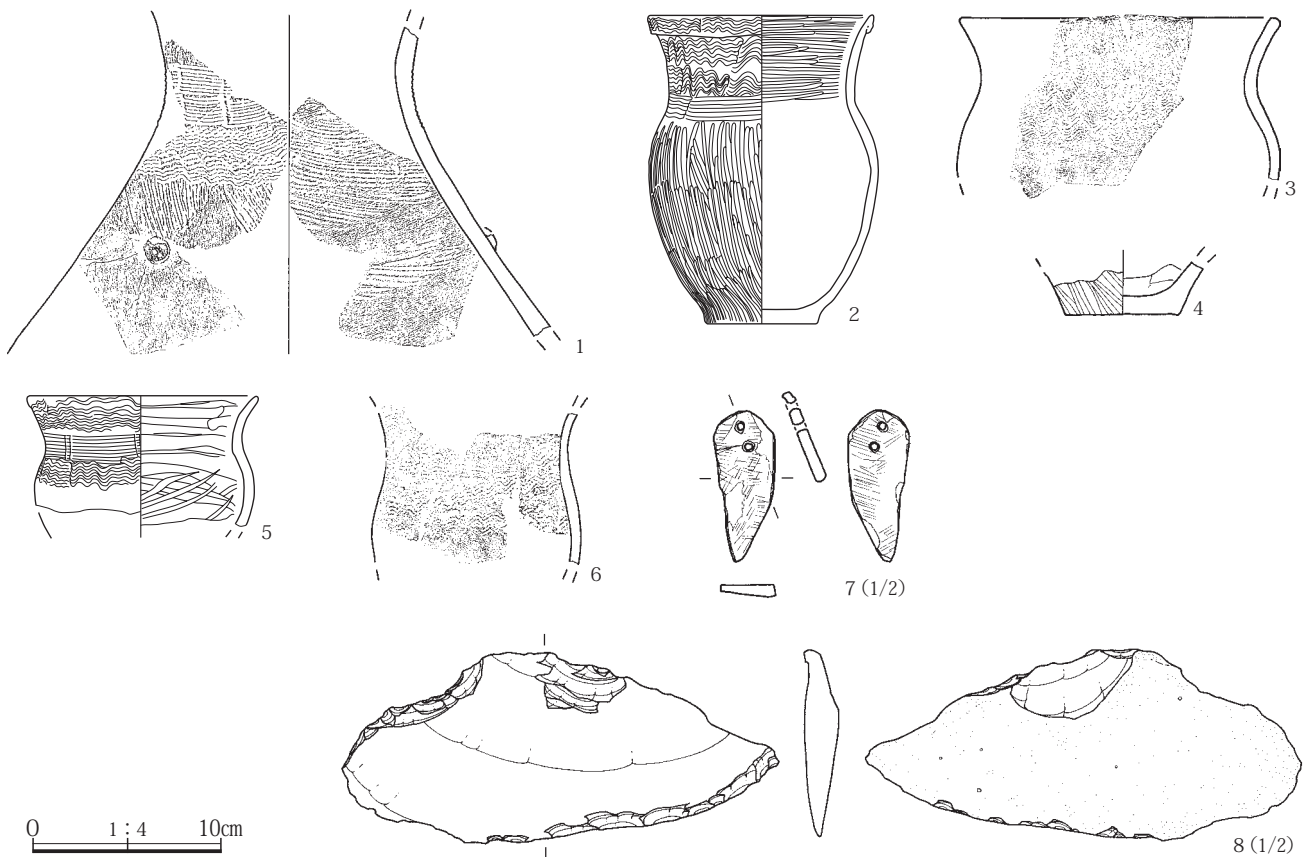
柱穴 支柱に関連したP1~P3の3本の柱穴と、出入口部関連のP4~P6の3本および、補助的な柱穴と想定される周壁際のP7~P10の4本を含めて、合計10本が検出さ

れた。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:69cm×37cm、P2:74cm×34cm、P3:45cm×14cm、P4:35cm×24cm、P5:34cm×27cm、P6:52cm×19cm、P7:29cm×30cm、P8:32cm×37cm、P9:27cm×34cm、P10:23cm×8cmである。また、支柱穴の芯々間の距離は、P1~P2:2.65m、P2~P3:2.40mを測る。いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。P4~P6の柱穴により、出入口部は斜面下方の南側に付設されると考えられる。

炉 東側周壁に近接してその85cm内側に長径73cm×短径46cm×深さ9cmの浅い掘込炉をもつ。西壁付近に長径20cm×短径10cmの垂角礫が横転しており、被熱痕も認められることから、原位置ではないものの炉石として配置されていた可能性がある。底面には被熱による赤化と焼土形成が認められる。また、南東隅の近縁に焼土痕が散在する。

周溝 精査にもかかわらず、検出されなかった。

埋没土 埋没土層の中位までは、V層およびVI層上半部が自然堆積している。その下位に堆積する最大層厚35cmの1~3層は、量的な多寡はあるものの、いずれも相当量のロームブロックを含んでおり、人為的な埋填が想定



第52図 1区29号住居出土遺物

される。

遺物 柱穴P2の開口部付近から完形の甕(Na.2)と、床面にほぼ密着して甕(Na.5)や台付甕(Na.6)が出土した。他の土器および石器・石製品は、いずれも埋没土中からの出土であり、同様の土器片が106点存在する。

所見 当住居の帰属時期については、平坦な複合口縁を持ち、括れ部の連簾文が弛緩した櫛描横線文や胴部に波状文を施文しない、床面密着出土のNo.2の土器様相から、弥生時代後期の樽式3期に比定される。

● 1区30号住居

位置 X=57900 Y=-75490

方位 不明 **面積** 不明

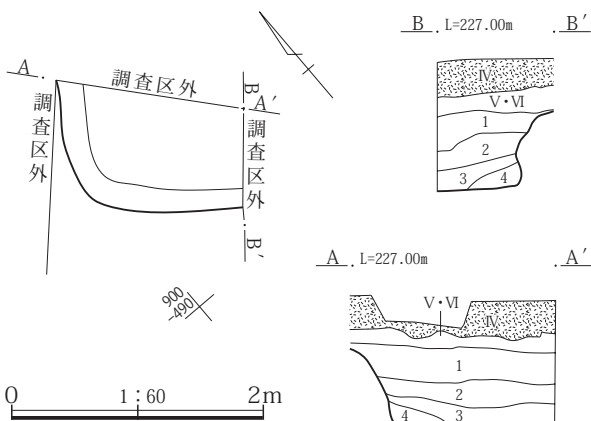
写真 P L 18・102 **観察表** 435頁

重複 無し。

形状 住居の大半が調査区外に位置するために確定的ではないが、29号住居と同様に斜面地の等高線にほぼ直行して南北に長軸を持つ長形状と推定される。

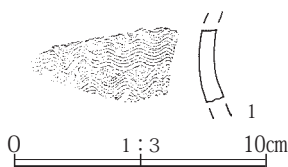
規模 長・短辺の長さは不明だが、埋没土層断面で計測した掘り込み深度は、60~65cmを測る。周壁面は、69度の勾配で掘り込まれている。

床面 埋没土の堆積状況から見て、VI層下位~X層上位にかけて掘り込み、床面を構築すると想定される。



埋没土層

- 1 黒褐色土(10YR3/1)橙色土粒を全体に含む。粘質土。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR5/3)ローム塊・粒を含む。
- 3 褐色土(10YR4/4)ローム塊・粒を多量に含む。
- 4 褐色土(10YR4/5)ローム粒を僅かに含む。粘質土。



第53図 1区30号住居と出土遺物

埋没土 埋没土層の上位に、V層およびVI層上位部が自然堆積する。主体を占める層厚60cmの1~3層は、いずれも相当量のロームブロックを含んでいる。

遺物 No.1の土器を含め、埋没土中から7点の樽式土器の破片が出土したのみである。

その他 周溝と炉については、調査範囲が狭小なこともあり、検出されなかった。

所見 当住居の帰属時期については、土器の小破片のみで確定的ではないが、弥生時代後期の樽式3期に比定される可能性が高い。

● 2区2号住居

位置 X=57920 Y=-75500

方位 N35度W **面積** 不明

写真 P L 19・102 **観察表** 435頁

重複 無し。

形状 西側約1/3が調査区外に位置するためにやや不明瞭であるが、斜面地の等高線にほぼ平行して南北に長軸を持つ長形状を呈する。長辺はほぼ直線的に走向するが、出入口部の短辺は若干外側に迫り出している。

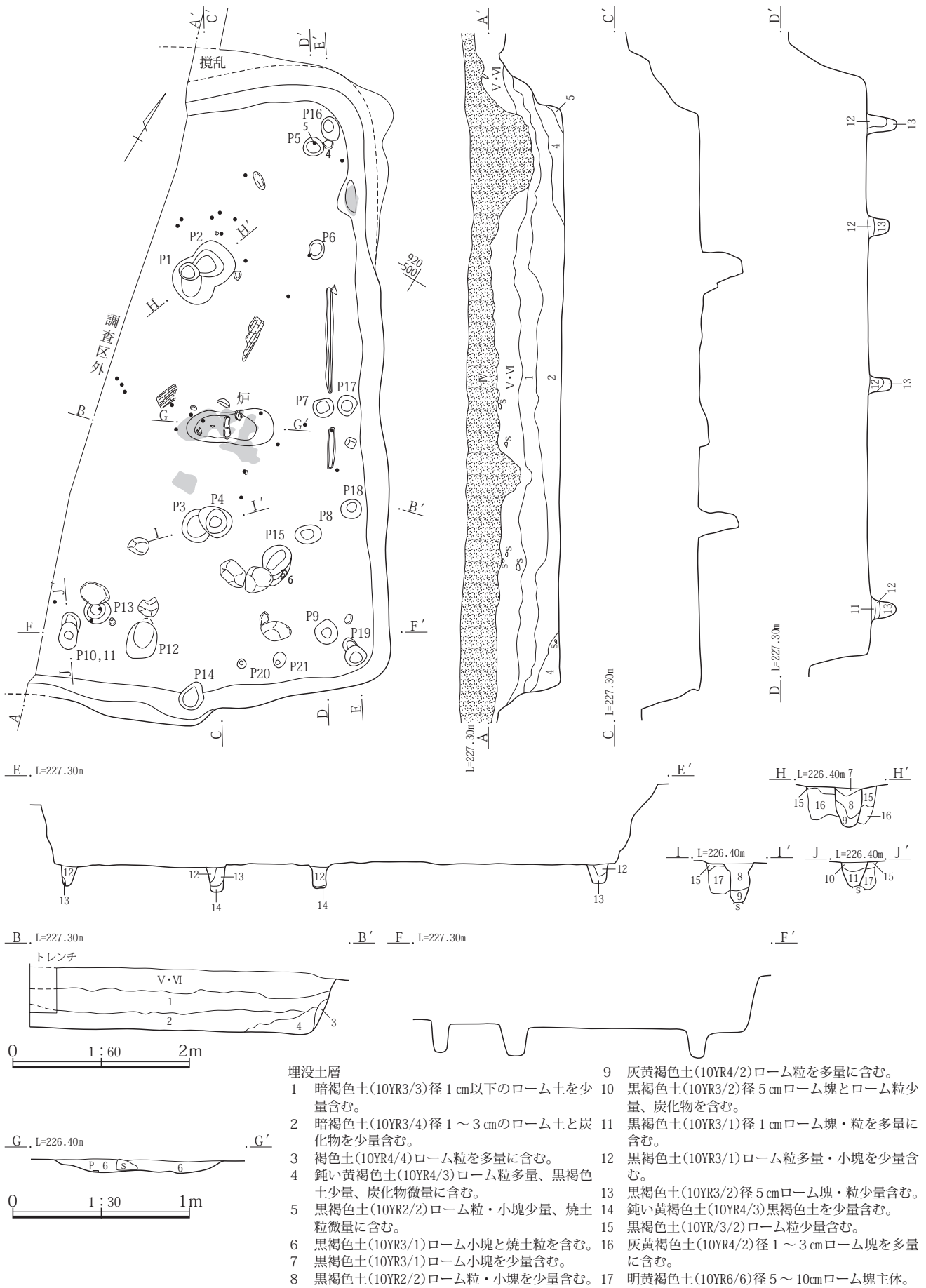
規模 短辺長は不明だが、長辺は7.46mである。埋没土層断面で計測した掘り込み深度は、70~73cmを測る。周壁面は、約65~70度の勾配で掘り込まれている。

床面 埋没土層上位のVI層の堆積状況から判断すれば、VI層下位を掘り込み面として、以下X層上位までを最大93cm掘り下げて床面を構築すると考えられる。炉の周辺部を中心にして、若干の凹凸面と叩き床状の硬化面が認められる。また、東壁の30cm内側に延長2m、幅10cm×深さ5cmの断続的な小溝が存在するが、規模的には周溝ではなく、床面上の敷物に関連した根太材の掘り方の可能性が高い。

柱穴 主柱に関連したP1~P4の4本の柱穴と、出入口部関連のP10~P13の4本および、補助的な柱穴と想定される周壁際のP5~P9・P14~P21の13本を含めて、合計21本が検出された。4本の主柱穴はP2がP1を、P4がP3を切って掘り込まれており、少なくとも1回の建替えが想定される。各主柱穴の芯々

柱穴一覧(単位:cm)

No	直径	深さ
1	53	40
2	32	45
3	37	36
4	40	46
5	24	31
6	22	24
7	23	25
8	30	17
9	28	27
10	31	31
11	(25)	31
12	44	34
13	30	36
14	33	9
15	38	34
16	36	23
17	23	27
18	23	31
19	25	24
20	11	13
21	17	15



第54図 2区2号住居

間の距離は、P1-P3とP2-P4共に2.90mを測る。尚、各柱穴の規模は一覧表に別記した。P10~P13の柱穴により、出入口部は斜面下方の南側に付設されると考えられる。いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。

炉 床面中央部からやや東側周壁に近接して、新旧の各1基が相互に重複して検出された。深さ9cmの浅い掘込炉であり、埋没土の状況からは新旧関係は把握できないが、中央部に存在する被熱折損した長径25cm×短径10cmの垂角礫の位置や、主柱穴が西側→東側へと建替えられている点を考慮すれば、その東半部側が新段階の炉と判断される。規模は、長径55cm×短径40cmを測る。埋没土中には焼土の塊・粒子が、底面には被熱による赤化と焼土形成が認められる。また、炉の南側に近接して焼土痕が認められるが、炭化材等も北側から出土しており、家屋焼失時の被熱痕跡の可能性もある。

周溝 精査にもかかわらず検出されなかった。

埋没土 埋没土層の中位までV層およびVI層上半部が自然堆積し、その下位に堆積する最大層厚55cmの1・2層は、少量のロームブロックを含む。また2層下位には炭化物も認められ、火災の痕跡を留めている。

遺物 第55図に掲載した6点を含め、やや粗雑な櫛描波状文や連簾文を施す448点の樽式土器が埋没土中より出土している。また、炉の北側に近接して炭化材2点が、南側の出入口部近縁に長径20~35cmの河床礫や垂角礫6

点が出土している。

所見 当住居の帰属時期については、平坦な複合口縁とやや粗雑な櫛描波状文を頸部全体に施すNo.1や櫛描連簾文が弛緩して横線文化したNo.3の土器様相から、弥生時代後期の樽式3期に比定される。

● 2区12号住居

位置 X=57925 Y=-75490

方位 N23度W **面積** 67.66㎡

写真 P L 20・21・102 **観察表** 435頁

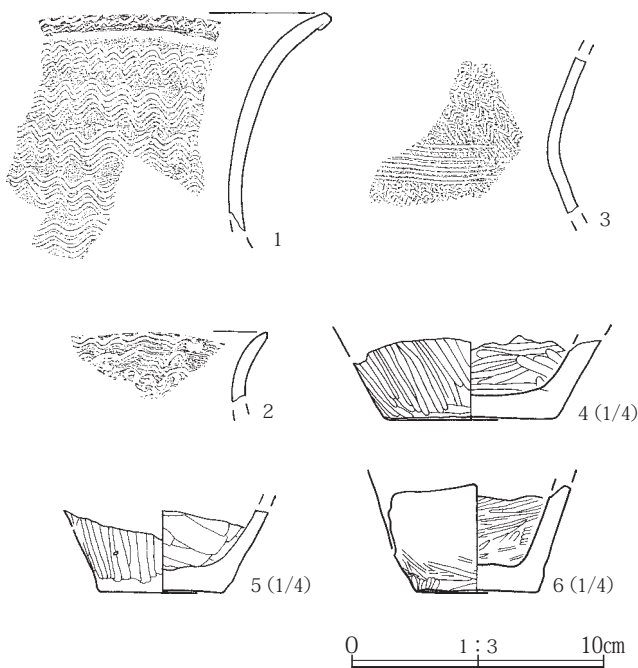
重複 ほぼ当住居の上面全体を覆うように、古墳時代後期の2区1号住居が構築されている。また、北・南壁側を同時代の2区28・35号土坑に切られている。

形状 斜面地の等高線にほぼ平行して、南北に長軸を持つ長方形状を呈する。各辺ともに、整然とした直線状に掘り込まれている。

規模 長辺10.03m×短辺6.75mの大形住居であり、掘り込み深度は69~78cmを測る。周壁面は、約80~85度の垂直に近い勾配で掘り込まれている。

床面 VI層内を掘り込み面として、X層上位まで最大78cm掘り込んで床面を構築する。3基の炉の周辺部を中心にして若干窪地状に低くなっており、叩き床状の硬化面が認められるが、全体的には凹凸の少ない平坦な床面である。掘り方は存在しない。

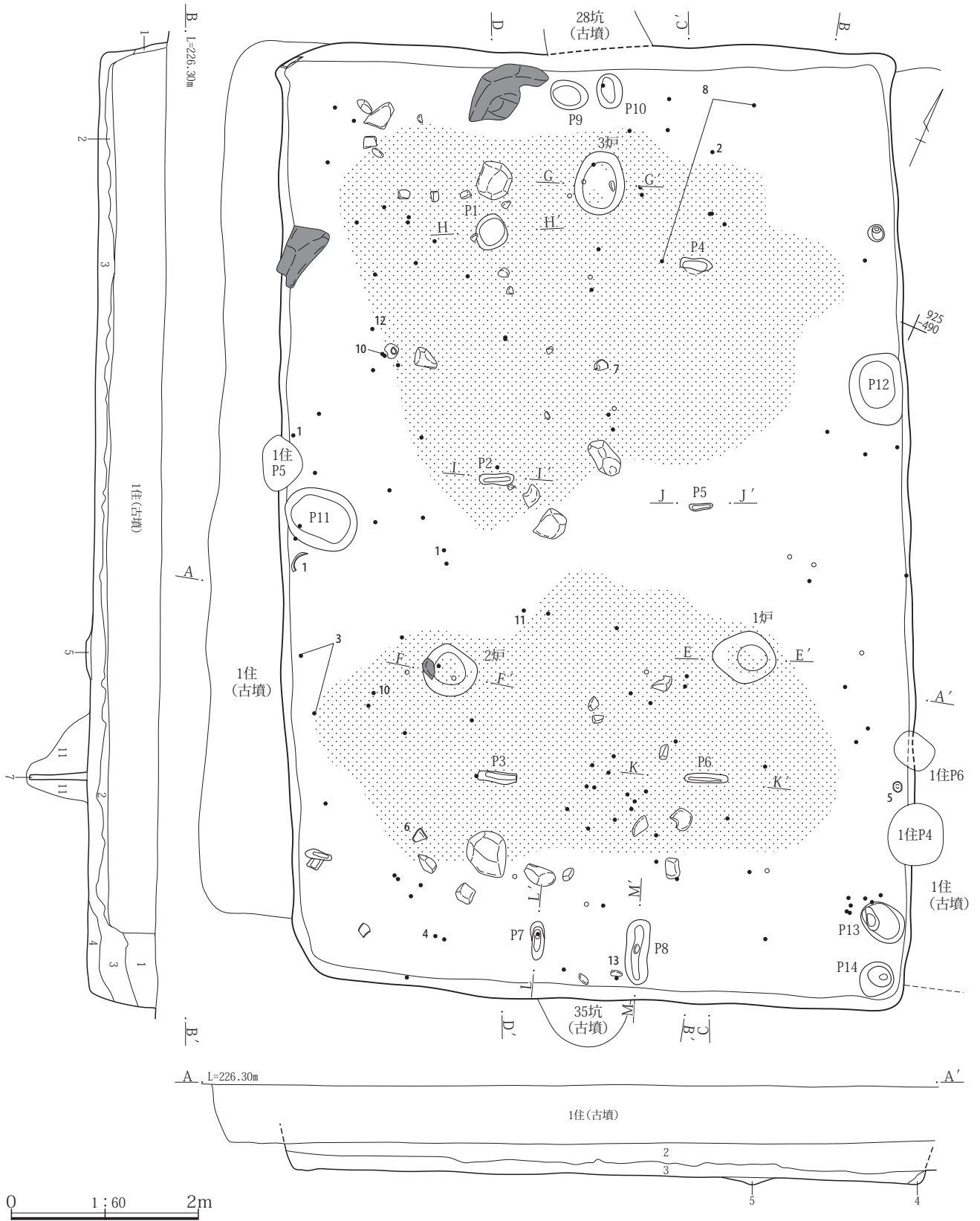
柱穴 主柱に関連したP1~P6の6本の柱穴と、出入口部関連のP7~P8の2本および、補助的な柱穴と想定される周壁際のP9~P14の6本を含めて、合計14本が検出された。各主柱穴内には柱痕が検出されているが、P1は直径18cm×長さ20cmの丸太状であり、P2~P6は角材状を呈する。後者の大きさ(縦×横×長さ)は、P2:17cm×10cm×13cm、P3:25cm×10cm×20cm、P4:26cm×10cm×52cm、P5:11cm×6cm×40cm、P6:23cm×10cm×63cmとなる。各主柱穴の掘り方規模等については、第57・58図にその平・断面図を、またその計測値については一覧表により別記した。各主柱穴の芯々間の距離は、P1~P2:2.70m、P2~P3:3.15m、P4~P5:2.60m、P5~P6:2.95m、P1~P4:2.25m、P3~P6:2.20mを測る。南側周壁に近接



第55図 2区2号住居出土遺物

柱穴一覧(単位:cm)

No.	直径	深さ
1	73	47
2	40	24
3	67	35
4	47	51
5	31	39
6	105	66
7	41	28
8	69	41
9	41	8
10	36	22
11	81	19
12	77	25
13	50	29
14	39	26



第56図 2区12号住居(1)

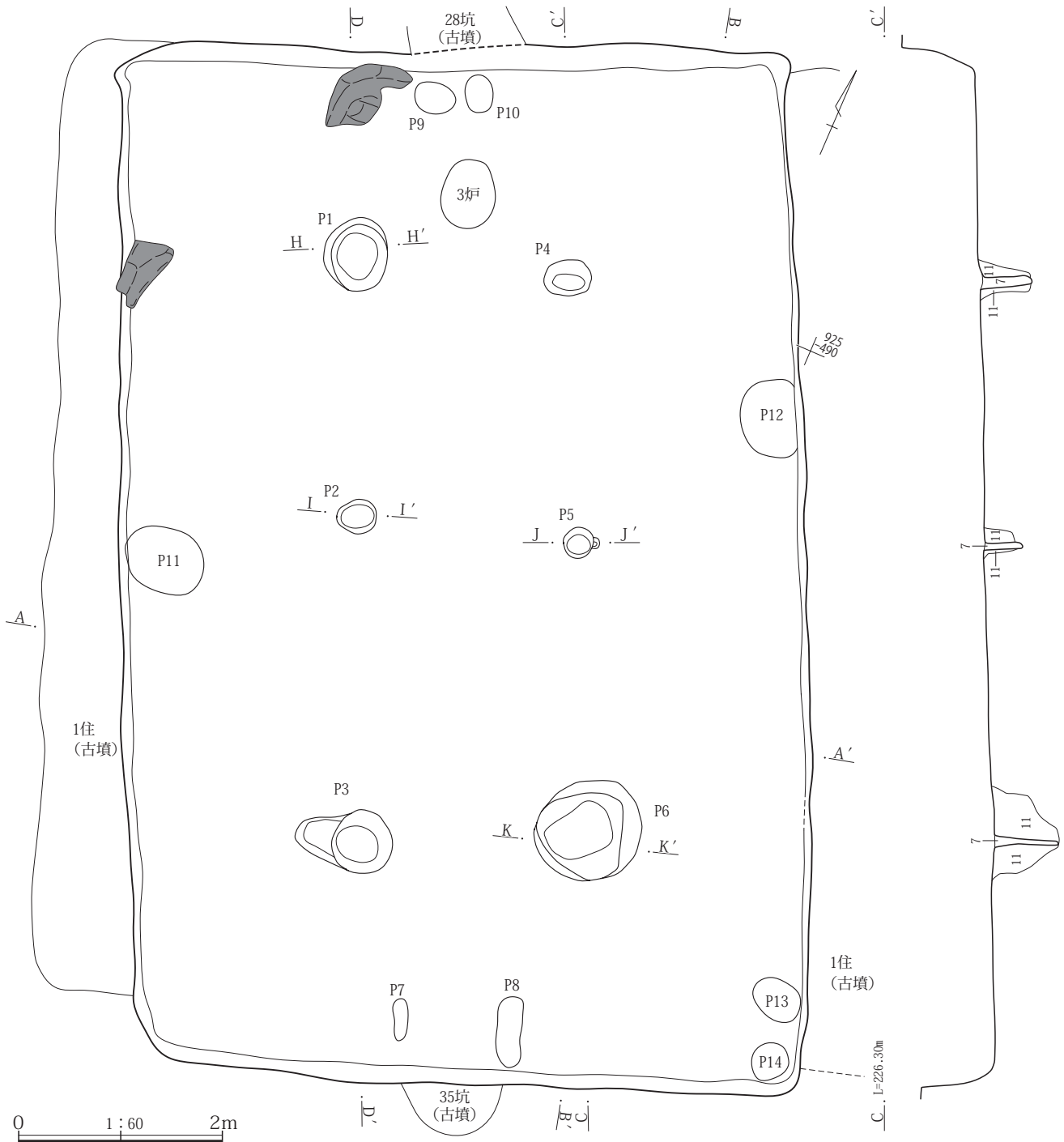
した出入口部の柱穴は、P7が長径41cm×短径13cm×深さ28cm、P8が長径69cm×短径24cm×深さ41cmを測る。相互に長軸方向が平行した細い楕円形状の掘り方を持ち、板材や角材を使用した造作物が想定される。

炉 北側周壁の90cm内側に存在する3号炉を頂点として、南西および南東方向に4.7~4.9m離れて二等辺三角形状に2号炉と1号炉を配置している。各炉ともに地床炉に近似した深度の浅い掘込炉であり、その規模

(長径×短径×深さ)は1号が68cm×56cm×11cm、2号が58cm×55cm×10cm、3号が67cm×53cm×14cmを測る。埋没土中には僅かな焼土粒が含まれる程度だが、底面には被熱による赤化と焼土形成が認められる。

周溝 精査にもかかわらず検出されなかった。

埋没土 古墳時代住居の重複により、大部分の埋没土が削平されているが、残存する部分ではロームブロックを相当量含む1~3層を主体とした暗褐色土がレンズ状に



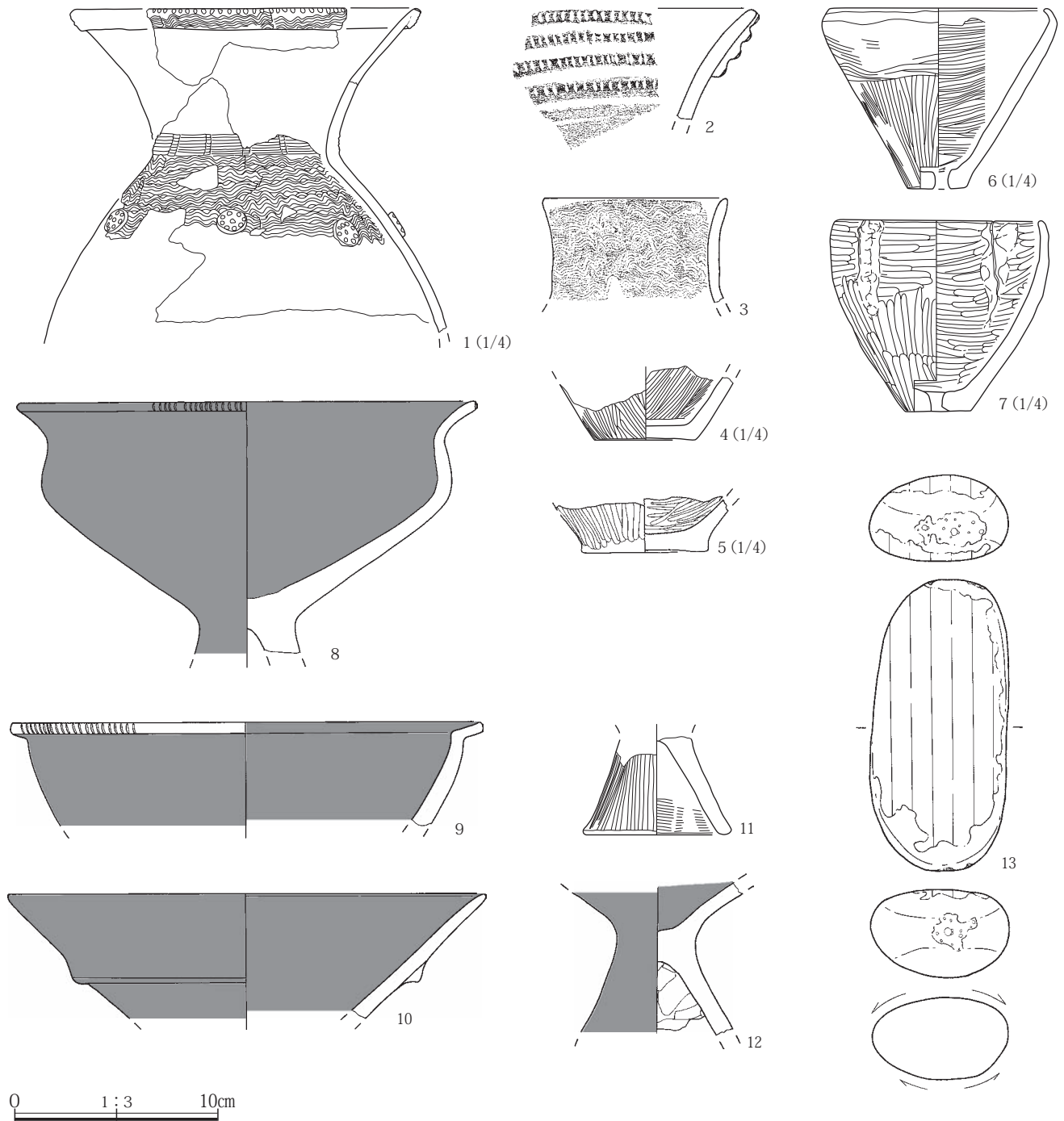
第57図 2区12号住居(2)

堆積しており、自然埋没の可能性が高い。

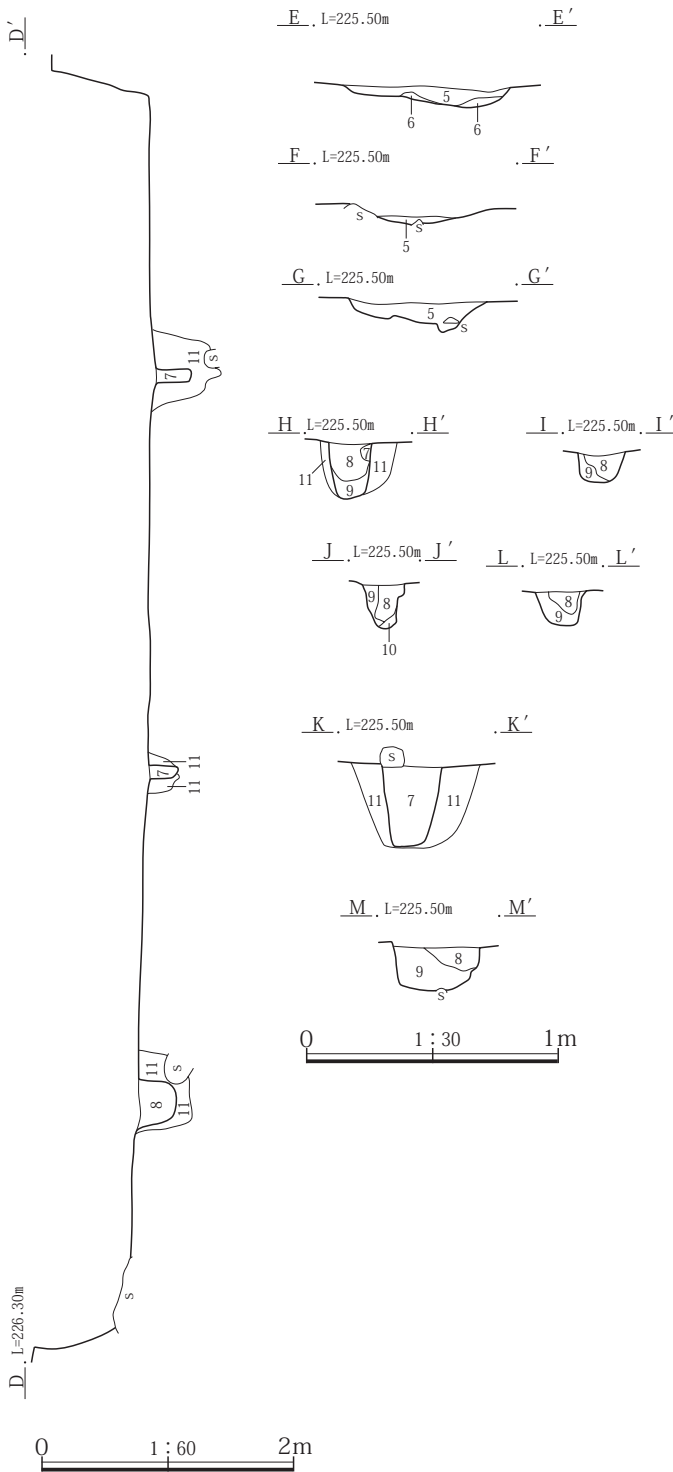
遺物 土器の完形品は皆無であり、各遺物の出土状況も特定箇所集中すること無く散在するが、No.1～3・5～7・10・12の土器片と13の磨石類がほぼ床面に密着して出土している。それ以外の土器は埋没土中からの出

土であり、他に387点の樽式土器破片が出土している。

所見 当住居の帰属時期については、平坦な複合口縁と括れ部にやや間隔の広い2連止連簾文を持つNo.1の壺形土器や、口縁部の括れと外反度合いが緩いNo.8の高坏などの様相から、弥生時代後期の樽式3期に比定される。



第58図 2区12号住居出土遺物



埋没土層

- 1 暗褐色土(10YR3/3)灰白色粗砂・褐色土少量、ローム粒多量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)径1cmローム塊を少量含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)径5～10cmローム塊多量に含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒多量に含む。
- 5 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊主体。焼土粒を少量含む。
- 6 明黄褐色土(10YR7/6)ローム塊を含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/1)ローム小塊少量、ローム粒多量に含む。柱痕。
- 8 黒褐色土(10YR3/2)径1～3cmローム塊を含む。柱痕の一部か。
- 9 暗褐色土(10YR3/3)ローム小塊少量、ローム粒多量に含む。
- 10 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊・粒を含む。
- 11 鈍い黄褐色土(10YR5/4)明黄褐色土塊を多量に含む。

第59図 2区12号住居(3)

●4区4号住居

位置 X=57977 Y=-75480

方位 N80度W 面積 70.10m²

写真 PL22・23・103 観察表 436頁

重複 北東隅付近の周壁際を、古墳時代後期の4区24号土坑に切られている。

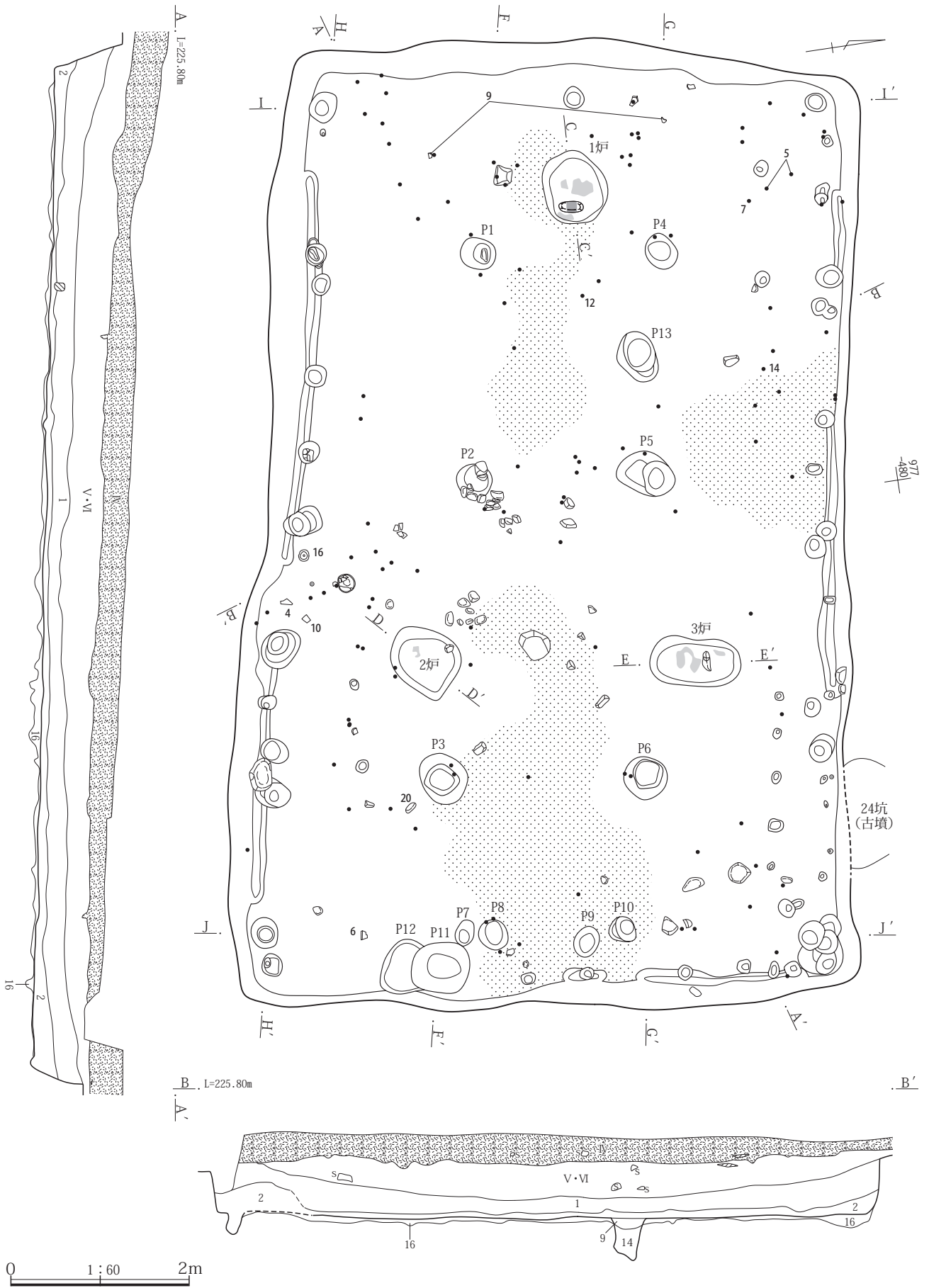
形状 斜面地の等高線にほぼ直交して、東西に長軸を持つ長方形を呈する。南辺と西辺は若干の蛇行・湾曲を見せるが、他辺は整然としたほぼ直線状に掘り込まれている。

規模 長辺10.26m×短辺6.73mの大形住居であり、埋没土層断面で計測した掘り込み深度は63～80cmを測る。周壁面は、約70～85度の勾配で掘り込まれている。

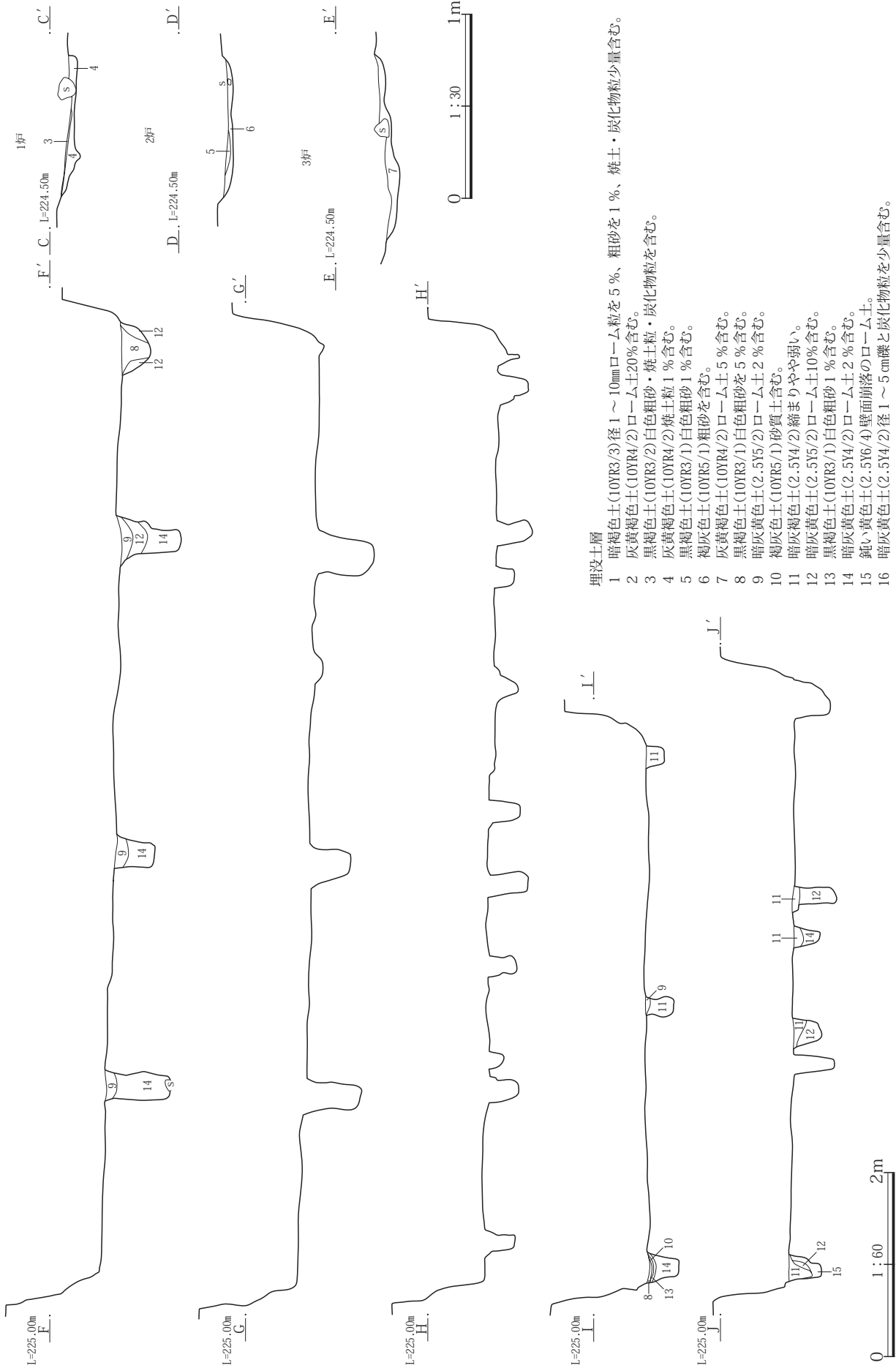
床面 VI層内を掘り込み面としてX層上位まで最大90cm前後に掘り下げた後に、暗灰黄色土を約5～10cm厚に埋填して貼り床面を構築する。3基の炉の周辺部を中心にして叩き床状の硬化面が認められ、全体的には若干の凹凸面が見られるものの、傾斜の少ない平坦な床面である。掘り方については、第61図A・Bセクション内の16層が埋填土であり、また第62図の平面図内に主な窪地状の掘り込みを図化した。

柱穴 主柱に関連したP1～P6の6本の柱穴と、出入口部関連のP7～P10の4本および、補助的な柱穴と想定される周壁際のP11～P13の3本を含めて、合計13本が検出された。また、周溝に付随した直径10～20cm、深さ10～25cm前後の壁柱穴が41本検出されている。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:39cm×70cm、P2:40cm×45cm、P3:39cm×46cm、P4:40cm×62cm、P5:39cm×46cm、P6:49cm×64cm、P7:29cm×44cm、P8:35cm×30cm、P9:34cm×29cm、P10:30cm×46cm、P11:64cm×33cm、P12:64cm×24cm、P13:47cm×29cmを測る。各主柱穴の芯々間の距離は、P1～P2:2.50m、P2～P3:3.40m、P4～P5:2.60m、P5～P6:3.30m、P1～P4:2.00m、P3～P6:2.30mを測る。東側周壁に近接した4本の出入口部柱穴の芯々間の距離は、P7～P9:1.4m、P8～P10:1.5mであり、新旧の架替えが行われたと想定される。同様に主柱穴のP5にも掘り直した痕跡が認められることから、最低でも1回の付替えが存在したと考えられる。

炉 西側周壁の1m内側に存在する1号炉を頂点として、南東および北東方向に4.8m離れて二等辺三角形



第60図 4区4号住居(1)



第61図 4区4号住居(2)

状に2号炉と3号炉を配置している。各炉ともに地床炉に近似した深度の浅い掘込炉であるが、1号は東側に、2号は北側寄りに、それぞれ長径32cmと22cmの河床礫を配置している。各炉の規模(長径×短径×深さ)は、1号が82cm×71cm×9cm、2号が79cm×68cm×9cm、3号が102cm×52cm×7cmを測る。各炉内には灰黄褐色土や黒褐色土の薄層が堆積するが、焼土粒や炭化物の混在は乏

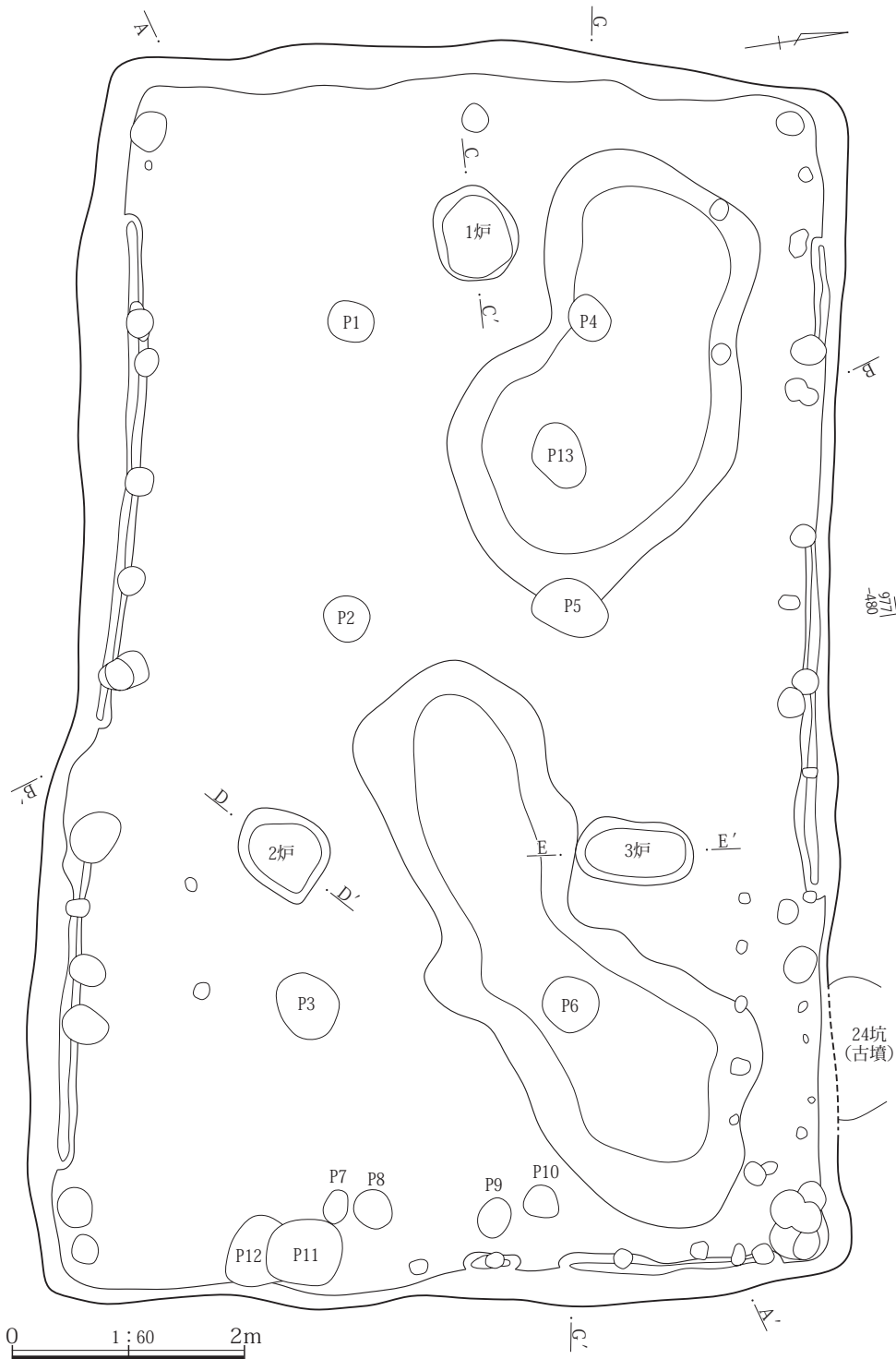
しい。他方、底面中央部には被熱による赤化と焼土形成が認められる。

周溝 西側周壁を除く各周壁際に幅6~20cm、深さ6cm前後の規模で断続的に周回している。また、それに付随して直径10~20cm、深さ10~25cm前後の壁柱穴が約41本存在する。これらの壁柱穴は、相互におよそ1m前後の間隔を置いて穿たれているものが多い。

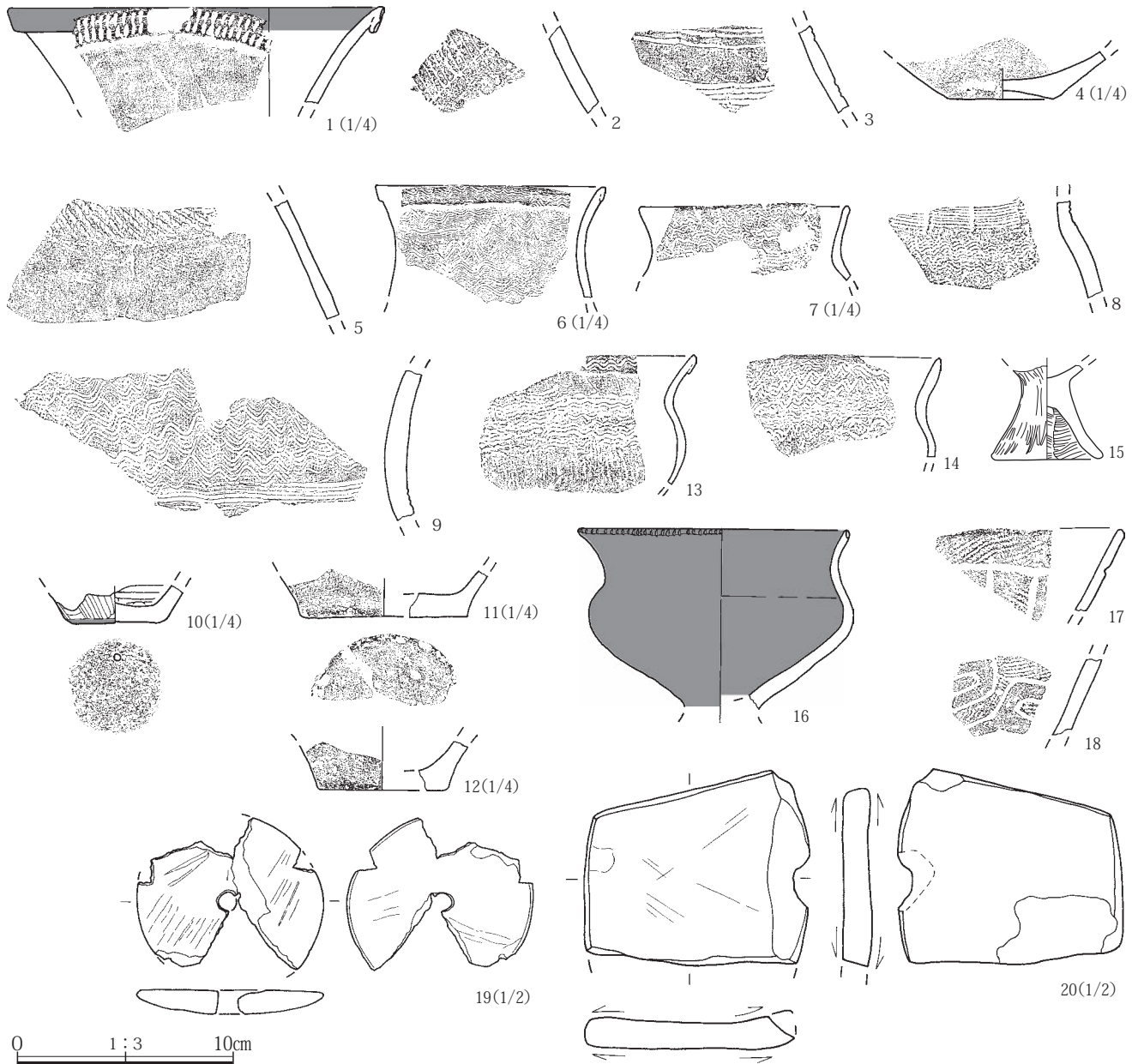
埋没土 埋没土層の中位までV層およびVI層上半部が自然堆積し、その下位にロームブロックを少量含む暗褐色土や灰黄褐色土の1・2層がレンズ状に堆積することから、住居廃絶後に自然埋没した可能性が高い。

遺物 埋没土中を主体に476点の樽式土器破片が出土し、完形品は皆無である。No.6・10・16は床面にほぼ密着出するが、19の紡輪や20の砥石を含めた他の遺物は全て埋没土中の出土である。尚、時期は異なるが、3・17・18等の弥生時代中期に帰属する土器片が52点出土しており、参考例として掲載した。

所見 当住居の帰属時期は、No.6・9・13・14などの土器に、複合口縁の平坦化と括れ部連簾文の横線文化やその欠落などが認められることから、弥生時代後期の樽式3期に比定される。



第62図 4区4号住居(3)



第63図 4区4号住居出土遺物

●4区8号住居

位置 X=57992 Y=-75485

方位 N3度E 面積 10.43㎡

写真 PL23・103 観察表 436頁

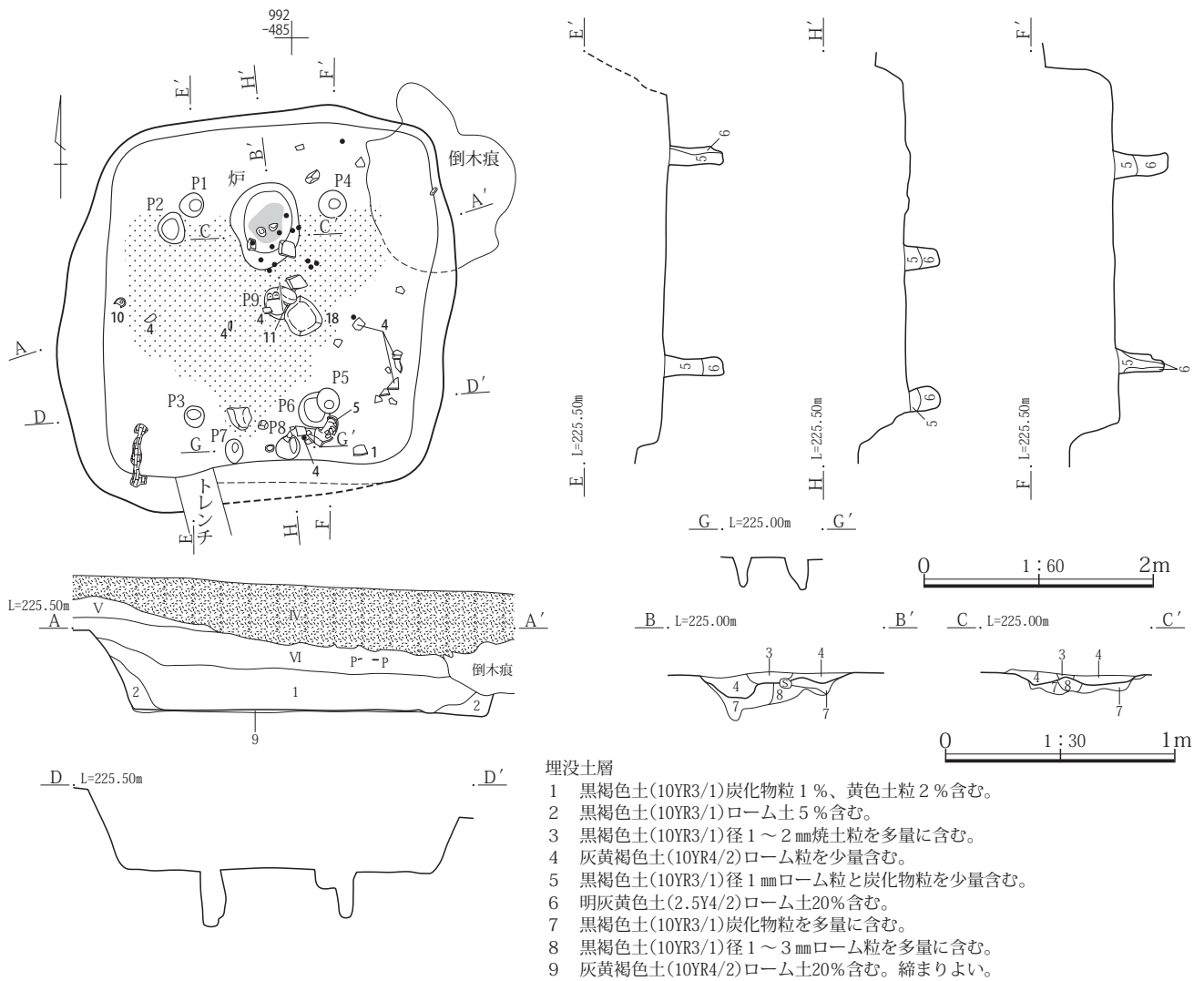
重複 北東隅で倒木痕と重複するが、これを切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線にほぼ平行して、南北に長軸を持つ正方形に近い長形状を呈する。東辺と西辺は若干外側に湾曲するが、他二辺は直線状に掘り込まれている。

規模 長辺3.43m×短辺3.30mの小形住居である。埋没土層断面で計測した掘り込み深度は、70~73cmを測る。周壁面は、約60~85度の勾配で掘り込まれている。

床面 VI層内を掘り込み面としてX層上位まで最大80cm前後に掘り下げた後に、灰黄褐色土を約2~4cm厚に埋填して部分的に貼り床面を構築する。炉の周辺部から中央部にかけて叩き床状の硬化面が認められ、全体的に凹凸や傾斜の少ない平坦な床面である。掘り方については、第64図Aセクション内の9層が相当する。

柱穴 主柱に関連したP1~P6の6本の柱穴と、出入口部関連のP7・P8の2本が検出された。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:21cm×54cm、P2:27cm×15cm、P3:19cm×49cm、P4:24cm×48cm、P5:22cm×44cm、P6:31cm×17cm、P7:22cm×27cm、P8:22cm×31cmを測る。各主柱穴の芯々間の距離は、P1~P3:1.85m、P4~P5:1.75



第64図 4区8号住居

m、P1~P4:1.20m、P3~P5:1.20mを測る。南側周壁に近接した出入口部柱穴P7・P8の芯々間の距離は、0.55mである。尚、P2・P6はそれぞれ主柱穴P1・P5の建替えによる代替柱穴と想定される。

炉 北側周壁の1m内側に位置し、深度の浅い掘込炉である。規模は、長径77cm×短径58cm×深さ7cmを測るが、下部に深度10~15cmの掘り方が存在する。炉内には焼土を多量に含んだ黒褐色土の堆積が認められる。

埋没土 埋没土層の中位までVI層上半部が自然堆積し、その下位に1層の黒褐色土が堆積する。

遺物 埋没土中を主体に345点の樽式土器破片が出土したが、完形品は皆無である。No.5の甕は、柱穴P6に近接した床面上より出土したが、16の紡輪や18の石皿を含めた他の全遺物は埋没土中からの出土である。また、13~15などの弥生時代中期に帰属する土器片が38点出土し

ており、参考例として掲載した。

所見 当住居の帰属時期については、括れ部に間隔の狭小な2連止櫛描連簾文を施すNo.4・5の土器文様から、弥生時代後期の樽式2期に比定される。

●4区27号住居

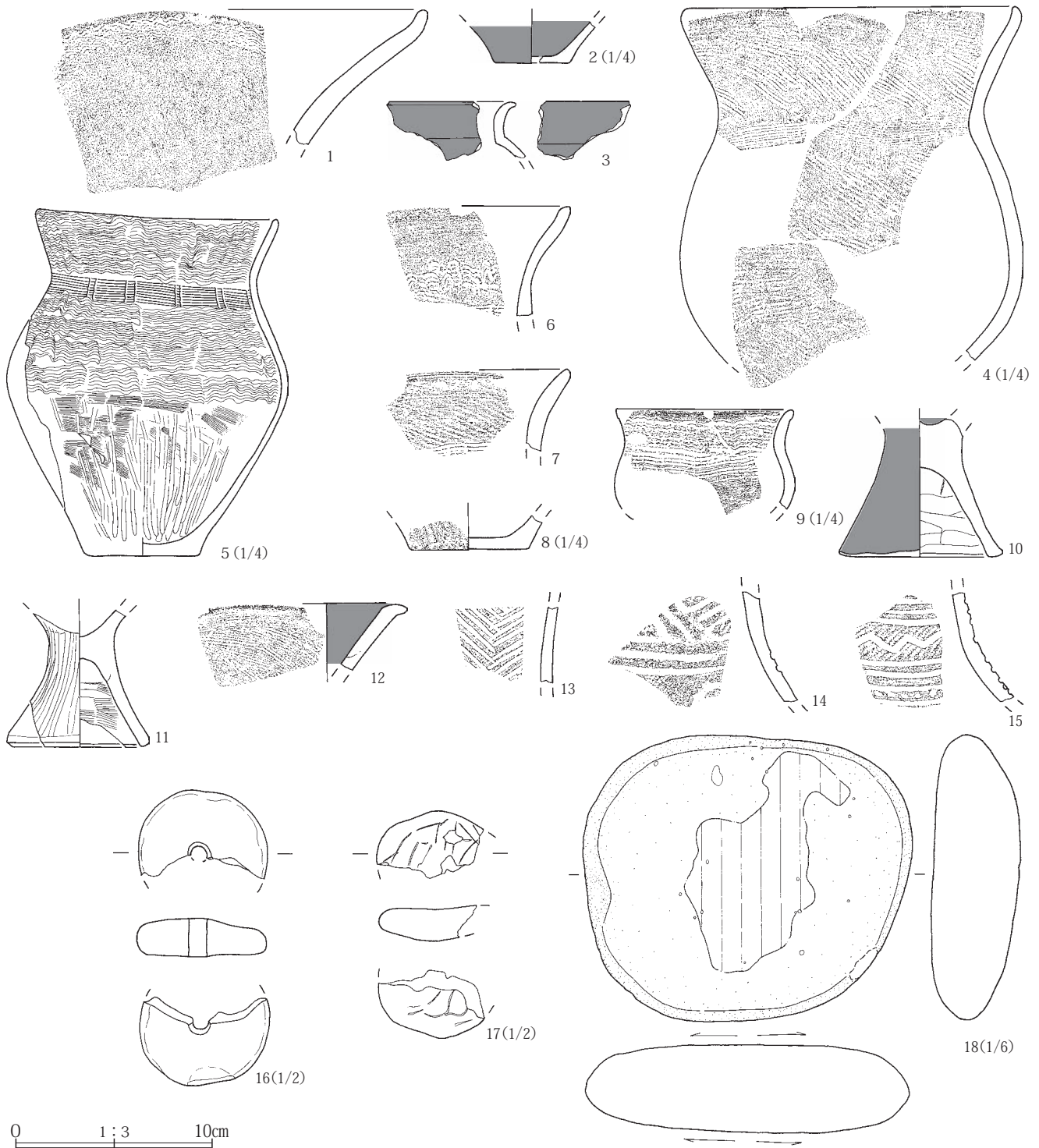
位置 X=57994 Y=-75500

方位 N32度W **面積** 不明

写真 P L24・104 **観察表** 437頁

重複 古墳時代後期の4区26号住居が西側を、同261・263号土坑が南側を切っている。

形状 北側約1/3が調査区外に位置するためやや不明瞭であるが、斜面地の等高線にほぼ直交して、南北に長軸を持つ長方形を呈する。残存する西辺と南辺は、ほぼ整然とした直線状に掘り込まれている。



第65図 4区8号住居出土遺物

規模 長辺の長さは不明だが、短辺は4.39mを測ることから中形住居の可能性が高い。埋没土層断面で計測した掘り込み深度は55～75cmを測る。周壁面は、約75～85度の急勾配で掘り込まれている。

床面 VI層内を掘り込み面としてX層上位まで最大93cm掘り下げた後に、灰黄褐色土を約5～13cm厚に埋填して貼り床面を構築する。4本の支柱穴で圍繞される範

囲から出入口部にかけて、叩き床状の硬化面が認められる。全体的に若干の凹凸面が見られるものの、傾斜の少ない平坦な床面である。掘り方については、第66図Aセクション内の9～11層が埋填土であり、また第67図の平面図内に主な窪地状の掘り込みを図化した。

柱穴 支柱に関連したP1～P4の4本の柱穴と、出入口部関連のP5～P8の4本が検出された。各柱穴の規模(直

径×深さ)は、P1:99cm×63cm、P2:93cm×63cm、P3:98cm×41cm、P4:18cm×37cm、P5:67cm×63cm、P6:48cm×23cm、P7:72cm×59cm、P8:54cm×57cmを測る。各支柱穴の芯々間の距離は、P1~P2:2.65m、P1~P3:4.55mを測る。また、南側周壁に近接した出入口部柱穴の芯々間の距離は、P5~P7:0.75m、P6~P8:1.50mであり、新旧の架替えが行われたと想定される。同様に支柱穴のP3にも掘り直した痕跡が認められることから、最低でも1回の付替えが存在したと考えられる。

炉 北側の床面中央に偏在する2号炉と、その南西方向に3m離れた1号炉の2基が存在する。各炉ともに深度の浅い掘込炉であり、その規模(長径×短径×深さ)は1号が67cm×57cm×8cm、2号が39cm×不明×8cmを測る。尚、2号は一回り大きい掘り方を持つ。各炉内には焼土粒を含む黒褐色土が堆積し、底面中央部には被熱による赤化と焼土形成が認められる。

周溝 西側および南側周壁際の一部に、幅7~24cm、深さ2~6cm前後の規模で掘り込まれている。

埋没土 埋没土層の下位までV・VI層が自然堆積し、その下位に1層の黒褐色土がレンズ状に堆積することから、廃絶後に自然埋没した可能性が高い。

遺物 埋没土中を主体に2,042点の樽式土器破片が出土し、完形品は皆無である。掲載遺物のNo.5・6・10・18の土器とNo.24~27の石器は床面にほぼ密着して出土しているが、他の遺物は全て埋没土中からの出土である。

所見 当住居の帰属時期は、頸部の短いNo.1・3の壺や、頸部の無文部を挟んで口縁部と胴部に波状文を施す2・4の甕などの土器様相から、弥生時代後期の樽式2期に比定される。

●4区33号住居

位置 X=57985 Y=-75500

方位 N20度E **面積** (21.78) m²

写真 P L 24・25・105・106 **観察表** 438頁

重複 北東側約1/3を古墳時代後期の4区28号住居により切られている。

形状 斜面地の等高線にほぼ平行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。北辺は若干外側に湾曲するが、他の二辺は直線状に掘り込まれている。

規模 長辺5.57m×短辺4.15mの小形住居であり、掘

り込み深度は36~49cmを測る。周壁面は、約70~80度の勾配で掘り込まれている。

床面 掘り込み面はVI層内と想定され、X層上位まで最大60cm前後に掘り下げた後に、暗褐色土を約2~10cm厚に埋填して部分的に貼り床面を構築する。支柱穴で圍繞された範囲を中心にその外周20~70cmの範囲まで、叩き床状の硬化面が認められる。全体的に凹凸や傾斜の少ない平坦な床面である。掘り方については、第69図A・Bセクション内の8層が相当する。

柱穴 支柱に関連したP1~P4の4本の柱穴と、出入口部関連のP5・P6の2本および補助的なP7~P12の6本が検出された。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:24cm×53cm、P2:29cm×62cm、P3:51cm×54cm、P4:36cm×59cm、P5:32cm×30cm、P6:35cm×29cm、P7:32cm×19cm、P8:15cm×10cm、P9:13cm×22cm、P10:16cm×20cm、P11:18cm×19cm、P12:19cm×14cmを測る。各支柱穴の芯々間の距離は、P1~P2:2.65m、P3~P4:2.70m、P1~P3:1.25m、P2~P4:1.50mを測る。南側周壁に近接した出入口部柱穴P5・P6の芯々間の距離は、0.55mである。尚、P1・P4の支柱穴には直径15cm前後の丸太状柱痕が、また出入口部柱穴のP5・P6では厚さ10cm×長さ30cmの板状の痕跡が確認されている。

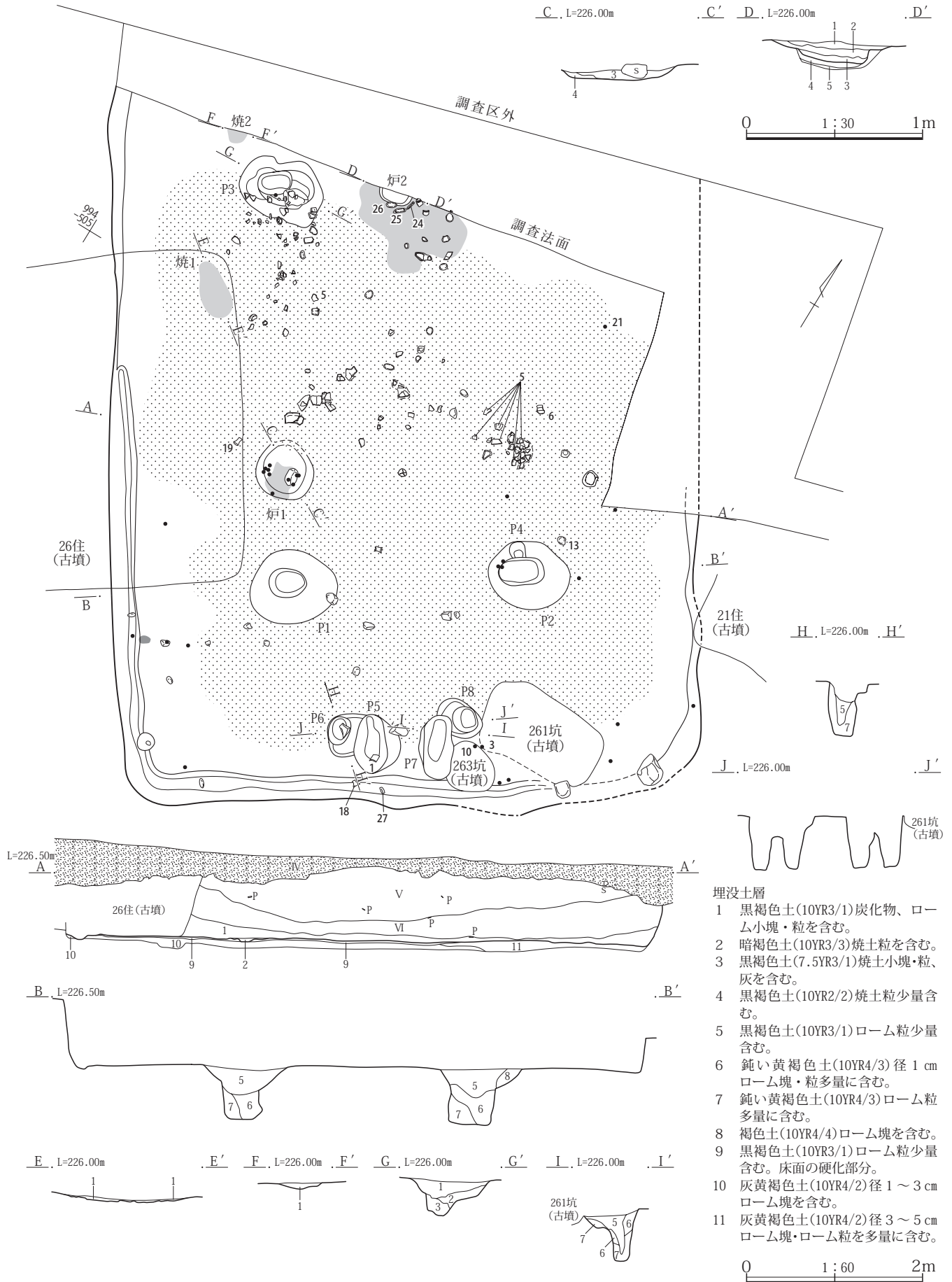
炉 北側周壁の約1m内側に位置し、その規模は直径67cm×深さ7cmを測るが、その下位に深度5cmの掘り方が存在する。底面には焼土の堆積層が認められる。

埋没土 上位に堆積する1層は、基本土層のVI層の可能性が高い。その下位に2層の黒褐色土が自然埋没の状態に堆積する。

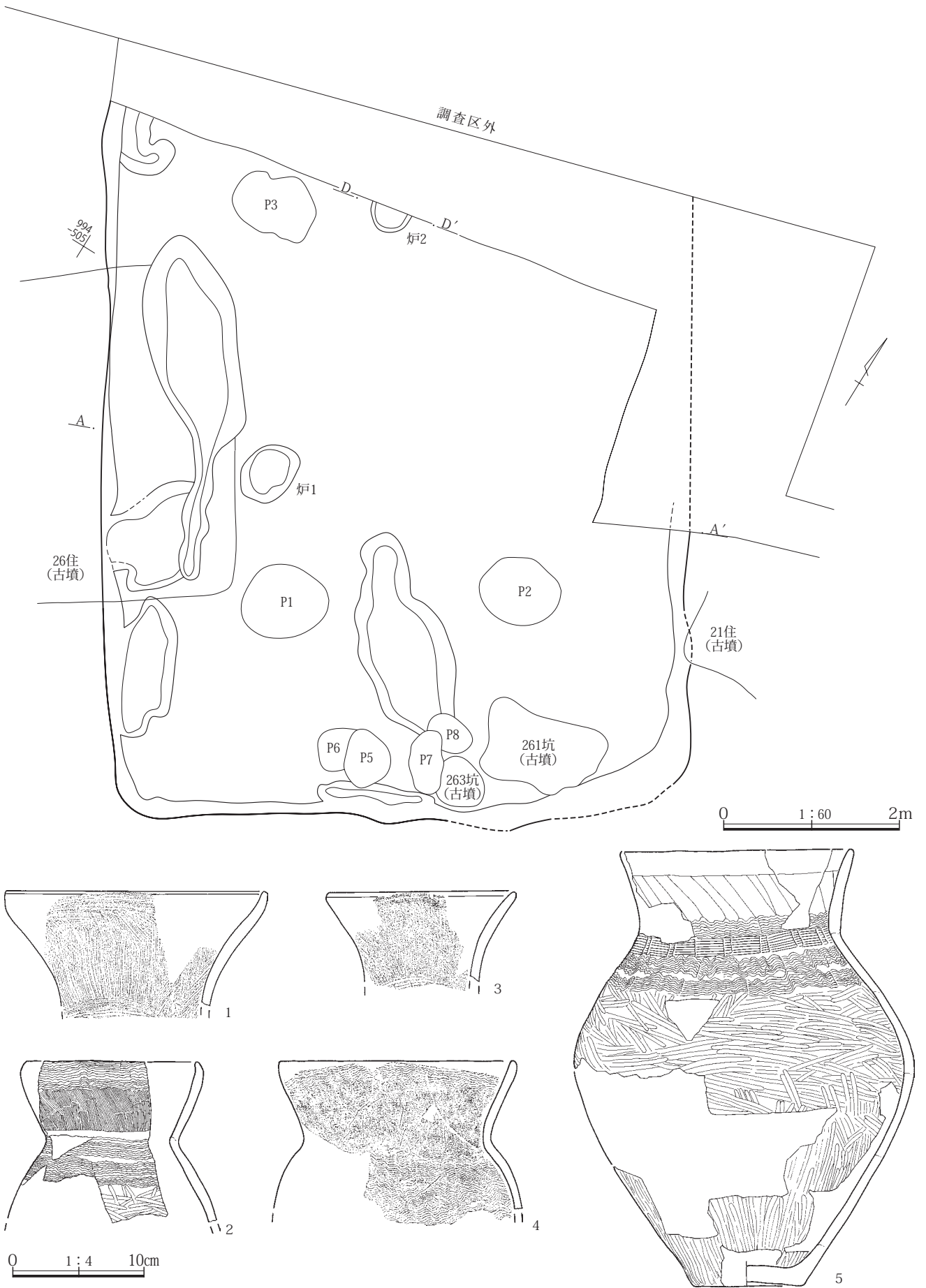
遺物 埋没土中を主体に271点の樽式土器破片が出土するが、完形品は皆無である。掲載遺物のNo.1・2・6・8・9・15~19は、ほぼ床面密着で出土したが、他の全遺物は埋没土中からの出土である。位置的には、支柱穴のP1・P2の周辺部に集中している。また、10の甕形土器の底部外面には、イネの籾圧痕が検出されている。その詳細については、400頁の「2. レプリカ法による弥生土器種実圧痕の同定」を参照されたい。

所見 当住居の帰属時期は、2段の2連止連籾文・波状文や鋸歯状文の交点にボタン状貼付文を施すNo.1・2の壺と、口縁部が強く屈曲して外反する17の高杯の様相から、弥生時代後期の樽式2期に比定される。

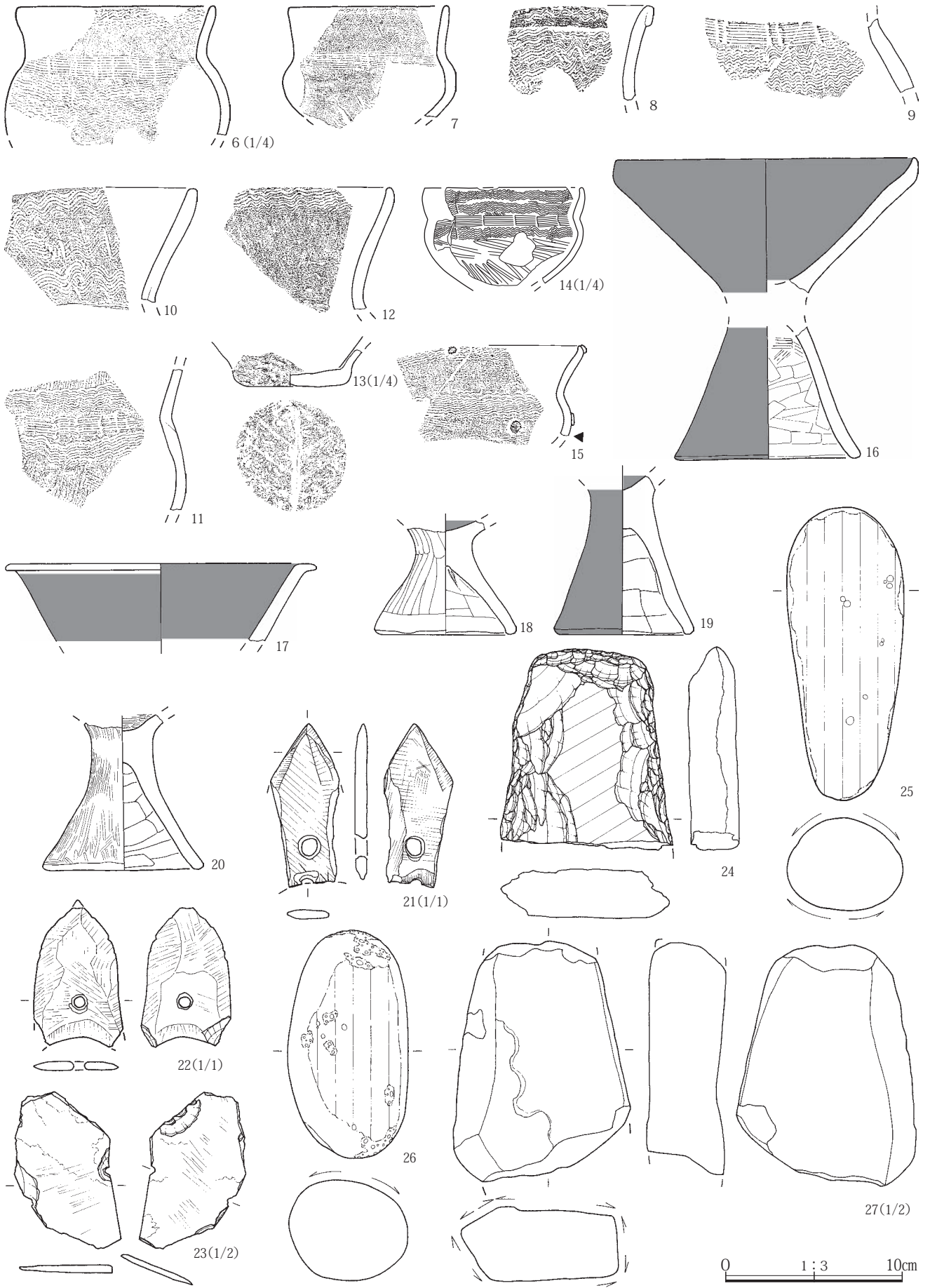
3. 弥生時代の遺構と遺物



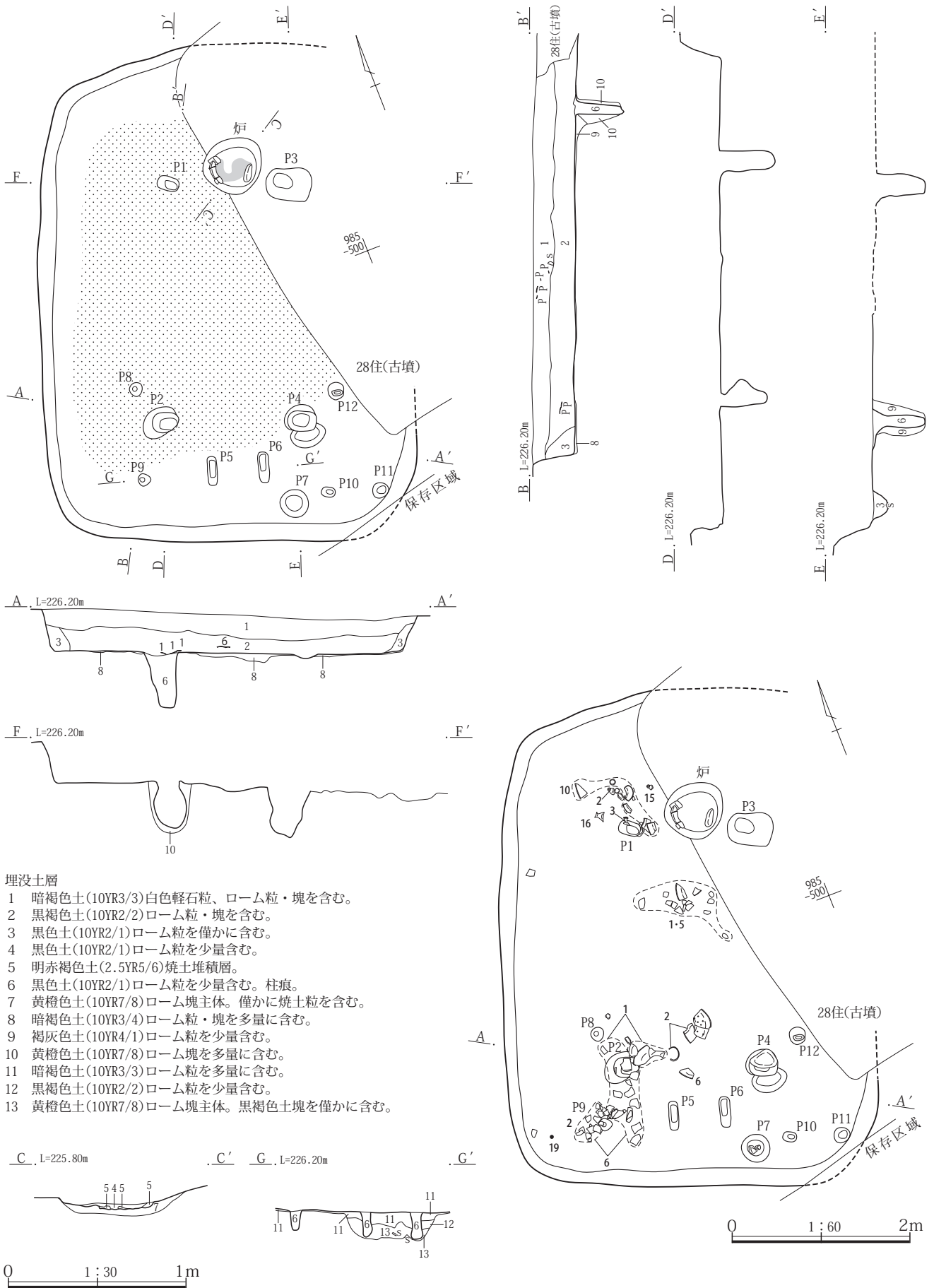
第66図 4区27号住居



第67図 4区27号住居と出土遺物(1)



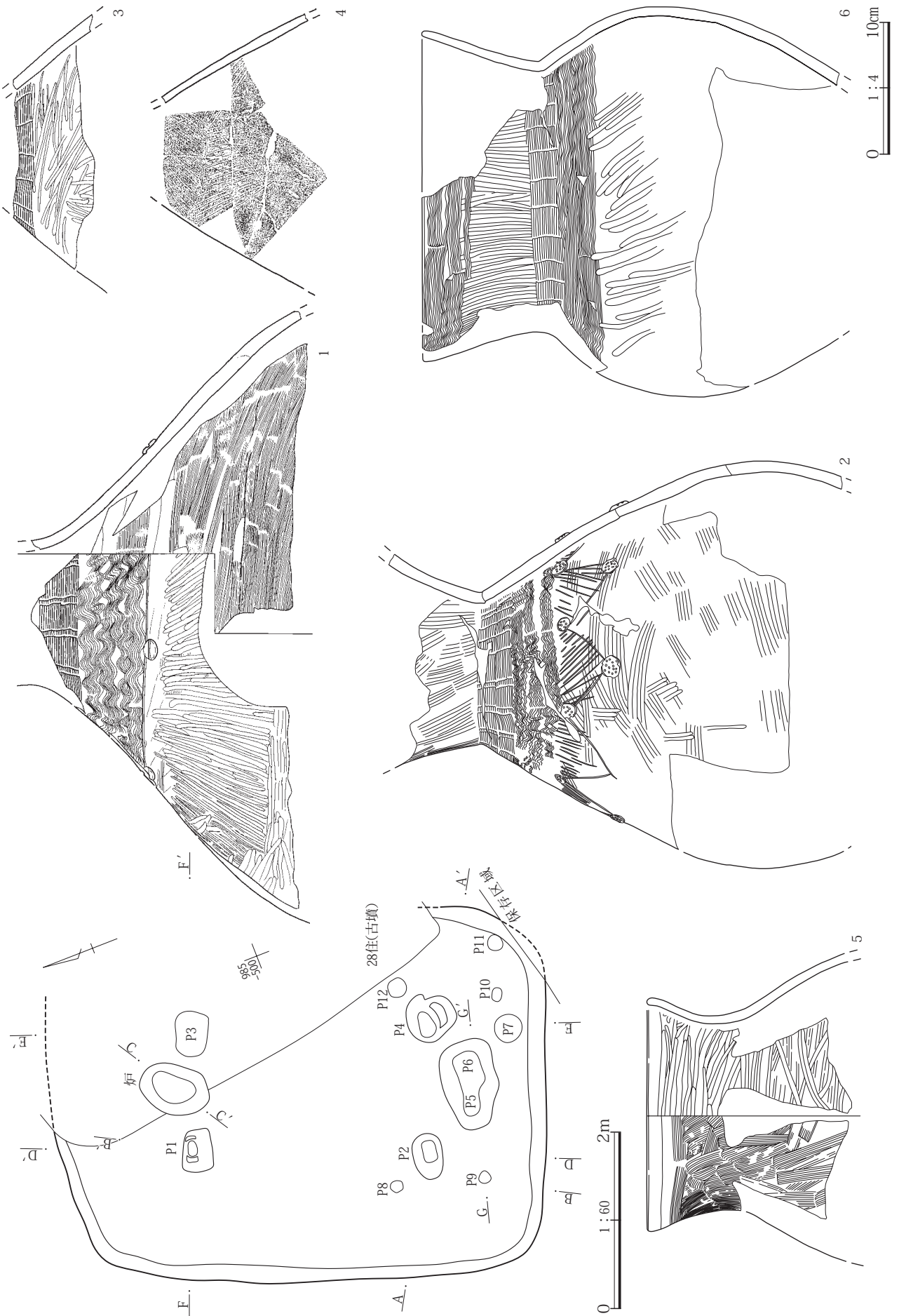
第68図 4区27号住居出土遺物(2)



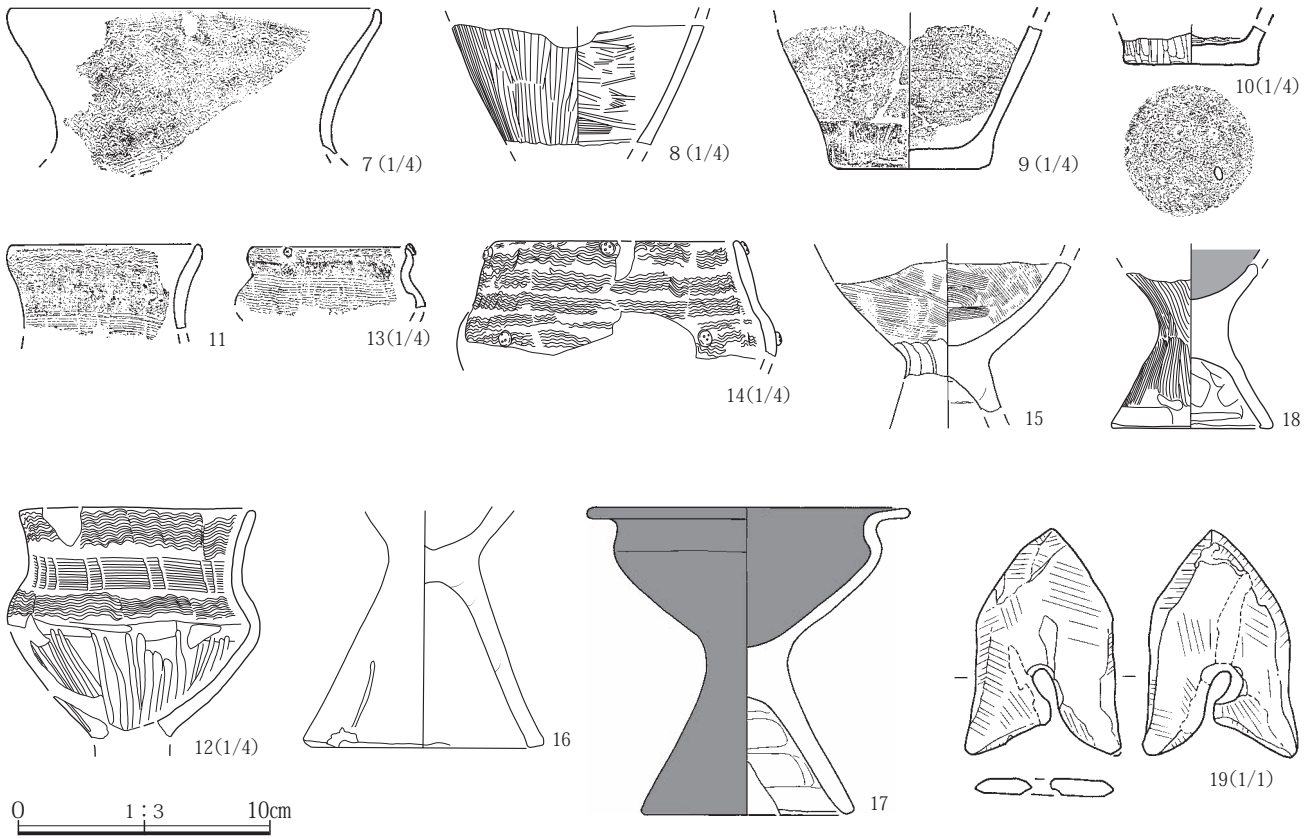
埋没土層

- 1 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒、ローム粒・塊を含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・塊を含む。
- 3 黒色土(10YR2/1)ローム粒を僅かに含む。
- 4 黒色土(10YR2/1)ローム粒を少量含む。
- 5 明赤褐色土(2.5YR5/6)焼土堆積層。
- 6 黒色土(10YR2/1)ローム粒を少量含む。柱痕。
- 7 黄橙色土(10YR7/8)ローム塊主体。僅かに焼土粒を含む。
- 8 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒・塊を多量に含む。
- 9 褐灰色土(10YR4/1)ローム粒を少量含む。
- 10 黄橙色土(10YR7/8)ローム塊を多量に含む。
- 11 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒を多量に含む。
- 12 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒を少量含む。
- 13 黄橙色土(10YR7/8)ローム塊主体。黒褐色土塊を僅かに含む。

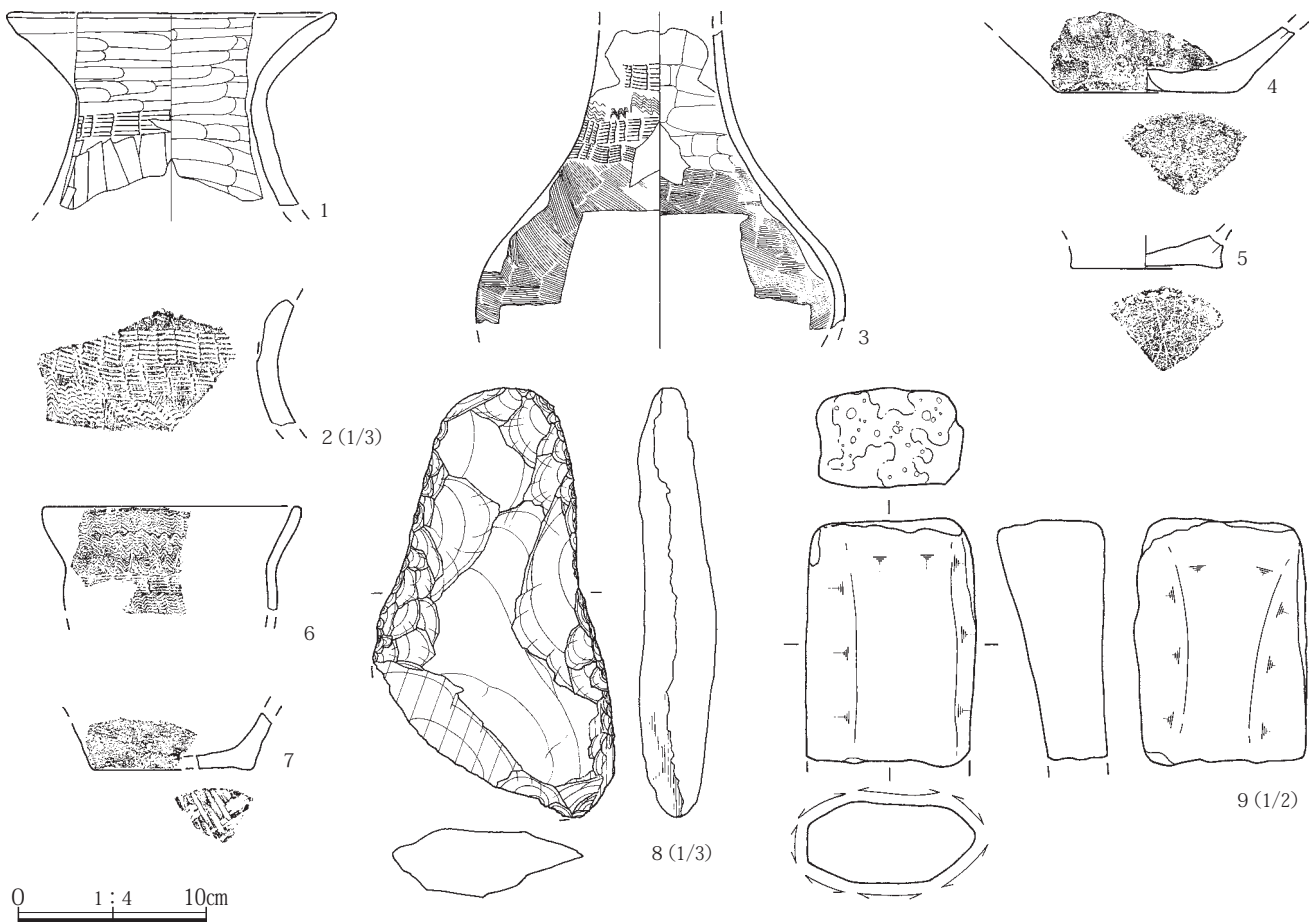
第69図 4区33号住居



第70図 4区33号住居と出土遺物(1)



第71図 4区33号住居出土遺物(2)



第72図 7区44号住居出土遺物

●7区44号住居

位置 X=57720 Y=-75548

方位 N20度W 面積 18.42㎡

写真 PL25・106 観察表 438頁

重複 無し。

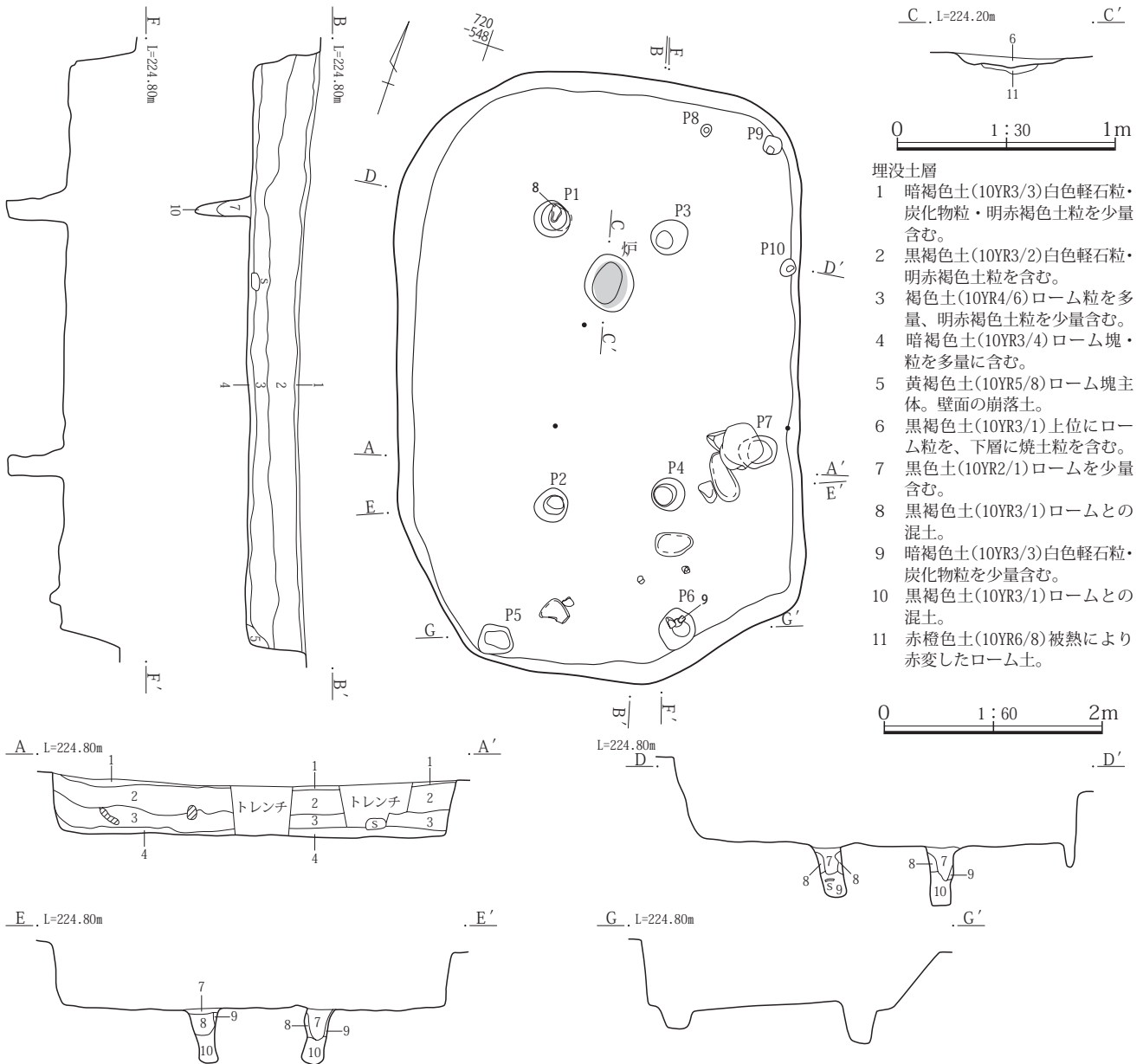
形状 斜面地の等高線にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸長方形形状を呈する。南辺は若干外側に湾曲するが、他辺は直線状に掘り込まれている。

規模 長辺5.55m×短辺3.68mの小形住居であり、掘り込み深度は44~74cmを測る。周壁面は、約75~80度の勾配で掘り込まれている。

床面 掘り込み面はVI層内と想定され、X層上位まで最大74cm掘り下げて床面を構築する。炉の周辺部を中心

にして硬化面が認められ、全体的に凹凸や傾斜の少ない平坦な床面である。

柱穴 主柱に関連したP1~P4の4本の柱穴と、補助的な柱穴のP5~P7の3本および、周壁際の壁柱穴P7~P10の4本が検出された。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:34cm×45cm、P2:31cm×50cm、P3:34cm×54cm、P4:31cm×51cm、P5:33cm×16cm、P6:39cm×26cm、P7:17cm×26cm、P8:12cm×20cm、P9:18cm×16cm、P10:17cm×22cmを測る。各主柱穴の芯々間の距離は、P1~P2:2.65m、P3~P4:2.35m、P1~P3:1.00m、P2~P4:1.00mを測る。南側周壁に近接したP6は、出入口部関連の柱穴の可能性もある。尚、各柱穴内からは、柱痕を検出することはできなかった。



第73図 7区44号住居

炉 床面中央部から北側へ約1m偏在する。その規模は長径49cm×短径45cm×深さ7cmを測り、底面には被熱による層厚3cmほどの焼土層が形成されている。

周溝 精査にもかかわらず検出されなかった。

埋没土 上半に堆積する1・2層は、基本土層のV・VI層に比定される可能性が高い。その下位に3・4層の褐色土や暗褐色土が、自然埋没の状態に堆積する。

遺物 掲載土器を含めて、埋没土中から49点の樽式土器破片が出土した。No.8・9の石鍬や砥石も埋没土中の出土であり、P4やP7の柱穴周縁には長径20~50cmの河床礫5点が床面より10cm前後浮遊して出土している。尚、No.5の壺底部外面には、イネ朶とキジ穎果の圧痕が検出されており、その詳細については400頁の「2. レプリカ法による弥生土器種実圧痕の同定」を参照されたい。

所見 当住居の帰属時期は、間隔の狭い等間隔止連簾文を施すNo.1~3の長頸壺の様相から、弥生時代後期の樽式1期に比定される可能性が高い。

(2) 壺棺墓

7区のはぼ中央部に、完形の壺形土器を用いた1基のみが検出された。土器の内部から人骨は検出されず、墓

としての証拠は乏しいが、従来からの類例に対比して壺棺墓として扱う。土坑状の浅い掘り込みを伴い、帰属時期は中期中葉段階に比定される。周辺には、同期の土坑墓と想定される527・529・571・730号土坑が存在しており、相互に様相の差異はあるものの墓域を形成している可能性もある。以下にその詳細を記載する。

● 7区1号壺棺墓

位置 X=57771 Y=-75522

方位 N1度E

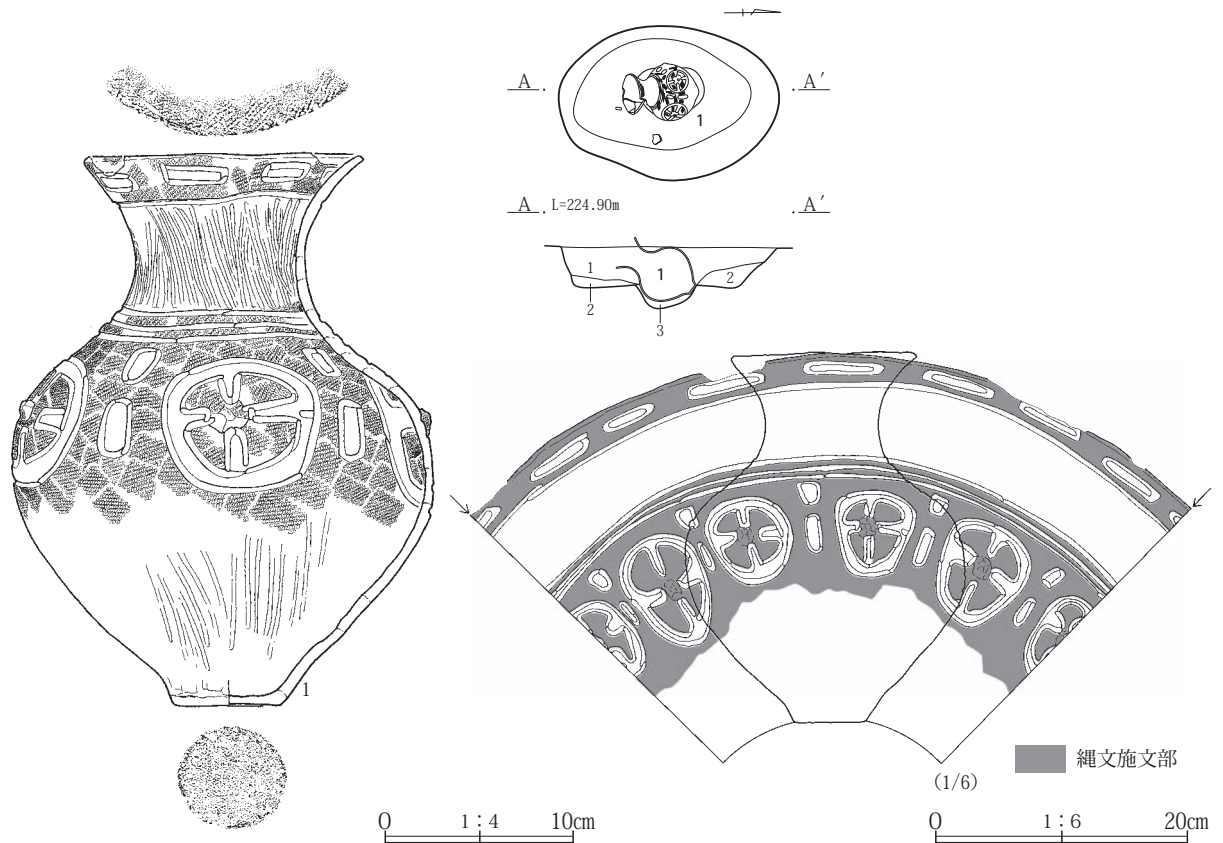
写真 PL26・106 **観察表** 439頁

重複 無し。

形状 長軸を南北方向に向けた楕円形状の掘り込みを伴い、その中央部に壺1点を斜位に設置している。

規模 土坑の規模は、長径87cm×短径62cm×深さ16cmを測る。この底面に直径25cm×深さ10cmの小穴を掘り込み、No.1の壺を垂直方向から約60度傾けて口縁開口部が南方を向くように設置している。掘り込み面は不明確であるが、土坑底面はVII層上面に達している。

埋没土 VI層に近似した褐灰色土を主体に埋没しており、人為的に埋填された可能性が高い。



第74図 7区1号壺棺墓と出土遺物

遺物 縄文土器片が数点混在するが、弥生土器はNo.1の1点のみである。土器の内側には、土坑埋没土と同様の1層が充満しており、人骨等は検出されなかった。

所見 壺棺に伴出することの多い蓋は検出されなかったが、木製の蓋が存在した可能性も考慮される。当住居の帰属時期については、方形・円形状の区画文や充填縄文を施すNo.1の土器文様から、弥生時代中期中葉段階に比定される。

(3)土坑

第7表に掲示したように、1・2・4・7区より20基を検出した。調査区別に見ると、1区:1基、2区:5基、4区:6基、7区:8基となり、1区を除いて各区ともに近似した数量となる。ただし、4区については第1章「2. 調査の方法と工程」の項目で既述したように、古墳時代の青人骨検出に伴う遺跡保存措置により、部分的調査にとどまっており、こうした点を勘案すれば竪穴住居の分布状況とほぼ同様に4区に集中する様態を看取することができる。基本的には、両者の遺構立地に何らかの相関性が存在することを示すものだろう。尚、各土坑の分布状況については、調査区別に別添の全体図5～7に掲示してあるので、そちらを参照されたい。

帰属時期については、土器等の明確な伴出遺物により

判定可能なものが約半数の11基にとどまるが、その内訳は中期中葉7基、後期(樽式期)4基であり、竪穴住居の構築が認められない中期中葉が最多を占める点で、注意を要する。

形態としては、掘り込み確認面での平面形状が円形のもの9基と全体の45%を占め、次いで楕円形を基調とするものが6基、長方形が4基、部分的調査による形状不明が1基となる。円形状土坑の中でいわゆる袋状の形態を持つものは皆無であり、4区268AB・984号や7区565・566号などのように、掘り込み深度の浅い円筒状が多数を占める。

規模に関しては、円形状の場合、直径が①50cm以下:1基、②50～99cm:6基、③100～110cm:2基で②グループが最多となるが、③グループも合わせれば円形土坑全体の90%を占める。楕円形状では長軸が①100cm未満:1基、②100～149cm:3基、③150～199cm:2基であり、各グループともに差異が乏しいが、規模の面では長方形土坑よりもやや小形と言えよう。長方形では、長軸が①150～199cm:3基、②200cm以上:1基であり、①グループを主体とする傾向が窺える。掘削深度については、その構築面が確認面に近似と思われるVI層内検出の2区31号、7区375・529・565・566・571・576・730号など8基が深度50cm未満であり、深度50～70cmが2区32・

第7表 土坑規模一覧(弥生時代)

区	番号	位置		主軸方位	形状	規模(cm)			確認面	時期	備考
		座標X	座標Y			長径	短径	深さ			
1	211	57896	-75504		円形	100	95	22	Ⅶ層内	不明	
2	31	57936	-75505	N29度E	長方形	166	114	43	Ⅵ層内	樽式期	底面付近に土器片3点。
2	32	57940	-75502	N68度W	楕円形	160	88	54	Ⅵ層内	樽式期	底面付近に炭化物・灰と焼土の堆積層あり。
2	33	57941	-75497	N75度W	長方形	171	107	70	Ⅵ層内	樽式期	
2	35	57911	-75489	N69度E	不明	97	(50)	30	Ⅶ層内	不明	
2	36	57939	-75501		円形	101	93	61	Ⅵ層内	中期中葉	底面付近に土器片2点。
4	267	57979	-75514	N29度W	楕円形	67	46	41	Ⅷ層内	不明	
4	273	57985	-75491	N3度E	楕円形	139	74	12	Ⅶ層内	不明	
4	328	57986	-75514		円形	67	48	58	Ⅵ層内	不明	
4	984	57992	-75482		円形	56	45	29	Ⅷ層内	不明	
4	268A	57983	-75508		円形	52	47	18	Ⅶ層内	不明	
4	268B	57983	-75508		円形	41	41	7	Ⅶ層内	不明	
7	375	57716	-75555	N42度W	楕円形	165	78	30	Ⅵ層内	不明	黒色土中で確認。形状不確定。
7	527	57775	-75533	N58度E	長方形	212	141	61	Ⅵ層内	中期中葉	上～中位に大・小形河床礫10点。
7	529	57771	-75521	N34度W	楕円形?	(137)	76	27	Ⅵ層内	中期中葉	中位に大形河床礫1点・中形垂角礫4点、完形筒形土器1点、土器片7点、石鏃1点。
7	565	57754	-75530		円形	97	84	20	Ⅵ層内	中期中葉	
7	566	57758	-75530		円形	70	67	22	Ⅵ層内	中期中葉	上位に中形河床礫1点。
7	571	57771	-75527	N30度W	楕円形	111	54	15	Ⅵ層内	樽式期	底面中央に半割大形河床礫1点や小形垂角礫5～6点。高坏片2点他土器片2点。
7	576	57756	-75523		円形	82	71	20	Ⅵ層内	中期中葉	底面壁際に大形河床礫1点
7	730	57783	-75515	N42度W	長方形?	(155)	83	28	Ⅵ層内	中期中葉	底面近くに打割された準完形筒形土器3点と蓋1点、削器類1点などが密集出土。

33・36号、4区328号、7区527号などの5基にとどまる。全体的に深度の浅い土坑が多いが、形態と深度との有意な関係性は認められない。また、1区211号、2区35号、4区267・268AB・273・984号のように、確認面がⅦ・Ⅷ層のものは、第14表に掲示した深度がその実態を直接反映していない点に留意する必要がある。

各土坑の機能・用途を考定する上で重要な要件となる埋没土の状況や遺物出土状況については、時期比定が可能な土坑を中心として以下の記述の中で扱うが、完形・準完形土器や大・中形自然礫を伴う土坑を除いて、その機能・用途については判然としなない。

尚、本報告書巻頭の凡例に記載した通り、発掘調査時点で弥生時代土坑に比定した遺構について、その規模・形状・埋没土層・出土遺物等の内容を詳細に検討した結果、小動物や草木等の非人為的土壌攪乱に起因すると判断される7基を除外・欠番とした。

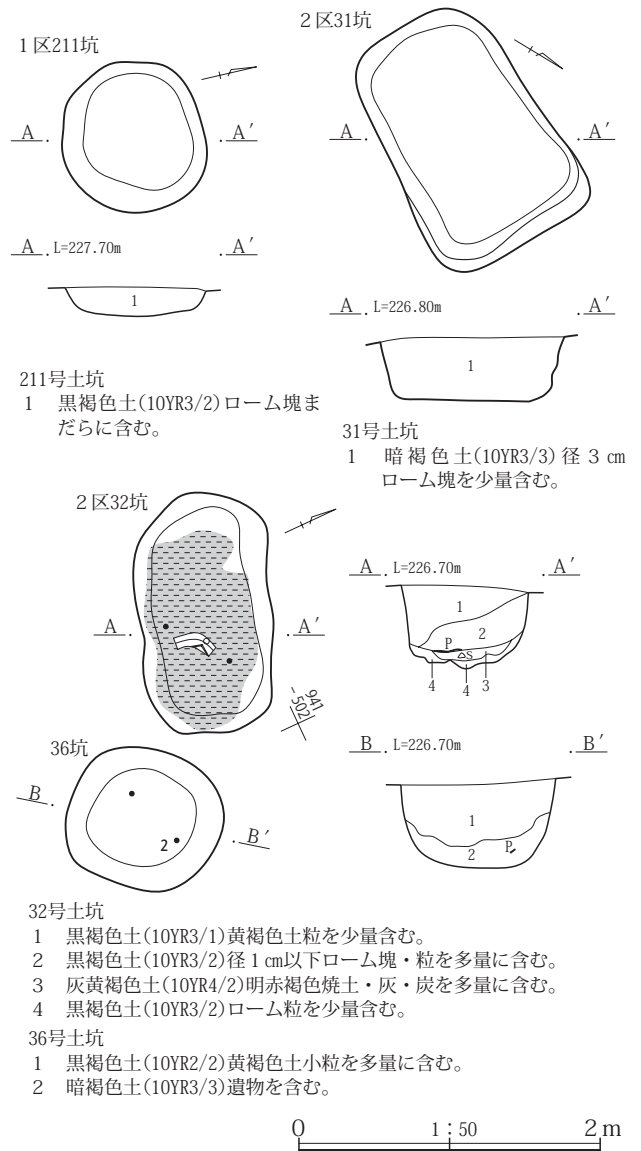
以下、各土坑の内容について、出土土器の時期を単位にして記述を行う。

A. 中期中葉

2区36号、7区527・529・565・566・576・730号の7基が存在し、その分布域は7区を中心に偏在する傾向が明瞭である。形態別に見ると、円形の36・565・566・576号と、長方形の527・730号、楕円形の529号に分類される。規模の面では、円形が長径100cm前後であり、長方形・楕円形が長径150～200cm前後とその差が際立っている。出土遺物では、長方形や楕円形状の土坑に完形・準完形の土器が伴出するのに対して、円形土坑には埋没土中での土器破片が少量出土するにとどまっている。また、7区での分布状況を見ると、円形の565・566・576号はほぼ中央部に集中しているのに対して、長方形・楕円形の527・529・730号はその北側に10m離れて群在している。両者間に認められるこのような差異は、機能・用途差を反映している可能性が高いと言えよう。各土坑の時期同定については、529・730号を除いていずれも小破片土器によるが、当該期に帰属すると見て良いだろう。この529・730号およびこれらと形態が類似する527号については、相互の関連性と共に特筆すべき内容があり、以下に詳述する。

長径が150cm前後と想定されるの529号土坑では、第77図No.5の筒形土器が底面から10cm浮遊し、かつその底部

接合部で2つに分割された状態で出土している。状況的には、埋没前段階で意図的に分割・配置されたか、あるいは埋没過程で2つに破損した両者の可能性が想定されるが、破損部分には打割時に生じたと推定される打痕が存在することから、前者の可能性が高い。また、床面より10～18cm浮遊して、長径20～30cmの板状節理を持つ垂角礫4点や長径68cm×短径26cmの棒状河床礫1点が出土しており、前者の垂角礫については各底面がほぼ水平状態であることから、意図的に配置された可能性が高い。一方、それらのやや上位から出土する棒状河床礫については、開口部に樹立されていた可能性もある。各遺物が土坑底面よりやや浮遊している点に関しては、調査時に



第75図 土坑(1)(1区211、2区31・32・36号)

使用面を確認できずに掘り方まで抜いてしまっていることが要因とも考えられる。尚、埋没土の状況からは、人為的埋没の有無を判断することは困難である。

尚、No.5の筒形土器については、口縁部の2箇所にてイネの籾圧痕が検出されており、当該期における米作農耕の存在を考える上で注目される。この詳細については、400頁の「2. レプリカ法による弥生土器種実圧痕の同定」を参照されたい。

730号土坑は、約1/3が調査区外に位置するために実際の規模は不明瞭だが、短径長から判断して長径170cm前後の可能性が高い。ほぼ底面に密着かつ北壁側に近接して、大形破片に分割された準完形の筒形土器3点(No.1～3)と蓋1点(No.4)が密集出土し、さらにNo.4の上面に接して左側縁部に使用痕を持つNo.5の削器が出土している。状況的には、埋没前段階で意図的に打割して、それら主要破片の大半を埋納的に密集配置した可能性が高い。埋没土中にはロームブロックが混在しており、人為的な埋填も想定される。

527号土坑は目立った出土土器はないが、長辺212cm×短辺141cm×深さ61cmの弥生時代土坑の中では最大規模を有し、上～中位に長径10～30cmの河床礫10点が存在する。埋没土中にはかなりのロームブロックが混在しており、人為的な埋填の可能性も想定される。

これら3基の土坑の機能・用途については、出土遺物の内容・状況に差異があるものの、529号と730号の場合は筒形土器や蓋に限定した意図的な毀損とその埋納あるいは副葬の可能性や、主軸方位の類似性という共通要素が認められ、これを重視すれば共に墓としての機能・用途を想定できよう。527号には副葬的な遺物は存在しないが、その主軸方位は529・730号とはほぼ直交する関係にある。また、その立地も同期の1号壺棺墓が存在する7区のX=57770～57784、Y=-75515～-75533の範囲に比較的まとまっており、相互の有機的な関係性を重視すれば、墓坑として比定することができよう。ただし、伴出遺物の内容や状態には相当の差異があり、必ずしも同一の性格付けをすることはできないであろう。

B. 後期

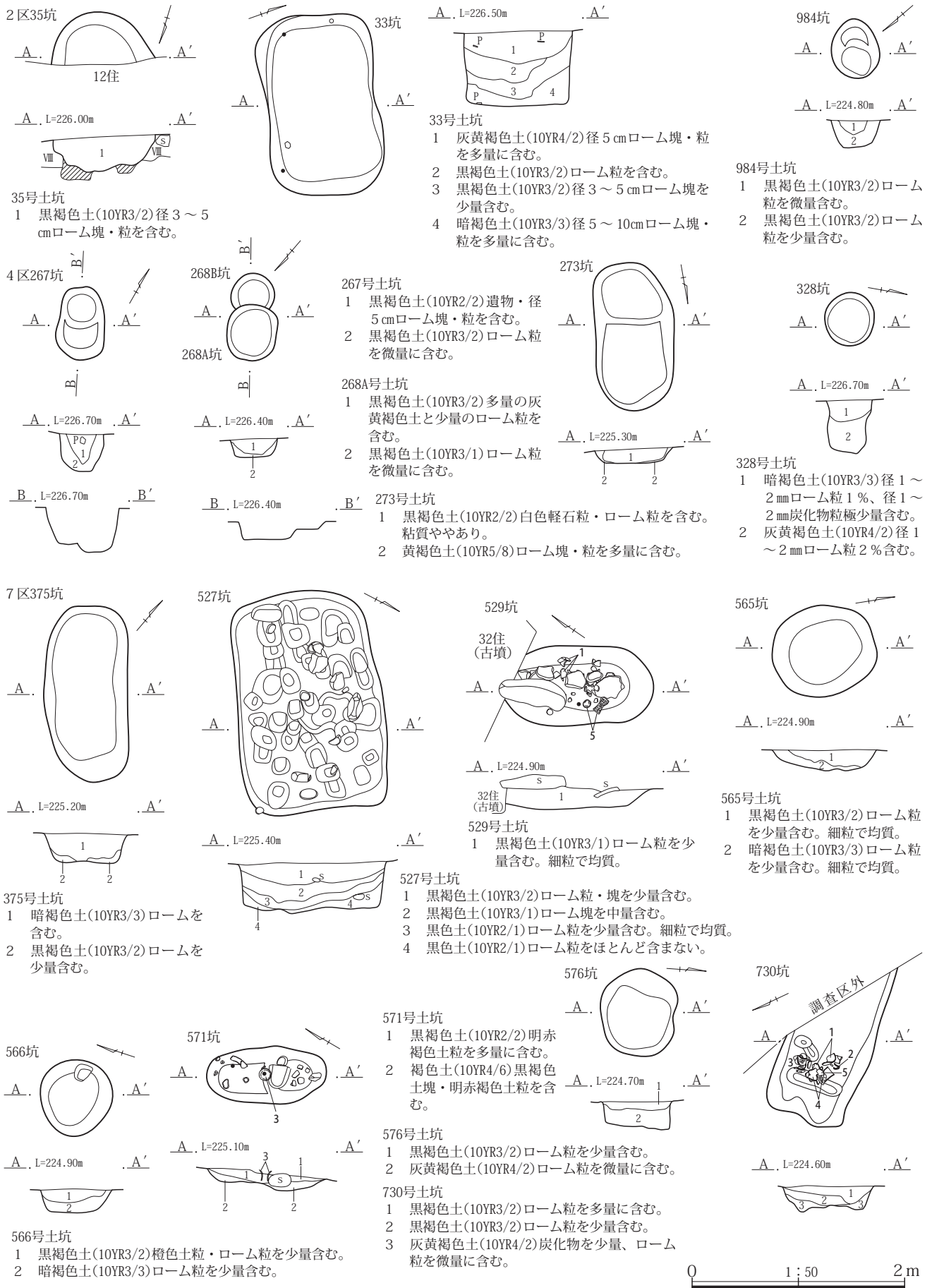
2区31～33号の3基と、7区571号の合計4基が存在し、2区を中心に偏在している。形態別に見ると、31・33号が長方形、32・571号が楕円形を呈しており、円形

土坑は存在していない。規模の面では、長径1m強の571号を除いて、他の3基は長径1.7m×深さ50～70cm前後と長大であり、形態的にも近似しているのが特徴的である。出土遺物は、571号を除いて埋没土中から少量の土器破片が出土するのみである。この571号号については、その詳細を後述する。また埋没土の状況では、約10cmと薄層の571号を除いて、各土坑ともにロームブロックを相当量含む黒褐色土や暗褐色土が堆積している。特に、32号の底面付近の全面にわたって、炭化物・灰層と焼土層が6cmの厚さで堆積しており、埋没前段階での焚火行為が認められる点で注目される。こうした状況を勘案すれば、3基の土坑は人為的に埋填された可能性が高いと言えよう。これら3基の土坑の主軸方位を見ると、32・33号はほぼ近似した方位をとるのに対して、31号はそれらと直交に近い方位をとっている。また、その立地も相互に約4mの間隔を置いてX=57935～57941、Y=-75496～-75505の狭い範囲に密集しており、機能・用途的にもその類似性や相関性が想定される。時期は異なるが、中期中葉の7区527号と形態や内容的に類似している点を重視すれば、墓坑の可能性が高い。

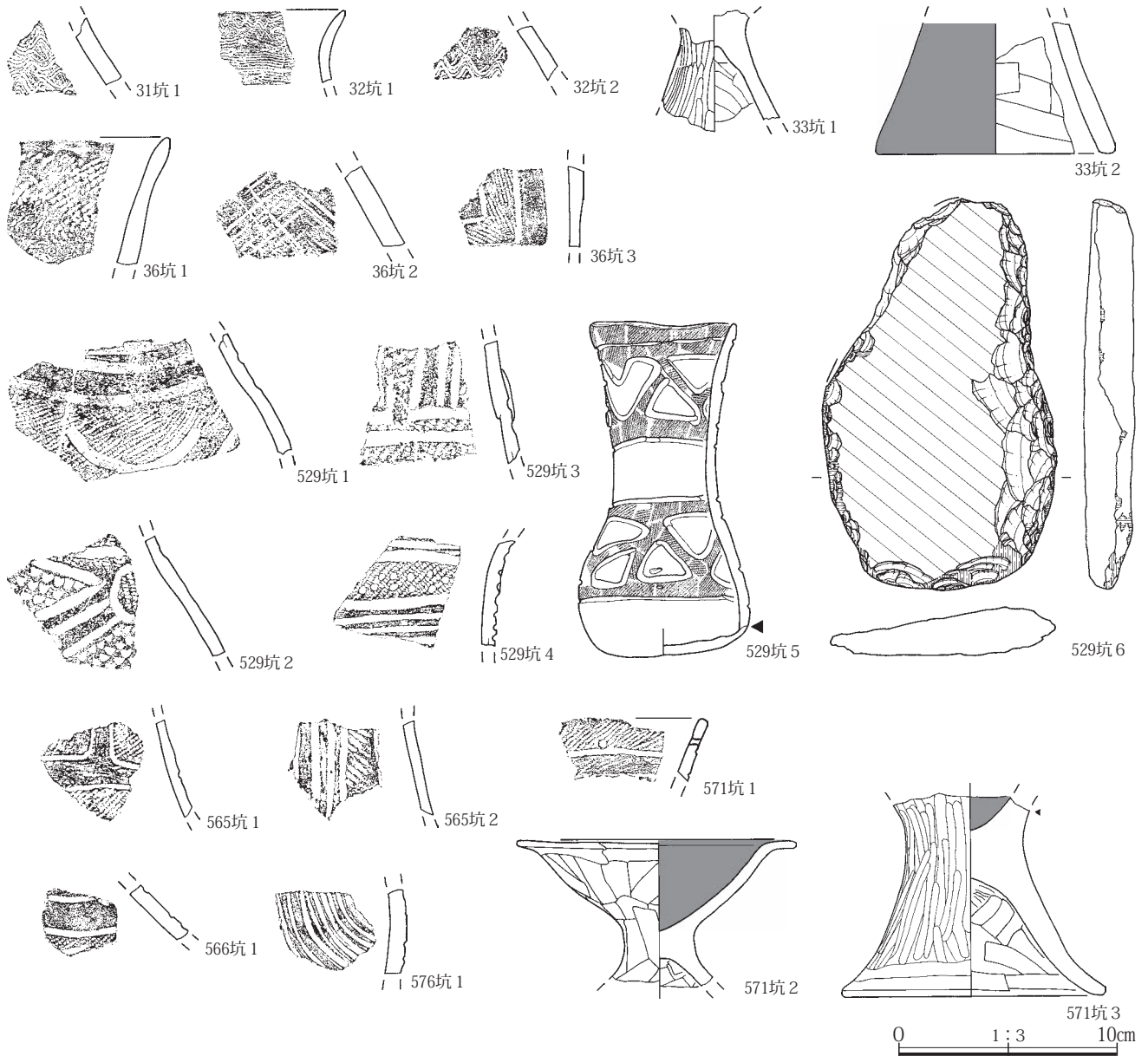
571号に関しては、長径111cm×短径54cm×深さ15cmであり、他の土坑に比べれば小ぶりである。出土遺物は、後期樽式の脚部や坏を欠失する高坏2点(第77図No.2・3)と中期中葉の土器片1点(No.1)の他に、底面中央に半割大形河床礫1点や小形亜角礫5～6点が散在している。完形土器が存在しない点では異なるが、先述の中期中葉段階の7区529号とも類似した様相を認めることができ、機能・用途的にも墓坑としての可能性が想定される。

C. 時期不明 出土土器が皆無のために明確な時期同定のできないものの、埋没土の性状が中期中葉や後期の土坑と類似するものとして、1区211号、2区35号、4区が267・273・328・948・268A・268B号の6基、7区375号の合計9基が存在する。4区に集中する傾向が認められるが、同区については繰り返し記述しているように、保存措置に伴う部分的調査という制約もあり、こうした点もその要因の一つを構成する可能性がある。また、前述した中期中葉や後期段階でも同様であったように、出土遺物が乏しい円形土坑が主体を占めていることも大きな要因と考えられる。

第3章 遺跡の調査内容



第76図 土坑(2)[2区33・35号、4区267・268A・268B・273・328・984号、7区375・527・529・565・566・571・576・730号]

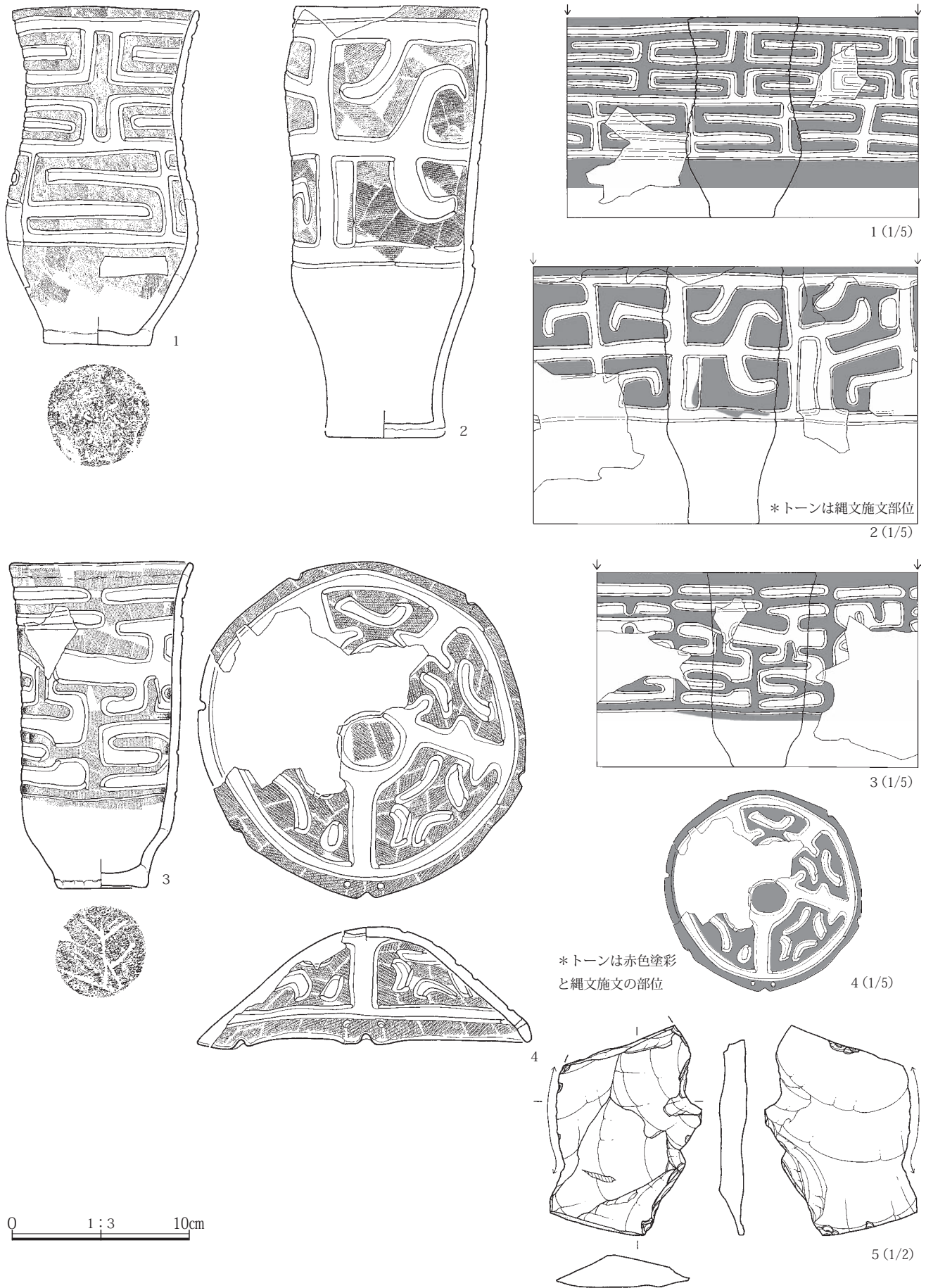


第77図 土坑出土遺物(1)〔2区31～33・36号、7区529・565・566・571・576号〕

形態や埋没土層から特徴的な様相を窺い知ることのできる土坑は少ないが、7区の南端部で検出された375号は、長径165cm×短径78cm×深さ30cmのやや長大な楕円形土坑であり、約60m北側に離れて群在中期中葉の529・730号や後期の571号とも、規模・主軸方位などの点で類似している。また、埋没土層も多量のロームブロックを含む暗褐色土がほぼ一括堆積しており、墓坑としての機能・用途が想定される。尚、当土坑の東側へ4m離れて、後述する中期の石鍬2点を伴う13号集石が近在しており、何らかの関係性を有すると仮定すれば、同期に比定される可能性もある。

(4) 掘立柱建物とピット状遺構

ピット状遺構については、第8表に掲示したように1～4・7区より86基を検出した。後述するように掘立柱建物の柱穴を構成するものや、その埋没土中に柱痕を確認できるものも散見されることから、何らかの構造物に関連した柱穴が相当数存在すると考えられる。調査区別に見ると、1区：18基、2区：41基、3区：2基、4区：16基、7区：9基であり、2区への集中が際立っている。この2区のピットに関しては、調査段階では判然としなかったが、平面図上にて柱間の間隔やその配列方向などの相関性から判断し、第80図のように1・2号掘立



第78図 土坑出土遺物(2)〔7区730号〕

3. 弥生時代の遺構と遺物

柱建物の2棟を想定復元した。また、2区北東隅のX=57939~57942、Y=-75496~-75497に存在する42・60・73・78号の4基に対して相互の連結線を引くと、70~120cmの間隔を置いて226mの等高線に沿った延長約3mの弧状の配置となる。同様に、4区北東隅のX=57992~57995、Y=-75483~-75485に位置する145・146・149・244号を連結すると、相互に0.9~1.2mの間隔を置いて225mの等高線に沿うように延長約4mの弧状配置を呈しており、共に杭列的な状況を窺うこともできる。その一方で、上記のような構造物との関連性を想定できるピットは、1・3・7区には認められず、人工的な柱穴ではない小ピットも少なからず含まれている可能性がある。

各ピットの埋没土層断面から柱痕と推定される土層堆積が確認できたものは、2区28・29・31~33・39・42・45・46・69号、7区313・314号の12基にとどまる。ま

第8表 ピット規模一覧(弥生時代)

区	番号	掲載 図版	位置		規模(cm)			備考
			座標X	座標Y	長径	短径	深さ	
1	103		57893	-75491	28	19	17	
1	107		57871	-75507	34	26	33	
1	113		57862	-75505	35	35	15	
1	114		57862	-75506	42	(38)	26	
1	115		57862	-75506	33	(16)	14	
1	116		57863	-75506	44	34	14	
1	118		57855	-75511	30	27	34	
1	121		57865	-75507	28	25	28	
1	122		57863	-75506	27	20	33	
1	123		57863	-75506	23	20	23	
1	124		57863	-75510	20	19	20	
1	125		57867	-75509	31	(15)	33	
1	127		57874	-75499	34	33	15	
1	462		57862	-75502	47	46	28	
1	463		57855	-75505	58	38	22	
1	464		57854	-75512	53	36	37	
1	465		57864	-75506	66	53	44	
1	466		57856	-75505	50	(20)	19	
2	22	第80図	57941	-75507	38	32	41	1号掘立
2	24	第80図	57939	-75507	30	27	43	1号掘立関連
2	25		57941	-75499	42	38	87	
2	26	第80図	57937	-75506	57	55	65	2号掘立
2	27	第80図	57940	-75505	28	27	37	1号掘立
2	28	第79図	57940	-75505	49	40	67	29Pに切られる
2	29	第79図	57940	-75504	26	20	60	28Pを切る
2	30	第80図	57940	-75507	37	35	32	1号掘立
2	31	第79図	57941	-75504	36	32	61	
2	32	第80図	57941	-75505	27	26	44	1号掘立
2	33	第80図	57942	-75504	41	34	53	1号掘立関連
2	34	第80図	57933	-75506	30	23	56	2号掘立
2	35		57928	-75503	48	43	75	
2	36		57928	-75503	55	43	48	
2	38		57926	-75502	32	31	39	
2	39	第79図	57941	-75501	39	37	54	45・46Pを切る
2	40		57940	-75499	25	23	28	
2	42	第79図	57940	-75496	38	38	82	
2	43	第80図	57940	-75508	42	40	28	1号掘立
2	44	第80図	57938	-75502	38	37	22	1号掘立関連
2	45	第79図	57941	-75501	(36)	(36)	57	36・46Pに切られる
2	46	第79図	57941	-75501	39	21	57	36Pに切られ46Pを切る
2	53	第80図	57935	-75504	25	20	16	2号掘立
2	58		57939	-75498	31	29	15	
2	60		57941	-75496	30	28	15	
2	62		57930	-75506	30	27	48	
2	63		57930	-75506	35	30	48	

た、掘立柱建物として想定復元した1・2号掘立についても、柱痕が確認されたのは1号掘立の32号ピットのみであり、必ずしも建物として確定的ではない点に留意する必要がある。

尚、掘立柱建物以外の各ピットの個別実測図については、柱痕が確認されたものに限定して第79図に掲載した。他のピットについては、調査区別に掲示した別添の全体図5~7を参照されたい。

当該遺構の帰属時期については、土器等の明確な遺物を伴うものが皆無であり、弥生時代として扱う事自体にも確証はない。本来的には、時期不明とすべき一群であるが、2区69号のようにVI層上面から掘り込んでいることが明確なピットの埋没土層との性状対比や、その他のピットもVI・VII層内で確認されている等の点を考慮すれば、弥生時代に比定することに大きな齟齬はないと判断される。

区	番号	掲載 図版	位置		規模(cm)			備考
			座標X	座標Y	長径	短径	深さ	
2	64	第80図	57935	-75506	25	23	44	2号掘立
2	65	第80図	57934	-75506	27	26	40	2号掘立
2	66	第80図	57938	-75504	36	32	28	2号掘立
2	67	第80図	57938	-75504	(38)	21	14	2号掘立
2	68	第80図	57941	-75503	30	26	15	1号掘立
2	69	第80図	57941	-75506	32	29	55	1号掘立関連
2	71		57939	-75493	37	35	34	
2	73		57939	-75497	32	31	23	
2	74	第80図	57934	-75933	27	24	26	2号掘立
2	76	第80図	57933	-75503	30	25	22	2号掘立
2	77		57942	-75500	35	(13)	9	
2	78		57941	-75496	31	31	34	
2	86		57942	-75501	32	32	38	
2	87		57928	-75502	33	29	40	
2	88		57928	-75496	28	27	22	
3	4		57931	-75475	41	37	9	
3	6		57933	-75476	(35)	(30)	11	
4	130		57981	-75515	40	(23)	42	
4	131		57985	-75509	41	35	13	
4	132		57987	-75511	41	39	14	
4	133		57991	-75486	27	24	19	
4	135		57988	-75484	20	17	10	
4	137		57992	-75497	22	22	25	
4	142		57988	-75487	24	23	29	
4	145		57992	-75485	24	21	17	
4	146		57993	-75484	24	18	20	
4	148		57992	-75484	22	15	19	
4	149		57994	-75484	28	22	30	
4	150		57992	-75489	23	20	29	
4	242		57989	-75478	43	26	46	
4	244		57995	-75482	21	16	16	
4	245		57994	-75483	28	21	10	
4	468		57987	-75491	(30)	34	27	
7	251		57728	-75549	25	22	18	
7	253		57728	-75547	32	31	22	
7	254		57722	-75550	33	(32)	20	
7	271		57734	-75544	45	34	36	
7	273		57729	-75547	28	23	14	
7	311		57767	-75522	23	19	12	
7	313	第79図	57727	-75532	33	31	43	
7	314	第79図	57725	-75531	37	32	29	
7	327		57741	-75539	33	22	31	

平面形態は、いずれも円形またはそれに近似した楕円形状を基本としており、方形状をはじめ他の形状は認められない。

規模に関しては、各ピットの確認・調査面が必ずしも当時の掘削・構築面に限定されないことから、第8表に掲示した各内容については実際の規模を指示するものではない。直径が①30cm未満：28基、②30～49cm：52基、③50～69cm：6基であり、②グループが全体の62%弱を占める。③グループの中には、1区465号のように土坑に近似する規模のものも存在するが、底面にかけて播り鉢状に窄まる形態を有する点でピットに分類した。その他にも同様のものが存在するが、基本的に直径が50cmを下回る小坑をピットに分類しており、両者の分類境界は相対的なものである。

埋没土の状況は、多少に関わらずロームブロックを含む黒褐色土や暗褐色土が堆積しているものが主体を占め、第79図に掲載したピットについては、人為的な埋填の可能性が高い。

尚、巻頭の凡例記載の通り、発掘調査時にピットとした遺構について、その規模・形状・埋没土層・出土遺物等の内容を詳細に検討し、小動物や草木等の非人為的土壌攪乱に起因すると判断される7基を欠番とした。

以下、2区の1・2号掘立柱建物の詳細について、記述する。

● 2区1号掘立柱建物

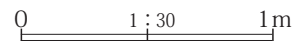
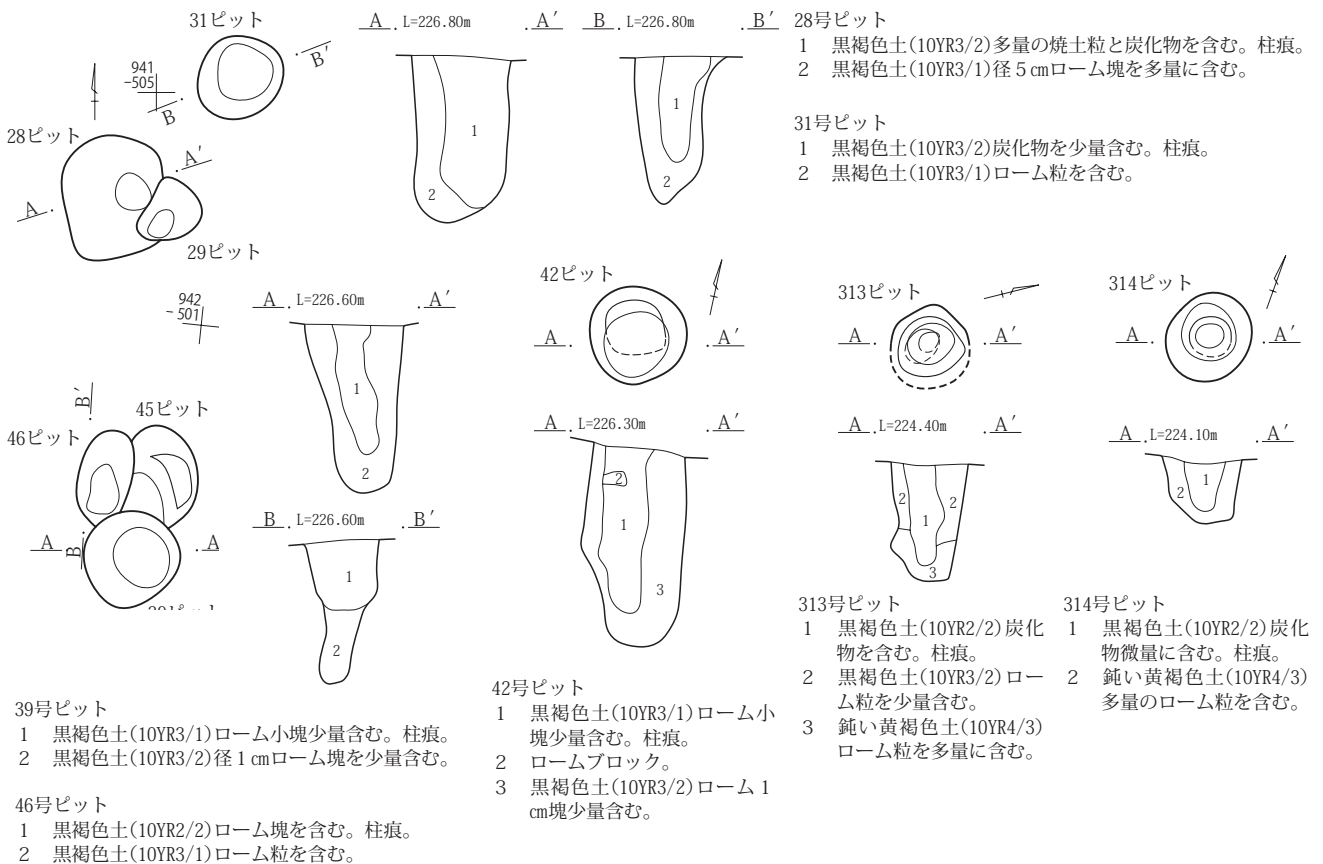
位置 X=57940 Y=-75503

方位 N88度W 区画内面積 5.77㎡

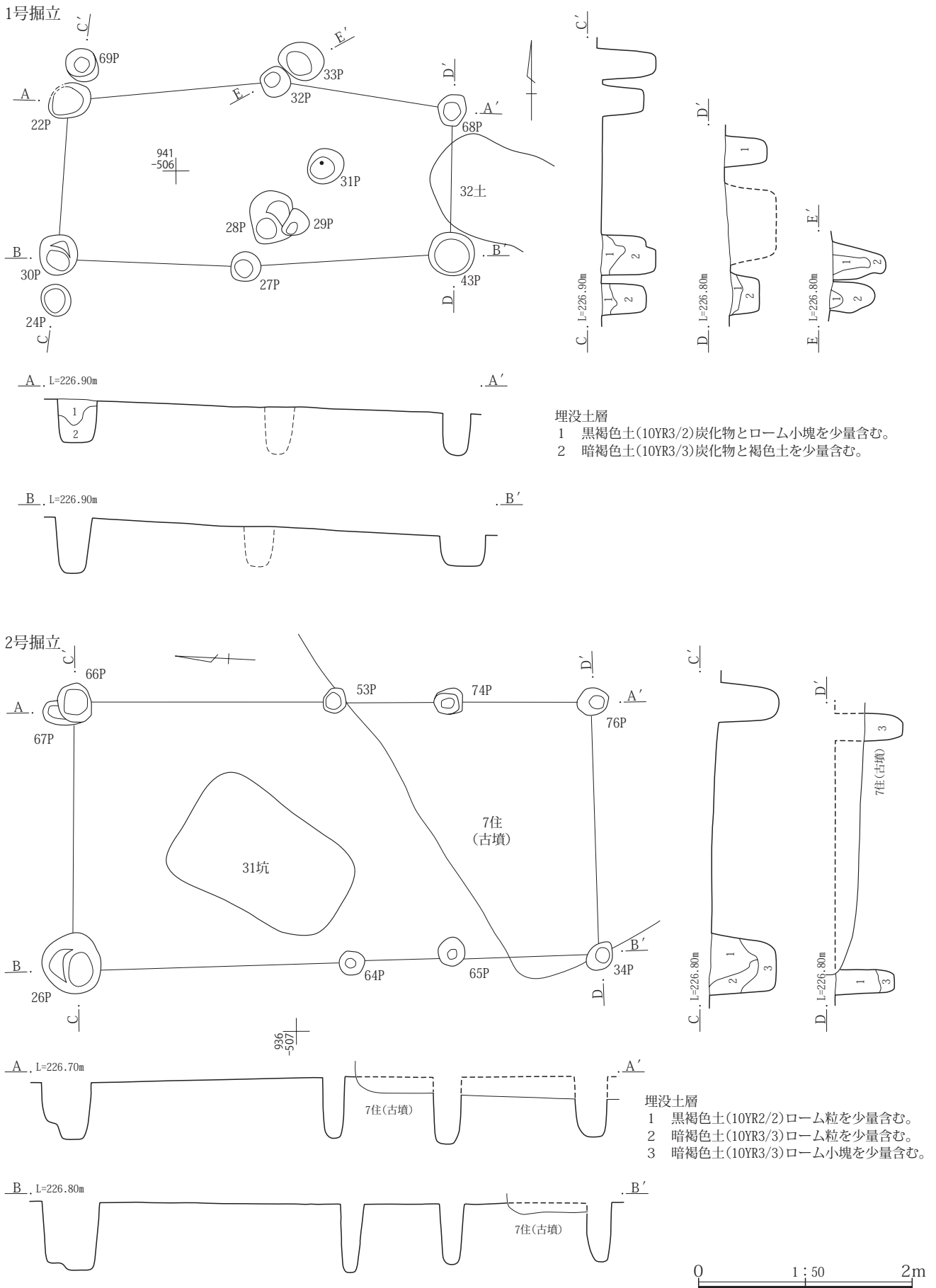
重複 柱穴区画内で32号土坑や28・31号ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線に直交するように、長軸を東西方向にもつ梁行1間×桁行2間の長方形を呈する側柱建物として復元した。長軸方向の柱通しは、北・南側ともに中間柱が15～20cm外側にずれて、やや不整形を呈する。

規模 長軸方向の桁行では北辺3.58m・南辺3.72m、



第79図 ピット〔2区28・29・31～33・39・42・45・46・69号、7区313・314号〕



第80図 2区1・2号掘立柱建物

短軸方向の梁行では東辺・西辺ともに1.42mを測る。

柱 穴 長軸3本、短軸2本の6本側柱構造であり、各柱穴の規模(直径×深さ)は22P:38cm×41cm、24P:30cm×43cm、27P:28cm×37cm、31P:36cm×61cm、43P:42cm×28cm、68P:30cm×15cmを測る。また、各柱穴の芯々間の距離は22P~32P:1.94m、32P~68P:1.65m、30P~27P:1.80m、27P~43P:1.94m、22P~30P:1.40m、68P~43P:1.42mを測る。22P・24・32Pに近接する69・30・33Pは、建替え等に伴う柱穴の可能性もある。尚、33Pの埋没土層内から柱痕が検出されている。

所 見 帰属時期については、前述したように伴出遺物が皆無であることから確定できない。ただし、当建物の構築地点には32号土坑をはじめ後期の33・34号土坑などの墓坑が共に集中しているのに対して、同期の竪穴住居はその10m南側に離れており、その立地が明確に区分されている点は注目される。

●2区2号掘立柱建物

位 置 X=57933 Y=-75503

方 位 N3度W **区画内面積** 11.70㎡

重 複 柱穴区画内で2区31号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形 状 斜面地の等高線に平行するように、長軸を南北方向にもつ梁行1間×桁行2間の長方形状を呈する側柱建物として復元した。桁行の対向する1箇所に2本の塚柱を持つ。長軸方向の柱通しは、北・南側ともに直線的であり、かなり均整のとれた形状を呈する。

規 模 長軸方向の桁行では東辺4.86m・西辺4.76m、短軸方向の梁行では北辺2.44m・南辺2.42mを測る。

柱 穴 基本的には塚柱を除く長軸3本、短軸2本の6本側柱構造であり、各柱穴の規模(直径×深さ)は26P:57cm×65cm、34P:30cm×56cm、53P:25cm×16cm、64P:25cm×44cm、67P:38cm×14cm、76P:30cm×22cmを測る。塚柱2本は65P:27cm×40cm、74P:27cm×26cmである。また、各柱穴の芯々間の距離は26P~64P:2.44m、64P~34P:2.32m、67P~53P:2.42m、53P~76P:2.44m、26P~67P:2.44m、34P~76P:2.42mを測る。塚柱部分では64P~65P:0.96m、65P~34P:1.36m、53P~74P:1.08m、74P~76P:1.36mである。26P・67Pの北側張出部分は、抜柱痕の可能性もある。尚、各柱穴の埋没土層内か

らは、柱痕は検出されなかった。

所 見 帰属時期については、伴出遺物が皆無であることから確定できない。1号掘立柱建物と当該建物とを比較すると、主軸方位では約90度の差異があり、また柱間隔では1号が1.8m、当建物が2.4mを基本とする点で大きな差異が認められる。こうした差異は、両者の帰属時期やその機能・用途の違いを反映している可能性が高いと考えられる。

(5)集石遺構

7区から13・17・21号の3基が検出されたのみである。下部に土坑状の掘り込みを伴う13号と、持たない17・21号の2タイプが認められる。前者は長径10~20cm大の垂角礫10数点を主体に密集構成され、後者は長径40~70cm大の河床礫1・2点を主体にしてその近縁に長径10cm前後の垂角礫4~5点を配置している。各集石遺構の石材には、垂角礫を中心に被熱によると推定される若干の赤変が認められるが、顕著な比熱剥離や炭化物・焼土などがほとんど認められない点で、当該箇所での焚火等の加熱行為は無かったと考えられる。また、各集石の構築面はVI層内であるが、13号の土坑状の掘り込み面については不明である。

分布状況を見ると、13号は7区の南端部に偏在するのに対して、17・21号は同区の中央部に隣接しており、主要な構成石材の差異を含めて、両者間には機能・用途差が存在する可能性が高い。

尚、帰属時期については確定的ではないが、13号や21号の近縁に弥生時代中期に多見される石鍬が出土しており、これを重視すれば同期に比定されると想定される。

以下、各集石遺構の内容について記載する。

●7区13号集石

位 置 X=57714 Y=-75550

写 真 P L33・108 **観察表** 440頁

重 複 無し。

形 状 中央部に長径20cm大の垂角5石を直径50cmの楕円形状に配置して、その内側にNo.3の縄文時代石皿破片を組み込み、さらに北側外縁にNo.1・2の石鍬を平置している。また、周辺部には長径10~15cm大の垂角礫や河床礫10数個が、東西98cm×南北64cmの範囲に不規則なが

らかなり密集して出土している。一部の小振り垂角礫に赤変が認められるが、中央部の大形垂角礫にはほぼ皆無である。VI層内にて検出した。

下部遺構 長径158cm×短径86cm、深さ8cmの楕円形状の浅い掘り込みを持つ。石材配置に関わる掘り方と考えられるが、底面および周壁部に焼土形成は認められない。
埋没土 焼土や炭化物を含まない、締りの乏しい黒褐色土が埋没している。

遺物 前述したように、石皿破片1点と完形品の石鍬2点が出土している。石皿破片は有縁で裏面に脚部を持つことから、縄文時代前期に帰属すると推定される。

所見 帰属時期については、縄文時代や弥生時代の遺物が混在することから確定的ではないが、完形石鍬2点の存在を重視すれば、弥生時代中期に比定される。

●7区17号集石

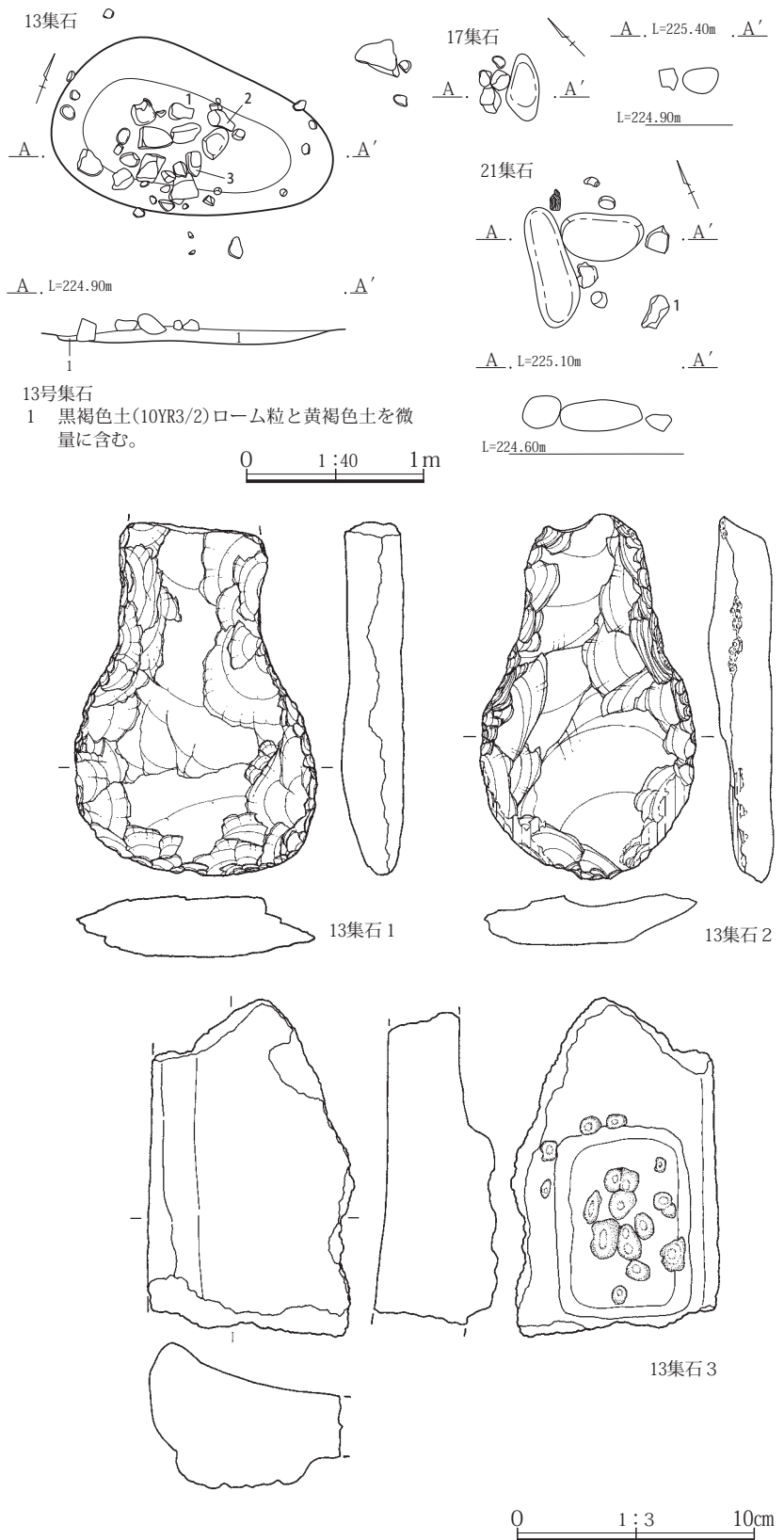
位置 X=57775 Y=-75520

写真 P L 33

重複 無し。南東側に2m離れて21号集石が存在する。

第9表 集石規模一覧(弥生時代)

区	番号	位置		集石形状	集石規模(cm)		掘方形状	掘方規模(cm)		備考
		座標X	座標Y		長径	短径		長径	短径	
7	13	57714	-75550	楕円形	98	64	楕円形	158	86	垂角礫主体
7	17	57775	-75520	不定形	40	24	無	-	-	河床礫主体
7	21	57772	-75518	不定形	80	70	無	-	-	河床礫主体



第81図 集石と出土遺物

形状 長径38cm×短径18cmの楕円形状の河床礫1石を平置し、その西隣りに直径5～12cmの垂角礫4石を配置している。垂角礫には若干の赤変が認められるが、大形河床礫は皆無である。VI層内にて検出した。

下部遺構 無し。

遺物 前述の通り、No.1・2の石鍬とNo.3の縄文時代の石皿破片が出土したのみである。

所見 帰属時期については2点の石鍬を重視すれば、弥生時代中期に比定される可能性が高い。

●7区21号集石

位置 X=57772 Y=-75518

写真 P L 33・108 **観察表** 440頁

重複 無し。北西側に2m離れて17号集石が存在する。

形状 長径68cm×短径24cmの棒状河床礫と、長径47cm×短径26cmの楕円形状河床礫をく字状に平置し、その近縁に基部を欠損するNo.1の石鍬や直径10cm前後の垂角礫4石を配置している。各石材には、被熱痕はほとんど認められない。VI層内にて検出した。

下部遺構 無し。

遺物 No.1の石鍬の他に、河床礫2点の間隙から縄文時代中期の焼町土器が出土しているが、異時代遺物の意図的な配置ではなく混在の可能性が高い。

所見 帰属時期については、平置されたNo.1の石鍬を重視すれば、弥生時代中期に比定される。

(6)溝状遺構

4区南東部の調査区外との境界にて、1条を検出した。当区では、弥生時代文化層の上位に古墳時代後期の冑着装人骨が検出されており、その保存措置に伴って弥生時代以前の遺構についても保存されることとなったため、当該遺構調査も延長7m、幅2～4mの狭小な範囲にとどまっている。以下、その内容を記載する。

●4区30号溝

位置 X=57960～57964 Y=-75473～-75480

写真 P L 34・108 **観察表** 440頁

重複 無し。

形状 断面形は法面勾配が20～40度の緩やかな逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で若干弧状に湾曲走行する。

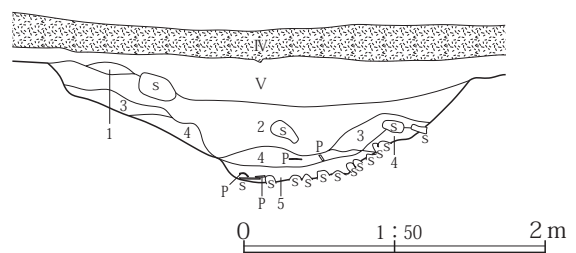
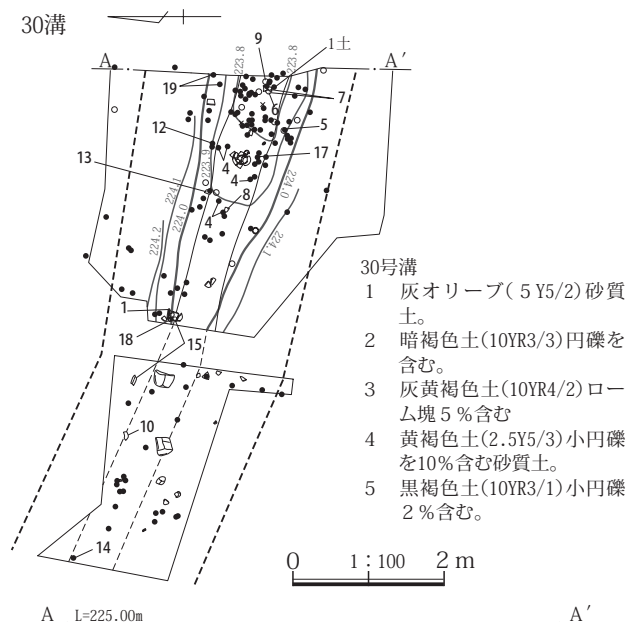
その走向は、緩斜面の等高線に直交するように掘り込まれている。

規模 上幅240～280cm、下幅45～67cm、深さ90cmを測る。延長約7mの範囲を調査したが、底面の高低差は32cmであり、約5%の勾配で西から段丘崖方向の東へと走行している。

埋没土 VI層上面を掘り込み面としており、上位1/3にはIV層(Hr-FA)やV層が堆積し、その下位に層厚40cmの暗褐色土の2層や砂礫を含む水性堆積の4・5層が堆積している。

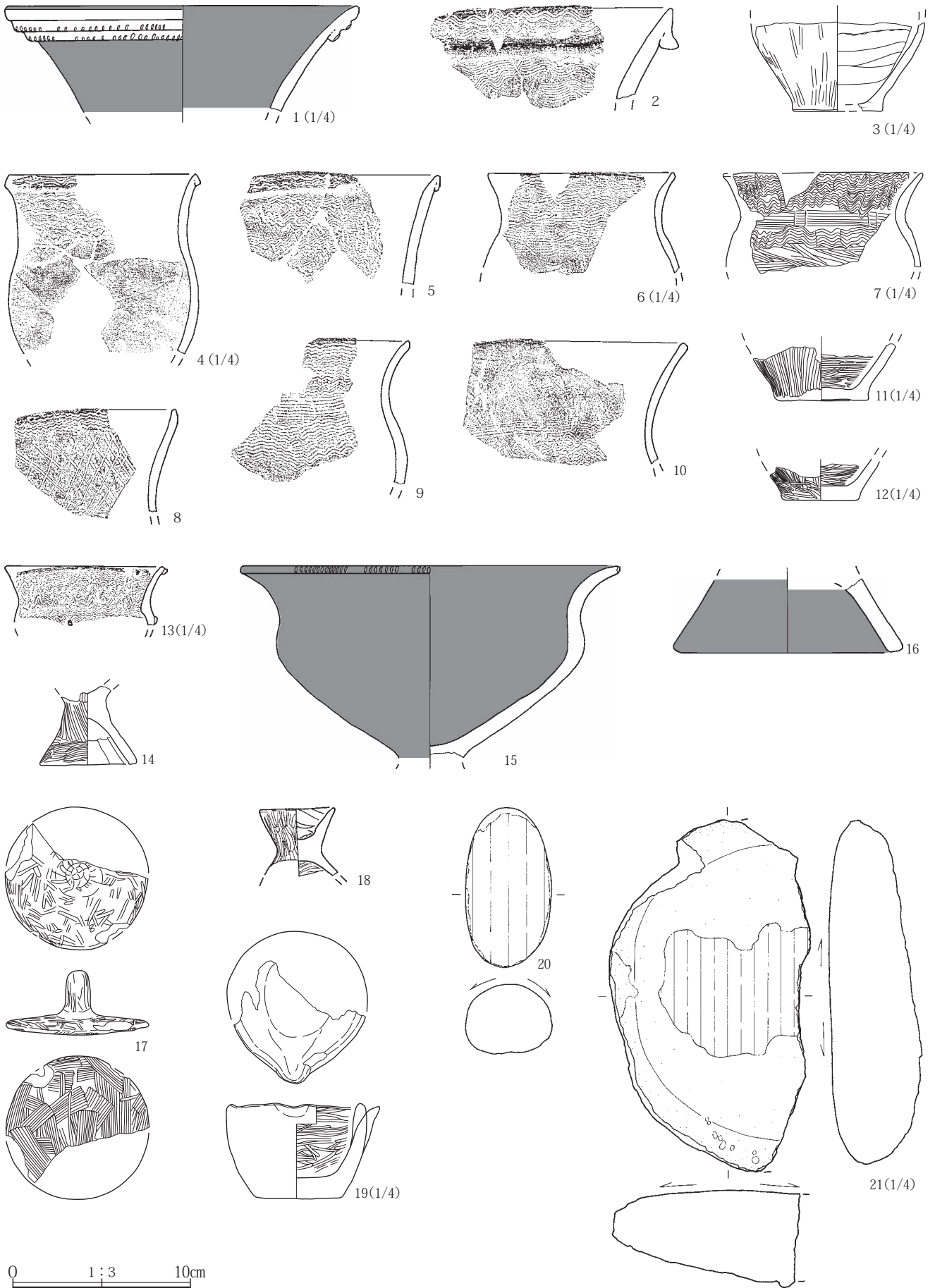
遺物 主に埋没土の2層内を中心にして、弥生時代後期樽式2～3期の壺・甕・台付甕・高坏・片口鉢・蓋などの破片類が多量に出土し、第83図20・21のような磨石類や石皿破片も認められる。

所見 上幅が3mの大規模なことや逆台形状の断面形から見て、人為的な掘削による溝状遺構と判断される。調査範囲が狭小なこともあり、その性格については確定できない。帰属時期については、出土土器から判断して後期樽式2～3期に比定される。



第82図 4区30号溝状遺構

3. 弥生時代の遺構と遺物



第83図 4区30号溝状遺構出土遺物

(7) 土器集中出土地点

1・4・9区の3地点において、口縁部や胴部を欠失した複数体の準完形土器や、多数の中・小破片化した半完形土器などが、かなり密集してVI層内から出土している。これらの土器は遺構を伴っていないことから、基本的には遺物包含層内での廃棄遺物として把握すべきものだろう。しかし、その一方で準完形の複数個体が近接したり、意図的に配置したような出土状況を示すものもあり、ここでは次項の遺構外出土遺物とは区別して扱っておきたい。以下、各遺物集中地点の内容を記載する。

●1区2号土器集中

位置 X=57894 Y=-75498

写真 P L 34・109 観察表 440頁

重複 無し。

状況 壺形土器1点の頸部下位～肩部にかけての部位が、中・小破片に分割されて長径120cm×短径90cmの範囲に密集して出土した。各破片ともにほとんど比高差がない状態で出土しており、当時の地表に廃棄されたと想定される。また、口縁部～頸部と胴部～底部は検出されていないことから、廃棄の前段階に意図的に打割られ、当該部位のみが廃棄された可能性が高い。

遺物 胴部の直径が約70cm前後の大形の壺形土器であり、口縁部～頸部と胴部～底部は欠失している。括れ部にやや間隔の広い2連止櫛描連簾文を、肩部に9帯の波状文と5単位のボタン状貼付文を施す。

所見 壺形土器の意図的な打割状態を重視すれば、何らかの儀礼行為を経た廃棄とも考えられる。当該土器は、肩部の波状文を主体とした文様構成から、弥生時代後期の樽式3期に比定されよう。

●4区1号土器集中

位置 X=57980 Y=-75487

写真 P L 35・109 観察表 440頁

重複 無し。

状況 口縁部と同部下位～底部を欠失する弥生時代中期の筒形土器(No.1)や、脚台部を欠失する同後期樽式2期の高坏(No.2)の他に、壺や甕形土器の破片7点が出土している。No.1・2は約70cmの距離を置き、共に横転ま

たは斜位に傾いた状態で、No.1がVI層下位、No.2が同中位から出土している。両者は帰属時期が異なっており、直接的な関連性は希薄であるが、No.1は口縁部や底部を意図的に打割している可能性もある。各土器の内部にはVI層が充満しており、骨類をはじめとする遺物は皆無であった。

遺物 No.1は頸部～胴部上半に横線や鋸歯状沈線による横帯文を多段に施し、R縄文を充填施文している。No.2は口縁部がく字状に強く屈曲・外反し、内外面に赤色塗彩を施す。

所見 状況的には、包含層内における時期の異なった筒形土器と高坏の偶然的な近接出土例と言えよう。ただし、No.1の筒形土器の欠失状態を意図的な打割と見なせば、前述の2号と同様に何らかの儀礼行為の存在を想定することもできよう。

●9区3号土器集中

位置 X=58047 Y=-75518

写真 P L 35・109 観察表 441頁

重複 無し。

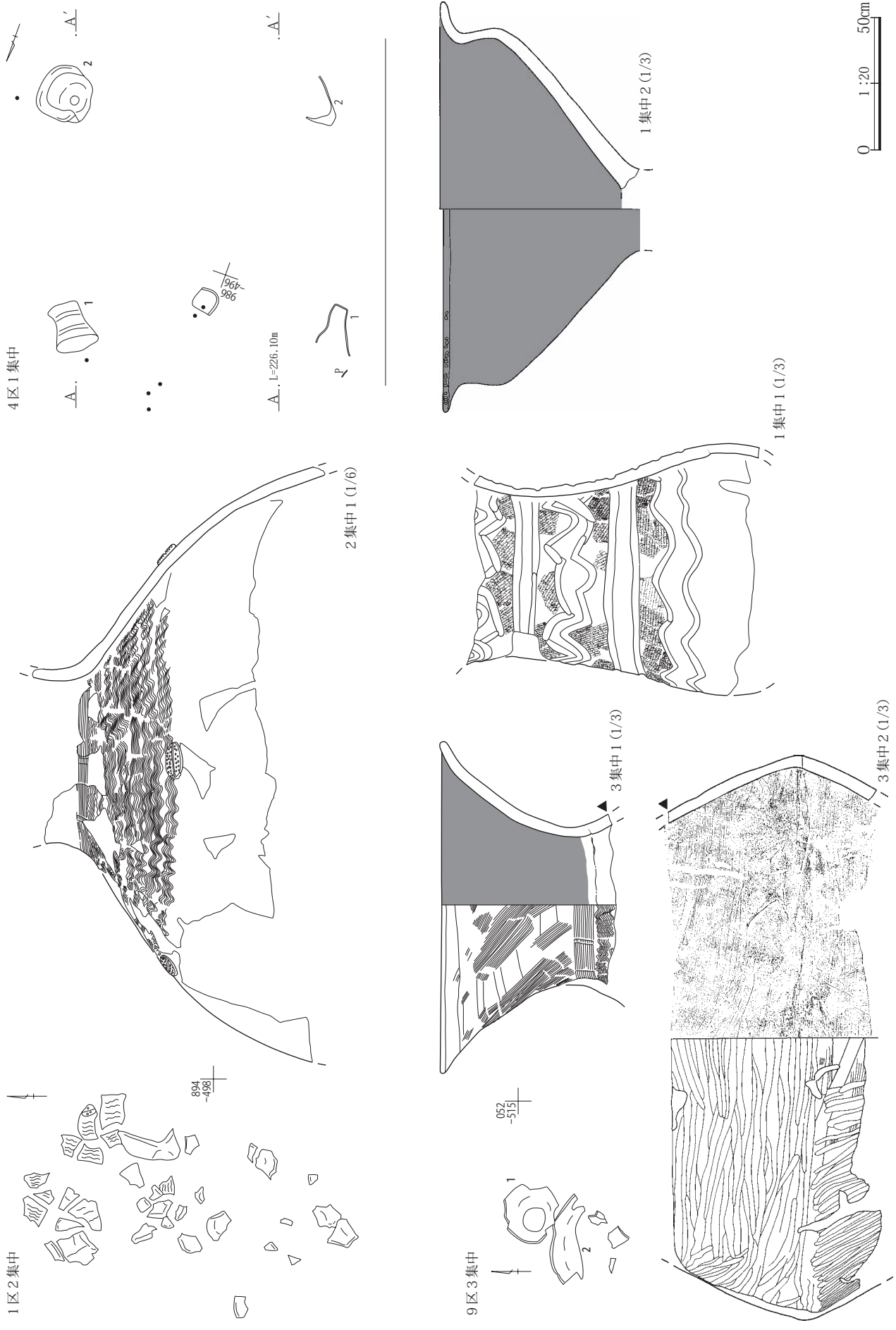
状況 口縁部～頸部のみの壺形土器No.1と胴部中位大形破片の壺形土器No.2とが、相互に隣接して出土したが、この周辺部からはそれらの関連破片は検出されなかった。また、これら2点以外に他の大形破片や密集した出土状況はなく、意図的に平置している可能性もある。

遺物 No.1は括れ部に間隔の狭い2連止連簾文を、内面の口縁部～頸部に赤色塗彩を施す。括れ部は、輪積みの接合部で欠損する。No.2の肩部破損部位は、No.1と同様に輪積みの接合部である。

所見 確定的ではないが、No.1・2の出土状況は意図的に平置された可能性がある。土器の帰属時期は、No.1の文様構成から後期樽式2期と判断される。

(8) 遺構外の出土遺物

12区を除く1～5・7～10・13区の20,865㎡の範囲に、弥生時代の遺物包含層が確認された。この包含層は、層厚5～30cmのVI層を中心として、一部はその上・下位のV層やVII層にまたがっている。第1章の「2. 調査の方法と工程」で既述したように、弥生時代の文化層に相当するVI層の上位には、V層内を構築面とする古墳時代の



第84図 土器集中地点と出土遺物

5世紀後半の集落が存在している。この集落形成に伴う竪穴住居(竪穴建物)の掘り込みは、X層のローム土上面にまで到達しており、当然のことながらこの掘削に起因して弥生時代や縄文時代の遺物包含層も、破壊・攪乱を免れていない。従って、竪穴住居の周縁に積み上げられた掘削排土による「周堤帯」内をはじめV層内には、弥生・縄文時代遺物がかなり多量に含有される状況となっている。このような状態を踏まえつつ、古墳時代遺構調査の進捗と合わせて、その下位のVI層について層位的な発掘を試行した。しかし、結果的には上述の通り、弥生時代遺物と共に縄文時代遺物が少なからず混在し、層位的な出土状態を確認することはできなかった。こうした状況を踏まえて、包含層遺物については各調査区ごとに5mメッシュのグリッド単位で取り上げ、位置情報の記録を主眼とした調査に変更した。

出土遺物の内容や数量に関しては、土器については第10表に各調査区を単位とした時期別数量を掲載した。ちなみにその総数は33,027点であり、時期別に見ると中期では初頭65点、前葉～中葉10,117点(筒形土器267点含む)、後葉663点、前葉～後葉1,368点と合計12,213点を数える。また後期では前半825点、前半～後半12,872点であり、合計では13,697点を数える。小破片かつ無文のために中期または後期かの判別困難なものが、7,117点存在する。

石器については、縄文時代石器との区別が困難な剥片石器類は除外し、特徴的な石鋤や磨製石斧などを主体に選別したが、結果的には石鋤を除いて第112図に掲載したものが全てである。尚、石鋤に関しては第111図に掲載した9点の他に、7区から13点が出土している。

遺物の分布状況については、調査対象面積が広く土器の時期別出土数量も全調査区の中で最多となる7区の出

土土器についてのみ、グリッド・型式別の出土分布を第86～88図に掲示した。尚、この分布図はグリッド取り上げ等の出土位置情報を持つ土器に限定しているため、表採等の土器を含む第10表の数量とは合致しない。また、石器については、出土点数が僅少であることから分布図作成を行っていない。

以下、各調査区ごとの遺物出土状況や掲載遺物の内容について記載する。

A. 各調査区の土器出土状況

a. 1 区

土器の時期別の内訳は、中期では前葉～中葉60点(3.8%)、前葉～後葉96点(6.1%)、後期では前半～後半1,412点(90.1%)の合計1,568点である。中期が若干存在するものの、後期が圧倒的に多数を占める。

当区で検出されている遺構については、中期は皆無であるが、後期では竪穴住居2軒(29・30号)が存在しており、当該期の遺構外遺物が多数を占める現象と整合的である。また、時期の確定はできないが、弥生時代に帰属する土坑18基やピット1基が存在する。一定量の中期土器の存在を考慮すれば、逆にそれら土坑の中にも中期に比定されるものが存在する可能性もあろう。

b. 2 区

土器の時期別の内訳は、中期では前葉～中葉142点(筒形土器11点を含む、4.7%)、後葉26点(0.9%)、前葉～後葉357点(11.9%)、後期では前半～後半2,270点(75.9%)、中期～後期196点(6.6%)の合計2,991点を数える。中期が2割弱存在する点で注意されるが、1区とほぼ同様に後期が多数を占める。

当区で検出されている遺構については、中期は土坑のみであるが1基(36号)が存在し、後期では竪穴住居2軒(2・12号)、土坑3基(31～33号)が存在するなど、遺構

外遺物との相関性が窺える。また、時期の確定はできないが、他区には認められない掘立柱建物2棟も存在しており、注目される。

c. 3 区

土器の時期別の内訳は、中期では前葉～後葉15点(8.8%)のみであり、後期では前半～後半155点(91.2%)の合計170点を数える。調査面積の狭小さや竪穴住居・土坑などの構築が皆無な状況に比例して、出土した土器点数は少ないが、

第10表 遺構外出土の未掲載土器数量時期別一覧(弥生時代)

区	中期					後期			中期～後期	合計	
	初頭	前葉～中葉	(筒形)	後葉	前葉～後葉	小計	前半	前半～後半			小計
1		60			96	156		1,412	1,412		1,568
2		131	11	26	357	525		2,270	2,270	196	2,991
3		15				15		155	155		170
4		18		1	457	476		5,582	5,582	97	6,155
5		4			97	101		49	49		150
7	65	9,622	256	636	148	10,727	787	4	791	6,824	18,342
8					205	205					205
9					8	8	25	3,232	3,257		3,265
10						0	9	135	144		144
13						0	4	33	37		37
合計	65	9,850	267	663	1,368	12,213	825	12,872	13,697	7,117	33,027

後期が主体を占めている点は西側に近接する2区の影響を受けていると考えられる。

d. 4 区

土器の時期別の内訳は、中期では前葉～中葉18点(0.3%)、後葉1点(0.0%)、前葉～後葉457点(7.4%)、後期では前半～後半5,582点(90.7%)、中期～後期97点(1.6%)の合計6,155点を数える。

当区は、古墳時代の冑着装人骨出土に伴う遺跡保存措置により、調査対象面積を536㎡と狭小範囲に限定されているにもかかわらず、全区の中で最多の後期竪穴住居4軒(4・8・27・33号)を検出している。単位面積当たりの竪穴住居検出数を考慮すれば、当区が後期集落の中心域であったと想定でき、それが包含層内の同期土器点数の多さと連動していることが看取される。また、中期の土器数量も単位面積比で見れば、7区に次ぐ多さであり、時期の確定できない土坑6基やピット16基などの遺構との関連性も考える必要があろう。

e. 5 区

土器の時期別の内訳は、中期では前葉～中葉4点(2.7%)、前葉～後葉97点(64.7%)、後期では前半～後半49点(32.6%)の合計150点を数える。総点数が少ないものの中期が後期を上回る点で注意されるが、当区で検出されている遺構は皆無であり、基本的に北側に隣接する7区の様相の影響を受けていると考えられる。

f. 7 区

土器の時期別の内訳は、中期では初頭65点(0.4%)、前葉～中葉9,878点(筒形土器256点を含む。53.8%)、後葉636点(3.5%)、前葉～後葉148点(0.8%)、後期では前半787点(4.3%)、前半～後半4点(0.0%)、中期～後期6,824点(37.2%)の合計18,342点を数える。中期全体では10,727点と全点数の58%を占めるが、後期全体でも791点に過ぎないことを考慮すれば、分類困難な中期～後期6,824点の大半は中期に比定されると言えよう。これを中・後期の出土点数比率で按分すれば、6,355点が中期に帰属することになる。これを合算した場合には中期が17,082点を数え、全体の93%を占めることになる。これら各期土器の分布状況については、5mメッシュのグリッドを単位にしてその数量を第86～88図にプロットした。また、説明の煩雑さを回避するために、第85図に各グリッドの仮番号(以下、G1・G2等と呼称)を設定して

おり、これに準拠してその分布状況を以下に記述する。尚、北端部のG86～91では各期土器の分布が希薄または皆無の区域となっているが、当域は農道として調査対象範囲から除外された部分であるため、実態を反映していない点に留意されたい。

中期中頭(第86図) 全数量が65点と僅少なこともあり、中心的と言えるほどの分布域は認められないが、G52～82は空白またはそれに近似した希薄な区域となっている。一方、その南側では散漫ながらも各グリッドから土器が出土しており、中心的な分布域形成の兆候が認められる。尚、当該期の明確な遺構は皆無である。

中期前葉～後葉(第86・87図) 当段階の土器分布は、第86・87図において前葉～中葉と筒形土器・後葉の3つに分類して掲示した。数量的に多い前葉～中葉で見ると、その分布はほぼ全域にわたっているが、濃密度なのはG46～79であり、特にG46・50では500点以上が出土している。また、上述したようにその大半が中期に帰属する可能性が高い第88図の中期～後期の分布も、ほぼ同様の状況を示している。一方、第87図の筒形土器や後葉段階では、その分布が若干南半部に偏在する傾向も認められ、次段階の後期前半に近似した様相を見せている。

遺構分布との関連性では、当期の竪穴住居は存在しないが、527・529・565・566・576・730号の7基の土坑がG53～77にかけての中央部区域に散在し、濃密な土器分布区域ともほぼ合致した状況を看取することができる。ただし、17,000点を超える土器数量の産出が、これら数基の土坑構築との関連のみでなされたとは考え難く、竪穴住居とは異なる何らかの居住施設の存在を考慮する必要がある。

後期前半(第88図) 総数787点中の761点を第88図にプロットしたが、前述の中期に比べて数量が激減している。ほぼ全域にわたって分布するが、北側のG68・75では70点前後のかなり密集した出土が認められる。また、南端部のG7～30では、やや広い範囲に10～20点前後の比較的まとまった分布が見られる。

こうした分布状況と当該期の遺構との関連性を見ると、前者の場合には墓坑と想定される571号土坑がその南側に近接し、後者では樽式1期の44号住居が存在している。両区域における場的機能は異なると考えられるが、葬祭儀礼行為や定住生活の過程でその周辺部に投・遺棄

されたものと想定される。

g. 8 区

土器の時期別の内訳は、中期の前葉～後葉が205点を数えるが、後期は皆無である。当区内での遺構も皆無であるが、中期土器が少量ながらも存在する点は、西側に隣接する7区との関連性が想定される。

h. 9 区

土器の時期別の内訳は、中期では前葉～後葉8点(0.2%)、後期では前半25点(0.8%)、前半～後半3,232点(99.0%)の合計3,257点を数える。

当区については、「第1章 発掘調査の概要」にて既述したように、遺跡保存措置に伴い破壊を免れない橋脚部分の狭小な465.01㎡についてのみ調査実施した関係もあり、遺構は検出できなかった。しかし、当区の南側に近接する4区では、後期の竪穴住居4軒や時期の確定できない土坑6基、ピット16基等が存在しており、これらと同時期の遺構が保存区域内にも存在した可能性が高い。言わば、集落内での生活廃棄物的な様相を呈すると考えられる。

i. 10 区

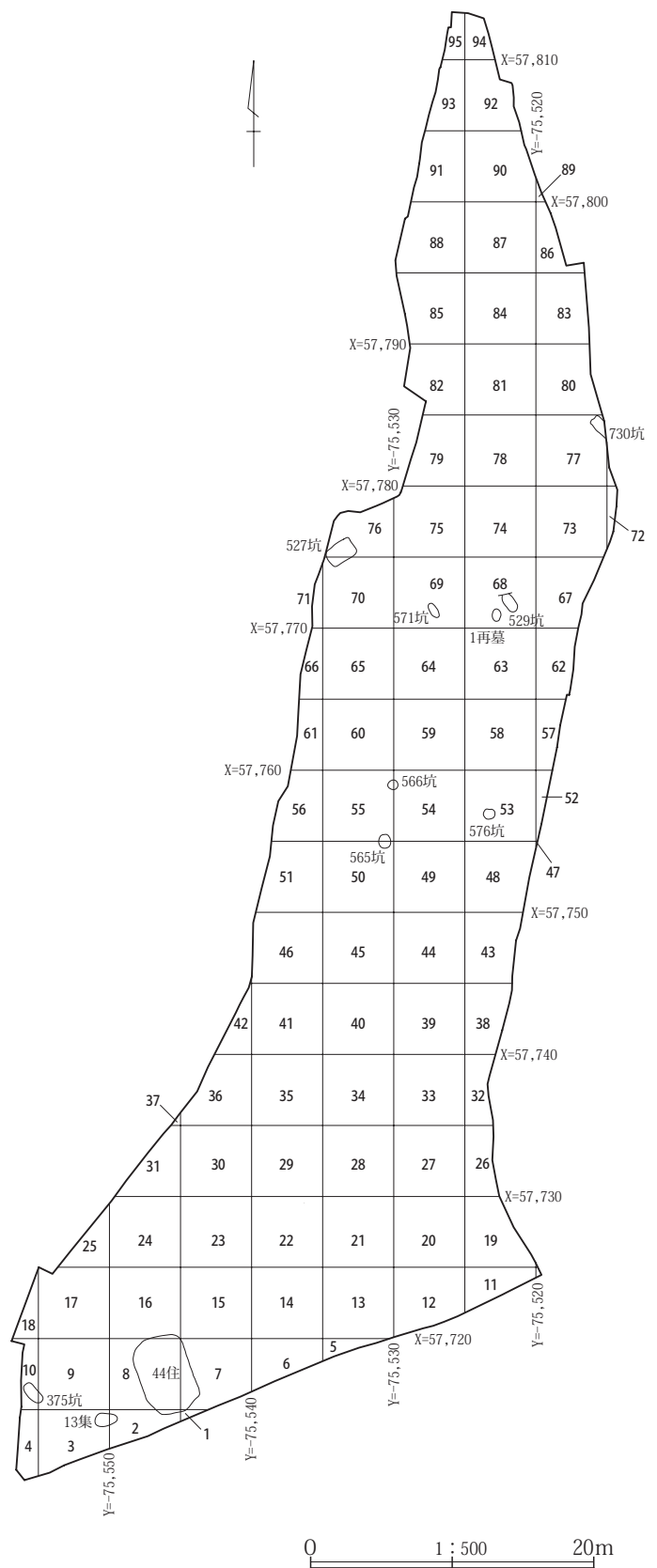
10区北を含む土器の時期別の内訳は、中期は皆無であるが、後期では前半9点(6.3%)、前半～後半が135点(93.7%)の合計144点を数える。土器数量の僅少な中で、10区北から人形土器の頭部破片1点が出土しているのが特筆される。

2,800㎡を超える調査面積にもかかわらず、当該期の遺構は皆無であり、上記のような僅少点数の出土状況とも相応していると言える。おそらく当区は、前述した4区を中心とする後期集落の外縁部に相当すると考えられ、人為的な活動の希薄さが反映したものであろう。ただし、上記のような人形土器が出土する点については、集落外縁部における何らかの儀礼の存在も考慮される。

j. 13 区

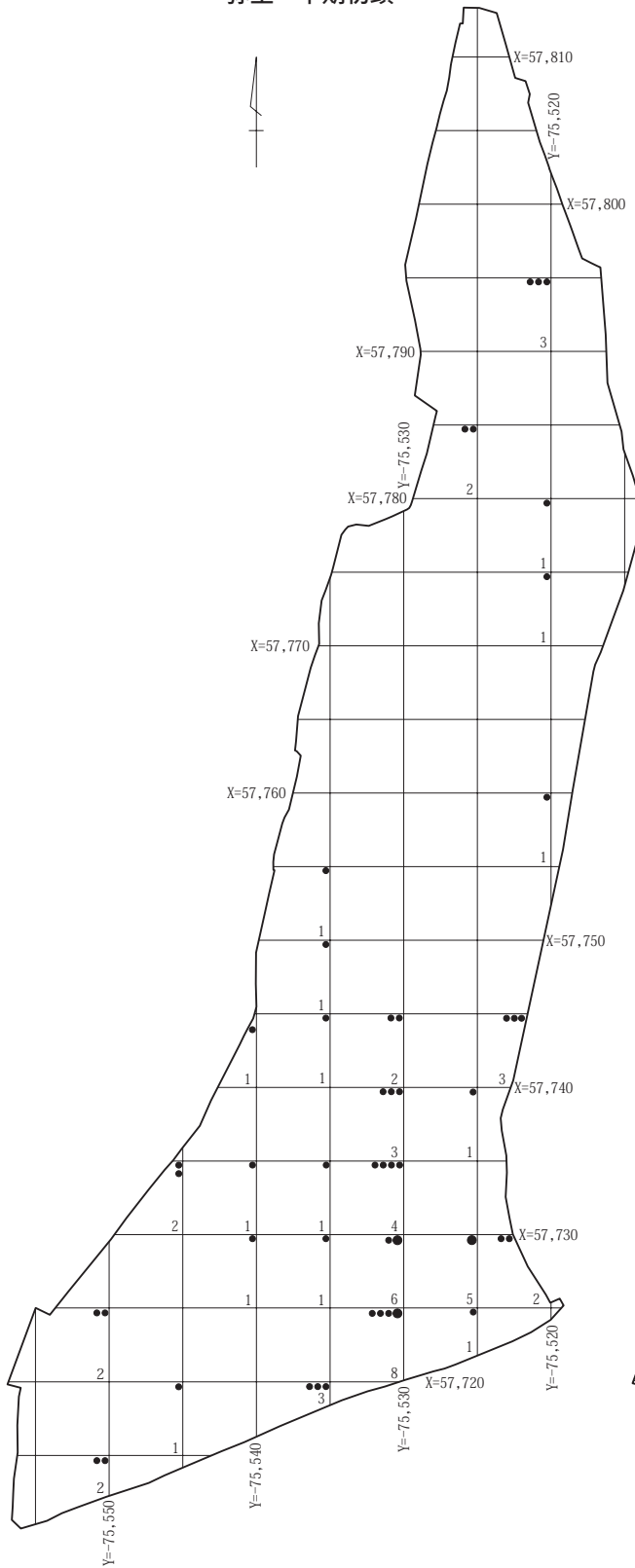
土器の時期別の内訳は、中期は皆無であり、後期では前半4点(10.8%)、前半～後半33点(89.2%)の合計37点を数えるのみである。

全調査区の中で最大調査面積の3,800㎡弱を測るが、10区と同様に当該期の遺構は皆無であるだけでなく、土器数量的に同区よりもさらに減少している。位置的には10区の50mほど北側に当たり、集落中心部からの距離に

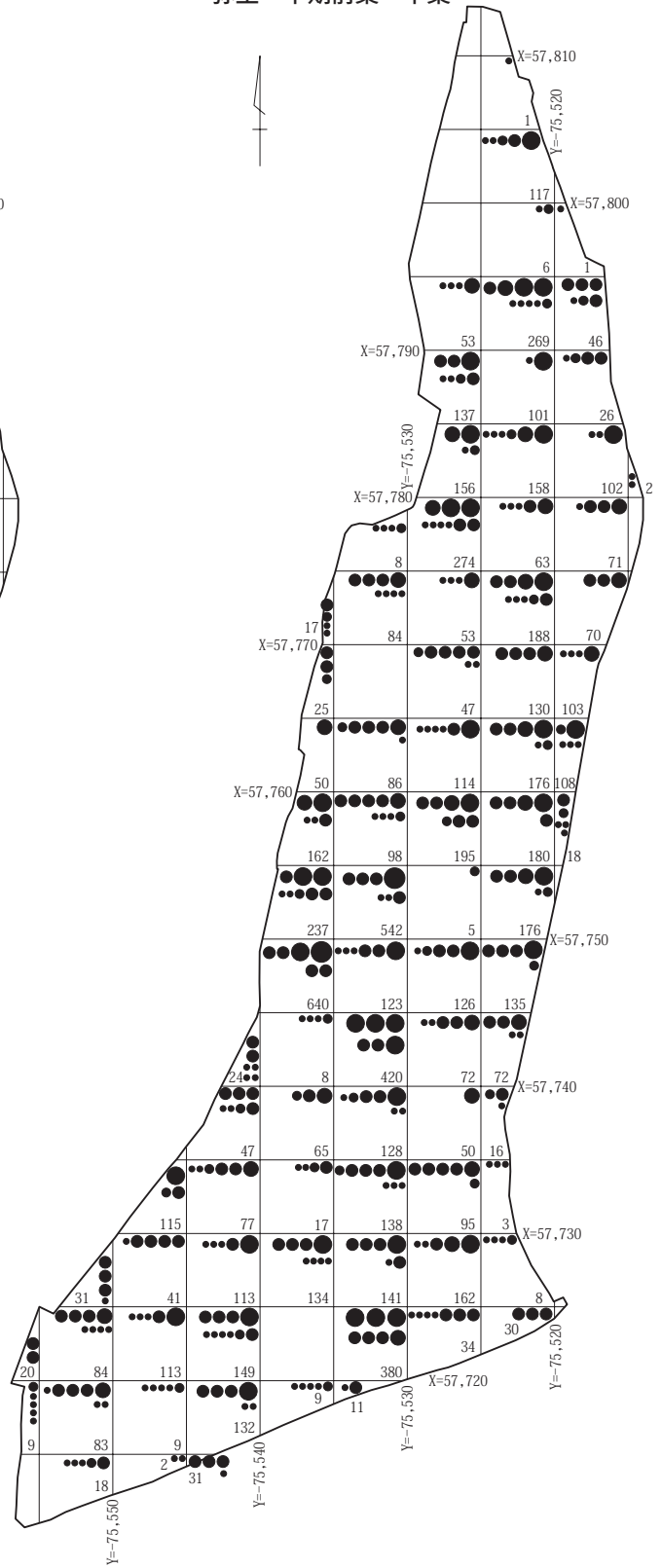


第85図 7区のグリッド番号と弥生時代遺構の分布

弥生・中期初頭



弥生・中期前葉～中葉



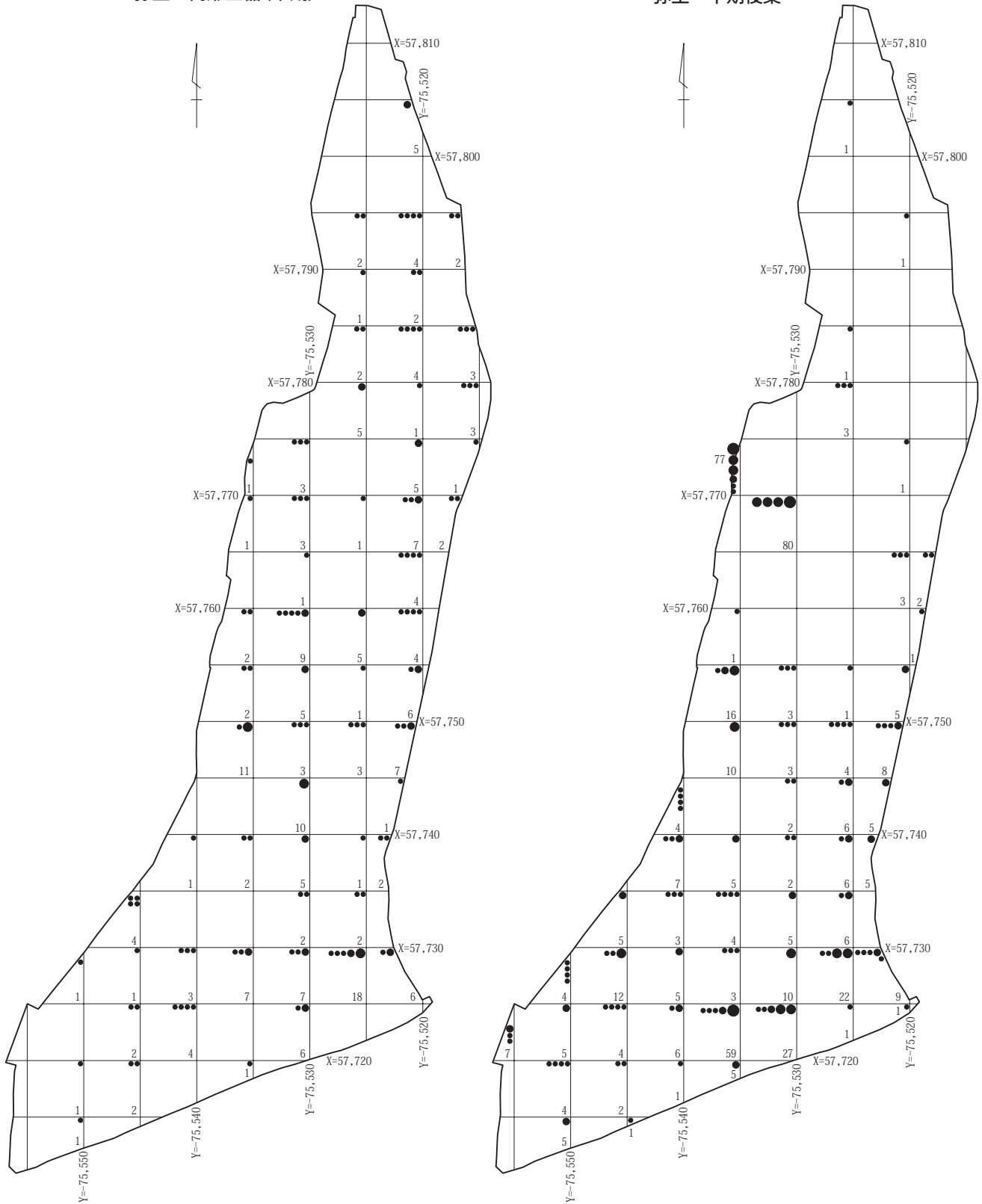
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第86図 7区遺構外出土弥生土器のグリッド別分布(1)

弥生・筒形土器(中期)

弥生・中期後葉



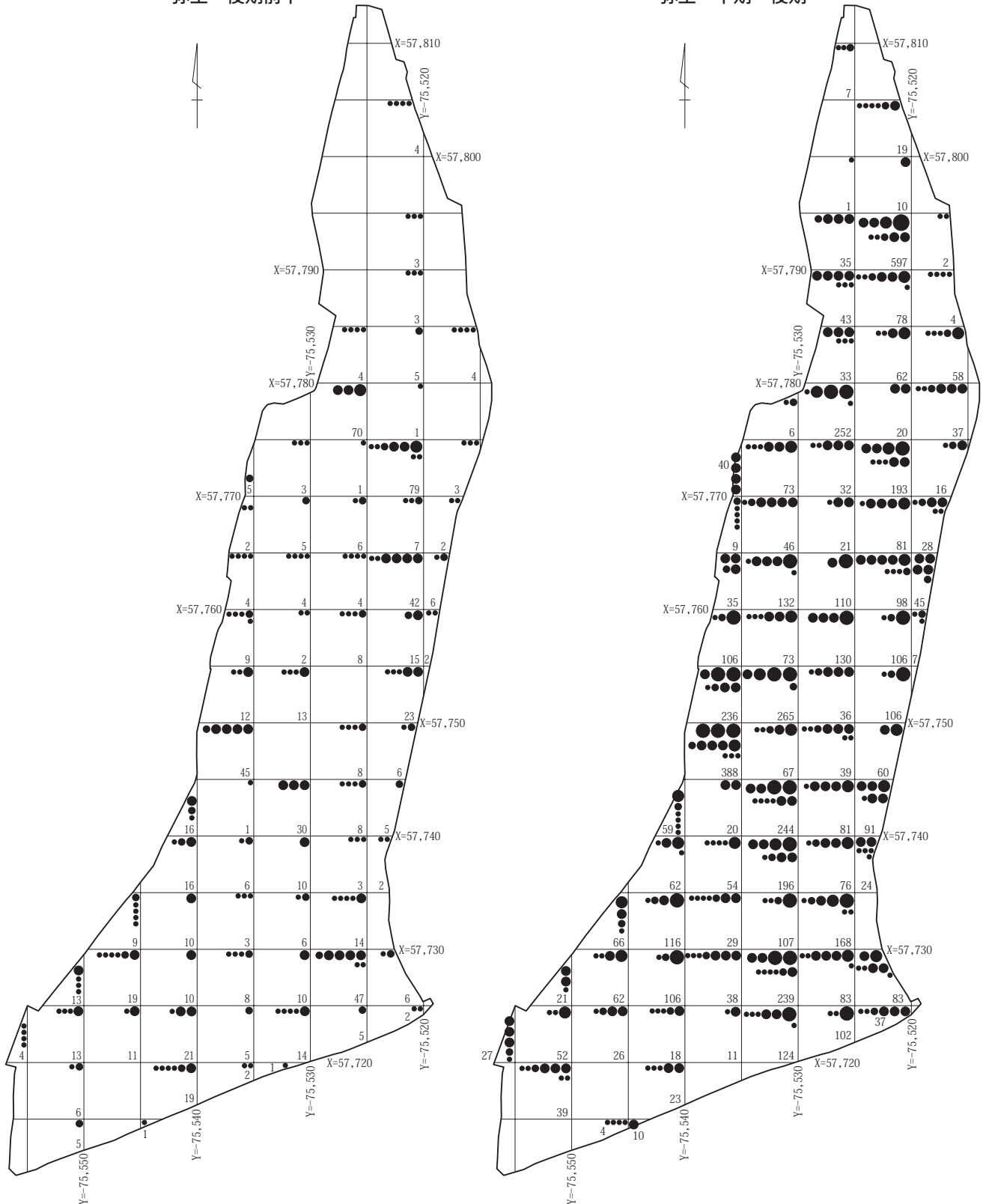
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第87図 7区遺構外出土弥生土器のグリッド別分布(2)

弥生・後期前半

弥生・中期～後期



● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第88図 7区遺構外出土弥生土器のグリッド別分布(3)

比例して出土遺物量が減少する傾向が明瞭である。

B. 各調査区の掲載土器の内容

a. 1 区

中期前葉～中葉(第89図1～6・8・9・15、PL109・110) 後葉を含めて総数156点が検出されている。15は前葉段階の無文深鉢である。8～10は、櫛描羽状文や刺突文を施す栗林式であり、中葉段階に比定される。1・2・5の短頸壺や甕の口縁部破片は、口唇部にLR縄文を施すもので、他の3・4・6と共に前葉～中葉段階に比定される。横線文や弧線文、鋸歯文などが多用されるが、施文具では棒状具を用いる1・3と櫛状具による5・6・8～10などがある。

胎土は壺・甕ともにEタイプが主体を占めるが、栗林式ではE1タイプに限定され搬入品の可能性もある。

後期前半～後半(第89図7・11～14・16～21、PL109・110) 総数1,412点の樽式土器が検出されている。肩部に矢羽状や鋸歯状の沈線文を施す12は樽式2期に比定される。11・13・14の壺、16・17・21の甕、7・18・20の台付甕、19の鉢などは、平坦な複合口縁や3連止連簾文・やや乱雑な波状文等の特徴から、同3期に比定されよう。

胎土はDタイプが主体を占めるが、壺類にはEタイプが目立つ。6は雲母を含むB1タイプであり、注目される。

b. 2 区

中期前葉～中葉(第90図22～41、PL110・111) 後葉を含めて総数525点が検出されている。22～41は前葉～中葉段階に位置付けられるが、横線文や波状文を施してLR縄文を充填施文する22～24の壺や32～35の甕、沈線文や隆帯文・刺突文・貼付文を施す25～28の小型壺、方形状入組文やLRの充填縄文を施す29～31の筒形土器、LR縄文を全面施文する36の甕、口唇部のLR縄文やほぼ全面に条痕文を施す37～39の甕、カナムグラの疑似縄文を口唇部上面や口縁部に施文する41の鉢などが認められる。

胎土はDタイプが主体を占めるが、小型壺の26・28は僅少なK2タイプであり、搬入品の可能性を含めて注意を要する。

後期前半～後半(第90図42～48、PL111) 総数2,270点の樽式土器が検出されている。口縁部～胴部上位にかけて櫛描の波状文や連簾文を施す42～44の甕、同じく台付甕の47、括れ部に篋状具の刻み状刺突文を施す東海地方の清水天王山式に近似した48の甕などが認められる。平

坦な複合口縁とやや乱雑な櫛描波状文の様相から、いずれも樽式3期に比定される。

胎土の傾向については、掲示した点数が少ないために判然としないが、44は雲母を含む僅少なB1タイプであり、注目される。

c. 3 区

中期前葉～中葉(第91図49・50、PL111) 総数15点が検出されている。49は方形状入組文とLR充填縄文を施す鉢で、口唇部近縁に直径3mmの焼成前穿孔を持つ。50は胴部に波状文と充填的なLR縄文を施す甕である。

胎土タイプの傾向については、掲載数が僅少なために判然としない。

後期前半～後半(第91図51～53、PL111) 総数155点の樽式土器が検出されている。51・52は、口縁部～胴部上位にかけて櫛描の波状文やT字文を施す甕であり、整然とした複合口縁の状態から樽式2期に比定されよう。

胎土については、中期と同様に判然としない。

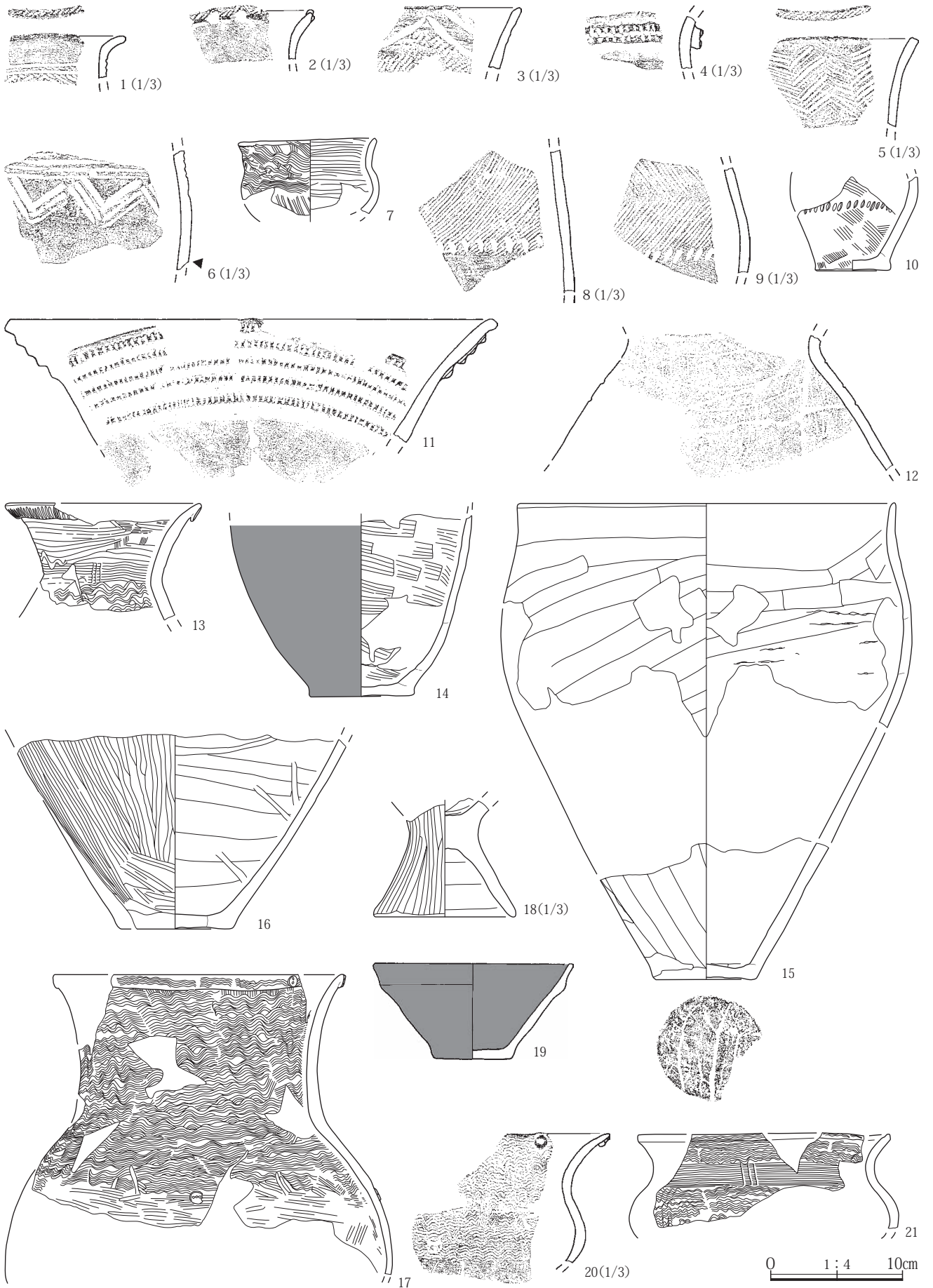
d. 4 区

中期前葉～中葉(第92図54～72、PL111・112) 後葉を含めて総数476点が検出されている。54～72は、前葉～中葉段階に位置付けられる一群である。器種としては、壺・甕・小型壺などが認められる。壺には重四角文を施す54と、コ字重ね文を施す小型壺の55がある。甕には、方形状入組文とLRの充填縄文を施文する56・58～61、鋸歯文とLR縄文を施す57、口唇部に刺突文や縄文を施し櫛状具の条痕文を縦・斜位・羽状・鋸歯状に施文する62～65、口唇部に希少なRL縄文を施し擦痕状の整形痕を残す66等がある。69～72は蓋であるが、円文・コ字重ね文・曲線的入組文などを施し、69・70はLR縄文を、72はカナムグラによる擬似縄文を充填施文する。

胎土はEタイプやHタイプが主体を占め、各器種を横断して認められるが、小型壺の55は比較的稀少なJ2タイプである。

後期前半～後半(第92・93図73～86、PL112) 総数5,582点の樽式土器が検出されている。73～76は壺であり、肩部に矢羽状文や刺突文充填の鋸歯文、櫛描波状文、ボタン状貼付文などを施す。77～86は甕であり、低平な複合口縁と櫛描の2～3連止連簾文や波状文を施す。87～88は台付甕で、括れ部の連簾文は省略されて波状文のみで構成される。90は蓋、91～93は高環である。これらの帰

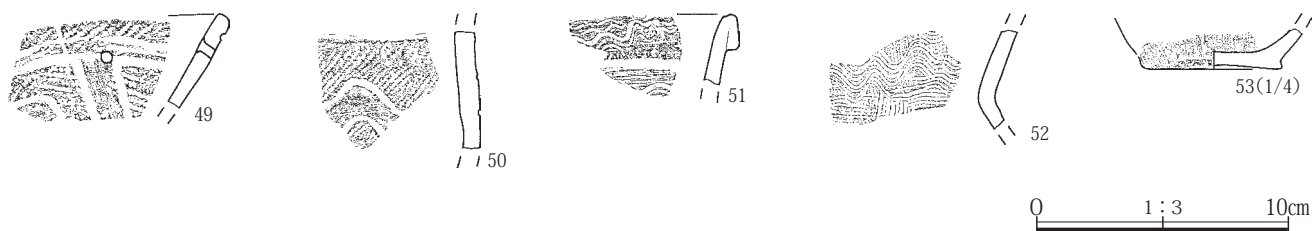
3. 弥生時代の遺構と遺物



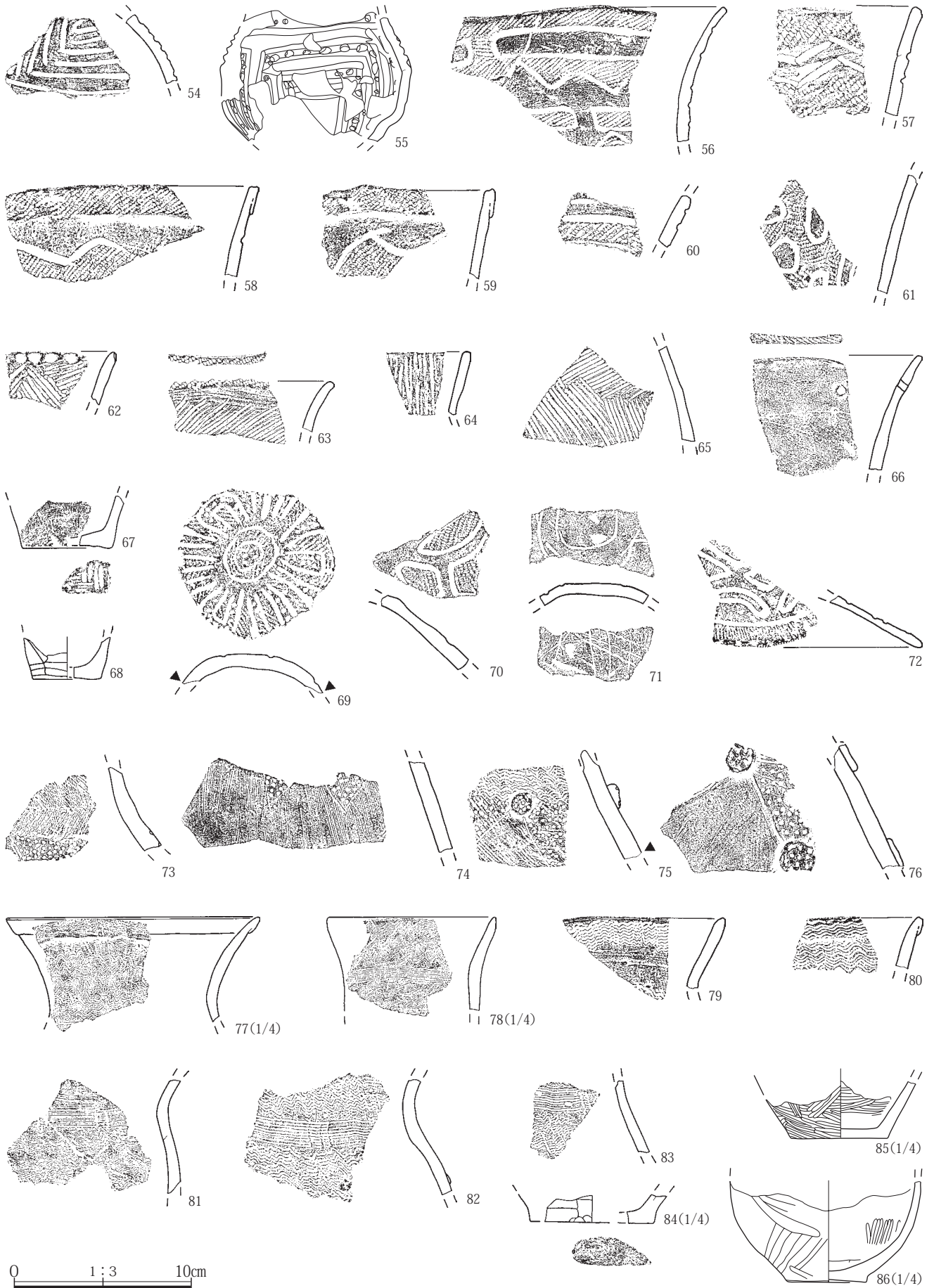
第99図 1区遺構外出土土器



第90図 2区遺構外出土土器



第91図 3区遺構外出土土器



第92図 4区遺構外出土土器(1)

属時期については、複合口縁や櫛描文の様相から樽式3期に比定される。

胎土については、F・Hタイプが最も多く、次いでE・Jタイプの順となる。各タイプとも各器種に認められるが、E1タイプは壺、H1タイプは甕に多見される。また、J2タイプは蓋や高坏にほぼ限定されており、同タイプの中期小型壺とも併せて注意を要する。

e. 5 区

中期前葉～中葉(第93図94～97、PL112) 後葉を含めて総数101点が検出されている。94～97はいずれも甕であり、94は横位・多段のLR縄文施文や括れ部への指頭状圧痕文、95は方形文やLRの縄文充填、96は櫛状具の羽状文、97は条痕文や底外面の木葉痕を施す。

胎土は、Eタイプが主体を占める。

後期前半～後半(第93図98、PL112) 総数49点の樽式土器が検出されている。98の壺は、括れ部に等間隔止連簾文を施すが、その様相から樽式1期に比定される。

f. 7 区

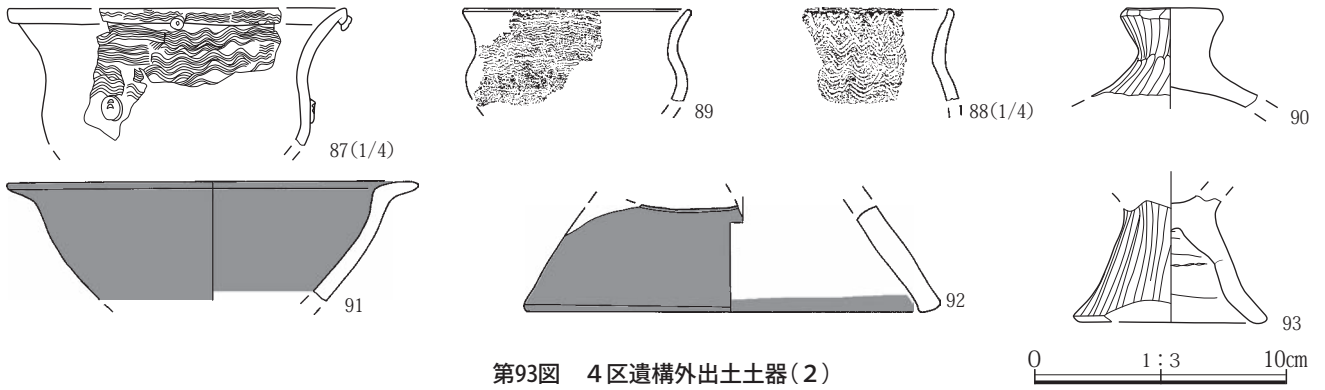
中期初頭(第95図113、PL113) 総数65点が検出されている。113は壺であり、内面に段を作出した受け口状の二重口縁を持ち、口唇下外面に瘤状の小突起を付す。また櫛状具の弧線文を施し、内面口縁部には刺突文やLR縄文充填の波状文を施文する。胎土はD7タイプである。

中期前葉～中葉(第95～104図99～112・114～189・191～203・205～392・406、PL112～121) 後葉を含めて総数10,727点が検出されているが、前述したように中期～後期に分類された6,824点の大半が当段階に編入され、総体では17,000点を超える想定される。器種としては、壺・筒形・甕・小型甕・台付鉢・鉢・蓋・有孔鉢・高坏などが認められる。

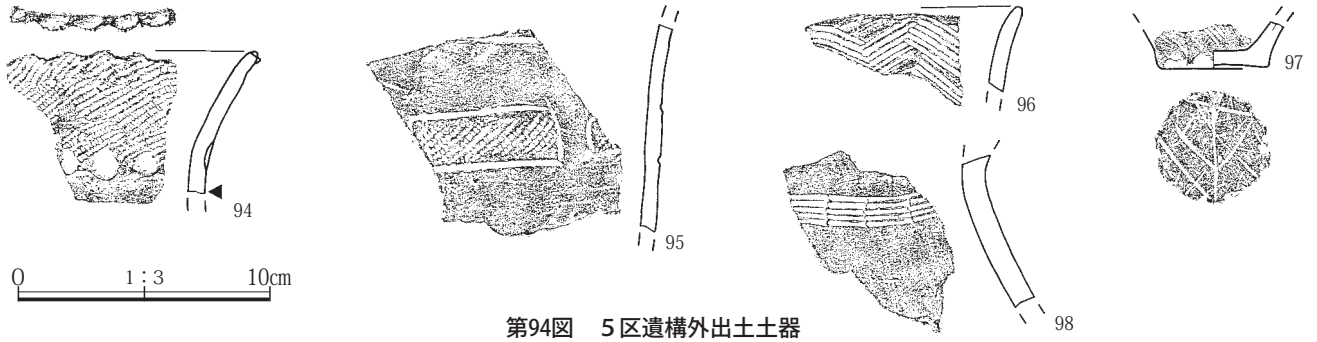
壺形土器は、99～112・114～189・191～203であり、複数の類型や型式が存在する。99・100は長頸壺、101～106は広口の長頸壺で、横帯文や弧線文・波状文・刺突文などを多段に施し、LR縄文を充填的に施文する一群である。107～112・114～116は、口縁部に円文・波状文・横線文・縦線文・舌状文や貼付文を施し、LR縄文を充填的に施文する。107の短沈線を充填した円文を眼部表現と捉えれば、顔面付土器の可能性もあり、胎土が結晶片岩を含む希少なCタイプである点を含めて注目される。また、108の内外面は赤色塗彩されている。117～119は口縁部

にLR縄文を横位施文し、括れ部に横線文、胴部に垂下文・羽状文などを施す一群である。120～124は櫛状具の条痕文および擦痕状整形痕を横・斜位や鋸歯状に施文する一群で、121・123・124は口唇部にLR縄文や押圧状の刻み目を施す。125～130は、口縁部に縄文のみを多段施文する一群であるが、胴部を含めての全面施文か否かは不明である。130がR縄文の他は、全てLR縄文である。125・126は広口長頸壺の口縁部破片と推定される。131・132は口縁部が無文の一群であり、胴部の文様構成は不明。135は波状文やLRの充填縄文を付加した方形文を横位・多段に重畳施文しており、中期中葉段階の栗林式系に比定されよう。133・134・136～167・169・173・175・176は、壺の括れ部～肩部を中心とした破片であるが、横帯文・円文・波状文・入組文・方形文・三角文・重三角文・重四角文・充填刺突文などを施し、LR縄文を充填的に施文する一群である。158・159は、外面に赤色塗彩をしている。168・170～172・174は櫛状具の条痕文や三角形・方形文とLRの充填縄文などを施文する一群である。171や172は、三角形・方形文に沿って条痕文を縦・斜位に施文している。170は櫛状具ではないが、短沈線により羽状文を施す。177～180は、櫛描の波状文や横線文を施すもので、北陸地方との関係が想定される一群である。181・182は櫛描の羽状文を施す一群である。183・184は単沈線の横線文・鉤手文・刺突文を施す一群であるが、縄文を含めた他の文様の有無については不明である。186～189は重弧状の同心円文や弧線文を施す中期後葉段階の一群であり、東北地方南部との関連性が想定される。203は壺から剥落した耳状の小突起であり、両側縁及び稜部に刺突文を施し、直径3mmの焼成前穿孔が側縁部を貫通している。195・196は底外面に織布痕を、197・199は網代痕を、198は木葉痕を持つ。胎土は、Eタイプが最多で壺全体の42%を占め、次いでG・D・Kタイプが各10～12%台となる。また、雲母を含むB5タイプが125・133・154に、結晶片岩を含むC2タイプが107・151・157・163・164に認められ、僅少なながらも当該タイプが壺形土器に一定数存在する点に注意が必要である。

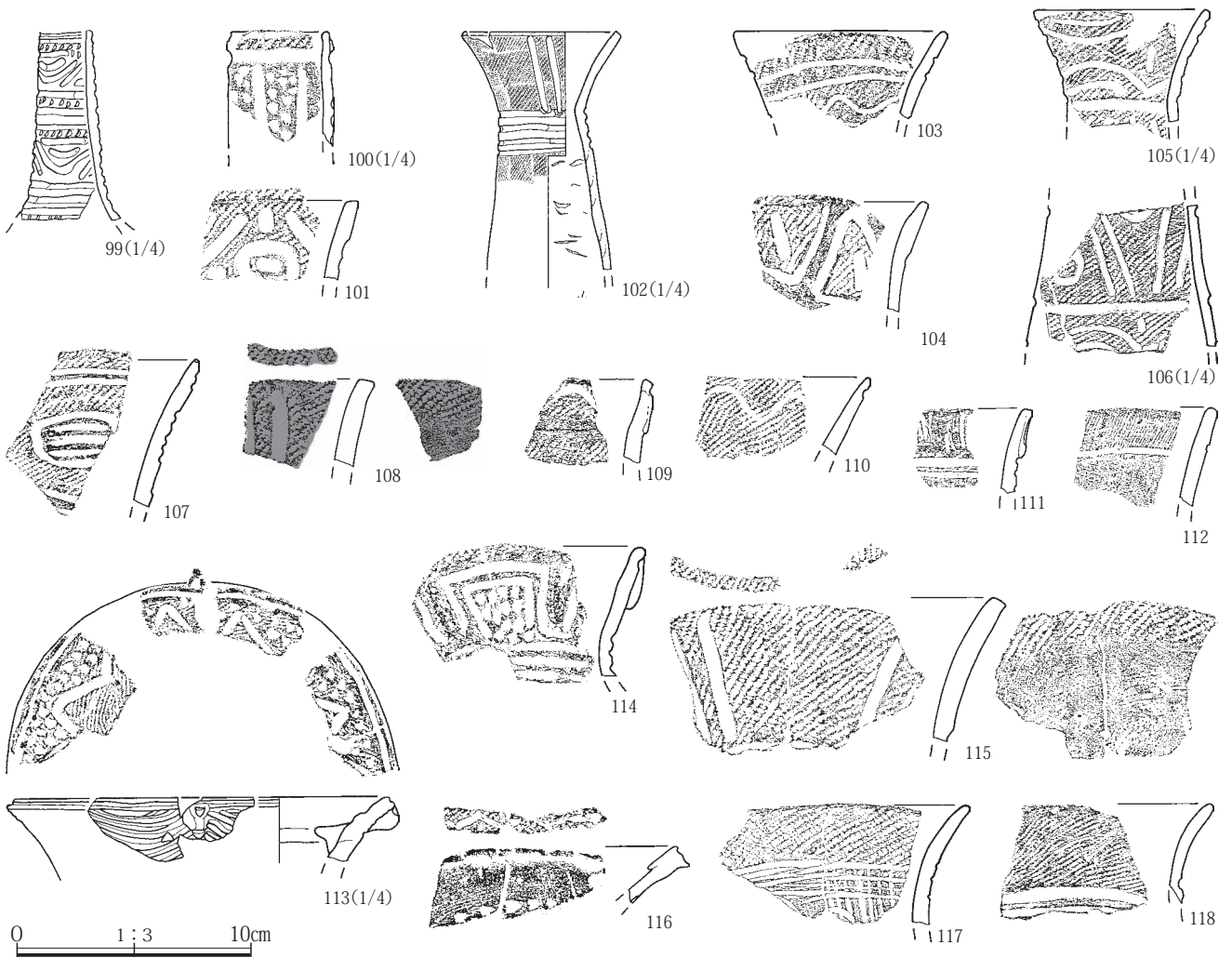
筒形土器は207～264・391・392であり、方形状の入組文とLRを主体とした充填縄文の施文が特徴的であるが、207・219・223・227・233のように僅少なながらもRLの充填縄文を施すものや、224・225・243・244のような全く



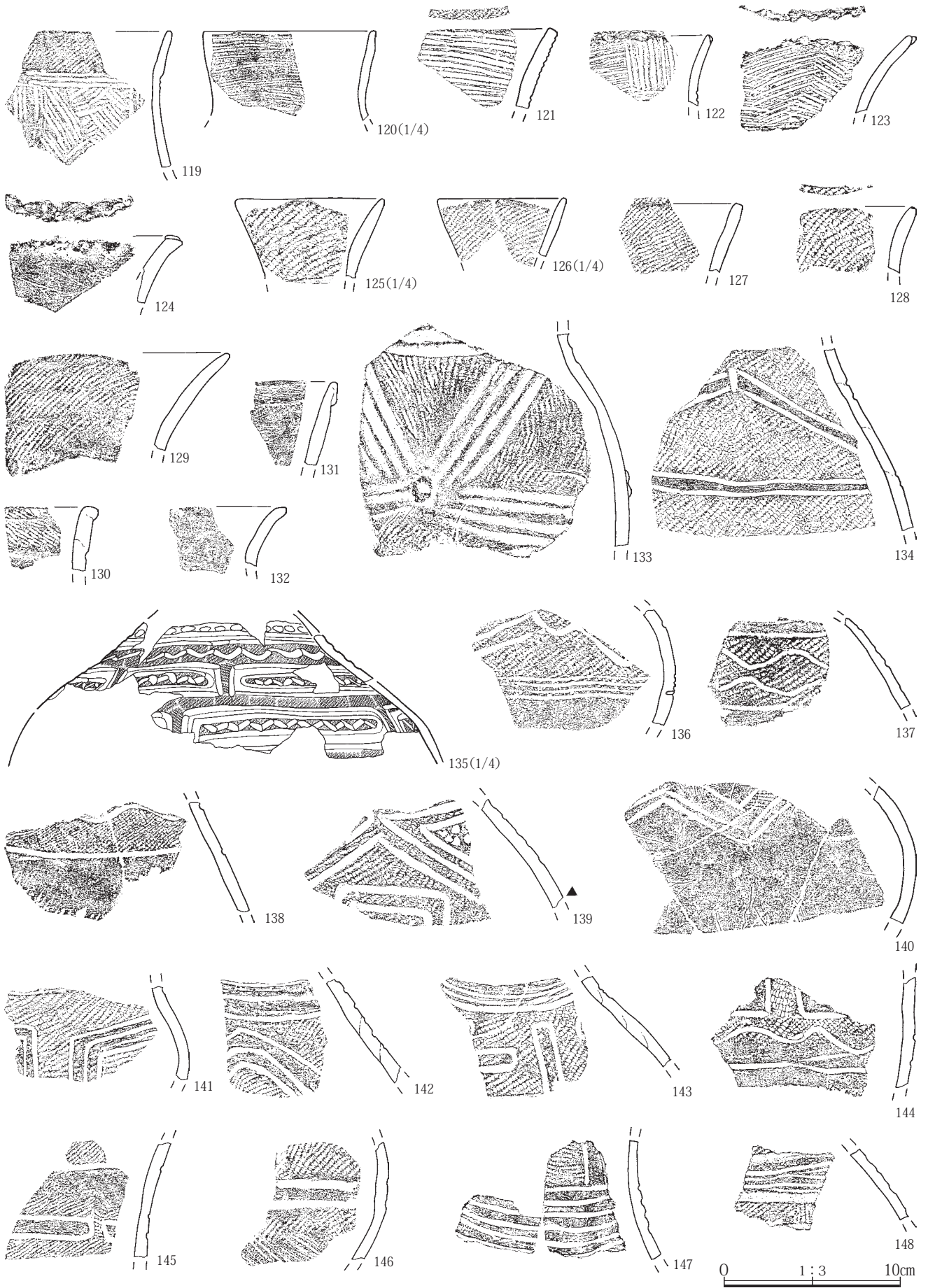
第93図 4区遺構外出土土器(2)



第94図 5区遺構外出土土器



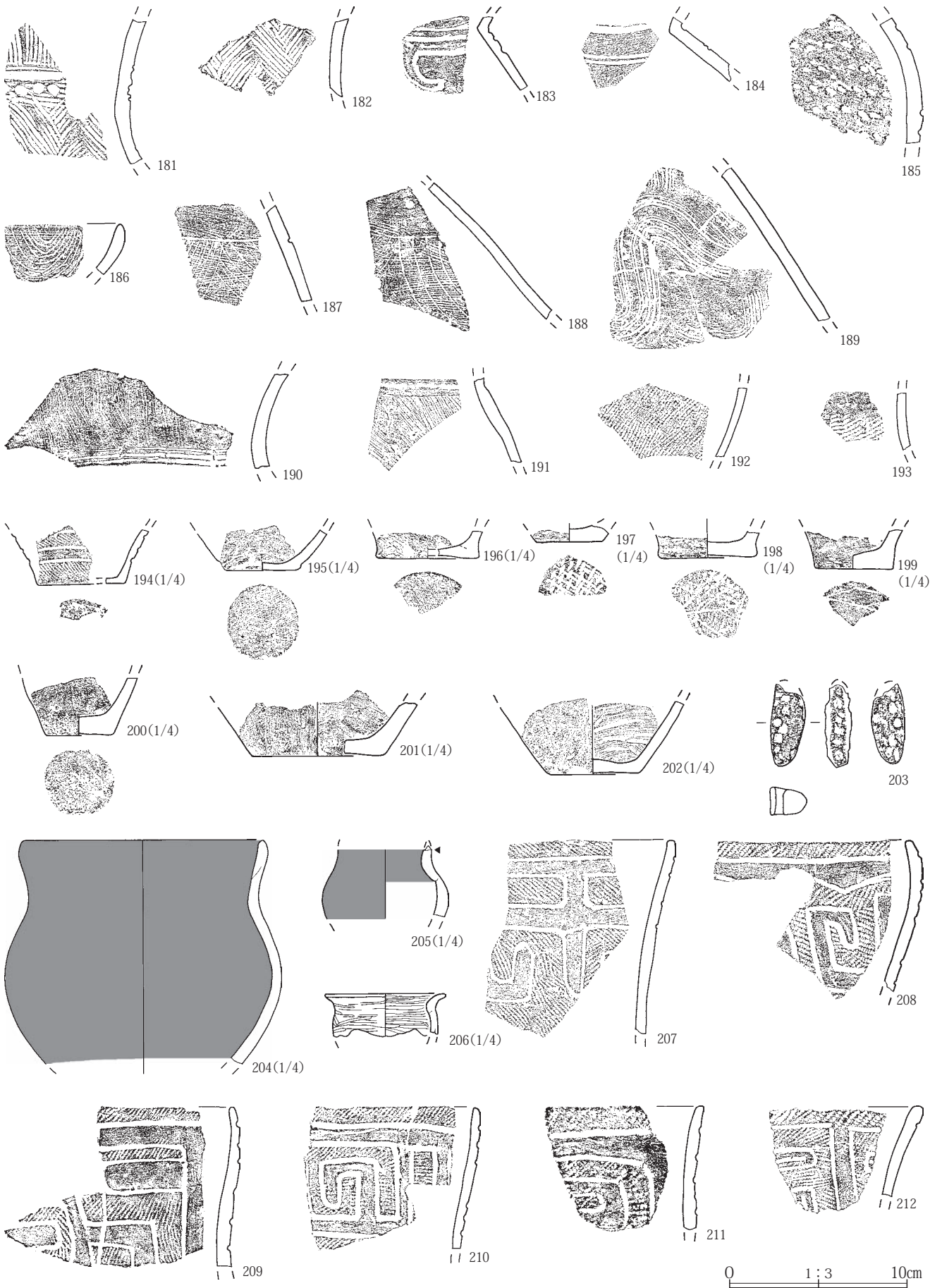
第95図 7区遺構外出土土器(1)



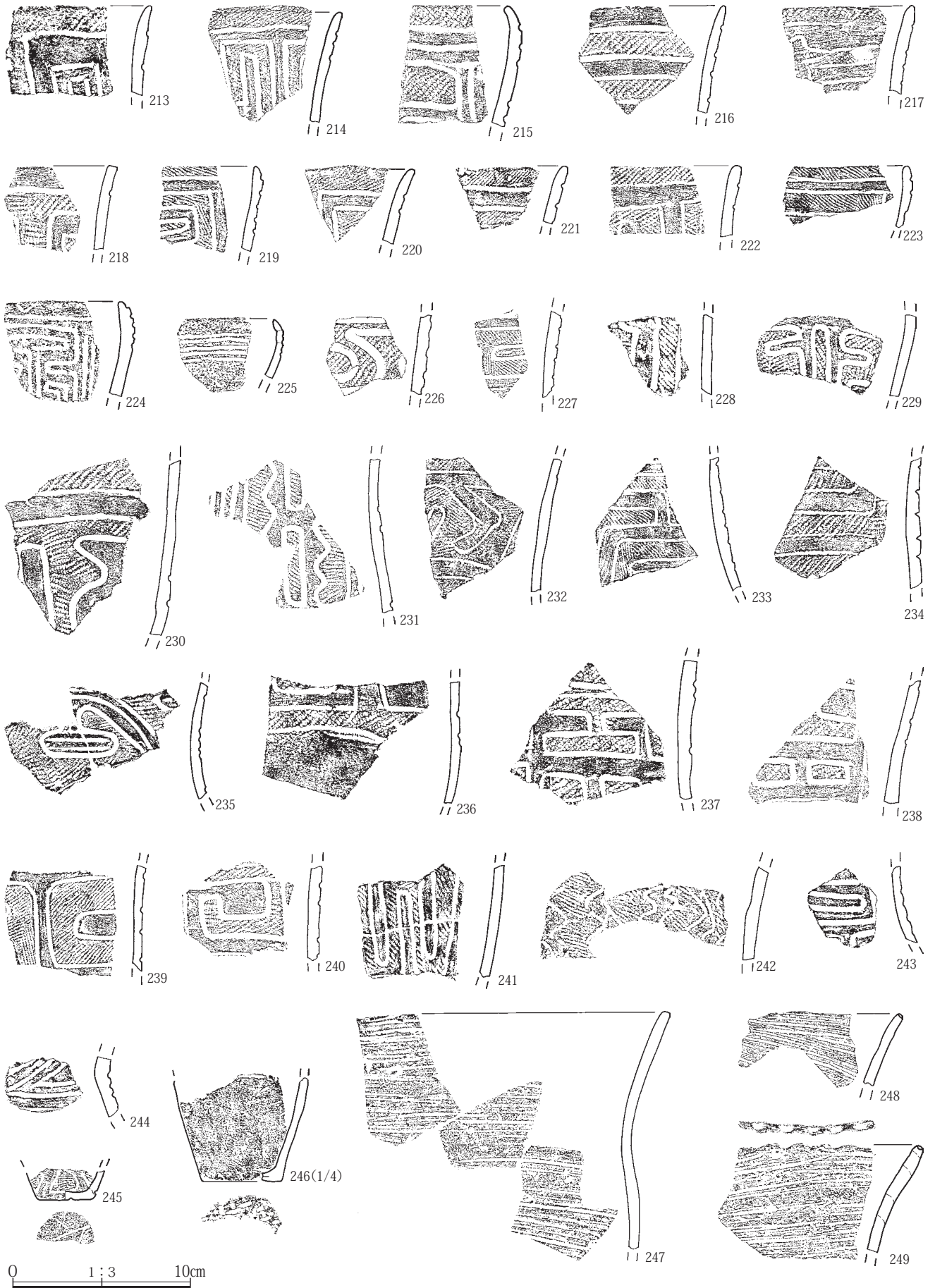
第96図 7区遺構外出土土器(2)



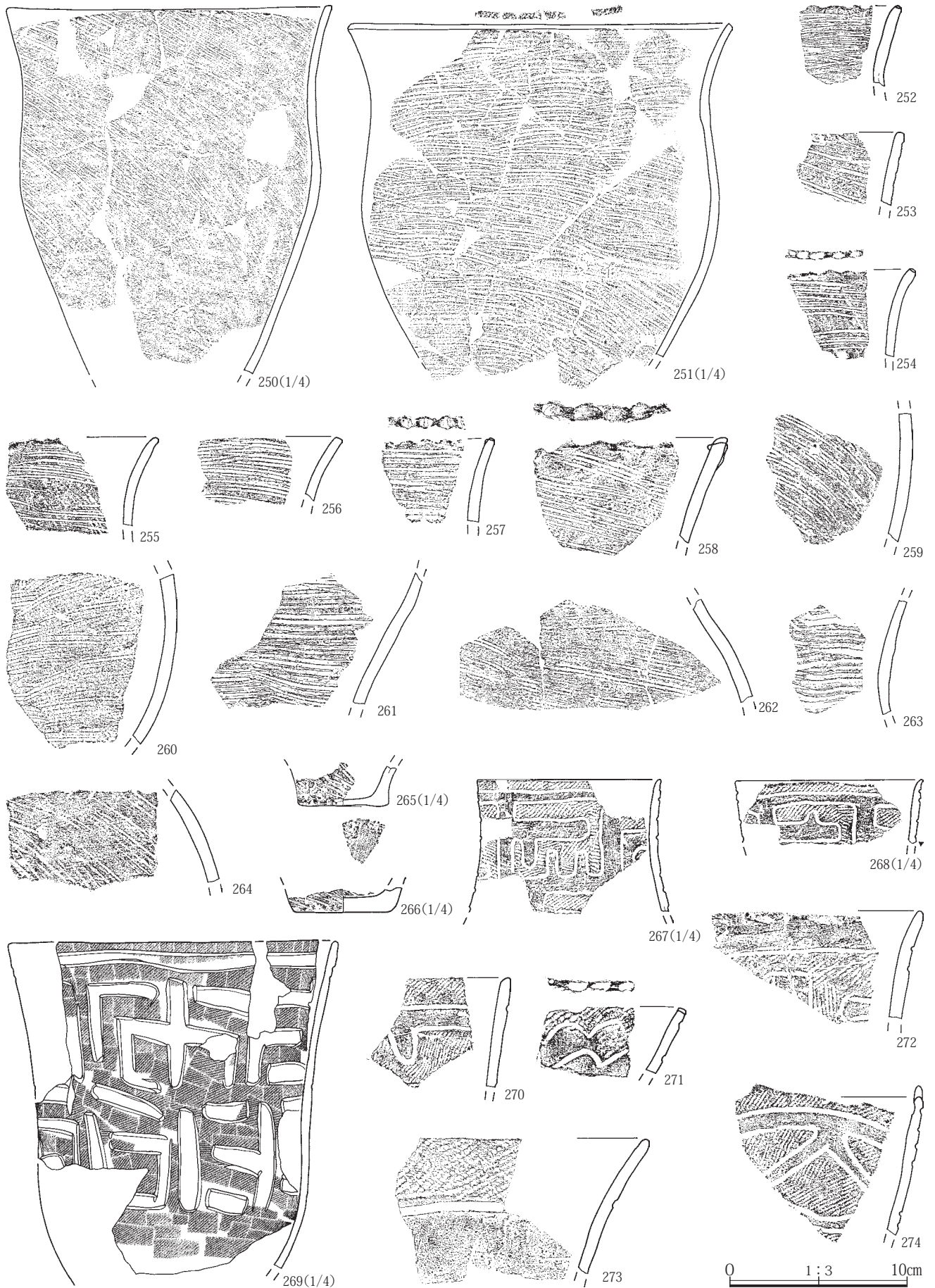
第97図 7区遺構外出土土器(3)



第98図 7区遺構外出土土器(4)



第99図 7区遺構外出土土器(5)



第100図 7区遺構外出土土器(6)

縄文を施さないものもある。245は底外面に木葉痕を、246は網代痕を持つ。胎土はEタイプが最多の50%を占め、次いでF・Kが15～17%となる。また、結晶片岩を含むC6タイプが216・228に認められる。

甕形土器は247～352であり、壺と同様にいくつかの類型や型式が認められる。247～266・295は、櫛状具による条痕文を横・斜位や羽状に全面施文する一群である。口唇部上面に押圧状の刻み目を施す249・252・254・257・258や、同じくLR縄文を施文する251などもある。265は底外面に織布痕を持つ。これらの条痕文土器は、中期前葉段階に比定される可能性が高い。267～290・298・299・305～309・311は、方形状入組文や三角文・方形文・波状文・羽状文等を施して、LR縄文を主体に充填施文する一群である。271・284・285・298は、口唇部に押圧状の刻み目を施す。282は僅少なRL縄文を充填的に施文する。291～294・296・297・300～303・310・312～319は、櫛状具や櫛描の縦線文・横線文・波状文・羽状文・三角文などを施し、基本的に充填縄文を持たない一群である。291・294・300・303は口唇部にLR縄文を、296は押圧状の刻み目を施す。304・320～328は、全面にLR縄文またはカナムグラの擬似縄文を無文部を挟在しつつ全面的に横位施文する一群である。304・326はカナムグラを横位施文し、326は口唇部にも施す。329～333は、文様を持たない無文甕の一群である。330は補修孔と推定される焼成後穿孔を持つ。391・392は、括れ部の段状接合部に爪形状の刺突文を横位施文し、口唇部にLR縄文を施す一群であり、中期中葉段階の栗林式に比定される。334～339は底外面に網代痕を、同じく340～344は織布痕を、345～350・406は木葉痕を持つ。また、352は底端部に斜め方向の直径3mmの焼成前穿孔を持つ。胎土は、Eタイプが53%と最多を占め、次いでD・G・Iタイプが各9%となる。また、293・308・345が雲母を含むBタイプ、266・274・291が結晶片岩を含むCタイプであり、壺と同様に希少タイプが一定数量存在している。尚、栗林式の391・392は共にE1タイプであり、1区8～10の同式と同様の胎土を持つ。

小型甕は353・354であり、LR縄文を充填的に施文するが、353は刺突文や横線文を施す。

台付鉢は355～360・388・389であり、355～357・359はLR縄文を、388・389は入組文とLRの充填縄文を、358

は円形竹管文を施す。360は無文。357・388を除いて脚台部に透かし孔が認められる。胎土はEタイプが主体を占める。

鉢形土器は361～374であるが、361～372は筒形土器に類似した方形三角形・曲線状の入組文や三角文・方形文などを施し、LR縄文を充填施文する一群である。365は口縁部に直径3mmの焼成前穿孔を2個持ち、372は外面に赤色塗彩をしている。373は口縁部に微隆起状の横位隆帯を施文し、内・外面に赤色塗彩を施す。374はLR縄文を全面施文する。胎土はKタイプが6割弱を占め、他にD・E・Gタイプなどが認められる。

蓋は375～385であり、上記の鉢形土器に類似した文様やLRの充填縄文が施文されている。383～385の口縁部には、直径3mmの焼成前穿孔が認められ、384には2個の穿孔が存在する。胎土はE・Iタイプが多数を占めるが、378のように雲母を含むB5タイプも僅かに認められる。

有孔鉢は386であり、直径24mmの孔を持つ。

高坏は387・390であり、387は脚台部に5個の透かし孔を持つ。390は坏部底面に3個の透かし孔を持ち、内・外面に赤色塗彩を施す。

後期前半～後半(第98・104図190・204～206・393～405・407・408、PL115・120・121) 前半を中心にして総数791点の樽式および平行段階の土器が検出されている。器種は、壺・広口壺・短頸壺・甕・台付甕・小型台付甕などが認められる。

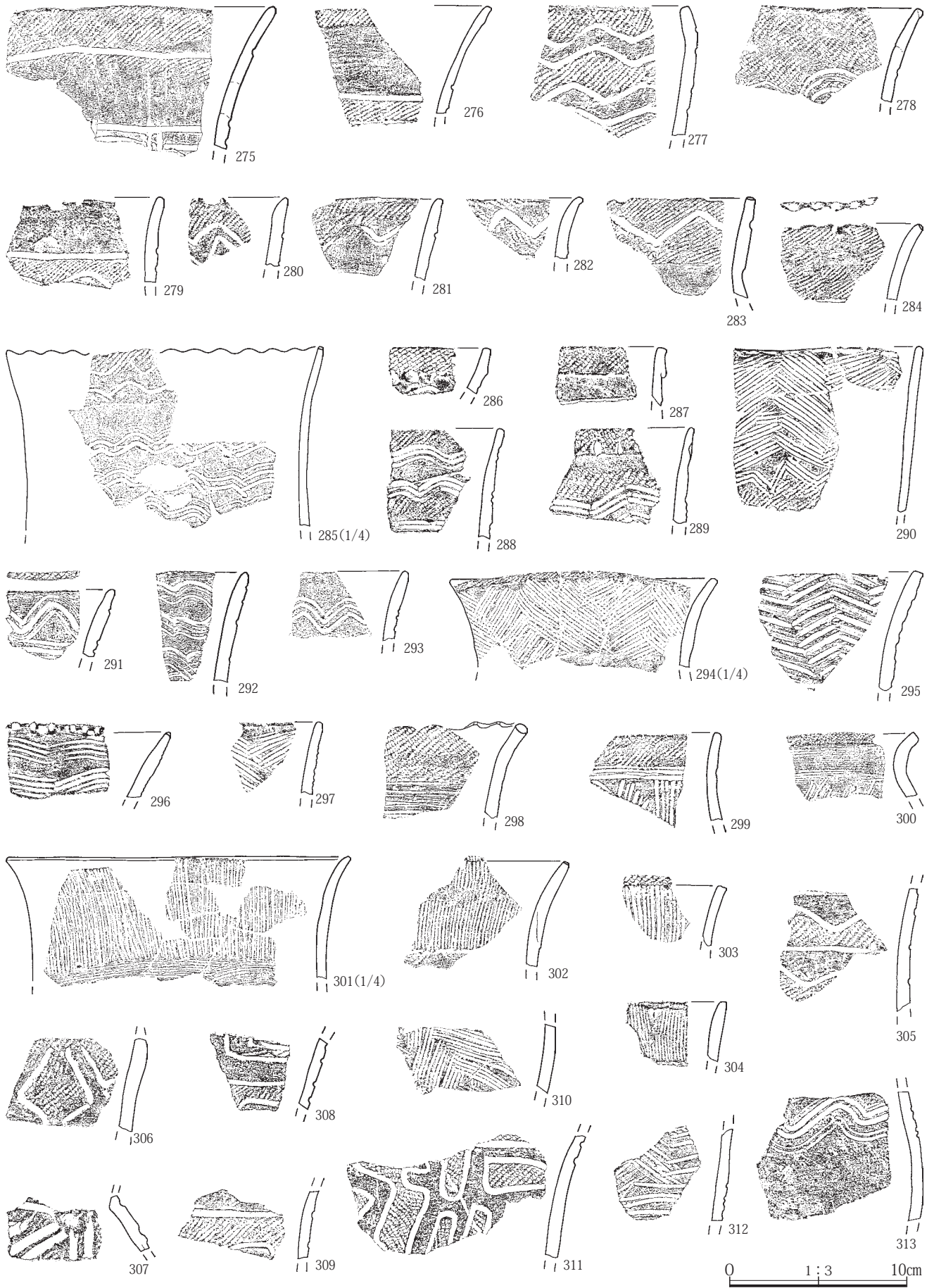
204は広口壺で、内外の全面に赤色塗彩を施す。後期に帰属すると想定されるが、確定的ではない。

205は短頸壺であり、外面の全面と内面の口縁部に赤色塗彩を施す。

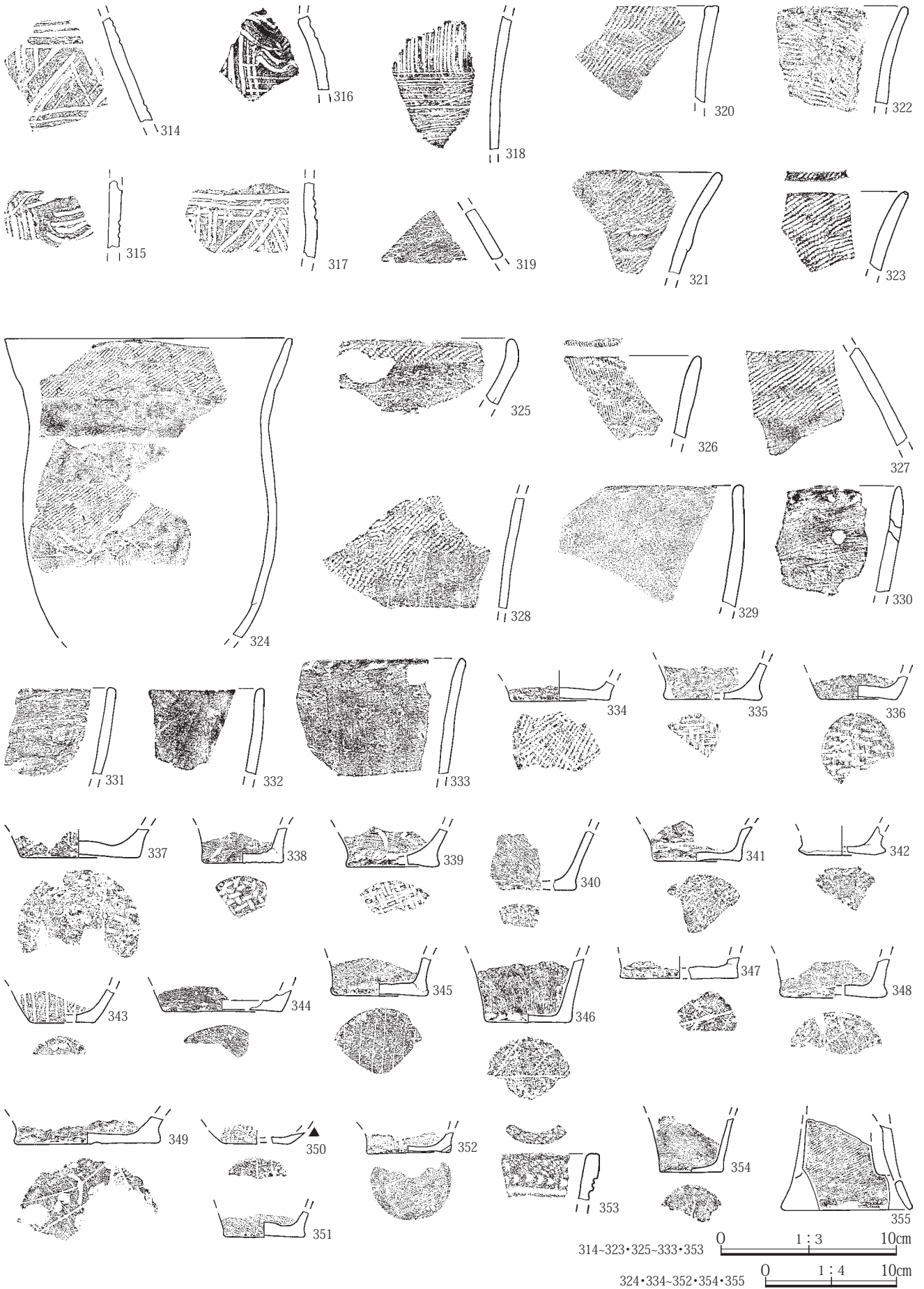
壺は190・393～403であり、受け口状の口唇部や同心円文・等間隔止連簾文を施す393・395～399・402は樽式1～2期に、頸部の短い190・394・403は同3期に比定されよう。398・399の外面には、赤色塗彩が施されている。胎土はJ・Dタイプが主体を占める。

甕は405、台付甕は404・408、小型台付甕は407である。やや受け口状の口唇部と等間隔止連簾文を施す404・405は樽式2期に、外傾する口縁部を持つ407は同3期に比定されよう。

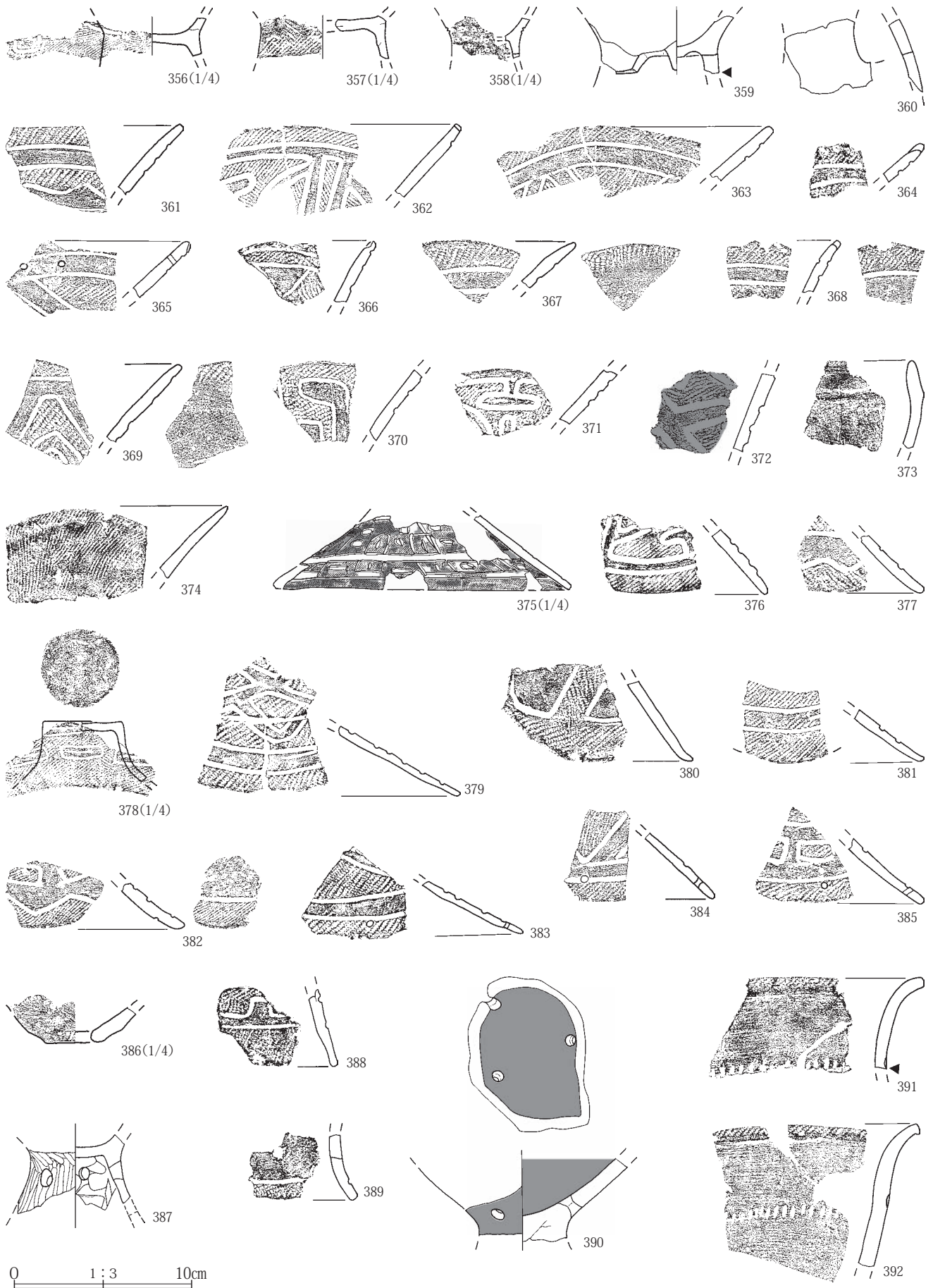
尚、393の壺では口縁部外面の1箇所にはイネの籾殻圧痕を、また408の台付甕は底部内面の1箇所にキビの可



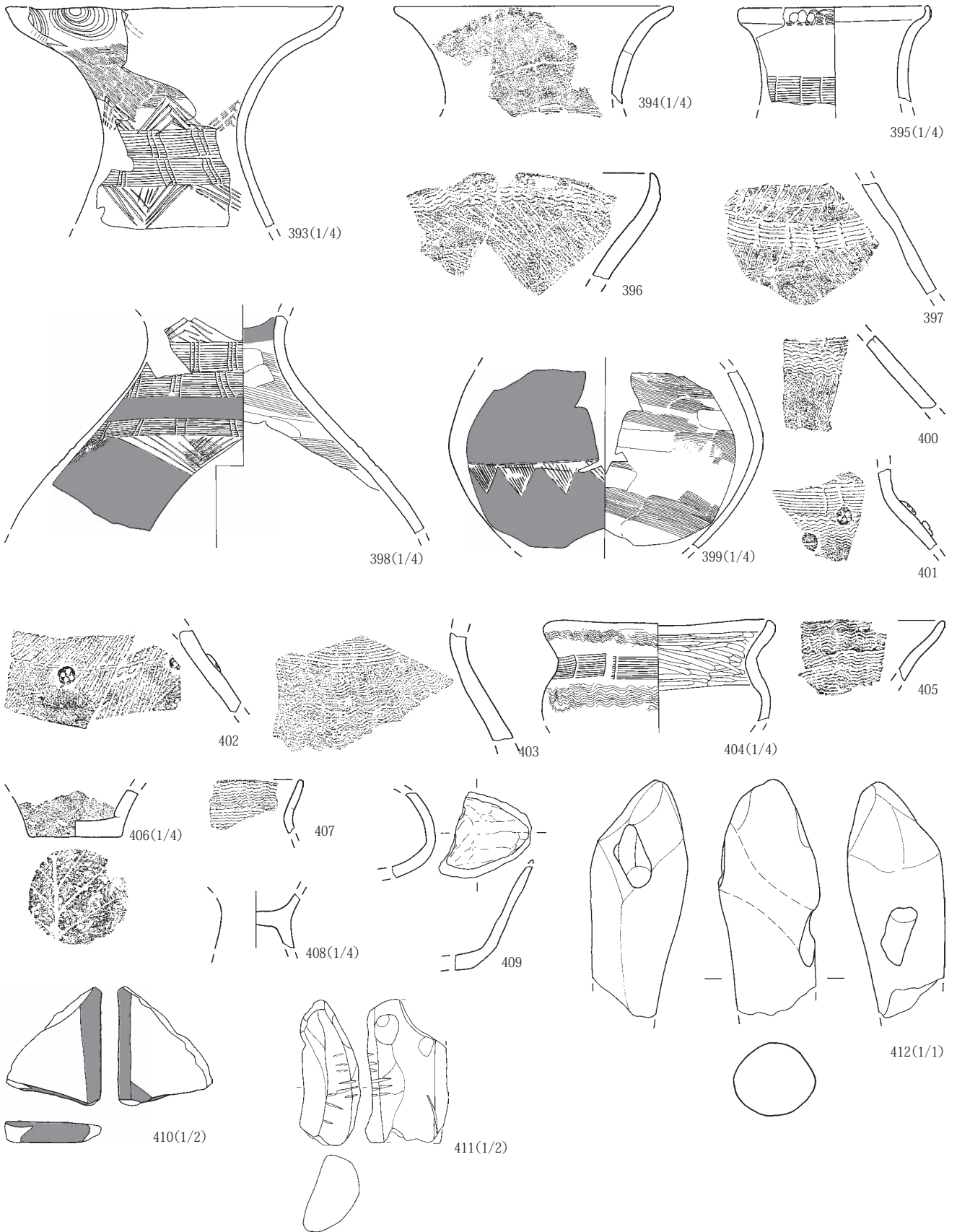
第101図 7区遺構外出土土器(7)



第102図 7区遺構外出土土器(8)



第103図 7区遺構外出土土器(9)



第104図 7区遺構外出土土器(10)

性能がある有ふ果圧痕を検出している。その詳細については、400頁の「2. レプリカ法による弥生土器種実圧痕の同定」を参照されたい。

土製品(第104図409～412、PL121) 機能・用途の不明なものを含めて一括した。409は鳥形土製品と推定される後部破片であり、器肉は5mm前後と薄い。410は弥生土器片を利用した溝砥石と推定され、左側縁の表裏面に断面V字形の摩耗痕が、また下縁には指抑えによる摩耗痕が認められる。411は用途不明だが、環状土製品の一部破片と推定され、左側縁に櫛状工具の擦痕が認められる。412は、断面円形の棒状体に斜め方向から直径5mmの焼成前穿孔を施しており、笛的な機能・用途が想定される。帰属時期については確定できないが、胎土的には中・後期土器に類似しており、弥生時代に帰属することは確実と考えられる。

g. 8 区

中期前葉～中葉(第105図413～424、PL121) 後葉を含めて総数205点が検出されている。ここでは壺・甕・蓋を掲載した。415～418は壺であり、415は重層的な方形文を、416・417は複合口縁を持つが、共にLR縄文を充填的に施文する。418は口唇部外端の隆帯上に圧痕状の刻み目を施す。413・414・419～422は甕であるが、413・414は櫛状具の条痕文を横・斜位に、420はLR縄文を横位・多段に全面施文する。422は鋸歯状の単沈線文を重層的に施し、下位にLR縄文を横位・多段に施文する。419は櫛状具の波状文を複数段に施すが、縄文施文の有無は不明。423・424は蓋であり、前者は無文、後者は方形の入組文を施してLR縄文を充填施文する。

胎土の傾向については、掲載点数が少ないために判然としないが、Dタイプが主体を占める。また、415の壺は雲母を含むB4タイプである。

h. 9 区

後期前半(第106・107図425～449、PL122・123) 総数3,257点の樽式土器が検出されている。掲載土器の器種には、壺・甕・小型甕・小型台付甕・高坏などがある。壺は423～437であり、受け口状に小さく内湾する口唇部や内側に折り返す複合口縁、等間隔止の連簾文などが特徴的である。425・427・429は内面に、434は外面に赤色塗彩を施す。甕は438～445であり、壺と同様に受け口状の口唇部や等間隔止の連簾文が認められる。446は小型甕の

同部下位～底部破片、447は小型台付甕、449は高坏である。

胎土については、掲載点数が少ないために器種別の傾向は不明だが、全体的にはDタイプが5割弱を占め、次いでEタイプが2割強となる。

各土器の帰属時期については、受け口状の口縁部や等間隔止連簾文の様相から、樽式1～2期に比定されよう。

i. 10 区

後期前半(第108・109図450～459、PL123) 当区については、925.58㎡の「10区北」を包括した範囲であり、後期後半を含めて総数144点の樽式土器が検出されている。掲載土器の器種には、壺・甕・小型甕・小型台付甕・高坏・人面土器などがあるが、453～459は10区北から出土している。壺は450・451・453～455あり、外反する口縁部とやや短めの頸部、等間隔止の連簾文などが特徴的である。450は内面の一部に、また454は鋸歯文の外縁部や内面に赤色塗彩が認められる。甕は456で、口唇部が短く内湾する。台付甕は457で、括れ部にやや幅広の等間隔止連簾文を施す。高坏は452と458であり、前者は口唇部がく字状に外折して内外面に赤色塗彩を施す。459は人面土器の頭部～顔面上半部の破片であり、粘土貼付の鼻稜と筥掻き穿孔の眼孔を作出し、6個の瘤状装飾や頭頂部・鼻稜部およびその近縁に赤色塗彩を施す。

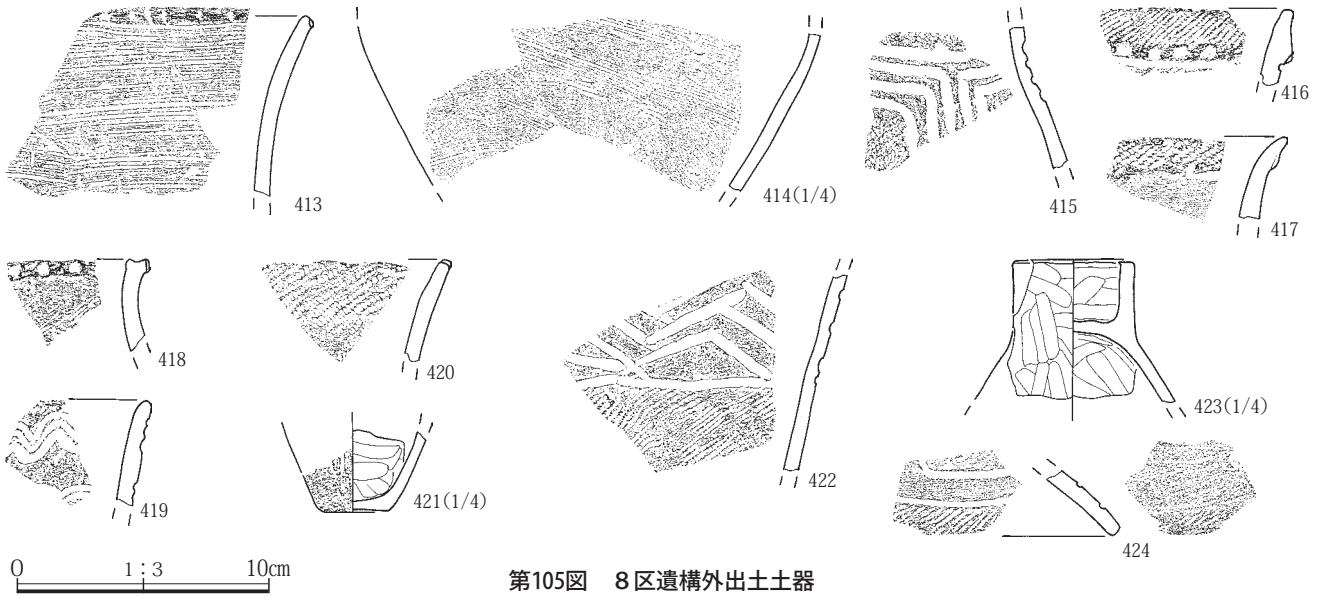
胎土については、掲載点数が少ないために器種別の傾向は不明だが、全体的にはEタイプが主体を占める。

各土器の帰属時期については、壺や高坏の様相から、樽式2期に比定される。459の人面土器については、詳細な時期は判然としないが、出土土器には中期が皆無で後期の樽式2・3期により構成されることを重視すれば、同期に帰属する可能性が高い。

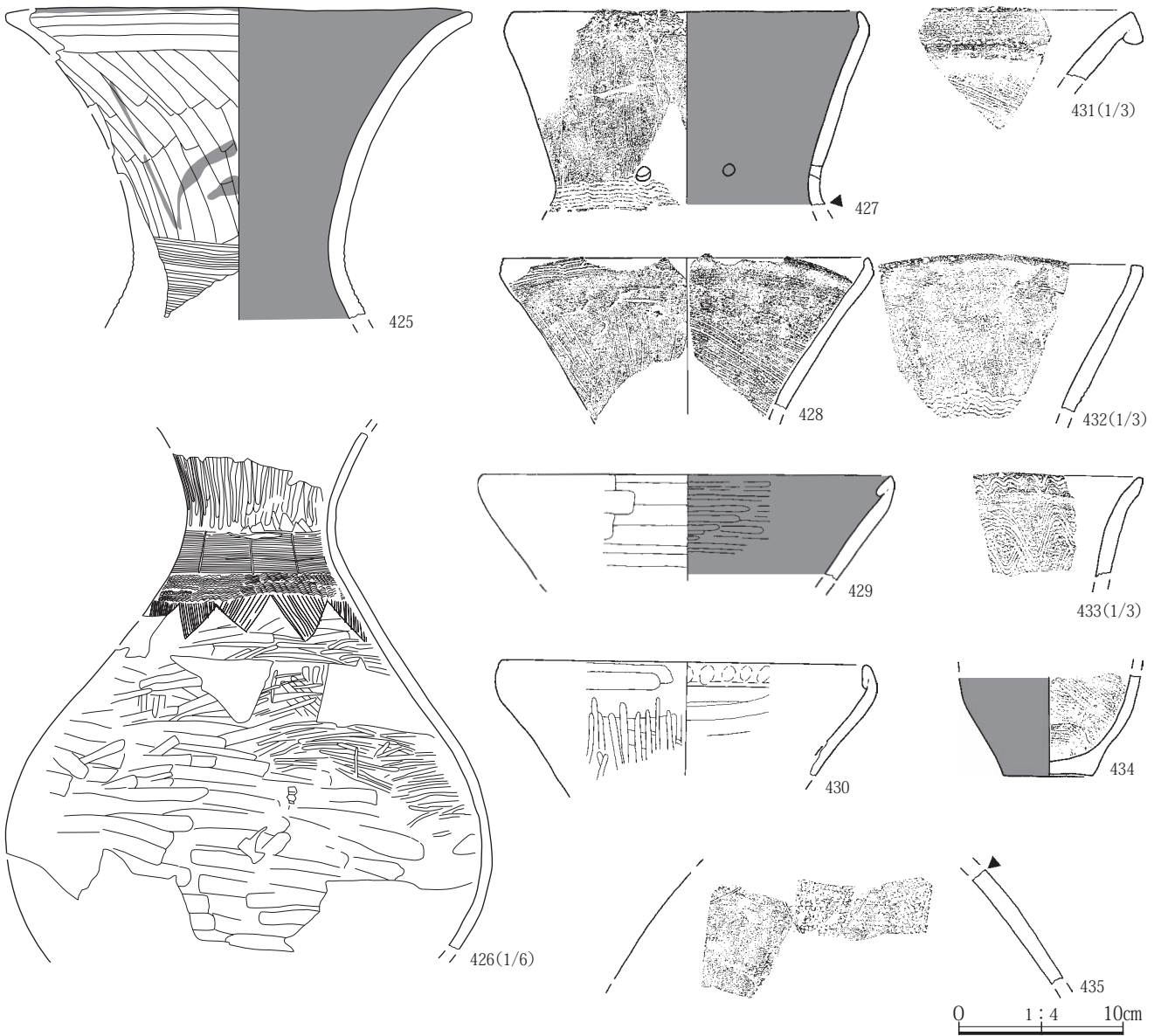
j. 13 区

後期前半～後半(第110図460～463、PL123) 総数37点の樽式土器が検出されている。掲載土器の器種は、壺・甕・高坏などである。壺は460・461であり、僅かに受け口状に内湾する口唇部が特徴的である。460の内面には、赤色塗彩が認められる。甕は462であり、口縁部～胴部上位にかけてやや粗雑な櫛描波状文が6帯施される。高坏は463であり、口唇端部が若干外反して内外面に赤色塗彩を施す。

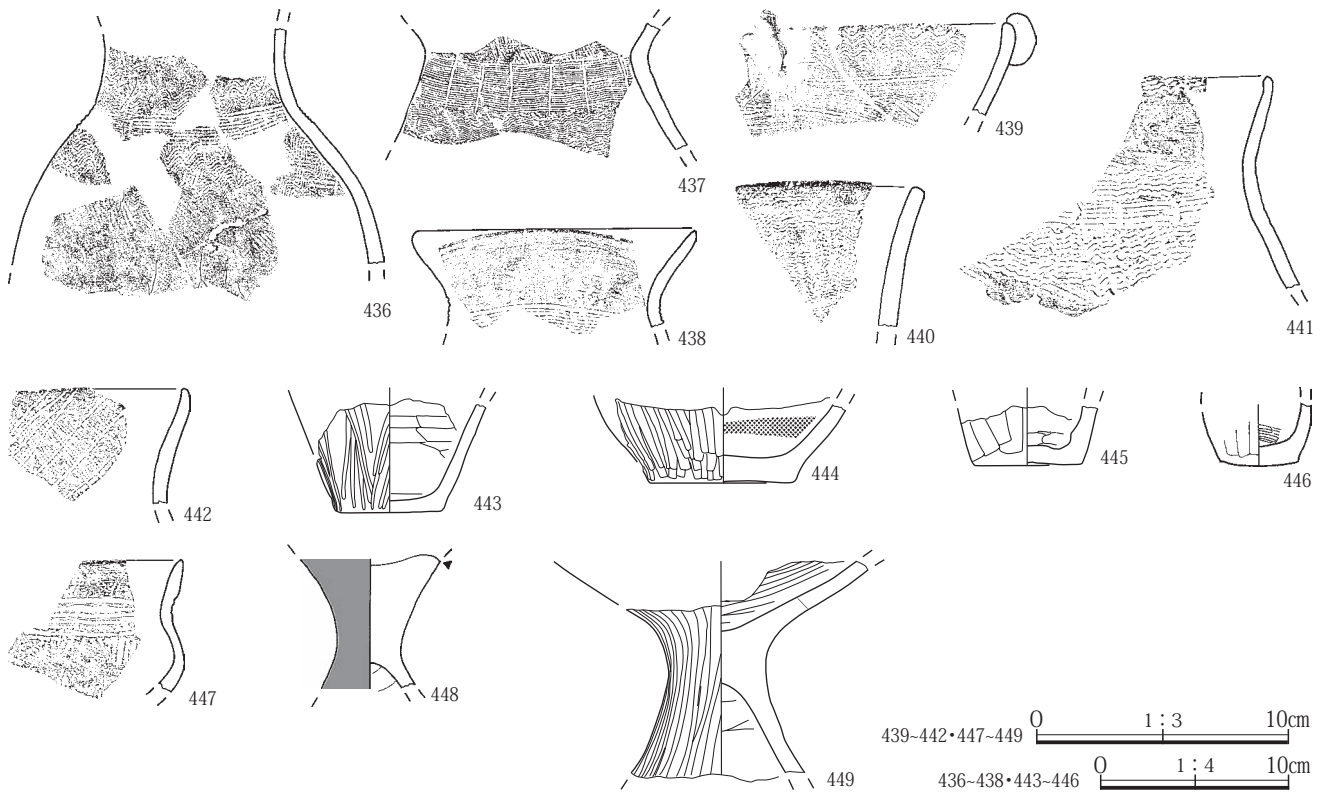
各土器の帰属時期については、460・461・463が樽式2期に、462が同3期に比定される。



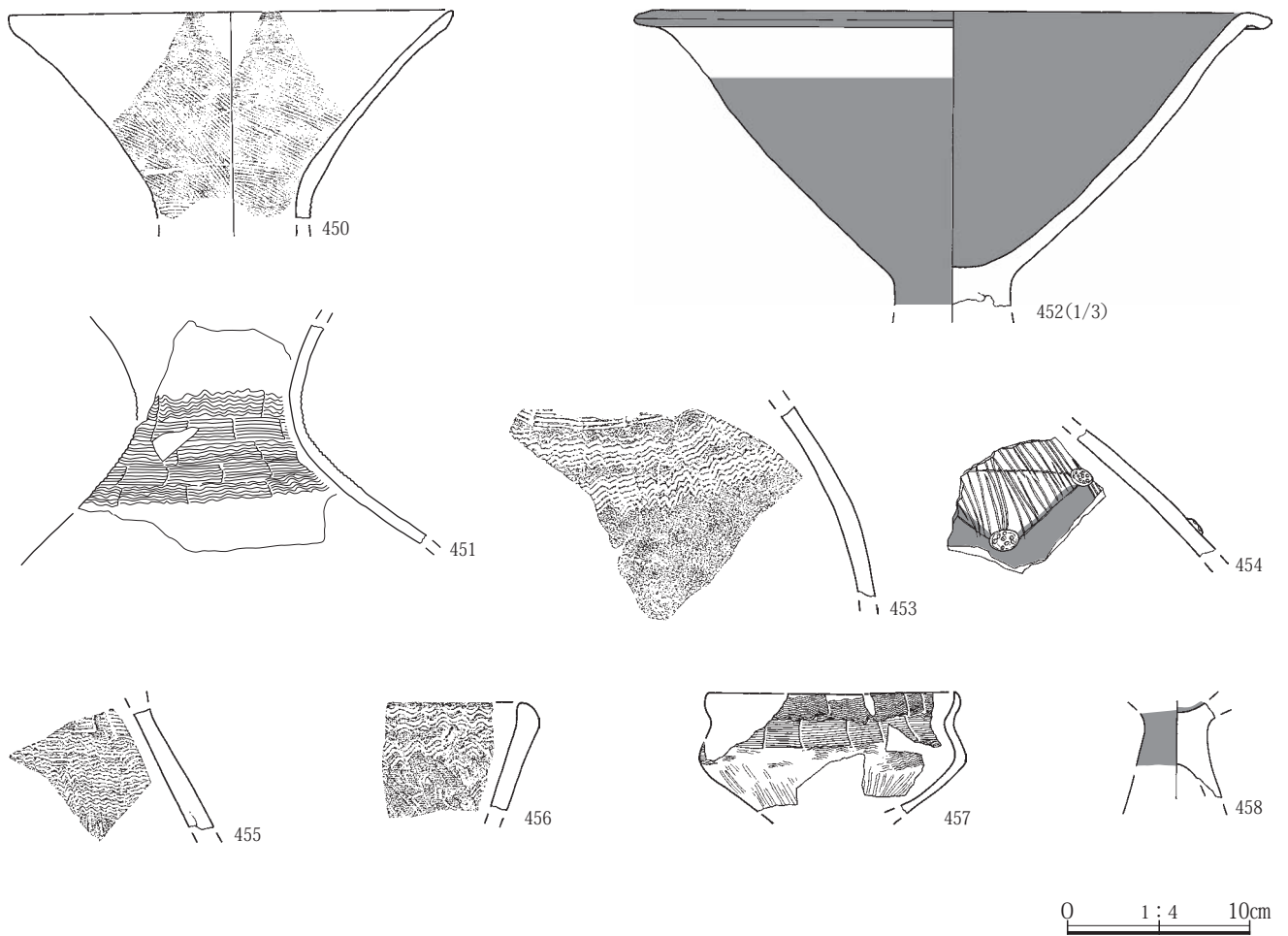
第105図 8区遺構外出土土器



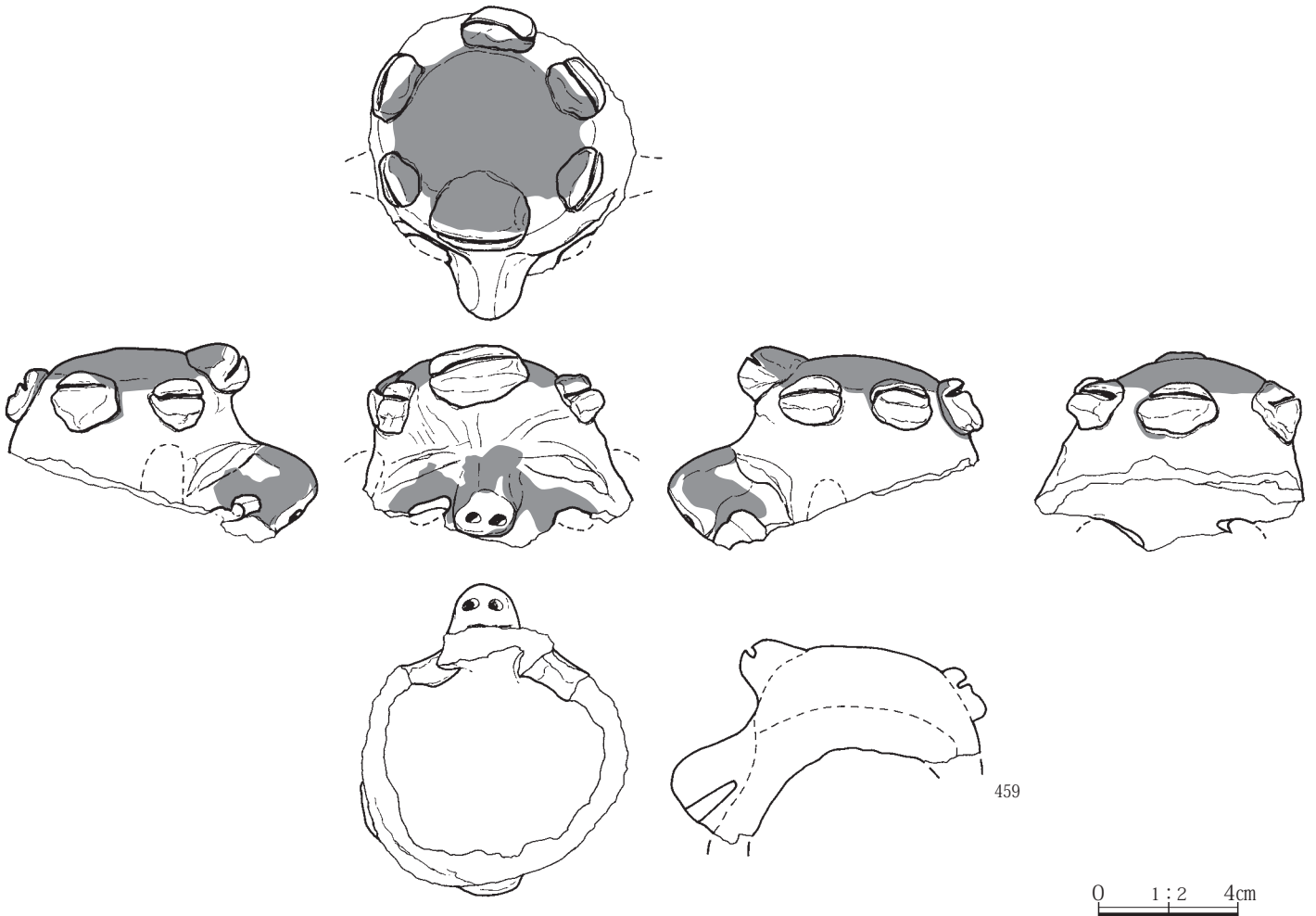
第106図 9区遺構外出土土器(1)



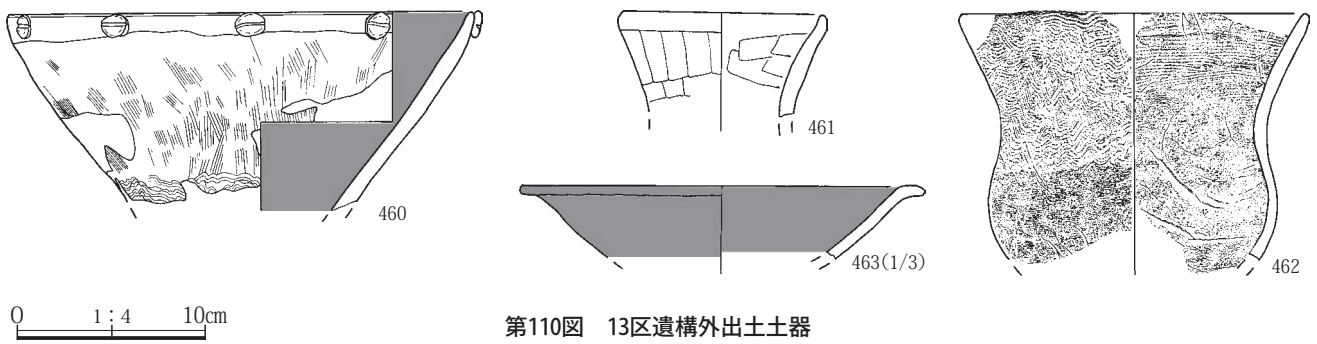
第107図 9区遺構外出土土器(2)



第108図 10区遺構外出土土器(1)



第109図 10区遺構外出土土器(2)



第110図 13区遺構外出土土器

C. 掲載石器の内容

前述したように、遺構外の出土石器については縄文時代石器との区別が困難な剥片石器類は除外し、特徴的な石鍬や磨製石斧などを主体に選別した。結果的には、第111図に掲載したものが全てであるが、石鍬に関しては掲載品9点の他に、7区から13点が出土している。以下、器種別にその内容記載を行う。

石 鍬(第111図1～9、PL124) 2区から2点、7区から20点が出土している。露頭採取の可能性が高い、特徴的な板状節理の性状を持つ細粒輝石安山岩を素材とする。1～9の全てが、表裏面に節理面を大きく残して刃部および両側縁部に加工を施す。1・4・6～8には、表裏面の先端付近に摩滅状の使用痕が認められる。また、1～4・8・9の側縁部にはつぶれと摩滅が認められ、着柄痕の可能性がある。4・7を除く掲載・未掲載品の全てに欠損が認められるが、4・7についてもサイズの再生品の可能性がある。完形・準完形品や完存部位での大きさ・重量については、長さ145～240mm、刃部幅86～150mm、厚さ13～40mm、重さ635～991gを測る。

石 核(第112図10、PL124) 7区から1点が出土したのみである。黒色安山岩の垂円礫を素材として、交互剥離により剥片を作出している。剥離面は、縄文石核に比べて風化の程度が極めて小さく、岩石本来の黒色を帯びている。尚、中期中葉の7区730号土坑から出土している、104頁第78図No.5の黒色安山岩製の削器もその素材剥離面は新鮮であり、当石核からこの素材剥片を産出した可能性もある。残存部の大きさは、長径105mm×短径92mm×重さ847gを測る。

石包丁(第112図11・12、PL124) 4区から欠損品1点と当該石器の再生剥片と想定される1点が出土したのみである。11は全体的に研磨されているが、裏面全体に光沢があるのに比べて表面の光沢は著しく乏しいことから、破損等の後で表面は再度研磨された可能性がある。表面の下方には、穿孔途中と判断される直径4mmの円形凹みがあり、破損または変形に伴い孔の位置を変更しようとした可能性がある。ほぼ中央に縦方向の折断が認められ、折断面には孔の一部が残存する。孔の内部は中央付近が狭くなっており、両面穿孔の可能性もある。残存大きさは、長さ61mm×幅45mm×厚さ8mm×重さ28gを測るが、復元完形品では長さ120mm、重さ60g前後と想定される。

石材は黒色頁岩を使用する。12の剥片は、背面の大部分に研磨面が認められることや、磨製石斧をはじめとする磨製石器類には認められない珪質頁岩を使用することから、石庖丁の再生剥片と考えられる。

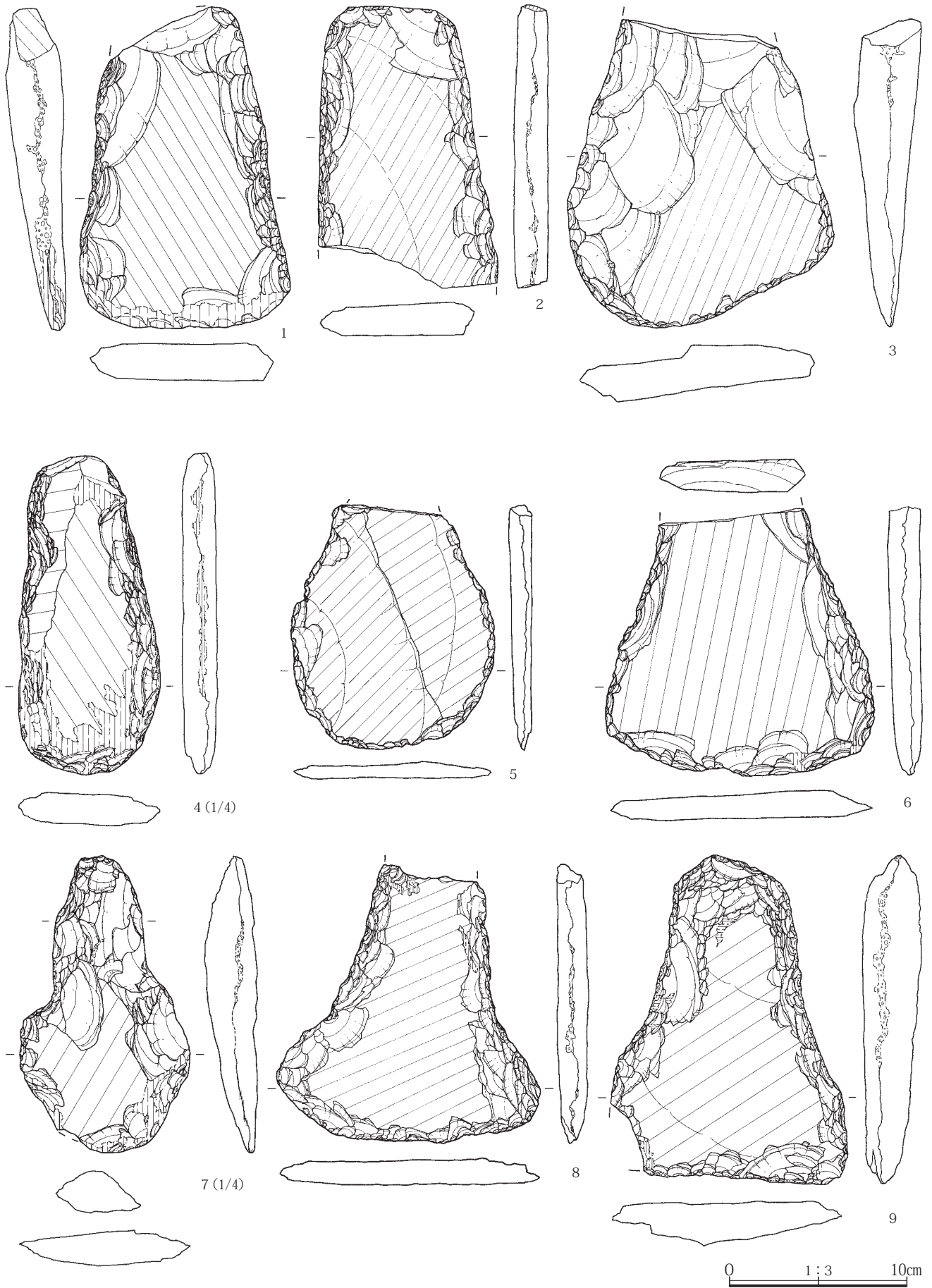
磨製石斧(第112図13・14、PL124) 太型蛤刃石斧であるが、4・7区から各1点が出土した。13は刃部のみを残す欠損品であり、14は基部に整形時の剥離痕が残る。両者とも良好に研磨されているが、14の裏面および両側縁の基部～体部2/3には、繊細な敲打痕による器面の「肌荒れ」が認められる。これに関しては、研磨時での磨き残しか、あるいは柄のソケットに装着する際に密着度を高めるための調整打痕の両者が想定できる。14の大きさは、長さ146mm×幅60mm×厚さ35mm×重さ537gを測る。石材は共に変はんれい岩を使用する。

石 槌(第112図15、PL124) 7区から1点が出土した。全面に丁寧な研磨を施した、刃部～体部下位1/3を欠損する磨製石斧の転用品と想定される。折断面には、欠損後に生じた面的な磨耗痕が認められることから、当部位を機能部とした石槌的な用途が想定される。大きさは、長さ131mm×幅61mm×厚さ45mm×重さ639gを測る。石材は、いずれも変はんれい岩を使用する。

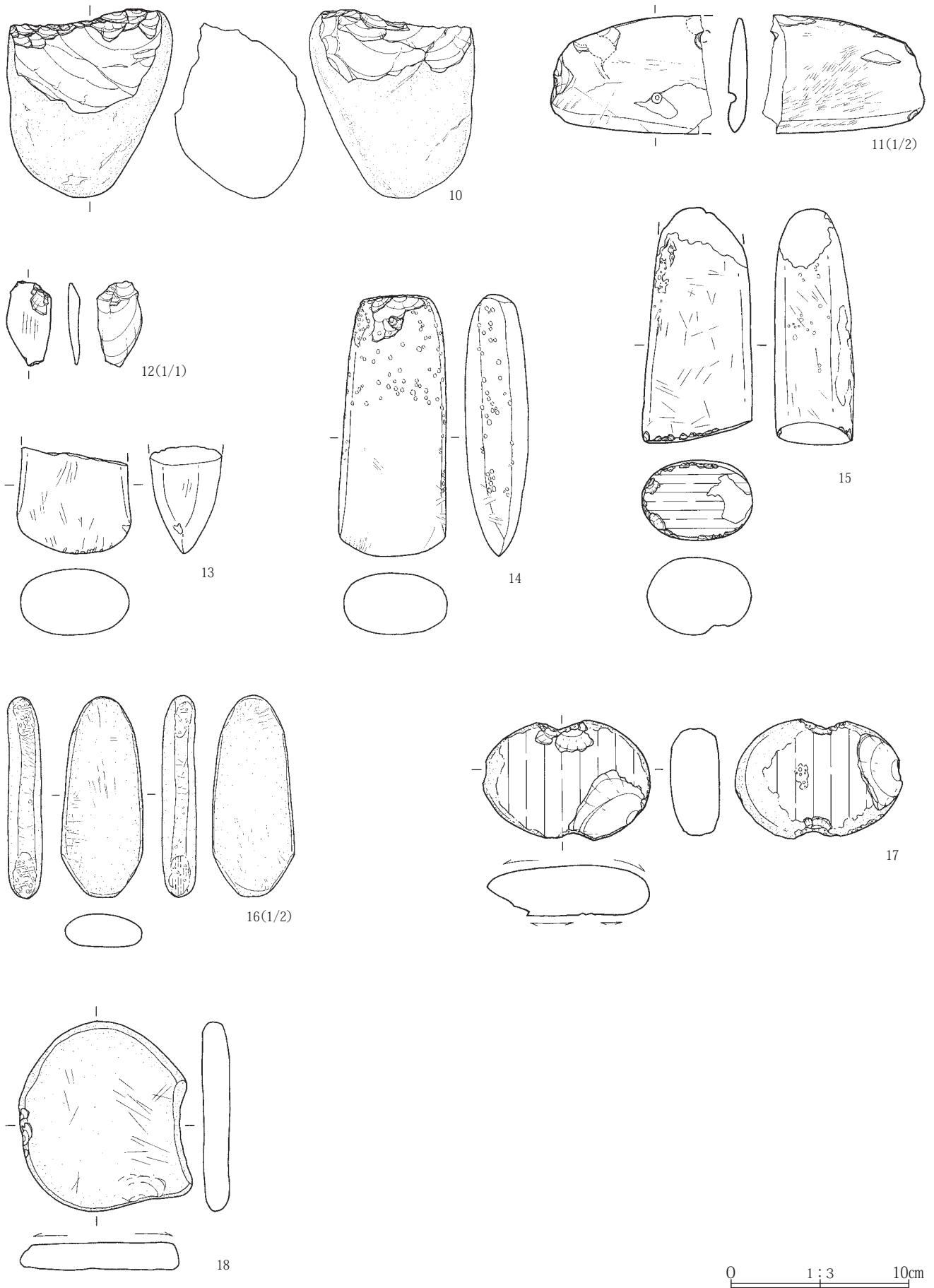
石製研磨具(第112図16、PL124) 4区から1点が出土したのみである。扁平な円礫を使用し、側縁の四隅に研磨により作出された平滑面や僅かな細かい線條痕が認められる。また、表裏面にも細かい多方向の線條痕が存在する。大きさは、長さ75mm×幅313mm×厚さ13mm×重さ49gを測る。石材は変玄武岩を使用する。

石 錘(第112図17、PL124) 7区から1点が出土したのみである。扁平な楕円礫を使用し、短軸の上・下側縁に抉入状の剥離加工を施す。表裏面には加工前の磨面が存在しており、磨石の転用品と考えられる。また、裏面の中央付近には敲打痕が集中し、表裏面の右側縁の剥離痕は敲打に伴うものと考えられる。大きさは、縦97mm×横95mm×厚さ28mm×重さ252gを測る。石材は祖龍輝石安山岩を使用する。

砥 石(第112図18、PL124) 5区から1点が出土したのみである。扁平な円礫を使用し、表裏面の砥面はほぼ平坦で多方向の細かい線條痕が認められる。大きさは、縦106mm×横97mm×厚さ16mm×重さ266gを測る。石材はデイサイト凝灰岩を使用する。



第111図 遺構外出土石器(1)



0 1:3 10cm

第112図 遺構外出土石器(2)

4. 縄文時代の遺構と遺物

各調査区では、基本土層のⅦ層～Ⅸ層までの淡色黒ボク土や褐色土中を中心にして、前期～後期前半の竪穴住居37軒、土坑425基・配石10基・集石4基・ピット324基・屋外埋設土器2基・焼土遺構5基・自然流水路3条などの遺構が確認されている。また、当該層内には多量の遺物が包含され、7万点を超える土器片や2,600点余りの石器類が出土している。

尚、各遺跡の分布状況は別添の全体図8～18を参照されたい。以下、各調査区と遺構種別を単位として、その詳細を記述する。

(1) 竪穴住居

1・2・4・5・7・8区から37軒の竪穴住居が検出されているが、古墳・弥生時代住居との重複もあり、全体形状が把握できるのは、12軒にとどまる。その内の3軒に複数回の建て替えが認められ、これらを通算して土器の細別型式を単位にした時期別内訳でみると、前期22軒(関山Ⅱ式古期4・同中期8・同新时期1・同中～新时期4、有尾式期2、有尾式～黒浜式期1、諸磯b式期1)、中期20軒(勝坂2式期1、新巻～焼町土器期1、加曽利E1式～E2式期3、同E2式古期1、同E2式新时期4、同E2式期3、同E2式～E3式期2、同E3式中期1、同E3式新时期2、同E3式新々期1、同E3式期1)、後期3軒(称名寺Ⅱ式期2、称名寺Ⅱ式～堀之内1式期1)の合計45軒を数える。総体的には、前期の関山Ⅱ式期と中期の加曽利E2・E3式期を中心とした集落跡と言えよう。

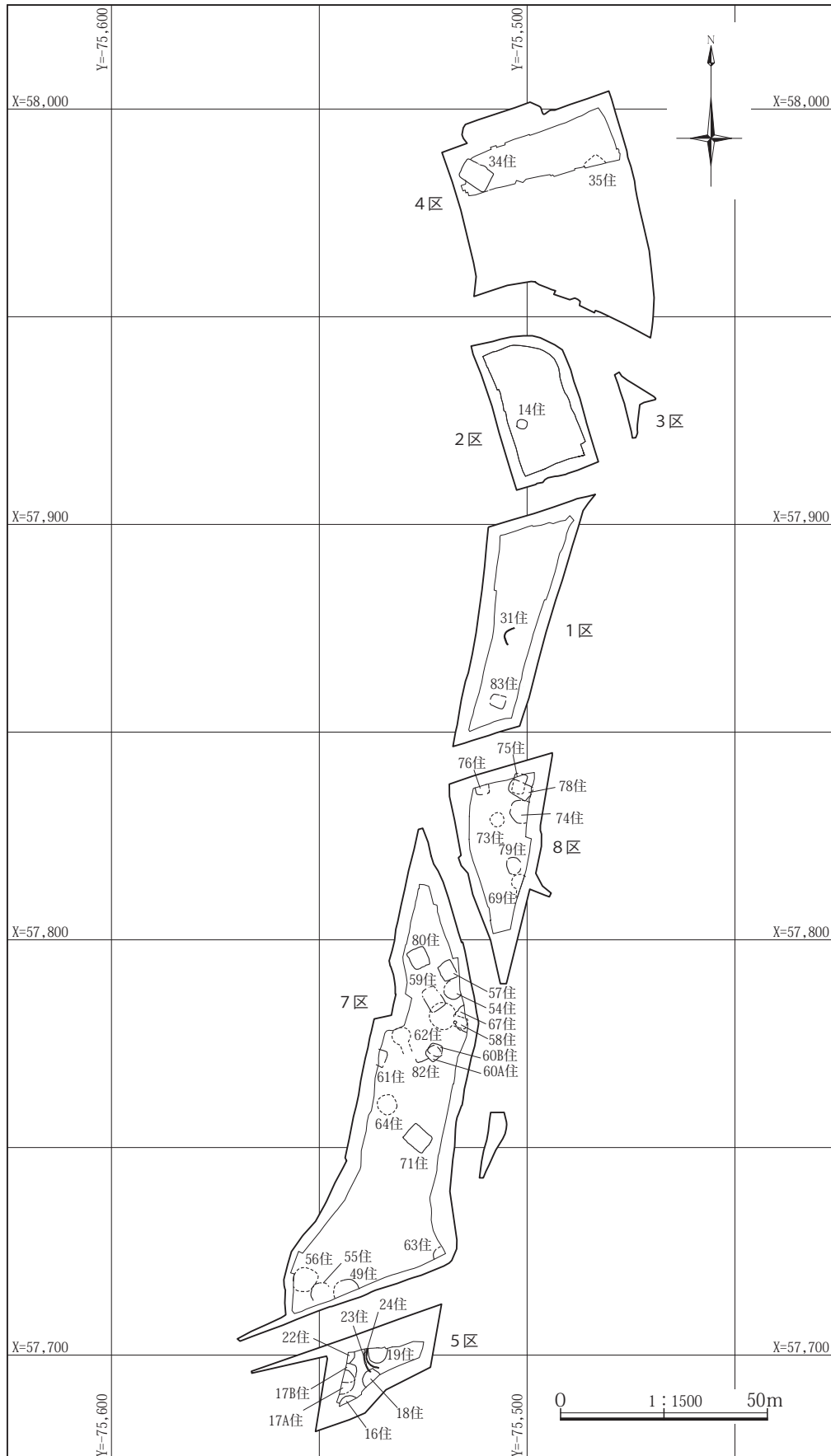
各竪穴住居の形態は、前期の場合、四隅がやや丸みを帯びた長台形状を基本として、その長軸方向が地形の等高線に直行するように構築されており、同方向の下位側に出入口部が設置されると考えられる。Ⅷ～Ⅸ層内で確認した規模で比較すると、長辺7～8m未満で短辺5～6m未満の大形住居と、長辺5～6m未満で短辺4～5m未満の中形住居、長・短辺3～4m未満の小形住居の3タイプが認められる。最大掘削深度は、大形住居の場合は80cm以上を測るが、中・小形住居は40～60cm未満が主体を占める。ただし、実際の掘り込み面はより上位にあると想定されることから、掘削深度については+10cm程度深くなると考えられ

る。柱穴は、基本的に6本あるいは8本の支柱穴と布掘り状の周溝を伴う多数本の壁柱穴から構成される。また、炉は中央部からやや奥壁側に偏って設置され、奥壁側にのみ一石を配した掘り込みの浅い方形を呈する。当該期の竪穴住居で特筆されるのは、4区34号住居や7区71号住居に代表されるような高頻度の拡張や建て替え状況である。長軸方向での再構築を基本としており、上屋構造や出入口部との密接な関係が窺える。

中期の住居形態は、勝坂2式期：隅丸長方形、加曽利E1～E2式期：楕円形状、同E3式期：円形状を基調とするが、加曽利E3式新々段階には柄鏡形敷石住居へと変化している。敷石住居以外の規模は、長径が5～6mの中形と3m台の小形が認められるものの時期的な偏在傾向に乏しく、両者が併存する状況にある。掘り込み深度は先の前期例と大差ないが、遺存状態が良好な加曽利E2式期の5区16号住居では、Ⅶ層下面からⅩ層にかけて約95cmの掘り込みが確認でき、高深度の竪穴住居の存在に留意する必要がある。柱穴については、全体住居形状の把握可能なものが少ないこともあり確定的ではないが、6～8本程度が周壁の約30～40cm内側に配置される。炉は、掘込炉や埋糞炉が若干認められるが、石囲炉を基本に長方形→方形へと変化している。

後期前半の住居形態は、中期末葉段階と同様に柄鏡形敷石住居となる。残存不良なものが多いために、柱穴をはじめ内部施設の状況は不明瞭だが、竪穴の掘り込み深度は前・中期に比べてかなり浅く、10本前後の柱穴が周壁近縁に配置されると想定される。

竪穴住居の分布動向は各時期共に大差ないが、その主体的な分布域は7区を中心に5・8区の3地区に全体の78%が集中しており、より南側の区域に偏在する傾向が窺える。5区の南側には、現況で比高差10mの深い谷が存在し、山麓末端湧水等の開析により当該居住域もかなり侵食されていると考えられるが、恐らくそうした湧水を生活水とすべくより南側への立地を指向した結果とみなすことも可能である。出土遺物については、土器を第12表に、石器を第13表に一括したが、各住居ともに異なる時期の遺物混在が認められる。これについては、重層的な竪穴住居掘削・構築や他時期遺構との重複および、台風等による倒木や小動物による土壌攪乱を要因とした遺物混在を考慮する必要があるだろう。



第113図 縄文時代の竪穴住居分布図

第11表 竪穴住居規模一覧(縄文時代)

区	番号	位置		主軸方位	形状	規模(cm)				面積 (㎡)	時期	備考
		座標X	座標Y			長径	短径	最小深	最大深			
1	31	57874	-75506	不明	隅丸方形?	(452)	不明	不明	不明	不明	加曾利E2式新期	
1	83	57860	-75508	N70度W	長台形	365	309	15	31	10.26	勝坂2式期	
2	14	57923	-75500	N70度W	隅丸方形	246	223	6	26	4.51	諸磯b式期	
4	34①	57980	-75510	N75度W	隅丸長方形	(580)	(430)	不明	不明	(23.6)	関山Ⅱ式中期	1期
4	34②	57980	-75510	N75度W	隅丸長方形	(620)	(455)	不明	不明	(27.0)	関山Ⅱ式中期	2期
4	34③	57980	-75510	N75度W	隅丸長方形	(685)	(440)	不明	不明	(28.8)	関山Ⅱ式中～新期	3期
4	34④	57980	-75510	N75度W	隅丸長台形	(516)	(430)	不明	不明	(21.0)	関山Ⅱ式古期?	4期
4	34⑤	57980	-75510	N75度W	隅丸長台形	745	520	(26)	82	(36.5)	有尾式期?	5期
4	34⑥	57980	-75510	N57度W	隅丸長方形	750	530	(26)	82	37.32	有尾式～黒浜式期	6期
4	35	57986	-75483	N47度E	長方形?	不明	(420)	3	11	不明	関山Ⅱ式中期	
5	16	57688	-75544	不明	円形?	不明	不明	(25)	95	不明	加曾利E2式～同E3式期	
5	17A	57695	-75545	不明	円形?	623	不明	55	63	不明	加曾利E2式期	
5	17B	57698	-75541	不明	隅丸方形?	(470)	不明	28	48	不明	加曾利E1式～同E2式期	
5	18	57695	-75535	不明	楕円形?	464	不明	32	45	不明	加曾利E2式～同E3式期	
5	19	57702	-75535	不明	楕円形	不明	470	4	38	不明	加曾利E2式古期	
5	22	57700	-75541	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	加曾利E2式期?	
5	23	57700	-75540	不明	楕円形?	不明	不明	不明	不明	不明	加曾利E1式～同E2式期	
5	24	57700	-75540	不明	楕円形?	不明	不明	不明	不明	不明	加曾利E2式期?	
7	49	57717	-75547	不明	円形?	667	不明	31	49	不明	加曾利E2式新期	
7	54	57791	-75516	不明	隅丸長方形?	不明	(254)	12	28	不明	加曾利E3式期?	
7	55	57717	-75545	不明	楕円形?	482	不明	15	19	不明	加曾利E1式～同E2式古期?	
7	56	57720	-75552	N5度E	円形	(580)	(540)	不明	不明	(27.5)	加曾利E2式新期	
7	57	57795	-75520	N30度W	長方形	447	353	10	56	15.16	関山Ⅱ式中～新期	
7	58	57779	-75523	N70度W	柄鏡形	(670)	(630)	不明	不明	(39.7)	称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式期	
7	59①	57785	-75525	N33度W	隅丸長台形	(500)	(380)	(36)	(46)	(17.5)	関山Ⅱ式古期	1期
7	59②	57785	-75525	N33度W	隅丸長台形	581	410	17	46	21.46	関山Ⅱ式中期	2期
7	60A	57771	-75520	N39度W	隅丸正方形	335	322	33	47	9.88	関山Ⅱ式中期	
7	60B	57771	-75520	N70度W	隅丸長方形	340	280	29	51	(8.4)	関山Ⅱ式古期	
7	61	57769	-75533	N65度W	長方形?	不明	388	29	55	不明	関山Ⅱ式中～新期	
7	62	57780	-75530	N22度W	柄鏡形	(420)	(400)	不明	不明	(20.8)	称名寺Ⅱ式期?	
7	63	57726	-75520	不明	円形?	不明	不明	不明	34	不明	加曾利E2式新期	
7	64	57761	-75531	不明	円形?	(490)	(480)	不明	(10)	(17.5)	加曾利E3式新期	
7	67	57785	-75515	N50度W	隅丸長方形?	(400)	不明	不明	(15)	不明	前期?	
7	71①	57755	-75525	N50度W	長方形	(500)	(440)	不明	(53)	(21.5)	関山Ⅱ式古期	1期
7	71②	57755	-75525	N50度W	長方形	(580)	(450)	(39)	(51)	(24.7)	関山Ⅱ式中期	2期
7	71③	57755	-75525	N50度W	長方形	587	482	36	51	27.51	関山Ⅱ式新期	3期
7	80	57794	-75528	N22度W	隅丸長方形	470	433	21	40	19.82	関山Ⅱ式中～新期	
7	82	57771	-75527	不明	柄鏡形?	不明	不明	5	11	不明	称名寺Ⅱ式期?	
8	69	57815	-75500	N2度E	柄鏡形	(360)	不明	不明	不明	不明	加曾利E3式新々期	
8	73	57830	-75509	不明	円形?	(330)	不明	不明	不明	(8.8)	加曾利E3式新期?	
8	74	57829	-75504	不明	円形	561	不明	20	30	不明	加曾利E3式中期	
8	75	57835	-75501	N9度E	隅丸長方形	480	(285)	45	50	(13.7)	有尾式期?	
8	76	57837	-75512	N7度W	隅丸長方形?	不明	325	43	50	不明	関山Ⅱ式中期?	
8	78	57838	-75500	N60度W	隅丸長台形	570	370	30	44	(18.8)	関山Ⅱ式中期?	
8	79	57820	-75505	N16度W	楕円形	417	348	11	23	11.48	新巻～焼町土器期?	

凡例

()内は残存部位での数値または推定値を表す。

第3章 遺跡の調査内容

第12表 竪穴住居出土土器の型式別数量一覧(縄文時代)

区	番号	早期		前期							中期								
		夏島	早期末	関山Ⅰ	関山Ⅱ	関山Ⅱ ～黒浜	有尾	諸磯 a	諸磯 b	諸磯 c	浮島	五領ヶ台	阿玉台Ⅱ	阿玉台Ⅲ	勝坂	勝坂2	勝坂3	新巻	焼町
1	31				1														
1	83				22			6	2			1	5		5	23	34		
2	14							1											
4	34	1			709		35												
4	35		14	8	49	4	1	46	3										
5	16				1												1	5	
5	17A				1				4		1							14	
5	17B																	1	
5	18							2	1	1								3	
5	19				1				1		2	1						13	
5	22					2													
5	23				1														
5	24																		
7	49				2				3		5			3				9	
7	54				11						2								
7	55				12				5						1			4	
7	56				2				4					1					
7	57				126				2									2	
7	58				85				1										
7	59				557		1												
7	60A・B				397				1									6	
7	61				198														
7	62				15													2	
7	63				1														
7	64				16					1									
7	67																		
7	71				482				1										
7	80				331													1	
7	82																		
8	69								1										
8	73				2				2									2	
8	74				7													1	
8	75				122	95	65		1			6						2	
8	76				9											15		2	
8	78				5		25												
8	79				2		2	1										2	
合計		1	14	8	3,167	101	129	47	33	8	2	10	8	5	4	6	39	37	102

区	番号	中期							後期							合計		
		三原田	郷戸	加曾利E1	加曾利E2	加曾利E3	加曾利E4	中期後半	称名寺Ⅰ	称名寺Ⅱ	掘之内Ⅰ	三十稲場	後期前半	掘之内Ⅱ	加曾利B1		後期中葉	高井東
1	31				31													32
1	83																	148
2	14																	1
4	34				1								2					748
4	35																	125
5	16	19		26	79	82												213
5	17A	72	9	98	626	659	1	2			2					2		1,491
5	17B	8	9	7	21	16		1										63
5	18	34	4	10	80	32	2	445	1	2	8	1		3	5	7	1	642
5	19	54	9	92	331	115					1			3	3		3	629
5	22				1													6
5	23				1	3												5
5	24				6													7
7	49			1	24	10		372	2		5		5		1			442
7	54					27	3	132	2		17							194
7	55	1		10	3	1		184			1			4				226
7	56	1	2	6	788			32						1	2			839
7	57					9	1	88			4		68					300
7	58					166	33	706	40	42	12		432	135				1,652
7	59					11	3	23		5	1		20					621
7	60A・B				2								5	1				412
7	61					7				21								226
7	62					121	28	708	37	5	39		197					1,152
7	63				1	18		2										22
7	64					193	1								9			220
7	67																	0
7	71							8										491
7	80					5		55			3		33	5				433
7	82									1								1
8	69				2	47	3		1		1							55
8	73					76												82
8	74		3			599												611
8	75		1			51	5	63										411
8	76					14		1										41
8	78							2										32
8	79					115												157
合計		189	37	251	1,999	2,374	80	2,877	83	76	94	1	762	153	20	9	4	12,730

		(重量:g)										合計											
		打製系列		使用痕系列		複合技術系列		その他		合計													
石	チャート	石鏃	石錐	石匙	石器類	礫器	磨石類	砥石	石皿	石皿	台石	砥石	磨石	磨石	多孔石	石棒	石製品	石核	剥片	重量	点数	重量	点数
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.2	1	1.2
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.2	1	1.2
8区76号住居																							
		(重量:g)										合計											
		打製系列		使用痕系列		複合技術系列		その他		合計													
石	黒色頁岩	石鏃	石錐	石匙	石器類	礫器	磨石類	砥石	石皿	石皿	台石	砥石	磨石	磨石	多孔石	石棒	石製品	石核	剥片	重量	点数	重量	点数
0	0	0	0	0	0	0	2	1252.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	29.2	3	53.6	
0	0	0	0	124.4	0	0	2	1252.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1252.5	2	1306.1	
0	0	0	0	124.4	0	0	2	1252.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	29.2	5	1306.1	
8区78号住居																							
		(重量:g)										合計											
		打製系列		使用痕系列		複合技術系列		その他		合計													
石	黒曜石	石鏃	石錐	石匙	石器類	礫器	磨石類	砥石	石皿	石皿	台石	砥石	磨石	磨石	多孔石	石棒	石製品	石核	剥片	重量	点数	重量	点数
1	0.7	0	0	0	0	0	1	634.6	0	0	1	3602.4	0	0	0	0	0	0	19	307.8	24	4670.9	
1	0.7	0	0	0	0	0	1	634.6	0	0	1	3602.4	0	0	0	0	0	0	19	307.8	24	4670.9	
8区79号住居																							
		(重量:g)										合計											
		打製系列		使用痕系列		複合技術系列		その他		合計													
石	黒曜石	石鏃	石錐	石匙	石器類	礫器	磨石類	砥石	石皿	石皿	台石	砥石	磨石	磨石	多孔石	石棒	石製品	石核	剥片	重量	点数	重量	点数
1	0.7	0	0	0	0	0	1	96.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	298.0	15	394.9	
1	0.7	0	0	0	0	0	1	28.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.3	2	2.0	
1	0.7	0	0	0	0	0	2	125.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4237.0	24	4670.9	

● 1区31号住居

位置 X=57874 Y=-75506

方位 不明 面積 不明

写真 P L 36・125 観察表 456頁

重複 216号土坑が炉に近接して西側に存在するが、新旧関係は不明。

形状 IX層上面にて西側周溝および埋葬炉の検出により竪穴住居と認定した。斜面下方の東半部の掘り込みは確認できなかったが、柱穴の配列を重視すれば楕円形状あるいは四隅の丸い方形状を呈すると推定される。

規模 不明。

床面 斜面上方の北西側から南東側にかけて緩い傾斜を持つ。不明瞭な倒木痕の攪乱が見られるが、炉の南側一部に叩き床状の堅緻な面が認められる。

柱穴 P1~P5の5本が検出された。住居形状を楕円形と見做せば、6~7本主柱と想定される。主な柱穴の芯々間の距離は、P1~P2:2.1m、P2~P3:1.65m、P3~P4:2.35mを測る。また、各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:31cm×41cm、P2:34cm×24cm、P3:34cm×16cm、P4:26cm×20cm、P5:34cm×6cmである。各柱穴ともに柱痕は確認できなかった。

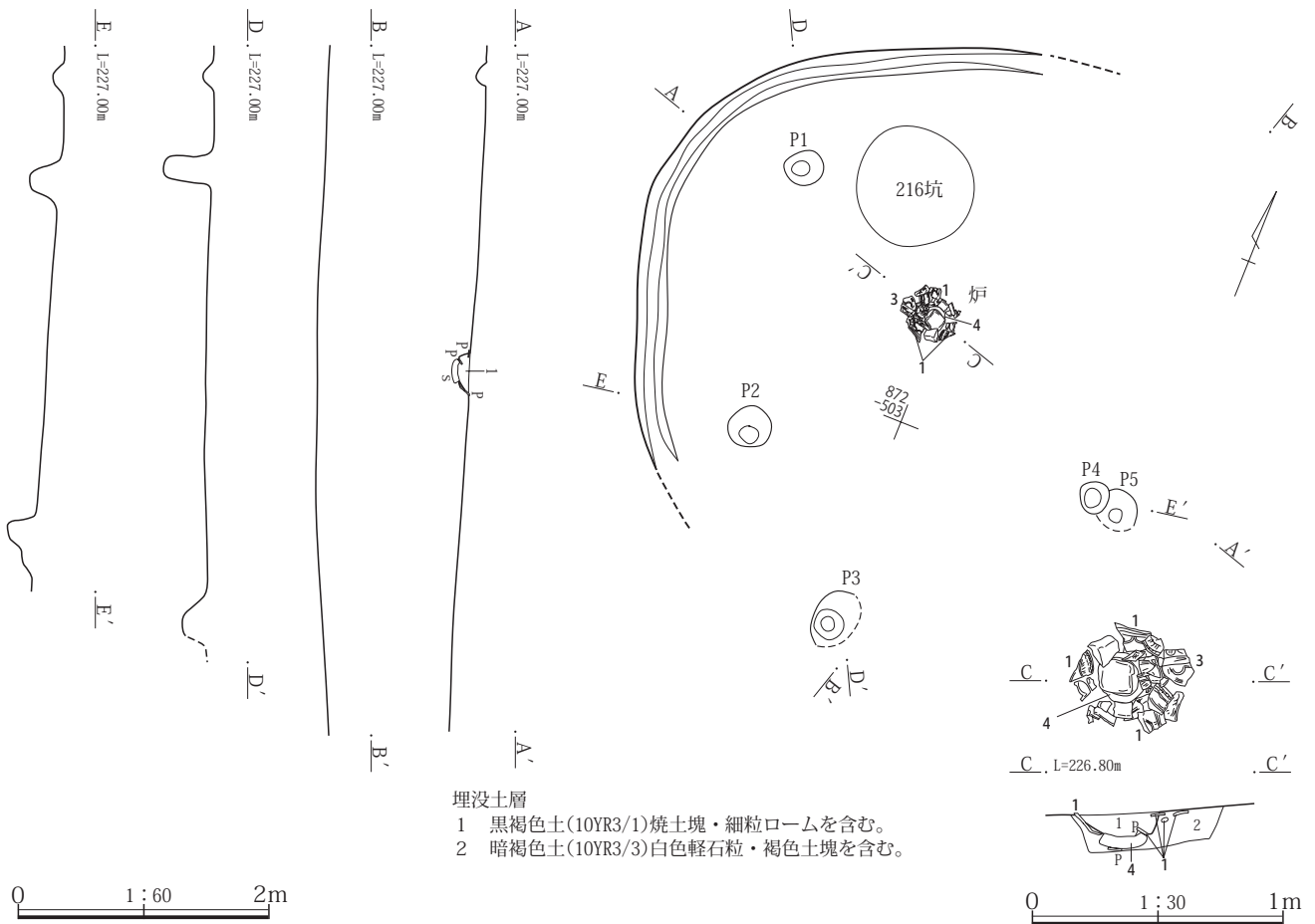
炉 床面のほぼ中央部に位置する。炉の中心部に径20cmの石皿を置き、それを圍繞するように深鉢土器(No.1)を打割した大小の破片を円形状に配置する。規模は、長径50cm×短径40cm、深さ10cmで、掘り方は直径60cm×深さ16cmの円形状を呈する。土器片や炉壁面の一部に、被熱による若干の風・赤化や焼土形成が認められる。

周溝 西側で全体の1/4程度を検出。幅17cm×深さ4~12cmを測る。

埋没土 炉内にVIII層に類似した暗褐灰色土が堆積しており、VIII層内あるいはその上面に掘り込み面を持つと想定される。

遺物 炉の内部から、縄文時代中期の深鉢土器の大形破片3個体(No.1~3)と石皿1点(No.4)の他に、埋没土中から土器片31点や欠損した多孔石1点が出土した。

所見 前述したように、当住居の確認がIX層上面であったため、規模等については不明瞭だが、柱穴P4とP5との重複状況を考慮すれば、建て替えが存在した可能性もある。また、当住居の構築・廃絶時期については、炉内や埋没土中の出土土器から判断して、中期の加曾利2式後半期に比定される。



第114図 1区31号住居

● 1区83号住居

位置 X=57860 Y=-75508
方位 N70度W **面積** 10.26㎡
写真 P L 36・125 **観察表** 456頁
重複 西・東側の壁面で240号土坑、463・466号ピットと重複するが、新旧関係は不明。
形状 斜面地の等高線にほぼ直行して東西に長軸を持ち、四隅の丸い長台形状を呈する。四辺はほぼ直線的に掘り込まれている。
規模 長軸3.65m×短軸3.09m、掘り込み深度15～31cmを測る。
床面 VIII層下位～X層にかけて15～31cm掘り込んで床面を構築する。斜面上方の東側から西側にかけてゆるい傾斜を持ち、全体的にやや凹凸のある床面を形成する。叩き床状の硬化面は存在しないが、全体的にかなりの堅緻面が認められる。尚、掘り方等は確認できなかった。
柱穴 東壁中央部に接してP1の1本が検出されたのみであるが、住居規模から判断して掘り込みを伴わない床置の支柱構造か、あるいは基本的に支柱を持たない伏せ

屋根構造が想定される。P1の規模は、直径24cm×深さ27cmであり、柱痕は確認できなかった。
炉 石囲いや埋甕などの施設を伴う炉の痕跡は確認できず、床面での焼土形成や被熱痕も認められないことから、屋内での焚火行為は無かったと考えられる。
埋没土 ロームブロックを多量に含む暗褐色土で埋没しており、人為的な埋め戻しの可能性も想定される。
遺物 床面に密着して出土した遺物は皆無であり、第117図に掲載した土器や石器を含めて、床面から5cm以上浮遊した状態で出土している。出土土器には前期の関山Ⅱ式も見られるが、主体を占めるのは勝坂2・3式や新巻類型である。第117図のNo.1～5は勝坂2式で、No.6はそれらに併行する新巻類型である。石器は、床面から5cm浮遊して出土したNo.8の打製石斧のみである。
その他 周溝については、精査にかかわらず検出できなかった。
所見 当住居の構築・廃絶時期については、No.1～6の出土土器から判断して、縄文時代中期の勝坂2式期に比定される。

●2区14号住居

位置 X=57923 Y=-75500

方位 N70度W 面積 4.51㎡

写真 PL36・37・125 観察表 456頁

重複 無し

形状 斜面地の等高線にほぼ直行して、東西に長軸を持つ隅丸方形形状を呈する。四辺はやや外湾気味に掘り込まれている。

規模 長軸2.46m×短軸2.23m、掘り込み深度6～26cmを測る。

床面 IX～X層にかけて最大26cm掘り込んで床面を構築し、斜面上方の西側から東側向かって僅かに傾斜する。かなりの凹凸が認められ、中央部では炉方向へと摺り鉢状に傾斜している。また、炉の周辺部は叩き床状の堅緻な面が認められ、全体的にもかなり堅緻な床面が形成されている。壁面は約50度の角度で立ち上がる。尚、掘り方等は確認できなかった。

柱穴 精査にかかわらず検出できなかった。一辺が2m強の小さな住居規模から判断して、掘り込みを伴わない床置の支柱構造も想定される。

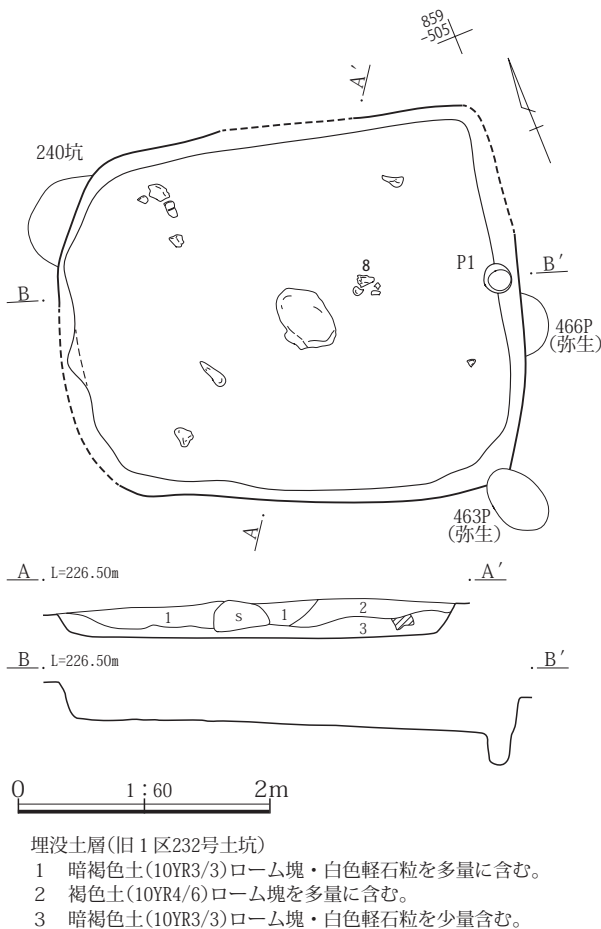
炉 床面のほぼ中央部に位置する。僅かな掘込炉であり、規模は直径44cm×深さ14cmの逆円錐形状を呈する。底壁面に被熱による僅かな赤変が認められるが、焼土形成に乏しく、使用の期間・頻度の少なさを窺わせる。

周溝 幅3～12cm×深さ1～4cmの規模で、周壁際を全周している。

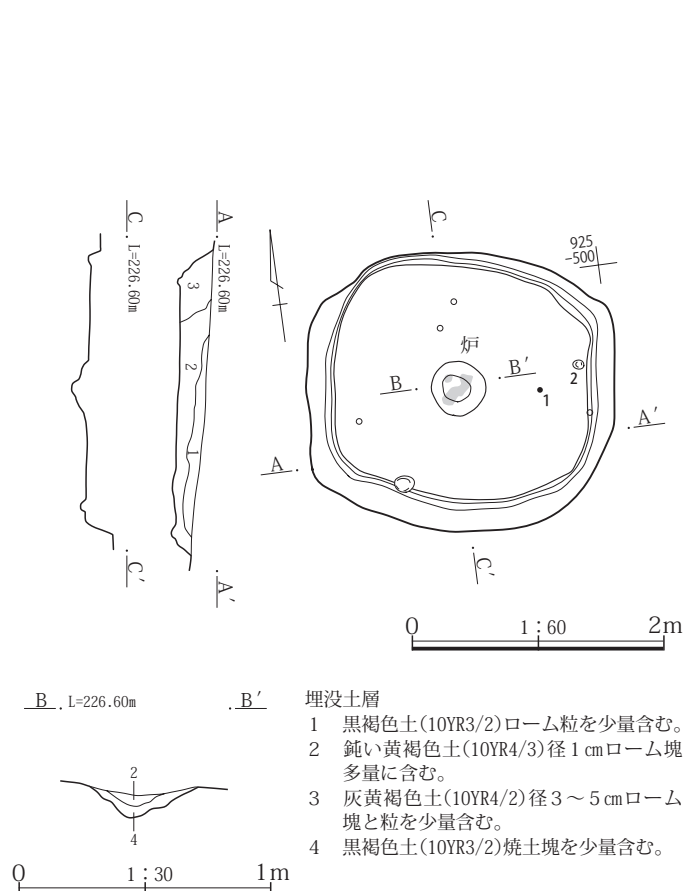
埋没土 VII・VIII層に類似した灰黄褐色土の2・3層がレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

遺物 埋没土中を含め、土器片1点(No.1)と磨石類1点(No.2)、削器1点が出土したのみである。

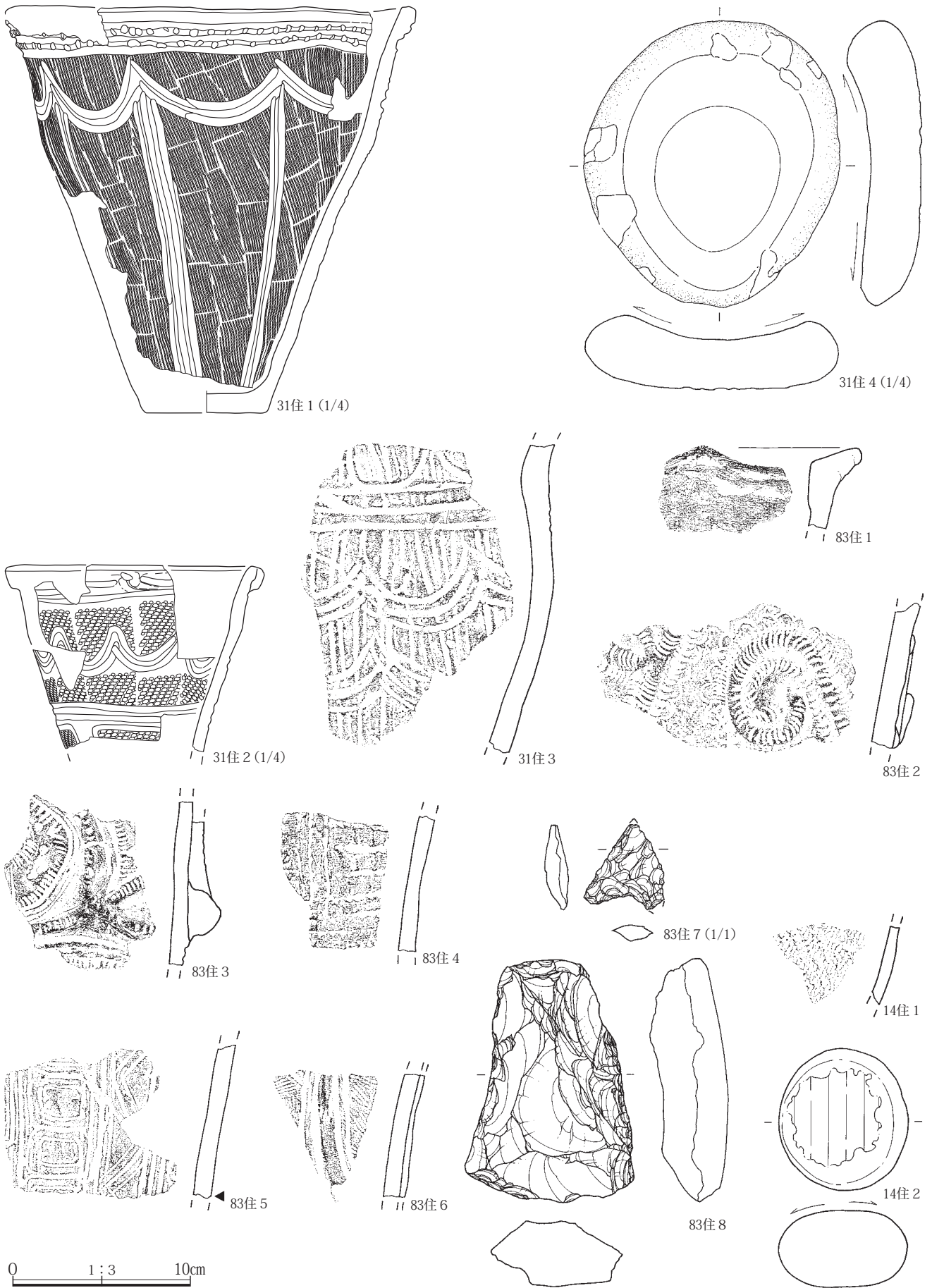
所見 当住居の確認はIX層上面であるが、当初の掘り込み面については確定できない。構築・廃絶時期についても確定的ではないが、小形かつ隅丸方形形状の外形と出土土器を重視すれば、前期の諸磯b式期の可能性が高い。



第115図 1区83号住居



第116図 2区14号住居



第117図 1区31・83号、2区14号住居出土遺物

● 4区34号住居

概要 最終的に、同一地点において5回に及ぶ拡張や建て替えの痕跡を確認したが、当住居のほぼ直上に古墳時代後期の4区20号住居が構築されていたこともあり、調査中の段階ではその重複状況について堆積土層断面からの確に把握することは困難であった。最終構築段階かつ最大規模の6期住居の調査終了後に、床面下の精査により第118図のように複数軒分の壁柱穴を伴う周溝や主柱穴を検出した。これらの複雑に切り合う付属施設について、当該期住居の基本構造でもある長軸方向に並行した3本×2列の6本主柱穴の配列状況と、長軸方向への拡張状況等を加味して、1～6期の変遷過程を考定した。従って、各期住居の付属施設内容とも密接に関わる構築過程は必ずしも確定的なものではなく、少なからず仮定を含む点に留意されたい。また、最大規模の6期やそれに次ぐ5期の住居拡張により、周壁を含む外形が完全に消失している1～4期住居の規模については、残存する周溝の外側20cmに壁面の立ち上がりを想定し、各期の平・断面図に破線で表示すると共に、第11表にその推定値を記載した。以下、構築当初段階の1期から最終段階の6期へと順次記述する。

尚、各期住居の位置・方位および写真・観察表の項目内容についてはほぼ同一であるため、1期にて記載し2期以降は省略する。

【1期】

位置 X=57860 Y=-75510

方位 N57度W **面積** (23.6㎡)

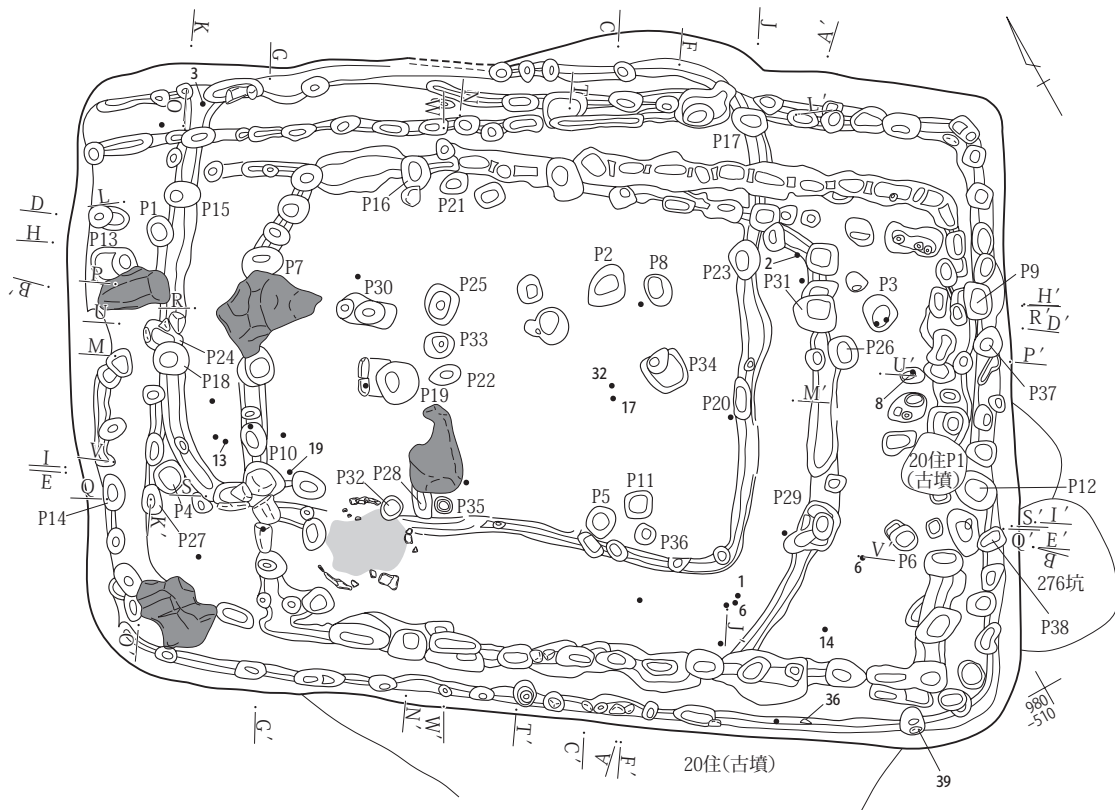
写真 P L 37・38・125～127 **観察表** 456頁

形状 斜面地の等高線にほぼ直行して、東西方向に長軸を持つ隅丸長方形形状を呈する。周溝の走向から判断して、やや外湾気味となる東辺を除き、他辺はほぼ直線的に掘り込まれていると想定される。

規模 長軸5.8m×短軸4.3mと推定される。1～6期の中では、2番目の小規模住居である。

床面 多期に及ぶ重複・建て替に付随する柱穴等の掘り込みにより、床面の状況は不明である。尚、X層以下のローム層中に包含された崖錐堆積物である長径60～85cm、短径30～50cm大の垂角礫4点が、床面上と周溝内に平易・抜去されずに礫面を覗かせている。

柱穴 3本×2列の合計6本の主柱穴が、住居の長軸方向に並行して配置されている。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P24：32cm×31cm、P33：24cm×51cm、P34：



第118図 4区34号住居

34cm×58cm、P27：23cm×40cm、P35：14cm×24cm、P36：16cm×44cmである。P34の北壁側には、建て替えに伴う支柱除去痕と思われる浅い掘り込みが見られる。各柱穴の芯々間の距離は、P24～P33:2.2m、P33～P34:1.8m、P27～P35:2.3m、P35～P36:1.65m、P24～P27:1.35m、P34～P36:1.3mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。尚、壁柱穴については周溝と一体化していることから、次項にて記載する。

周溝 直径15～35cm、深さ26～81cmの各壁柱穴を連結するように上幅7～24cm、深さ2～25cmの規模で周壁際廻るが、南壁側では相互に接続した壁柱穴の掘り込みにより周溝状を呈している。また、北辺中央部や南西隅は他期住居との重複・削平により不明瞭である。

その他 炉・埋没土・遺物等については、他期住居との重複により消失しているために不明である。

所見 当住居の構築・廃絶時期については、確実な伴出遺物が存在しないために確定できないが、6期の中で最古段階と推定されることから、状況的には第125図No. 1・2・4のような土器を伴う関山Ⅱ式期中段階に比定される可能性が高い。

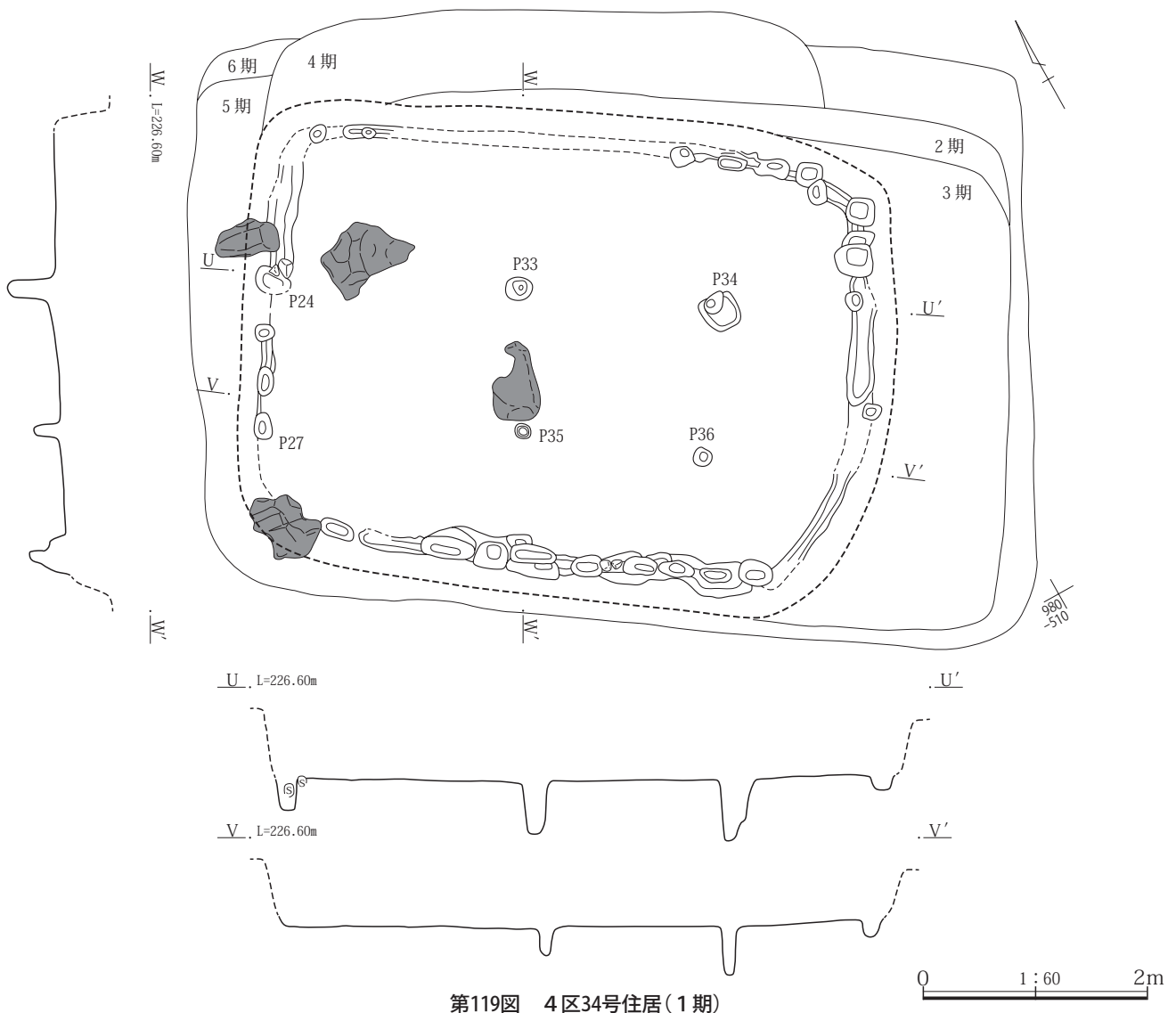
【2期】

面積 (27.0㎡)

形状 東西方向に長軸を持つ隅丸長方形形状を呈する。1期住居の南辺の一部を共用しつつ西側を約60cm縮小して、東側に約1m拡張している。やや外湾気味の西辺を除き、他辺はほぼ直線的に掘り込まれると想定される。

規模 長軸6.2m×短軸4.55mと推定される。規模的には、1期住居を3㎡強上回っている。

床面 多期に及ぶ重複・建て替に付随した柱穴等の掘り込みにより、床面の状況は不明。ローム層中に包含さ



第119図 4区34号住居(1期)

れた崖錐堆積物の亜角礫2点が、平易・抜去されずに床面上と周溝内に礫面を覗かせている。

柱 穴 2本×2列の合計4本の支柱穴が、ほぼ対角線上に配置されると想定したが、他期に認定した支柱穴がその中間に充当されて6本支柱となる可能性もある。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P30：47cm×60cm、P31：33cm×74cm、P32：19cm×28cm、P29：50cm×74cmであり、斜面地下位側のP31・P29の掘削深度がいずれも70cmを超える。P29は3期住居でも共用されており、建て替えあるいは柱の抜去に伴う掘り直しが認められる。またP30でも2本が重複しており、住居の拡張を伴わない支柱の入れ替えも考慮される。各柱穴の芯々間の距離は、P30～P31：3.6m、P32～P29：3.45m、P30～P32：1.55m、P31～P29：1.7mを測る。各柱穴内での柱痕は確認できなかった。

周 溝 直径15～35cm、深さ23～48cmの各壁柱穴を連結するように上幅7～26cm、深さ7～24cmの規模で周壁際をほぼ全周しているが、1期でも指摘したように壁柱穴相互の接続掘削により周溝状を呈するとも言える。

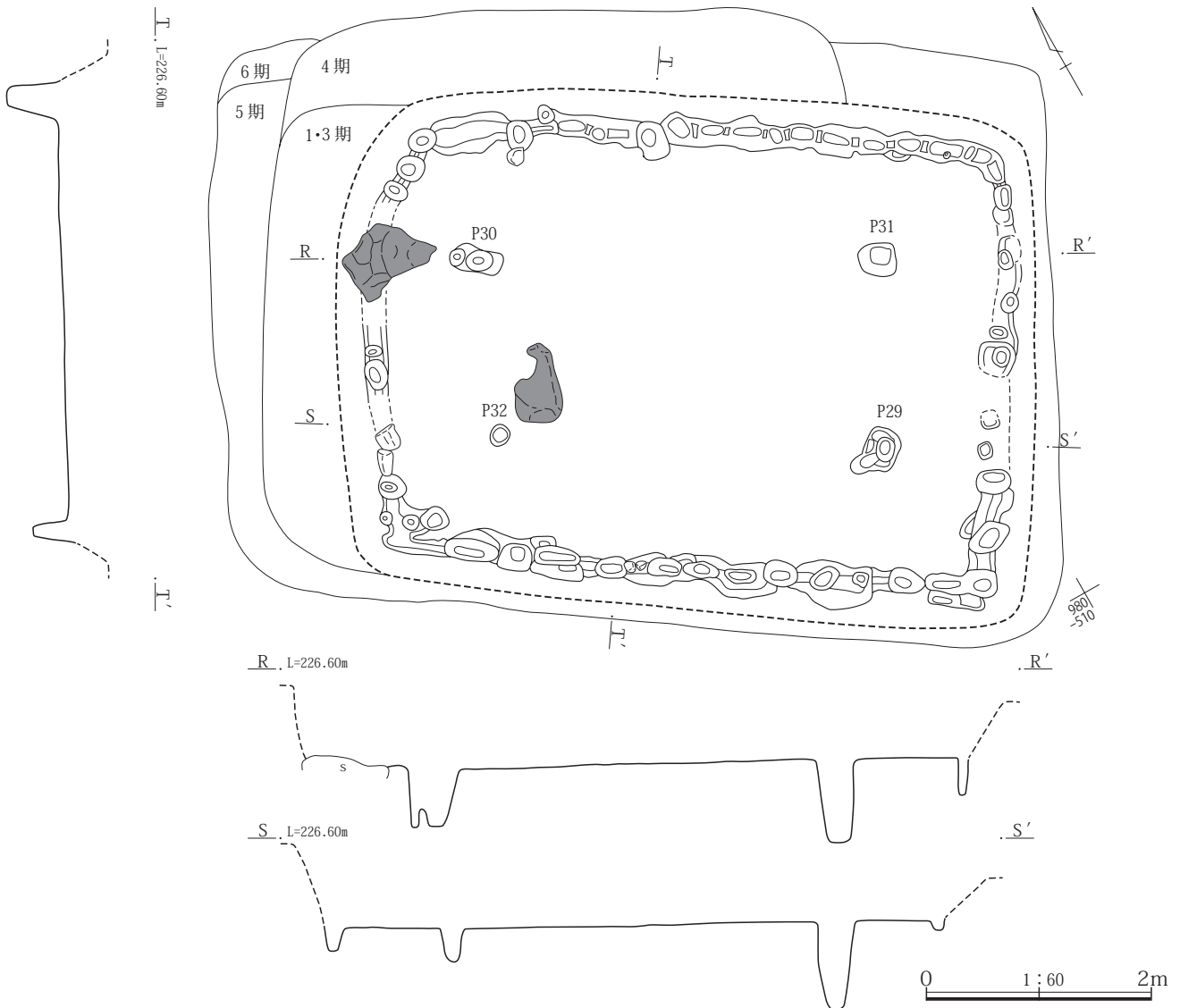
その他 炉・埋没土・遺物等については、他期住居との重複により消失しているために不明。

所 見 当住居の構築・廃絶時期については、確実な伴出遺物が存在しないために確定できない。状況的には、1期住居に近接した関山Ⅱ式期中段階に比定される可能性が高い。

【3期】

面 積 (28.8㎡)

形 状 東西方向に長軸を持ち、平行四辺形状の隅丸長方形を呈する。2期住居の南辺全部と東辺を共有しつつ西側に約70cm拡張するが、逆に北辺を約20cm縮小してい



第120図 4区34号住居(2期)

る。やや外湾気味の北辺を除き、他辺はほぼ直線的に掘り込まれると推定される。

規模 長軸6.85m×短軸4.4mと推定される。規模的には、2期住居を2m弱上回る。

床面 多期に及ぶ重複・建て替により、床面の状況は不明。1期と同様に、ローム層中に包含された崖錐堆積物の垂角礫4点が、床面上と周溝内に平易・抜去されずに礫面を覗かせている。

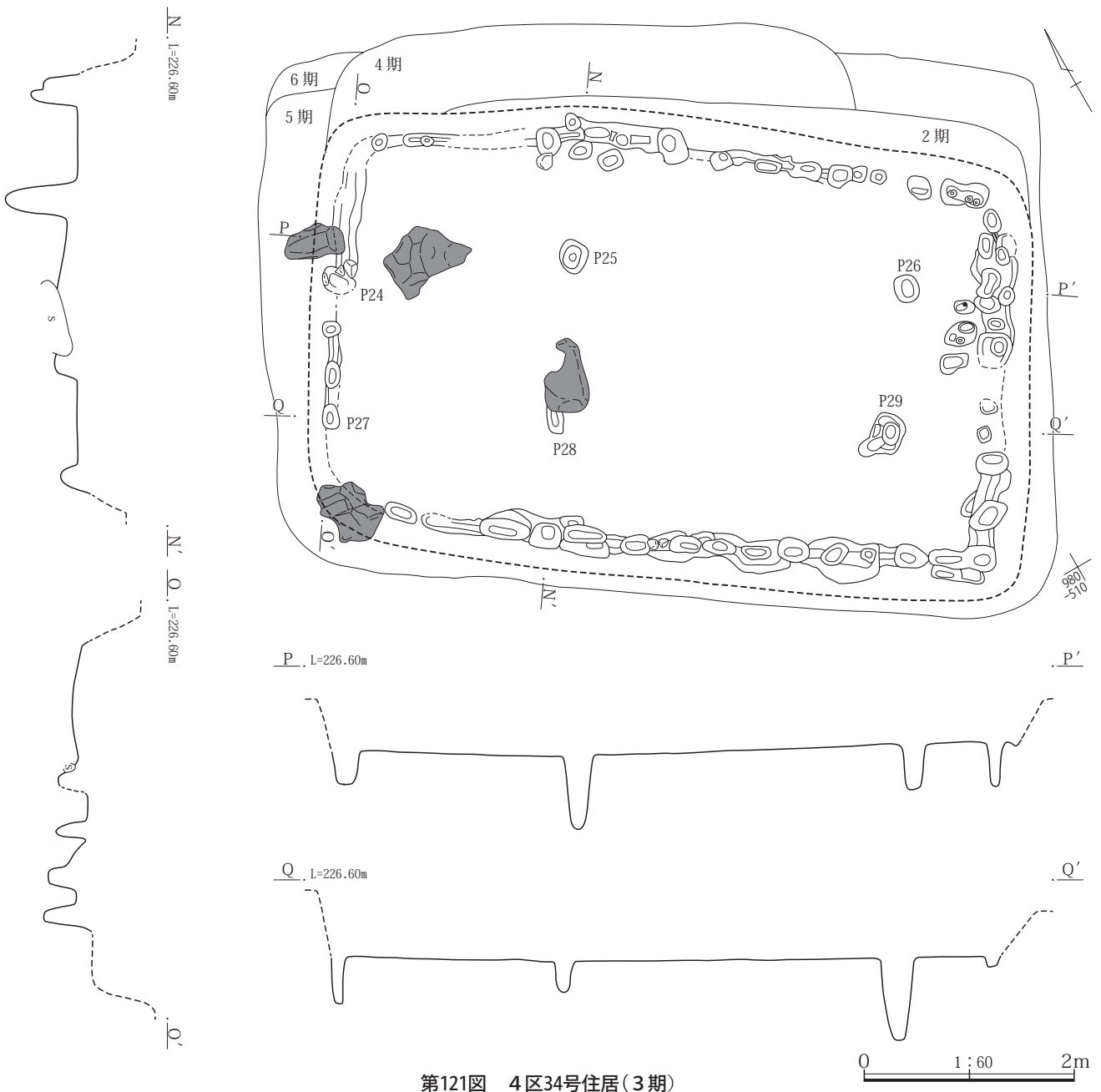
柱穴 3本×2列の合計6本の支柱穴が、住居の長軸方向に並行して配置されている。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P24：32cm×31cm、P25：23cm×51cm、P26：27cm×36cm、P27：23cm×40cm、P28：25cm×20cm、P29：

50cm×74cmであり、P24は1期とP29は2期の住居との共用である。各柱穴の芯々間の距離は、P24～P25：2.25m、P25～P26：3.2m、P27～P28：2.15m、P28～P29：3.2m、P24～P27：1.3m、P26～P29：1.4mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。

周溝 直径10～35cm、深さ22～50cmの各壁柱穴を連結するように上幅8～21cm、深さ2～25cmの規模で周壁際をほぼ全周しているが、南西隅や西辺中央部付近は垂角礫で途切れる。

その他 炉・埋没土・遺物等については、他期住居との重複により消失しているために不明。

所見 当住居の構築・廃絶時期についても1・2期同



第121図 4区34号住居(3期)

様に、確実な伴出遺物が存在しないために確定できない。状況的には、第125図3・5・6などの土器を伴う関山Ⅱ式期中～新段階に比定される可能性が高い。

【4期】

面積 (21.0㎡)

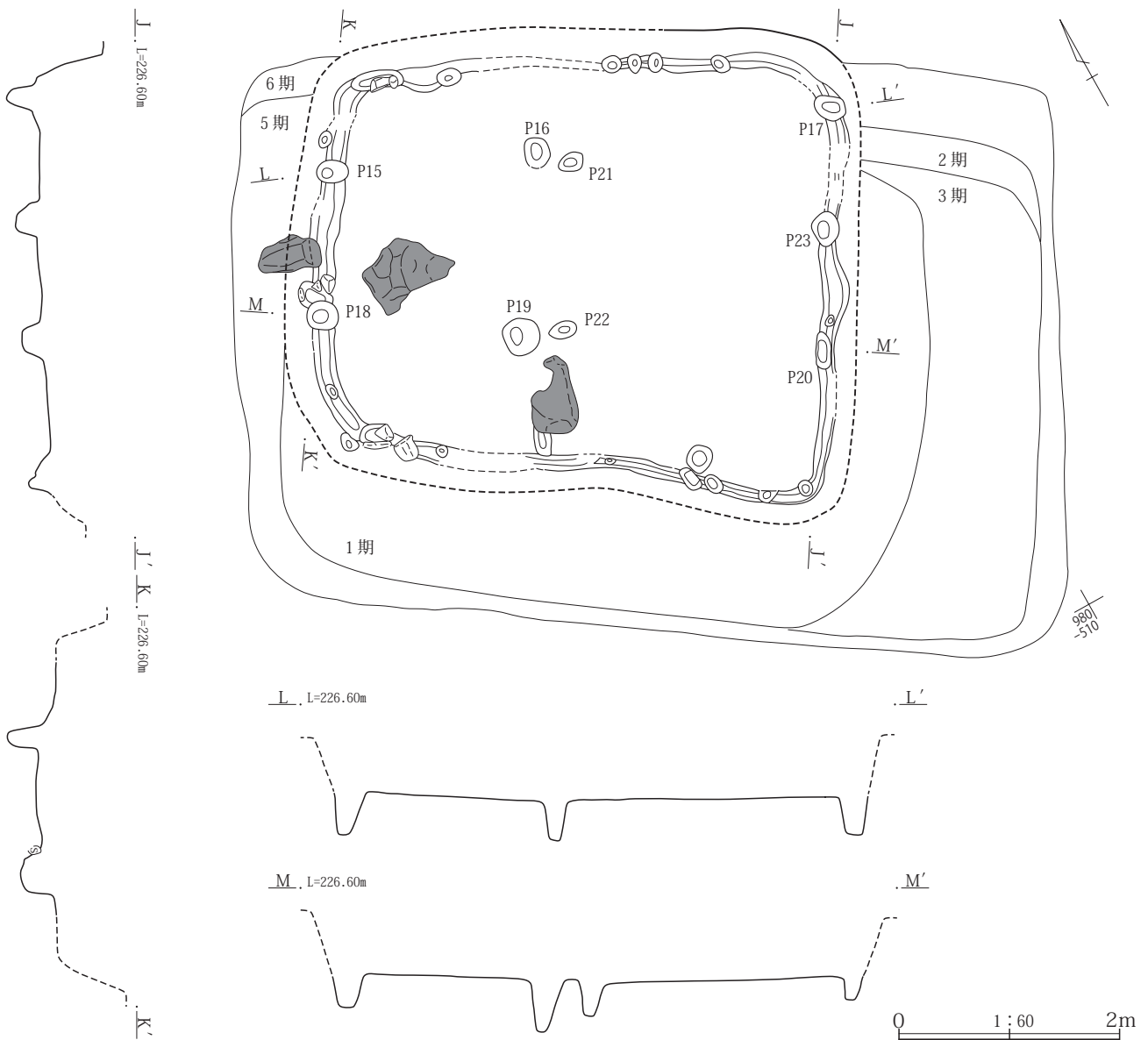
形状 東西方向に長軸を持ち、東辺に較べて西辺が70cm短い隅丸長台形を呈する。3期住居の西辺部のみを共有するが、東辺と共に約10～20cm縮小し、長軸方向でも170cm縮小している。やや内側に湾曲する南辺を除いて、各辺はほぼ直線的に掘り込まれると推定される。

規模 長軸5.16m×短軸4.3mと推定される。規模的には3期住居を8㎡弱下回り、1～3期まで認められた拡大傾向が一転して縮小化していると共に、各期の中で

も最小規模となっている。

床面 多期に及ぶ重複・建て替により、床面の状況は不明。ローム層中に包含された崖錐堆積物の亜角礫2点が床面上に、また1点が周溝内に平易・抜去されずに礫面を覗かせている。

柱穴 3本×2列の合計6本(P15～P20)の支柱穴が、住居の長軸方向に並行して配置されている。また、P21・P22の2本が上記支柱穴に近接し、支柱の入れ替えあるいは補助柱等に関係した柱穴の可能性もある。東辺周溝内のP23は、補助柱穴か出入口部に関係した柱穴と思われる。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P15：28cm×40cm、P16：28cm×45cm、P17：30cm×39cm、P18：28cm×29cm、P19：34cm×54cm、P20：34cm×22cm、P21：24cm×51cm、



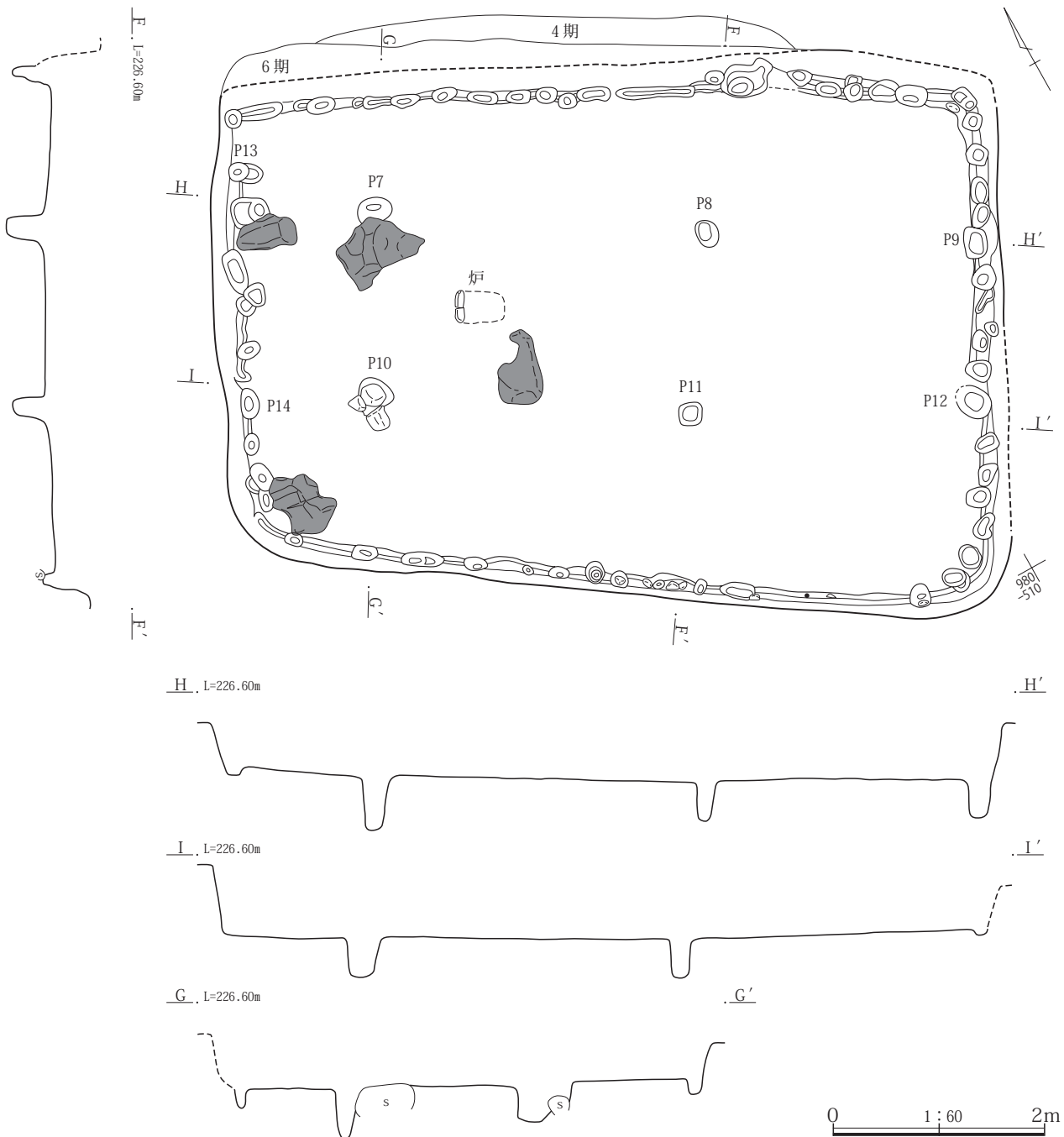
第122図 4区34号住居(4期)

P22：26cm×37cm、P23：32cm×32cmである。また各柱穴の芯々間の距離は、P15～P16：1.9m、P16～P17：2.7m、P18～P19：1.8m、P19～P20：2.75m、P15～P18：1.3m、P17～P20：2.2mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。

周溝 直径10～25cm、深さ16～21cmの各壁柱穴を連結するように上幅7～25cm、深さ6～24cmの規模で周壁際をほぼ全周している。壁柱穴の様態は、他期に比べて規模・本数ともにその貧弱さが際立っている。

その他 炉・埋没土・遺物等については、他期住居との重複により消失しているために不明。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、確実な伴出遺物が存在しないために確定できない。3期住居の西辺を共有する関係にあることから当住居を4期としたが、1期住居西辺との共有関係も考慮すれば、当該住居が最古段階となる可能性も否定できない。そう仮定した場合には、住居面積が約21㎡→29㎡へと段階的な拡大傾向を示すことになり、より整合的でもある。



第123図 4区34号住居(5期)

【5期】

面積 (36.5)m²

形状 東西方向に長軸を持ち、東辺に比べて西辺が70cm短い隅丸長台形を呈する。1～4期の外形壁面との共有関係は皆無であり、長・短辺ともに大きく拡張している。四辺はほぼ直線的に掘り込まれ、その壁面勾配は約80度である。北辺中央部付で4期住居の拡張や倒木痕と重複するため、同部位の壁面が不明瞭となっている。

規模 長軸7.45m×短軸5.20mで、掘り込み深度は45～82cmを測る。

床面 6期床面上での当期の周溝検出状況から判断すると、当期に形成された床面が6期住居段階でも踏襲された可能性が高い。残存良好な箇所での計測では、Ⅷ～Ⅹ層にかけて最大82cm掘り込んで床面を構築し、壁際から床面中央部に向かって掘り鉢状に10～15cm低くなる。多期に及ぶ重複・建て替えに付随する柱穴等の掘り込みにより、床硬化面の状況は不明であり、掘り方等も確認できなかった。尚、ローム層中の垂角礫4点が、平易・抜去されずに床面上に礫面を覗かせているが、1～4期の床面上に灰黄褐色土を5～10cm程度の厚さで被覆していることから、各垂角礫はその上面が僅かに見える程度であったと推定される。

柱穴 3本×2列の合計6本(P7～P12)の支柱穴が、長軸方向に並行して配置されている。また、斜面上位側となる西壁際のP13・P14は、補助的な柱穴あるいは壁柱穴と思われる。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P7:34cm×50cm、P8:27cm×36cm、P9:29cm×39cm、P10:33cm×35cm、P11:32cm×36cm、P12:30cm×35cm、P13:19cm×33cm、P14:28cm×57cmである。また各柱穴の芯々間の距離は、P7～P8:3.1m、P8～P9:2.55m、P10～P11:3.0m、P11～P12:2.7m、P7～P10:1.75m、P9～P12:1.5mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。

炉 第123図に表示したのは6期の炉であるが、双方の類似した住居規模・外形を考慮すれば、7区59号住居の事例と同様に当期の炉もほぼ同一位置に設置されていたと推定される。

周溝 直径10～40cm、深さ20～43cmの壁柱穴が相互に接続して周壁際を全周するように掘り込まれた結果、布掘り状の様相を呈していると考えられる。明瞭な柱穴が認められない箇所では、上幅10～22cm、深さ2～21cmを

測る。

埋没土 四辺の掘り込み状況から、Ⅷ層内あるいはその上面に掘り込み面を持つと想定されるが、6期住居との重複により埋没土は不明である。

遺物 多重複により、当期住居に伴出する遺物は確定できない。

所見 当住居の構築・廃絶時期については、伴出遺物を抽出できないことから確定できない。ただし、住居規模や外形が6期のベースとなっていることを重視すれば、時期的にも6期に近接する可能性が高く、後述するように有尾式期に比定されると考えられる。

【6期】

面積 37.32m²

重複 南西壁側から中央部にかけて20号住居(古墳時代)に切られ、北東壁で276号土坑を切って掘り込まれている。

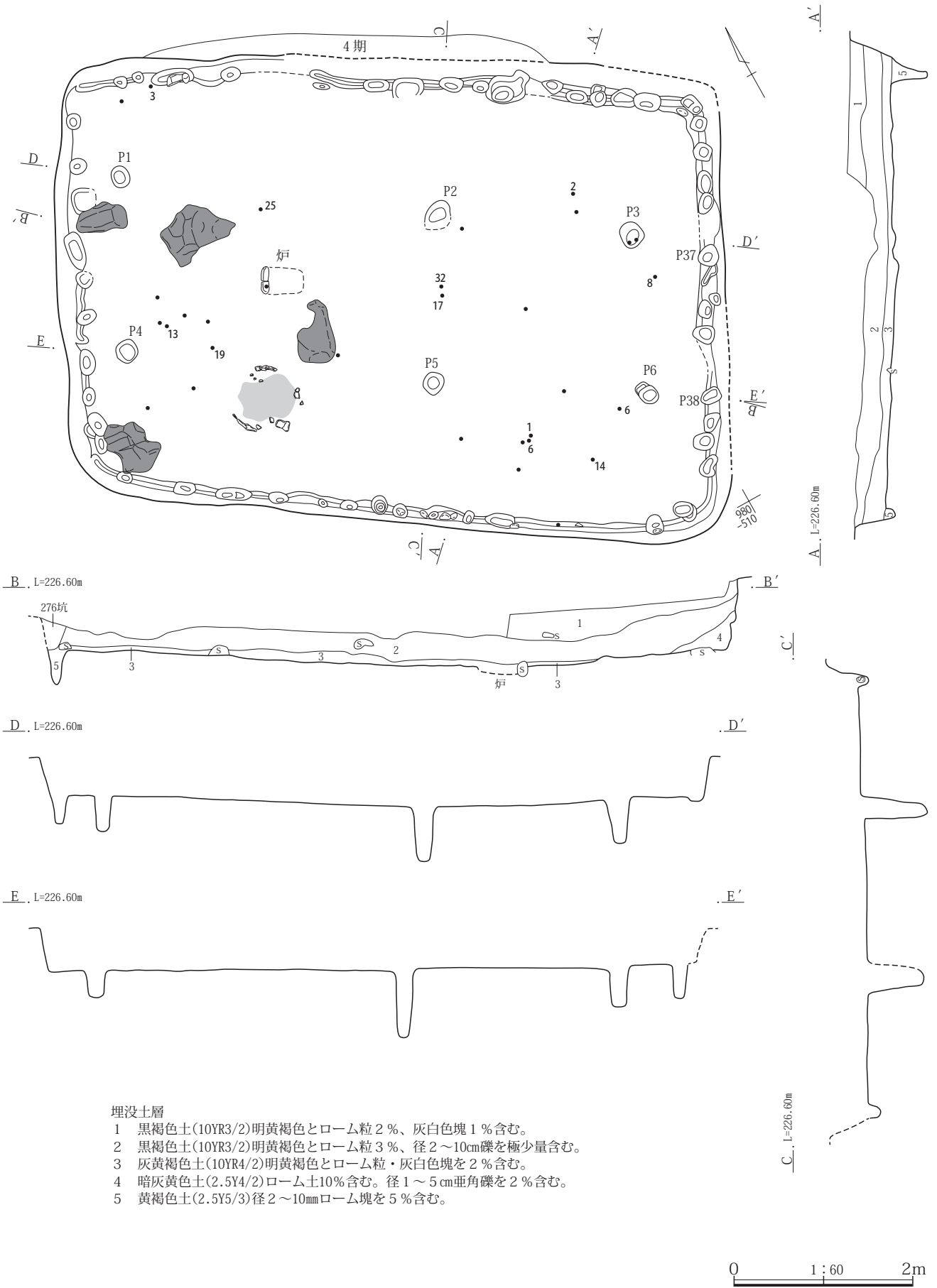
形状 北辺を除いて直前段階の5期住居の外形を全く踏襲するが、西辺側を北方向に約40cm拡張しているために、平行四辺形状の隅丸長方形を呈する。

規模 5期住居とほぼ同様であり、長軸7.50m×短軸5.30m、掘り込み深度45～82cmを測るが、西辺の延伸により5期より面積を1m²拡大し、各期の中では最大規模となる。

床面 基本的に、5期段階の床面を踏襲すると想定される。

柱穴 5期の柱穴を共用する可能性もあるが、3本×2列の合計6本の支柱穴全てが若干位置をずらしつつ、長軸方向に並行して配置されると推定した。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:24cm×40cm、P2:32cm×62cm、P3:28cm×52cm、P4:25cm×31cm、P5:25cm×27cm、P6:20cm×45cmである。また各柱穴の芯々間の距離は、P1～P2:3.6m、P2～P3:2.2m、P4～P5:3.4m、P5～P6:2.45m、P1～P4:1.95m、P3～P6:1.8mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。尚、斜面下位側の東壁周溝内に直径25cm、深さ45cm前後のP37・P38の壁柱穴2本が存在し、これらは出入口部に関係した柱穴の可能性もある。

炉 床面中央部から約1m西壁(奥壁)側に偏在する。奥壁側の一辺に長径30cm×短径15cmの棒状河床礫1石を配した、長方形または楕円形状の掘込炉と想定され



第124図 4区34号住居(6期)

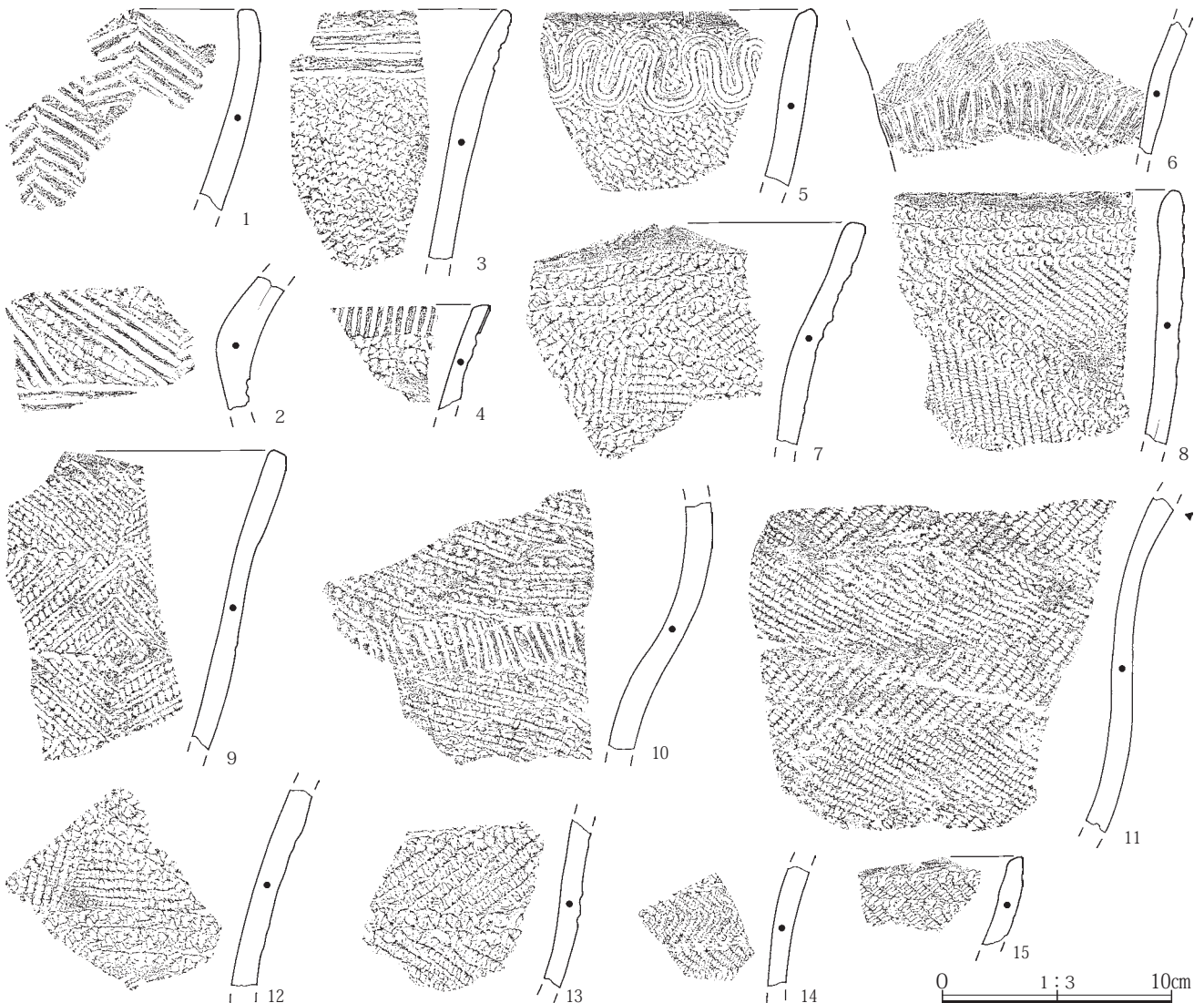
るが、多重複に起因して炉の埋没土と掘り方境界との識別が困難であったため、規模・形状については不明である。炉石は中央部に割れているが、被熱によるものと推定される。また、当炉の南側約1mの床面上に直径50cm程の焼土痕が認められ、当該箇所での何らかの焚火行為が存在したと考えられる。

周溝 直径10~40cm、深さ20~30cmの壁柱穴が接続して掘り込まれており、5期で記載したのと同様にその痕跡が結果的に周溝状を呈していると考えられる。上幅は10~42cm、深さ2~21cmの規模で周壁際をほぼ全周している。

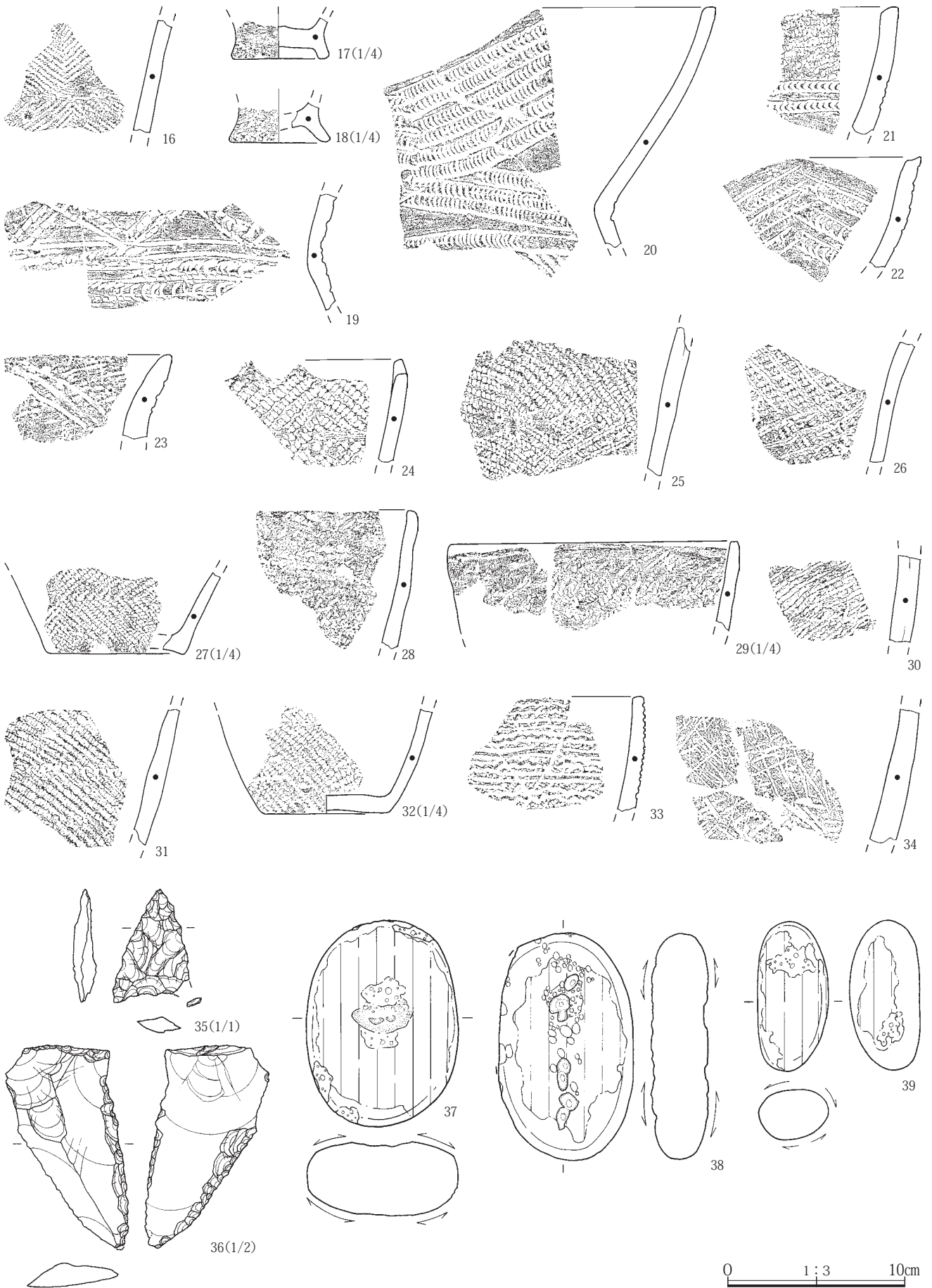
埋没土 5期と同様に、Ⅷ層内あるいはその上面に掘り込み面を持つと想定される。Ⅷ層に近似した黒褐色土が上層から下層にかけてレンズ状に堆積しており、自然埋没状態を示している。

遺物 床面密着および浮遊高5cm以内の遺物は、第125・126図のNo.1・2・6・14・17・25の土器片とNo.39の磨石類であるが、各土器片には関山Ⅱ式や有尾式が混在し、確実な伴出遺物を特定するのは困難である。埋没土の2層を中心にして、前期の関山Ⅱ式709点、有尾式35点の土器片と、削器類13点、磨石類4点の石器が出土した。また、埋没土中から出土した黒曜石の調整剥片4点について、蛍光X線分析による産地同定を行ったが、星ヶ台3点、高松沢1点という結果を得ている。その詳細については「第4章 自然科学分析」を参照されたい。

所見 当住居の構築・廃絶時期については、上記の通り床面密着土器からは確定できないが、1~6期の中で最新段階の構築である点を重視すれば、第126図No.20~34の土器を伴う有尾式~黒浜式期に比定される可能性が高い。



第125図 4区34号住居出土遺物(1)



第126図 4区34号住居出土遺物(2)

●4区35号住居

位置 X=57986 Y=-75483

方位 N47度E 面積 不明

写真 P L 39・127 観察表 457頁

重複 北西壁側を弥生時代の8号住居に切られる。

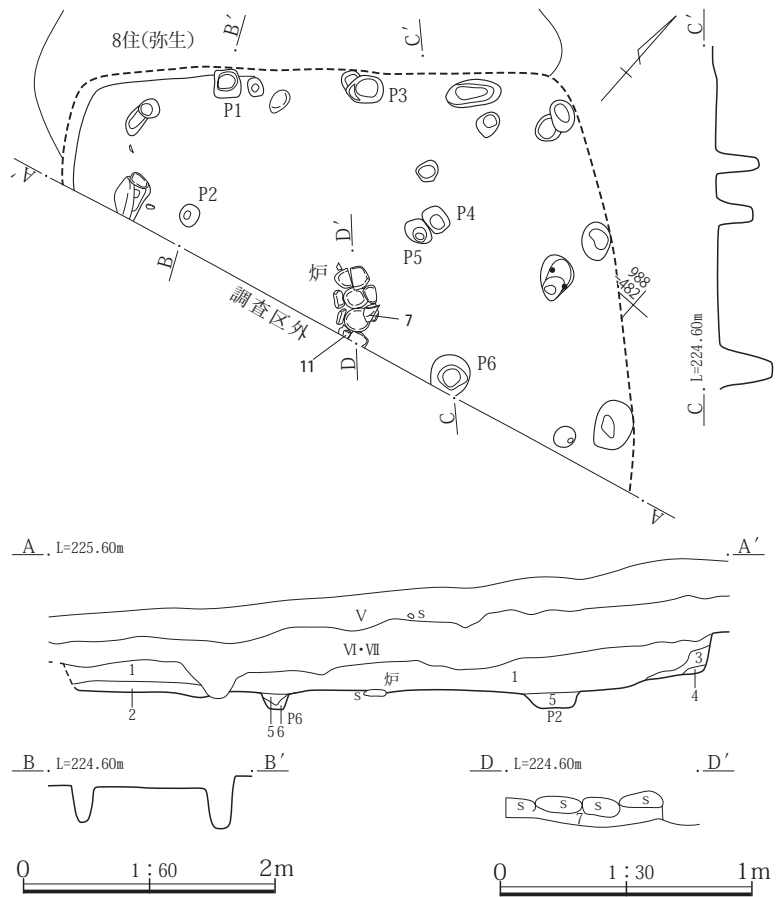
形状 斜面地の等高線にほぼ直行して、東西方向に長軸を持つ長方形と推定されるが、大部分が調査区外に位置するため詳細不明。

規模 長軸は不明だが、短軸は4.2mと推定される。掘り込み深度は、8号住居による削平もあり10cm前後と残存不良だが、調査区外との境界断面では30cmを測る。

床面 VIII～X層上面にかけて最大30cm掘り込み、凹凸の少ない床面を形成する。叩き床状ほどではないが、全体的にかなり堅緻な面が認められる。

柱穴 支柱穴と推定されるP1～P6の6本の他に、周壁際を廻る直径15～40cm、深さ10～35cmの壁柱穴的なピットが10数本検出された。相互の配列状況から見て、東西の長軸方向に並行する3本×2列の配置と想定されるが、壁際のP1・P3については配列の軸線からずれており、出入口部に関わる柱穴の可能性もある。また、P4・P5のように近接する柱穴も存在することから、建て替え等による再旋削も考慮される。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1：23cm×32cm、P2：17cm×28cm、P3：29cm×22cm、P4：22cm×32cm、P5：23cm×30cm、P6：32cm×43cmである。各柱穴の芯々間の距離は、P1～P2：1.15m、P3～P4：1.2m、P4～P6：1.25m、P1～P3：1.1mを測る。

炉 調査区外との境界に近接して、長径10～30cm大の河床礫8個を用材とした長辺65cm×短辺35cmの石組状の炉を検出。長辺の両側各2石は立位に設置しているが、西側短辺の被熱割れした石材も立っていた可能性があり、扁平な円礫3個を底面に敷いてそれをコ字状に圍繞した石囲炉と考えられる。石材の近縁や直下には、焼土形成は認められなかった。掘り方は短辺45cm、深さ3～5cmを測るが、長辺側は調査区外に伸びているため不明。



埋没土層

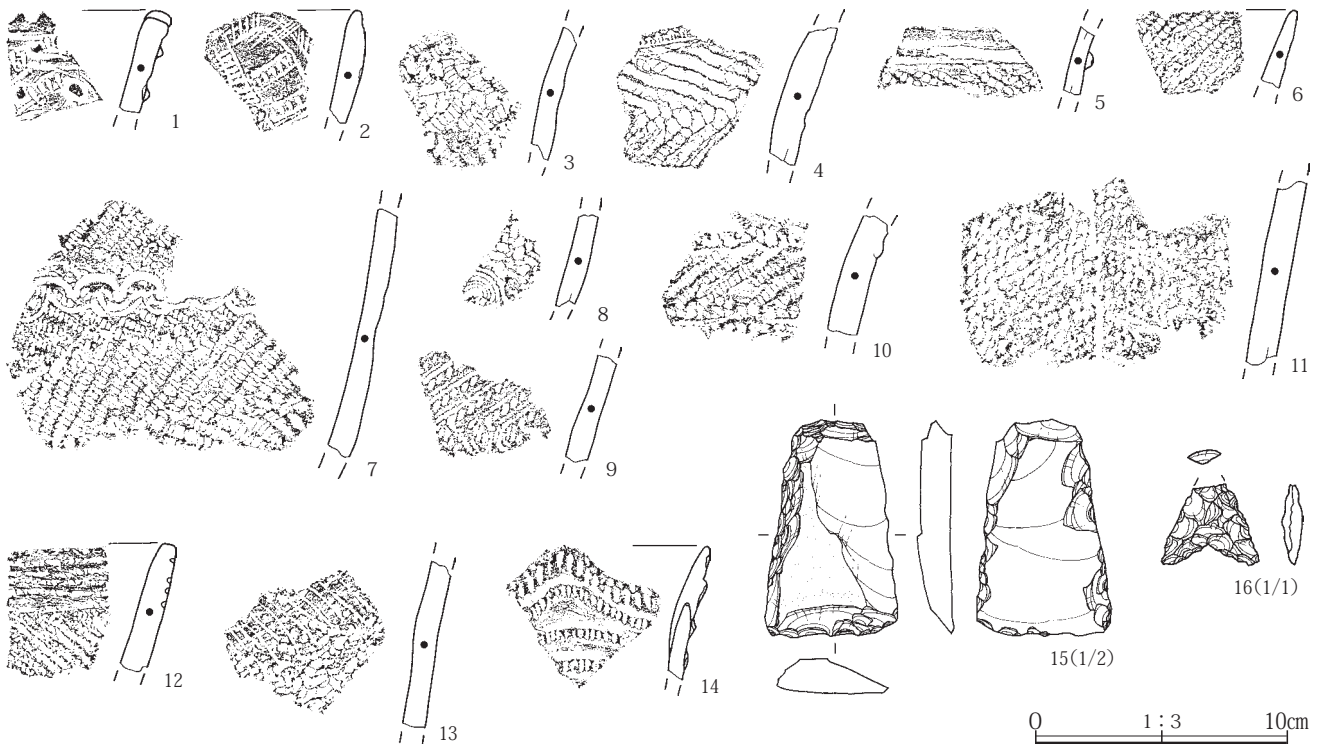
- 1 灰黄色土(2.5Y4/2)径1～2mmローム塊を3%含む。
- 2 灰黄褐色土(2.5Y4/2)径1～2mmローム塊を4%含む。
- 3 黄灰色土(2.5Y4/1)径1～2mmローム塊を10%含む。
- 4 黄灰色土(2.5Y4/1)ローム粒・塊を主体とした土。
- 5 黄灰色土(2.5Y4/1)径2～10mmローム塊を5%含む。
- 6 暗灰黄色土(2.5Y4/2)径2～5mmローム塊を20%含む。
- 7 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム塊を埋没土層10%含む。

第127図 4区35号住居

埋没土 VIII層に近似した灰黄褐色土がレンズ状に堆積して自然埋没状況を示す。

遺物 床面密着の出土遺物は、炉内出土のNo.7・11の土器片2点のみである。埋没土中からは、前期の関山Ⅱ式を主体とした125点の土器片と石鏃(16)と削り器(15)各1点の石器が出土した。No.14は小破片ではあるが、清水ノ上Ⅱ式式の土器と考えられる。尚、黒曜石製石鏃のNo.16と同剥片1点について、蛍光X線分析による産地同定を行ったが、高松沢と鷹山または小深沢との結果を得ている。その詳細については「第4章 自然科学分析」を参照されたい。

所見 当住居の構築・廃絶時期については、伴出遺物と想定されるNo.7・11の関山Ⅱ式中段階の器片から、同式期に比定される可能性が高い。



第128図 4区35号住居出土遺物

● 5区16号住居

位置 X=57688 Y=-75544

方位 不明 面積 不明

写真 P L 39・127 観察表 458頁

重複 無し

形状 住居全体の約2/3が調査区外に位置するため詳細は不明だが、ほぼ一定の曲率で掘り込まれる周壁の状況から、円形状あるいは楕円形状を呈すると推定される。壁面の勾配は約67度の角度でやや緩やかに立ち上がる。

規模 長・短径は不明だが、掘り込み深度は調査区外との境界断面で95cmを測り、当遺跡の縄文時代住居の中では最大の掘削深度を持つ。

床面 VIII上面からX層上面にかけて最大95cm掘り込み、凹凸の少ない平坦な床面を形成する。叩き床状ほどではないが、全体的にかなり堅緻な面が認められる。尚、調査区外との境界付近に、当住居の構築時期を遡る北から南方向への地滑り的な地山崩落痕が認められ、その痕跡を平易して床面を構築している。

柱穴 住居の大半が調査区外に存在することや、地滑り痕内の柱穴検出が困難であったこともあり、主柱穴に認定されるのはP1の1本に限定される。17A号住居や56号住居等を参照すれば、構造的には5～7本が周壁内側を廻ると想定される。P1の規模は、直径33cm×深さ53cm

を測り、整然とした円筒状の深い掘り込みをもつ。

周溝 上幅14～24cm、深さ7～14cmの規模で周壁際を全周すると想定される。

埋没土 VIII層よりも黒色味の強い黒褐色土が、斜面上位の北西側から南東方向へとレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示す。上位には、淡色黒ボク土のVII層が堆積する。

遺物 床面に密着して出土した遺物は皆無であり、平面図内にプロットされたNo.2～4・6の新巻類型や焼町土器・三原田式の土器片も、8～29cm浮遊した状態での出土である。埋没土中からは、中期の加曾利E2・E3式を主体にした213点の土器片と、基部を欠損した打製石斧1点(12)や調整剥片4点などの石器が出土している。

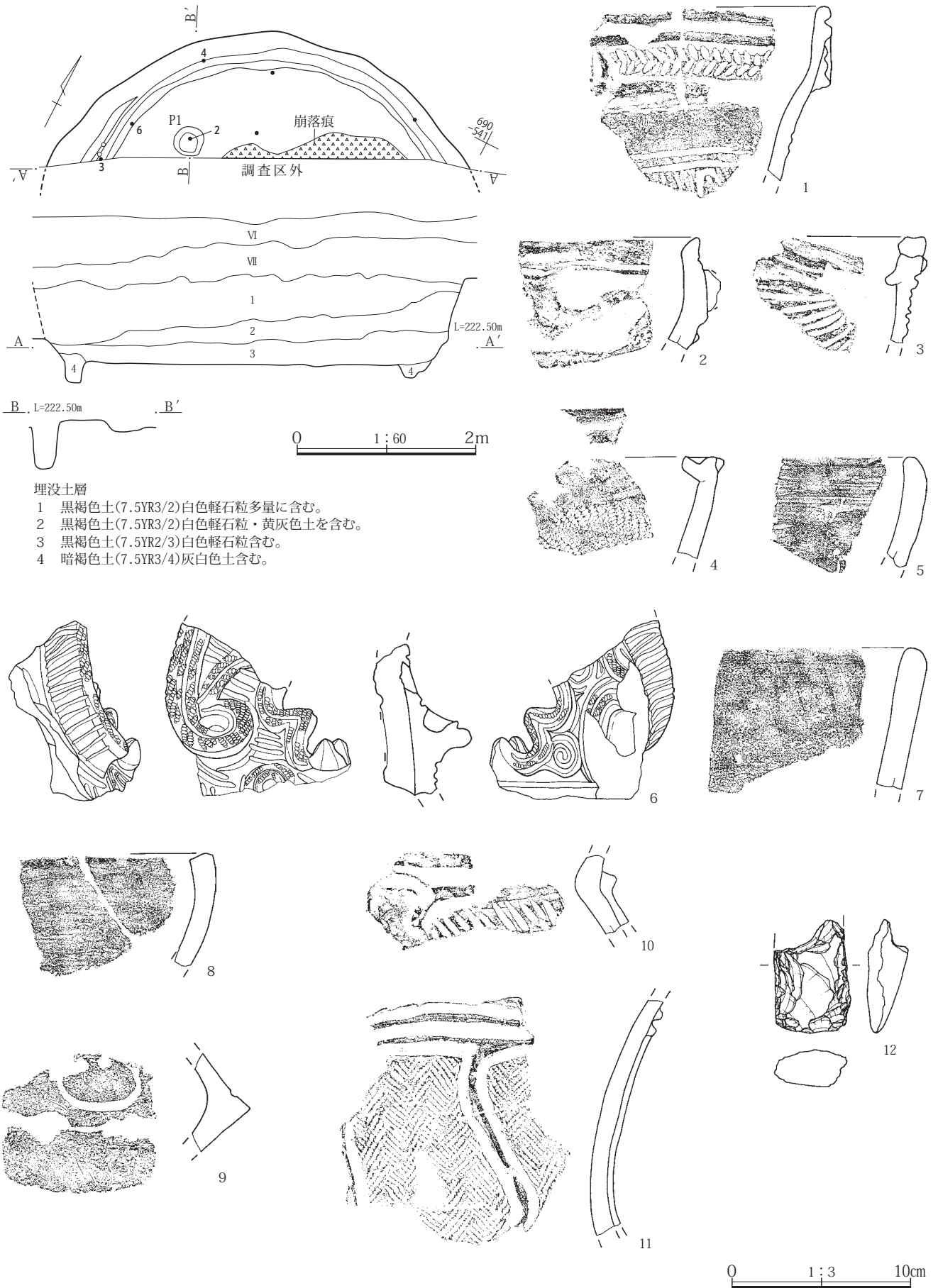
所見 当住居の構築・廃絶時期については、床面に密着出土した遺物が存在しないことから確定できないが、埋没土中の主体的な土器片が加曾利E2式～同E3式であることや、円形を基調とした住居形態などから見て、同式期に比定される可能性が高い。

● 5区17A号住居

位置 X=57695 Y=-75545

写真 P L 40・128 観察表 458頁

重複 東壁から南壁にかけて古墳時代後期の13号住居により切られ、北壁側で17B号住居を切っている。



第129図 5区16号住居と出土遺物

形状 住居全体の約半分が調査区外に位置しているため確定的ではないが、円形または楕円形状を呈すると考えられる。壁面の勾配は約70度の角度で立ち上がる。

規模 直径6.23mであり、掘り込み深度は調査区外との境界断面で55～63cmを測る。

床面 Ⅷ上面からⅩ層にかけて最大63cm掘り込んで床面を構築する。斜面上位の北側から南側に向かって比高差25cmの緩傾斜があり、若干の凹凸面が見られる。炉の周辺部を中心にして、かなりの硬化面が認められる。尚、掘り方は存在しなかった。

柱穴 周壁の50～80cm内側を廻るP1～P4の支柱穴4本を検出したが、調査区外の残存部を考慮すれば8～10本の支柱構造か。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1：47cm×53cm、P2：43cm×60cm、P3：42cm×9cm、P4：44cm×58cmである。13号住居との重複で浅いP3の当初深度は、

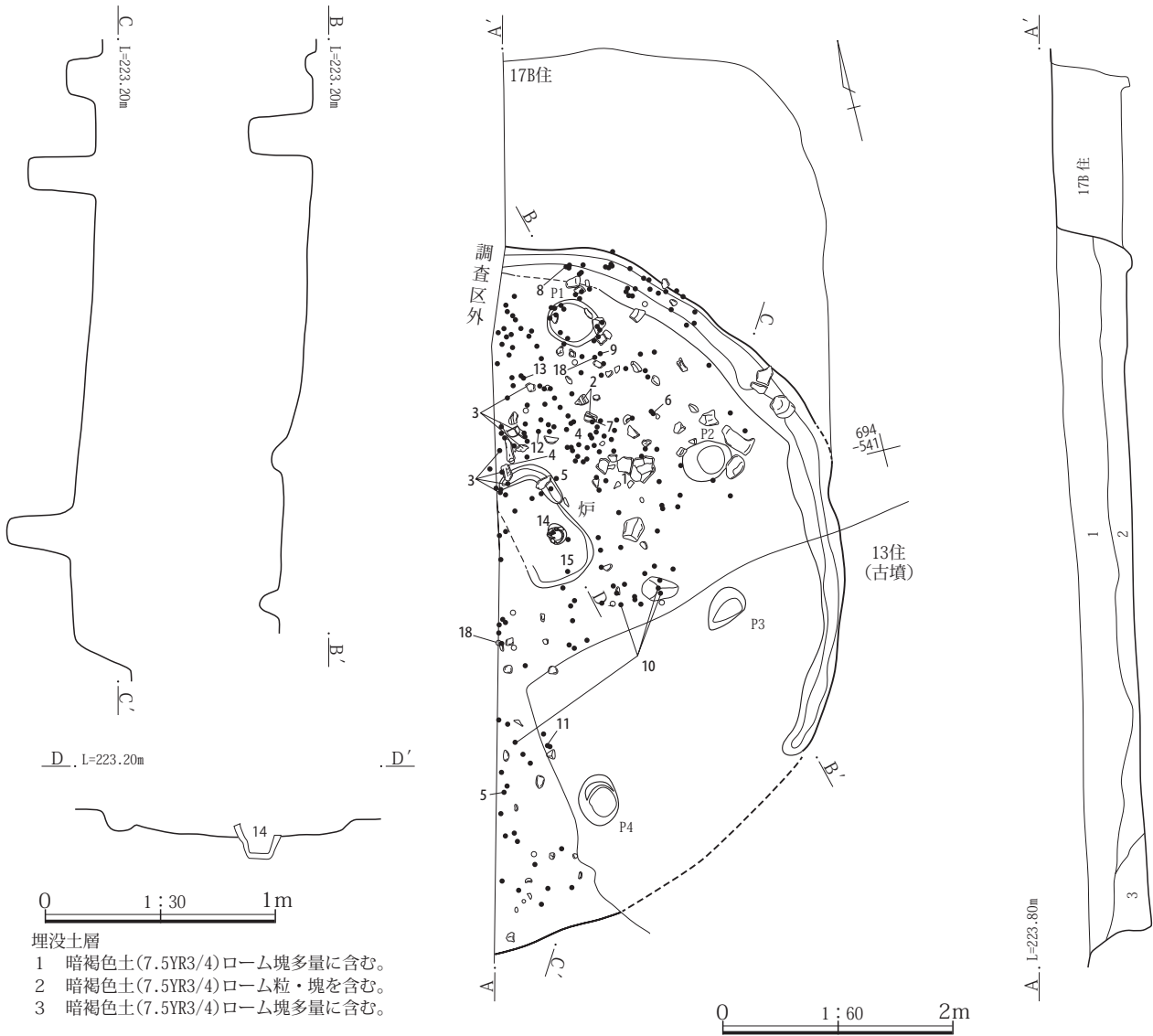
約25cmプラスした35cm前後か。各柱穴の芯々間の距離は、P1～P2：1.7m、P2～P3：1.35m、P3～P4：2.0mを測る。

炉 床面のほぼ中央部に上半部を欠失した深鉢土器(14)を埋設するが、その周縁に長辺108cm×短辺60cm×深さ6cmの長方形の落ち込みが認められる。外周に幅10cm×深さ5cmの溝状の凹地を伴うことから、方形石囲炉の石材を抜去した痕跡と思われる。埋設土器には微弱的な被熱風化が認められるが、焼土の形成は乏しい。

周溝 13号住居との重複で一部不明瞭だが、上幅11～32cm、深さ4～22cmの規模で全周すると想定される。

埋設土 Ⅷ層に近似した暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示す。その上位にはⅦ層が堆積している。

遺物 炉埋設土器や床面密着のNo.6・9を除き、床面から5cm以上浮遊して出土。17B号住居部分を含む埋設土中からは、中期の加曽利E2・E3式を主体に土器片1491



第130図 5区17A号住居

点と、石鏃1点、削器類17点、打製石斧15点、楔形・台石・多孔石各2点、磨石類3点などの石器が出土した。尚、黒曜石製の石鏃1点と調整剥片3点について、蛍光X線分析による産地同定を行ったが、いずれも星ヶ台との結果を得ている。その詳細については「第4章 自然科学分析」を参照されたい。

所見 当住居の構築時期は、炉埋設土器から加曾利E2式期に比定される可能性が高い。方位・面積は不明。

●5区17B号住居

位置 X=57698 Y=-75541

写真 PL40・129 **観察表** 459頁

重複 南半部を17A号住居により切られている。

形状 17A号住居との重複により確定できないが、隅丸方形または楕円形状を呈すると思われる。壁面の勾配は約80度の角度で立ち上がる。

規模 推定長径4.7m×掘り込み深度28～48cmを測る。

床面 VIII上面からX層にかけて最大48cm掘り込んで床面を構築。全体的にかなり堅緻で、掘り方は存在しない。

柱穴 周壁の約50cm前後内側を廻るP1～P8の8本が存在し、P1～P4・P8が主柱穴か。調査区外の残存部1/3を含め、8～10本の主柱構造と推定される。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:29cm×40cm、P2:39cm×63cm、P3:23cm×24cm、P4:37cm×61cm、P5:32cm×21cm、P6:32cm×22cm、P7:28cm×30cm、P8:33cm×40cmである。各柱穴の芯々間の距離は、P1～P2:1.4m、P2～P3:1.35m、P3～P4:1.7m、P4～P8:1.3mを測る。

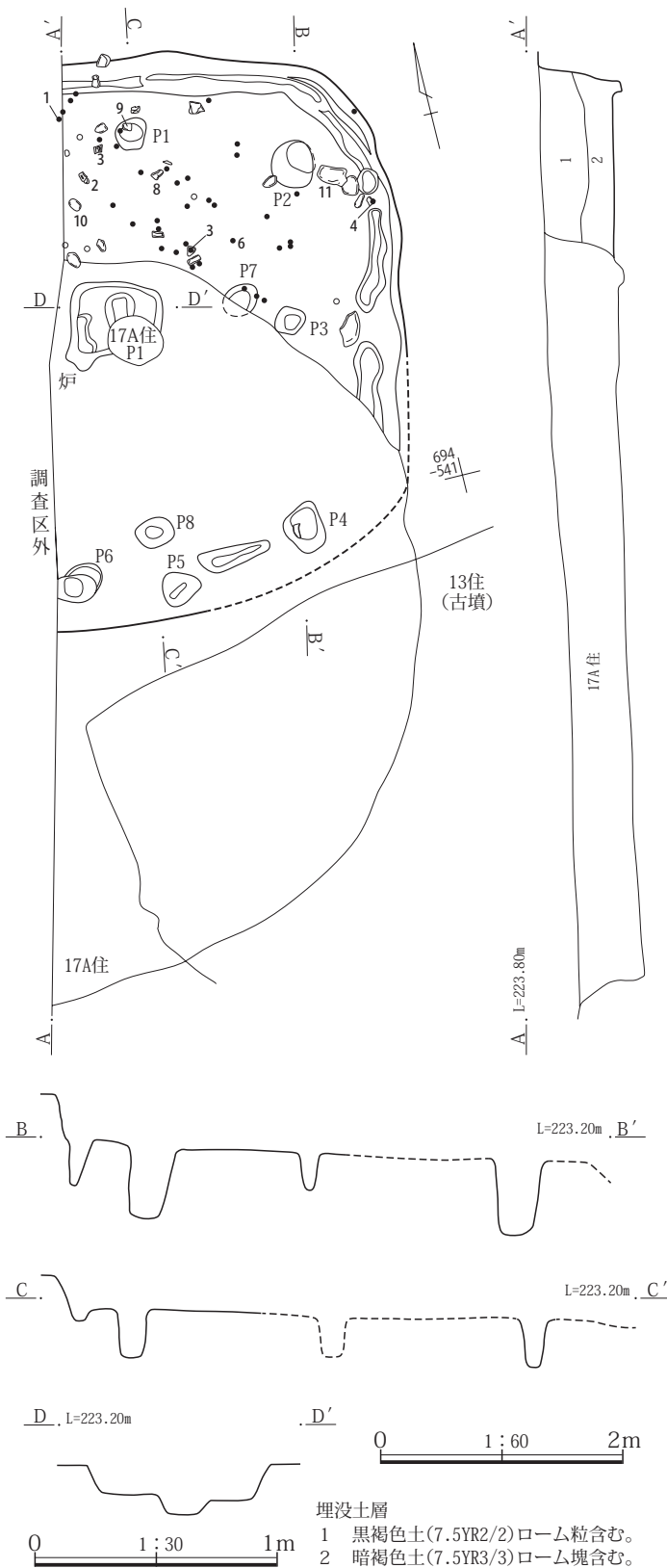
炉 床面のほぼ中央部に、17A号住居で削平された長径75cm×短径60cm×深さ13cmの掘り方のみが残存。外周に炉石を抜去した痕跡があり、方形の石囲炉と推定。

周溝 上幅9～22cm、深さ5～21cmの規模で周壁際を全周すると想定される。

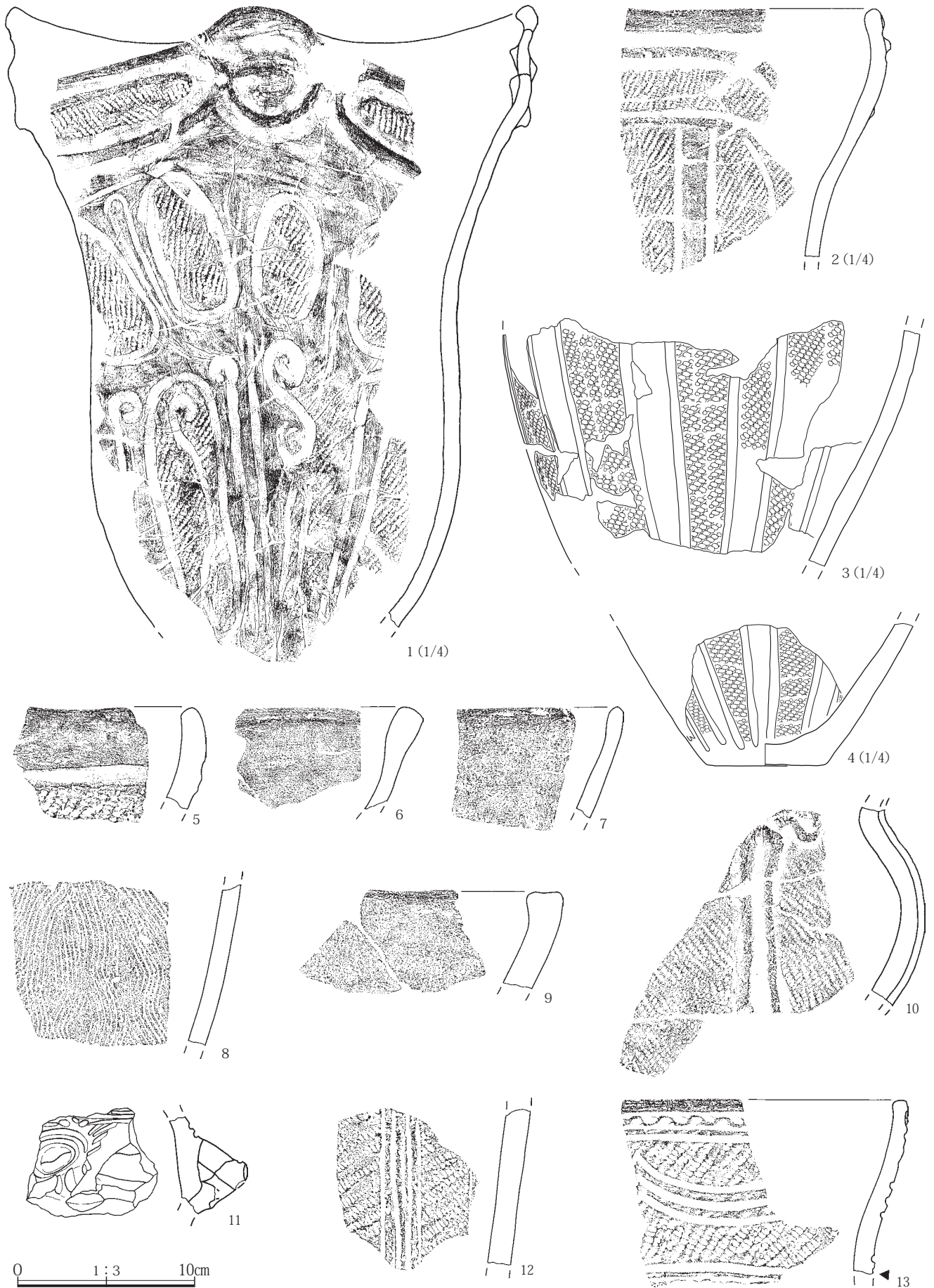
埋設土 黒褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示す。17A号住居と同様に。上位にVII層が堆積している。

遺物 No.17の多孔石を除き、床面から7cm以上浮遊した状態で出土した。埋設土中の遺物は17A号住居と区別できなかったため、前述の通り一括した。

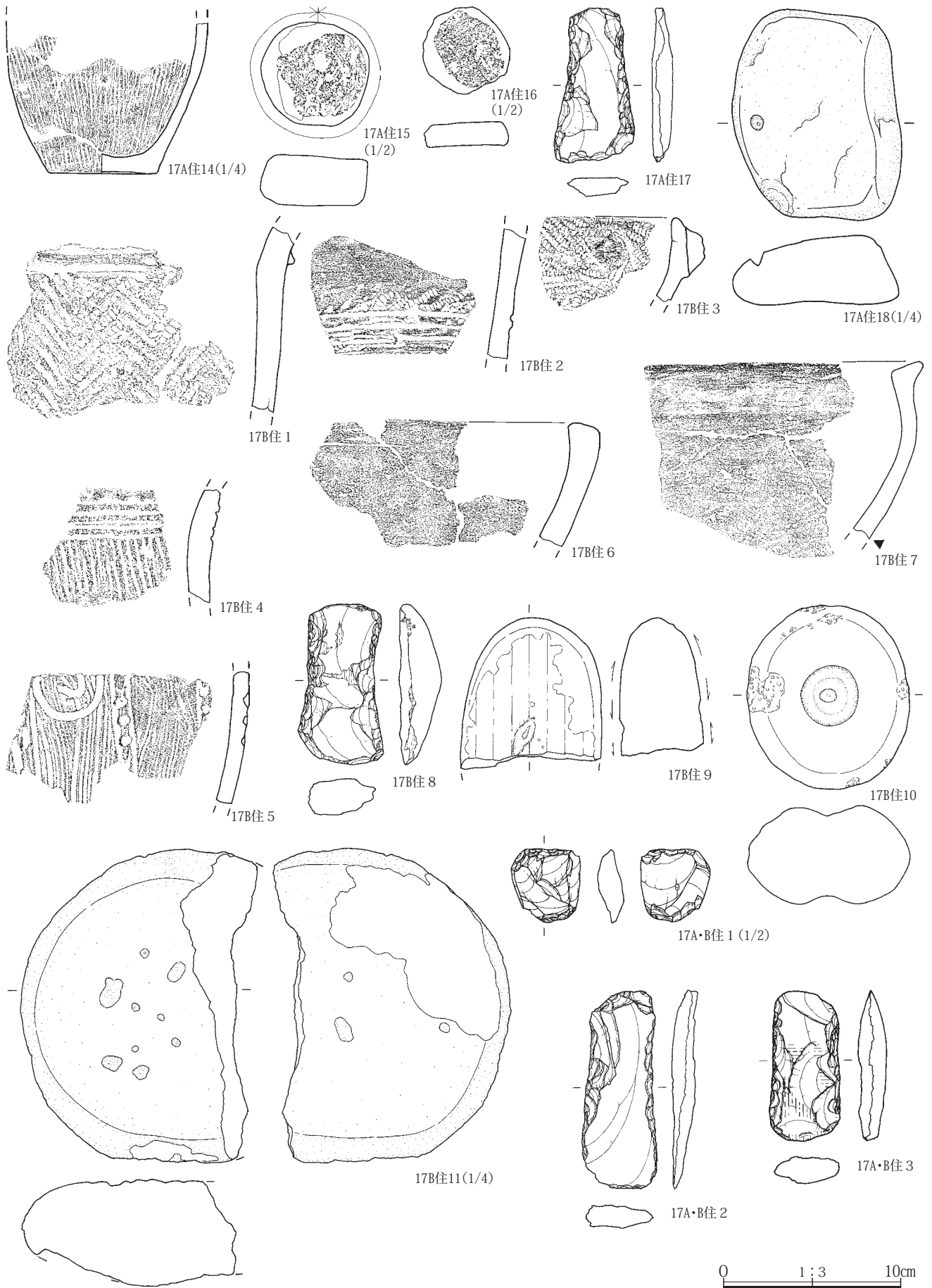
所見 当住居の構築時期については確定できないが、加曾利E1式～同E2式期と推定される。



第131図 5区17B号住居



第132図 5区17A号住居出土遺物



第133図 5区17A・17B号住居出土遺物

● 5区18号住居

位置 X = 57695 Y = -75535

方位 不明 面積 不明

写真 P L 41・129 観察表 459頁

重複 北壁側で加曾利E2式期の138号土坑を切る。

形状 東南側約1/2が調査区外に位置するため確定的ではないが、円形または楕円形と推定される。壁面の勾配は約70度の角度で立ち上がる。

規模 最大径は4.64mで、調査区外との境界断面での掘り込み深度は32～45cmを測る。

床面 Ⅷ層上面からⅩ層にかけて、最大45cmを掘り込んで床面を構築する。全体的に高低差は少ないが、やや凹凸面を持つ。叩き床状の硬化面は存在しないが、炉の周辺部を中心に堅緻な面を形成する。尚、掘り方は存在しなかった。

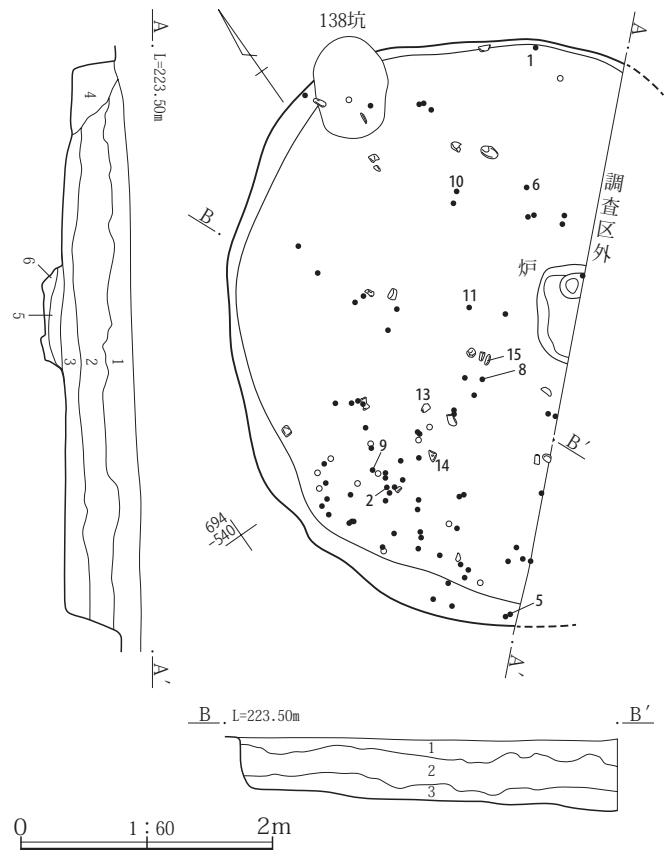
柱穴 精査にもかかわらず、検出することができなかった。掘り込みを伴わない床置の主柱構造や、柱穴内にⅩ層と同様のローム土を埋填したことによる検出の困難さも想定されるが、確定できない。尚、各柱穴内から柱痕は確認できなかった。

炉 床面のほぼ中央部に位置し、外見的には最大長79cm×深さ18cmの方形状の掘込炉を思わせるが、壁面際の底面には大きな凹凸が存在し、被熱による壁面の赤化や焼土形成も認められない。調査区外に約1/2が残存するために確定的ではないが、住居廃絶時に石囲炉の用石を抜去したものと推定される。

埋没土 Ⅷ層に類似した暗褐色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。尚、1層の上位にはⅧ層が堆積している。

遺物 床面に密着して出土した遺物は皆無であり、図示した遺物を含めて埋没土1層～2層を中心とした出土である。土器は中期の加曾利E2式を主体にして同E3式や三原田式など642点が、石器は削器類5点、打製石斧8点、磨石類・石錘・石核各1点などが存在する。尚、黒曜石製の剥片1点について蛍光X線分析による産地同定を実施したが、星ヶ台と想定される結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期については、良好な伴出遺物がないために確定できないが、中心的な出土土器から判断すれば加曾利E2式～同E3式期に比定される。



- 埋没土層
- 1 黒褐色土(7.5YR2/2)ローム粒を少量含む。
 - 2 暗褐色土(7.5YR3/3)ローム粒・塊を含む。
 - 3 暗褐色土(7.5YR3/4)ローム粒を含む。
 - 4 暗褐色土(7.5YR3/4)ローム塊多量を含む。
 - 5 暗褐色土(7.5YR3/3)ローム塊多量を含む。
 - 6 暗褐色土(7.5YR3/4)ローム粒多量を含む。

第134図 5区18号住居

● 5区19号住居

位置 X = 57702 Y = -75535

方位 N 6度E 面積 不明

写真 P L 41・130 観察表 460頁

重複 西壁際で981号土坑を切って掘り込まれている。

形状 北側約1/3が調査区外に位置するため確定的ではないが、斜面地の等高線にほぼ直行して南北に長軸を持つ楕円形と推定される。壁面の勾配は約70度の角度で立ち上がる。

規模 住居の調査確認面がⅧ層下位～Ⅹ層上面のため、検出した掘り込み深度が浅い。長径は不明だが、短径4.70mで、掘り込み深度は4～38cmを測る。

床面 Ⅷ層からⅩ層上面にかけて、最大38cmを掘り込んで床面を構築する。全体的に凹凸の少ない平坦な床面で、炉の周辺部を中心にやや堅緻な面が形成されている。尚、掘り方は存在しなかった。

柱穴 調査区外への残存部や981号土坑の重複もあり、

検出できたのはP1～P3の3本のみである。住居形状から判断して、7本前後の支柱構造と推定される。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:42cm×14cm、P2:52cm×32cm、P3:53cm×29cmである。主な柱穴芯々間の距離は、P2～P3が1.5mを測る。尚、各柱穴内から柱痕は確認できなかった。

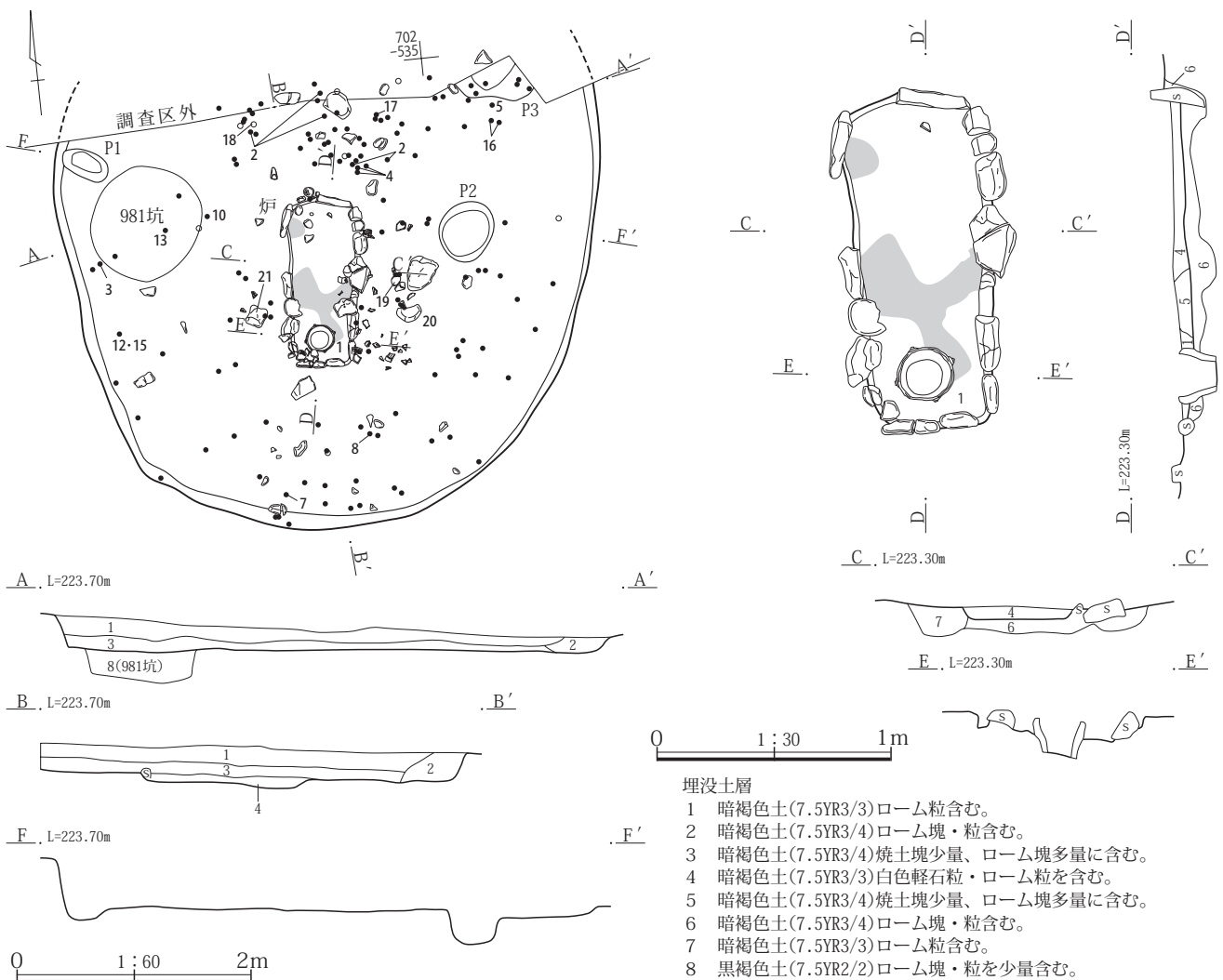
炉 床面のほぼ中央部に位置する長形状の石囲炉で、南端に埋設土器をもつ。規模は、長辺148cm×短辺70cm、炉石天端からの深さ14cmであり、長径20～30cmの棒状河床礫を主体にして外周を囲繞する。また、埋設土器は胴部下半を欠失した深鉢(No.1)を正位に埋置している。底面には被熱による若干の赤化と焼土形成が、また埋設土器には内面側を中心に被熱風化が認められる。尚、掘り方は炉石の設置を含めて大きく掘り窪めることはなく、最大深度が12cmを測る程度である。

埋設土 Ⅷ層上位に掘り込み面を持つと想定される。Ⅶ・

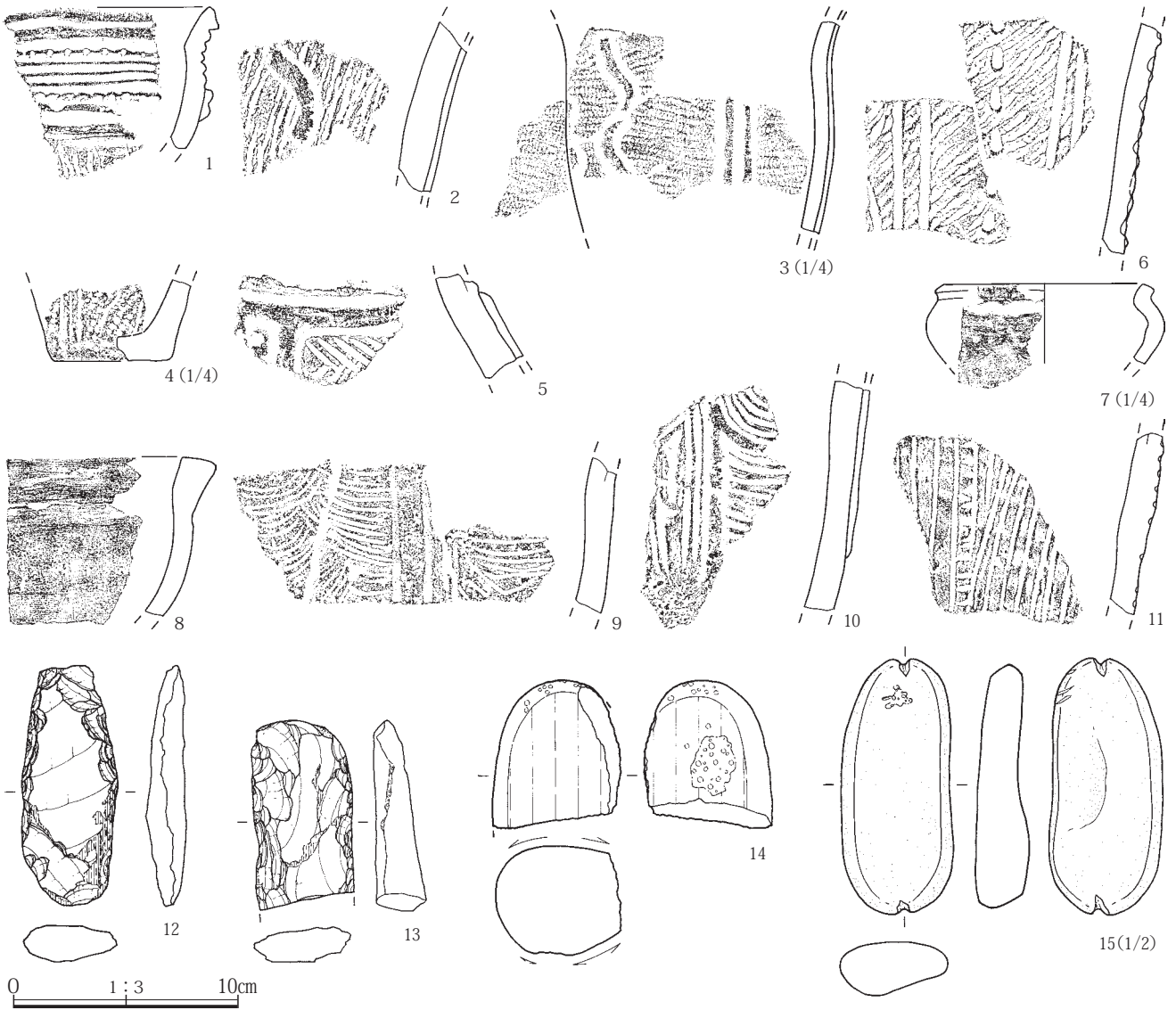
Ⅷ層に近似した暗褐色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。

遺物 炉埋設土器を除いた床面に密着および浮遊高5cm以内の出土遺物は、第137・138図のNo.3・14・16・19・20の土器・石器であり、大半の遺物が埋没土の1・2層を中心に出土している。土器では中期の加曾利E2式を主体に同E1・E3式などの破片629点が、石器では削器類・楔形石器・石皿・磨石類・石核が各1点、打製石斧3点、多孔石3点等が出土した。石器は欠損品が主体を占め、完形品が極めて少ないのが特筆される。尚、黒曜石製の調整剥片1点について蛍光X線分析による産地同定を実施したが、星ヶ台との結果を得ている。その詳細については「第4章 自然科学分析」を参照されたい。

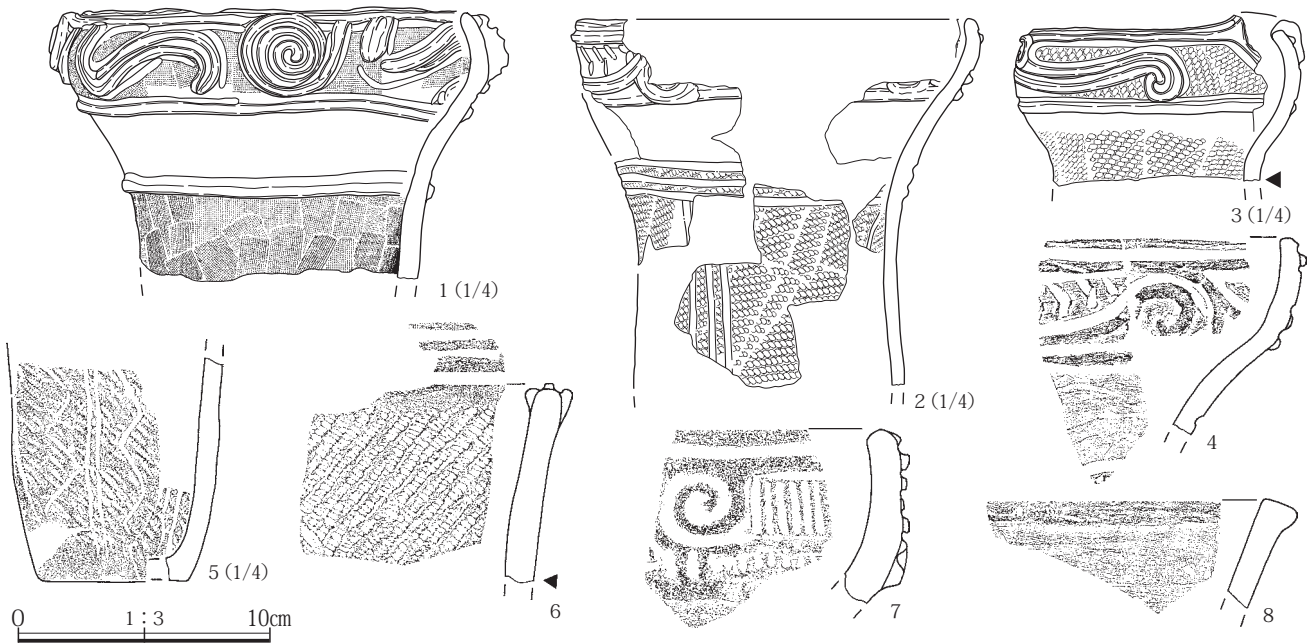
所見 当住居の構築時期については、炉埋設土器や床面密着出土土器から判断して、中期の加曾利E2式期古段階に比定される。



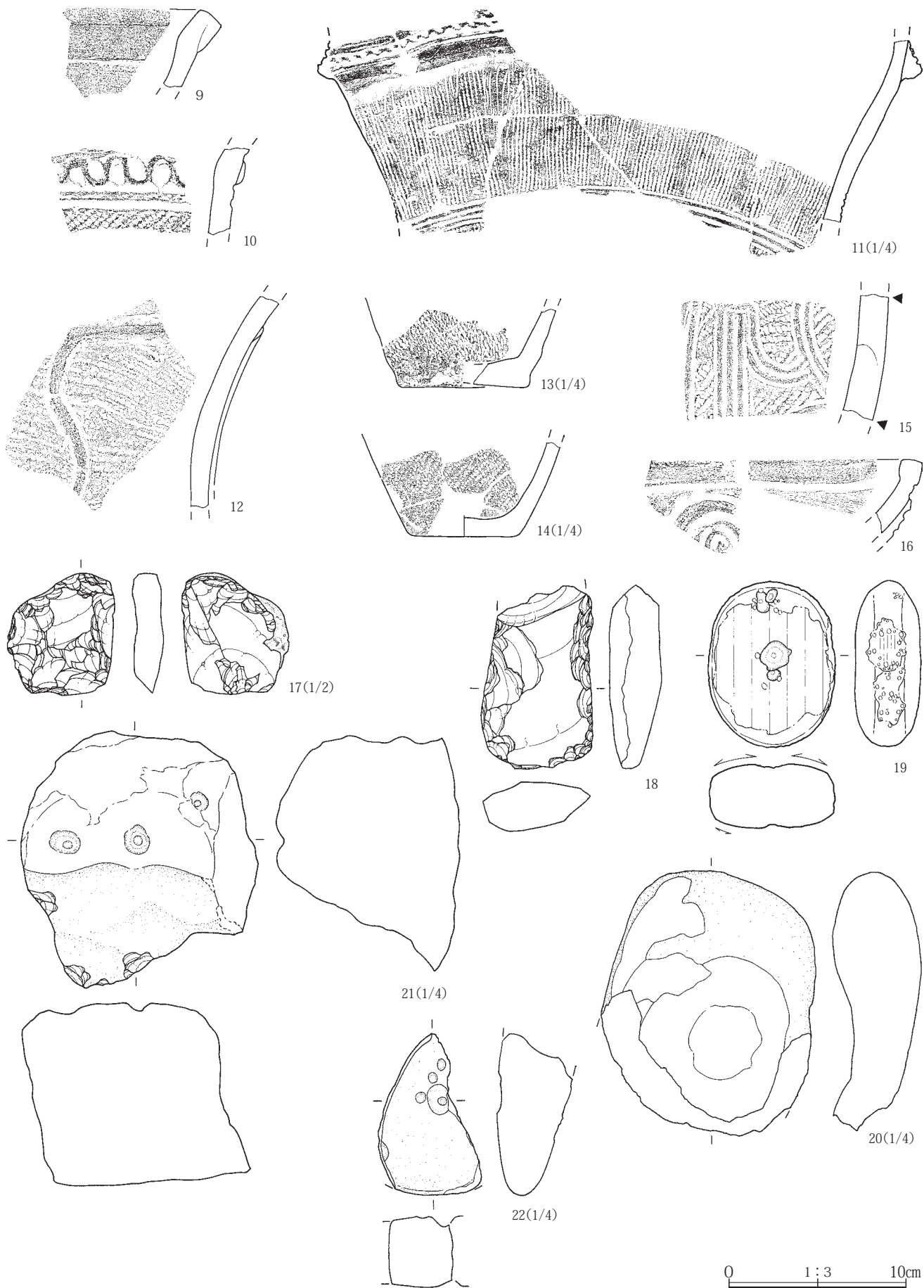
第135図 5区19号住居



第136図 5区18号住居出土遺物



第137図 5区19号住居出土遺物(1)



第138図 5区19号住居出土遺物(2)

●5区22号住居

位置 X = 57700 Y = -75541

方位 不明 面積 不明

写真 P L 42・131 観察表 460頁

重複 南側を17B号住居により切られている。

形状 調査区の北西隅に位置し、住居範囲の大半が調査区外に存在することや、斜面地の崩落等と17B号住居の重複により周壁を検出できなかったため不明である。ただし、周溝の延伸状況から見れば、円形または楕円形状の可能性が高い。

規模 上記要因により不明。

床面 Ⅷ層～Ⅹ層上面を掘り込んで床面を構築する。全体的に凹凸が少なく、平坦で堅緻な床面が形成されている。尚、掘り方等は存在しない。

柱穴 調査可能範囲が狭小なため、検出できたのはP1～P3の3本のみである。ただし、整然とした円筒状の掘り込みをもつP1に比較して、P2・P3については掘削深度が2～7cmと浅く柱穴ではない可能性が高い。P1の規模は、直径65cm×深さ66cmである。

炉 検出できなかったが、周溝の延伸状況を加味すれば、調査区外に存在すると思われる。

周溝 上幅12～24cm、深さ12cmの規模を持つ。

埋没土 Ⅷ層内に掘り込み面を持つと想定される。Ⅶ・Ⅷ層に近似した暗褐色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

遺物 出土遺物は極めて乏しく、埋没土中より前期の関山Ⅱ式～黒浜式2点、中期の加曽利E2式4点が出土したのみで、石器は皆無である。

所見 当住居の構築時期については確定できないが、住居の柱穴・周溝等の様相やNo.1の土器片を考慮すれば、中期の加曽利E2式期と想定される。

●5区23号住居

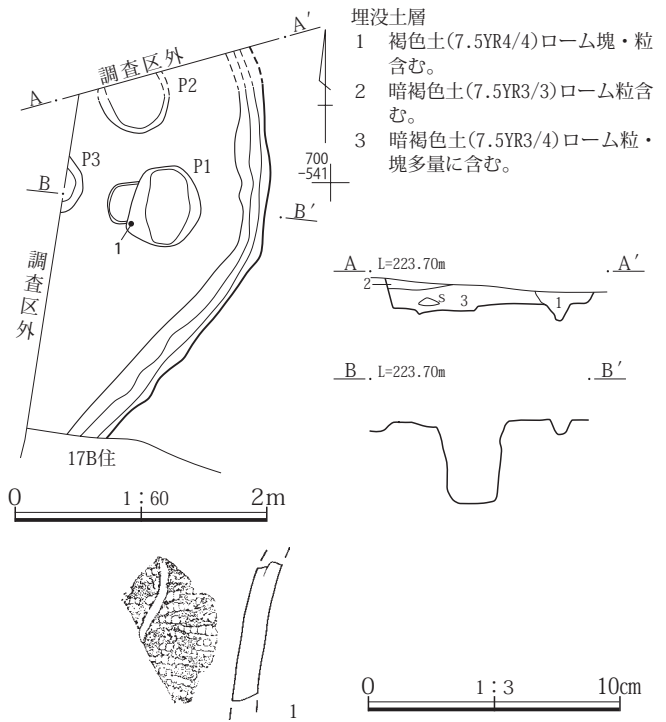
位置 X = 57700 Y = -75540

方位 不明 面積 不明

写真 P L 42・131 観察表 461頁

重複 19・24号住居と重複するが、新旧関係は不明。

形状 19号住居の調査後に、当該住居の床面部に相当するⅨ層下位での遺構確認により、周溝の一部を検出したにとどまる。住居北側の1/4程が調査区外に存在する



が、周溝の延伸方向・状況から見て、楕円形状を呈すると推定される。

規模 上記要因により不明。

床面 北西側の一部に残存する床面状況から、Ⅹ層上面まで掘り込んで床面を構築していると考えられるが、19号住居の構築により平易され、全体の様相は不明。

柱穴 検出できたのは、周溝の10～20cm内側に沿ったP1・P2の2本のみであるが、整然とした円筒状の掘り込みをもつ。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:80cm×55cm、P2:80cm×50cmであり、かなりの規模を持つのが特徴的である。両柱穴の芯々間の距離は、2.25mを測る。また、各柱穴ともに柱痕は確認できなかった。

炉 検出できなかったが、19号住居構築により削平された可能性が高い。

周溝 上幅11～28cm、深さ14～36cmの規模を持つ。

埋没土 諸般の事情により、調査区外との境界断面にて掘り込み状況を記録できなかったが、Ⅷ層内に掘り込み面を持つと想定される。当該断面では、Ⅶ・Ⅷ層に近似した暗褐色土の堆積が認められた。

遺物 出土遺物は極めて乏しく、確認面付近より前期の関山Ⅱ式1点(Na.2)、中期の加曽利E1式1点(Na.1)、同E2式2点の土器片が出土したのみで、石器は皆無である。

所見 当住居の構築時期については確定できないが、住居の柱穴・周溝等の様相やNo.1の土器片等を考慮すれば、中期の加曽利E1～E2式期と想定される。

●5区24号住居

位置 X=57700 Y=-75540

方位 不明 **面積** 不明

写真 P L 42・131 **観察表** 461頁

重複 19・23号住居と重複するが、新旧関係は不明。

形状 23号住居と同様に周溝の一部を検出したにとどまるが、その延伸方向や状況から見て円形または楕円形状を呈すると推定される。

規模 上記要因により不明。

床面 23号住居と同様に19号住居の構築により平易さ

れ、全体の様相は不明である。

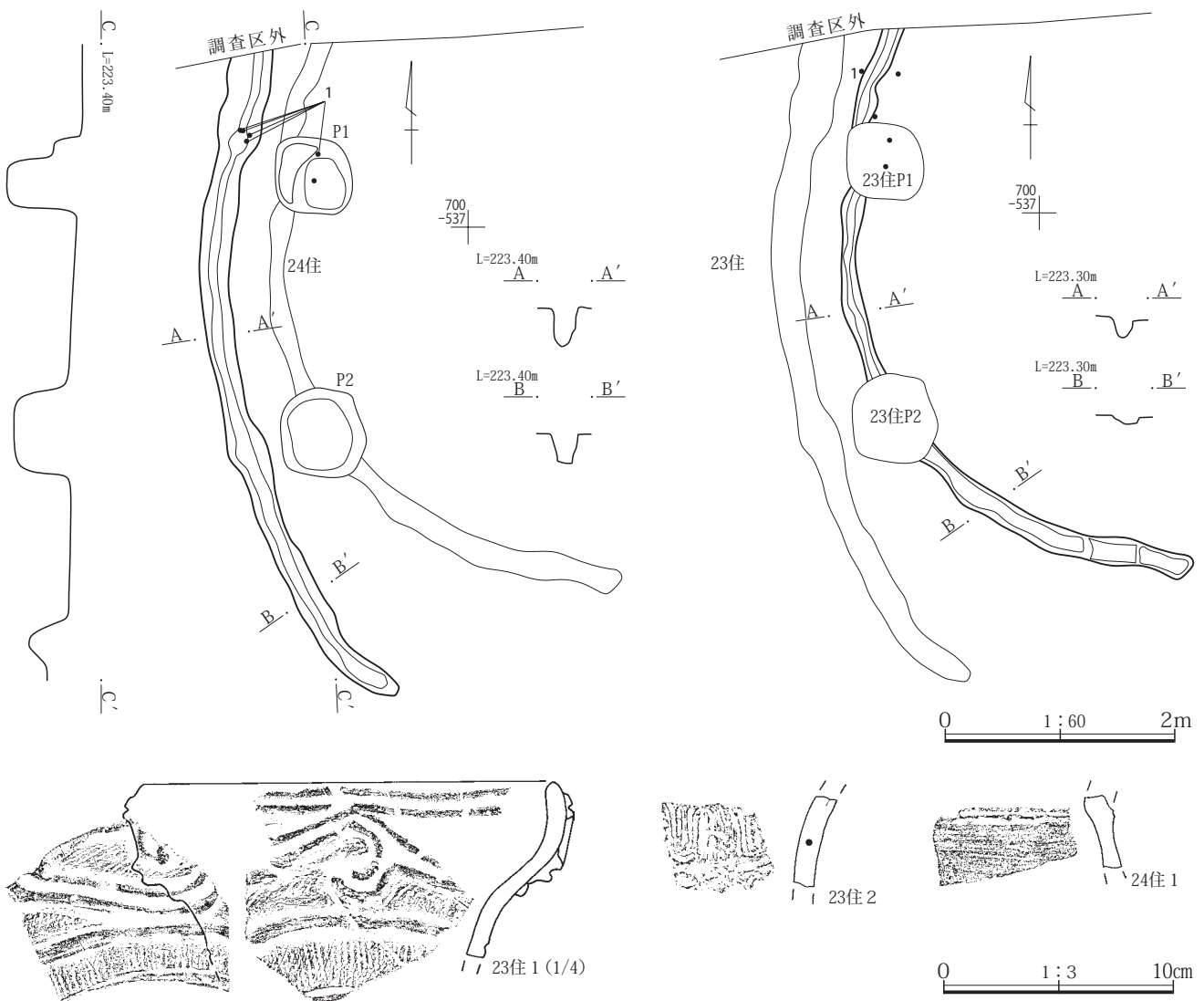
周溝 上幅7～22cm、深さ6～19cmの規模を持つ。

埋没土 23号住居と同様に、Ⅷ層内に掘り込み面を持つと想定される。

遺物 出土遺物は極めて少ないが、確認面付近より中期の加曽利E2式6点、堀之内2式1点(No.1)の土器片が出土したのみで、石器は皆無である。尚、加曽利E2式土器については、小破片のために図示していない。

その他 規模・柱穴・炉は不明だが、19号住居の構築により削平された可能性が高い。

所見 当住居の構築時期については確定できないが、周溝の走向が23号住居のそれとほぼ同一であることを考慮すれば、中期の加曽利E2式期の可能性が高い。



第140図 5区23・24号住居と出土遺物

●7区49号住居

位置 X=57717 Y=-75547

方位 不明 面積 不明

写真 P L 42・43・131 観察表 461頁

重複 西壁側を弥生時代後期の44号住居により切られ、同部位で縄文時代中期の55号住居を切って掘り込まれている。

形状 住居の南半分が調査区外に位置しているため確定的ではないが、壁面の湾曲状態から見て円形または楕円形状を呈すると考えられる。壁面の勾配は、約65度のやや緩やかな角度で立ち上がる。

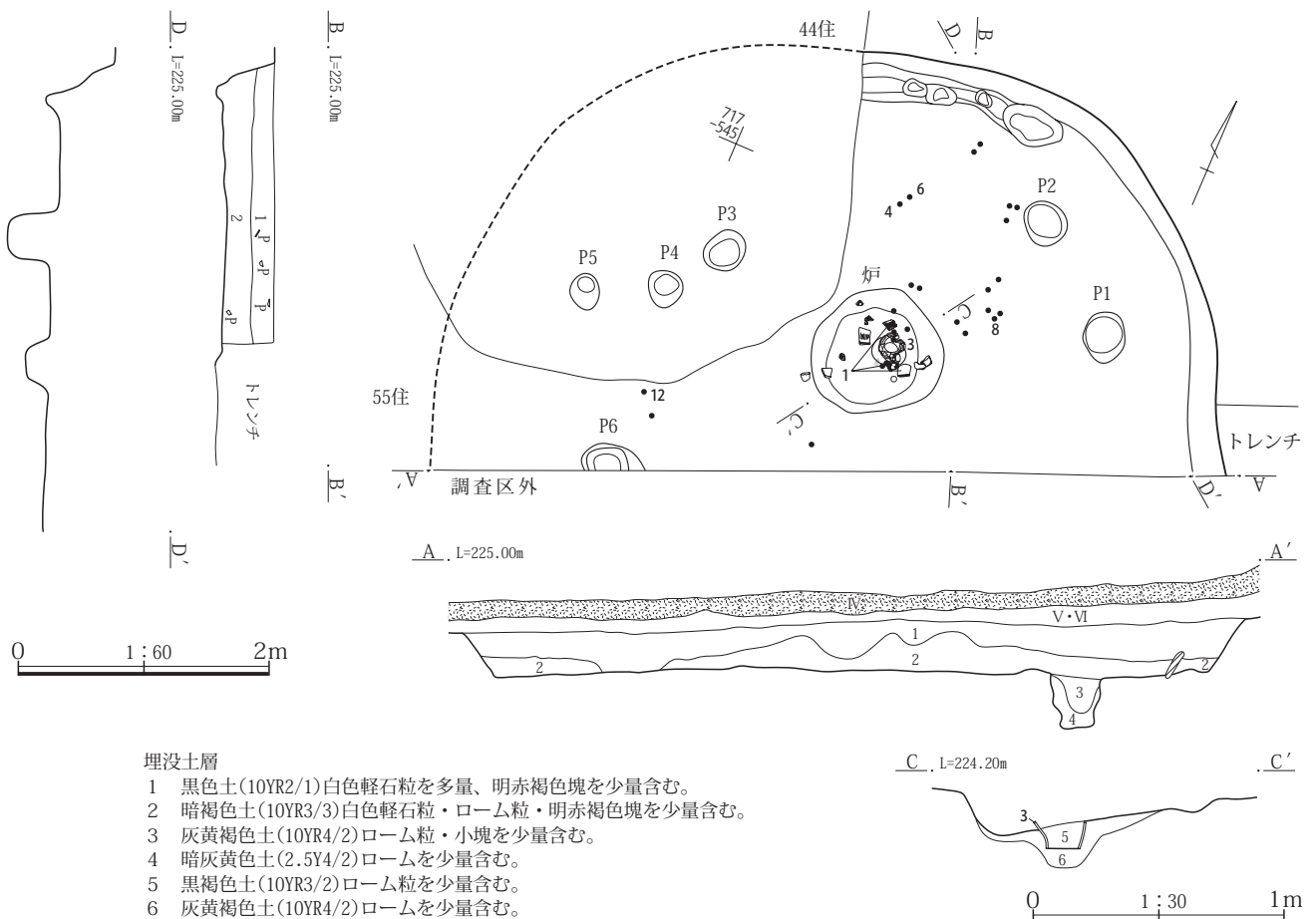
規模 調査区外との境界断面で確認した長径は、6.67mであり、同様に掘り込み深度は31~49cmを測る。

床面 VII層上面で確認・調査を行った44号住居に付随して当住居の調査を実施するため、実際の掘り込み面は不詳である。おそらくVIII層上面~X層にかけて、最大49cm掘り込んで床面を構築すると考えられる。若干の凹凸面を持ち、全体的にやや堅緻な床面を形成する。掘り方は

存在しない。

柱穴 周壁の50~100cm内側を廻るP1~P6の支柱穴6本が検出されたが、深度の浅いP1や位置的ずれるP4・P5は、支柱穴ではない可能性もある。尚、44号住居の削平を受けているP3~P5は、10cm前後をプラスする必要がある。調査区外の残存部を考慮すれば、6~8本の支柱構造と推定される。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:41cm×18cm、P2:36cm×33cm、P3:36cm×16cm、P4:30cm×28cm、P5:30cm×39cm、P6:48cm×41cmである。主な柱穴の芯々間の距離は、P1~P2:1.05m、P2~P3:2.55m、P3~P6:1.95mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。

炉 床面のほぼ中央部に口縁部と胴部下半を欠失した深鉢土器(No.3)を埋設するが、その周縁に長径103cm×短径93cm×深さ15cmの円形状の落ち込みが認められる。外周を中心にして幅10~15cm、深さ5~10cmの凹地を伴うことから、石囲炉の石材を抜去した痕跡と推定される。埋設土器の内面には微弱な被熱風化が認められる



第141図 7区49号住居

程度で、その底面や掘り方壁面を含めて焼土の形成は、ほとんど確認できない。

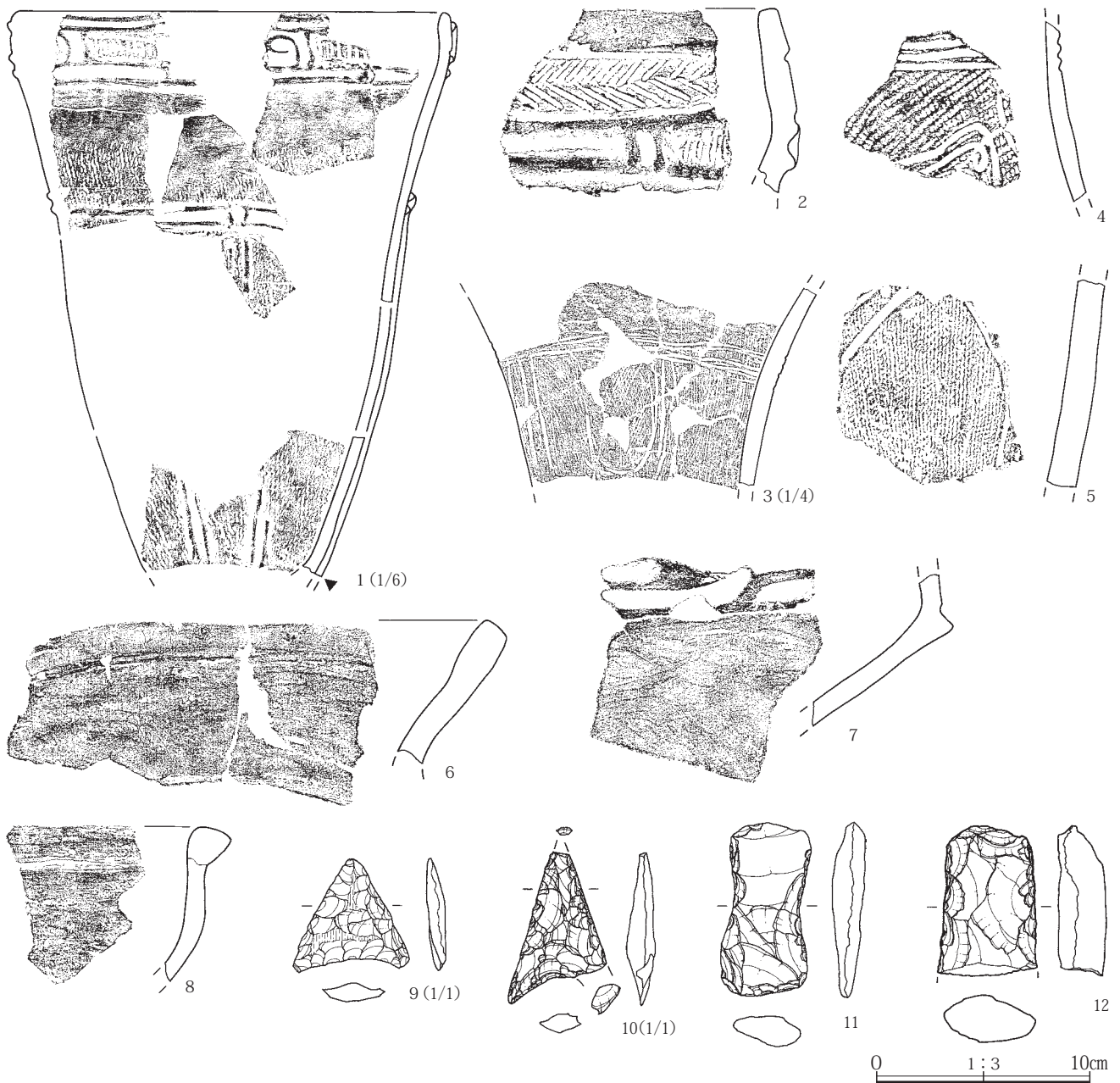
周溝 44号住居との重複等もあり、その一部の延長1.8m程を検出したにとどまる。残存部分での上幅11～21cm、深さ2～6cmを測る。

埋没土 Ⅷ層に近似した黒褐色土や暗褐色土が、ほぼレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示す。当該地点でのⅦ層堆積はやや不規則であるが、上位にはⅤ・Ⅵ層の堆積が認められる。

遺物 炉埋設土器のNo.3を除き、いずれの遺物も床面から4cm以上浮遊し、その大半が埋没土中からの出土で

ある。土器はそのほとんどが破片であるが、中期の加曾利E2式を中心に442点、石器では石鏃2点、削器類10点、打製石斧6点などが出土した。尚、黒曜石製の剥片4点について蛍光X線分析による産地同定を行ったが、いずれも星ヶ台との結果を得ている。その詳細については「第4章 自然科学分析」を参照されたい。

所見 当住居の構築時期は、炉埋設土器や第142図に掲載した埋没土中の出土土器の大半が、いずれも加曾利E2式期新段階であることから、同式期に比定される可能性が高い。



第142図 7区49号住居出土遺物

●7区54号住居

位置 X=57791 Y=-75516

方位 不明 面積 不明

写真 P L 43・131 観察表 461頁

重複 西壁側を後世の攪乱により切られ、北壁側で縄文時代前期の57号住居と重複する。

形状 上記住居との重複や攪乱と、東側1/3程度が調査区外に位置するために確定的ではないが、円形状と推定される。壁面勾配は約60～80度の角度で立ち上がる。

規模 不明だが、掘り込み深度は12～28cmを測る。

床面 Ⅷ層上面～Ⅹ層にかけて、最大28cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸を持ち、特に堅緻面はない。

柱穴 P1～P10の10本の柱穴が検出されたが、周壁際を廻るP3・P6を除き、その配列は規則性に欠ける。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:34cm×12cm、P2:36cm×18cm、P3:31cm×11cm、P4:23cm×12cm、P5:29cm×12cm、P6:48cm×41cm、P7:39cm×31cm、P8:40cm×27cm、P9:47cm×12cm、P10:28cm×16cmである。主な柱穴の芯々間の距離は、P3～P6:2.2mを測る。

炉 南壁から約1.6mの位置に偏在し、底面に長径10～20cmの河床礫2個を配置する。調査段階で炉と認定したが、礫表面や掘り方壁面には被熱赤変や焼土形成が無く、実際の炉は西側の攪乱で破壊された可能性が高い。

埋没土 Ⅶ・Ⅷ層に近似した黒褐色土や暗褐色土が、ほぼレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示す。

遺物 床面に密着して出土した遺物は皆無であり、その全てが埋没土中からの出土である。土器は破片のみであるが、中期の加曾利E3式を主体に194点が、石器では削器類5点、楔形・磨石類各1点などが出土した。尚、黒曜石製剥片2点の蛍光X線分析による産地同定を行い、土屋橋1と星ヶ台との結果を得ている。

所見 構築時期は、床面密着の出土遺物が皆無のために確定できないが、埋没土の出土土器の大半を加曾利E3式が占めており、同式期に比定される可能性が高い。

●7区55号住居

位置 X=57717 Y=-75545

方位 不明 面積 不明

写真 P L 44・132 観察表 461頁

重複 東壁側を弥生時代後期の44号住居と縄文時代中

期の49号住居により、南壁側を古墳時代後期の36号住居により各々切られている。また、床面上に418・982号土坑が存在するが、418号は加曾利E3式期であり、982号は当住居の炉想定位置に存在することから、これらに切られている可能性が高い。

形状 上記の重複状況や住居の南側1/4程度が調査区外にあるため確定的ではないが、円形または楕円形状と考えられる。壁面勾配は約76度の角度で立ち上がる。

規模 残存部での最大直径は4.82mであり、同様に掘り込み深度は15～50cmを測る。

床面 Ⅶ層上面で掘り込みを確認したが、Ⅷ層上面～Ⅹ層にかけて最大50cm掘り込んで床面を構築。かなりの凹凸面を持ち、あまり堅緻な面や掘り方は存在しない。

柱穴 直径26～46cm、深さ3～42cmの柱穴21本が検出された。それらの規模については下表に一括したが、位置的に東半部に偏在し、配置的にも規則性が乏しいことから、その大半は柱穴ではない可能性もある。ただし、P1・P5・P6・P12の芯々間を連結すると、かなり整った方形を呈する。これらが支柱とすれば、その芯々間の距離はP1～P5:2.0m、P5～P6:1.5m、P6～P12:1.95m、P12～P1:1.65mを測る。

炉 982号土坑の重複により壊された可能性が高い。

周溝 他遺構の重複しない北半部の周壁際を、上幅8～16cm、深さ1～7cmの規模で廻るが、基本的に全周すると推定される。

埋没土 Ⅷ層に近似した黒褐色土や暗褐色土が、ほぼレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示す。

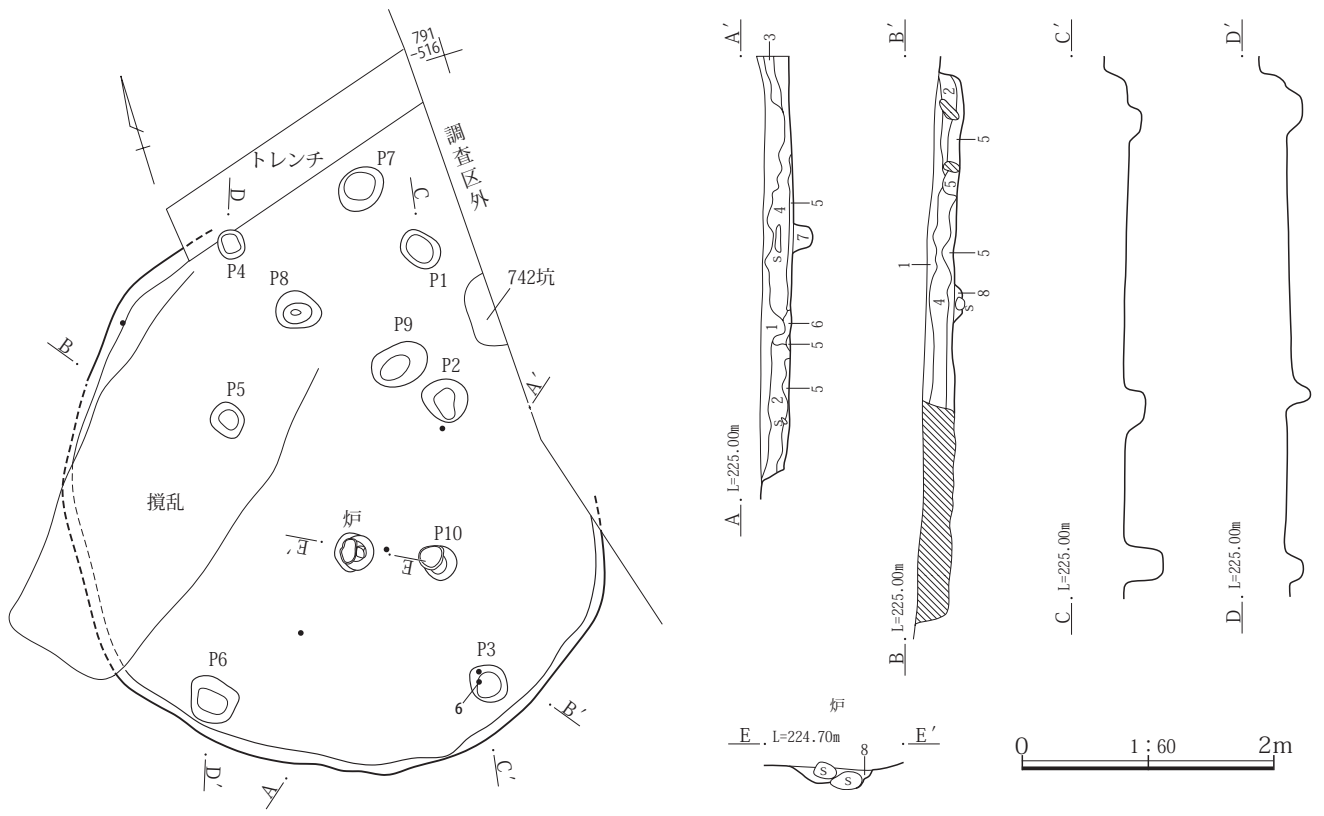
遺物 床面密着の遺物はなく、その全てが埋没土中の出土。土器は破片主体で中期の加曾利E1・E2式を中心に226点が、石器では削器類と石皿が各1点出土した。尚、黒曜石製剥片3点の蛍光X線分析による産地同定を行い、鷹山・小深沢、恩馳島、星ヶ台との結果を得ている。

所見 構築時期について

柱穴一覧(単位:cm)

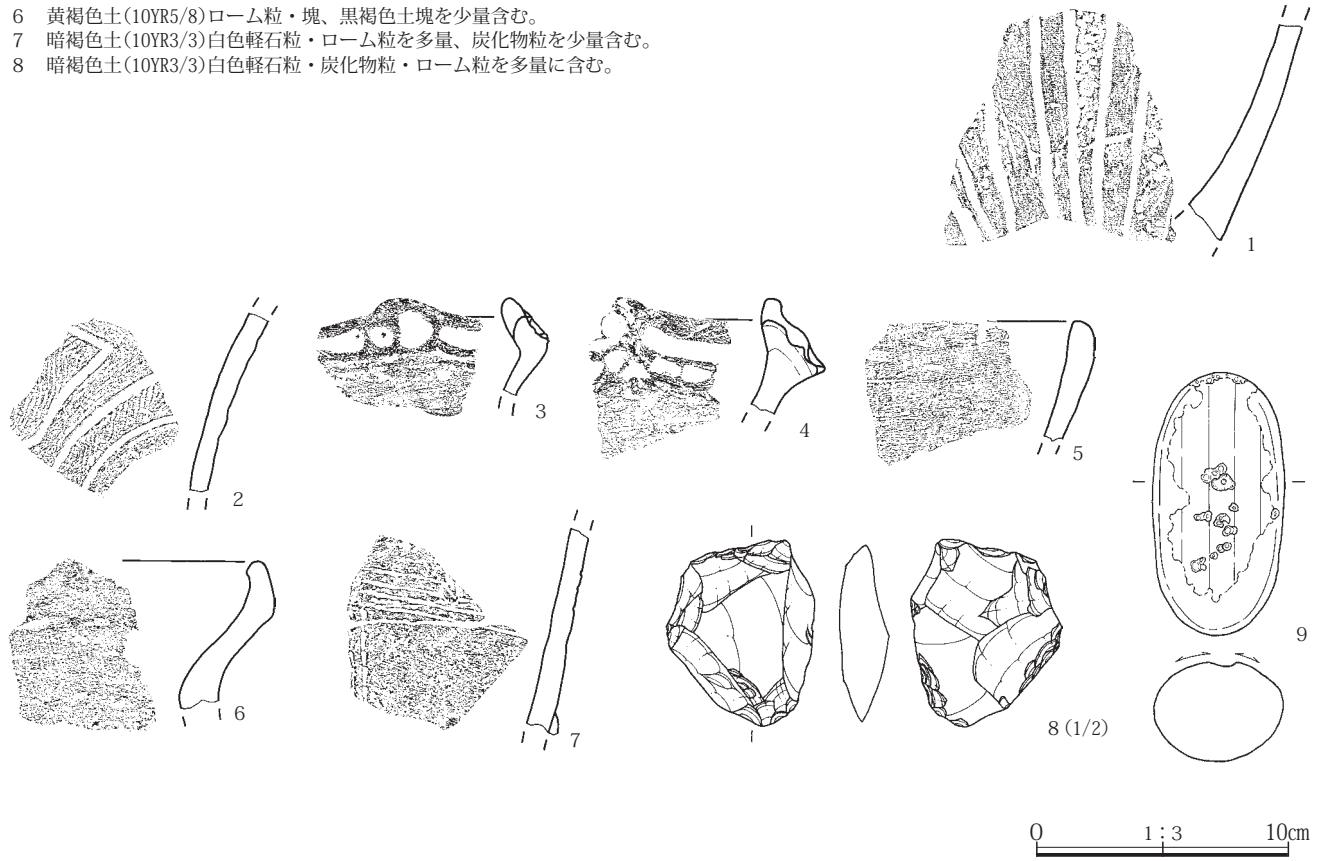
No.	直径	深さ	No.	直径	深さ
1	29	36	12	35	38
2	27	24	13	25	11
3	26	29	14	33	13
4	34	42	15	33	12
5	26	38	16	38	37
6	32	26	17	35	41
7	30	37	18	36	15
8	35	8	19	33	24
9	(46)	33	20	(45)	3
10	(29)	35	21	33	10
11	43	39			

では、床面密着の出土遺物が皆無のために確定できないが、埋没土の出土土器の大半を占める加曾利E1式～同E2式古段階の状況から、同式期に比定される可能性が高い。

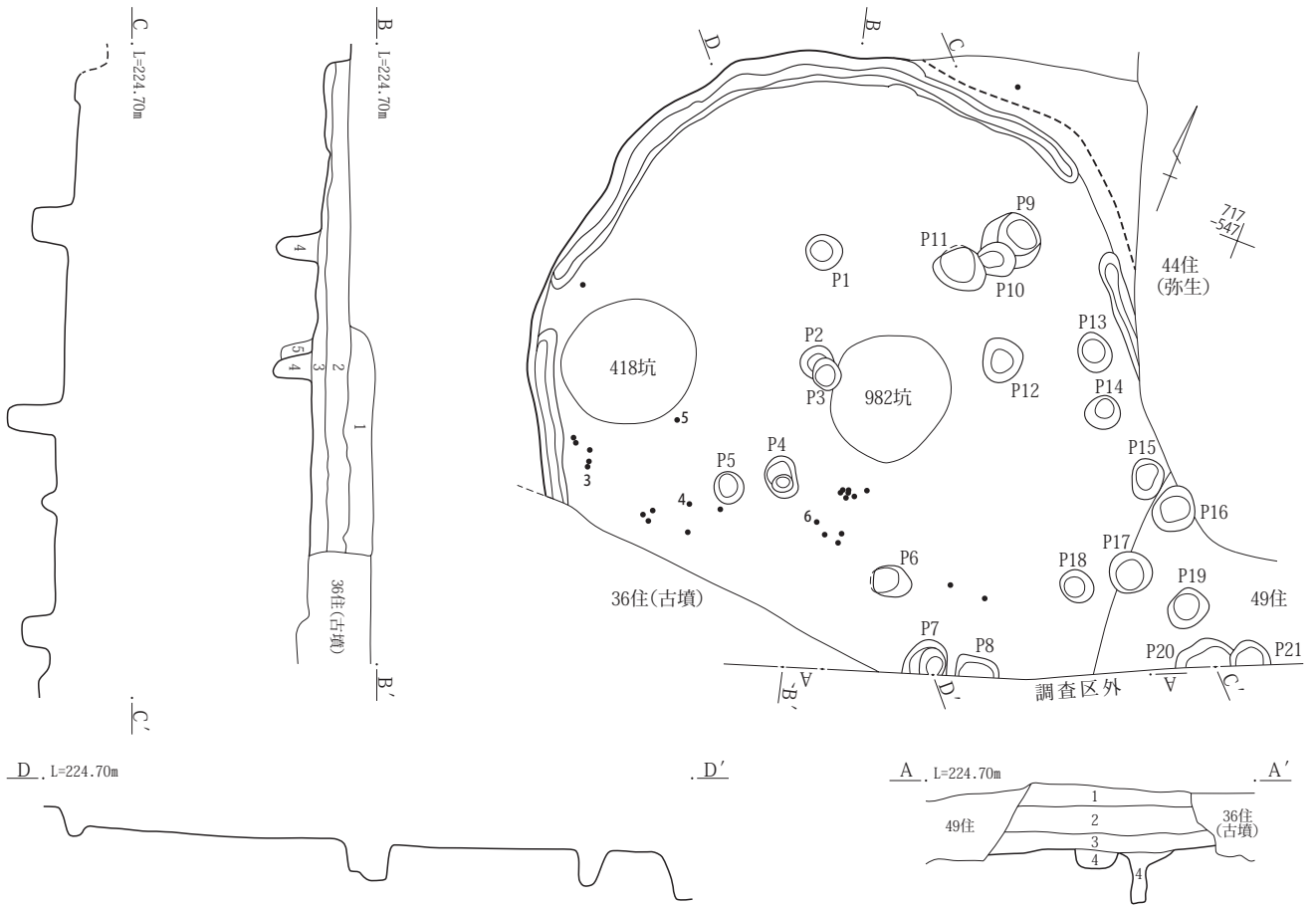


埋没土層

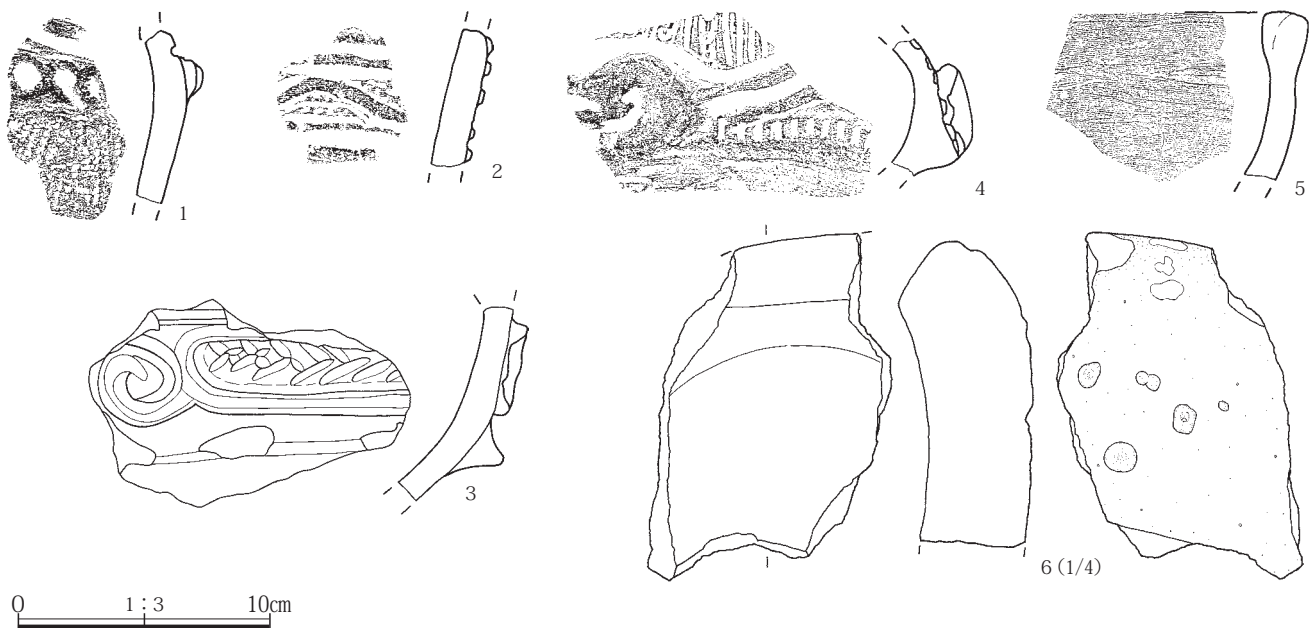
- 1 黒褐色土(10YR3/1)白色軽石粒・赤褐色塊を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・ローム粒・赤褐色塊を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR5/4)ローム粒・塊を含む。赤褐色塊を少量含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)褐色土塊・ローム粒を含む。
- 5 黄橙色土(10YR8/8)ローム粒・塊主体。
- 6 黄褐色土(10YR5/8)ローム粒・塊、黒褐色土塊を少量含む。
- 7 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・ローム粒を多量、炭化物粒を少量含む。
- 8 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・炭化物粒・ローム粒を多量に含む。



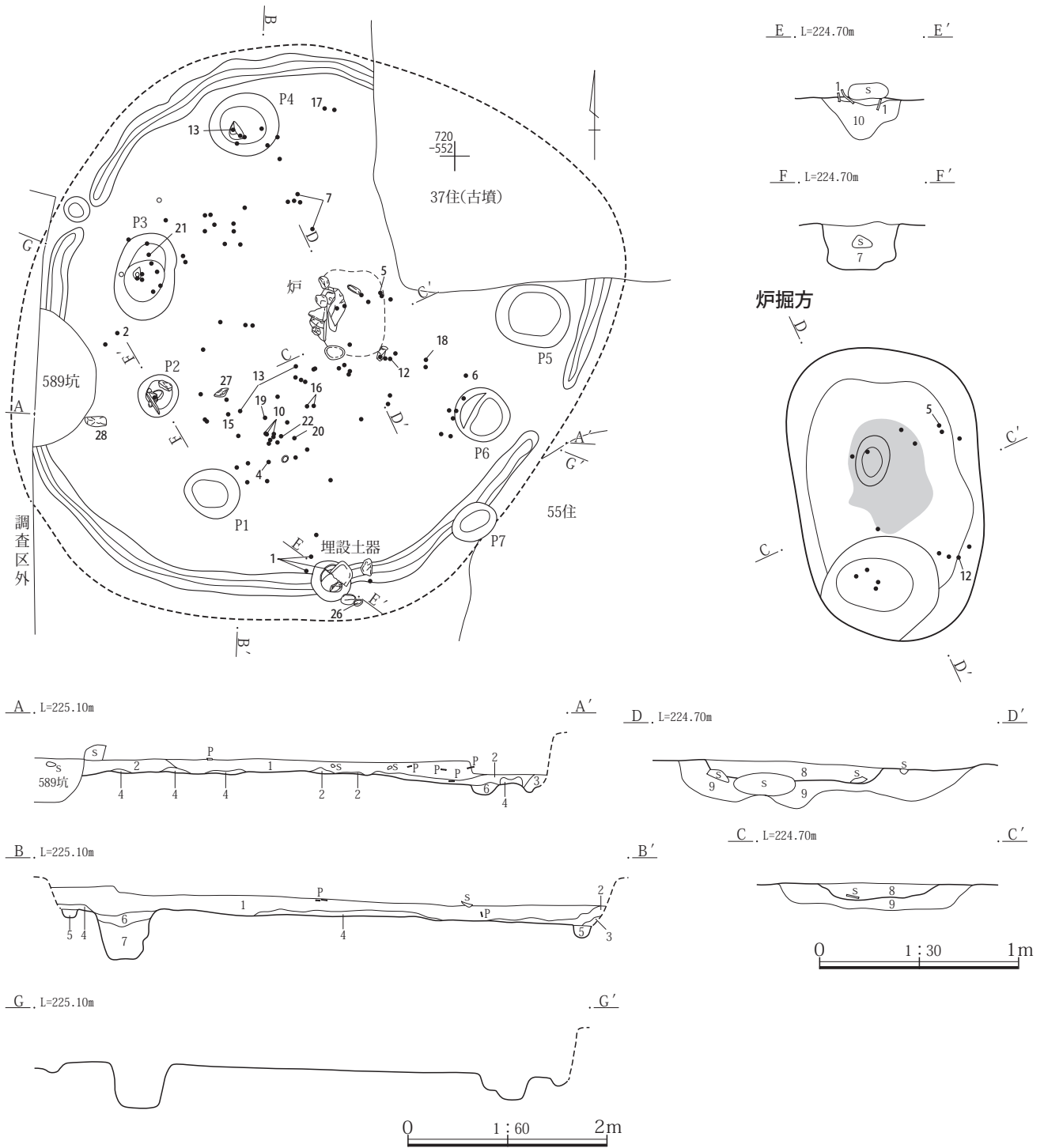
第143図 7区54号住居と出土遺物



- 埋没土層
- 1 黒褐色土(10YR3/1)白色軽石粒・黄橙色軽石粒・明赤褐色塊・褐色土塊を多量に含む。
 - 2 黒褐色土(10YR3/1)黄橙色軽石粒・白色軽石粒を少量含む。
 - 3 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・黄橙色軽石粒・ローム塊を少量含む。
 - 4 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒・小塊を微量に含む。
 - 5 灰黄褐色土(10YR4/2)ロームを多量に含む。



第144図 7区55号住居と出土遺物



埋設土層

- 1 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒を多量、明赤褐色塊・ローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・ローム粒を少量含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8)ローム塊を多量に含む。
- 4 褐色土(10YR4/4)ローム塊を多量、白色軽石粒を含む。
- 5 黄橙色土(10YR8/8)ローム塊・粒を多量、褐色塊を少量含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・塊を少量含む。
- 8 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・小塊を微量に含む。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・小塊を少量、焼土を微量に含む。
- 10 灰黄褐色土(10YR4/2)黒褐色土・ロームを少量含む。

第145図 7区56号住居

● 7区56号住居

位置 X=57720 Y=-75552

方位 N5度E 面積 (27.5㎡)

写真 PL44・45・132・133 観察表 462頁

重複 北壁側を古墳時代後期の37号住居で、西壁側を589号土坑により切られ、東壁側で縄文時代中期の55号住居を切っている。

形状 他住居との重複や住居内埋没土がⅧ層に近似した黒褐色土であったため周壁面の検出が難しく、第145図の平面図では周溝の20~30cm外側に推定外形を破線で表示したが、不整形円または楕円形状を呈する。

規模 推定規模は長径5.8m×短径5.4mを測る。

床面 Ⅷ層上面~Ⅹ層にかけて掘り込み、床面を構築か。若干の凹凸面を持ち、炉の周辺部を中心にやや堅緻な床面を形成。掘り方は存在しない。

柱穴 周壁の30~120cm内側をP1~P6の支柱穴6本が廻るが、位置的にずれるP7は補助的あるいは出入口部に関係した柱穴か。37号住居との重複で不明な柱穴を加えれば、7~8本支柱であろう。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:56cm×41cm、P2:43cm×22cm、P3:86cm×46cm、P4:70cm×49cm、P5:74cm×34cm、P6:55cm×19cm、P7:48cm×33cmである。各柱穴芯々間の距離は、

P1~P2・P2~P3・P5~P6:1.15m、P3~P4:1.85mを測る。

炉 床面のほぼ中央部に位置する。西側一部のみ炉石を配した長辺85×短辺62cm、深さ13cmの方形状を呈するが、壁際の凹凸から判断して石囲炉の用石が抜去されたものと推定される。底面と石材に被熱による赤化や割れが認められる。

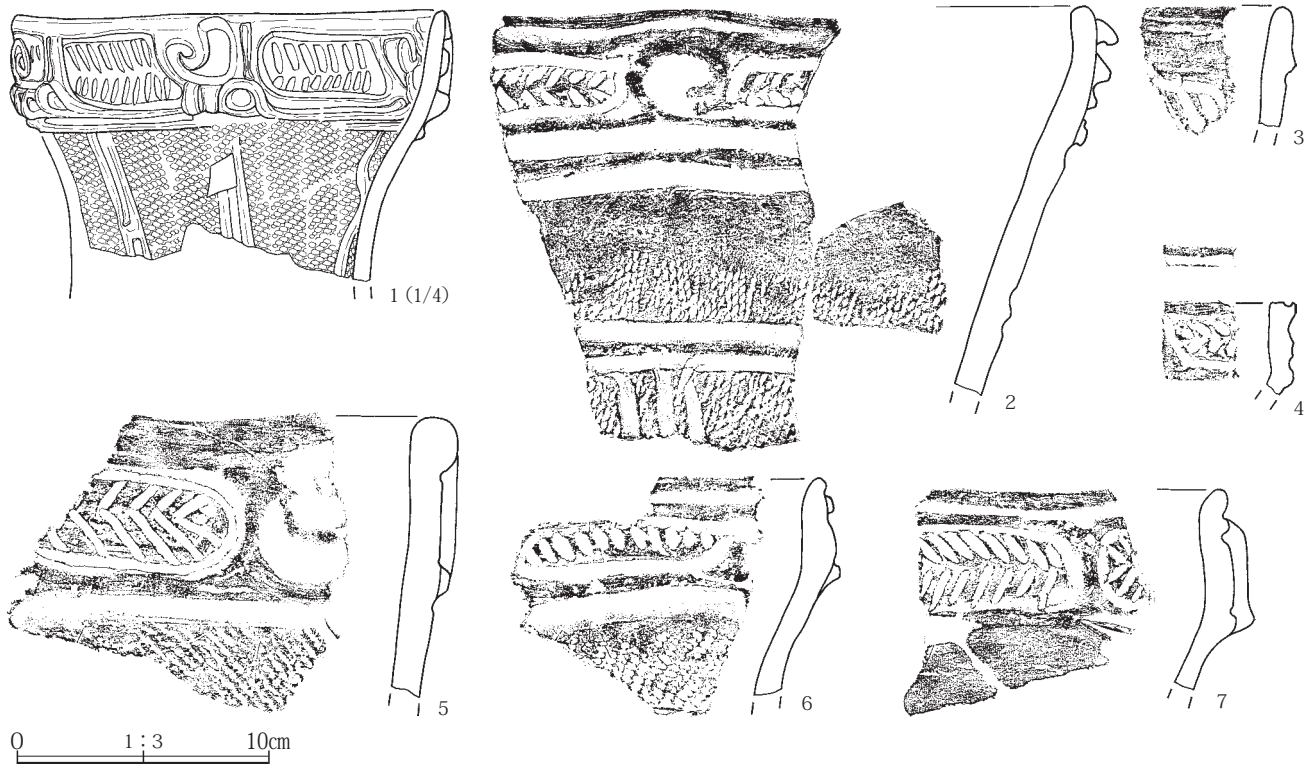
埋 甕 出入口部と想定される南側の周溝内に、胴部下半を欠失した深鉢土器(No.1)を正位に埋設する。この上面には、長径15~25cmの平板な河床礫3点が存在し、これらにより蓋をしたような状態が認められた。

周 溝 上幅9~19cm、深さ3~10cmの規模で周壁際を全周すると考えられる。

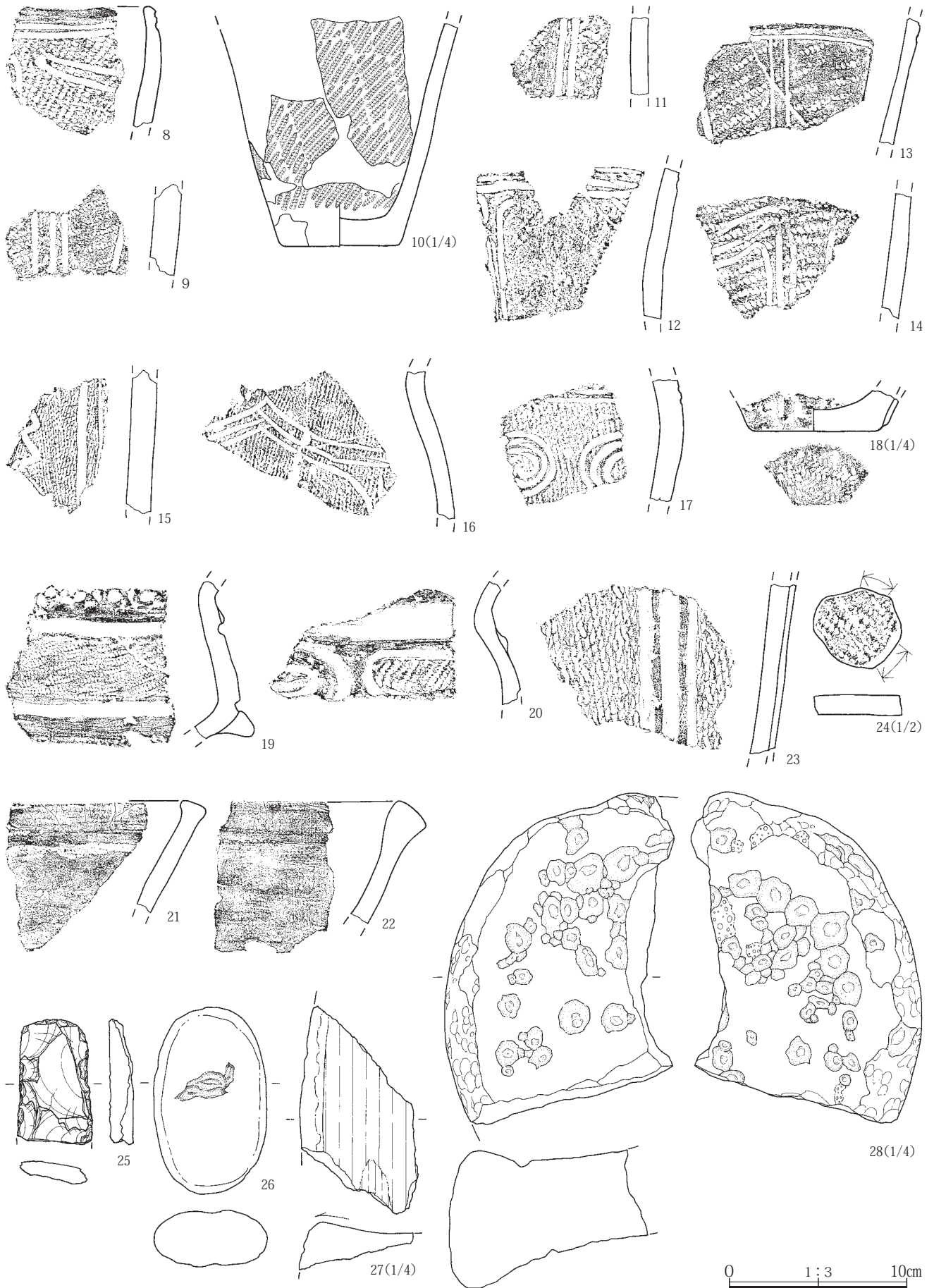
埋没土 Ⅷ層に近似した黒褐色土や暗褐色土が、薄く堆積する。

遺物 埋設土器のNo.1や床面密着のNo.4を除き、他の全遺物が床面から5cm以上浮遊して埋没土中から出土した。土器は中期の加曾利E2式を中心に839点、石器では削器類6点、打製石斧・石皿・石核各2点、磨石類1点などが出土した。

所見 当住居の構築時期は、埋設土器をはじめ埋没土中の出土土器の大半が加曾利E2式新段階であることから、同式期に比定される。



第146図 7区56号住居出土遺物(1)



第147図 7区56号住居出土遺物(2)

● 7区57号住居

位置 X = 57795 Y = -75520

方位 N30度W 面積 15.16㎡

写真 P L 45・46・133・134 観察表 462頁

重複 北壁側で601号土坑と重複するが新旧関係不明。

形状 南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。四辺はほぼ直線的に掘り込まれ、その壁面勾配は約72度である。

規模 長軸4.47m×短軸3.53m、深度42～56cmを測る。

床面 VII～X層にかけて最大56cm掘り込んで床面を構築。炉の周辺部を中心に叩き床状の堅緻な面を形成。

柱穴 3本×2列の6本(P1～P3・P5～P7)の支柱穴が、長軸方向に並行して配置。P9やP13は補助的な柱穴で、北・南壁際の6本は出入口部に関連した柱穴の可能性もある。各柱穴の規模は一覧表に別記したが、上記支柱穴の芯々間の距離は、P1～P2：1.85m、P2～P3：1.75m、P5～P6：1.8m、P6～P7：1.5m、P1～P5：1.05m、P3～P7：1.15mを測る。

炉 床面中央部に位置する。長径36cmの扁平河床礫

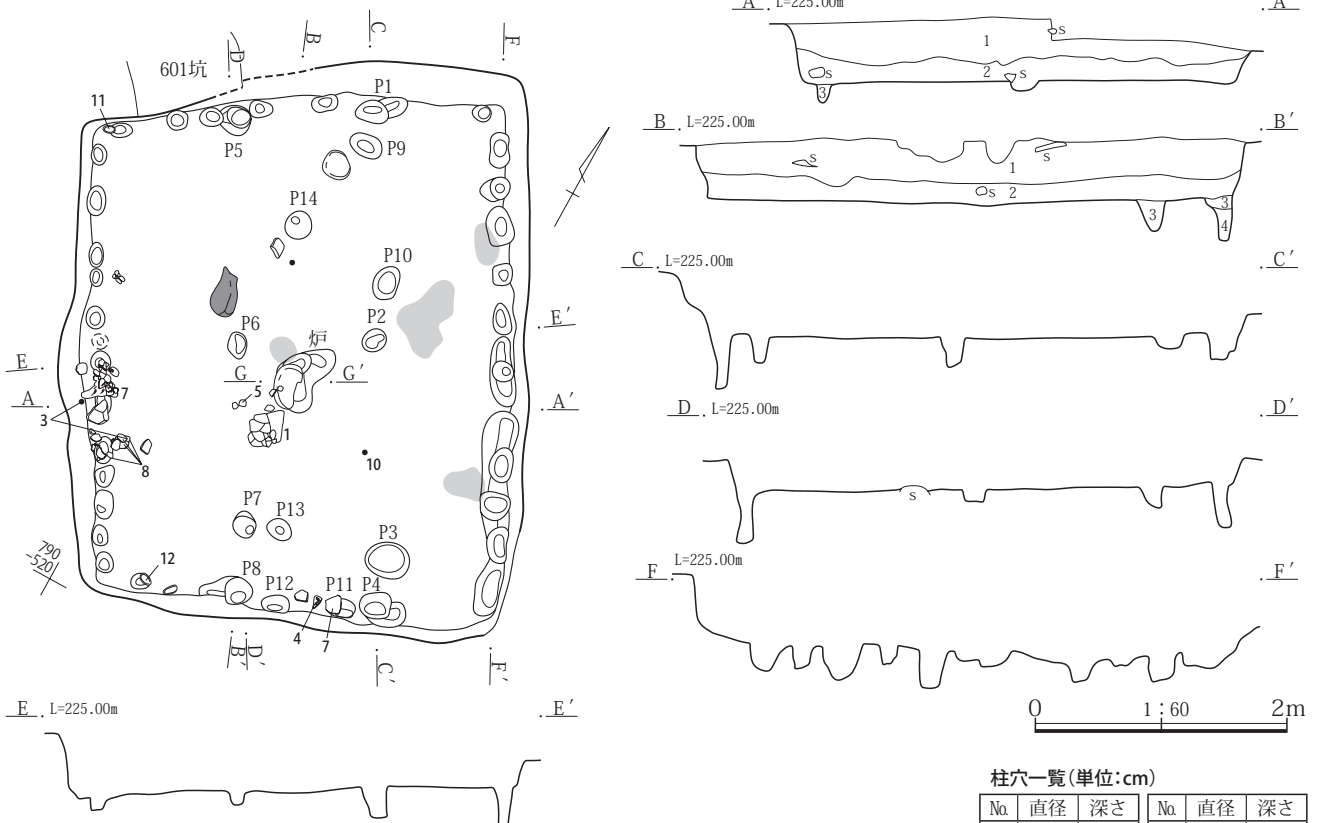
1点が床面より5cmほど浮遊して近接出土するが、本来は当礫を北側に配した長径58cm×短径32cm、深さ10cmの掘込炉であろう。北側50cmと東側1m離れた床面上に被熱による赤変が認められる。

周溝 直径14～31cm、深さ9～33cmの壁柱穴に付随して上幅9～24cm、深さ5～14cmの規模で東壁際の一部のみ認められる。

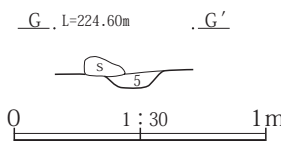
埋没土 VII・VIII層内に近似した暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示す。

遺物 床面密着あるいは浮遊高4cm以内の出土遺物は、No.1・3・8・11・12のみで、他は埋没土出土である。土器は前期の関山Ⅱ式の破片を中心に300点、石器は石鏃・石匙各1点、削器4点、磨石類2点が出土。尚、黒曜石製剥片2点の蛍光X線分析による産地同定を行い、鷹山または小深沢との結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期については、床面密着や埋没土中の出土土器が関山Ⅱ式中～新段階を主体とすることや住居形態から判断して、同式期に比定される。



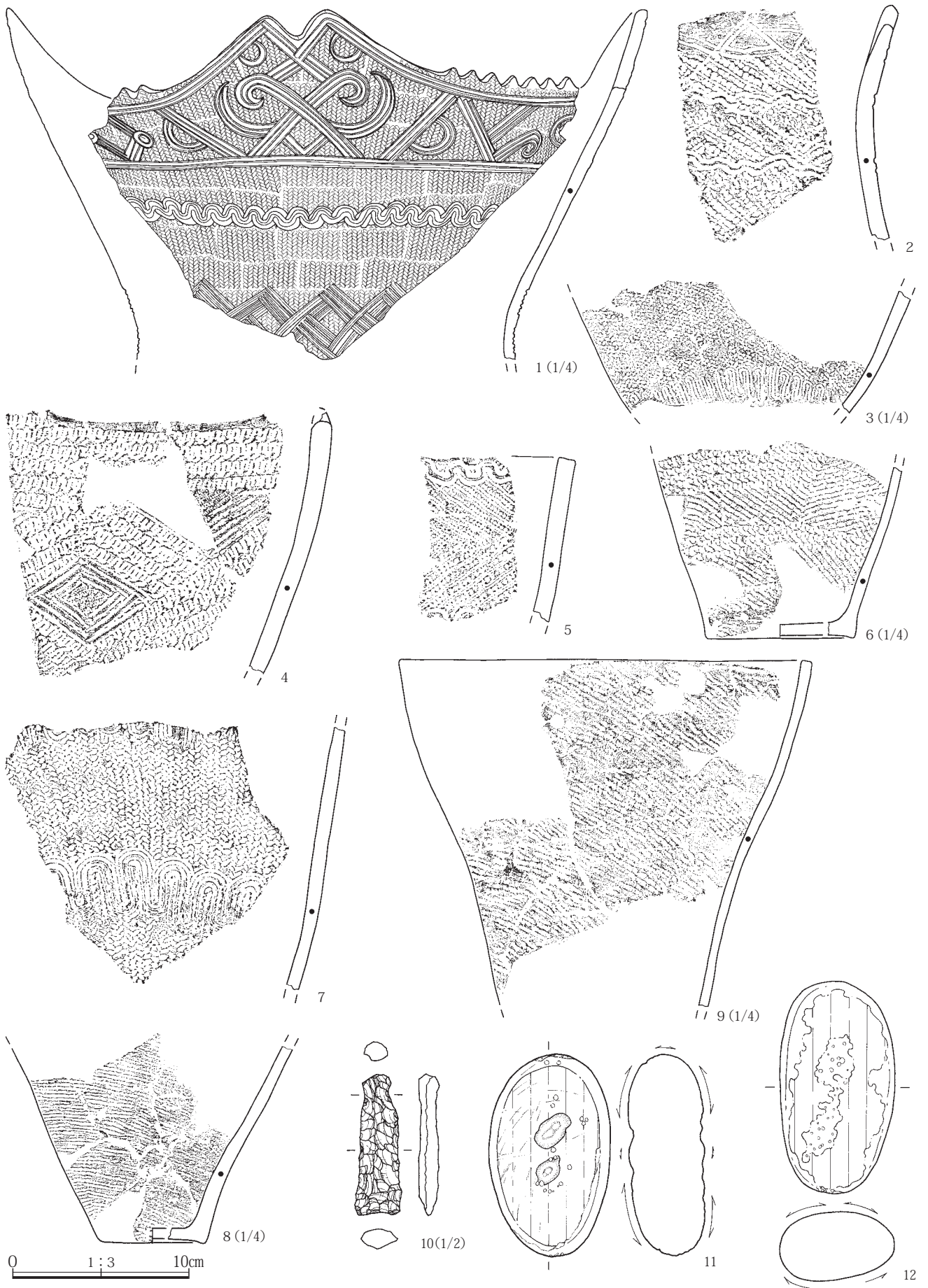
- 埋没土層
- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊を多量、黄褐色軽石粒・白色軽石粒を含む。
 - 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・塊、黄褐色軽石粒を含む。
 - 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・炭化物・白色軽石粒を微量含む。
 - 4 黄褐色土(10YR5/8)ローム粒を多量、白色軽石粒を少量含む。



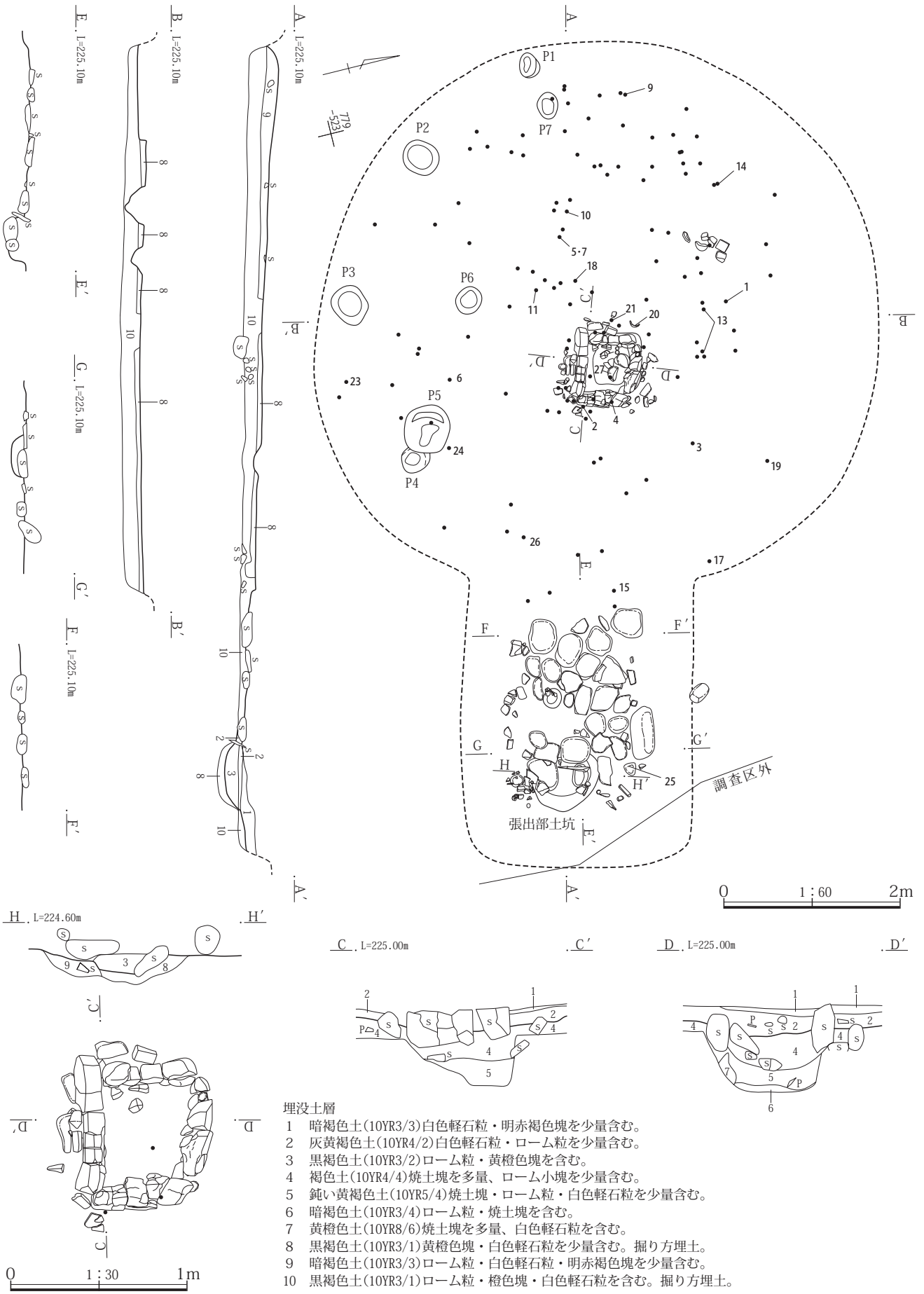
第148図 7区57号住居

柱穴一覧(単位:cm)

No.	直径	深さ	No.	直径	深さ
1	26	40	8	22	35
2	21	22	9	27	21
3	36	10	10	29	7
4	31	15	11	22	22
5	25	39	12	23	23
6	18	10	13	21	27
7	20	24	14	22	39



第149図 7区57号住居出土遺物



第150図 7区58号住居

●7区58号住居

位置 X=57779 Y=-75523

方位 N70度W 面積 (39.7㎡)

写真 P L 46・47・134・135 観察表 463頁

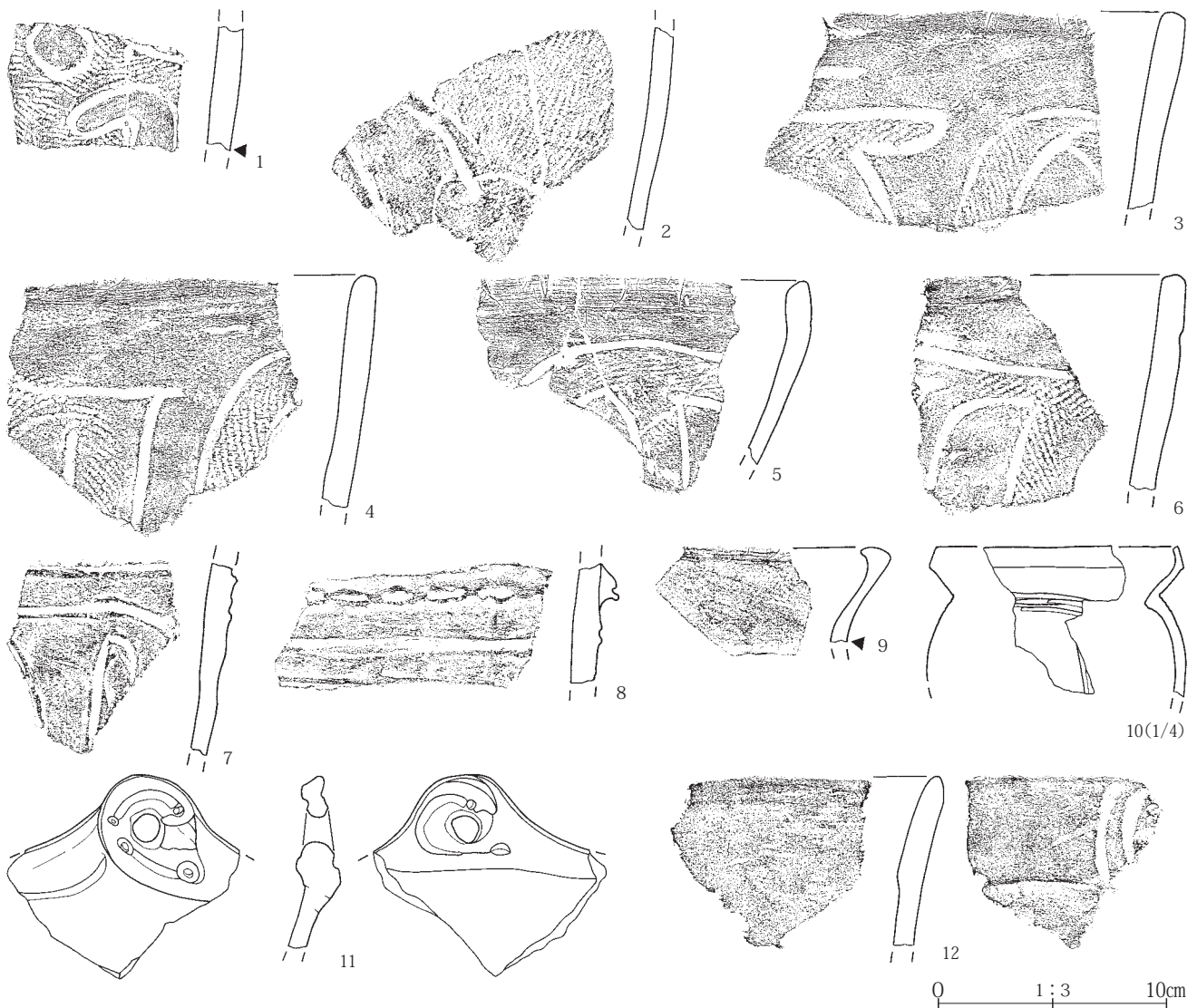
形状 住居内埋没土とⅦ・Ⅷ層との類似により各層上面での確認が難しく、結果的にⅧ層の精査・掘り下げ段階で炉石および張出部の一部敷石の検出し、当住居の存在を確認し得た。従って、住居の外形や周壁面は検出できず、第150図のように柱穴の配置や張出部敷石の範囲を考慮して破線により柄鏡形を想定・復元した。

規模 推定規模は主体部が長軸6.7m×短軸6.3m、張出部が長軸3.5m×短軸2.7mを測る。

床面 Ⅶ層上面～Ⅷ層内にかけて掘り込み、床面を構築すると想定される。張出部には板状節理の安山岩や扁平・円形状の河床礫を敷き詰めているが、主体部には皆

無であり、構築当初から敷石を施さなかった可能性もある。埋設土器の事例が多見される張出部先端の敷石下には、直径40cm×深さ12cmの土坑状の浅い掘り込みが存在している。また、北半部の周壁想定部位からやや内側の柱穴配列と重複する位置に、直径2～3cmの砂粒状河床礫を帯状に配置した周礫も認められる。南半部にも散在している状況から見て、構築当初は周壁際を圍繞していたと推定される。掘り方は8・10層が該当し、層厚10～25cmを測るが、10層についてはⅧ層との区分が難しく、実際の掘り方深度は15cm程度と推定される。

柱穴 主体部の南側を中心に7本を検出したが、他は地山と埋没土との識別が困難なために不明である。配置状況からP1～P5が支柱穴と想定され、周壁際を10本前後が廻る多柱構造であろう。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1：28cm×11cm、P2：42cm×26cm、P3：45cm×



第151図 7区58号住居出土遺物(1)

17cm、P4：32cm×19cm、P5：56cm×29cm、P6：31cm×15cm、P7：30cm×18cmである。各柱穴芯々間の距離は、P1～P2：1.6m、P2～P3：1.85m、P3～P4：1.9mを測る。

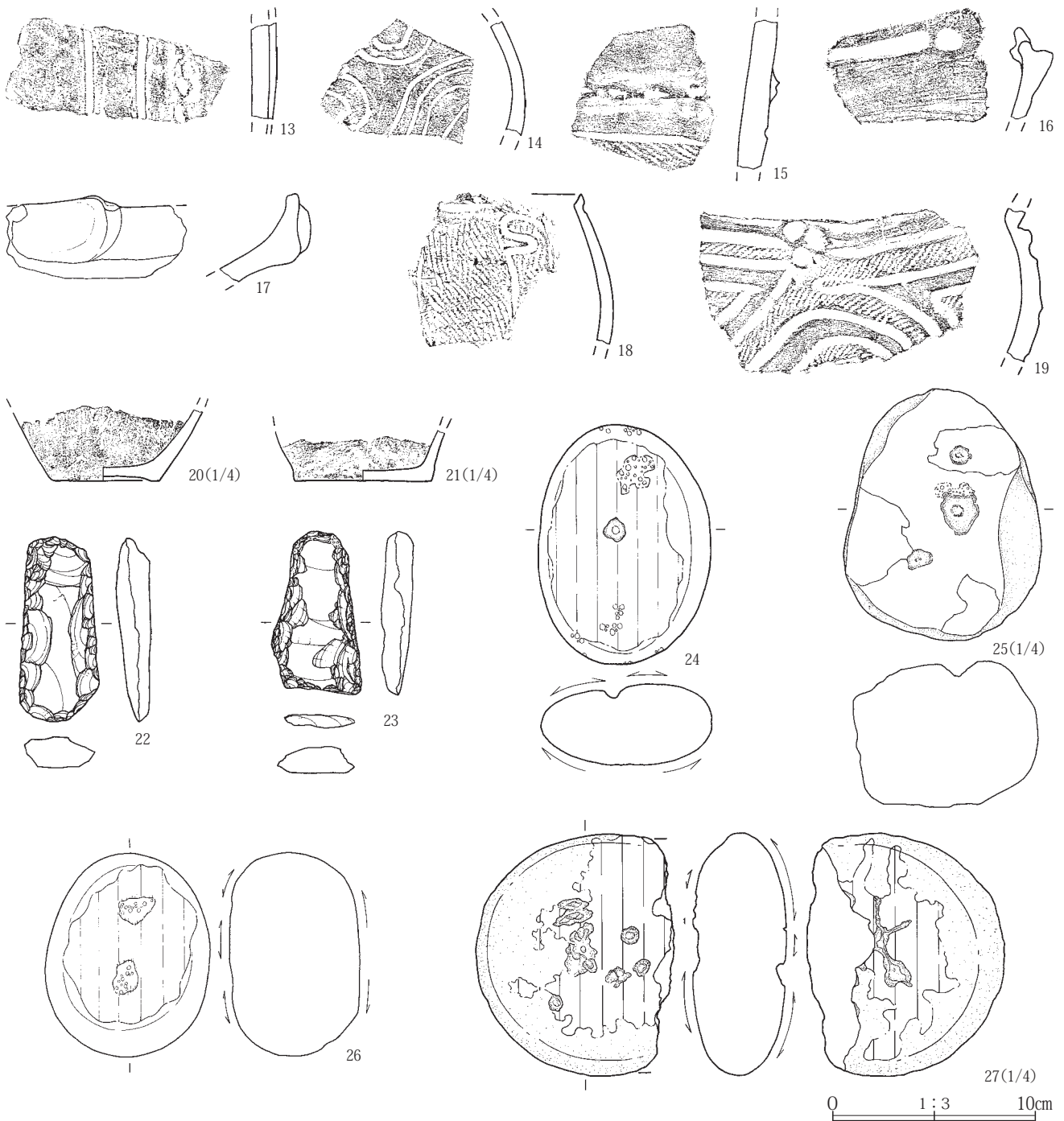
炉 主体部のほぼ中央部に位置する。柱状の垂角礫4石を配した方形石囲炉で、長辺82×短辺72cm、深さ21cmの規模を持つ。各石材は被熱により節理面に沿って細かく破砕され、掘り方の上位壁面には赤変が認められる。

遺物 床面密着や浮遊高4cm以内の出土遺物は、No.1～7・9・10・13・15・17・19・24～26で、他は埋没土相

当層出土。土器は中期の加曾利E3・E4式から後期の称名寺Ⅰ・Ⅱ式を中心に1,652点、石器では削器類7点、打製石斧2点、磨石類5点、台石1点、多孔石2点などが出土した。尚、黒曜石製剥片2点の蛍光X線分析による産地同定を行い、星ヶ台と高松沢との結果を得ている。

その他 周溝と埋没土は未検出。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、床面密着出土土器の大半が称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式であることから、同式期に比定される可能性が高い。



第152図 7区58号住居出土遺物(2)

●7区59号住居

概要 支柱穴の配列と周溝の圍繞状況から、1回の建て替え・拡張が想定される。構築当初段階を1期、拡張段階を2期として、順次その内容を記載する。尚、各期住居の位置・方位および写真・観察表についてはほぼ同一であるため、2期では省略する。

【1期】

位置 X=57785 Y=-75525

方位 N33度W **面積** (17.5㎡)

写真 P L 48・49・135・136 **観察表** 464頁

形状 斜面地の等高線にほぼ直行して南北方向に長軸を持ち、北辺が南辺より70cm短い隅丸長台形を呈する。

規模 長辺5.0m、短辺3.15m・3.8mと推定される。

床面 2期住居との重複により、床面状況は不明。

柱穴 3本×2列の6本支柱穴P1・P9～P13が、住居の長軸方向に並行して配置されている。各柱穴の規模は下記一覧表に記載したが、それらの芯々間の距離はP1～P9：1.95m、P9～P10：1.15m、P11～P12：1.8m、P12

～P13：1.3m、P1～P11とP10～P13は1.4mを測る。南壁際のP14・P15は出入口部に関連した柱穴と思われる。

炉 北側1/4を2期の炉で切られるため一部不明瞭だが、長径70cm×短径50cm、深さ11cmの掘込炉である。2期炉と同様に北壁際に1石を配置した可能性もある。

周溝 南壁から西壁際の直径16～30cm、深さ7～29cmの各壁柱穴を連結して、上幅8～20cm、深さ4～30cmの規模で全周すると想定される。

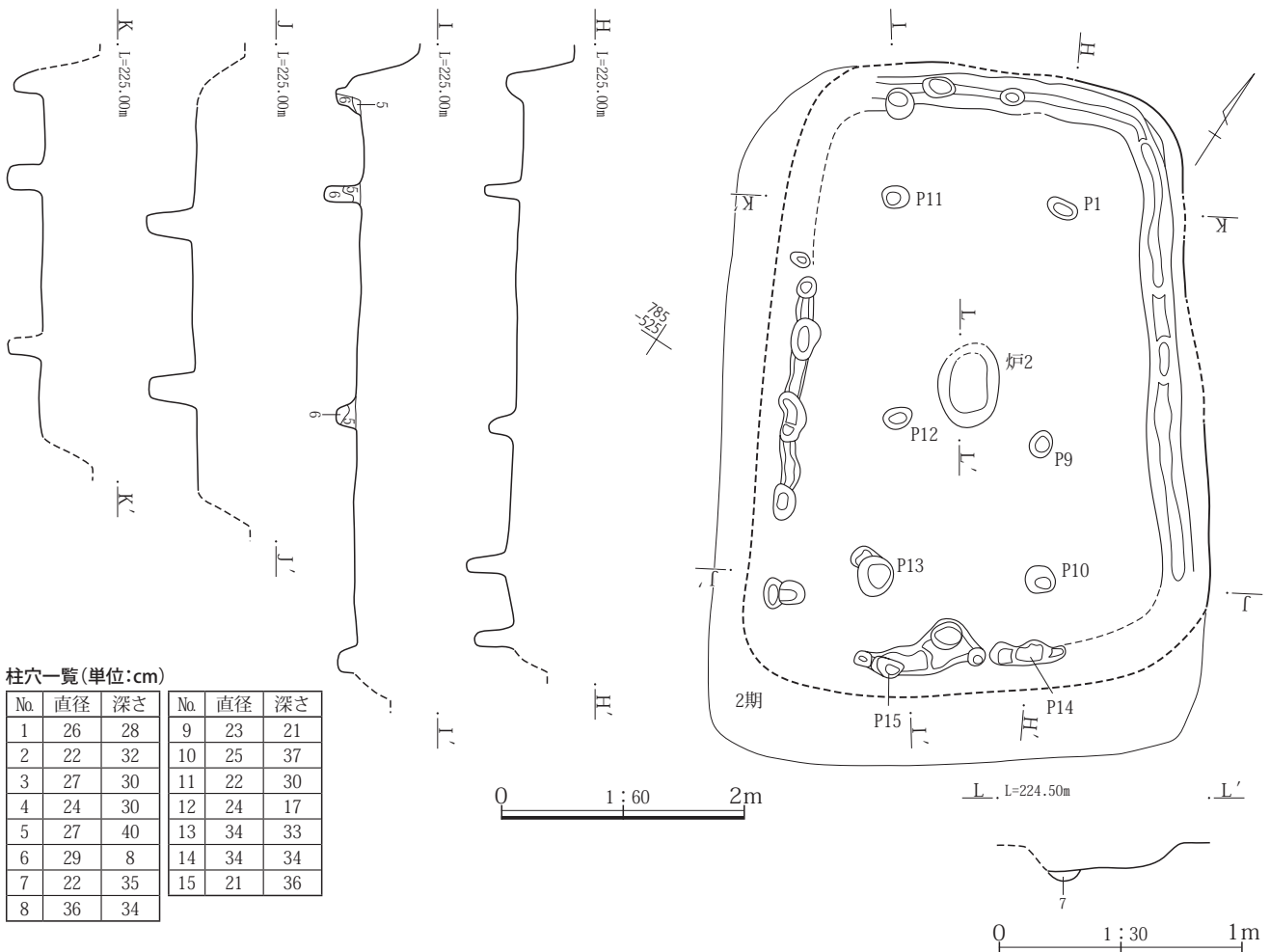
所見 当住居の構築時期は伴出遺物が皆無のために確定できないが、2期住居の前段階に構築されることから、状況的には第155図2のような土器を伴う関山Ⅱ式期古段階に比定される可能性が高い。

【2期】

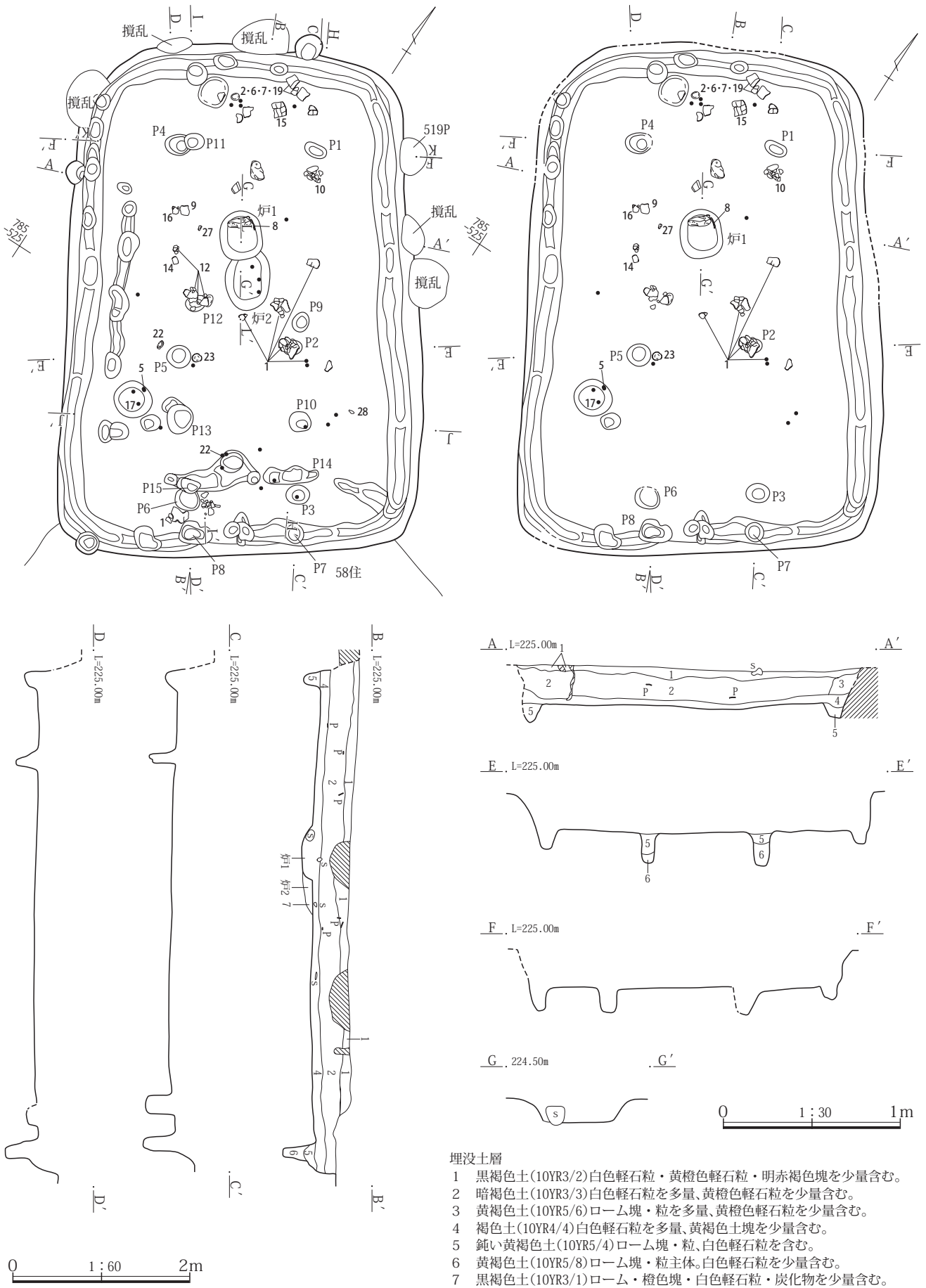
面積 21.46㎡

重複 南壁側を後期の58号住居に切られている。

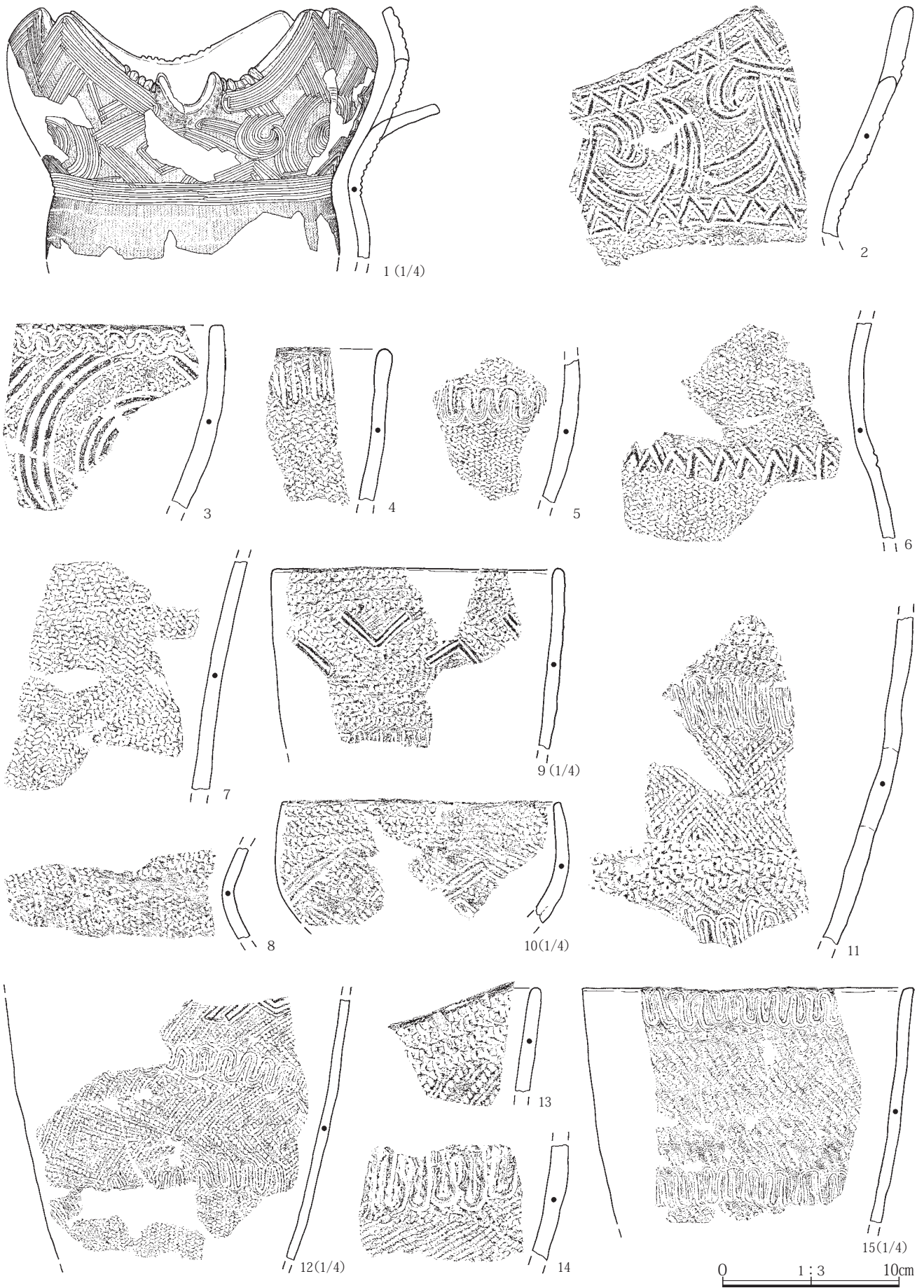
形状 1期の北壁と東壁を共有しつつ西壁と南壁を対角線方向に30～60cm拡張し、隅丸長台形を呈する。四辺はほぼ直線的で、壁面勾配は約74度の角度で立ち上がる。



第153図 7区59号住居(1期)



第154図 7区59号住居(2期)



第155図 7区59号住居出土遺物(1)

規模 長辺5.81m、短辺3.59mと4.10m、掘り込み深度35~46cmを測る。

床面 Ⅷ層内~Ⅹ層にかけて、最大46cm掘り込んで床面を構築している。体的には地形勾配と同様に、北側から南側に向かって比高差10cmの傾斜が認められるが、炉周辺部も窪地状に若干低くなる。また炉周辺部を中心にして、叩き床に近い堅緻な面が認められる。

柱穴 P1~P6の3本×2列の6本主柱穴が、長軸方向に並行して配置されている。各柱穴の規模は一覧表に記載した通りだが、P1は1期柱穴を共用している。各主柱穴の芯々間の距離はP1~P2:3.6m、P2~P3:2.2m、P4~P5:3.4m、P5~P6:2.45m、P1~P4:1.95m、P3~P6:1.8mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。尚、東壁周溝内に直径26~36cm、深さ34~35cmのP7・P8が存在し、これらは出入口部に関わる柱穴の可能性もある。

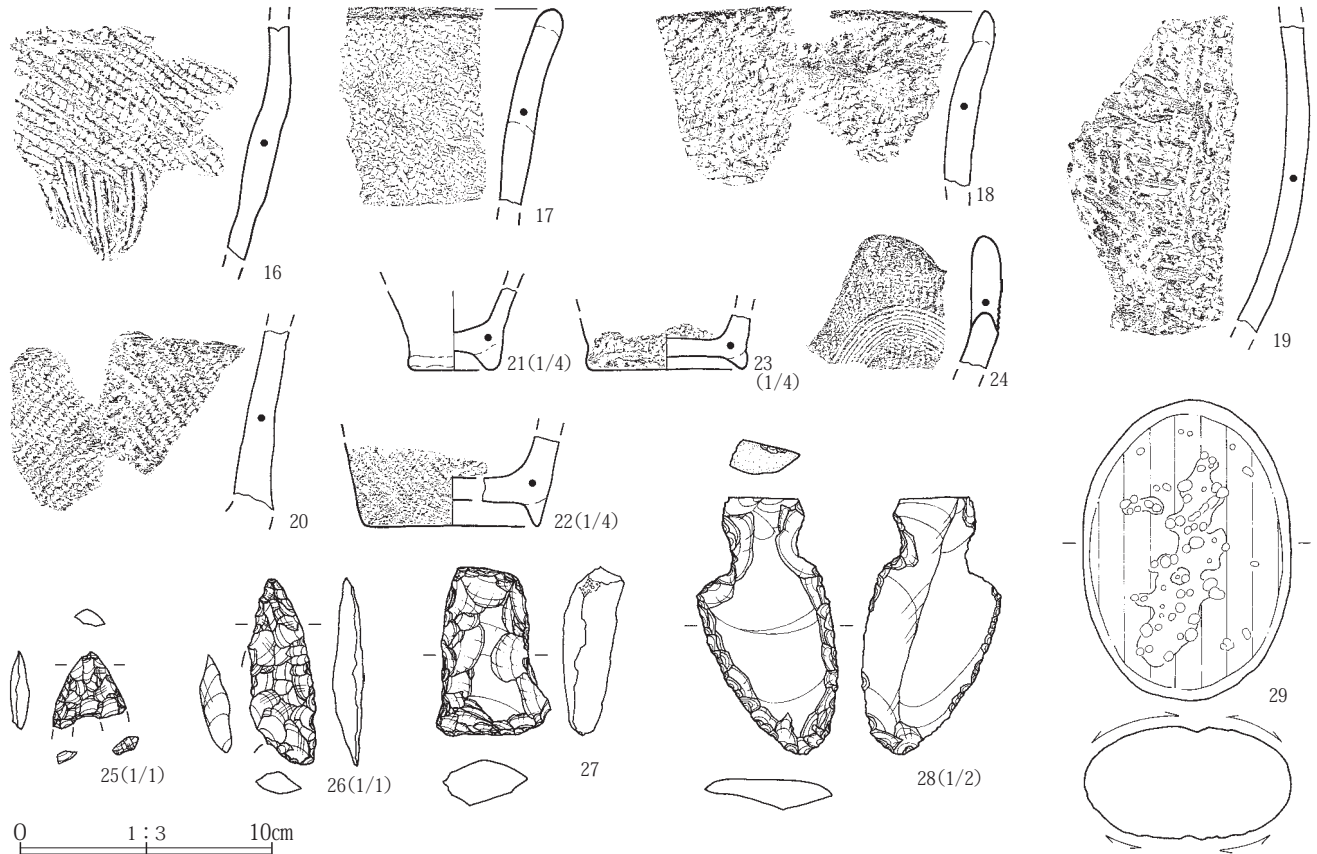
炉 1期炉の北側に40cmほど離れてやや奥壁側に偏在し、北壁際に長径30cm×短径10cmの垂角礫1石を据えた楕円形状の掘込炉である。規模は長径56cm×短径50cm×深さ16cmを測る。炉石には若干の被熱剥離が認められるが、底・壁面は焼土形成や赤色変化に乏しい。

周溝 上幅13~36cm×深さ7~34cmの規模で周壁際を全周している。西壁際の周溝内を中心に直径19~35cm、深さ20~28cmの壁柱穴が数個認められる。

埋没土 Ⅷ層に類似した暗褐色土が上層から下層にかけてレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。尚、B-B'の土層セクションでは、土壌攪乱等により称名寺式期の58号住居との重複が明確に把握できなかった。

遺物 床面密着および浮遊高3cm以内の遺物は、No.1・8・22のみで他は埋没土の2層内を中心に出土した。土器は前期の関山Ⅱ式557点が主体を占め、石器では石匙3点、削器類6点、打製石斧2点、磨石類1点が出土した。また、称名寺式期の58号住居が重複する南半部では、同住居の周礫用材と推定される直径5cm前後の河床礫が、土壌攪乱等により下位にまで多数混在している。尚、黒曜石製の石鏃2点(No.25・26)と剥片6点の蛍光X線分析による産地同定を行い、星ヶ台、土屋橋2、鷹山または小深沢との結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期については、床面密着および埋没土中出土土器のほとんどが関山Ⅱ式中段階であることから、同式期に比定される可能性が高い。



第156図 7区59号住居出土遺物(2)

●7区60A号住居

位置 X=57771 Y=-75520

方位 N39度W 面積 9.88㎡

写真 P L 49・50・136・137 観察表 465頁

重複 北～東壁側で60B号住居を切っているが、東壁側で重複する587号土坑との新旧関係は不明。

形状 60B号住居との重複により北～東側周壁が不明瞭だが、斜面地の等高線にほぼ直行して南北方向に長軸を持つ隅丸正方形を呈する。やや外側に湾曲する東辺を除き、各辺共に直線的で壁面勾配は約81度で立ち上がる。

規模 長辺3.35m×短径3.22m、深さ33～47cmを測る。

床面 VIII層上面～X層にかけて最大47cm掘り込み、床面を構築。凹凸の少ない平坦な床面で、炉の周辺部を中心にやや堅緻な床面を形成。掘り方は存在しない。

柱穴 住居の対角線上にP1～P4の柱穴を配した4本支柱構造である。周壁際にP5～P8の4本とP9・P10の2本が存在するが、前者は出入口部に関連した柱穴と想定される。後者は直径43cmで周壁面を抉るように掘り込まれて

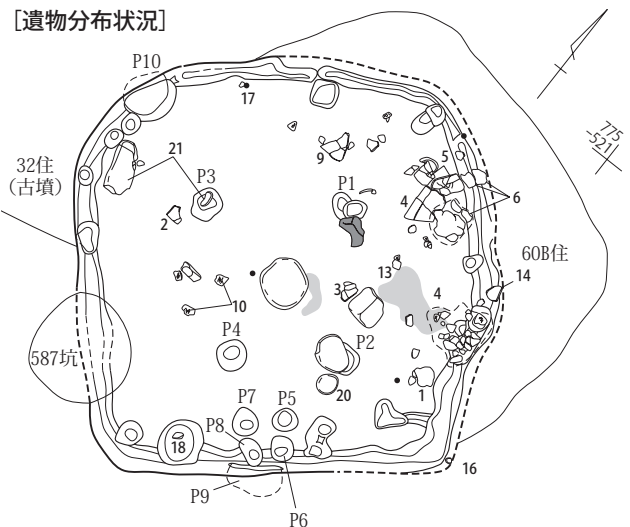
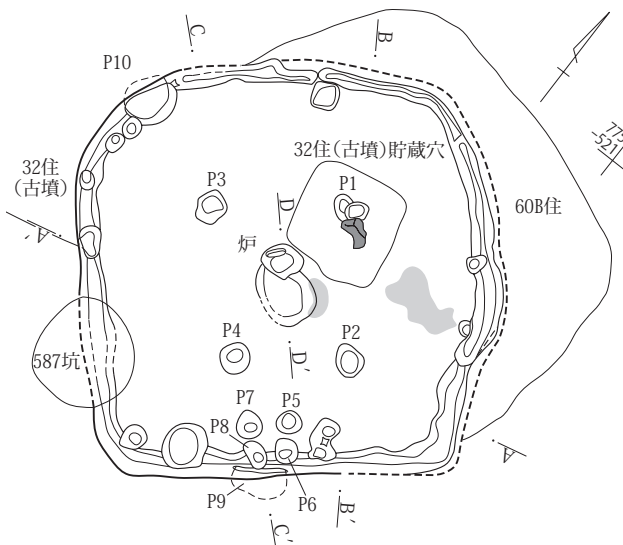
おり、支柱の補助的なものと推定される。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:20cm×24cm、P2:26cm×32cm、P3:27cm×35cm、P4:24cm×39cm、P5・P6:20cm×18cm、P7:22cm×20cm、P8:24cm×25cm、P9:43cm×30cm、P10:43cm×37cmである。各柱穴芯々間の距離は、P1～P2:1.2m、P3～P4:1.25m、P1～P3:1.15m、P2～P4:0.9mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。

炉 床面の中央部に位置する。北壁側のみに長径18cm×短径10cmの河床礫1石を配した楕円形状の掘込炉で、長径65×短径45cm、深さ14cmを測る。また東側へ50cm離れた床面上の長径60cm範囲に被熱による赤変あり。

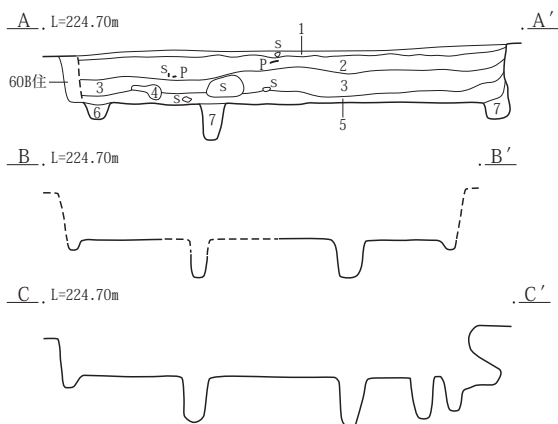
周溝 上幅10～22cm、深さ5～23cmの規模で周壁際を全周するが、北東隅では長径10～25cm、深さ15～32cmの壁柱穴を伴う。

埋没土 VIII層に近似した暗褐色土が上層から下層にかけてレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

遺物 床面密着および浮遊高5cm以内の遺物は、No.2・4・5・17・20のみで他は埋没土の2・3層内を中心に

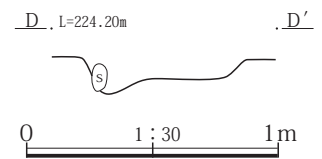


[遺物分布状況]

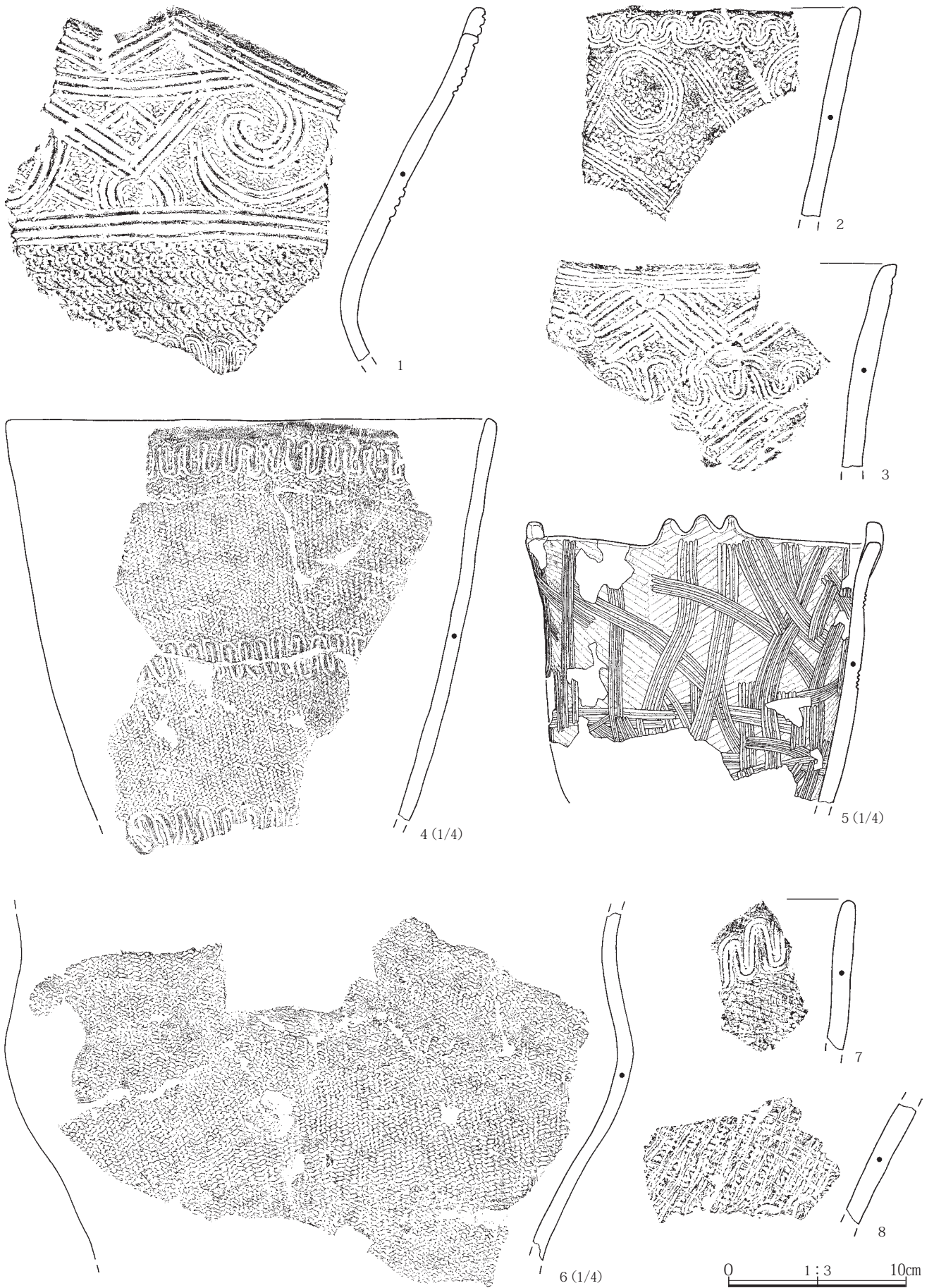


埋没土層

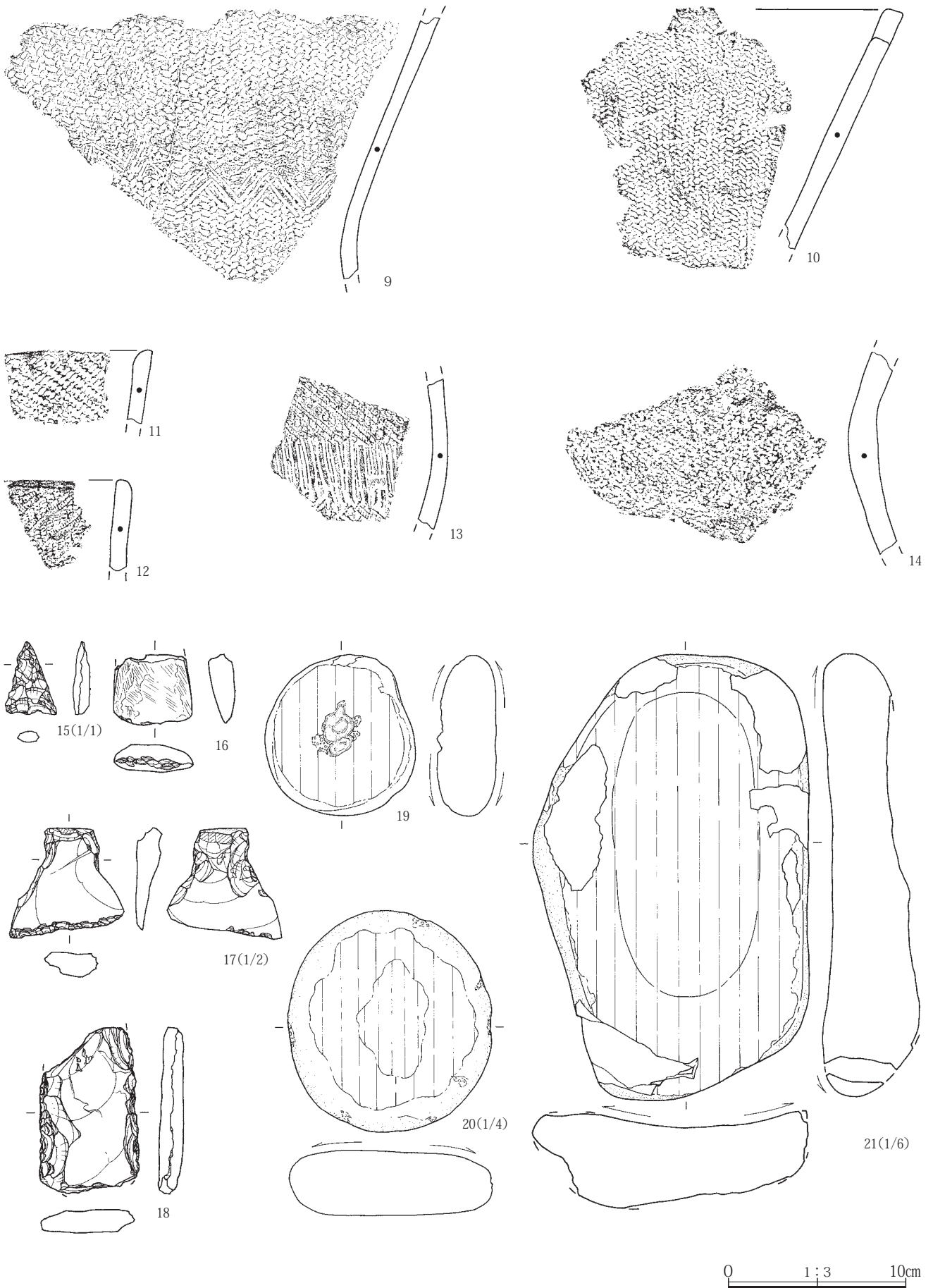
- 1 黒褐色土(10YR3/2)細粒で均質。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒・焼土・炭化物を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム・白色軽石粒・焼土塊・炭化物を少量含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・焼土を含む。
- 5 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム・白色軽石粒・炭化物を少量含む。
- 6 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊混入。
- 7 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊含む。



第157図 7区60A号住居



第158図 7区60A号住居出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第159図 7区60A号住居出土遺物(2)

出土した。埋没土中の遺物については60B号住居遺物と区分できないが、土器では前期の関山Ⅱ式が379点と大多数を占める。石器では、石匙3点、削器類6点、打製石斧2点、磨石類1点が出土した。尚、黒曜石製の石鏃1点(No.15)と剥片4点の蛍光X線分析による産地同定を行い、鷹山または小深沢との結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、床面密着や埋没土中の出土土器の大半が関山Ⅱ式中段階であることから、同式期に比定される。

●7区60B号住居

位置 X=57771 Y=-75520

方位 N70度W **面積** (8.4㎡)

写真 P L 49・50・137 **観察表** 465頁

重複 西～東壁側にかけて60A号住居により、また北壁側を古墳時代の32号住居により切られている。

形状 60A号住居との重複により南側周壁が不明瞭だが、斜面地の等高線にほぼ直行して東西方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。各辺共にやや外湾気味に掘り込まれ、壁面勾配は約80度の角度で立ち上がる。

規模 長辺3.40m×短径2.80m、深さ29～51cmを測る。

床面 Ⅷ層上面～Ⅹ層にかけて最大51cm掘り込み、床面を構築する。60A号住居の削平により詳細は不明。

柱穴 P1～P6の6本が検出されているが、P1～P4の4本主柱構造であろう。P6・P5は主柱の補助的なものと推定される。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:21cm×32cm、P2:22cm×18cm、P3:20cm×25cm、P4:18cm×26cm、P5:17cm×21cm、P6:15cm×15cmである。各柱穴芯々間の距離は、P1～P2:1.85m、P3～P4:2.05m、P1～P3:0.75m、P2～P4:0.85mを測る。

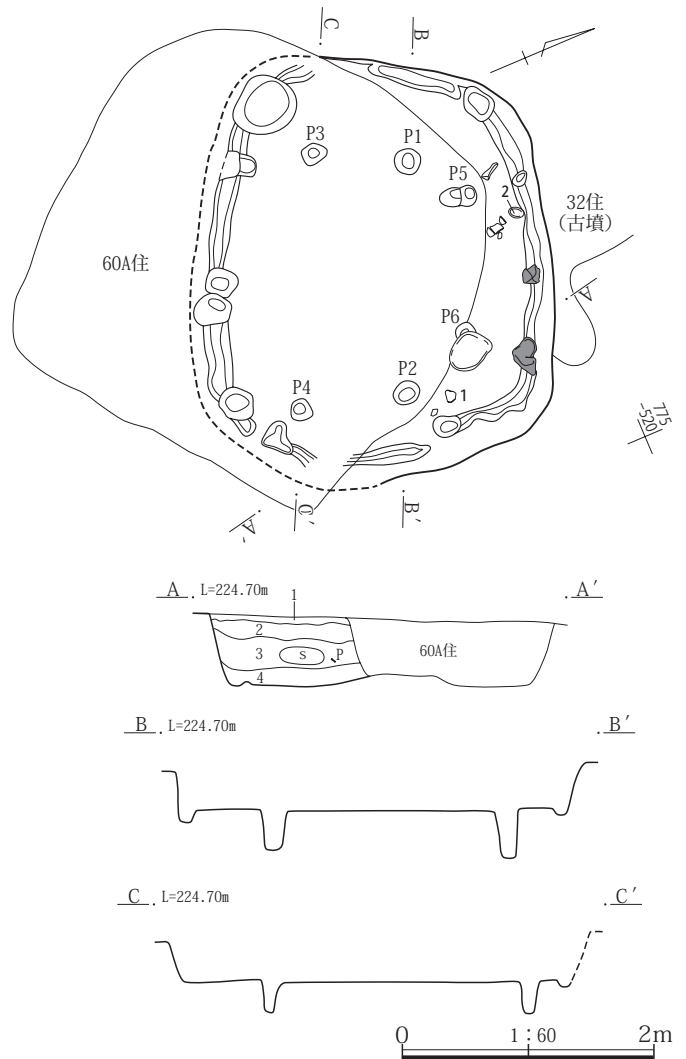
炉 60A号住居の削平により消失しと推定される。

周溝 上幅10～19cm、深さ2～8cmの規模で周壁際を全周し、南壁際で僅かな壁柱穴を伴う。

埋没土 部分的な検出だが、Ⅷ層に近似した暗褐色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

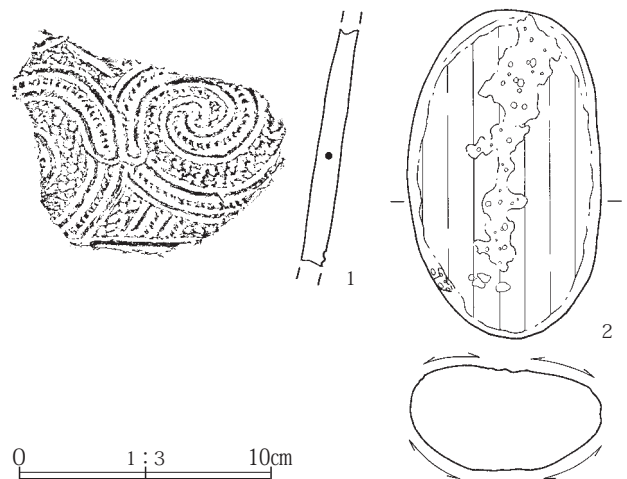
遺物 床面密着の遺物はなく、全て3層を中心とした埋没土中の出土である。

所見 確実な伴出遺物はないが、60A号住居に先行することやNo.1の出土土器が関山Ⅱ式古段階であることから、同式期に比定される可能性が高い。

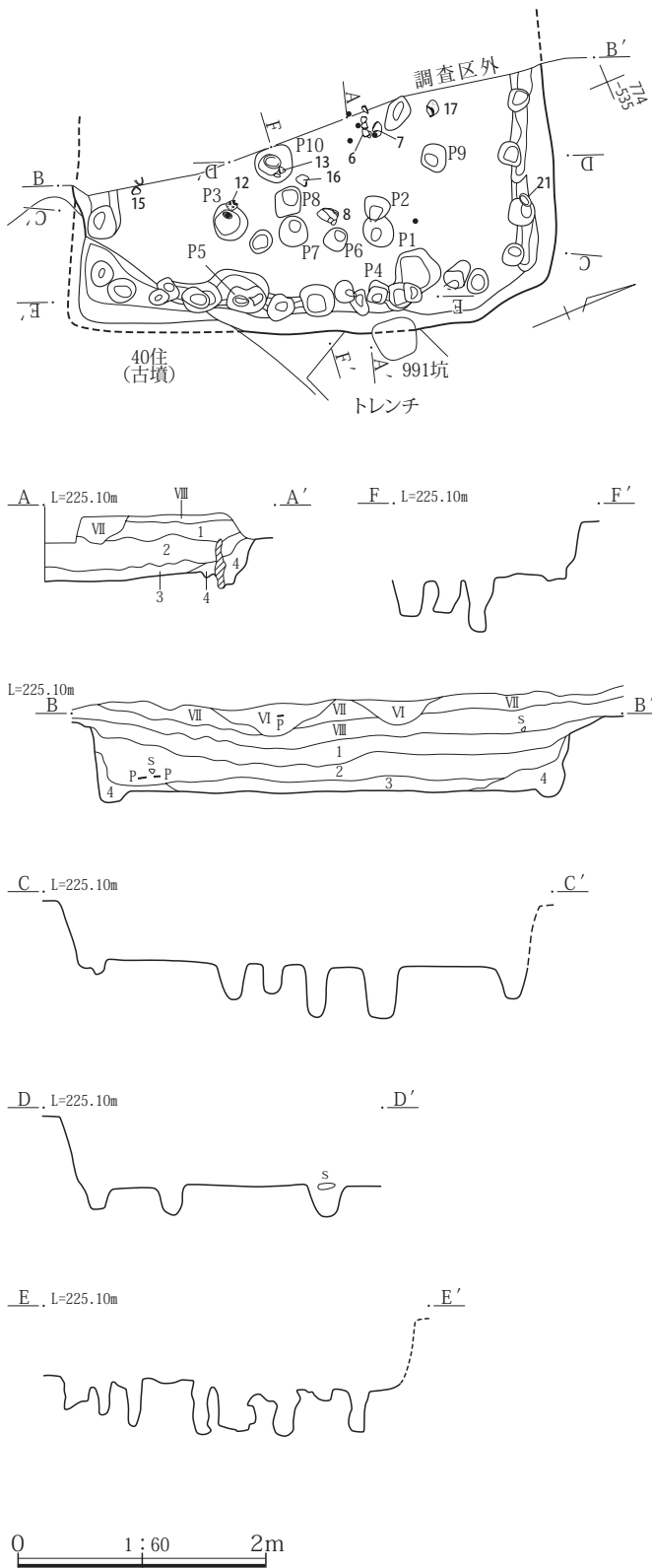


埋没土層

- 1 黒褐色土(10YR3/2)細粒で均質。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒・焼土・炭化物を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム・白色軽石粒・焼土塊・炭化物を少量含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・焼土含む。



第160図 7区60B号住居と出土遺物



埋没土層

- 1 暗褐色土(10YR3/4)橙色塊・白色軽石粒・ローム粒を少量含む。軟質。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・橙色塊・白色軽石粒・炭化物を少量含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・白色軽石粒・赤褐色塊を少量含む。
- 4 褐色土(10YR4/4)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。

第161図 7区61号住居

●7区61号住居

位置 X=57769 Y=-75533

方位 N65度W 面積 不明

写真 P L 51・137・138 観察表 465頁

重複 南東隅を古墳時代の40号住居が切っているが、991号土坑との新旧関係は不明である。

形状 全体の2/3が調査区外に存在するため確定的ではないが、斜面地の等高線にほぼ直行して東西方向に長軸を持つ長方形と推定される。壁面勾配は約83度。

規模 長辺は不明だが、短辺3.88m、深さ55~58cmを測り、比較的整然と掘り込まれている。

床面 VIII層下面~X層にかけて最大58cm掘り込み、床面を構築している。若干の凹凸を持ち、全体的に叩き床に近似したやや堅緻な床面を形成するが、掘り方は存在しない。

柱穴 P1~P9の柱穴を検出したが、規模や位置などの状況から見て主柱と関連するのは、P1・P3と推定される。ただし、P9・P10は住居の建て替えや拡張に付随した柱穴の可能性もある。また、P4・P5は出入口部に関連した柱穴と想定される。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:27cm×29cm、P2:19cm×11cm、P3:39cm×44cm、P4:13cm×33cm、P5:19cm×41cm、P6:19cm×23cm、P7:25cm×41cm、P8:27cm×24cm、P9:22cm×25cm、P10:31cm×27cmである。各柱穴芯々間の距離は、P1~P3:1.25m、P9~P10:1.35mを測る。

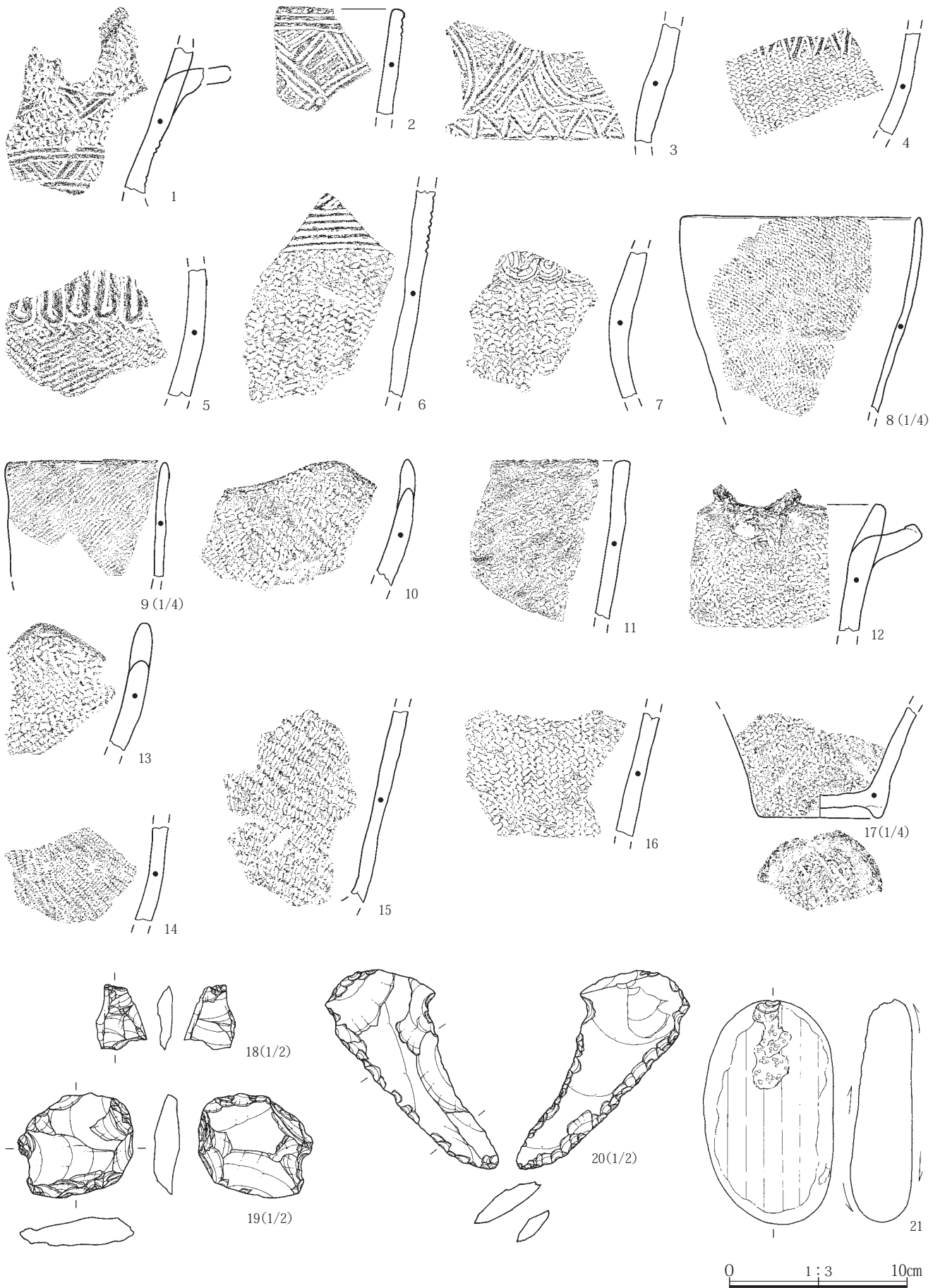
炉 調査区外に存在すると想定される。

周溝 周壁際の直径17~30cm、深さ4~42cmの壁柱穴を連結して上幅12~30cm、深さ3~11cmの規模で全周。

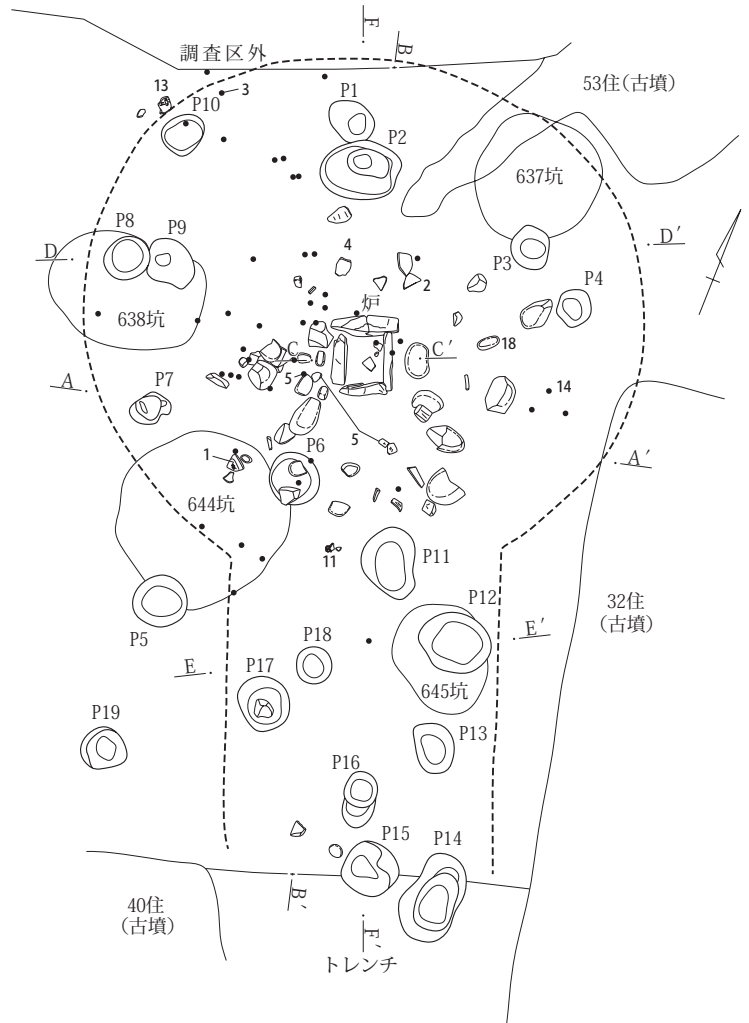
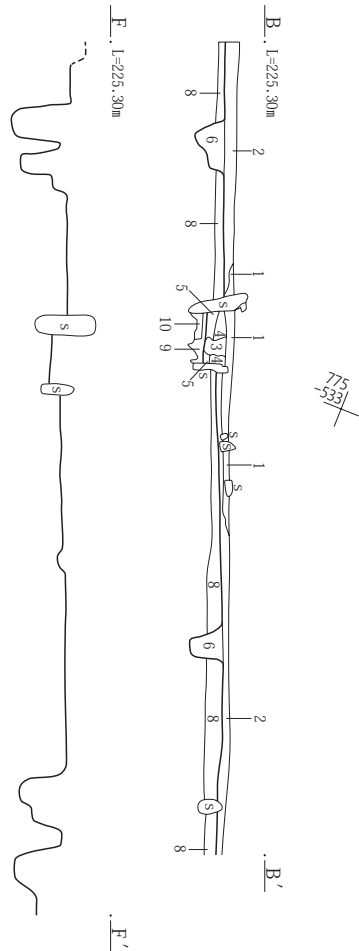
埋没土 VIII層に近似した暗褐色土が上層から下層にかけてレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

遺物 床面密着および浮遊高5cm以内の遺物は、No.7・8・16・17・21のみで他は埋没土内から出土した。埋没土中の土器は、前期の関山Ⅱ式198点を主体に226点が、また石器では石匙1点(No.20)、削器類4点、楔形3点(No.18・19)、磨石類1点(No.21)、石核1点が出土した。尚、黒曜石製石核1点の蛍光X線分析による産地同定を行い、鷹山との結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、床面密着や埋没土中の出土土器の大半が関山Ⅱ式中~新段階であることから、同式期に比定される可能性が高い。

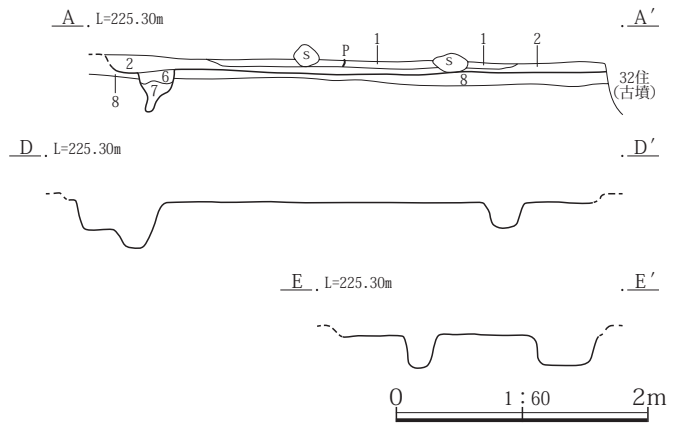


第162図 7区61号住居出土遺物

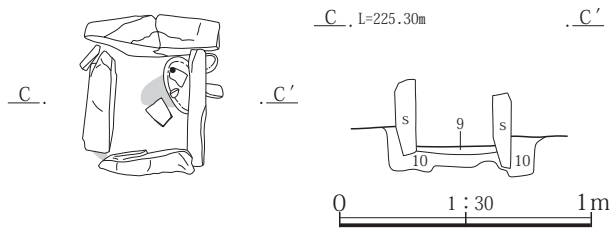


埋没土層

- 1 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・黒褐色土塊・白色軽石粒を含む。
- 3 褐色土(10YR4/4)ローム小塊・粒・焼土塊を含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・黒色土小塊を少量含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/1)焼土塊・白色軽石粒を僅かに含む。
- 6 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒多量に含む。ローム少量含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2)白色軽石粒を少量含む。
- 8 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊を多量、白色軽石粒を少量含む。
- 9 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊を含む。
- 10 鈍い黄褐色土(10YR5/3)ローム主体。暗褐色土小塊を少量含む。



炉



柱穴一覧(単位:cm)

No.	直径	深さ	No.	直径	深さ
1	40	47	11	57	31
2	65	25	12	59	22
3	33	20	13	40	38
4	31	12	14	47	44
5	44	25	15	53	40
6	43	16	16	28	35
7	33	33	17	43	22
8	37	24	18	30	24
9	44	35	19	36	38
10	34	8			

第163図 7区62号住居

●7区62号住居

位置 X=57780 Y=-75530

方位 N22度W 面積 (20.8m²)

写真 P L 51・52・138・139 観察表 466頁

重複 北側と東側および南側を古墳時代の32・40・53号住居により切られ、55B号溝を切る。637・638・644・645号土坑とも重複するが、新旧関係は不明。

形状 7区58号住居と同様に、住居内埋没土とⅦ・Ⅷ層との類似により各層上面での確認が難しく、結果的にⅧ層の精査・掘り下げ段階で方形石囲炉を検出し、その周辺部に散在する河床・垂角礫の状況から、柄鏡形敷石住居と判断した。従って、明瞭な周壁面や床面は検出できなかったが、柱穴や炉石の配置方向を加味して、第163図のように破線によりその形状を想定・復元した。

規模 推定規模は主体部が長軸4.2m×短軸4.0m、張出部が長軸3.0m×短軸2.15mを測る。

床面 Ⅶ層上面または同層内～Ⅷ層内にかけて掘り込み、床面を構築すると想定される。炉の周辺に河床・垂角礫が僅かに存在するのみであり、床面敷石の有無については確定できないが、炉周辺を中心とした部分敷石の可能性も考慮される。

柱穴 主体部からP1～P4・P6～P10の9本を、また張出部からP11～P18の8本を検出した。主体部のP1・P3・P6・P7・P8・P10の配列は、ほぼ円形状を呈しているが、P3とP6の間には1～2本の未検出の柱穴が想定される。恐らく、周壁際を8本前後が廻る多柱構造であろう。P2・P4・P9等は、補助的または建て替えに伴う柱穴と推定される。また、張出部の柱穴については、想定区域外のP5やP19を含めてその配列に規則性があまり認められず、時期の異なる柱穴が混在している可能性もある。各柱穴の規模は一覧表に別記したが、主な柱穴の芯々間の距離は、P1～P3:2.2m、P6～P7:1.3m、P7～P8:1.25m、P8～P10:1.1m、P10～P1:1.4mを測る。

炉 主体部のほぼ中央部に位置すると推定される。板状節理を持つ横幅30～55cm、縦幅30～50cm、厚さ10～15cmの垂角礫4石を配した方形石囲炉で、奥壁側に一回り大きな石材を使用している。炉本体の規模は長辺64×短辺47cm、奥壁側を除く石材頂部からの深さ13～21cmを測る。各石材は被熱により節理面に沿って細かくひび割れ、掘り方の底面には赤変が認められる。

埋没土 柱穴や炉内を除く1・2層が埋没土相当層だが、Ⅶ・Ⅷ層との識別が困難であり、確定的ではない。

遺物 床面密着や浮遊高4cm以内の出土遺物は、No.5・12・14・18のみで、他は埋没土相当層出土。土器は中期の加曾利E3・E4式857点や後期の称名寺I式～堀之内1式526点を中心にして、また石器では石鎌・楔形・磨石類各1点、削器類7点、打製石斧3点などが出土した。尚、黒曜石製剥片4点の蛍光X線分析による産地同定を行い、星ヶ台と鷹山または小深沢との結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、床面密着や埋没土中の出土土器に時間的な幅があり確定できないが、称名寺II式期に比定される可能性が高い。

●7区63号住居

位置 X=57726 Y=-75520

方位 不明 面積 不明

写真 P L 52・139 観察表 467頁

重複 北壁側を古墳時代の41号住居により、西壁近くを389号ピットにより切られている。

形状 41号住居との重複や全体の3/4が調査区外に存在するために確定できないが、柱穴や炉の配置状況から円形または楕円形状を呈すると推定される。

規模 長・短径は不明だが、土層セクションA-A'での掘り込み深度は34cmを測る。

床面 Ⅷ～Ⅸ層にかけて30cm前後を掘り込み、床面を構築すると想定される。特に堅緻な面や掘り方は無い。

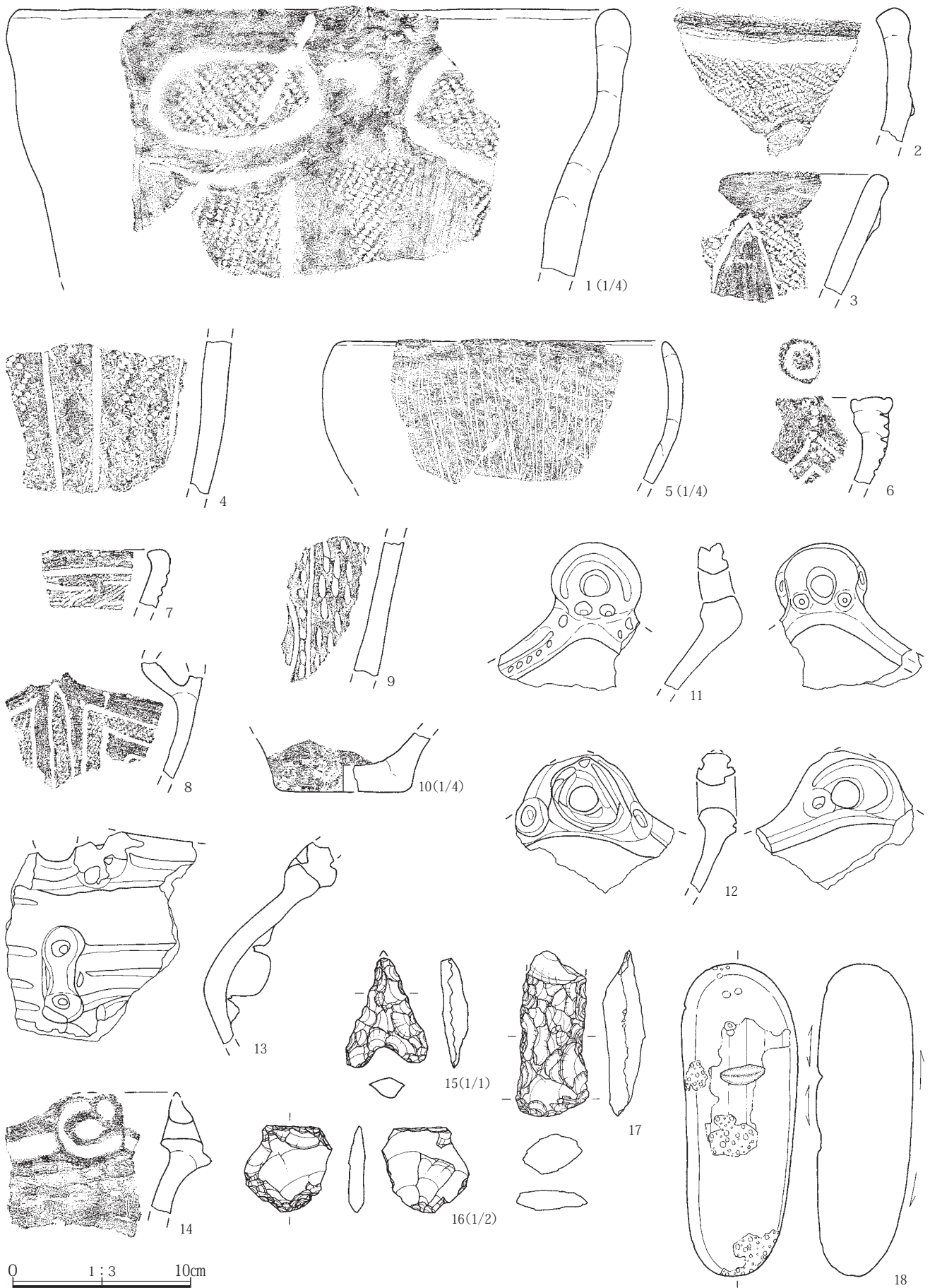
柱穴 周壁の20～30cm内側に、P1・P2の2本を検出した。各柱穴の規模(直径×深さ)はP1:38cm×16cm、P2:33cm×12cm。P1～P2の芯々間の距離は1.5mを測る。

炉 西側の用石が原位置から少々動いているが、長径35～50cm大の河床礫による方形石囲炉と推定され、中央部に胴上半部を欠失した深鉢土器を正位に埋設する。石材・土器ともに若干の被熱風化・赤変が認められるが、焼土形成に乏しい。

埋没土 Ⅷ層に近似した黒褐色土で自然埋没する。

遺物 No.1の炉埋設土器を除いて床面密着遺物は皆無で、埋没土中より加曾利E2・E3式の土器片が若干出土するにとどまる。

所見 当住居の構築時期は、加曾利E2式新段階の炉埋設土器により同式期に比定される。



第164図 7区62号住居出土遺物

● 7区64号住居

位置 X=57761 Y=-75531
 方位 不明 面積 (17.5㎡)
 写真 PL 52・139 観察表 467頁

重複 南側で306号ピットと重複するが新旧関係不明。
 形状 VIII層の精査・掘り下げ段階で、方形石囲炉と10本の柱穴を検出し、竪穴住居と認定した。当住居の埋没土がVIII層と類似していたために、竪穴の明確な掘り込みや壁面の検出はできなかったが、サブトレンチのA・B各ラインで確認した僅かな掘り込みを基本にして、柱穴配置の外側35~50cmの位置に破線でその形状を想定・復元した。状況的には、円形状を呈すると推定される。

規模 推定規模は長径4.9m×短径4.8m、確認深度10cmを測る。

床面 VIII~IX層内にかけて掘り込み、床面を構築すると想定される。全体的な床面の状況は不明。

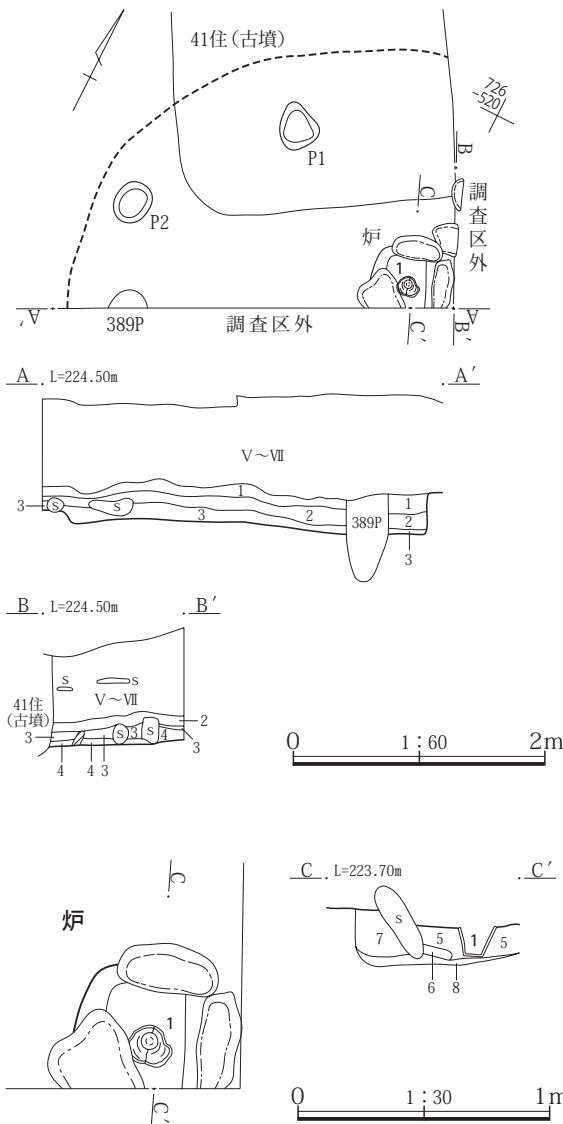
柱穴 P1~P10の10本を検出したが、位置的にはP4・P5・P7を除く8本が支柱穴か。各柱穴の規模(直径×深さ)はP1:37cm×19cm、P2:34cm×25cm、P3:36cm×22cm、P4:40cm×18cm、P5:44cm×22cm、P6:36cm×24cm、P7:31cm×27cm、P8:31cm×26cm、P9:41cm×25cm、P10:37cm×21cmである。各柱穴の芯々間の距離はP1~P2:1.8m、P2~P3:1.8m、P3~P6:2.1m、P6~P8:1.4m、P8~P9:1.7m、P9~P10:1.5m、P10~P1:1.2mを測る。

炉 ほぼ中央部に位置し、長径35~45cmの河床礫4石を配した方形石囲炉で、規模は長辺55cm×短辺49cm、深さ8cmを測る。各石材は被熱の度合いが乏しく、炉内での焼土形成はほとんど認められない。

埋没土 1~3層が埋没土だが、VIII層との識別が困難なことから分層を含めて確定的ではない。

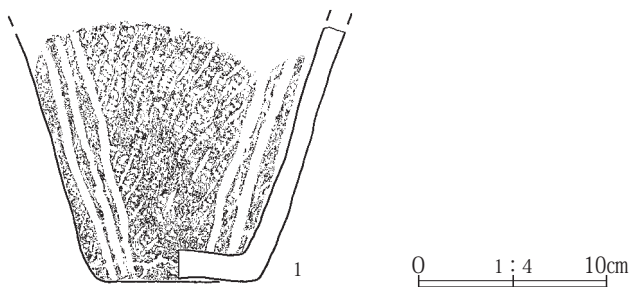
遺物 床面密着や浮遊高4cm以内の出土遺物は、No.2・5・6・9のみで、他は埋没土相当層からの出土である。土器は中期の加曾利E3式の193点を主体とし、また石器では石鏃・楔形・磨石類各1点、削器類7点、削器類3点、打製石斧2点などが出土した。尚、黒曜石製の石鏃・剥片各1点の蛍光X線分析による産地同定を行い、星ヶ台と鷹山との結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、床面密着や埋没土中の出土土器の大半が加曾利E3式新段階であることから、同式期に比定される可能性が高い。

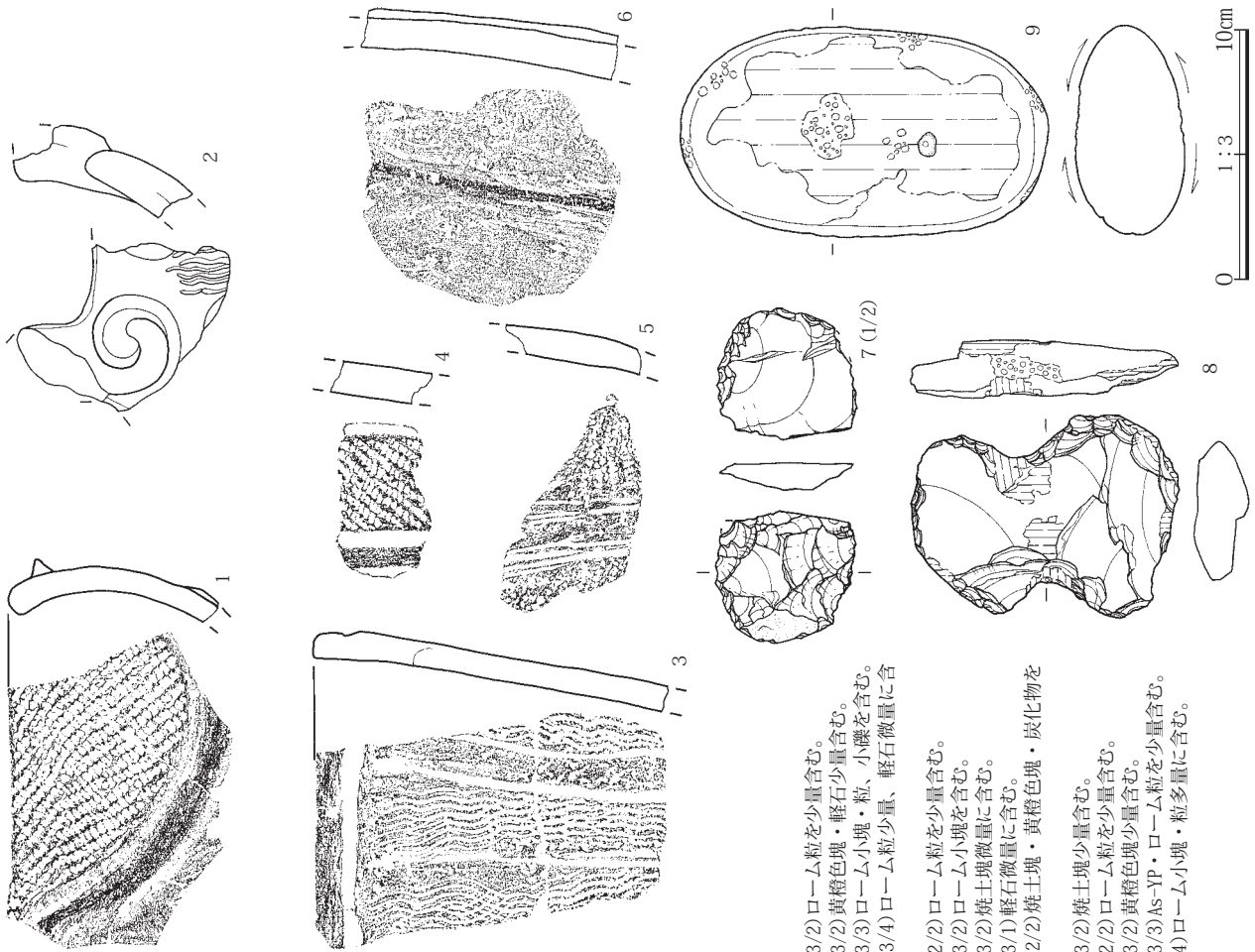


埋没土層

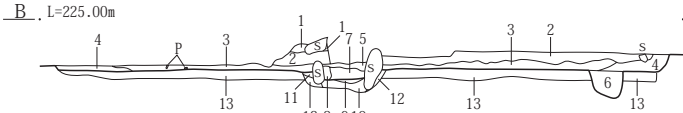
- 1 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒を多量、明赤褐色塊を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1)白色軽石粒・明赤褐色塊を少量含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒・白色軽石粒・明赤褐色塊を少量含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒・明赤褐色塊を少量含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/1)白色軽石粒を少量含む。粘性あり。
- 6 黄灰色土(2.5Y4/1)白色軽石粒・褐色塊を少量含む。
- 7 黒色土(10YR2/1)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。
- 8 黒褐色土(10YR3/1)白色軽石粒・明赤褐色塊を少量含む。



第165図 7区63号住居と出土遺物

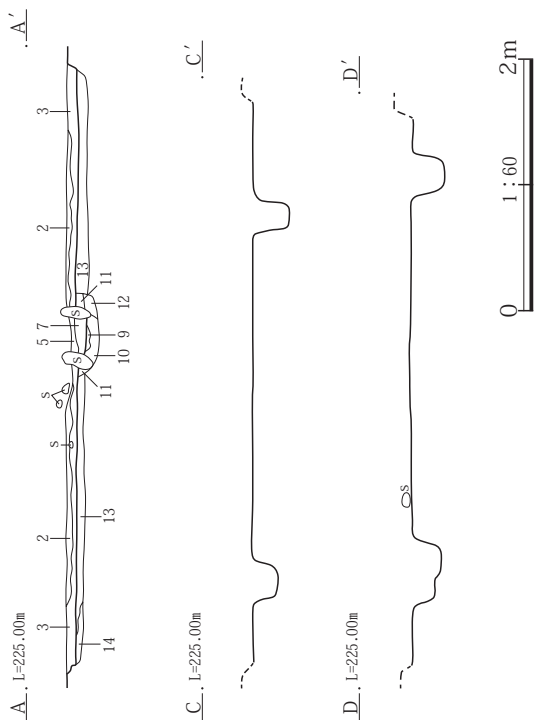
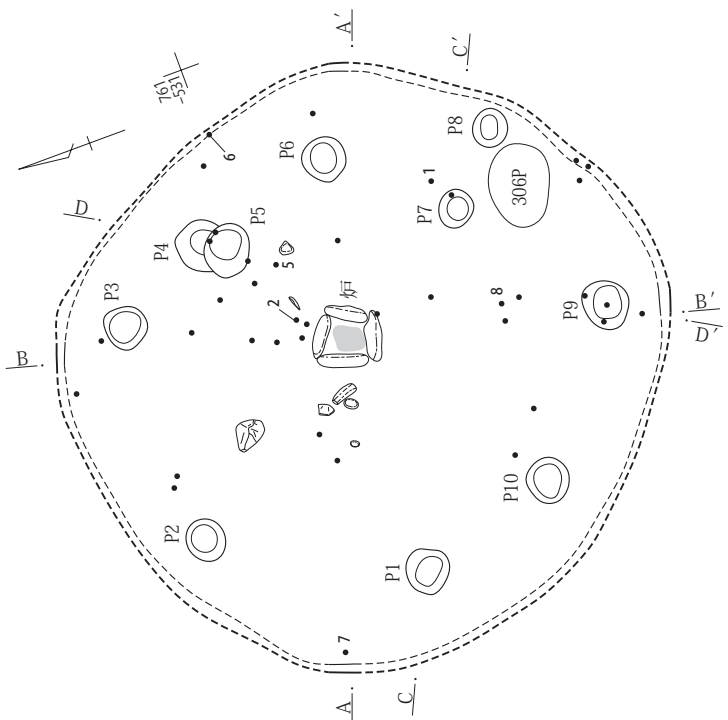


0 1:3 10cm



- 埋没土層
- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
 - 2 黒褐色土(10YR3/2)黄橙色塊・軽石少量含む。
 - 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム小塊・粒・小礫を含む。
 - 4 暗褐色土(10YR3/4)ローム粒少量、軽石微量に含む。
 - 5 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒を少量含む。
 - 6 黒褐色土(10YR3/2)ローム小塊を含む。
 - 7 黒褐色土(10YR3/2)焼土塊微量を含む。
 - 8 黒褐色土(10YR3/1)軽石微量を含む。
 - 9 黒褐色土(10YR2/2)焼土塊・黄橙色塊・炭化物を微量を含む。
 - 10 黒褐色土(10YR3/2)焼土塊少量含む。
 - 11 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒を少量含む。
 - 12 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色塊少量含む。
 - 13 暗褐色土(10YR3/3)AS-YP・ローム粒を少量含む。
 - 14 褐色土(10YR4/4)ローム小塊・粒多量を含む。

第166図 7区64号住居と出土遺物



●7区67号住居

位置 X=57785 Y=-75515

方位 N50度W 面積 不明

写真 P L 53

重複 西壁中央部を弥生時代の730号土坑により、南西隅から南半部を縄文時代後期の58号住居により、各々切られている。また、南西隅で重複する667・992号土坑との新旧関係は不明である。

形状 上記各遺構の重複や、Ⅶ・Ⅷ層の堆積が5～10cmと極めて薄いこともあり、当該層内での検出ができなかった。結果的に、Ⅸ層の精査・掘り下げ段階で方形に走向する周溝と4本の柱穴を検出し、竪穴住居と認定した。約1/2が調査区外に存在するため形状については確定できないが、周溝の走向状況を加味すれば、斜面の等高線に直行して東西方向に長軸を持つ長方形状と推定される。

規模 推定規模は長辺約4mで、調査区外との境界断面で確認した深度は15cmを測るが、下記の埋没土での記載の通り確定的ではない。

床面 Ⅷ～Ⅸ層下面にかけて掘り込み、床面を構築す

ると想定される。全体的な床面の状況は不明。

柱穴 床面上に位置するP1～P4の4本と、南側周溝内のP5の1本を検出したが、位置的に主柱穴はP1のみで、他は補助柱穴か出入口部に関連した柱穴と想定される。各柱穴の規模(直径×深さ)はP1：37cm×40cm、P2：24cm×21cm、P3：36cm×32cm、P4：34cm×20cm、P5：40cm×24cmである。

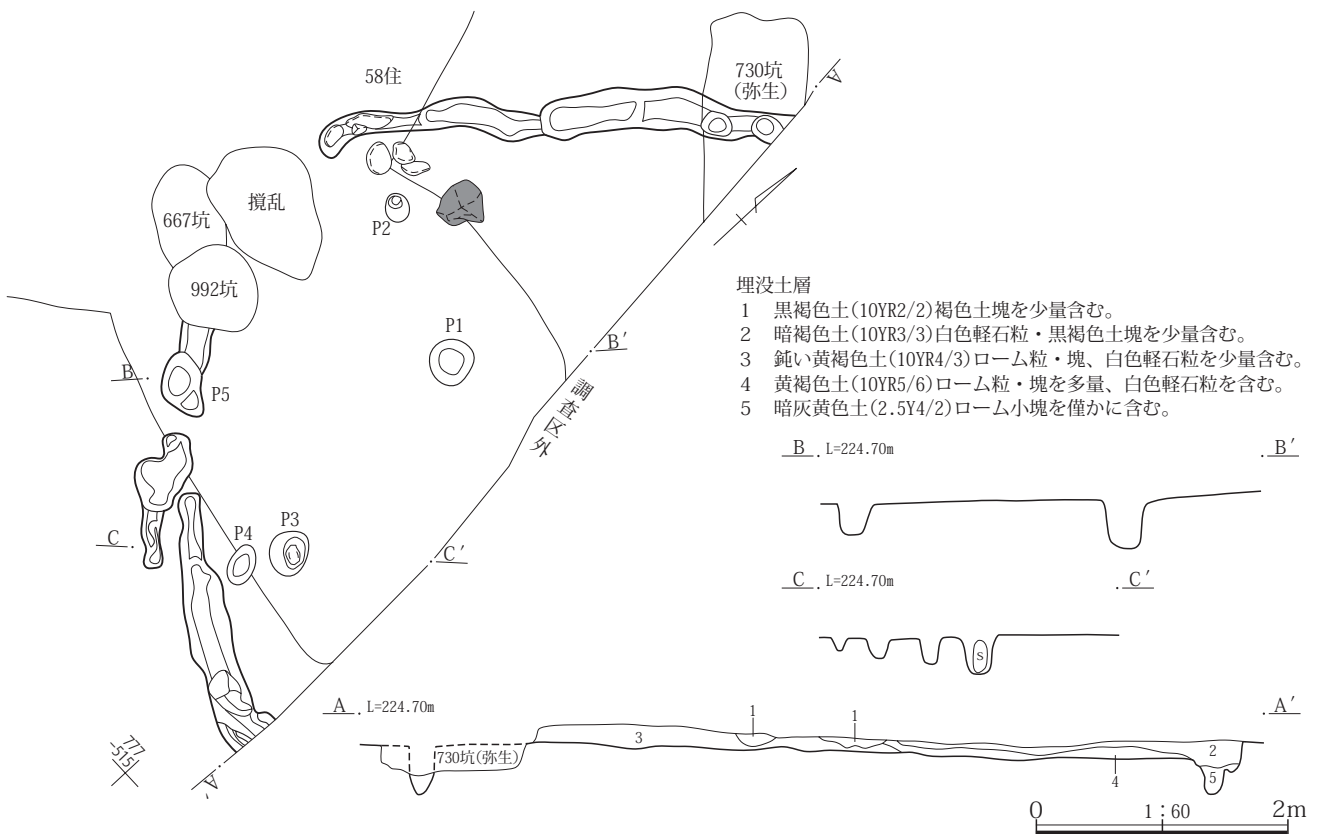
炉 未検出であるが、調査区外に存在する可能性が高い。

周溝 上幅12～37cm、深さ11～27cmの規模で全周する。

埋没土 調査区外との境界断面土層では、Ⅷ・Ⅸ層に近似した1～4層の暗褐色土や黄褐色土が埋没土層を形成しているが、状況的にはⅧ・Ⅸ層との識別が困難なため、床面認定や分層を含めて確定的ではない。

遺物 床面密着や埋没土相当層内の出土遺物を含めて、皆無である。

所見 当住居の時期については、出土遺物が皆無のために確定することができないが、当遺跡内で外形が方形を呈する住居はいずれも前期に帰属することから、同期に比定される可能性が高い。



●7区71号住居

概要 支柱穴の配列と周溝の圍繞状況から、少なくとも2回の建て替え・拡張が想定される。構築当初段階を1期、拡張段階を2・3期として、順次その内容を記載するが、最大規模となる3期の拡張により、周壁を含む外形の一部が消失している1・2期住居の規模については、残存する周溝の外側20cmに壁面の立ち上りを想定し、各期の平・断面図に破線で表示すると共に、第11表にその推定値を記載した。尚、各期住居の位置・方位および写真・観察表の項目内容に関しては、各期ともほぼ同一であるため1期にて詳述し、2期以降では省略する。

【1期】

位置 X=57755 Y=-75525

方位 N50度W **面積** (21.5㎡)

写真 P L 53・54・139~141 **観察表** 467頁

重複 南壁側で686・708号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

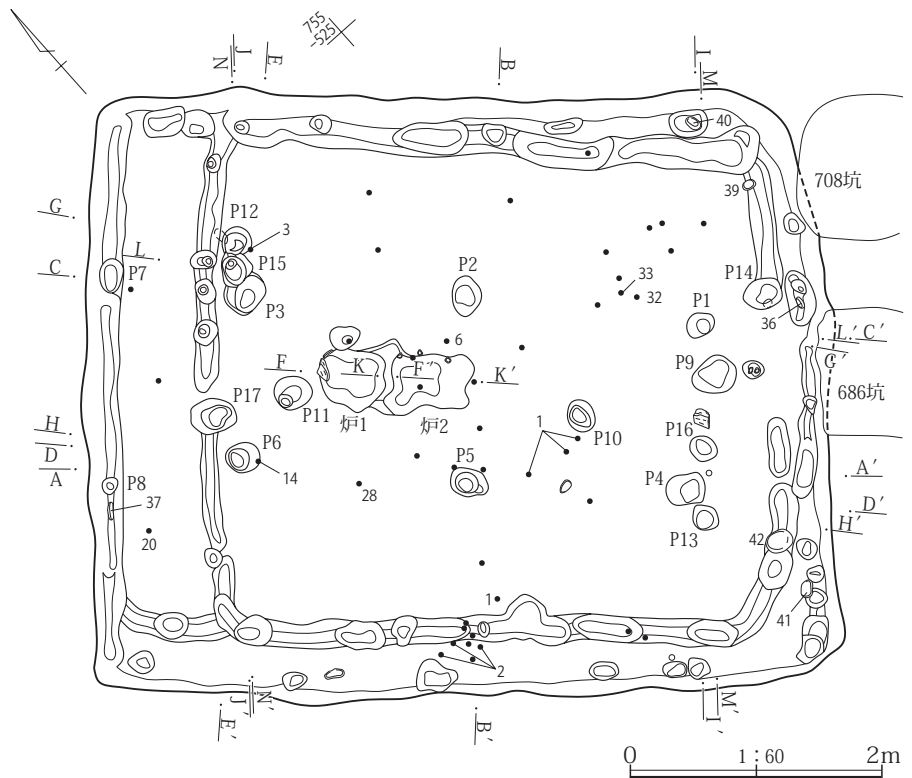
形状 斜面地の等高線にほぼ直行して、南北方向に長軸を持つ正方形に近似した長方形を呈する。四辺はほぼ直線的に掘り込まれると推定される。

規模 長辺5.0m×短辺4.4m、深度53cmと推定される。

床面 2・3期住居との完全重複により平易され、床面状況は不明である。

柱穴 3本×2列の6本支柱穴であり、P1・P2・P15とP5・P6・P16が住居の長軸方向に並行して配置されている。各柱穴の規模は左記一覧表に記載したが、それらの芯々間の距離はP1~P2:1.95m、P2~P15:1.85m、P16~P5:1.95m、P5~P6:1.85m、P1~P16:1.0m、P15~P6:1.55mを測る。北壁際のP17や南壁際のP14は、補助的または出入口部に関連した柱穴と思われる。

炉 2期と同様に2号炉を使用した可能性もあるが、確定できないことからここでは床面状況と同様に不明扱いとする。



第168図 7区71号住居

周溝 出入口部と想定される南壁中央部で途切れるが、直径12~37cm、深さ10~26cmの各壁柱穴を連結して、上幅9~26cm、深さ3~20cmの規模でほぼ全周する。

所見 当住居の構築時期は、重複により伴出遺物の特定が困難なために確定できないが、最古期段階に構築されることから、状況的には第171図3のような土器を伴う関山Ⅱ式期古段階に比定される可能性が高い。

【2期】

面積 (24.7㎡)

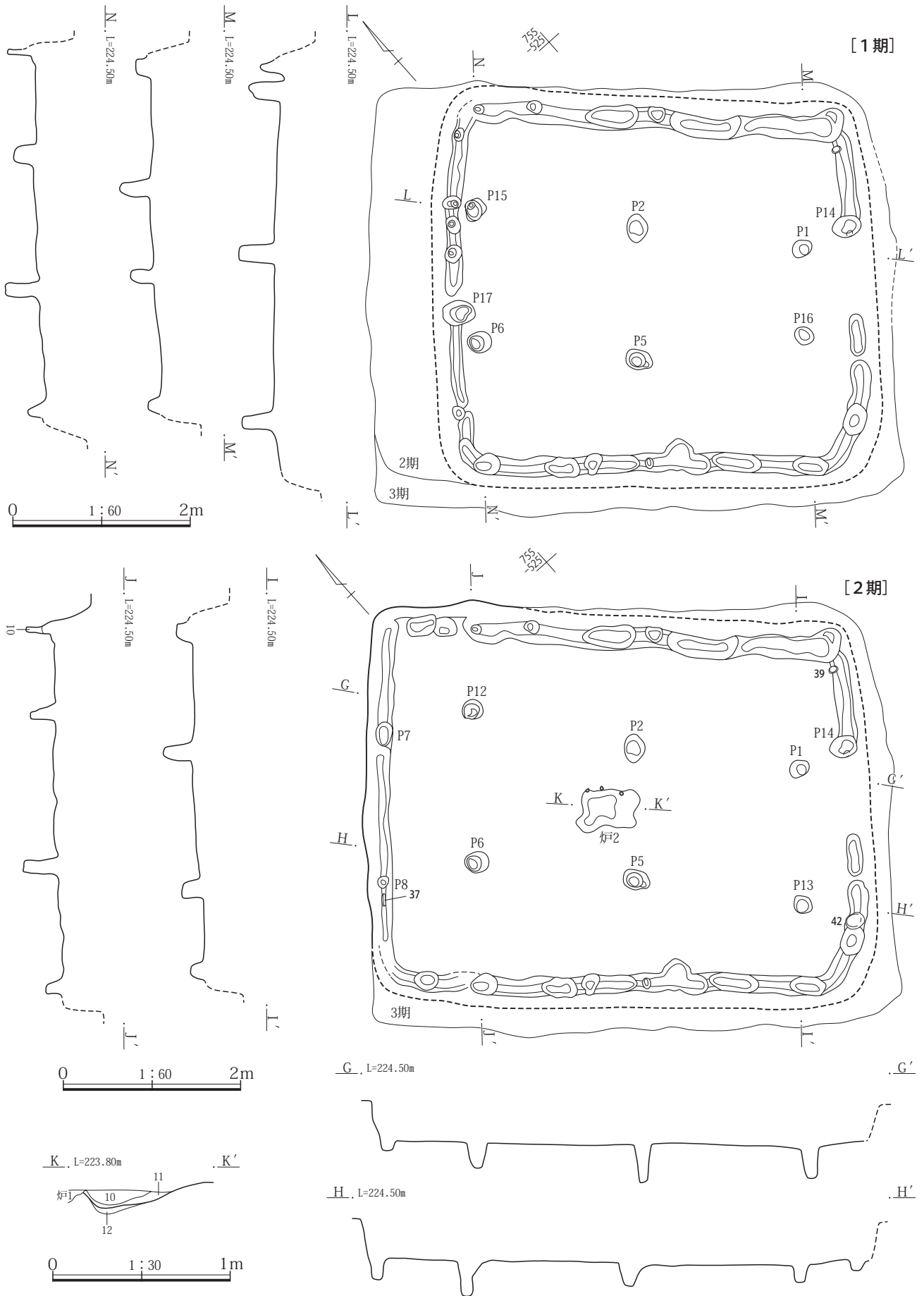
形状 1期の南・東・西壁の3辺を共用しつつ、北側に80cm拡張した長方形状を呈する。1期と同様に、四辺は直線的に掘り込まれると推定される。

規模 長辺5.8m、短辺3.59mと4.5m、最大掘り込み深度50cm前後と推定される。

床面 1期と同様に、3期住居との完全重複により平易され、床面状況は不明である。

柱穴一覧(単位:cm)

No.	直径	深さ	備考
1	23	34	1~3期
2	32	39	1~3期
3	30	31	3期
4	33	56	3期
5	30	26	1~3期
6	27	37	1~3期
7	27	30	3期
8	14	41	3期
9	35	26	3期
10	27	26	3期
11	30	32	3期
12	(24)	26	2期
13	23	26	2期
14	23	26	1・2期
15	24	25	1期
16	22	25	1期
17	36	33	1期



第169図 7区71号住居(1・2期)

柱 穴 3本×2列の6本主柱穴が長軸方向に並行して配置されるが、P1・P2・P5・P6の4本は1期柱穴を共用すると考えられる。各主柱穴の芯々間の距離はP1～P2：1.95m、P2～P12：1.85m、P13～P15：1.95m、P5～P6：1.85m、P1～P13：1.55m、P12～P6：1.75mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。尚、北壁周溝内にP7・P8が存在するが、これらは補助的主柱穴あるいは壁柱穴と推定される。

炉 床面のほぼ中央部に存在するが、北側を1号炉に切られている。長径63cm×短径39cm×深さ12cmの長方形掘込炉であるが、1号炉のように北壁際に棒状礫を1石配置していた可能性もある。長軸は住居外形と同様に南北方向である。底・壁面や周辺部は、被熱による焼土形成や赤色変化に乏しい。

周 溝 1期と同様に、出入口部と想定される南壁中央部で途切れる。直径12～37cm、深さ8～25cmの各壁柱穴を連結して上幅9～26cm、深さ3～27cmの規模でほぼ全周する。尚、北壁周溝内に直径14～27cm、深さ30～41cmのP7・P8の壁柱穴2本が存在するが、これらは補助的な主柱穴の可能性もある

遺 物 3期住居との重複により、床面密着等の伴出遺物は僅少であり、北壁際や南壁際の周溝埋没土中から出土したNo.37・39の磨石類2点とNo.42の台石1点のみにとどまる。

所 見 1期と同様に、明確な伴出土器が皆無のために住居の構築時期については確定できない。ただし、1・3期との関係を考慮すれば、関山Ⅱ式期中段階に比定される可能性が高い。

【3 期】

面 積 27.51㎡

形 状 2期の北壁と東壁一部を共用するが、西壁側を30cm、南壁側を10cm、東壁南半部を20cmほど拡張している。四辺ともに直線的に掘り込まれ、整然とした長方形状を呈する。壁面は垂直に近似した、約85度の角度で掘り込まれている。

規 模 長辺5.87m×短辺4.82m、掘り込み深度36～51cmを測る。各期の中では最大規模となるが、2期に比べて約3㎡の拡張にとどまる。

床 面 Ⅷ～Ⅹ層にかけて、最大51cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸が認められるが、全体的な傾斜は

少なく、炉の周辺部を中心に叩き床に近い堅緻な面が形成されている。

柱 穴 3本×2列の6本主柱穴が長軸方向に並行して配置されるが、P1・P2・P5・P6の4本は、1・2期の柱穴を共用すると考えられる。各柱穴の芯々間の距離は、P1～P2：1.95m、P2～P3：1.75m、P4～P5：1.8m、P5～P6：1.85m、P1～P4・P3～P6：1.35mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。尚、北壁周溝内に存在するP7・P8は2期段階の柱穴であり、当住居との共用の有無は不明である。

炉 床面中央部から約1m北壁(奥壁)側に偏在する。奥壁側の一辺に長径30cm×短径20cmの板状垂角礫1石を配した、長方形または楕円形状の掘込炉である。その規模は、長径55cm×短径43cm×深さ12cmを測る。炉石および底・壁面には、被熱による割れや焼土形成がほとんど認められず、2期段階の2号炉を含め、屋内で火を焚く行為がかなり低調であったことを示唆している。

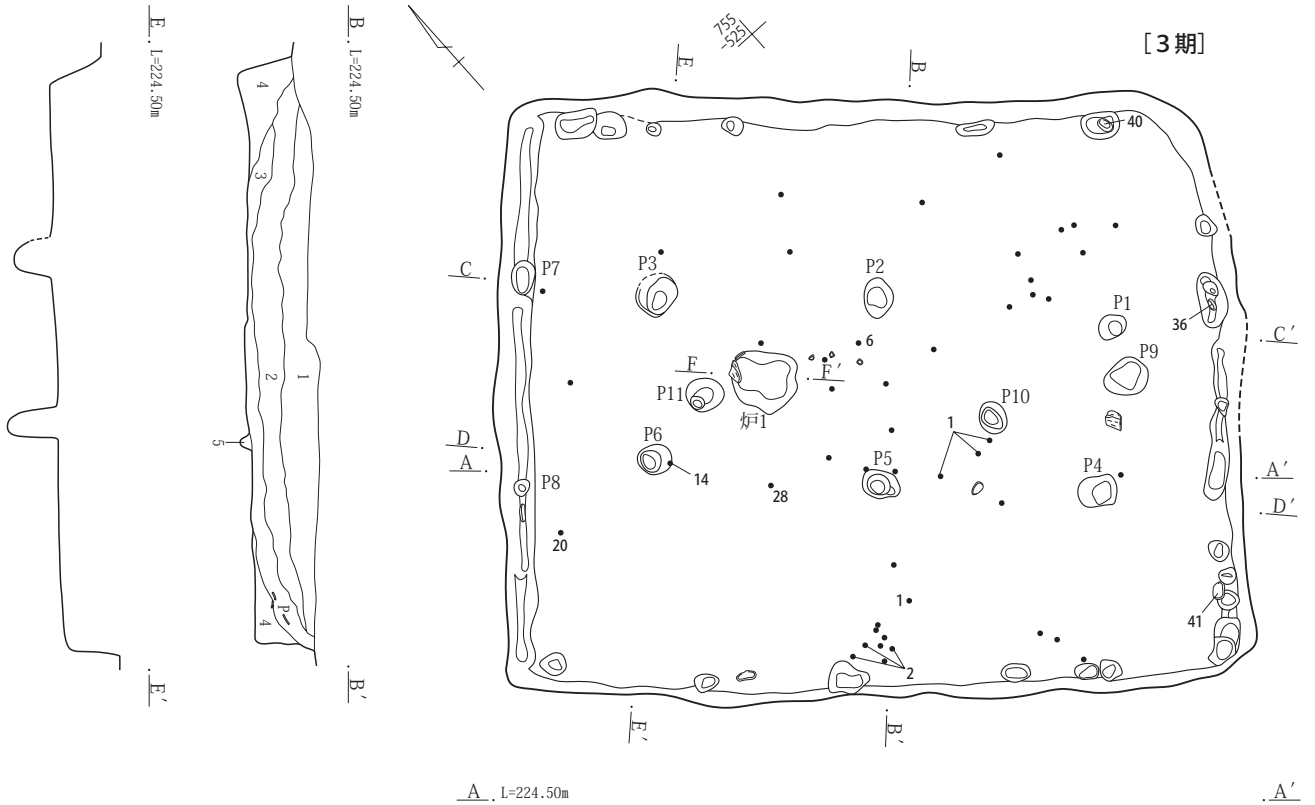
周 溝 1・2期では壁際をほぼ全周していたが、当期では東・西・南壁際を観察した限りでは、基本的に設置されなかったと考えられる。尚、北壁際の周溝は2期に帰属するものである。

埋没土 Ⅷ層に近似した暗褐色土や褐色土が、上層から下層にかけてレンズ状に堆積しており、自然埋没状態を示している。

遺 物 床面密着および浮遊高3cm以内の遺物は、第175図のNo.36・39・40の磨石類のみで、他は全て1・2層を中心とした埋没土中からの出土である。土器は関山Ⅱ式の482点を主体としており、また石器では打製石斧2点、磨石類7点、台石1点と剥片48点が存在する程度である。尚、この剥片の中で黒曜石製の調整剥片8点について、蛍光X線分析による産地同定を行ったが、鷹山3点、星ヶ台2点、鷹山または小深沢3点という結果を得ている。その詳細については「第4章 自然科学分析」を参照されたい。

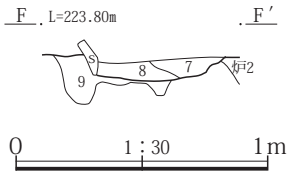
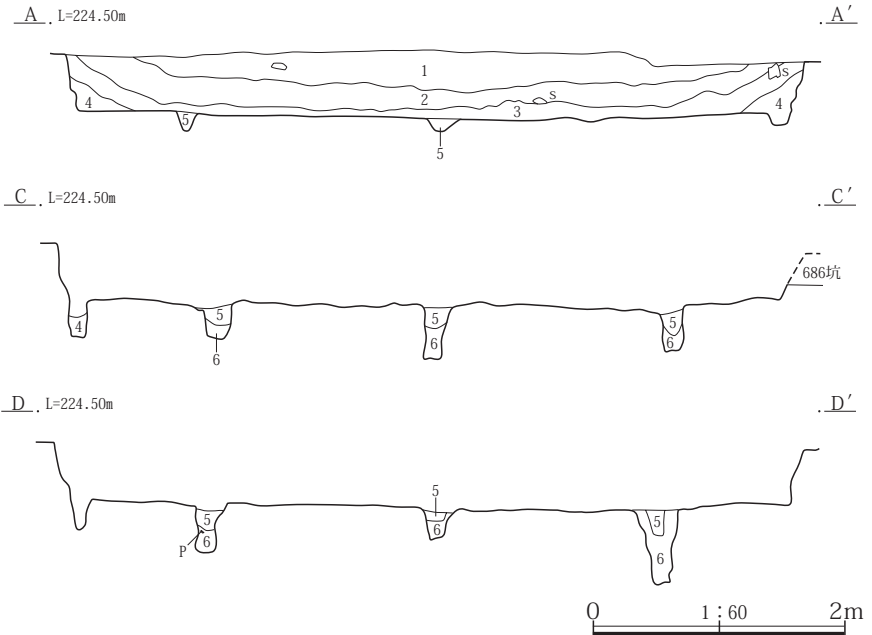
所 見 当住居の構築・廃絶時期については、上記の通り床面密着の土器が存在しないことから確定できないが、1・2期よりも新しい段階の構築である点を重視すれば、第171図No.11・14～16のようにコンパス文が弛緩・粗大化した段階の土器を伴う、関山Ⅱ式でも新しい段階の時期に比定される可能性が高い。

[3期]

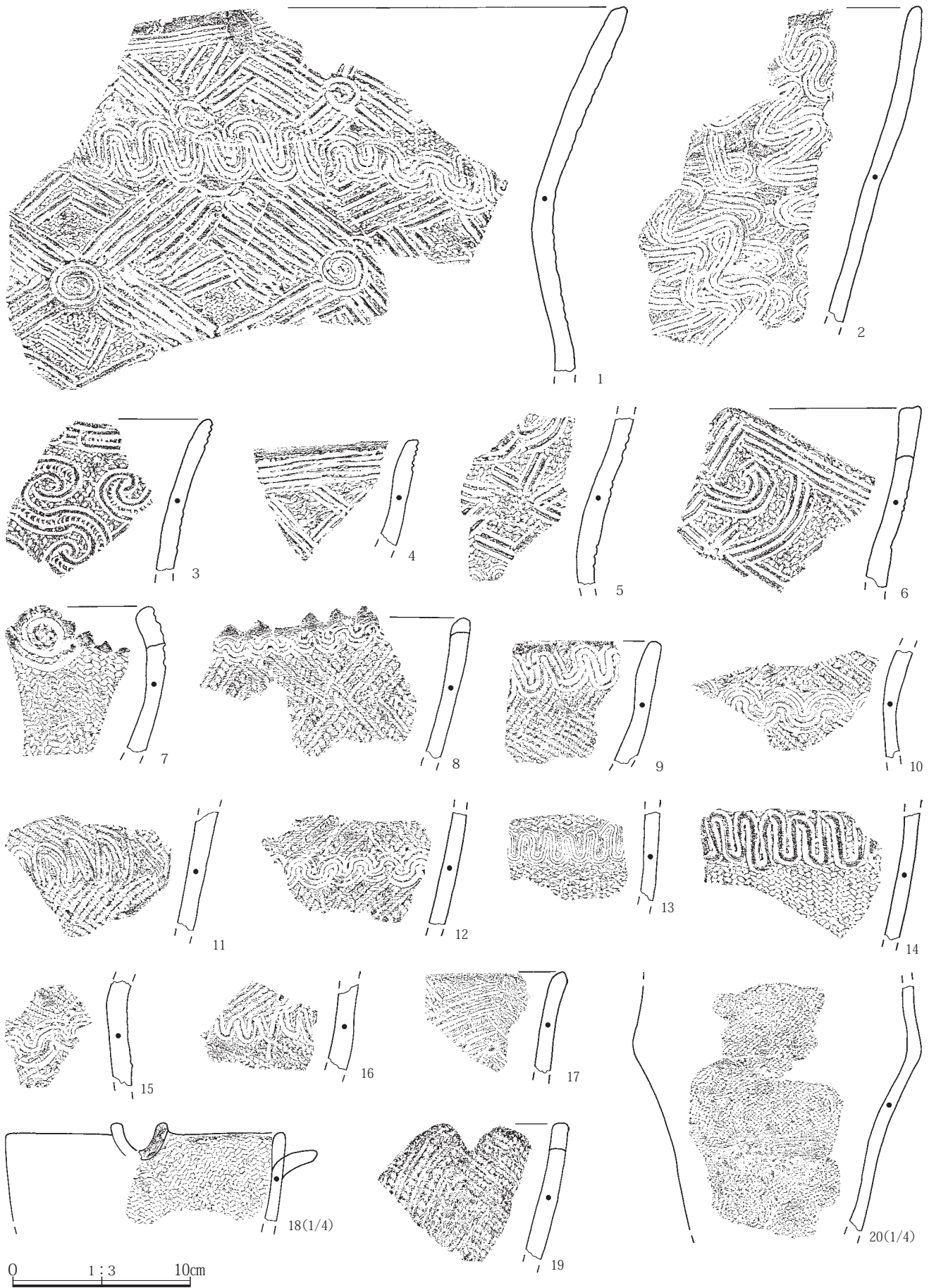


埋没土層

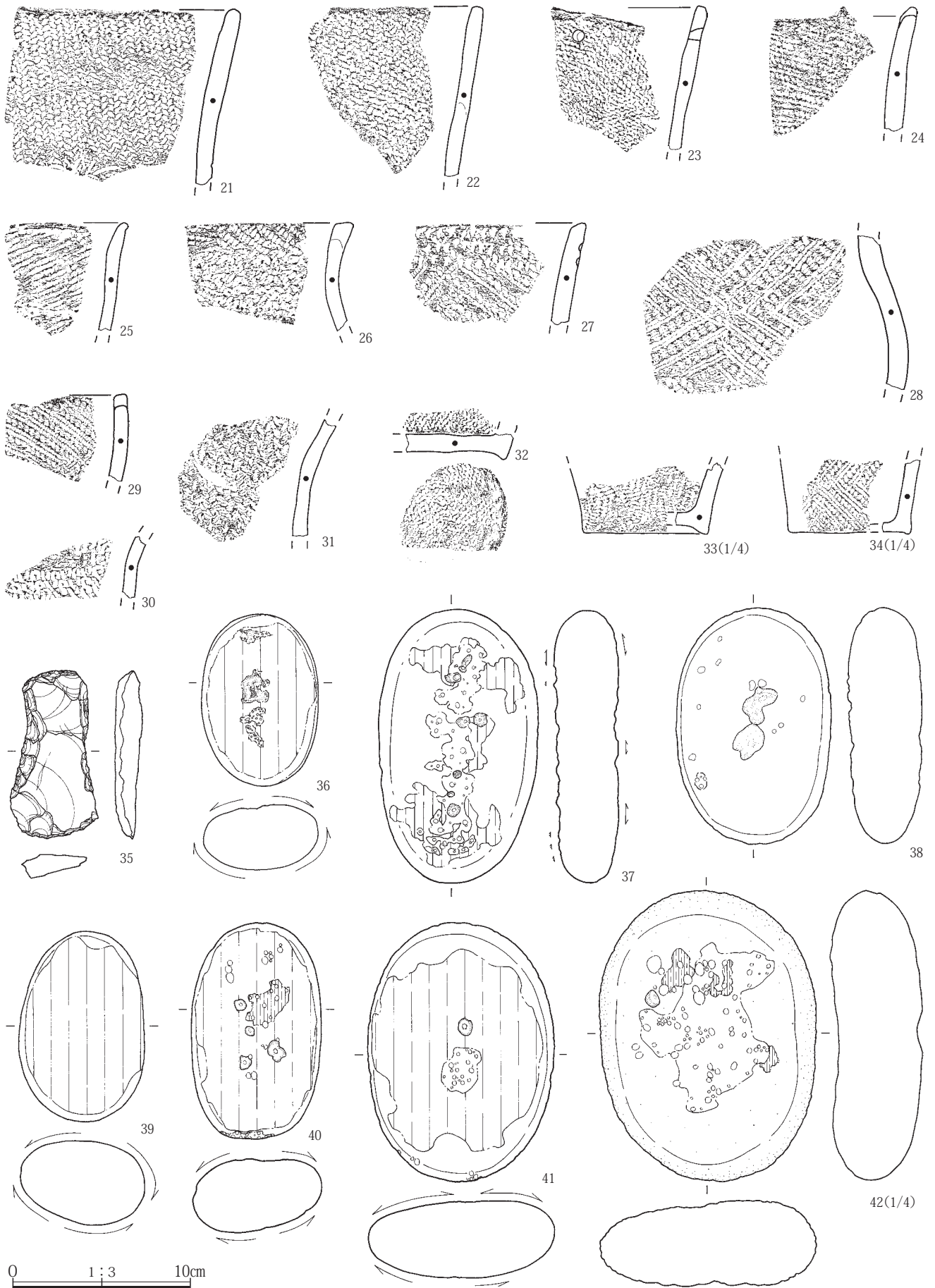
- 1 黒褐色土(10YR3/2)径1~5mm黄橙色軽石粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム小塊少量、炭化物粒微量、軽石粒を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径1~5cmローム塊少量、褐色土・炭化物・焼土塊少量含む。
- 4 褐色土(10YR4/4)ローム塊少量、ローム粒多量に含む。
- 5 鈍い黄褐色土(10YR4/3)灰白色軽石粒を少量含む。
- 6 褐色土(10YR4/6)ローム小塊・炭化物を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・炭化物・焼土塊を少量含む。
- 8 鈍い赤褐色土(5YR5/3)焼土塊を微量に含む。
- 9 褐色土(7.5YR4/3)ローム粒・炭化物小片・焼土塊を含む。
- 10 黒褐色土(7.5YR3/1)ローム小塊・粒少量含む。
- 11 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊少量、ローム粒多量に含む。
- 12 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・小礫を含む。



第170図 7区71号住居(3期)



第171図 7区71号住居出土遺物(1)



第172図 7区71号住居出土遺物(2)

●7区80号住居

位置 X=57794 Y=-75528

方位 N22度W 面積 19.82㎡

写真 PL54・55・141・142 観察表 468頁

重複 当住居の上位全面に古墳時代の2号方形周溝遺構が重複する。また南壁側で有尾式期の922号土坑に、東壁際に称名寺I式期の933号土坑により切られる。

形状 斜面地の等高線にほぼ直行して、南北方向に長軸を持つ正方形に近似した長方形を呈する。四辺は若干湾曲気味に掘り込まれ、壁面は約80度で立ち上がる。

規模 長辺4.7m×短辺4.33m、深度21~40cmを測るが、上面を2号方形周溝遺構の関連調査により削平されているため、本来の掘削深度は+20cm程度深くなると想定される。

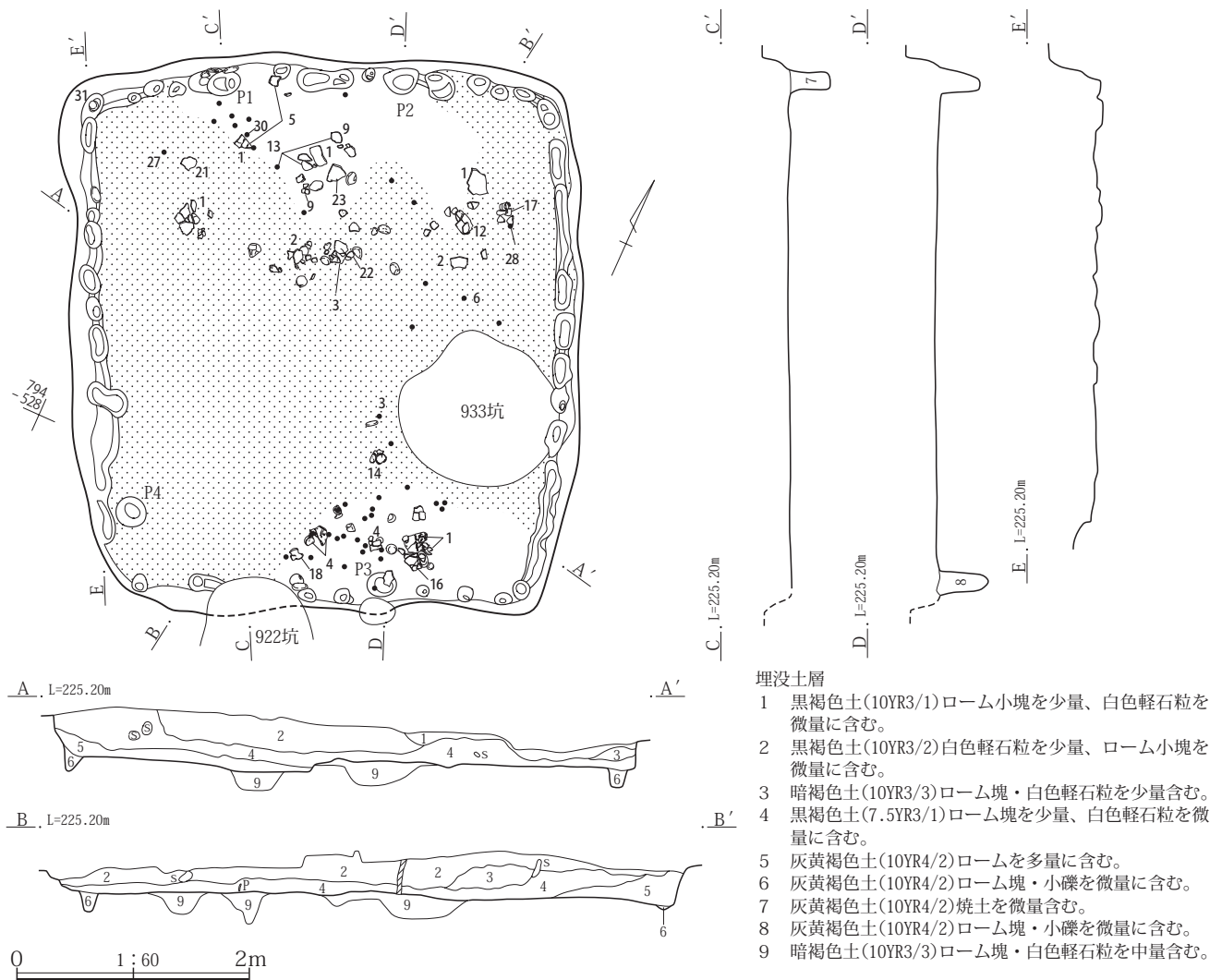
床面 VII~X層にかけて掘り込まれる。若干の凹凸を

持ち、ほぼ全面に叩き床状の堅緻面が認められる。尚、掘り方は存在しなかった。

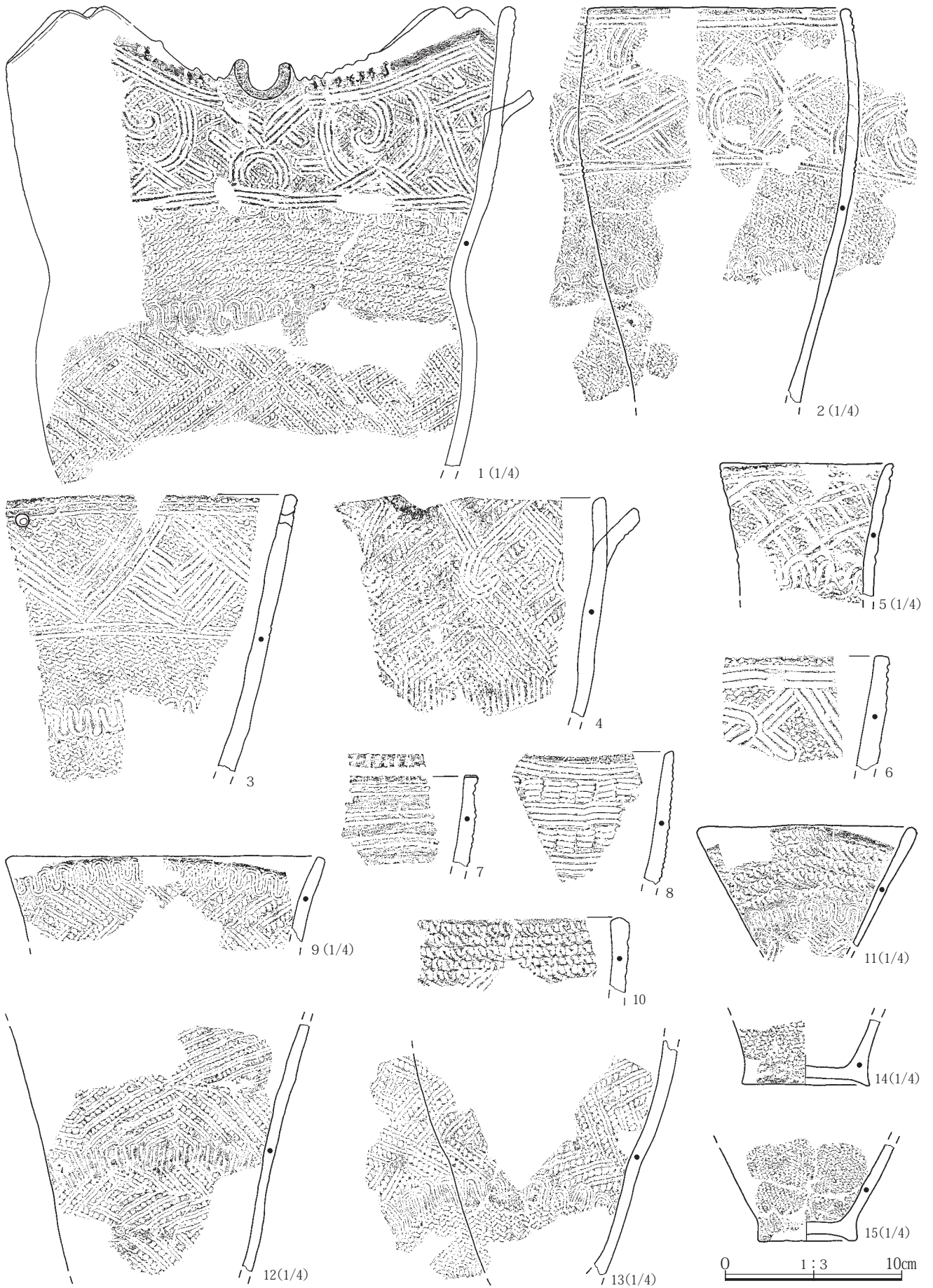
柱穴 P1~P4の4本が検出されたが、基本的にはP1~P3のように対向する周壁際に各2本を配置する2本×2列の4本主柱穴構造と推定される。P1と対向する南壁際の柱穴は、922号土坑により削平された可能性が高い。各柱穴の規模(直径×深さ)はP1:29cm×34cm、P2:30cm×34cm、P3:25cm×43cm、P4:27cm×10cmである。それら柱穴の芯々間の距離はP1~P2:1.5m、P2~P3:4.3mを測る。南西隅のP4は、深度的に壁柱穴と思われる。尚、各柱穴内からは柱痕は検出されなかった。

炉 精査にもかかわらず検出できなかった。恐らく、炉石配置や低頻度使用による焼土形成などの被熱痕跡が、認められなかったことに起因すると想定される。

周溝 南壁側を除き、周壁際の直径12~26cm、深さ4



第173図 7区80号住居



第174図 7区80号住居出土遺物(1)



第175図 7区80号住居出土遺物(2)

～21cmの各壁柱穴を連結して、上幅7～25cm、深さ4～18cmの規模で周回する。

埋没土 Ⅷ層に近似した黒褐色土や暗褐色土が、ほぼレンズ状に堆積しており、自然埋没状態を示している。

遺物 床面密着および浮遊高4cm以内の出土遺物は、No.1・4・5・9・22・24であり、他は没土中から出土した。土器では中・後期が若干混在するが、関山Ⅱ式中～新段階が331点と主体を占めている。また石器では、石鏃6点、石匙4点、削器類3点、楔形1点、磨石類7点と黒曜石を主体とした剥片48点が出土している。尚、黒曜石製の石鏃6点と剥片10点について、蛍光X線分析による産地同定を行い、鷹山5点、星ヶ台1点、鷹山または小深沢10点という結果を得ている。その詳細については、「第4章 自然科学分析」を参照されたい。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、出土土器が関山Ⅱ式中～新段階を主体としており、同式期に比定される。

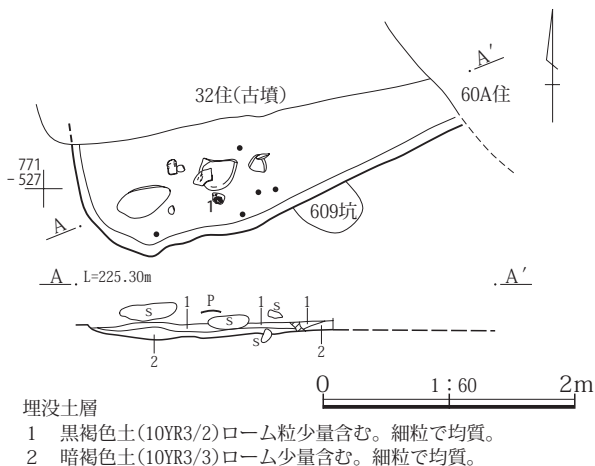
●7区82号住居

位置 X=57771 Y=-75527

方位 不明 **面積** 不明

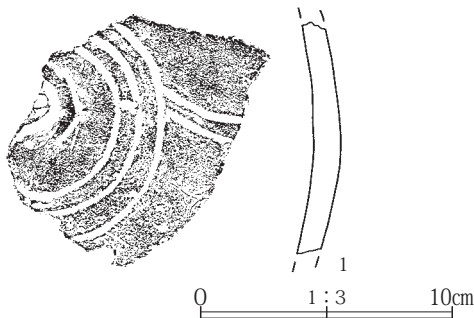
写真 P L 55・56・143 **観察表** 469頁

重複 当住居の北側の大半を古墳時代の32号住居に切



埋没土層

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒少量含む。細粒で均質。
2 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒少量含む。細粒で均質。



第176図 7区82号住居と出土遺物

られ、東側に関山Ⅱ式期の60A号住居が重複する。

形状 他住居との重複により、住居の一部を検出したのみであるが、掘り込み深度が浅いために第176図の外形についても確実ではない。出土土器が称名寺Ⅱ式であることから、柄鏡形敷石住居の可能性もある。

規模 規模は不明だが、残存する部位での掘削深度は5～11cmを測る。

床面 Ⅶ～Ⅷ層上面にかけて掘り込まれる。明瞭な縦織面はなく、Aセクションの床面位置も確定的ではない。

埋没土 Ⅶ層に近似した暗褐色土の薄層が堆積する。

遺物 床面より8cm浮遊してNo.1の土器片が出土したのみである。他に扁平な長径40～50cmの河床礫2点が出土したが、敷石住居の用材の可能性もある。

その他 柱穴と周溝については検出できなかったが、それら内部の埋没土がⅧ層と類似するために、検出困難であったことも考慮される。

所見 敷石の用材と推定される河床礫から住居認定をしたが、確定的ではない。住居とすれば、その時期はNo.1の土器から称名寺Ⅱ同式期と推定される。

●8区69号住居

位置 X=57815 Y=-75500

方位 N 2度 E **面積** 不明

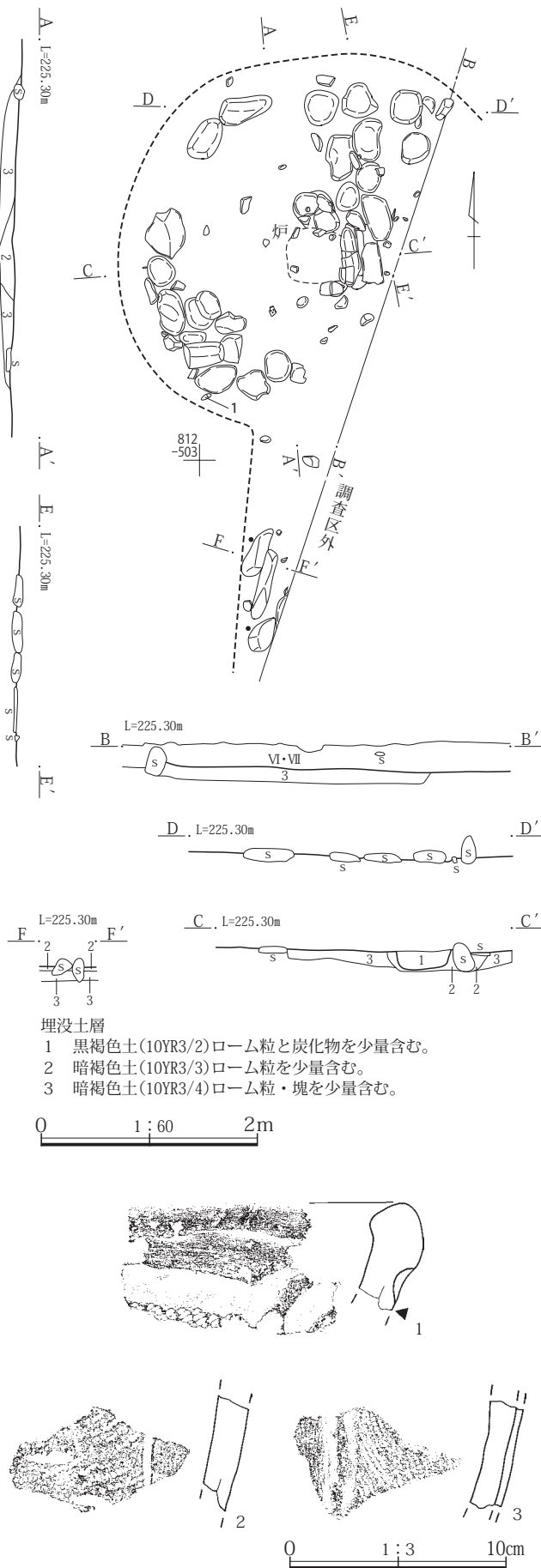
写真 P L 56・143 **観察表** 470頁

重複 無し。

形状 7区62号住居と同様に、住居内埋没土とⅦ層との類似により同層上面での確認が難しく、結果的にⅦ層下面～Ⅷ層の精査・掘り下げ段階で敷石や方形石囲炉を検出した。従って、明瞭な周壁面の検出はできなかったが、主体部敷石や張出部石材の配置状況から、第177図のように破線により柄鏡形の形状を想定・復元した。

規模 推定規模は主体部が長径3.6m、張出部が長軸2.1m強を測る。

床面 Ⅶ層上面または同層内～Ⅷ層内にかけて掘り込み、主体部を中心に長径30～50cm大の扁平な河床礫を相互に密接して敷設する。西半部や張出部側の敷石は希薄だが、方形石囲炉の西半部の石材が欠失しており、こうした点を加味すれば構築当初は全面敷石であった可能性が高い。張出部では長径50～65cmの棒状河床礫を横位に並べており、外壁面に沿って敷設したものと理解される。



第177図 8区69号住居と出土遺物

尚、敷石下には10cm前後の掘り方が認められる。

柱穴 精査にもかかわらず検出できなかったが、恐らく柱穴自体の掘削深度が浅く、かつその埋没土がⅧ層と類似する等の要因により、検出が困難であったためと考えられる。

炉 主体部のほぼ中央部に位置する。東側に配置した長径55cmの棒状河床礫1石を残すのみで、他は欠失しているが、周辺の敷石状況から一辺が60cm前後、深度8cmの方形石囲炉と判断される。炉石材は被熱により節理面に沿ってブロック状に著しくひび割れるが、掘り方底面や壁面は黒褐色土であることに起因して、焼土形成や赤変は認められなかった。

埋没土 第177図のBセクションでは、敷石上にⅥ・Ⅶ層相当が堆積すると表記したが、これは実際の住居内埋没土との識別が困難なための措置であり、確定的ではない。

遺物 床面密着の出土遺物はNo.1のみで、他は埋没土相当層からの出土である。土器は中期の加曾利E3式47点を中心とし、また石器では削器類4点が出土した。尚、黒曜石製剥片1点の蛍光X線分析による産地同定を行い、星ヶ台との結果を得ている。

所見 当住居の構築・廃絶時期は、床面密着や埋没土相当層中の出土土器が加曾利E3式新々段階を主体としていることから、同式期に比定される。

● 8区73号住居

位置 X=57830 Y=-75509

方位 不明 **面積** (8.8㎡)

写真 P L 57・143 **観察表** 470頁

重複 北壁側で倒木痕が当住居を切っている。

形状 Ⅷ～Ⅸ層の精査・掘り下げ段階で、土器埋設炉と2本の柱穴を検出し、竪穴住居と認定した。当住居の埋没土がⅧ・Ⅸ層と類似していたために、竪穴の明確な掘り込みや壁面の検出はできなかったが、当遺跡における加曾利E3式期の住居はいずれも円形状を基本としていることから、柱穴配置の外側30cm前後の位置に破線で同形状を想定・復元した。

規模 推定規模は直径3.3mであり、掘削深度は不明である。

床面 Ⅷ～Ⅸ層内にかけて掘り込み、床面を構築する

と想定される。全体的な床面の状況は不明。北側の倒木痕と重複する部分では、Ⅹ層以下のローム層中に挟在する長径30～50cm大の亜角礫が、床面相当部位に礫面を覗かせている。

柱 穴 P1・P2の2本を検出したが、他については検出できなかった。この点については、掘り込み深度が浅く、その埋没土がⅧ・Ⅸ層に類似することに起因して検出できなかった可能性が高い。各柱穴の規模(直径×深さ)はP1：30cm×17cm、P2：36cm×32cmであり、その芯々間の

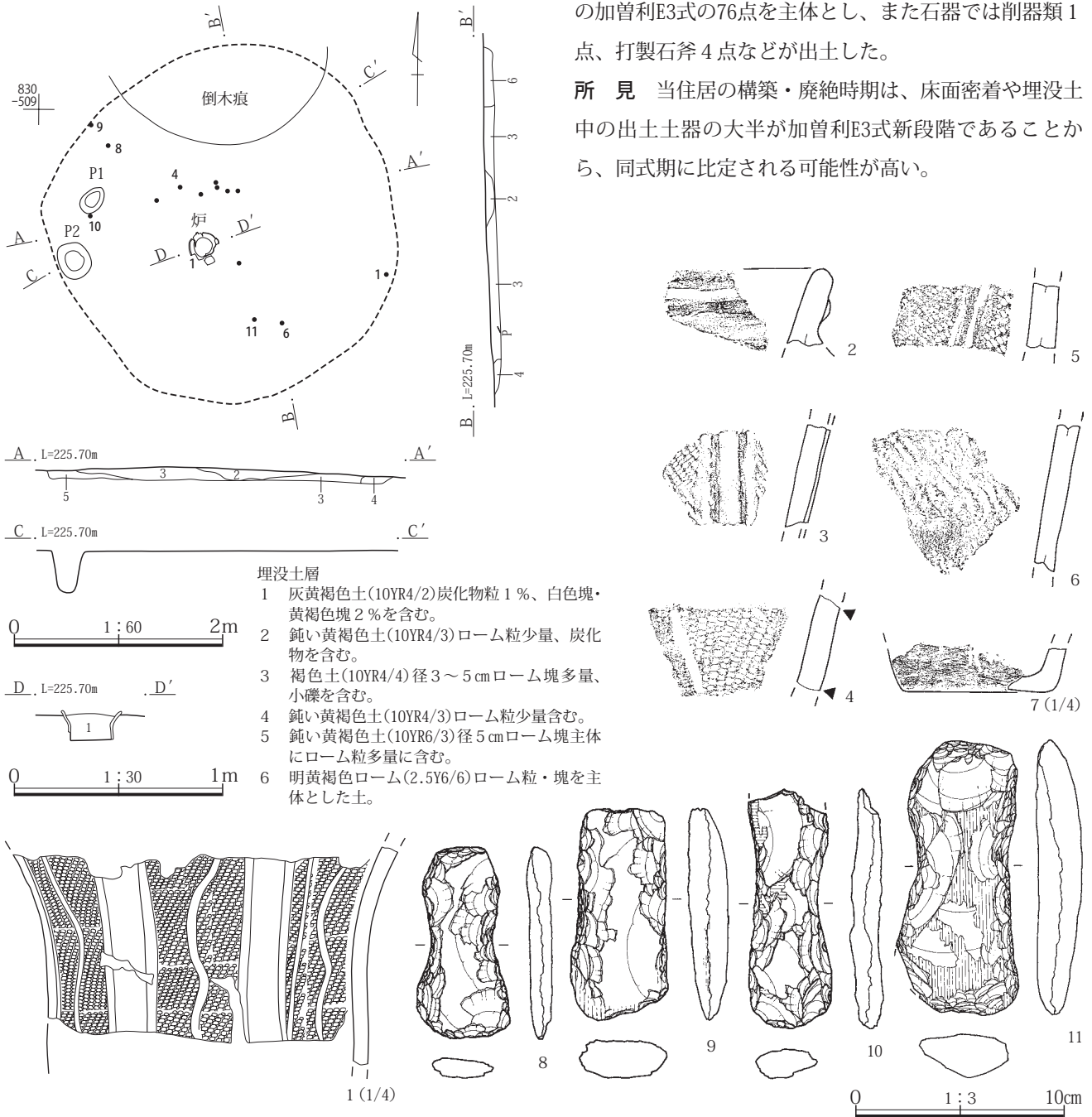
距離は0.6mを測る。

炉 床面のほぼ中央部に位置すると想定される。胴部上位～口縁部と同部下位～底部を欠失する深鉢土器を正位に設置した土器埋設炉である。土器内面は、被熱により若干の風化と多くのひび割れを生じているが、炉内での焼土形成はほとんど認められない。

周 溝 検出できなかったが、柱穴の場合と同様に埋没土がⅧ層と類似することによる未検出の可能性もある。

遺 物 炉埋設土器のNo.1の他にNo.6が床面密着出土であり、他は埋没土相当層からの出土である。土器は中期の加曽利E3式の76点を主体とし、また石器では削器類1点、打製石斧4点などが出土した。

所 見 当住居の構築・廃絶時期は、床面密着や埋没土中の出土土器の大半が加曽利E3式新段階であることから、同式期に比定される可能性が高い。



第178図 8区73号住居と出土遺物

●8区74号住居

位置 X=57829 Y=-75504

方位 不明 面積 不明

写真 P L 57・58・143・144 観察表 470頁

重複 周壁際や床面上で土坑4基、ピット1基と重複するが、908・914号土坑を切っている他は新旧関係不明。

形状 埋没土がⅧ層と類似していたため、その外形確認を下位のⅨ層上面にて行った。円形状を呈すると推定され、壁面勾配は約80度で立ち上がる。

規模 規模は直径5.61mを測る。上記理由により断面図での掘り込み深度は約10cm前後と浅いが、調査区外との境界断面で確認した深度は20~30cmを測る。

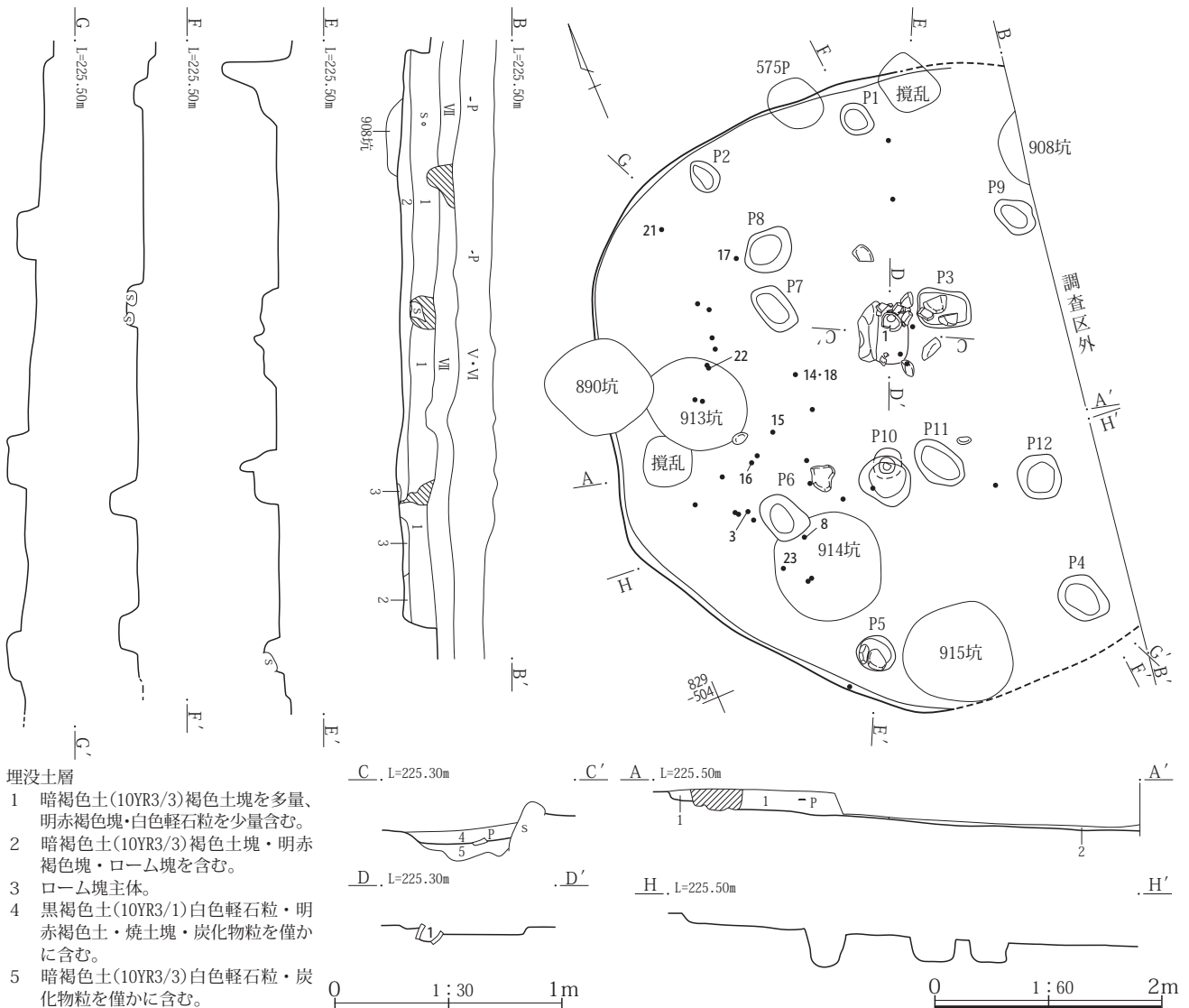
床面 Ⅷ層上面~Ⅹ層上面にかけて、最大30cm掘り込

んで床面を形成する。全体的に傾斜や凹凸の少ない平坦な床面で、特に叩き床状の硬化面は存在しないが、炉の周辺部を中心に堅緻な面をもつ。

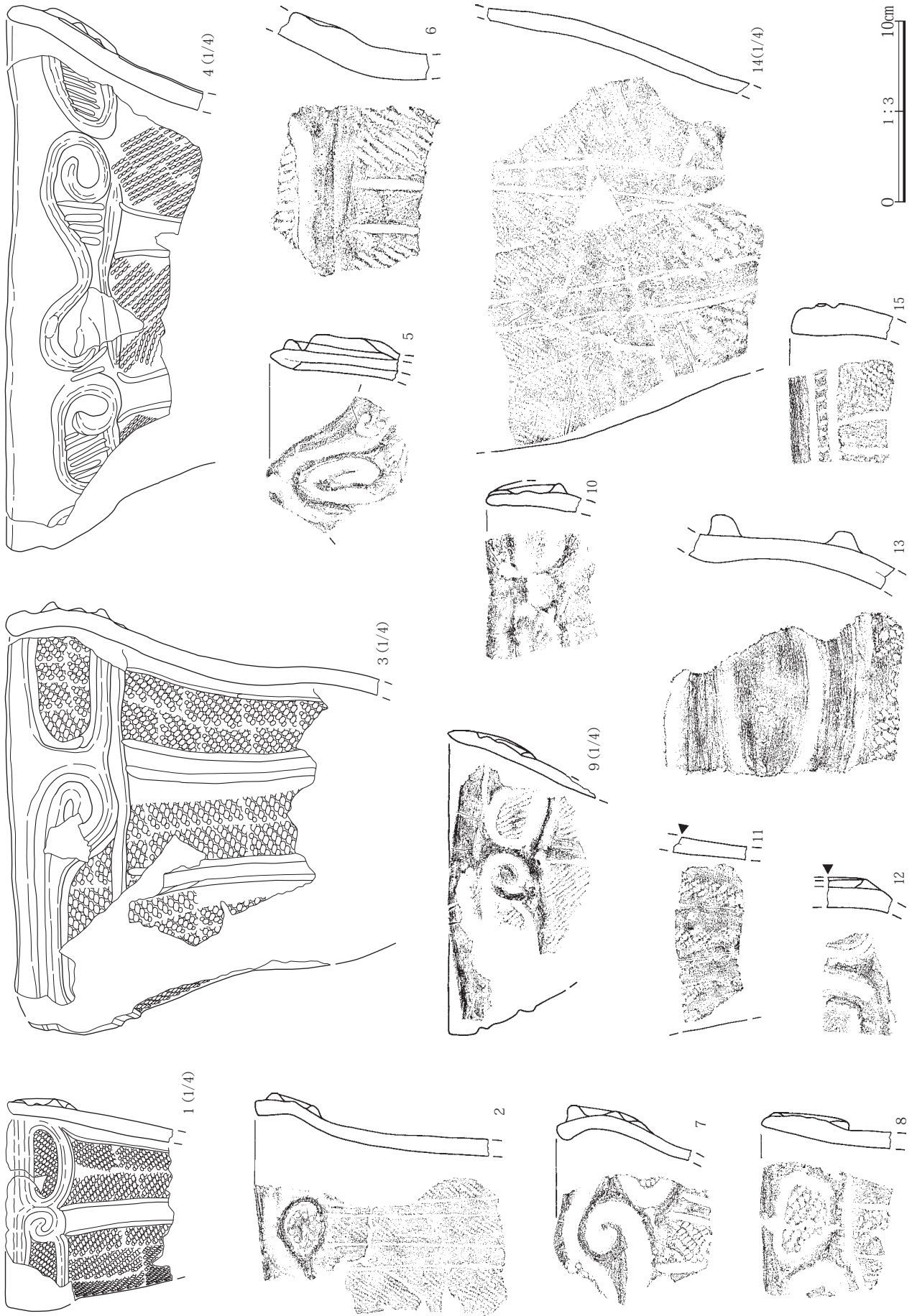
柱穴 P1~P12の12本が検出されているが、住居形状や帰属時期から判断して7~8本主柱が周壁の内側を廻る構造と推定される。位置・規模的には、P4~P9の6本が主柱関連の柱穴と考えられ、他については補助的な柱穴あるいは別遺構関連の小ピットであろう。土坑との重複により欠失した主柱穴も想定されるが、各柱穴の規模は別表に一括した。主な柱穴の芯々間の距離はP4~P5:1.9m、P5~P6:1.5m、P8~P9:2.2mを測る。

柱穴一覧(単位:cm)

No.	直径	深さ
1	31	12
2	31	21
3	47	11
4	35	15
5	46	15
6	39	35
7	44	28
8	44	20
9	44	32
10	46	20
11	51	19
12	39	23



第179図 8区74号住居



第180図 8区74号住居出土遺物(1)

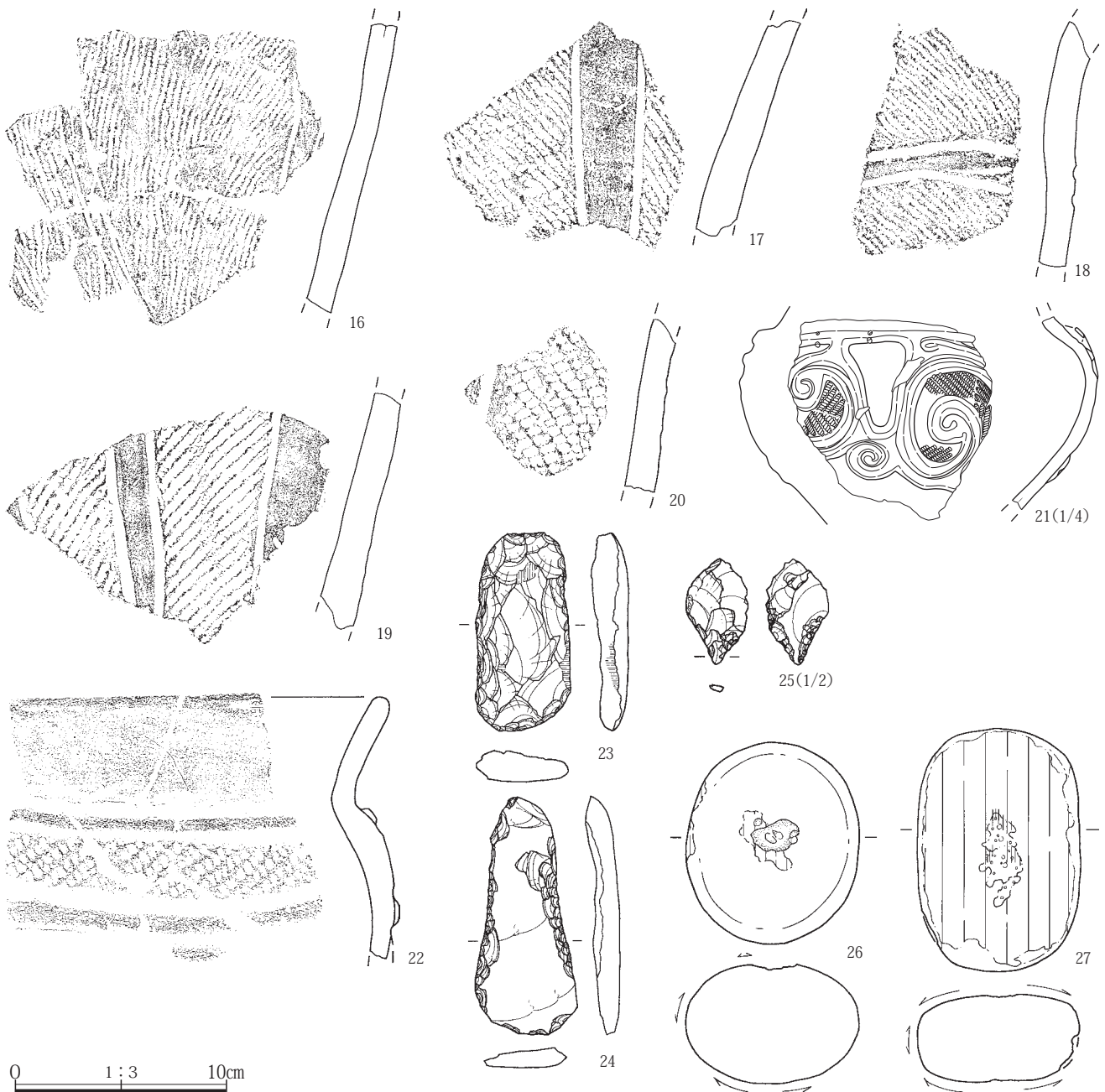
炉 床面のほぼ中央部に位置する。東側に長径55cm×短径25cmの河床礫1石が残存するが、縦・横幅80×80cm、深さ16cmの方形の掘り方から見て、構築当初は方形石囲炉であったと想定される。やや北側に偏在して、胴部下半以下を欠失した深鉢土器(No.1)を正位に埋置している。埋設土器は口縁部付近を中心にして被熱による風化・剥離が著しいが、掘り方には底面の一部に若干の焼土化が認められる程度である。

埋設土 上位のⅦ層以下にⅦ・Ⅷ層に近似した暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 炉埋設土器を除いた床面直上および浮遊高4cm

以内の出土遺物は、No.14・15・17・18・21であり、他は埋没土中の出土。土器は主体を占める加曾利E3式599点、石器では石錐・石核各1点、削器・磨石類各3点、打製石斧8点、台石2点等が埋没土の1層内を中心にして出土した。尚、炉の近縁から出土したオニグルミの炭化破片3点について、放射性炭素年代測定により4800～4600ca1 BPの暦年代を得ている。また、黒曜石製の石核1点と剥片2点について、蛍光X線分析による産地同定を行い、星ヶ台との結果を得ている。

所見 当住居の構築時期については、炉埋設土器が加曾利E3式中段階であることから、同式期に比定される。



第181図 8区74号住居出土遺物(2)

● 8区75号住居

位置 X = 57835 Y = -75501

方位 N 9度E 面積 (13.7m²)

写真 P L 58・145・146 観察表 471頁

重複 南側で78号住居や916・917号土坑を切る。他に886・911・918号土坑と重複するが、新旧関係は不明。

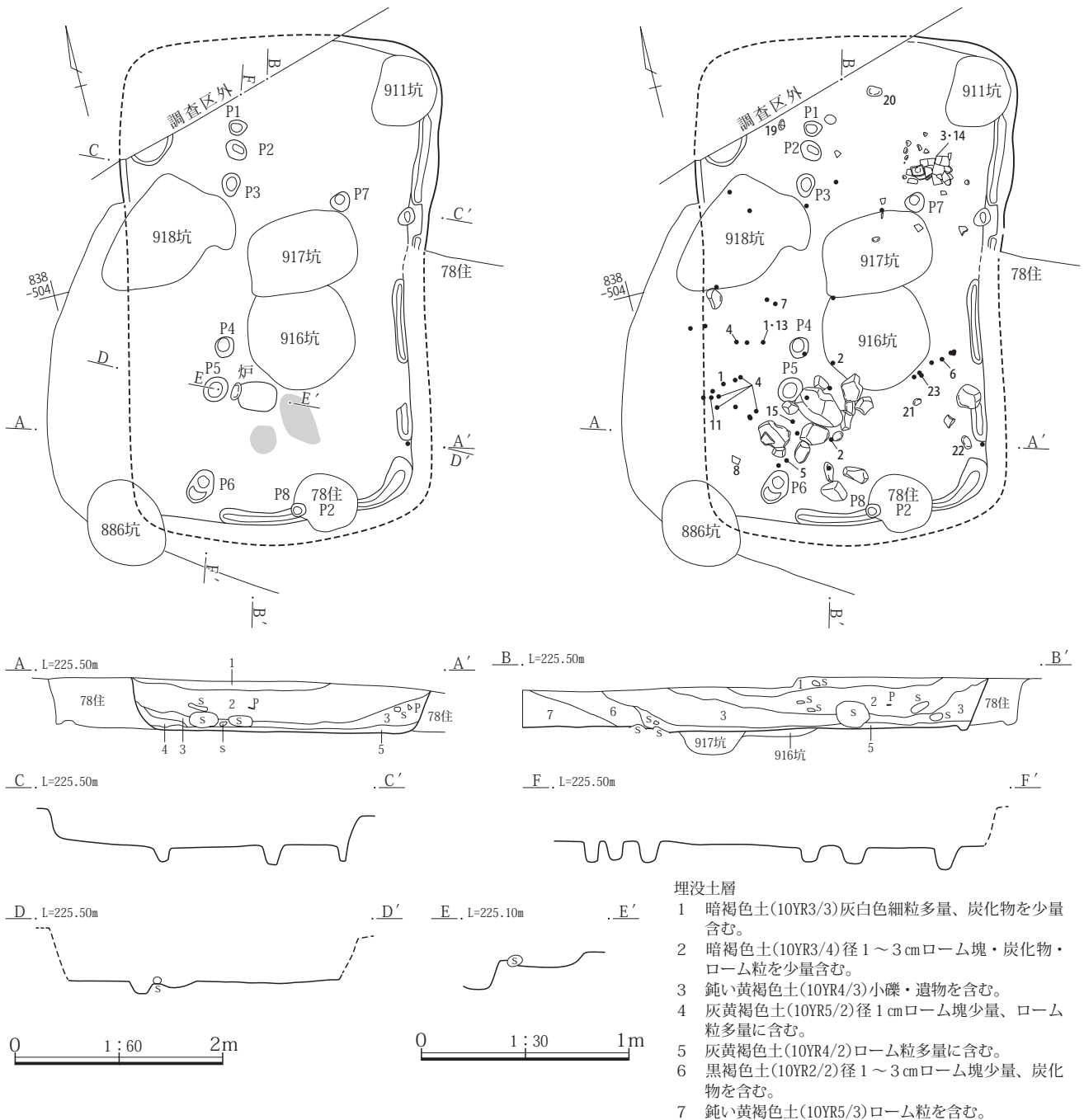
形状 78号住居との重複に起因して、調査段階で南半部の周壁検出が困難であったため、A・Bセクションで確認した壁面位置を基にその立ち上がりを想定し、平・断面図に破線で表示した。斜面地の等高線にほぼ平行し

て、南北方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。各辺共にほぼ直線的で、壁面勾配は約70~80度で立ち上がる。

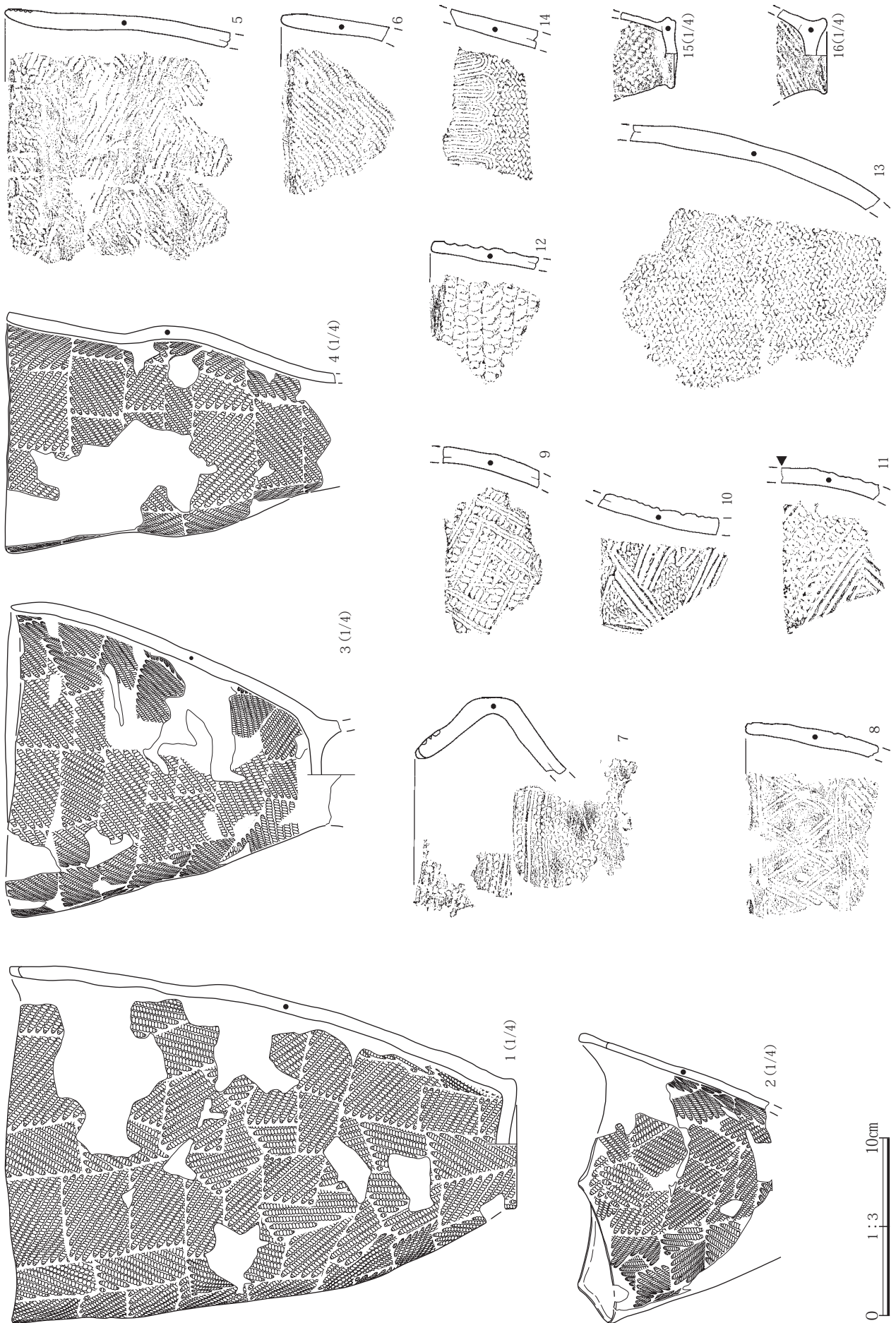
規模 長辺4.8m×短辺2.85m、深さ45~51cmを測る。

床面 VIII~X層にかけて最大51cm掘り込み、床面を構築。重複する78号住居床面との識別が困難であり、実際は第182図の床面線ではなく、層厚3~8cm前後の5層を埋填して、その上面を貼り床としている可能性もある。

柱穴 P1~P8の8本を検出した。住居の長軸方向に並行して3本×2列の6本主柱構造と思われるが、P3・P4・P6列に対向するP7列側の2本が916・917号土坑や78



第182図 8区75号住居



第183図 8区75号住居出土遺物(1)

号住居柱穴との重複により欠落すると推定される。他の柱穴は補助的なものであろう。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:17cm×19cm、P2:22cm×17cm、P3:23cm×12cm、P4:19cm×10cm、P5:25cm×12cm、P6:34cm×21cm、P7:19cm×16cm、P8:14cm×20cmである。主な柱穴芯々間の距離は、P3~P4:1.6m、P3~P4:1.35m、P3~P7:1.05mを測る。各柱穴の柱痕は確認できなかった。

炉 床面中央部から南側約1mに偏在する。西側のみに長径18cm×短径8cmの河床礫1石を配した楕円形状の掘込炉で、規模は長径32×短径25cm、深さ8cmを測る。また東・南側に隣接した床面上の2箇所に、被熱による赤変が認められる。尚、前述の床面が5層上面の場合、その下位の当炉は78号住居に帰属する可能性もある。

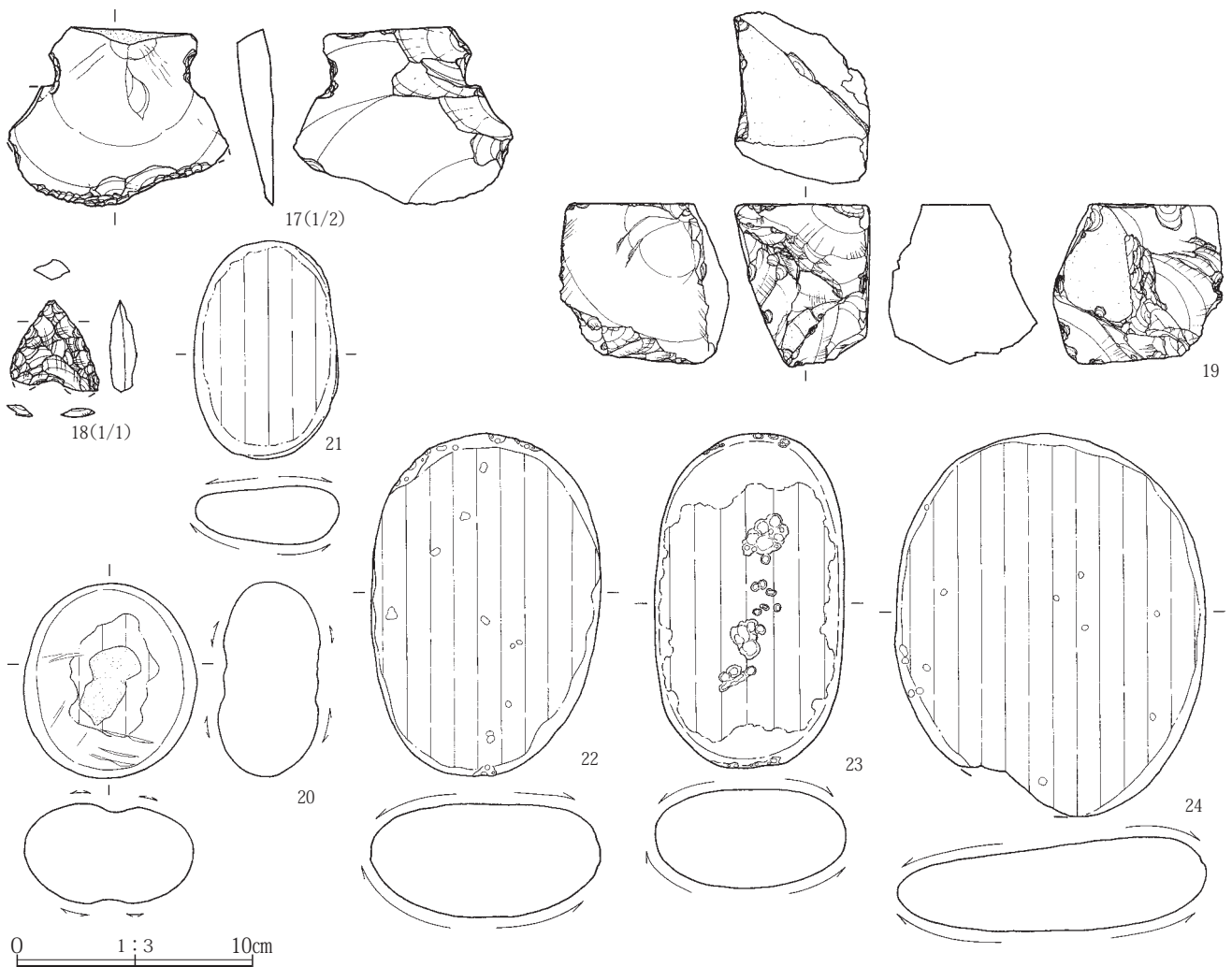
周溝 78号住居等の重複もあり確定的ではないが、東壁際から南壁際にかけて上幅7~18cm、深さ2~7cmの

規模で断続的に廻る。

埋没土 VIII層に近似した暗褐色土が上層から下層にかけてレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

遺物 床面密着および浮遊高4cm以内の出土遺物はNo.3・14・22のみで、他は埋没土の2層内を中心に出土した。78号住居の重複もあり、埋没土中の土器には関山II式が122点、同式~有尾式が165点混在する。石器では石鏃・石匙・打製石斧・楔形・石核・台石各1点、削器類11点、磨石類9点が出土した。尚、黒曜石製の石鏃・石核各1点(No.18・19)と剥片3点の蛍光X線分析による産地同定を行い、星ヶ台1点、鷹山または小深沢4点との結果を得ている。

所見 当住居の時期は、出土土器が関山II式中段階~有尾式まで混在するため確定できないが、78号住居に後出することから、有尾式期に比定される可能性が高い。



第184図 8区75号住居出土遺物(2)

●8区76号住居

位置 X=57837 Y=-75512

方位 N7度W 面積 不明

写真 PL59・146 観察表 472頁

重複 東壁・南壁側で846・868・870号土坑と重複するが、新旧関係は不明。

形状 住居の約2/3が調査区外に存在するため確定的ではないが、斜面地の等高線にほぼ平行して、南北方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈すると推定される。壁面勾配は約60～70度で立ち上がる。

規模 短辺3.25m、深さ45～51cmを測る。

床面 VIII～X層にかけて最大51cm掘り込み、床面を構築。凹凸少なく、全体的にかなり堅緻な面を形成する。

柱穴 P1～P7の7本を検出した。住居の長軸方向に並行して3本×2列の6本主柱構造と考えられるが、住居の大半が調査区外にあるため確定できない。恐らくP1・P3が主柱穴で、周溝内のP2・P4は出入口に関連した柱穴か。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1:36cm×20cm、

P2:16cm×24cm、P3:25cm×27cm、P4:25cm×20cm、P5:24cm×20cm、P6:27cm×29cm、P7:44cm×10cmである。主な柱穴芯々間の距離は、P1～P3が1.2mを測る。

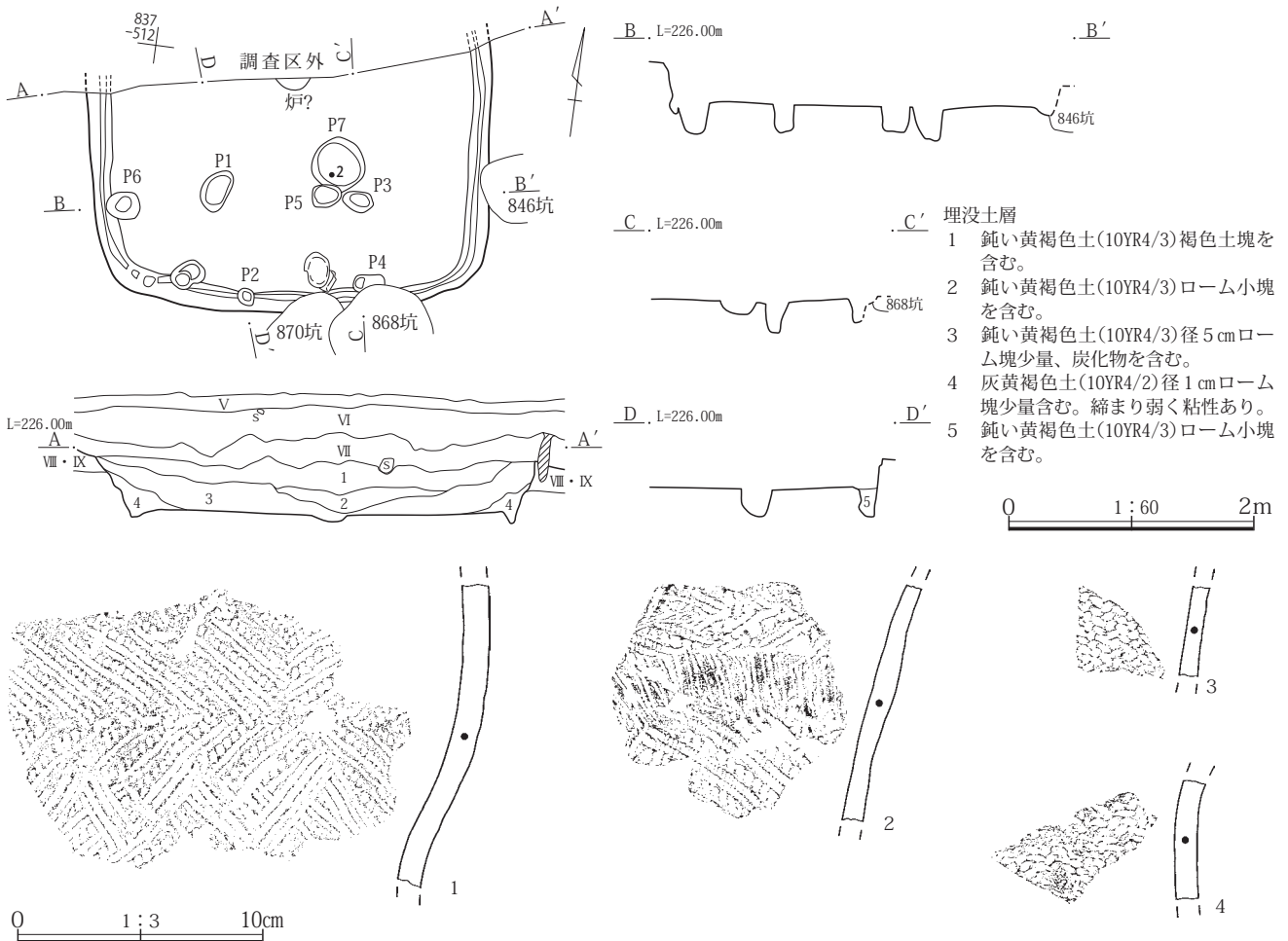
炉 調査区外との境界断面中央部で幅30cm×深さ5cmの落ち込みを検出し、炉を想定したが、位置的には南側にかなり偏在しており、相違する可能性が高い。

周溝 上幅6～12cm、深さ3～24cmの規模で周壁際を全周すると推定される。

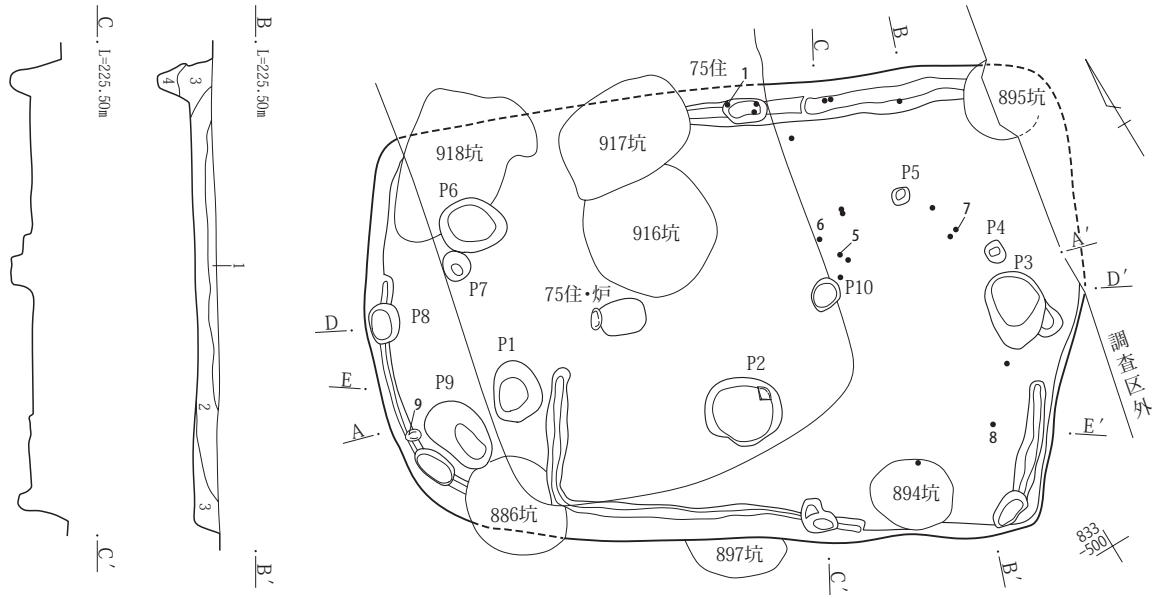
埋没土 VIII層に類似した黄褐色土が上層から下層にかけてレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

遺物 床面密着の出土遺物は皆無であり、全て埋没土中から出土した。土器には関山Ⅱ式9点の他に加曾利E3式が14点存在するが、住居形態から見て後者は混在と考えられる。石器は剥片1点の他は皆無である。

所見 当住居の時期は、前述の通り出土土器が関山Ⅱ式中段階にほぼ限定されることから、同式期に比定される可能性が高い。

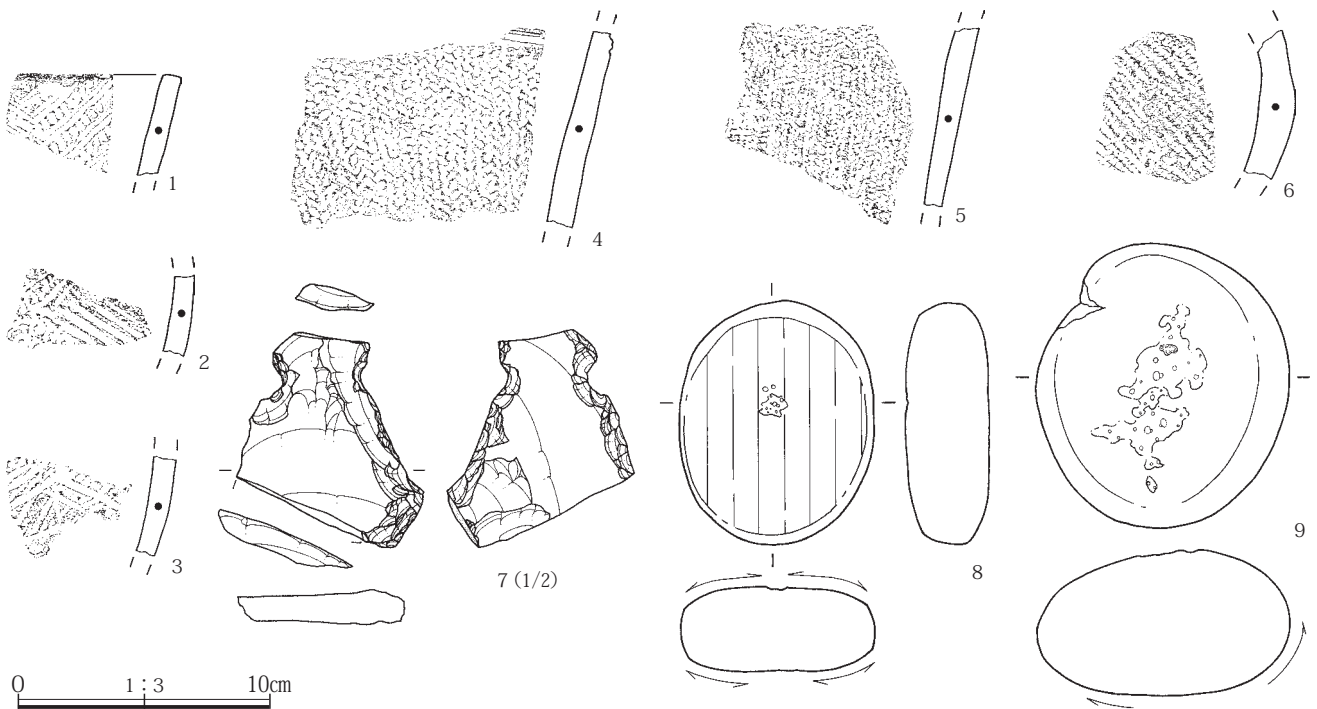
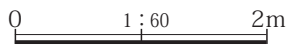
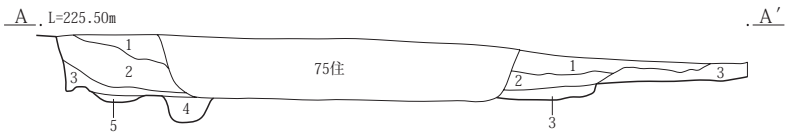


第185図 8区76号住居と出土遺物



埋没土層

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)径1cmローム塊・灰白色細粒多量、炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2)径1cmローム塊少量、ローム粒多量を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒多量を含む。
- 4 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径1cmローム塊多量を含む。
- 5 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径1cmローム塊・ローム粒多量を含む。



第186図 8区78号住居と出土遺物

●8区78号住居

位置 X = 57838 Y = -75500

方位 N60度W 面積 (18.8㎡)

写真 P L 59・146 観察表 472頁

重複 西半部を75号住居に切られる。他に886・894・895・897・916～918号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 75号住居との重複や北東隅が調査区外になるために外形の一部が不明瞭だが、斜面地の等高線に直行して東西方向に長軸を持ち、斜面上位の西辺が東辺より60cm短い隅丸長台形を呈する。東・西辺はやや湾曲するが、他辺は直線的に掘り込まれ、壁面勾配は約70～80度の角度で立ち上がる。

規模 長辺5.70m×短辺3.70m、深さ30～44cmを測る。
床面 VIII～X層にかけて最大44cm掘り込み、床面を構築する。75号住居との重複により西半部の状況が確定的ではないが、若干の凹凸を持ち、周壁際から中央部に向かって約10cm程度低くなると想定される。掘り方は存在しない。

柱穴 P1～P10の10本を検出した。住居の長軸方向に並行して3本×2列を配した6本主柱構造と推定されるが、各柱穴の配置はやや規則性に欠ける。75号住居や土坑との重複で欠落する柱穴も考慮されるが、土坑に認定された894・895号などは柱穴の可能性もある。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P1：50cm×15cm、P2：62cm×29cm、P3：61cm×17cm、P4：18cm×11cm、P5：14cm×12cm、P6：53cm×10cm、P7：21cm×18cm、P8：31cm×20cm、P9：61cm×18cm、P10：25cm×9cmである。

炉 75号住居の当該項目で記載したように、調査段階で認定した同住居の炉が、当住居の炉に帰属する可能性がある。この場合、同期住居の炉にほぼ齊一的に認められる「住居の長軸方向の奥壁側に河床礫を1石配置」というあり方も合致しており、その蓋然性は高い。規模等を再述すれば、長径32×短径25cm、深さ8cmを測る掘込炉である。また東・南側に隣接した床面上の2箇所の被熱・焼土化部分についても、当住居に帰属すると想定される。詳細は223頁の第182図を参照されたい。

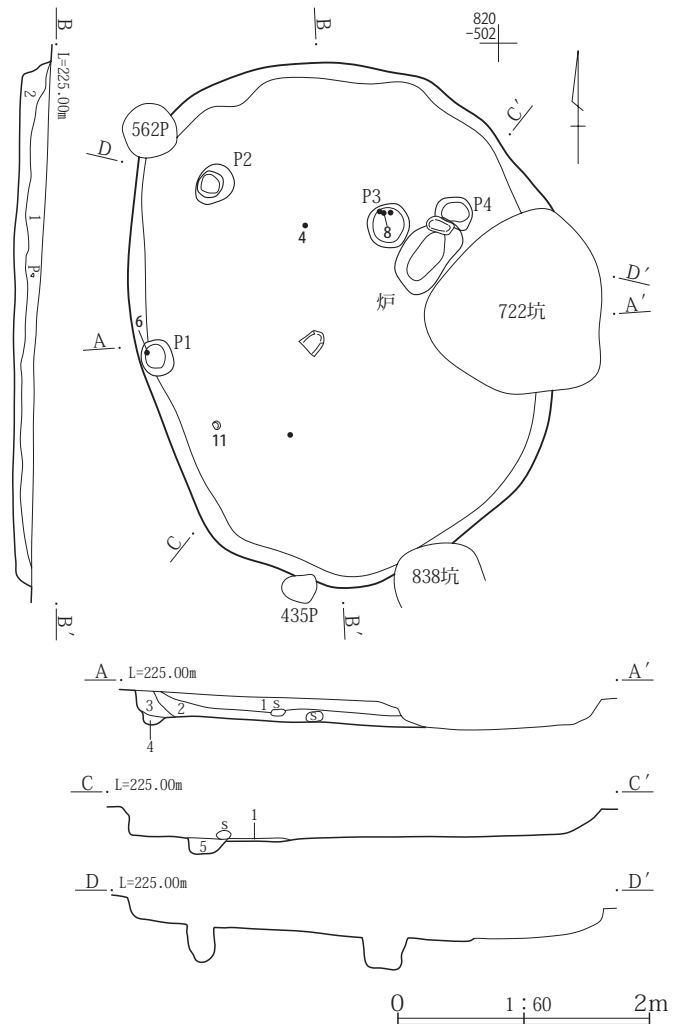
周溝 75号住居や土坑等の重複により欠失している箇所も想定されるが、上幅5～21cm、深さ3～23cmの規模で断続的に廻る。尚、南西隅の手前1mで北方向に長さ

110cm伸びているが、拡張・建て替え等に伴う古段階の周溝痕跡の可能性もある。

埋没土 VIII層に近似した灰黄褐色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没状況を示す。

遺物 床面密着および浮遊高3cm以内の出土遺物はNo.4・7～9で、他は埋没土中から出土した。75号住居との重複により出土遺物は僅少だが、土器は関山Ⅱ式5点、有尾式25点が混在する。石器では石匙1点、磨石類2点が出土した。

所見 当住居の時期については、出土土器のみでは確定できないが、75号住居に先行する点を加味すれば、関山Ⅱ式中段階に比定される可能性が高い。



埋没土層

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊、白色軽石粒、橙色塊、赤褐色土を含む。
- 2 黄褐色土(10YR4/4)ローム塊・白色軽石粒・黄褐色土を含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊含む。
- 4 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒・塊、白色軽石粒を含む。
- 5 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒を少量含む。

第187図 8区79号住居

● 8区79号住居

位置 X=57820 Y=-75505

方位 N16度W 面積 11.48㎡

写真 PL60・146 観察表 472頁

重複 東壁側を加曾利E3式期の722号土坑に切られる。他に838号土坑や435・526号ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

形状 埋没土が不明瞭なため、Ⅸ層上面にて外形を確認したが、結果的に確認できた掘り込み深度は浅く、壁面の状況もやや明確さに欠ける。斜面地の等高線に直行して、南北方向に長軸を持つ楕円形状を呈する。壁面勾配は約60～70度の角度で立ち上がる。

規模 長径4.17m×短径3.48m、深さ11～23cmを測る。当初の掘り込み面はⅧ層上面と想定されることから、本来の壁高は20cm程度を付加した45cm前後と推定される。

床面 Ⅷ～Ⅹ層にかけて掘り込み、床面を構築すると想定される。若干の凹凸を持ち、北側から南側に向かって比高差約15cm傾斜が認められる。特に堅緻な面は存在せず、全体的に軟弱である。掘り方は存在しない。

柱穴 北半部に偏在するP1～P4の4本を検出した。配置に規則性がなく、積極的に支柱穴とする根拠に乏しいが、その規模(直径×深さ)はP1:29cm×7cm、P2:34cm×31cm、P3:351cm×26cm、P4:30cm×15cmである。主

な柱穴の芯々間の距離は、P1～P2:1.45m、P2～P3:1.5mを測る。

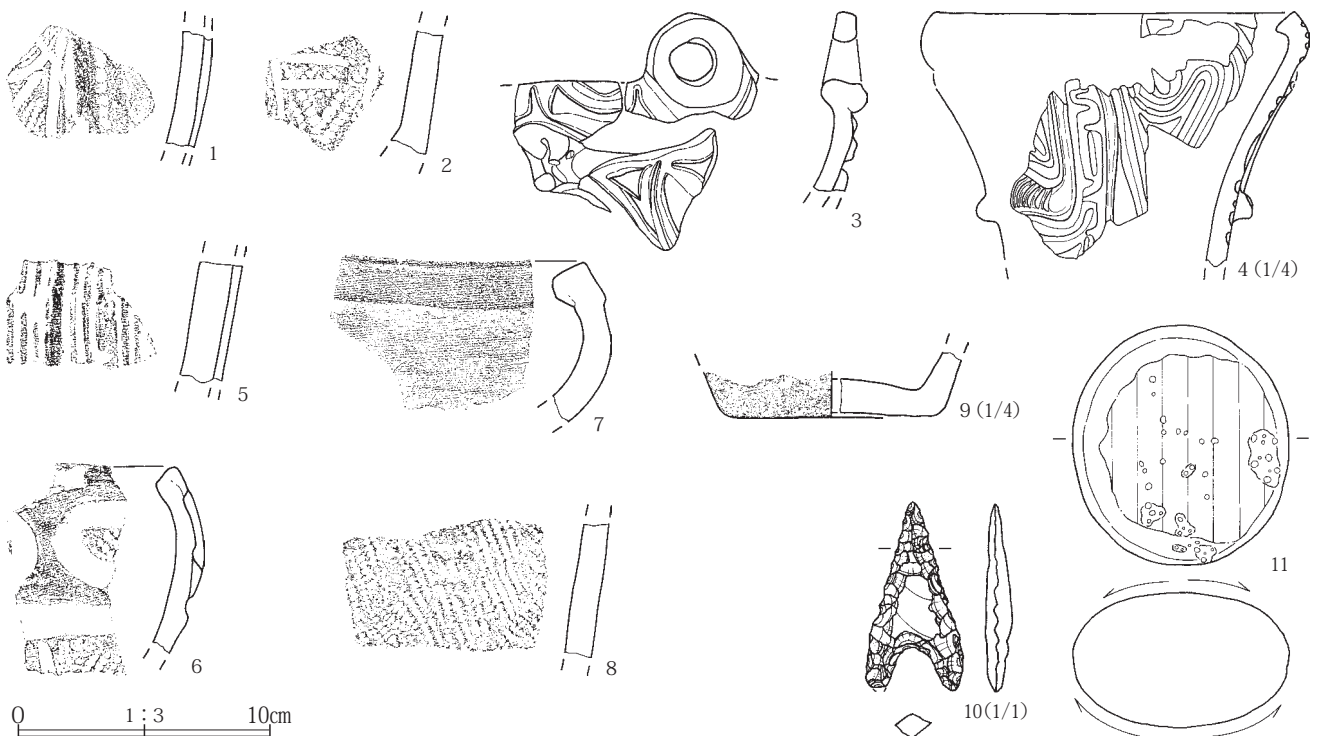
炉 床面中央部から北東側に約50cm偏在する。長径64×短径37cm、深さ3cmの僅かな掘り込みを持つが、被熱の痕跡や焼土形成は皆無であり、炉ではない可能性もある。また、その北壁の上位に5cmほど浮遊して長径30cm×短径15cmの河床礫1点が出土したが、関係性の有無は不明である。

周溝 精査にもかかわらず検出できなかった。

埋没土 外形の確認面がⅨ層であったことや722号土坑の重複もあり、自ずと検出し得た埋没土の層厚も薄いことから、その堆積状況は判然としない。

遺物 床面密着の出土遺物はNo.6・11のみで、他は埋没土中からの出土である。土器は加曾利E3式が115点と最多を占めるが、新巻類型や焼町土器が37点混在する。石器では石鏃・磨石類・台石が各1点、打製石斧2点が出土した。尚、黒曜石製の剥片1点について、蛍光X線分析による産地同定を行ったところ、ぶどう沢という結果を得ている。

所見 当住居の時期については、混在する出土土器のみでは確定できないが、炉の不明瞭な楕円形の住居形状を加味すれば、新巻～焼町土器段階に比定される可能性が高い。



第188図 8区79号住居出土遺物

(2) 竪穴状遺構

10区のⅧ層下位にて、1基(1号竪穴)を検出したのみである。長径3m強の不整楕円形状で掘り込みも浅く、付属する施設や遺物も皆無である。人為的な遺構と認定するには多くの要件を欠いており、何らかの自然的営為による落ち込みの可能性も否定できないが、ここでは規模等の事実記載のみを行っておきたい。

●1号竪穴

位置 X=58086 Y=-75552

方位 N86度E 面積 6.11㎡

写真 PL60

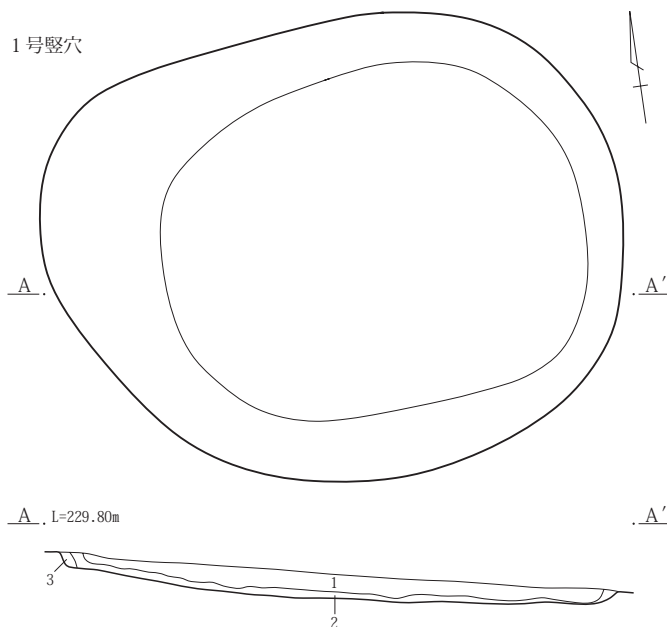
重複 無し。

形状 長軸を東西方向にもつ不整楕円形状を呈する。

規模 Ⅷ層下位にて確認したが、実際の掘り込み面は不明。長径3.07×短径2.45m、最大深度25cmを測る。

床面 斜面上方の西側から東側に向かって約4度の緩い傾斜を持つが、全体的には中央部が窪む掘り鉢状となる。叩き床状の堅緻な面は認められない。

埋没土 Ⅷ層に類似した黒褐灰色土がレンズ状に堆積し



埋没土層

- 1 黒褐色土(10YR3/1)明赤褐色土粒、ローム粒を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4)白色軽石粒を多量、明赤褐色土粒・黄褐色軽石を少量含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8)ローム塊を多量、白色軽石粒を少量含む。

0 1:40 1m

第189図 10区1号竪穴状遺構

ており、自然埋没状況を示す可能性が高い。

その他 柱穴・炉等の付属施設や出土遺物はない。

所見 前述したように、人為的な遺構として認定するには多くの要件に欠けるが、機能・用途不明の遺構としての側面も考慮する必要がある。

(3) 土坑

第14表に掲示したように、1・2・4・5・7～10・13区より425基を検出した。調査区別に見ると、1区：13基、2区：38基、4区：43基、5区：5基、7区：222基、8区：89基、9区：1基、10区：10基、13区：4基となるが、基本的に竪穴住居の分布状況とほぼ同様の傾向を有しており、両者間に有機的な関係性の存在を窺うことができる。尚、各土坑の分布状況については、調査区別に別添の全体図8・9・12・14・15・17・18に掲示してあるので、そちらを参照されたい。

帰属時期については、土器等の明確な伴出遺物により判定可能なものが263基にとどまるが、その内訳は早期2基、前期101基、中期95基、後期29基、中期後半～後期前半36基であり、前期が最多となる。

形態としては、掘り込み確認面での平面形状が円形のものが348基と全体の82%を占め、次いで楕円形を基調とするものが24基、長方形が1基、不整形が2基、部分調査による形状不明が50基となる。円形状土坑の中で、いわゆる袋状の形態を持つものは1区224号、2区37・91号、4区269・306・333号、7区362・629・637・659・660・670・682・714・753・922号、8区814・838～840・842・867・892・893号などの24基を数えるのみである。しかし、調査・確認面が当時の掘削面よりも30～50cm程度下位となったために掘り込みの上半部が欠失していることや、埋没過程での開口部崩落等に起因して、結果的に袋状を円筒形状として分類せざるを得ないものが相当数存在すると推定される。

規模に関しては、円形状の場合、直径が①50cm以下：8基、②50～99cm：202基、③100～149cm：127基、④150～199cm：10基、⑤200cm以上：1基で②グループが最多となるが、③グループも合わせれば円形土坑全体の94%を占める。楕円形状では、長軸が①50～99cm：12基、②100～149cm：10基、③150～199cm：1基、④200cm以上：

1基であり、①②グループを主体とする傾向が明瞭である。規模の面で見れば、円形土坑とも共通性を持つと言えよう。尚、掘削深度については、上述したように当時の構築・掘削面を把握できないものが大半であり、第14表に掲示した深度についてもその実態を直接反映していない点に留意されたい。

各土坑の機能・用途を考定する上で重要な要件となる埋没土の状況や遺物出土状況については、時期比定が可能な土坑を中心として以下の記述の中で扱うが、完形・準完形土器や大・中形自然礫を伴う土坑を除いて、その大半は貯蔵穴としての用途が想定される。

尚、本報告書巻頭の凡例に記載した通り、発掘調査時点で土坑に比定した遺構について、その規模・形状・埋没土層・出土遺物等の内容を詳細に検討した結果、小動物や草木等の非人為的土壤攪乱に起因すると判断される191基を除外・欠番とした。

以下、煩雑さを回避するために、出土土器の細別時期と調査区を単位にして記述を行う。

A. 早期

2区48・117号の2基が存在する。いずれも小破片土器による時期同定だが、早期末葉の表裏条痕文土器や絡条体圧痕文土器を出土する。共に直径1m前後の円形状を呈し、自然埋没状況を示すことから貯蔵穴等の用途が想定される。

B. 前期

関山Ⅱ式期 1区3基、2区10基、4区10基、7区36基、8区5基の合計64基が存在し、当該期住居と同様に7区を中心にして分布する傾向が明瞭である。形状別では円形58基、楕円形2基、不明4基であり、円形土坑が89%を占める。円形土坑の場合、規模では直径50cm未満が1基、同50～99cmが20基、同100～149cmが33基、同150cm以上が3基であり、直径100cm前後の中規模土坑が主体的となる。尚、2区91号、4区306号、7区637・660・682号の5基は周壁面にオーバーハングが認められることから、袋状形態を呈すると判断されるが、そのいずれもが中規模である。

遺物の出土状況では、土坑の中位～下位にかけて準完形および大形破片の深鉢土器1～2点が横転出土する4区291号、7区639・674・788号の4基、同じく深鉢土器の中・小破片が多数散在出土する2区38・51・53号や4

区303・306・311号、7区663号の7基、打製石斧1点を伴う7区633号などが特筆される。また、中位～下位にかけて長径20～40cmの大形河床礫や亜角礫を1～2点伴う1区215号、2区122号、4区291号、7区655・658・662・960号、8区853号などの7基と、同様に3個以上の礫を伴う2区53号や7区619号の2基がある。ただし、礫の出土状況はやや多様であり、中央部付近で約10～15cm浮遊する2区122号や7区662号、周壁にもたれ掛かった7区658号、2～3点が上下に重なる7区619号などが注視される。また、先の2区53号や4区291号は土器の他に大形礫も伴っている点で、上記両例の要素を併せ持っている。

埋没土層の状況では、ローム土の大・小ブロックを多・中量含有しつつ複数層で互層堆積し、人為的埋没状況を明示するようなケースは2区91号・4区270号や8区914号の3基にとどまるが、これらの土坑は墓坑としての用途が想定される。先の遺物出土状況との関連では、準完形・大型破片の土器や河床・亜角礫等を出土する土坑において、上記のような明確に人為的埋没状況を示すものは認められない。ただし、黒褐色土等で一気に埋没しているものも存在することから、これらの中には遺体の顔面や体部に完形および大形破片の土器を被せる「鉢被り・土器片被り葬」や、同様に礫を載せる「抱石葬」などの埋葬状態を反映したものと、土坑上位での墓標的配石として認定されるものが含まれていると考えられる。例えば、7区639号は「鉢被り葬」、7区674・788号は「土器片被り葬」、1区215号、2区122号、7区655・658・662号、8区853号は「抱石葬」、4区291号は「土器片被り・抱石葬」の可能性もある。また、下位に完形の打製石斧1点が出土する7区633号の場合は、同石器が副葬された可能性も考慮される。尚、2区38・51・53号、4区303・306・311号、7区663号等の中・小土器破片は、埋没中途段階で投棄・堆積した可能性が高い。

分布状況については、調査面積が最も広く竪穴住居の検出軒数も11軒と最多になる7区で見ると、北西から南東にかけて列状に配置された80・57・59・67号住居や61・60A・60B・71号住居との間隙およびその近縁に当該期土坑の50%に相当する32基の土坑が存在し、7区での集中化と共に竪穴住居との密接な関係性を看取することができる。尚、墓が想定される上記の各土坑については、

それらの位置を国家座標で見るとX=57770~57780、Y=-75515~75525の範囲に集中しており、集団的墓域が形成されていた可能性が高い。

有尾・黒浜式期 関山Ⅱ式土器も混在して明確な帰属が判別できないものを含め、32基が存在する。調査区別では、2区14基、4区13基、7区2基、8区3基となり、7区は稀少なに対して2・4区に全体の84%が集中する点で、前述の関山Ⅱ式期と大きく異なる。形状別では円形が30基、不明2基であり、その殆どを円形土坑が占めている。規模では直径50cm未満は皆無で、同50~99cmが12基、同100~149cmが17基、同150cm以上が1基となる。また2区37号、4区269・333号、7区922号の4基は周壁面にオーバーハングが認められることから、基本的に袋状形態を呈すると判断される。こうした円形土坑の特徴は、先述の関山Ⅱ式期とも共通している。

遺物の出土状況では、土坑の下位~底面にかけて横転・破損した完形深鉢土器や大形破片化した準完形の深鉢土器1点が出土している4区271・298号が注目される。また、同位置から1~2点の河床礫や垂角礫が出土する2区44・45・110号、8区889号なども、注視すべき存在である。前者の場合は、墓坑における鉢被りあるいは破片被り葬を、後者は抱石葬の可能性を想定できる。

一方、多量のロームブロック土混在や互層堆積などの人為的な埋没状況を示唆する土坑は、4区269・271・276・280・282号の5基に確認できるのみだが、底面に完形土器1点を伴う271号の場合は、墓としての蓋然性がより高いと言えよう。

分布状況については、前述したように4区とその南側に隣接する2区に集中する傾向が認められるが、4区については、「第1章 発掘調査の概要」で既述した通り、古墳時代後期の冑着装人骨等の出土により、縄文時代の文化面を含むその大部分の面積について保存措置が講じられたために各遺構の実態把握は難しい。しかし、同区には有尾式期に比定される可能性が高い4区34号住居(6期)が存在しており、これとの有機的な関係性を持つと考えられる。ただし、墓坑の可能性が高い土器や大形礫を伴う前述の6基は、1箇所に集中することなく分散しており、墓域を形成する状況は認められない。また、先の7区を主分布域とする関山Ⅱ式期と比較すれば、立地地点を違えている可能性が高い。

諸磯 a・b式期 1区1基、4区3基、7区1基の合計5基が存在するのみである。形状はいずれも円形を基調としており、規模も直径70~110cmの範囲に収まる。1区224号は壁面のオーバーハング状況から、袋状形態を呈すると判断される。

遺物出土状況では、中位~下位に大形河床礫2点を伴う4区277号が特筆されるが、他は数点の土器小破片を伴うのみであり、土坑の帰属時期についても確定的ではない。

また、埋没土の状況については、1区224号、4区272・274・277号にロームブロックの混入が認められるが、277号を除いて積極的に人為的埋没を認定できる状況ではない。277号については人為的な埋め戻しが想定され、河床礫の出土状況とも合わせて墓坑の可能性もある。

分布状況では、調査個数が僅少なこともあり、全体的な傾向を見定めることは難しいが、4区にやや集中する状況も看取される。こうした点は、前段階の有尾式期の遺構が4区に集中することと何らかの関連性を有する可能性も考慮される。

C. 中期

五領ヶ台式期 円形土坑の7区671号の1基が存在するのみであるが、土器の小破片1点のみによる時期判定であり、確定的ではない。後述する阿玉台式・勝坂式期と共に竪穴住居をはじめとする遺構が存在せず、土坑のみが構築されるという特徴を持つ。7区では、中期後半の遺構がかなり集中的に存在するが、当該期の土坑構築はいわばその先駆的な遺構立地としての側面を有すると考えられる。

勝坂1式・阿玉台Ia式期 7区578号、8区862号の円形土坑2基が存在する。578号では、埋没土中位に勝坂1式の深鉢土器1点(第232図1)が大形破片に分散して横位出土している。状況的には、埋没中途段階で分割または破損した当該深鉢土器を廃棄したようなあり方を示すが、埋没土にはかなり多量のロームブロックが混在しており、人為的な埋戻し過程での残置の可能性もある。また、862号は底面に近接してほぼ完形に復元できる阿玉台Ia式の浅鉢1点(第240図2)が出土し、更にその上位に二分割された石皿(同図3)が重畳的に載っている。この出土状況は、前述の578号とは大きく異なり、人為的かつ意識的な配置を窺わせるが、特に浅鉢と石皿の組

合わせに注意を払う必要がある。こうした土器と石皿の対置関係は、中期後半の竪穴住居内において散見され、男・女性原理を背景とした呪術的行為として把握されている。当例の場合は、遺体の顔面あるいは体部に「鉢被り」として浅鉢を載せ、それと対置させるためにその上位に石皿を載せたと想定することもできよう。この他に、浅鉢破片や磨石類が各1点(同図1・4)出土している。

当期の土坑が7区およびこれに隣接する8区に存在する点に関しては、先の五領ヶ台式期での立地を踏襲するものであり、竪穴住居の存在は確認されてはいないものの、同一地点における継続的な集落形成が開始されたことを示唆するものであろう。

勝坂2式・阿玉台Ⅱ式・新巻類型期 7区に9基、8区に3基の合計12基が存在する。各土坑ともに出土土器は僅少であり、また上記の各型式が少なからず共存している状況ではあるが、中心的な土器で区分すれば勝坂2式期6基、阿玉台Ⅱ式期2基、新巻類型期4基となる。

各土坑の規模は、直径52～119cmの範囲に収まる中形であり、その形状も円形のみである。また、袋状形態が8区867号の1基に認められる。

遺物の出土状況では、下位に中形の河床礫1点が存在する7区688号や、120点の新巻類型土器破片が埋没土上位より出土した7区726号が特筆される他は、いずれも埋没土中に混在して土器や石器が少量出土している。

分布状況については、7・8区のみ限定されており、前段階の立地地点を継続的に利用している。特に、7区の場合は中央部に集中する傾向が看取されるが、8区にも少数ながら分布する点は、中心的な分布域が2地点に分散することを示すと考えられる。ただし、当該期の竪穴住居は1軒のみであるが1区に83号住居が存在しており、土坑とは分布域をやや違える可能性もある。

勝坂3式・焼町土器期 7区に5基、8区に3基の合計8基が存在する。いずれも円形状を呈し、その規模は直径80～133cmの範囲に収まる。また、袋状形態が想定されるのは、7区629・714号、8区891・892号の4基である。

遺物の出土状況では、上位～中位にかけて立位の直径20cmの棒状河床礫や焼土ブロックと、底面に横転・破損した焼町土器の完形深鉢1点(第235図1)を伴う7区714号が注目される。土器については「鉢被り葬」としての用

途が想定されるが、上位部での棒状礫は墓標的な立石を、また焼土は葬儀礼等に伴う焚火行為の存在を示すと想定される。一方、8区891号は底面に大形亜角礫1点が存在し、同892号は底面を埋め尽くすように大～中形の河床・亜角礫16点が散在するなど、共に意図的な配置状況を窺わせる。ただし、底面に密着出土している点で、「抱石葬」の状況とは異なる。この他に、上位～中位にかけて多数の中・小土器破片が出土する7区346・717号があるが、基本的には埋没中途過程での投棄と考えられる。

埋没土の堆積状況により、人為的な埋戻し行為が想定されるのは、7区714号と8区893号の2基である。714号については「鉢被り葬」による墓坑の可能性が高いが、埋没土状況からもそれを裏付けると言えよう。

分布域を竪穴住居との関連で見れば、1軒のみだが8区に79号住居が存在しており、その周辺部に土坑が展開する状況も考慮される。

三原田式・加曾利E1式期 7区382・672号、8区830・831号の合計4基が存在する。いずれも円形状を基調とし、その規模は直径55～113cmの範囲に収まる。

遺物の出土状況では、382号を除いて埋没土層内から小破片土器が数点出土するのみであり、672号のように後期後半の土器が混在する例もある。こうした点を考慮すると、時期的には不確定な要素もあるが、各土坑ともに7・8区に立地する点で中期の他土坑とも共通している。また、竪穴住居との関連性では、5区の狭小な範囲に16・18・23・17B号住居の4軒がかなり密集して存在しており、土坑とは若干構築地点が異なる可能性もある。

加曾利E2式期 7区に6基、8区に2基の合計8基が存在する。いずれも円形状を呈し、その規模は直径1m前後となる土坑が主体を占めるが、7区596号のように直径2mを超えるものもある。また、袋状形態が想定されるものに、7区670号、8区839号の2基がある。

遺物の出土状況では、上位に大形の円形河床礫1点を伴う7区670号と、中位に加曾利E2式深鉢土器の大形破片と多孔石の各1点を伴う8区846号の2基が特筆される。670号の場合、河床礫の出土位置が開口部に近い中央部にあることから、土坑埋没後にその上面中央に残置したと想定される。また、土坑下部にロームブロックを含む人為的な攪拌土層が堆積していることを加味すれば、墓坑として人為的に埋填した後に墓標的な円形河床

礫を配置したと考えられる。この円形河床礫は、中・後期の柄鏡形敷石住居や配石遺構に多用される「丸石」に近似しており、当域におけるその出現時期を考える上で注視すべき事例と言えよう。一方、846号はロームブロックを多量に含む埋没土から人為的な埋填が想定され、「土器片被り葬」あるいは「抱石葬」の可能性が高い。また、人為的な埋没状況を示すものに7区748号があるが、上記のような土器や礫の出土遺物は無い。仮にこれを墓とした場合には、当期だけでなく鉢被りや抱石等の行為を付加しない墓坑の存在を想定する必要もあるだろう。これら以外の土坑については、自然埋没過程での投棄や流れ込みによる遺物出土と考えられる。

分布状況については、中期の他土坑と同様に7・8区の2地点に集中構築されているが、当該期の竪穴住居は1区31号、5区19・22・24号、7区49・55・56・63号などの8軒が存在し、全体的には土坑よりも南側に偏在する傾向を持つ。こうした点は、前段階の加曾利E1式期とも類似しており、集落構造を考える上で注意すべき傾向である。

加曾利E3式期 1区7基、5区1基、7区9基、8区21基の合計38基が存在する。楕円形状の7区609号と8区741号の2基を除いて、他のいずれも円形状を呈する。規模は、直径50cm未満が1基、同50～99cmが23基、同100～149cmが11基、同150～199cmが3基を数えるが、円・楕円形を含めて直径50～149cmの中形が89%を占める。また、袋状形態が想定されるのは、8区840・842号の2基にとどまる。数量的には、前期の関山Ⅱ式期の約1/2強であるが、その分布域は他期土坑に比べて最も広範囲に及ぶ。ただし、後述するように中期後半や中期後半～後期前半とした時期確定の困難な土坑55基の大半が、当該期に比定される可能性が高いことを考慮すれば、竪穴住居の構築数と共にその数量の多さと広大な分布域とが比例しているとも言える。また、1区より北側には分布していないことから、調査区南側を中心に展開している様相が看取される。

遺物の出土状況では、土坑の中位～下位にかけて完形の打製石斧1点を伴う8区722・840号が注目される。また、同位置から1～2点の河床礫や垂角礫を伴う1区225・237号、7区573・989号、8区889号や3点以上の河床礫・垂角礫を伴う8区722・840・876・906号と、上

位～中位に大形の河床礫や垂角礫10数点を伴う8区906号などが特筆される。これらの土坑は、先述の各期土坑の場合と同様に墓の可能性が高いと思われるが、打製石斧は副葬品、中位～下位出土の大形礫は抱石葬、上位の礫は墓標的な配石であろう。この他に、調査区外との境界断面で検出された1区238号は、中位より深鉢土器の胴下部～底部を伴出するが、規模的に土坑ではなく屋外埋設土器の可能性もある。

埋没土との関連では、1区225・237号、8区906号がロームブロックを多量に含む褐灰色土ではぼ一括埋没し、人為的な埋填を窺わせる。上記以外では、8区815・873・874・909・910号などの5基が同様な埋没状況を示しており、墓坑の可能性もある。

墓の可能性のある土坑の分布は、2基程度が近接するケースもあるが、群を形成することはなく相互に散在的である。

竪穴住居との分布対比では、5区17A号、7区54・62号、8区69・73・74号の6軒の住居分布から明らかのように、中期の他住居に比べてその分布範囲をより北側へと拡大しているが、土坑分布もそれに連動している状況が看取される。

加曾利E4式期 5区141号、7区383号、8区887号の3基が存在するのみである。形状は円形1基と不明2基だが、規模的にはいずれも直径1m前後の中形である。

遺物も埋没土中より土器破片が10点前後出土するのみで、埋没土の堆積状況を含めて特筆すべきものは認められない。

検出数が僅少のため、全体的な分布傾向は不明だが、同期に比定される可能性の高い柄鏡形敷石住居の69号が8区に存在しており、当区を中心とした近縁部に分布すると想定される。

D. 後期

称名寺Ⅰ式・加曾利E5式期 7区351・791号の2基が存在する。形状は共に円形であるが、351号は直径167cmと791号の2倍弱の規模を持つ。

遺物の出土状況は、351号の場合、下位に中形河床礫・磨石類各1点と加曾利E5式の深鉢大形破片1点がやや散在して出土し、791号では上～中位に大形河床礫1点・垂角礫4点や丸石状磨石の直下に称名寺Ⅰ式中形破片1点が出土している。ともに河床礫や大・中形の土器破

片を伴う点で共通しているが、791号はロームブロックを多量に含んだ褐色土で人為的と考えられる埋没をしている。こうした点を加味すると、共に墓坑として土器片被り葬や抱石葬の可能性を想定し得るだろう。

当該期の住居は調査区域内からは確認されておらず、集落の様相や土坑の占地状況は把握できないが、基本的に中期後半段階と類似した地点に立地する点は、加曾利E4式期以降の急激な減少傾向と共にその様相を同じくしている。

称名寺Ⅱ式期 7区709号の1基が存在するのみである。形状は円形で、直径107cmの規模を持つ。

遺物の出土状況では、中央部の下位より多孔石1点(第236図3)が出土しており、抱石葬的な様相を持つと考えられる。

当該期の住居は確定的ではないが、柄鏡形敷石住居の7区58号のみが確認されている。遺構数量や分布状況を含めて、前段階と同様の低調な様相が継続している。

堀之内Ⅰ式期 7区9基、8区1基の合計10基が存在し、いずれも円形状を呈する。規模は、直径50cm未満が1基、同50～99cmが3基、同100～150cm台が6基を数えるが、全体的には直径50～150cm台の中形が90%を占める。また、袋状形態が想定されるものに7区362号がある。数量的には、後期初頭の称名寺Ⅰ・Ⅱ式期に比べて大幅な増加に転じており、画期的な変化が生じたことが窺える。

遺物の出土状況では、中位～下位にかけて大・中形の河床礫や垂角礫を2～4点伴う7区362・705号があり、多量のロームブロックを含む暗褐色土や黄褐色土で埋没していることも考慮すれば、抱石葬などの墓坑的な性格を持つ可能性もある。また、これらに近似して8区724号は2点の垂角礫を伴うが、底面に密着出土している点で異なる。他の土坑では、少量の土器小破片や欠損した打製石斧などを伴うが、主として埋没土上位からの散漫な出土であり、自然埋没過程で混在した可能性が高い。

当該期の明確な住居は存在しないが、前段階の称名寺Ⅱ式期とした7区58号住居は堀之内Ⅰ式土器を少なからず出土しており、当期まで下る可能性もある。そう仮定した場合には、7区の住居周辺部に土坑が比較的まとまって分布する状況が看取されると共に、中期末葉の加曾利E3式段階に比べてその分布域を縮小していることが

明瞭と言えよう。

堀之内Ⅱ式期 5区1基、7区5基の合計6基が存在する。形状は5基が円形を呈し、直径63～104cmの中形規模を持つ。唯一、隅丸方形を呈する7区673号は、長径234cm×短径180cm、深さ72cmとかなりの大規模さを有し、形状・規模ともに他の土坑とは一線を画している。

出土遺物では、各土坑ともに堀之内Ⅱ式土器の小破片を1～4点と僅少量伴出するが、673号では破片ながら三十稲場式土器1点を伴出しており、他型式土器との併行関係を示す可能性もある。

埋没土の状況については、積極的に人為的埋填と判断できるものはないが、673号はロームブロックを含む鈍い黄橙色土でほぼ一括埋没しており、特異な形態・規模を加味すれば複数体を葬る墓坑的な用途も想定される。

当該期の住居は検出されていないため、集落内での土坑配置状況は不明である。ただし、立地的には7区を中心とする点で、前出の後期前半段階とも共通している。

加曾利B1式期 7区から6基が検出され、形状は円形4基、楕円形1基、不明1基である。規模は、長径および直径が72～138cmの範囲に収まり、2mを超えるような大規模なものはない。楕円形状を呈する426号を含めて、各土坑ともにⅧ層内での確認・調査であるが、掘り込み深度は21～39cmにとどまり、Ⅹ層のローム土まで到達しないものが多い。また、底面も平坦ではなく湾曲や凹凸が目立ち、他期に比べてその構築状況は極めて脆弱である。

出土遺物に関しては、いずれも埋没土中から加曾利B1式土器片を出土するものの、その数量が1～3点と極めて僅少であることや、580・589号のように中期後半の土器片が混在していることに注意を要する。

これらの諸点については、土坑としての遺構認定可否に連動するものであり、要件を欠くものはあらためて再検討する必要がある。特に、調査区外との境界断面で検出された589号の場合、Ⅷ層上面から掘り込まれていると認識されているが、その埋没土はⅨ層と明確に区別することが難しいことや、後述する当該期の配石遺構がⅧ層内に構築されている点等を考慮すると、樹木や小動物による土壌攪乱痕を土坑として誤認している可能性もある。これらの点を加味すれば、明確に当該期土坑として認定できるものは存在しない可能性が高い。

E. その他の土坑

前述したように、伴出遺物がないか、または複数期にわたる遺物が混在するために、明確な時期同定ができない土坑が存在する。ここでは、大まかな大別時期区分によりその概要を記載する。

中期後半～後期前半 7区より36基が検出されている。形状は円形31基、楕円形2基、不明3基である。その規模は、円形土坑では直径47～99cmが24基、100～128cmが7基と中規模が主体的である。袋状の断面形態を持つものは、659・753号の2基がある。楕円形では、長径100cm未満が1基、71号住居との重複で確定できないが160cmを超えるものが1基ある。

出土遺物では、中位から底面にかけて完形品の磨製石斧や打製石斧各1点を伴う583・753・920号があり、920号では中形の垂角礫5点も伴出する。また中位において、615号は大形棒状礫2点を含む河床礫7点を、648号は中形垂角礫2点を伴う。これらの土坑の中で、人為的な埋没状況を窺うことができるのは、かなり多量のロームブロックが混在する920号のみであるが、615号を除いて打製石斧の副葬や抱石葬などの墓坑的な様相を持つとも考えられる。615号の場合は、棒状礫が立石的な様相を示しており、土坑上部に小規模配石を施した土坑墓の可能性も考慮される。

時期不明 1区2基、2区12基、4区17基、5区2基、7区78基、8区36基、9区1基、10区10基、13区4基の合計162基が存在し、総数の約5割弱が7区に集中している。形状は円形118基、楕円形14基、不整形2基、不明28基であり、円形袋状形態が8区814号の1基に認められる。形態別に規模を見ると、円形では直径50cm未満が5基、50～99cmが86基、100～149cmが47基であり、中形規模のものが多数を占める。楕円形状の場合も、長径53～117cmの中形規模が13基と多数を占める点で円形と大差ないが、7区942号のように長径205cmを測る大形規模も見られる点はその用途を考える上で注意を要する。

前述したように、帰属時期の同定を可能とする出土土器は皆無であるが、住居との切り合い関係からある程度時期想定が可能なものもある。例えば、加曾利E2～E3式期の5区19号住居や8区74号住居に切られる5区981号・8区908号などは、少なくとも同期以前に構築されたことは明白であり、逆に7区982号のように同期の7区55

号住居を切っているものはそれ以降での構築となる。また、埋没土中より磨製石斧や打製石斧を出土する8区798・859号は、その形態や制作技法から判断して中期後半以降であろう。一方、出土遺物はないものの、調査区外との境界断面土層観察でⅦ層上面から掘り込む7区942号は、中期後半以降の可能性が高い。

大・中形の河床礫や垂角礫などの自然的遺物を出土する土坑として、11基が存在する。その出土状況により分類すれば、上～中位の出土が7区426・693・704号、下位～底面が4区286号、7区631・632・692・776・786号、8区894・915号となる。4区286号や7区704号・8区894号を除く各土坑は、多量のロームブロック混入により人為的埋没と想定されるが、特に上記の下位～底面に礫を伴う土坑の多くは、抱石葬等の墓坑に比定される可能性がある。また、7区426・704号では大形棒状河床礫が上位にて立石状の様相を呈しており、墓標的な小配石とも考えられる。一方、底面を埋め尽くすように大形の河床礫や垂角礫が出土する4区286号は、小規模な配石遺構の掘り方部分に相当する可能性もあり、後段で記載する配石遺構とも類似点を有する。こうした特徴的な土坑について、数量的にその大多数を占める7区での分布状況を見ると、そのほとんどが中央部にまとまる傾向を示す。特に704・776号は後期の称名寺I式～堀之内1式期の705・709・791号などと近接しており、時期的にこれらとも近似すると仮定できるならば、当該区域に累世的な集団墓を形成していることも想定される。

第14表 土坑規模一覧(縄文時代)

区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
1	213	第190図	第223図	57895	-75502	円形		89	87	19	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
1	214	第190図	第223図	57880	-75500	円形		96	84	18	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
1	215	第190図	第223図	57877	-75503	円形		124	122	32	関山Ⅱ式期	底面に河床礫1点。関山Ⅱ式1点。
1	216	第190図		57873	-75503	円形		97	94	14	加曽利E3式期	31住と重複。加曽利E3式1点。
1	217	第190図		57864	-75508	円形		62	59	18	不明	
1	218	第190図	第223図	57868	-75508	円形		93	92	64	加曽利E3式期	加曽利E3式1点。削器2点。
1	219	第190図	第223図	57868	-75504	円形		99	97	66	加曽利E3式期	関山Ⅱ式8点,加曽利E3式9点。
1	221	第190図	第223図	57882	-75504	円形		68	62	13	加曽利E3式期	加曽利E3式1点。
1	224	第190図		57881	-75496	円形	○	102	101	64	諸磯a式期	諸磯a式1点。
1	225	第190図	第223図	57877	-75498	円形		160	139	41	加曽利E3式期	下位に中形垂角礫1点,加曽利E3式13点。
1	237	第190図	第223図	57865	-75504	円形		65	59	50	加曽利E3式期	下位に中形河床礫1点,加曽利E3式4点。
1	238	第190図	第223図	57862	-75501	不明		(48)	(30)	42	加曽利E3式期	467Pを切る。中位に胴下部～底部加曽利E3式1点。
1	240	第190図		57858	-75508	不明		77	(33)	38	不明	83住と重複
2	37	第191図	第223図	57928	-75503	円形	○	79	71	78	有尾式期	有尾式18点,関山Ⅱ～有尾式27点。削器1点。
2	38	第191図	第223・224図	57940	-75503	円形		157	156	37	関山Ⅱ式期	48Pに切られる。底面に関山Ⅱ式深鉢の大形破片多数散在。早期末3点,関山Ⅱ式127点,有尾式3点。楔形1点,削器4点。
2	39	第191図	第224図	57936	-75507	円形		113	99	38	有尾式期	有尾式19点。
2	40	第191図		57941	-75498	不明		(127)	(77)	27	不明	
2	41	第191図	第224図	57919	-75486	円形		147	140	22	有尾式期	有尾式4点。
2	42	第192図		57938	-75504	円形		74	66	19	関山Ⅱ式～有尾式期	120坑・66Pと重複。関山Ⅱ～有尾式3点。
2	43	第191図		57939	-75508	円形		104	103	49	有尾式期	有尾式7点。
2	44	第192図	第224図	57936	-75504	円形		172	165	36	有尾式期	45坑を切る。下位に深鉢破片多数点と大形垂角礫1点。関山Ⅱ式8点,関山Ⅱ～有尾式32点。
2	45	第192図	第224図	57936	-75502	円形		148	125	39	有尾式期	44坑に切られる。下位に河床礫1点。有尾式7点。
2	46	第191図	第224図	57933	-75503	円形		103	80	19	有尾式期	有尾式14点。
2	47A	第192図	第224図	57935	-75500	円形		112	(106)	29	不明	47B坑と重複
2	47B	第192図	第224図	57935	-75500	円形		106	(70)	23	有尾式期	47A坑と重複。下位に深鉢破片多数点と河床礫2点。有尾式49点,清水ノ上Ⅱ式1点。
2	48	第191図	第224図	57934	-75502	円形		120	115	41	早期末葉	早期末条痕文2点。
2	49	第192図	第224図	57940	-75497	円形		102	85	24	有尾式期	有尾式3点。
2	50	第191図	第224図	57934	-75492	円形		127	112	62	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式26点。
2	51	第192図	第224図	57939	-75498	円形		88	84	23	関山Ⅱ式期	中位に深鉢破片多数点。関山Ⅱ式22点,有尾式3点。打斧・削器各1点。
2	53	第192図	第225図	57939	-75500	円形		171	166	32	関山Ⅱ式期	下位に深鉢小破片中量・削器類4点と垂角礫3点。関山Ⅰ式2点,同Ⅱ式172点。楔形2点,削器1点。
2	76	第192図	第225図	57935	-75494	円形		145	140	43	有尾式期	92坑を切る。関山Ⅱ式11点,有尾式64点。
2	91	第192図	第225図	57937	-75492	円形	○	142	(116)	61	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式15点。楔形・削器各1点。
2	92	第192図		57935	-75495	不明		99	(47)	23	不明	76坑に切られる。
2	106	第193図	第225図	57931	-75493	円形		133	128	46	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式80点,有尾式5点。
2	107	第192図		57914	-75499	不明		85	(50)	18	不明	2住(弥生)に切られる。
2	108	第193図		57916	-75486	不明		(84)	(50)	15	不明	109坑を切る。
2	109	第193図		57916	-75487	不明		(155)	(23)	24	不明	108坑に切られる。
2	110	第193図	第225図	57913	-75496	不明		(93)	(36)	18	有尾式期	下位に河床礫1点。関山Ⅱ式2点,有尾式1点。
2	111	第193図		57926	-75495	不明		(94)	85	27	不明	117坑を切る。
2	112	第193図		57927	-75490	不明		(99)	(54)	18	不明	1住(古墳)に切られる。
2	113	第193図		57941	-75508	楕円形		82	(49)	14	不明	
2	114	第193図		57933	-75497	円形		69	63	17	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ1点。
2	116	第193図	第225図	57926	-75499	円形		97	92	18	有尾式期	有尾式1点。
2	117	第193図	第225図	57926	-75496	円形		97	94	12	早期末葉	111坑に切られる。早期末条痕文1点。
2	118	第191図		57942	-75501	不明		173	(44)	30	不明	86Pに切られる。削器1点。
2	119	第193図		57931	-75491	円形		97	84	34	不明	
2	120	第192図		57937	-75504	楕円形		111	77	60	不明	42坑と重複。底面に河床礫1点
2	122	第193図	第225図	57925	-75488	円形		114	102	38	関山Ⅱ式期	中位に大形垂角礫1点。関山Ⅱ式2点。
2	136	第193図	第225図	57915	-75493	円形		119	105	25	有尾式期	137坑に切られる。有尾式5点。
2	137	第193図	第225図	57915	-75494	不明		99	73	24	関山Ⅱ式期	136坑を切る。関山Ⅱ式7点。
2	983	第193図	第225図	57935	-75497	円形		48	42	16	関山Ⅱ式期	上位に深鉢大形破片1点。関山Ⅱ式37点。
4	269	第194図	第226図	57987	-75497	円形	○	146	143	54	有尾式期	二ツ木式1点,有尾式30点。
4	270	第195図	第225図	57988	-75489	円形		159	135	38	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式9点。
4	271	第195図	第225図	57988	-75491	円形		(90)	87	32	黒浜式期	601Pと重複。底面に横転・破損した黒浜式の完形深鉢1点。関山Ⅱ式34点,有尾～黒浜式31点。削器1点。
4	272	第195図	第225図	57987	-75491	円形		94	76	32	諸磯b式期	諸磯b式1点。
4	274	第195図	第225図	57987	-75491	円形		69	50	28	諸磯a式期	早期表裏縄文系1点,有尾式・諸磯a式各1点。
4	276	第194図	第225図	57980	-75509	円形		117	115	36	関山Ⅱ式～有尾式期	34住を切る。関山Ⅱ～有尾式2点。

第3章 遺跡の調査内容

区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
4	277	第194図	第226図	57989	-75483	円形		100	92	40	諸磯b式期	中～下位に大形河床礫2点。早期末葉1点, 関山Ⅱ式9点, 諸磯a式2点, 同b式3点。
4	278	第194図		57984	-75501	円形		85	67	37	不明	
4	280	第196図		57986	-75504	円形		90	76	20	関山Ⅱ式～有尾式期	関山Ⅱ～有尾式2点。
4	282	第195図	第225図	57989	-75493	円形		(94)	79	25	関山Ⅱ式～有尾式期	283坑に切られる。関山Ⅱ～有尾式3点。
4	283	第195図		57989	-75494	円形		(62)	46	14	不明	282坑を切る。
4	284	第196図	第225図	57988	-75505	円形		116	101	25	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
4	285	第196図	第226図	57987	-75504	円形		130	118	20	有尾式期	有尾式2点。
4	286	第195図		57983	-75505	円形		102	76	24	不明	287坑を切る。底面に大形河床礫2・亜角礫4点
4	287	第195図	第226図	57983	-75506	円形		128	123	48	関山Ⅱ式期	286坑に切られる。関山Ⅱ式1点。多孔石1点。
4	288	第196図		57991	-75499	円形		105	97	11	不明	
4	291	第196図	第227図	57991	-75504	円形		100	(84)	35	関山Ⅱ式期	下位に関山Ⅱ式深鉢の大形破片と河床礫各1点。関山Ⅱ式5点。台石1点。
4	294	第194図		57991	-75497	円形		73	60	29	不明	
4	296	第194図		57990	-75497	円形		104	88	35	不明	
4	298	第195図	第226図	57990	-75491	円形		100	92	25	有尾式期	下位に横転・破損した有尾式の準完形深鉢1点。有尾式33点。
4	299	第196図	第227図	57992	-75499	円形		(125)	125	32	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式11点。
4	301	第194図	第226図	57989	-75498	円形		146	144	40	有尾式期	有尾式19点, 諸磯b式2点。
4	302	第196図		57988	-75499	円形		(96)	89	20	不明	303坑と重複。
4	303	第196図	第226図	57988	-75500	円形		115	87	21	関山Ⅱ式期	302坑と重複。下位に関山Ⅱ式の深鉢破片多数散在。関山Ⅱ式22点。削器1点。
4	304	第196図		57982	-75504	円形		110	89	31	不明	305坑を切り, 151Pと重複。
4	305	第196図	第227図	57982	-75505	円形		114	104	21	関山Ⅱ式期	304坑に切られる。関山Ⅱ式9点, 有尾式1点。石匙1点。
4	306	第196図	第227図	57982	-75503	円形	○	119	119	33	関山Ⅱ式期	下位に関山Ⅱ式の深鉢破片多数散在。関山Ⅱ式30点, 関山Ⅱ～有尾式2点。
4	307	第195図	第227図	57988	-75487	円形		92	90	30	有尾式期	有尾式17点, 諸磯b式1点。
4	308	第195図	第228図	57987	-75487	円形		87	77	41	有尾式期	有尾式35点。
4	309	第195図		57990	-75487	円形		94	(62)	23	不明	310坑と重複。
4	310	第195図	第227図	57990	-75487	円形		64	55	31	有尾式期	309坑と重複。有尾式8点。
4	311	第197図	第228図	57995	-75492	円形		145	(109)	24	関山Ⅱ式期	中位に深鉢破片多数散在。関山Ⅱ式24点。
4	314	第194図		57990	-75484	円形		73	72	39	不明	
4	333	第194図	第228図	57990	-75481	円形	○	109	97	70	関山Ⅱ式～有尾式期	334坑を切る。関山Ⅱ～有尾式5点。
4	334	第194図		57989	-75482	円形		115	(90)	50	不明	333坑に切られる。
4	335	第197図		57992	-75479	円形		85	(64)	17	不明	
4	336	第197図	第228図	57994	-75480	円形		144	(84)	29	関山Ⅱ式期	337坑を切る。関山Ⅱ式1点。
4	337	第197図		57993	-75480	円形		149	145	18	不明	336坑に切られる。
4	338	第197図		57995	-75483	円形		68	67	15	不明	
4	339	第197図	第228図	57995	-75483	円形		78	74	24	関山Ⅱ式～有尾式期	関山Ⅱ～有尾式1点。
4	340	第197図		57979	-75512	不明		(75)	(13)	27	不明	
4	341	第194図		57981	-75508	円形		(86)	77	19	不明	
4	342	第197図		57995	-75480	不明		(70)	(41)	16	不明	
5	138	第197図	第228図	57696	-75537	円形		81	58	41	加曾利E3式期	18住に切られる。加曾利E1～3式3点。削器2点。
5	139	第197図	第228図	57696	-75533	円形		67	61	37	堀之内2式期	堀之内2式2点, 後期中葉2点。楔形・削器各1点。
5	141	第197図	第228図	57700	-75539	円形		90	79	38	加曾利E4式期	142坑を切る。加曾利E3式9点, 同E4式5点, 中期後半18点。
5	142	第197図		57700	-75538	円形		113	(87)	30	不明	141坑に切られる。
5	981	第197図		57702	-75537	円形		97	91	29	不明	19住に切られる。
7	346	第198図	第229・230図	57748	-75534	円形		133	130	40	焼町土器期	中位に深鉢破片多数散在。阿玉台Ib式1点, 勝坂2式68点・同3式7点, 新巻6点, 焼町26点。磨石類1点。
7	347	第198図	第230図	57746	-75535	円形		80	80	35	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式2点。
7	351	第199図	第230図	57729	-75524	円形		167	153	24	加曾利E5式期	下位到中形河床礫・磨石類各1点と加曾利E5式の深鉢大形破片1点。加曾利E5式20点, 堀之内1式3点。
7	352	第199図	第230図	57773	-75526	円形		132	100	22	関山Ⅱ式期	359坑を切る。関山Ⅱ式2点。
7	357	第199図		57773	-75524	円形		55	53	33	不明	
7	358	第199図		57772	-75525	楕円形		100	72	32	不明	359坑に切られる。
7	359	第199図		57772	-75525	円形		97	(62)	19	不明	352坑に切られ, 358坑を切る。
7	361	第199図	第230図	57771	-75528	円形		123	(113)	47	加曾利E3式期	底面に小形河床礫2点。加曾利E3式20点。打斧1点, 削器2点。
7	362	第199図	第230図	57769	-75528	円形	○	(112)	(107)	51	堀之内1式期	底面に中形河床礫2点。関山Ⅱ式7点, 有尾式・加曾利E4式・堀之内1式各1点。
7	366	第199図		57765	-75530	円形		52	45	16	不明	
7	368	第199図		57769	-75534	不明		112	(73)	48	不明	
7	378	第199図		57720	-75528	不明		(51)	(17)	33	不明	

4. 縄文時代の遺構と遺物

区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
7	381	第200図	第230図	57713	-75553	円形		153	139	55	堀之内1式期	加曾利E3式6点,堀之内1式4点。削器2点。
7	382	第200図	第230図	57713	-75551	円形		76	70	51	加曾利E1式期	加曾利E1式19点,郷土式2点。
7	383	第199図	第230図	57710	-75554	不明		86	(80)	27	加曾利E4式期	622坑を切る。加曾利E1式・同E3式各1点,同E4式4点。
7	389	第200図	第231図	57721	-75550	不明		76	(45)	43	加曾利E3式期	加曾利E3式2点。
7	393	第200図	第231図	57725	-75551	円形		63	62	23	堀之内2式期	395坑と重複。堀之内2式3点,後期中葉1点。
7	395	第200図	第231図	57724	-75552	円形		94	73	27	加曾利B1式期	484Pに切られ,393坑と重複。中位に深鉢・分銅形打斧・垂角礫各1点。加曾利B1式1点。
7	397	第200図	第231図	57726	-75549	円形		98	95	20	堀之内2式期	堀之内2式1点。
7	398	第200図		57728	-75549	円形		55	49	21	不明	
7	400	第201図		57726	-75548	円形		70	62	19	不明	
7	402	第201図		57724	-75547	円形		56	56	23	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半1点。
7	403	第201図		57725	-75546	円形		95	80	33	中期後半～後期前半	417坑と重複。中期後半～後期前半4点。
7	404	第201図		57728	-75546	円形		51	(47)	23	不明	405坑を切り,266Pと重複。
7	405	第201図		57728	-75546	円形		74	(42)	24	不明	404坑に切られる。
7	407	第201図		57726	-75546	円形		62	56	25	不明	
7	408	第201図		57726	-75547	円形		61	54	23	不明	419坑に切られる。
7	409	第201図		57727	-75546	楕円形		60	40	18	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半6点。
7	410	第200図	第231図	57722	-75550	円形		72	68	21	加曾利B1式期	加曾利B1式1点。削器1点。
7	417	第201図	第231図	57725	-75547	円形		104	95	38	加曾利E2式期	403坑と重複。中位に深鉢破片複数点と小形垂角礫1点。加曾利E2式2点。
7	418	第200図	第231図	57713	-75550	円形		107	100	52	加曾利E3式期	55住を切る。加曾利E3式4点。磨石類1点。
7	419	第201図	第231図	57727	-75547	円形		124	111	29	加曾利E3式期	408坑・256Pと重複。加曾利E3式2点。
7	420	第200図	第231図	57724	-75543	円形		68	62	41	堀之内1式期	加曾利E2式5点,堀之内1式2点。打斧1点。
7	421	第200図		57721	-75545	円形		77	59	29	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半4点。
7	424	第200図	第231図	57731	-75544	楕円形		106	69	30	加曾利B1式期	加曾利B1式3点。
7	425	第201図		57738	-75542	円形		69	66	16	不明	
7	426	第201図	第231図	57740	-75541	円形		(89)	70	70	不明	620坑と重複。上位に大形河床礫2点。磨石類1点。
7	428	第201図		57728	-75547	円形		60	53	13	不明	
7	429	第202図		57730	-75542	楕円形		70	63	31	不明	
7	436	第202図	第231図	57790	-75520	円形		56	54	19	中期後半～後期前半	関山Ⅱ式・諸磯b式各1点,中期後半～後期前半5点。
7	507	第202図	第231図	57747	-75527	円形		193	185	94	加曾利B2式期	55溝を切る。下位に深鉢破片複数点と河床礫1点。堀之内1式1点,加曾利B2式2点。磨石類1点。
7	512	第201図	第231図	57729	-75547	円形		109	88	47	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式3点。削器1点。
7	519	第202図		57724	-75548	円形		47	36	24	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半9点。
7	525	第202図		57724	-75553	不整形		88	60	22	不明	
7	526	第202図		57724	-75554	不明		(40)	(25)	20	不明	
7	559	第203図		57757	-75536	不明		81	(75)	30	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半6点。
7	562	第203図	第231図	57753	-75534	円形		127	106	21	加曾利B1式期	731坑と重複。加曾利B1式2点。
7	563	第203図		57752	-75535	円形		67	61	37	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半4点。
7	564	第198図	第231図	57750	-75534	円形		99	87	34	堀之内1式期	388Pを切り,736坑と重複。堀之内1式1点,後期前半11点。
7	567	第205図	第232図	57757	-75527	円形		146	142	39	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式17点。
7	572	第202図	第231図	57749	-75525	円形		128	109	28	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式2点。
7	573	第205図	第232図	57757	-75524	円形		58	55	25	加曾利E3式期	776坑・788坑と重複。下位に大形河床礫1点。加曾利E3式5点。
7	574	第205図		57757	-75523	円形		89	76	25	中期後半～後期前半	788坑・789坑・560Pと重複。中期後半～後期前半3点。
7	575	第205図		57758	-75523	円形		63	59	17	中期後半～後期前半	823坑・716坑と重複。中期後半～後期前半4点。
7	577	第205図	第232図	57758	-75521	円形		67	64	22	堀之内2式期	717坑・714坑と重複。堀之内2式1点。
7	578	第205図	第232図	57758	-75520	円形		113	93	63	勝坂1式期	中位に勝坂1式の深鉢土器1点が大形破片に分散して横位出土。他に焼町1点,加曾利E3式2点,石器剥片複数点。
7	579	第204図		57752	-75522	円形		68	65	38	中期後半	中期後半1点。
7	580	第202図	第232図	57753	-75524	円形		122	(110)	39	加曾利B1式期	581坑を切る。加曾利E3式5点,加曾利B1式3点。削器1点。
7	581	第202図	第232図	57753	-75525	円形		(139)	132	59	加曾利E3式期	580坑に切られる。関山Ⅱ式3点,加曾利E3式6点。
7	582	第202図	第232図	57751	-75528	円形		93	87	25	勝坂2式期	関山Ⅱ式・勝坂2式各2点。
7	583	第202図		57763	-75526	円形		72	60	28	中期後半～後期前半	10号配石と重複。下位に磨斧1点。中期後半～後期前半7点。

第3章 遺跡の調査内容

区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
7	584	第202図		57776	-75533	円形		85	80	23	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半5点。
7	585	第204図	第232図	57775	-75532	円形		65	58	27	中期後半	638坑を切る。関山Ⅱ式2点,中期後半11点。
7	587	第206図		57770	-75522	円形		89	(81)	53	中期後半～後期前半	60A住・518Pと重複。中期後半～後期前半1点。
7	589	第206図	第232図	57717	-75555	不明		138	(60)	38	加曽利B1式期	56住を切る。加曽利B1式2点,中期後半～後期前半9点。
7	591	第198図		57747	-75538	円形		96	85	20	中期後半～後期前半	関山Ⅱ式4点,中期後半～後期前半16点。
7	595	第206図		57790	-75513	円形		57	51	30	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半4点。
7	596	第206図	第232図	57740	-75525	円形		211	180	46	加曽利E2式期	諸磯b式・加曽利E2式各2点。
7	597	第207図	第232図	57721	-75538	円形		120	113	44	加曽利E2式期	前期末・新巻各2点,加曽利E2式3点。
7	601	第207図		57793	-75520	不明		90	75	22	関山Ⅱ式期	57住と重複。関山Ⅱ式2点。
7	606	第207図	第232図	57767	-75526	円形		62	60	25	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
7	609	第207図	第232図	57770	-75524	楕円形		60	46	23	加曽利E3式期	加曽利E3式1点。
7	610	第207図		57769	-75523	円形		64	56	21	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半1点。
7	612	第207図		57767	-75524	円形		64	54	22	勝坂2式期	勝坂2式1点。
7	615	第207図	第232図	57768	-75522	円形		128	119	24	中期後半～後期前半	525・527Pに切られる。中位に大形棒状礫2点を含む河床礫7点。新巻2点,中期後半6点。
7	618	第207図	第232図	57737	-75541	円形		104	99	40	堀之内2式期	堀之内2式4点。
7	619	第208図	第232図	57773	-75519	円形		87	79	25	関山Ⅱ式期	中～下位に大形河床礫3点。関山Ⅱ式1点。
7	620	第201図	第232図	57741	-75541	円形		113	99	40	加曽利E2式期	426坑と重複。加曽利E2式42点,郷土式1点。
7	621	第201図		57742	-75540	不明		(127)	(40)	30	不明	
7	622	第199図		57711	-75554	円形		60	55	28	中期後半～後期前半	383坑に切られる。中期後半～後期前半2点。
7	623	第207図		57711	-75556	不明		(79)	(35)	50	不明	
7	624	第207図	第232図	57766	-75519	円形		67	65	36	不明	石鎌1点。
7	629	第207図	第233図	57768	-75520	円形	○	113	106	58	焼町土器期	630坑を切る。焼町3点。打斧1点。
7	630	第207図		57769	-75519	不明		59	(34)	26	不明	629坑に切られる。
7	631	第207図		57769	-75518	円形		50	45	17	不明	下位に大形垂角礫1点。
7	632	第208図		57771	-75518	円形		68	65	58	不明	底面に大形垂角礫1点。
7	633	第208図	第233図	57772	-75518	円形		107	97	37	関山Ⅱ式期	下位に打斧1点。関山Ⅱ式1点。打斧1点。
7	637	第208図	第233図	57778	-75529	円形	○	105	102	36	関山Ⅱ式期	62住と重複。関山Ⅱ式3点。
7	638	第204図	第233図	57775	-75531	円形		125	92	25	関山Ⅱ式期	585坑に切られ,62住と重複。関山Ⅱ式2点。
7	639	第208図	第233図	57776	-75525	円形		124	102	20	関山Ⅱ式期	365Pと重複。中位に横転・破損した関山Ⅱ式の準完形深鉢1点。関山Ⅱ式179点。
7	640	第208図		57712	-75554	円形		51	49	12	不明	
7	641	第209図		57766	-75517	不明		103	(84)	58	不明	643坑と重複。
7	642	第207図	第233図	57769	-75518	円形		103	98	13	勝坂2式期	阿玉台Ⅱ式2点,勝坂2式1点。
7	643	第209図	第233図	57766	-75517	不明		63	(45)	40	勝坂2式期	641坑と重複。勝坂2式1点。
7	644	第208図	第233図	57774	-75530	円形		140	138	30	関山Ⅱ式期	62住と重複。関山Ⅱ式27点。石匙1点。
7	645	第209図		57774	-75528	円形		93	72	19	不明	62住と重複
7	647	第210図	第233図	57778	-75526	円形		115	103	37	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式2点。
7	648	第209図	第233図	57721	-75536	円形		118	115	50	中期後半～後期前半	中位に中形垂角礫2点。関山Ⅱ式5点,中期後半～後期前半10点。
7	649	第210図	第233図	57778	-75524	円形?		122	(105)	20	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
7	654	第210図		57779	-75524	円形		82	73	19	不明	530Pを切り,344Pと重複。
7	655	第210図	第233図	57780	-75525	円形		103	100	29	関山Ⅱ式期	底面に石器剥片と垂角礫各1点。関山Ⅱ式2点。
7	656	第209図		57775	-75517	円形		92	85	27	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式8点。
7	657	第209図	第233図	57776	-75516	円形		121	114	20	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式41点。
7	658	第210図	第233図	57779	-75521	円形		105	100	26	関山Ⅱ式期	中～下位に大形河床礫1点。関山Ⅱ式3点。磨石類・石核各1点。
7	659	第210図	第233図	57777	-75521	円形	○	109	106	50	中期後半～後期前半	660坑を切る。阿玉台Ⅱ式1点,中期後半～後期前半8点。削器1点。
7	660	第210図	第233図	57777	-75521	円形?	○	105	102	37	関山Ⅱ式期	659坑に切られる。関山Ⅱ式17点。
7	661	第208図		57778	-75528	円形		92	80	23	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式2点。削器1点。
7	662	第208図	第233図	57773	-75519	円形		120	103	19	関山Ⅱ式期	下位に大形河床礫1点。関山Ⅱ式2点。
7	663	第210図	第234図	57780	-75522	円形		90	88	19	関山Ⅱ式期	下位に関山Ⅱ式の準完形深鉢2点が破片で散在。関山Ⅱ式9点。
7	664	第208図	第233図	57773	-75517	不明		104	(49)	17	関山Ⅱ式期	665坑に切られる。関山Ⅱ式1点。
7	665	第208図		57772	-75516	円形		110	106	40	中期後半～後期前半	664坑を切る。中期後半～後期前半1点。
7	667	第209図		57780	-75517	不明		(68)	57	25	不明	992坑と重複。
7	668	第211図		57762	-75519	円形		117	107	39	不明	725坑と重複。
7	669	第210図	第233図	57777	-75521	円形?		107	(74)	34	諸磯b式期	675坑に切られ,701坑を切る。有尾式4点,諸磯b式1点。

4. 縄文時代の遺構と遺物

区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
7	670	第211図	第234図	57765	-75521	円形	○	105	102	58	加曾利E2式期	上位に大形河床礫1点。焼町17点,加曾利E2式5点。磨石類1点。
7	671	第211図		57764	-75522	円形		110	89	37	五領ヶ台式期	五領ヶ台式1点。
7	672	第211図	第233図	57763	-75522	円形		113	100	36	三原田式期	378Pを切る。関山Ⅱ式2点,三原田式1点,後期後半4点。
7	673	第205図	第234図	57759	-75524	隅丸長方形		234	180	72	堀之内Ⅱ式期	709坑を切り,791坑と重複。加曾利E5式5点,堀之内Ⅱ式2点,三十稲場式1点,後期前半14点。石鏃・台石各1点。
7	674	第208図	第234図	57773	-75515	円形		99	98	38	関山Ⅱ式期	底面に横転・破損した関山Ⅱ式の準完形深鉢2点。関山Ⅱ式42点。
7	675	第210図	第233図	57778	-75522	円形		100	92	35	中期後半～後期前半	699坑・701坑を切る。中期後半～後期前半2点。磨斧1点。
7	676	第208図		57775	-75516	円形		60	47	41	不明	
7	678	第205図		57760	-75523	円形		60	54	21	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半4点。
7	681	第205図	第233図	57759	-75522	円形		53	47	51	堀之内Ⅰ式期	関山Ⅱ式1点,堀之内Ⅰ式7点。石鏃1点。
7	682	第209図	第235図	57765	-75527	円形	○	98	96	30	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式18点。楔形1点。
7	683	第209図	第235図	57764	-75528	円形		80	75	35	中期後半	694坑を切る。関山Ⅱ式1点,中期後半5点。
7	685	第209図		57764	-75528	円形		63	58	44	不明	
7	686	第204図	第235図	57750	-75520	楕円形		(167)	102	35	中期後半～後期前半	71住と重複。関山Ⅱ式1点,中期後半～後期前半2点。
7	688	第209図	第235図	57764	-75518	円形		119	114	62	勝坂Ⅱ式期	下位に深鉢破片複数点と中形河床礫1点。早期沈線文・諸磯c式各1点,関山Ⅱ式9点,勝坂Ⅱ式22点。
7	691	第199図		57769	-75527	楕円形		53	47	35	不明	
7	692	第199図		57771	-75528	円形		56	46	36	不明	下位に大形河床礫1点。
7	693	第207図		57766	-75520	円形		94	85	47	不明	328Pと重複。中位に大形河床礫1点。
7	694	第209図	第235図	57764	-75530	円形		85	75	20	関山Ⅱ式期	683坑に切られる。関山Ⅱ式16点。
7	700	第211図		57763	-75520	円形		70	64	23	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
7	701	第210図		57778	-75522	不明		90	(56)	27	不明	
7	704	第205図		57757	-75525	円形		92	81	25	不明	上～中位に立位の大形棒状河床礫と他河床礫・亜角礫各1点。
7	705	第205図	第235図	57758	-75525	円形		105	92	33	堀之内Ⅰ式期	362Pに切られ,709坑と重複。中～下位に大・中形河床礫4点。加曾利E4式2点,堀之内Ⅰ式1点,中期後半～後期前半11点。磨石類1点。
7	707	第211図		57764	-75520	楕円形		113	77	49	不明	底面に小穴。
7	708	第204図		57751	-75522	円形		134	115	25	不明	71住と重複。
7	709	第205図	第236図	57759	-75524	円形		107	95	53	称名寺Ⅱ式期	673坑に切られ,553Pを切る。705坑と重複。加曾利E4式・称名寺Ⅰ・同Ⅱ式各1点,中期後半～後期前半17点。磨石類1点。
7	710	第205図		57760	-75521	円形		64	49	31	不明	669・675坑に切られる。
7	711	第210図		57759	-75533	円形		99	91	28	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半2点。
7	712	第205図		57758	-75520	円形		74	63	21	不明	
7	713	第205図		57756	-75523	円形		79	70	28	不明	
7	714	第205図	第235図	57757	-75521	円形	○	95	95	50	焼町土器期	577坑と重複。上～中位に立位の棒状河床礫1点・焼土ブロックと底面に横転・破損した焼町土器の完形深鉢1点。新巻6点,焼町1点,中期後半7点。磨石類1点。
7	715	第203図		57756	-75537	円形		84	72	11	不明	
7	716	第205図	第235図	57759	-75523	円形		117	110	31	勝坂Ⅱ式期	717坑を切り,575坑・393Pと重複。勝坂Ⅱ式6点。削器1点。
7	717	第205図	第236図	57758	-75522	円形		93	89	44	焼町土器期	716坑を切り,577坑と重複。上～中位に深鉢破片多数点と打斧3・削器1点。五領ヶ台式2点,勝坂Ⅱ式8点,焼町1点,中期後半28点。打斧3点,削器1点。
7	719	第210図		57760	-75531	楕円形		62	43	28	不明	
7	725	第211図	第236図	57762	-75519	円形		86	84	44	新巻類型期	726坑を切り,668坑と重複。新巻24点。打斧1点。
7	726	第211図	第236図	57761	-75518	不明		(74)	(51)	36	新巻類型期	725坑に切られる。新巻120点。
7	729	第203図	第235図	57755	-75537	円形		81	(57)	15	関山Ⅱ式期	536Pに切られ,990坑と重複。関山Ⅱ式1点。
7	731	第203図		57754	-75535	円形		105	104	17	関山Ⅱ式期	535・396Pに切られ,562坑と重複。関山Ⅱ式1点。
7	732	第198図	第237図	57751	-75535	円形		68	61	24	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式2点。
7	735	第198図		57750	-75535	円形		45	41	21	不明	
7	736	第198図	第236図	57749	-75534	円形		114	112	45	新巻類型期	388Pを切り,564坑と重複。新巻29点。
7	737	第198図		57750	-75536	円形		94	85	26	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半3点。
7	738	第203図		57754	-75533	円形		80	77	12	不明	
7	739	第203図	第237図	57754	-75536	円形		100	95	44	中期後半	中期後半5点。
7	742	第211図		57788	-75516	不明		(60)	(23)	5	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半1点。
7	744	第203図		57757	-75532	楕円形		90	65	16	不明	
7	745	第198図		57750	-75537	円形		71	55	23	不明	
7	746	第211図		57755	-75528	円形		110	108	41	不明	
7	747	第198図	第237図	57747	-75537	円形		112	97	35	中期後半	748坑を切る。中期後半3点。磨石類1点。

第3章 遺跡の調査内容

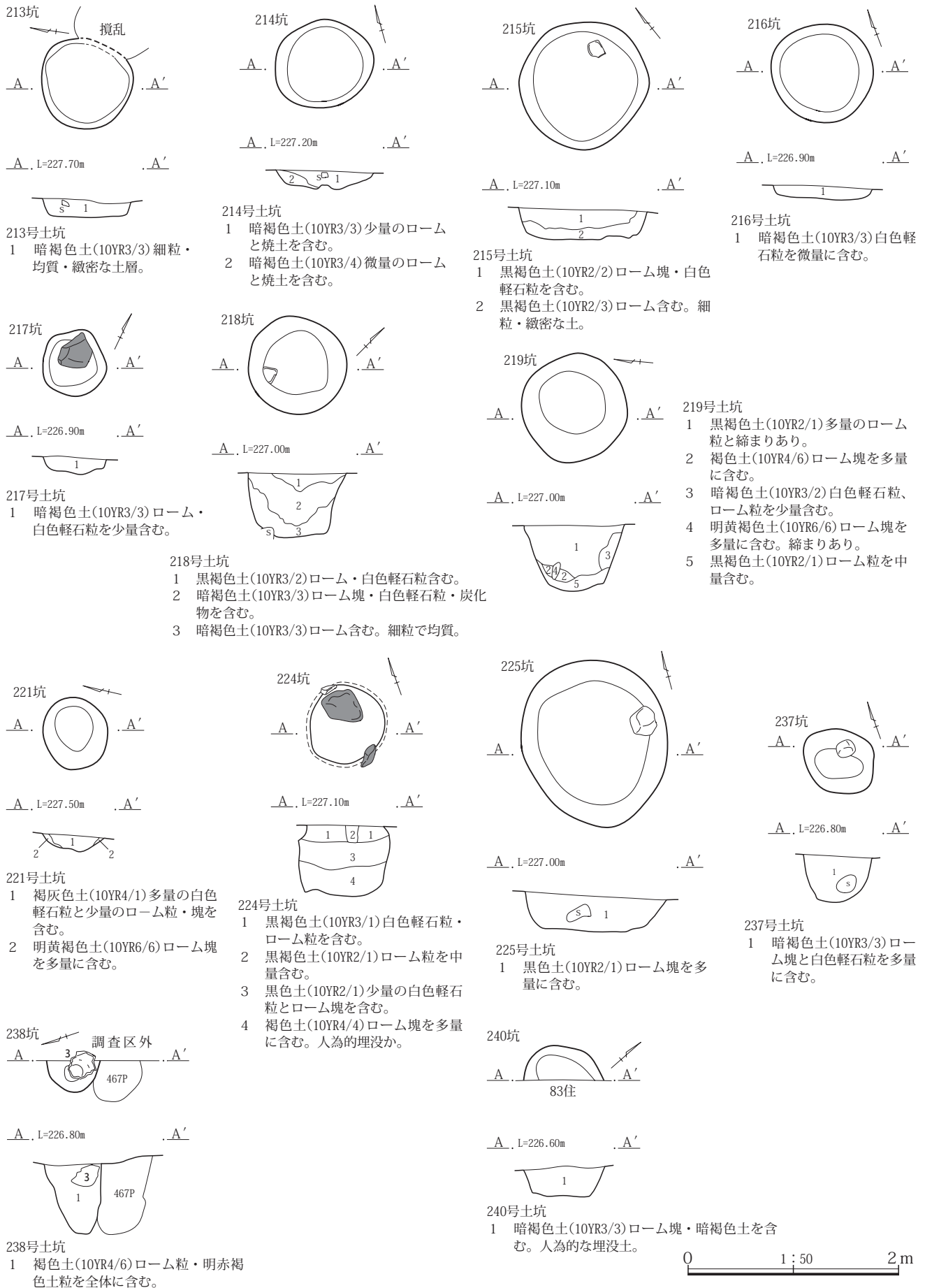
区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
7	748	第198図	第237図	57748	-75537	円形		113	(96)	30	加曾利E2式期	747坑に切られる。加曾利E2式1点。
7	749	第198図		57751	-75537	円形		55	48	17	不明	539Pを切る。
7	751	第203図	第237図	57754	-75531	円形		112	109	28	加曾利B2式期	752坑に切られる。加曾利B2式16点。削器1点。
7	752	第203図	第237図	57753	-75531	円形		93	88	35	焼町土器期	751坑を切る。関山Ⅱ式・勝坂式各6点, 焼町9点, 中期後半24点。
7	753	第211図	第237図	57749	-75531	円形	○	125	121	44	中期後半～後期前半	754坑を切る。底面に打斧1点。中期後半～後期前半5点。
7	754	第211図	第237図	57750	-75532	不明		83	(70)	17	中期後半～後期前半	753坑に切られる。関山Ⅱ式・五領ヶ台式各1点, 中期後半～後期前半2点。磨石類1点。
7	758	第204図		57748	-75523	円形		74	69	20	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半5点。
7	766	第212図		57738	-75527	円形		40	39	28	不明	
7	767	第212図		57736	-75531	円形		81	70	32	不明	385Pに切られる。
7	768	第212図	第237図	57736	-75533	円形		80	61	29	中期後半	中期後半1点。
7	769	第212図		57734	-75530	円形		78	55	39	中期後半	中期後半3点。
7	771	第212図		57733	-75532	円形		85	83	35	不明	
7	772	第212図	第237図	57733	-75533	円形		113	93	35	中期後半～後期前半	関山Ⅱ式・中期後半～後期前半各1点。
7	773	第212図		57732	-75526	円形		61	46	24	不明	
7	774	第212図		57784	-75515	円形		87	82	30	不明	
7	776	第205図	第237図	57756	-75524	円形		99	89	33	不明	788坑を切り, 573坑・392Pと重複。中～下位に楔形・多孔付石皿片各1点と河床礫2点。
7	782	第212図		57732	-75530	楕円形		85	50	30	後期前半	後期前半1点。
7	784	第212図		57735	-75534	円形		83	58	47	不明	
7	786	第203図	第237図	57752	-75537	円形		130	116	30	不明	下位に中形の磨石1点, 板状亜角礫2点。
7	788	第205図	第238図	57757	-75524	円形		99	94	67	関山Ⅱ式期	789坑を切り, 776坑に切られる。573坑・574坑と重複。下位に関山Ⅱ式の深鉢大形破片複数点。関山Ⅱ式13点。削器1点。
7	789	第205図	第237図	57757	-75524	円形		136	(98)	44	関山Ⅱ式期	790坑を切り, 788坑に切られる。574坑と重複。関山Ⅱ式1点。
7	790	第205図		57758	-75524	円形		94	90	40	中期後半～後期前半	789坑に切られ, 823坑と重複。中期後半～後期前半2点。
7	791	第205図	第238図	57760	-75523	円形		98	97	50	称名寺Ⅰ式期	中位のルームブロック直下に大形河床礫1点・亜角礫4点と丸石状磨石1点の直下に称名寺Ⅰ式の中形破片1点。関山Ⅱ式1点, 後期前半3点。
7	792	第212図		57725	-75538	円形		85	85	49	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半13点。
7	793	第205図		57759	-75527	円形		79	65	40	不明	
7	823	第205図		57758	-75523	不明		(70)	(55)	-19	中期後半	575・790坑と重複。中期後半1点。
7	882	第212図		57734	-75535	円形		71	57	38	不明	
7	883	第212図		57730	-75535	円形		59	50	38	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半1点。
7	884	第213図		57727	-75538	円形		114	109	32	不明	
7	885	第213図	第237図	57727	-75542	円形		95	92	24	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半1点。打斧1点。
7	920	第213図	第238図	57730	-75539	円形		94	86	43	中期後半～後期前半	中～下位に分銅形打斧1点と中形亜角礫5点。中期後半～後期前半4点。
7	921	第213図		57733	-75540	不明		(88)	(49)	15	不明	
7	922	第213図	第238図	57792	-75525	円形	○	117	99	83	有尾式期	80住を切る。関山Ⅱ式・有尾式各3点。削器1点。
7	924	第213図		57808	-75524	円形		91	79	36	不明	
7	929	第213図	第238図	57798	-75524	円形		112	110	47	堀之内Ⅰ式期	947坑と重複。加曾利E3式3点, 堀之内Ⅰ式1点, 中期後半～後期前半12点。楔形・削器各1点。
7	930	第213図	第238図	57807	-75521	円形		99	(46)	34	有尾式期	関山Ⅱ式15点, 有尾式2点。
7	933	第214図	第238図	57795	-75524	円形		130	127	54	堀之内Ⅰ式期	80住を切る。称名寺Ⅰ式1点, 堀之内Ⅰ式2点, 後期前半12点。削器1点。
7	937	第213図		57811	-75524	楕円形		106	86	18	不明	
7	942	第213図		57800	-75528	楕円形?		205	(57)	73	不明	Ⅶ層上面から掘り込む
7	944	第214図		57800	-75526	円形		110	91	33	不明	945坑に切られる。
7	945	第214図		57801	-75525	円形		113	94	20	不明	944坑を切る。
7	947	第213図		57799	-75524	円形?		120	(105)	31	不明	929坑と重複。
7	952	第214図		57808	-75521	円形?		87	80	23	不明	
7	958	第213図		57799	-75523	楕円形		107	81	21	不明	
7	959	第214図	第238図	57801	-75520	円形		135	(60)	23	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式4点。
7	960	第214図	第238図	57799	-75521	円形		135	122	30	関山Ⅱ式期	底面に中形亜角礫2点。関山Ⅱ式2点。
7	961	第214図		57798	-75520	円形		122	97	32	不明	
7	966	第214図	第228図	57795	-75523	円形?		101	(72)	25	加曾利E3式期	関山Ⅱ式3点, 加曾利E3式2点, 中期後半21点。打斧・磨石類各1点。
7	968	第214図		57795	-75521	円形		105	81	29	不明	
7	975	第214図		57798	-75519	楕円形		142	105	21	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式3点。
7	982	第214図		57714	-75548	円形		100	93	26	不明	55住を切る。

4. 縄文時代の遺構と遺物

区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
7	985	第200図		57725	-75543	円形		37	37	18	不明	
7	986	第203図		57755	-75534	円形		71	58	22	不明	
7	987	第203図		57754	-75538	円形		48	47	28	堀之内Ⅰ式期	988坑を切る。堀之内Ⅰ式1点。
7	988	第203図	第228図	57753	-75537	円形		56	(43)	25	加曽利B2式期	987坑に切られる。加曽利B2式1点。
7	989	第203図	第228図	57756	-75536	円形		73	60	26	加曽利E3式期	底面に垂角礫1点。加曽利E3式1点。
7	990	第203図		57755	-75536	不明		56	(33)	23	不明	729坑・291Pと重複。
7	991	第214図		57771	-75533	円形		34	32	13	不明	61住と重複。
7	992	第209図		57780	-75516	円形		72	65	54	不明	667坑と重複。
8	720	第215図		57820	-75503	円形		58	50	23	加曽利E3式期	721坑を切る。加曽利E3式3点。
8	721	第215図	第239図	57820	-75503	円形		52	36	35	加曽利E3式期	720坑に切られる。加曽利E3式4点。
8	722	第215図	第239図	57817	-75501	円形		195	134	57	加曽利E3式期	79住を切る。下位に垂角礫4点。加曽利E3式93点。打斧1点。
8	723	第216図	第239図	57824	-75508	円形		140	140	44	加曽利E3式期	加曽利E3式41点。
8	724	第215図	第239図	57826	-75511	円形		125	110	25	堀之内Ⅰ式期	底面に中形垂角礫2点。加曽利E3式・堀之内Ⅰ式各8点。
8	741	第215図		57823	-75502	楕円形		70	43	30	加曽利E3式期	加曽利E3式3点。
8	797	第215図		57802	-75504	円形		97	88	26	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
8	798	第215図	第239図	57802	-75506	円形		98	87	61	不明	磨斧1点。
8	799	第217図		57804	-75506	円形		56	52	39	不明	
8	801	第217図		57809	-75506	円形		75	57	28	加曽利E3式期	554Pに切られる。加曽利E3式1点。
8	802	第217図		57811	-75507	楕円形		77	52	35	不明	
8	805	第217図	第239図	57811	-75505	円形		96	83	47	加曽利E3式期	阿玉台Ⅰa式・加曽利E3式各1点。
8	807	第217図		57810	-75503	円形		57	49	34	不明	
8	808	第217図		57810	-75502	円形		48	45	26	不明	
8	810	第217図		57814	-75508	円形		75	62	27	不明	
8	812	第217図		57813	-75505	円形		67	61	13	加曽利E3式期	加曽利E3式1点。
8	813	第217図		57813	-75504	円形		67	59	20	不明	
8	814	第217図		57813	-75507	円形	○	95	93	70	不明	石核1点。
8	815	第217図		57812	-75510	不明		96	(75)	39	加曽利E3式期	ロームブロック混土で一括埋没。加曽利E3式6点。
8	818	第217図		57815	-75503	円形		54	53	15	不明	
8	819	第217図		57813	-75503	円形		60	57	30	不明	
8	820	第217図		57815	-75504	楕円形		108	47	49	中期後半	中位に棒状河床礫・垂角礫各1点。中期後半1点。
8	821	第217図		57817	-75505	楕円形		62	43	17	中期後半	中期後半1点。
8	822	第217図	第239図	57811	-75506	円形		100	93	35	加曽利E3式期	加曽利E3式5点。
8	827	第218図		57818	-75507	円形		91	89	19	中期後半	底面近くに垂角礫1点。中期後半6点。
8	828	第215図		57820	-75505	円形		101	96	15	不明	
8	829	第218図		57818	-75511	不明		(93)	(54)	32	不明	
8	830	第216図	第239図	57820	-75508	円形		55	44	31	三原田式期	関山Ⅱ式・三原田式各1点。
8	831	第215図	第239図	57820	-75502	円形		80	75	43	三原田式期	関山Ⅱ式・三原田式各1点。
8	834	第215図		57819	-75505	円形		51	40	22	不明	
8	835	第217図		57815	-75506	円形		85	65	56	不明	
8	836	第216図		57923	-75505	円形		70	52	13	不明	420Pに切られる。
8	837	第217図		57813	-75510	円形		67	48	28	不明	
8	838	第217図		57815	-75502	円形	○	72	70	54	中期後半	ロームブロック混土で埋没。79住と重複。中期後半3点。
8	839	第217図	第239図	57812	-75502	円形	○	69	65	35	加曽利E2式期	加曽利E2式3点。
8	840	第217図	第239図	57811	-75502	円形	○	86	79	49	加曽利E3式期	564Pに切られる。下位に大形棒状河床礫2・垂角礫1点と打斧1点。加曽利E3式1点, 中期後半4点。
8	842	第218図	第239図	57808	-75503	円形?	○	118	(64)	42	加曽利E3式期	勝坂2式1点, 加曽利E3式13点。
8	843	第218図	第239図	57821	-75503	円形		52	43	30	阿玉台Ⅱ式期	関山Ⅱ式・阿玉台Ⅱ式各1点。石核1点。
8	845	第218図		57836	-75505	円形		83	78	44	中期後半	中期後半1点。
8	846	第219図	第239図	57836	-75508	円形		71	56	37	加曽利E2式期	中位に加曽利E2式深鉢大形破片・多孔石各1点。76住と重複。
8	848	第216図		57820	-75509	円形		94	90	56	不明	
8	850	第218図	第239図	57818	-75510	円形		91	84	28	阿玉台Ⅱ式期	阿玉台Ⅱ式1点。
8	852	第216図		57821	-75509	円形		131	104	35	不明	853坑に切られる。
8	853	第216図	第239図	57821	-75509	不明		118	70	27	関山Ⅱ式期	852坑を切る。879坑と重複。下位に大形河床礫1点。関山Ⅱ式5点。
8	855	第216図		57822	-75508	円形		83	(80)	24	不明	856坑に切られる。
8	856	第216図		57823	-75509	楕円形		117	98	33	不明	855坑を切る。
8	859	第216図	第239図	57823	-75511	円形		85	71	41	不明	中位に打斧・削器各1点。
8	862	第216図	第240図	57824	-75510	円形		78	69	35	阿玉台Ⅰa式期	中～下位に二分割石皿が載る伏せた阿玉台Ⅰa式の完形浅鉢1点と磨石類1点。鉢破りか。阿玉台Ⅰa式28点。
8	863	第216図		57822	-75507	円形		130	119	17	不明	
8	864	第216図	第239図	57823	-75506	円形		174	145	36	加曽利E3式期	加曽利E3式15点。削器1点。
8	866	第215図		57820	-75501	不明		48	(30)	45	不明	867坑を切る。下位に深鉢破片

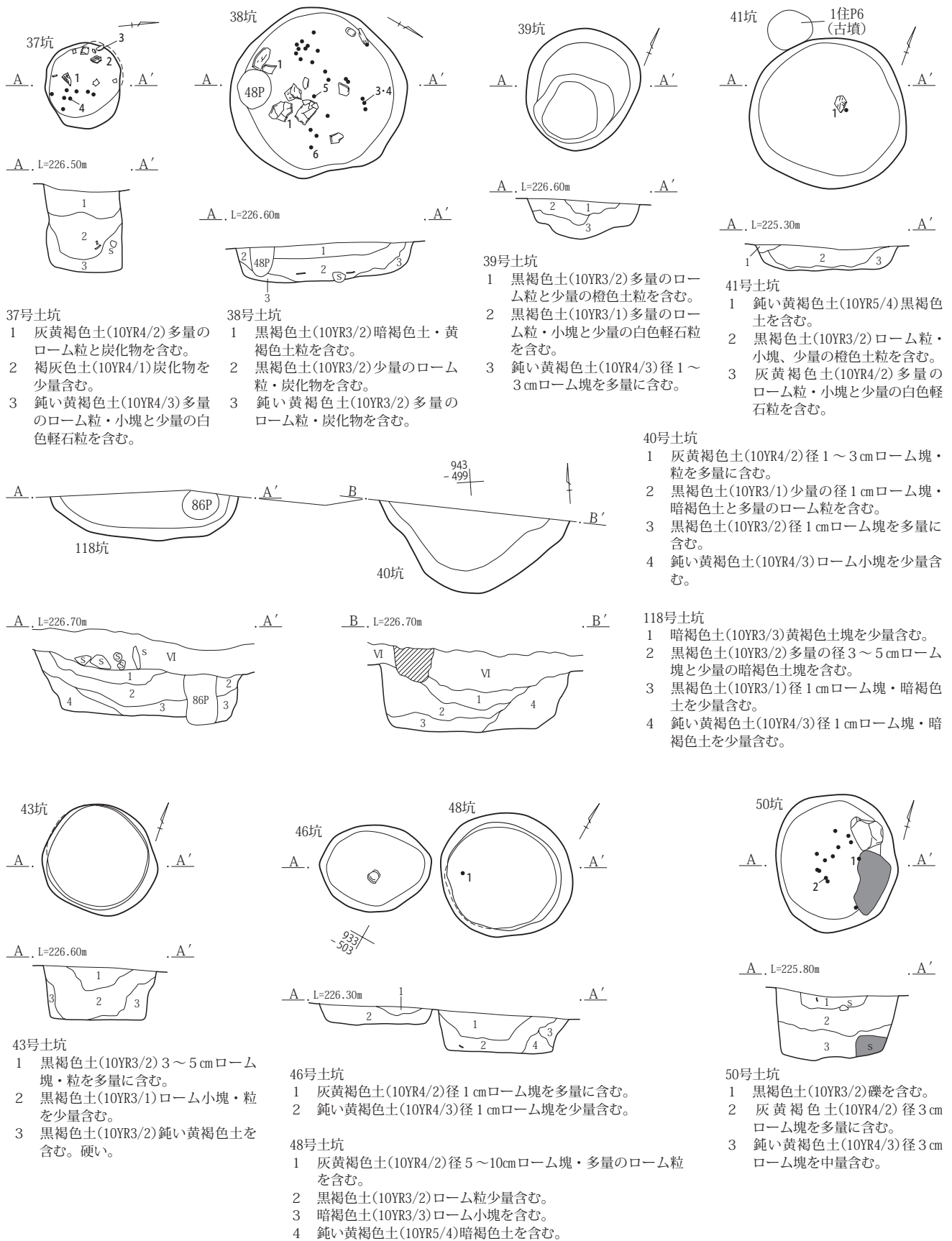
第3章 遺跡の調査内容

区	番号	掲載図版図版		位置		形状		規模 (cm)			時期	備考
		遺構	遺物	座標X	座標Y	全体形	袋状	長径	短径	深さ		
8	867	第215図	第240図	57819	-75501	円形	○	101	99	84	新巻類型期	870坑を切り, 866坑に切られる。勝坂2式1点, 新巻7点。
8	868	第219図		57834	-75510	円形		82	70	38	中期後半	76住と重複。中期後半2点。
8	869	第219図		57822	-75500	円形		60	50	44	不明	874坑と重複。
8	870	第219図		57834	-75509	円形		79	55	50	加曾利E3式期	868坑に切られ, 76住と重複。加曾利E3式5点。
8	872	第219図		57824	-75499	不明		(80)	(66)	23	不明	873坑を切る。
8	873	第219図	第239図	57823	-75499	不明		(141)	(104)	38	加曾利E3式期	872坑に切られる。焼町1点, 加曾利E3式8点。
8	874	第219図		57821	-75499	不明		(120)	(98)	28	加曾利E3式期	869坑と重複。加曾利E3式3点。
8	875	第219図		57832	-75505	円形		56	54	34	不明	底面に打割河床礫1点。石核1点。
8	876	第219図	第239図	57833	-75506	円形		63	54	40	加曾利E3式期	877坑を切る。上~中位に大形亜角礫6点を埋填か。加曾利E3式10点。
8	877	第219図		57833	-75506	不明		50	(44)	34	不明	876坑に切られる。
8	879	第216図	第239図	57820	-75509	不明		48	(39)	15	有尾式期	有尾式1点。
8	880	第216図		57821	-75508	円形		55	46	25	関山Ⅱ式期	関山Ⅱ式1点。
8	886	第220図		57835	-75504	円形		88	72	50	不明	75・78住と重複。
8	887	第220図	第239図	57829	-75508	不明		68	(58)	47	加曾利E4式期	加曾利E3式9点・同E4式1点。
8	888	第215図		57816	-75500	円形		63	50	48	中期後半	上位に大形河床礫1点。中期後半8点。
8	889	第220図	第240図	57827	-75506	円形		124	116	42	有尾式期	下位~底面に大形亜角礫2点と有尾式土器11点。
8	890	第220図		57831	-75503	円形		83	80	35	不明	74住と重複。913坑と重複。
8	891	第220図		57826	-75503	円形		80	68	45	勝坂3式期	底面に大形亜角礫1点。勝坂3式2点, 中期後半4点。
8	892	第220図	第241図	57825	-75503	円形	○	92	90	46	勝坂3式期	底面に大~中形の河床・亜角礫16点。諸礫b・新巻・勝坂3式各1点, 勝坂2式3点。磨石類1点。
8	893	第220図	第240図	57825	-75501	円形	○	96	90	41	焼町土器期	焼町1点, 中期後半4点。
8	894	第220図		57833	-75500	円形		67	57	31	不明	78住と重複。中~下位に中・小形の河床礫2・亜角礫3点。
8	895	第221図		57836	-75498	不明		67	(30)	49	加曾利E3式期	78住と重複。加曾利E3式1点。
8	897	第220図		57834	-75502	不明		(78)	(31)	25	不明	78住と重複。
8	898	第219図		57833	-75508	円形		105	100	55	中期後半	中位~底面に中~大形亜角礫10数点。中期後半1点。
8	899	第221図		57831	-75511	円形		92	73	47	中期後半	中期後半2点。
8	902	第220図		57828	-75505	円形		94	87	17	不明	576Pに切られる。
8	904	第220図		57828	-75507	円形		71	65	13	中期後半	中期後半1点。
8	906	第219図		57831	-75508	円形		113	95	67	加曾利E3式期	上~中位に大形河床礫・亜角礫約10点。加曾利E3式15点。
8	908	第221図		57832	-75501	不明		(66)	(20)	11	不明	74住に切られる。
8	909	第221図	第240図	57834	-75499	不明		(85)	(51)	58	加曾利E3式期	加曾利E3式1点。
8	910	第219図	第240図	57832	-75506	円形		74	61	25	加曾利E3式期	加曾利E3式8点。
8	911	第221図	第240図	57838	-75499	円形		70	59	34	有尾式期	底面に河床・亜角礫10数点。8区74住と重複。有尾式1点。
8	913	第220図		57831	-75503	円形		85	78	22	不明	74住・890坑と重複。
8	914	第221図	第241図	57829	-75502	円形		95	94	37	関山Ⅱ式期	74住に切られる。関山Ⅱ式1点。
8	915	第221図		57828	-75503	円形		95	87	19	不明	74住と重複。底面に大形河床礫1点。
8	916	第221図	第241図	57836	-75501	円形		103	(94)	20	中期後半	75住・917坑に切られ, 78住と重複。中期後半3点。石核1点。
8	917	第221図	第241図	57837	-75501	楕円形		107	75	26	関山Ⅱ式期	75住に切られ, 916坑を切る。78住と重複。関山Ⅱ式1点。石鏃・石匙・磨石類各1点。
8	918	第221図		57837	-75502	不整形		125	98	26	不明	75・78住と重複。
9	995	第221図		58040	-75520	円形		110	103	35	不明	
10	321	第222図		58070	-75569	円形		82	66	16	不明	
10	322	第222図		58083	-75581	円形		134	114	17	不明	
10	323	第222図		58087	-75578	楕円形		82	57	15	不明	
10	324	第222図		58086	-75577	円形		90	86	77	不明	
10	325	第222図		58088	-75573	円形		135	111	28	不明	
10	326	第222図		58091	-75573	円形		69	63	22	不明	
10	327	第222図		58086	-75566	円形		113	110	16	不明	
10	329	第222図		58075	-75551	円形		59	(56)	21	不明	
10	330	第222図		58078	-75546	円形		71	69	14	不明	
10	331	第222図		58085	-75550	円形		110	97	15	不明	
13	343	第222図		58129	-75676	円形		93	(74)	36	不明	
13	344	第222図		58127	-75675	円形		61	54	27	不明	
13	345	第222図		58130	-75658	円形		63	59	31	不明	
13	349	第222図		58126	-75663	円形		75	63	23	不明	

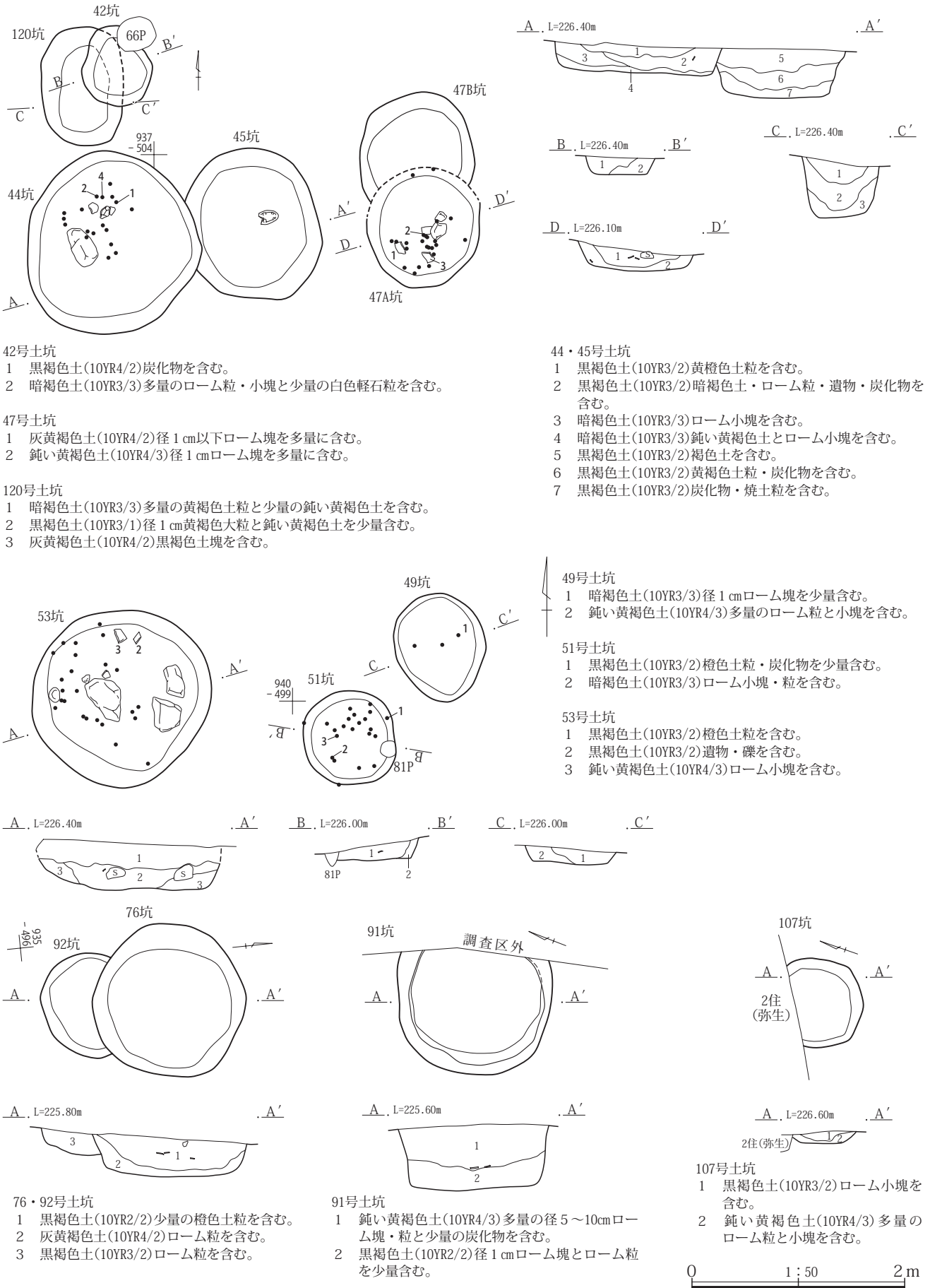


第190図 土坑(1)〔1区213~219・221・224・225・237・238・240号〕

第3章 遺跡の調査内容

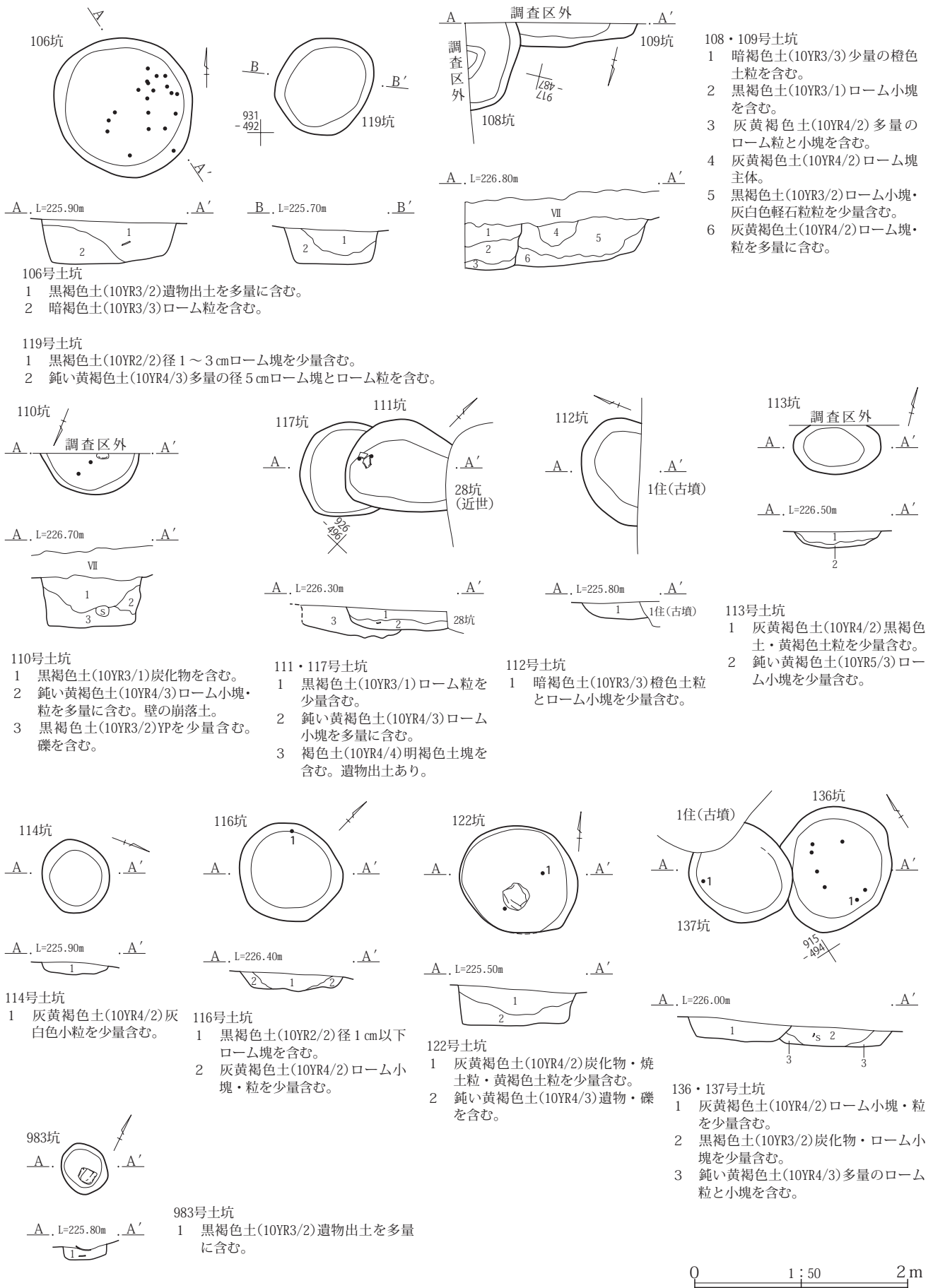


第191図 土坑(2)〔2区37~41・43・46・48・50・118号〕



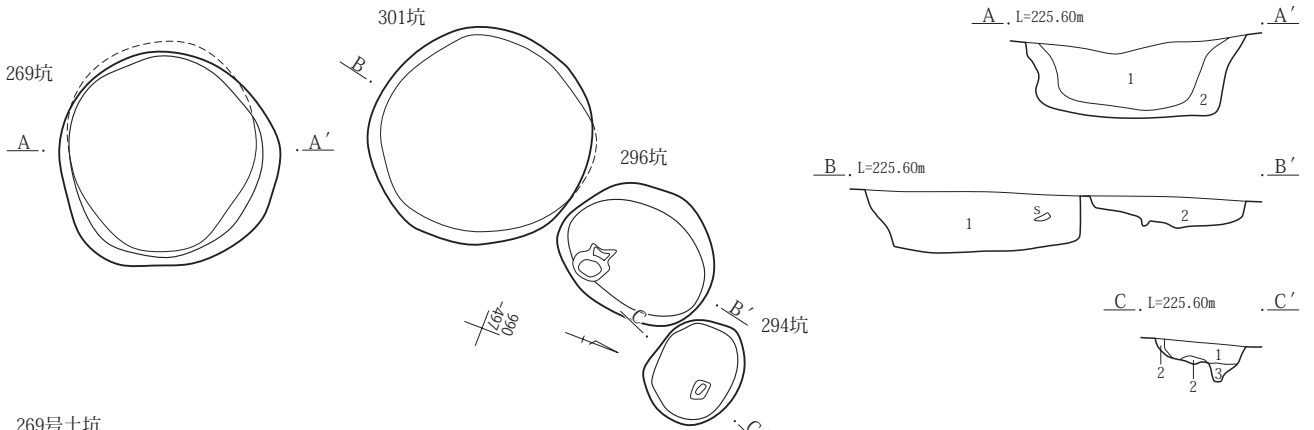
第192図 土坑(3) [2区42・44・45・47A・47B・49・51・53・76・91・92・107・120号]

第3章 遺跡の調査内容



第193図 土坑(4)〔2区106・108~114・116・117・119・122・136・137・983号〕

4. 縄文時代の遺構と遺物



269号土坑

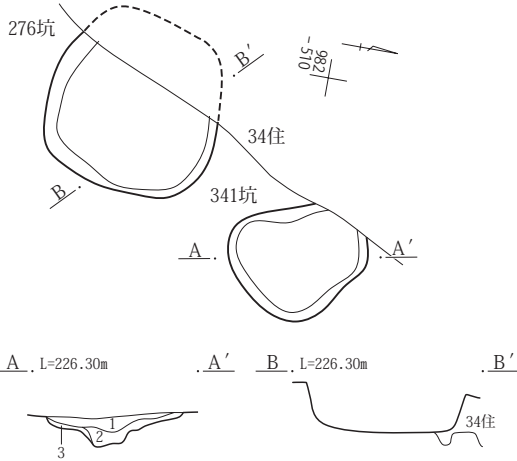
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)径5mmのローム粒・焼土・炭化物・径20~30mmの礫を微量に含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊を少量含む。

296・301号土坑

- 1 黒色土(10YR2/1)中量の白色軽石粒と少量の橙色土塊を含む。
- 2 黒色土(10YR2/1)中量の白色軽石粒と少量の橙色土粒を含む。

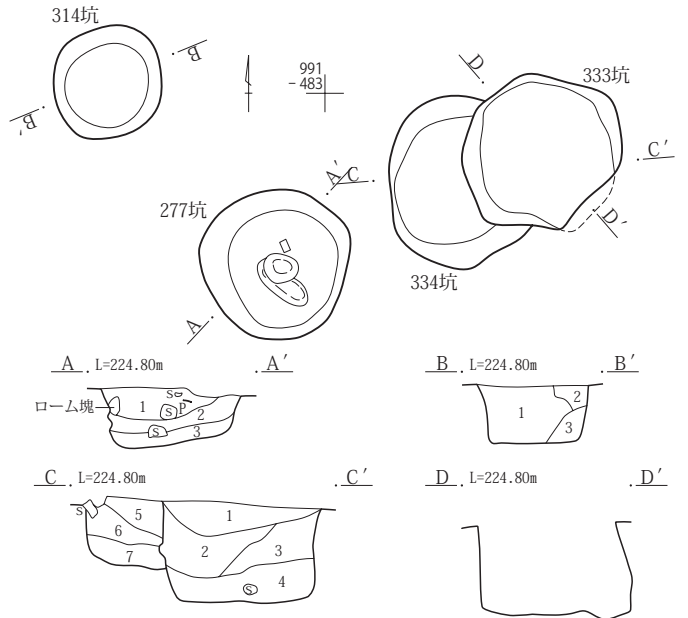
294号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1)多量の白色軽石粒と少量のローム粒・塊を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。
- 3 褐灰色土(10YR4/1)白色軽石粒・ローム粒を含む。



341号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒2%・径1~3mm灰白色軽石粒1%と炭化物極少量含む。
- 2 黒褐色土(10Y3/2)ローム塊10%含む。
- 3 暗灰黄色土(10Y5/2)ローム粒30%含む。



277号土坑

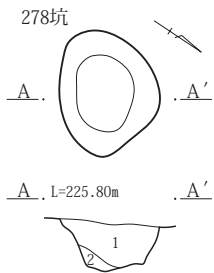
- 1 暗褐色土(10YR3/3)中量の白色軽石粒と少量の橙色土粒を含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/6)白色軽石粒・ローム粒を少量含む。
- 3 明黄褐色土(10YR7/6)少量の橙色土粒を含む。

314号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1)中量の白色軽石粒と炭化物粒・少量の橙色土粒を含む。
- 2 褐色土(10YR4/4)白色軽石粒・ローム粒を含む。
- 3 明黄褐色土(10YR7/6)橙色土粒を含む。ローム塊を多量に含む。

333・334号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)径2~5mmローム粒1%と径1~2mm灰色粒1%含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)径1~10mmローム粒2%と径5~20mm亜角礫少量含む。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒5%含む。
- 4 黒褐色土(10Y3/2)ローム粒3%と径2~15cm亜角礫3%含む。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2)径1~2mm灰色粒1%含む。
- 6 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒5%含む。
- 7 黒褐色土(10Y3/2)ローム粒3%と径5~10cm亜角礫1%含む。



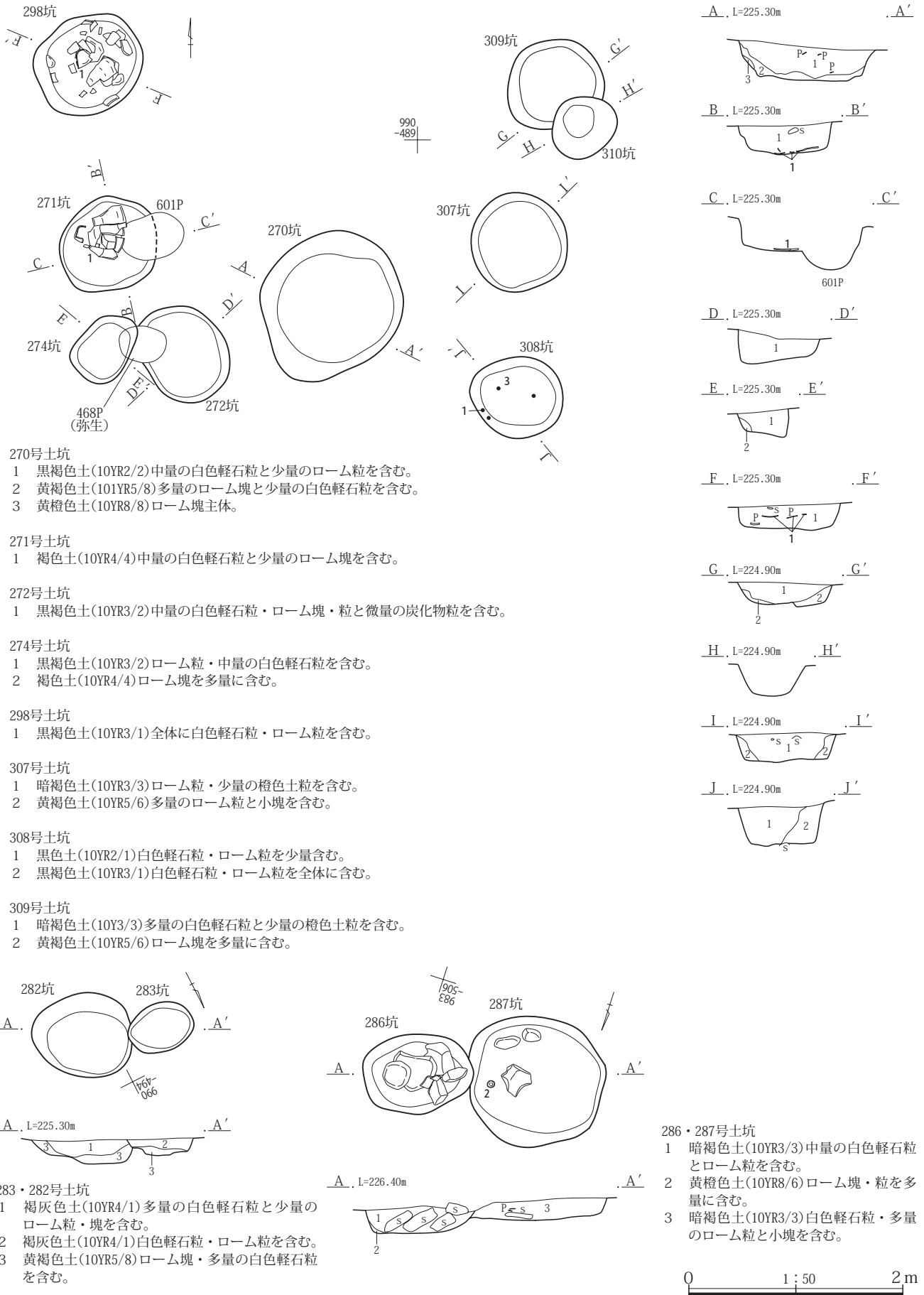
278号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1)中量の白色軽石粒と少量のローム粒・塊を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム塊・褐色土塊と少量の白色軽石粒を含む。

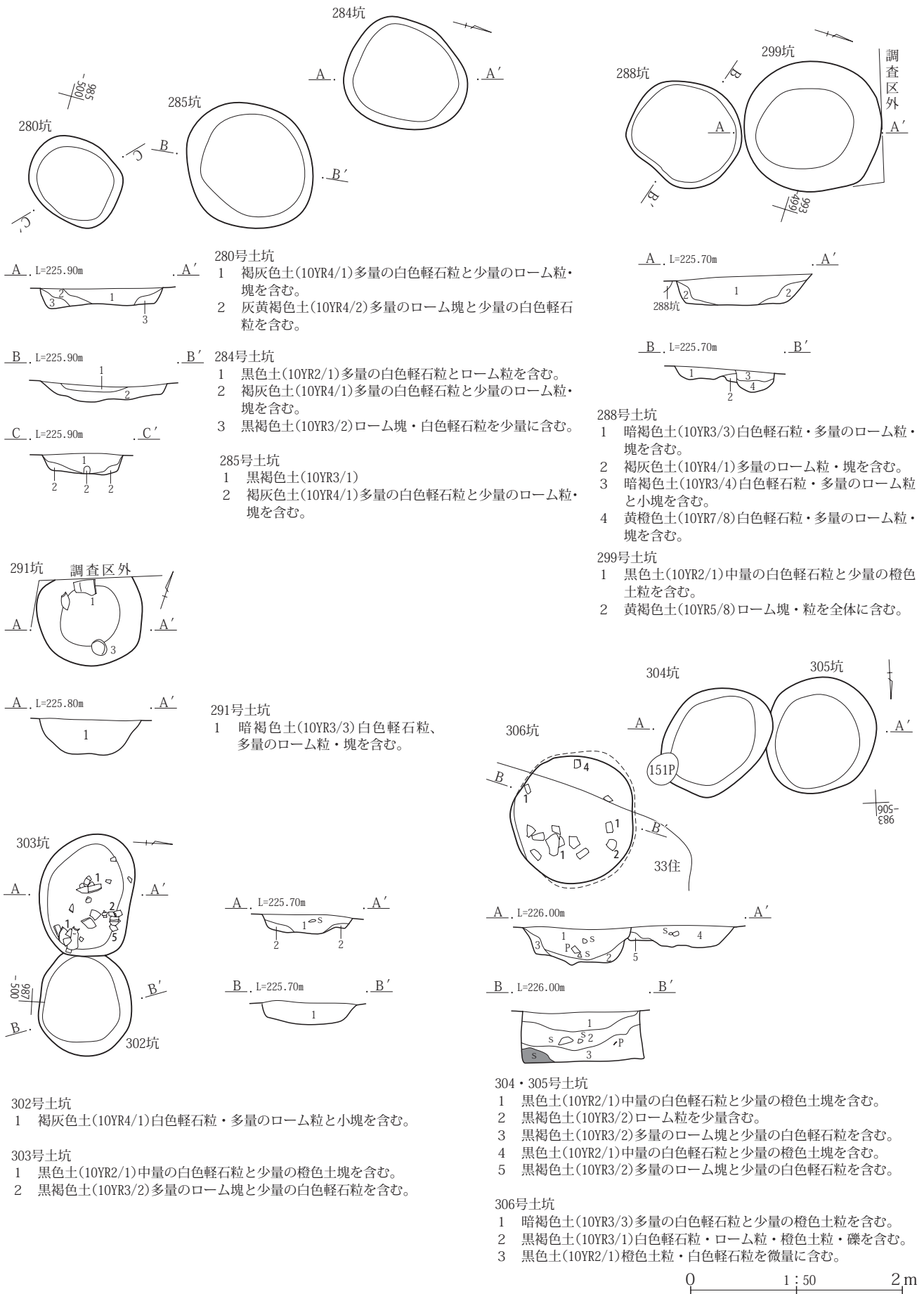


第194図 土坑(5)〔4区269・276~278・294・296・301・314・333・334・341号〕

第3章 遺跡の調査内容



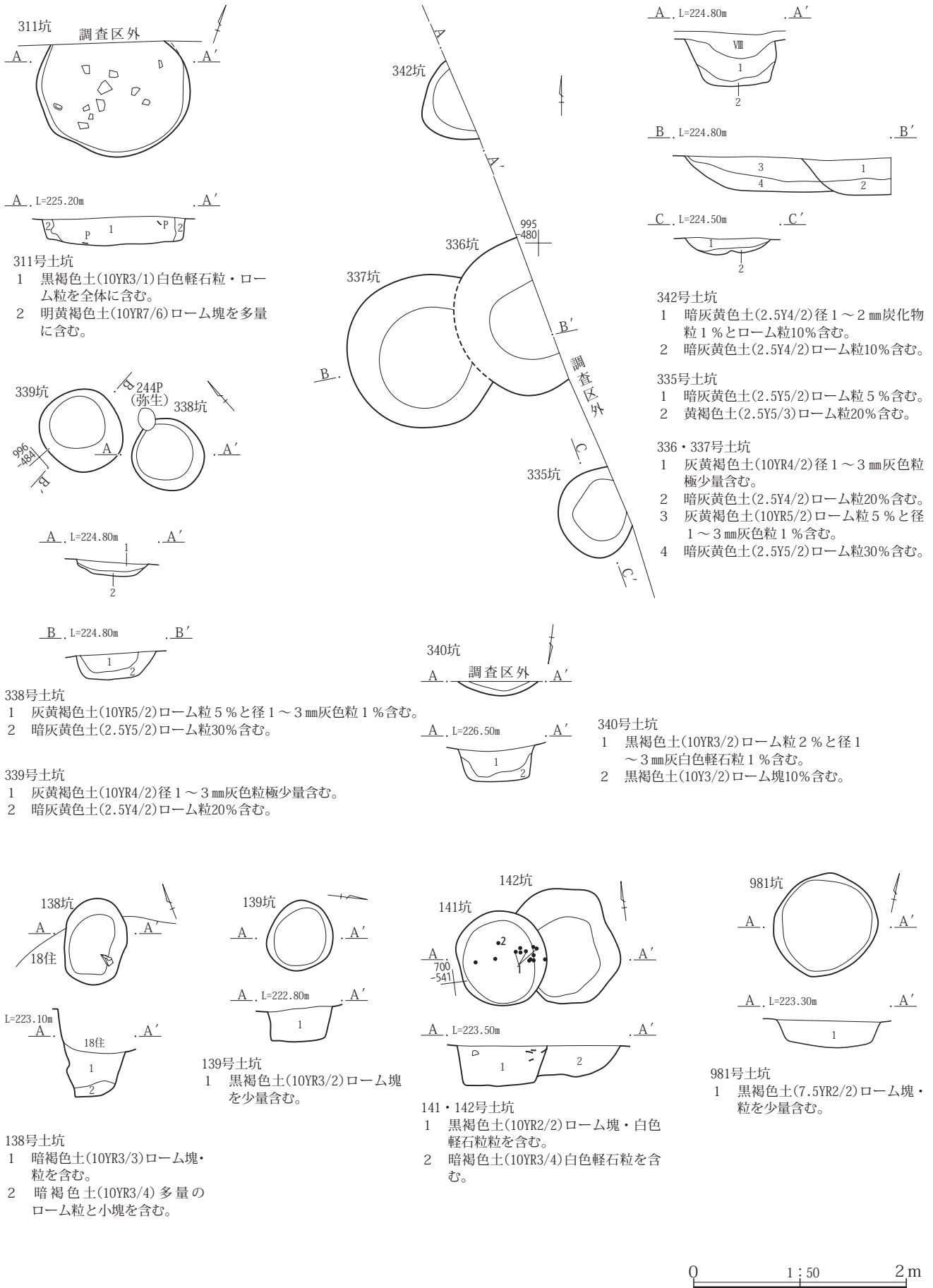
第195図 土坑(6)〔4区270~272・274・282・283・286・287・298・307~310号〕



0 1:50 2m

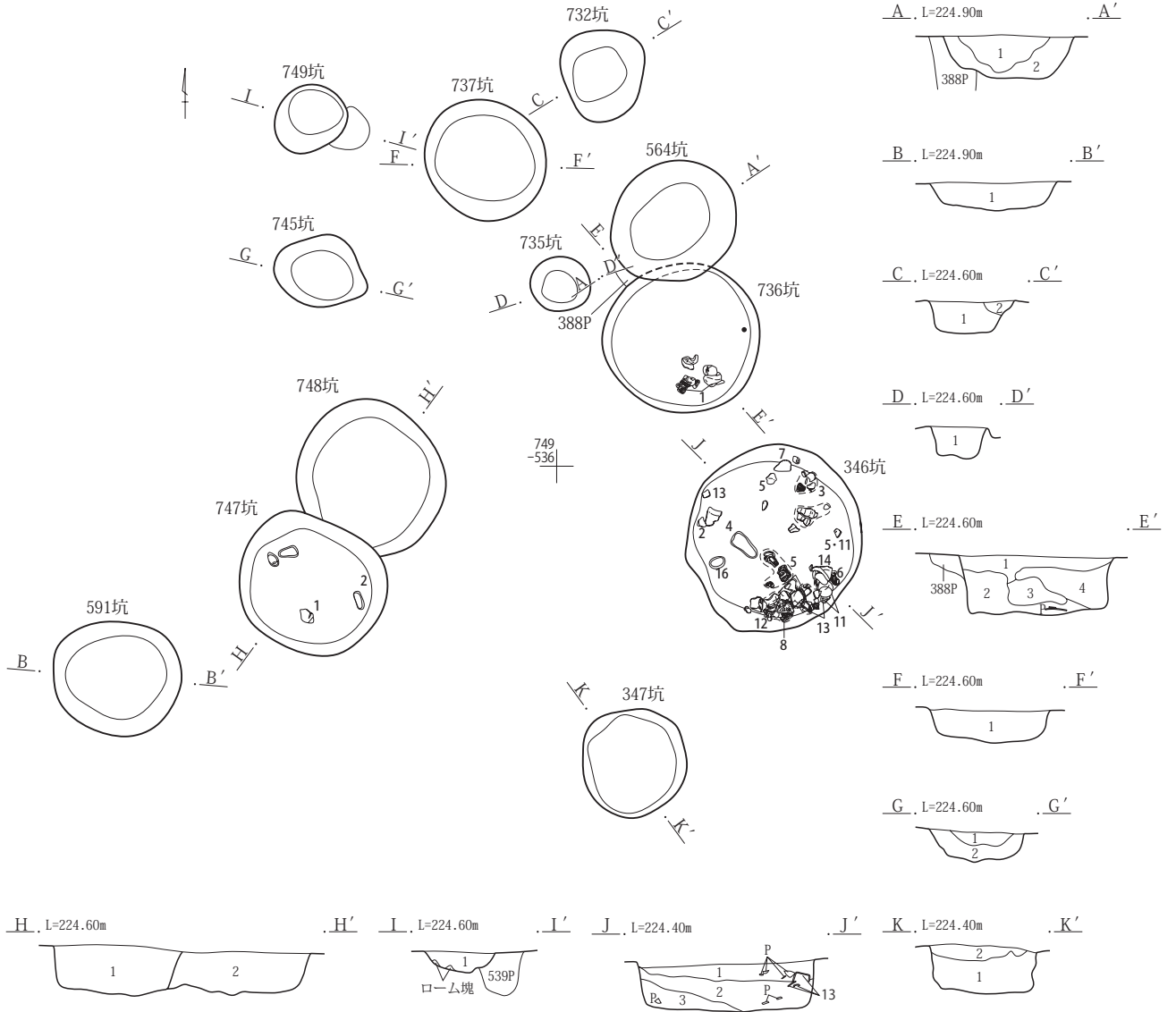
第196図 土坑(7)[4区280・284・285・288・291・299・302~306号]

第3章 遺跡の調査内容



第197図 土坑(8)〔4区311・335~340・342号、5区138・139・141・142・981号〕

4. 縄文時代の遺構と遺物



346号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4)白色軽石粒・ローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・ローム粒・炭化物粒を少量含む。
- 3 褐色土(10YR4/4)白色軽石粒・ローム粒と微量の明赤褐色土粒を含む。

347号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4)多量のローム粒・塊と少量の黒色土塊を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1)多量の白色軽石粒、ローム粒・塊と少量の炭化物粒を含む。

564号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)小礫・軽石・褐色土を含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)少量の径1cmローム塊と多量のローム粒を含む。

591号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・褐色土塊を少量含む。

732号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の白色軽石粒と明赤褐色土粒、ローム粒・塊を少量含む。
- 2 褐色土(10YR4/6)褐色土主体。ローム粒を少量含む。

735号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)中量の白色軽石粒、ローム粒・塊と少量の炭化物粒を含む。

736号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)中量の白色軽石粒、ローム粒・塊を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4)多量の白色軽石粒、ローム粒・塊を含む。人為的埋没か。
- 3 黄褐色土(10YR5/8)多量のローム粒・塊と褐色土塊を含む。人為的埋没か。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)多量の白色軽石粒、ローム粒・塊と明赤褐色土粒を含む。人為的埋没か。

737号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム粒・明赤褐色土粒を含む。

745号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム粒と炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒と少量の炭化物を含む。

747・748号土坑

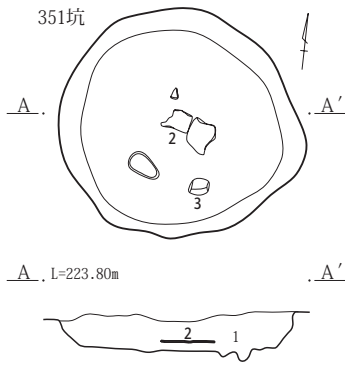
- 1 黒褐色土(10YR3/2)中量の白色軽石粒とローム粒・褐色土塊を少量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)白色軽石粒、ローム粒・大塊を多量に含む。人為的埋没か。

749号土坑

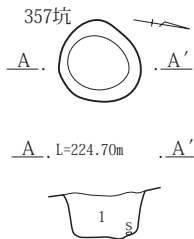
- 1 黒褐色土(10YR3/2)中量の白色軽石粒と褐色土塊を少量含む。

第198図 土坑(9)〔7区346・347・564・591・732・735~737・745・747~749号〕

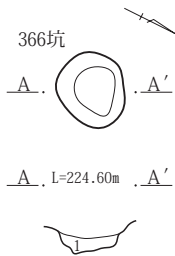
第3章 遺跡の調査内容



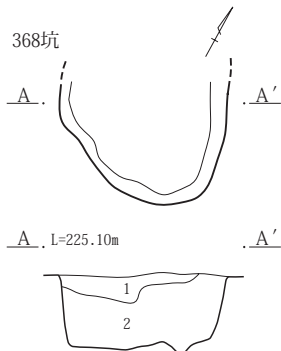
351号土坑
1 黒褐色土(10YR3/1)ロームを少量含む。



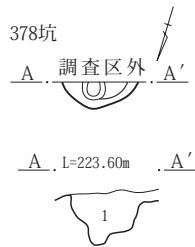
357号土坑
1 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・ローム粒・塊を多量・焼土・炭化物粒を少量含む。人為的埋没土。



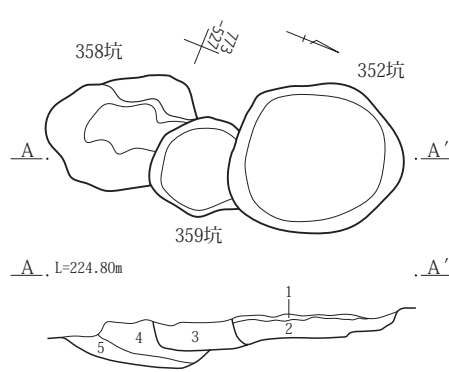
366号土坑
1 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒を微量に含む。



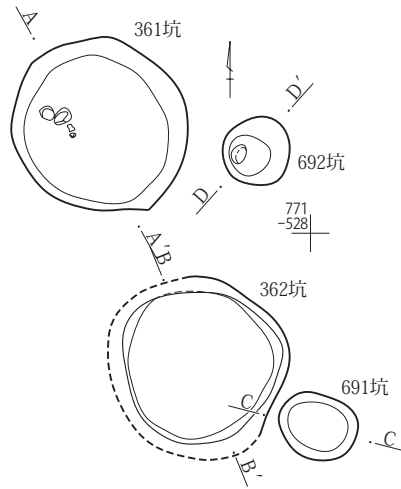
368号土坑
1 褐灰色土(10YR4/1)中量の白色軽石粒・ローム粒・塊と少量の明赤褐色土粒を含む。
2 黒褐色土(10YR2/3)中量のローム粒・塊と微量の明赤褐色土粒を含む。



378号土坑
1 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒を微量に含む。



352・358・359号土坑
1 褐色土(10YR4/4)白色軽石粒・ローム粒・塊を少量含む。
2 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒を含む。微量の明赤褐色土粒を含む。
3 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・ローム粒・塊を少量含む。
4 灰黄褐色土(10YR4/2)白色軽石粒・多量のローム粒と小塊を含む。
5 暗褐色土(10YR3/3)少量の白色軽石粒・ローム粒と微量の明赤褐色土粒を含む。

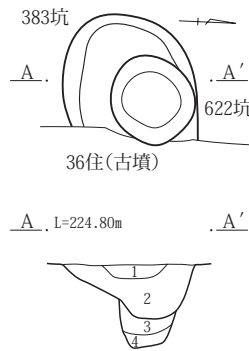


361号土坑
1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・褐色土塊・明赤褐色土粒を含む。
2 褐色土(10YR4/6)褐色土塊・明赤褐色土粒を少量含む。
3 灰黄褐色土(10YR4/2)中量のローム粒・塊と少量の明赤褐色土粒を含む。

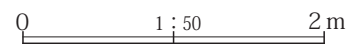
362号土坑
1 暗褐色土(10YR3/3)中量の白色軽石粒・ローム粒と少量の明赤褐色土粒を含む。
2 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒・明赤褐色土粒を含む。

691号土坑
1 褐灰色土(10YR4/1)ローム塊・粒、白色軽石粒を含む。
2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊を多量に含む。

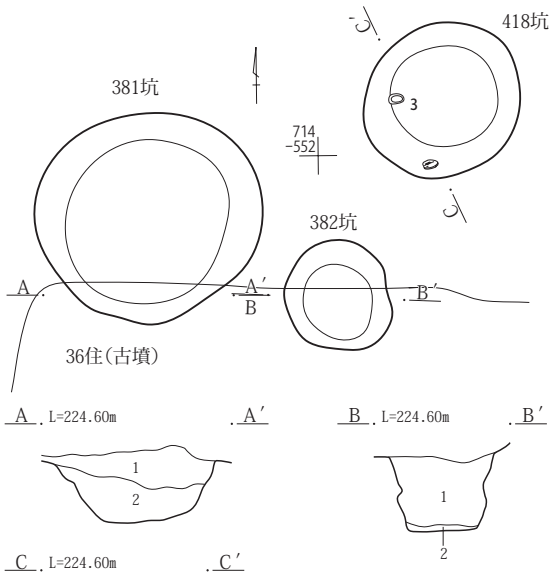
692号土坑
1 褐灰色土(10YR4/1)中量のローム塊・粒、白色軽石粒と少量の明赤褐色土粒を含む。
2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊・白色軽石粒を含む。
3 褐色土(10YR4/4)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。



383・622号土坑
1 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒を微量に含む。
2 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・塊を微量に含む。
3 灰黄褐色土(10YR4/2)炭化物・ローム粒1%を含む。締りやや良い。
4 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒40%含む。締りやや良い。

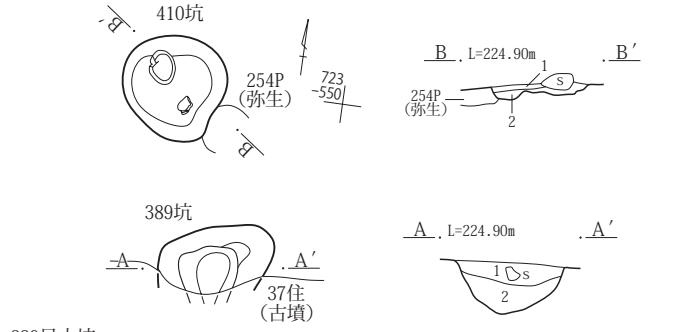


第199図 土坑(10)[7区351・352・357~359・361・362・366・368・378・383・622・691・692号]

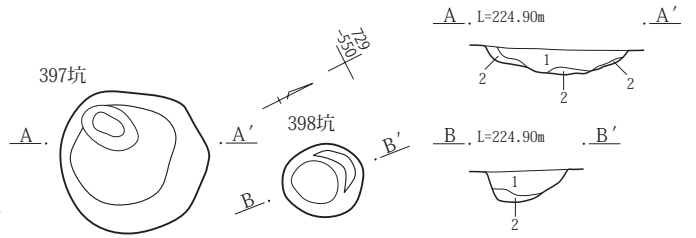


- 381号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)中量のローム粒・塊と白色軽石粒を少量含む。
 2 黒褐色土(10YR3/1)多量のローム粒・塊と少量の白色軽石粒を含む。
- 382号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊、白色軽石粒を含む。微量の明赤褐色土粒を含む。
 2 黄褐色土(10YR5/8)中量のローム粒・塊と少量の白色軽石粒を含む。

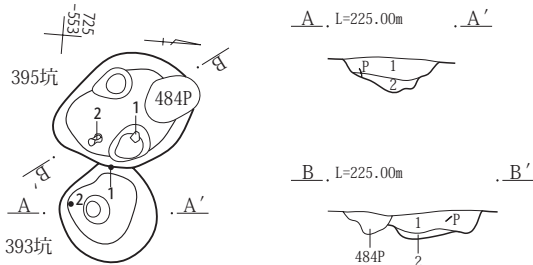
- 418号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。



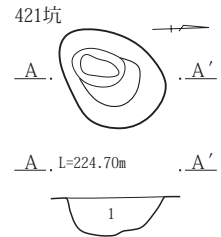
- 389号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・塊を少量含む。
 2 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒・塊と少量の白色軽石粒を含む。
- 410号土坑
 1 黒色土(10YR2/1)中量のローム粒・塊と炭化物粒を微量に含む。
 2 黒褐色土(10YR3/1)少量のローム塊・白色軽石粒・褐色土塊と炭化物粒を微量に含む。



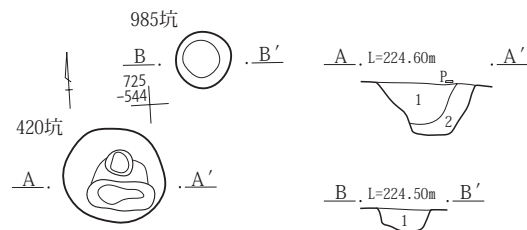
- 397号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/1)中量のローム粒・塊と少量の白色軽石粒を含む。
 2 黄褐色土(10YR5/8)多量のローム粒・塊と少量の褐色土小塊を含む。
- 398号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/1)中量のローム粒・塊と微量の明赤褐色土粒を含む。
 2 黄褐色土(10YR5/8)多量のローム粒と少量の褐色土小塊を含む。



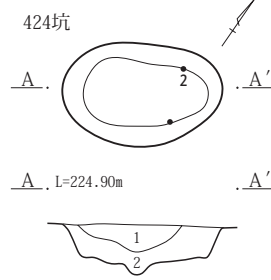
- 393号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒・ローム粒・明赤褐色土粒を含む。
 2 褐色土(10YR4/6)ローム粒・黒色土塊を含む。
- 395号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム粒・塊と微量の明赤褐色土粒を含む。
 2 黄褐色土(10YR5/8)多量のローム粒・塊と黒色土小塊を少量含む。



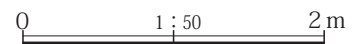
- 421号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/1)少量のローム粒・塊と微量の白色軽石粒を含む。



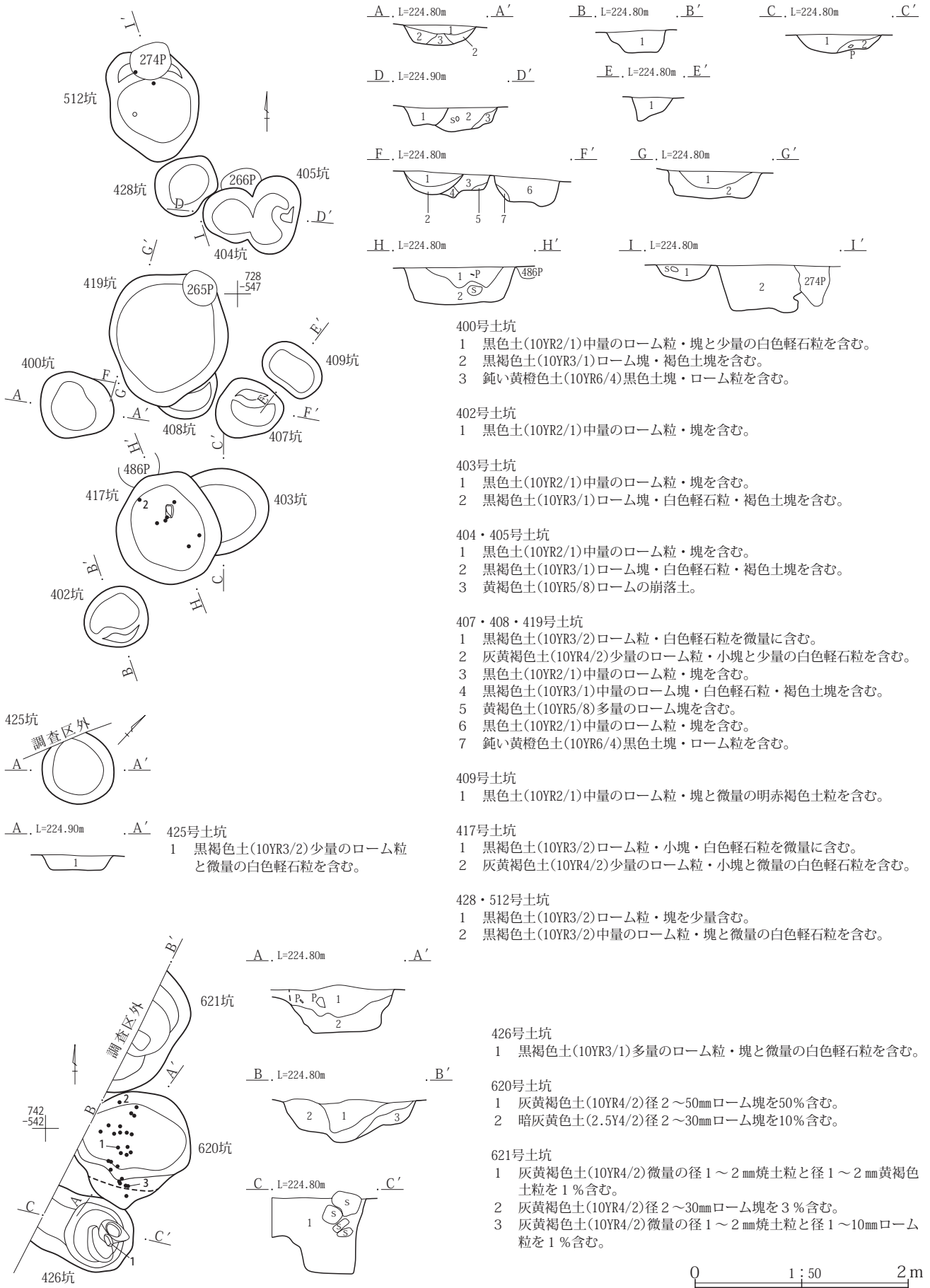
- 420号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/1)少量のローム粒・塊と微量の白色軽石粒を含む。
 2 黒褐色土(10YR3/2)ロームを多量に含む。
- 985号土坑
 1 灰黄褐色土(10YR4/2)黒褐色土・ローム粒・塊を少量含む。



- 424号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/1)少量のローム粒と微量の白色軽石粒を含む。
 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・小塊を少量含む。

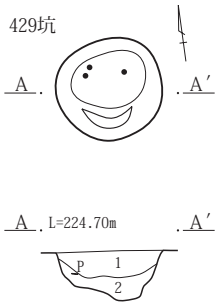


第200図 土坑(11)〔7区381・382・389・393・395・397・398・410・418・420・421・424・985号〕

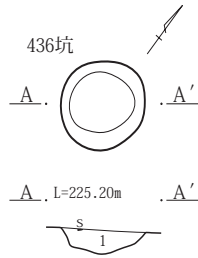


第201図 土坑(12)〔7区400・402～405・407～409・417・419・425・426・428・512・620・621号〕

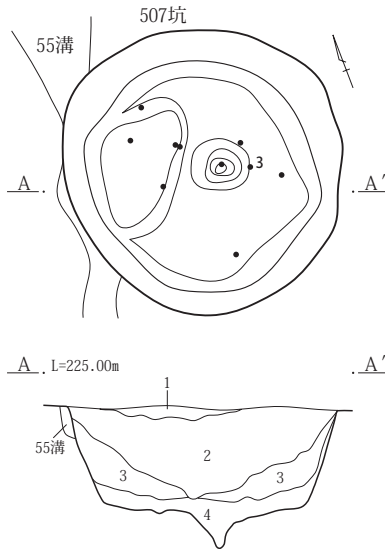
4. 縄文時代の遺構と遺物



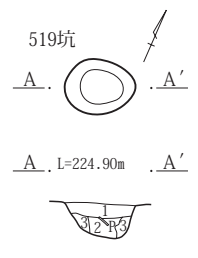
- 429号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)少量のローム粒と微量の白色軽石粒を含む。
 - 2 灰黄褐色土(10YR4/2)少量のローム小塊と微量のローム粒を含む。



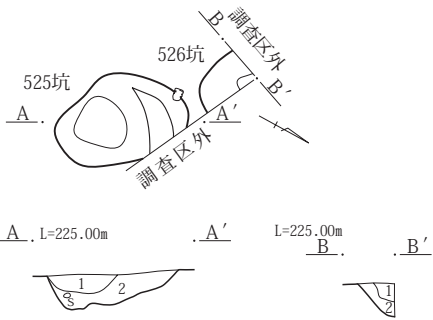
- 436号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)細粒で均質。



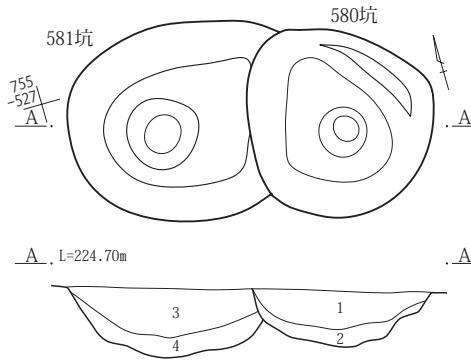
- 507号土坑
- 1 暗褐色土(10YR3/3)多量のローム粒を含む。
 - 2 黒褐色土(10YR3/2)径3~5cmローム塊・粒を多量に含む。人為的埋没か。
 - 3 黒褐色土(10YR2/2)径0.5~1cmローム塊・粒を多量に含む。
 - 4 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径5cmローム塊を含む。



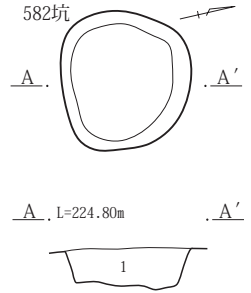
- 519号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/1)白色軽石粒・明赤褐色土粒・炭化物粒を多量に含む。
 - 2 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒・ローム粒・明赤褐色土粒を含む。
 - 3 黒色土(10YR2/1)中量のローム粒・塊を含む。



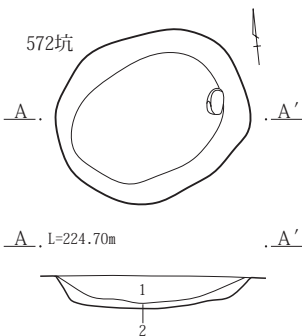
- 525号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
 - 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊を少量含む。ローム粒を微量に含む。
- 526号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
 - 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ロームを多量に含む。



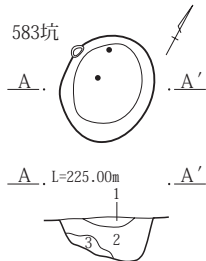
- 580・581号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
 - 2 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒を微量に含む。
 - 3 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
 - 4 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒を微量に含む。



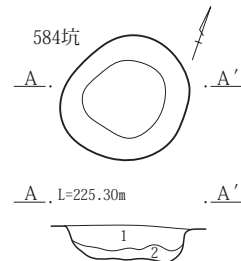
- 582号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。



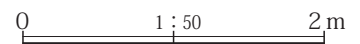
- 572号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
 - 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒を微量に含む。



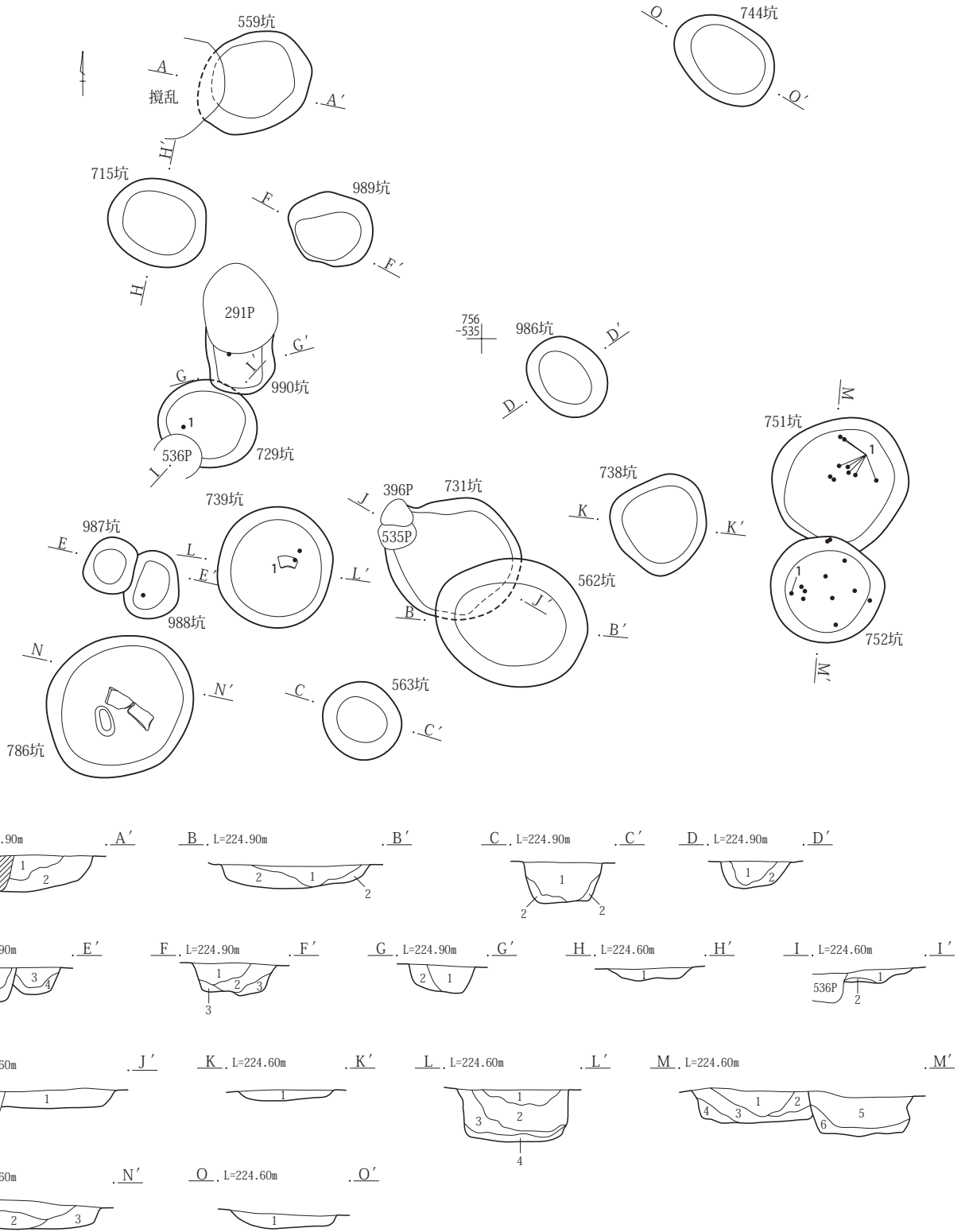
- 583号土坑
- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒を少量含む。
 - 2 暗褐色土(10YR3/3)橙色土粒・軽石を少量含む。
 - 3 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊・粒を多量に含む。



- 584号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)ロームを10%含む。
 - 2 黒褐色土(10YR3/2)ロームを30%含む。



第202図 土坑(13)[7区429・436・507・519・525・526・572・580~584号]



559号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/2)少量の径5cmローム塊と焼土粒・炭化物を含む。
 2 暗褐色土(10YR3/3)少量の径1cmローム塊と多量のローム粒を含む。

562号土坑
 1 黒褐色土(10YR2/2)黄橙色粒を少量含む。
 2 黒褐色土(10YR2/2)暗褐色土塊・ローム粒を含む。

563号土坑
 1 黒褐色土(10YR2/2)少量のローム粒・黄橙色粒を含む。
 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量のローム粒を含む。

715号土坑
 1 黒褐色土(10YR2/2)径3~5cmローム塊を多量に含む。



第203図 土坑(14)[7区559・562・563・715・729・731・738・739・744・751・752・786・986~990号]

729号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1)多量の白色軽石粒やローム粒を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム粒・白色軽石粒を含む。

731号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1)多量のローム粒・白色軽石粒と少量の明赤褐色土粒を含む。

738号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム小塊・粒を含む。

739号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量のローム粒と遺物・礫を含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量の径1~3cmローム塊と少量の炭化物を含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム粒を含む。
- 4 鈍い黄褐色土(10YR5/3)径5cmローム塊・粒を多量に含む。

744号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径3~5cmローム塊を多量に含む。

751・752号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)径1cmローム塊を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量のローム粒を含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)多量のローム粒を含む。
- 5 褐色土(10YR4/4)灰白色軽石粒を少量含む。
- 6 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量のローム粒を含む。

786号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)黒褐色土を含む。径3~5cmローム塊・粒を多量に含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR6/3)多量のローム粒を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒を含む。

986号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)白色軽石粒・ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒・ローム粒・明赤褐色土粒を含む。

987・988号土坑

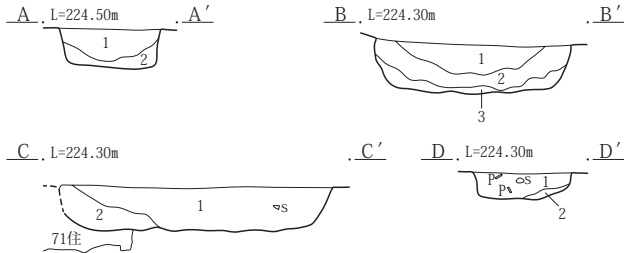
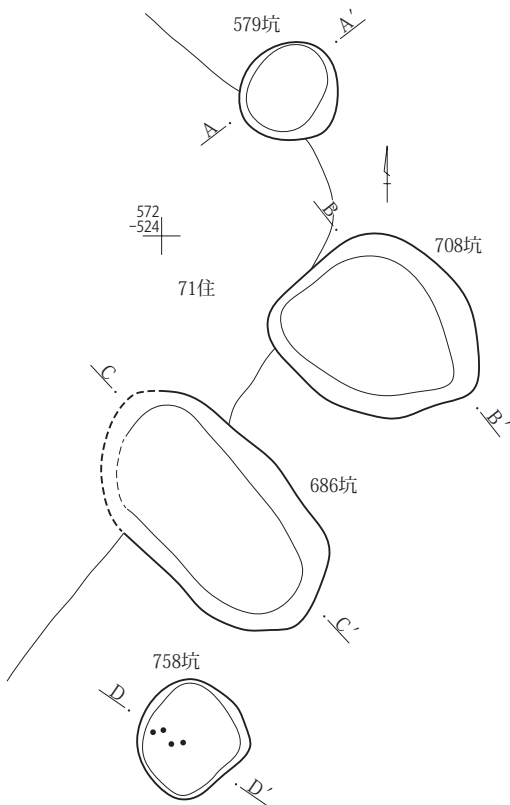
- 1 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色土を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒を少量含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)黒褐色土を中量含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/3)黒褐色土を少量含む。

989号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色土・多量のローム粒を含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)黄褐色土を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量のローム粒を含む。

990号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)多量の黄褐色土と少量のローム粒を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム小塊・粒を含む。



579号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒を微量に含む。

686号土坑

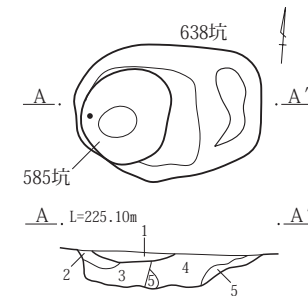
- 1 黒褐色土(10YR3/2)径5cmローム塊・粒を多量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)径5cmローム塊・粒を少量含む。

708号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)少量のローム粒・黄褐色土粒を含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊・粒主体。
- 3 黄褐色土(10YR5/6)ローム主体。

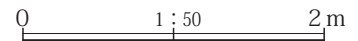
758号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)中量の白色軽石粒・ローム粒・明赤褐色土粒と少量の炭化物粒を含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/8)多量のローム粒を含む。

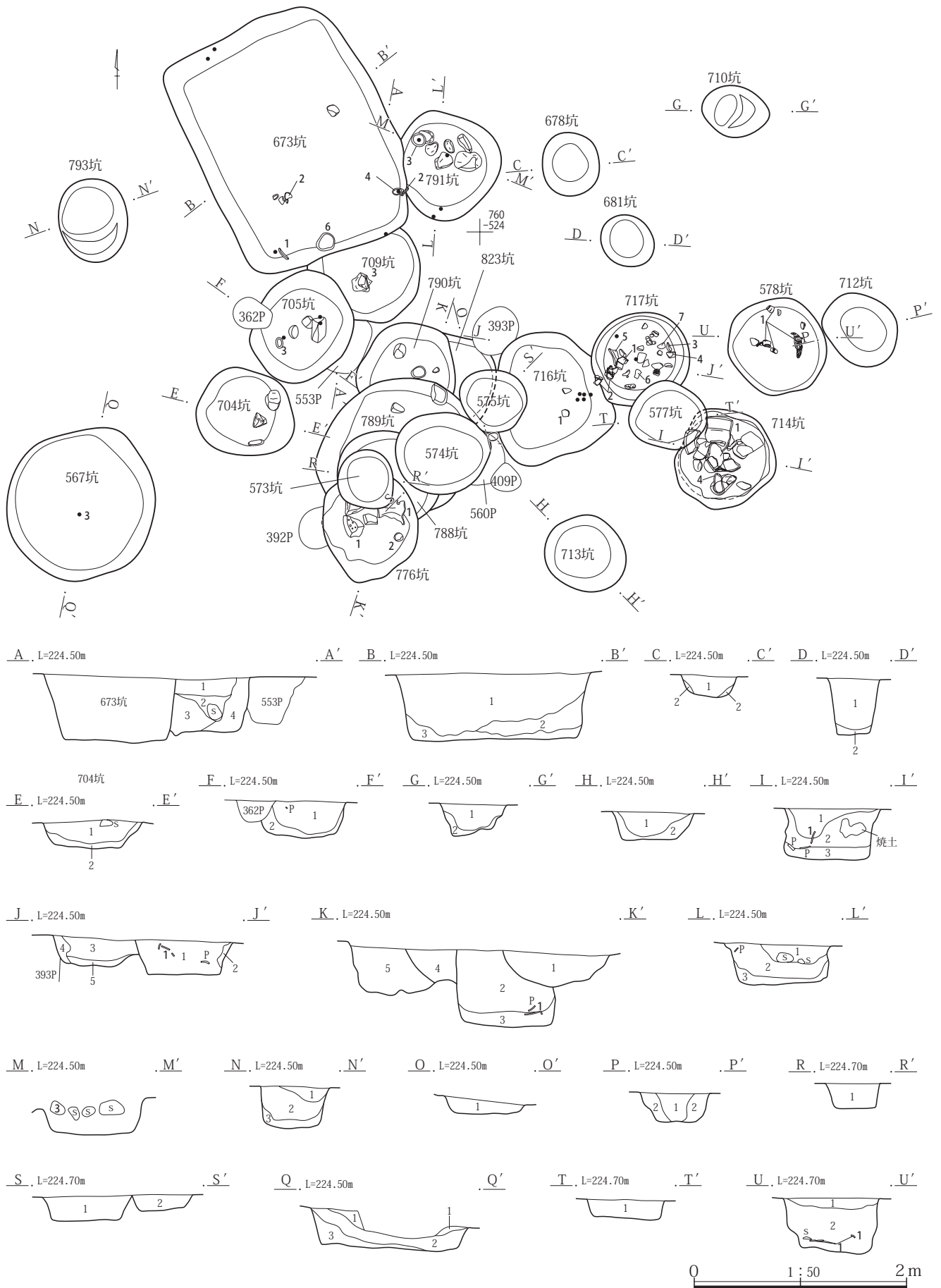


585・638号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ロームを微量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)ロームを少量含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)ロームを少量含む。
- 5 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を多量に含む。



第204図 土坑(15)〔7区579・585・638・686・708・758号〕



第205図 土坑(16) [7区567・573~575・577・578・673・678・681・704・705・709・710・712~714・716・717・776・788~791・793・823号]

567号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)灰白色軽石粒・ローム粒を少量含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)炭化物・ローム粒を含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR5/4)ローム塊・粒を多量に含む。

573号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を微量に含む。

574・575号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒を微量に含む。

577号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を微量に含む。

578号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム粒を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。

673号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR7/2)少量の径5~10cmローム塊・炭化物・黒褐色土を含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径1~3cmローム塊を少量含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR5/4)少量の径3~5cmローム塊・炭化物を含む。

678号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)少量の白色軽石粒・ローム粒と炭化物粒を含む。
- 2 褐色土(10YR4/4)多量のローム粒・小塊と少量の白色軽石粒を含む。

681号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)少量の白色軽石粒・ローム粒と炭化物粒を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/3)中量のローム粒と少量の炭化物粒を含む。

704号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム粒を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊を少量含む。

705号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)少量のローム粒・小塊と微量の焼土・炭化物を含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ロームを少量含む。

709号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)多量の灰白色粒と少量のYPを含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1)大形礫を含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径3cmローム塊・粒を多量に含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/3)径1~3cmローム塊を多量に含む。

710号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR5/2)ローム粒・塊を少量含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム塊を少量含む。

712号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒を少量含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒・塊を微量に含む。

713号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・小塊を多量に含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒・小塊を少量含む。

714号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR5/2)ローム小塊を少量含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム小塊・焼土を微量に含む。
- 3 暗灰黄色土(10Y5/2)ローム塊を少量含む。

716・717号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の白色軽石粒とローム粒を少量含む。
- 2 明黄褐色土(10YR7/6)ローム塊主体。
- 3 褐灰色土(10YR4/1)多量のローム粒・塊と明赤褐色土粒を少量含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/1)中量のローム塊・粒、白色軽石粒と少量の明赤褐色土粒、褐色土塊を含む。
- 5 褐色土(10YR4/4)ローム塊・白色軽石粒・褐色土塊を含む。

776・788・789・790号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・塊を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1)少量のローム塊・粒を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2)ローム粒を少量含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒と少量のローム小塊・白色軽石粒、微量の炭化物を含む。
- 5 暗灰黄色土(2.5Y4/2)多量のローム粒・塊と白色軽石粒を少量含む。

791号土坑

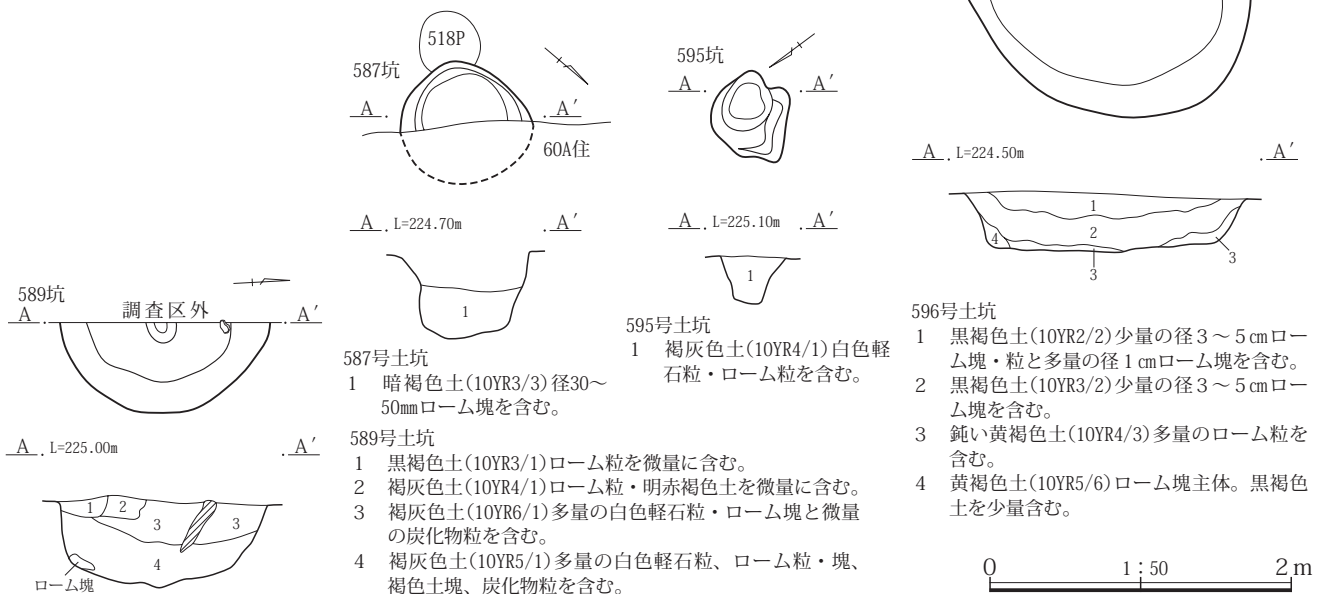
- 1 暗灰黄色土(2.5Y5/2)と径3~10cmローム塊の混土層。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)径3cmローム塊を少量含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒を含む。

793号土坑

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒・塊を少量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒・塊を含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/3)ローム粒・塊を少量含む。

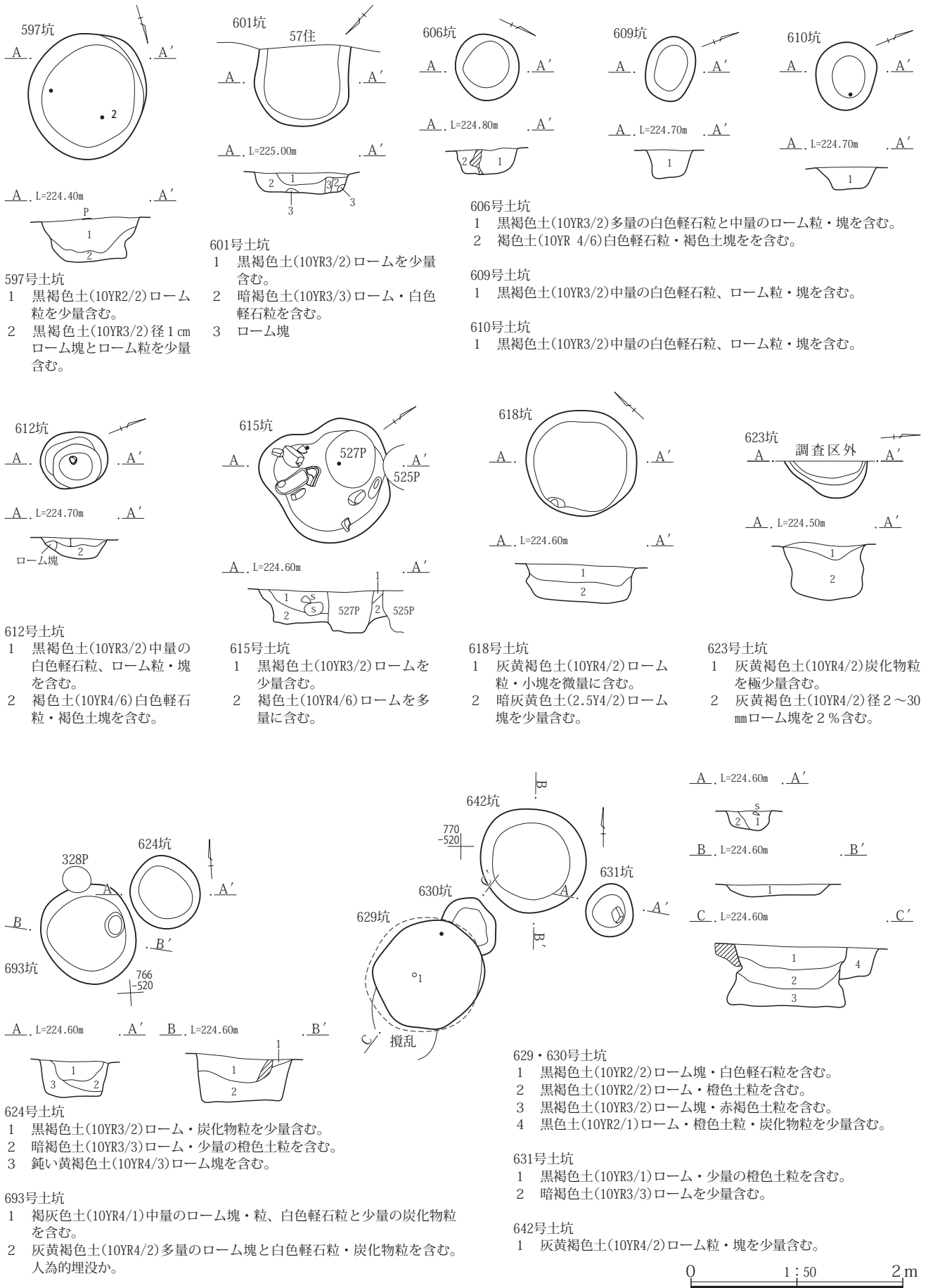
823号土坑

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム塊を少量含む。



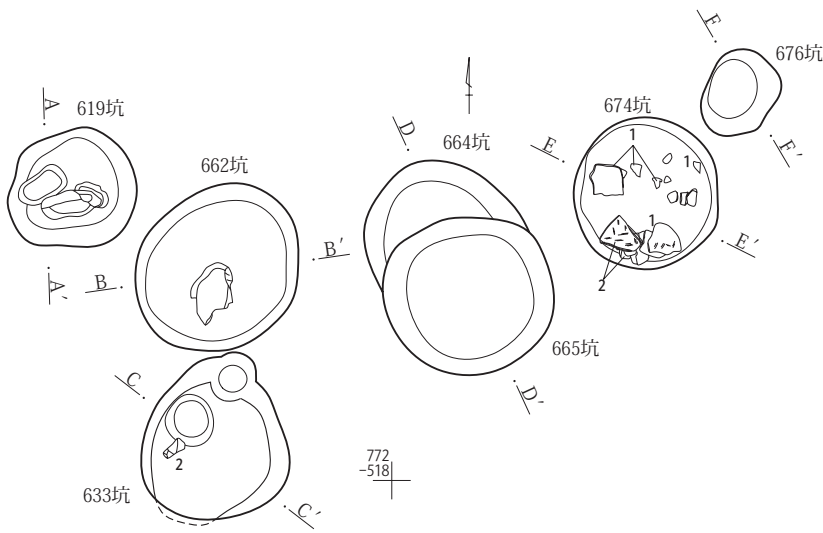
第206図 土坑(17)〔7区587・589・595・596号〕

第3章 遺跡の調査内容

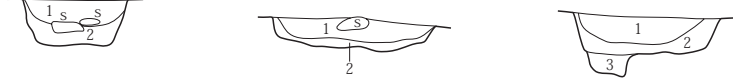


第207図 土坑(18)[7区597・601・606・609・610・612・615・618・623・624・629~631・642・693号]

4. 縄文時代の遺構と遺物



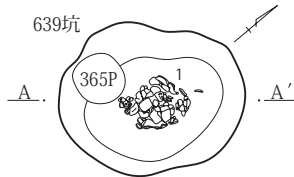
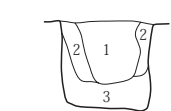
A, L=224.50m A' B, L=224.50m B' C, L=224.50m C'



D, L=224.40m D' E, L=224.40m E' F, L=224.40m F'



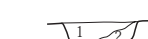
A, L=224.50m A'



A, L=224.50m A'



A, L=224.50m A'



632号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊を少量含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム塊を多量に含む。
- 3 黄褐色土(10Y5/3)ローム塊を微量に含む。

639号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4)多量の白色軽石粒と炭化物粒を微量に含む。
- 2 褐色土(10YR4/4)白色軽石粒・褐色土塊を含む。

619号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4)ローム・白色軽石粒・橙色土粒・炭化物粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・炭化物粒・白色軽石粒を少量含む。

633号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/1)ローム・白色軽石粒・橙色土粒・炭化物粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム・白色軽石粒少量含む。
- 3 ローム塊を主体に暗褐色土(10YR3/3)を少量含む。

662号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ロームを多量に含む。

664・665号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)多量のローム粒・小塊と少量の白色軽石粒を含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒を少量含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒を少量含む。
- 4 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ロームを微量に含む。

674号土坑

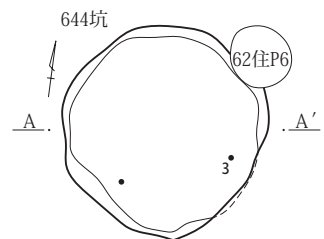
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)中量の白色軽石粒、ローム粒・塊と少量の明赤褐色土粒を含む。

676号土坑

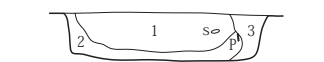
- 1 暗褐色土(10YR3/4)多量の白色軽石粒、ローム粒・塊を含む。

640号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/4)白色軽石粒・ローム粒・褐色土塊を含む。
- 2 黄褐色土(10Y5/8)ローム主体。黒褐色土塊を含む。

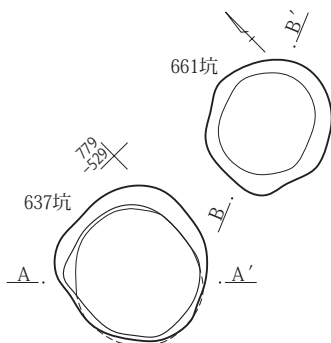


A, L=225.00m A'



644号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム・白色軽石粒を少量含む。細粒で均質。
- 2 黒褐色土(10YR3/1)ローム・橙色土粒・炭化物粒を少量含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。



A, L=225.00m A' B, L=225.00m B'



637号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム・白色軽石粒・橙色土粒・炭化物粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム・白色軽石粒を少量含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・橙色土粒・白色軽石粒含む。

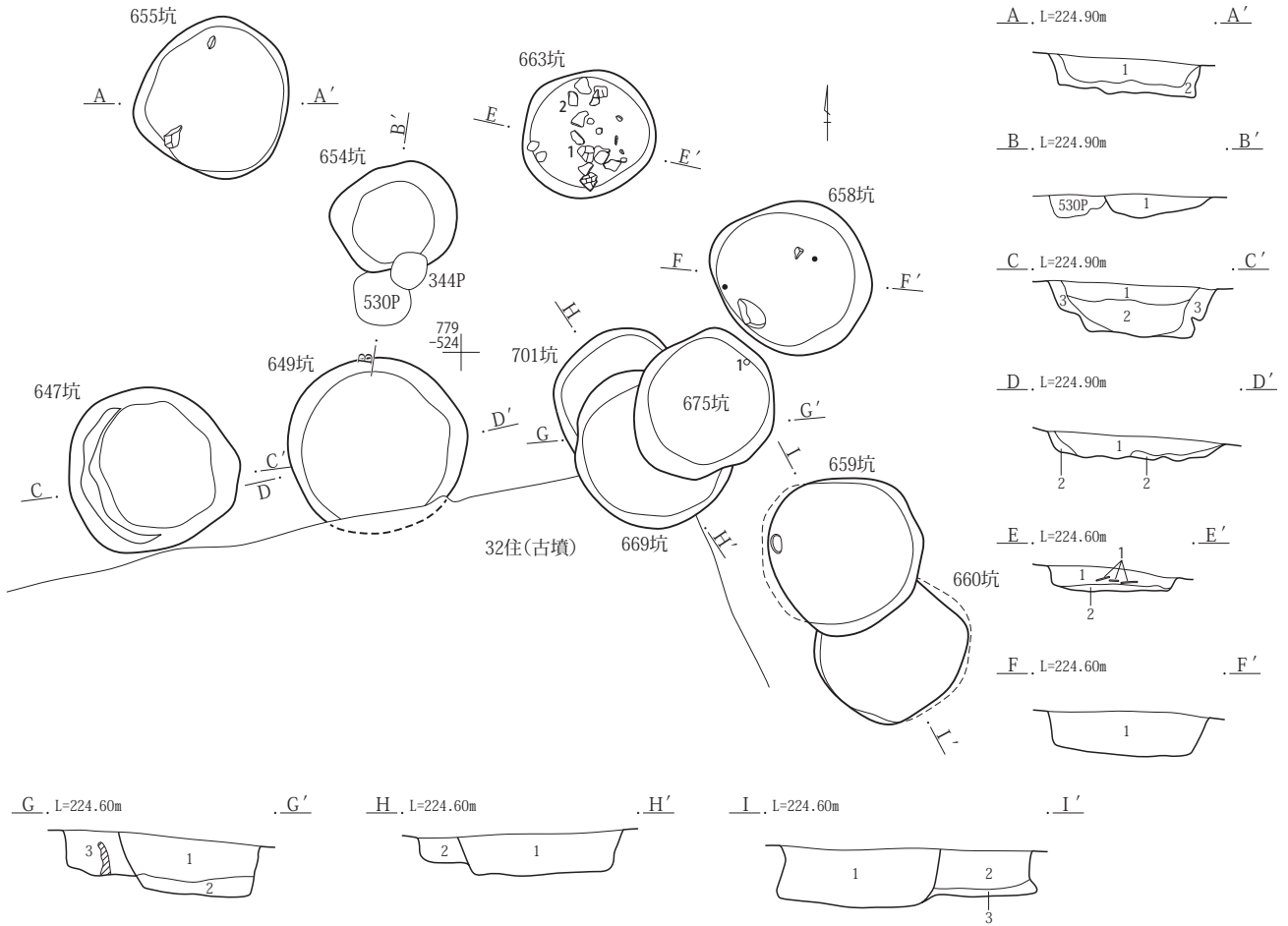
661号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4)中量のローム塊・褐色土塊と少量の白色軽石粒を含む。

0 1:50 2m

第208図 土坑(19)〔7区619・632・633・637・639・640・644・661・662・664・665・674・676号〕

4. 縄文時代の遺構と遺物



647号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム・白色軽石粒含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム・白色軽石粒・橙色土塊を含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。

649号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒・塊を少量含む。

654号土坑

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒を微量に含む。

655号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・多量の白色軽石粒を多量に含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒・塊を少量含む。

658号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)少量のローム粒と微量の焼土・炭化物を含む。

659・660号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒とローム小塊を微量に含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・白色軽石粒を少量含む。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ロームを少量含む。

663号土坑

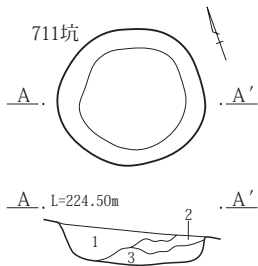
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・焼土・炭化物を微量に含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ロームを少量含む。

669・675号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の白色軽石粒とローム粒・塊、明赤褐色土粒を含む。
- 2 褐色土(10YR4/4)ローム塊を多量に含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の白色軽石粒、ローム粒、明赤褐色土粒を含む。

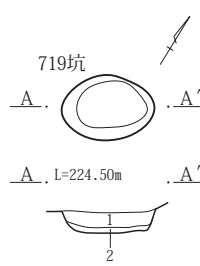
701号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量のローム粒・白色軽石粒と明赤褐色土粒を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・白色軽石粒を含む。



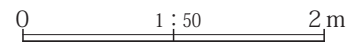
711号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)多量の径1cmローム塊と少量の灰白色軽石粒を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)少量の灰白色軽石粒・炭化物と多量のローム粒を含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量の径3~5cmローム塊と微量の灰白色軽石粒を含む。



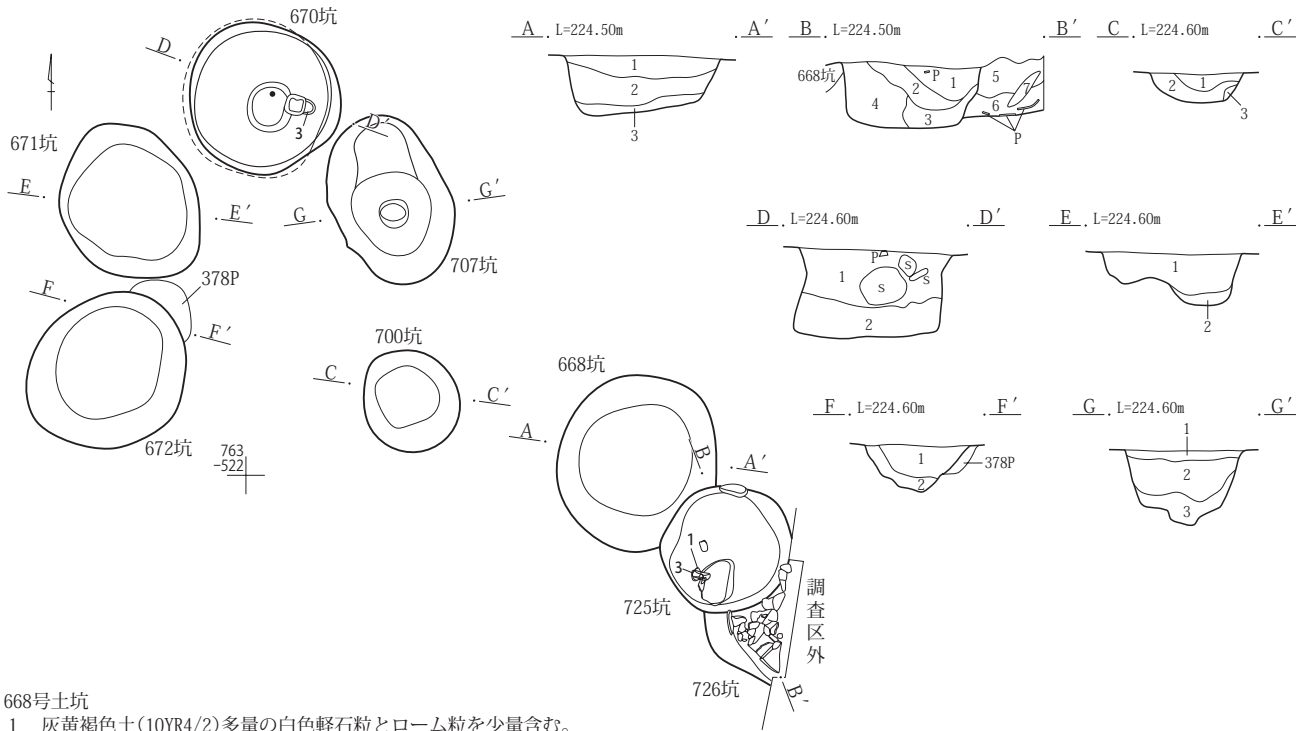
719号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・灰多量の白色軽石粒と炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒を少量含む。



第210図 土坑(21)〔7区647・649・654・655・658~660・663・669・675・701・711・719号〕

第3章 遺跡の調査内容



668号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の白色軽石粒とローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4)中量の白色軽石粒、ローム粒・塊と少量の明赤褐色土粒を含む。
- 3 黄橙色土(10YR7/8)ローム粒・塊主体。

670号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の白色軽石粒・ローム粒と少量の明赤褐色土粒・炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4)多量のローム大塊と少量の白色軽石粒・明赤褐色土粒を含む。人為的埋没か。

671号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)白色軽石粒・ローム粒・明赤褐色土粒を少量含む。
- 2 ローム粒・塊を主体に暗褐色土(10YR3/5)を少量含む。

672号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)中量の白色軽石粒、ローム粒・塊と明赤褐色土粒、炭化物粒を少量含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/8)中量のローム粒・塊を含む。

700号土坑

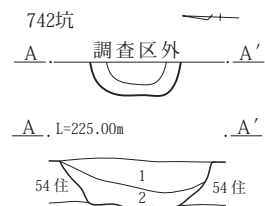
- 1 褐灰色土(10YR4/1)中量のローム粒・白色軽石粒と少量の明赤褐色土粒を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・白色軽石粒を含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8)ローム塊主体。

707号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒を微量に含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)ローム粒・小塊を多量に含む。
- 3 暗灰黄色土(10Y5/2)ローム粒を微量に含む。

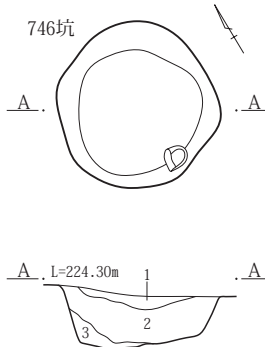
725・726号土坑

- 1 黄褐色土(10Y5/3)ローム小塊・粒を多量に含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)少量の径1～3cmローム塊と多量のローム粒を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)径1cmローム塊・粒を多量に含む。
- 4 鈍い黄色土(10Y6/4)径3cmローム塊を多量に含む。
- 5 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径3cmローム塊・粒、焼土粒を含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR5/2)径5cmローム塊・粒を含む。
- 7 黒褐色土(10YR2/2)攪乱層。



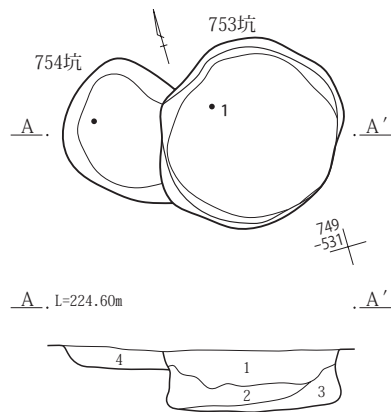
742号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒・明赤褐色土粒を含む。
- 2 褐灰色土(10YR4/1)中量のローム粒・塊と明赤褐色土粒を少量含む。



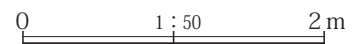
746号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)中量のローム粒・塊と明赤褐色土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4)多量のローム粒・塊を含む。人為的埋没か。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を少量含む。

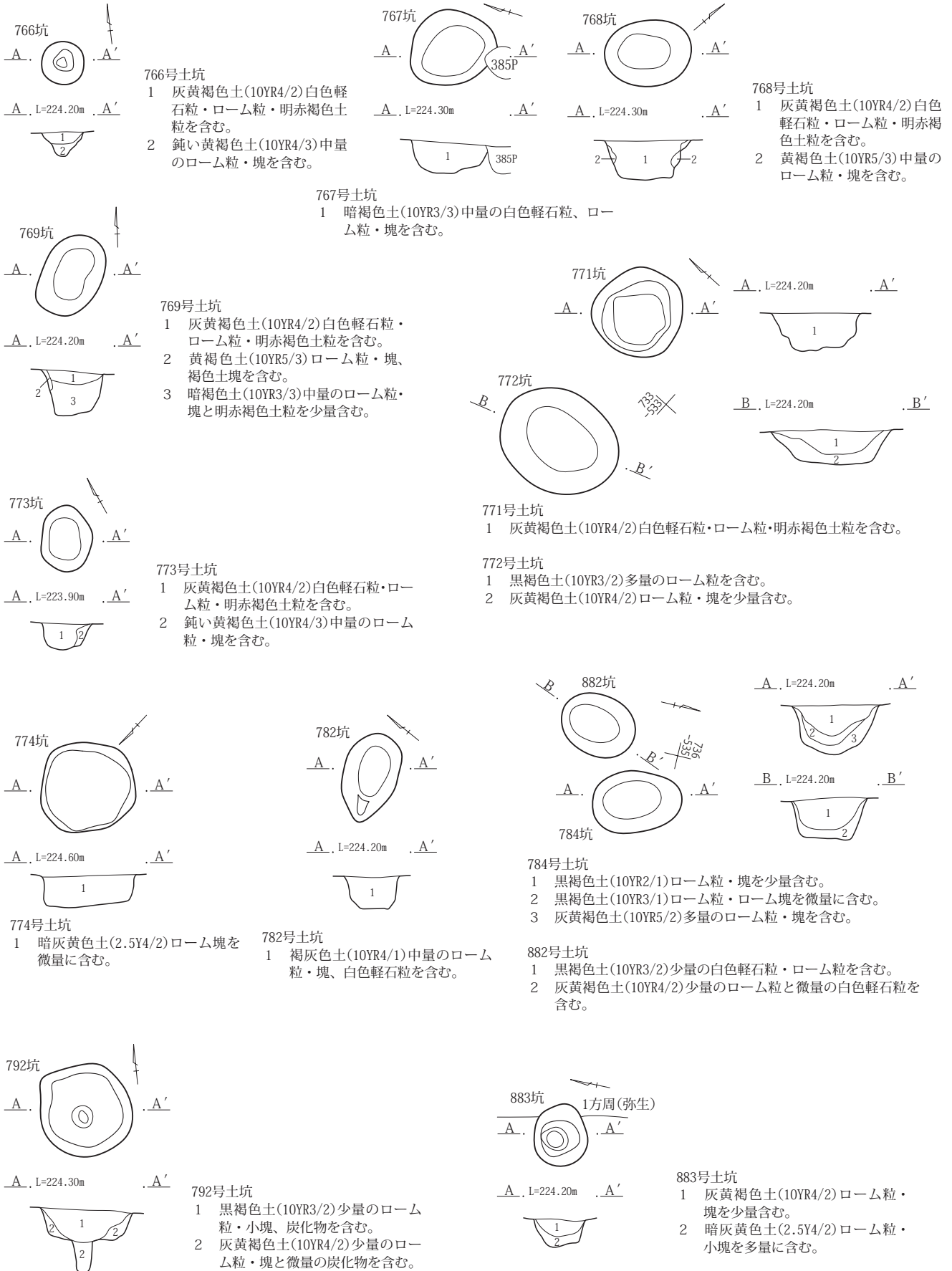


753・754号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径1cmローム塊・粒を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム小塊・粒を多量に含む。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR5/4)径3～5cmローム塊・粒を多量に含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2)径5cmローム塊・炭化物を含む。

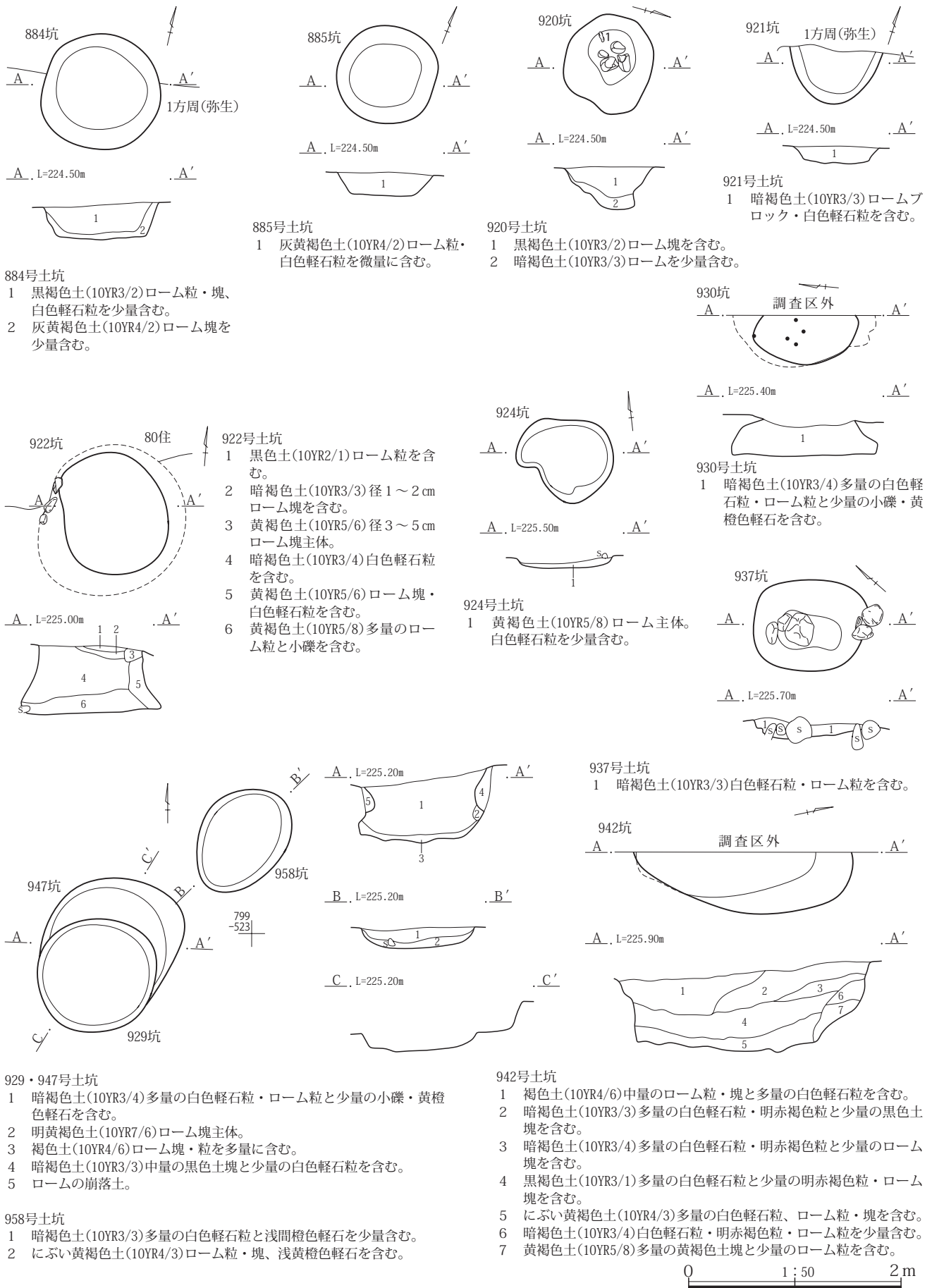


第211図 土坑(22)〔7区668・670～672・700・707・725・726・742・746・753・754号〕



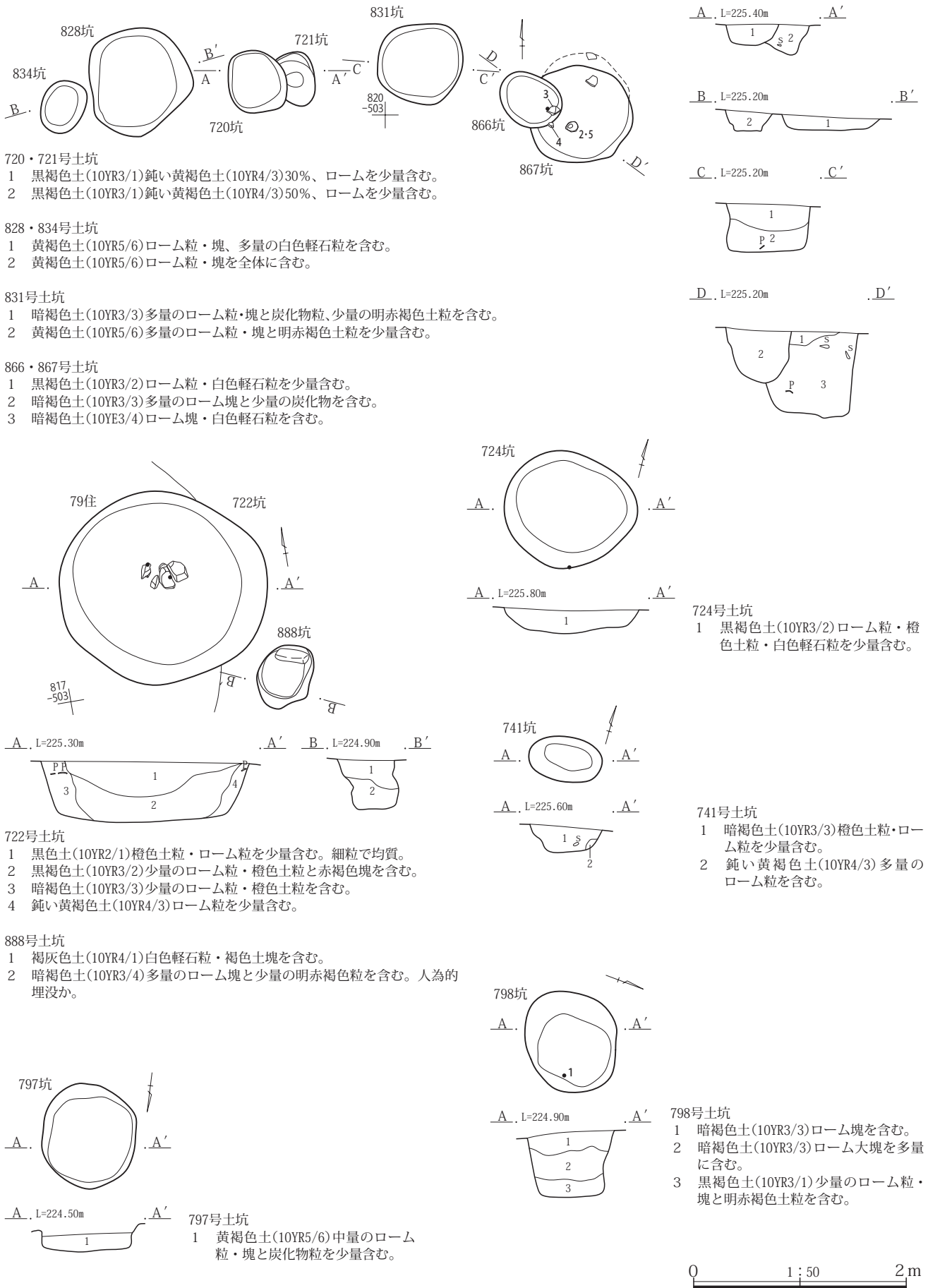
第212図 土坑(23)〔7区766~769・771~774・782・784・792・882・883号〕

第3章 遺跡の調査内容

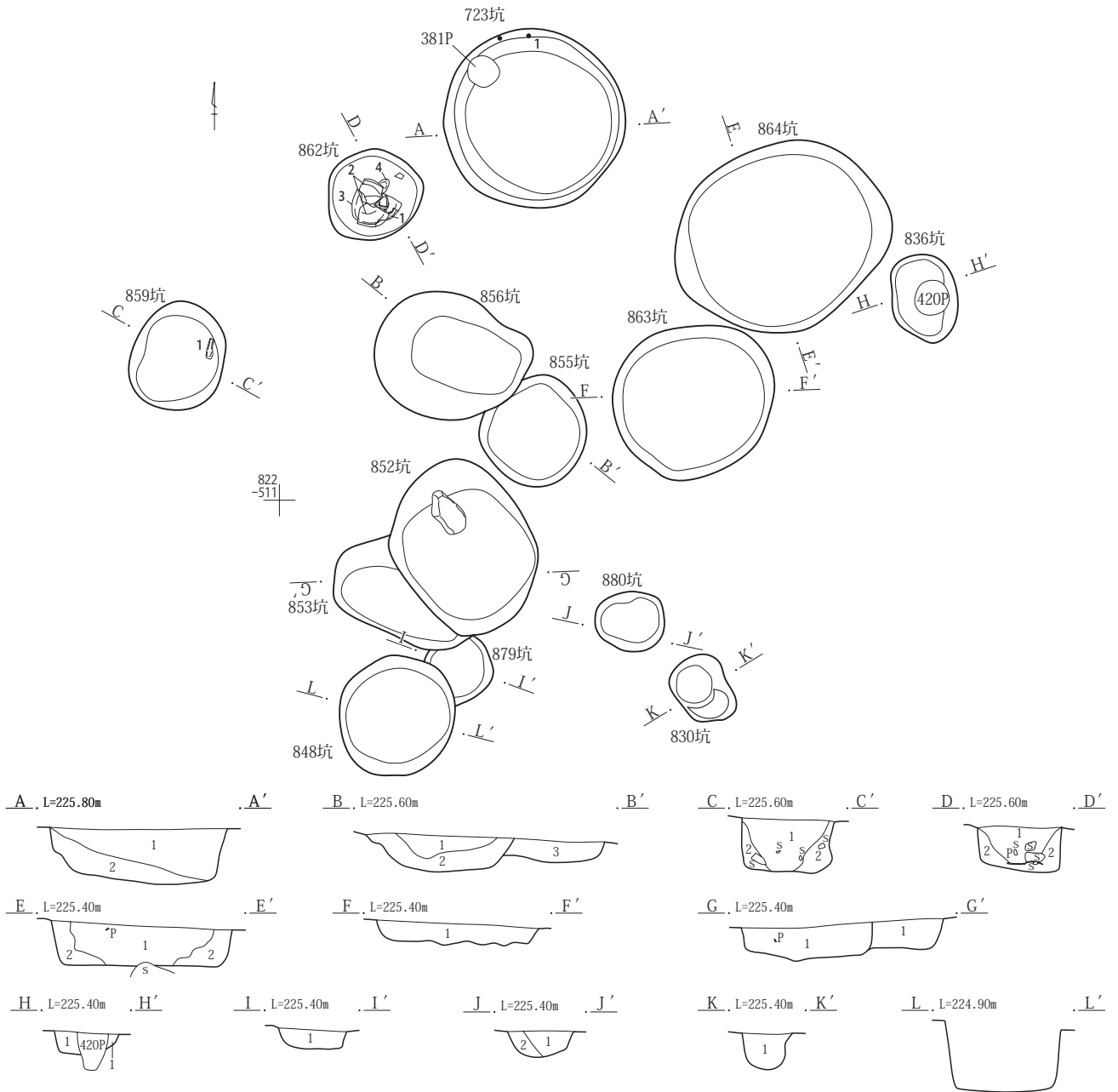


第213図 土坑(24)〔7区884・885・920~922・924・929・930・937・942・947・958号〕

第3章 遺跡の調査内容



第215図 土坑(26)〔8区720~722・724・741・797・798・828・831・834・866・867・888号〕



723号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒・橙色土粒・炭化物粒を少量含む。
- 2 黒色土(10YR2/1)ローム粒・橙色土粒・炭化物粒・焼土を少量含む。

830号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・明赤褐色土粒を少量含む。

836号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒を微量に含む。

852・853号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム塊・橙色土塊を含む。

855・856号土坑

- 1 黒褐色土(10YR3/2)ロームを少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ロームを少量含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を少量含む。

859号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ロームを少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を多量に含む。

862号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ロームを少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。

863号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を多量に含む。

864号土坑

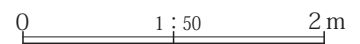
- 1 黒褐色土(10YR3/2)径1cmローム塊を少量含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR5/4)ローム塊・粒を多量に含む。

879号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒を含む。

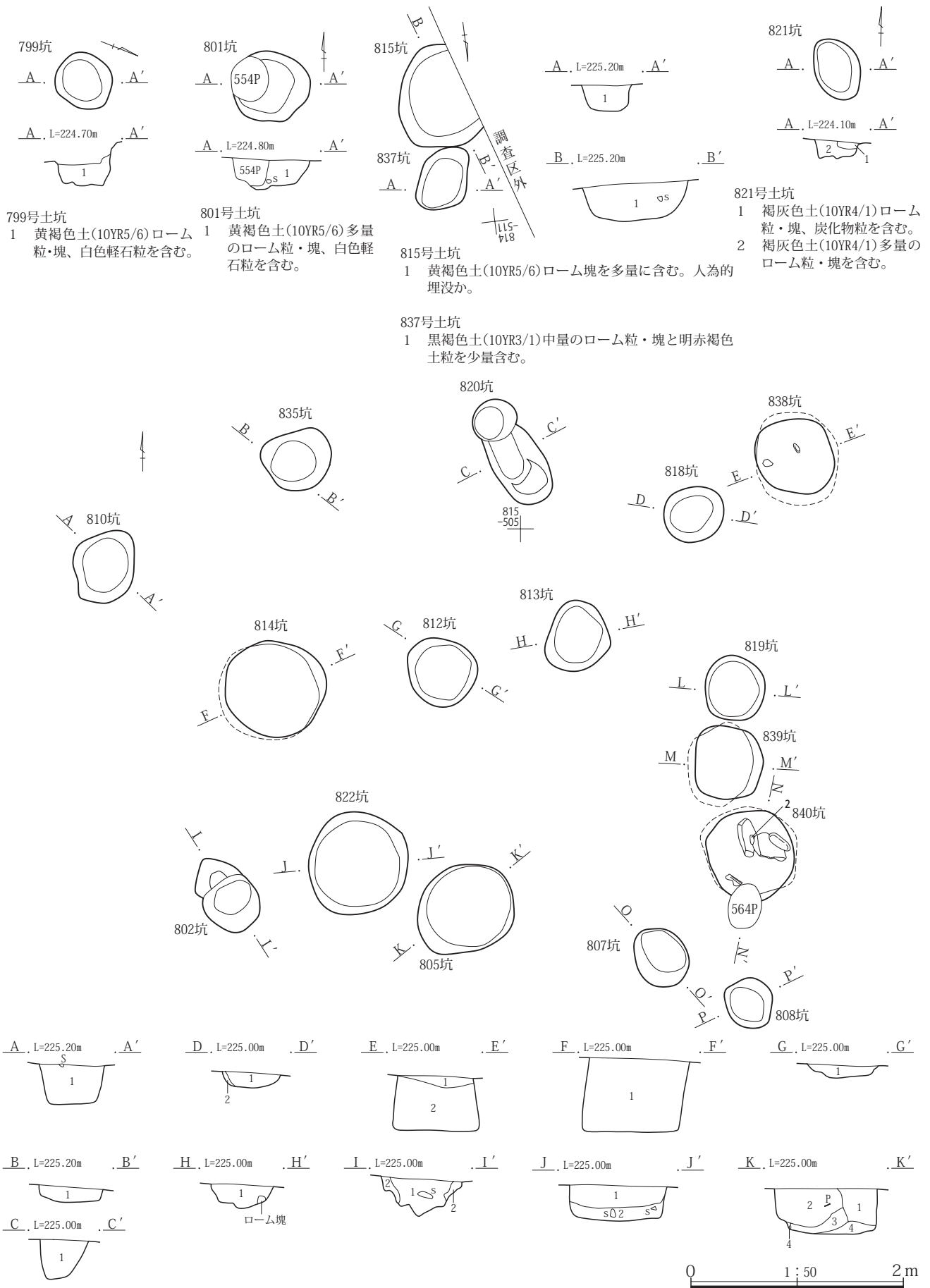
880号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ロームを少量含む。



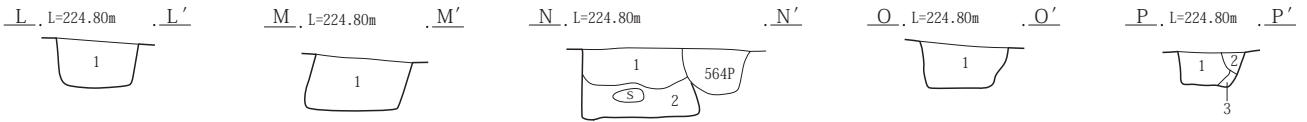
第216図 土坑(27)〔8区723・830・836・848・852・853・855・856・859・862~864・879・880号〕

第3章 遺跡の調査内容



第217図 土坑(28)〔8区799・801・802・805・807・808・810・812~815・818~822・835・837~840号〕

4. 縄文時代の遺構と遺物



- 802号土坑
 1 黄褐色土(10YR5/6)中量のローム粒・塊と白色軽石粒、明赤褐色土粒を少量含む。
 2 黄褐色土(10YR5/6)中量のローム粒・塊を含む。

- 805号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/4)多量のローム粒・塊と少量の赤褐色土粒を含む。
 2 暗褐色土(10YR3/3)中量のローム粒・塊、白色軽石粒と少量の明赤褐色土粒を含む。
 3 黄褐色土(10YR8/8)ローム主体。褐色土塊を含む。
 4 1層と2層の混土層。

- 807号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)少量のローム粒・塊、炭化物粒と微量の明赤褐色土粒を含む。

- 808号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)少量のローム粒・塊、炭化物粒と微量の明赤褐色土粒を含む。
 2 黒褐色土(10YR3/1)炭化物粒を少量含む。
 3 暗褐色土(10YR3/4)中量のローム粒・塊を含む。

- 810号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)少量のローム粒・塊、白色軽石粒と微量の明赤褐色土粒を含む。

- 812号土坑
 1 黄褐色土(10YR5/6)中量のローム粒・塊を含む。

- 813号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)少量のローム粒・塊、白色軽石粒と微量の明赤褐色土粒を含む。

- 814号土坑
 1 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒・塊を全体に含む。

- 818号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・白色軽石粒・明赤褐色土粒・炭化物粒を少量含む。
 2 黄褐色土(10YR5/6)ロームの崩落土。

- 819号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・白色軽石粒・明赤褐色土粒・炭化物粒を少量含む。

- 820号土坑
 1 黄褐色土(10YR5/6)多量のローム粒・塊と少量の炭化物粒を含む。

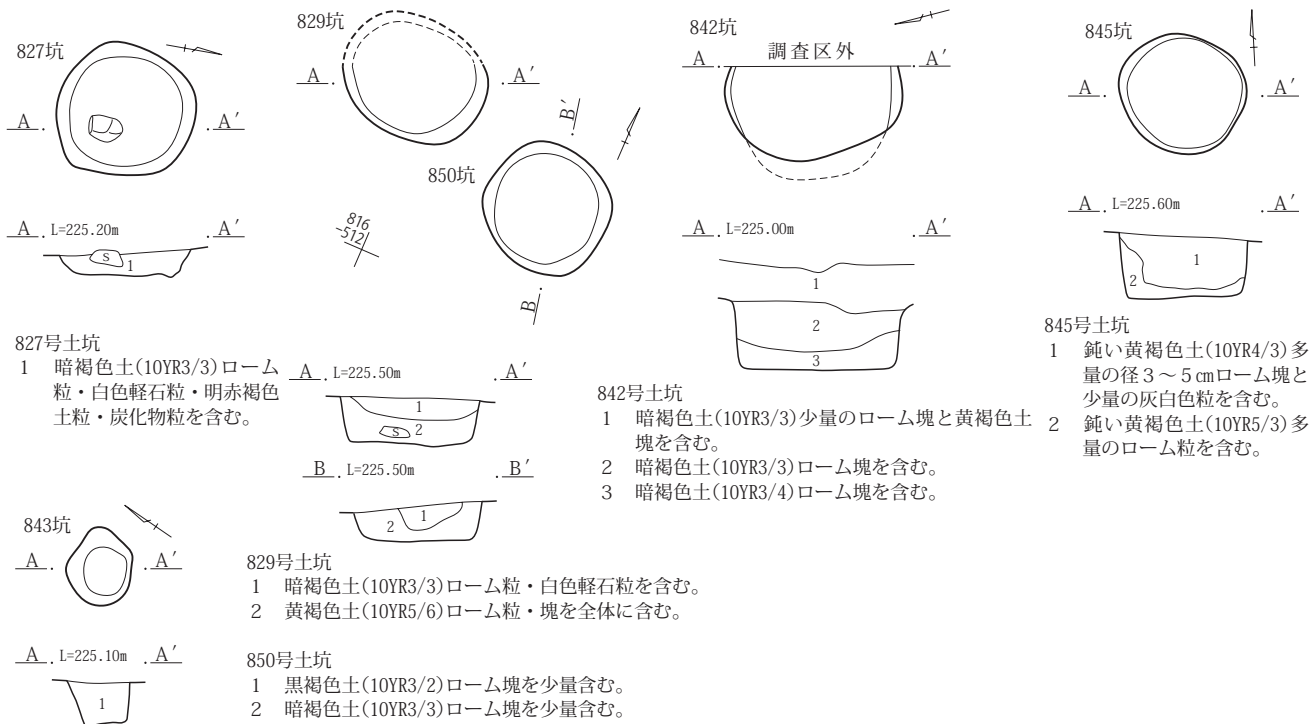
- 822号土坑
 1 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒・塊を全体に含む。人為的埋没か。
 2 暗褐色土(10YR3/4)礫を全体に含む。

- 835号土坑
 1 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒・塊、白色軽石粒を含む。

- 838号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)細粒炭化物粒を少量含む。
 2 黄褐色土(10YR5/6)多量のローム粒・塊を含む。人為的埋没か。

- 840号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム・炭化物を少量含む。
 2 黒褐色土(10YR3/2)ローム・炭化物を少量含む。

- 839号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム塊・炭化物を少量含む。



- 827号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・白色軽石粒・明赤褐色土粒・炭化物粒を含む。

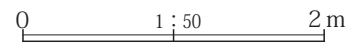
- 842号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)少量のローム塊と黄褐色土塊を含む。
 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。
 3 暗褐色土(10YR3/4)ローム塊を含む。

- 845号土坑
 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量の径3～5cmローム塊と少量の灰白色粒を含む。
 2 鈍い黄褐色土(10YR5/3)多量のローム粒を含む。

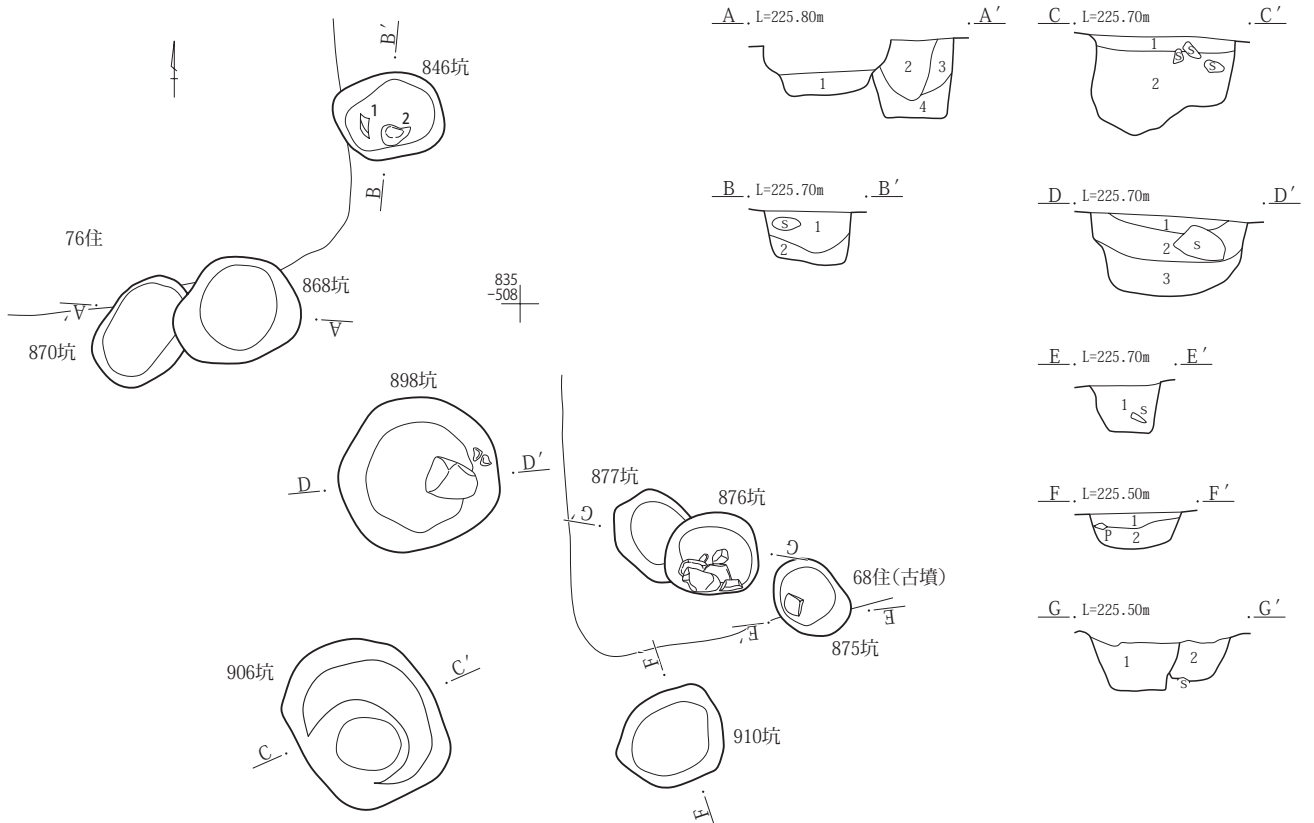
- 829号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・白色軽石粒を含む。
 2 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒・塊を全体に含む。

- 850号土坑
 1 黒褐色土(10YR3/2)ローム塊を少量含む。
 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を少量含む。

- 843号土坑
 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。



第218図 土坑(29)〔8区827・829・842・843・845・850号〕



846号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量の径1~3cmローム塊と少量の灰白色細粒を含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR5/3)多量のローム粒と小礫を含む。

868・870号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量のローム粒と径3~5cmローム塊を少量含む。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2)径2~30mmローム塊を10%含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒2%含む。
- 4 黒褐色土(10Y3/2)径2~50mmローム塊を3%含む。

875号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR5/3)径1cmローム塊を少量含む。

876・877号土坑

- 1 鈍い黄褐色土(10YR5/3)径10cmローム塊・粒を多量に含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)径3~5cmローム塊を少量含む。

898号土坑

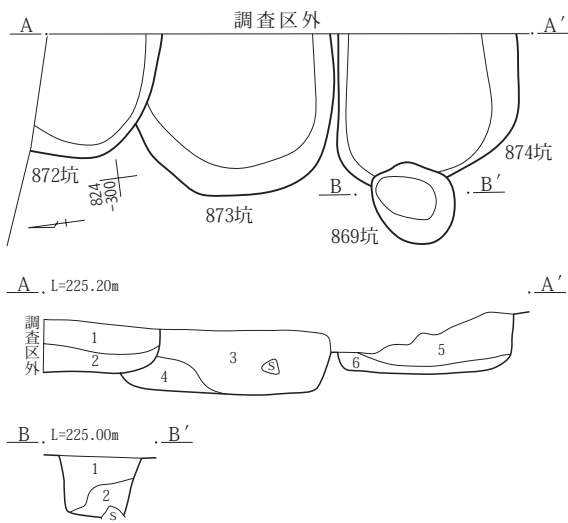
- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を多量に含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/4)ローム塊を多量に含む。

906号土坑

- 1 褐灰色土(10YR4/1)多量の白色軽石粒・小礫と中量のローム粒・塊を含む。
- 2 褐灰色土(10YR5/1)黄褐色土塊を多量に含む。人為的埋没か。

910号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3)中量の白色軽石粒・ローム塊と少量の明赤褐色土粒を含む。
- 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)多量の白色軽石粒・黄褐色土塊を含む。人為的埋没か。

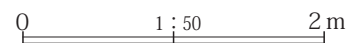


869号土坑

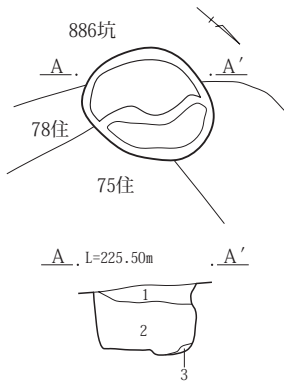
- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒を含む。

872~874号土坑

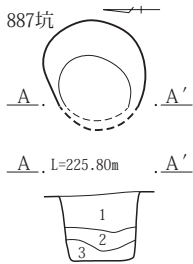
- 1 暗褐色土(10YR3/3)中量のローム粒・塊を含む。
- 2 褐色土(10YR4/4)中量のローム粒・塊と明赤褐色土粒を少量含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/6)中量のローム粒・塊を含む。人為的埋没か。
- 4 明黄褐色土(10YR6/8)多量のローム粒・塊を含む。人為的埋没か。
- 5 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊、白色軽石粒を含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/2)黒褐色土塊、ローム粒・塊、白色軽石粒を含む。



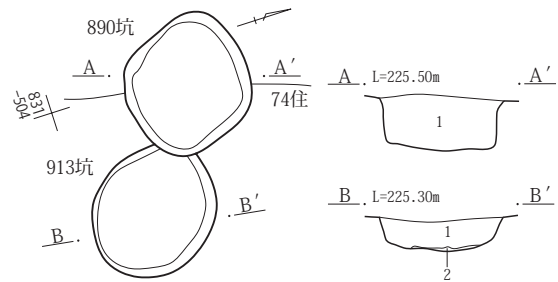
第219図 土坑(30)〔8区846・868~870・872~877・898・906・910号〕



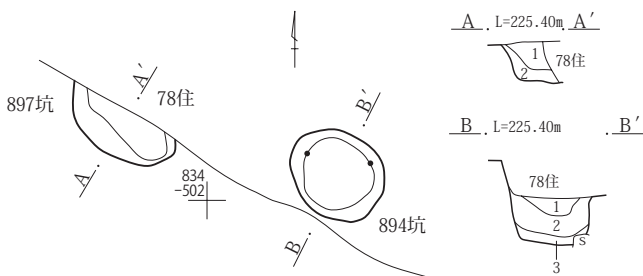
- 886号土坑
- 1 鈍い黄褐色土(10YR5/3)多量の径1~3cmローム塊と少量の炭化物を少量含む。
 - 2 灰黄褐色土(10YR4/2)径1~10cmローム塊・小礫と少量の炭化物を含む。
 - 3 灰黄褐色土(10YR6/2)多量のローム粒を含む。



- 887号土坑
- 1 暗褐色土(10YR3/3)少量の明赤褐色粒・白色軽石粒・ローム塊を含む。
 - 2 褐色土(10YR4/4)多量のローム塊と少量の明赤褐色粒を含む。
 - 3 黄褐色土(10YR5/8)ローム粒・褐灰色砂粒土を含む。

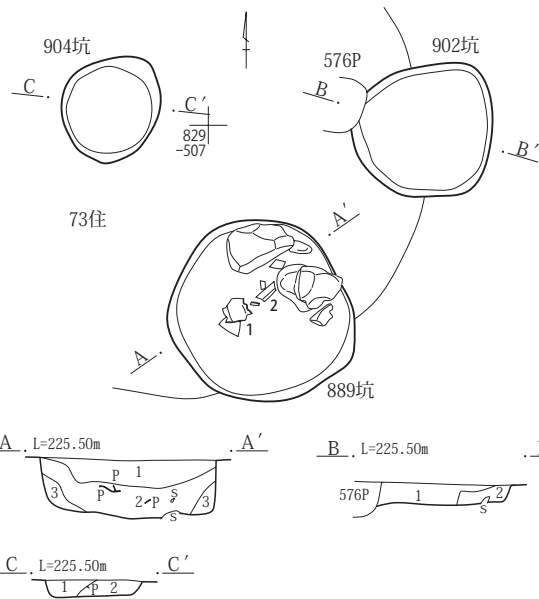


- 890号土坑
- 1 褐灰色土(10YR4/1)ローム大塊・褐色土大塊を多量に含む。人為的埋没か。
- 913号土坑
- 1 褐灰色土(10YR4/1)白色軽石粒・黄褐色土塊を含む。人為的埋没か。
 - 2 褐灰色土(10YR5/1)鈍い黄褐色土主体。



- 894号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)少量の橙色土粒を含む。
 - 2 暗褐色土(10YR3/3)径1cmローム塊・小礫を含む。
 - 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊・粒を多量に含む。

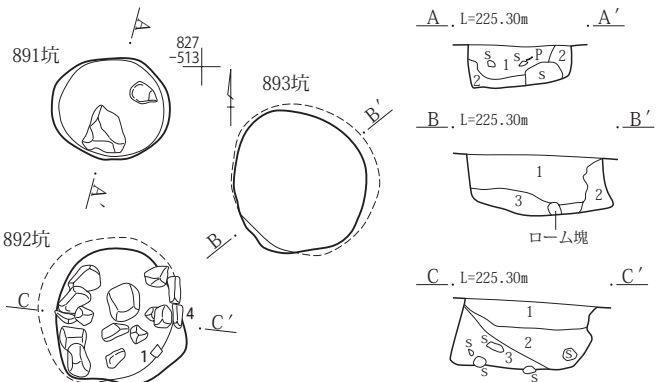
- 897号土坑
- 1 黒褐色土(10YR3/2)灰多量の白色軽石粒と炭化物を少量含む。
 - 2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・粒を含む。



- 889号土坑
- 1 暗褐色土(10YR3/3)少量の鈍い黄褐色土と少量の白色軽石粒を含む。
 - 2 暗褐色土(10YR3/3)少量のローム塊・白色軽石粒・橙色土粒を含む。
 - 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊含む。

- 902号土坑
- 1 黒褐色土(10YR2/1)褐色土塊・白色軽石粒を含む。
 - 2 鈍い黄褐色土(10YR5/3)多量の白色軽石粒を含む。

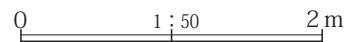
- 904号土坑
- 1 褐灰色土(10YR5/1)白色軽石粒・ローム粒を少量含む。
 - 2 褐灰色土(10YR4/1)多量の黄褐色土塊と少量の白色軽石粒を含む。



- 891号土坑
- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・白色軽石粒を含む。
 - 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊・白色軽石粒を少量含む。

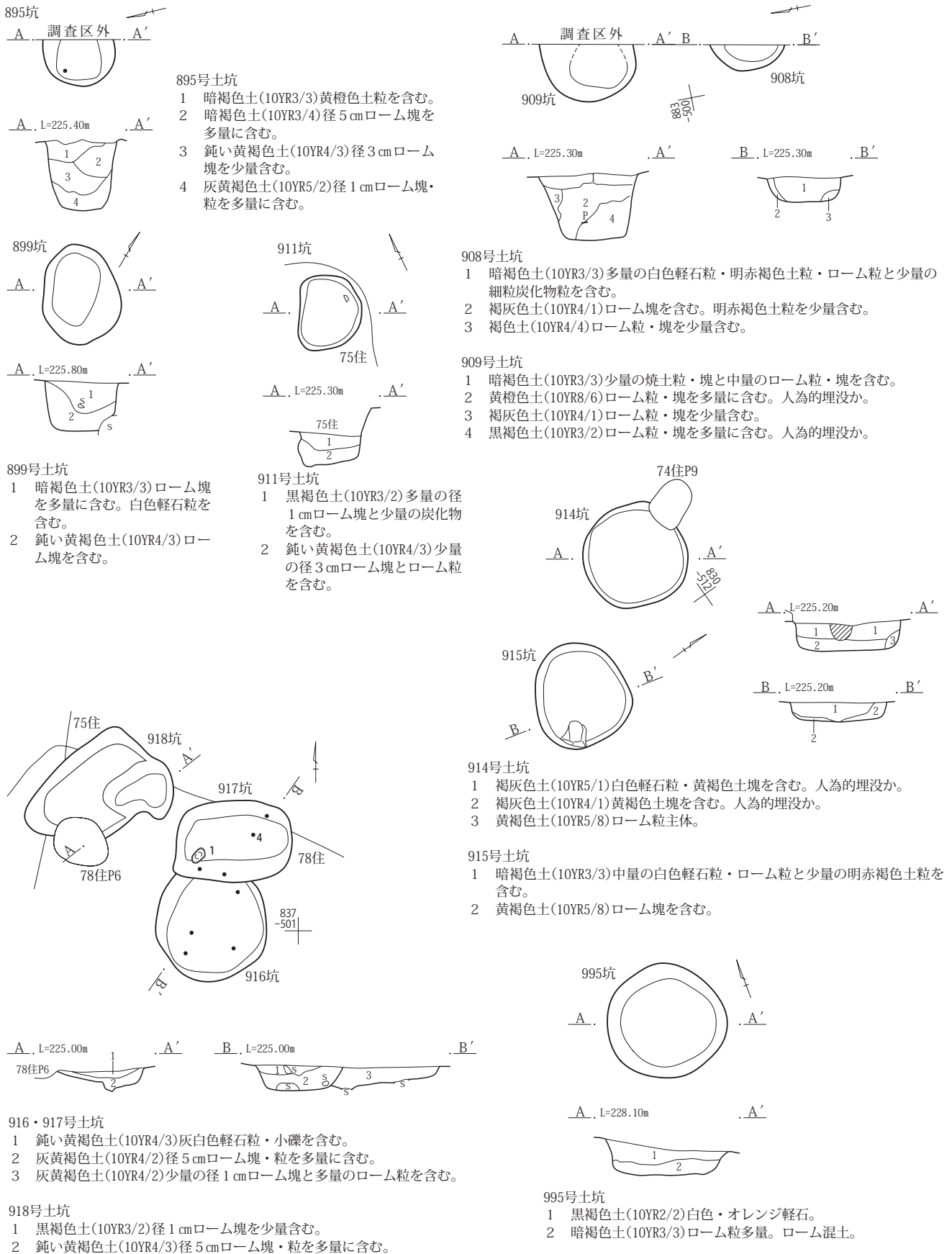
- 892号土坑
- 1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊・炭化物を含む。
 - 2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊・白色軽石粒を含む。
 - 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム塊を多量に含む。

- 893号土坑
- 1 黄褐色土(10YR5/8)ローム塊・粒を含む。人為的埋没か。
 - 2 黄褐色土(10YR5/6)ローム塊・粒を多量に含む。
 - 3 ローム塊・粒を主体とした土。



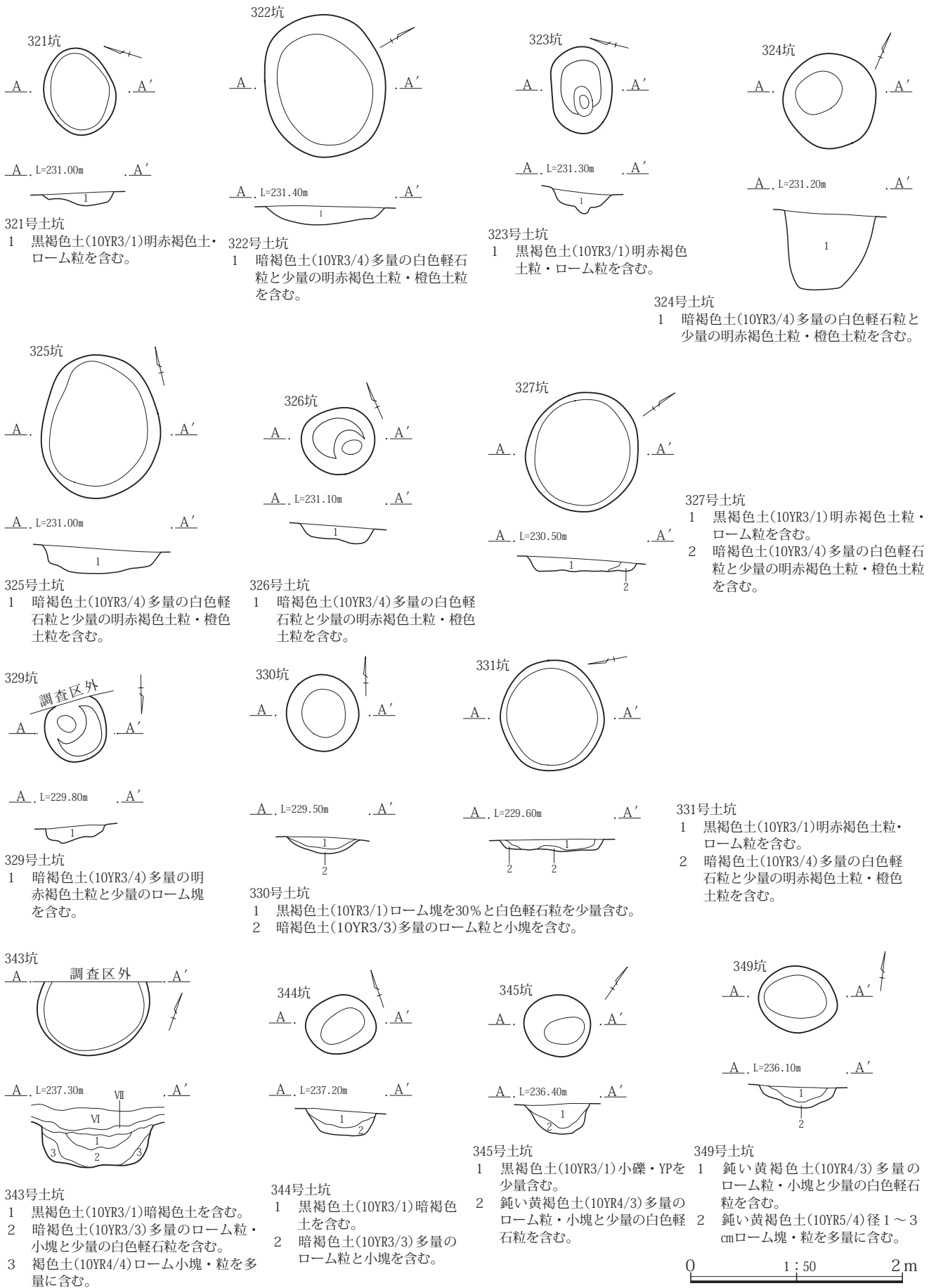
第220図 土坑(31)〔8区886・887・889~894・897・902・904・913号〕

第3章 遺跡の調査内容



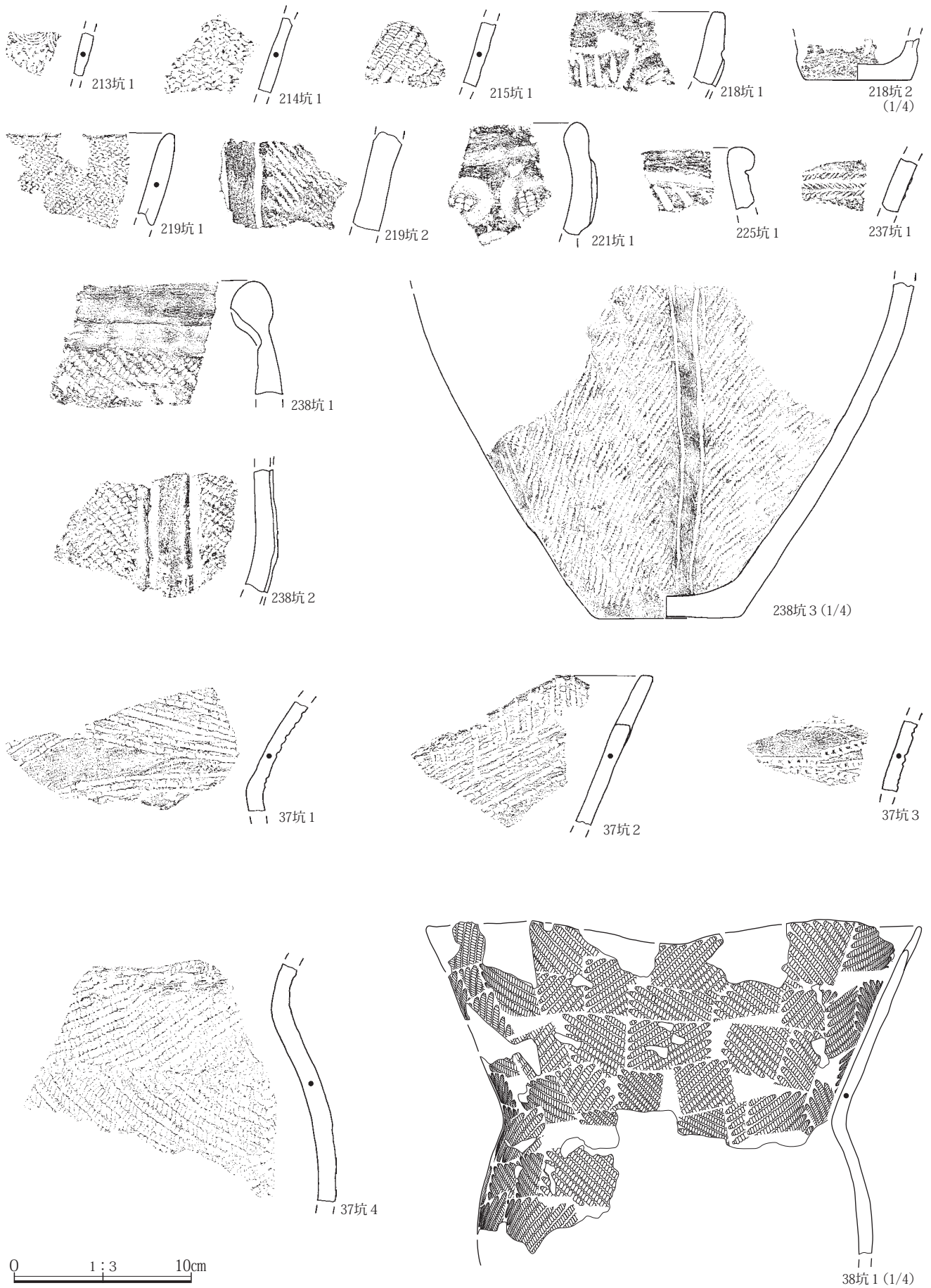
0 1:50 2m

第221図 土坑(32)〔8区895・899・908・909・911・914~918号、9区995号〕



第222図 土坑(33)〔10区321~327・329~331号、13区343~345・349号〕

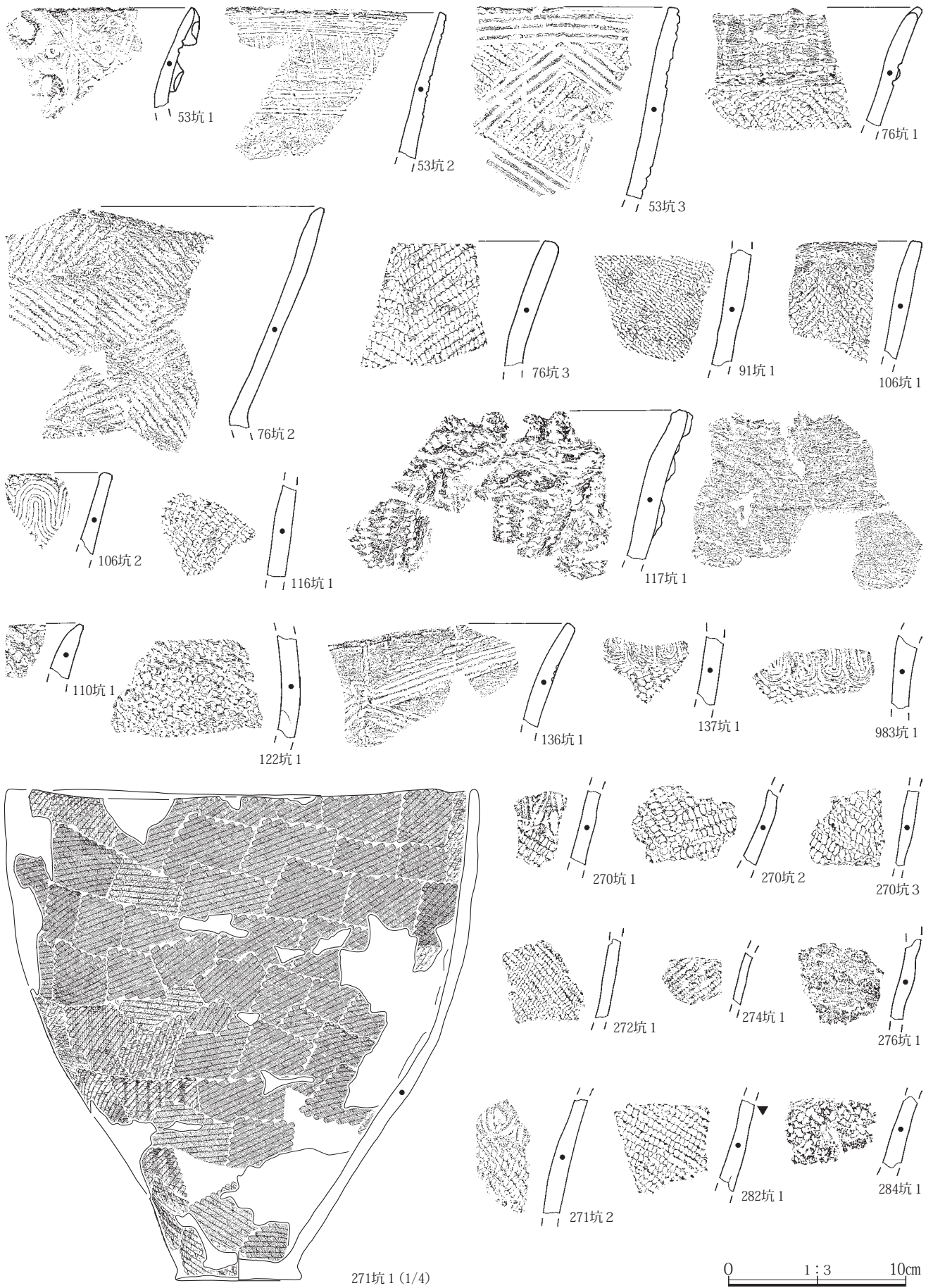
第3章 遺跡の調査内容



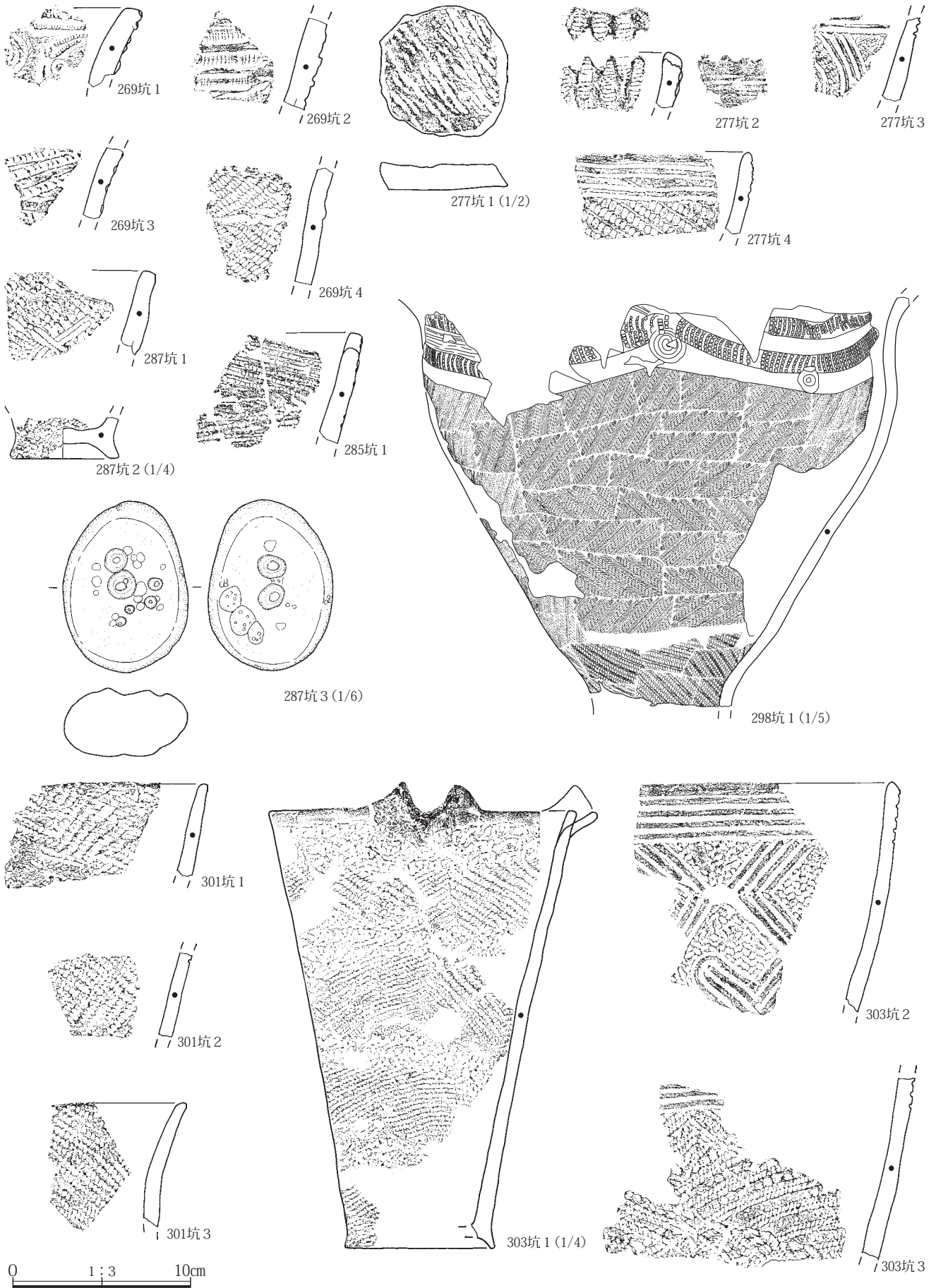
第223図 土坑出土遺物(1)〔1区213~215・218・219・221・225・237・238号、2区37・38号〕



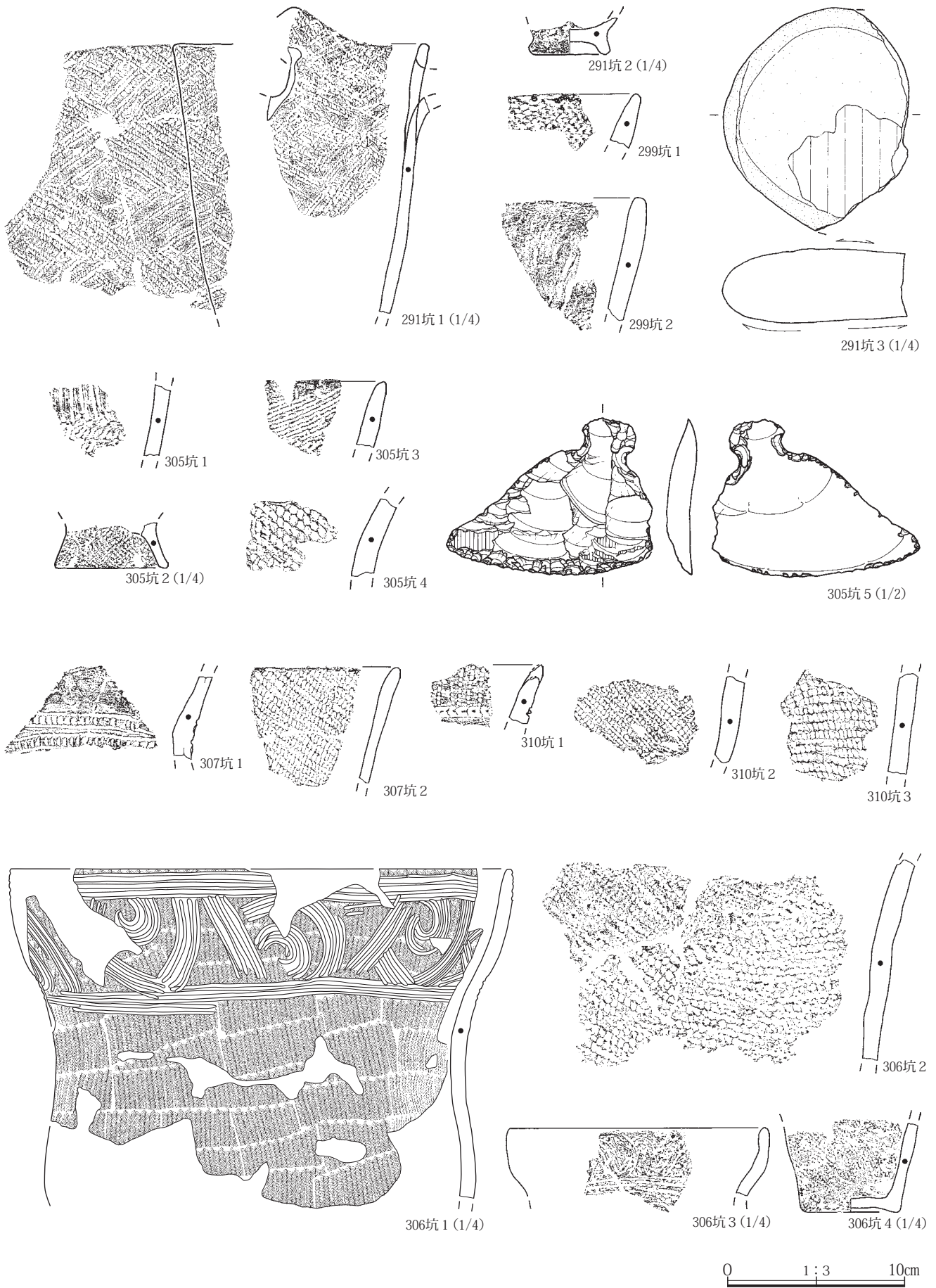
第224図 土坑出土遺物(2)〔2区38・39・41・44～51号〕



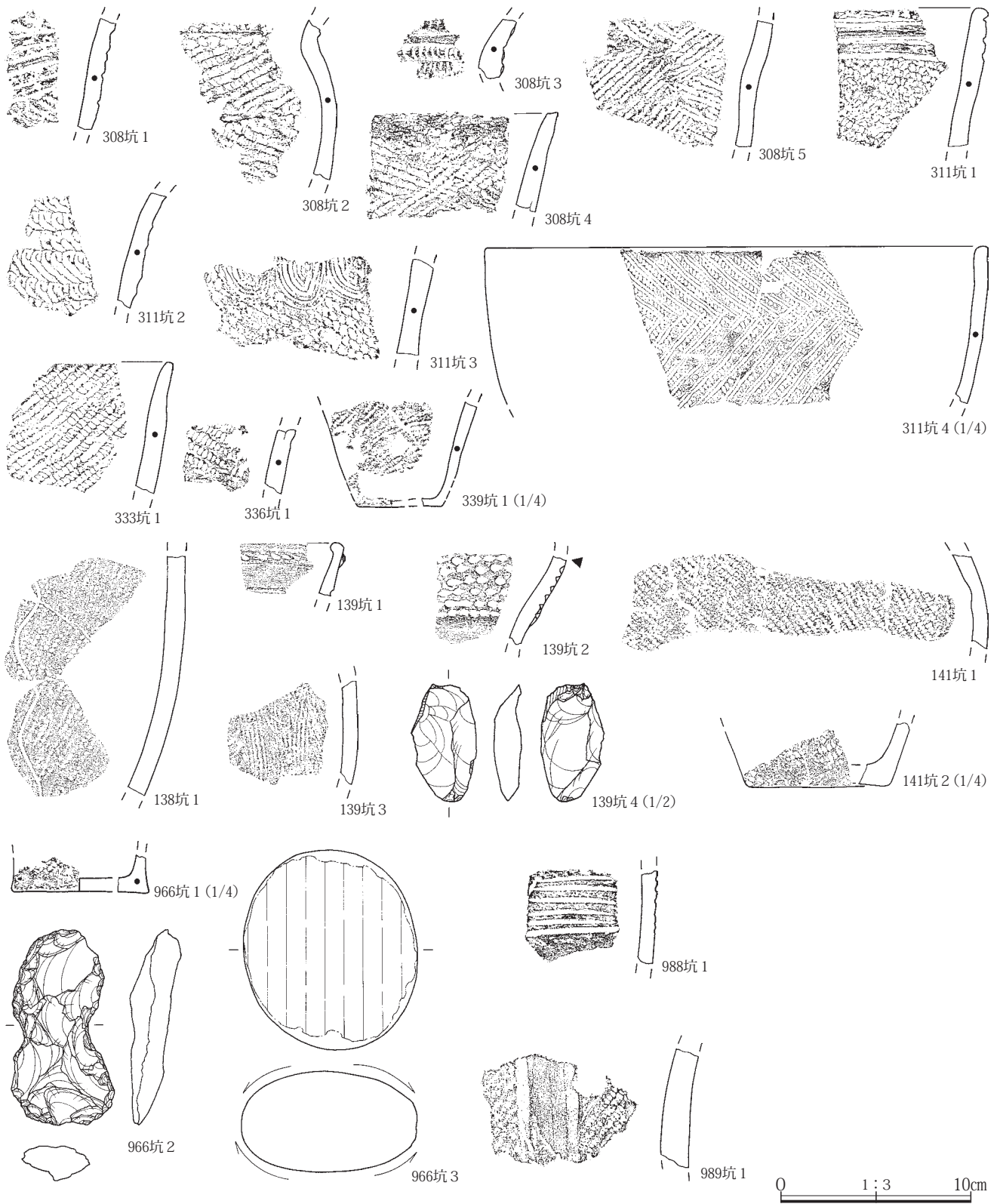
第225図 土坑出土遺物(3)[2区53・76・91・106・110・116・117・122・136・137・983号、4区270~272・274・276・282・284号]



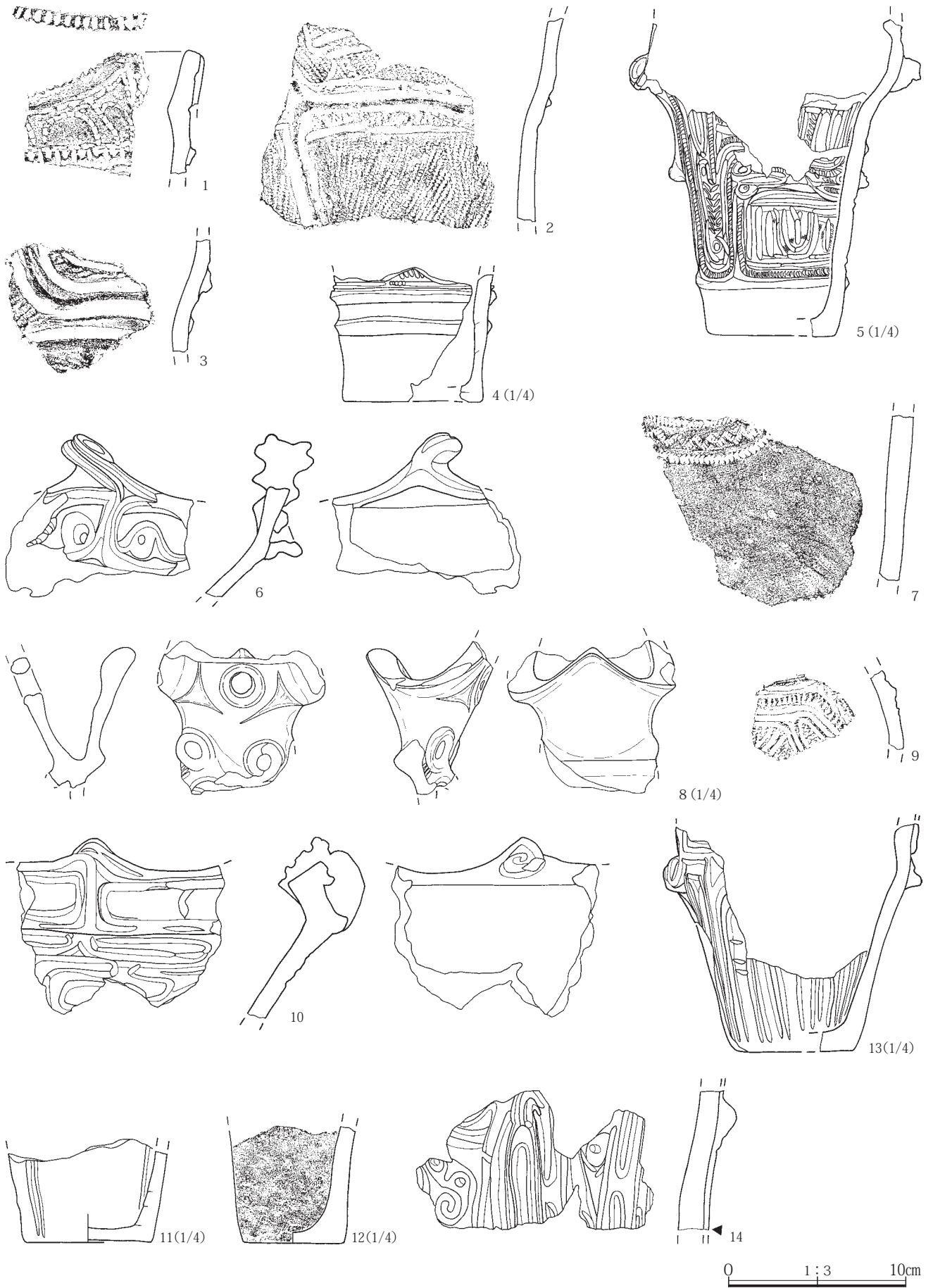
第226図 土坑出土遺物(4)〔4区269・277・285・287・298・301・303号〕



第227図 土坑出土遺物(5)[4区291・299・305～307・310号]



第228図 土坑出土遺物(6)[4区308・311・333・336・339号、5区138・139・141号、7区966・988・989号]

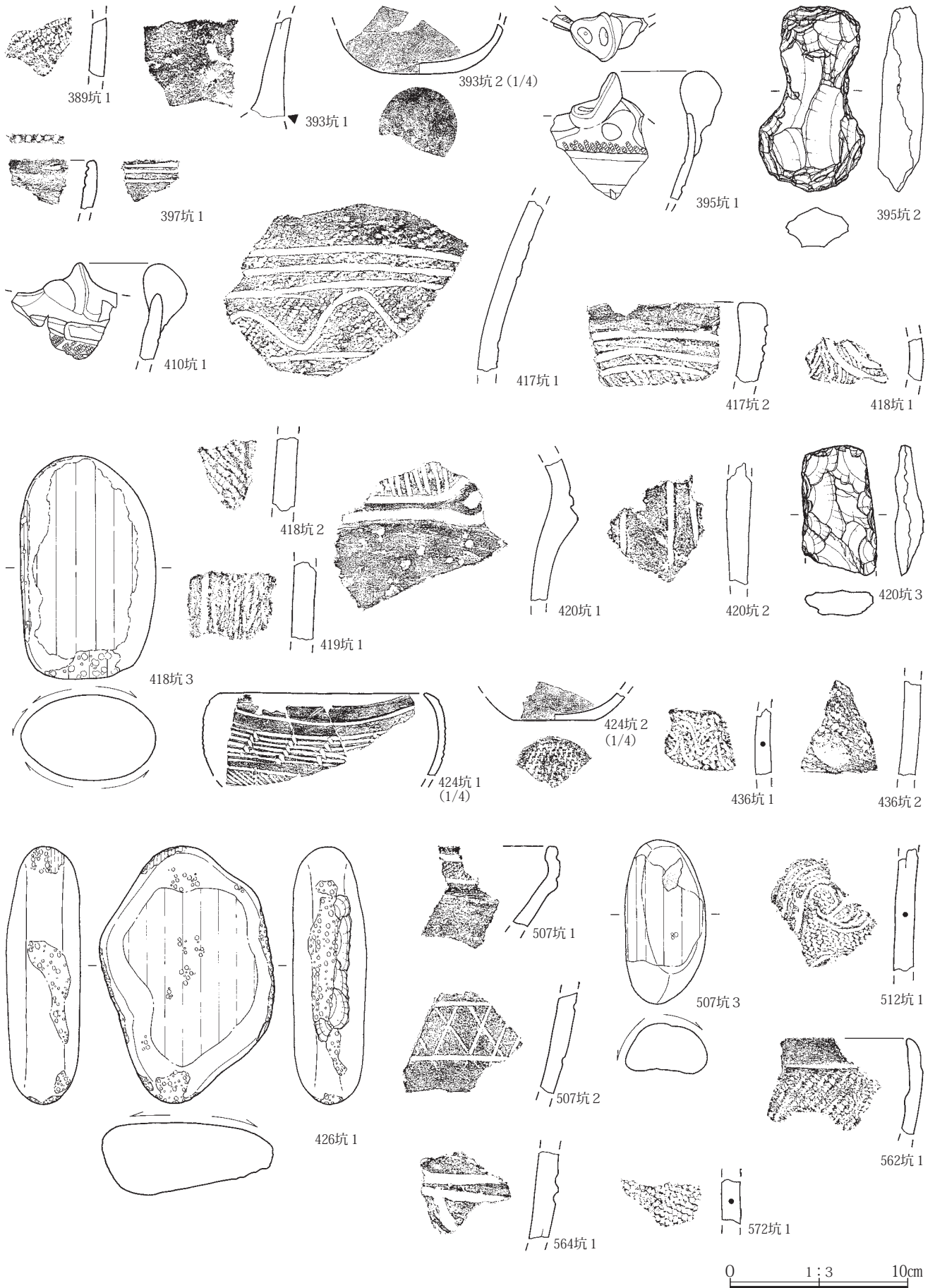


第229図 土坑出土遺物(7)[7区346号]

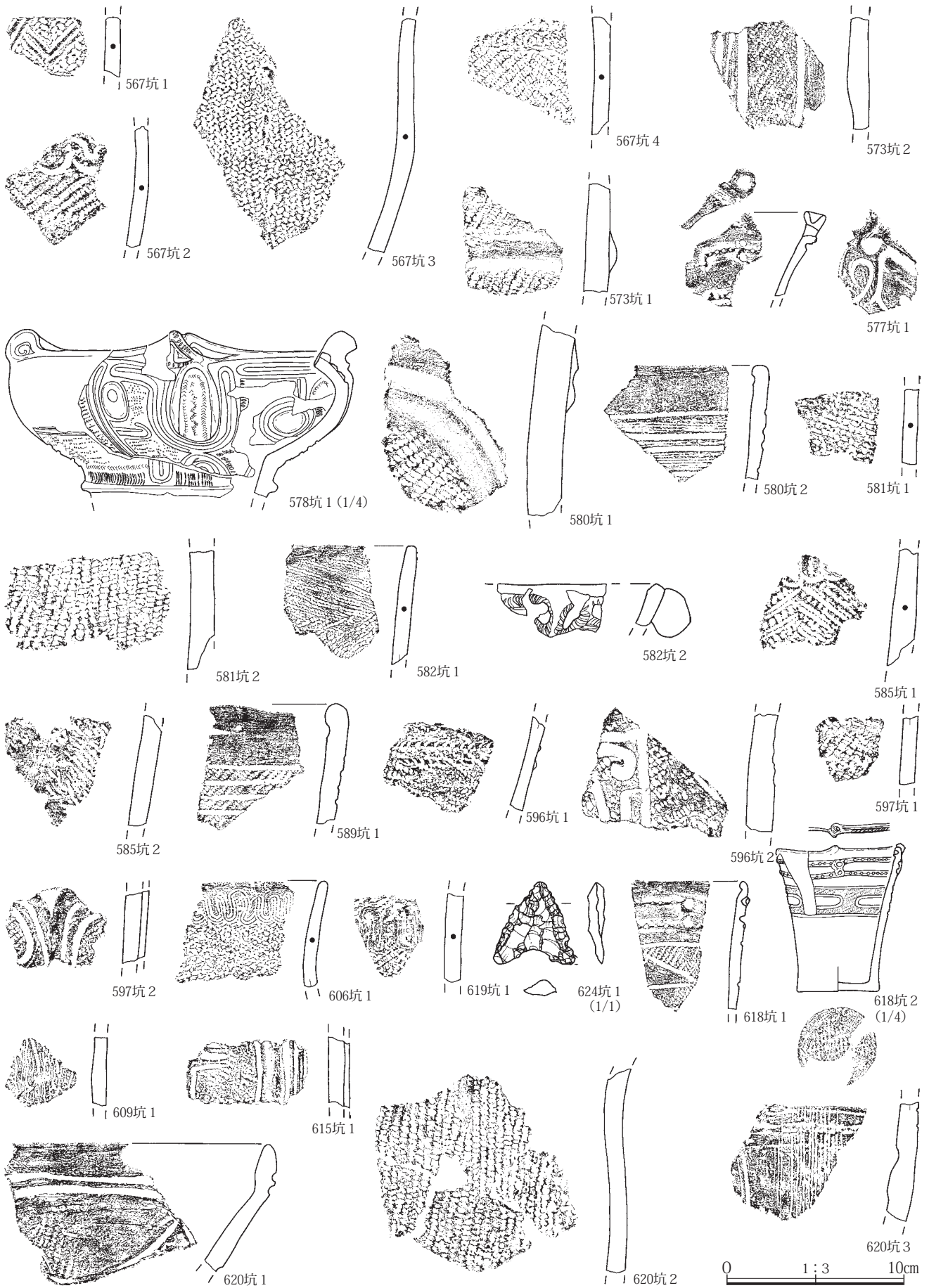


第230図 土坑出土遺物(8)〔7区346・347・351・352・361・362・381~383号〕

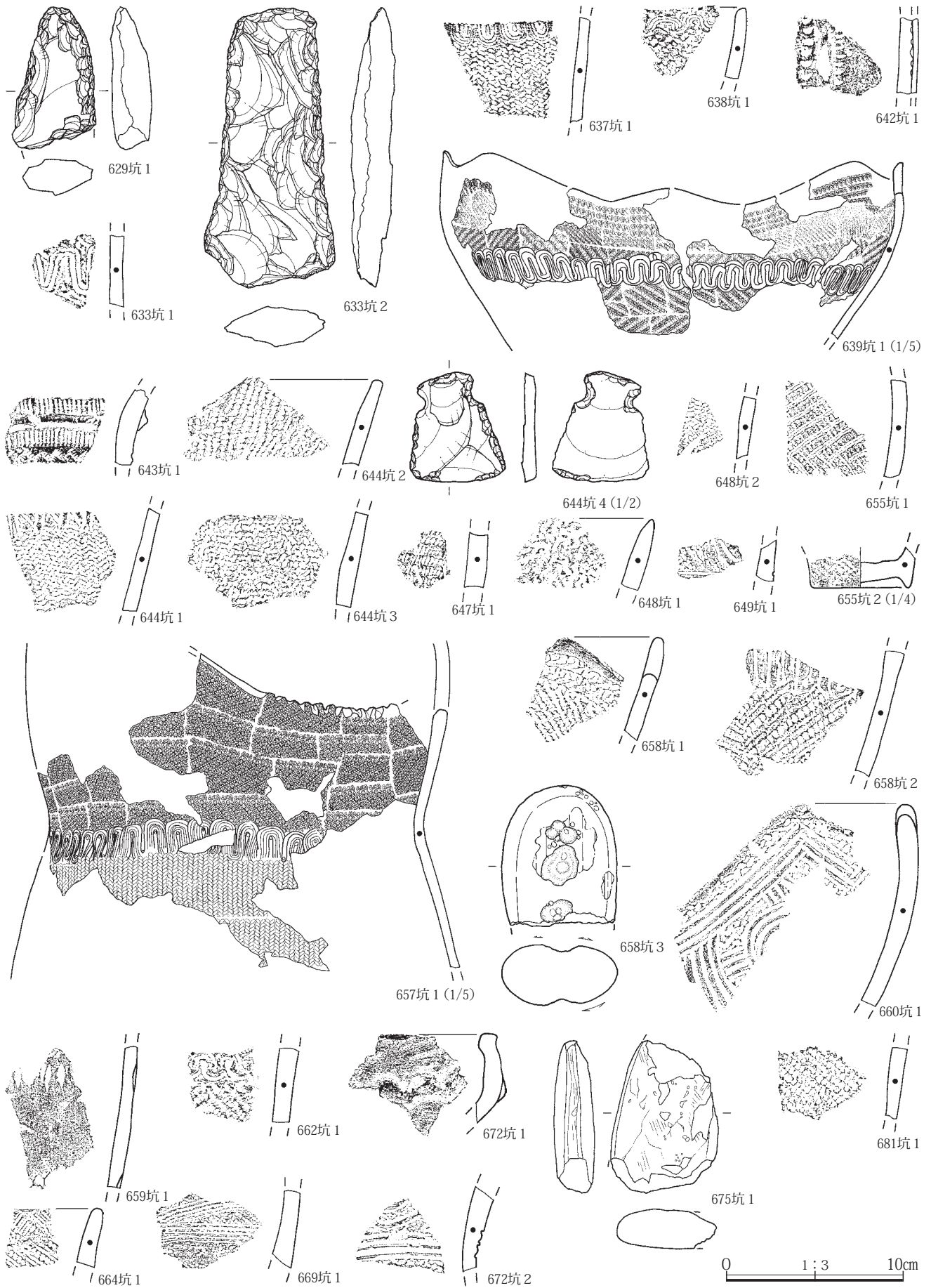
第3章 遺跡の調査内容



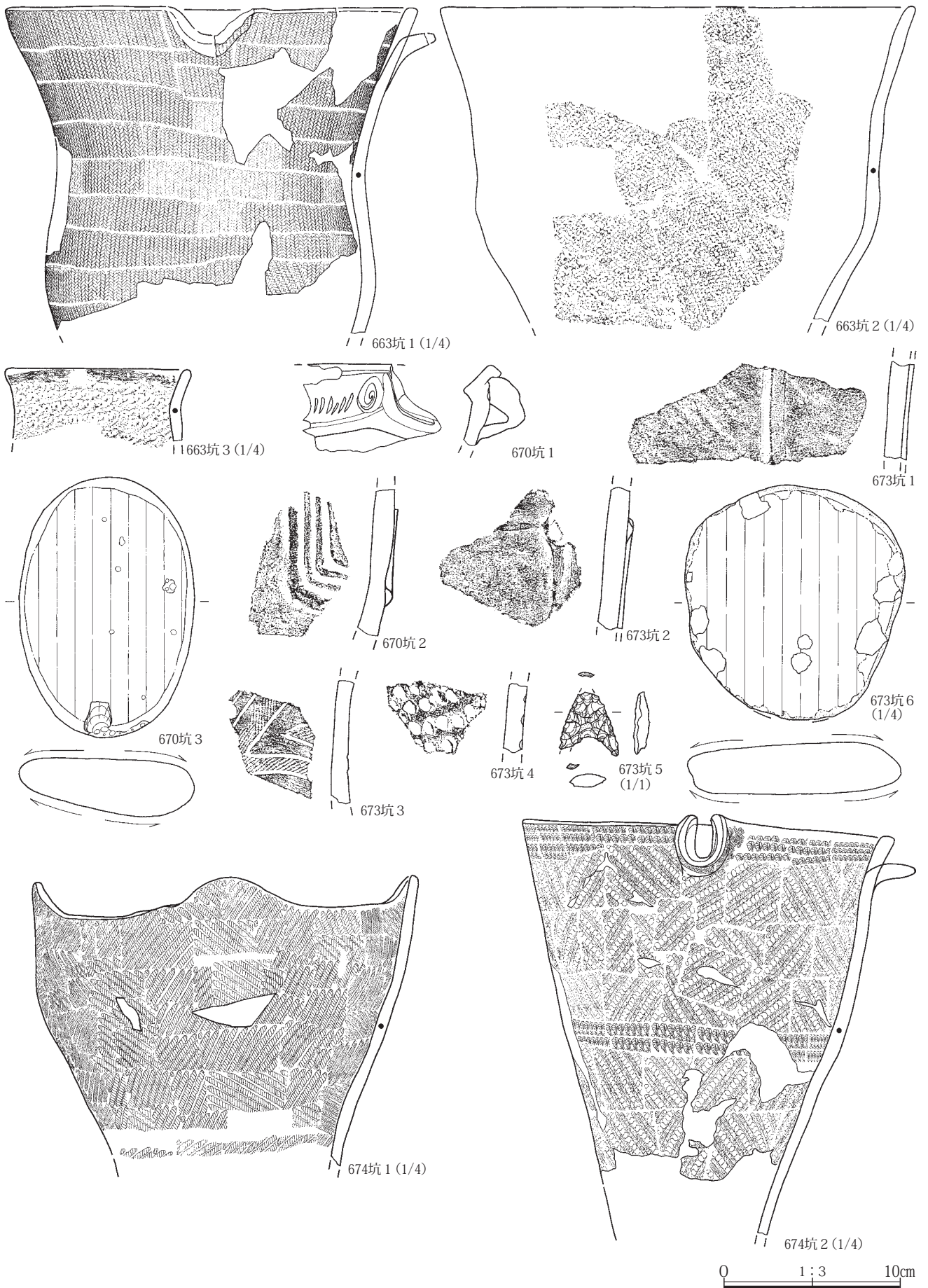
第231図 土坑出土遺物(9)〔7区389・393・395・397・410・417~420・424・426・436・507・512・562・564・572号〕



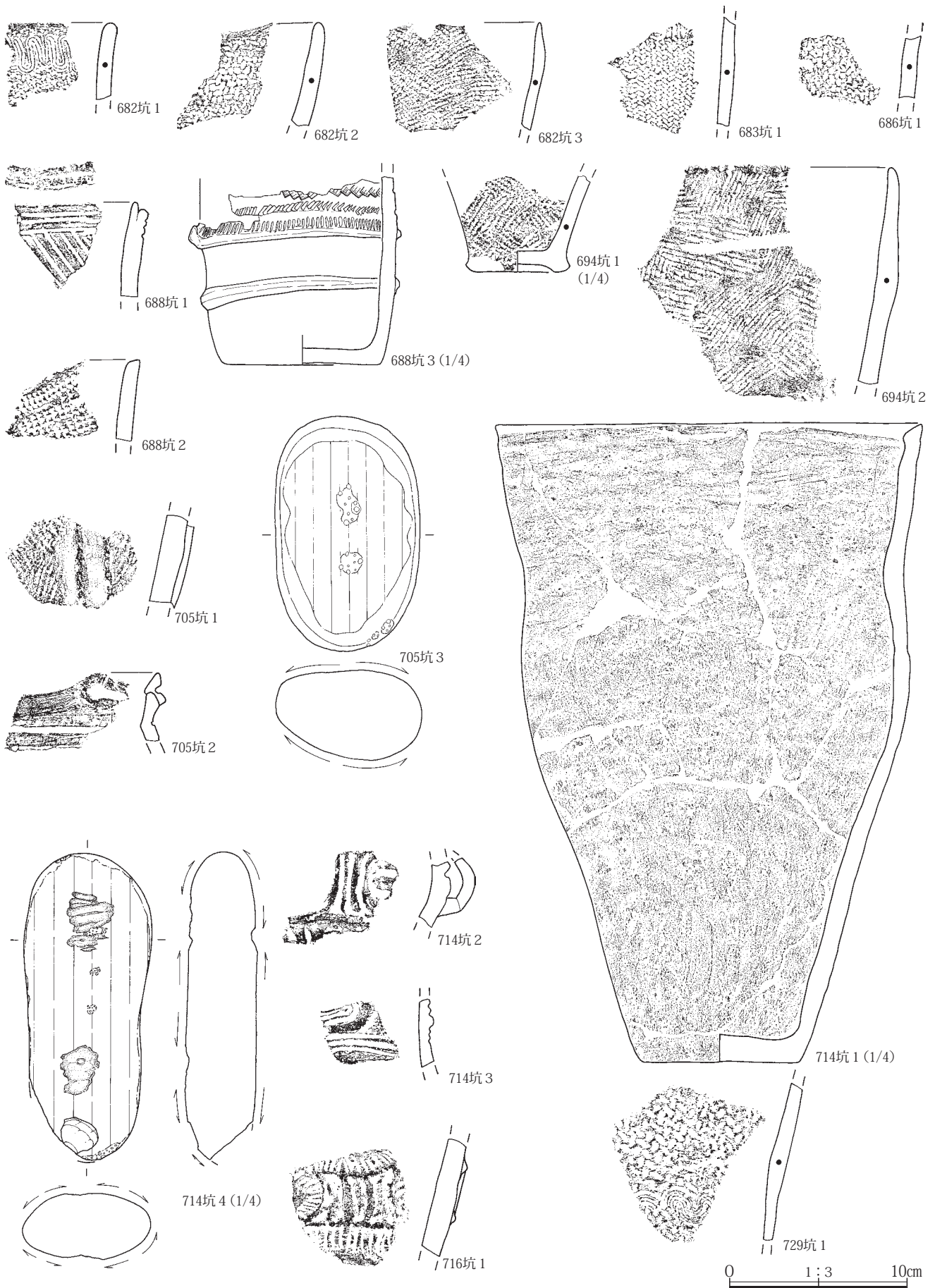
第232図 土坑出土遺物(10)〔7区567・573・577・578・580～582・585・589・596・597・606・609・615・618～620・624号〕



第233図 土坑出土遺物(11)〔7区629・633・637～639・642～644・647～649・655・657～660・662・664・669・672・675・681号〕



第234図 土坑出土遺物(12)〔7区663・670・673・674号〕

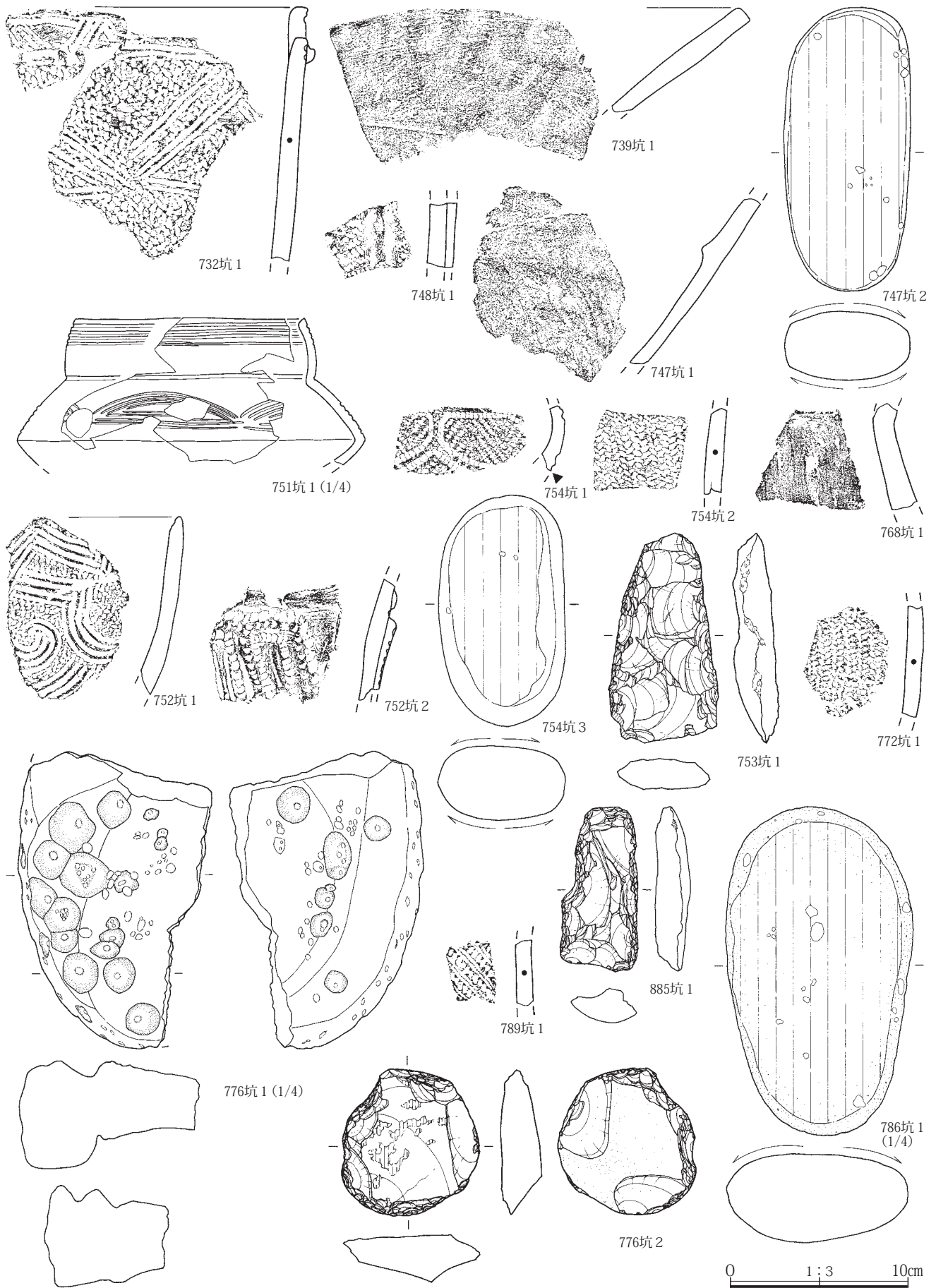


第235図 土坑出土遺物(13)〔7区682・683・686・688・694・705・714・716・729号〕

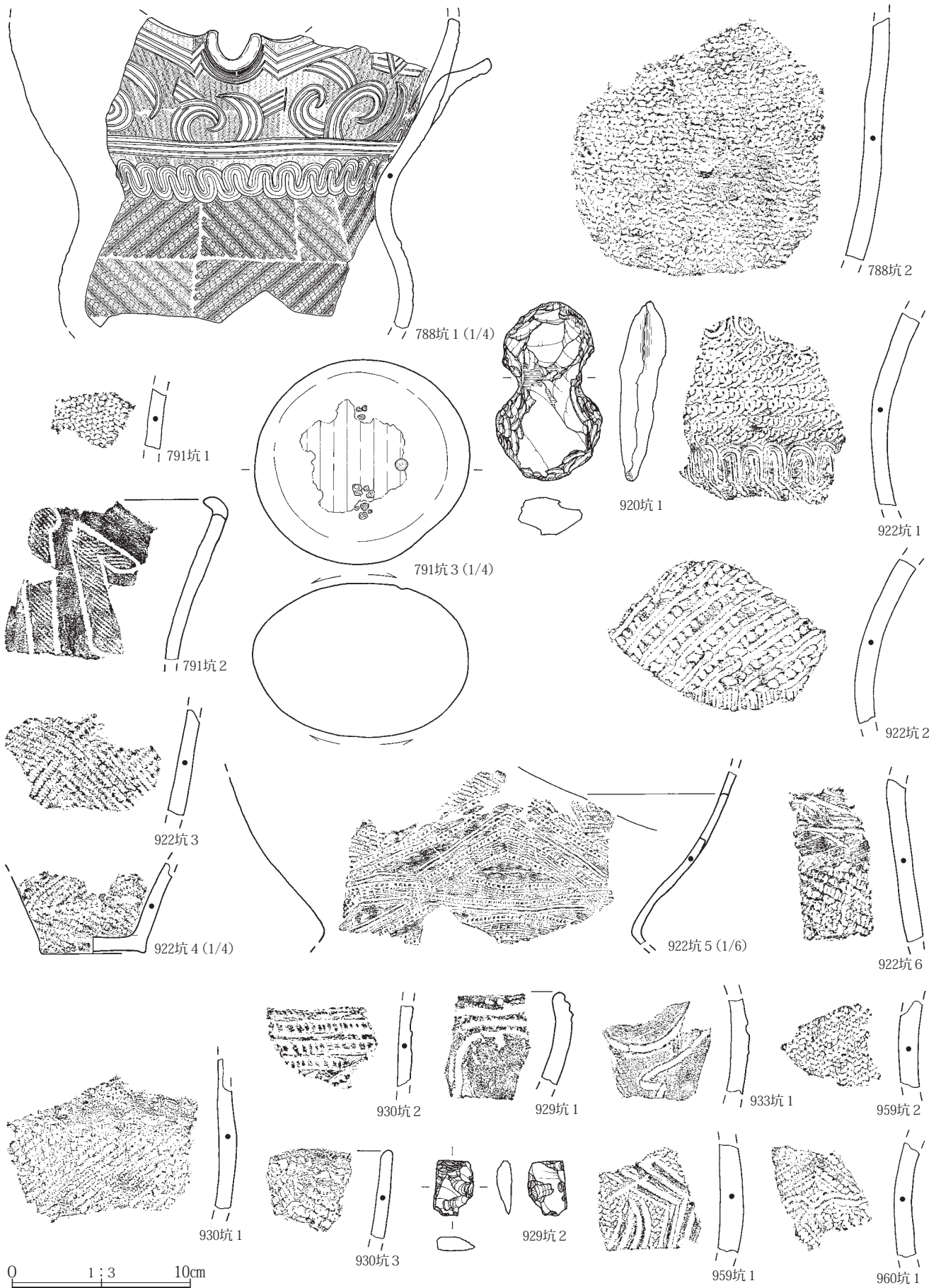


第236図 土坑出土遺物(14)〔7区709・717・725・726・736号〕

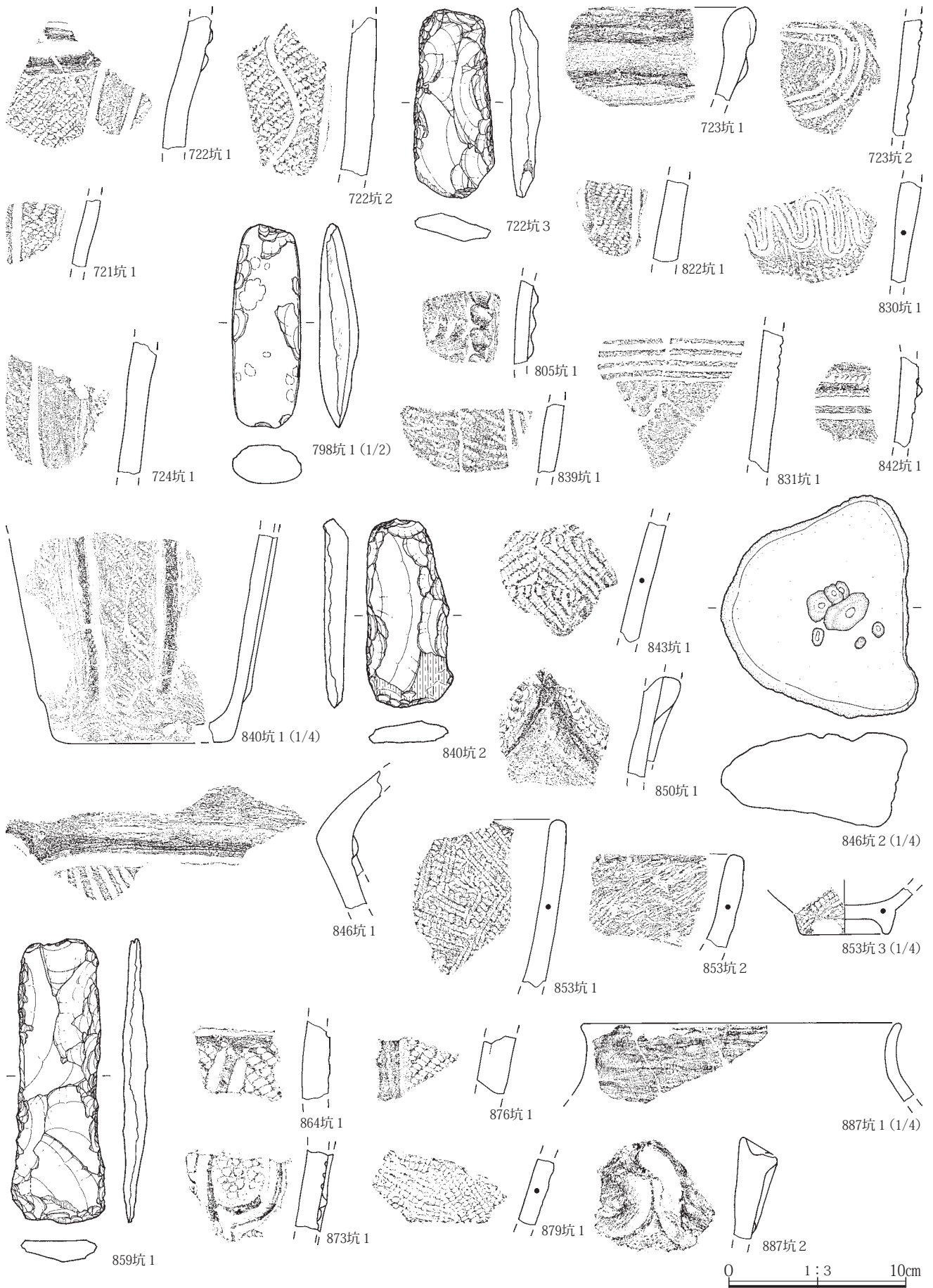
0 1:3 10cm



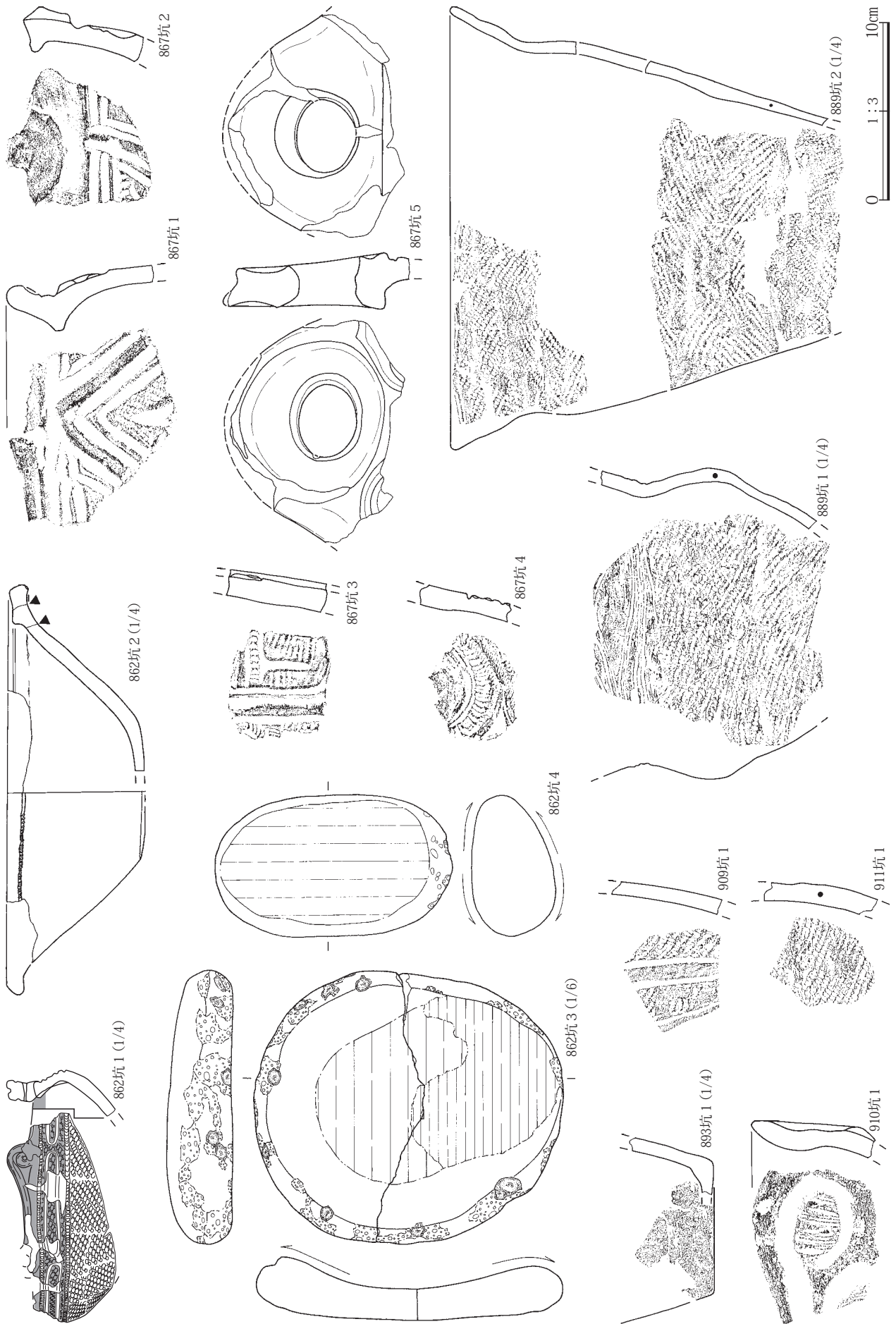
第237図 土坑出土遺物(15)〔7区732・739・747・748・751～754・768・772・776・786・789・885号〕



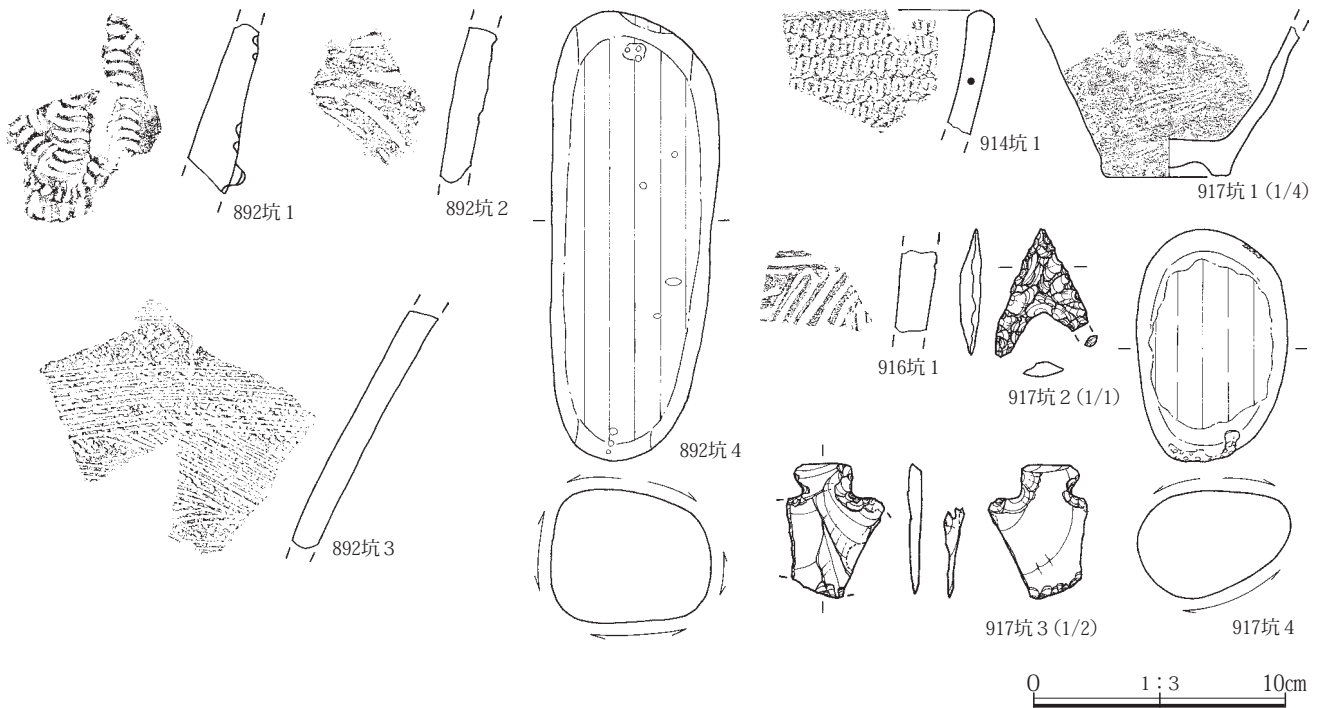
第238図 土坑出土遺物(16)〔7区788・791・920・922・929・930・933・959・960号〕



第239図 土坑出土遺物(17)〔8区721~724・798・805・822・830・831・839・840・842・843・846・850・853・859・864・873・876・879・887号〕



第240図 土坑出土遺物(18)〔8区862・867・889・893・909～911号〕



第241図 土坑出土遺物(19)〔8区892・914・916・917号〕

(4) 掘立柱建物とピット状遺構

第15表に揭示したように、1・2・4・7～10区より324基のピットを検出した。詳細は後述するが、僅少なながら掘立柱建物の柱穴を構成するものや、その埋没土中に柱痕を確認できるものも散見されることから、何らかの構造物に関連した柱穴も存在する可能性がある。

調査区別に見ると、1区：1基、2区：12基、4区：20基、7区：171基、8区：60基、9区：5基、10区：55基となる。竪穴住居が未検出の10区でも7・8区に次ぐ基数が存在する点で、土坑のあり方とは若干様相を異にするが、7・8区を主体にした分布状況は基本的に竪穴住居の分布動向と軌を一にしている。また、7区のピットに関しては、調査段階では判然としなかったが、報告書作成に関わる基礎整理段階で、平面図上にて柱間の間隔やその配列方向などの相関性から掘立柱建物の存在を確認し、第242図のように3・4号掘立柱建物の2棟を想定復元した。また、7区中央部のX=57755～57559、Y=-75521～-75525に存在する373・534・560・553号の4基に対して相互の連結線を引くと、180～240cmの間隔を置いて等高線の走向に直交するように延長約5.8mの直線状の配置となる。杭列的な構造物を想定することもできるが、確定的ではなく指摘するに留める。

尚、他ピットの個別遺構実測図については、伴出遺物

により時期比定が可能なものを中心に作図・掲載したが、それら以外のピットについては調査区別に掲示した別添の全体図8・9・13・16・17を参照されたい。

帰属時期については、土器等の明確な伴出遺物により判定可能なものが24基にとどまるが、その内訳は前期2基、中期14基、後期7基であり、中期が最多となる。

平面形態は、いずれも円形状を基本としており、方形状や他の形状は認められない。

規模に関しては、各ピットの確認・調査面が必ずしも当時の掘削・構築面に限定されないことから、第15表に揭示した各内容については「参考値」である点を勘案する必要がある。直径が①30cm未満：89基、②30～49cm：199基、③50～69cm：34基、④70～80cm：2基であり、②グループが全体の61%強を占める。③④グループの中には、4区243号のように土坑に匹敵する規模を持つものも存在する。当例は、調査区外との境界断面土層でⅦ層上面からの掘り込みを確認したものであり、底面にかけて掃り鉢状に窄まる形態を呈している点でピットに分類した。その他にも同様のものが存在するが、基本的に直径が50cmを下回る小坑をピットに分類しており、両者の分類境界は相対的なものである。

埋没土の状況は、多少に関わらずロームブロックを含む黄褐色土や暗褐色土が堆積しているものが主体を占めるが、人為的な埋填の有無を見分けるのは難しい。ただ

し、1区467号や7区393号などは人為的埋填の可能性が高い。尚、柱痕等の痕跡が確認されたピットは皆無であるが、前述したように7区ではその配置状況から掘立柱建物等の柱穴列として2棟の存在を想定・復元しており、各ピットの中には他にも建物等の構造物に関連するものが存在する可能性もある。

尚、巻頭の凡例記載の通り、発掘調査時にピットとした遺構について、その規模・形状・埋没土層・出土遺物等の内容を詳細に検討し、小動物や草木等の非人為的土壌攪乱に起因すると判断される121基を欠番とした。

以下、7区の3・4号掘立柱建物の詳細既述と共に、伴出土器により時期比定の可能なピットについてその大別時期を単位にして記述する。

A. 掘立柱建物

●7区3号掘立柱建物

位置 X=57764 Y=-75527

方位 N26度E

区画内面積 3.55㎡

重複 北西隅の柱穴478Pが、古墳時代後期の40号住居に切られる。

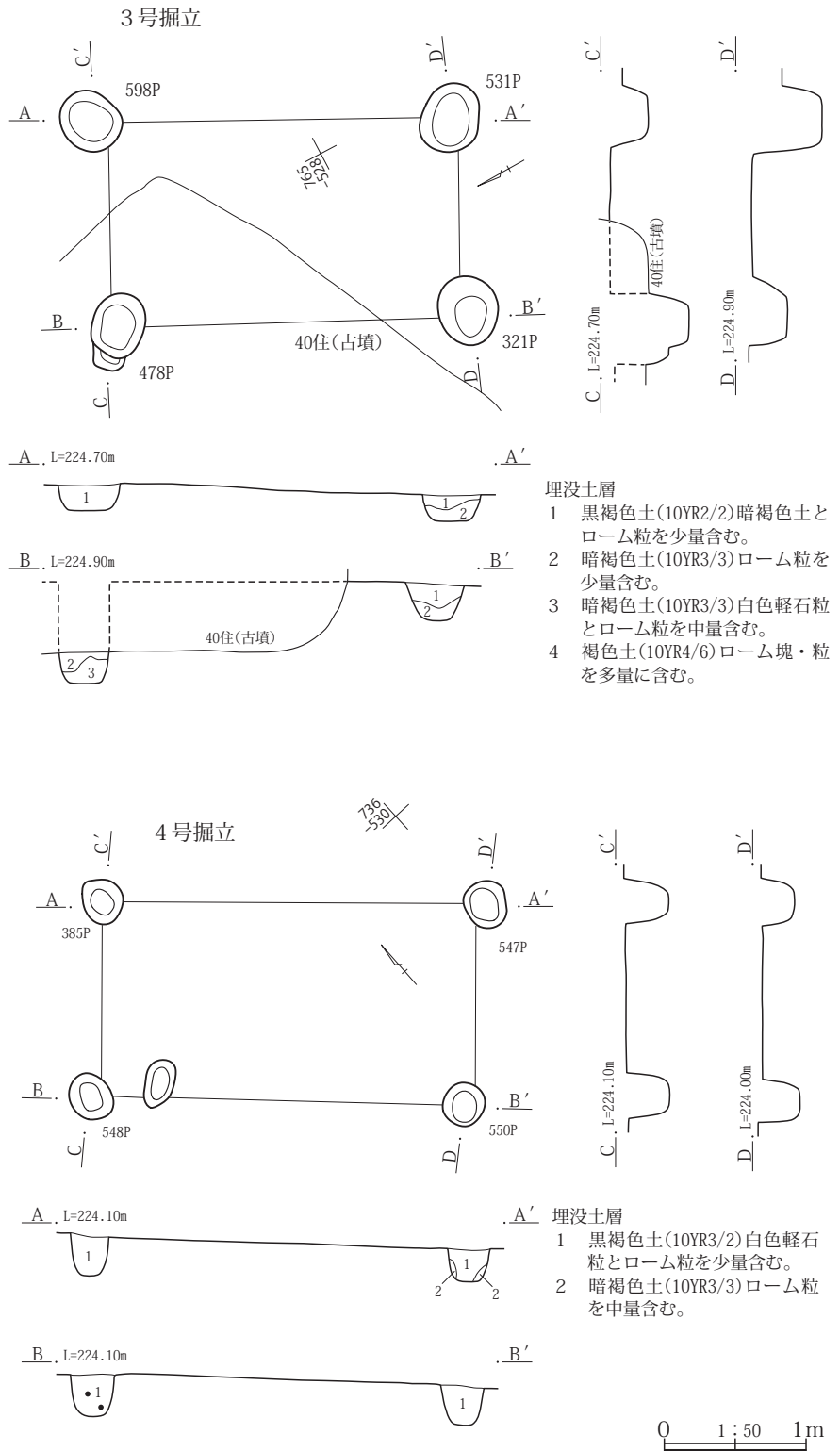
形状 斜面地の等高線に平行するように、長軸を南北方向にもつ梁行1間×桁行1間の長方形を呈する側柱建物として復元した。

規模 長軸方向の桁行では東辺2.55m・西辺2.50m、短軸方向の梁行では北辺1.45m・南辺1.40mを測る。

柱穴 長軸・短軸ともに2本の4本側柱構造であり、各柱穴の規模(直径×深さ)は321P:50cm×30cm、478P:30cm×43cm、531P:49cm×19cm、598P:45cm×26cmを測る。また、各柱穴の芯々間の距離は531P~598P:2.55m、321P~478P:2.50m、321P~531:1.40m、598P~478P:1.45mを測る。478P西側の張出部分は、抜柱痕の可能性もある。尚、各柱穴の埋没土

層内から柱痕は検出されなかったが、531P内から第246図No.1加曾利E2式の土器片が出土している。

所見 帰属時期については、531P内の出土土器を重視すれば、加曾利E2式期に比定されよう。当該期の竪穴住居は南端部を中心に分布しており、相互に立地点を違えることに注意を要する。



第242図 7区3・4号掘立柱建物

●7区4号掘立柱建物

位置 X=57734 Y=-75530

方位 N46度W 区画内面積 3.66㎡

重複 柱穴区画内で549号ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線に直交するように、長軸を南北方向にもつ梁行1間×桁行1間の長方形状を呈する側柱建物として復元した。

規模 長軸方向の桁行では東辺2.65m・西辺2.60m、短軸方向の梁行では北辺1.40m・南辺1.45mを測る。

柱穴 長軸・短軸ともに2本の4本側柱構造であり、各柱穴の規模(直径×深さ)は385P:33cm×30cm、547P:34cm×23cm、548P:34cm×29cm、550P:30cm×30cmを測る。また、各柱穴の芯々間の距離は385P~547P:2.65m、548P~550P:2.60m、548P~385:1.40m、550P~547P:1.45mを測る。尚、各柱穴の埋没土層内から柱痕は検出されなかったが、548P内から第246図No.1・2の加曾利E2式の土器片が出土している。

所見 帰属時期については、548P内の出土土器を重視すれば、加曾利E2式期に比定されよう。位置的には、3号掘立柱建物の南側に27m離れているが、当該期の竪穴

住居はさらにその南西側に25m離れて立地しており、基本的に掘立柱建物と竪穴住居とは立地点を違えることが明瞭である。

B. ピット

前期 関山Ⅱ式期の7区295・537号の2基が存在するのみである。同期の71号住居が、その東側4mに近接しており、何らかの関係を持つと想定される。

中期 加曾利E2式期の7区549号の1基、同E3式期の1区467号と7区291・454・488・494・500・532号の7基、同E4式期の7区346・497・499・508号の4基がある。人為的か否かの判定はできないが、1区467号や7区291・454号は中位～底面にかけて河床礫や垂角礫を、また同様に7区346号は打製石斧片や土器片を出土している。7区ピットの分布は、当該期の54・62号住居の周辺部に散在する傾向を有する。

後期 称名寺Ⅱ式期は7区362・492・498・501・510・541号の6基が、堀之内1式期は7区512号の1基のみが存在する。いずれも7区内に分布するが、498・510号は称名寺Ⅱ式期の58号住居内に位置しており、当住居の柱穴の一部を構成する可能性もある。

第15表 ピット規模一覧(縄文時代)

区	番号	掲載図版	位置		規模 (cm)			時期(備考)	区	番号	掲載図版	位置		規模 (cm)			時期(備考)
			座標X	座標Y	長径	短径	深さ					座標X	座標Y	長径	短径	深さ	
1	467	第243図	57861	-75501	41	(39)	46	加曾利E3式期	4	471		57992	-75488	54	53	22	
2	48		57939	-75503	37	31	27		4	472		57982	-75503	46	(30)	37	
2	50		57935	-75506	34	27	29		4	601		57989	-75491	60	41	40	
2	51		57937	-75503	25	24	13		7	252		57727	-75548	35	27	34	
2	54		57936	-75504	41	37	29		7	265		57727	-75547	34	30	18	
2	55		57935	-75502	23	20	13		7	266		57728	-75546	38	37	25	
2	56		57938	-75500	39	34	20		7	267		57731	-75746	46	33	17	
2	57		57939	-75499	27	26	18		7	268		57732	-75543	35	32	20	
2	61		57931	-75505	29	27	29		7	270		57736	-75542	34	29	21	
2	70	第243図	57939	-75495	41	35	29		7	274		57730	-75547	39	32	43	
2	72		57939	-75501	31	24	17		7	277		57786	-75526	26	25	22	
2	81		57939	-75498	16	14	12		7	278		57788	-75526	51	46	27	
4	138		57992	-75497	25	22	13		7	281		57765	-75536	38	36	20	
4	139		57985	-75494	31	28	37		7	284		57759	-75536	45	35	21	
4	140		57986	-75495	21	20	11		7	289		57731	-75546	30	30	26	
4	143		57983	-75502	39	25	14		7	291	第243図	57755	-75536	74	61	21	加曾利E3式期
4	151	第243図	57982	-75503	32	27	32		7	295	第243図	57752	-75536	40	40	35	関山Ⅱ式期
4	152		57995	-75490	25	23	19		7	301		57752	-75537	(23)	21	16	
4	155		57991	-75492	22	(10)	13		7	303		57752	-75536	35	28	15	
4	156		57991	-75491	24	15	16		7	306		57754	-75533	66	49	18	
4	160		57988	-75492	16	(12)	14		7	315		57709	-75519	40	31	30	
4	163		57983	-75505	31	(20)	14		7	320		57769	-75524	35	29	37	
4	243		57989	-75477	80	38	38		7	321	第242図	57764	-75529	50	43	30	(3号掘立)
4	247		57990	-75479	27	24	32		7	322		57777	-75533	35	34	28	
4	248		57991	-75479	35	31	25		7	324		57770	-75521	28	23	17	
4	249	第243図	57991	-75483	29	26	35		7	325		57723	-75553	29	24	26	
4	250	第243図	57982	-75508	32	31	35		7	326		57710	-75556	30	(21)	37	
4	469		57983	-75500	41	33	45		7	328		57766	-75520	28	25	19	
4	470		57989	-75496	43	34	19		7	329		57768	-75518	25	22	19	

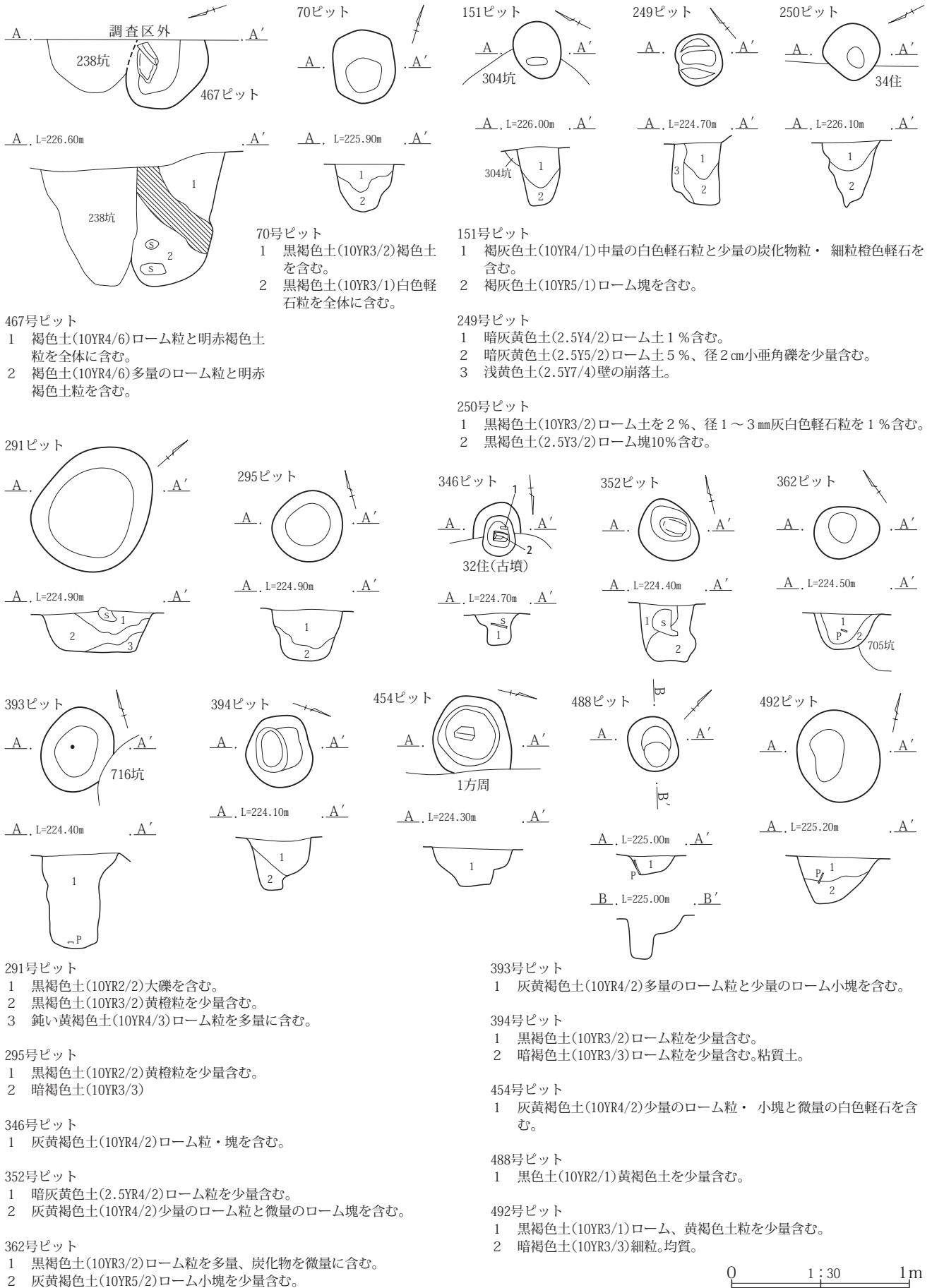
4. 縄文時代の遺構と遺物

区	番号	掲載 図版	位置		規模 (cm)			時期 (備考)	区	番号	掲載 図版	位置		規模 (cm)			時期 (備考)
			座標X	座標Y	長径	短径	深さ					座標X	座標Y	長径	短径	深さ	
7	330		57771	-75518	35	32	23		7	493		57788	-75522	42	42	31	
7	333		57775	-75534	37	26	25		7	494	第244図	57787	-75522	49	46	27	加曾利E3式期
7	335		57784	-75524	24	20	12		7	495		57787	-75521	35	28	28	
7	336		57781	-75524	34	22	23		7	496		57581	-75518	39	28	28	
7	339		57781	-75525	30	26	20		7	497	第244図	57781	-75517	36	35	15	加曾利E4式期
7	340		57783	-75527	21	18	17		7	498	第244図	57781	-75517	36	34	13	称名寺Ⅱ式期
7	341		57782	-75526	27	21	22		7	499	第244図	57782	-75517	55	46	20	加曾利E4式期
7	344		57779	-75524	26	24	18		7	500	第244図	57783	-75517	36	34	11	加曾利E3式期
7	345		57781	-75526	20	19	19		7	501	第244図	57785	-75522	42	40	17	称名寺Ⅱ式期
7	346	第243図	57771	-75526	(31)	26	37	加曾利E4式期	7	502		57794	-75521	(36)	(11)	17	
7	348		57781	-75516	24	21	21		7	503		57783	-75521	28	24	31	
7	349		57783	-75517	28	28	22		7	504		57785	-75520	30	28	30	
7	350		57783	-75518	30	26	31		7	505		57788	-75521	35	32	34	
7	352	第243図	57778	-75515	37	33	40		7	506	第244図	57786	-75522	45	25	15	
7	356		57780	-75515	38	37	39		7	507		57789	-75519	34	29	21	
7	359		57774	-75519	40	35	58		7	508	第244図	57784	-75518	30	26	15	加曾利E4式期
7	360		57782	-75517	25	24	26		7	509		57780	-75515	25	23	12	
7	361		57772	-75517	36	33	15		7	510	第244図	57785	-75522	48	36	31	称名寺Ⅱ式期
7	362	第243図	57759	-75526	30	(25)	16	称名寺Ⅱ式期	7	511		57777	-75520	28	23	22	
7	363		57784	-75519	38	27	38		7	512	第244図	57776	-75519	53	36	25	堀之内Ⅰ式期
7	364		57766	-75523	39	35	28		7	513		57723	-75550	50	44	32	
7	365		57775	-75524	35	32	44		7	514		57724	-75549	34	30	23	
7	368		57767	-75726	35	28	41		7	515		57788	-75526	51	43	16	
7	369		57767	-75527	40	35	25		7	516		57790	-75525	39	38	10	
7	370		57766	-75525	37	36	41		7	517		57778	-75515	47	40	28	
7	373		57754	-75521	38	34	27		7	518	第244図	57770	-75523	44	41	36	
7	377		57760	-75535	39	33	31		7	519	第244図	57788	-75511	(43)	(31)	36	加曾利E5式期
7	378		57763	-75522	46	42	15		7	520		57768	-75526	45	43	15	
7	379		57753	-75533	53	45	17		7	521		57769	-75525	50	46	20	
7	382		57753	-75521	40	34	28		7	522		57768	-75523	40	35	38	
7	383		57735	-75528	29	29	19		7	523		57768	-75523	31	26	31	
7	384		57732	-75532	34	22	36		7	524		57768	-75523	40	38	23	
7	385	第242図	57736	-75531	33	29	30	(4号掘立)	7	525		57769	-75521	45	44	41	
7	386		57754	-75535	25	23	14		7	526		57768	-75521	47	45	15	
7	387		57728	-75530	38	36	25		7	527		57768	-75522	54	47	42	
7	388		57750	-75535	34	30	42		7	528		57769	-75520	43	38	30	
7	389		57723	-75521	30	(14)	68		7	529		57768	-75519	49	44	21	
7	392		57757	-75525	38	(23)	25		7	530		57779	-75524	39	(38)	19	
7	393	第243図	57758	-75523	49	(39)	53		7	531	第242図	57763	-75527	49	40	19	加曾利E2式期 (3号掘立)
7	394	第243図	57731	-75532	40	37	30		7	532	第244図	57765	-75526	42	37	37	加曾利E3式期
7	409		57757	-75523	25	25	18		7	533		57762	-75522	45	(35)	18	
7	450		57732	-75537	41	31	31		7	534		57756	-75522	52	46	36	
7	454	第243図	57731	-75536	44	(43)	23	加曾利E3式期	7	535		57754	-75535	32	(20)	23	
7	457		57796	-75522	36	32	26		7	536		57754	-75537	30	30	21	
7	458		57800	-75521	22	20	13		7	537	第244図	57750	-75535	52	46	21	関山Ⅱ式期
7	459		57798	-75522	24	24	7		7	539		57751	-75537	33	32	33	
7	460		57798	-75522	22	21	20		7	541	第244図	57746	-75528	37	29	17	称名寺Ⅱ式期
7	461		57701	-75540	(34)	(14)	29		7	542		57746	-75523	54	54	23	
7	473		57775	-75527	55	44	26		7	543		57746	-75523	40	37	15	
7	474		57772	-75525	(46)	40	21		7	544		57746	-75522	26	25	16	
7	475		57771	-75525	48	45	23		7	545		57745	-75522	36	31	19	
7	476		57775	-75523	46	38	22		7	546		57761	-75523	47	42	51	
7	477		57767	-75528	39	25	25		7	547	第242図	57734	-75529	34	30	23	(4号掘立)
7	478	第242図	57766	-75527	55	36	30	(3号掘立)	7	548	第242図	57735	-75532	34	28	29	加曾利E2式期 (4号掘立)
7	479		57766	-75530	36	35	40		7	549	第245図	57735	-75532	35	20	29	加曾利E2式期
7	480		57765	-75529	(35)	(25)	29		7	550	第242図	57733	-75530	30	30	30	(4号掘立)
7	481		57771	-75524	(27)	(18)	14		7	551		57734	-75533	39	33	29	
7	482		57775	-75521	37	30	36		7	552		57727	-75527	56	54	39	
7	483		57713	-75555	64	36	19		7	553		57758	-75525	58	51	44	
7	484		57725	-75552	39	30	17		7	560		57757	-75523	50	48	36	
7	485		57725	-75548	38	(22)	14		7	578		57808	-75523	45	36	51	
7	486		57726	-75547	39	38	15		7	579		57807	-75525	31	27	30	
7	487		57794	-75520	35	(23)	22		7	580		57805	-75526	31	26	36	
7	488	第243図	57793	-75519	31	26	24	加曾利E3式期	7	581		57792	-75523	30	27	25	
7	489		57792	-75511	33	29	26		7	582	第245図	57792	-75522	44	42	21	
7	490		57791	-75518	49	39	21		7	583		57811	-75523	46	37	47	
7	491		57791	-75524	33	31	13										
7	492	第243図	57789	-75522	51	46	24	称名寺Ⅱ式期									

第3章 遺跡の調査内容

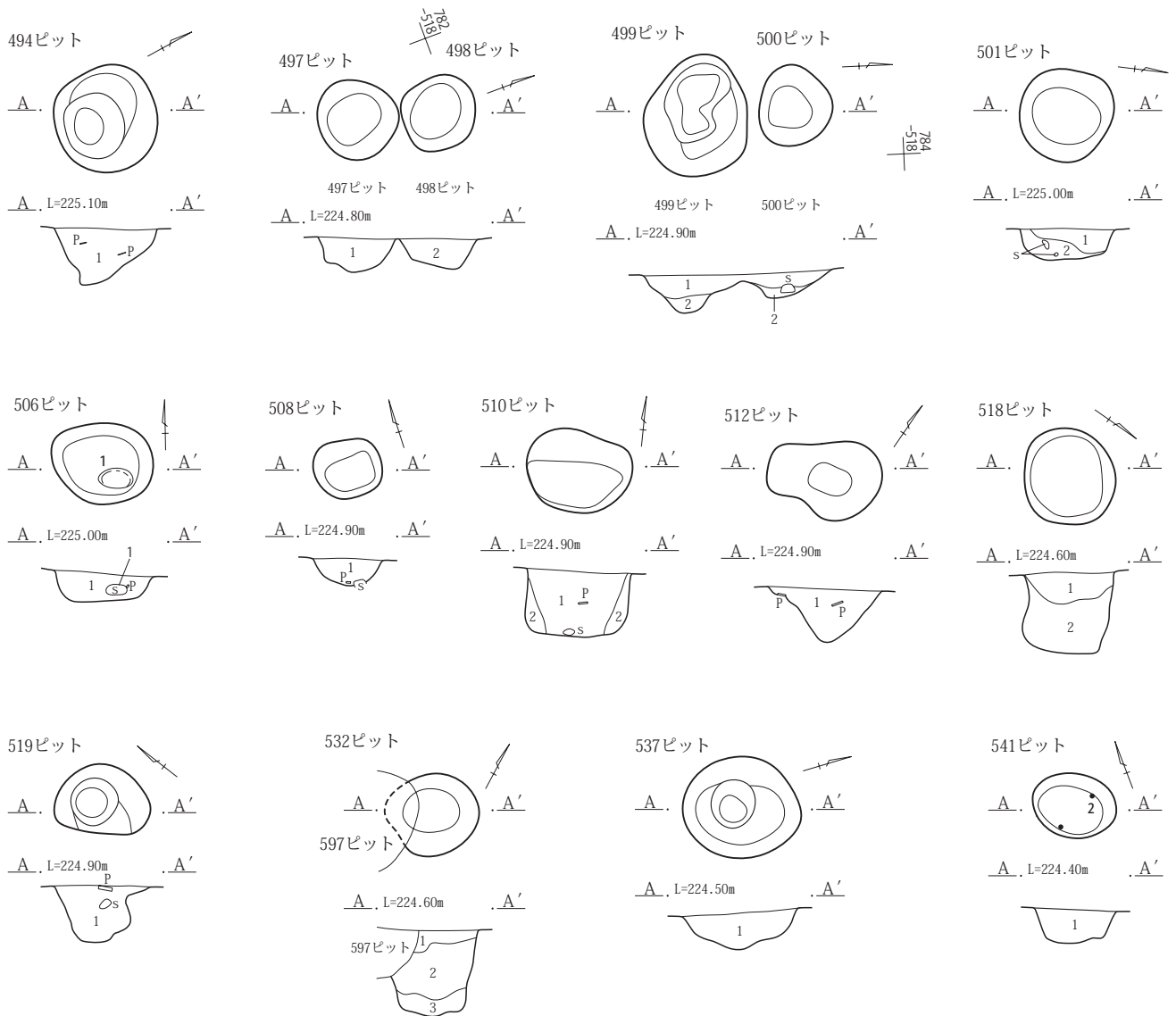
区	番号	掲載 図版	位置		規模 (cm)			時期 (備考)	区	番号	掲載 図版	位置		規模 (cm)			時期 (備考)
			座標X	座標Y	長径	短径	深さ					座標X	座標Y	長径	短径	深さ	
7	584	第245図	57791	-75528	61	46	27		8	573	第245図	57815	-75503	50	45	46	
7	585		57788	-75528	37	31	24		8	574		57832	-75500	55	51	45	
7	586		57797	-75521	30	23	11		8	575		57833	-75501	51	43	52	
7	587		57796	-75519	49	46	30		8	576		57828	-75505	38	37	24	
7	588		57795	-75519	31	23	11		8	577		57831	-75505	47	40	25	
7	589		57800	-75520	38	31	29		9	592		58041	-75527	23	19	17	
7	590		57718	-75550	43	(25)	5		9	593		58041	-75529	31	28	22	
7	591	第245図	57795	-75518	26	(26)	12		9	594	第245図	58042	-75528	26	21	27	
7	597		57765	-75526	48	45	28		9	595		58039	-75529	20	17	13	
7	598	第242図	57766	-75526	45	40	26	(3号掘立)	9	596		58035	-75530	23	22	13	
7	599		57762	-75523	70	51	54		10	164		58068	-75571	36	26	15	
8	381		57825	-75509	25	25	15		10	165		58073	-75574	29	28	19	
8	395		57806	-75504	35	33	28		10	167		58070	-75577	37	31	39	
8	396		57805	-75506	40	29	24		10	169	第245図	58081	-75580	34	29	30	
8	397		57807	-75506	37	29	21		10	170		58082	-75567	27	25	20	
8	398		57808	-75507	31	25	18		10	171		58084	-75566	26	20	18	
8	400		57809	-75506	26	19	28		10	174		58076	-75561	36	34	22	
8	401		57811	-75508	28	26	25		10	175		58076	-75560	42	37	32	
8	402	第245図	57810	-75507	30	27	28		10	176		58076	-75557	30	26	23	
8	403	第245図	57810	-75508	30	30	21		10	177		58077	-75556	21	20	20	
8	404		57812	-75509	33	29	38		10	178		58078	-75557	29	27	23	
8	405		57809	-75503	25	23	32		10	179		58078	-75556	40	29	32	
8	406	第245図	57812	-75504	35	30	27		10	180		58079	-75558	23	21	16	
8	407		57811	-75505	(25)	25	20		10	181		58079	-75558	32	26	26	
8	408		57815	-75505	(15)	(12)	29		10	182		58079	-75558	27	24	35	
8	416		57818	-75511	33	33	23		10	183		58080	-75557	38	24	27	
8	417		57815	-75510	22	19	20		10	184		58080	-75558	23	21	18	
8	418		57815	-75510	34	28	18		10	185		58080	-75558	30	29	22	
8	419		57814	-75505	35	30	25		10	186		58080	-75558	30	29	23	
8	420		57823	-75505	27	27	29		10	187		58081	-75559	25	23	29	
8	421		57813	-75510	39	25	44		10	188		58079	-75559	26	24	27	
8	423		57814	-75511	(30)	(16)	39		10	189		58083	-75560	27	26	15	
8	424		57819	-75504	40	35	27		10	191		58085	-75561	29	26	29	
8	425		57820	-75505	46	38	32		10	192		58087	-75561	32	25	20	
8	426		57813	-75506	29	27	26		10	193		58088	-75559	28	23	19	
8	428		57823	-75504	43	31	21		10	194		58087	-75086	33	27	40	
8	429		57820	-75506	34	25	19		10	195		58087	-75559	23	20	15	
8	430		57819	-75510	26	24	18		10	197		58086	-75559	27	23	17	
8	432	第245図	57826	-75503	41	41	30		10	200		58084	-75559	23	23	19	
8	435		57815	-75503	37	24	31		10	201		58084	-75559	26	21	28	
8	437		57823	-75512	43	38	38		10	202		58083	-75557	27	25	39	
8	438		57825	-75512	40	26	27		10	203		58081	-75555	30	25	25	
8	439		57822	-75509	37	32	35		10	204		58080	-75555	25	25	24	
8	441		57816	-75500	22	20	25		10	206		58080	-75555	28	27	22	
8	442		57827	-75506	25	(10)	24		10	207		58079	-75556	35	27	28	
8	445	第245図	57825	-75505	32	30	27		10	208		58079	-75556	(34)	27	26	
8	446		57824	-75507	30	29	37		10	209		58078	-75555	42	34	51	
8	538		57827	-75504	50	48	28		10	211		58078	-75553	23	19	18	
8	540		57810	-75505	48	40	35		10	212		58080	-75552	23	21	21	
8	554		57808	-75505	35	不明	24		10	213		58080	-75551	22	20	17	
8	555		57808	-75509	45	40	28		10	214		58084	-75553	22	17	12	
8	556		57811	-75509	48	42	21		10	215		58088	-75557	32	30	32	
8	557		57813	-75508	44	40	34		10	216		58091	-75552	37	30	33	
8	558		57814	-75507	48	44	26		10	217		58091	-75557	27	24	25	
8	559	第245図	57812	-75504	53	53	20		10	221		58094	-75549	28	27	17	
8	561		57818	-75505	35	35	30		10	223		58094	-75551	23	21	36	
8	562	第245図	57819	-75504	42	41	33		10	224	第245図	58093	-75551	25	22	21	
8	563		57816	-75506	57	51	14		10	225		58094	-75552	21	19	19	
8	564		57811	-75502	30	(25)	26		10	226		58093	-75553	28	25	21	
8	565		57820	-75503	55	40	42		10	227		58089	-75549	30	27	16	
8	566		57820	-75508	56	50	18		10	232		58089	-75545	16	16	17	
8	567		57821	-75511	41	35	33		10	234		58089	-75545	21	20	15	
8	568		57823	-75510	50	38	36		10	237		58082	-75544	30	29	12	
8	569		57824	-75510	38	32	27		10	239		58072	-75560	23	22	19	
8	570		57821	-75500	59	54	29		10	240		58076	-75557	(24)	22	23	
8	571		57821	-75501	43	34	25										

4. 縄文時代の遺構と遺物



第243図 ピット(1)[1区467号、2区70号、4区151・249・250号、7区291・295・346・352・362・393・394・454・488・492号]

第3章 遺跡の調査内容



494号ピット

1 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色土粒と白色軽石少量含む。

497・498号ピット

1 黒褐色土(10YR3/1)黄褐色土粒と白色軽石少量含む。
2 黒褐色土(10YR3/1)細粒。均質。

499・500号ピット

1 黒褐色土(10YR3/1)細粒。均質。
2 暗褐色土(10YR3/3)細粒。均質。

501号ピット

1 黒褐色土(10YR3/1)白色軽石少量含む。
2 暗褐色土(10YR3/3)細粒。均質。

506号ピット

1 黒褐色土(10YR3/1)黄褐色土粒と白色軽石少量含む。

508号ピット

1 黒褐色土(10YR3/2)橙色土粒を少量含む。細粒。均質。

510号ピット

1 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒・黄褐色土粒を少量含む。細粒。均質。
2 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒を少量含む。

512号ピット

1 黒褐色土(10YR3/2)細粒。均質。

518号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)細粒。均質。
2 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊。硬質土。

519号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム少量含む。

532号ピット

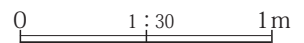
1 褐灰色土(10YR6/1)多量の白色軽石粒と少量の炭化物粒を含む。
2 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒と炭化物粒を少量含む。
3 灰黄褐色土(10YR5/2)中量のローム粒・塊と少量の白色軽石粒を含む。

537号ピット

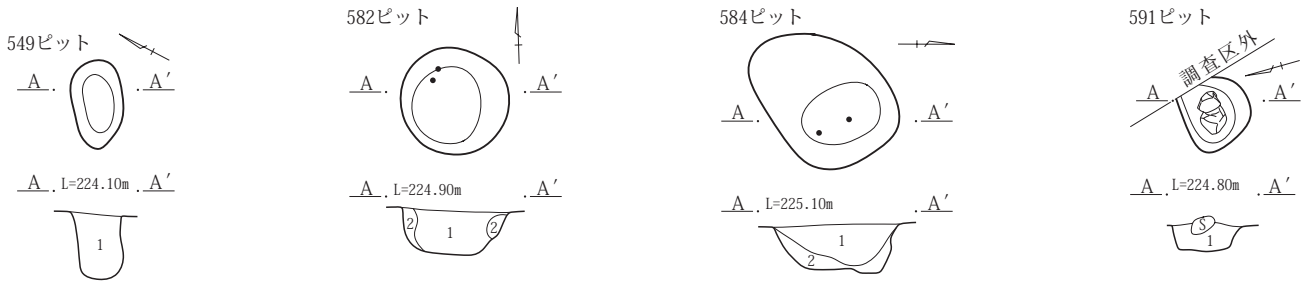
1 灰黄褐色土(10YR4/2)白色軽石粒、ローム粒・塊を含む。

541号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2)多量の白色軽石粒と少量のローム粒・炭化物粒を含む。



第244図 ピット(2)〔7区494・497～501・506・508・510・512・518・519・532・537・541号〕



549号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊、白色軽石粒を含む。

582号ピット

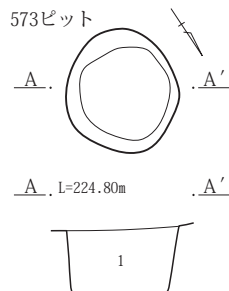
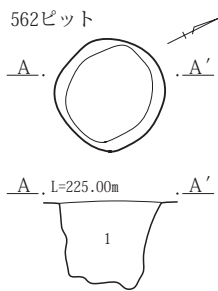
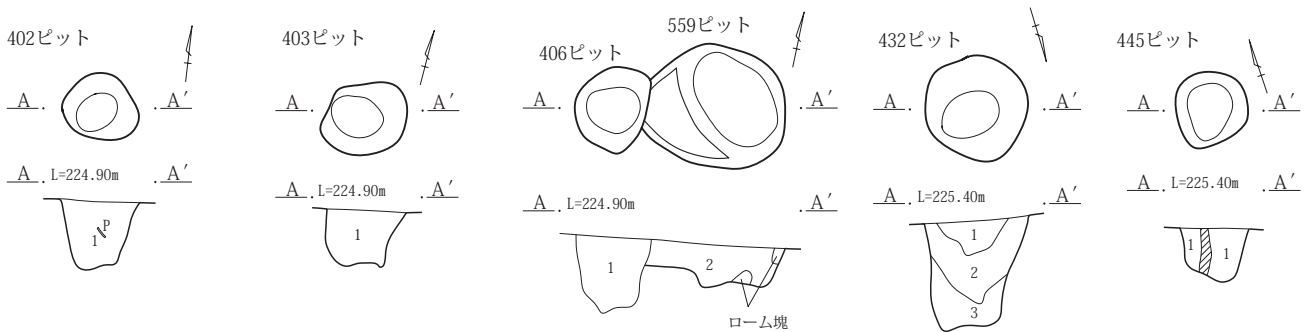
1 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒、ローム粒・塊を少量含む。
2 ローム塊主体。

584号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)白色軽石粒、ローム粒を含む。
2 黄褐色土(10YR5/8)ローム粒を多量に含む。

591号ピット

1 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒を多量に含む。



402号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒、白色軽石粒を含む。

403号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒、白色軽石粒を含む。

406・559号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒、明赤褐色土粒を少量含む。
2 黄褐色土(10YR5/6)ローム粒、白色軽石粒を少量含む。

432号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム小塊微量に含む。
2 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム 1 cm塊少量含む。
3 鈍い黄褐色土(10YR4/3)ローム 3～5 cm塊少量含む。

445号ピット

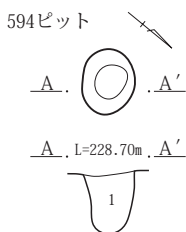
1 褐灰色土(10YR4/1)多量の褐色土塊と白色軽石粒、ローム粒を含む。

562号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒、白色軽石粒、細粒炭化物粒を少量含む。

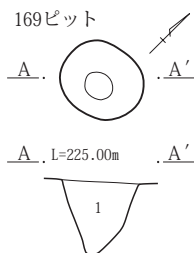
573号ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊、白色軽石を含む。



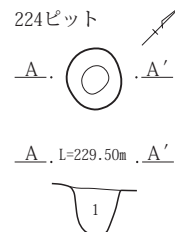
594号ピット

1 黒褐色土(10YR3/2)白色軽石粒を多量に含む。



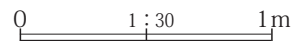
169号ピット

1 褐灰色土(10YR4/1)多量の白色軽石粒と少量の炭化物粒・細粒橙色軽石を含む。

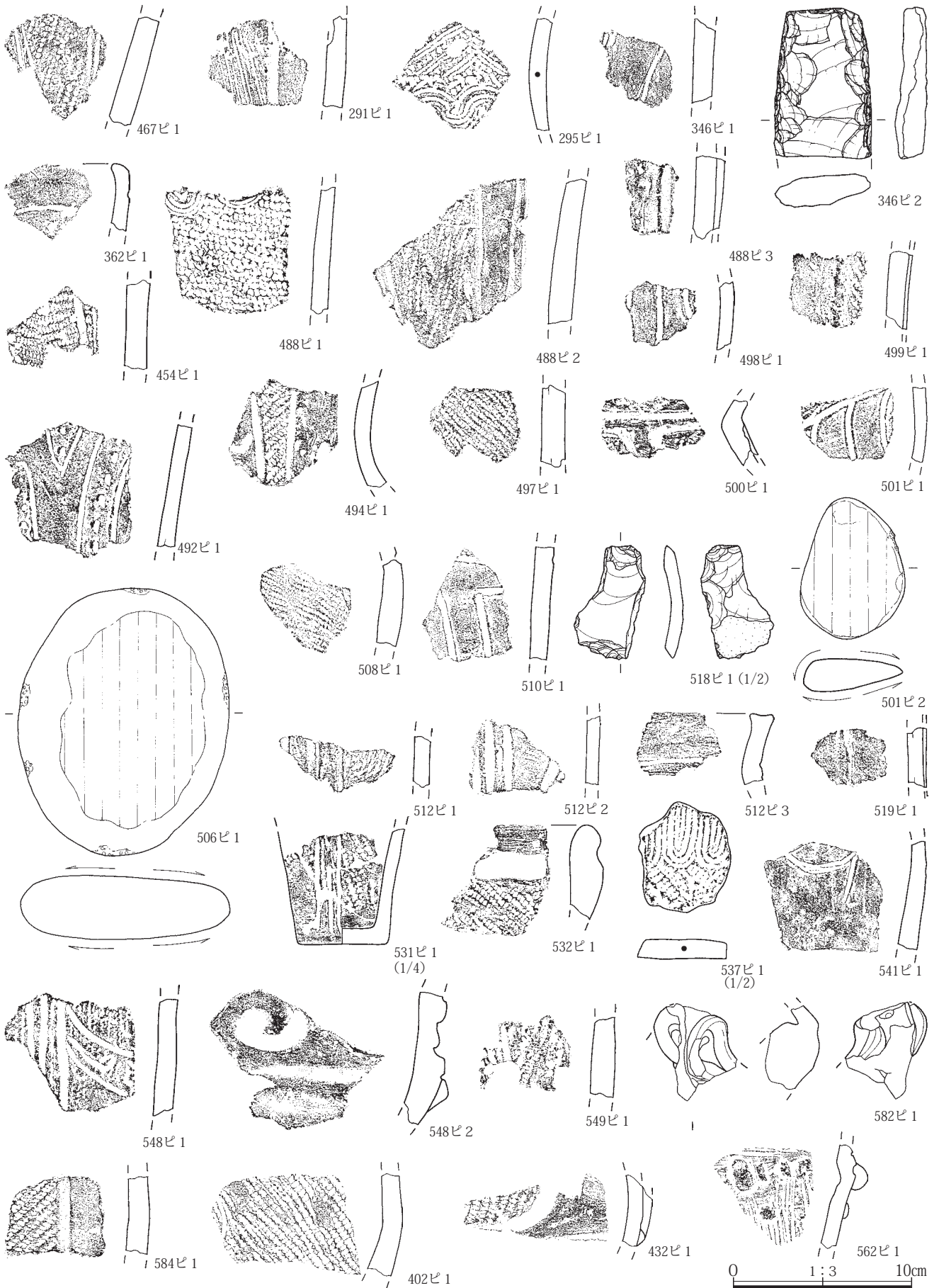


224号ピット

1 褐灰色土(10YR4/1)多量の白色軽石粒とローム粒を含む。



第245図 ピット(3)[7区549・582・584・591号、8区402・403・406・432・445・559・562・573号、9区594号、10区169・224号]



第246図 ピット出土遺物〔1区467号、7区291・295・346・362・454・488・492・494・497～501・506・508・510・512・518・519・531・532・537・541・548・549・582・584号、8区402・432・562号〕

(5) 配石遺構

1～10号の10基を検出したが、そのいずれも7区内に構築されている。その検出は、V・VI層内の古墳・弥生時代の竪穴住居を中心とした遺構調査の終了後に、VI層下位からVII層上面を人力にて掘り下げて縄文時代遺構の探索を行っている過程で、2・3号配石などの石材上面部分を確認したことに端を発している。その後、VII層内を中心として面的に調査範囲を拡大してゆく中で、相互に近接する10基の配石遺構を検出した。

各配石遺構は、長径30～50cm大の河床礫を用材としているが、2・3・6・7号のように円形状や方形に石材を配置してその下部に深さ20～30cmの楕円形状の掘り方を伴う事例と、1・4・5・8～10号のように石材が不定形かつ散在的に分布し、明瞭かつ確実な掘り方を伴わない両者が認められる。後者の配石については、本来は定形的であったかあるいは他の配石の石材が後世の攪乱等により損壊・散在化した可能性もある。

帰属時期については、主な出土土器が中期末葉の加曾利E3～E4式や堀之内1式～加曾利B3式まで混在しており、確定することが困難である。ただし、2・3・6・7号などに類似した定形的な配石遺構は、これまでの県内事例でみると後期前半～中葉段階に多见されることから、いずれも後期に比定される可能性が高い。

一方、分布状況で見ると7・8号を除く各配石は調査区のほぼ中央部に集中・近接しており、相互に有機的な関係性を有すると想定される。

以下、各配石遺構の内容について、記述する。

●7区1号配石

位置 X=57861 Y=-75532

写真 P L 84・164 観察表 489・490頁

重複 加曾利E3式期の64号住居の上位に構築されている。東側に2号配石が隣接するが、新旧関係は不明。

形状 長さ30～50cm大の楕円形状河床礫11個を主体にして、不定形ではあるが直径約2.5mの円形状の範囲に配置している。その中央部分は石材配置が希薄であることから、空間部が形成されていたことも考慮される。各礫上面相互の最大標高差は224.9～225.1mの20cm、底面相互の最大標高差は224.6～225.0mの40cmであり、上面を基軸に相互対比すれば、大形礫の下半部を埋置しつつその上面高をある程度調整し、西→東方向への斜面勾配を意識した配置を行っている状況も看取することができる。

掘り方 存在しないが、大形礫の配置では若干掘り窪めてその下半部を埋置している可能性が高い。

遺物 各石材の周辺部から加曾利E3・E4式20点や堀之内1式19点、加曾利B3式1点などの土器片と、削器・打製石斧・多孔石各1点、磨石類5点などの石器が出土しており、その一部を第250図1～8に掲載した。尚、No.5の多孔石は配石に組み込まれるように出土している。

所見 掘り方や下部遺構を伴わないことから、基本的に当時の地表面にベタ置き状態で構築したものと推定される。帰属時期については、周辺部の出土土器の時間幅が大きいために確定できないが、中期末葉～後期前半段階の中に収まると想定される。

●7区2号配石

位置 X=57761 Y=-75530

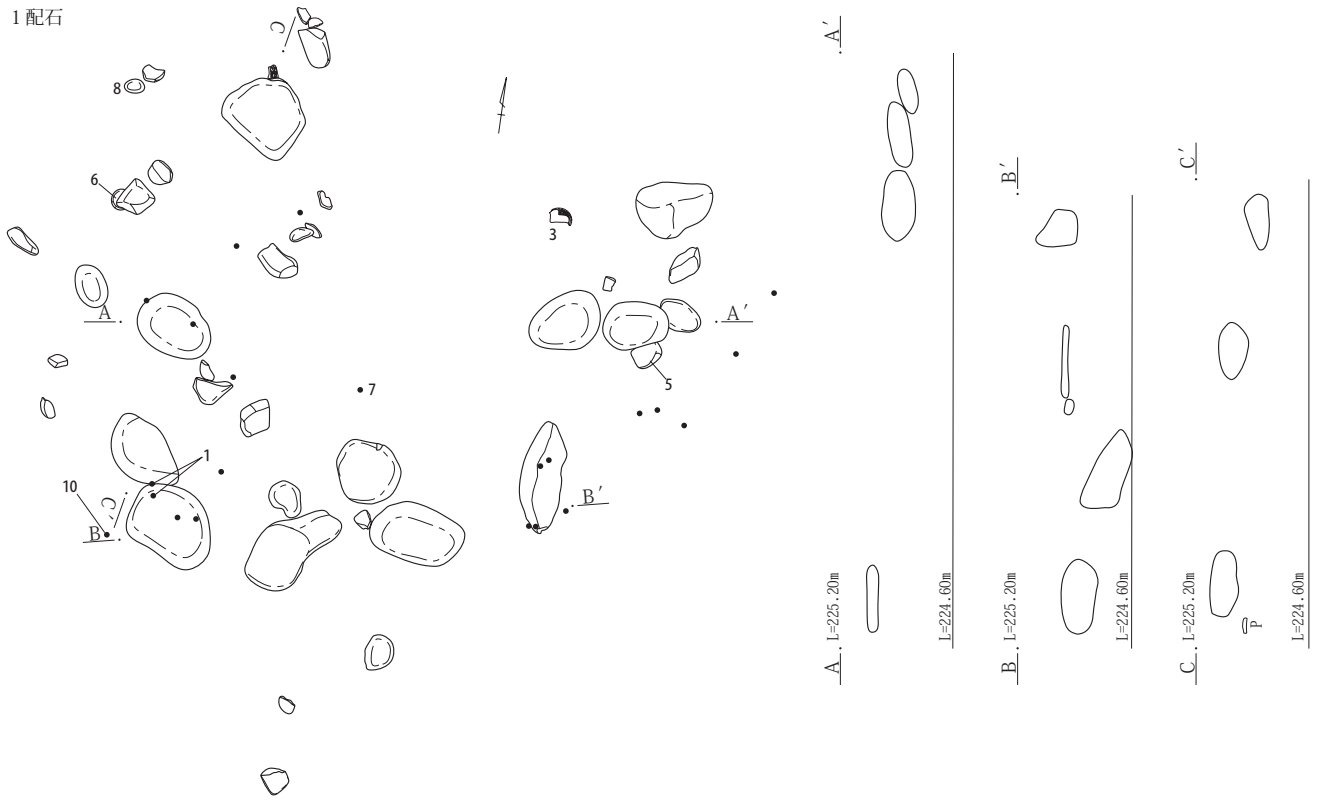
写真 P L 84・163 観察表 490頁

第16表 配石規模一覧(縄文時代)

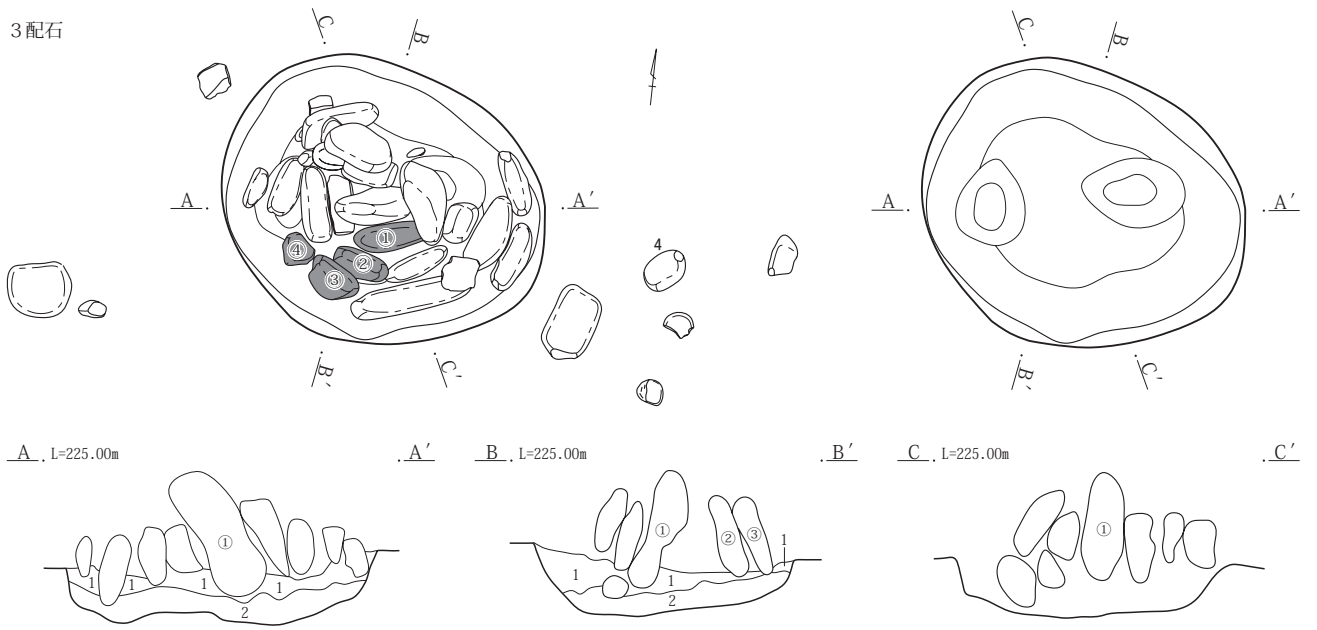
区	番号	位置		配石形状	配石規模(cm)		掘方形状	掘方規模(cm)			時期	備考
		座標X	座標Y		長径	短径		長径	短径	深さ		
7	1	57761	-75532	不定形	355	285	無	—	—	—	中期末葉～後期前半	加曾利E3・4式20,堀之内1式19,加曾利B3式1。削器1,打斧1,磨石類5,多孔石1。
7	2	57761	-75530	楕円形	218	198	楕円形	248	178	28～42	堀之内1式～同2式期?	加曾利E3・4式118,称名寺II式1,堀之内1式14・同2式4,後期前半100。削器1,打斧2,磨石類1,多孔石2。
7	3	57760	-75525	楕円形	140	120	楕円形	178	148	24～28	堀之内1式～同2式期?	加曾利E3・4式40,称名寺1式2,堀之内1式1,同2式2。打斧1,磨石類2,石皿1,台石1。
7	4	57761	-75520	楕円形	100	68	楕円形	133	92	8～11	中期末葉～後期中葉	加曾利E3式23,加曾利B2式1。打斧1,磨石類2。
7	5	57765	-75522	楕円形	114	72	楕円形	115	83	9～11	中期末葉～後期前半	関山II式3,加曾利E2式23,堀之内1式1。磨石類1。
7	6	57767	-75524	L字形	89	50	不整形	110	67	10～12	中期末葉～後期中葉?	削器1。
7	7	57776	-75519	楕円形	103	76	楕円形	130	73	10～30	中期末葉～後期中葉?	削器1。
7	8	57748	-75524	不定形	540	320	無	—	—	—	中期末葉～後期前半	加曾利E2～E4式49,堀之内1式19。削器1,打斧2,磨石類1。
7	9	57762	-75527	不定形	120	120	無	—	—	—	中期末葉～後期前半	関山II式4,加曾利E4式11,堀之内1式6。
7	10	57763	-75525	列状	172	62	楕円形	221	132	9～12	中期末葉～後期中葉	加曾利E3式49,堀之内1式5,加曾利B1式1。削器2。

第3章 遺跡の調査内容

1 配石

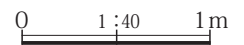


3 配石



3号配石

- 1 鈍い黄褐色土(10YR5/3)ローム小塊・粒を少量含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム塊・粒を多量に含む。



第247図 配石(1)[7区1・3号]

重複 重複する遺構はないが、東側に1号配石が近接する。

形状 長さ30~70cm大の河床礫22個と長さ40~50cmの垂角礫6個を主体にして、長径248cm×短径178cmの楕円形状に密集配置しており、南側には垂角礫がやや集中する傾向を持つ。①~⑤のグレートーンの石材は、長さ55~80cm、幅20~40cmの棒状河床礫であり、いずれも扁平な楕円形状河床礫にもたれ掛かるように南側へと傾斜している。他の石材を含めて、構築時の様相からかなり崩れた状態になっていると考えられるが、当初段階では恐らく①~⑤は立石状に樹立すると共に、扁平楕円形状の河床礫が根巻き石的にその基部に配置されていた可能性が高い。

下部遺構 長径248cm×短径217cm、深さ28~42cmの不整楕円形状の掘り込みが存在する。南側の石材を中心にしてその底面直上に構築されており、基本的に石材設置に関わる「掘り方」に比定できよう。

埋没土 ローム粒・ブロックを含んだ締りのある層厚25~40cmの黒褐色土を主体に埋填されている。棒状河床礫やその根巻き石的な楕円形河床礫などは、その中~上位の4層上面を中心に配置されている。

遺物 各石材間やその周辺部から、加曽利E3・E4式118点、称名寺Ⅱ式1点、堀之内1式14点、同2式4点、後期前半100点などの土器片と、削器・磨石類各1点、打製石斧・多孔石各2点などの石器が出土している。尚、No.7の多孔石は用材の下位より出土しており、配石の一部に組み込まれていた可能性が高い。

所見 複数本の棒状河床礫を立石とした「立石圍繞配石」と考えられる。帰属時期については、周辺部の出土土器の時間幅が大きいために確定することは難しいが、相当点数を出土している堀之内1式~同2式土器を重視すれば、当該期に比定することができよう。

●7区3号配石

位置 X=57760 Y=-75520

写真 P L 84・163 **観察表** 490頁

重複 重複する遺構はないが、西側3mに2号配石、北側1mに10号配石が近接する。

形状 長さ20~80cm大の河床礫19個と長さ20~30cmの垂角礫2個を主体にして、長径140cm×短径120cmの円形

に近い楕円形状に密集配置している。①~④のグレートーンの石材は、長さ40~75cm、幅25~30cmの棒状河床礫であり、やや東側に傾く中央部の①を含めていずれも立石状に屹立している。これら以外の扁平楕円形状や棒状の石材は、長軸を横位・平積み状に接続して①の棒状礫を圍繞するように配置されている。上記のように②~④は立石状を呈するが、①を圍繞するような様態を示している点では、他の石材とも類似していると言える。恐らく、長さ75cm×幅25cmと大きさに他を凌駕する①の棒状礫を立石として中心部に据え、それを他の石材が円形状に圍繞する構造と想定される。

下部遺構 長径178cm×短径148cm、深さ24~28cmの楕円形状の掘り込みを有する。底面に近接している石材を含め、その大半が底面より20cm以内に構築されており、各石材を安定的に設置するための「掘り方」に比定することができよう。

埋没土 ローム粒・ブロックを含んだ締りのある層厚20~30cmの黄褐色土(1・2層)により埋填されている。中央部の立石状棒状礫をはじめとする各石材は、中位の2層上面を中心にして配置されている。

遺物 各石材間やその周辺部から、加曽利E3・E4式40点、称名寺Ⅰ式2点、堀之内1式1点、同2式2点などの土器片と、打製石斧・石皿・台石各1点、磨石類2点などの石器が出土している。尚、No.4の石皿は当配石の東側に50cm離れて出土しており、伴出遺物ではない可能性もある。

所見 ①の大形棒状河床礫を立石とした「立石圍繞配石」と考えられる。帰属時期については、出土土器の時間幅が大きいために確定することは困難であるが、2号配石とも類似した様態を呈することから、堀之内1式~同2式期に比定される可能性があろう。

●7区4号配石

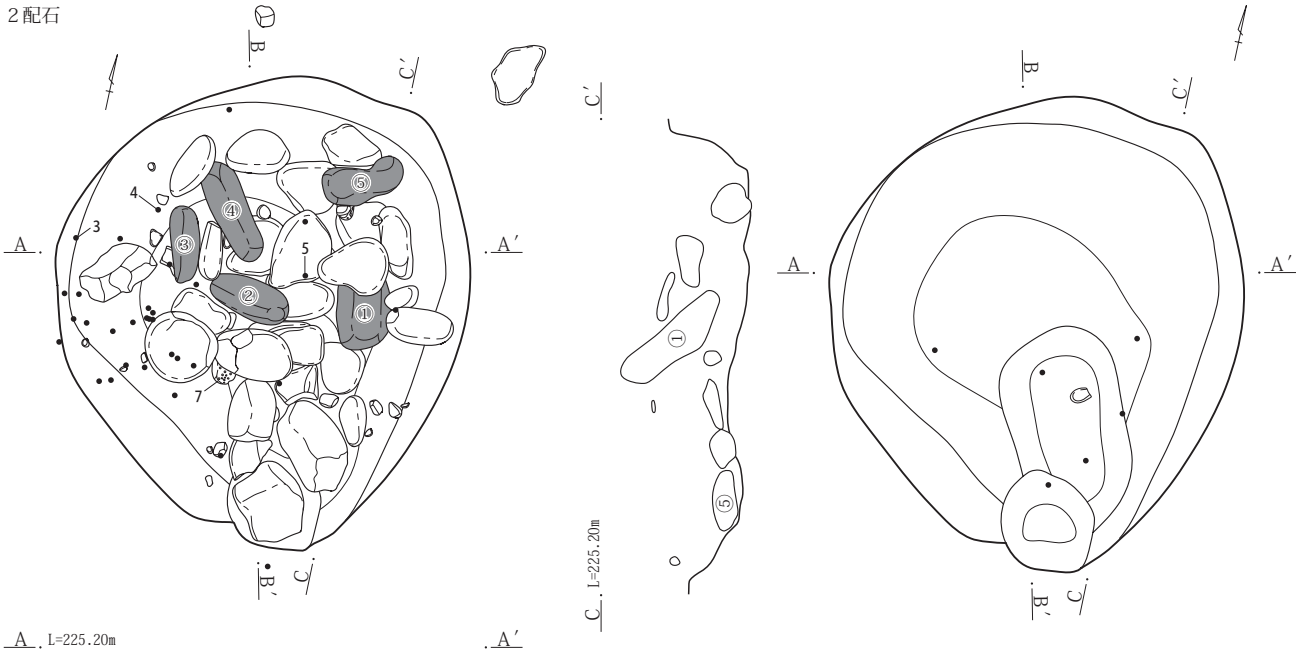
位置 X=57761 Y=-75520

写真 P L 85・163 **観察表** 490頁

重複 重複する遺構はないが、西側5mに3号配石、北側3mに10号配石が近接する。

形状 長さ30~45cm大の河床礫3個と長さ30cmの垂角礫1個が、長径100cm×短径68cmの範囲に楕円形状かつ散在的に出土している。構築当初の形状を保持している

2号配石

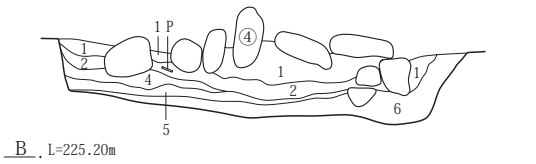


2号配石

- 1 黒褐色土(10YR2/2)少量のローム粒・黄橙色軽石粒・暗褐色土を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)縮まりややあり。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)多量の黄橙色軽石粒・ローム粒を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)縮まりやや弱い。
- 5 暗褐色土(10YR3/3)多量の灰白色軽石粒・ローム小塊を含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・炭化物を含む。

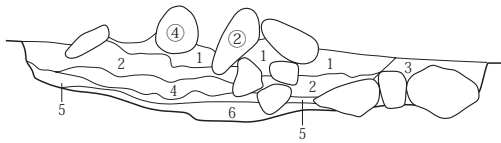
A. L=225.20m

C. L=225.20m

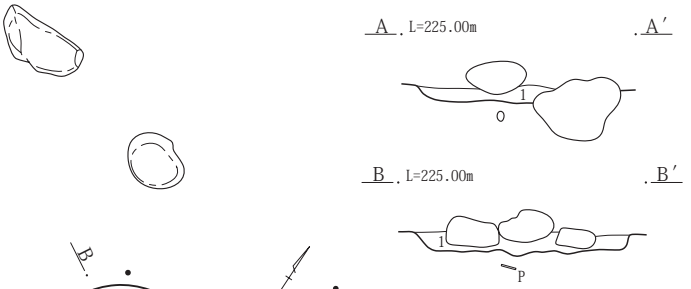


B. L=225.20m

B'



5号配石



A. L=225.00m

A'

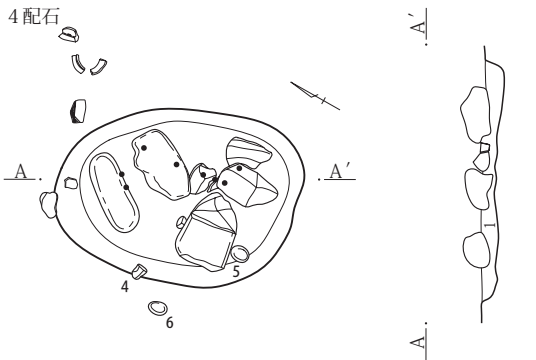
B. L=225.00m

B'

5号配石

- 1 黒褐色土(10YR2/2)黄橙色軽石粒を微量に含む。

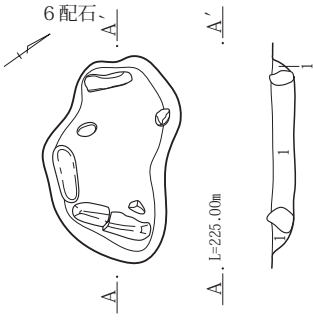
4号配石



4号配石

- 1 黒褐色土(10YR2/2)黄橙色軽石粒を少量含む。

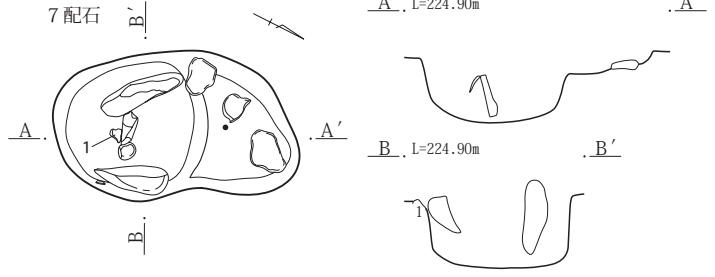
6号配石



6号配石

- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒を少量含む。細粒に均質。

7号配石



A. L=224.90m

A'

B. L=224.90m

B'

0 1:40 1m

第248図 配石(2)〔7区2・4~7号〕

のか否か判定できないが、各石材の平坦面を下位にして平置した以外には規則性が認められず、2・3号配石とは質的に異なる可能性が高い。

下部遺構 長径133cm×短径92cm、深さ8～11cmの楕円形の浅い掘り込み状を呈する。各石材の下面は、底面に密着するかあるいは2～3cm浮遊した状態で設置されており、様態的には「掘り方」に類似するものの、その機能や下記の埋没土の状況も加味すれば、人為的な掘り込みではない可能性もある。

埋没土 締りの乏しい黒褐色土の1層のみが確認されているが、Ⅶ層に極めて近似している点で、分層できない可能性が高い。そうした場合には、各石材は当時の地表面に平置されたものと想定される。

遺物 各石材間やその周辺部から、加曾利E3式23点、加曾利B2式1点などの土器片と、打製石斧1点(No.4)、磨石類2点(No.5・6)などの石器が出土している。

所見 上述したような、直径2m前後の範囲に多数の礫を集中配置して下部に明瞭な掘り方を伴う2・3号配石とは異なり、1号配石のような不定形かつ散在的な配石に近似した様相を持つ。帰属時期については確定できないが、出土土器から判断して中期末～後期中葉段階の中に収まると考えられる。

●7区5号配石

位置 X=57765 Y=-75522

写真 P L 85・163 **観察表** 490頁

重複 重複する遺構はないが、西側3mに10号配石、南側3mに4号配石、北側2mに6号配石が近接する。

形状 長さ30～45cmの河床礫3個と長さ40cmの垂角礫1個が、長径114cm×短径72cmの範囲に楕円形状かつ散在的に出土している。4号と同様に、構築当初の形状を保持しているのか否か判定できないが、垂角礫を除く各石材の平坦面を下位にして配置した以外には規則性が認められない。

下部遺構 長径115cm×短径83cm、深さ9～11cmの楕円形で、浅い掘り込み状を呈する。垂角礫を除く各石材の下面は、底面から2～6cm浮遊し、垂角礫はⅦ層に食い込んだ状態として記録したが、4号と同様に人為的な掘り込みではない可能性が高い。

埋没土 締りの乏しい黒褐色土の1層を埋填土として記

録したが、Ⅶ層に極めて近似している点で明瞭には分層できない。

遺物 各石材間やその周辺部から、関山Ⅱ式3点、加曾利E2式23点、堀之内1式1点の土器片と、磨石類1点(No.3)の石器が出土している。

所見 当配石については、当時の地表面に各石材を配置したものか、あるいは他配石の石材が散逸したものと想定される。前者の場合に注意されるのは、円形河床礫1石を楕円形河床礫2石が挟み込むように並置されている点である。可能性としては、中期末葉～後期中葉に存在する「丸石囲繞配石」的な要素も考慮される。帰属時期については出土遺物からの確定はできないが、上記のように中期末葉～後期中葉段階の中に収まると考えられる。

●7区6号配石

位置 X=57767 Y=-75524

写真 P L 86

重複 重複する遺構はないが、南側2～3mに5・10号配石が近接する。

形状 長さ25～45cm、幅12cm前後の棒状河床礫3個を石材として、長径89cm×短径50cmのL字形状に配置している。各石材の設置は、長軸を横位にしている点で共通性が認められる。

下部遺構 長径110cm×短径67cm、深さ10～12cmの不整形形状の掘り込みを有する。底面に密着して各石材を配置しており、「掘り方」に比定することができよう。

埋没土 ローム粒を少量含む締りのある層厚10cm前後の黒褐色土1層により埋填されている。

遺物 各石材間やその周辺部を含め、削器1点が出土したのみである。

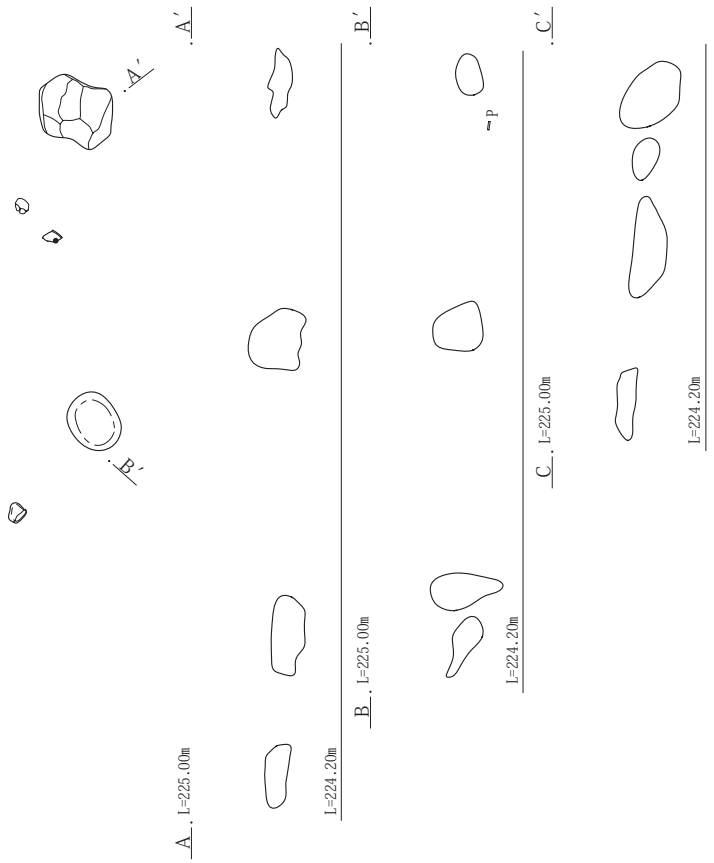
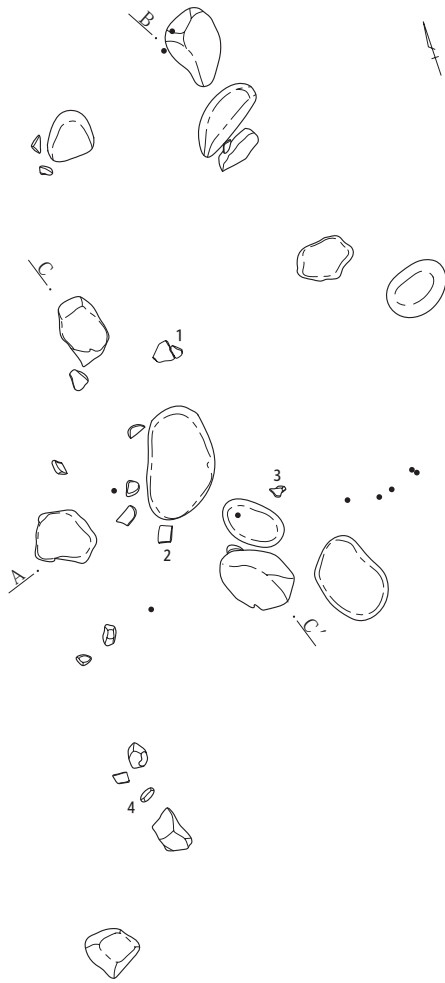
所見 石材の配置状況は、竪穴住居の石囲炉や配石墓に近似した様相を呈するが、焼土や副葬品の痕跡・遺物出土状況は認められない。帰属時期については、出土土器が皆無なために確定できないが、他の配石遺構と同様に中期末葉～後期中葉の中に収まると想定される。

●7区7号配石

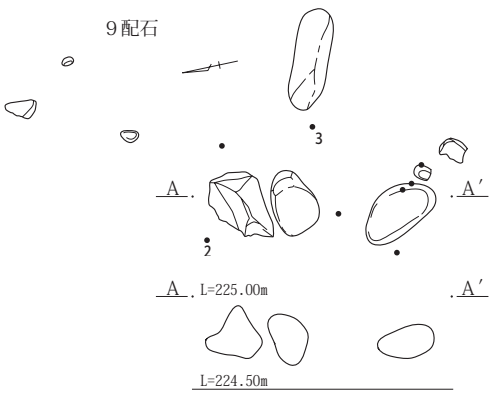
位置 X=57776 Y=-75519

写真 P L 86・163 **観察表** 490頁

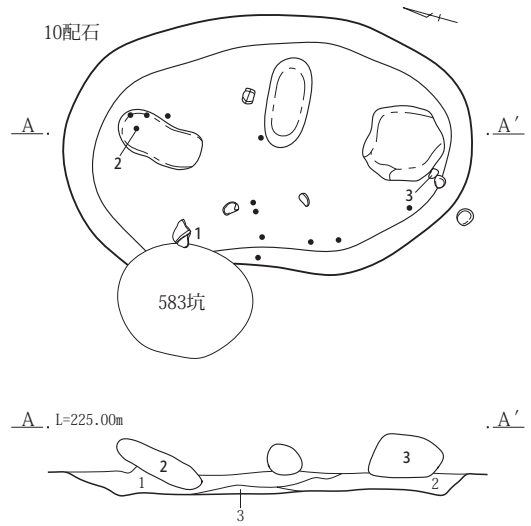
8配石



9配石

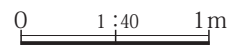


10配石



10号配石

- 1 黒褐色土(10YR2/3)暗褐色土を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)黒褐色土を含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒を含む。



第249図 配石(3)[7区8~10号]

重複 重複する遺構はないが、北側1.5mに58号住居が近接する。

形状 長さ15～50cm、幅10～40cmの大・小形河床礫4個と長さ10～20cm、幅5～20cmの垂角礫3個を石材として、長径103cm×短径76cmの楕円形状に配置している。大形の河床礫2個は、東・西に対向して配置され、共に長軸を横位にして平積み的に設置されているが、下記のように他の石材よりも深い掘り方を伴うことから、これらの大形礫とそれに接続する小形の垂角礫2個で別の配石遺構を形成する可能性もある。

下部遺構 長径130cm×短径73cm、深さ10～12cmの浅い楕円形状の掘り込みと、直径85cm×深さ30cmの円形状のやや深い掘り込みにより構成される。後者の底面は、大形河床礫下部より10cm弱程度の深さであり、石材設置に伴う「掘り方」と考えられる。また、前者の掘り込みは明瞭ではなく、その底面が当時の構築(地表)面の可能性が高い。

埋没土 諸般の事情により埋没土の断面図記録はないが、大形礫の周辺部分は黒褐色土1層により埋填されている。

遺物 各石材間やその周辺部を含め、削器1点が出土したのみである。

所見 石材の配置状況は、竪穴住居の石囲炉に近似した様相を呈するが、焼土の形成は認められない。帰属時期については、出土土器が皆無なために確定できないが、6号配石とも類似することから中期末葉～後期中葉の中に収まると想定される。

●7区8号配石

位置 X=57848 Y=-75524

写真 P L 86・163 **観察表** 491頁

重複 関山Ⅱ式期の71号住居の上位に構築され、北側に10m離れて2・3号配石が存在する。

形状 長さ25～60cm、幅20～35cmの扁平な楕円形状河床礫11個と、長さ25～45cm、幅15～30cmの垂角礫4個を主体にして、東西5.4m×南北3.2mの範囲に不定形かつ散在的に配置している。

掘り方 存在しないが、各礫の設置状況は大形礫を中心にして、個々に下位部分を10cm程度埋置しているのが看取できる。その一方で、大半の礫は当時の地表面に平置

していると想定される。

遺物 各石材の周辺部から加曾利E2～E4式49点や堀之内1式19点などの土器片と、削器・磨石類各1点、打製石斧2点などの石器が出土している。

所見 散在的な礫の配置と掘り方を伴わない点で、1号配石に類似したあり方を示す。帰属時期については、出土土器の時間幅が大きいため確定できないが、中期末葉～後期前半段階の中に収まると想定される。

●7区9号配石

位置 X=57862 Y=-75527

写真 P L 86・164 **観察表** 491頁

重複 重複する遺構はないが、東・南側に近接して3・10号配石が存在する。

形状 長さ35～55cm、幅20～25cmの棒状・楕円形状河床礫3個と、長さ45cm×幅30cmの垂角礫1個が、東西・南北方向ともに1.2mの範囲に不定形かつ散在的に配置されている。状況的には、後述する10号配石と共に3号配石のような定形的配石の石材の一部が、後世の攪乱等により散在したことも想定される。グレートーンの棒状河床礫は、立石として使用されていた可能性もある。

掘り方 存在しないが、棒状礫や扁平礫を除いて個々にその下位部分を10cm程度埋置している可能性もある。

遺物 各石材の周辺部から関山Ⅱ式4点、加曾利E4式11点、堀之内1式6点などの土器片と、磨石類1点が出土している。

所見 散在的な礫の配置と掘り方を伴わない点で、1・8号配石に類似したあり方を示す。帰属時期については、出土土器の時間幅が大きいため確定できないが、中期末葉～後期前半段階の中に収まると想定される。

●7区10号配石

位置 X=57763 Y=-75525

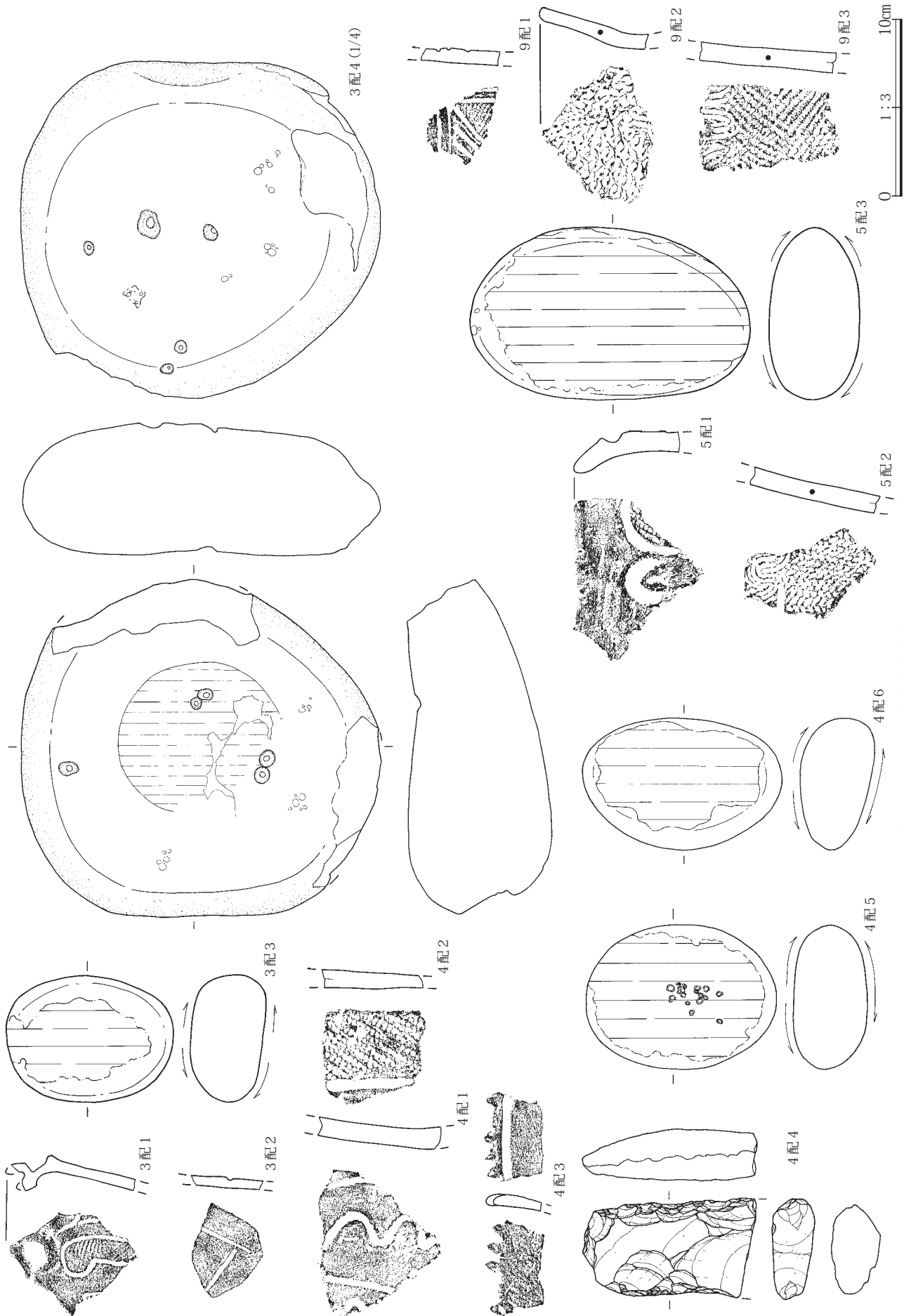
写真 P L 86・164 **観察表** 491頁

重複 遺構583号土坑と重複するが、新旧関係は不明。南側1.5mに3号配石、西側に9号配石が近接する。

形状 長さ50cm×幅20cmの楕円形状河床礫2個と、直径40cmの円形状垂角礫1個が、南北172cm×東西62cmの範囲に列状かつ散在的に出土している。4・5号配石と同様に、構築当初の形状を保持しているのか否か確定で



第250図 配石出土遺物(1)[7区1・2号]



第251図 配石出土遺物(2)〔7区3~5・9号〕

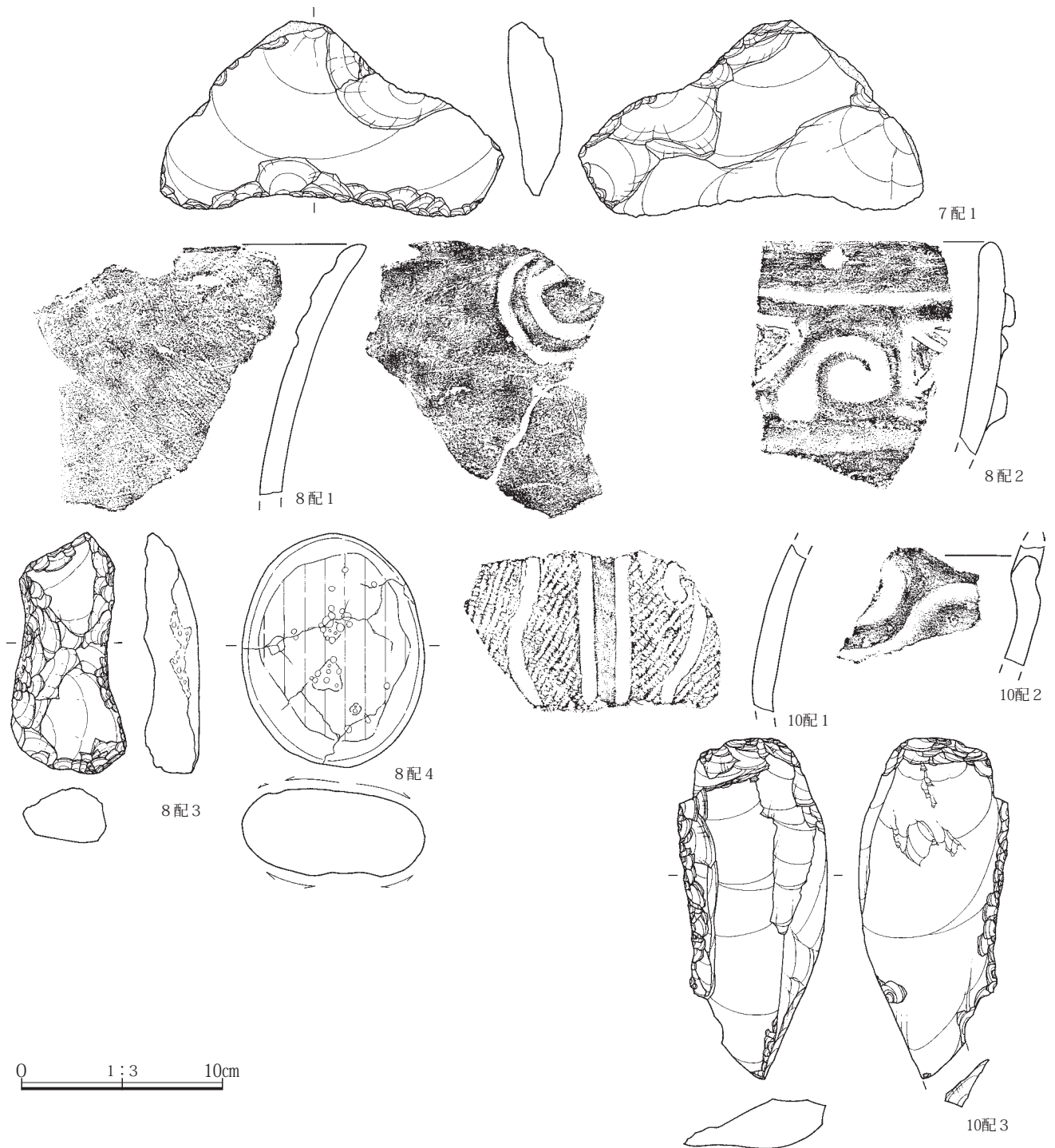
きない。

下部遺構 長径221cm×短径132cm、深さ9～12cmの楕円形の浅い掘り込み状を呈すると想定したが、下記の通り埋没土がⅦ層とも大差なく、誤認している可能性もある。

埋没土 締りの乏しい黒褐色土の1～3層を埋填土として記録したが、各層の境界は不明瞭かつⅦ層に極めて近似していることから、分層できない可能性が高い。

遺物 各石材間やその周辺部から、加曾利E3式49点、堀之内1式5点、加曾利B1式1点の土器片と、削器1点の石器が出土している。

所見 当配石については、9号配石と同様に3号配石の石材の一部が散在化したものと想定される。帰属時期については出土遺物からの確定は困難だが、中期末葉～後期中葉段階の中に収まると考えられる



第252図 配石出土遺物(3)〔7区7・8・10号〕

(6) 集石遺構

下部に土坑状の掘り込みを伴う集石遺構であり、7区から15・19・31号の3基、8区から29号の1基を検出した。構築面はⅦ～Ⅷ層内を主体とするが、31号の掘り込みはⅩ層のローム上面にまで達している。前項の配石遺構に類似した大きさの石材を用いているものもあるが、各集石遺構の石材には被熱による赤変や割れが認められる点で異なる。当遺構の機能・性格については、従来から言われているように石蒸し等の調理に関連した施設と想定される。

竪穴住居と同様に7区に集中する傾向が顕著であるが、相互に分散している点を重視すれば、帰属時期の差異を反映している可能性もある。尚、各集石の帰属時期については確定できないものが多いが、出土土器等を有するものについては中期後半～後期前半段階の中に収束すると考えられる。

以下、各集石遺構の内容について記載する。

●7区15号集石

位置 X=57779 Y=-75521

写真 PL87

重複 称名寺Ⅱ式期の58号住居と重複するが、新旧関係は不明。南側に32m離れて31号集石が存在する。

形状 長さ17～20cm、幅12cmの河床礫2個と、長さ10～40cm、幅8～15cmの垂角礫6個が、東西80cm×南北54cmの範囲に不規則ながら、かなり密集して出土している。各礫には、程度の差異はあるものの被熱による赤変やハゼ・割れなどが認められ、一部の垂角礫には煤状炭化物の付着も確認することができる。また、東側に近接する垂角礫1個にも被熱・煤状炭化物痕が認められることから、当集石の一部が散乱したものである。

下部遺構 長径100cm×短径71cm、深さ10～12cmの楕円形状の浅い掘り込みを持つ。底面および周壁部に焼土形成は認められない。

第17表 集石規模一覧(縄文時代)

区	番号	位置		集石形状	集石規模(cm)		掘方形状	掘方規模(cm)			時期	備考
		座標X	座標Y		長径	短径		長径	短径	深さ		
7	15	57779	-75521	楕円形	80	54	楕円形	100	71	12	不明	石材被熱。
7	19	57730	-75547	不定形	75	69	楕円形?	不明	89	12	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半土器3。打斧1。石材被熱。
7	31	57744	-75522	円形	112	97	円形	135	(110)	36	中期後半～後期前半	中期後半～後期前半土器2。多孔石1。石材被熱。
8	29	57810	-75508	楕円形	95	59	楕円形	127	103	11	加曾利E3式期	勝坂3・焼町・加曾利E2式各1,加曾利E3式29。

埋没土 締りの乏しい暗褐色・黒褐色土の1・2層が埋没しているが、第2層は掘り方的な埋填土か。

遺物 各石材間やその周辺部からの出土遺物は、皆無である。

所見 帰属時期については、出土遺物が皆無のために不明である。

●7区19号集石

位置 X=57730 Y=-75547

写真 PL87・164 観察表 491頁

重複 重複する遺構はないが、北東に30m離れて31号集石が存在する。

形状 先行したグリッド調査により南半部を欠失するが、長さ8cm×幅5cmの河床礫1個と、長さ5～20cm、幅6～14cmの垂角礫9個が、東西75cm×南北69cmの範囲に偏在・密集して出土している。各礫の被熱状況は微弱だが、一部の石材に赤変やハゼ・割れなどが認められる。

下部遺構 長径は不明だが、短径89cm、深さ10～12cmの楕円形状の浅い掘り込みを伴うと想定される。底面および周壁部に焼土形成は認められない。

埋没土 締りの乏しい黒褐色土の1層が埋没し、上部部を中心に少量の焼土・炭化物粒が認められる。

遺物 各石材間やその周辺部から中期後半～後期前半の土器片3点と、欠損した撥形の打製石斧1点(No.1)が出土している。

所見 帰属時期については、出土遺物から判断して中期後半～後期前半の中に収まると想定される。

●7区31号集石

位置 X=57744 Y=-75522

写真 PL87

重複 重複する遺構はないが、南西に30m離れて19号集石が存在する。

形状 東側約1/4が調査区外となるが、長さ5cm×

幅35cm、幅4～34cmの大小の垂角礫約100個が、南北112cm×東西97cmの円形状の範囲に集積されている。各礫は、被熱により赤変やハゼ・割れなどが顕著に認められ、使用頻度の高さを看取することができる。

下部遺構 短径は不明だが、長径135cm、深さ34～36cmの円形状の明確な掘り込みを伴っている。底面部はX層のローム上面にまで達しているが、周壁部分を含めて焼土形成は認められない。

埋没土 締りの乏しい黒褐色土の1層が埋没し、上位部を中心にして少量の焼土・炭化物粒が認められる。

遺物 図化されていないが、各石材間やその周辺部から中期後半～後期前半の土器片2点と、多孔石1点が出土している。

所見 帰属時期については、出土遺物から判断して中

期後半～後期前半の中に収まると想定される。

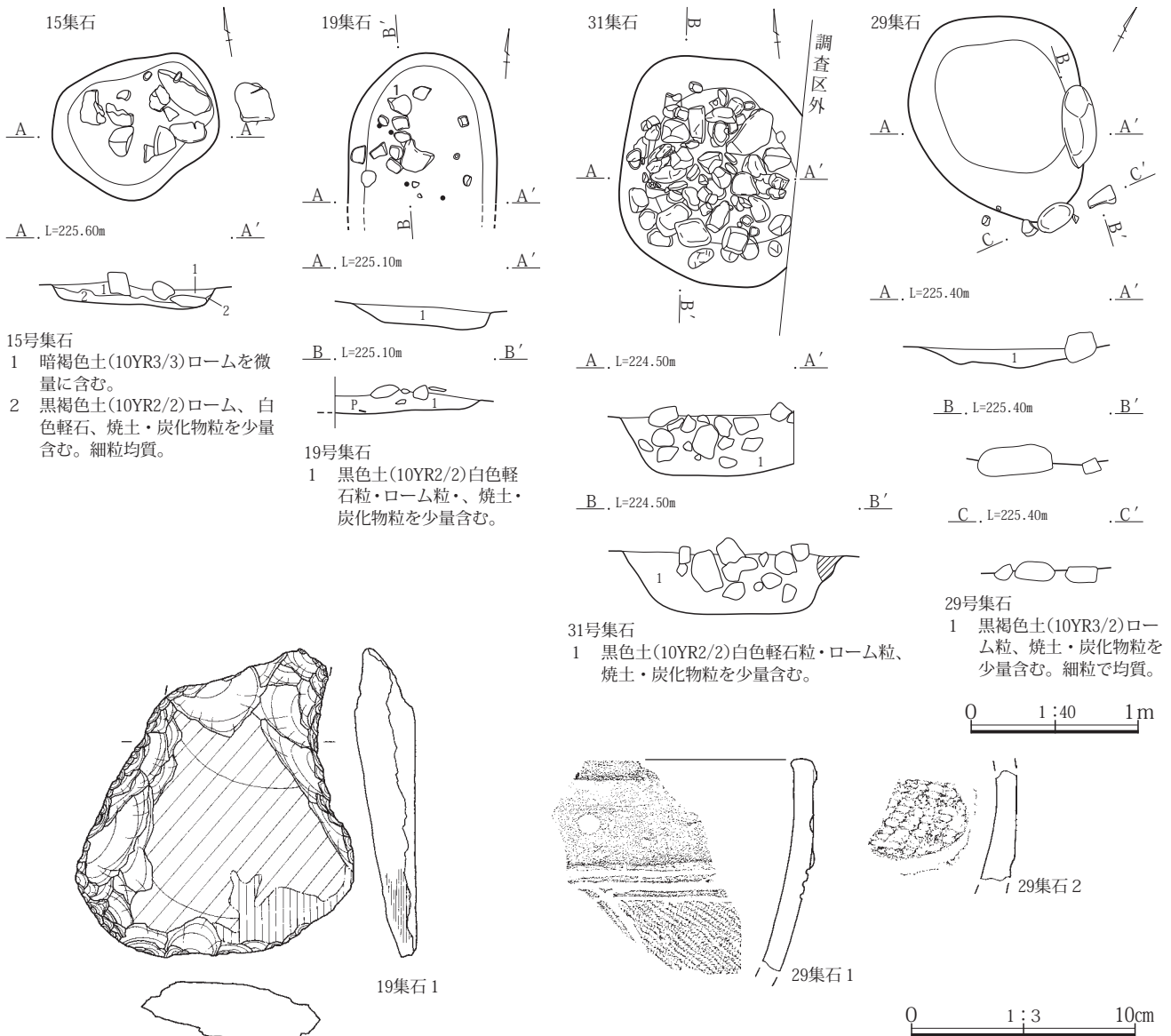
●8区29号集石

位置 X=57810 Y=-75508

写真 P L 87・164 観察表 491頁

重複 重複する遺構はないが、北東に8m離れて加曽利E4式期の69号住居が存在する。

形状 長さ24～50cm、幅14～20cmの河床礫と、長さ12～16cm、幅7～10cmの垂角礫の各2個が、南北95cm×東西59cmの範囲に散在・出土しており、後世の攪乱等により散逸したと想定される。また、不定形な配石遺構の可能性もあるが、河床礫には被熱によると思われる赤変やハゼ・割れなどが認められることから、集石遺構として扱っておく。



- 15号集石
1 暗褐色土(10YR3/3)ロームを微量に含む。
2 黒褐色土(10YR2/2)ローム、白色軽石、焼土・炭化物粒を少量含む。細粒均質。

- 19号集石
1 黒色土(10YR2/2)白色軽石粒・ローム粒、焼土・炭化物粒を少量含む。

- 31号集石
1 黒色土(10YR2/2)白色軽石粒、焼土・炭化物粒を少量含む。

- 29号集石
1 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒、焼土・炭化物粒を少量含む。細粒で均質。

第253図 集石と出土遺物

下部遺構 長径は127cm×短径103cm、深さ8～11cmの楕円形状の浅い掘り込みを伴うと想定される。底面および周壁部に焼土形成は認められない。

埋没土 締りの乏しい黒褐色土の1層が埋没し、少量の焼土・炭化物粒が認められる。

遺物 各石材間やその周辺部から中期後半の勝坂3式・焼町土器・加曾利E2式が各1点、加曾利E3式29点等の土器片が出土している。

所見 帰属時期については、出土土器から判断して加曾利E3式期に比定される可能性が高い。

(7)屋外埋設土器

7区より1・2号の2基が検出されている。1号は勝坂2式の深鉢と浅鉢が各1点、併行段階の焼町土器1点が入れ子状に出土し、2号は加曾利E3式の深鉢1点をほぼ正位の状態で埋設している。その土器内部からは、骨等を含めて何ら伴出遺物はない。位置的には1号が7区の南側に、2号がほぼ中央部に存在し、両者間の距離は約42mである。以下、各埋設土器の内容を記載する。

●7区1号埋設土器

位置 X=57727 Y=-75538

写真 P L 88・164 **観察表** 491頁

重複 重複する遺構はないが、北側に35m離れて加曾利E3式期の64号住居が存在する。

状態 口縁部～頸部と底部を欠失した、全長35cm深鉢土器をほぼ正位に埋置するが、約10度ほど北側に傾いている。口縁部～頸部や底部については、埋置する前段階で意識的に打割したものと想定される。また、構築面に近い土器の上端部では、その外縁に沿って4点の同一土器破片が出土しており、打割した破片の一部を意識的に配置したものと考えられる。埋設土器本体には、被熱による風化の痕跡や一部に煤状炭化物が付着しているが、下記の通り掘り方の壁面には焼土形成が認められないことから、埋置以前に煮沸等で使用されていた土器を転用した可能性が高い。

掘り方 直径55cm×深さ45cmの円錐形状に掘り込んでいるが、A-A'の土層断面図からも明らかのように、土器の形態や大きさに合致するように意識した掘り方と

なっている。埋設土器の確認面は、Ⅶ層下位～Ⅷ層上位であるが、掘り方底面はⅨ層内に達している。尚、掘り方の壁面には焼土形成や赤化等の被熱痕跡は存在しない。

埋没土 締りの乏しい黒褐色土の1層が埋没し、微量の焼土・炭化物粒を含むが、焼骨片等は一切認められなかった。

遺物 煮沸利用された加曾利E3式の深鉢土器を転用・埋置しているが、この本体以外の土器を始めとする遺物出土は皆無である。

所見 帰属時期については、埋設土器から判断して加曾利E3式の新～新々段階に比定される。

●7区2号埋設土器

位置 X=57773 Y=-75520

写真 P L 88・164 **観察表** 491頁

重複 重複する遺構はないが、周辺部に勝坂2式期の612・629・642号土坑などが存在する。

状態 検出当初段階では、Ⅷ層内にNo.1の焼町土器やNo.2の勝坂2式土器の破片が散在する状態であった。それらを記録・取り上げてゆく過程で、第254図のようにNo.3の浅鉢土器の底部大形破片を中央部に置き、それを囲繞するように胴部下半を欠失するNo.1の焼町土器の大形破片を正位に配置すると共に、底部を欠失するNo.2の勝坂2式土器の大形破片を入れ子状に正位配置している状況が明らかとなった。上位に散在する土器片は、攪乱等により原位置から移動したものと推定される。各土器には、被熱による風化の痕跡や一部に煤状炭化物の付着が認められ、1号埋設土器と同様に埋置以前に煮沸等で使用されていた土器を転用した可能性が高い。

掘り方 直径120cm、深さ18～20cmの円形状の浅い掘り方を伴うが、上半部分が攪乱を受けている可能性を考慮すると、構築当初段階の深度は10～20cm程度が加算されると想定される。

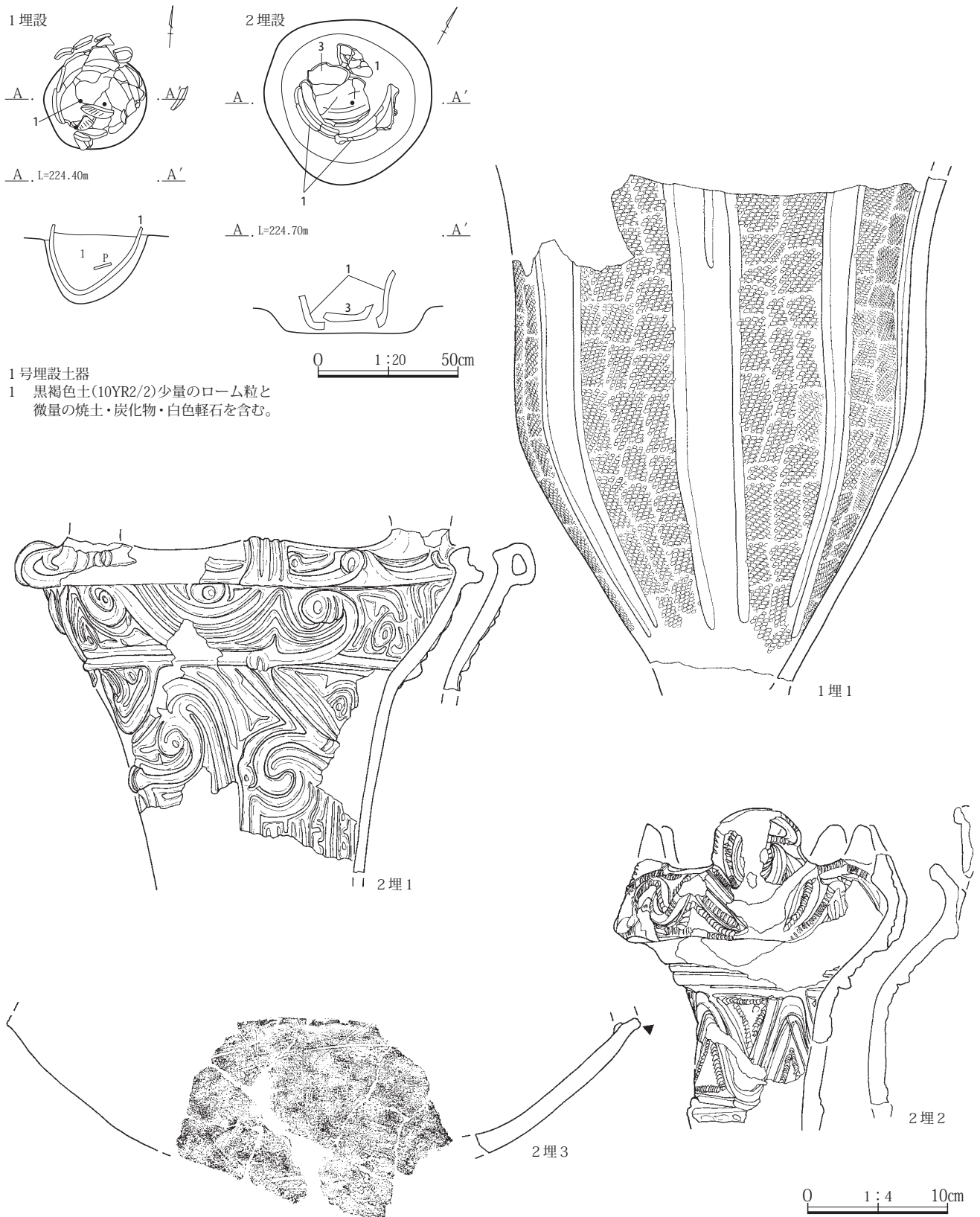
埋没土 Ⅷ層に近似した締りの乏しい暗褐色土が埋没している。

遺物 勝坂2式(No.2)・焼町土器(No.1)の深鉢各1点と浅鉢(No.3)1点が出土している。No.1・2は底部を欠失し、No.3は口縁部を欠失した体部下位～底部の大形破片であるが、設置状況から見てこれら3点の土器は、構

築時に打割・加工されたものと考えられる。

所見 No.1～3の土器は一括出土状況を示しており、

共に併行段階に位置付けられる。当遺構の帰属時期は、
No.2の土期により、勝坂2式段階に比定される。



第254図 1・2号屋外埋設土器

4. 縄文時代の遺構と遺物

(8) 焼土遺構

7区より17～20号の4基が、8区より21号の1基が検出されている。7区に集中分布する傾向は、竪穴住居をはじめとする各種遺構のあり方と同様であり、基本的には集落を構成する遺構の一つとして存在していると見なすことができよう。各焼土の規模や形状については、第18表に集約してあるが、以下にそれらの全体的な特徴や異同点について記載する。

各焼土の検出状況を見ると、その確認面はいずれもⅧ層～Ⅸ層上面であるが、実際の形成面が層位的に確認できたのは、調査区外との境界土層断面でⅧ層中位に存在する21号のみである。

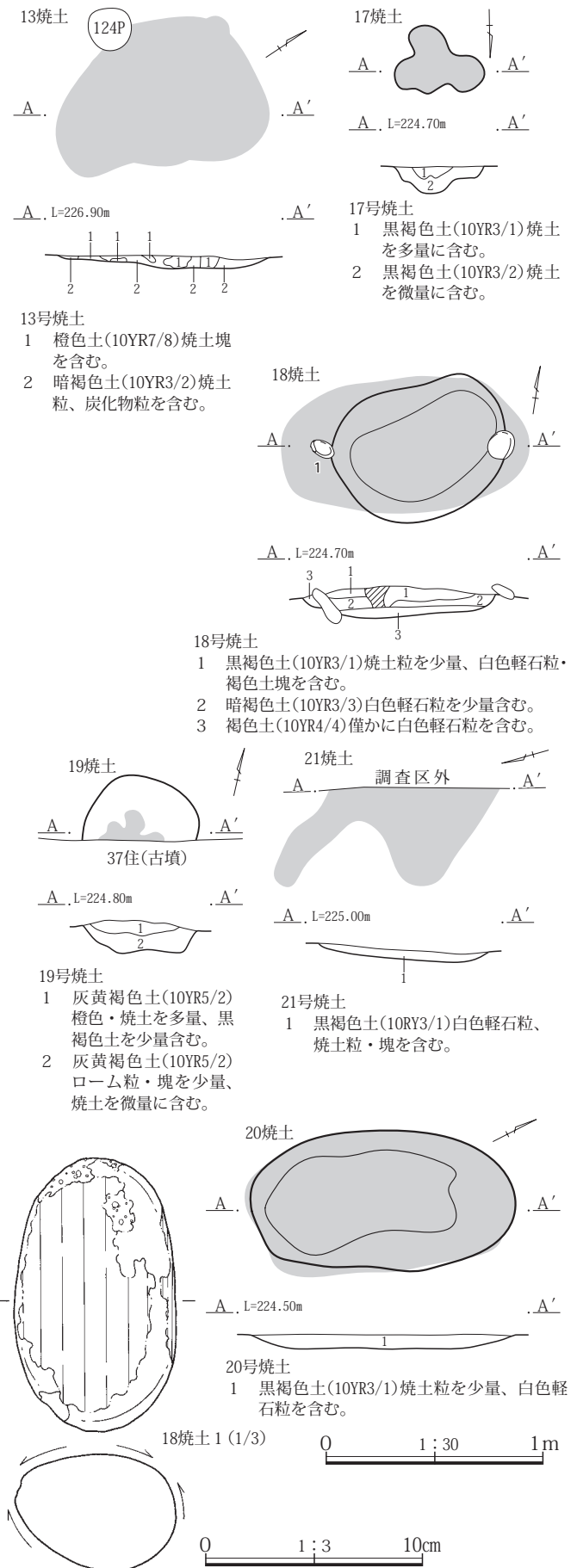
焼土堆積層の下部に土坑状の浅い掘り込みを伴うのは、右図のように17～19号であり、20・21号は焼土層の水平・垂直方向での分布範囲を平・断面図やトーンで表示したものである。また、17号についても不定形な落ち込みの上位に焼土層が形成されており、人為的な掘り込みではない可能性もある。18号では、長軸方向のほぼ対向した壁際に長径15cm前後の磨石(No.1)や河床礫を各1石配置しており、明瞭な掘り込みの存在も含めて他とは大きな差異が認められる。

焼土層の形成・堆積状況は、比較的狭小な範囲に層厚6～10cmでブロック状に集中堆積する17・19号と、長径1m前後の楕円形状の範囲にやや散漫・ブロック状に堆積する18・20・21号に分別され、燃烧物の配置状態を反映している可能性がある。

これら焼土遺構の機能・用途については不明だが、少なくとも各地点における焚火等の人為的な所作により焼土が形成されたと考えられ、屋外での調理あるいは儀礼等の場での焚火行為が想定し得るだろう。18号を含めて土器の出土は皆無であり、帰属時期の特定は困難である。ただし、21号と同様にその形成面がⅧ層内を中心にしているとすれば、竪穴住居を主体とした前期集落を構築している関山Ⅱ式期に比定される可能性が高い。

第18表 焼土遺構規模一覧(縄文時代)

区	番号	位置		主軸方位	形状	規模 (cm)			時期
		座標 X	座標 Y			長径	短径	深さ	
1	13	57863	-75509	N23度E	楕円形	99	66	4	不明
7	17	57736	-75537	N89度W	不定形	41	30	11	不明
7	18	57768	-75522	N13度E	楕円形	114	67	9	不明
7	19	57721	-75557	不明	不明	(31)	(14)	15	不明
7	20	57773	-75518	N27度E	楕円形	123	63	6	不明
8	21	57816	-75501	不明	不明	(62)	(53)	5	不明



第255図 焼土遺構と出土遺物

(9) 溝状遺構

2区32号と7区55A・55B号の3条が検出されている。55A・55B号は、後述するように互層的な砂礫の堆積状況から、かなりの流水が存在したことが明瞭である。おそらく、調査区外の西側山麓端部より湧出した自然流水の侵食による流路と考えられるが、両溝ともに直線的な走行を呈しており、人為的な掘削の可能性も考慮される。これら溝の確認面は、32号がⅦ層下面～Ⅷ層上面、55A・55B号がⅦ層上面であり、各々の検出層位の差異が形成時期の違いを反映していると考えられる。

以下、各溝の内容を記載する。

● 2区32号溝

位置 X = 57932～57937 Y = -75493～-75495

写真 P L 89

重複 位置的には2区76・92号土坑と重複するが、当溝はその上位に浅い掘り込みで構築されるために、直接的な切合関係はない。

形状 断面が半円形状を呈し、弧状に湾曲走行する。竪穴住居の周溝に近似するが、斜面上方側が浅いのに対して下方側が深くなる点で大きく異なる。基本的に、地形勾配に即して掘り込まれている状況が看取される。

規模 上幅31～51cm、下幅13～39cm、深さ1～10cm、延長6.15mの規模を持ち、約6%の勾配で北から南方向へ走行する。

埋没土 やや締りのある黒褐色土の1層が埋没するが、の流水による砂礫層等の堆積は認められない。

遺物 出土遺物は皆無である。

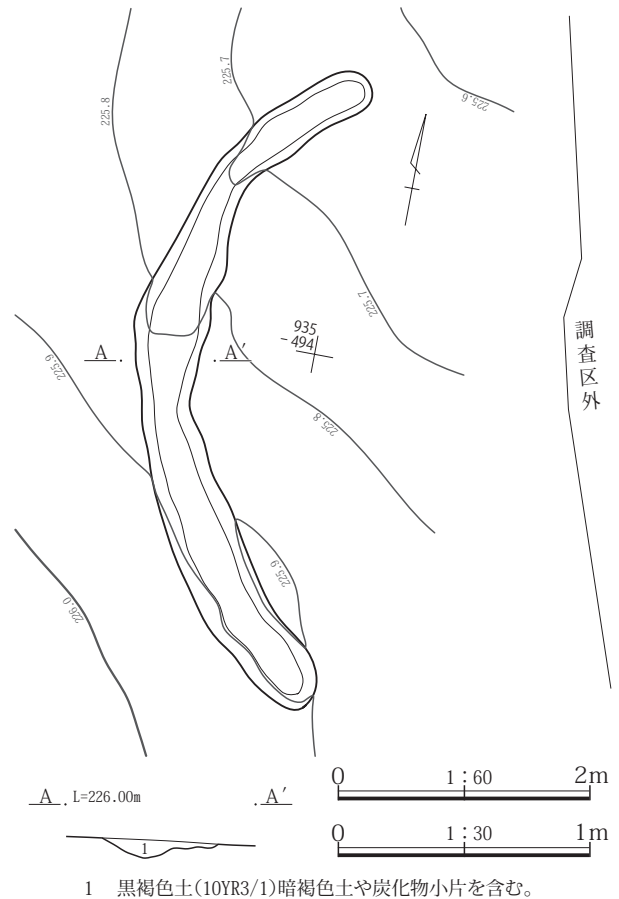
所見 かなり整然とした弧状形態を呈することや、流水の痕跡が認められない点で、人為的な掘り込みと想定されるが、機能・用途は不明である。帰属時期については確定できないが、検出層位を重視すれば中期後半の可能性が高い。

● 7区55A号溝

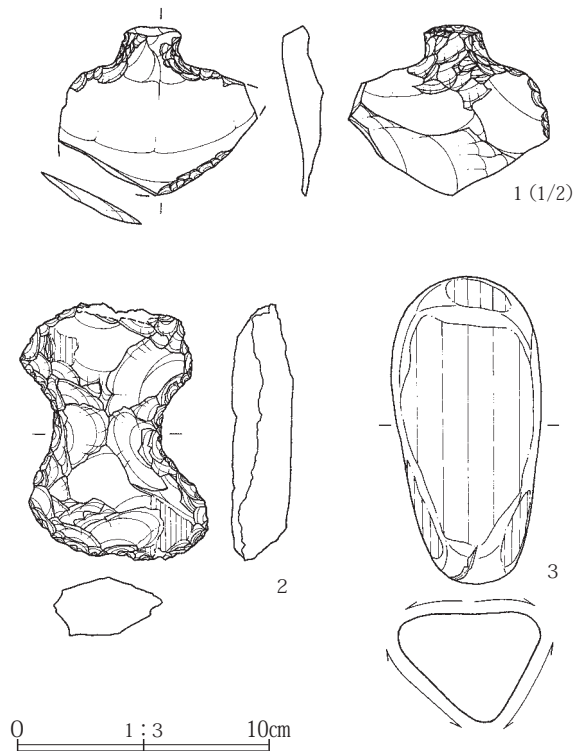
位置 X = 57750～57779 Y = -75520～-75529

写真 P L 89・164 観察表 491頁

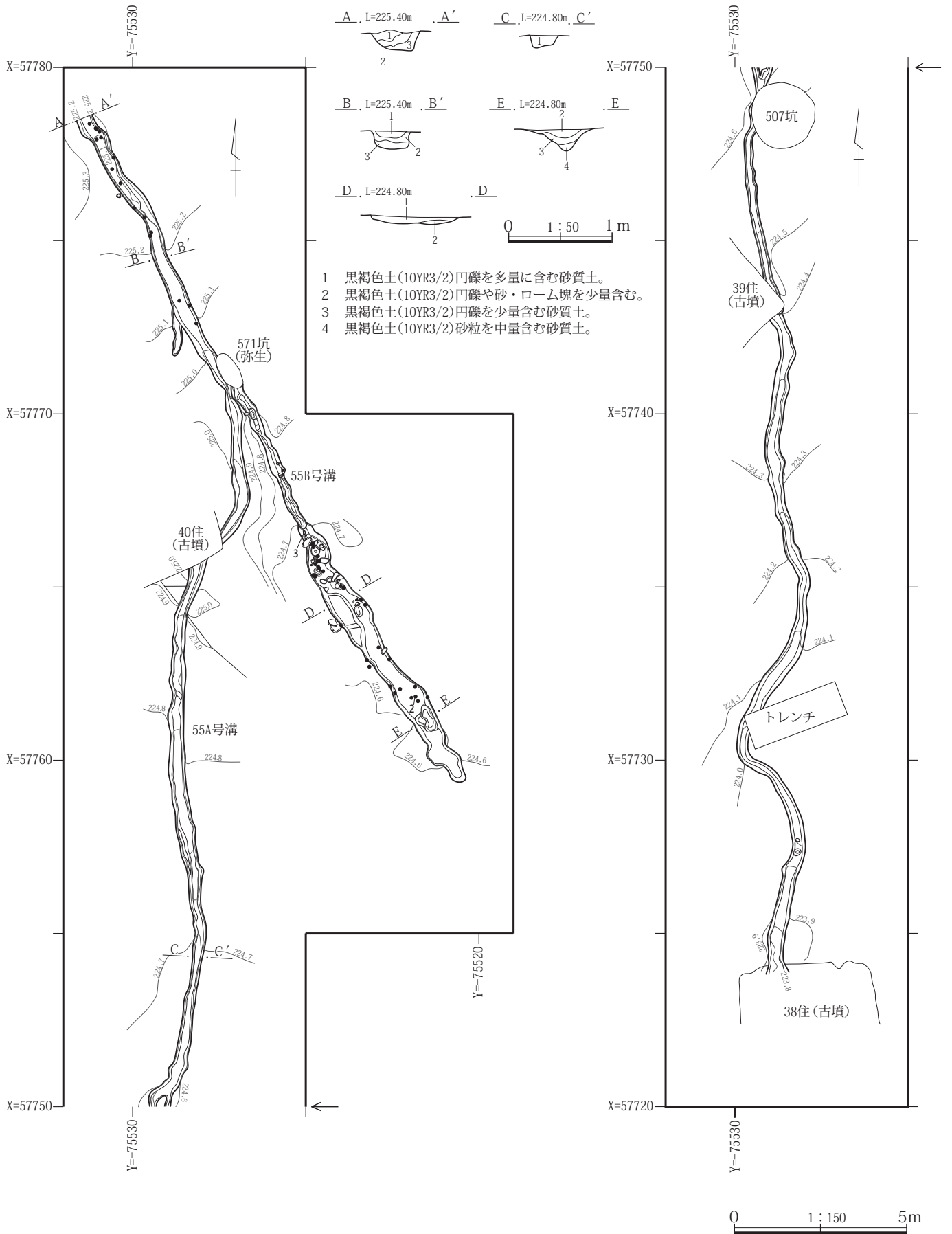
重複 当溝は55B号溝の中途に接続する様態を呈するが、両者の新旧関係は不明である。加曾利B2式期の507



第256図 2区32号溝状遺構



第257図 7区55A・B号溝状遺構出土遺物



第258図 7区55A・B号溝状遺構

号土坑と古墳時代の38～40号住居に切られ、1～3・9号配石などに関連した石材が上部に載る。位置的に72号住居や567・606・682・685・746号土坑と重複するが、当溝はその上位に浅い掘り込みで構築されるために、直接的な切合関係はない。

方位 N2度E

形状 断面がU字形状を呈し、若干蛇行する箇所も見られるが、ほぼ直線的に北側から南側へ走行している。地形勾配に規制された場合には、北西方向から南東方向への走行が自然であるが、南端部では等高線と並走するなど、全体的には地形勾配をやや無視した走向が認められる。

規模 上幅22～56cm、下幅10～29cm、深さ4～16cm、延長46.60mの規模を持ち、約2%の緩やかな勾配で北から南方向へ走行する。

埋没土 流水による砂礫を多量に含む黒褐色土の1層で埋没している。

遺物 55B号溝出土遺物との分別がなされていないが、埋没土の砂礫層内より加曾利E3式を主体とした中期後半の土器片が375点、同じく堀之内1式を主体とした後期前半の土器片が326点出土している。前期の土器片15点の混在や、破断面が摩耗している土器片も少なからず存在することから、流水が周辺部の遺物包含層を侵食することにより運搬・混在したもののだろう。

所見 やや複雑な斜面勾配にあまり影響されることもなく、ほぼ直線的に走行していることや、全体的な上・下幅規模の振幅が少ない等の点を重視すれば、人為的な掘削による水路の可能性も否定できない。ただし、この場合の流水は生活用水に限定される訳ではなく、集落内に流れ込む湧水や雨水を一括処理するための「排水溝」とも考え得る。帰属時期については確定できないが、重複関係にある加曾利B2式期の507号土坑より古いことや、後述する55B号溝との関連性から加曾利E3式期の62号住居より新しいことを踏まえれば、後期前半の堀之内1式期に比定される可能性が高い。

●7区55B号溝

位置 X = 57723～57750 Y = -75528～-75529

写真 P L 89・164

重複 位置的に加曾利E3式期の62号住居や三原田式期

の672号土坑、および時期不明の645・692・710号土坑と重複するが、当溝はそれらの上位に浅い掘り込みで構築されるため、直接的な切合関係はない。また、中途に接続する55A号溝との重複関係は把握できなかったが、走行・接続状況から判断して、ほぼ同一時期かあるいはその時間的差異は僅少と推定される。

方位 N30度W

形状 断面がU字形およびV字形状を呈し、ほぼ地形勾配に即して北西から南東方向へ直線状に走行している。隣接した南側での遺構確認調査の掘削が先行したために、南東端でその走行が途切れているが、状況としてはそのまま連続して調査区外境界まで延びているのが確認されている。

規模 上幅20～98cm、下幅11～78cm、深さ2～19cm、延長21.80mの規模を持ち、約3%の勾配で北西から南東方向へ走行する。南東側の下位部分は、北西側に比べてその幅員が2倍程度広がっている。

埋没土 A・B・Eラインの土層断面では、砂礫を多量に含む黒褐色土の1～3層がラミナ状に互層堆積しており、流水による堆積・形成が明瞭である。

遺物 前出の55A号溝で記載した通り、出土遺物の分別がなされていないが、中期後半や後期前半の土器片の他に、第257図に掲載した3点の石器を含めて、石鏃・石匙・磨石類各1点と削器6点・打製石斧3点などの石器が埋没土中から出土している。土器片と同様に、流水が遺物包含層を侵食したり周辺部からの流れ込み等により混在したと想定される。

所見 北西から南東方向への斜面勾配にほぼ合致した状態で走行しているが、自然流路と見なすには過度に直線状である点に注意が必要だろう。また、全体的な上・下幅員の規模は、55A号に比べればその振幅が大きいものの、北西側の上位部分では55A号とほぼ同様の規模を有している。これらの点は、自然流路と見るよりも人為的な水路状遺構としての可能性をより強めるものであろう。帰属時期については、55A号と同様に堀之内1式期と想定される。

(10) 遺構外の出土遺物

1～5・7～10・12・13区の20,990㎡に及ぶ調査面積の中で、12区の125㎡を除いた各区において縄文時代の遺物包含層が存在している。この包含層は、層厚10～40cmのⅦ層と同10～25cmのⅧ層にまたがるが、少量ながらその上・下位のⅥ層やⅨ層内にも同時代遺物が認められる。第1章の「2. 調査の方法と工程」で既述したように、6世紀代の火山噴出物によるⅡ・Ⅳ層などの示準的な堆積層の存在から、古墳・弥生時代遺構調査の進捗と合わせて、その下位のⅥ～Ⅸ層についても層位的な発掘を試行した。しかし、総体的にはⅥ・Ⅶ層などの上層から中・後期遺物が出土する傾向は認められるものの、前期遺物も少なからず混在し、層位的な出土状況を確認することはできなかった。こうした状況や調査期間との兼ね合いを踏まえて、包含層遺物については各調査区ごとに5mメッシュのグリッド単位で取り上げ、位置情報を押さえることを主眼とした。

出土遺物の内容や数量に関しては、土器については324頁第19表に各調査区・型式別の数量を、また石器については368頁第20表に同じく調査区・器種別の数・重量と369頁第21表に器種別・石材別の数・重量を掲載した。ちなみに、出土土器は早期～後期にかけての破片を主体に71,691点、石器は剥片類を含めて2,403点が検出されている。これらの中で特徴的なものを調査区を単位にして抽出し、土器506点を第271～295図に、石器類133点を第298～305図に掲載した。

遺物の分布状況については、頁数や整理事業期間との関係上、調査対象面積が広く土器の出土数量も全調査区の中で最多となる7区の出土土器についてのみ、グリッド・型式別の出土分布を第259～270図に掲示した。尚、この分布図はグリッド取り上げ等の出土位置情報を持つ土器に限定しているため、表採等の土器を含む第19表の型式別数量とは合致しない。

他方、出土点数の少ない石器については、前述の理由により分布図作成はなされていないが、その帰属時期についても石鏃・打製石斧・磨製石器・石棒等の特定器種を除いて、同定することは困難である。出土土器との関連で見れば、早期前半～後期後半までの広い時間幅が想定されよう。従って本項では、各調査区単位での器種別

の出土傾向を中心として記述すると共に、全体的な器種・石材組成については大工原豊氏による3つの「石器系列」区分(打製・使用痕・複合技術系列)に準拠して(註1)、総合的に記述する。また、各掲載石器の個別内容については、各調査区を一括して器種別に記述を行う。

以下、各調査区ごとの遺物出土状況や掲載遺物の内容について記載する。

A. 各調査区の土器出土状況

a. 1 区

土器の大別時期毎の内訳は、早期3点(0.3%)、前期401点(41.4%)、中期557点(57.7%)、後期6点(0.6%)の合計967点であり、中期を筆頭にして前期もそれに匹敵する数量を占める一方で、早・後期が皆無に近い状況となる。前期の主体を占めるのは関山Ⅱ式であり、縄文施文のみで型式の確定できないものを含めれば、約300点弱が存在する。中期では、加曾利E3式が487点で最多数を占める。

両型式期の遺構については、土坑のみであるが関山Ⅱ式期が3基(213～215号)、加曾利E3式期が7基(216・218・219・221・225・237・238号)検出されており、包含層の各土器片はそれら土坑の周辺部を中心に分布している。各式土器片の出土数量は、先の土坑数ともほぼ比例関係にある。

b. 2 区

早期94点(3.8%)、前期2,293点(92.6%)、中期82点(3.4%)、後期6点(0.2%)の合計2,475点が出土している。前期が他期を圧倒して大多数を占めることや、中期の僅少さと早期が少なからず存在する点が特徴的である。早期では、絡条体圧痕文や同条痕文を施す末葉段階の土器片が94点存在し、全調査区を通じて最多数を占める。前期の主体となるのは638点の関山Ⅱ式であり、次いで47点の有尾式となるが、下記のように土坑の数量比でみた場合には、型式判別の難しい縄文施文のみの土器片1,565点の中に、相当数の有尾式が含まれていると想定される。

当区での遺構は土坑のみであるが、早期末葉2基(48・117号)、関山Ⅱ式期10基(38・50・51・53・91・106・114・122・137・986号)の他に有尾式期13基(37・39・41・43～47B・49・76・110・116・136号)が存在し、そ

第3章 遺跡の調査内容

の周辺部を中心にしてに各式土器片が散在している。

c. 3 区

早期3点(4.3%)、前期65点(92.8%)、中期2点(2.9%)の合計70点であり、後期は皆無である。調査面積の狭小さや遺構が皆無であることに比例して、全体的な出土点数も少ないが、前期の関山Ⅱ式～有尾式が63点とその大半を占める状況は上述の2区と同様であり、位置的な隣接関係を含め両区は一体的な内容を有する。

d. 4 区

早期22点(0.3%)、前期5,779点(98.4%)、中期39点

(0.7%)、後期34点(0.6%)の合計5,874点が出土している。前期がそのほとんどを占めて他期はほぼ皆無に近い状況を呈するが、この前期のみの数量対比では全調査区を通じて最多となる。また、1頁第1章「2. 調査の方法と工程」で既述したように、当区の調査面積は保存対象区域を除いた約50㎡の狭小範囲であり、単位面積に対する土器の出土量の多さは特筆される。前期土器の主体は、関山Ⅱ式2,360点と有尾式2,200点であり、諸磯式1,157点がそれに次ぐ。遺構は伴わないものの34点の関山Ⅰ式が検出されていることについては、関山Ⅱ式期を

第19表 遺構外出土土器の型式別数量一覧(縄文時代)

調査区	早期			前期								
	夏島	田戸下層	早期末葉	花積下層	二ツ木	関山Ⅰ	関山Ⅱ	関山Ⅱ～黒浜	有尾	諸磯a～c	浮島	十三菩提
1			3			1	174	115	26	84		1
2			94		3	6	638	1,565	47	32		2
3			3				2	53	8	2		
4	1		21	9		34	2,360	16	2,200	1,157		3
5			1			2	12	64	2	16		
7	1	1					3,405		44	285	1	3
8							34	1	8	10		1
9			5				542			10		
10							11			20		
13												
合計	2	1	127	9	3	43	7,178	1,814	2,335	1,616	1	4

調査区	中期											中期後半
	五領ヶ台	阿玉台Ib～II	勝坂2～3	新巻	焼町	三原田	郷土	加曾利E1	加曾利E2	加曾利E3	加曾利E4	
1		4	11	6	5				25	487	14	5
2		2	3						8	20		49
3		1									1	
4					1		1		10	14		13
5		4	9		19	58	24	134	511	549	21	1,970
7	36	154	448	88	779	63	187	240	526	1,648	531	20,790
8	2	4	23	1	23	1	4	1	3	3,205	36	63
9	1			1						5		17
10										3	17	
13											5	
合計	39	169	494	96	827	122	216	375	1,083	5,931	625	22,907

調査区	後期										合計	
	加E5・称Ⅰ	称名寺Ⅱ	掘之内Ⅰ	三十稲場	称Ⅰ～堀Ⅰ	掘之内Ⅱ	加曾利B1	加曾利B2	加曾利B3	堀2～加B2		高井東～安行2
1			6									967
2		2	1			1	1	1				2,475
3												70
4		1	16			6		8		3		5,874
5	23	39	114	1	1	59	36	5		87	1	3,762
7	393	167	3,301	121	17,827	850	799	282	2	1,334	48	54,354
8	13	2	52		1	3		4	3	4	1	3,503
9	1		2		4		13	2				603
10								18				69
13						6	3					14
合計	430	211	3,492	122	17,833	925	852	320	5	1,428	50	71,691

端緒とする当遺跡の集落形成前段階に、何らかの先駆的活動が存在したことを示すものとして注目される。当区での遺構は、いずれも前期に帰属するもののみであり、竪穴住居が2軒(34・35号)と土坑が26基(時期不明の17基を除く)存在する。住居は関山Ⅱ式期を主体とするが、34号住居は6期にわたるほぼ連続的な拡張・建て替えが認められ、かなり長期間に及ぶ居住を窺うことができる。土坑では、関山Ⅱ式期10基(270・284・287・291・299・303・305・306・311・336号)、有尾式期7基(269・285・298・301・307・308・310号)、関山Ⅱ式～有尾式期5基(276・280・282・333・339号)、黒浜式期1基(271号)、諸磯a・b式期3基(272・274・277号)など多時期にわたるが、住居と同様に関山Ⅱ式・有尾式期を主体とする点で住居のあり方も共通している。こうした遺構の構築状況を加味すれば、多量の関山Ⅱ式～有尾式土器の集中的出土も当該期集落形成がその背景にあると考えられ、当区がその中心的地点を構成する可能性が高い。

e. 5 区

早期1点(0%)、前期96点(2.6%)、中期3,299点(87.7%)、後期366点(9.7%)の合計3,762点が出土している。中期が他期を凌駕して90%近くを占めることや、後期が10%と少なからず存在する一方で、前期の僅少さが際立っている。中期の中で主体的なのは、加曾利E1式～E3式の1,194点であり、確実な型式比定が困難な中期後半1,970点の大半が加曾利E式であると想定されることから、同E2・E3式の点数の多さが特筆される。また、後期は前半～中葉段階に集中しており、堀之内1式の114点を主体にして堀之内2式～加曾利B2式の187点が注目される。

当区での遺構は、竪穴住居が加曾利E1式～E2式期の7軒(16・17B・18・19・22～24号)と同E3式期の1軒(17A号)の合計8軒存在している。また、この他に土坑5基が存在するが、時期不明の2基を除いて加曾利E3式・同E4式・堀之内2式期ともに各1基を数えるにとどまる。このような、ほぼ加曾利E式期に限定される竪穴住居を中心とした集落形成が、遺構外出土の土器数量にも反映されていることが明瞭である。

f. 7 区

5mメッシュのグリッドを単位にして、主な土器型式別の数量分布図を第264～274図に作成したが、説明の煩

雑さを回避するために、第263図に各グリッドの仮番号(以下、G1・G2等と呼称)を設定しており、これに準拠してその分布状況を記述する。尚、北端部のG86～91では各土器型式の分布が見られない空白域となっているが、当域は農道として調査対象範囲から除外された部分である点に留意されたい。

大別時期単位での出土点数を見ると、早期2点(0%)、前期3,738点(6.9%)、中期25,490点(46.9%)、後期25,124点(46.2%)の合計54,354点が出土しており、全調査区の76%が7区に集中している。中期・後期がほぼ同数の25,000点で、両者を合わせれば全体の93%を占める。また、中・後期に比較すれば見劣りするものの、3,405点の関山Ⅱ式を中心にした前期についても、全調査区の中では4区に次ぐ出土量を有し、その数量の多さが注視される。

当区では、遺構の検出数も他区を凌駕しているが、竪穴住居では前期の関山Ⅱ式期7軒(57・59・60A・60B・61・71・80号)、不明1軒(67号)、中期の加曾利E1式～E2式期4軒(49・55・56・63号)、同E3式期2軒(54・64号)、後期の称名寺Ⅱ式～堀之内1式期3軒(58・62・82号)などの合計17軒が存在する。

また土坑では、時期不明の78基を除いて、前期の関山Ⅱ式期36基、有尾式期2基、諸磯b式期1基、中期の五領ヶ台式期1基、勝坂1式期1基、同2式期6基、新巻類型期3基、焼町土器期5基、三原田式期1基、加曾利E1式～E2式期7基、同E3式期9基、同E4式期1基、中期後半8基、後期の称名寺Ⅰ式期2基、同Ⅱ式期1基、堀之内1式期9基、同2式期5基、加曾利B1式期6基、同B2式期3基、中期後半～後期前半37基などの合計144基が存在する。

さらに、後期前半～中葉段階に比定される配石遺構10基の全てが、当区内に存在することも見逃すことのできない要点である。

以下、大別時期・土器型式別にその分布状況を概観し、併せて上記遺構との関連性を見てみよう。

前期(第260・261図) 先ず前期関山Ⅱ式土器の中心的分布域は、G63・67・70・73～75・78・79・84等の北部域と、G44・48・49・51・53・54・56・59・60の中部域、G12・13・20・21・27～29・33・34・40等の南部域の3つに大別される。これらの分布域と遺構の分布状況とを

対照すると、北部域には57・59・60A・60B・61・80号住居が、中部域には71号住居が各々存在しており、それらの周辺部に土器の集中分布する状況が明瞭である。こうした状態は、竪穴住居を中心とした居住過程での生活廃棄物を、その周辺部や廃絶住居の窪地等に投棄したことを示唆するものだろう。一方南部域については、近縁に竪穴住居や土坑が存在せず、集中分布の背景が不明瞭だが、恐らく隣接する東側の調査区外に竪穴住居などの遺構が存在すると想定される。

第261図の諸磯式の場合は、僅少な285点がほぼ全域にわたり散漫に分布しており、目立った集中地点が認められない。明確な遺構は669号土坑1基が存在するのみであり、集落形成の希薄さが窺える。

中期(第261～266図) 阿玉台Ib・II式154点や勝坂2・3式448点は、南部域のG34を中心に分布する点で共通性が認められる。こうした傾向は、出土点数に差異はあるものの新巻類型や焼町土器、加曾利E1・E2式にも認められ、同地点がかなり長期間にわたって利用されていることが理解される。これらの各期に該当する周辺部での遺構は、G39に位置する加曾利E2式期の596号土坑のみであるが、時期の確定できない767～769・771・772・782・784・882号土坑との関連性も考慮される。また、加曾利E2式ではG3・17にもやや集中した分布が認められるが、同地点には49・55・56号住居が存在しており、状況的にはその周辺部に分布している。

中期の中で最多数を占める1,648点の加曾利E3式は、G53・54・64・65・68～70・73～76・78・79・84等の北半部に集中する傾向にある。当域には54・62・64号住居が存在しており、前述と同様に住居の周辺部に密集する状況にある。一方、明確な型式比定が困難な中期後半20,790点の中で、加曾利E1～E4式に分類される18,707点については、第266図にその分布状況をまとめてあるが、当該期の竪穴住居が集中する北半部だけでなく、土坑を含めた各遺構が希薄な南半部にも相当数の分布が認められる。これを第19表の同式の数量比に応じて按分すれば、加曾利E3式が56%の10,500点弱を占めることになり、当然のことながら南半部の住居空白部分にも相当数の土器が集中分布することになるだろう。こうした分布現象については、第一義的には当該地点が集落内の「廃棄物集積場所」として選定されていたことを示唆するものだろう。

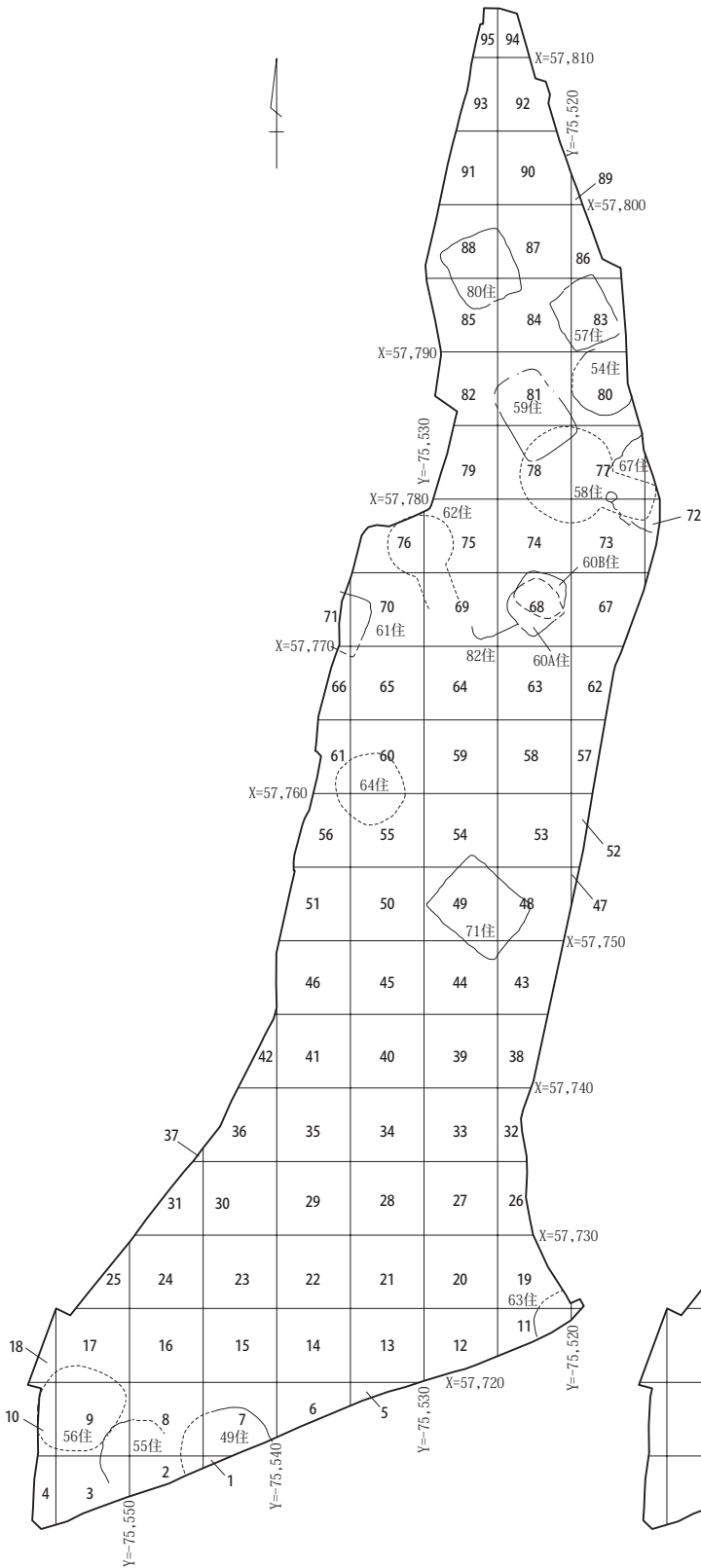
ただし、東側に隣接する8区での住居配置をも考慮すると、南端部のG1～18と北部のG69～88の範囲が、各々環状集落の「住居帯」の一部を構成する可能性もある。この場合には、この「廃棄物集積場所」は環状集落の中央広場的な空間部に相当し、祭儀礼を伴う「モノ送り場」的な要素も考慮する必要があるだろう。

531点の加曾利E4式は、G84を中心として北半部に分布主体があり、部分的には同E3式とも近似した状況を呈するが、同E3式に比べてその数量や分布域は著しい減少・縮小状態に陥っている。この背景には、当期の竪穴住居が皆無で土坑も南端部の383号1基のみという、急激な遺構減少が存在しており、言わば「集落解体」状況が想定される。

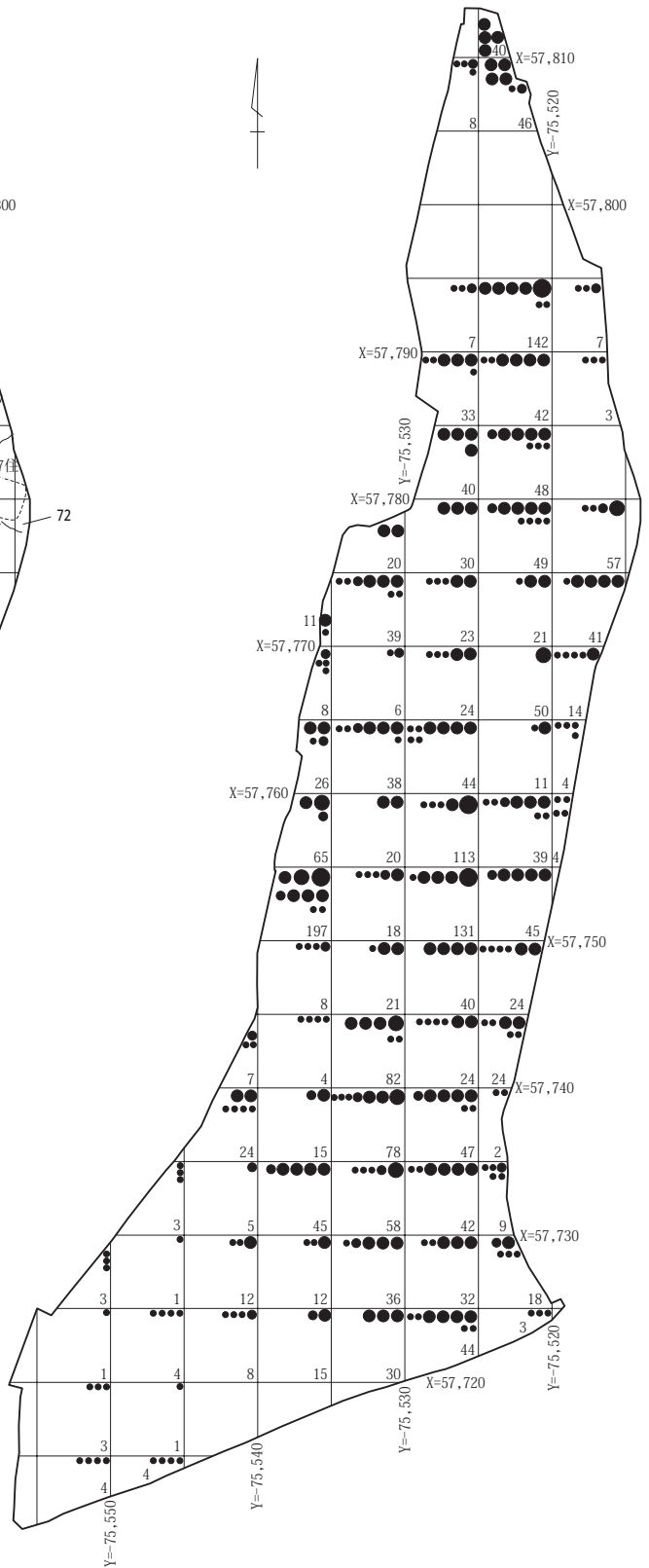
後期(第267～270図) 称名寺I式393点や同II式167点は、前段階の加曾利E4式よりも漸減しつつ、ほぼ同様に北半部を主体に分布する。当該域では、確定的ではないが称名寺II式期の62・82号住居が存在し、小規模集落の継続的な形成が土器分布とも関連性を有すると考えられる。

次の堀之内1式では、加曾利E3式の2倍以上の3,301点が存在し、急激な増加に転じている。また、型式分類の困難な称名寺I式～堀之内1式17,827点を先の加曾利E3式と同様に按分すれば、その85%の15,200点余が堀之内1式となり、各型式を通じて最多数を占める。分布的には、第268図右のように北半部を主体にしつつも南半部にも相当数が存在するという、加曾利E3式とも類似した状況を呈する。当該期の遺構は、不確実ながら58号の柄鏡形敷石住居1軒と土坑9基が存在するにすぎない。このような土器の分布数量に相応した規模の集落形成が認められない状況については、他の背景を考慮する必要があるだろう。その筆頭に挙げられるのは、10基の配石遺構の存在である。位置的には、G57～76の範囲に集中しており、堀之内1式の中心的な分布域とも合致している。配石遺構の性格については、立石や多孔石・石皿などをその用材に組み込んでいることから見て、豊穰や祖霊崇拜などの祭儀礼に関わる遺構と考えられる。こうした配石遺構の周辺部に、上記のような多量の土器片が出土する状況は、当該遺構の周縁部にて催された儀式の中でこれらの土器が使用・廃棄されたか、あるいは当区域が「モノ送り場」的な性格を有していたために、破損した

前期(関山II)



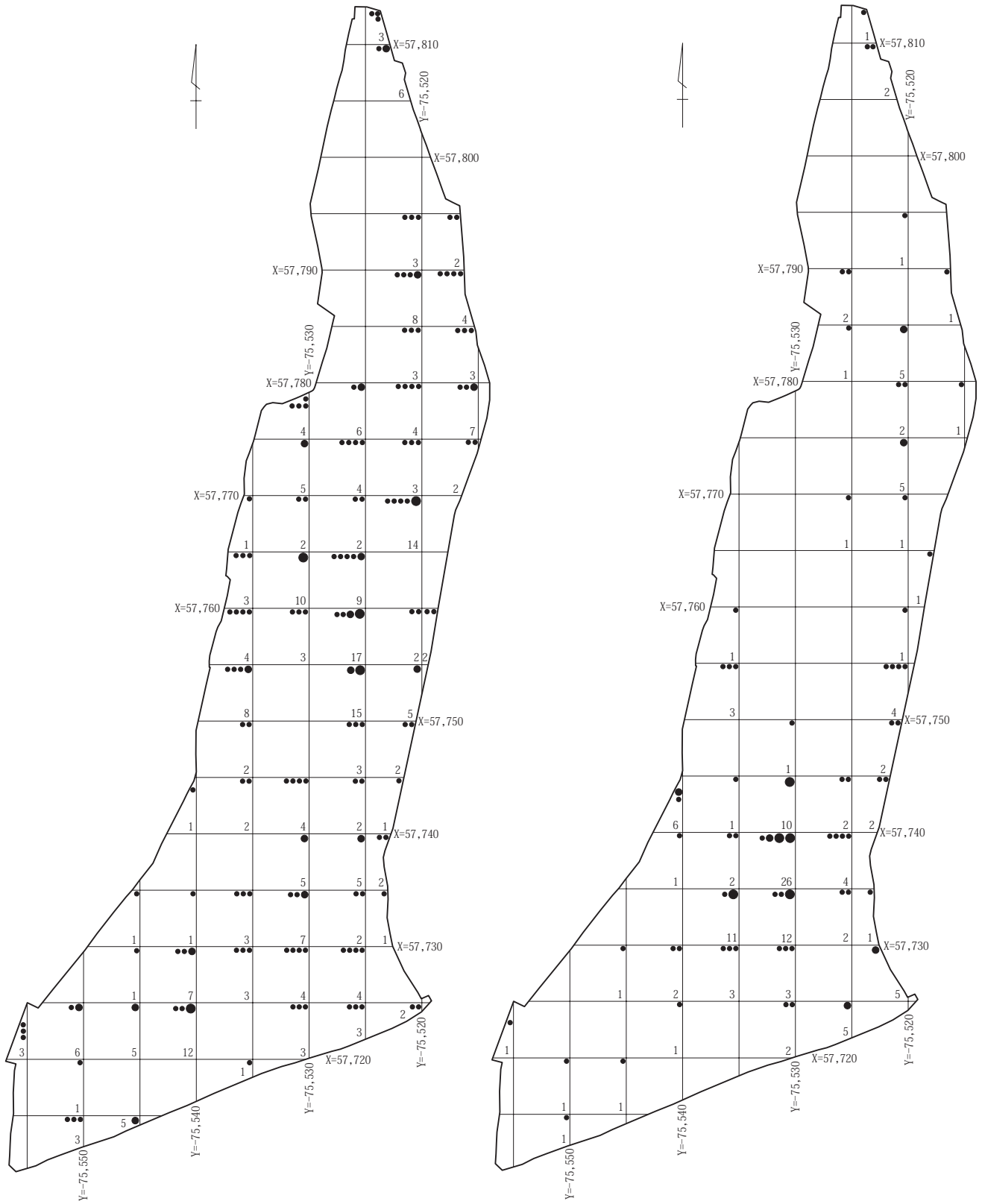
第259図 7区のグリッド番号と竪穴住居分布



第260図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(1)

前期(諸磯a~c)

中期(阿玉台I b・II)



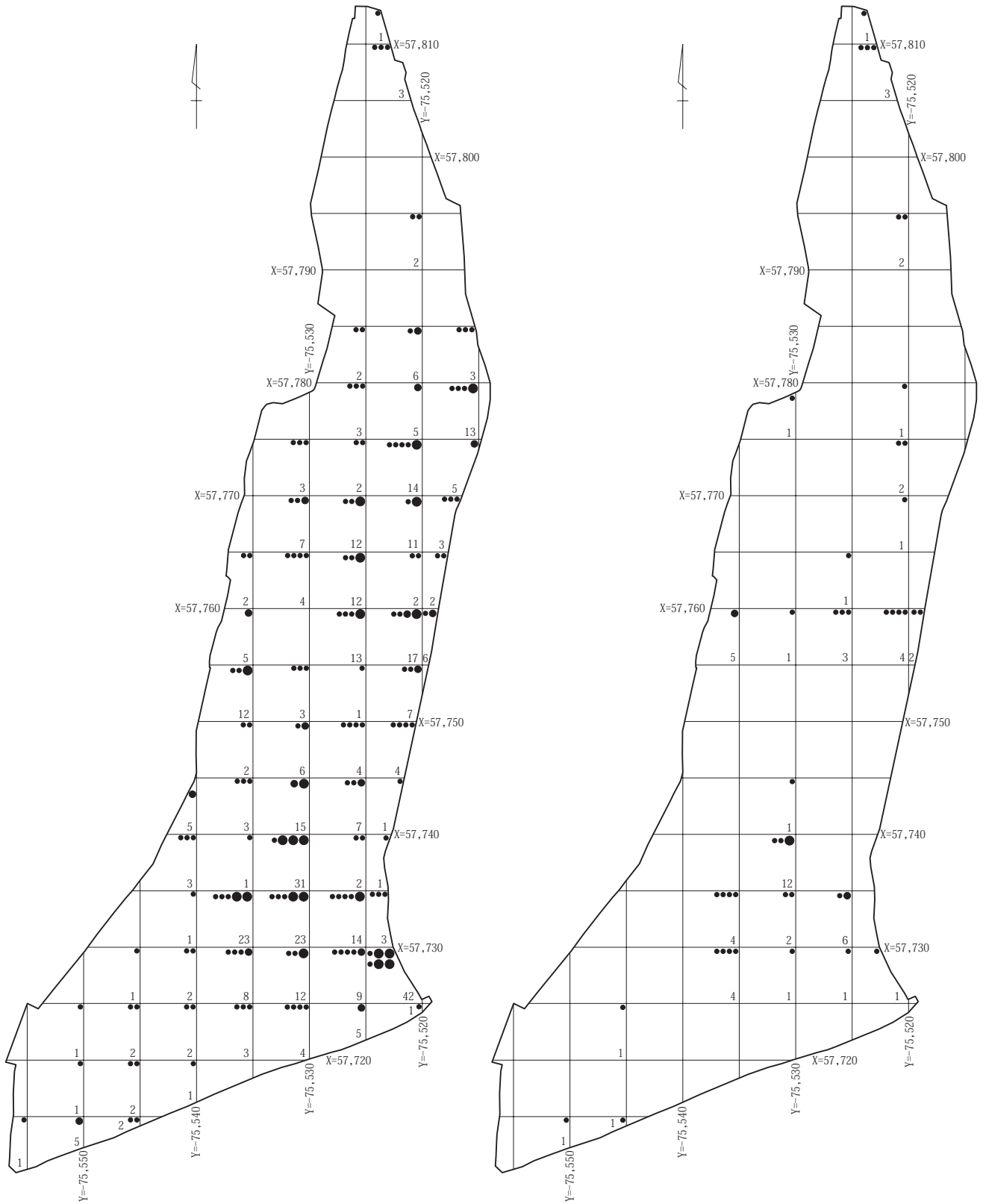
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第261図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(2)

中期(勝坂2・3)

中期(新巻)



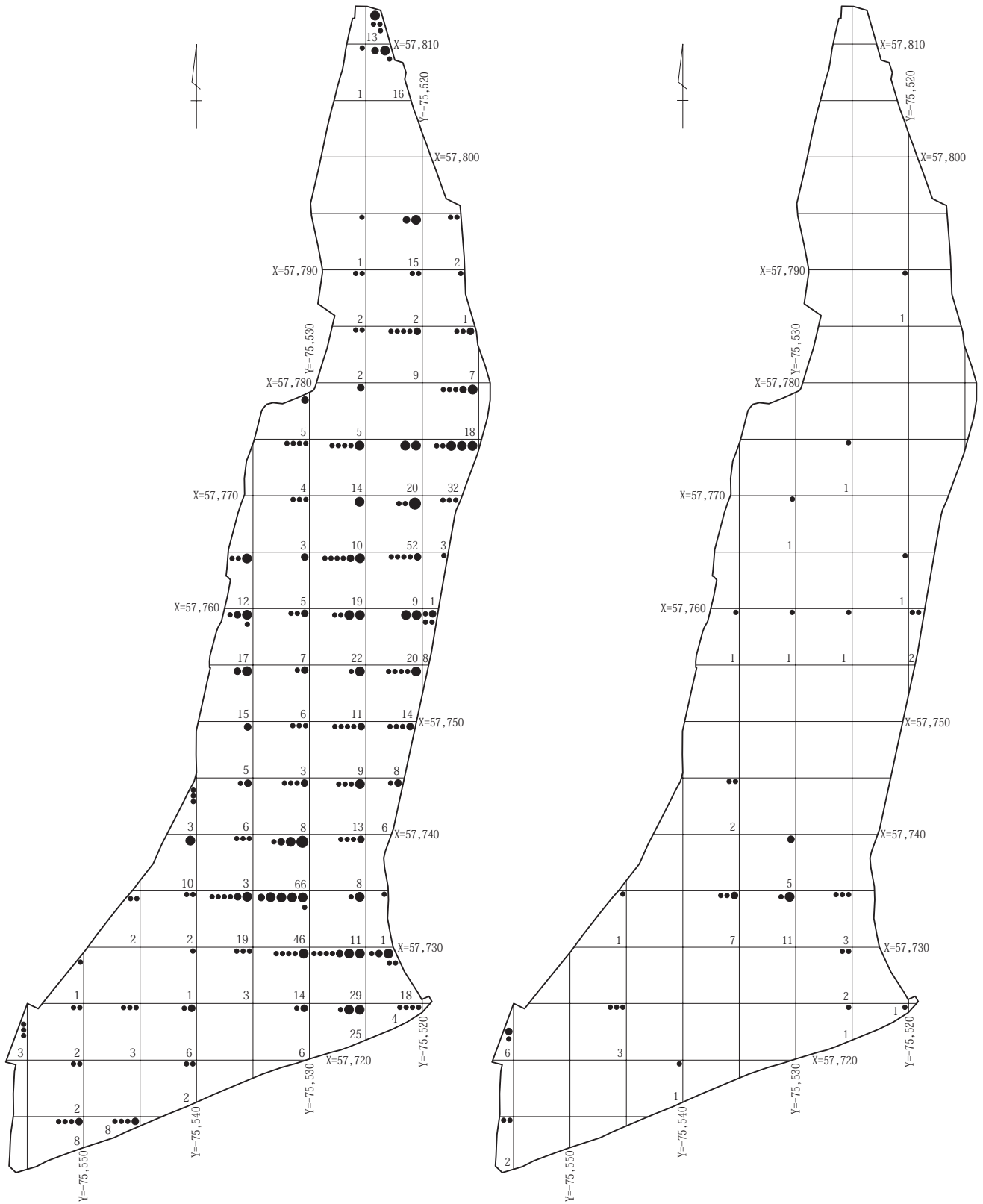
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第262図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(3)

中期(焼町)

中期(三原田)



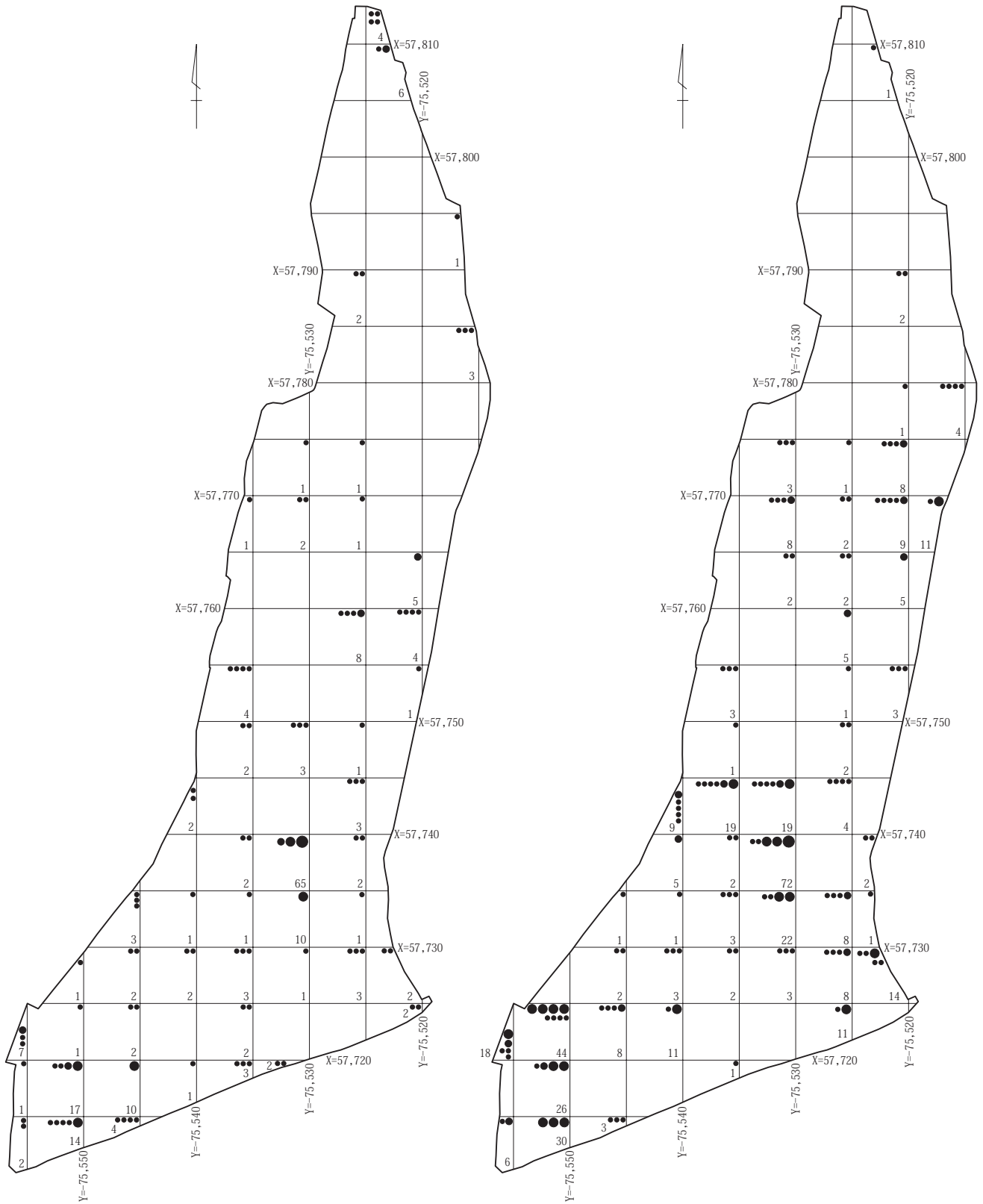
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第263図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(4)

中期(加普利E1)

中期(加普利E2)



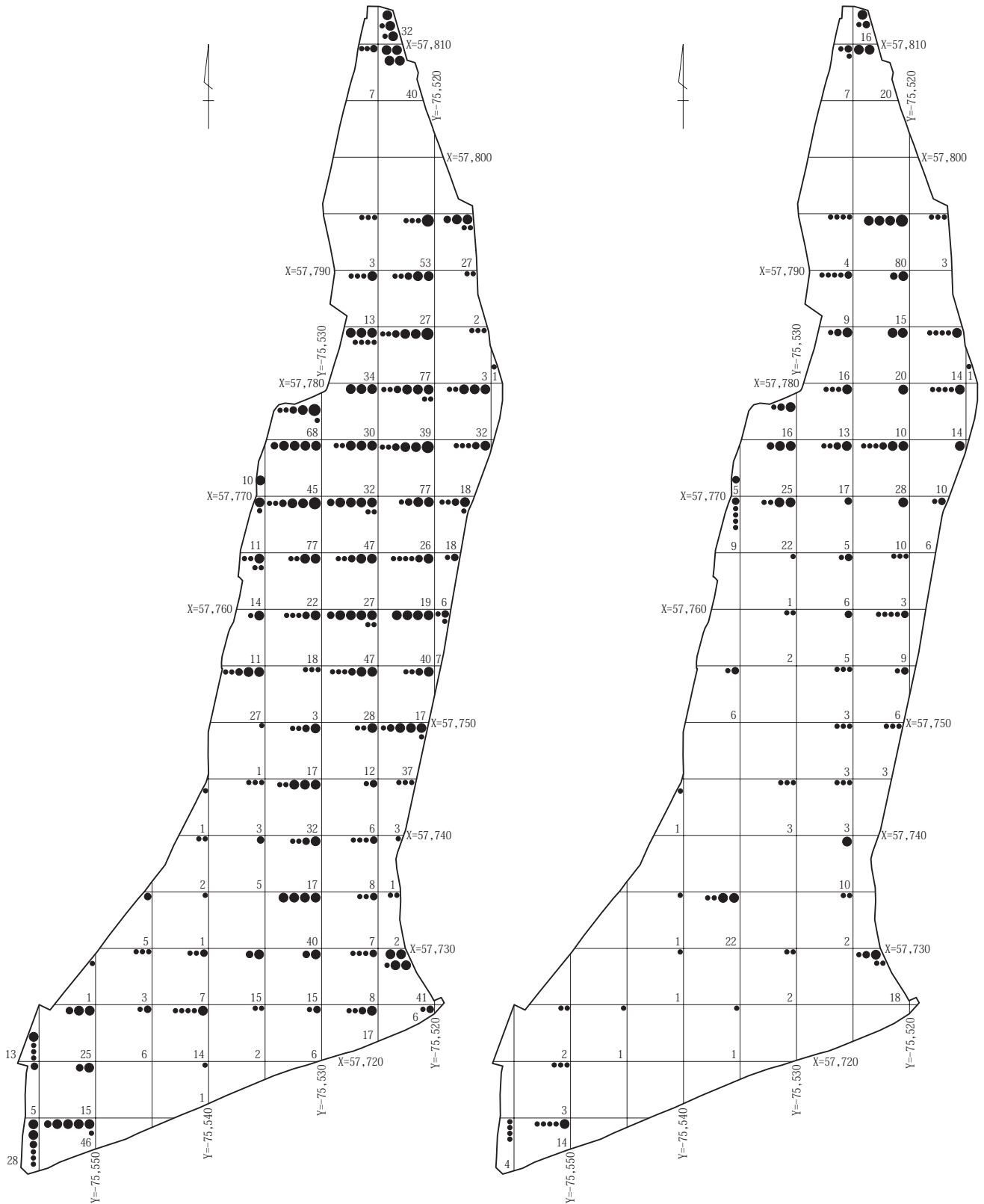
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第264図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(5)

中期(加普利E3)

中期(加普利E4)



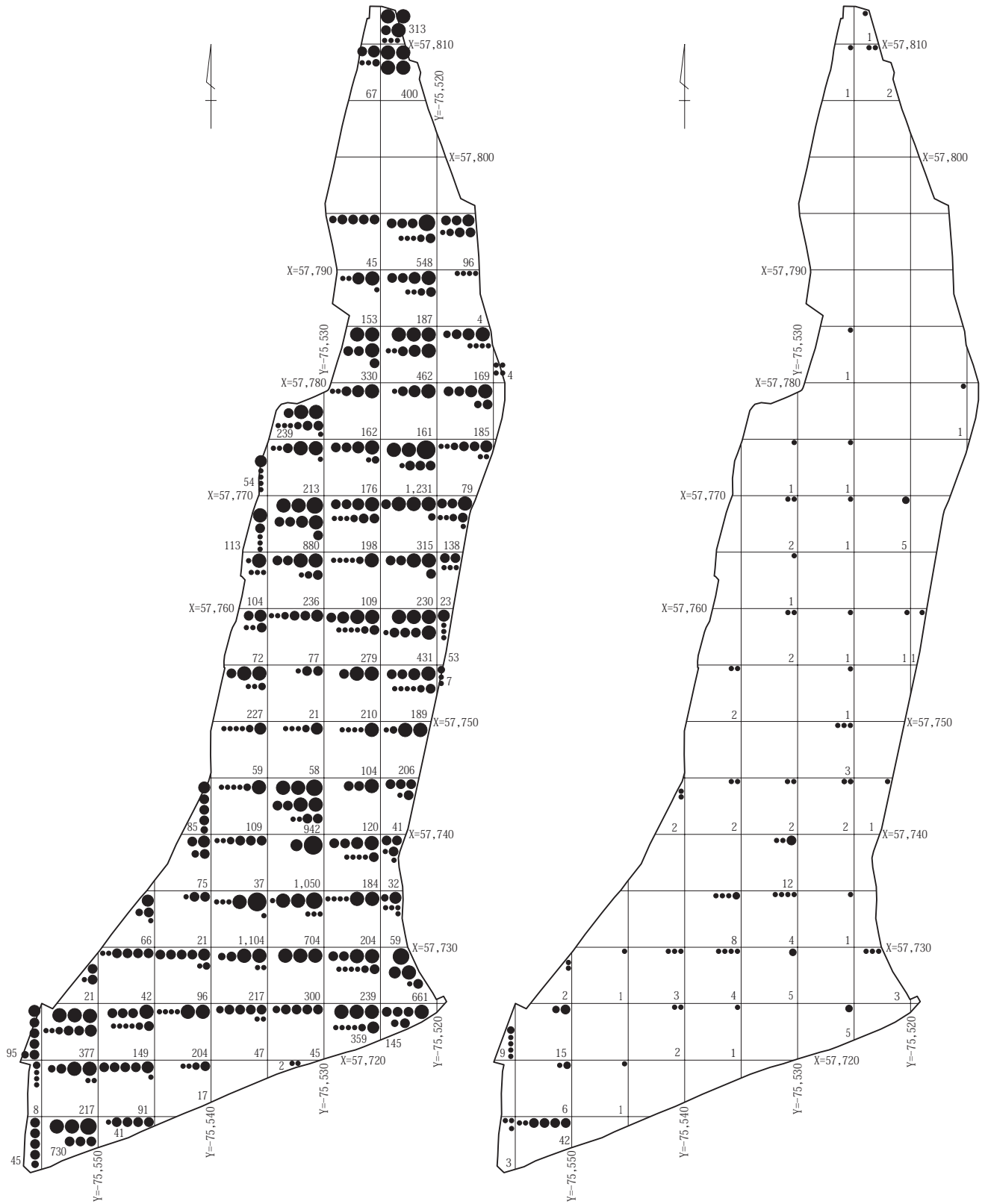
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第265図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(6)

中期(加普利E1 ~ E4)

中期(郷土)



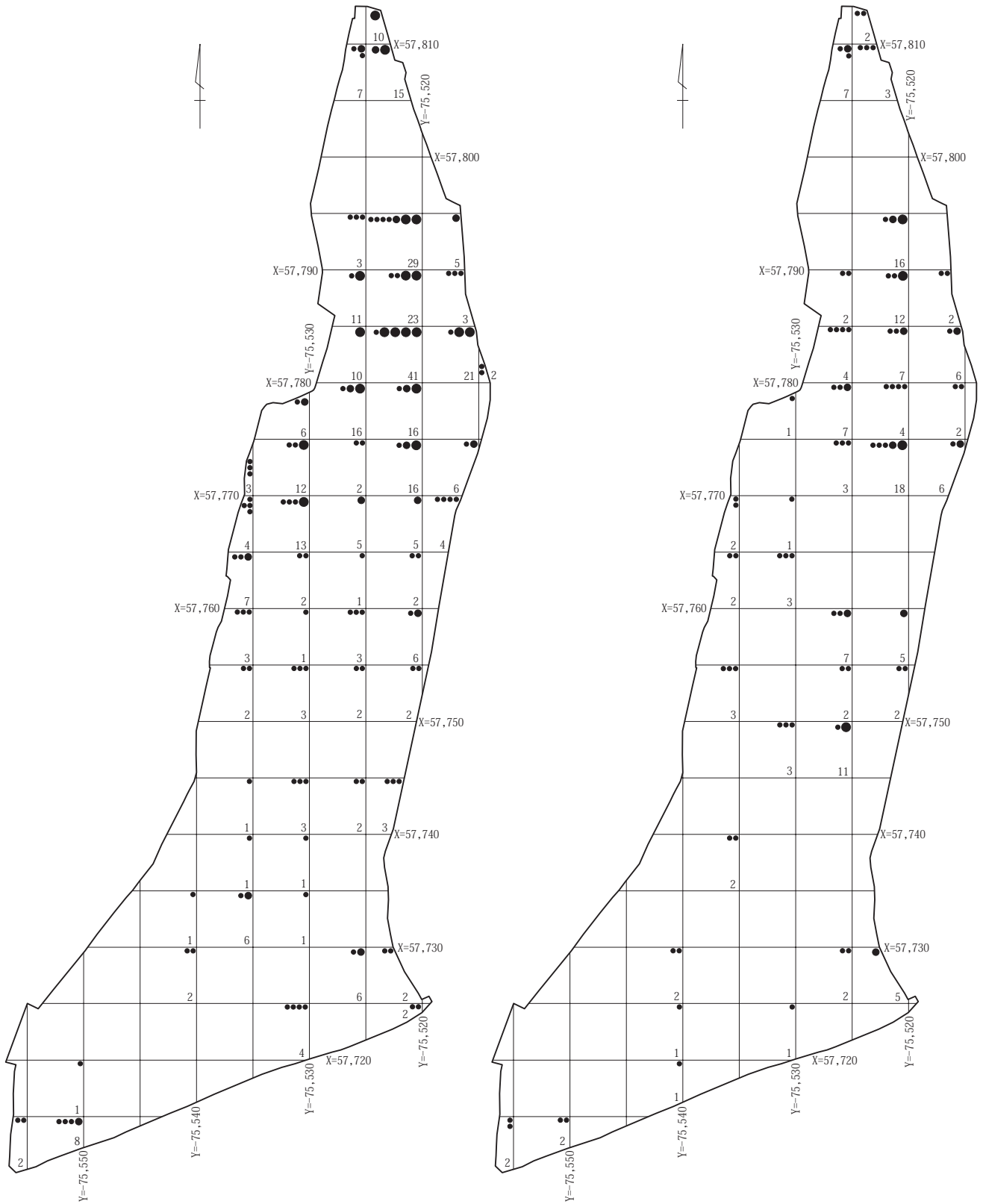
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第266図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(7)

後期(称名寺Ⅰ)

後期(称名寺Ⅱ)



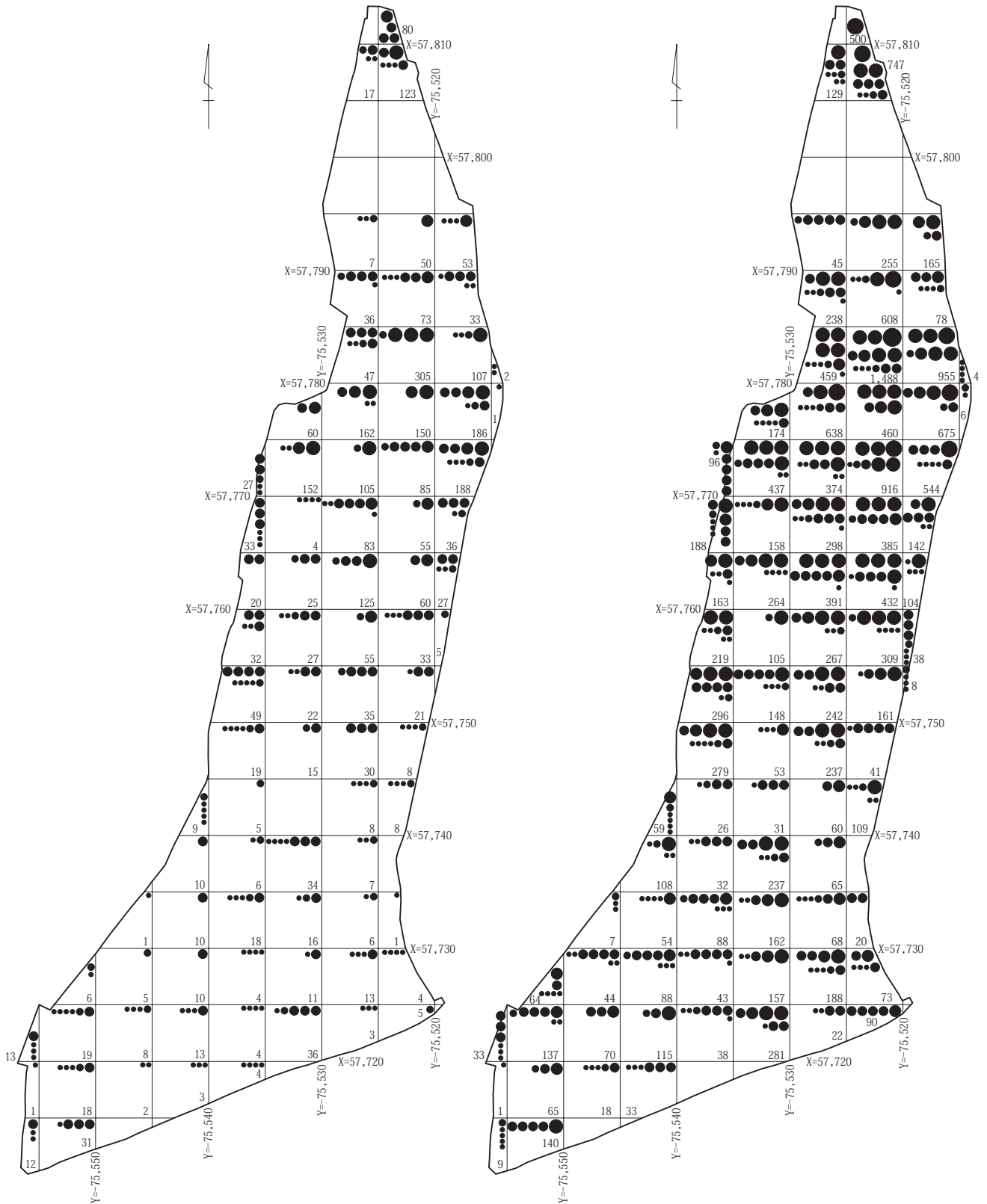
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第267図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(8)

後期(堀之内1)

後期(称I~堀1)



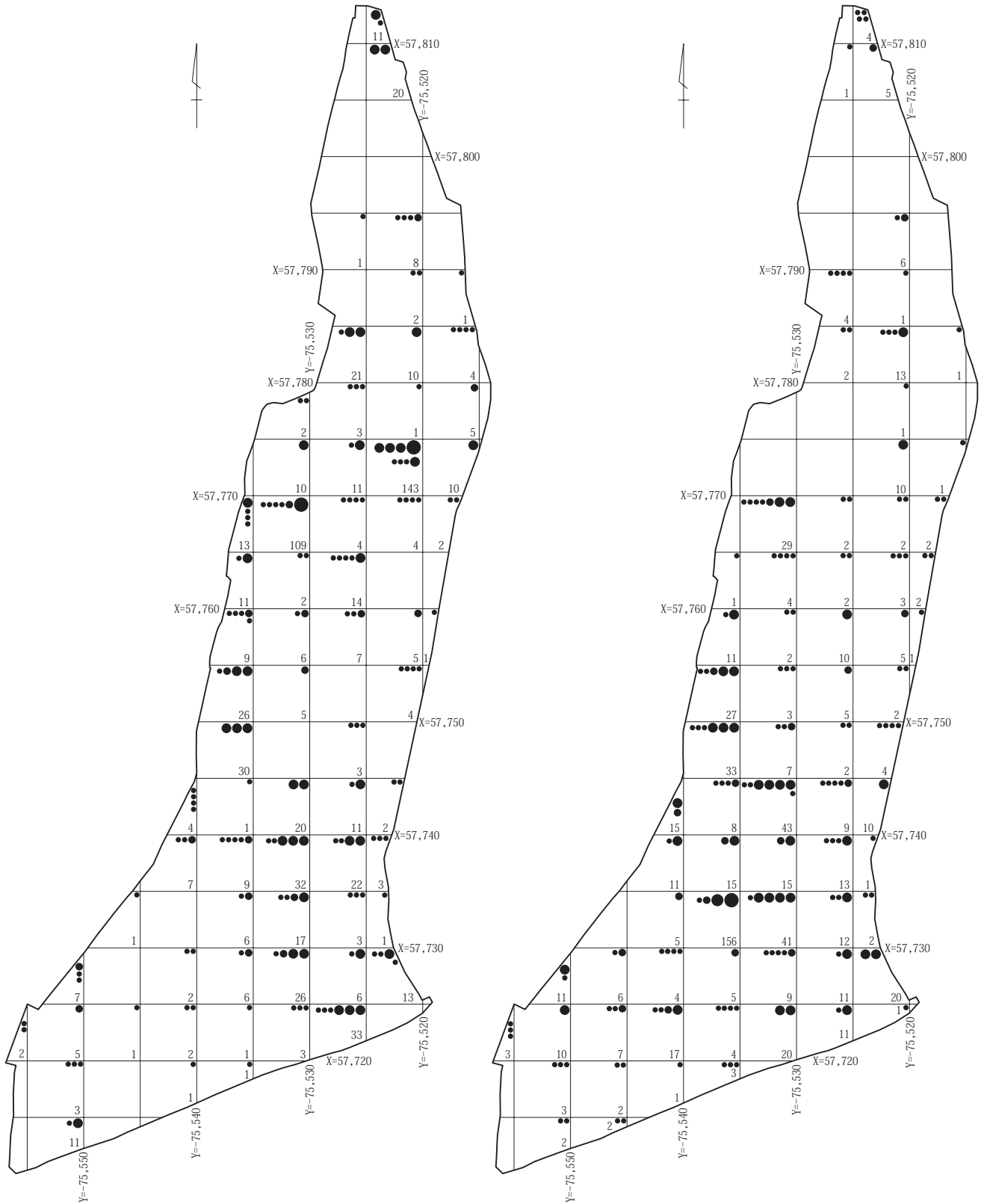
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第268図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(9)

後期(堀之内2)

後期(加普利B1)



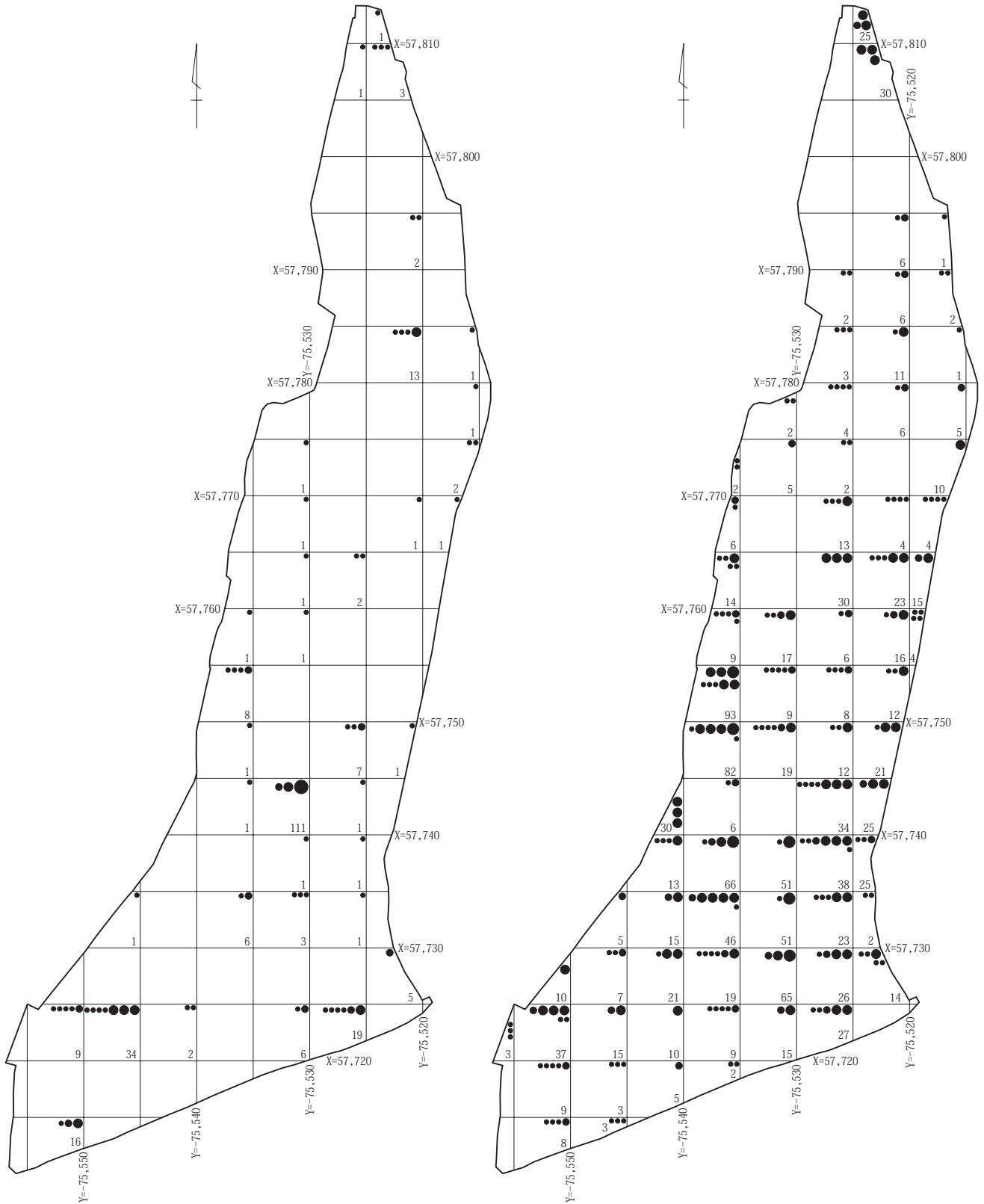
● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第269図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(10)

後期(加普利B2)

後期(堀2～加B2)



● 1点 ● 5点 ● 10点 ● 50点 ● 100点 ● 500点 ● 1000点

0 1 : 500 20m

第270図 7区遺構外出土縄文土器のグリッド別分布(11)

土器類が集積されたことも想定し得る。時期的には堀之内1式だけでなく、やや散在的分布ではあるが、3,300点弱の堀之内2式～加曾利B2式も含めた段階についても、そうした場の機能・性格が継続した可能性を視野に入れる必要がある。

g. 8 区

前期54点(1.6%)、中期3,366点(96.1%)、後期83点(2.3%)の合計3,503点が出土している。前・後期を合わせても5%に届かず、中期が他期を圧倒して100%近くを占めることが特徴的である。中期の中で主体的なのは95%を占める加曾利E3式の3,205点であり、その前後型式の数量が極めて希薄であることから、当段階において急激な増加に転じていることが明瞭である。

当区での遺構は、竪穴住居が前期の関山Ⅱ式期2軒(76・78号)、有尾式期1軒(75号)、中期の焼町土器期1軒(79号)、加曾利E3式期3軒(69・73・74号)の合計7軒存在している。また、土坑は時期不明の36基を除いて53基が存在し、その内訳は前期の関山Ⅱ式期5基、有尾式期3基、中期の阿玉台Ⅰa・Ⅱ式期3基、新巻類型・焼町土器期各1基、勝坂3式・三原田式・加曾利E2式期各2基、加曾利E3式期21基、同E4式期1基、中期後半11基、後期の堀之内1式期1基となる。中期の加曾利E3式期は竪穴住居や土坑等の遺構数量が多く、上記の土器数量の多さとも合致しているが、前期の関山Ⅱ式・有尾式期や中期の焼町土器期は竪穴住居が存在するにも関わらず、土器の出土量は乏しい。こうした点は、居住期間の長短や地点利用頻度の多寡などの差異を反映していると考えられるが、当該区が7区の東側に近接していることを重視すれば、基本的には7区の時期的動向と軌を一にしていると考えられる。

h. 9 区

前期5点(0%)、前期552点(91.5%)、中期24点(3.9%)、後期22点(3.6%)の合計603点が出土している。当区は4区と同様に、古墳時代遺構や同文化面の保存措置により、調査対象面積は橋脚部分のみの221.21㎡と狭小である。それに相応して総体的な出土土器の数量も少ないが、前期の関山Ⅱ式が他型式を凌駕する状況は、南側に近接する4・2区とも共通している。

当区での遺構は、時期不明の土坑1基とピット5基が存在するにすぎず、調査面積の狭小さに起因する可能性

もあるが、遺構構築のかなり希薄な状況が看取される。前述したように、関山Ⅱ式期の遺構分布は7・8区に集中する傾向にあるが、同区から北方に約150m離れている4区にもかなり集中する状況が看取され、当該期の集落は少なくとも2地点に分散立地すると想定される。散漫な遺構・遺物分布状況から9区や2区を俯瞰すれば、4区を中心とした集落の外縁部を構成する可能性が高いと言えよう。

i. 10 区

10区北を含めて、前期31点(44.9%)、中期20点(29.0%)、後期18点(26.1%)の合計69点が出土している。約2,843㎡の調査面積を考えれば、総体的に極めて僅少量と言える。こうした状況下でも特徴的なのは、後期の加曾利B2式18点が7区に次いで多出している点である。

当区での遺構は、時期不明の土坑10基のみであり、上記の加曾利B2式土器との関連性は不明だが、前期や中期の各型式とはやや異なった動向を持つ可能性がある。

j. 13 区

中期5点、後期9点の合計14点が出土したのみであり、全区中で最も僅少である。前記10区での様態を含めれば、各期集落形成地点から北方へ遠ざかるに連れて、徐々に希薄となる土器分布状況を示している。

当区での遺構は、時期不明の土坑4基のみであり、10区での状況と近似している。両区の僅少な土器分布を考慮すれば、竪穴住居の存在しない集落外縁部の様相を示していると想定されるが、中期の加曾利E3・E4式と後期の加曾利B1・B2式の存在は、当該期における集落中心部から離れた活動域の広さを物語るものだろう。

B. 各調査区の掲載土器の内容

a. 1 区

①前期の土器

関山Ⅱ式(第271図9、PL165) 総数174点が発見されている。9は0段多条のRL環付縄文を横位・多段に施文し、半截竹管状具の平行沈線文でV字状の意匠を構成している。

有尾式(第271・272図20・22・26、PL165) 総数26点が発見されている。他に、口縁部から底部にかけて単節縄文を横位・多段施文する、関山Ⅱ式や有尾・黒浜式との識別が困難な土器115点が存在する。20・22・26はい



第271図 1～3区遺構外出土土器(1)

ずれも波状口縁を持ち、20・22は口縁部に連点状刺突沈線文や同刺突文により菱形意匠を構成するが、26はLR縄文を横位・多段に全面施文すると想定される。

諸磯b式(第272図28～30、PL165) 総数69点が検出されている。各土器ともにRL縄文を横位・多段に施文し、22は浮線文により、29・30は半截竹管状具の平行沈線文により各々文様構成している。胎土はHタイプが主体を占めている。

下島式(第272図31、PL165) 十三菩提式併行として集計したが、総数1点が検出されている。全体的な文様構成は不明だが、波状口縁下に結節浮線文を縦・斜位に施している。

②中期の土器

勝坂2式(第272図36、PL166) 勝坂2・3式が総数11点検出されている。36は眼鏡状の小把手を付し、篋状具の連続爪形文や半截竹管状具の平行沈線文を施す。

新巻類型(第272図35、PL166) 総数6点が検出されている。35は隆線文に沿って沈線文を施し、区画内に三角陰刻文や円文を施す。胎土は雲母の粗・細砂を含むBタイプ。

焼町土器(第272図37、PL166) 総数5点が検出されている。37は曲隆線文に沿って単沈線文を重層的に施文し、区画中央に刺突文を充填する。胎土は、新巻類型と同様の雲母の粗・細砂を含むBタイプである。

加曾利E3式(第272図38～40、PL166) 総数487点が検出されている。いずれもキャリパー形の深鉢だが、38は口縁部に幅広沈線の区画文を、39は逆U字状の懸垂文を施す。胎土は、38・40の珪質乳白色岩片や灰白色岩片を含むD・Eタイプと、39の珪質乳白色岩片が欠落するHタイプなど多様である。

b. 2 区

①早期の土器

条痕文土器(第271図1～6・8、PL165) 総数94点が検出されている。口唇部外端から上面にかけて相互に接続した小波状隆帯や小突起を付し、下位の横位隆帯文上面に巻紐と想定される絡条体圧痕文や貝殻状具の条痕文を施す、早期末葉の一群である。施文具の絡条体は、0段縄I(エル)を主体とするが、5のように1段縄Lを使用するものもある。胎土は、中量の珪質乳白色岩片・輝石・石英や少量の円磨度の進んだ灰白色岩片の粗・細砂

と繊維を含むA3タイプが中心的である。

②前期の土器

関山II式(第271図10～12・17～19、PL165) 総数638点が検出されている。地文に1段丸組紐を施す10・11と、直前段合撚縄文を施す12・18・19などがある。文様は、17が円形竹管状具の刺突文や半截竹管状具の横線文を施す他は、半截竹管状具の重ね引き集合沈線による横線文・渦巻文・鋸歯文などを施す。胎土は先述の早期条痕文土器と同様に、中量の珪質乳白色岩片・輝石・石英や少量の円磨度の進んだ灰白色岩片の粗・細砂と繊維を含むA3タイプが中心的であるが、19のように結晶片岩の礫・粗砂を含むA10タイプもある。

有尾式(第271・272図13・16・21・23～25、PL165)

総数47点が検出されている。21・23は連点状刺突文により、24・25は半截竹管状具の平行沈線文により各々菱形意匠を構成する。13・16は半截竹管状具の爪形文や刺突文を横位に施す。胎土は、関山II式と同様にA3タイプやそれに近似したA4タイプが主体を占める。

有尾式～黒浜式(第272図27・32、PL165) 口縁部から底部にかけて単節縄文を横位・多段施文する、関山II式や有尾・黒浜式との識別が困難な土器1,565点が存在する。27・32は、LR縄文を横位・多段に施文する。

諸磯a式(第271図15、PL165) 総数1点が検出されている。口縁波頂部下に円形竹管文や半截竹管状具の爪形文を施す。

前期末葉(第272図33・34、PL166) 十三菩提式併行として集計したが、総数2点が検出されている。晴ヶ峰式併行の土器であり、上下両側を三角陰刻状に削ぎ取った横位の鋸歯状隆帯文や結節沈線文と、集合沈線文による三角形の意匠内に三角陰刻文が特徴的である。

c. 3 区

①早期の土器

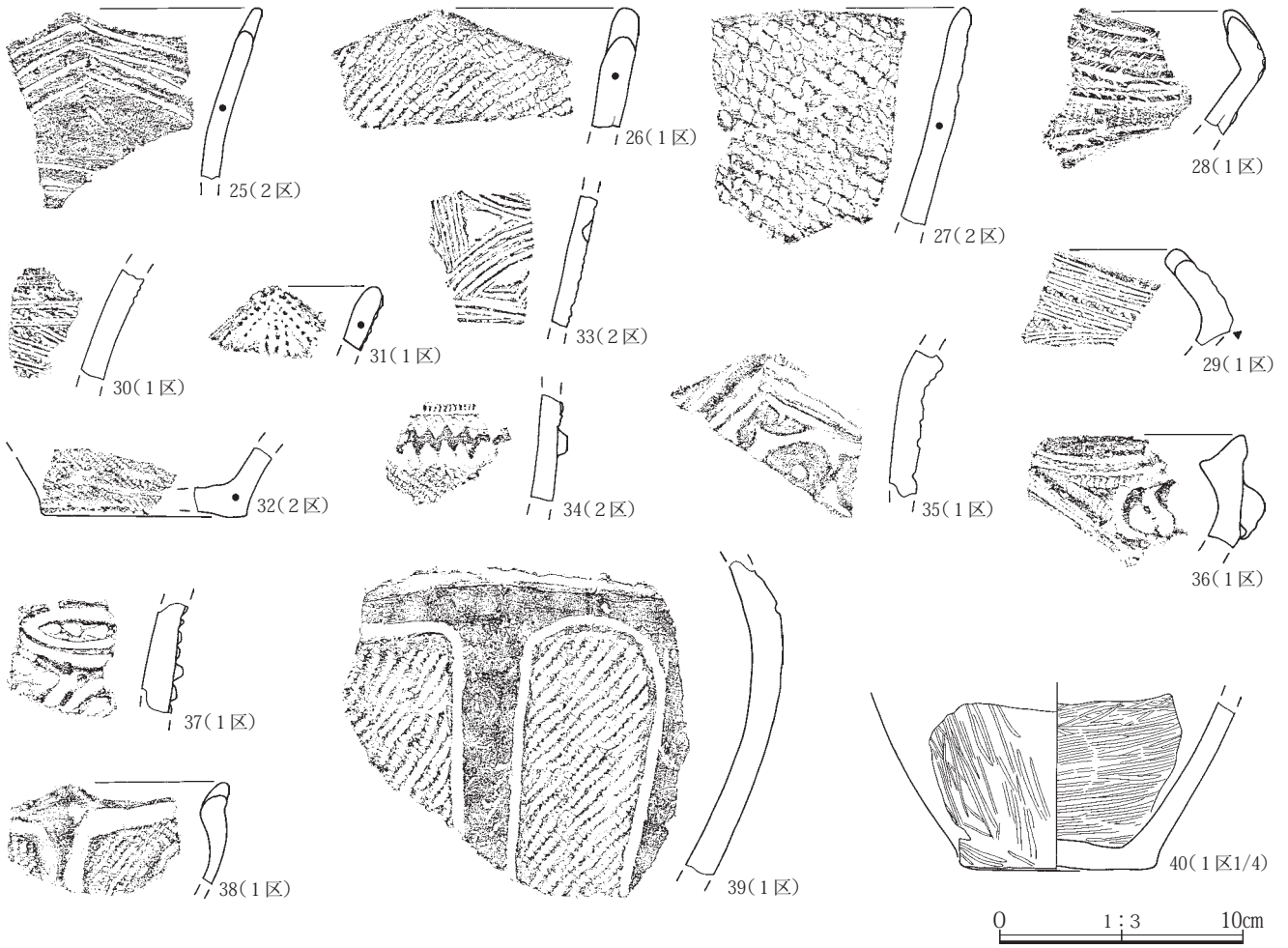
条痕文土器(第271図7、PL165) 総数3点が検出されている。条痕文を外縦位・内面横位に施文するが、口縁部の文様は不明。

②前期の土器

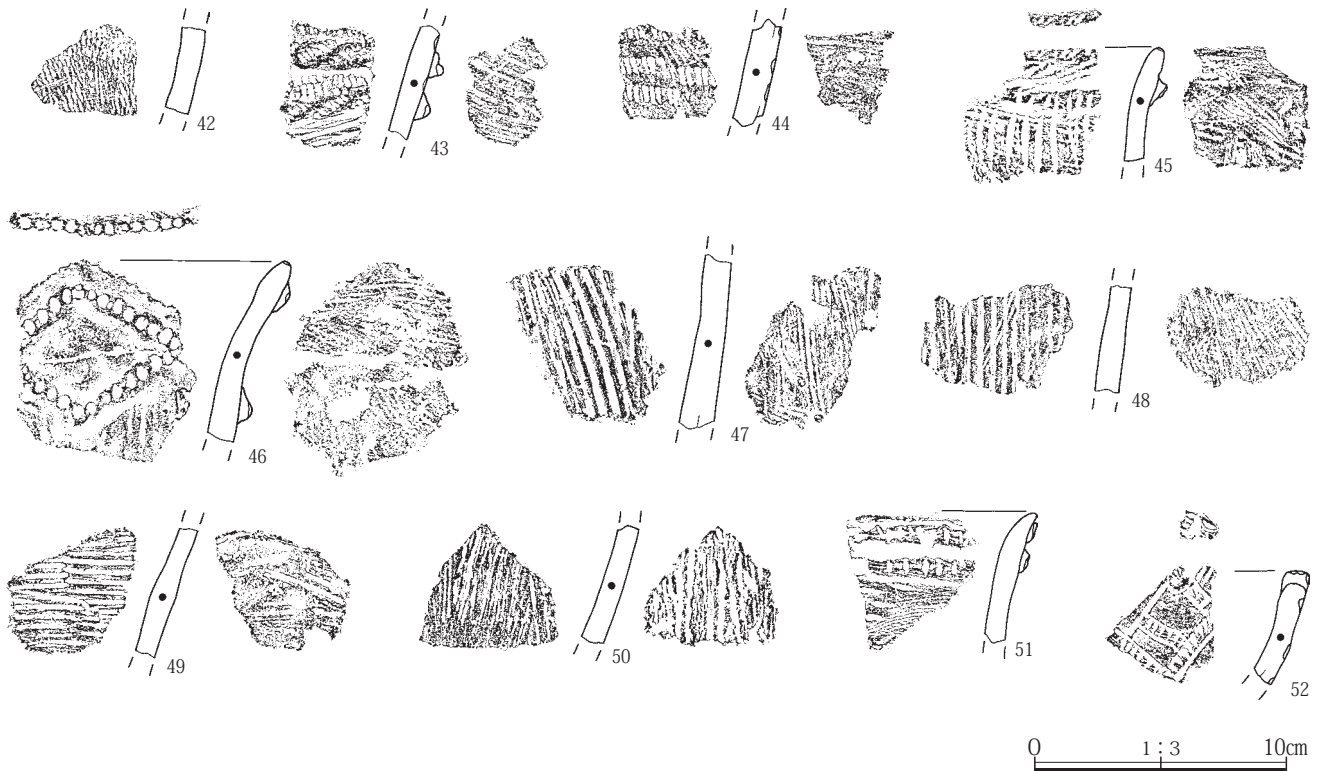
関山II式(第271図14、PL165) 総数2点のみが検出されている。半截竹管の重ね引き横位集合沈線文を施す。

d. 4 区

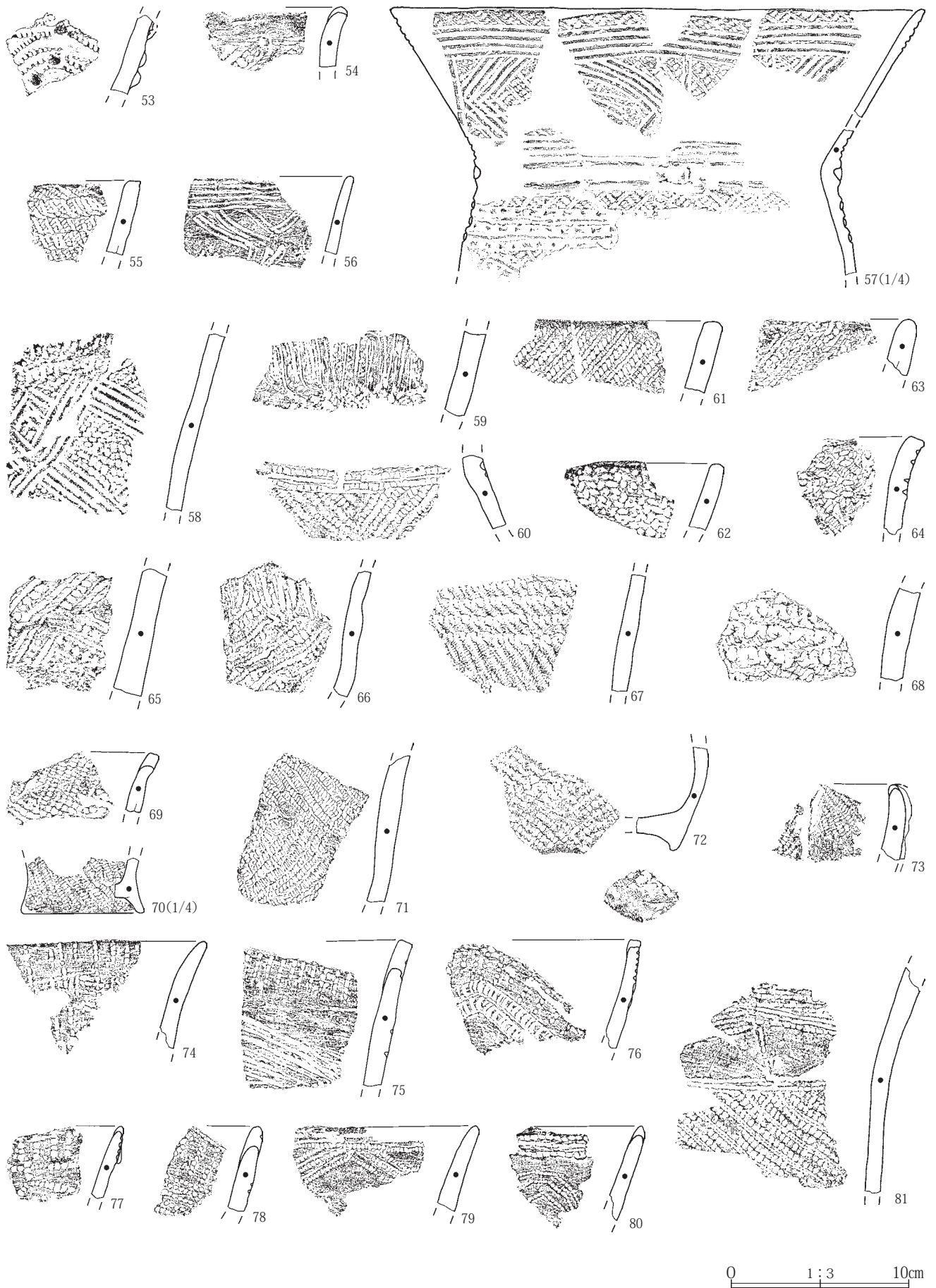
①早期の土器



第272図 1～3区遺構外出土土器(2)



第273図 4区遺構外出土土器(1)



第274図 4区遺構外出土土器(2)

夏島式(第273図42、PL166) 総数1点が検出されているのみである。撚糸文Rを縦位に密接施文している。

条痕文土器(第273図43～50、PL166) 表裏面に条痕文を施す早期末葉の一群であり、総数21点が検出されている。横位の隆帯文上面に巻紐と想定される絡条体圧痕文を施す43やそれに近似した44と、口縁部の隆帯文上面に棒状具の刻み目を施す46、および口縁部の横位隆帯文上面や口唇部にハマグリ等の貝殻腹縁文を施す45などが主なものである。また、45の内外面にはアナダラ属の貝殻条痕文を施文している。胎土は、珪質乳白色岩片・輝石・石英や円磨度の進んだ灰白色岩片の粗・細砂と繊維を含むA2・A3タイプや、それらにチャートの粗・細砂を含むA6タイプが多い。

②前期の土器

花積下層式(第273・274図51・73、PL166・167) 総数9点が検出されている。口縁部にやや低平な横位隆帯文を2条施文して縦位の刻目を施す51や、波頂下の縦位隆帯文下部に接して横位隆帯文を施し、LR・RL縄文を横位施文して羽状を構成する73がある。胎土は共にA2タイプである。

関山Ⅰ式(第273・274図52・53・55、PL166) 総数34点が検出されている。双頭状の波状口縁と半截竹管の梯子状沈線文により菱形の意匠を構成する52、刻目を加えた渦巻状細隆起線文や円形貼付文・円形刺突文を施す53、原体長10mmの短いRL縄文を横位多段に施す55などがある。胎土は花積下層式と同様に、A2タイプを主体としている。

関山Ⅱ式(第274図54・56～72、PL166・167) 総数2,360点が検出されている。文様構成の不明な破片が多いが、直前段合撚り縄文や組紐を地文に半截竹管状具の平行沈線文を施す57・58や、粗大なコンパス文を施す59、口縁部から底部にかけて縄文や組紐を施す61～64・69などが見られる。胎土は、A2・A4タイプが主体をなしている。

有尾式(第274～276図74～87・90・95・99・103～105、PL167・168) 総数2,200点が検出されている。口唇下に縦位の連点状刺突文を施し、口縁部に同刺突文や爪形文・沈線文等で菱形意匠を構成する74～78や、縦位連点状刺突文が欠落するがそれらに近似する79～81・84等の一群と、半截竹管状具の平行沈線文や爪形文で菱形意匠を構成する82・83・85～87がある。また、90・95・99・103

～105は口縁部から底部にかけて、主に0段多条の2種類の単節縄文を横位・多段に施文して菱形意匠を構成する一群である。胎土は、A2・A4タイプが主体を占める。

黒浜式(第276図110・111、PL168) 総数2点のみが検出されている。無地文の口縁部に半截竹管状具のコンパス文や両端の閉じた平行沈線文・円文などを施す。

有尾式～黒浜式(第275・276図88・89・91～94・96～98・100～102・106～109、PL167・168) 口縁部から底部にかけて単節縄文を横位・多段施文する、関山Ⅱ式や有尾・黒浜式との識別が困難な土器16点が存在する。89・91～94は、2種類の縄文原体を横位・多段に交互施文して菱形や羽状の意匠を構成する。胎土は、A2・A4タイプが主体をなしている。

諸磯a式(第276図112～119、PL168) 総数252点が検出されている。半截竹管状具の爪形文や円形竹管文により文様構成する112～115や、半截竹管状具の平行・鋸歯状の沈線文を施す116・117と、口縁部から底部にかけて単節縄文を横位・多段に施文する118・119などがある。胎土はD・Eタイプを主体とするが、118のように結晶片岩を含むCタイプも認められる。

諸磯b式(第276図120～124、PL168) 総数791点が検出されている。浮線文により文様構成する120・121、半截竹管状具の平行沈線文により文様構成する122・123、やや粗大な単節縄文を横位・多段に施文する124等が主なものである。胎土は、Eタイプを主体とする。

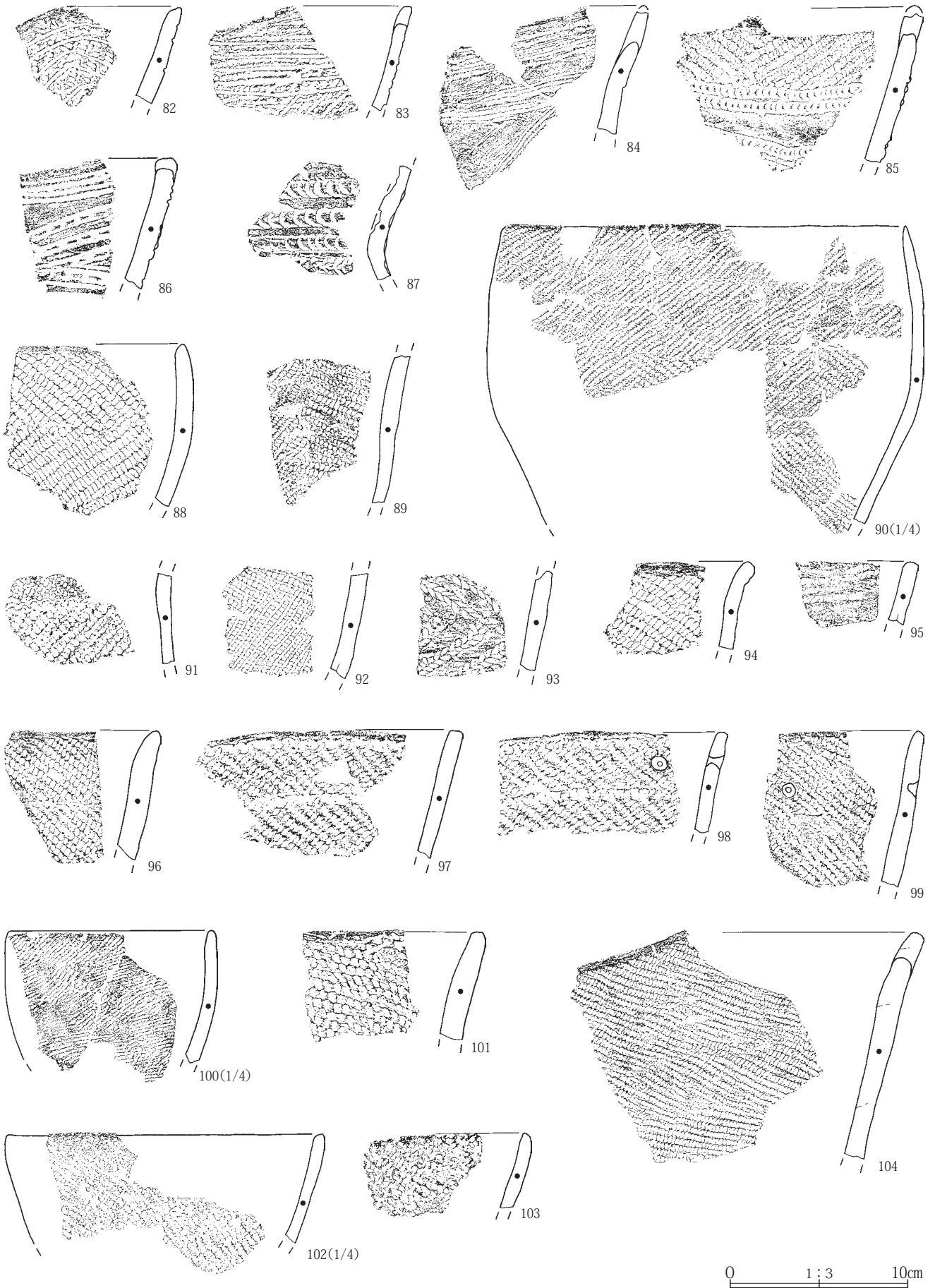
諸磯c式(第276図125、PL168) 総数114点が検出されている。125は結節沈線文により文様構成する。胎土は、雲母を含有する特徴的なBタイプである。

前期末葉(第276図126～128、PL168) 十三菩提式併行として集計したが、総数3点が検出されている。RL・RLの結束縄文を横位・多段に施す126・127と、開端部の自縄自縛によるRL縄文を横位・多段に施す128がある。胎土はEタイプを主体とする。

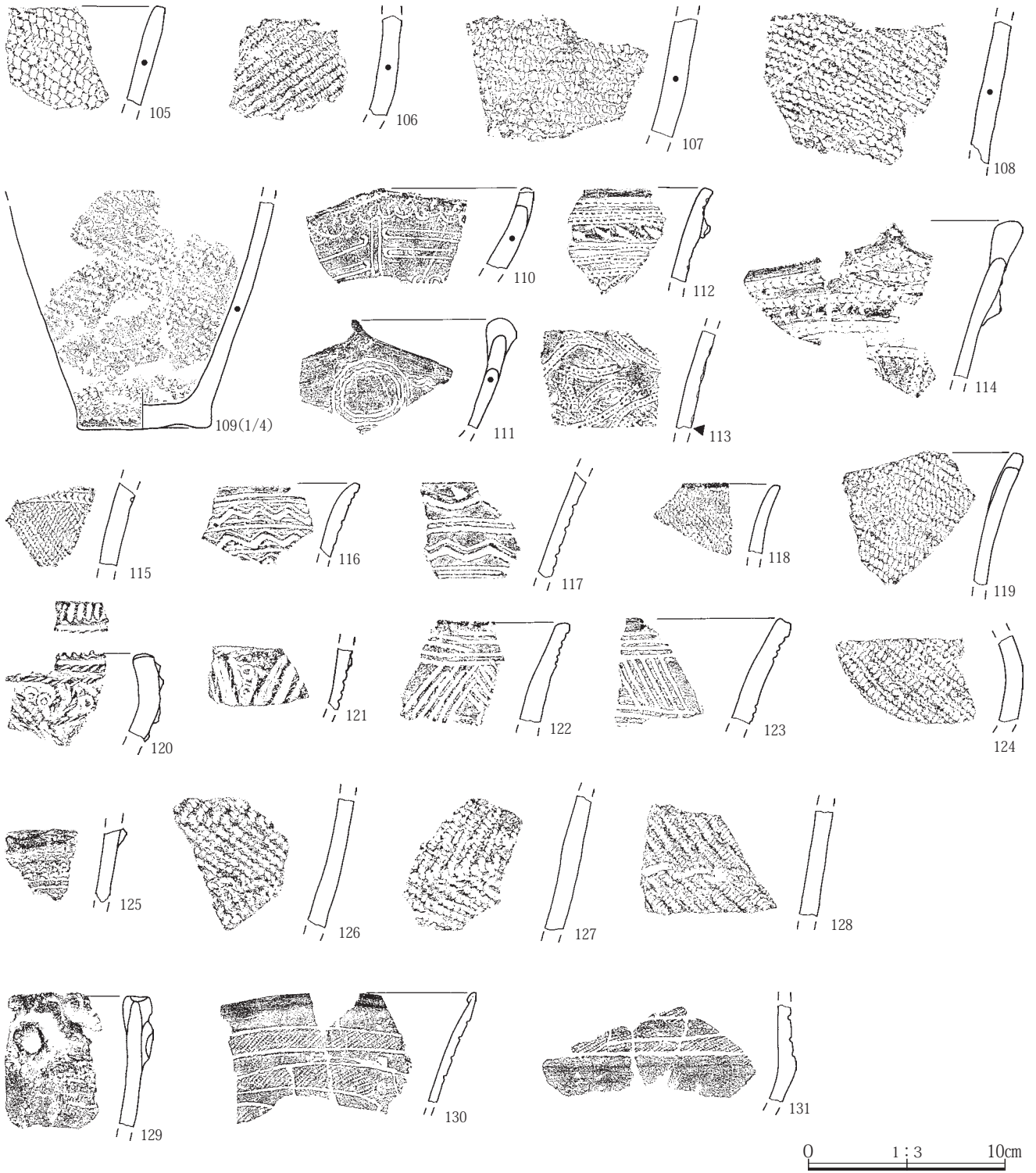
③後期の土器

堀之内1式(第276図129、PL168) 総数16点が検出されている。129は波頂部に接続して横位の隆帯文を施し、波頂下に円文を貼付する。

堀之内2式(第276図130・131、PL168) 総数6点が検出されている。130・131ともに、いわゆる「体部屈曲鉢」であり、細沈線の横帯区画文内にLR縄文を充填施文する。



第275図 4区遺構外出土土器(3)



第276図 4区遺構外出土土器(4)

胎土はJタイプを主体とする。

e. 5 区

①中期の土器

加曾利E1式(第277図132~137、PL169) 総数134点が検出されている。132・133は単節縄文を斜位施文して135の撚糸文のように縦位の条方向を意識している。また、132は口縁部にS字状の隆帯文を施し、棒状具で背割り状の沈線文を付加する。134・136・137は口縁がく字状に内折する浅鉢で、134・136は口縁部に横位の沈線文を施す。胎土は、D・Eタイプを主体とする。

加曾利E2式(第277図139~142・144、PL169) 総数511点が検出されている。139・140は口縁部に単沈線2本による連弧文を施す。141・142は浅鉢、144は有孔罅付土器である。胎土は、Eタイプを主体とする。

加曾利E3式(第277図145~147、PL169) 総数549点が検出されている。各土器ともに、S字文の弛緩した区画文や渦巻文を施すが、147は両耳壺的な鉢であろう。胎土はEタイプを主体とするが、一部には147のように多量の結晶片岩礫を含むC5タイプも認められる。

郷土式(第277図138・143、PL169) 総数24点が検出されている。口縁部や胴部に、矢羽根状の短沈線文を充填的に施文する。隆帯の渦巻文や懸垂文の様態から、加曾利E2式併行と考えられる。胎土はEタイプの他に、143のような新巻類型や焼町土器に見られる雲母を含有したBタイプも認められる。

②後期の土器

称名寺I式(第278図148、PL169) 総数23点が検出されている。148は口縁内面に断面三角形の隆帯を巡らせて受け口状に成形し、口縁部にC字状の小突起を推定4単位に施す。瓢形に近い形状を呈する。

堀之内1式(第278図149・150、PL169) 総数114点が検出されている。単沈線によりJ字状の意匠を構成する149と、細沈線の区画文内に細密なLR縄文を充填施文し、方形の区画内にS字状や弧線状の細沈線文を重畳的に施する150がある。胎土は、Eタイプを主体とする。

堀之内2式(第278図151、PL169) 総数59点が検出されている。151は口唇内面に横位沈線文を施し、口縁部から底部にかけてRL縄文を横・縦位に施文する。器形は、口縁部が緩く外反・開口する朝顔形を呈する。

加曾利B1式(第278図152、PL169) 総数36点が検出さ

れている。152は口唇内面に凹線状の横位沈線文を持ち、口縁部に推定6状の沈線横帯文や弧状の区切り文を施してLR縄文を充填施文する。

加曾利B2式(第278図153、PL169) 総数5点が検出されている。153は口唇内面に凹線状の横位沈線文を持ち、口縁部の沈線横帯文内に櫛歯状工具の横位条線文を充填施文して弧線文を付加する。胎土は、前述の加曾利B1式を含めてIタイプが主体を占める。

高井東式(第278図154、PL169) 総数1点が検出されている。154はく字状に内折する口縁部の上・下端に2条の横線文を施し、縦位の刻目を付加する。また頸部には、ヘラ状工具の細沈線文を斜位に施文する。

土器片加工円板(第278図155、PL169) 総数1点が検出されている。後期前半の深鉢の胴部破片を円形状に打割整形し、周縁の過半部に摩耗痕を持つ。

f. 7 区

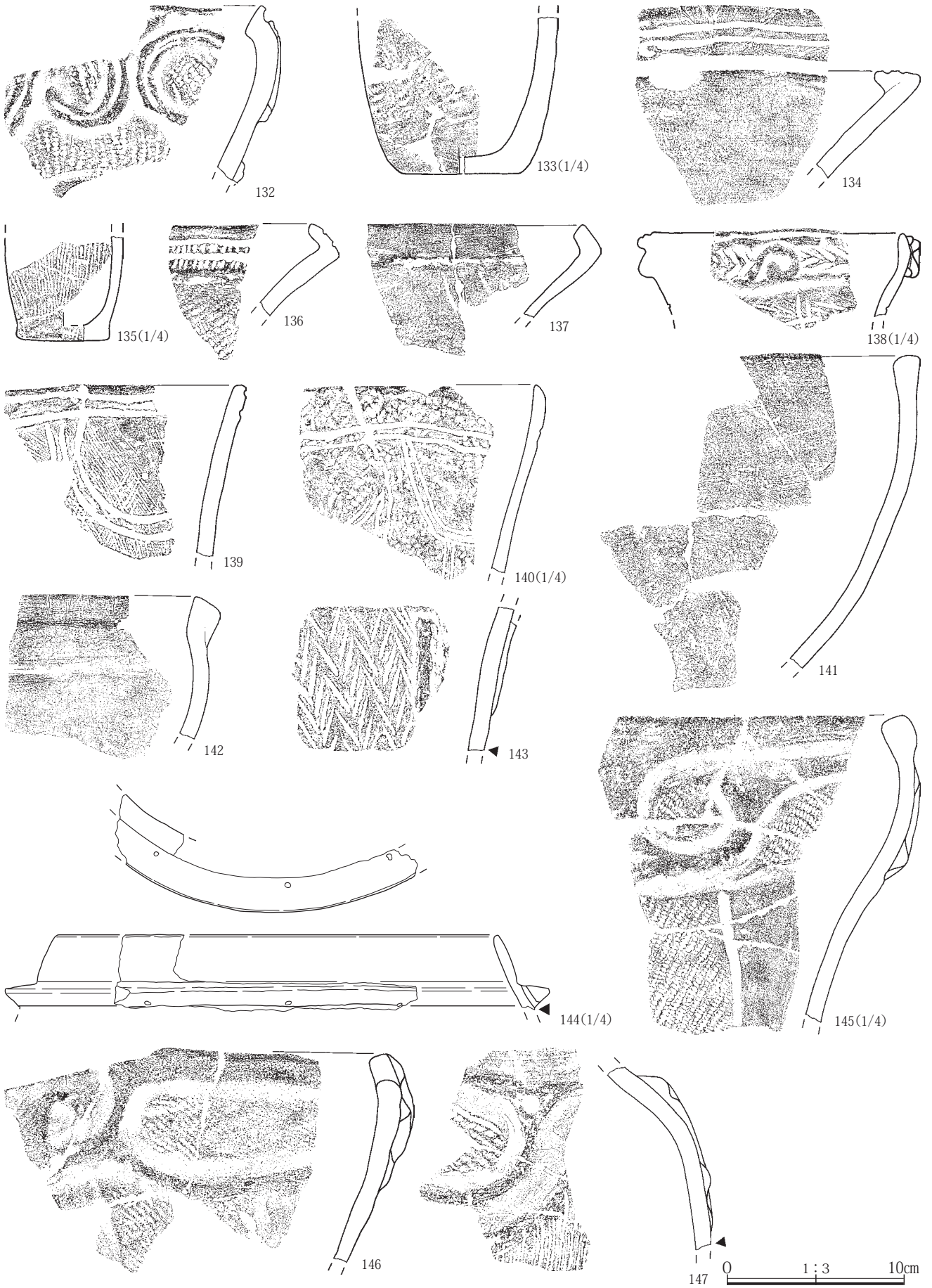
①前期の土器

関山式(第279図156~175、PL170) 総数3,405点が検出されている。半截竹管状具の平行沈線で楕円区画文・渦巻文・連続爪形文を施す156、同具の鋸歯状文・横線文・コンパス文を施す157~162、口縁部から底部にかけて直前段合撚りや環付縄文・丸組紐を横位・多段に施す163~171等が主なものである。173~175の底部破片では、上げ底が特徴的である。胎土は、A4タイプが主体を占めるが、160のように雲母を含むA9タイプも僅かながら認められる。

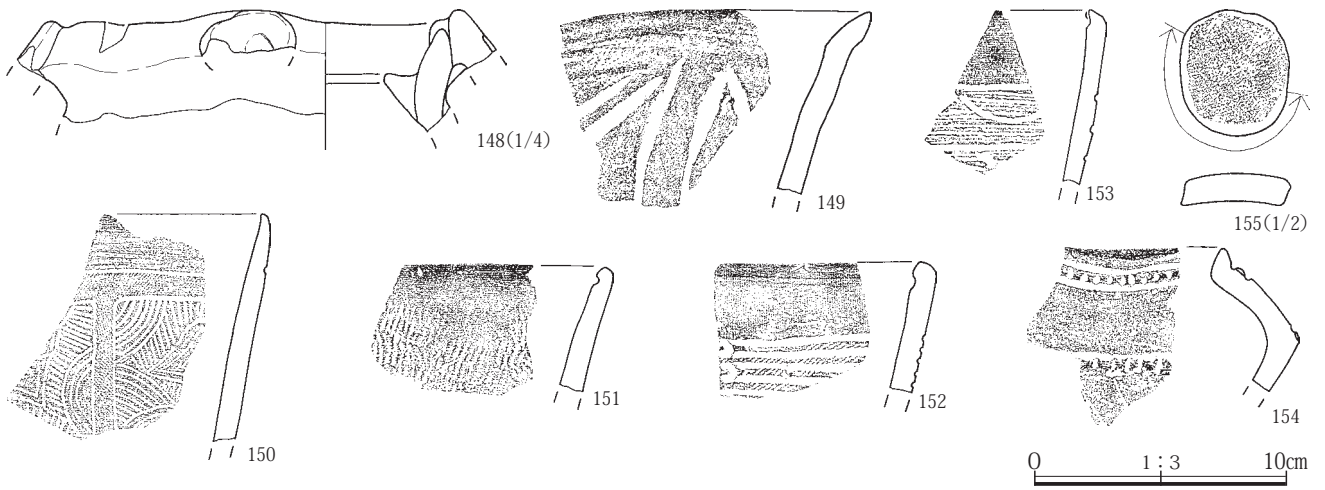
有尾式(第280図176~181、PL170) 総数44点が検出されている。連点状の刺突文を施す176、半截竹管状具の平行沈線文を施す177・178、半截竹管状具の爪形文を施す179、口縁部から底部にかけて縄文を横位・多段に施文する180等が主なものである。181は櫛歯状工具の押し引き的な連続刺突により疑似縄文を作出する点で、特徴的である。胎土は、A4タイプが主体を占める。

諸磯b式(第280図182・183、PL170) 総数162点が検出されている。共に口縁部がく字状に強く内折し、182が横位の浮線文を多段に、183が半截竹管状具の集合沈線文を施す。胎土は、Dタイプを主体とする。

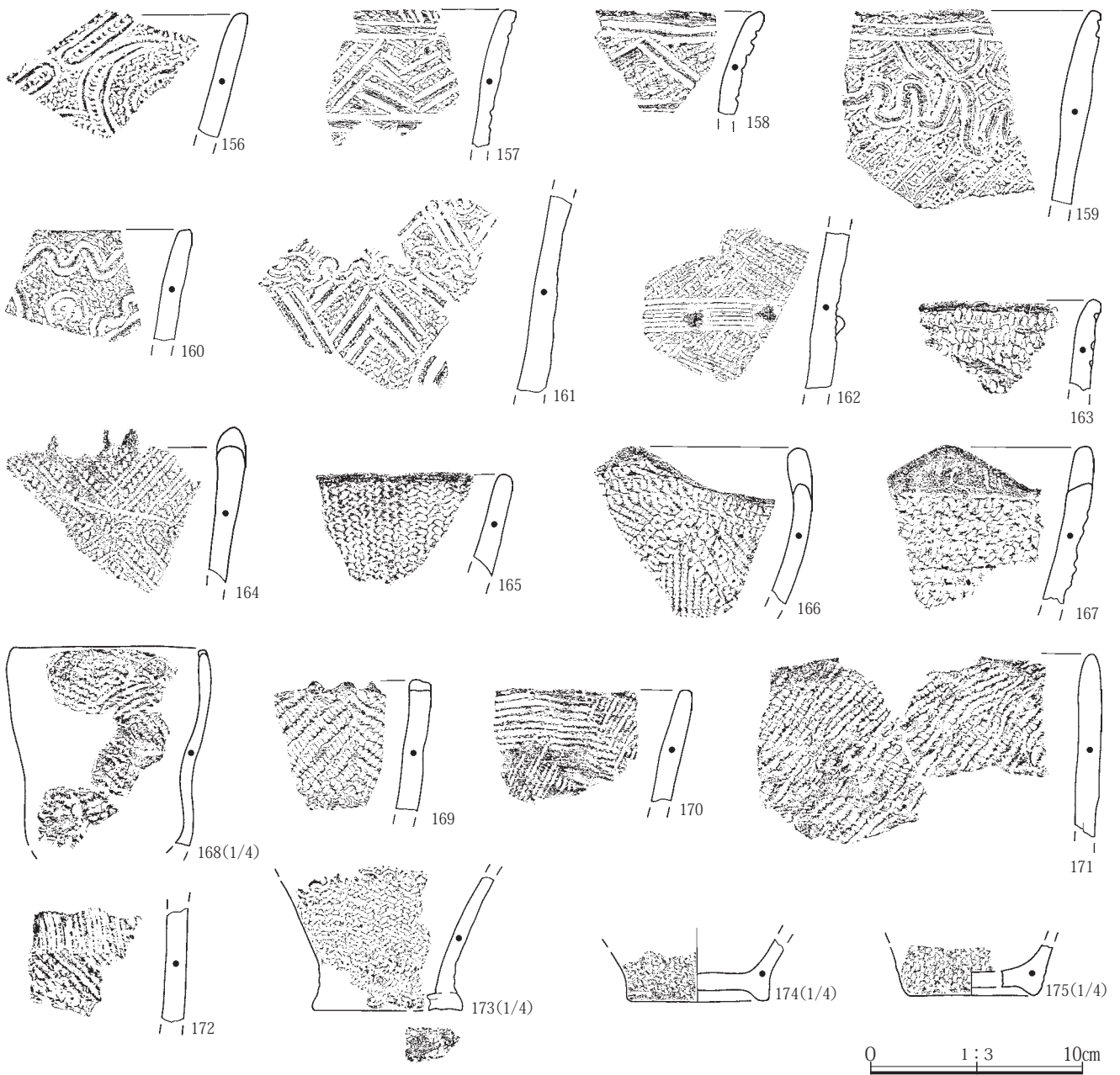
十三菩提式(第280図184、PL170) 総数3点が検出されている。口唇上に刻目を施し、口縁部に半截竹管の横位波状文を施文する。胎土は、結晶片岩礫を含む特徴的



第277図 5区遺構外出土器(1)



第278図 5区遺構外出土土器(2)



第279図 7区遺構外出土土器(1)

なCタイプである。

②中期の土器

阿玉台Ia式(第280図185、PL170) 当型式と考えられるのは185の1点のみであるが、後述する同Ib式の中に少数が混在する可能性もある。波頂下に弧状の隆線文を施文する。胎土は、雲母の粗・細砂を含むB5タイプ。

阿玉台Ib式(第280図186～190、PL170) 総数30点が検出されている。186・188は口縁部に隆帯の区画文を施し、隆帯の上面やそれに沿って単列の角押文を施文する。187や190もそれらに類似する。189は胴部に列状刺突文を施す。胎土は、いずれも雲母の粗・細砂を含むBタイプである。

阿玉台II式(第280図191、PL171) 総数124点が検出されている。191は波頂下に隆帯を縦位に貼付し、口縁に沿って半截竹管状具の角押文を施す。

勝坂2式(第280図192・193・195～198、PL171) 総数90点が検出されている。隆帯の上面やそれに沿って沈線文・篋状具の連続爪形文・弧線文を施し、区画文内や間隙部に三叉文等を施文する。胎土は、珪質乳白色岩片を含まないHタイプが主体を占める。

勝坂3式(第280図194、PL171) 総数358点が検出されている。194は縦位施文L撚糸文を地文として、篋状や円形状の隆帯文を施し、それに沿って単沈線文を施文する。胎土は勝坂2式と同様に、Hタイプが主体を占める。

新巻類型(第280・281図199～201、PL171) 総数88点が検出されている。199・200は、隆帯文を基軸にしてその両側に沈線文を施し、短沈線・三叉文や縄文を充填的に施文する。201は懸垂状の単沈線でパネル状に区画された内部に、三叉文や横線文を施す。199は口縁部に付された耳状の大形把手。胎土は、勝坂式と同様のHタイプと雲母の粗・細砂を含有するBタイプの両者がある。

焼町土器(第281図202～210、PL171) 総数779点が検出されている。202～210は、口唇部から口縁部にかけて眼鏡状突起や曲隆線文を施し、それに沿って半肉彫的な単沈線文を施文する。胎土は、Hタイプが主体を占めるが、雲母の粗・細砂を含むBタイプも少なからず認められる。

三原田式(第281図211、PL171) 総数63点が検出されている。211は、短く外反する口唇部を持ち、口縁部に角押文的な連続刺突文を、その下位に指頭状の押圧を加

えた隆帯波状文を施す。

加曾利E1式(第281図213～215・217・218、PL171) 総数240点が検出されている。213・214は、口縁部に2本単位隆帯のS字文を施し、同心円状の重弧線文や縄文を施文する。215・218は前者に属する胴・底部破片で、撚糸文や隆帯懸垂文を施す。217は無文の浅鉢土器。胎土はHタイプを主体とするが、217は雲母を含むBタイプであり、焼町土器等に伴う可能性もある。

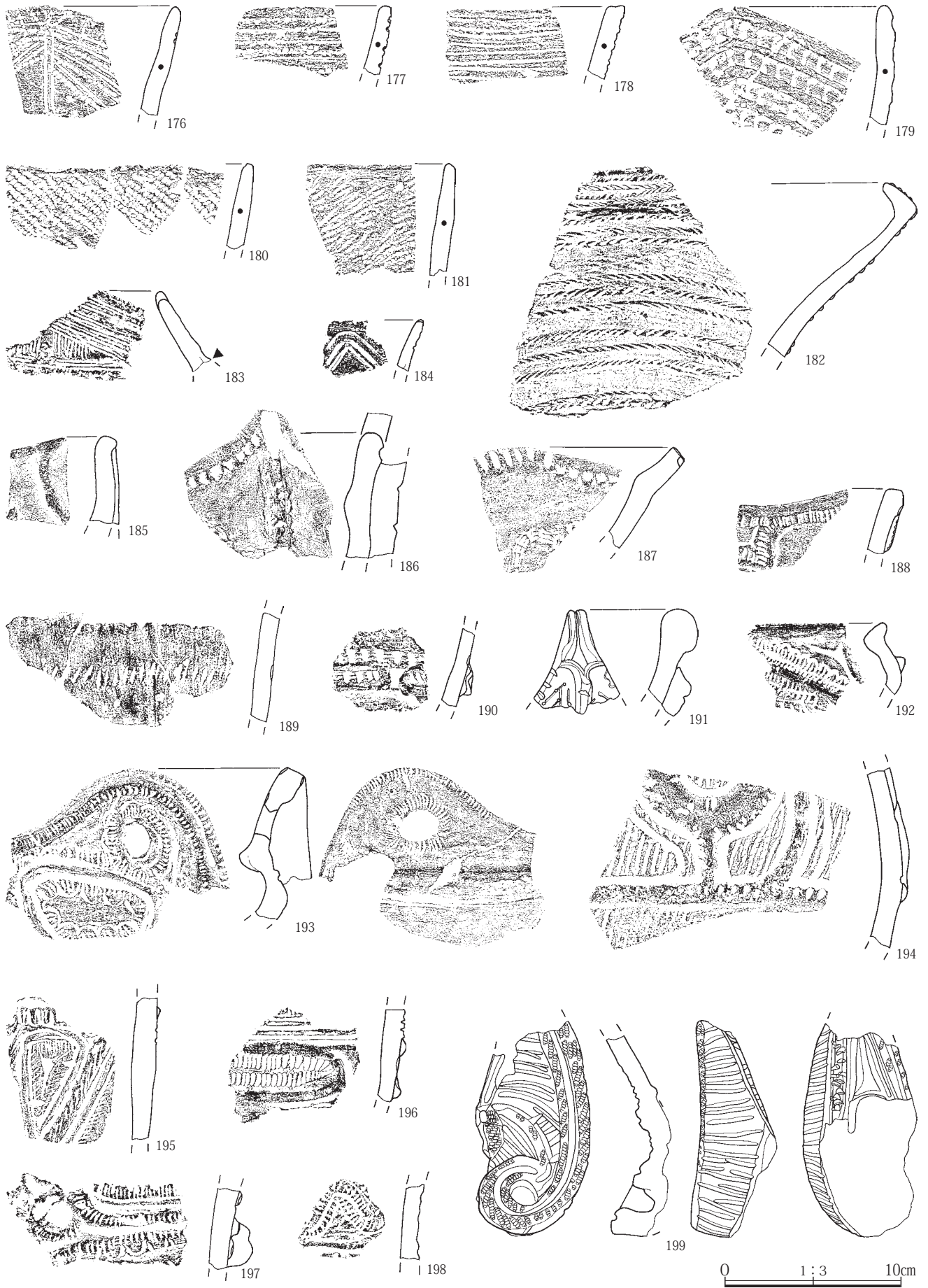
加曾利E2式(第281・282図216・219～232、PL171・172) 総数526点が検出されている。216・219～225は、口縁部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施すが、220～222は短沈線を、219・213・225は縄文地文を、216・224は郷土式に近似した矢羽状の短沈線文を施す。227～230は、口縁部や頸部・胴部に連弧文を施す一群である。231・232は口縁が短く外折する浅鉢土器。胎土はHタイプを主体としているが、231のように結晶片岩礫を含むCタイプも僅かに存在する。

加曾利E3式(第282・283図233～245、PL172・173) 総数1,648点が検出されている。沈線による波状文やU字状・逆U字状の区画文を施して縄文を充填施文する233・235～238の一群や、大柄な隆帯渦巻文を施す234、連弧文を施す245等が主なものである。239・242～244は、口縁部に弛緩した楕円区画文を施す深鉢の胴・底部破片で、懸垂文間に縄文を充填施文する。240は横線文と櫛歯状具の条線文を持つ鉢形土器、241は口縁部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施す浅鉢土器である。胎土はHタイプを主体とするが、僅少なながら236・241のように結晶片岩礫を含むCタイプも認められる。

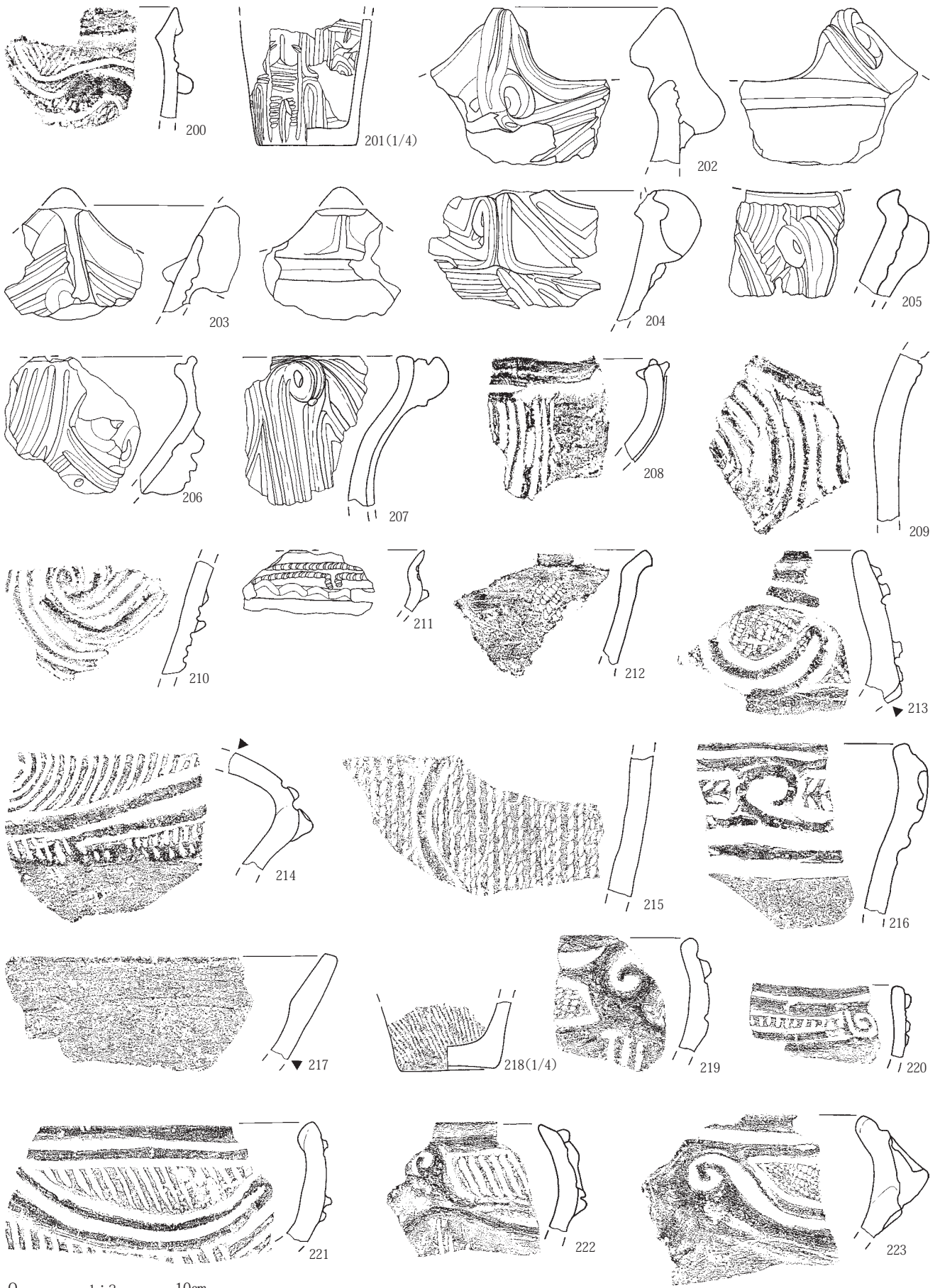
加曾利E4式(第283図246、PL173) 総数531点が検出されている。246は細沈線のV字状区画文内にLR縄文を充填施文している。胎土は、他型式でも僅少な赤色岩片を含むIタイプである。

郷土式(第283図247・249～253、PL173) 総数187点が検出されている。個々には時間差を有するが、口縁部の区画文内に短沈線を矢羽状に充填施文する247・249と、胴部に綾杉状や鱗状の沈線文を施す252・253等がある。250・251も郷土式系に比定したが、櫛歯状具の条線文は曾利式的である。胎土は、Hタイプが主体を占める。

大木9b式(第283図248、PL173) 下記の中期後半に分類した型式判別が困難な土器群の中に、相当数が存在す



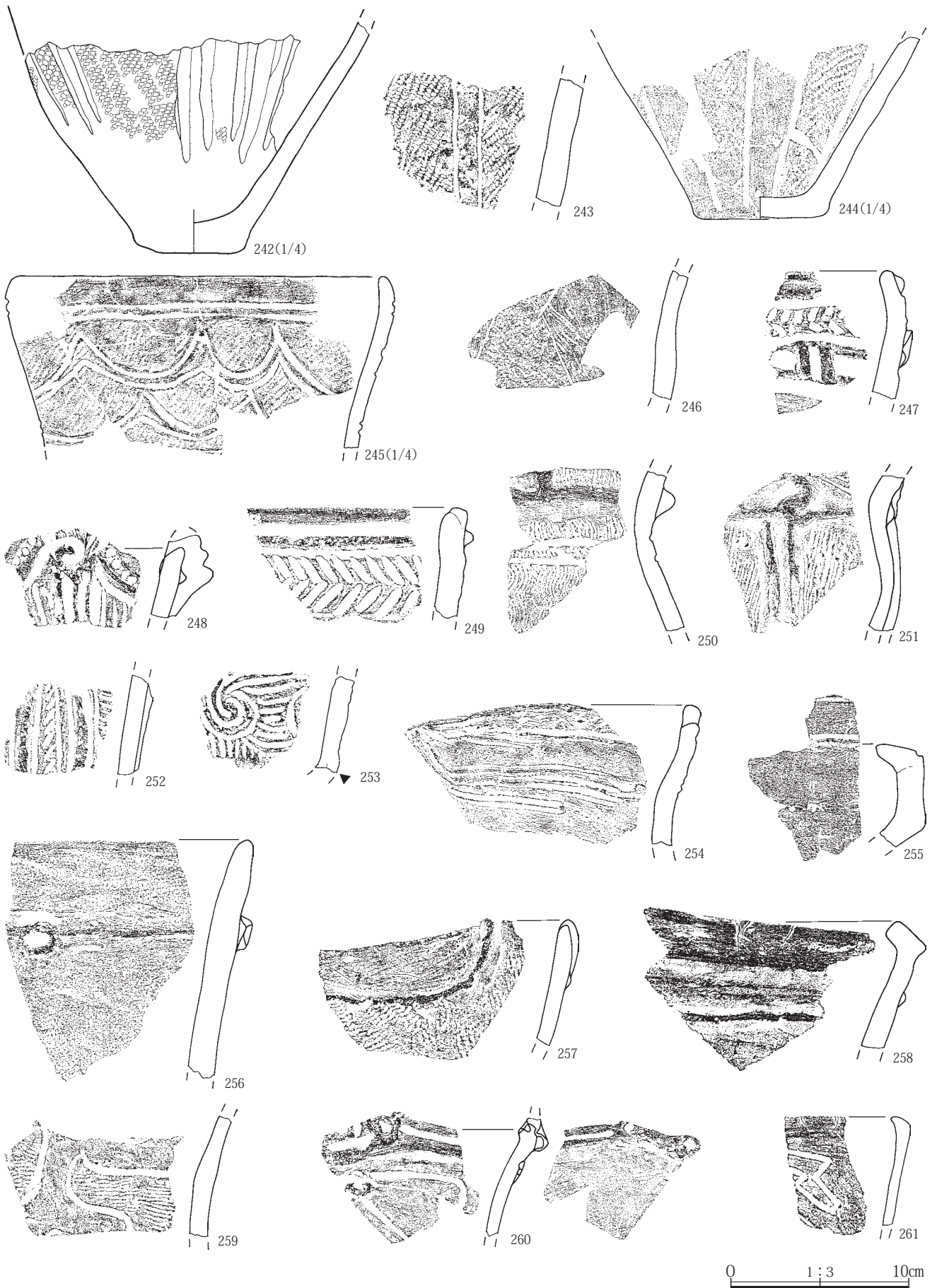
第280図 7区遺構外出土土器(2)



第281図 7区遺構外出土土器(3)



第282図 7区遺構外出土土器(4)



第283図 7区遺構外出土土器(5)

る可能性がある。248は波頂下に隆線の渦巻弧線文を横位施文し、それに沿って連続刺突文を施す。また、渦巻文に接続して腕骨状の隆帯懸垂文を施し、縦位の単沈線を充填的に施文する。

中期後半(第282・283図212・254・255、PL171・173)

総数20,790点が検出されている。前述の「A. 各調査区の土器出土状況」で既述したが、これら土器の大半は加曾利E1式～同E4式に分類される可能性が高い。その中で、型式判別が困難かつ特徴的な土器を選定して掲載した。212は口縁が短く外反し、RL縄文を部分的に縦位施文する。254は外面を粗く篋無でした粗製の深鉢で、半截竹管の平行沈線文を横位乱雑に施文する。255は短く内折する口縁に2条の横線文を施す。212の胎土は、新巻類型や焼町土器に近似したBタイプであり、当該式に比定される可能性もある。

③後期の土器

称名寺Ⅰ式(第283図256～259、PL173) いわゆる「加

曾利E5式」130点を含む、総数393点が検出されている。256～258は加曾利E5式であり、口縁部に微隆起線文を横位施文する。縄文を持つ257と、無文の256・258がある。259は単沈線の区画文を施し、L縄文を充填施文する。胎土はE・Hタイプが主体を占めるが、256は雲母の粗・細砂を含むBタイプである。

称名寺Ⅱ式(第283・284図260～263、PL173) 総数167

点が検出されている。いずれも胴部に単沈線の区画文を施すが、260は口唇外端に横位隆帯を施文し、円形貼付文に接続する短沈線文を施す。胎土はHタイプが主体を占めるが、261は雲母の粗・細砂を含むBタイプである。

三十稻場式(第284図264、PL173) 総数121点が検出さ

れている。264は篋状具による左斜位方向からの連続刺突により、多段の刺突文を施す。

堀之内Ⅰ式(第284～286図265～301、PL173・174) 総

数3,301点が検出されている。この他に、型式判別の困難な称名寺Ⅰ式～堀之内Ⅰ式17,827点が存在する。265～271・275・276・278・279は、口縁の内外面に横線文・押圧状円形刺突文・弧線文等を施すいわゆる「口部裝飾帯」を持ち、口縁部から頸部括れ部が無文となる一群である。265～267・269は鎖状の垂下隆帯文を施す。272～274は、口部裝飾帯が欠落する一群であろう。渦巻文・懸垂文・弧線文・横帯文を施す280～285は、上記の胴部

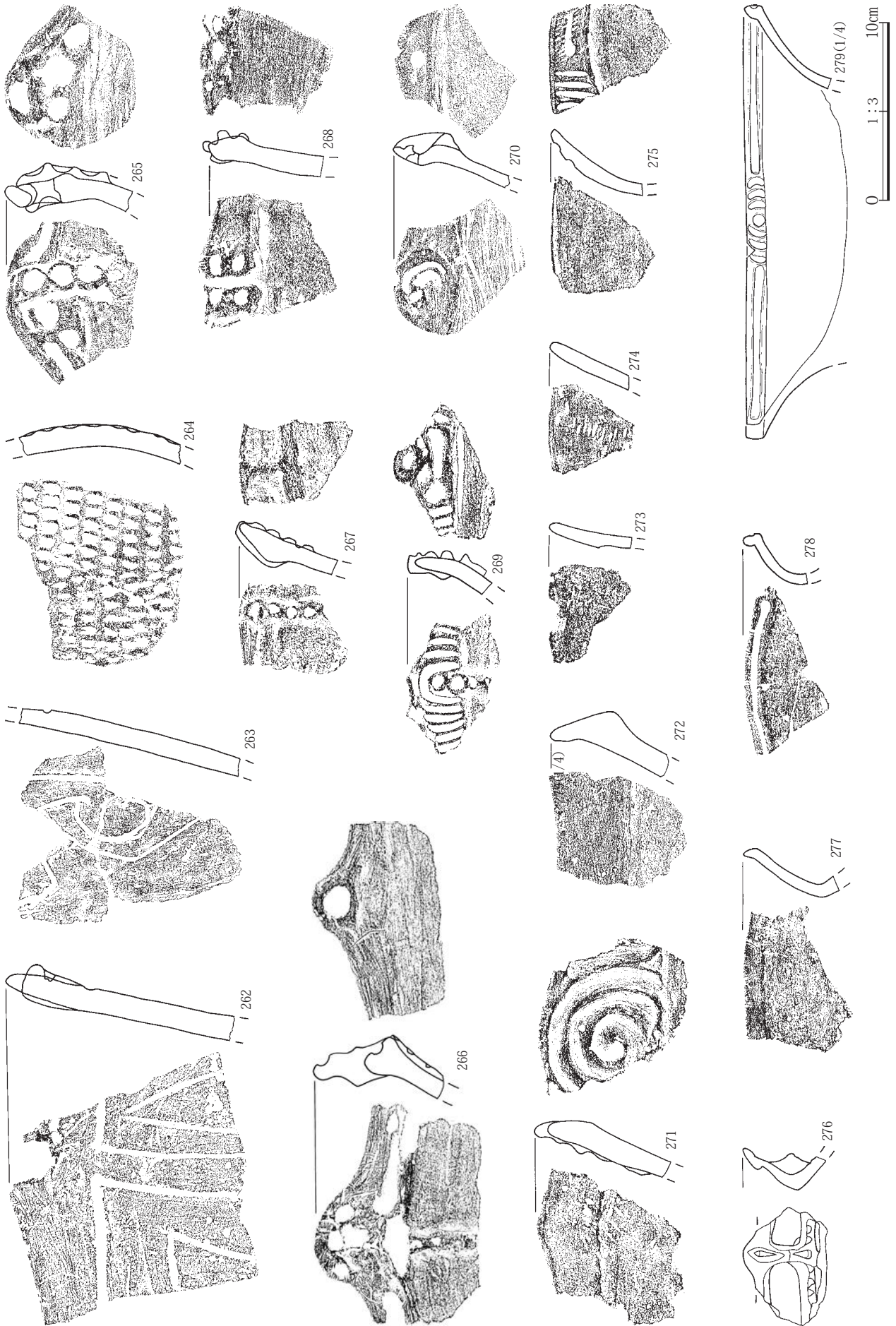
破片と考えられ、共にいわゆる「小仙塚類型」や「矢太神沼類型」に分類される可能性が高い。口端や括れ部に横線文を持つ以外は無文の290・291は、上記各類型の粗製の土器であろう。懸垂文や斜線文を施す括れの弱い286・287は「下北原類型」に、また朝顔形の器形を持ち垂下隆帯や沈線文を施す288・289は「堀之内類型」に比定されよう。浅鉢土器としては、口部裝飾帯をもつ294・299がある。298・300は無文の鉢、短頸壺的な295・296は注口土器、297は蓋と考えられる。胎土は、Eタイプを主体とするが、灰白色岩片や珪質乳白色岩片を含まないH・Jタイプも存在する。265・270・285・291の深鉢は、雲母の粗・細砂を含むBタイプであり、僅少なながらも当該タイプの存在に注意を要する。

堀之内Ⅱ式(第286・287図302～339、PL174～176) 総

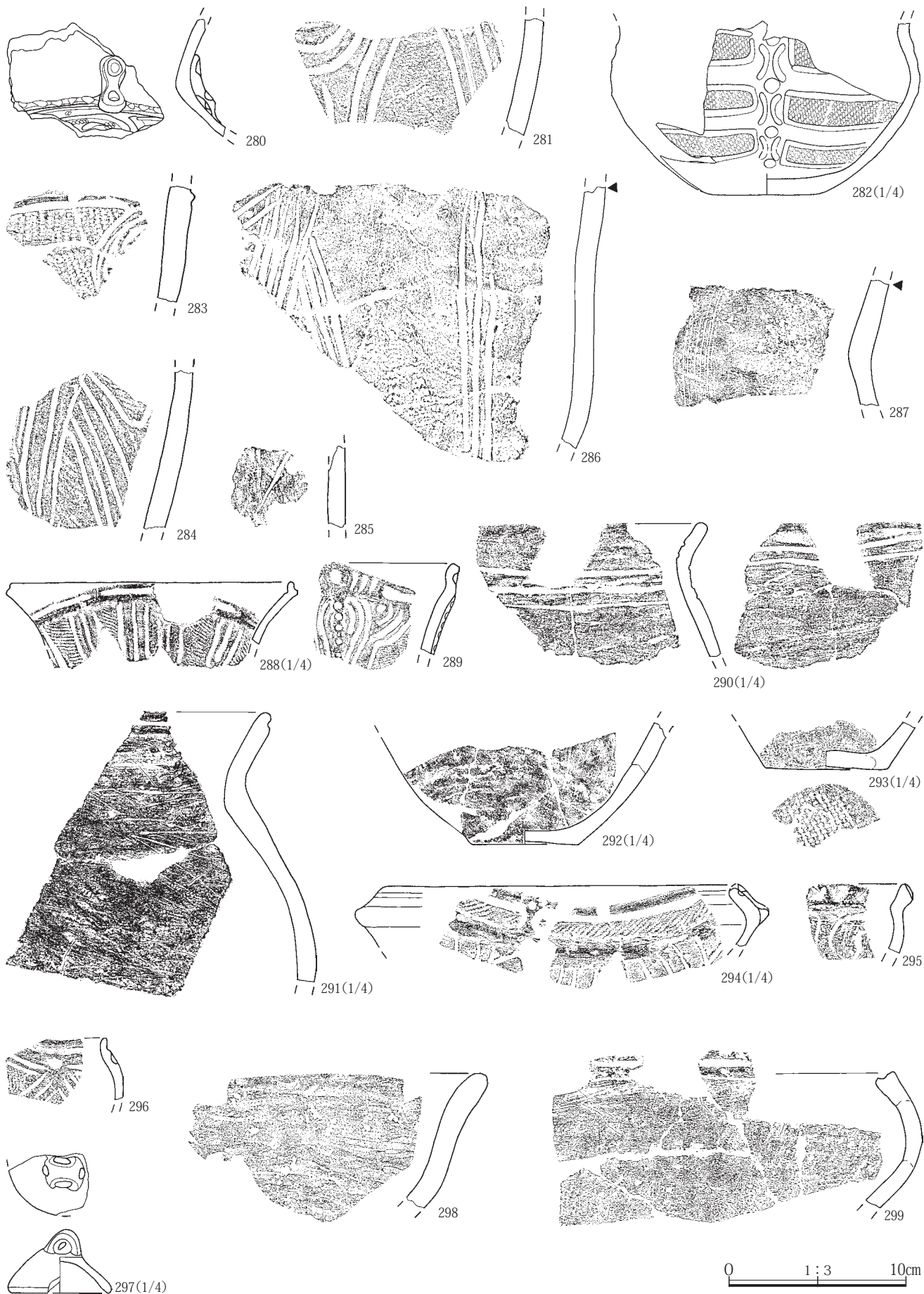
数850点が検出されている。303～316・318・320は、口縁に刻み隆線文や沈線の横帯区画文を施し、主にLR縄文を充填施文する一群である。317・319・32・322もそれらに類似するが、刻み目隆線文が欠落する。323は「石神類型」に特徴的な「結紐状繫絡文」が施文され、324・325はいわゆる「体部屈曲鉢」であろう。他に、格子目文を施す326・627、全面縄文施文の331、浅鉢の332・333、注口土器の334～336がある。無文深鉢の328・337～339は型式判別が難しいが、328を除いて器面に撫で状の粗い整形痕を残す粗製土器である。器面調整は、先述の粗製土器を除き篋状具による丁寧な磨きが施され、燻べ焼きにより黒色光沢を帯びたものも10%程度に認められる。胎土は、胎土は、細密な生地土で赤色岩片を含むG1タイプが主体を占める。また僅少なながら、321のように雲母の粗・細砂を含むBタイプや、305・334等の結晶片岩礫を含むCタイプも認められる。

加曾利B1式(第288～290図340～403、PL176～178) 総

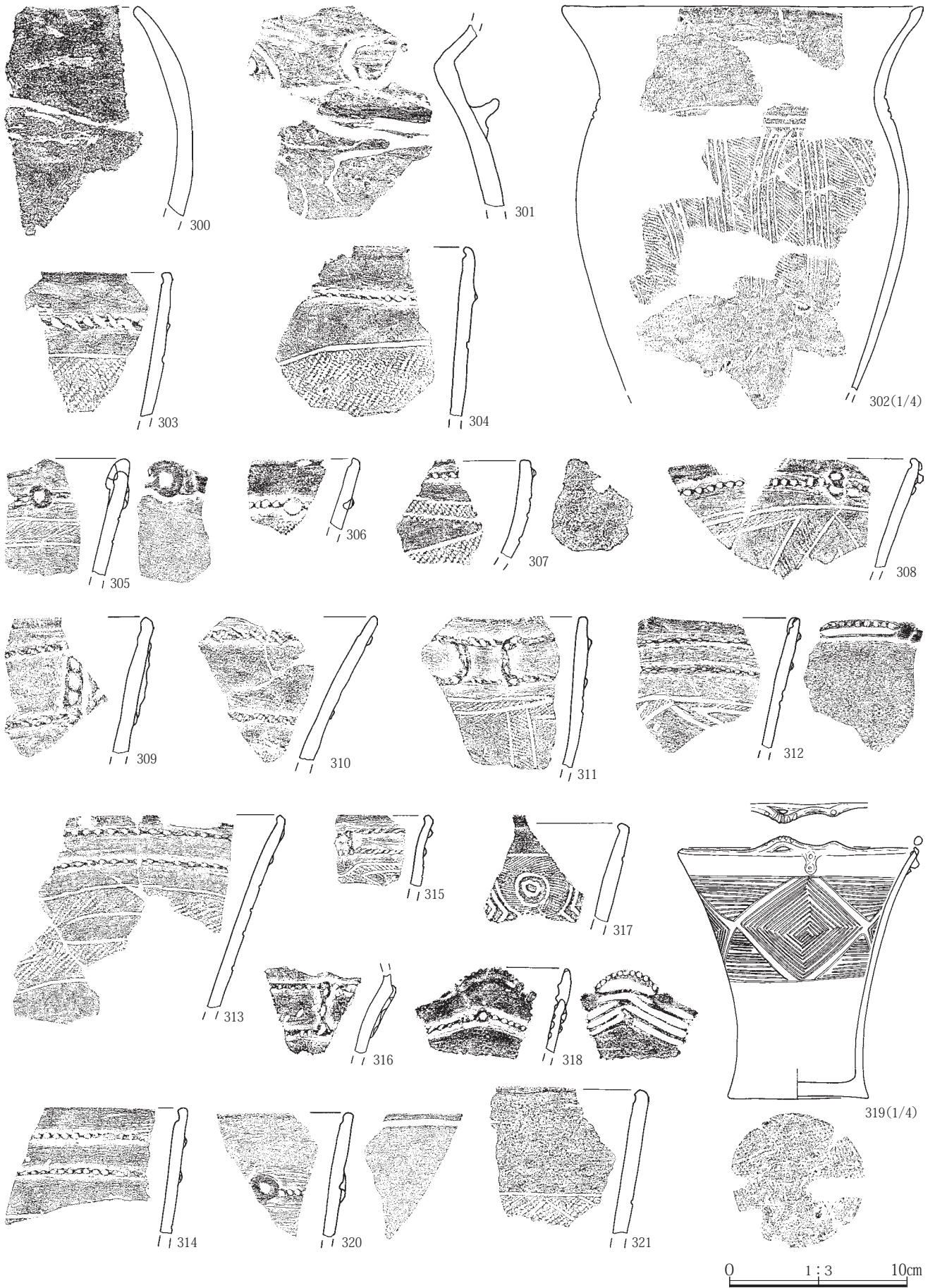
数799点が検出されている。深鉢では、外削ぎ状の口唇部上端に刻み目を施し、口縁の横線文帯内に区切り縦線文やLR縄文を施文する340～342・344～365と、充填縄文が欠落する343・366～368、斜線文や格子目文を充填する369～371、地文的な縄文と横線文を施す372～375、全面に縄文を施文する376～378、無文土器の379～382等がある。383～395は鉢形土器で、394・395の無文土器を除いて上記の深鉢と類似した文様を施す。他に、口縁内面に横線文を施す浅鉢の396、注口土器の398～403等があ



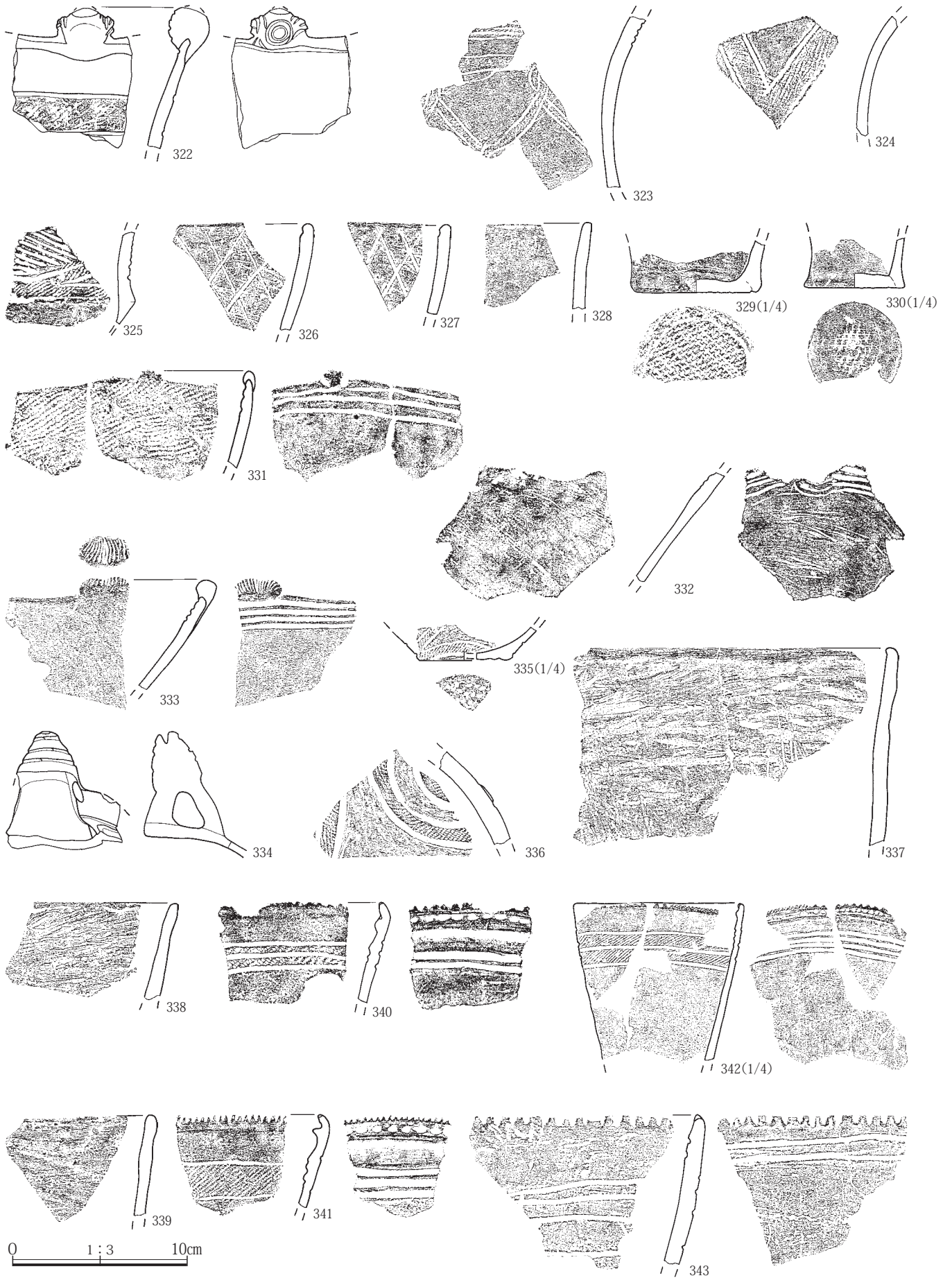
第284図 7区遺構外出土器(6)



第285図 7区遺構外出土土器(7)



第286図 7区遺構外出土土器(8)



第287図 7区遺構外出土土器(9)

る。器面調整は、加曽利B1式と同様に篋状具による丁寧な磨きが施され、燻べ焼きにより黒色光沢を帯びたものが30%程度に認められる。胎土は、細密な生地土で赤色岩片を含むG1タイプが主体を占め、E・Hタイプがそれに次ぐ。また僅少ではあるが、357・395のように雲母の粗・細砂を含むBタイプや、340・344・386等の結晶片岩礫を含むCタイプも認められる。

加曽利B1式併行(第289図397、PL178) 総数1点が検出されている。397は竹管状具の単沈線区画文を施し、区画内に細密なLR縄文を充填施文した後に、区画線に沿って同具の連続刺突文を施す。また、隙間部には三角形の沈線文を施文し、台付深鉢の可能性もある。胎土は、雲母の粗・細砂を含むBタイプである。

加曽利B2式(第290図404～411、PL178) 総数282点が検出されている。深鉢土器では、横帯文の区画内に弧線文や斜線文を施す404～407、口唇部上端に連続したC字状の刺突加工を施す408、口端に横位の鎖状隆帯文を施し縄文を全面施文する紐線文系の409、無文の410等がある。他に、411は鉢形土器である。胎土はEタイプが主体的であるが、僅少なながら407・409のように結晶片岩礫を含むCタイプも存在する。

加曽利B3式(第290図412、PL178) 総数2点が検出されている。412は口縁に細沈線を羽状に施すと推定され、口縁内面には凹線状の浅い横線文を施す。胎土は、結晶片岩礫を含む特徴的なCタイプである。

後期中葉(第290図413～424、PL178・179) 器面調整の特徴から堀之内2式～加曽利B2式と想定されるものの、型式判別の困難な1,334点が存在する。415～423は底面に網代痕を持つ深鉢土器であり、413・414は無文の粗製土器である。424は注口土器の注口部で、本体との接合基部に接合痕が残存し、直径約33mmの円筒を心材としてその外周に最大15mm厚に粘土を巻き付けて造作している。胎土はHタイプが主体を占めるが、僅少なながら416のように雲母の粗・細砂を含むBタイプや、419の結晶片岩礫を含むCタイプも認められる。

高井東式(第291図425～440、PL179) 総数47点が検出されている。425～431は、く字状に内折する口縁部に2本の横線文やC字状の貼付文を施す深鉢土器で、425・426は胴部に羽状沈線文を施文する。432～435の全体的な文様構成は不明だが、432・433は口縁部にLR縄文を横

位施文し、口唇部が内削ぎ状に肥厚する434・435は無文である。他に、低平・幅広な横位隆帯や沈線文交差部に円形貼付文を施す鉢形土器の437・440や、口縁部に扇形や半円形状の突起を付す浅鉢土器の438・439がある。胎土はEタイプが主体を占めるが、僅少なながら432のように結晶片岩礫を含む特徴的なCタイプも認められる。

安行2式(第291図441、PL179) 総数1点が検出されている。441は口縁部に隆起帯を施し、RL縄文を横位施文する。また、口唇～口縁部に棒状や豚鼻状の貼付文を施す。

後期後葉(第291図442、PL179) 総数1点が検出されている。442は口唇部がやや内削ぎ状に肥厚する、所謂「西広型深鉢」か。体部に単沈線の横線文やLR縄文を横位に施す。

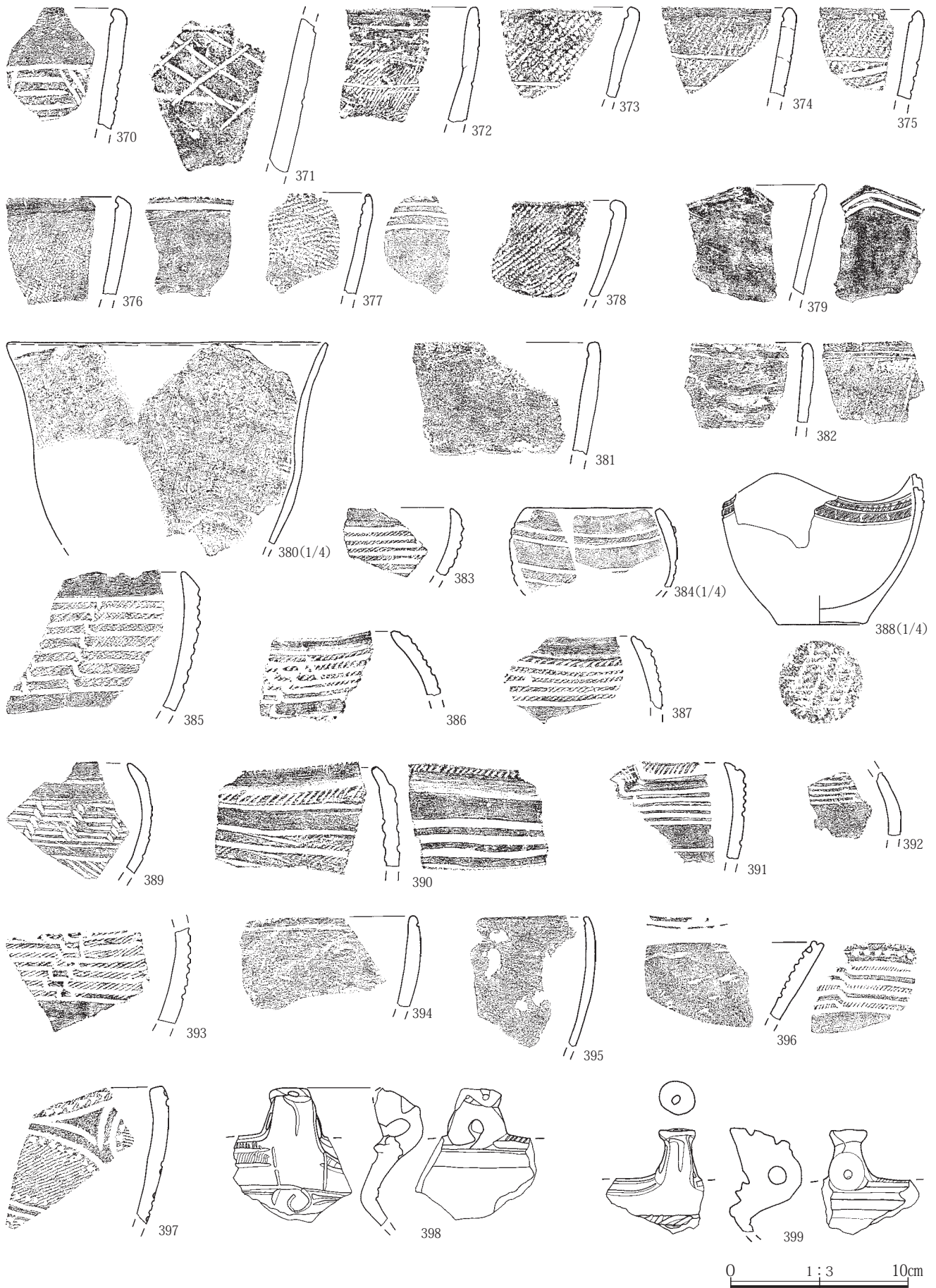
三角柱形土製品(第291図443、PL179) 総数1点のみが検出されている。各外面に棒状具による渦巻状沈線文や刺突文を施す。

土器片加工円板(第291・292図444～456、PL179) 総数13点が検出されている。深鉢土器の底部破片を利用した455の1点を除いて、基本的に胴部破片を円形状に打割整形して使用している。その大きさは、直径24～65mmとかなりのばらつきがあるが、各破片を土器型式により分類すれば、諸磯b式1点(449)、加曽利E3式2点(450・451)、中期後半1点(444)、堀之内1式1点(447)、堀之内2式1点(446)、後期前半6点(445・448・452～454・456)、後期中葉1点(455)となる。また、456の欠損品1点を除いて周縁部の摩耗痕の状態により分類すれば、摩耗全周4点(446・449・451・452)、摩耗一部欠落4点(445・448・453・454)、摩耗一部有2点(444・450)、摩耗無2点(447・455)となる。胎土は、Eタイプが50%以上を占め、Hタイプがこれに次ぐ。

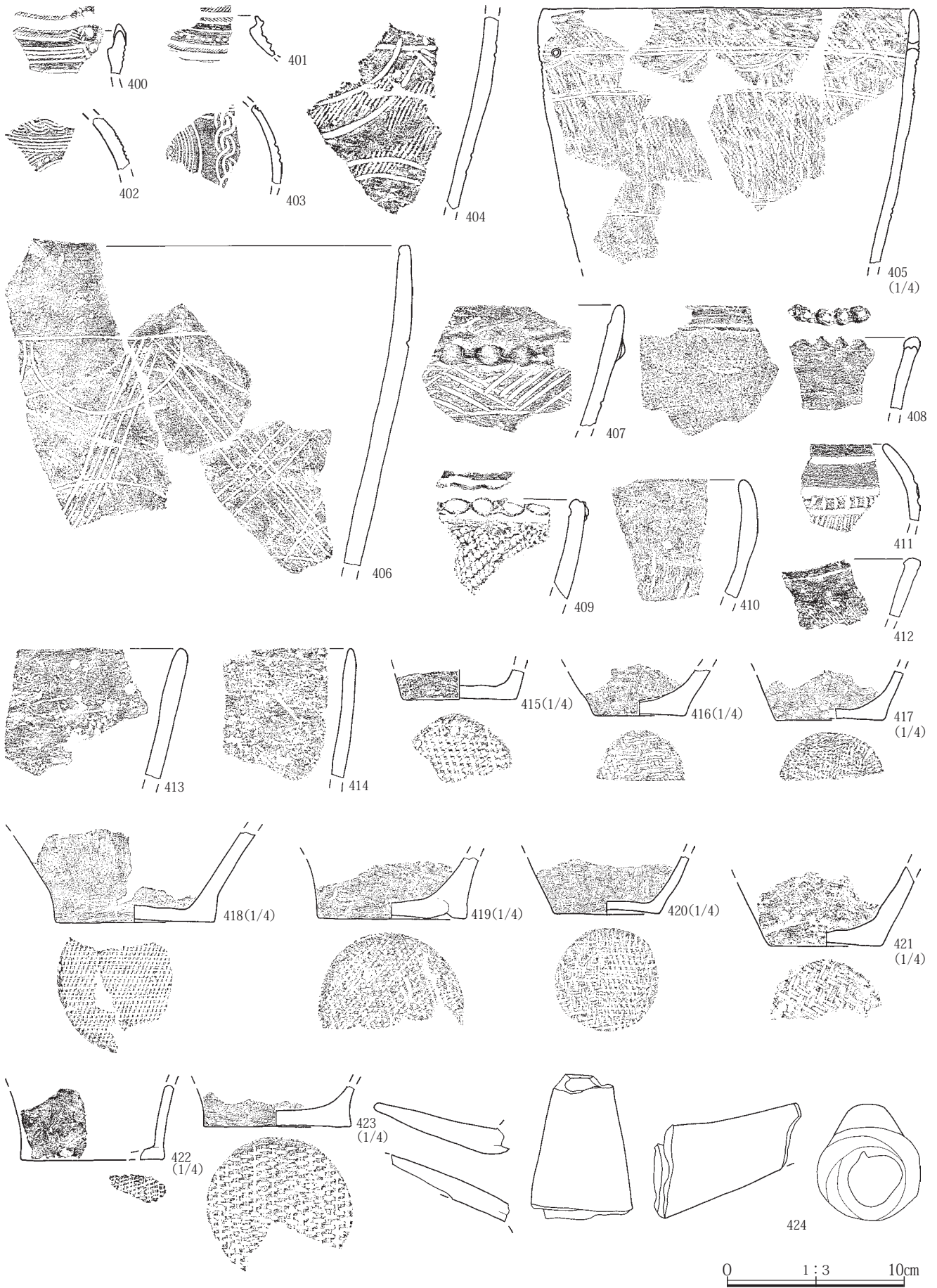
円盤状土製品(第292図457、PL179) 総数1点のみが検出されている。竹管状具による沈線区画文内に同具の斜位刺突文を充填し、破断面に接して直径3mmの焼成前尖孔が存在する。



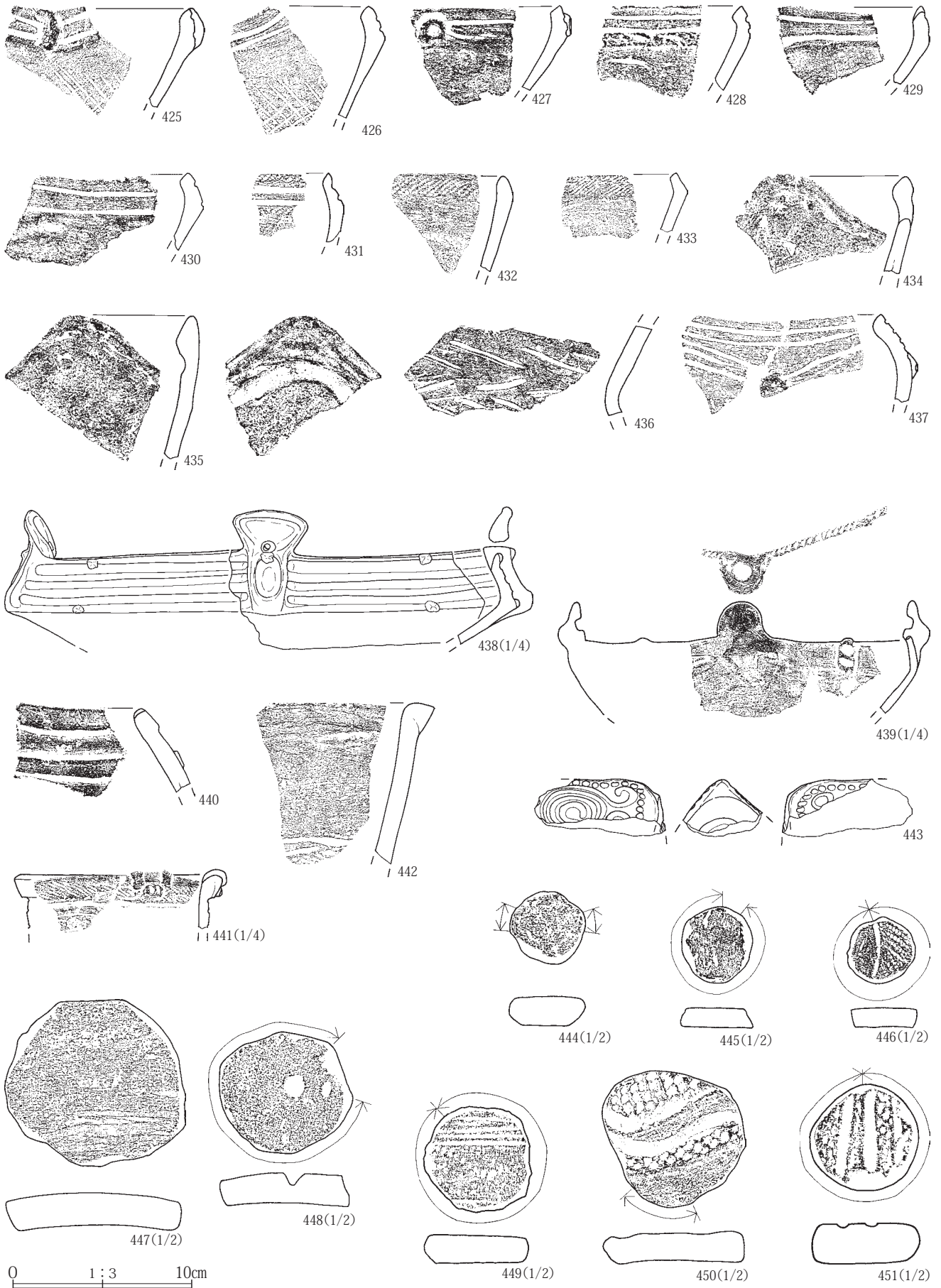
第288図 7区遺構外出土土器(10)



第289図 7区遺構外出土土器(11)



第290図 7区遺構外出土土器(12)



第291図 7区遺構外出土土器(13)

g. 8 区

①前期の土器

有尾式(第293図458・459、PL180) 総数8点が検出されている。459は、半截竹管状具の集合沈線文により菱形意匠を構成する。458は、口縁部～底部にかけて縄文を全面施文する。胎土は、共にA4タイプである。

下島式(第293図460、PL180) 総数1点のみが検出されている。半截竹管状具による条痕状の横位平行沈線文を施し、4～7本単位の結節浮線文を渦巻状に施文する。胎土は、特徴的な結晶片岩礫を含むCタイプである。

前期末葉(第293図461、PL180) 総数1点が検出されている。中央に孔を持つ方形の把手破片であり、外縁端部に刻目を施し、孔に沿って半截竹管状具の集合沈線文を施文する。胎土は、雲母の粗・細砂を含むBタイプである。

②中期の土器

阿玉台Ⅱ式(第293図462、PL180) 総数3点が検出されている。462は、隆線の楕円区画文内に半截竹管状具による結節沈線文や波状文を施す。胎土は、雲母の粗・細砂を含む特徴的なBタイプである。

勝坂2式(第293図463、PL180) 総数7点が検出されている。463は、横位や曲線状の隆線文に沿って篋状具の爪形文やペン先状具の三角押文を施す。

勝坂3式(第293図464・465、PL180) 総数16点が検出されている。464は、半截竹管状具による平行沈線文を横・斜位に施し、それに沿って篋状具の爪形文や三角陰刻文を施文する。465は、刻目を持つ縦位隆線文の両側に半截竹管状具の押し引きによる浅い爪形文を施す。胎土は、464が結晶片岩礫を含むCタイプである。

焼町土器(第293図466、PL180) 総数1点のみが検出されている。眼鏡状小突起に接続する隆線文に沿って、半肉彫的な単沈線文を施す。

加曾利E2式(第293図467、PL180) 総数3点のみが検出されている。467は口縁部に隆線区画内を施し、郷土式に近似した単沈線を羽状に充填施文する。また、胴部には半截竹管状具による蛇行状懸垂文を施す。

加曾利E3式(第293図468～473、PL180) 総数3,205点が検出されている。468・469は、口縁部の低平な隆帯文に沿った沈線区画文内や胴部の懸垂文間に、RL縄文を充填的に施文する。472・473は、それらと同様の胴部破片

である。他に、渦巻文を施す470・471の浅鉢土器がある。胎土は、Eタイプが主体を占める。

加曾利E4式(第293図475、PL180) 総数36点が検出されている。475は、口縁部及び胴部に断面三角形の横位微隆帯や同懸垂文を貼付し、区画内にLR縄文を充填施文する。

郷土式(第293図474、PL180) 総数4点が検出されている。474は、隆線の懸垂文や曲線文を施し、単沈線文を充填的に施文する。

③後期の土器

称名寺Ⅰ式(第294図476、PL180) いわゆる「加曾利E5式」を含む、総数13点が検出されている。476は鉢形土器の胴部破片であり、渦巻状の沈線区画文内にRL縄文を充填施文し、内外面に赤色塗彩を施す。

堀之内1式(第294図477～479、PL180) 総数52点が検出されている。「口部裝飾帯」を持つ478や、強い括れ部と8字状貼付文を持つ479は、「小仙塚類型」や「矢太神沼類型」に分類される深鉢土器であろう。477は、口縁にU字状沈線文や扁平楕円形状の沈線区画文を施す。胎土は、共にDタイプである。

加曾利B2式(第294図481・482、PL180) 総数4点が検出されている。482はいわゆる3単位突起深鉢で、突起部に接続して刺突文を施す。481は口唇部上面に刻目をもつ鉢形土器で、横線文内に刺突文を施す。胎土は、共に緻密なEタイプである。

後期後半(第294図480、PL180) 総数1点のみが検出されている。口縁部に、櫛状具による繊細な斜線文を施す。

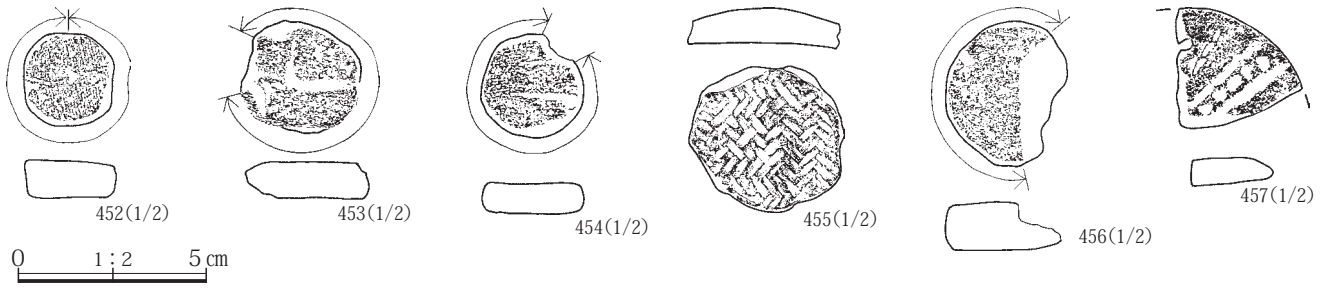
土器片加工円板(第294図484、PL180) 総数1点が検出されたのみである。有尾式深鉢土器の胴部破片を円形状に打割整形し、その縁辺部の全周に摩耗痕が認められる。

円盤状土製品(第294図483、PL180) 総数1点のみが検出されている。最大厚17mmの楕円形状土製品であり、表裏両面に細沈線のS字状渦巻文を施す。この渦巻文は、加曾利B1・B2式に見られるの字文に類似しており、同式段階の可能性もある。

h. 9 区

①早期の土器

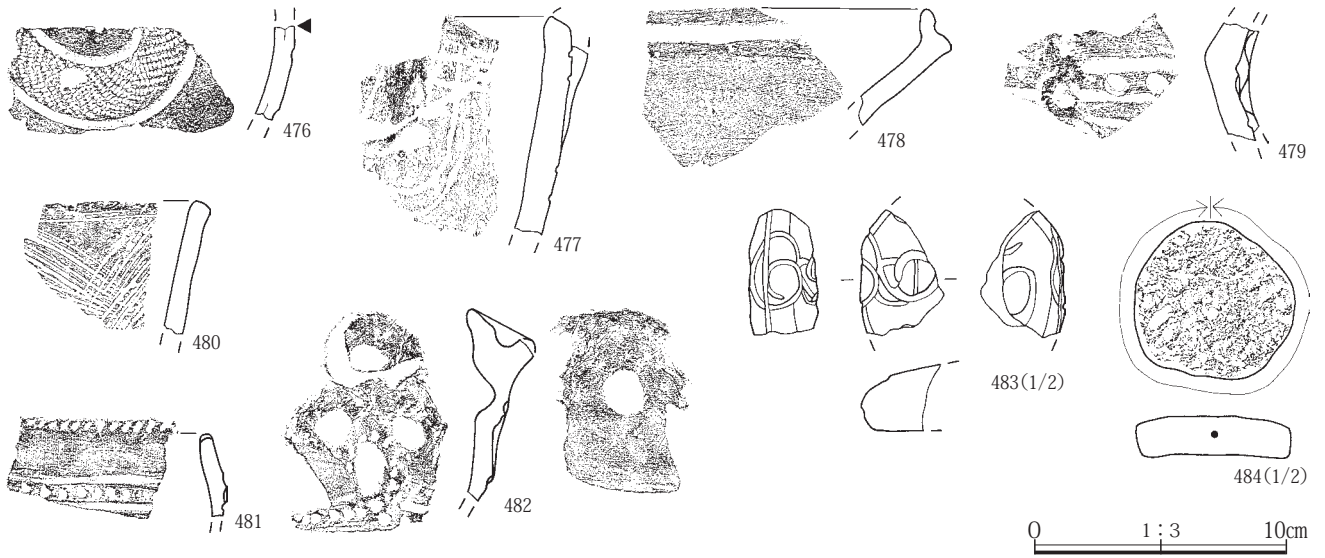
条痕文土器(第295図485、PL180) 総数5点が検出されている。458は、内外面共に条痕文を横位施文するが、



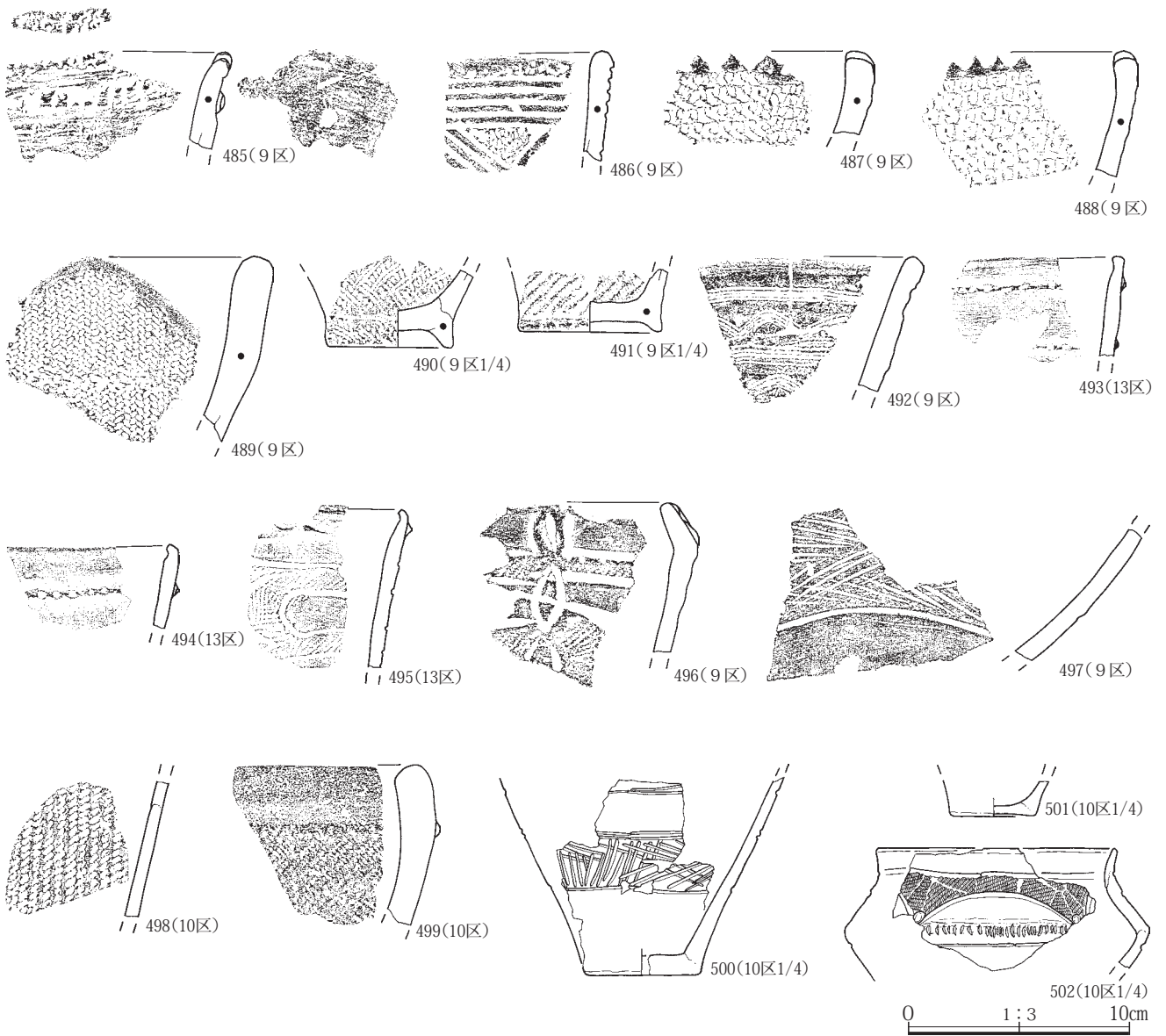
第292図 7区遺構外出土土器(14)



第293図 8区遺構外出土土器(1)



第294図 8区遺構外出土土器(2)



第295図 9・10・13区遺構外出土土器

内面は微弱。口縁部に横位の隆帯文を施し、口唇部上面と共にアナダラ属の貝殻腹縁文を連続施文する。

②前期の土器

関山Ⅱ式(第295図486～491、PL180) 総数542点が検出されている。半截竹管状具の重ね引き平行沈線で横線文や鋸歯文を施す486、環付縄文や0段縄丸組紐を横位・多段に施文する487～489、2種類の直前段合撚り縄文を横位・多段に交互施文する490等がある。胎土は、A4タイプが主体を占める。

諸磯b式(第295図492、PL181) 総数5点が検出されている。半截竹管状具の集合沈線で横線文や波状文を多段に施文する。

加曽利B2式(第295図496・497、PL181) 総数2点が検出されている。496は口縁部がく字状に短く内折し、口縁部から頸部にかけてLR縄文を充填施文した横帯文や縦連対弧文を施す。497は幅広の横帯文間に羽状沈線文を充填施文する浅鉢土器。胎土は、共にやや緻密なDタイプである。

i. 10 区

①前期の土器

諸磯b式(第295図498、PL181) 総数20点が検出されている。498はRL縄文を横位・多段に施文する。胎土は、結晶片岩礫を含む特徴的なCタイプである。

②中期の土器

加曽利E4式(第295図499、PL181) 総数17点が検出されている。499は口縁部に横位の微隆起帯を施し、LR縄文を横・縦位に施文して部分的な羽状の意匠を構成。

③後期の土器

加曽利B2式(第295図500～502、PL181) 総数18点が検出されている。502はやや幅広の横帯文を2段に施し、その区画内に羽状沈線文を充填施文する。501はいわゆるソロバン玉形土器であり、口縁部に磨消弧線文を施し、繊細なL縄文を充填施文する。また、屈曲部には篋状具の刻み目を施す。胎土は、D・E・Gタイプとやや多様である。

j. 13 区

①後期の土器

堀之内2式(第295図493～495、PL181) 総数6点が検出されている。493～495は、口縁部に横位刻目隆線文や沈線の横帯区画文を施し、内面口唇部下には横位沈線文

を施文する。胎土はDタイプが主体を占める。

C. 各調査区の石器出土状況

a. 1 区

総数53点の石器が出土している。石核・剥片を除く器種別の数量内訳は、部分的な加工・使用痕を有する剥片を含む削器類が6点と最も多く、次いで打製石斧4点、石鏃・楔形や凹石・敲石を含む磨石類が各2点の順となる。石器系列(以下、系列と略記)単位で見れば、打製系列14点、使用痕系列2点、複合技術系列1点であり、打製系列が主体を占めている。また、打製系列の母材である石核3点や調整剥片34点の存在を考慮すれば、調査区内に当該石材を持ち込んで同系列石器の製作が行われたことを示唆している。

b. 2 区

総数88点の石器が出土している。石核・剥片を除く器種別の数量内訳は、削器類が25点と最多を占め、次いで楔形6点、打製石斧4点、石鏃2点、石錐・石匙・磨石類・軽石製品が各1点の順となる。系列単位で見れば、打製系列39点、使用痕系列1点、複合技術系列1点であり、打製系列が主体を占める。また、同系列の母材である石核3点や剥片44点が存在する点は、先述の1区と類似した様相を持つと言える。

c. 4 区

総数223点の石器が出土している。石核・剥片を除く器種別の数量内訳は、削器類が59点と最多を占め、次いで楔形15点、石鏃11点、打製石斧8点、石匙4点、石錐3点、磨石類2点、磨製石斧と多孔石が各1点の順となる。系列別で見れば、打製系列が100点と全体の96%を占め、使用痕系列2点や複合技術系列2点を遙かに凌駕している。その母材の石核8点や調整剥片111点の存在も、打製系列の優位性と1・2区と同様の調査区内石器製作を示唆するものだが、7区に次ぐ出土数量の多さに注意を要する。

d. 5 区

総数71点の石器が出土している。石核・剥片を除く器種別の数量内訳は、削器類が16点と最多を占め、次いで打製石斧7点石鏃・石匙・磨石類が各2点、楔形・石皿が各1点の順となる。系列別で見れば打製系列が28点、使用痕系列3点の他は、複合技術系列は皆無である。他

に、打製系列と密接な関係性を持つ石核2点と調整剥片38点が存在する。

e. 7 区

総数1,837点の石器が出土している。石核・剥片を除く器種別の数量内訳は、削器類が203点と最多を占め、次いで打製石斧100点、磨石類40点、石鏃26点、楔形24点、石匙13点、磨製石斧10点、石皿8点、多孔石6点、台石3点、垂飾・石製品各2点、石錘・石棒・砥石が各1点の順となる。系列別で見れば、打製系列が366点と全体の83.2%を占め、次いで使用痕系列52点、複合技術系列22点となる。打製系列の母材の石核31点や調整剥片1,366点は、他区を圧倒する数量であり、打製系列を始めとする石器製作・加工の中核的場所として存在したことを示している。こうした様態は、前述した土器の出土状況とも軌を一にするものであり、前期の関山Ⅱ式期や中期の加曾利E2・E3式期を中心とした集落形成がその背景にあると考えられる。

f. 8 区

総数129点の石器が出土している。石核・剥片を除く器種別の数量内訳は、打製石斧が16点と最多を占め、次いで削器類14点、多孔石6点、楔形3点の順となる。系列単位で見れば、打製系列33点、複合技術系列6点の他、使用痕系列は皆無である。打製系列の母材となる石核が3点、剥片が87点が存在する点は、打製系列石器が主体

を占める状況と合致している。

g. 9 区

総数2点の出土にとどまる。その内訳は、削器類と剥片が各1点であり、当該区が221.21㎡の狭小面積調査であること考慮したとしても、出土土器が603点存在することに对比すれば、その僅少さの背景が問題となろう。

D. 出土石器の各系列と器種・石材組成

前述したように、各調査区から出土した全石器数量については、各系列を単位として器種・使用石材の状況を第21表に一括した。また、それらの相関性について視覚的な確認を容易にするため、第296・297図の円グラフによりその占有比率を表示した。

石核や剥片類を除いた各器種の合計は678点を数えるが、これを系列別に見れば打製系列の581点(86.5%)が最多数を占め、これに次いで使用痕系列60点(8.9%)、複合技術系列31点(4.6%)の順となる。また、全体的な石器組成比率では、削器類が324点(48.1%)と全体の5割弱を占め、打製石斧の139点(20.7%)がこれに次ぐなど、打製系列の優位性と共に特定器種が突出する傾向が顕著に認められる。

以下、系列別にみた各器種組成や使用石材比率等について概述する。

第20表 遺構外出土石器の調査区・器種別の数・重量一覧(縄文)

(重量:g)

調査区	打製系列													使用痕系列									
	石鏃		石錘		石匙		削器類		打製石斧		楔形		点数	磨石類		石皿		砥石		台石		点数	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
1	2	2.3					6	203.6	4	328.1	2	155.7	14	2	834.4								2
2	2	4.9	1	65.7	1	10.1	25	884.3	4	454.5	6	49.7	39	1	172.7								1
4	11	10	3	11.6	4	36.8	59	1400.8	8	2144.5	15	53.8	100	2	1404.6								2
5	2	5.6			2	28.2	16	604.8	7	520.1	1	9.7	28	2	769.3	1	631.4						3
7	26	24.7			13	163.8	203	7663.1	100	11308.5	24	295.2	366	40	23700.9	8	21693.7	1	383.2	3	7608.2	52	
8							14	1227.5	16	1152.9	3	38.6	33										0
9							1	5.2					1										0
合計	43	47.5	4	77.3	20	238.9	324	11989.3	139	15908.6	51	602.7	581	47	26881.9	9	22325.1	1	383.2	3	7608.2	60	

調査区	複合技術系列										その他						合計		
	磨製石斧		石錘		多孔石		石棒		垂飾		石製品		点数	石核		剥片			
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		点数	重量	点数	重量	点数	重量
1													0	3	394.9	34	305.4	53	2224.4
2													1	3	1893.1	44	417.7	88	4016
4	1	160.8			1	1925.4							2	8	890.8	111	798.4	223	8837.5
5													0	2	28	38	457.1	71	3054.2
7	10	900.5	1	20.2	6	28346.2	1	40.2	2	9.1	2	82.8	22	31	7862.2	1366	12756.4	1837	122858.9
8					6	290100.0							6	3	562.4	87	1191.2	129	294272.6
9													0			1	4.9	2	10.1
合計	11	1061.3	1	20.2	13	320371.6	1	40.2	2	9.1	3	146.1	31	50	11631.4	1681	15931.1	2403	435273.7

a. 打製系列の器種・石材組成

第21表に系列・器種別の組成一覧を掲示したが、当系列を器種系列により細分すれば(註2)、押圧剥離系列の石鏃・石錐、直接打撃系列の打製石斧・削器・石匙Bに分類される。これらの器種組成を数量順に並べると、第296図③のように削器類55.8%(324点)、打製石斧23.9%(139点)、楔形石器8.8%(51点)、石鏃7.4%(43点)、石匙3.4%(20点)、石錐0.7%(4点)となる。打製石斧と石鏃に関して形態判別可能な完形・準完形品で見ると、打製石斧では撥形と短冊形が各6点、分銅形が4点となる。また、石鏃では凹基無茎鏃が20点、平基無茎鏃と平基有茎鏃が各2点、凹基有茎鏃と凸基有茎鏃が各1点である。

総体的な使用石材は、同図④のように黒色頁岩が49.5%(285点)と5割弱を占め、当系列における同石材の優位性が際立っている。また、細粒輝石安山岩15.1%(87点)、黒色安山岩9.5%(55点)、黒曜石7.5%(43点)、チャート7.1%(41点)も多見され、黒曜石を除いて群馬県内に産出する石材を多用している。

一方、器種別の最多使用石材では、削器・打製石斧・石匙・石錐が黒色頁岩を、楔形石器が黒曜石、石鏃が黒色安山岩を選定している。2・3番手の使用石材に関しては、各器種共に全て異なっており、多様な石材選定傾向を看取することもできる。2・3番手の石材を一括した場合には、細粒輝石安山岩を使用する器種には削器と打製石斧、同じく黒色頁岩は楔形石器、黒色安山岩は削器、黒曜石は石鏃、チャートは石鏃・楔形石器などに分かれるものの、削器と打製石斧の間には主用石材の類似性が認められる。また、主用石材は若干異なるが、黒色頁岩や黒曜石を多用する石鏃と楔形石器の間にも近似した様相を窺うことができる。このような異器種間における使用石材の共通性は、製作工程や素材剥片作出工程における有機的関係を示すものだろう。

石鏃の主用石材に関しては、珪質頁岩を除いて各石材とも僅差であるが、黒色安山岩が14点と最多を占めている。群馬県北・西部域においては、石鏃の石材には押圧剥離に適した黒色頁岩が多用され、黒色安山岩は僅少となるのが通例である。これを先の形態別で見ると、黒色安山岩を使用するのは凹基無茎鏃にほぼ限定されており、時期的にも前期を中心としたかなり限定的な現象である可能性が高い。

b. 使用痕系列の器種・石材組成

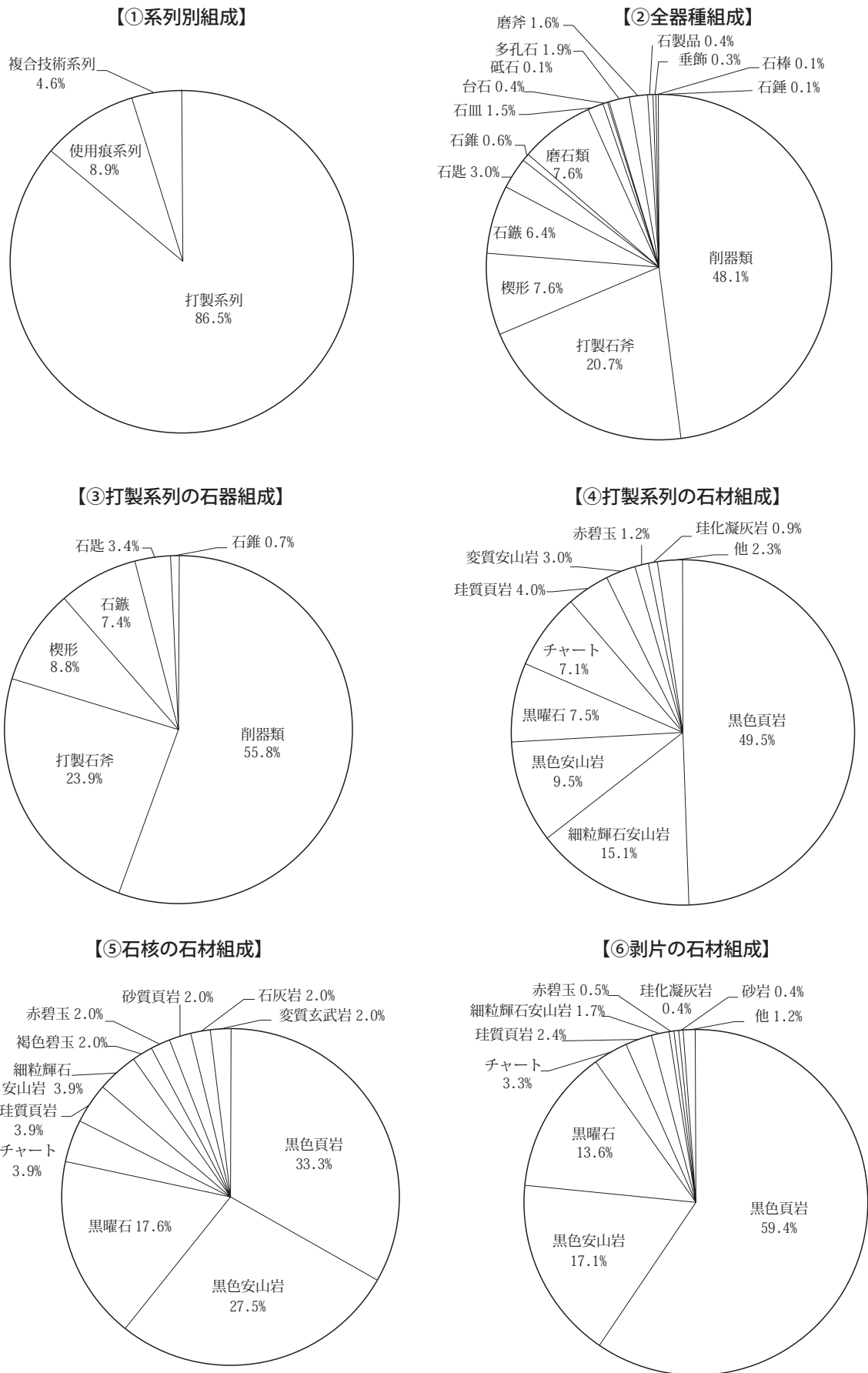
当系列の器種については、第297図⑦にその組成比率を掲示したが、主体を占めるのは磨石・凹石・敲石を包括した磨石類の77%(47点)であり、次いで石皿16.4%(10点)、台石4.9%(3点)、砥石1.6%(1点)となる。磨石類を除いて各器種共に僅少であり、全体的な傾向を分析するためのサンプル数としては精度に欠けるが、磨石類が他器種を凌駕する点は明瞭と言える。

使用石材との関係では、⑧図のように粗粒輝石安山岩が81.7%を占めており、磨石類をはじめとする当系列器種の主用石材となっている。こうした斉一的な石材選択は、「叩く・磨る」という用途に適合した硬さ・粘り等の性状が粗粒輝石安山岩に備わっていたことに起因するが、同時に当石材が榛名山麓を流下する小河川や吾妻川などの近隣の河床に多出することとも関連性を有する。また、当然のことでもあるが、機能・用途が異なる打製系列の石材選択とは明確な差異が認められる。

c. 複合技術系列の器種・石材組成

当系列を器種系列に細分すると、非機能系列の多孔石・石棒と機能系列の磨製石斧・石錘、装身系列の石製品・垂飾に分類され、後述するように各器種系列の石材選択には相互に大きな差異が認められる。当系列の石器は総数31点と僅少ではあるが、⑨図の器種組成比率を器種系列別に見ると、非機能系列の多孔石が41.9%(13)と最多数を占め、同系列の石棒は3.2%(1点)となる。次に機能系列では磨製石斧が35.5%(11点)、石錘が3.2%(1点)であり、装身系列では石製品が9.7%(3点)、垂飾が6.5%(2点)となる。

各器種系列と石材選択との関係性を見ると、非機能系列の多孔石は全て粗粒輝石安山岩であり、石棒は変質玄武岩を用いている。機能系列の磨製石斧は変質蛇紋岩3点、変玄武岩・蛇紋岩が各2点、変質安山岩・珪化凝灰岩各1点が主用石材であるが、各石材共に素材としての原石や石核が存在しないことから、製品として遺跡内に搬入された可能性が高い。また、石錘は変質玄武岩であり、石核や剥片の存在から当遺跡内での製作と想定される。装身系列では、垂飾が岩石明不明の緑色透明鉱物、石製品3点が玉髓・軽石・変質安山岩に分かれるが、いずれも原石・石核が存在しない点で、磨製石斧と同様に遺跡外からの搬入品の可能性が高い。



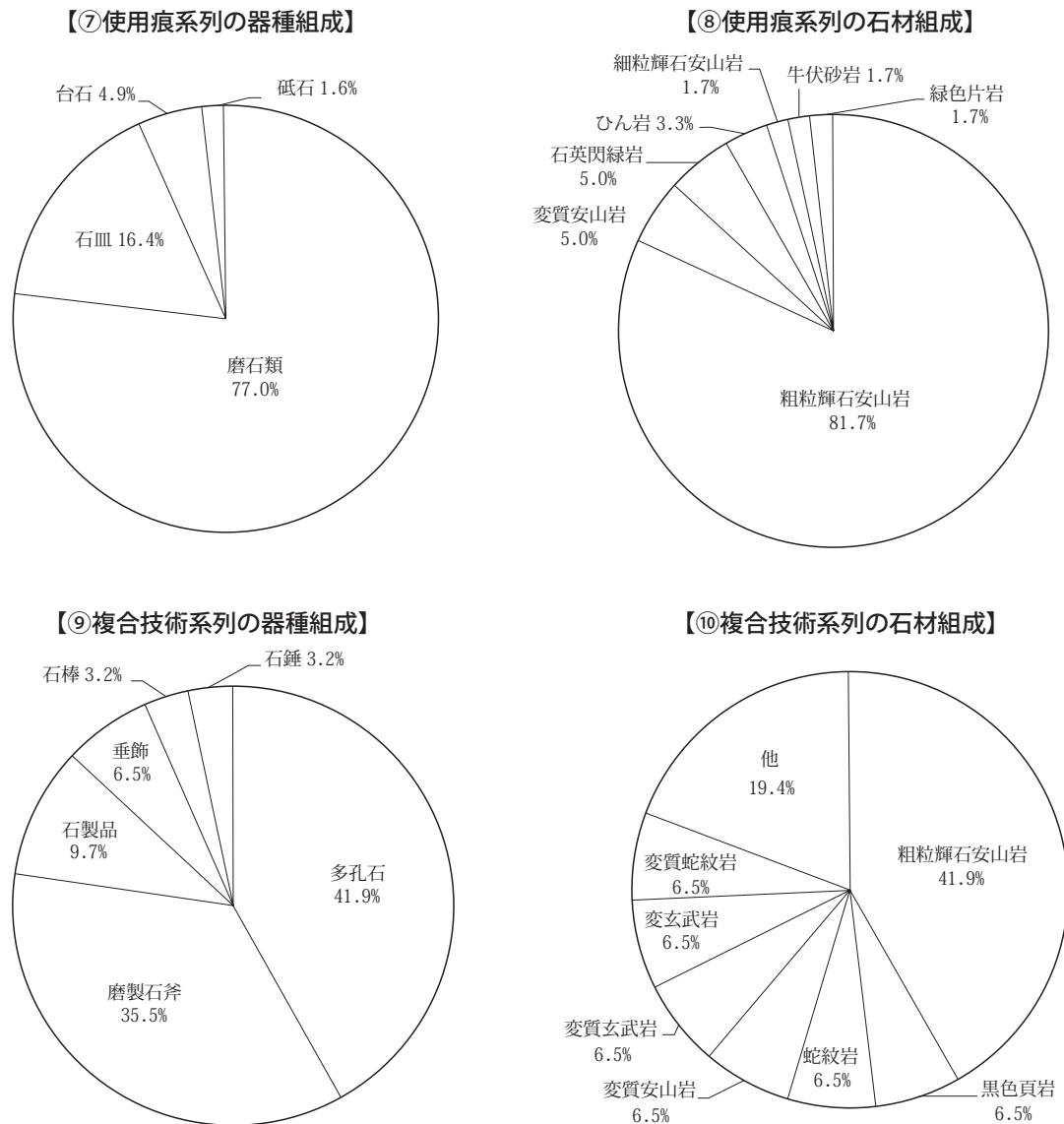
第296図 遺構外出土石器の系列・器種別組成(1)

d. 石核・剥片の石材組成

上記の打製系列石器石材との有機的関係性を持つのは、石核50点と素材・調整剥片類1,681点の存在である。第296図⑤⑥にその石材組成比率を図示したが、両者共に黒色頁岩が最多を占め、黒色安山岩・黒曜石・チャート・珪質頁岩の順となる点で一致しており、各石材を当遺跡内に持ち込んで打製系列を中心とした石器製作が行われたことを示している。ただし、④図の打製系列石材組成と比較した場合、黒色頁岩が主体を占める点では合致しているが、細粒輝石安山岩の比率がかなり僅少なことに注意を要する。細粒輝石安山岩は、打製石斧の主要石材の一つであり、その調整剥片を副次的に削器類が利用したと考えられるが、55点を数える打製石斧の存在に比べて、当該剥片数が29点なのはやや僅少な過ぎる。可

能性としては、調査区域外に当該石材を用いた打製石斧を主体とする加工場の存在が考慮される。また、石鏃の主用石材の一つである黒曜石の残核を含む石核は9点存在し、その重量は4.6~38.7gとややばらつきがあるが、10g以下が70%弱を占める。ちなみに、8区75号住居から出土した第184図19の黒曜石製石核は87gと唯一50gを超える中形品であるが、他例はいずれも30g以下である。また、未掲載だが1点が確認されている同石材の原石は、44gであり、これらを総合すれば当初から石鏃製作を目的として小形原石の黒曜石が搬入されたと推定される。

一方、使用痕系列や複合技術系列の石器に散見される牛伏砂岩・軽石・蛇紋岩・石英閃緑岩・ひん岩・変玄武岩・変質蛇紋岩・緑色片岩・緑色透明鉱物等の石材は、



第297図 遺構外出土石器の系列・器種別組成(2)

石核・剥片ともに検出されていないことから、当遺跡外からの搬入品である可能性が高い。

E. 系列・器種別の掲載石器の内容

a. 打製系列

石 鏃(第298図1～31、PL181) 総数43点中の31点を掲載した。形態別では、基部が逆U字状に挟れる所謂鍬形鏃(1)、逆V字状に挟れる凹基無茎鏃(2～20)、平基無茎鏃(21～23)、凹基有茎鏃(24・25)、平基有茎鏃(26～28)、凸基有茎鏃(29・30)等がある。出土点数や完形品が少ないため、各形態ごとの正確な寸法把握は困難だが、凹基無茎鏃の場合は長さ17～29mm、基部幅11～19mm、重量0.6～0.8gと相互にかなりの差異があり、大小の種別と共に基部作出に複数のパターンが認められる。尚、No.13・15は体部中央を研磨した局部磨製石鏃である。平基無茎鏃は長さ17～32mm、基部幅11～21mm、重量0.4～1.7gであり、大小や側縁形状・長幅比の点で各石鏃とも相当の差異がある。凹基有茎鏃は長さ21～24mm、基部幅13mm前後、重量0.8～1.0gであり、他形態の有茎鏃に比してやや小形である。平基有茎鏃は茎部の欠損が目立つが、推定長30～37mm、基部幅15～18mm、重量1.4～2.0g前後であり、鏃身部中央までの深い押圧剥離や直線的な鋸歯縁が特徴的である。凸基有茎鏃は大・小形に二分され、前者のNo.29は長さ49mm、基部幅18mm、重量3.1gであり、他形態の石鏃を遥かに凌駕する長大さと、鏃身部中央までの深い押圧剥離が特徴的である。後者は推定長17mm、基部幅10mm、推定重量0.6gである。

各石鏃の帰属時期については、不明確なものが多い。1の鍬形的な石鏃は基部の作りがやや分厚く、早期の押型文段階に特徴的な薄作りの形態とは異なる。また、2～20の凹基無茎鏃は、前期～晩期にまで認められる形態である。13・15の局部磨製石鏃は後期中葉、24～30の有茎鏃は後期～晩期段階と推定されるが、26～28の平基有茎鏃は「後谷型石鏃」(註3)に近似することから、晩期に比定されよう。また、長さ49mmと長大な29の凸基有茎鏃は、チャートを用材とする点を含めて、後期末葉～晩期前葉の「安通型石鏃」(註4)に比定される。尚、21の五角形状の平基無茎鏃は、早期段階と推定される。

楔形石器(第298・299図32～43、PL182) 総数51点中の12点を掲載した。対向する上下や左右の両端に、階段

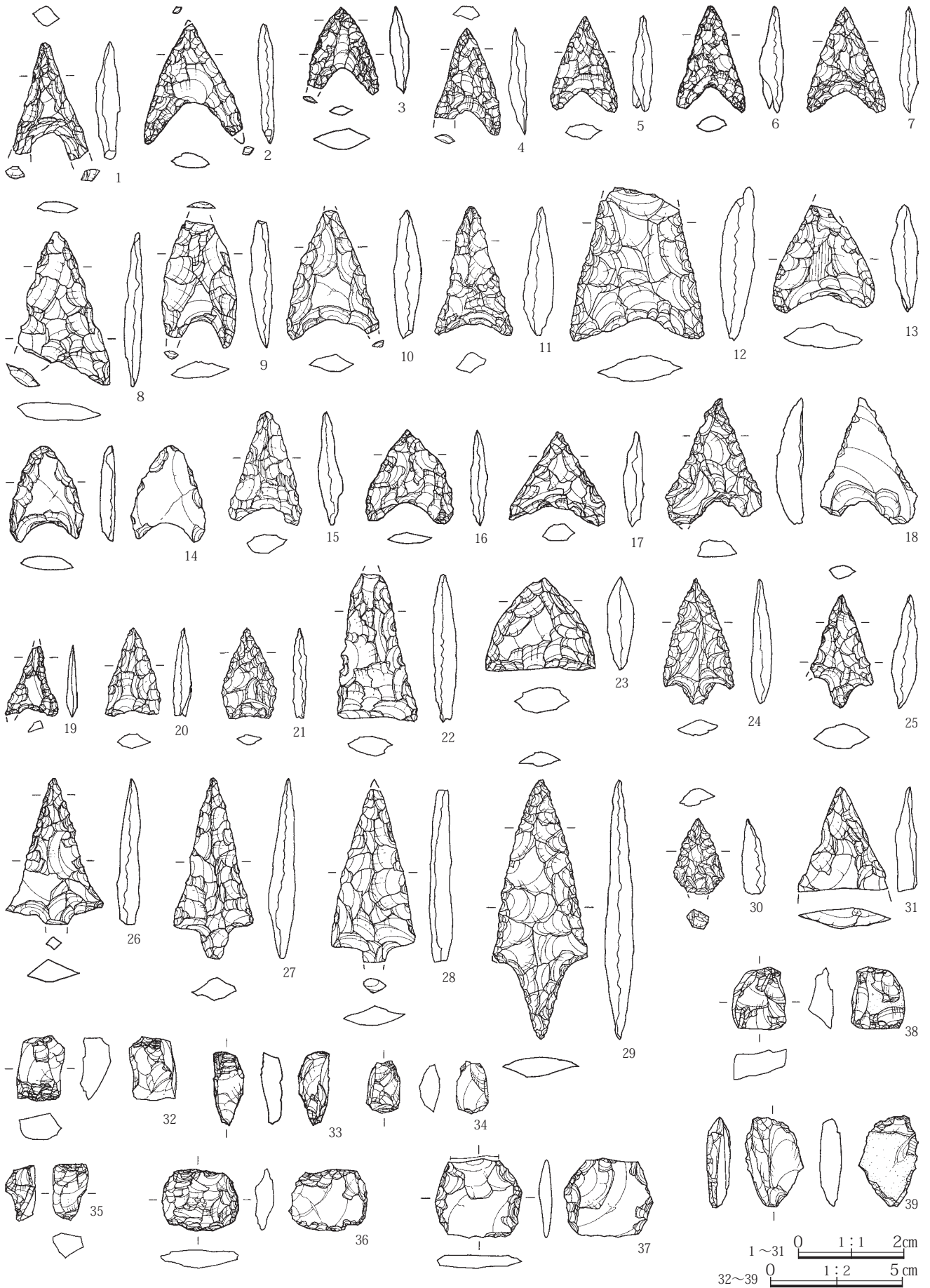
状の両極加撃痕が認められる一群である。その大半は縦20～35mm、横10mm前後、重さ5～10gの剥片を素材としているが、黒色頁岩や黒色安山岩の剥片素材については、打製石斧などの加工過程で産出した調整剥片を再利用したものであろう。一方、黒曜石を素材とする34・35・38などの小形品は、石鏃製作過程において小形石核からの剥片剥離を両極加撃法により作出した素材剥片の可能性もある。尚、図掲載されていないが、石匙や削器類に用いられる赤碧玉の剥片素材も3点認められる。

石 匙(第299図44～56、PL182) 総数20点中の13点を掲載した。44～51の8点が横型であり、52～56の5点が縦型である。横長や縦長の楕円形状の剥片を素材として、両型ともにその素材形状をあまり改変することなく、片面側を中心にしてやや粗い押圧剥離により刃部を作出する。横型の場合、摘み部が体部中央からやや左右に偏在するものが多く、正三角形の整った形態を持つNo.45のような例は僅少である。また、摘み部の作出に際しては、裏面の打瘤部分を折り取るか切除加工をしているものが多い。大きさは、横型が縦幅40mm前後・横幅40～60mm前後・重さ9～20gであり、縦型が縦幅50～70mm前後・横幅24～40mm前後・重さ8.5～17gとなる。

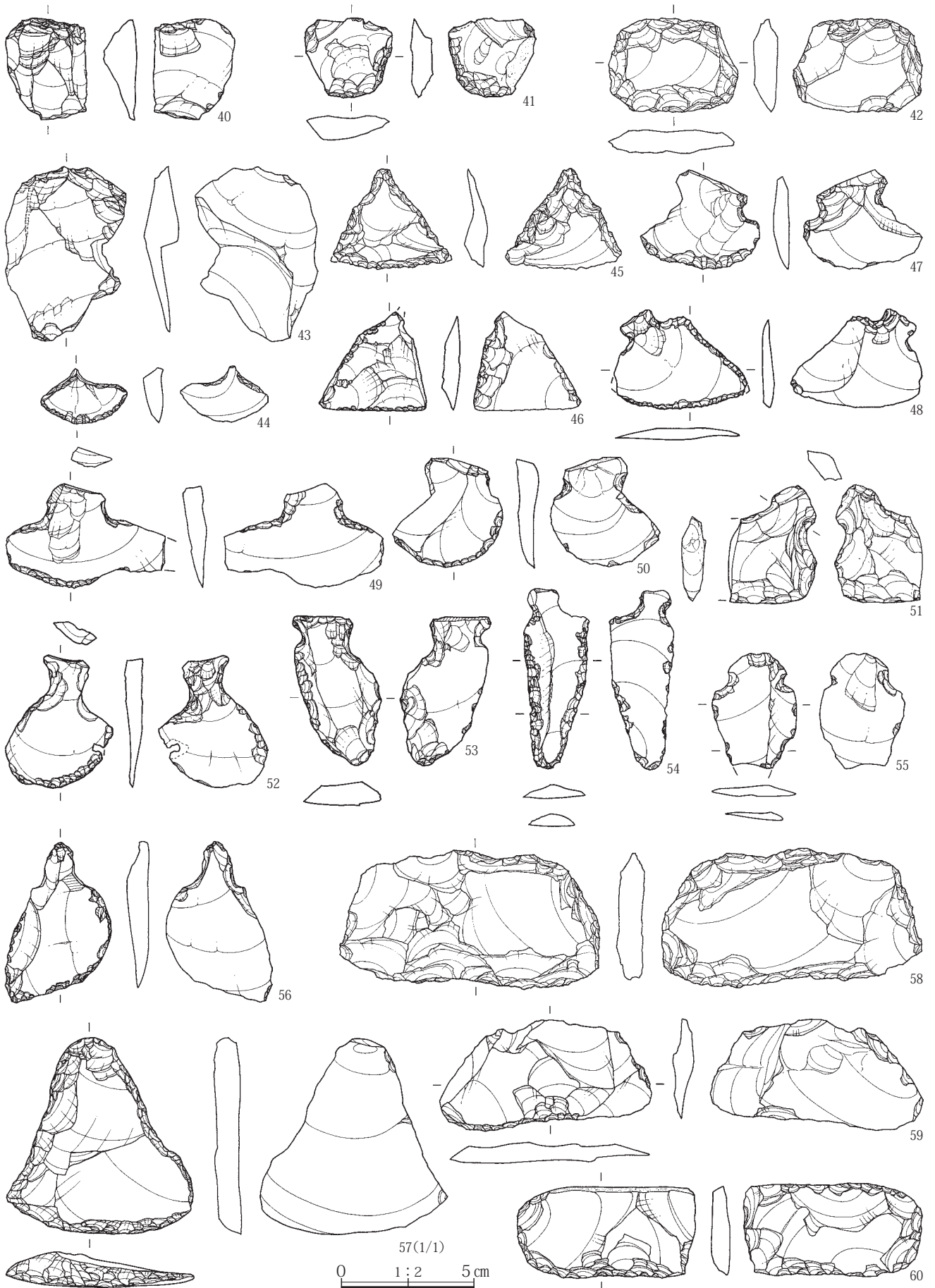
石材は黒色頁岩が主体を占めており、同石材を多用する打製石斧を中心とした打製系列の剥片剥離工程や素材剥片作出工程とも、密接な関連性を窺うことができる。尚、黒曜石製は皆無であり、他に比べてやや丁寧な加工を施す横型のNo.44は赤碧玉、縦型のNo.54は珪質頁岩を使用などの点は、注意を要する。

搔 器(第299図57、PL182) 第20・21表には削器類として一括したが、明瞭なのは1点のみである。三角形の大形素材剥片を用材として、裏面からの片面加工により下縁部に機能部を作出する。石材は珪質頁岩を使用。

削器類(第299・300図58～67、PL182・183) 総数324点中の9点を掲載した。不定形の横長・縦長剥片を用材として、その縁辺部にやや粗雑な刃部加工を施すものと、刃こぼれ状の使用痕を有する二者があるが、ここでは両者を合わせて削器類とした。こうした剥片形状と機能部位の関係については、正確な分類・分析をしていないが、およそ横長剥片は下縁部を、また縦長剥片は両側縁部を機能部とするケースが目立つ。No.67は便宜的に削器に分類したが、加工により稜線部や先端部が作出された長さ



第298図 遺構外出土石器(1)〔石鏃・楔〕



第299図 遺構外出土石器(2) [楔・石匙・削器]

120mmを超える断面三角形の石器である。用途は判然としないが、先端を機能部とした刺突具的な使用も想定される。大小様々な剥片を利用しているが、掲載した各石器の平均的な大きさは、長さ64mm×幅59mm×厚さ12mmで、重量は49gを測る。尚、石材については前述したように、黒色頁岩を多用している。

石 錐(第300図68～71、PL183) 総数4点のすべてを掲載した。小形剥片を使用して、押圧剥離により機能部を作出するが、No.70・71のような細長いピック状の機能部を持つものと、68・69のように下端部を尖頭状に加工するだけの二者がある。前者は機能部欠損のため、全長は不明。石材は、71がチャート以外は全て黒色頁岩。

打製石斧(第300・301図72～89、PL183) 総数139点中の18点を掲載した。形態的には、No.72～77の撥形と78～85の短冊形、86～89の分銅形に分類される。これを「水平回転技法」と「垂直打撃法」(註5)の製作技術の観点から見ると、撥形の75～77や短冊形の80・82は前者の技法であり、分銅形を含む他の全てが後者の技法により制作されている。両技法ともに前期中葉段階に出現するが、「水平回転技法」がより古段階とされており、傾向的には撥形に同技法が多見される。72～75・77・79・82・83・85の体部上位から基部にかけた両側縁と、86・87・89の挟入部の両側には、着柄痕と想定される磨滅や潰れが認められる。また、各石器ともに程度の差はあるが、刃部から体部中位を中心として縦方向の線状痕を伴う磨耗痕が認められる。形態別の大きさは、撥形が長さ77～129mm・刃部幅45～67mm・重さ53～146g、短冊形が長さ77～110mm・刃部幅38～52mm・重さ33～221g、分銅形が長さ87～105mm・刃部幅43～84mm・重さ56～295gとなる。各形態ともに、数値的にかなりのばらつきがあるが、破損時の刃部再生に伴う器体縮小や異時期の混在が想定される。特に、「水平回転技法」により加工されるものは、器厚が薄い傾向にある。

使用石材は、72が珪質頁岩、75・79・84が変質安山岩、80・85・87が細粒輝石安山岩、83が粗粒輝石安山岩の他は、全て黒色頁岩である。

各石器の帰属時期は、「水平回転技法」によるものは前期中葉段階に、他の撥形・短冊形は前期後葉～後期段階、分銅形は中期後半～後期段階と想定されるが、88・89のノッチ状挟入部を持つ分銅形は後期段階であろう。

石 核(第301図90～92、PL183) 打製系列の素材として、総数50点中の3点を掲載した。石材は90・91が黒色安山岩、92が黒色頁岩であり、各石核ともに河床の円礫を素材とするが、前者は小形礫を後者は大形礫を使用している。作出可能な素材剥片の大きさを考慮すれば、前者は石鏃等の小形品用であり、後者は打製石斧等の大形品を対象とする石核であろう。ちなみにその重量は、前者が87g・105g、後者が1,532gである。

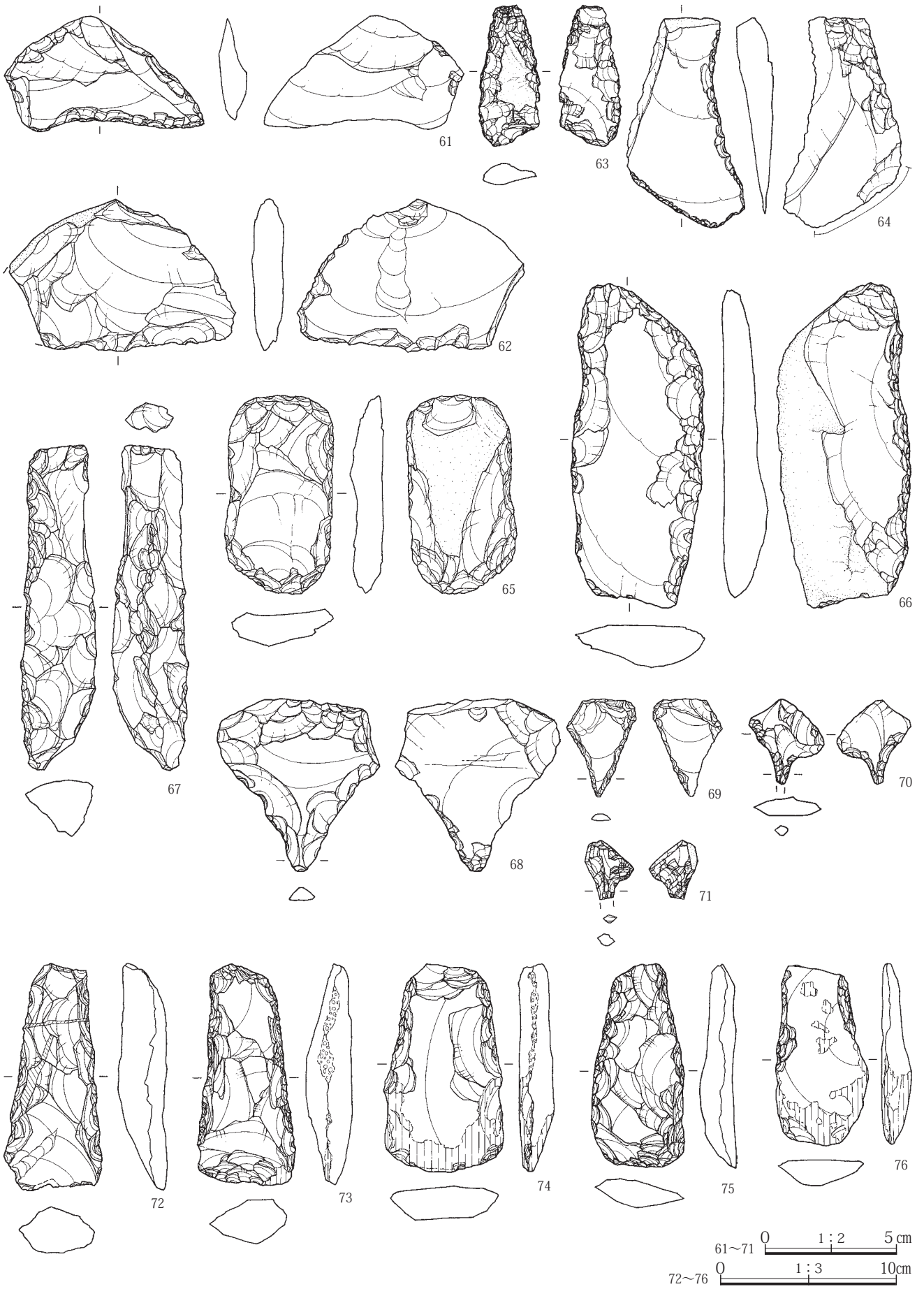
b. 使用痕系列

磨石類(第302図103～113、PL184) 総数47点中の11点を掲載した。ほぼ片手で掌握できるサイズの円形や楕円形状の扁平な河床礫を素材として、その表面に使用による凹み穴・敲打痕・磨り面(磨耗痕)等が複合的に存在するものを一括した。表裏両面に凹み穴と磨り面を持つ105・108・110～113、片面に凹み穴と両面に磨り面を持つ104、両面に磨り面と下端部に敲打痕を持つ109、両面に磨り面のみを持つ103・106・107等がある。凹み穴と磨り面・敲打痕の形成時における新旧関係については、詳細な観察が未実施のため全体的傾向は不明だが、凹み穴の形成後に磨り面が重複する状況も多見される。大きさは、103～105・110のように長径が14cm以上、重さが700～1,300gの大形品と、108・109・111～113のような長径10～12cm、重さ280～400gの中形品、106・107のような長径8cm以下、重さ250g以下の小形品に分類できる。石材は、粗粒輝石安山岩が8点(73%)と最多を占め、他に石英閃緑岩と変質安山岩が各2点認められる。

石 皿(第303図115～119、PL184) 総数10点中の5点を掲載した。有縁石皿の116～118と、無縁石皿の115・119に大別される。有縁石皿はいずれも分割・欠損しており、人為的な破壊が想定される。無縁石皿2点は完形品であるが、115は長径26cm、重さ7.3kgであるのに対して、119は長径14cm、重さ1.3kgと小振りである。石材は5点が粗粒輝石安山岩を使用し、117の1点のみが緑色片岩を使用している。

各石皿の帰属時期については確定できないが、有縁・脚付きや隅丸長方形の形態を持つ116は、前期の可能性が高い。また、明瞭な縁を形成する118や播鉢状に深く窪む117は、中期に比定される可能性がある。

砥 石(第302図102、PL184) 総数は掲載した1点のみである。表牛伏砂岩を素材として、表面には縦方向の



第300図 遺構外出土石器(3) [削器・錐・打斧]



第301図 遺構外出土石器(4) [打斧・石核・磨斧]

細かい線条痕が、側面部には部分的な砥面が認められる。また、表面には研磨時に付着したと思われる、長さ5mm程度の頁岩の碎片が散在し、磨製石斧や垂飾等の装身具の製作に関連して使用されたと想定される。

c. 複合技術系列

磨製石斧(第301・302図93~100、PL183・184) 総数11点中の8点を掲載した。8点中7点が欠損品であるために、全長や重量等は不明のものが多い。93・95・96は基部~体部中位付近で欠損し、97~100は刃部~体部中位付近で欠損している。形態別に見ると、94は長さ55mm、幅18mm、重さ16gの小形品であり、他とは機能・用途が異なると考えられる。左側縁に擦り切り加工に伴う長軸方向の線状痕が残る。93・95~97は定角的なものだが、93は大形品で他は小形品である。98~100はいわゆる乳房状の磨製石斧であり、98は他に比べてかなりの大形品である。尚、93は破断面に磨耗による光沢が認められ、破損後にも再利用された可能性がある。

石材は、93・95・96・98のように蛇紋岩類を使用するものが主体を占めるが、他に珪質頁岩の94、珪化凝灰岩の97、変質安山岩の99、変玄武岩の100などもあり、かなり多様である。珪質頁岩を除いた他の石材については、石核が検出されていないことから、遺跡外から製品として搬入された可能性が高い。

帰属時期については、その形態から乳房状の98~100が前期、定角的な93・95~97は中期後半~後期と想定される。

石 錘(第302図101、PL184) 総数は掲載した1点のみである。長径42mm、厚さ8mm、重さ20gの扁平な小形円礫を使用し、上下両端の長軸方向に抉入状の加工を施す。下端の抉入部には磨耗痕が認められる。石材は変質蛇紋岩である。

多孔石(第304・305図126~133、PL185) 総数13点中の8点を掲載した。不定形な粗粒輝石安山岩の垂角礫を素材として、整形加工を施さずに用いている。各個体ともに、多数の凹み穴が付されているが、穴の形状は錐挟み状の回転運動による逆円錐形を呈するものを主体に、集合打痕状の凹み穴が少数存在するのが特徴的である。この二種の凹み穴は、前者が最終形態と考えられ、当該石器の機能・性格を考える上で注意を要する。各個体の大きさは、126・128・130の小形品が長径25cm前後、重

さ6.4~8kgであり、他の大形品は長径39~57cm、重さ43~68kgとなる。前者の小形品3点は人による移動が容易であるが、後者の5点は重量的にその場に据えられていた可能性もある。また、前者2点が7区出土に対して、後者はいずれも8区に集中しており、固定型とも言える大形の多孔石を用いた祭儀礼が、同区域で執行されていたことを示唆している。

石 棒(第303図120、PL184) 総数は掲載した1点のみである。有頭の小型石棒であり、頭部は先端が刃部状に薄く加工され、その中位の両側縁には抉入状の切れ込みが施される。使用石材は変質蛇紋岩に分類されるが、打製石斧や削器類に使用されている同石材とは異なり、搬入品の可能性もある。

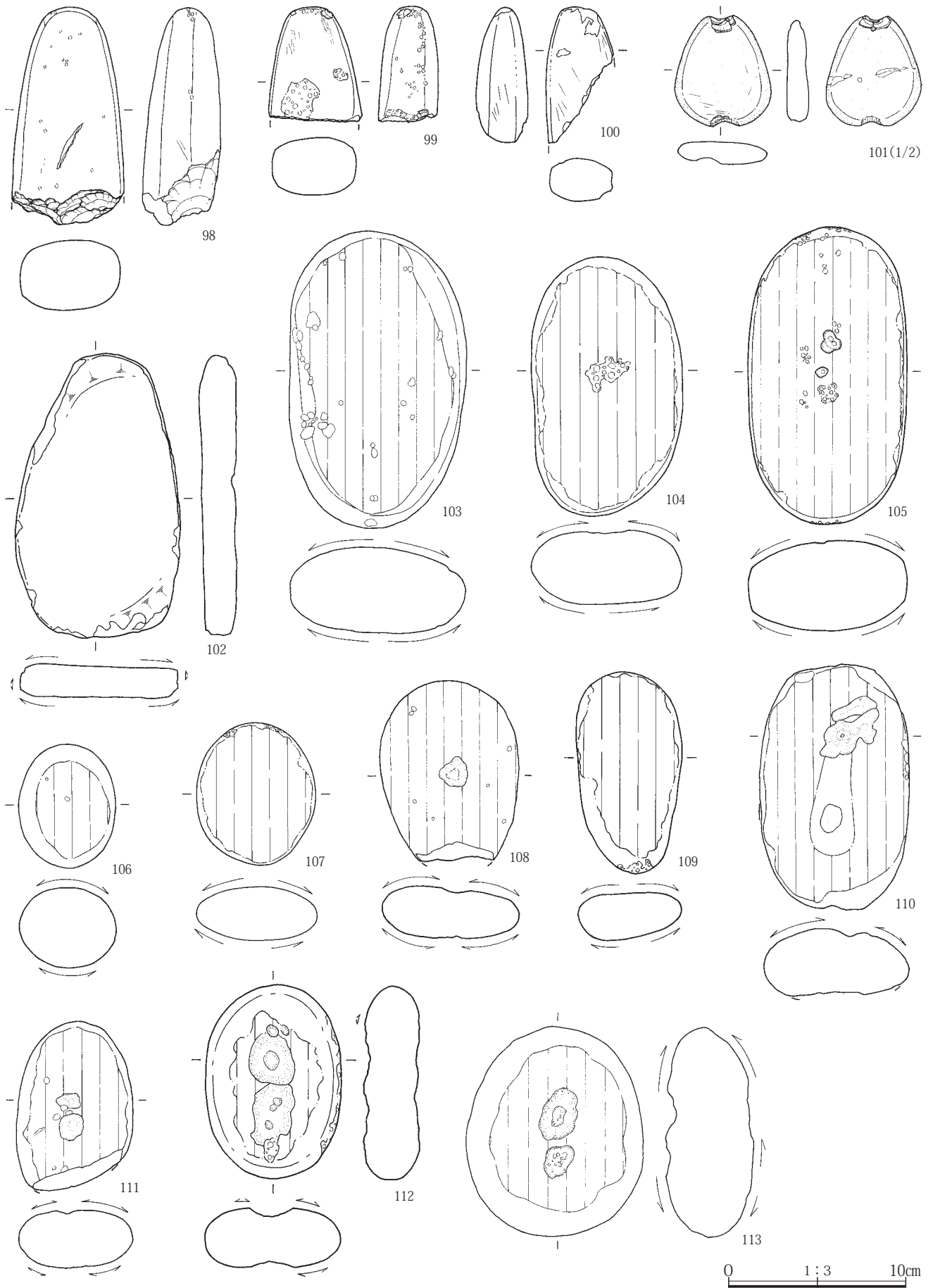
帰属時期については確定できないが、後期前半~後半段階と想定される。

垂 飾(第303図121・122、PL184・185) 総数は掲載した2点のみである。121は方形状、122は不定形であるが、ともに全体的に研磨され、貫通孔を有する点で共通している。前者は、下端の折断面中央部に片側からの直径2mmの穿孔が認められ、この断面は折断後に研磨・再生されている。後者は、表面に直径4mmの穿孔が、裏面には未貫通の同1mmの凹み穴が認められる。石材は前者が黒色頁岩を使用し、後者は不明だが緑色の透明鉱物を使用している。

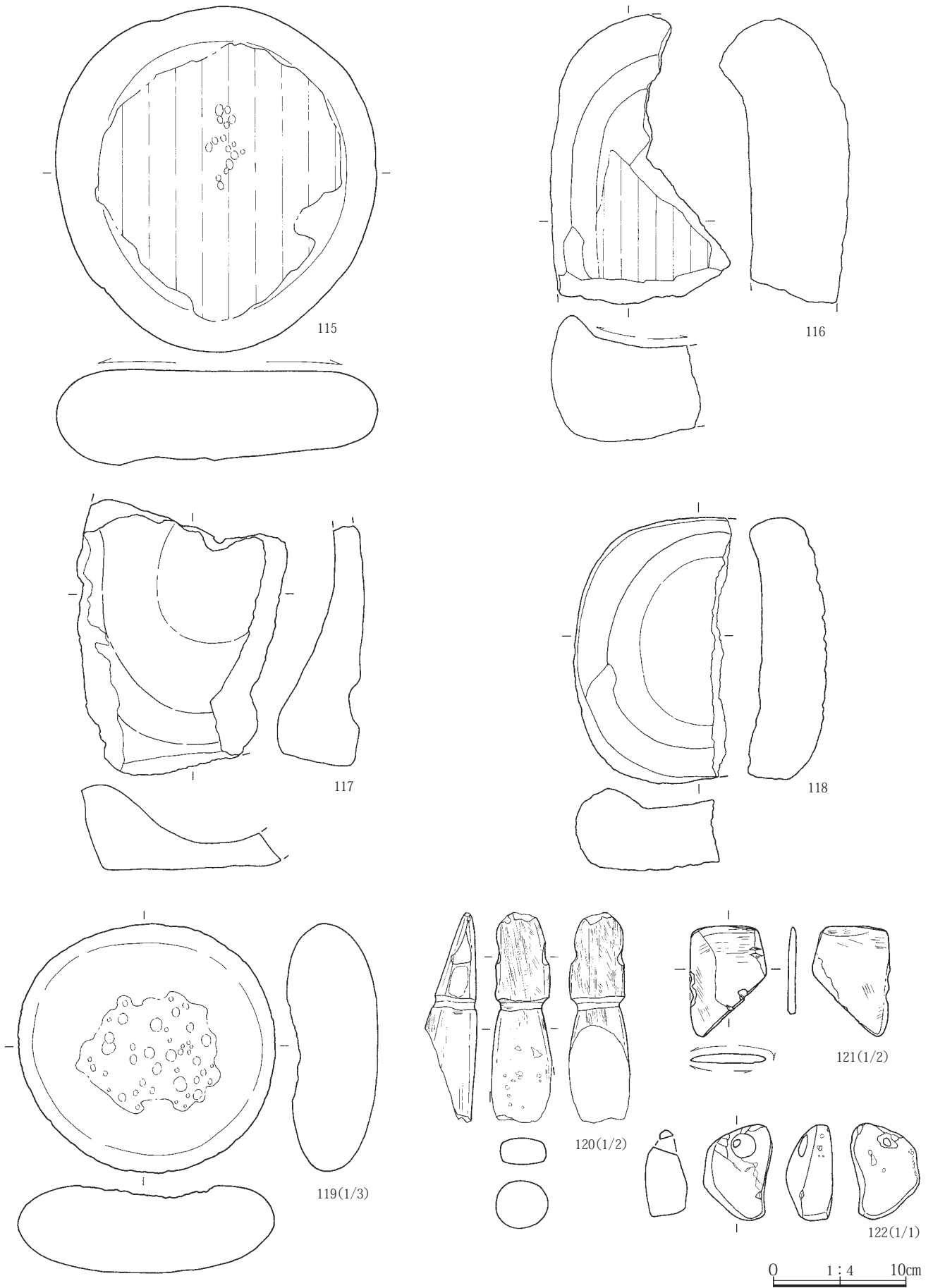
石製品(第304図123~125、PL185) 総数は掲載した3点のみである。各製品の機能・用途は不明であり、使用する石材も相互に異なる。123は軽石を素材として、直径8mmの貫通孔を1箇所、未貫通孔を7箇所に施す。124は玉髓の扁平小円礫を素材として、短軸方向の両側縁に打製石斧製作の「垂直打撃法」と類似した抉入状の加工を施しており、石錘的な用途も想定される。125は表裏面が全体的に滑らかで、表面上方に漏斗状の凹みを持つが、砥石の可能性もある。

註

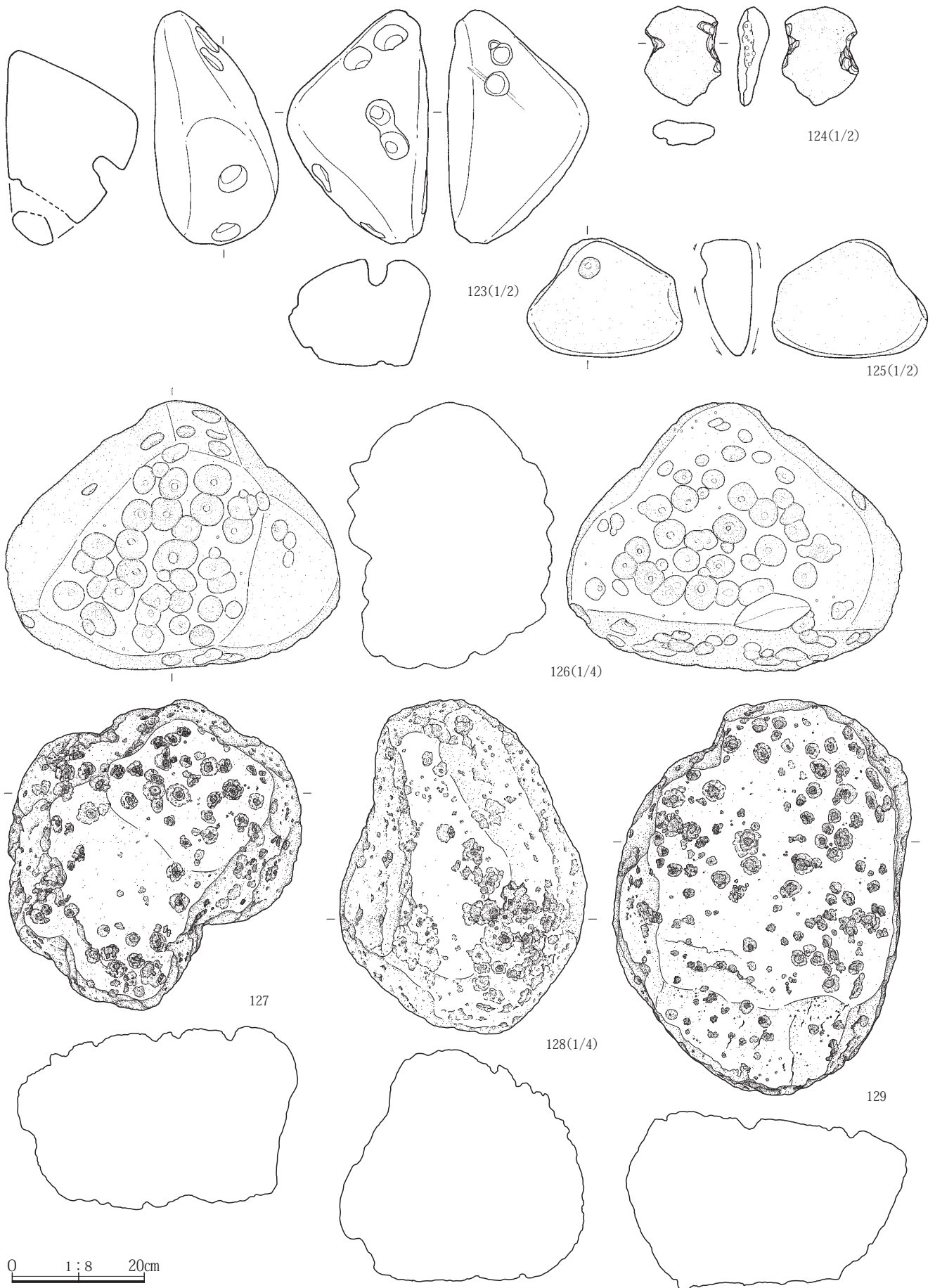
1. 大工原 豊 2008『縄文石器研究序論』六一書房
2. 註1に同じ。
3. 西井幸雄 2017「後谷型石鏃について」『石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備』
4. 大工原 豊 2017「安通型石鏃の研究—群馬地域の後・晩期の石鏃型式」『石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備』
5. 註1に同じ。



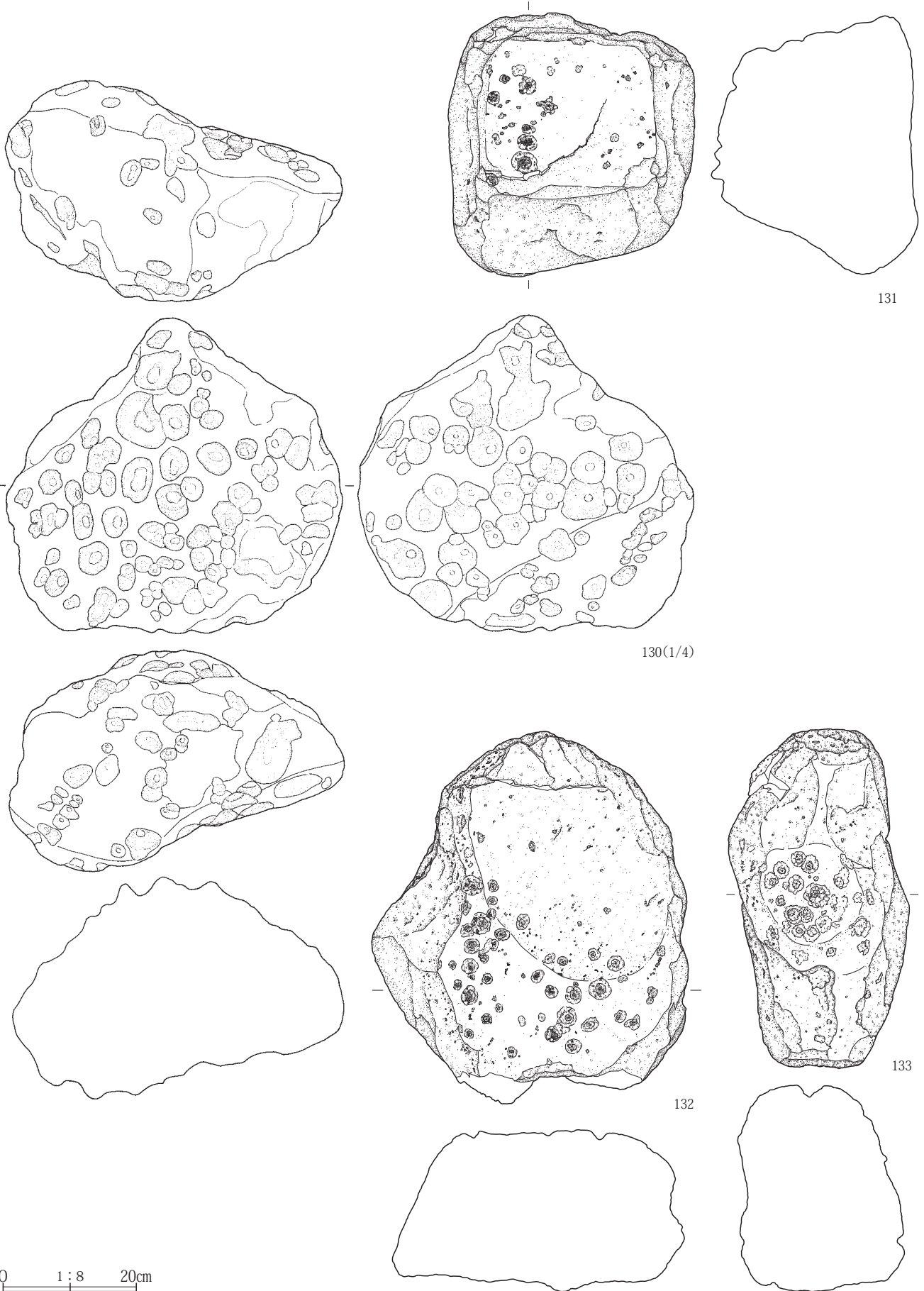
第302図 遺構外出土石器(5)〔磨斧・石錘・砥石・磨石類〕



第303図 遺構外出土石器(6)〔石皿・石棒・石製品〕



第304図 遺構外出土石器(7)〔石製品・多孔石〕



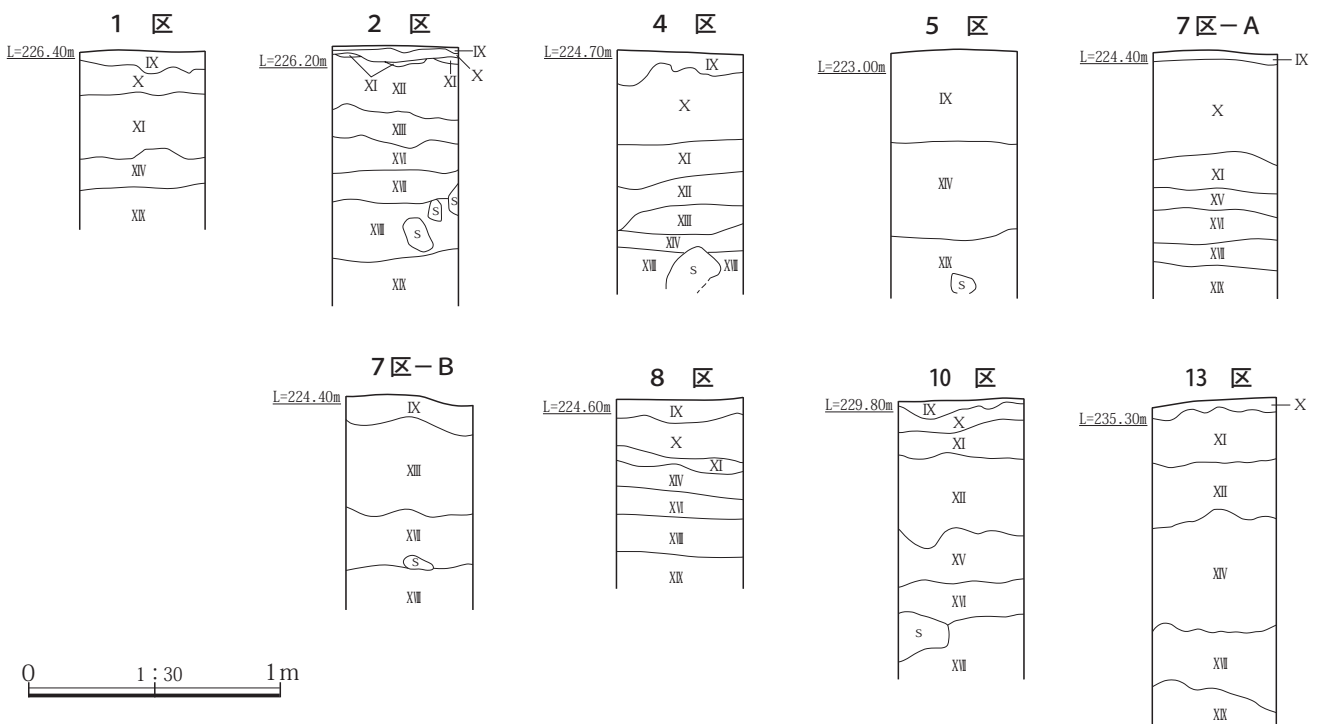
第305図 遺構外出土石器(8)〔多孔隙石〕

5. 旧石器時代の調査

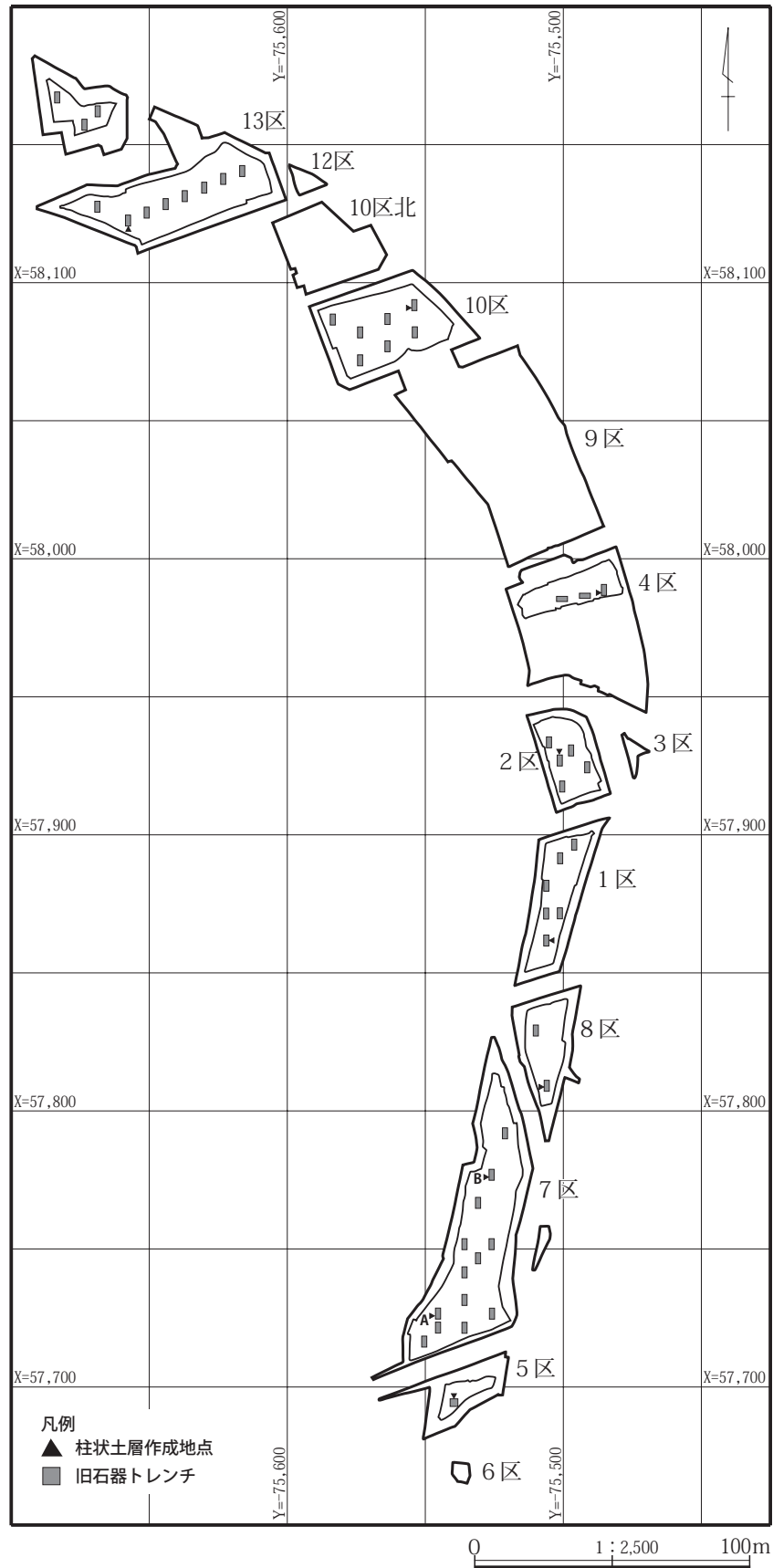
旧石器時代の調査概要については、1頁の「2. 調査の方法と工程」で既述したが、II～IX層内における近世・古墳時代～縄文時代の遺構・遺物包含層調査を終了した段階で、その下位層に関東ローム相当層の堆積が確認され、旧石器の存在が想定されたことから、トレンチ調査を実施することとなった。当該調査は、古墳時代の冑着装人骨関連遺構の保存措置による4区南半部と9区、工事工程との兼ね合いによる10区北、狭小面積の3・12区を除いて、各調査区の48箇所、5m×2.5mのトレンチを適宜設定し、X～XIX層までの厚さ約1mのローム層調査を行った。ちなみに、各調査区のトレンチ設定数は1区6箇所、2区5箇所、4区3箇所、5区1箇所、7区13箇所、8区2箇所、10区7箇所、13区11箇所である。結果的に、各トレンチ内からは石器等を検出することはできなかったが、旧地形やローム層の堆積状況を把握するために、トレンチ調査区内の9箇所において柱状土層図の作成を行った。

以下、各堆積土層の説明をするが、当該図の作成地点については第307図内に▲印で表示してある。

- IX層：暗灰黄色土(2.5Y4/2)。総社軽石(As-Sj)に由来する軽石を含む。ローム漸移層。層厚10～50cm。
- X層：鈍い黄色土(2.5Y6/3)。As-YPを含む締りのあるローム土。層厚10～40cm。
- XI層：黄褐色土(2.5YR5/4)。多量の直径5～10mmのローム塊と少量のAs-YPを含む。層厚2～25cm。
- XII層：灰褐色土(7.5YR6/2)。As-YPがブロック状に堆積する。層厚10～35cm。
- XIII層：鈍い黄色土(2.5Y6/3)。直径1～5mmのAs-YPとAs-Okを多量に含む。層厚10～35cm。
- XIV層：浅黄色土(2.5Y7/4)。多量の直径5mmの礫と砂質土ブロックを含む。層厚10～50cm。
- XV層：浅黄色土(2.5Y7/4)。細粒のAs-YPを少量含む。層厚10～20cm。
- XVI層：鈍い黄褐色土(2.5Y7/4)。直径5～10mmの礫を少量含む。層厚10～15cm。
- XVII層：灰黄褐色土(5YR5/2)。直径5～10mmの礫と赤色礫を多量に含む洪水層。層厚10～35cm。
- XVIII層：灰黄褐色土(10YR5/2)。多量の径10mm礫・粗砂とAs-Srを含む。層厚10～25cm。
- XIX層：暗灰褐色土(2.5Y5/2)。砂礫土で多量の大形亜角礫を含む基盤層。



第306図 旧石器時代調査トレンチ内の柱状土層図



第307図 旧石器時代調査のトレンチ配置と柱状土層作図地点

第4章 自然科学分析

《分析業務の概要と目的》

金井東裏遺跡では、発掘調査報告書作成事業を円滑に実施するために、下記の通り4つの自然科学分析を研究所や分析会社に委託した。

①分析名：金井東裏遺跡出土の近世人骨

分析者：生物考古学研究所 植崎修一郎

当分析業務は、I層下位からII層にかけて掘り込まれた近世以降の墓坑14基より出土した人骨について、部位・性別・年齢・埋葬個体数等を明確にするために実施したものである。

②分析名：レプリカ法による弥生土器種実圧痕の同定

分析者：(株)パレオ・ラボ 米田恭子・佐々木由香・
バンドリ スダルシャン

当分析業務は、弥生土器の器面に残る種実の圧痕について、当遺跡における農耕の有無や栽培植物の種類を解明する手掛かりとなることから、最も精度の高いレプリカ法により種実の同定をするために実施した。

③分析名：縄文時代炭化種実の放射性炭素年代測定

分析者：(株)加速器分析研究所

当分析業務は、縄文時代中期の竪穴住居内から出土した少量のオニグルミの炭化種実について、加速器を使用した放射性炭素年代測定(AMS)により、当該住居の構築および廃絶に関わる実年代を解明するために実施した。

④分析名：縄文時代黒曜石製石器の蛍光X線分析による 石材原産地同定

分析者：(株)パレオ・ラボ 竹原弘展

当分析業務は、縄文時代の竪穴住居内から出土した黒曜石を用材とする石鏃や剥片・石核について、その石材産地同定を通じて当遺跡における時期別の流通動向を解明するために実施したものである。

以下に、各分析内容の詳細を記載する。

1. 金井東裏遺跡出土の近世人骨

本遺跡の1・7・8・9・10調査区の14基の墓坑から14体の近世人骨が出土したので、以下に報告する。

出土人骨は、清掃後、観察・計測・写真撮影を行った。なお、出土人骨の計測方法はマルティンの方法(馬場1991)に、出土歯の計測方法は藤田恒太郎の方法(藤田1949)に従った。

写真にある略称は、I2(切歯)・C(犬歯)・P1(第1小白歯)・P2(第2小白歯)・M1(第1大白歯)・M2(第2大白歯)・RFI(右腓骨)・RT(右脛骨)・RF(右大腿骨)・LF(左大腿骨)・LT(左脛骨)・LFI(左腓骨)を意味する。

(1) 1区出土人骨

1区では、39号墓坑の1基から人骨が出土した。

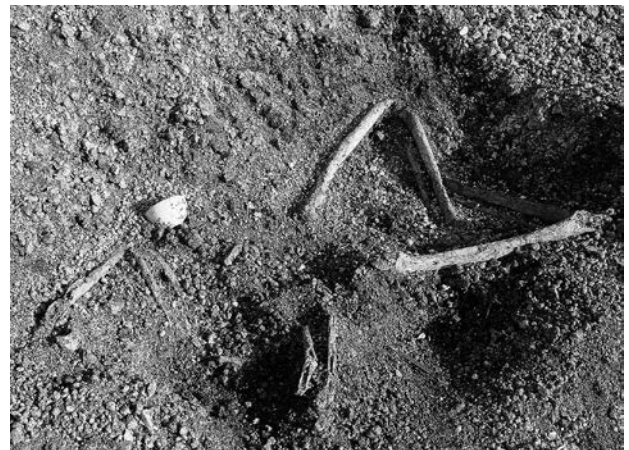
A. 39号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約159cm・短軸(東西)約132cm・深さ約109cm前後の規模の楕円形土坑から検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。人骨の出土状況写真では頭蓋骨が無いように見えるが、実際は検出されている。

②副葬品

寛永通寶6点、磁器1点が、検出されている。



1. 1区39号墓坑出土人骨出土状況[北から撮影]

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨・下顎骨・四肢骨と全身骨格が出土している。

④被葬者の個体数

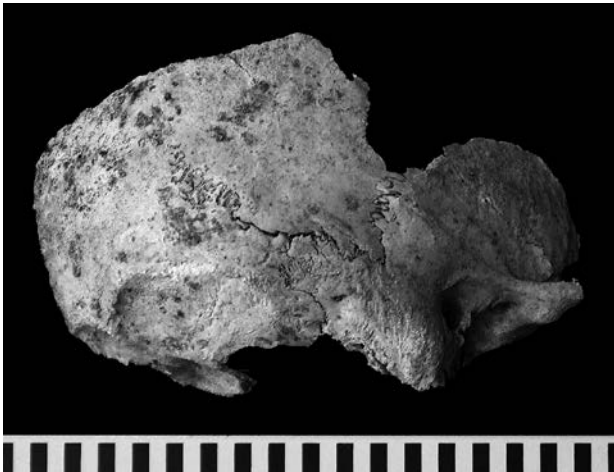
出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

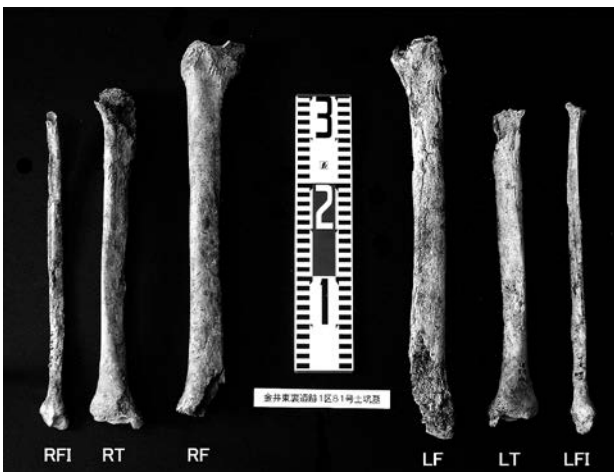
頭蓋骨の乳様突起は大きい。後頭骨十字部の外後頭隆起厚は18mmである。中世人骨の研究では、男性が平均17.5mm・女性が平均15.0mmである(長岡・平田2005)。また、歯冠計測値も大きい。さらに、四肢骨も大きく頑丈であるため、総合的に被葬者の性別は男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。



2. 1区39号墓坑出土人骨[頭蓋骨右側面観]



3. 1区39号墓坑出土人骨



4. 1区39号墓坑出土人骨[下顎骨右咬合面観]

⑦被葬者の古病理

歯石の付着及び俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は、認められなかった。

(2) 7区出土人骨

7区では、1号・3号・4号・5号・38号墓坑の5基の墓坑から人骨が出土した。なお、1号墓坑以外の4基の墓坑は隣接している。

A. 1号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約96cm・短軸(東西)約83cm・深さ13cmの規模の方形土坑から検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

②副葬品

銭貨の寛永通寶4点、古銭2点、砥石1点が検出されている。六道銭は、通常6点が多く約43%をしめるが、実際には、1点から311点まで変異がある事が知られている(鈴木1999)。



5. 7区1号墓坑出土人骨出土状況

③人骨の出土部位

人骨は、下顎骨片・四肢骨片が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないので、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

大腿骨骨幹部は比較的大きく頑丈であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、かなり磨耗している。この磨耗は通常の咬耗では無いと推定されるため、被葬者の死亡年齢は成人としか推定できない。

⑦被葬者の古病理

出土歯の咬耗度及び咬耗状態を観察すると、歯冠部がほぼ無くなるほど咬耗している。しかしながら、下顎歯の切歯部から小白歯部は舌側から唇側にかけて斜めに咬

耗している状態である。これは、通常の咬耗ではなく、動物の皮革や植物の繊維等を歯でなめしたためと推定される。このような事例は、群馬県内では、元総社西川・塚田中原遺跡の175号土坑出土中世40歳代男性に認められている(檜崎2003)。

B. 3号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(北西～南東)約146cm・短軸(北東～南西)約96cm・深さ約74cmの規模の隅丸長方形土坑から検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北西にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

②副葬品

銭貨の寛永通寶2点、古銭1点、陶器1点が検出されている。

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨片及び四肢骨が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

頭蓋骨の内、前頭骨は薄く華奢である。出土歯は歯冠が計測値に影響を与えるほどの異常磨耗の状態であるため、計測はできなかった。右脛骨の栄養孔位最大径(8a)は28mmで栄養孔位横径(9a)は20mmであった。左脛骨は破損しており、計測できなかった。近世人骨の男性と女性の平均値は、栄養孔位最大径は男性32.9mm・女性28.8mm、栄養孔位横径は男性23.7mm・女性21.2mmである(遠藤・木村1967)。したがって、総合的に被葬者の性別は女性であると推定される。



6. 7区1号墓坑出土人骨下顎歯の異常磨耗
[右から、I2・C・P1・P2・M1・M2]



7. 7区1号墓坑出土人骨下顎歯の異常磨耗
[右から、I2・C・P1・P2・M1・M2]



8. 7区3号墓坑出土人骨出土状況

⑥被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

⑦被葬者の古病理

出土遊離歯の内、2本に俗に虫歯と呼ばれる齲蝕が認められた。歯髓腔にまで齲蝕が進行する齲蝕症第3度(C3)の状態であるため、歯種の同定は困難であるが、下顎犬歯と下顎小白歯であると推定される。

C. 4号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約145cm・短軸(東西)約84cm・深さ77cmの規程の隅丸長方形土坑から検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を南にして顔面部を東に向け右側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。なお、本墓坑は上部で5号墓坑と重複している。新旧関係は、本墓坑の方が古い。

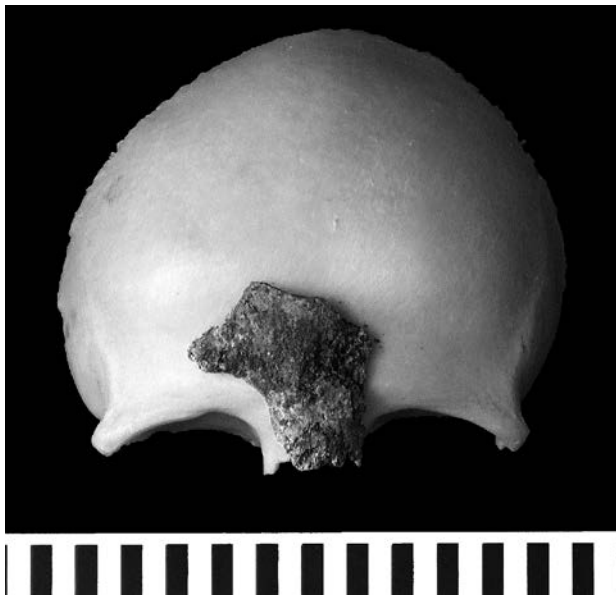
②副葬品

錢貨の寛永通寶17点と陶器が検出されている。六道銭は、通常6点が多く約43%をしめるが、実際には、1点から311点まで変異がある事が知られている(鈴木1999)。

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨・四肢骨が出土している。

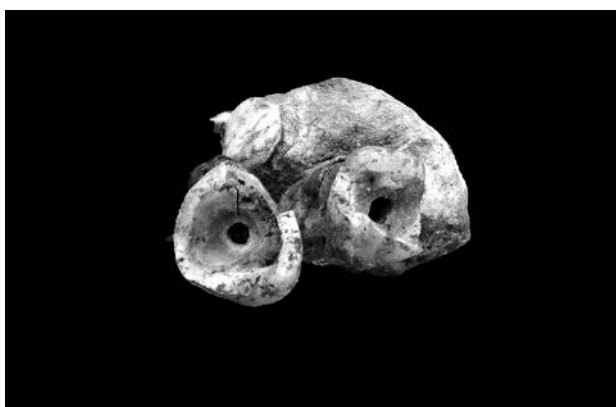
④被葬者の個体数



9. 7区3号墓坑出土人骨[前頭骨]



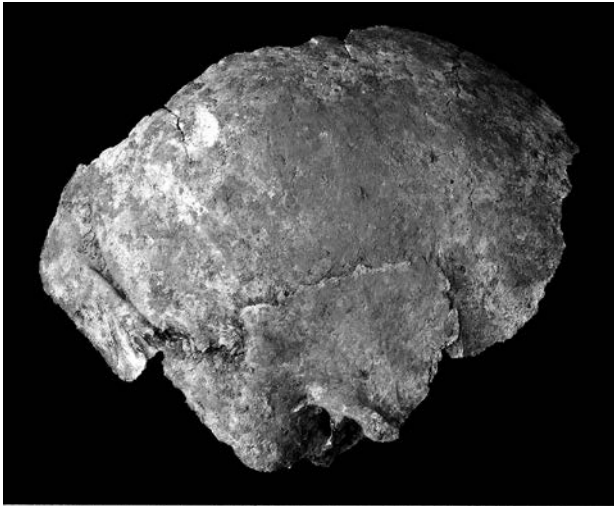
10. 7区3号墓坑出土人骨[四肢骨]



11. 7区3号墓坑出土人骨[咬合面齲蝕]



12. 7区4号墓坑出土人骨出土状況



13. 7区4号墓坑出土人骨[頭蓋骨右側面観]



14. 7区4号墓坑出土人骨[四肢骨]

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

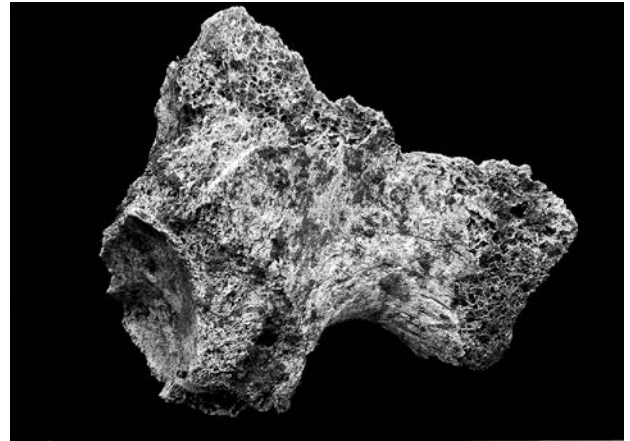
⑤被葬者の性別

歯冠計測値や四肢骨も比較的大きく男性的である。しかしながら、左寛骨の大坐骨切痕の角度が鈍角であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。恐らく、大柄な女性であったのであろう。

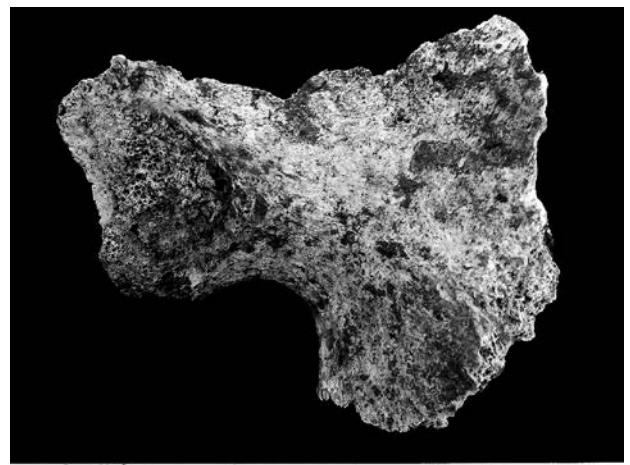
⑥被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合の癒合度を観察すると、内板はすべて癒合して消失している状態であるが、外板は癒合していない状態である。出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、総合的に被葬者の死亡年齢は約30歳代から40歳代であると推定される。

⑦被葬者の古病理



15. 7区4号墓坑出土人骨[左寛骨側面観]



16. 7区4号墓坑出土人骨[左寛骨内面観]

全体的に、歯石の付着が認められた。また、下顎右第2大臼歯(M2)の遠心面歯頸部及び下顎左第2大臼歯(M2)の頬側面の歯頸部に俗に虫歯と呼ばれる齲蝕が認められた。

D. 5号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(北東～南西)約134cm・短軸(北西～南東)約71cm・深さ30cmの規模の長方形土坑から検出されている。人骨の残存状態が非常に悪いため、被葬者の埋葬形態は不明である。また、本墓坑は下部で4号墓坑と重複している。新旧関係は、本墓坑の方が新しい。

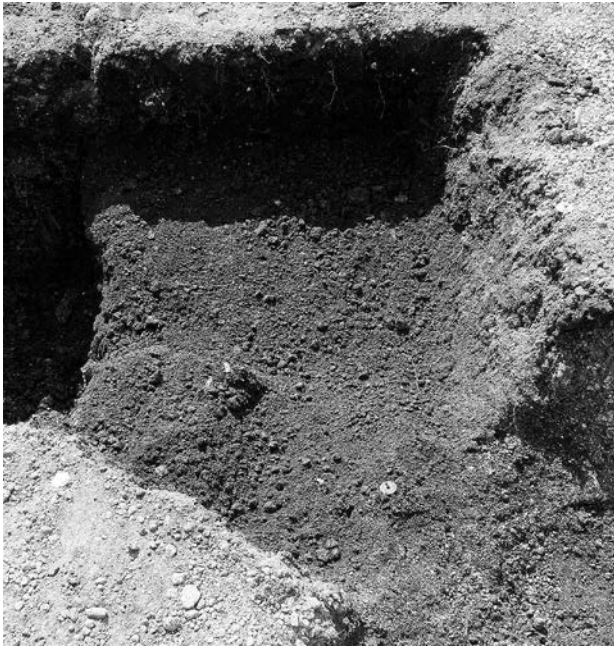
②副葬品

銭貨の寛永通寶5点が、検出されている。

③人骨の出土部位

人骨は、わずかな破片のみが出土している。

④被葬者の個体数



17. 7区5号墓坑全景

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は恐らく1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別・死亡年齢

人骨は、わずかな破片のみが出土しているため、被葬者の性別及び死亡年齢は不明である。残存状態が非常に悪いため、経験則からは未成年である可能性が高い。

E. 38号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(東西)約197cm・短軸(南北)約138cm・深さ約69cmの規模の隅丸長方形土坑から検出されている。残念ながら、人骨の出土状況が不明であるため被葬者の埋葬形態は不明である。

②副葬品

磁器1点が、検出されている。

③人骨の出土部位



18. 7区38号墓坑全景

人骨は、頭蓋骨・四肢骨が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

頭蓋骨の乳様突起は大きく発達している。後頭骨十字部の外後頭隆起厚は18mmである。中世人骨の平均値は、男性が17.5mm・女性が15.0mmである(長岡・平田2005)。四肢骨は、破損しており計測はできなかったが、比較的大きく頑丈である。右寛骨の大坐骨切痕部の角度は狭く鋭角であるため、総合的に被葬者の性別は男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合の内、矢状縫合とラムダ(人字)縫合



19. 7区38号墓坑出土人骨[頭蓋骨左側面観]

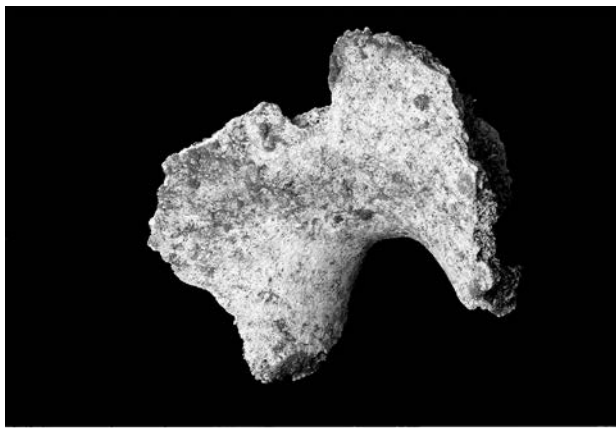


20. 7区38号墓坑出土人骨[四肢骨]

を観察すると、矢状縫合の内板は癒合しており外板は開放の状態である。ラムダ(人字)縫合は、内板及び外板共に開放の状態である。

歯は出土していないため、咬耗度から死亡年齢を推定するのは不可能である。しかしながら、次項で記載するように、本個体の下顎骨を観察すると、生前脱落が多く認められ歯槽も閉鎖した状態が多い。総合的に、被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。

⑦被葬者の古病理



21. 7区38号墓坑出土人骨[右寛骨側面観]



22. 7区38号墓坑出土人骨[下顎骨右側面観]



23. 7区38号墓坑出土人骨[下顎骨右上面観]

下顎骨右を観察すると、多くの歯が生前脱落し歯槽も閉鎖した状態である。少なくとも、下顎右第1大臼歯(M1)か下顎右第2大臼歯(M2)以外はすべて生前脱落をしていたと推定される。

(3) 8区出土人骨

8区では、11号・13号墓坑の2基の墓坑から人骨が出土した。これら2基は単独に位置している。

A. 11号墓坑出土人骨

①埋葬形態

本墓坑は、2号流路により攪乱を受けているため、全容は不明である。

②副葬品

副葬品は、検出されていない。

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨片・四肢骨片が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

頭蓋骨の内、前頭骨の眉弓は、発達している。歯の歯冠計測値は大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度を観察すると、上顎の大臼歯はエナメル質のみのマルティンの1度の状態である。切歯から小白歯

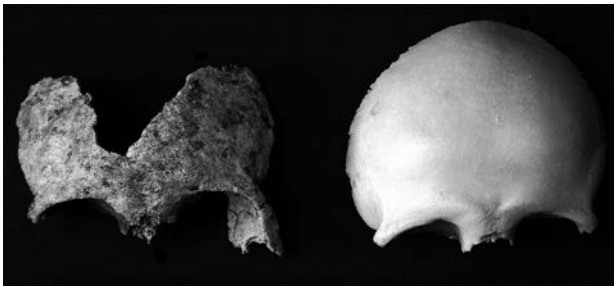


24. 8区11号墓坑出土人骨出土状況

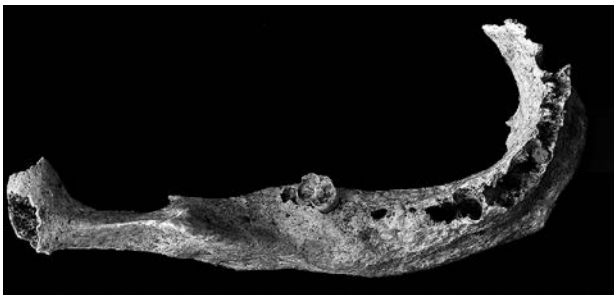
は象牙質が線状あるいは点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。下顎右を観察すると、第1大臼歯(M1)または第2大臼歯(M2)は生前脱落をして歯槽も閉鎖した状態である。また、第2大臼歯(M2)または第3大臼歯(M3)は、齲蝕により歯冠が崩壊して残根状態になっているので、上顎大臼歯とは咬合せずに咬耗しなかったと推定される。したがって、被葬者の死亡年齢は、約40歳代であると推定される。

⑦被葬者の古病理

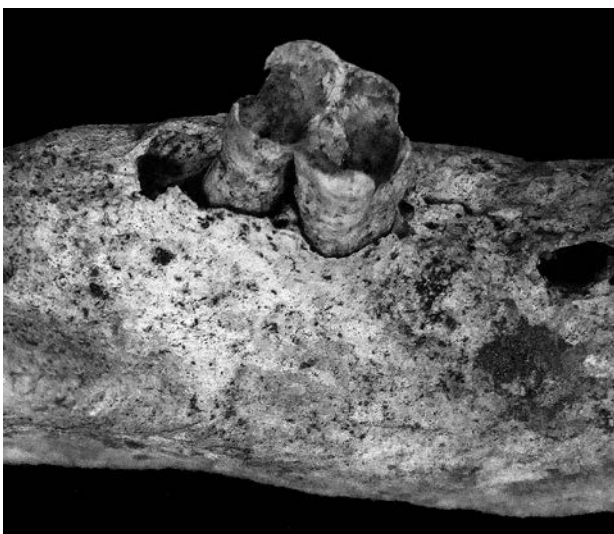
下顎右第1大臼歯(M1)または第2大臼歯(M2)は生前脱



25. 8区11号墓坑出土人骨[前頭骨]



26. 8区11号墓坑出土人骨[下顎骨右上面観]



27. 8区11号墓坑出土人骨[下顎骨右大臼歯]

落し、歯槽も閉鎖した状態である。下顎右第2大臼歯(M2)または第3大臼歯(M3)は、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕により、歯冠が崩壊して残根状態となった齲蝕症第4度(C4)の状態である。下顎左は確定できないが、上顎左大臼歯も咬耗度が低いため、下顎右の大臼歯と同様に、生前脱落をしていたか、あるいは齲蝕により歯冠が崩壊して咬耗が進まなかった可能性が高い。

B. 13号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、直径約126cm・深さ約78cmの規模の円形土坑から検出されている。しかしながら、人骨の取り上げ図もなく平面図も無いため、被葬者の埋葬形態は不明である。

②副葬品

古銭1点が検出されている。

③人骨の出土部位

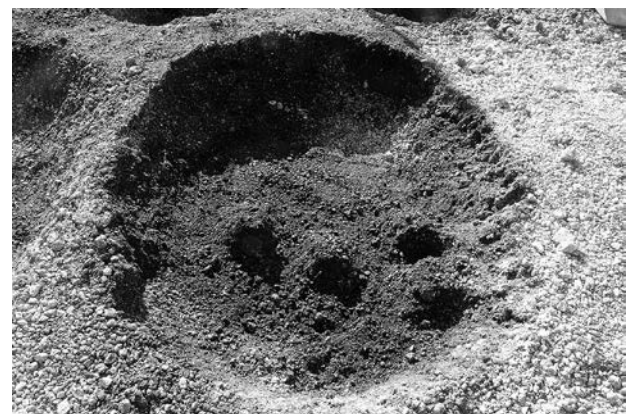
人骨は、頭蓋骨片・四肢骨片が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別・死亡年齢

人骨は、わずかな破片のみが出土しているため、被葬者の性別及び死亡年齢は不明である。残存状態が非常に悪いので、経験則からは未成年である可能性が高い。



28. 8区13号墓坑全景

(4) 9区出土人骨

9区では、2号・6号・7号墓坑の3基の墓坑から人骨が出土した。なお、これら3基の墓坑は隣接して検出されている。

A. 2号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約139cm・短軸(東西)約92cm・深さ約50cmの楕円形土坑から検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にして顔面部を西に向けた横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

②副葬品

銭貨の寛永通寶6点が、検出されている。

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨片・四肢骨片が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

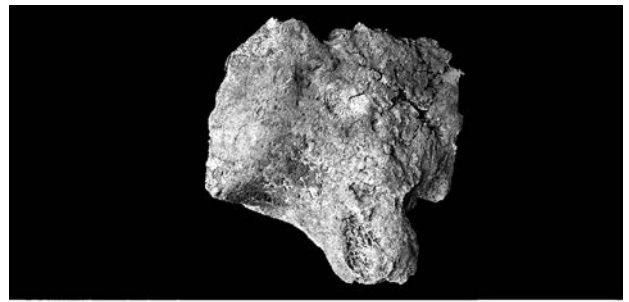
歯の歯冠計測値は大きく、男性的である。後頭骨十字部の外後頭隆起厚は15mmである。中世人骨の平均値は、男性が17.5mm・女性が15.0mmである(長岡・平田2005)。この計測値からは、女性的である。実際、後頭骨の外後頭隆起は発達しておらず、女性的である。しかしながら、乳様突起も発達しているため、総合的に被葬者の性別は男性であると推定される。但し、出土歯を観察すると咬耗があまり認められない状態であるため、未成年(男児)である可能性も否定できない。外後頭隆起厚は、まだ発達していないために薄い可能性も否定できない。

⑥被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの1度の状態である。被葬者の死亡年齢は、約10歳代から20歳代であると推定される。但し、未成年である可能性も否定できない。



29. 9区2号墓坑出土人骨出土状況[頭蓋骨]



30. 9区2号墓坑出土人骨[左側頭骨]



31. 9区2号墓坑出土人骨[下顎骨左側面観]

⑦被葬者の古病理

歯には、歯石の付着及び俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。

B. 6号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約170cm・短軸(東西)約130cm・深さ約70cmの規模の楕円形土坑から検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にして顔面部を西に向け右側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

②副葬品

銭貨の寛永通寶6点、火打金1点が、検出されている。

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨及び四肢骨が出土している。なお、頭蓋骨は本報告者が復元を試みた。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、眉弓や乳様突起が発達しており、頭蓋骨計測値も大きいので、被葬者の性別は男性であると推定される。歯冠計測値は比較的小さいが、在来系の特徴である。

⑤被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合を観察すると、内板はすべて癒合している状態である。外板は、矢状縫合は癒合している状態であるが、冠状縫合とラムダ(人字)縫合は癒合していない状態である。歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。また、切歯縫合は癒合して消失している。総合的に、約30歳代であると推定される。

⑥被葬者の古病理

一部の歯に、歯石の付着が認められた。俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は、認められなかった。また、これは古病理ではないが、後頭骨の右側部には、舌下神経管二分が認められた。この非計測的形質は、日本本土では約15%に認められ、渡来系(弥生系)に少なく、在来系(縄文系)に多く認められる形質として知られている(百々1995)。渡来系ではこの舌下神経管が1つで、在来系では2つに分かれている。本個体も在来系である可能性が高い。

C. 7号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、直径約156cm～168cm・深さ約67cmの規模の円形土坑から検出されている。人骨の残存状態が悪いため、埋葬状態は不明である。

②副葬品

銭貨の寛永通寶29点、磁器2点が、検出されている。六道銭は、通常6点が多く約43%をしめるが、実際に



32. 9区6号墓坑出土人骨出土状況



33. 9区6号墓坑出土人骨[頭蓋骨前面観]



34. 9区6号墓坑出土人骨[頭蓋骨右側面観]



35. 9区6号墓坑出土人骨[頭蓋骨上面観]



36. 9区6号墓坑出土人骨[舌下神経管二分]

は、1点から311点まで変異がある事が知られている(鈴木1999)。

③人骨の出土部位

人骨の残存状態は非常に悪く、わずかに四肢骨片が出土しているのみである。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別・死亡年齢

人骨は、わずかな破片のみが出土しているため、被葬者の性別及び死亡年齢は不明である。残存状態が非常に悪いため、経験則からは未成年である可能性が高い。



37. 9区7号墓坑出土人骨出土状況

(5) 10区出土人骨

10区では、8号・9号・10号墓坑の3基の墓坑から人骨が出土した。なお、これらは単独である。

A. 8号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約100cm・短軸(東西)約71cm・深さ約13cmの規模の楕円形土坑から検出されている。人骨の出土状況からは、屈葬のように見えるが詳細は不明である。

②副葬品

寛永通寶6点が検出されている。

③人骨の出土部位

人骨は、遊離歯・四肢骨片が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

残念ながら、出土遊離歯のほとんどは、歯冠部のエナメル質が破損しているため、計測はできなかった。計測可能であった歯の歯冠計測値は、比較的大きい。しかしながら、出土四肢骨は比較的小さく華奢であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状あるいは点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

⑦被葬者の古病理

出土遊離歯には、歯石は一部に付着していたが、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。



38. 10区8号墓坑出土人骨出土状況



39. 10区8号墓坑出土人骨[四肢骨]

B. 9号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約100cm・短軸(東西)約70cm・深さ不明の規模の楕円形土坑から検出されている。出土状況の写真も取り上げ平面図も無いため、被葬者の埋葬状態は不明である。

②副葬品

副葬品は、検出されていない。

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨・四肢骨が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

出土四肢骨は、比較的大きく頑丈であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合と矢状縫合を観察すると、どちらも内板は癒合している状態であるが、外板はわずかに見える程度である。歯が出土していないので確かな事は不明であるが、恐らく、約40歳代であると推定される。

C. 10号墓坑出土人骨

①埋葬形態

人骨は、長軸(南北)約125cm・短軸(東西)約86cm・深さ約52cmの隅丸長方形土坑から検出されている。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にして顔面部を西に向け右側を下にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。



40. 10区9号墓坑出土人骨[頭蓋骨右側面観]



41. 10区9号墓坑出土人骨[四肢骨]

これは、経験則であるが、頭蓋骨の場合、他の骨よりも高い位置にある事が多く、発掘の際に破損する機会が多い。本人骨の頭蓋骨も、左側が破損している。この事は、左側が上にあり右側が下にして埋葬された事を示唆する。このことから、顔面部を西に向け右側を下にした証拠となる。

②副葬品

寛永通寶12点、古銭1点、キセル1点、磁器2点が検出されている。

③人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨・四肢骨が出土している。なお、頭蓋骨は本報告者が復元を試みた。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

④被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、眉弓や乳様突起が発達しており、頭蓋骨計測値も大きいので、被葬者の性別は男性であると推定される。



42. 10区10号墓坑出土人骨[頭蓋骨]

⑤被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合を観察すると、冠状縫合及びラムダ(人字)縫合は内板及び外板共に癒合していない状態である。矢状縫合は、内板は癒合しているが、外板は癒合していない状態である。歯は出土していないが、生前脱落が認められるため、総合的に被葬者の死亡年齢は約30歳代から40歳代であると推定される。

⑥被葬者の古病理

下顎骨左を観察すると、切歯部・犬歯部・小白歯部は



43. 10区10号墓坑出土人骨[頭蓋骨前面観]

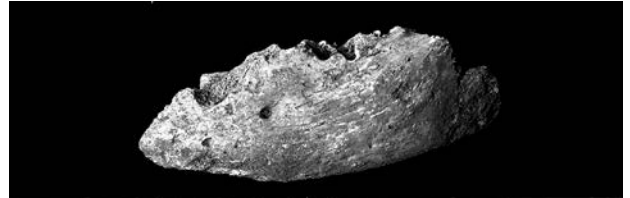


44. 10区10号墓坑出土人骨[頭蓋骨右側面観]

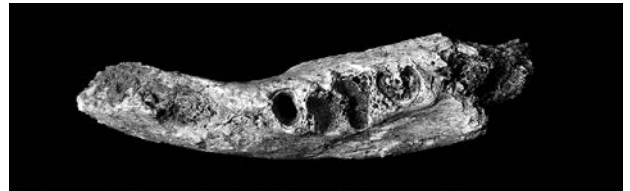


45. 10区10号墓坑出土人骨[頭蓋骨上面観]

生前脱落をし、歯槽も閉鎖した状態である。わずかに、3本分の歯槽が閉鎖せずに開放した状態で残存している。確定できないが、残存していたのは、下顎左第2小白歯・同第1大臼歯・同第2大臼歯または、下顎第1大臼歯から同第3大臼歯である可能性が高い。もし、前者の場合は問題無いが、後者の場合は、歯根が1本分しかないため、歯冠が崩壊した状態であったかもしれない。



46. 10区10号墓坑出土人骨[下顎骨左側面観]



47. 10区10号墓坑出土人骨[下顎骨左上面観]

まとめ

群馬県渋川市金井字東裏に所在する、金井東裏遺跡の1区・7区・8区・9区・10区の5調査区から検出された14基の墓坑から近世人骨14体が出土した。これら人骨のまとめを表1に、頭蓋計測値を表2に、歯冠計測値を表3に示した。

引用文献

- 馬場悠男 1991 『人類学講座別巻1. 人体計測法・Ⅱ. 人骨計測法』雄山閣出版
- 百々幸雄 1995 「第3章. 日本人の現像・骨からみた日本列島の人類史」『モンゴロイドの地球3. 日本人のなりたち』(百々幸雄編)東京大学出版会 pp.129-171
- 遠藤萬里・木村 賛 1967 「Ⅶ. 四肢骨」『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』(鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行編)東京大学出版会 pp.275-405
- 藤田恒太郎 1949 「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61 pp.27-32
- 権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』67 pp.151-163
- MATSUMURA, Hirofumi 1995 *Amicroevolutional History of the Japanese people as viewed from dental morphology*, National Science Museum Monographs, No.9, National Science Museum
- 長岡朋人・平田和明 2005 「中世日本人の破損頭蓋の性別判定」『Anthropological Science』113 pp.17-26
- 長岡朋人・平田和明 2009 「四肢長骨の骨頭・骨頸の周径に基づく中世人骨の性別判定」『Anthropological Science』117 pp.23-30

橋崎修一郎 2003「第1分冊：(5)元総社西川遺跡・塚田中原遺跡出土人骨」『元総社西川遺跡・塚田中原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.347-359
 鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会

表1 金井東裏遺跡出土の近世人骨一覧

区名	墓坑名	個体数	性別	死亡年齢	古病理
1区	39号墓坑	1個体	男性	約30歳代	—
7区	1号墓坑	1個体	男性	成人	歯の異常磨耗
	3号墓坑	1個体	女性	約30歳代	齶触
	4号墓坑	1個体	女性	約40歳代	歯石・齶触
	5号墓坑	1個体	不明	未成年?	—
8区	38号墓坑	1個体	男性	約40歳代	生前脱落
	11号墓坑	1個体	男性	約40歳代	齶触
	13号墓坑	1個体	不明	未成年?	—
9区	2号墓坑	1個体	男性(男児)	10代未成年	—
	6号墓坑	1個体	男性	約30歳代	舌下神経管二分
	7号墓坑	1個体	不明	未成年?	—
10区	8号墓坑	1個体	女性	約30歳代	—
	9号墓坑	1個体	男性	約40歳代	—
	10号墓坑	1個体	男性	約40歳代	生前脱落

表2 金井東裏遺跡頭蓋骨計測値

計測項目	金井東裏遺跡		江戸時代人骨*		現代日本人骨**	
	9区6号	10区10号	♂	♀	♂	♀
1. 頭蓋骨最大長	—	191mm	181.9mm	175.4mm	178.9mm	170.8mm
26. 正中前頭弧長	126mm	128mm	126.7mm	123.7mm	127.4mm	122.1mm
27. 正中頭頂弧長	130mm	134mm	127.7mm	123.9mm	125.1mm	121.0mm
29. 正中前頭弦長	112mm	114mm	111.4mm	108.7mm	111.8mm	106.5mm
30. 正中頭頂弦長	119mm	120mm	114.6mm	111.2mm	111.8mm	108.6mm

表3 金井東裏遺跡出土人骨歯冠計測および比較表

部位	歯種	計測項目	金井東裏遺跡										江戸時代人* Matsumura, 1995		現代人** 権田, 1959				
			1区39号		7区4号		8区11号		9区2号		9区6号		10区9号		♂	♀	♂	♀	
			右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左					
上顎	I1	MD	—	—	9.0	9.2	8.7	8.9	—	8.8	8.0	8.2	—	9.1	8.78	8.38	8.67	8.55	
		BL	—	—	7.1	7.2	7.2	7.3	—	8.1	7.2	7.3	—	7.5	7.52	7.06	7.35	7.28	
	I2	MD	8.1	—	7.4	7.5	—	—	—	—	—	—	—	—	7.16	6.97	7.13	7.05	
		BL	6.8	—	6.9	6.7	—	—	—	—	—	—	—	—	6.74	6.33	6.62	6.51	
	C	MD	—	—	7.9	7.8	7.9	7.8	8.2	—	—	—	—	8.4	8.01	7.60	7.94	7.71	
		BL	—	—	8.6	8.7	8.9	8.9	8.9	—	—	—	—	8.1	8.66	8.03	8.52	8.13	
	P1	MD	—	—	7.4	7.5	—	—	—	—	7.0	7.1	7.8	7.4	7.41	7.23	7.38	7.37	
		BL	—	—	9.8	9.9	—	—	—	—	8.9	9.1	10.0	10.0	9.67	9.33	9.59	9.43	
	P2	MD	—	—	6.8	6.9	—	—	—	—	6.6	6.3	—	—	7.00	6.82	7.02	6.94	
		BL	—	—	10.1	10.2	—	—	—	—	9.5	9.0	—	—	9.55	9.29	9.41	9.23	
	M1	MD	—	—	—	—	11.0	11.0	—	11.1	—	10.3	—	—	10.61	10.18	10.68	10.47	
		BL	—	—	—	—	11.7	11.5	—	12.1	—	11.5	—	—	11.87	11.39	11.75	11.40	
	M2	MD	—	—	—	—	10.1	10.2	—	—	10.0	—	—	10.3	9.88	9.48	9.91	9.74	
		BL	—	—	—	—	11.4	11.7	—	—	11.8	—	—	12.1	12.00	11.52	11.85	11.31	
	M3	MD	—	—	—	—	—	—	—	—	8.8	8.8	—	—	—	—	8.94	8.86	
		BL	—	—	—	—	—	—	—	—	11.2	11.4	—	—	—	—	10.79	10.50	
	下顎	I1	MD	—	—	—	5.4	—	—	—	—	—	—	—	—	5.45	5.32	5.48	5.47
			BL	—	—	—	6.0	—	—	—	—	—	—	—	—	5.78	5.65	5.88	5.77
I2		MD	—	—	—	—	—	—	—	—	5.7	—	—	—	6.09	5.97	6.20	6.11	
		BL	—	—	—	—	—	—	—	—	6.4	—	—	—	6.29	6.11	6.43	6.30	
C		MD	8.1	—	—	7.1	—	—	—	—	—	6.9	—	—	7.06	6.69	7.07	6.68	
		BL	8.3	—	—	7.8	—	—	—	—	—	8.0	—	—	8.04	7.39	8.14	7.50	
P1		MD	7.7	—	7.4	7.6	—	—	—	—	6.8	—	—	—	7.32	7.05	7.31	7.19	
		BL	7.8	—	8.2	8.3	—	—	—	—	8.1	—	—	—	8.34	7.89	8.06	7.77	
P2		MD	8.4	—	7.2	7.6	—	—	—	—	7.2	—	—	—	7.45	7.12	7.42	7.29	
		BL	8.8	—	8.8	8.8	—	—	—	—	8.5	—	—	—	8.68	8.30	8.53	8.26	
M1		MD	—	—	—	—	—	—	12.4	—	11.3	11.2	—	—	11.72	11.14	11.72	11.32	
		BL	—	—	—	—	—	—	12.1	—	10.8	10.9	—	—	11.15	10.62	10.89	10.55	
M2		MD	—	—	—	—	—	—	12.6	—	11.0	—	—	—	11.39	10.78	11.30	10.89	
		BL	—	—	—	—	—	—	11.0	—	10.5	—	—	—	10.75	10.21	10.53	10.20	
M3		MD	—	11.9	—	10.7	—	—	—	—	—	9.8	—	—	—	—	10.96	10.65	
		BL	—	10.6	—	10.4	—	—	—	—	—	9.7	—	—	—	—	10.28	10.02	

2. レプリカ法による弥生土器種実 圧痕の同定

(1)はじめに

金井東裏遺跡で出土した弥生時代中期～後期の土器には、種実の圧痕と思われる痕跡が確認された。ここでは、レプリカ法によって採取された圧痕について、実体顕微鏡ならびに走査型電子顕微鏡で観察を行い、同定した結果を報告する。

(2)資料と方法

分析資料は、壺の底部3点(分析No.1, 2, 4)と壺の口縁部～胴部1点(分析No.3)、脚の台部1点(分析No.5)、筒型土器1点(分析No.6)と蓋1点(分析No.7)の、計7点である(表1)。土器の時期は、分析No.1～No.5が弥生時代後期、分析No.6とNo.7が弥生時代中期である。

土器の抽出は群馬県埋蔵文化財調査事業団、圧痕のレプリカの採取と同定は(株)パレオ・ラボが行った。分析No.1～5のレプリカを採取する圧痕は、あらかじめ群馬県埋蔵文化財事業団により各試料1点ずつの計5点が選定されていた。さらに肉眼観察および実体顕微鏡下で土器全面について詳細に観察したところ、さらに種実とみられる圧痕1点と木葉痕1点が観察されたため、合計7点のレプリカを採取し、同定を行った。また、分析No.6については4点、No.7については2点の圧痕が選定されていた。よって、合わせて計13点の圧痕のレプリカ採取と同定を行った。

レプリカの採取では、まず圧痕内を筆と流水で水洗し、乾燥条件下でブローアを用いて付着物を除去した。次に、資料の保護のため、パラロイドB72の5%アセトン溶液を離型剤にして土器に含浸させた。圧痕の採取方法は、丑野・田川(1991)等を参考にして以下の手順で行った。印象剤に用いるシリコン樹脂((株)ニッシン製JMシリコンレギュラータイプとアグサ・ジャパン(株)製のブルーミックスソフト)を注射器に入れ、圧痕部分に充填してレプリカを作製した。採取したレプリカは、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)および実体顕微鏡で撮影を行い、種実の同定を試みた。なお、採取したレプリカは(株)パレオ・ラボに、土器は群馬県埋蔵文化財調査事

業団に保管されている。

(3)結果

同定した結果を表2に示す。

分析No.1(圧痕No.1):外面の圧痕は不明種実であった。

分析No.2(圧痕No.2):外面の圧痕はイネ籾であった。籾の上部には、ふ毛が残存する。

分析No.3(圧痕No.3):外面の圧痕はイネ籾殻であった。籾殻は内外穎がはずれた状態である。籾殻の上部にはふ毛が残存する。

分析No.4(圧痕No.4-1, No.4-2, No.4-3):外面の圧痕は、イネ籾(圧痕No.4-1)とキビ穎果?(圧痕No.4-2)であった。イネ籾の上部にはふ毛が残存する。底部の木葉痕No.4-3は、広葉樹の葉であった。

分析No.5(圧痕No.5):外面の圧痕はキビの有ふ果であった。

分析No.6(圧痕No.6-1, No.6-2, No.6-3, No.6-4):外面の圧痕2点(圧痕No.6-2, No.6-4)はイネ籾であった。いずれもイネ籾の芒は短く、先端は切れている。圧痕No.6-4のイネ籾の上部にはふ毛が残存する。

分析No.7(圧痕No.7-1, No.7-2):いずれも種実の圧痕ではなく、分類群不明の材であった。

A. イネ *Oryza sativa* L. 籾(圧痕No.2, 4-1, 6-2, 6-4)・籾殻(圧痕No.3) イネ科

上面観は楕円形。2条の稜があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくなる。圧痕No.2とNo.4-1, No.6-4の籾の上部にはふ毛が残存している。圧痕No.2と4-1には護穎と小穂軸が残る。

B. キビ *Panicum miliaceum* L. 有ふ果(圧痕No.5)・穎果?(圧痕No.4-2) イネ科

有ふ果は球形で先端は丸く、内穎側が膨らむ。表面は平滑。穎果?は、やや紡錘形を呈する円形で、中央に全長の1/2程度のうちわ型の胚がみえるが、明瞭ではない。したがって、キビと断定するのは難しい。

C. 不明 A Unknown A 種実(圧痕No.1-1)

上面観は楕円形?、側面観は倒卵形か。先端(写真5-15a)は急速に窄まり、円形の頂部がある。側面観は下端にむかって窄まる形状だが、圧痕は全長が残っていない。表面は平滑。表面に見える隆起は、種実の隆起ではない。

D. 広葉樹 Broad-leaved tree 葉(圧痕No.4-3)

主脈や縁が残存しておらず、二次脈のみ残存する。科以上の詳細な同定はできなかった。

(4)考察

土器に残る圧痕をレプリカ法により同定した結果を時期ごとに見ていくと、弥生時代中期の筒型土器の外面の圧痕4点のうち2点は、栽培植物であるイネの籾と同定された。一方、蓋の底部の圧痕2点は種実の圧痕ではなかった。弥生時代後期の壺3個体と脚1点からは、栽培植物であるイネ籾2点とイネ籾殻1点、キビ有ふ果1点、キビ穎果?1点が同定された。また、同定には至らないものの、1点は不明の種実であった。分析No.4の壺底部の外面には、木葉痕が残されていた。葉の同定の決め手となる縁の部分や葉脈が圧痕では観察されなかったため、広葉樹以上の詳細な分類は困難であった。

今回分析した土器7点の圧痕は、いずれも外面に残されていた圧痕である。底部の外面に残された圧痕については、土器づくりの初期段階にイネの籾や籾殻、キビの有ふ果などが作業台や乾燥場所などにあって偶発的に付いた可能性や、混ざった可能性、意図的に混和された可能性がある。一方、胴部や口縁部外面に残された圧痕の場合は、偶発的に混ざった可能性や、意図的に胎土に混和された可能性、土器づくりの終盤で意図的に付けられた可能性などが考えられる。

引用文献

丑野 毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 pp.13-36. 日本文化財科学会

表1 分析資料一覧

分析No.	器種	部位	残存	圧痕No.	圧痕採取位置	遺構名	遺物番号	掲載図	土器法量(cm)					時期
									幅	口径	底径	厚さ	高さ	
1	壺	底部	完存	1	外面	4区4号住居	10	第63図	7.0	—	—	1.1	1.9	弥生時代後期
2	壺	底部	完存	2	外面	4区33号住居	10	第71図	7.6	—	—	1.0	1.8	
3	壺	口縁部~胴部	1/4	3	外面	7区遺構外	393	第107図	14.5	—	—	0.8	14.5	
4	壺	底部	1/4	4-1	外面	7区44号住居	5	第72図	5.7	—	—	1.4	1.8	
				4-2	外面									
				4-3	外面									
5	脚	台部	1/2	5	外面	7区遺構外	408	第107図	6.0	—	—	1.1	3.6	
6	筒形	胴部	完形	6-1	外面	7区529土坑	5	第81図	—	7.0	3.0	—	15.0	弥生時代中期
				6-2										
				6-3										
				6-4										
7	蓋	底部	完存	7-1	外面	7区遺構外	378	第106図	—	不明	5.9	—	(4.7)	
				7-2										

表2 金井東裏遺跡出土土器圧痕の同定結果(単位: mm、括弧内は破片値を表す)

分析No.	圧痕No.	圧痕採取位置	同定結果		実体顕微鏡写真	走査型電子顕微鏡写真	法量		
			分類群	部位			長さ/長軸	幅/短軸	厚さ
1	1	外面	不明A	種実	—	○	(3.26)	2.69	(1.44)
2	2	外面	イネ	籾	—	○	7.29	3.38	(2.04)
3	3	外面	イネ	籾殻	—	○	6.12	2.78	(1.33)
							(4.11)	(1.01)	(0.63)
4	4-1	外面	イネ	籾	—	○	7.04	4.03	(1.91)
	4-2		キビ?	穎果	—	○	2.38	1.65	(1.44)
	4-3		広葉樹	葉	○	—	(44.6)	(44.2)	—
5	5	外面	キビ	有ふ果	—	○	2.46	2.27	(1.75)
6	6-1	外面	不明	材	—	○	(6.34)	(2.42)	(1.98)
	6-2		イネ	籾	—	○	6.05	2.28	(1.2)
	6-3		不明	材	—	○	(3.25)	(2.26)	(1.11)
	6-4		イネ	籾	—	○	6.10	3.10	(1.73)
7	7-1	外面	不明	材	—	○	(2.18)	(0.80)	(0.64)
	7-2		同定不能	種実ではない	—	—	1.84	1.60	(0.84)

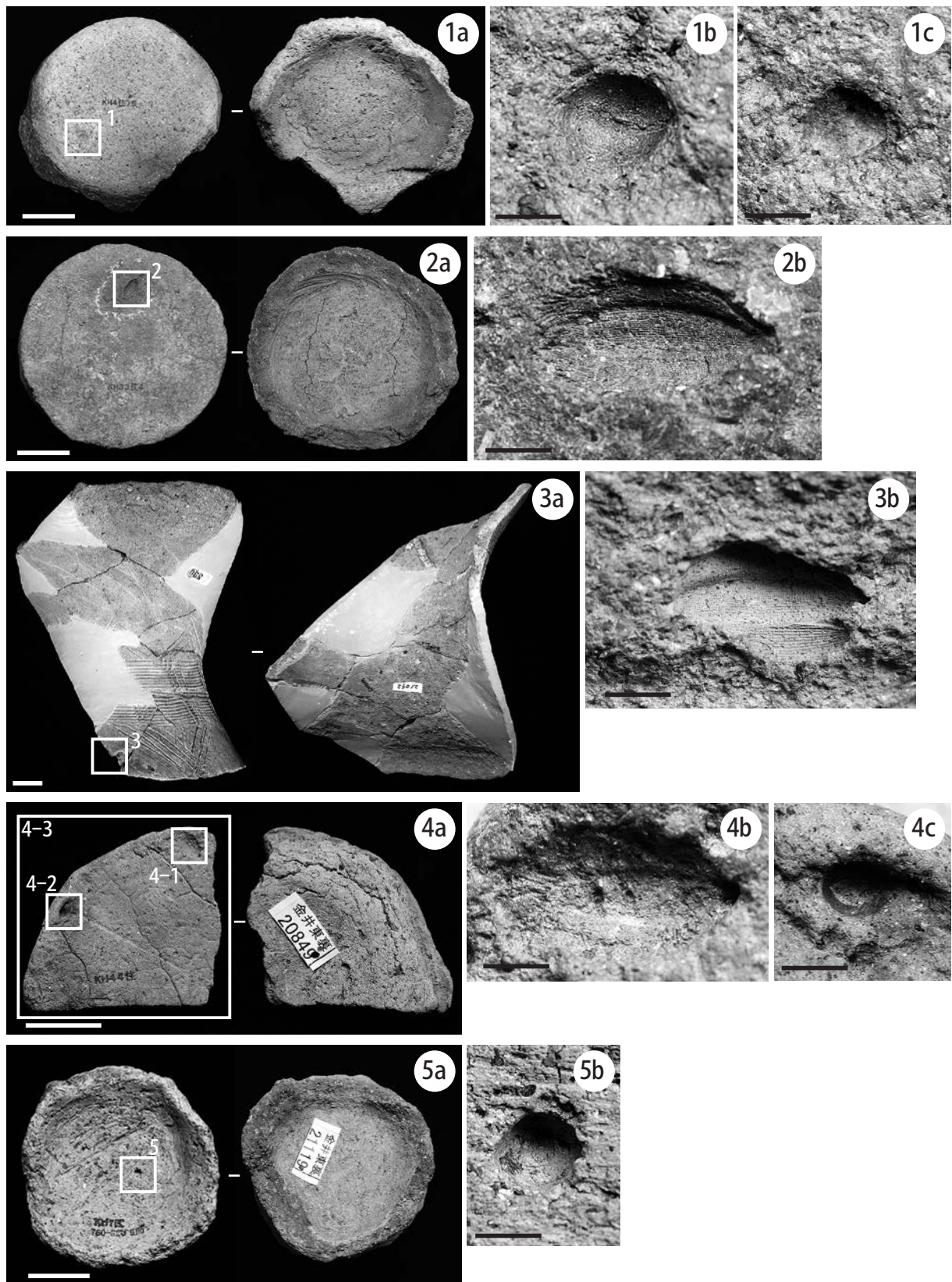


写真 1 金井東裏遺跡出土土器と圧痕

1a：分析No.1、1b：圧痕No.1、2a：分析No.2、2b：圧痕No.2、3a：分析No.3、3b：圧痕No.3、4a：分析No.4、4b：圧痕No.4-1、4c：圧痕No.4-2、5a：分析No.5、5b：圧痕No.5
土器写真のスケールは2cm、圧痕部拡大写真のスケールは2mm、土器写真内の白枠は圧痕位置を示す

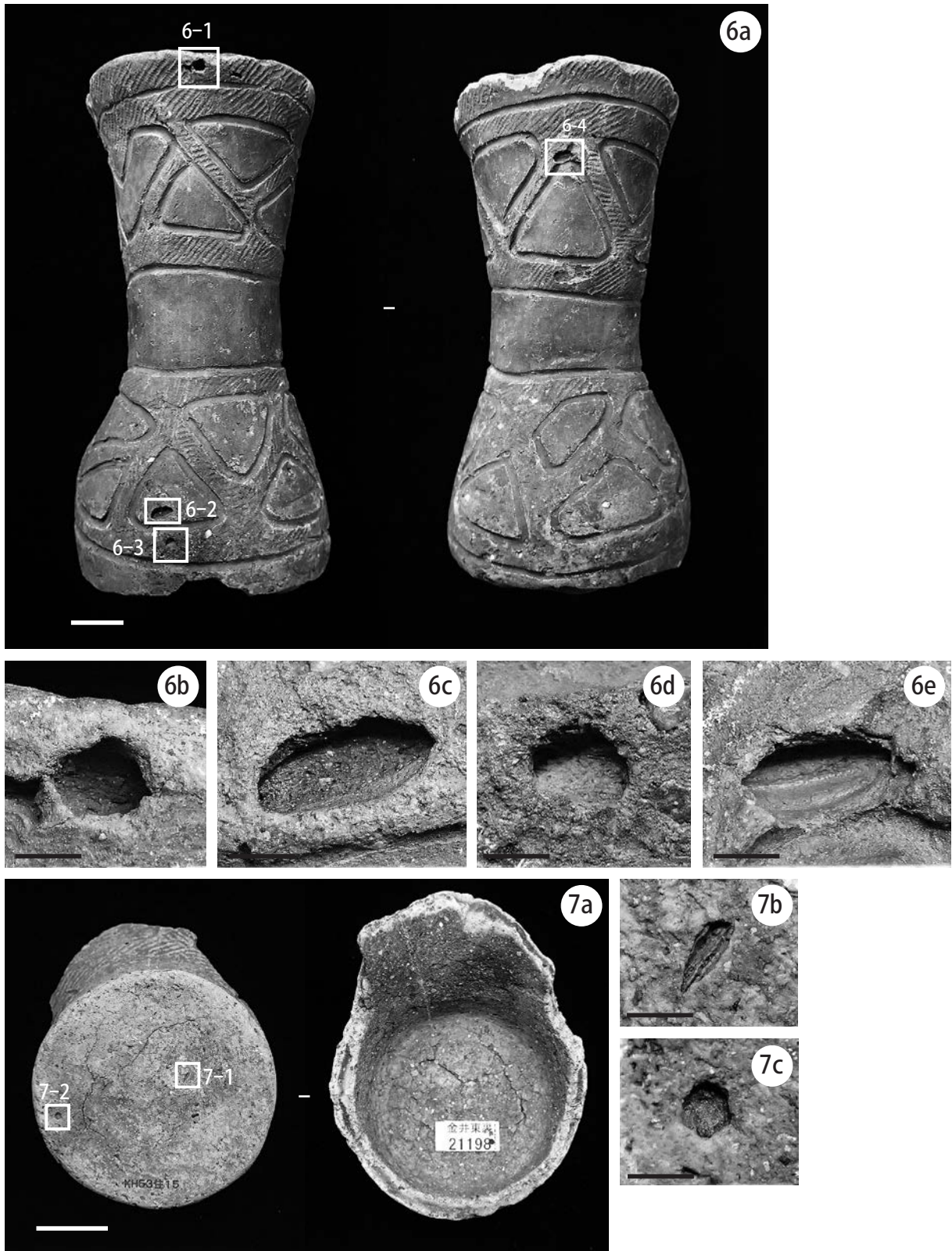


写真2 金井東裏遺跡出土土器と圧痕(2)

6a: 分析No.6、6b: 圧痕No.6-1、6c: 圧痕No.6-2、6d: 圧痕No.6-3、6e: 圧痕No.6-4、7a: 分析No.7、7b: 圧痕No.7-1、7c: 圧痕No.7-2

土器写真のスケールは2cm、圧痕部拡大写真のスケールは2mm、土器写真内の白枠は圧痕位置を示す

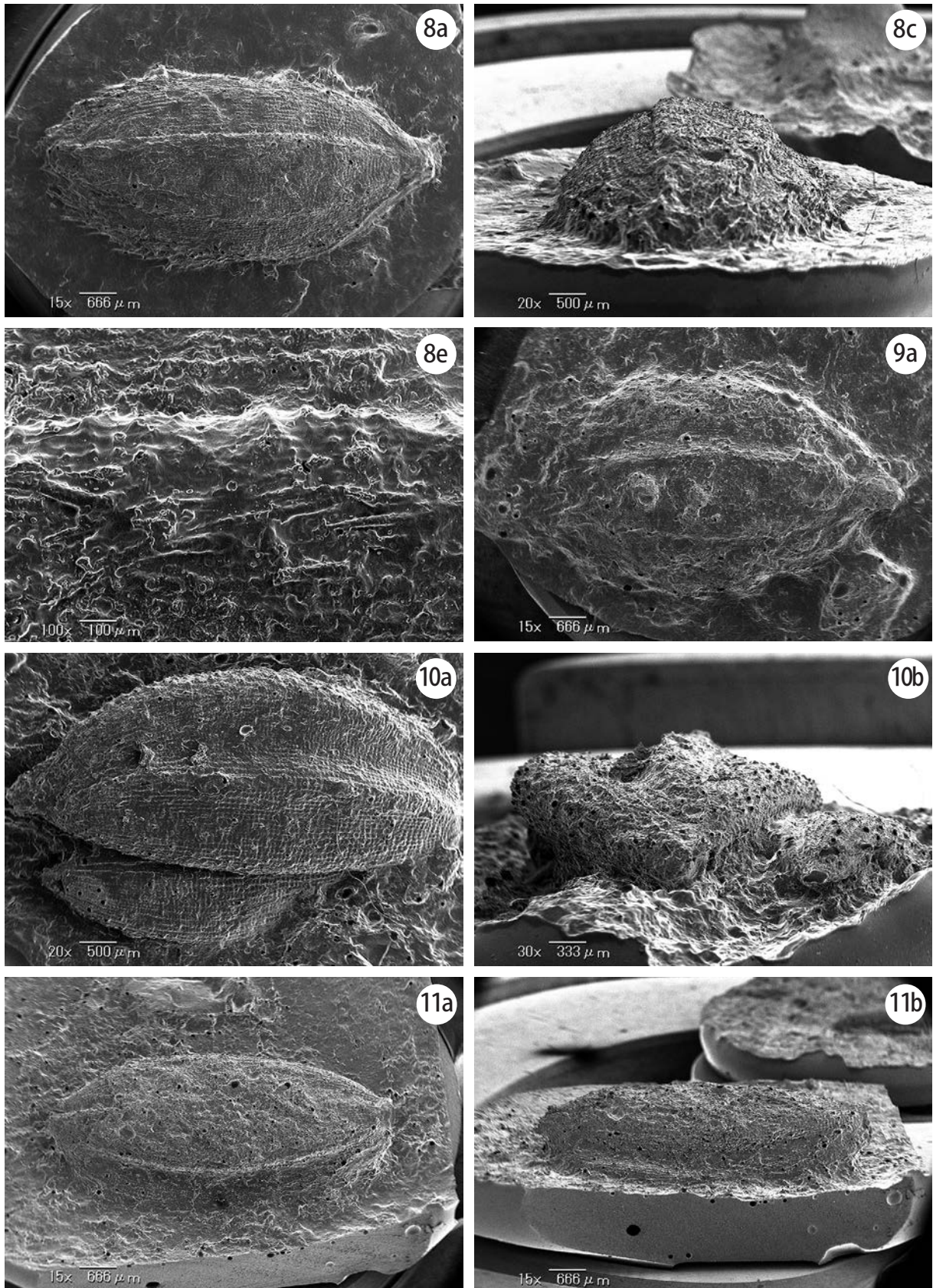


写真3 金井東裏遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(1)

8. イネ粉(圧痕No.2)、9. イネ粉(圧痕No.4-1)、10. 粉殻-側面観(圧痕No.3)、11. イネ粉(圧痕No.6-2)
a: 側面観、b: 内顎側、c: 上面観、d: 顆粒状突起の拡大、e: ふ毛の拡大

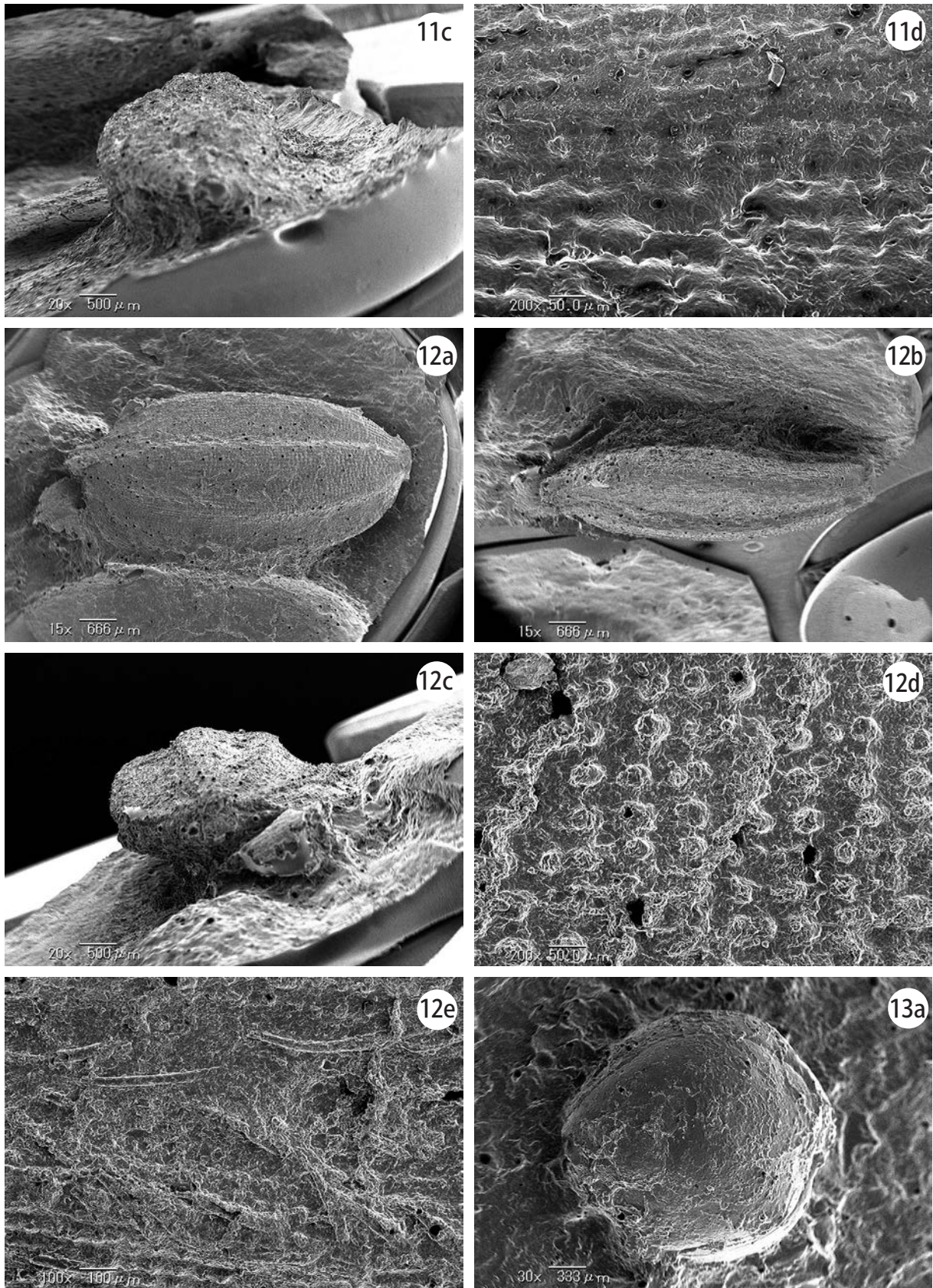


写真4 金井東裏遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(2)

11. イネ粃(圧痕No.6-2)、12. イネ粃(圧痕No.6-4)、13. キビ有ふ果(圧痕No.5)
 a: 側面観、b: 内穎側、c: 上面観、d: 顆粒状突起の拡大、e: ふ毛の拡大

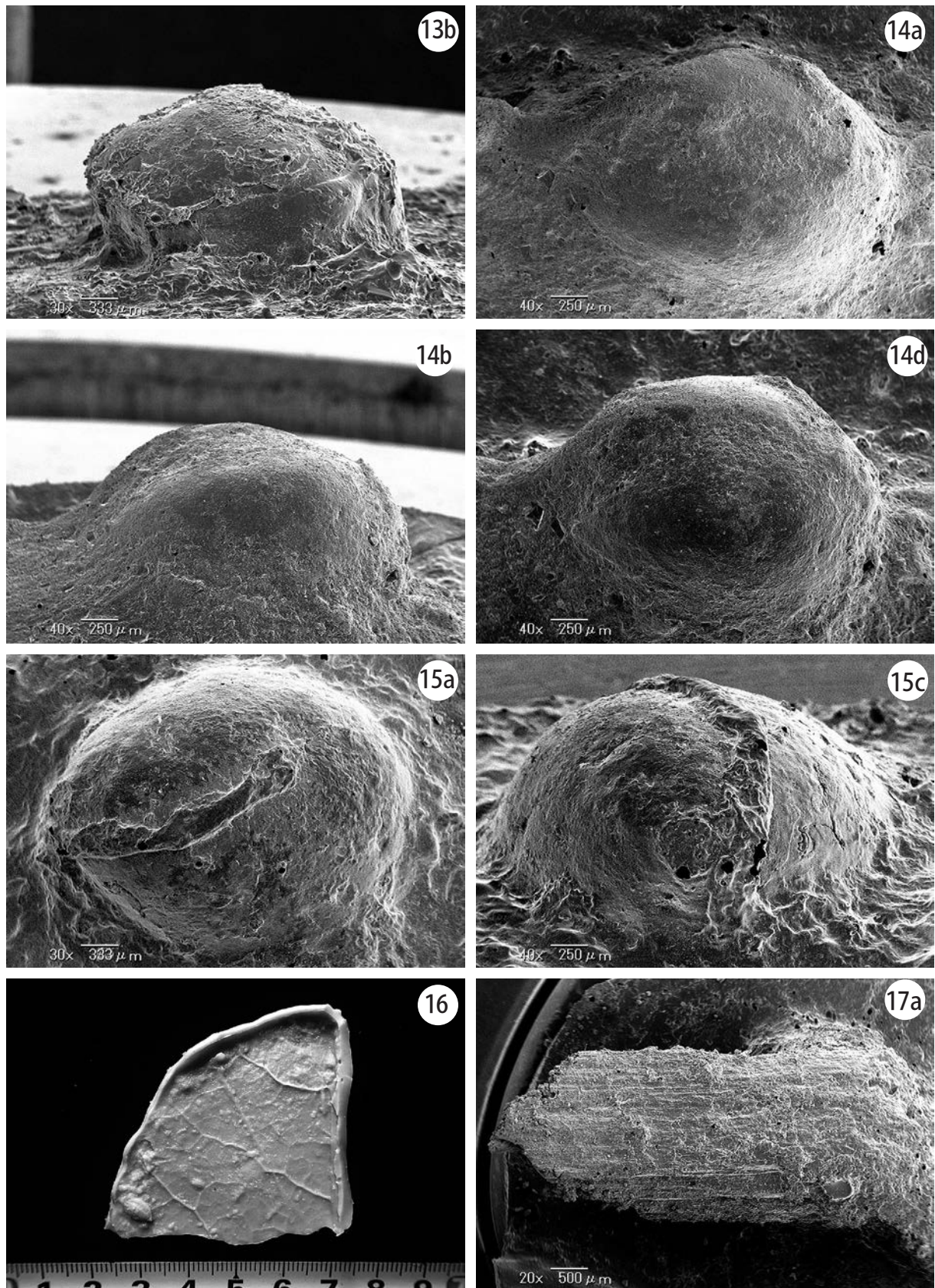


写真5 金井東裏遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(3)

13. キビ有ふ果(圧痕No.5)、14. キビ類果?(圧痕No.4-2)、15. 不明A種実(圧痕No.1)、16. 広葉樹(圧痕No.4-3の実体顕微鏡写真)、17. 不明木材(圧痕No.6-1)
a:側面観、b:内穎・外穎側、c:上面観、d:斜め方向

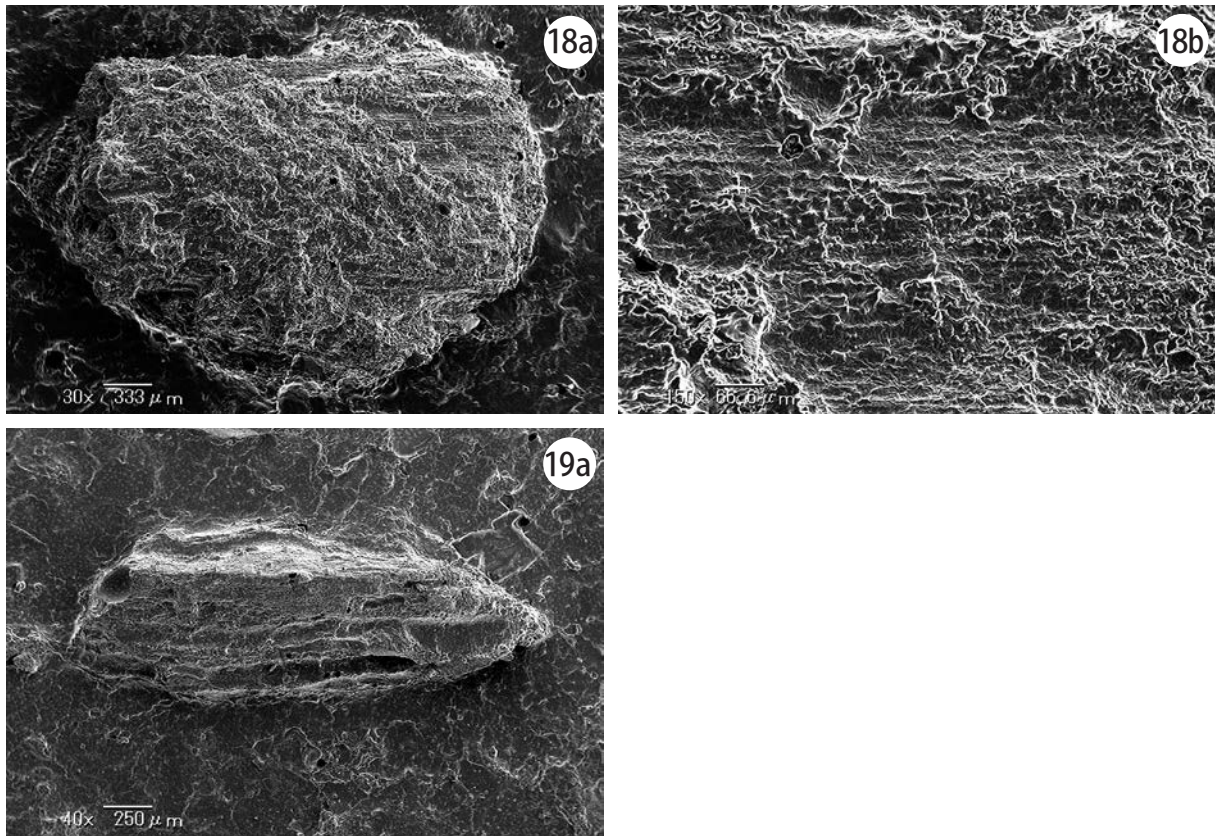


写真6 金井東裏遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(4)

18. 不明木材(圧痕No.6-1)、19. 不明木材(圧痕No.7-1)
a:側面観、b:部分拡大

3. 縄文時代炭化種実の放射性炭素年代測定(AMS)

(1)測定対象試料

金井東裏遺跡は、群馬県渋川市金井字東裏B8787に所在し、榛名山麓を流れる小河川によって形成された扇状地(吾妻川の河岸段丘の複合地形)に立地する。測定対象試料は、74号竪穴住居から出土した炭化オニグルミ破片3点である(表1)。この住居からは加曽利E3式土器が出土している。

(2)測定の意義

試料の年代を測定し、共伴する加曽利E3式土器の年代を検討する。

(3)化学処理工程

- ①メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ②酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- ③試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- ④真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- ⑥グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4)測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5)算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ②¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- ④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較

3. 縄文時代炭化種実の放射性炭素年代測定(AMS)

正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(6)測定結果

測定結果を表1・2に示す。74号住居出土試料の14C年代は、炭化物1が4210±30yrBP、炭化物2が4130±30yrBP、炭化物3が4160±30yrBPで、3点ともおおむね近い値となっている。暦年較正年代(1σ)は、4800～4600cal BP頃の範囲となり、加曽利E3式期として示された年代値(小林編2008)と重なる結果である。

試料の炭素含有率はいずれも70%前後の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

引用文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 アム・プロモーション
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果(δ¹³C補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-153410	74号住居炭化物1	74号住居炬付近	炭化物(オニグルミ破片)	AAA	-27.66±0.25	4,210±30	59.23±0.19
IAAA-153411	74号住居炭化物2	74号住居炬付近	炭化物(オニグルミ破片)	AAA	-28.89±0.32	4,130±30	59.79±0.19
IAAA-153412	74号住居炭化物3	74号住居炬付近	炭化物(オニグルミ破片)	AAA	-28.06±0.27	4,160±30	59.58±0.19

[#7891]

表2 放射性炭素年代測定結果(δ¹³C未補正值、暦年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-153410	4,250±20	58.9±0.18	4,207±25	4836calBP-4815calBP (25.7%)	4845calBP-4802calBP (33.1%)
				4754calBP-4710calBP (42.5%)	4762calBP-4693calBP (50.7%)
IAAA-153411	4,200±30	59.32±0.18	4,131±25	4676calBP-4645calBP (11.6%)	4676calBP-4645calBP (11.6%)
				4808calBP-4781calBP (13.8%)	4820calBP-4750calBP (27.5%)
				4770calBP-4758calBP (5.3%)	4729calBP-4567calBP (65.4%)
				4702calBP-4670calBP (15.6%)	4557calBP-4535calBP (2.5%)
IAAA-153412	4,210±20	59.2±0.18	4,160±25	4651calBP-4581calBP (33.5%)	
				4821calBP-4799calBP (11.7%)	4827calBP-4782calBP (19.2%)
				4762calBP-4748calBP (7.3%)	4768calBP-4611calBP (73.8%)
				4742calBP-4734calBP (3.7%)	4598calBP-4585calBP (2.4%)
				4729calBP-4690calBP (21.5%)	
				4679calBP-4643calBP (20.9%)	
				4636calBP-4629calBP (3.0%)	

[参考値]

4. 縄文時代黒曜石製石器の蛍光X線分析による石材原産地同定

(1)はじめに

渋川市に所在する金井東裏遺跡から出土した縄文時代の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

尚、参照資料として諏訪西遺跡の縄文時代前・中期の黒曜石製石鏃7点についても同様に分析し、産地推定を行った。

(2)試料と方法

分析対象は、金井東裏遺跡より出土した黒曜石製石器79点と、諏訪西遺跡より出土した黒曜石製石器7点の合計86点である(表1)。時期別には、関山Ⅰ式期が6点、関山Ⅱ式期が60点、阿玉台Ⅱ式期が1点、新巻～焼町土器期が1点、加曾利E2～E3式期が14点、称名寺Ⅱ式期が4点で、器種別には、石鏃が20点、剥片が63点、石核が3点である。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジとイオン交換水を用いて、測定面の表面の洗浄を行った。また、剥片、石核で風化や汚染が強く認められた試料は、サンドブラストを用いて直径1.5cm程度の範囲の風化面を除去して新鮮面を測定した。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

①Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強

度)

②Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

③Mn強度×100/Fe強度

④log(Fe強度/K強度)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe強度/K強度)の値が減少する(望月1999)。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

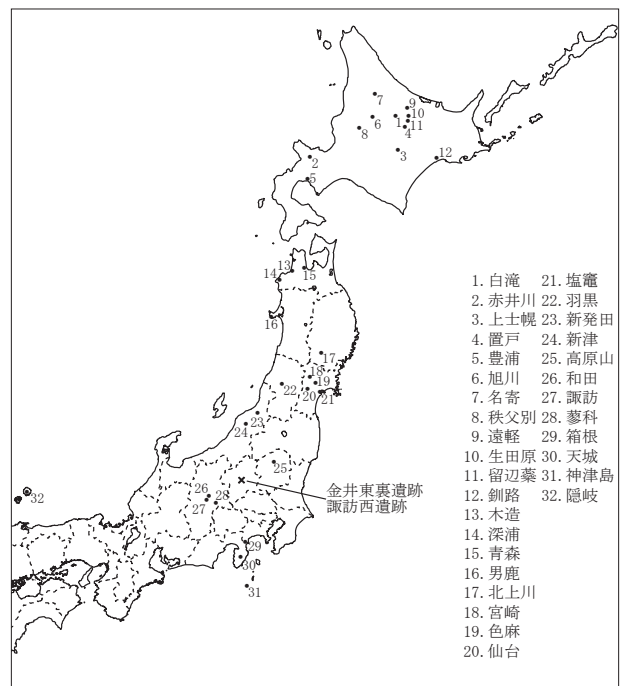


図1 黒曜石産地分布図(東日本)

(3)分析結果

表4に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットし

4. 縄文時代黒曜石製石鏃の蛍光X線分析による石材原産地同定

表1 分析対象となる黒曜石製石器の一覧

通番	遺跡	遺物番号および掲載図番号	器種	形態	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	時期
1	金井東裏	5 区 17 住居 1	剥片		24	19	8	3.4	加曾利E2式期
2		5 区 17 住居 2	剥片		16	13	4	1.2	加曾利E2式期
3		5 区 17 住居 3	剥片		18	11	5	1.0	加曾利E2式期
4		5 区 17 住居 4	石鏃	欠損	(18)	(6)	3	0.5	加曾利E2式期
5		5 区 18 住居 1	剥片		24	18	4	1.5	加曾利E2~E3式期
6		5 区 19 住居 1	剥片		23	13	5	1.1	加曾利E2式期
7		4 区 34 住居 1	剥片		34	24	12	7.8	関山II式期
8		4 区 34 住居 2	剥片		50	15	8	5.0	関山II式期
9		4 区 34 住居 3	剥片		43	16	5	2.9	関山II式期
10		4 区 34 住居 4	剥片		22	15	9	1.5	関山II式期
11		4 区 35 住居 1	剥片		18	14	6	1.1	関山II式期
12		4 区 35 住居 第128図16	石鏃	凹基無茎鏃	(11)	13	3	0.3	関山II式期
13		7 区 49 住居 1	剥片		22	18	6	1.6	加曾利E2式期
14		7 区 49 住居 2	剥片		19	16	4	1.1	加曾利E2式期
15		7 区 49 住居 3	剥片		21	17	3	1.0	加曾利E2式期
16		7 区 49 住居 4	剥片		20	10	4	1.0	加曾利E2式期
17		7 区 54 住居 1	剥片		24	15	5	1.6	関山II式期
18		7 区 54 住居 2	剥片		18	15	6	1.3	関山II式期
19		7 区 55 住居 1	剥片		22	16	4	1.3	関山II式期
20		7 区 55 住居 2	剥片		21	17	4	1.1	関山II式期
21		7 区 55 住居 3	剥片		17	11	4	1.1	関山II式期
22		7 区 57 住居 1	剥片		30	14	9	3.0	関山II式期
23		7 区 57 住居 2	剥片		25	17	6	1.7	関山II式期
24		7 区 58 住居 1	剥片		32	16	6	3.5	関山II式期
25		7 区 58 住居 2	剥片		28	9	7	1.7	関山II式期
26		7 区 59 住居 1	剥片		38	16	12	6.7	関山II式期
27		7 区 59 住居 2	剥片		33	22	10	5.4	関山II式期
28		7 区 59 住居 3	剥片		29	14	12	3.1	関山II式期
29		7 区 59 住居 4	剥片		24	15	10	2.6	関山II式期
30		7 区 59 住居 5	剥片		19	18	6	1.5	関山II式期
31		7 区 59 住居 6	剥片		25	18	3	1.1	関山II式期
32		7 区 59 住居 第156図26	石鏃	凹基無茎鏃	(10)	(10)	2	0.2	関山II式期
33		7 区 59 住居 第156図25	石鏃	欠損	25	(9)	4	0.6	関山II式期
34		7 区 60 住居 1	剥片		57	47	9	21.7	関山II式期
35		7 区 60 住居 2	剥片		19	15	9	1.8	関山II式期
36		7 区 60 住居 3	剥片		16	14	8	2.4	関山II式期
37		7 区 60 住居 4	剥片		22	11	10	1.9	関山II式期
38		7 区 60 住居 第159図15	石鏃	凹基有茎鏃	14	10	4	0.3	関山II式期
39		7 区 61 住居 1	石核		44	24	11	11.9	関山II式期
40		7 区 62 住居 1	剥片		29	23	10	4.7	称名寺II式期?
41		7 区 62 住居 2	剥片		29	20	7	3.1	称名寺II式期?
42		7 区 62 住居 3	剥片		26	17	9	3.2	称名寺II式期?
43		7 区 62 住居 4	剥片		25	16	3	1.1	称名寺II式期?
44		7 区 64 住居 1	剥片		12	7	6	0.7	関山II式期
45		7 区 64 住居 2	石鏃	平基無茎鏃	(17)	18	5	1.1	加曾利E3式期
46		8 区 69 住居 1	剥片		12	6	3	0.3	関山II式期
47		7 区 71 住居 1	剥片		31	20	11	5.5	関山II式期
48		7 区 71 住居 2	剥片		34	21	12	4.2	関山II式期
49		7 区 71 住居 3	剥片		25	21	11	4.4	関山II式期
50		7 区 71 住居 4	剥片		25	15	9	2.9	関山II式期
51		7 区 71 住居 5	剥片		31	15	9	2.4	関山II式期
52		7 区 71 住居 6	剥片		25	15	7	2.5	関山II式期
53		7 区 71 住居 7	剥片		19	14	8	1.6	関山II式期
54		7 区 71 住居 8	剥片		17	15	6	1.4	関山II式期
55		8 区 74 住居 1	剥片		39	24	7	5.4	加曾利E3式期
56		8 区 74 住居 2	剥片		21	16	8	1.8	加曾利E3式期
57		8 区 74 住居 3	石核		49	26	16	22.9	加曾利E3式期
58		8 区 75 住居 1	剥片		35	27	23	10.3	関山II式期
59		8 区 75 住居 2	剥片		22	18	10	3.0	関山II式期
60		8 区 75 住居 3	剥片		21	15	12	2.6	関山II式期
61		8 区 75 住居 第184図18	石鏃	凹基無茎鏃	(12)	13	4	0.4	関山II式期
62		8 区 75 住居 第184図19	石核		61	53	49	86.5	関山II式期
63		8 区 79 住居 1	剥片		21	11	8	1.2	新巻~焼町土器期?
64		7 区 80 住居 1	剥片		29	21	12	4.9	関山II式期
65		7 区 80 住居 2	剥片		26	19	9	3.2	関山II式期
66		7 区 80 住居 3	剥片		20	17	7	1.7	関山II式期
67		7 区 80 住居 4	剥片		30	17	4	1.9	関山II式期
68		7 区 80 住居 5	剥片		25	14	10	2.1	関山II式期
69		7 区 80 住居 6	剥片		38	13	4	1.7	関山II式期
70		7 区 80 住居 7	剥片		21	17	5	1.7	関山II式期
71		7 区 80 住居 10	剥片		26	18	4	1.3	関山II式期
72		7 区 80 住居 11	剥片		24	14	4	1.2	関山II式期
73		7 区 80 住居 12	剥片		27	18	4	1.4	関山II式期
74		7 区 80 住居 第175図26	石鏃	凹基無茎鏃	(16)	(13)	3	0.4	関山II式期
75		7 区 80 住居 第175図25	石鏃	凹基無茎鏃	20	12	5	0.4	関山II式期
76		7 区 80 住居 15	石鏃	凹基無茎鏃	(15)	13	3	0.4	関山II式期
77		7 区 80 住居 16	石鏃	凹基無茎鏃	(12)	(10)	3	0.3	関山II式期
78		7 区 80 住居 17	石鏃	凹基無茎鏃	(17)	(12)	4	0.5	関山II式期
79		7 区 80 住居 18	石鏃	凹基無茎鏃	(13)	(13)	2	0.2	関山II式期
80		諏訪西 2 住居 第219図1	石鏃	凹基無茎鏃	14	17	4	0.6	阿玉台II式期
81		諏訪西 4 住居 第222図2	石鏃	平基無茎鏃	19	16	4	0.9	関山I式期
82		諏訪西 10 住居 第228図1	石鏃	凹基無茎鏃	15	14	3	0.3	関山I式期
83		諏訪西 10 住居 第228図2	石鏃	平基無茎鏃	17	15	4	1.1	関山I式期
84		諏訪西 11 住居 第230図1	石鏃	凹基無茎鏃	21	15	3	0.7	関山I式期
85		諏訪西 11 住居 第230図2	石鏃	平基無茎鏃	20	21	4	1.1	関山I式期
86		諏訪西 12 住居 第232図19	石鏃	凹基無茎鏃	24	16	5	1.2	関山I式期

第4章 自然科学分析

た図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、15点が鷹山群(和田エリア)、26点が鷹山群と小深沢群(和田エリア)の重複域、2点が土屋橋1群(和田エリア)、1点が土屋橋2群(和田エリア)、1点が

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2), 1K露頭(10), 十勝石沢露頭直下河床(11), アジサイの滝露頭(10)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
	上土幌	上土幌	十勝三股(4), タウシュベツ川右岸(42), タウシュベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
	置戸	置戸山	置戸山(5)
		所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊泉(10)
	旭川	旭川	近文台(8), 雨紛台(2)
	名寄	名寄	忠烈布川(19)
	秩父別	秩父別1	中山(66)
		秩父別2	
		秩父別3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
留辺蘂	留辺蘂1	ケシヨマップ川河床(9)	
	留辺蘂2		
釧路	釧路	釧路市営スキー場(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15), 鶴ヶ坂(10)
	深浦	八森山	岡崎浜(7), 八森山公園(8)
	青森	青森	天田内川(6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
		脇本	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9), 真城(33)
		北上折居2	
		北上折居3	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸	根岸(40)
	仙台	秋保1	土蔵(18)
		秋保2	
塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24), 大越沢(10)
		櫛引	たらのき代(19)
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)
	新津	金津	金津(7)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)
		七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 枝持沢(3)
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)
		鷹山	鷹山(14), 東餅屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土屋橋1	土屋橋西(10)
		土屋橋2	新和田トンネル北(20), 土屋橋北西(58), 土屋橋西(1)
		古峠	和田峠トンネル上(28), 古峠(38), 和田峠スキー場(28)
		ぶどう沢	ぶどう沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
		高松沢	高松沢(19)
		諏訪	星ヶ台
神奈川	箱根	冷山	冷山(20), 麦草峠(20), 麦草峠東(20)
		芦ノ湯	芦ノ湯(20)
		畑宿	畑宿(51)
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)
静岡	天城	上多賀	上多賀(20)
		柏峠	柏峠(20)
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)
		砂糠崎	砂糠崎(20)
島根	隠岐	久見	久見パーライト中(6), 久見採掘現場(5)
		箕浦	箕浦海岸(3), 加茂(4), 岸浜(3)

ぶどう沢群(和田エリア)、4点が高松沢群(和田エリア)、29点が星ヶ台群(諏訪エリア)、2点が恩馳島群(神津島エリア)の範囲にプロットされた。No.5とNo.18は図2では星ヶ台群の範囲にプロットされたが、図3では星ヶ台群の下方にプロットされた。これは先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月, 1999)、星ヶ台群に属する可能性が高い。同様に、No.35とNo.39は鷹山群に、No.82は高松沢群に属する可能性が高い。No.85の石鏃は、合致する判別群がなかった。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表3に、時期、器種別の産地を示す。測定した石器86点の範囲内においては、縄文時代前期前半の関山式期の石器は和田エリア産の割合が高く、中期後半以降の加曾利E2~E3式期、称名寺II式期の石器は諏訪エリア産の割合が高い傾向がみられた。また、関山II式期と阿玉台II式期の石器には神津島エリア産が各1点ずつ確認された。

(4)おわりに

金井東裏遺跡、諏訪西遺跡より出土した黒曜石製石器86点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、52点が和田エリア、31点が諏訪エリア、2点が神津島エリア産と推定された。残り1点は産地不明であった。

引用文献

望月明彦 1999「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—』172-179, 大和市教育委員会。

表3 時期・器種別の産地

時期(遺跡)	器種	和田	諏訪	神津島	不明	計	
関山I (諏訪西)	石鏃	平基無莖	1	1		3	
		凹基無莖	2	1		3	
	合計	3	2	0	1	6	
関山II (金井東裏)	石鏃	凹基無莖	8	1		9	
		凹基有莖	1			1	
		欠損計	10	1	0	0	11
	剥片	36	10	1		47	
	石核	1	1			2	
	合計	47	12	1	0	60	
阿玉台II (諏訪西)	石鏃	凹基無莖		1		1	
合計	0	0	1	0	1		
新巻~焼町 (金井東裏)	剥片	0	1	0	0	1	
合計	0	1	0	0	1		
加曾利E2~E3 (金井東裏)	石鏃	平基無莖		1		1	
		欠損計	0	2	0	0	2
		剥片	1	10			11
	石核		1			1	
合計	1	13	0	0	14		
称名寺II (金井東裏)	剥片	1	3			4	
合計	1	3	0	0	4		
総計		52	30	2	1	85	

4. 縄文時代黒曜石製石鏃の蛍光X線分析による石材原産地同定

表4 計測値および産地推定結果

通番	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log Fe K	判別群	エリア
1	317.1	125.8	1177.0	803.6	302.1	395.3	792.7	35.03	10.69	13.17	0.57	星ヶ台	諏訪
2	186.1	74.9	736.8	467.0	173.4	224.9	436.4	35.87	10.17	13.32	0.60	星ヶ台	諏訪
3	267.3	108.5	1054.5	703.7	262.4	350.4	682.8	35.20	10.29	13.13	0.60	星ヶ台	諏訪
4	242.9	96.0	921.8	624.1	231.9	308.0	596.8	35.44	10.41	13.17	0.58	星ヶ台	諏訪
5	318.8	92.6	893.1	666.6	242.7	325.3	633.4	35.68	10.37	12.99	0.45	星ヶ台?	諏訪?
6	277.5	108.1	1041.8	704.1	265.7	354.2	686.8	35.02	10.37	13.21	0.57	星ヶ台	諏訪
7	233.1	92.0	852.2	580.3	224.3	294.6	575.4	34.65	10.79	13.40	0.56	星ヶ台	諏訪
8	119.1	48.6	444.6	298.4	115.7	153.7	302.4	34.29	10.92	13.29	0.57	星ヶ台	諏訪
9	301.6	112.6	1515.9	969.6	324.1	407.6	948.0	36.60	7.43	12.23	0.70	高松沢	和田
10	288.3	115.4	1098.7	726.2	274.4	356.0	696.7	35.37	10.50	13.37	0.58	星ヶ台	諏訪
11	117.4	57.9	470.4	583.3	36.4	246.9	324.8	48.96	12.31	3.06	0.60	鷹山or小深沢	和田
12	250.0	90.9	1263.8	771.1	290.6	329.2	808.0	35.07	7.19	13.22	0.70	高松沢	和田
13	261.8	102.9	1008.4	676.6	259.1	339.1	658.4	35.00	10.21	13.40	0.59	星ヶ台	諏訪
14	247.8	98.1	945.0	614.3	229.5	301.6	578.4	35.64	10.38	13.31	0.58	星ヶ台	諏訪
15	294.7	114.1	1091.2	756.9	287.4	376.7	732.4	35.15	10.46	13.35	0.57	星ヶ台	諏訪
16	256.0	99.3	955.8	661.4	252.5	334.8	655.1	34.74	10.39	13.26	0.57	星ヶ台	諏訪
17	101.3	40.7	448.2	377.6	76.2	164.0	306.4	40.86	9.09	8.25	0.65	土屋橋1	和田
18	176.0	59.2	552.0	356.0	133.0	175.7	335.1	35.61	10.72	13.30	0.50	星ヶ台?	諏訪?
19	281.4	142.7	1202.5	1409.2	110.6	586.6	777.6	48.86	11.87	3.83	0.63	鷹山or小深沢	和田
20	190.7	105.8	1343.1	326.8	413.5	252.1	642.0	20.00	7.88	25.30	0.85	恩馳島	神津島
21	279.2	111.5	1040.4	716.6	272.1	359.2	693.4	35.10	10.71	13.33	0.57	星ヶ台	諏訪
22	311.6	156.3	1241.5	1534.8	103.0	643.3	836.1	49.24	12.59	3.31	0.60	鷹山	和田
23	279.3	136.4	1115.7	1352.8	100.5	569.2	762.7	48.57	12.22	3.61	0.60	鷹山or小深沢	和田
24	263.5	103.6	1021.1	694.0	265.1	348.7	677.7	34.96	10.14	13.35	0.59	星ヶ台	諏訪
25	213.4	76.3	1028.6	672.3	210.1	281.3	661.2	36.84	7.42	11.51	0.68	高松沢	和田
26	257.6	128.1	1023.6	1225.1	75.9	507.2	656.1	49.71	12.51	3.08	0.60	鷹山	和田
27	277.4	116.9	1247.4	1097.6	167.3	456.6	790.5	43.70	9.37	6.66	0.65	土屋橋2	和田
28	274.0	136.5	1117.7	1404.7	89.4	599.0	796.3	48.61	12.21	3.10	0.61	鷹山or小深沢	和田
29	136.7	67.8	531.4	673.0	47.3	289.6	377.2	48.52	12.77	3.41	0.59	鷹山	和田
30	124.1	59.8	500.7	622.9	37.0	260.6	340.5	49.40	11.95	2.93	0.61	鷹山or小深沢	和田
31	315.2	113.9	1131.9	755.0	279.7	367.5	712.4	35.70	10.06	13.23	0.56	星ヶ台	諏訪
32	196.1	99.8	833.9	1011.1	61.8	417.8	537.8	49.84	11.97	3.04	0.63	鷹山or小深沢	和田
33	253.5	128.6	1067.5	1294.7	80.8	541.4	711.5	49.26	12.05	3.07	0.62	鷹山or小深沢	和田
34	218.8	108.5	902.6	1091.7	72.9	460.0	604.3	48.98	12.03	3.27	0.62	鷹山or小深沢	和田
35	277.3	121.6	968.1	1198.5	74.3	505.1	649.1	49.38	12.56	3.06	0.54	鷹山?	和田?
36	316.8	150.6	1268.1	1434.9	110.9	598.6	821.7	48.38	11.88	3.74	0.60	鷹山or小深沢	和田
37	255.8	127.1	1056.5	1162.1	72.0	469.6	674.1	48.88	12.03	3.03	0.62	鷹山or小深沢	和田
38	224.1	108.4	915.8	1057.8	63.4	432.3	562.7	49.99	11.84	2.99	0.61	鷹山or小深沢	和田
39	252.6	116.4	920.5	1113.7	75.3	470.4	620.3	48.85	12.64	3.30	0.56	鷹山?	和田?
40	335.6	131.0	1217.6	814.8	304.9	404.4	776.1	35.42	10.76	13.26	0.56	星ヶ台	諏訪
41	311.8	119.6	1160.3	778.7	287.4	388.4	743.3	35.43	10.31	13.08	0.57	星ヶ台	諏訪
42	317.7	126.6	1169.2	788.3	299.7	393.7	766.2	35.07	10.83	13.33	0.57	星ヶ台	諏訪
43	298.8	146.8	1209.1	1480.3	94.1	616.7	799.2	49.50	12.14	3.15	0.61	鷹山or小深沢	和田
44	139.0	68.7	539.6	738.3	51.6	324.4	432.8	47.72	12.73	3.33	0.59	鷹山	和田
45	293.0	115.5	1108.7	744.0	281.3	368.3	714.8	35.29	10.42	13.34	0.58	星ヶ台	諏訪
46	114.0	42.3	427.1	283.8	104.4	136.8	264.1	35.97	9.90	13.23	0.57	星ヶ台	諏訪
47	296.6	141.2	1122.1	1273.6	81.8	523.1	663.4	50.10	12.59	3.22	0.58	鷹山	和田
48	186.8	93.2	793.3	958.1	58.1	400.7	554.9	48.59	11.75	2.95	0.63	鷹山or小深沢	和田
49	326.3	131.3	1265.2	781.6	295.9	377.2	735.2	35.69	10.38	13.51	0.59	星ヶ台	諏訪
50	306.1	119.9	1138.9	774.9	290.5	379.2	745.8	35.38	10.53	13.26	0.57	星ヶ台	諏訪
51	305.2	144.3	1138.5	1446.0	91.5	602.6	792.3	49.31	12.67	3.12	0.57	鷹山	和田
52	305.3	154.8	1223.4	1473.7	92.2	610.1	789.5	49.70	12.65	3.11	0.60	鷹山	和田
53	184.3	91.0	755.2	850.7	53.1	347.9	478.8	49.16	12.05	3.07	0.61	鷹山or小深沢	和田
54	235.5	118.4	957.3	1222.0	79.6	520.2	689.8	48.65	12.37	3.17	0.61	鷹山or小深沢	和田
55	234.8	91.8	878.3	583.3	220.6	293.4	571.6	34.95	10.45	13.22	0.57	星ヶ台	諏訪
56	286.5	113.7	1070.4	732.2	277.6	364.6	708.8	35.15	10.62	13.33	0.57	星ヶ台	諏訪
57	281.5	110.2	1033.6	686.5	261.9	345.6	677.4	34.82	10.66	13.29	0.56	星ヶ台	諏訪
58	288.2	145.6	1161.9	1384.5	87.8	572.8	738.7	49.73	12.53	3.16	0.61	鷹山	和田
59	271.6	137.5	1098.6	1346.3	85.8	564.7	721.7	49.52	12.52	3.16	0.61	鷹山	和田
60	249.6	119.3	931.7	1186.6	79.9	507.8	672.8	48.49	12.81	3.26	0.57	鷹山	和田
61	278.2	136.6	1143.8	1351.7	85.3	560.7	728.4	49.58	11.94	3.13	0.61	鷹山or小深沢	和田
62	269.9	110.6	1044.6	674.9	254.4	340.7	663.5	34.91	10.59	13.16	0.59	星ヶ台	諏訪
63	203.5	75.2	1040.8	560.9	300.7	260.1	761.1	29.79	7.23	15.97	0.71	ぶどう沢	和田
64	317.2	157.0	1275.8	1576.3	100.6	664.0	888.1	48.82	12.30	3.12	0.60	鷹山or小深沢	和田
65	178.8	88.2	697.2	853.6	57.2	367.2	472.6	48.76	12.65	3.27	0.59	鷹山	和田
66	232.0	118.5	937.2	1186.8	77.9	510.8	685.5	48.22	12.65	3.17	0.61	鷹山	和田
67	280.1	142.8	1169.4	1397.5	89.9	582.1	766.8	49.27	12.21	3.17	0.62	鷹山or小深沢	和田
68	262.7	120.7	978.4	1285.8	79.1	526.7	671.4	50.17	12.33	3.09	0.57	鷹山	和田
69	128.8	63.9	537.8	619.4	40.6	257.3	344.8	49.07	11.88	3.22	0.62	鷹山or小深沢	和田
70	270.1	136.2	1132.6	1392.6	89.6	579.5	748.0	49.56	12.02	3.19	0.62	鷹山or小深沢	和田
71	249.7	123.7	1017.1	1269.4	80.6	525.9	679.9	49.67	12.16	3.15	0.61	鷹山or小深沢	和田
72	259.6	127.8	1041.4	1338.9	84.6	567.4	753.9	48.78	12.27	3.08	0.60	鷹山or小深沢	和田
73	311.1	148.5	1212.3	1494.7	93.0	621.8	801.5	49.64	12.25	3.09	0.59	鷹山	和田
74	248.5	127.8	1059.5	1337.5	84.8	560.2	717.1	49.54	12.07	3.14	0.63	鷹山or小深沢	和田
75	246.6	120.7	1017.4	1137.0	66.3	469.2	607.6	49.87	11.86	2.91	0.62	鷹山or小深沢	和田
76	67.6	34.3	271.1	371.3	27.5	164.7	220.4	47.37	12.65	3.50	0.60	鷹山	和田
77	159.3	62.3	596.1	426.3	163.9	219.9	429.3	34.39	10.45	13.23	0.57	星ヶ台	諏訪
78	196.0	95.8	801.0	918.2	54.1	374.8	490.4	49.97	11.95	2.94	0.61	鷹山or小深沢	和田
79	265.5	133.5	1097.4	1332.6	80.4	553.4	760.3	48.87	12.17	2.95	0.62	鷹山or小深沢	和田
80	124.1	66.7	838.6	214.9	276.7	171.0	430.6	19.66	7.96	25.31	0.83	恩馳島	神津島
81	270.2	105.4	1003.7	702.3	267.2	349.9	690.5	34.94	10.50	13.29	0.57	星ヶ台	諏訪
82	260.0	81.0	1103.2	701.5	231.7	292.5	679.2	36.83	7.34	12.16	0.63	高松沢?	和田?
83	169.5	64.9	811.7	600.9	156.7	253.8	530.4	38.97	8.00	10.16	0.68	土屋橋1	和田
84	267.7	105.1	1033.1	696.4	264.9	341.5	674.3	35.22	10.17	13.40	0.59	星ヶ台	諏訪
85	390.0	120.4	1457.3	1278.0	255.9	483.4	907.3	43.70	8.26	8.75	0.57	?	不明
86	299.9	111.9	1455.4	976.8	316.2	414.4	992.2	36.18	7.69	11.71	0.69	高松沢	和田

*網掛け試料は風化面を除去して測定

4. 縄文時代黒曜石製石鏃の蛍光X線分析による石材原産地同定

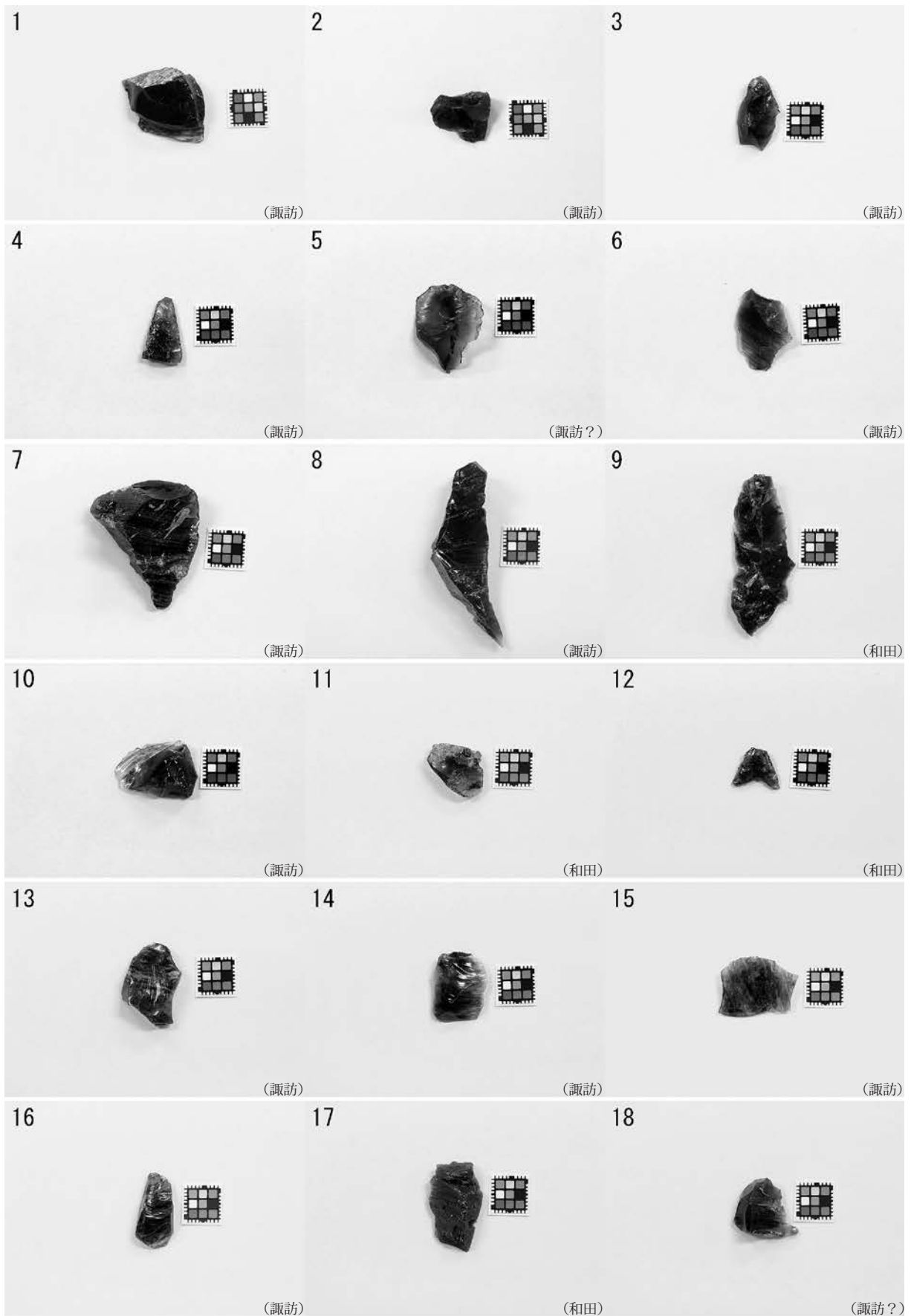


写真1. 分析資料(1)

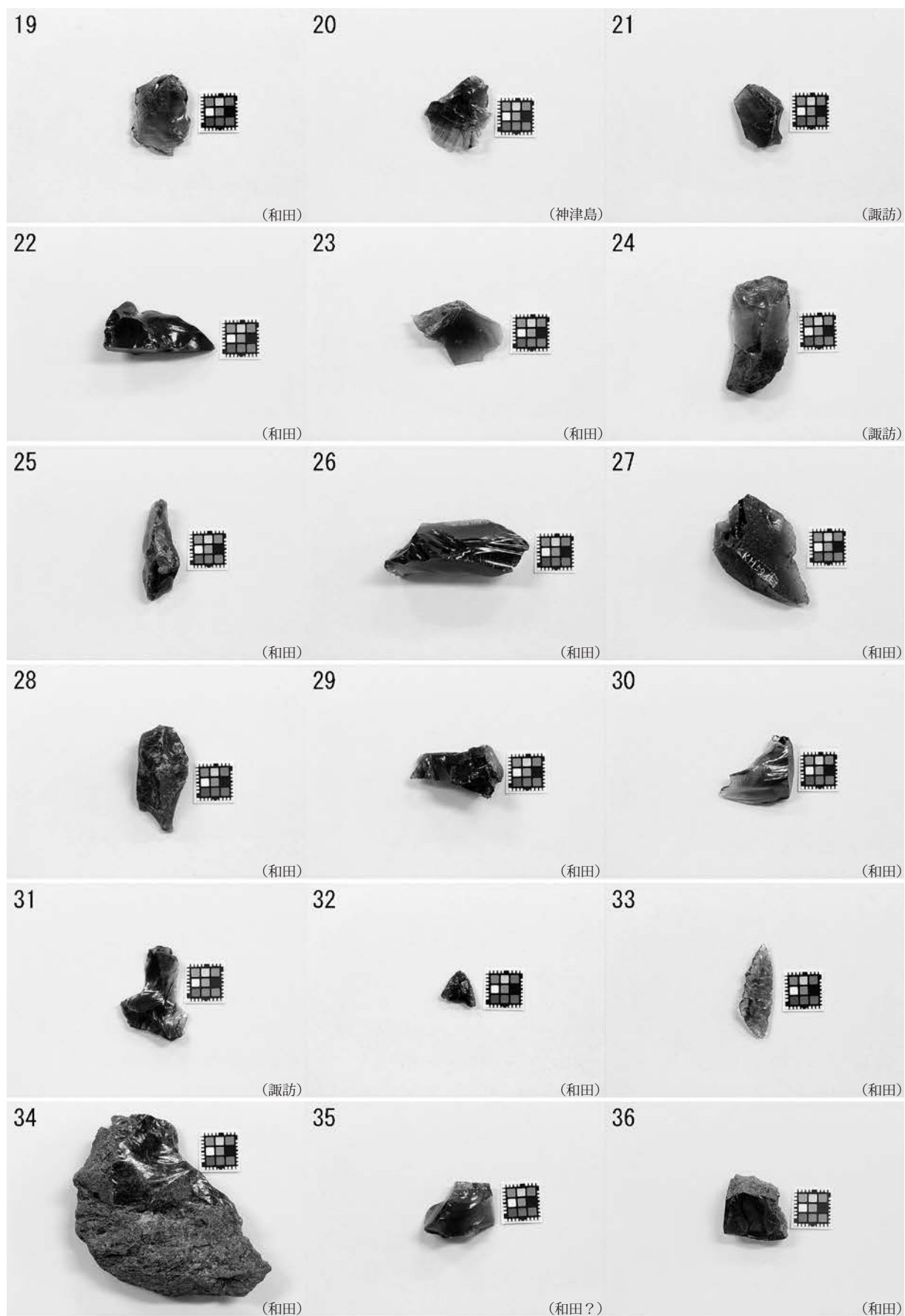


写真2. 分析資料(2)

4. 縄文時代黒曜石製石鏃の蛍光X線分析による石材原産地同定

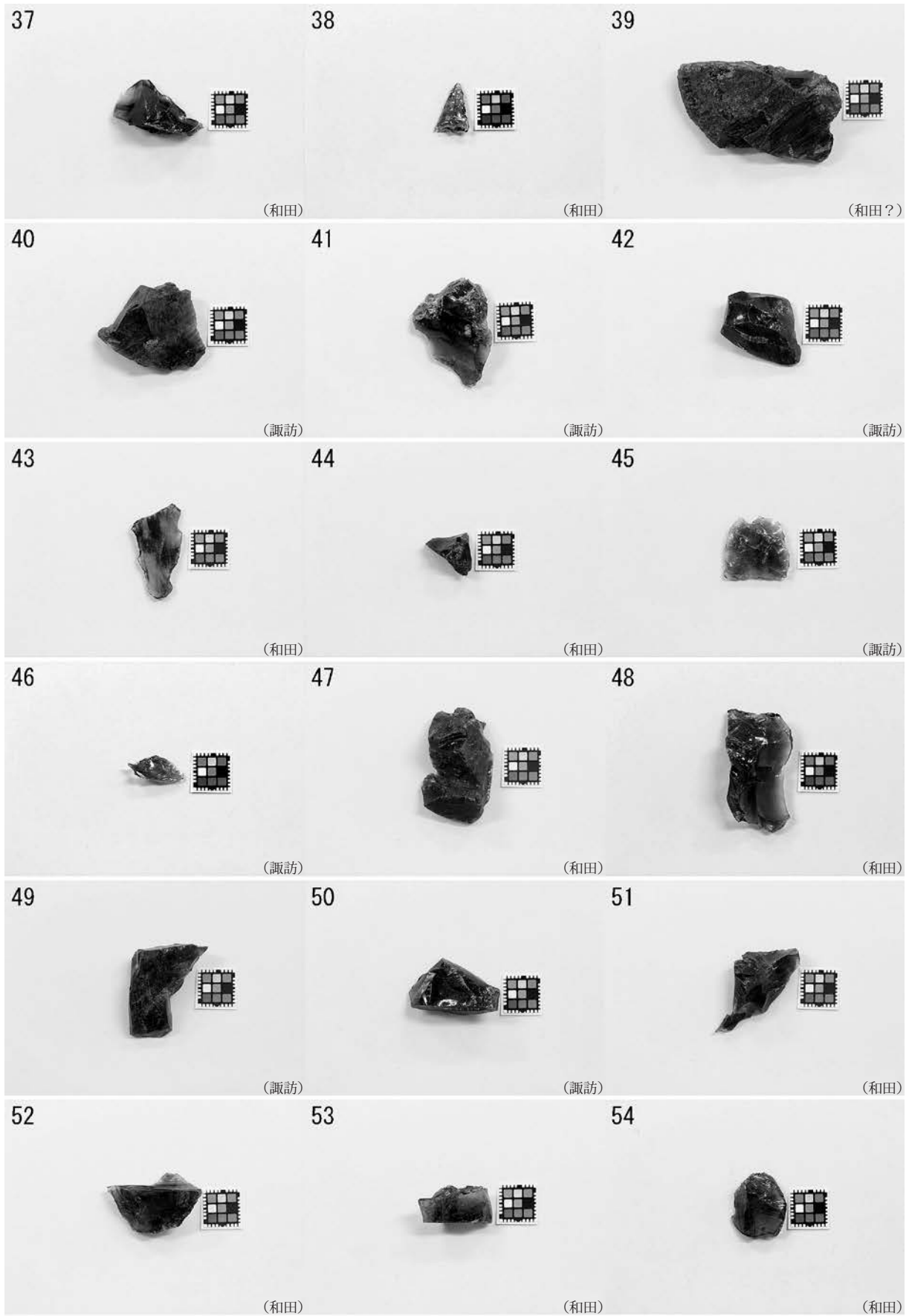


写真3. 分析資料(3)

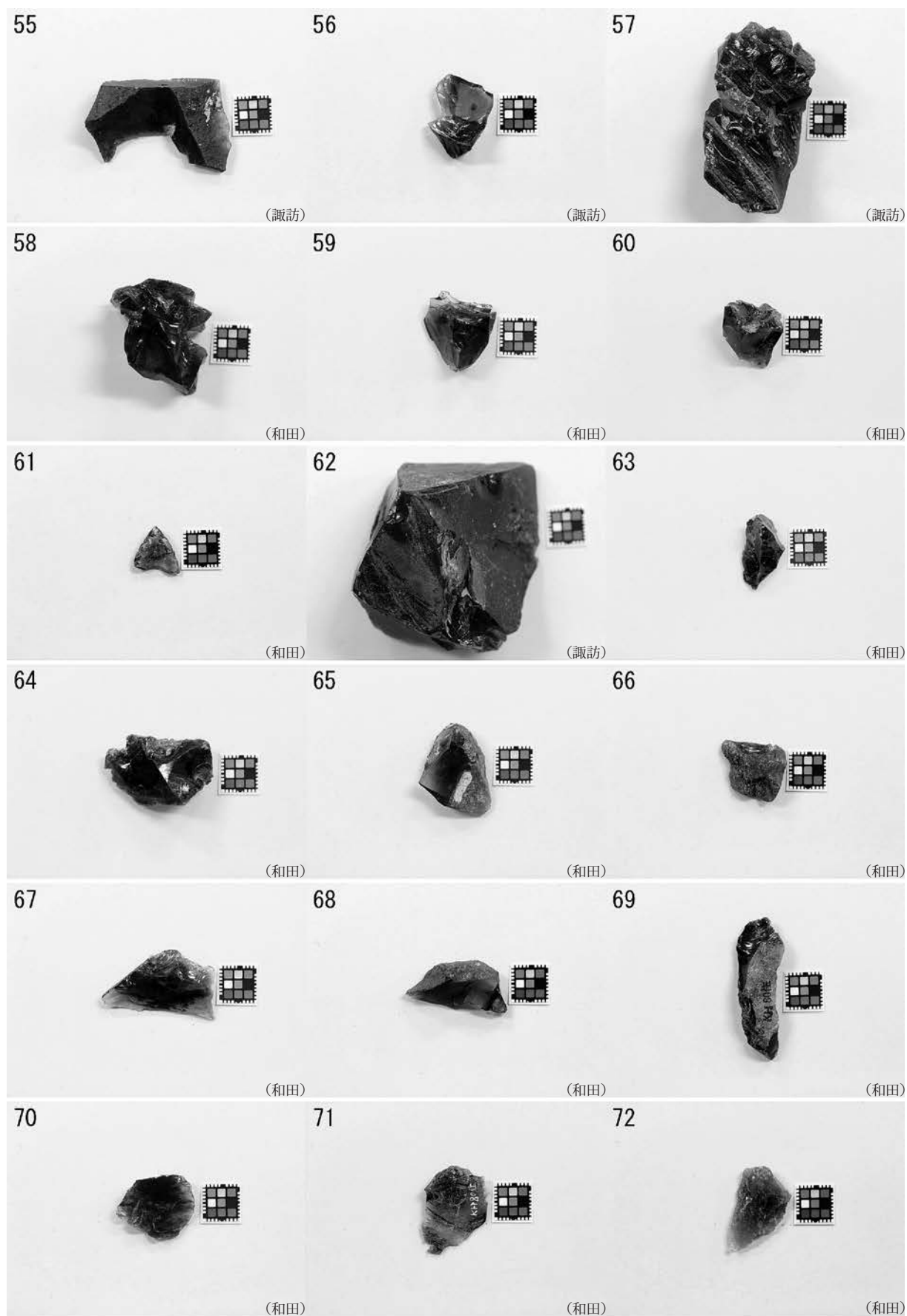


写真4. 分析資料(4)

4. 縄文時代黒曜石製石鏃の蛍光X線分析による石材原産地同定

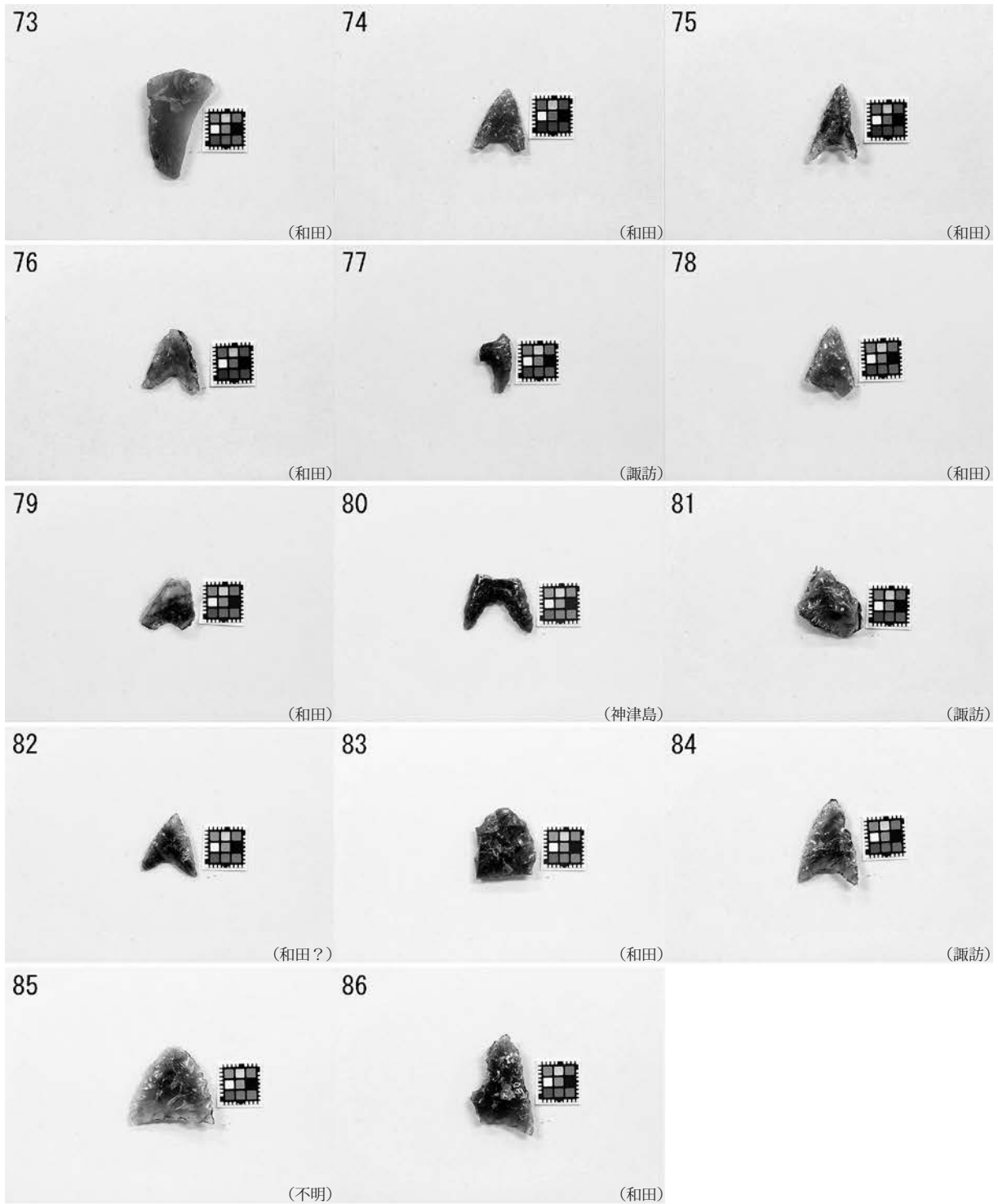


写真5. 分析資料(5)

第5章 調査の成果と課題

1. 近世以降

金井東裏遺跡での近世およびそれ以降の時期に帰属する遺構については、全体図1～4に掲示したように土地区画との関連性が想定されるA類の溝状遺構12条と、細長形状の土坑A類89基が目される。この溝状遺構A類の場合、同一地点に新旧が重複するものを統合してカウントすれば、1区では34・35号の2条、2区は5号の1条、4区は16号を主体とする1条、7区は44号の1条、9区は50号を主体とする1条、10区は45・46号の2条であり、合計で8条となる。走向の異なる7区44号を除く他の全ては、その走向がN70～78度Eの範囲に収斂し、相互にほぼ同一の方向性を意図した構築と判断される。各溝相互間の間隔については、下表のように1間幅を180cmとして換算すると10間を単位としていることが明瞭である。例えば、1区34号・35号と2区5号の相互間や10区の45号・46号の間隔は、共に10間幅を測る。これら以外の場合は、個々に異なり相当の長大な間隔を置いてはいるが、4区16号と9区50号とは30間幅を、9区50号と10区46号とは40間幅を測り、10間を1単位としてその複数倍の間隔を開けている。しかし、4区16号を基点として2区5号あるいは1区35・34号との間隔をみると、各々35間・48間・56間を測り、必ずしも10間単位とはなっていない。こうした点については、2区と4区との間に基点を違えるような何らかの区画境界が存在した可能性が高いと思われる。また、各溝状遺構と現在の土地区画状況とを対比すると、その走向については相互に類似してはいるが、同一位置に重複する状況は認められない。

ところで、昭和27年に東京大学の藤島亥治郎教授や群

馬大学の尾崎喜左雄教授らにより、石垣で地割りされた江戸時代の様相を留める「金井宿」の調査が行われた。それによると、南北の宿長300間を10間単位で30等分し、その区画線を背後の耕地へと東西方向に延長すると共に、各間口の10間幅の中に1間の路地を置くこととされている(註1)。現在の金井宿東側の畠耕地は、圃場整備等により間口に相当する南北幅が約20間に変更され、1間幅路地も3～4mに拡張されており、開宿当時の面影は東西の区画方向のみにとどまる。従って、全体図3・4に掲示した現在の土地区画と当該溝状遺構との走行が、位置的に合致しないのは当然とも言えるが、同時にその掘削時期が現代から遡ることを明示している。ただし、その相互間隔が10間を単位としている点は、先の金井宿の地割状況とも共通しており、その東側に設置されたと思われる各10間幅の畠地割境界に沿う東西方向の「1間幅路地」と、配置状況を同じくすると考えられる。限定された発掘調査範囲の中で、この「1間幅路地」と溝状遺構A類との重複関係は確認できないが、状況的には当該溝状遺構が「1間幅路地」の片側に付設された「側溝」的な機能を有していたことも想定し得る。尚、帰属時期の確定は困難ではあるが、こうした諸点を勘案すれば、溝状遺構A類が江戸時代まで遡る可能性を残している。

一方、細長形状のA類土坑については、1・7区を中心にした分布が認められ、その主軸方位は上記の溝状遺構の走向方位と同一か、または直交する方向性を有すると共に、位置的にも溝状遺構A類に近接・制約されている状況が看取できる。前述した溝状遺構A類と土地区画との強い関連性を重視すれば、土坑A類は各畠地割を単位にしてその区画内に設置されていると考えられる。当土坑の規模は、長辺109～870cm、短辺44～168cm、深さ8～112cmと相互にかなりの差異があり、長辺の規模に応じてA1～A3類に分類される。こうした類別を単位にして、その機能・用途が異なる可能性もあるが、深さとの有意な関係性は認められず、各類ともにI層に類似した黒色土とHr-FP軽石の混土単一層で埋没するものが主体をなす。こうした点は、前橋台地の利根川沿いの畠地で多数検出されている、天明3年の浅間山噴火に伴う

溝状遺構A類の走向方位と相互間隔

区	番号	走向方位	相互の間隔					
			溝間	m	尺間	溝間	m	尺間
1	34	N72度E	⇕	16～17	10	↑	101	56
1	35	N75度E	⇕	20～21	11		～	
2	5	N78度E	⇕	64～65	36	↓		
4	16	N70度E	⇕	53～54	30	↑	123	70
9	50	N71度E	⇕	70～71	40		～	
10	46	N76度E	⇕	17～19	10	↓		
10	45	N73度E	⇕					

泥流堆積物の埋填処理用に掘られたトレンチ状の、いわゆる「復旧溝」とも異なる。また土坑A類は、7頁第3図に示した吾妻川左岸のNo.16・18・23・28・30・31等の遺跡からも確認され、Hr-FPが層厚1m前後に厚く堆積する地域特有の遺構とも言える。現段階では、地域的に限定された畠耕作に関わる遺構として把握できるが、具体的に機能・用途を特定することは困難であり、今後の調査事例を検討していく中で再考する必要がある。

2. 弥生時代

当時代では、中期前葉から後期中葉にかけて遺跡の継続的立地が認められるが、竪穴住居等の明確な居住施設を伴う集落形成は、後期前葉～中葉に限定されている。この後期段階の集落は、1・2・4区を中心に展開する19軒の竪穴住居の存在から、全体的にはかなりの規模となることが想定される。その一方で、中期段階では7区を中心にして壺棺墓や墓坑・土坑は検出されているものの、竪穴住居の存在は確認されていない。しかし、当該区では1万点を超える土器片や石鍬22点が包含層内より検出されており、相応の定着の生活が存在した可能性は高い。明瞭な居住施設が欠落する点については、後期の竪穴住居のように下位のローム層にまで達する深い掘り込みを持つ堅固な構造ではなく、VI層の黒ボク土上面での平地式か、あるいはそれを僅かに掘り窪める程度の比較的簡易な構造による住居構築も考慮される。いずれにしても居住施設の不明瞭な状況から見て、後期に比べればその定住度合いは低いと言えよう。

ところで、400頁の「2. レプリカ法による弥生土器種実圧痕の同定」にまとめられているが、7区529号土坑から出土した中期中葉の筒形土器(第77図5)の外面2箇所、群馬県内では当該期での稀少例であるイネの籾圧痕が検出されている。この籾圧痕の検出が、当遺跡での中期段階における稲作農耕の存在を証明するものではないが、先の石鍬22点を加味すれば、その可能性はかなり高いと考えられる。さらに想定を進めれば、焼畑農法等による稲作陸耕が行われ、地味の低下とともにその居住地を短期・周期的に移動するような中期の生活形態が、堅固な竪穴住居を不要とした背景とも言えよう。

一方、注目すべき遺物としては、7区を中心に多量に出土している中期の筒形土器と、10区北の包含層内から

出土した人形土器破片の1点がある(第109図459)。この筒形土器については、高崎市の神保富士塚遺跡において良好な資料が出土しており、中期前葉の「神保富士塚式」(石川2003)として型式設定がなされている。その内容は、壺・甕・筒形・浅鉢から構成され、筒形土器を主体に磨消(充填)縄文手法による方形・渦巻状の区画文や「Ω形構図」が特徴とされている。また「神保富士塚式土器の類例は、利根川以西・榛名山麓以南の群馬県南西部一帯」(石川2003)に広がり、埼玉県北部域にも分布するとされている。金井東裏遺跡における同式平行土器の器種組成や磨消(充填)縄文手法もほぼ同様であるが、筒形土器にはこのΩ形文様はほとんど認められず、櫛歯状具による波状文や横線文を重帯施文する「甕2類A」も欠落するなどの差異がある。こうした異同が、同式段階における「小地域性」か、あるいは型式細分上の問題であるのか否か、狭小調査範囲での資料的な制約もあり判然としないが、留意する必要がある。また、当遺跡での「神保富士塚式」土器の出土により、その分布が榛名山北東麓の吾妻川流域にまで広がることは確実と言えよう。尚、墓坑の可能性が高い7区730号土坑には打割された筒形土器3点と蓋1点が、また同区529号土坑でも同状態の筒形土器1点出土しており、「魂抜き」的な破損行為を伴う筒形土器の副葬状況も注目される。

他方、人形土器は眼孔の上半と鼻稜を残した頭部上半の破片であるが、直径77mmの頭部に粘土貼付の鼻稜と篋搔き穿孔の眼孔を作出し、篋状具の横位沈線を刻み込んだ瘤状装飾6個が側面部を周回してほぼシンメトリーに貼付される。また、顔部両側には半月形の耳袋が剥落した痕跡があり、頭頂部・鼻稜部およびその近縁に赤色塗彩を施している。こうした人形土器の群馬県内における出土例は、渋川市の有馬遺跡・有馬条里遺跡、高崎市の小八木志志貝戸遺跡・若田坂上遺跡、吾妻郡中之条町川端遺跡などの5遺跡と、利根郡川場村生品字宮山地区等が知られている。点数については、同一個体の識別が不明なこともあり確定できないが、顔面・頭部によりカウントすれば、有馬遺跡・有馬条里遺跡・若田坂上遺跡・川場村地区が各1点、小八木志志貝戸遺跡2点、川端遺跡4点の合計10点を数える。総体的には破片での事例が主体を占め、その全体像が判別できるのは有馬遺跡の1点のみだが、中空状の造作、粘土貼付の鼻稜と棒状具刺

突の鼻孔、箆搔き穿孔の眼孔、小孔を穿った耳朵、何かを制止するかのように横に広げた腕、下唇を突き出したやや歪んだ容貌等の特徴を持つ。また、当例や耳部のみ小八木志志貝戸遺跡1点を除いて、他8点の顔面には赤色塗彩が施されることや、小八木志志貝戸遺跡・川端遺跡の2点は、鼻孔が剥き出しになる程に鼻稜が削ぎ落とされて「低鼻」状態なことも見逃せない特徴である。これらと金井東裏遺跡の事例とを対比すれば、眼孔部表現や赤色塗彩の様態は他例とも同様であり、やや上向き加減の低鼻も先の小八木志志貝戸遺跡例等に類似する。しかし、頭部の側面部を周回する瘤状貼付は対比できるものが存在せず、独特の表現となっている。各人形土器の帰属時期は、いずれも後期中葉～後葉とされている。当遺跡例は10区北の包含層からの出土であり、時期の確定は困難だが、同区内には後期中葉の樽式土器が存在するのみであり、当該期に帰属する可能性は高いと思われる。また、それらの出土状態は、有馬遺跡・小八木志志貝戸遺跡例が墓域と、川端遺跡例が竪穴住居との関係が指摘されており、必ずしも一樣ではない。当遺跡例の場合は、竪穴住居等の遺構が全く存在しない言わば集落外縁部に相当する地点での出土であり、上記の事例とも異なっている。こうした人形土器の出土状況を踏まえて、その機能・用途については「墓域や集落内で信仰にかかわる特殊な機能と用途を有していた」（平野2001）とする考え方もある。赤色塗彩や低鼻・突き出た唇等の形相は、畏怖を覚えさせる「異形の相貌」と言うべきものであり、人を模したのではなく霊力を備えた「神」を象ったものではなかろうか。「邪悪」を阻止するように両腕を広げる有馬遺跡例が人形土器の基本的形態とすれば、当遺跡例の場合は集落内への災禍や悪霊などの「邪悪」の侵入を防止すべく、その入口付近にて人形土器による祭儀礼行為が執行されたと想定することもできよう。

3. 縄文時代

当遺跡を含め、吾妻川の両岸に形成された河岸段丘や山麓緩斜面には、縄文時代前期前半に集落形成が活発に行われていたことが徐々に明らかとなってきた。南側に隣接する金井下新田遺跡でも、同期の集落形成が確認されており、今後における発掘調査を通じて、その実態が明瞭に把握されることが考えられる。様相的には、赤城山南

西麓の標高200～400mの丘陵部における前期の集落形成に比肩することができる。当遺跡の竪穴住居数は37軒であるが、3軒の住居における合計8回の建替えをカウントすれば、前期22軒、中期20軒、後期3軒となる。細分土器型式を単位にして詳細に区分すれば、前期は関山Ⅱ式期を主体に一時期3～4軒、同じく中期が加曾利E2式～E3式期を主体に2～4軒、後期が称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式期に1～2軒である。これを単純に考えれば各期ともに小規模集落となるが、幅員約20mの道路敷部分の調査でもあり、その実態を反映しているとは言えない。ただし、竪穴住居の分布状況から見ると、関山Ⅱ式期を主体とする前期集落の中心部は、基本的に7区の北半部から8区までの直径約100mの範囲に収束すると考えられる。また、8区から北側に150m離れて関山Ⅱ式～有尾式期の住居構築が認められるが、これについては上記集落とは関係性を保持しつつも同時併存した別集落の可能性もある。関山Ⅱ式期以降の集落形成は極めて希薄であり、細々とした遺跡地利用は継続するものの、再度の集落形成は次の中期勝坂2式期まで待たなければならない。他方、中期の加曾利E2式～E3式期の場合は、5区・7区南端部と7・8区の2地点に住居構築が集中し、両者間の長さ約60m区域内には掘立柱建物や土坑が存在するものの、竪穴住居の構築は認められない。こうした状況は、環状集落の形態を想起させるものであり、その直径は70～100mを測ると推定される。この推定が正しいとすれば、勝坂2式期に環状集落形成の端緒があり、加曾利E1式～同E3式新期に形成～最盛期を迎えて、同E3式新々期には解体へと向かうことが窺える。その後一定の空白期間を置いて、称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式期に柄鏡形敷石住居による小規模集落が形成され、再び若干の断絶期を挟みつつ堀之内2式～高井東式期にかけて配石遺構群を伴う祭・儀礼場へと変遷・終焉する。

以上のような集落変遷に関連して、竪穴住居内より出土した炭化種実の放射性炭素年代測定と、黒曜石を素材とする石鏃や石核・剥片の原産地同定分析を行っている。その詳細は408頁の「3. 縄文時代炭化種実の放射性炭素年代測定(AMS測定)」と、410頁の「4. 縄文時代黒曜石製石鏃の蛍光X線分析による石材原産地同定」にまとめられているが、その成果について簡単に触れておきたい。先ず前者の放射性炭素年代測定であるが、加曾利E2式期

の8区7 4号住居の炉付近から出土したオニグルミの炭化破片3点を対象に分析し、4,800~4,600cal BPの年代値が得られている。県内では当該期の分析事例に乏しいが、関東地方での同期事例を多数分析した小林謙一氏によれば、4,710~4,520cal BPという年代値が明らかにされており(小林2008)、これとも整合性がある。

一方、黒曜石製石器の石材原産地同定では、分析点数が多い前期の関山Ⅱ式期で見ると、和田峠系を主体として諏訪系が20%弱認められ、神津島系が1点存在する。また、中期の加曾利E2~E3式期では、諏訪系を主体に和田峠系が1点のみとなり、前期とは正反対の傾向を示している。分析点数は少ないが、新巻~焼町土器段階や後期の称名寺Ⅱ式期も中期と同様の傾向となる。また、参照・対比例として分析した諏訪西遺跡の関山Ⅰ式期では、当遺跡の関山Ⅱ式期と同様に和田峠系を主体としている。近年、黒曜石や同石材製の石器研究を精力的に進めてきた大工原豊氏により、群馬県内における黒曜石流通の実相が明らかにされてきている(大工原2002・2007・2008・2011)。同氏によれば、関山Ⅱ式期では南西部の鐮川・碓氷川ルートからの和田峠系を主

体とした黒曜石が流入し、中期中葉~後期は流通量の激減や流通システムの転換を伴いつつ、吾妻川ルートからの諏訪系(星ヶ塔)を主体とした黒曜石に変換されている。当遺跡の分析結果は、同氏の論考内容に合致したものであり、同説の正しさを追認するものと言える。

註・参考文献

1. 渋川市史編さん委員会 1993「第3章第5節 3金井宿」『渋川市誌 第2巻 通史編・上 原始~近世』
2. 平野進一 2001「北関東西部における弥生後期の人面付土器とその性格」『考古聚英』梅沢重昭先生退官記念論集
3. 諸田康成・水田稔 2008「群馬県利根郡川場村出土の人物形土器について」『研究紀要』26 群馬県埋文事業団
4. 佐藤明人 1990『有馬遺跡Ⅱ』(弥生・古墳時代編) 群馬県埋文事業団
5. 坂口一 1990『有馬条里遺跡Ⅰ』群馬県埋文事業団
6. 横山千晶 1999『小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ』群馬県埋文事業団
7. 鈴木正博 2002「巻頭弥生式中期中葉の突起文と筒形土器の型式学」『日本考古学協会第68回総会発表要旨』
8. 石川日出志 2003「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号 土曜考古学研究会
9. 小林謙一 2008「縄文土器の年代(東日本)」『総覧 縄文土器』(株)アム・プロモーション
10. 大工原豊 2002「黒曜石の流通を巡る社会-前期の北関東・中部地域-」『縄文社会論(上)』同成社
11. 大工原豊 2007「黒曜石交易システム」『縄文時代の考古学』6 同成社
12. 大工原豊 2008『縄文石器研究序論』六一書房
13. 大工原豊 2011「縄文時代における黒曜石の利用と展開-北関東の様相を中心として-」『日本考古学協会2011年度栃木大会 研究発表資料集』日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会

《遺物観察表》

縄文原体の分類一覧

No	原体表記	原体	観察表記載	No	原体表記	原体	観察表記載	備考
1	直前段合攪り	直前合1R		6	直前段合攪り	直前合2L (0段多条)		
2	直前段合攪り	直前合1L		7	前々段合攪り	前々合2R		
3	直前段合攪り	直前合2R		8	前々段反攪り・直前段合攪り	正反合2L (0段多条)		前々段のL縄反攪りと直前段でのL・R縄の合攪りによりL縄を0段r縄状態に攪り戻す。
4	直前段合攪り	直前合2L		9	前々段反攪り・直前段合攪り	正反合2R (0段多条)		前々段と直前段でのR縄反攪りで0段l(エル)縄状態に攪り戻す
5	直前段合攪り	直前合2R (0段多条)						

縄文・弥生土器の胎土分類一覧

No	分類	特 徴	備 考
1	A類	A1 少量の灰白色・珪質乳白色岩片や輝石の細砂と繊維を含むやや粗雑な胎土。	主として繊維を含有するグループ。
2		A2 少量の円磨度の進んだ灰白色岩片・珪質乳白色岩片・石英の粗・細砂や赤色岩片礫と繊維を含むやや緻密な胎土。	
3		A3 中量の珪質乳白色岩片・輝石・石英や少量の円磨度の進んだ灰白色岩片の粗・細砂と繊維を含むやや粗雑な胎土。	
4		A4 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や少量の珪質乳白色岩片・輝石・石英の粗・細砂と繊維を含む緻密な胎土。	
5		A5 多量の珪質乳白色岩片・石英や中量の灰白色岩片・輝石の粗・細砂と繊維を含むやや緻密な胎土。	
6		A6 多量の珪質乳白色・灰白色・黒色岩片の粗・細砂や少量の円磨度の進んだチャート礫と繊維を含むやや粗雑な胎土。	
7		A7 多量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片の礫・粗砂や中量の白色岩片粗・細砂と繊維を含むやや緻密な胎土。	
8		A8 多量の円磨度の進んだ赤色・黒色岩片の礫・粗砂や中量の白色岩片粗・細砂と繊維を含むやや緻密な胎土。	
9		A9 少量の石英・長石・角閃石や灰白色岩片の粗・細砂と微量の雲母細砂および繊維を含む緻密な胎土。	
10		A10 中量の円磨度の進んだ結晶片岩や灰白色・黒色岩片の礫・粗砂と珪質乳白色岩片粗・細砂および繊維を含む滑り感ある胎土。	
11	B類	B1 少量の長石・石英・角閃石や灰白色岩片の粗・細砂と微量の雲母細砂を含む緻密な胎土。	主として雲母を含有し、繊維を含まないグループ。
12		B2 中量の長石・石英・角閃石の粗・細砂と少量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や微量の雲母細砂を含む緻密な胎土。	
13		B3 中量の長石・石英・角閃石の粗・細砂や円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂と少量の雲母粗・細砂を含む緻密な胎土。	
14		B4 多量の長石・石英や少量の角閃石・黒色岩片・雲母の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
15		B5 多量の円磨度の進んだ長石・石英・雲母の粗・細砂や少量の角閃石粗・細砂を含む緻密な胎土。	
16	C類	C1 少量の円磨度の進んだ結晶片岩・灰白色岩片の礫・粗砂や珪質乳白色岩片・輝石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	主として結晶片岩を含有し、繊維を含まないグループ。
17		C2 少量の結晶片岩礫と灰白色岩片・珪質乳白色岩片・輝石・石英の細砂を含む緻密な胎土。	
18		C3 中量の円磨度の進んだ結晶片岩や灰白色・黒色岩片の礫・粗砂と珪質乳白色岩片粗・細砂、雲母細砂を含む滑り感ある緻密な胎土。	
19		C4 中量の結晶片岩礫・粗砂や少量の灰白色岩片・石英の粗・細砂を含む滑り感のある緻密な胎土。	
20		C5 多量の円磨度の進んだ結晶片岩や灰白色・黒色岩片の礫・粗砂と少量の珪質乳白色岩片や石英の礫・粗砂を含む滑り感ある緻密な胎土。	
21		C6 多量の円磨度の進んだ結晶片岩・珪質乳白色岩片や暗灰色岩片の礫・粗砂を含むやや緻密な胎土。	
22	D類	D1 少量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や珪質乳白色岩片の粗・細砂と輝石細砂を含むやや緻密な胎土。	主として灰白色・珪質乳白色岩片や輝石を含有し、繊維を含まないグループ。
23		D2 少量の円磨度の進んだ灰白色岩片・珪質乳白色岩片・輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
24		D3 中量の円磨度の進んだ珪質灰白岩片や輝石の粗・細砂と少量の灰白色岩片粗・細砂を含む緻密な胎土。	
25		D4 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂と輝石・珪質乳白色岩片の細砂を含むやや緻密な胎土。	
26		D5 中量の円磨度の進んだチャート礫や灰白色岩片・珪質乳白色岩片・輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
27		D6 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や少量の珪質乳白色岩片・輝石細砂を含むやや緻密な胎土。	
28		D7 多量の円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色・黒色岩片の礫・粗砂と少量の輝石粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
29	E類	E1 中量の円磨度の進んだ灰白色・珪質乳白色岩片の粗・細砂と少量の輝石・石英の粗・細砂を含む極めて緻密な胎土。	主としてD類+石英を含有するグループ。
30		E2 中量の灰白色岩片・珪質乳白色岩片・輝石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
31		E3 中量の珪質乳白色岩片・石英の細砂や少量の円磨度の進んだ灰白色・黒色岩片粗・細砂と輝石細砂を含むやや緻密な胎土。	
32		E4 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂と中量の珪質乳白色岩片・石英の粗・細砂や輝石細砂を含むやや粗雑な胎土。	
33		E5 多量の灰白色岩片の礫・粗砂や珪質乳白色岩片・石英の粗・細砂と中量の輝石粗・細砂を含む緻密な胎土。	
34		E6 多量の珪質乳白色岩片・輝石・石英の粗・細砂と少量の灰白色岩片粗・細砂を含む緻密な胎土。	
35	F類	F1 少量の灰白色岩片・珪質乳白色岩片・輝石・石英の粗・細砂や赤色岩片細砂を含む極めて緻密な胎土。	主としてD類+赤色岩片を含有するグループ。
36		F2 中量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片・輝石の細砂と少量の灰白色・赤色岩片の細砂を含む極めて緻密な胎土。	
37		F3 多量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片礫・粗砂と少量の珪質乳白色岩片や輝石の細砂を含むやや緻密な胎土。	
38	G類	G1 中量の灰白色岩片・珪質乳白色岩片・輝石・石英の粗・細砂や赤色岩片礫・粗砂を含む極めて緻密な胎土。	主としてE類+赤色岩片を含有するグループ。
39		G2 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片粗・細砂や輝石細砂と中量の珪質乳白色・赤色・黒色岩片及び少量の石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
40	H類	H1 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や少量の輝石・石英の粗・細砂と黒色岩片礫を含む緻密な胎土。	主としてE類の珪質乳白色岩片が欠落するグループ。
41		H2 多量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や輝石粗・細砂と少量の石英粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
42	I類	I1 少量の灰白色岩片・輝石・石英の粗・細砂や赤色岩片礫・粗砂を含む緻密な胎土。	主としてH類+赤色岩片を含有するグループ。
43		I2 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片・石英の礫・粗砂と輝石・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
44		I3 多量の円磨度の進んだ灰白色・赤色・黒色岩片の礫・粗砂と少量の輝石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
45	J類	J1 多量の円磨度の進んだ暗灰色・珪質乳白色岩片の礫・粗砂と少量の輝石粗・細砂を含む緻密な胎土。	主としてC・D類の灰白色岩片が欠落するグループ。
46		J2 多量の輝石粗・細砂と少量の珪質乳白色岩片・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
47	K類	K1 多量の円磨度の進んだ珪質乳白色・赤色・黒色岩片の礫・粗砂や中量の輝石粗・細砂を含む緻密な胎土。	主としてF類の灰白色岩片が欠落するグループ。
48		K2 多量の円磨度の進んだ珪質乳白色・黒色岩片や輝石の粗・細砂と少量の赤色岩片粗・細砂を含む緻密な胎土。	

※各分類はルーペ等を使用した肉眼観察による。

※夾雑物の粒径分類については「新版 標準土色帳」の「土壌調査用チャート」に準拠した。

●近世以降の遺物観察表

1区39号墓坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦横	厚	重			
第8図 PL.91	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.435 2.432	厚 0.114	重 3.64		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。永と寶の間に大きな鑄欠けが見られる。	
第8図 PL.91	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.395 2.361	厚 0.097	重 2.12		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。永と寶の間に大きな鑄欠けが見られる。	
第8図 PL.91	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.486 2.462	厚 0.119	重 3.27		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが、表側の一部表面には平織布の痕跡が付着する。	
第8図 PL.91	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.547 2.548	厚 0.122	重 4.12		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側に鑄溜りの微小な凹凸が見られる。	
第8図 PL.91	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.489 2.482	厚 0.118	重 3.34		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第8図 PL.91	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.516 2.517	厚 0.120	重 3.46		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側に鑄溜りの微小な凹凸が見られる。	
第8図 PL.91	7	銅製品 不詳	7cm ほぼ完形	長幅 1.9 1.9	厚 0.2	重 0.78		直径2cmの輪状の銅製品で合わせ目等は確認できない。表面の大部分は劣化し詳細は不明。	
第8図 PL.91	8	肥前磁器 染付碗	9cm 完形	口径 8.3	高 4.9		夾雑部含まない/ 白/	外面に梅樹文。反対側には小さい梅樹文。内面と高台内無	17世紀後葉～ 18世紀中葉

7区1号墓坑出土遺物

第8図 PL.91	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.297 2.305	厚 0.129	重 2.92		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。外縁の一部劣化破損する。	
第8図 PL.91	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.372 2.321	厚 0.108	重 2.19		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。外縁の一部は劣化破損する。	
第8図 PL.91	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.297 2.300	厚 0.123	重 2.74		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。裏側全体と表側の一部は黒褐色の錆に覆われる。	
第8図 PL.91	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.362 2.393	厚 0.143	重 3.07		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが一部錆化により不明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。外縁の一部は劣化破損する。	
第8図 PL.91	5	鉄製品 釘	埋土中 破片	長幅 3.3 2.0	厚 1.2	重 2.51		角釘破片で全体に錆化した木材に覆われる。頭から1.3cmは板目材、そこから2cmは方向が90°異なる別の板目材を貫通し端部は劣化破損する	
第8図 PL.91	6	鉄製品 釘	埋土中 破片	長幅 3.1 2.1	厚 0.8	重 1.78		断面ほぼ正方形の角釘で頭部分は劣化破損する。板目の木材とともに錆化し本体は空洞化する	
第8図 PL.91	7	石製品 砥石	2cm 4/5	長幅 (11.5) 2.8	厚 3.0	重 115.8	変質デイスaito	砥面は2面認められる。表面は上下端にむかい著しく研ぎ減りする。裏面はわずかに内湾する。上部欠損。	近世

7区3号墓坑出土遺物

第8図 PL.91	1	銅製品 銭貨	埋土中 一部欠損	縦横 2.418	厚 0.125	重 2.31		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。通・永の字付近は破損する。	
第8図 PL.91	2	銅製品 銭貨	4cm ほぼ完形	縦横 2.461 2.659	厚 0.794	重 6.40		表側は硬く厚い錆に覆われ銭種は不明。裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。	
第8図 PL.91	3	瀬戸・美濃 陶器 碗	8cm 完形	口径 9.0	高 5.3		白色磁物微量含む/灰白/	高台内兜巾状を呈する。内面から高台脇錆色の鉄釉。	18世紀前葉～ 中葉

7区4号墓坑出土遺物

第8図 PL.91	1	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.512 2.512	厚 0.122	重 3.76		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1～4・8～12 癒着出土
第8図 PL.91	2	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.449 2.457	厚 0.123	重 3.77		寛永通寶。表・裏側とも非常に彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1～4・8～12 癒着出土
第8図 PL.91	3	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.413 2.403	厚 0.092	重 2.69		寛永通寶。表側は彫は深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭が認められる程度。	1～4・8～12 癒着出土
第8図 PL.91	4	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.486 2.462	厚 0.118	重 3.66		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。郭は正方形だが孔面には凹凸が見られる。	1～4・8～12 癒着出土
第8図 PL.91	5	銅製品 銭貨	5cm 完形	縦横 2.443 2.441	厚 0.138	重 4.30		寛永通寶。表側は非常に彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第8図 PL.91	6	銅製品 銭貨	5cm 完形	縦横 2.436 2.462	厚 0.119	重 2.93		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第8図 PL.91	7	銅製品 銭貨	5cm 完形	縦横 2.407 2.376	厚 0.133	重 3.44		寛永通寶。表側は非常に彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。永の字右の外縁が一部欠損。鑄欠けまたは劣化によると考えられる。	
第9図 PL.92	8	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.526 2.529	厚 0.121	重 3.33		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1～4・8～12 癒着出土
第9図 PL.92	9	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.511 2.519	厚 0.119	重 3.59		寛永通寶(背文)。表側はやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏側もやや彫は浅いが外縁・郭は明瞭、文の字は彫が非常に浅く文字が認められる程度。	1～4・8～12 癒着出土
第9図 PL.92	10	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.503 2.511	厚 0.119	重 3.48		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1～4・8～12 癒着出土
第9図 PL.92	11	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.533 2.527	厚 0.133	重 4.28		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。孔の四隅がバリ状に張り出す。	1～4・8～12 癒着出土
第9図 PL.92	12	銅製品 銭貨	13cm 完形	縦横 2.509 2.508	厚 0.117	重 3.23		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。通の字の下と永の字上の郭に鑄欠けが見られる。	1～4・8～12 癒着出土
第9図 PL.92	13	銅製品 銭貨	5cm 完形	縦横 2.554 2.544	厚 0.146	重 4.09		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第9図 PL.92	14	銅製品 銭貨	5cm 完形	縦 横	2.553 2.541	厚 重	0.130 3.87		寛永通寶(背文)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。
第9図 PL.92	15	銅製品 銭貨	5cm 完形	縦 横	2.535 2.547	厚 重	0.151 3.56		寛永通寶(背文)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。郭部分は裏側へわずかに凹む。
第9図 PL.92	16	肥前陶器 青緑釉皿	9cm 完形	口 底	12.8 4.6	高	3.5	夾雑部含まない/ 灰白/	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部と高台端部4箇所の日痕。内面から高台端部青緑釉。口縁部外面から体部中位外面透明釉。内野山。

7区5号墓坑出土遺物

第9図 PL.92	1	銅製品 銭貨	6cm 完形	縦 横	2.512 2.532	厚 重	0.114 3.13		寛永通寶。表側は彫はやや浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。通の字の右方の外縁に鑄け孔が見られる。
第9図 PL.92	2	銅製品 銭貨	4cm 完形	縦 横	2.398 2.406	厚 重	0.111 3.04		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。通と永の外縁は潰れたように角ばる。
第9図 PL.92	3	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.450 2.459	厚 重	0.123 3.28		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭が認められる程度。通の字部分に微小な鑄けの孔が認められる。
第9図 PL.92	4	銅製品 銭貨	4cm 完形	縦 横	2.438 2.410	厚 重	0.128 2.99		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側の寛と永の間に鑄けにより細い溝上に凹みが見られる。
第9図 PL.92	5	銅製品 銭貨	3cm 完形	縦 横	2.185 2.169	厚 重	0.124 2.55		寛永通寶。表側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。裏側はやや平坦だが外縁・郭とも明瞭。

7区38号墓坑出土遺物

第10図 PL.93	1	肥前磁器 染付碗	埋土中 完形	口 底	8.8 3.4	高	4.9	夾雑部含まない/ 白色/	体部外面6箇所コンニャク印判による松文。内面と高台内無文。高台端部無釉。
---------------	---	-------------	-----------	--------	------------	---	-----	-----------------	--------------------------------------

8区12号墓坑出土遺物

第9図 PL.92	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.379 2.388	厚 重	0.124 3.43		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第9図 PL.92	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.426 2.435	厚 重	0.099 2.95		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永と寶の間には鑄けの孔がある。
第9図 PL.92	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.450 2.431	厚 重	0.112 2.98		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭とも明瞭。外縁の一部は劣化破損する。
第9図 PL.92	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.481 2.483	厚 重	0.139 2.63		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側には目の粗い平織の布が全面に付着する。
第9図 PL.92	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.464 2.467	厚 重	0.125 3.11		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。
第9図 PL.92	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.464 2.416	厚 重	0.206 1.59		銅製の銭貨と見られるが全体に褐色の硬い錆に覆われ銭種は不明。一部に錆化した目の粗い平織の布が付着する。
第9図	7	鉄製品 釘	20cm 一部欠損	長 幅	5.7 1.9	厚 重	1.1 4.59		断面ほぼ正方形の角釘で両端とも劣化破損する。頭側と先端側では方向の90°異なる針葉樹板目材が錆化残存する。
第9図	8	鉄製品 釘	26cm ほぼ完形	長 幅	2.2 0.8	厚 重	1.5 0.75		頭部分を延ばし折り曲げる、角釘と見られるが板目の木材とともに錆化し本体は空洞化するため詳細は不明。木質は頭から0.8cmとその下では板目材の方向が直角にずれる。
第9図	9	鉄製品 釘	26cm 破片	長 幅	2.1 2.1	厚 重	0.8 1.19		頭部分を延ばし折り曲げる角釘と見られるが、板目の木材とともに錆化し本体は空洞化するため詳細は不明。頭から1cmは板目材その下は90°方向の異なる別の板目材を貫通し1cm程で劣化破損する。

8区14号墓坑出土遺物

第10図 PL.93	1	肥前磁器 染付碗	3cm 完形	口 底	8.6 3.3	高	4.9	夾雑部含まない/ 灰白/	口縁部と高台脇の1重圏線間に唐草文。高台外面1重圏線。内面と高台内無文。高台端部無釉。
第10図 PL.93	2	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.486 2.473	厚 重	0.125 3.61		寛永通寶。表側は非常に彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。
第10図 PL.93	3	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.449 2.459	厚 重	0.119 3.29		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第10図 PL.93	4	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.552 2.542	厚 重	0.142 3.58		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが文字はややつぶれ気味。裏側は平坦だが外縁・郭とも認められる。
第10図 PL.93	5	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.516 2.516	厚 重	0.123 3.59		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第10図 PL.93	6	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.526 2.537	厚 重	0.122 3.33		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側下方に鑄溜りの凹凸が見られる。
第10図 PL.93	7	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.510 2.520	厚 重	0.122 3.44		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第10図 PL.93	8	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.499 2.490	厚 重	0.138 3.67		寛永通寶(背文)。表・裏側とも非常に彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第10図 PL.93	9	銅製品 銭貨	2cm 完形	縦 横	2.510 2.515	厚 重	0.124 3.65		寛永通寶(背文)。表・裏側とも非常に彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。

8区16号墓坑出土遺物

第10図	1	鉄製品 火打金	埋土中 一部欠損	長 幅	6.3 2.2	厚 重	0.9 13.65		かすがい型の火打金。火打金上部に沿って針葉樹板目材が錆化残存する。
第10図	2	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 幅	4.9 2.2	厚 重	1.2 3.14		ほぼ完形の釘だが、全体に針葉樹の板材に覆われ細かい本体形状は不明。釘は頭から1.5cmは板目材、その先は板目材木口に打ち込まれている。

8区17号墓坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	厚 重			
第10図	1	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	3.6 1.1	1.1	1.44		頭部分を延ばし折り曲げる角釘。先端側は針葉樹の木材とともに錆化し細かい形状は不明。頭から0.7cmは板目材その先は板目材木口に打ち込まれている。	
第10図	2	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	4.6 1.3	0.7 1.55			頭部分を延ばし折り曲げる角釘。先端側は針葉樹の木材とともに錆化し細かい形状は不明。頭から2cmは板目材が錆化残存その先は錆化が著しく釘本体と木材との区別が困難。	

8区19号墓坑出土遺物

第10図 PL.93	1	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.427 2.430	厚 重	0.367 3.32		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で硬い鉄錆に覆われる。寛の字と外縁の間に鋳溜りが見られる。	
第10図 PL.93	2	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.327 2.336	厚 重	0.123 2.61		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。外縁の幅は表が1.5mm裏が3mmと大きく異なる。	
第10図 PL.93	3	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.340 2.333	厚 重	0.120 3.35		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第10図 PL.93	4	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.340 2.332	厚 重	0.112 2.75		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭とも認められる。	
第10図 PL.93	5	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.296 2.299	厚 重	0.093 2.47		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第10図 PL.93	6	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.390 2.382	厚 重	0.181 2.73		寛永通寶(背元)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが一部は硬い鉄さびに覆われる。裏面はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。元の字はやや不明瞭。	
第10図 PL.93	7	鉄製品 銭貨	底直 一部欠損	縦 横	2.639 2.643	厚 重	0.998 7.54		鉄製銭貨が2枚が錆化し強固に癒着する。両側ともに文字は確認できない。	

8区20号墓坑出土遺物

第10図 PL.93	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.387 2.399	厚 重	0.112 2.90		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。外縁の一部は劣化により凹む。	
第10図 PL.93	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.352 2.334	厚 重	0.172 2.72		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第10図 PL.93	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.336 2.326	厚 重	0.166 2.77		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭で一部に平織布が付着する。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第10図 PL.93	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.452 2.462	厚 重	0.166 4.30		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第10図 PL.93	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.438 2.432	厚 重	0.127 3.30		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。表側外縁の一部に錆化による小突起が見られる。	
第10図 PL.94	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.245 2.238	厚 重	0.121 2.67		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが一部は錆化により不明瞭となる。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第11図 PL.94	7	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.226 2.201	厚 重	0.113 1.95		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。平坦で外縁・郭とも不明瞭。全体にややゆがみ変形が見られる。	
第11図 PL.94	8	銅製品 銭貨	埋土中 ほぼ完形	縦 横	2.383 2.373	厚 重	0.135 2.55		銅製の銭貨で聖宋元寶の字が読み取れる。表側下方は彫深く外縁・文字も明瞭だが、上方は平坦で文字・郭とも不明瞭。裏側は全体に平坦で不明瞭。	
第11図 PL.94	9	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.823 2.845	厚 重	0.143 5.04		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第11図 PL.94	10	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.192 2.202	厚 重	0.105 2.06		寛永通寶(背元)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第11図 PL.94	11	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.827 2.805	厚 重	0.136 4.51		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表側左下の外縁に左下がりの平行する傷が見られる。	
第11図 PL.94	12	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.839 2.834	厚 重	0.139 4.47		寛永通寶(11波)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	

8区23号墓坑出土遺物

第11図 PL.94	1	銅製品 銭貨	埋土中 ほぼ完形	縦 横	2.467 2.624	厚 重	0.345 3.16		寛永通寶。表側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。裏側(癒着外面)は錆化した布に覆われる。	
第11図 PL.94	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.343 2.294	厚 重	0.108 2.35		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永の字下部に鋳欠けによる微小な孔が見られる。	
第11図 PL.94	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.262 2.282	厚 重	0.128 2.07		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫深く外縁・郭とも不明瞭。	
第11図 PL.94	4	鉄製品・銅 製品 銭貨	埋土中 ほぼ完形	縦 横	2.695 2.512	厚 重	0.469 4.69		銭貨2枚が錆化癒着する。1枚は鉄銭で錆化により文字等は確認できない。もう1枚は寛永通寶の銅銭で、表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第11図 PL.94	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.385 2.385	厚 重	0.349 2.58		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側(癒着外面)は平坦で一部に錆化した植物痕が付着する。寛の字の右に鋳欠けによる微小な孔が見られる。	
第11図 PL.94	6	銅製品 キセル・雁 首	埋土中 ほぼ完形	長 幅	4.6 1.5	厚 重	2.1 8.39		キセルの雁首で吸い口側には羅字の木質が一部残存する。表面は錆化し緑青色だが一部に赤銅色の平滑な表面が観察される。火皿内部には黒色物が付着する。	
第11図 PL.94	7	銅製品 キセル・吸 い口	埋土中 ほぼ完形	長 幅	6.6 1.4	厚 重	1.4 8.87		キセルの吸い口で雁首側には羅字の木質が残存する。表面は錆化し緑青色～灰色だが、一部は赤銅色の平滑な表面が観察される。	
第11図	8	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 幅	8.7 1.8	厚 重	2.2 8.31		長短釘2本が針葉樹の木材とともに錆化し出土。長い釘は厚さ1.3cmの板目材を貫通し別の板目材木口に打ち込まれている。短い釘は頭側は劣化破損するが長い釘と直行する形で内側の板材に打ち込まれる。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第11図	9	鉄製品 釘	埋土中 完形	長 6.9	幅 3.5	厚 1.8		長短釘2本が針葉樹の木材とともに錆化し出土。長い釘は厚さ1cmの板目材を貫通し別の板目材木口に打ちこまれて いる。短い釘は厚さ1cmの板目材を貫通したのち長い釘と 直行する形で内側の板材に打ち込まれる。	
第11図	10	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 5.3	幅 1.2	厚 1.0		ほぼ完形の釘だが全体に針葉樹の木材とともに錆化するた め、細かい形状は不明。頭から3cmとその先では90°方向の 異なる別の板目材に打ち込まれている。	
第11図	11	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 4.6	幅 1.0	厚 1.1		頭を延ばして折り曲げる角釘と見られるが、全体に針葉樹 の木材とともに錆化するため細かい形状は不明。頭から1.3 cmとその先では方向の異なる別板目材に打ち込まれてい る。	
第11図	12	鉄製品 釘	埋土中 完形	長 4.8	幅 1.6	厚 1.0		頭部分を延ばし折り曲げる角釘だが針葉樹の木材とともに 錆化するため細かい形状は不明。頭部は厚さ1.2cmは板目 材そのさきは向きの異なる厚さ1.8cmの板目材を貫通し、 さらに別の板目材に打ち込まれている。	
第11図	13	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 2.9	幅 2.8	厚 1.0		頭を延ばして折り曲げる角釘と見られるが、全体に針葉樹 の木材とともに錆化するため細かい形状は不明。頭から1.3 cmとその先では90°方向の異なる別板目材に打ち込まれて いる。	

8区26号墓坑出土遺物

第11図 PL.94	1	銅製品・ガ ラス製品 かんざし	埋土中 ほぼ完形	長 11.6	幅 1.6	厚 0.8		銅製のかんざしで頭側に直径0.8cmのガラス球を持つ。先 側は松葉状に別断面は半円形。ガラスはほぼ球形で渦巻 き状の模様を有する。	
第11図 PL.94	2	べっこう製 品 かんざし	埋土中 ほぼ完形	長 9.4	幅 0.6	厚 0.2		べっこう製と見られるかんざしで褐色から灰褐色で一部は 半透明。断面は隅丸方形で一部表面に目の細かい平織布 (0.5mm/目)が付着する。	

8区27号墓坑出土遺物

第11図 PL.94	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.485	横 2.424	厚 0.181		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は 錆化した植物痕が付着し不明。	
第11図 PL.94	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.493	横 2.479	厚 0.128		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第11図	3	鉄製品 釘	埋土中 完形	長 9.3	幅 2.2	厚 1.4		断面丸の釘。頭部分には針葉樹板目材が残存、頭から2cm で別の針葉樹板目材の木口に打ち込まれている。	
第11図	4	鉄製品 釘	埋土中 一部欠損	長 7.6	幅 1.2	厚 0.9		頭部を破損する丸釘。錆化が著しく細かい形状は不明。	

8区28号墓坑出土遺物

第12図 PL.94	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.496	横 2.491	厚 0.159		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。 表側の一部に目の粗い平織の布が付着する。	
第12図	2	鉄製品 銭貨	埋土中 一部欠損	縦 2.233	横 2.292	厚 0.193		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だ が劣化により一部破損する。	
第12図 PL.94	3	銅製品 キセル・雁 首	埋土中 ほぼ完形	長 5.5	幅 1.1	厚 1.7		キセルの雁首で吸い口側に羅字の木質が残存する。表面は 錆化し灰緑～黒色で荒れている。火皿は小さく内面には黒 色物が残存する。	
第12図 PL.94	4	銅製品 キセル・吸 い口	埋土中 完形	長 8.6	幅 1.1	厚 1.1		キセルの吸い口で雁首側には羅字の木質が一部残存する。 表面は緑青色で表面は荒れているが雁首側端部付近に「請 合」と線刻されている。その反対面には紙が重なり付着す るが文字等は判読不能。	
第12図 PL.95	5	銅製品 キセル・吸 い口	埋土中 完形	長 7.6	幅 1.0	厚 1.0		キセルの吸い口で雁首側には羅字の木質が一部残存する。 遺存状態は良く、全体に赤金色の平滑な表面が観察される。 吸い口付近に長さ1.5cm程の灰黒色の糸が2本付着する。	
第12図	6	金属製品・ 革製品 不詳	埋土中 破片	長 5.0	幅 3.3	厚 1.0		現存長さ3.3cm幅1cm程の金属製板と皮革からなる製品。皮 革には長方形を前後左右に連ねたような打ち出し模様が見 られ、同板とは釘または釘で留められていたと見られるが、 破損により詳細は不明。	
第12図 PL.95	7	金属製品 不詳	埋土中 ほぼ完形	長 4.0	幅 1.2	厚 0.2		長さ4cm幅1.2cmで中央に楕円形を孔を持ち幅方向にわず かに湾曲する板状の金属製品。6および8と一体のものと思 われるが、釘止孔等の構造は見られない。	
第12図 PL.95	8	金属製品 不詳	埋土中 一部欠損	長 4.1	幅 1.5	厚 0.5		薄い金属板を打ち出し菊花等を表現した立体的な加工製 品。6および7と組み合わせられる部品と見られるが、他のパ ーツと接合するような構造は確認できない。	
第12図	9	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 5.1	幅 1.1	厚 0.8		断面丸の釘。頭から0.9cmは針葉樹板目材、その先は針葉 樹板目材の木口に打ち込まれている。	

8区29号墓坑出土遺物

第12図 PL.95	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.411	横 2.401	厚 0.118		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.426	横 2.390	厚 0.135		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は 彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	2・3・9・11 ～14・19・ 20癒着出 土
第12図 PL.95	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.452	横 2.454	厚 0.131		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。 全体にゆがみ変形が見られる。	2・3・9・11 ～14・19・ 20癒着出 土
第12図 PL.95	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.448	横 2.448	厚 0.144		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は やや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦横	厚重			
第12図 PL.95	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.318 2.330	厚重 0.109 2.64		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.423 2.416	厚重 0.118 3.05		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。永の字下方に鑄欠けの孔が見られる。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	7	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.430 2.437	厚重 0.120 2.32		寛永通寶。表・裏側とも彫浅く外縁・文字・郭とも不明瞭。寛の字左に鑄欠けの微小な孔が見られる。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	8	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.441 2.493	厚重 0.096 2.58		寛永通寶。表・裏側とも彫浅く外縁・文字・郭とも不明瞭。孔の縁は押し広げられたように変形し丸みを持つ。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	9	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.473 2.495	厚重 0.258 2.86		寛永通寶。表・裏側とも彫浅く外縁・文字・郭とも不明瞭。通と永の字の間にひび割れと変形が見られる。	2・3・9・11 ～14・19・20 癒着出土
第12図 PL.95	10	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.460 2.449	厚重 0.134 3.79		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	11	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.335 2.332	厚重 0.126 3.15		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寛の字中央付近に鑄溜りの突起が見られる。	2・3・9・11 ～14・19・20 癒着出土
第12図 PL.95	12	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.334 2.307	厚重 0.111 2.65		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。	2・3・9・11 ～14・19・20 癒着出土
第12図 PL.95	13	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.351 2.344	厚重 0.102 2.51		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。永の字右に鑄溜りの突起が見られる。	2・3・9・11 ～14・19・20 癒着出土
第12図 PL.95	14	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.300 2.301	厚重 0.119 2.45		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	2・3・9・11 ～14・19・20 癒着出土
第12図 PL.95	15	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.319 2.316	厚重 0.120 2.89		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	16	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.266 2.274	厚重 0.102 2.40		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	17	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.204 2.221	厚重 0.091 1.83		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寛と寶の間に劣化によると思われる微小な孔が見られる。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第12図 PL.95	18	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.308 2.286	厚重 0.091 1.94		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。平坦だが外縁・郭は認められる。	1・4～8・10・ 15～18癒着出 土
第13図 PL.95	19	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.335 2.368	厚重 0.103 2.70		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。裏側下方に鑄溜りの突起が見られる。	2・3・9・11 ～14・19・20 癒着出土
第13図 PL.95	20	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.331 2.333	厚重 0.089 2.23		寛永通寶。表側は彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	2・3・9・11 ～14・19・20 癒着出土
第13図	21	鉄製品 釘	埋土中 破片	長幅 3.0 1.9	厚重 1.2 1.98		断面ほぼ正方形の角釘破片。全体的に針葉樹の木材とともに錆化し内部は空洞となり細かい形状は不明。90°方向の異なる二枚の板目材に打ち込まれている。	
第13図	22	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長幅 4.3 1.4	厚重 0.7 2.35		断面ほぼ正方形の角釘で全体的に針葉樹の木材とともに錆化し内部は空洞となり細かい形状は不明。頭から1cmとその先で90°方向の異なる二枚の板目材に打ち込まれている。	

8区33号墓坑出土遺物

第13図 PL.96	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.414 2.414	厚重 0.140 3.42		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第13図 PL.96	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.327 2.351	厚重 0.169 2.97		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第13図 PL.96	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.223 2.219	厚重 0.096 2.29		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第13図 PL.96	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.185 2.181	厚重 0.123 2.25		寛永通寶(元)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが裏側の元の字は不明瞭。	
第13図 PL.96	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.338 2.338	厚重 0.105 2.66		天禧通寶か。表側は彫深く外縁・郭とも明瞭だが文字は一部つぶれて不明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第13図 PL.96	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.799 2.807	厚重 0.127 4.45		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表側左下方外縁に劣化による孔が見られる。	
第13図 PL.96	7	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.286 2.304	厚重 0.151 3.78		大正九年発行の一銭硬貨。	
第13図 PL.96	8	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.334 2.320	厚重 0.144 3.77		大正九年発行の一銭硬貨。	
第13図 PL.96	9	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.292 2.301	厚重 0.195 3.69		大正十年発行の一銭硬貨。	
第13図 PL.96	10	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.348 2.341	厚重 0.196 3.78		大正十一年発行の一銭硬貨。	

8区34号墓坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦横	厚	重			
第13図 PL.96	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.457 2.451	厚 0.133 3.20		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭は明瞭。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第13図 PL.96	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.492 2.442	厚 0.126 3.14		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。左側の外縁は劣化破損する。		
第13図 PL.96	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.451 2.471	厚 0.125 2.91		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第13図 PL.96	4	銅製品 銭貨	埋土中 ほぼ完形	縦横 2.451 2.483	厚 0.124 2.83		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寶の字は裏側から強く押されたように変形突出する。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第13図 PL.96	5	銅製品 銭貨	埋土中 一部欠損	縦横 2.393 2.374	厚 0.147 2.31		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。外縁の一部は劣化破損する。		
第13図 PL.96	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.460 2.447	厚 0.129 2.80		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寛の字の右に鑄欠けによる微小な孔が見られる。		
第13図 PL.96	7	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.423 2.434	厚 0.134 2.71		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。通から永にかけての外縁は劣化破損する。		
第13図 PL.96	8	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.454 2.467	厚 0.100 2.60		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。永の字の右に鑄欠けによる微小な孔が見られる。		
第13図 PL.96	9	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.491 2.451	厚 0.121 2.23		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭は明瞭。永の字の右に鑄欠けによる三角形の孔が見られる。		
第13図 PL.96	10	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.294 2.250	厚 0.117 2.09		寛永通寶。表・裏側とも彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。表側の一部に錆化した平織の布が付着する。		
第13図 PL.96	11	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.368 2.338	厚 0.114 2.58		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第14図 PL.97	12	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.338 2.546	厚 0.102 2.44		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第14図 PL.97	13	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.396 2.399	厚 0.100 2.51		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。寶の左外縁は鑄欠けにより欠け永の左には微小な孔が見られる。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第14図 PL.97	14	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.272 2.307	厚 0.123 1.76		寛永通寶。表側は彫浅く錆化によりやや外縁・文字・郭の一部は不明瞭。裏側は彫浅く外縁・郭ともやや不明瞭。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第14図 PL.97	15	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.313 2.322	厚 0.100 2.64		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第14図 PL.97	16	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.341 2.290	厚 0.133 3.13		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第14図 PL.97	17	銅製品 銭貨	埋土中 一部欠損	縦横 2.295 2.275	厚 0.099 2.01		寛永通寶。表・裏側とも彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。外縁の一部は劣化破損する。		
第14図 PL.97	18	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.335 2.305	厚 0.158 2.66		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第14図 PL.97	19	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.307 2.347	厚 0.108 2.70		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。わずかに波打つような変形がある。		
第14図 PL.97	20	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.255 2.266	厚 0.088 2.07		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第14図 PL.97	21	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.205 2.231	厚 0.143 2.09		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は全体的に平織の布で覆われる。	1・3・4・12 ～15・21癒着 出土	
第14図 PL.97	22	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.129	厚 0.099 1.16		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。右下方の外縁は劣化破損する。		
第14図 PL.97	23	肥前磁器 白磁碗	埋土中 完形	口底 10.2 4.3	高 5.3	夾雑部含まない/ 白/	内外面無文。高台端部無釉。色絵素地であろう。透明釉に細かい貫入が入る。	17世紀中葉～ 後葉	
第14図	24	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長幅 4.1 1.0	厚 0.8 2.17		断面四角で頭部分を延ばし折り曲げた角釘で先端0.8cm直角に折れ曲がるが錆化が著しく細かい形状は不明。頭から1cmとその先は方向の異なる別の針葉樹板目材に打ち込まれている。		
第14図	25	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長幅 4.1 1.1	厚 0.6 1.71		断面四角で頭部分を延ばし折り曲げた角釘と見られるが錆化が著しく細かい形状は不明。全体に針葉樹板目材が錆化残存するが板の境界は確認できない。		
第14図	26	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長幅 3.2 1.2	厚 1.4 2.01		断面四角で頭部分を延ばし折り曲げた角釘と見られるが錆化が著しく細かい形状は不明。先端より1.5cm付近で直角に折れ曲がる。頭から2.5cmに針葉樹板目材が錆化残存する。		

8区35号墓坑出土遺物

第14図 PL.97	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.259 2.269	厚 0.137 2.29		寛永通寶(背元)。表・裏側とも彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭だが元の字は不明瞭。	
第14図 PL.97	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.681 2.675	厚 0.119 3.33		文久永寶(11波)。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。	
第14図 PL.97	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦横 2.660 2.669	厚 0.140 4.32		文久永寶(11波)。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14図 PL.97	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.691 2.724	厚 重	0.158 4.08		文久永寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第14図 PL.97	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.712 2.670	厚 重	0.164 3.26		文久永寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表側永と久の字の上には平織の布が付着する。
第14図 PL.97	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.651 2.639	厚 重	0.126 3.53		文久永寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第14図	7	鉄製品 釘	埋土中 破片	長 幅	3.7 1.4	厚 重	1.0 1.88		断面四角の角釘と見られるが、頭部分は錆化した針葉樹板目材に覆われる細かい形状は不明。先端側は劣化破損する。
第14図	8	鉄製品 釘	埋土中 破片	長 幅	1.6 2.7	厚 重	1.4 1.72		針葉樹板材中に2本の丸釘の痕跡が残る。2本は1.5cm程の間隔を開け90°の角度で打ち込まれているが、それぞれ両端とも破損している。

8区36号墓坑出土遺物

第15図 PL.97	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.496 2.536	厚 重	0.145 3.84		銅製の寛永通寶(背文)。表・裏面とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。
第15図 PL.97	2	鉄製品 銭貨	埋土中 ほぼ完形	縦 横	2.686 2.701	厚 重	0.920 10.13		鉄製の銭貨が複数枚錆化癒着する。外側の1枚は寛永通寶で彫は深い錆化により一部は不明瞭。錆化が著しく総枚数は不明。
第15図 PL.97	3	銅製品 キセル・雁首	埋土中 ほぼ完形	長 幅	4.6 1.2	厚 重	1.9 11.12		キセルの雁首で吸い口側に羅字の木質が残存する。表面は暗緑色で一部は赤銅色の平滑面も観察される。
第15図 PL.97	4	銅製品 キセル・吸い口	埋土中 ほぼ完形	長 幅	5.7 1.1	厚 重	1.0 8.79		キセルの吸い口で雁首側に羅字の木質が一部残存する。表面は緑青色で荒れているが一部に黄銅色の平滑面も観察される。

8区37号墓坑出土遺物

第15図	1	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 幅	6.6 1.5	厚 重	0.9 3.64		頭を折り曲げた角釘と見られるが、全体に針葉樹の木材と一緒に錆化し本体の形状は不明。厚さ1.7cmの板材を貫通し別の板材木口に打ち込まれている。
第15図	2	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 幅	4.8 1.7	厚 重	0.8 2.13		頭を折り曲げた角釘と見られるが、全体に針葉樹の木材と一緒に錆化し本体の形状は不明。厚さ1.2cmと0.8cmの二枚の板材を貫通し別の板材木口に打ち込まれている。
第15図	3	鉄製品 釘	埋土中 ほぼ完形	長 幅	3.4 2.9	厚 重	0.7 2.13		頭を折り曲げた角釘と見られるが、錆化により針葉樹の木材と一体化し頭部の細かい形状は不明。厚さ1.5cmの板材を貫通、さらに方向の異なる別の板材を貫通し、先端より2.5cmで直角に曲がる。

9区2号墓坑出土遺物

第15図 PL.98	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.506 2.500	厚 重	0.136 3.06		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寛の右上外縁は欠損する。郭はほぼ正方形だが孔は不定形。	1~4癒着出土
第15図 PL.98	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.464 2.484	厚 重	0.120 2.26		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。通の字上方および永右上に鑄欠けによる孔が見られる。	1~4癒着出土
第15図 PL.98	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.439 2.439	厚 重	0.145 3.77		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側の郭右下は凸凹するが、鑄欠けか劣化かは不明。	1~4癒着出土
第15図 PL.98	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.439 2.452	厚 重	0.129 2.65		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側の右下の郭に鑄欠けによる微小な孔が見られる。	1~4癒着出土
第15図 PL.98	5	銅製品 銭貨	20cm 完形	縦 横	2.436 2.443	厚 重	0.143 3.24		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第15図 PL.98	6	銅製品 銭貨	20cm 完形	縦 横	2.438 2.438	厚 重	0.125 3.08		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	

9区6号墓坑出土遺物

第15図 PL.98	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.512 2.506	厚 重	0.145 3.92		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1~6癒着出土
第15図 PL.98	2	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.440 2.454	厚 重	0.147 4.27		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1~6癒着出土
第15図 PL.98	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.531 2.524	厚 重	0.141 3.56		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1~6癒着出土
第15図 PL.98	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.529 2.565	厚 重	0.134 3.45		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1~6癒着出土
第15図 PL.98	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.520 2.521	厚 重	0.136 3.54		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1~6癒着出土
第15図 PL.98	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.511 2.513	厚 重	0.128 3.28		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1~6癒着出土
第15図 PL.98	7	鉄製品 火打金	13cm ほぼ完形	長 幅	8.2 2.8	厚 重	1.1 21.32		山形の火打金。表面全体に広葉樹材の炭化小破片が付着し錆化する。	

9区7号墓坑出土遺物

第15図 PL.98	1	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.486 2.503	厚 重	0.102 2.81		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1~4・11~18・27~29癒着出土
第15図 PL.98	2	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.514 2.517	厚 重	0.099 2.32		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永の字の右に鑄欠けによる孔が見られる。	1~4・11~18・27~29癒着出土
第15図 PL.98	3	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.492 2.480	厚 重	0.108 3.24		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永の字は鑄溜りにより外縁とつながる。	1~4・11~18・27~29癒着出土
第15図 PL.98	4	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 横	2.480 2.462	厚 重	0.150 4.05		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側上方外縁下に鑄欠けの凹みが見られる。	1~4・11~18・27~29癒着出土

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16図 PL.98	5	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.463	厚 0.117	重 3.28		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.98	6	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.419	厚 0.110	重 2.82		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側の郭は正方形だが孔と傾きが大きく異なる。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.98	7	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.435	厚 0.123	重 3.99		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.98	8	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.348	厚 0.107	重 2.82		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.98	9	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.487	厚 0.115	重 3.32		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	10	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.356	厚 0.127	重 2.20		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。永の字の右に鋳欠けの孔が見られる。	
第16図 PL.99	11	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.304	厚 0.112	重 3.09		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	12	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.286	厚 0.104	重 2.53		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。通と永の字の間に鋳欠けによる大きな孔が見られる。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	13	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.339	厚 0.116	重 3.03		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	14	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.300	厚 0.100	重 2.62		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	15	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.286	厚 0.103	重 2.64		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。表側上方に左右に走る平行な傷が見られる。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	16	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.254	厚 0.105	重 2.58		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	17	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.303	厚 0.124	重 2.91		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	18	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.307	厚 0.120	重 2.92		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永の字は鋳溜りにより外縁とつながる。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	19	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.326	厚 0.150	重 3.31		寛永通寶。表・裏側ともやや彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。	
第16図 PL.99	20	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.514	厚 0.135	重 3.98		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	21	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.536	厚 0.135	重 3.95		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	22	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.530	厚 0.127	重 3.78		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	23	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.513	厚 0.119	重 3.21		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	24	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.499	厚 0.120	重 3.47		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	25	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.530	厚 0.122	重 3.39		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	26	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 2.519	厚 0.137	重 4.13		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	5~9・20~26 癒着出土
第16図 PL.99	27	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.525	厚 0.120	重 3.45		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側左よりに接し鋳溜りの微小な突起が見られる。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第16図 PL.99	28	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.534	厚 0.116	重 2.84		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側左側外縁に接し鋳溜りの突起が見られる。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第17図 PL.99	29	銅製品 銭貨	底直 完形	縦 2.505	厚 0.139	重 3.78		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1~4・11~18・ 27~29癒着出 土
第17図 PL.99	30	肥前磁器 染付碗	3cm 完形	口 10.7	高 6.3		夾雑部含まない/ 白/	外面に草文。内面と高台内無文。高台端部無釉。	17世紀後葉~ 18世紀中葉
第17図 PL.100	31	肥前磁器 染付碗	底直 完形	口 10.3	高 6.2		夾雑部含まない/ 白/	焼成不良で釉白濁。外面、草花文を主文様とし、裏に蝶を染付。内面と高台内無文。	17世紀後葉~ 18世紀中葉
10区8号墓坑出土遺物									
第17図 PL.100	1	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 2.450	厚 0.113	重 2.99		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。左右にやや湾曲する。	
第17図 PL.100	2	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 2.502	厚 0.134	重 3.80		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第17図 PL.100	3	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 2.490	厚 0.138	重 3.81		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第17図 PL.100	4	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 2.480	厚 0.129	重 3.52		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第17図 PL.100	5	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.260 2.264	厚 重	0.099 2.27		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。外縁の幅は表側1.5mm外縁は幅5mmと大きく異なる。
第17図 PL.100	6	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.212 2.185	厚 重	0.108 2.46		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。永の字右に郭から外縁までつながる鑄溜りが見られる。

10区9号墓坑出土遺物

第17図	1	鉄製品 釘	埋土中 破片	長 幅	1.9 1.1	厚 重	1.1 0.87		断面ほぼ正方形で頭部分延ばして折り曲げた角釘。厚さ1.1cmの針葉樹板目材を貫通し方向の異なる別の板目材に打ち込まれその先は劣化破損する。
第17図	2	鉄製品 釘	23cm 破片	長 幅	2.7 1.6	厚 重	1.8 1.85		断面ほぼ正方形で頭部分を延ばして折り曲げた角釘。厚さ1.1cmの針葉樹板目材を貫通し方向の異なる別の板目材に打ち込まれその先は劣化破損する。

10区10号墓坑出土遺物

第17図 PL.100	1	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.486 2.472	厚 重	0.127 3.72		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭は明瞭。郭の下方は鋳欠けのためか凹む。	1・7～9癒着 出土
第17図 PL.100	2	銅製品 銭貨	埋土中 ほぼ完形	縦 横	2.755 2.848	厚 重	0.484 6.87		鉄製の銭貨と銅製の寛永通寶が錆化癒着する。寛永通寶の表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第17図 PL.100	3	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.393 2.416	厚 重	0.120 2.38		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭はやや不明瞭。	
第17図 PL.100	4	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.321 2.314	厚 重	0.126 2.84		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭はやや不明瞭。	
第17図 PL.100	5	銅製品 銭貨	埋土中 ほぼ完形	縦 横	2.560 2.453	厚 重	0.464 7.24		銅製の銭貨2枚が癒着し銭種は不明。外側の面には平織の布が錆付き残存する。反対側の銭貨は裏側で彫は深く外縁・郭とも明瞭。	
第17図 PL.100	6	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.460 2.448	厚 重	0.129 3.53		寛永通寶。表・裏側とも彫は深いが錆化により外縁・文字・郭の一部は不明瞭。	
第17図 PL.100	7	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.397 2.403	厚 重	0.113 2.72		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭は明瞭。	1・7～9癒着 出土
第17図 PL.100	8	鉄製品・銅 製品 銭貨	7cm 一部欠損	縦 横	2.478 2.570	厚 重	0.572 4.96		鉄製銭貨と銅製寛永通寶が錆化癒着する。銅製寛永通寶の表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。鉄製銭貨は銭種不明。	1・7～9癒着 出土
第17図 PL.100	9	銅製品 銭貨	7cm ほぼ完形	縦 横	2.312 2.309	厚 重	0.127 2.54		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で錆化により不明瞭。	1・7～9癒着 出土
第17図 PL.100	10	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.283 2.310	厚 重	0.112 2.62		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦だが外縁・郭とも明瞭。	
第17図 PL.100	11	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.284 2.250	厚 重	0.135 2.65		寛永通寶。表・裏側とも彫は深いが錆化により外縁・文字・郭は不明瞭。	
第17図 PL.100	12	銅製品 銭貨	7cm 完形	縦 横	2.199 2.194	厚 重	0.104 2.00		寛永通寶。表・裏側とも彫は深いが錆化により外縁・文字・郭は不明瞭。	
第18図 PL.100	13	肥前磁器 染付鉢蓋	29cm 完形	受口 口径	7.8 9.4	器	3.0	夾雑部含まない/ 白/	受け部無軸。紐状のつまみ貼り付け。天井部外面、氷裂地に菊花文を5箇所に配置。14の蓋。	18世紀後葉～ 19世紀中葉
第18図 PL.101	14	肥前磁器 染付鉢	29cm 完形	口径 底	8.5 4.2	高	4.4	夾雑部含まない/ 白/	口縁端部上面から内面釉剥ぎ。高台端部無軸。外面氷裂地に菊花文を5箇所に配置。13の身。	18世紀後葉～ 19世紀中葉
第18図 PL.101	15	金属製品 キセル・雁 首	20cm ほぼ完形	長 幅	5.9 1.8	厚 重	1.8 7.18		キセルの雁首で吸い口側に羅字の木質が一部残存する。表面は銀白色で平滑面だが一部は緑青色の錆に覆われる。火皿内面には黒色物が残存する。	
第18図 PL.101	16	金属製品 キセル・吸 い口	11cm ほぼ完形	長 幅	6.7 0.9	厚 重	0.8 4.64		キセルの吸い口で雁首側に羅字の木質が一部残存する。表面は銀白色で平滑面だが一部は緑青色の錆に覆われる。	
第18図	17	鉄製品 釘	埋土中 完形	長 幅	7.5 1.6	厚 重	3.2 7.38		断面ほぼ正方形の角釘で、頭部分は延ばして折り曲げる。頭のすぐ下まで貫通した竹材が錆化残存する。	
第18図	18	鉄製品 釘	埋土中 完形	長 幅	7.1 1.1	厚 重	2.6 5.45		断面ほぼ正方形の角釘で、頭部分は延ばして折り曲げる。頭のすぐ下まで貫通した竹材が錆化残存する。	

7区131号土坑出土遺物

第29図 PL.101	1	石製品 砥石	埋土中 2/3	長 幅	(8.0) 2.9	厚 重	1.7 51.3	砥沢石	砥面は1面認められる。表面は上下端におかいか著しく研ぎ減りする。裏面と両側面には櫛歯タガネ痕がわずかに残る。上部及び下部欠損。	近世
----------------	---	-----------	------------	--------	--------------	--------	-------------	-----	---	----

10区245号土坑出土遺物

第29図	1	鉄製品 不詳	埋土中 一部欠損	長 幅	4.7 4.6	厚 重	1.0 28.51		かまぼこ形の板状鉄製品。両端に耳状の突起を持つが片方は基部から破損する。木質・布等の痕跡は見られない。	
------	---	-----------	-------------	--------	------------	--------	--------------	--	---	--

2区3号溝状遺構出土遺物

第47図 PL.101	1	鉄製品 釘	埋土中 一部欠損	長 幅	6.5 1.1	厚 重	0.9 6.31		断面ほぼ正方形の角釘。頭は薄く延ばし緩く折り曲げる。先端側は欠損。木質等の痕跡は見られない。	
----------------	---	----------	-------------	--------	------------	--------	-------------	--	--	--

4区7号溝状遺構出土遺物

第47図 PL.101	1	銅製品 銭貨	埋土中 完形	縦 横	2.450 2.450	厚 重	0.119 3.35		元祐通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも識別できない。	
第47図 PL.101	2	銅製品 キセル・吸 い口	埋土中 ほぼ完形	長 幅	5.9 1.0	厚 重	1.0 7.93		キセルの吸い口で羅字は残存しない。雁首側は断面八角形で吸い口側は円形でその境の部分には三本の溝を持つ。	
第47図 PL.101	3	金属製品 守り本尊	埋土中 完形	長 幅	3.5 2.0	厚 重	0.3 7.93		表面には波夷羅大将西年守本尊、背面に日光山薬師堂西と記載される。表面は黒色だが背面は黄銅色の面が一部に見られる。	

4区10号溝状遺構出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第47図	1	鉄製品 不詳	埋土中 破片	長 幅	2.3 1.2	厚 重	0.4 1.36	断面長方形の薄板状鉄製品でト字形を持つが錆化が進み本来の形状かは不明。	
第47図	2	鉄製品 不詳	埋土中 一部欠損	長 幅	5.1 0.8	厚 重	0.6 2.49	棒状鉄製品で一端に向かい断面が長方形からかまぼこ形になり端部1cm程で曲がり先端は丸みを持つ。反対側は劣化破損する。	

4区16号溝状遺構出土遺物

第47図	1	鉄製品 釘	埋土中 一部欠損	長 幅	5.1 1.0	厚 重	0.9 5.47	断面正方形からやや円形の釘。頭部分は斜めに曲がり先端は細くなるが鋭利には尖らない。	
------	---	----------	-------------	--------	------------	--------	-------------	---	--

8区3号流路出土遺物

第47図 PL.101	1	瀬戸・美濃 陶器 皿	埋土中 1/4	口 底	(11.0) (6.0)	高	1.9	白色鈹物少量含む/灰白/	高台脇割り込む。内面から高台内面長石釉。	17世紀前葉～ 中葉
----------------	---	------------------	------------	--------	-----------------	---	-----	--------------	----------------------	---------------

2・4・8・9区遺構外出土遺物

第49図 PL.101	1	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.496 2.499	厚 重	0.134 4.31	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。外縁上部から寛の字にかけて鋳欠けにより凹む。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	2	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.502 2.517	厚 重	0.126 3.69	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寛の字左に鋳欠けによる滴形の孔が見られる。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	3	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.463 2.459	厚 重	0.148 4.48	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	4	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.450 2.457	厚 重	0.108 3.06	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。寛の字の左上に鋳欠けの微小な孔が右側には大きな孔が見られる。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	5	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.369 2.360	厚 重	0.120 3.44	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	6	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.377 2.373	厚 重	0.120 3.47	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも極めて明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	7	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.521 2.509	厚 重	0.115 2.92	寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも極めて明瞭。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	8	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.548 2.529	厚 重	0.137 4.10	寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも極めて明瞭。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	9	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.543 2.531	厚 重	0.132 3.91	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	10	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.525 2.516	厚 重	0.141 4.36	寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも極めて明瞭。	1～11癒着出 土
第49図 PL.101	11	銅製品 銭貨	8区遺構外 完形	縦 横	2.537 2.550	厚 重	0.136 3.82	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表側の一部表面に平織の布が付着する。	1～11癒着出 土
第49図	12	鉄製品 釘	8区遺構外 ほぼ完形	長 幅	3.2 4.0	厚 重	1.5 3.75	断面ほぼ正方形の角釘で全体的に針葉樹の木材とともに錆化し内部は空洞となり細かい形状は不明。頭から1.7cmとその先で方向の異なる二枚の板目材に打ち込まれている。釘先端付近の木質には別の角釘の断面が観察される。	
第49図	13	鉄製品 釘	8区遺構外 ほぼ完形	長 幅	4.0 1.4	厚 重	0.8 1.91	断面四角で頭部分を延ばし折り曲げた角釘と見られるが錆化が著しく細かい形状は不明。先端付近には針葉樹板目材が錆化残存する。	
第49図	14	鉄製品 釘	2区遺構外 破片	長 幅	6.0 1.4	厚 重	1.3 7.14	断面正方形に近い角釘破片。頭部は劣化破損し先端側は徐々に細くなり端部は角形だが破損後の錆化の可能性もある。木質等の痕跡は見られない。	
第49図	15	鉄製品 不詳	4区遺構外 一部欠損	長 幅	4.2 2.7	厚 重	0.8 8.76	かまぼこ形の板状鉄製品。両端に耳状の突起を持つが片方は破損する。	
第49図	16	鉄製品 釘	9区遺構外 破片	長 幅	4.4 1.1	厚 重	0.9 4.26	断面長方形の角釘だが、全体に硬い錆に覆われ内部は空洞化し頭部の細かい形状は不明。先端側は劣化破損する。	

●弥生時代の遺物観察表

1区29号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第52図 PL.102	1	弥生土器 壺	12cm 頸部～肩部1/8	口底		高	D3	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を2帯、肩部に同波状文2帯と斜線充填の鋸歯文及びボタン状貼付文を施す。施文具8歯14mm。外面肩部は前記施文部を除いて赤色塗彩。内面櫛描条痕状の横撫で後・横位篋磨きで、頸部赤色塗彩。灰白色。	樽式
第52図 PL.102	2	弥生土器 甗	P2開口部 ほぼ完存	口底	12.1 5.9	高 16.3	F1	外面側に折返す複合口縁。口縁部～頸部に櫛描波状文を3帯施し、括れ部に櫛描横線文を施文。施文具6歯12mm。外面丁寧な縦位篋磨き、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第52図 PL.102	3	弥生土器 甗	埋土中 口縁部片	口底		高	E1	口縁部～胴部上位に櫛描波状文を4帯施す。施文具9歯14mm。	樽式
第52図 PL.102	4	弥生土器 甗	埋土中 底部完存	口底	6.0	高	E1	外面斜位篋磨き・煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第52図 PL.102	5	弥生土器 甗	1cm 口縁部～胴部上 位完存	口底	12.3	高	F1	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、同波状文を口縁部に2帯、胴部に1帯施文。施文具7歯11mm。外面やや被熱風化、内面横位篋磨き・胴部下位に煤状炭化物付着。	樽式
第52図 PL.102	6	弥生土器 甗	1cm 頸部～胴部上位 1/3	口底		高	F1	括れ部に櫛描連簾文を、頸部～胴部上位に4帯以上の同波状文を施す。施文具5歯10mm。外面やや被熱風化・一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第52図 PL.102	7	石製品 石製品	埋土中 完形	長幅	4.0 1.6	厚重 0.4 3.3	蛇紋岩	ほぼ全面に研磨が及び整形されている。径約2mmの孔を2つ穿孔する。	
第52図 PL.102	8	剥片石器 削器	埋土中 完形	長幅	5.1 11.5	厚重 1.0 46.7	細粒輝石安山岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。大形の横長剥片を素材とする。背面側に自然面を大きく残す。円礫を利用する。先端部に剥離痕が集中するが散発的であり使用痕の可能性もある。形態的特徴から石包丁の代替器種の可能性を想定する必要がある。	

1区30号住居出土遺物

第53図 PL.102	1	弥生土器 甗	埋土中 頸部片	口底		高	D4	櫛描波状文を複数帯施す。施文具9歯11mm。内面横位篋磨き。	樽式
----------------	---	-----------	------------	----	--	---	----	--------------------------------	----

2区2号住居出土遺物

第55図 PL.102	1	弥生土器 壺	埋土中 口縁部片	口底		高	D4	外面側に折返す複合口縁。口縁部～頸部に櫛描波状文を複数帯施す。施文具8歯14mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第55図 PL.102	2	弥生土器 甗	埋土中 口縁部片	口底		高	D2	櫛描波状文を複数帯施す。内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第55図 PL.102	3	弥生土器 甗	埋土中 頸部片	口底		高	F2	括れ部に櫛描連簾文を、頸部～肩部に櫛描波状文を複数帯施す。施文具8歯14mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第55図 PL.102	4	弥生土器 甗	埋土中 底部1/2	口底	(9.0)	高	E1	外面縦位篋磨き、内面横位篋磨き。	樽式
第55図 PL.102	5	弥生土器 壺	57cm 胴部下位～底部 完存	口底	6.7	高	F2	胴部下位外面に粗圧痕。外面縦位篋磨き、内面横位篋磨きで、外面一部被熱剥離・赤変色。灰白色。	樽式
第55図 PL.102	6	弥生土器 壺	埋土中 底部1/2	口底	6.5	高	D4	外面横位篋磨き・被熱剥離、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式

2区12号住居出土遺物

第58図 PL.102	1	弥生土器 壺	床直 頸部～胴上半 1/2	口底		高	D6	外面側に折返す複合口縁。口唇部上面に刻目を施す。括れ部に2連止櫛描連簾文を、口縁部と肩部に同波状文を複数帯施し、下位にボタン状貼付文を7単位に施す。施文具8歯16mm。外面口縁部横位・頸部縦位篋磨き、内面横位篋磨き。	樽式
第58図 PL.102	2	弥生土器 壺	床直 口縁部片	口底		高	E4	4段の複合口縁に刻目を施す。内面横位篋磨き、一部に赤色塗彩残存。	樽式
第58図 PL.102	3	弥生土器 壺	5cm 口縁部片	口底		高	E2	口縁部～頸部に櫛描波状文を複数帯施す。施文具6歯12mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横・斜位篋磨き。	樽式
第58図 PL.102	4	弥生土器 甗	17cm 底部完存	口底	6.4	高	D4	外面縦位篋磨き・被熱剥離、内面丁寧な縦・斜位篋磨き。	樽式
第58図 PL.102	5	弥生土器 甗	1cm 底部完存	口底	8.2	高	D4	外面縦位篋磨き・一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第58図 PL.102	6	弥生土器 有孔鉢	床直 口縁部片	口底		高	G2	底面に径9mmの焼成前穿孔。外面口縁部横位・胴部縦位篋磨き、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第58図 PL.102	7	弥生土器 有孔鉢	2cm 口縁部片	口底		高	D2	底面に径9mmの焼成前穿孔。外面口縁部横位・胴部縦位篋磨き、内面丁寧な横位篋磨き。整形後の口縁部ひび割れ補修あり。	樽式
第58図 PL.102	8	弥生土器 高坏	埋土中 坏部1/2	口底	(22.5)	高	G2	口唇部上面に刻目を施す。内外面共に赤色塗彩、下半部風化・剥離。	樽式
第58図 PL.102	9	弥生土器 高坏	埋土中 口縁部1/6	口底	(23.0)	高	G2	口唇部上面に刻目を施す。内外面共に赤色塗彩、内面口縁部風化・剥離。	樽式
第58図 PL.102	10	弥生土器 高坏	1cm 口縁部1/6	口底	(23.5)	高	G2	内外面共に赤色塗彩。内面一部に風化・剥離。	樽式
第58図 PL.102	11	弥生土器 台付甗	2cm 脚部完存	口底	7.3	高	G2	外面縦位篋磨き・一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨きで。	樽式
第58図 PL.102	12	弥生土器 高坏	床直 坏底部～脚部上 位完存	口底		高	G2	坏部内外面・脚部外面赤色塗彩。内面脚部横位篋磨きで。	樽式
第58図 PL.102	13	礫石器 磨石	1cm 完形	長幅	14.2 6.8	厚重 4.3 630.5	粗粒輝石安山岩	棒状の円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。上下端に敲打痕が集中する。	

4区4号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高さ	厚み			
第63図 PL.103	1	弥生土器 壺	埋土中 口縁部1/5	口底	(22.8)	高	E2	複合口縁上面に2列の刻目を施し、同部位の内外面に赤色塗彩。外面縦位刷毛目、内面横位刷毛目。内外面共にやや風化。	樽式
第63図 PL.103	2	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口底		高	E2	肩部に斜線充填鋸歯文を施す。内面横位篋撫で。	樽式
第63図 PL.103	3	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口底		高	D2	肩部に櫛描横線文を2帯施す。内面横位篋撫で、やや風化。	弥生中期
第63図 PL.103	4	弥生土器 壺	12cm 底部完存	口底	(6.5)	高	E2	外面縦位篋撫で、内面横位篋撫で。	樽式
第63図 PL.103	5	弥生土器 壺	33cm 胴部片	口底		高	E2	肩部にRL縄文を横位施文。外面縦・斜位篋磨き、内面横位篋撫で。	樽式
第63図 PL.103	6	弥生土器 甗	2cm 口縁部1/5	口底	(14.0)	高	E2	幅狭な複合口縁から肩部に櫛描波状文を6帯施す。施文具10歯13mm。内面横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	7	弥生土器 甗	19cm 口縁部1/5	口底	(12.8)	高	E2	括れ部に櫛描連簾文を、口縁部に同波状文を2帯施す。施文具8歯13mm。外面一部に被熱剥離、内面横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	8	弥生土器 甗	埋土中 胴部片	口底		高	E2	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施し、胴部上位に同波状文を複数帯施す。施文具11歯18mm。外面煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	9	弥生土器 甗	埋土中 頸部片	口底		高	H1	括れ部に櫛描連簾文を、口縁部～頸部に同波状文を4帯以上施す。施文具7歯12mm。内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	10	弥生土器 甗	3cm 底部完存	口底	6.2	高	E2	底部外面に不明種実圧痕。外面縦位、内面横位の篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	11	弥生土器 甗	埋土中 底部1/3	口底	(10.0)	高	I3	外面縦位篋磨き、内面横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	12	弥生土器 甗	11cm 底部1/5	口底	(8.0)	高	E5	外面縦位篋磨き、内面被熱風化。	樽式
第63図 PL.103	13	弥生土器 小型台付甗	9cm 口縁部～胴部片	口底		高	E2	幅狭な複合口縁から肩部に櫛描波状文を3帯施す。施文具6歯10mm。外面煤状炭化物付着、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	14	弥生土器 小型台付甗	7cm 口縁部片	口底		高	E2	口縁部～肩部に櫛描波状文を5帯施す。施文具3歯5mm。外面一部に被熱剥離、内面横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	15	弥生土器 小型台付甗	埋土中 脚台部完存	口底	5.0	高	E2	脚部外面縦位篋磨き・一部に煤状炭化物付着、内面横位篋撫で。底部外面縦位篋磨き、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第63図 PL.103	16	弥生土器 高坏	床直 脚部欠損	口底	(12.3)	高	E2	口縁部が強く屈曲・外反。内外面共に赤色塗彩、内面やや風化・剥離。	樽式
第63図 PL.103	17	弥生土器 筒形	埋土中 胴部片	口底		高	E1	横・縦位の沈文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共にやや風化。	弥生中期
第63図 PL.103	18	弥生土器 筒形	埋土中 胴部片	口底		高	E1	方形の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや風化。	弥生中期
第63図 PL.103	19	石製品 紡輪	埋土中 2/3	長幅	5.7	厚重 0.8 10.2	流紋岩凝灰岩	全面が良く研磨され、丁寧な作り。特に表面に線条痕が集中する。中心軸の孔径約6mm。	逆台形状 (薄型)
第63図 PL.103	20	石製品 砥石	34cm 不明	長幅	(6.0) 7.0	厚重 1.0 70.8	粗粒輝石安山岩	矩形に整形されている。表裏面が砥面と想定され、特に表面は著しく滑らかであり中央部がやや凹んだ形態を呈する。	

4区8号住居出土遺物

第65図 PL.103	1	弥生土器 壺	26cm 口縁部片	口底		高	E5	口縁部に櫛描波状文を1帯施す。施文具9歯12mm。内外面共に風化。	樽式
第65図 PL.103	2	弥生土器 壺	埋土中 底部1/4	口底	(5.0)	高	I3	内外面共に赤色塗彩。	樽式
第65図 PL.103	3	弥生土器 短頸壺	埋土中 口縁部片	口底		高	F1	外反する受け口状口縁。内外面共に赤色塗彩。	樽式
第65図 PL.103	4	弥生土器 甗	24cm 口縁部～胴部 1/3	口底	(22.5)	高	I3	括れ部に2連止櫛描連簾文を施す。外面口縁部～胴部斜位篋撫で、煤状炭化物付着。内面横位篋撫で、被熱剥離。	樽式
第65図 PL.103	5	弥生土器 甗	2cm 口縁部～底部 3/4	口底	16.5 7.7	高 23.3	H1	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、口縁部に同波状文を3帯、胴部上半に4帯施す。施文具8歯14mm。外面胴部下半横位篋撫で後、縦位篋磨き、一部に煤状炭化物付着。内面口縁部～胴部上半横位、胴部下半縦位篋磨き。	樽式
第65図 PL.103	6	弥生土器 甗	埋土中 胴部片	口底		高	F1	頸部～括れ部に櫛描波状文と連簾文を施す。施文具8歯16mm。内外面共に一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第65図 PL.103	7	弥生土器 甗	埋土中 口縁部片	口底		高	F1	括れ部に櫛描連簾文を施す。外面横・斜位篋撫で。内面篋撫で状の横位磨き、やや被熱風化。	樽式
第65図 PL.103	8	弥生土器 甗	埋土中 底部1/2	口底	8.0	高	F1	外面やや被熱風化、内面横位篋磨き。	樽式?
第65図 PL.103	9	弥生土器 小型台付甗	埋土中 口縁部～胴部 1/4	口底	(12.0)	高	H1	口縁部にやや粗雑な櫛描波状文を1帯施文し、括れ部に同工具の3連止簾文を施文。施文具8歯20mm。外面一部被熱剥離・煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第65図 PL.103	10	弥生土器 高坏	50cm 脚部一部4/5	口底	8.3	高	F1	坏部内面及び脚部外面は赤色塗彩。脚部内面一部に赤色塗彩有り、横位篋撫で。	樽式
第65図 PL.103	11	弥生土器 高坏	35cm 脚部3/4	口底	(7.2)	高	E1	外面縦位篋磨き、一部に煤状炭化物付着。内面刷毛目状の横位篋撫で。	樽式
第65図 PL.103	12	弥生土器 高坏	埋土中 口縁部片	口底		高	F1	外面横・斜位刷毛目状の篋撫で後、やや粗い横位篋磨き。内面赤色塗彩。	樽式
第65図 PL.103	13	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口底		高	H1	縦位の沈羽状文を施す。内面横位篋撫で。	弥生中期
第65図 PL.103	14	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口底		高	D7	頸部～肩部に斜線充填三角文または重三角文を施す。内面横位篋撫で、やや風化。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第65図 PL.103	15	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口底		高	D7	頸部～肩部に波状文や刺突文充填の横帯文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第65図 PL.103	16	弥生土器 土製紡輪	埋土中 3/5	径孔	4.3 0.7	厚 1.2	F1	中央部に7mmの孔を穿つ。両面ともに撫で整形。	
第65図 PL.103	17	弥生土器 土製円板	埋土中 1/3	径孔		厚 1.1	F1	手捏ね状の不整円形状を呈し、両面に篋状工具の細沈線で円弧状の意匠を構成。	
第65図 PL.103	18	礫石器 石皿	33cm 完形	長幅	29.0 33.4	厚重 9.1 14900	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面と裏面の中央付近に磨面が認められる。正面の磨面は著しく滑らかである。	
4区27号住居出土遺物									
第67図 PL.104	1	弥生土器 壺	60cm 口縁部1/2	口底	(20.0)	高	E2	括れ部に櫛描連簾文を施す。外面口縁部横位・頸部縦位刷毛目、内面横位刷毛目。	樽式
第67図 PL.104	2	弥生土器 甗	埋土中 口縁部～胴部上位1/3	口底	(13.0)	高	E2	櫛描波状文を口縁部に1帯、肩部に2帯施す。施文具11歯20mm。外面頸部縦位刷毛目、胴部横位刷毛目後、縦・横位篋磨き。内面口縁部横位刷毛目後・横位篋磨き、胴部横位刷毛目。	樽式
第67図 PL.104	3	弥生土器 壺	8cm 口縁部1/2	口底	(14.0)	高	E1	括れ部に櫛描連簾文を施す。外面縦位刷毛目後、斜位篋撫で。内面横位刷毛目。内外面共にやや風化。	樽式
第67図 PL.104	4	弥生土器 甗	45cm 口縁部～胴部上位1/3	口底	(18.0)	高	E2	櫛描波状文を口縁部に1帯、胴部上半に3帯施す。施文具12歯15mm。外面口縁部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第67図 PL.104	5	弥生土器 甗	床直 口縁部～底部3/4	口底	(17.5) 8.5	高 32.9	D2	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、頸部と胴部上位に同波状文を各1・2帯施文。施文具7歯14mm。外面口縁部横位撫で、頸部斜位篋撫で、胴部上半横位・下半縦位篋磨き。内面横位篋磨き、口縁部・底部一部に煤状炭化物付着。	樽式
第68図 PL.104	6	弥生土器 甗	床直 口縁部～胴部上位1/4	口底	(15.0)	高	G2	括れ部に多連止櫛描連簾文を施し、頸部と胴部上位に同波状文を各1・2帯施文。施文具9歯16mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	7	弥生土器 小型台付甗	埋土中 口縁部～胴部上半1/4	口底	(12.0)	高	D2	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、口縁部に同波状文を3帯施文。施文具7歯12mm。内外面共に丁寧な横位篋磨き、内面一部に煤状炭化物付着。	樽式
第68図 PL.104	8	弥生土器 甗	埋土中 胴部片	口底		高	E2	複合口縁上面から頸部に櫛描波状文を4帯施す。施文具11歯13mm。外面煤状炭化物付着、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	9	弥生土器 甗	埋土中 頸部片	口底		高	E2	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、胴部上位に同波状文を2帯施す。施文具9歯14mm。内面横位刷毛目後、やや粗い横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	10	弥生土器 甗	床直 口縁部片	口底		高	E2	括れ部に櫛描連簾文を施し、口縁部から頸部に同波状文を3帯施す。施文具7歯12mm。外面炭素吸着、内面やや粗い横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	11	弥生土器 甗	埋土中 頸部～胴部片	口底		高	E2	括れ部に3連止櫛描連簾文を施し、頸部と胴部上位に同波状文を各1帯施す。施文具9歯13mm。外面縦位刷毛目後、胴部縦位篋磨き。内面横位篋磨き、炭素吸着。	樽式
第68図 PL.104	12	弥生土器 甗	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	口縁部に櫛描波状文を施す。施文具13歯13mm。外面煤状炭化物付着、内面丁寧な横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	13	弥生土器 甗	10cm 底部完存	口底	8.0	高	C5	底外面に木葉痕。外面やや粗い縦位篋磨き、内面煤状炭化物付着・被熱剥離。	樽式
第68図 PL.104	14	弥生土器 甗	埋土中 口縁部～胴部1/2	口底	(12.0)	高	E2	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施し、同波状文を口縁部に2帯、肩部に1帯施す。外面斜位篋磨き、内面横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	15	弥生土器 小型台付甗	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	口縁部と括れ部に櫛描波状文を各1帯施し、同部位に円形貼付文を施文。施文具12歯15mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	16	弥生土器 高坏	埋土中 坏部1/2	口底	16.6	高	D2	内外面共に赤色塗彩。	樽式
第68図 PL.104	17	弥生土器 高坏	埋土中 口縁部1/5	口底	(17.4)	高	E2	内外面に赤色塗彩、外面やや風化。	樽式
第68図 PL.104	18	弥生土器 高坏	床直 脚部完存	口底	8.0	高	E2	脚部外面横・縦位篋撫で・一部に煤状炭化物付着、内面横位篋撫で。底部内面赤色塗彩。	樽式
第68図 PL.104	19	弥生土器 高坏	9cm 脚部完存	口底	8.0	高	E2	脚部外面と坏部内面に赤色塗彩。脚部内面横位篋撫で。	樽式
第68図 PL.104	20	弥生土器 高坏	埋土中 脚部完存	口底	9.0	高	I1	外面縦位篋磨き、内面横位篋磨き。	樽式
第68図 PL.104	21	石製品 磨製石鏃	42cm 1/2	長幅	(3.1) (1.3)	厚重 0.2 1.2	珪質準片岩	表裏面共に丁寧に研磨整形されており擦痕が認められる。孔径約3mm。両側辺から下部にかけて欠損。	
第68図 PL.104	22	剥片石器 磨製石鏃	埋土中 ほぼ完形	長幅	(2.6) (1.7)	厚重 0.2 1.4	変質準片岩	全面に研磨痕が認められ丁寧に仕上げられている。径約2mmの孔を両側穿孔する。	
第68図 PL.104	23	剥片石器 磨製石鏃未成品?	埋土中 完形?	長幅	(6.0) (4.1)	厚重 0.3 8.8	蛇紋岩	表裏面とも研磨され細かな線条痕が認められる。右側縁に半円形の抉り状の加工が1箇所認められる。石鏃あるいは他の未成品である可能性が高い。	
第68図 PL.104	24	剥片石器 石鏃	炉内 1/3	長幅	(11.3) (9.9)	厚重 (2.8) 473.9	粗粒輝石安山岩	表裏面に節理面を大きく残し、石材は露頭採集の可能性が高い。左側辺には部分的な黒変がみられ受熱の可能性が高い。	
第68図 PL.104	25	礫石器 磨石	炉内 完形	長幅	16.5 6.6	厚重 5.2 787.8	粗粒輝石安山岩	棒状の円礫を利用する。表面のほぼ全面と裏面の中央付近に磨面が認められる。	
第68図 PL.104	26	礫石器 磨石	炉内 完形	長幅	12.8 6.7	厚重 5.7 754.2	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。上下端部に敲打痕が集中する。	
第68図 PL.104	27	石製品 砥石	3cm 不明	長幅	(9.0) 6.1	厚重 2.9 213.9	砂岩	表裏面及び左右側面が研面である。	

4区33号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口底	高					
第70図 PL.105	1	弥生土器 壺	床直 括れ部～胴部上 半1/2	口底	高		D2	括れ部に2連止櫛描連簾文を2帯施文し、肩部に同波状文3帯とボタン状貼付文を施す。施文具9歯17mm。外面縦・横位の筥磨き、内面横位刷毛目。	樽式	
第70図 PL.105	2	弥生土器 壺	床直 頸部～胴部上半 3/4	口底	高		H1	括れ部に2連止櫛描連簾文を2帯施し、以下に同波状文3帯や斜線充填鋸歯文とボタン状貼付文を施す。施文具9歯11mm。外面縦位筥磨き、煤状炭化物付着。内面横位筥磨き。	樽式	
第70図 PL.105	3	弥生土器 壺	埋土中 胴部上位完存	口底	高		E5	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施す。施文具11歯19mm以上。内外面共に横位筥磨き、やや風化。	樽式	
第70図 PL.105	4	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口底	高		D2	肩部に矢羽根状文や斜線充填鋸歯文を施す。外面撫で状の縦位筥磨き。内面横位筥磨きで、一部に煤状炭化物付着。	樽式	
第70図 PL.105	5	弥生土器 甗	埋土中 口縁部～底部 1/4	口底	17.5	高	I3	外面口縁横位・胴部縦位刷毛目、煤状炭化物。内面横位筥磨き。	樽式	
第70図 PL.105	6	弥生土器 甗	床直 口縁部～胴部下 半2/3	口底	(24.8)	高	H1	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施し、口縁部と胴部上位に同波状文を各2帯施す。施文具18歯22mm。外面頸部縦位筥磨き、胴部横・斜位の筥磨きで、やや被熱風化。内面横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.105	7	弥生土器 甗	埋土中 口縁部1/6	口底	(19.4)	高	E2	口縁部～頸部に櫛描波状文を7帯密接施文する。括れ部に同工具の簾状文を施文。施文具4歯4～5mm。外面全体に煤状炭化物付着、内面横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.105	8	弥生土器 甗	埋土中 胴部片	口底		高	H1	外面縦位筥磨き、内面横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.105	9	弥生土器 甗	床直 底部3/4	口底	8.4	高	H1	外面縦位筥磨き、被熱風化。内面横位筥磨き、煤状炭化物付着。	樽式?	
第71図 PL.105	10	弥生土器 甗	床直 底部完存	口底	6.9	高	E2	底部外面にイネ糊圧痕。外面縦位、内面横位の筥磨き。	樽式	
第71図 PL.105	11	弥生土器 小型甗	埋土中 口縁部1/6	口底	(10.0)	高	E2	口縁部に櫛描波状文を1帯施文し、括れ部に同工具の等間隔止め簾状文を施文。施文具8歯12mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.105	12	弥生土器 小型台付甗	埋土中 口縁部～底部 3/4	口底	12.5	高	H1	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、口縁部と胴部上位に同波状文を各1帯施す。施文具11歯15mm。外面胴部縦位筥磨き、内面横位筥磨き。内外面共にやや被熱風化。	樽式	
第71図 PL.105	13	弥生土器 小型台付甗	埋土中 口縁部1/4	口底	(8.2)	高	E2	受け口状口縁部。口唇部に円形貼付文と櫛描波状文を1帯施文。括れ部に同工具の2連止め簾状文を、胴部上位に同波状文を施す。施文具7歯10mm。外面炭素吸着、内面横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.105	14	弥生土器 台付甗	埋土中 口縁部～底部 3/4	口底	12.8	高	E2	口縁部～胴部上位に櫛描波状文を5帯施し、ボタン状貼付文を口縁部及び胴部上位に推定5単位に施文。内面横位筥磨きで後、粗い横位筥磨き。内外面共にやや被熱風化。	樽式	
第71図 PL.106	15	弥生土器 台付甗	床直 胴部下半～脚台 部	口底		高	D5	内外面共に横・斜位の刷毛目。外面一部に煤状炭化物付着、被熱剥離。	樽式	
第71図 PL.106	16	弥生土器 台付甗	床直 脚部完存	口底	9.6	高	E2	外面縦位筥磨き、煤状炭化物付着。内面横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.106	17	弥生土器 高坏	床直 坏部～脚部1/2	口底	(12.7) (8.4)	高	12.1 J2	脚部内面を除く全面に赤色塗彩。坏部内面風化・剥離。脚部内面横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.106	18	弥生土器 高坏	床直 脚部完存	口底	(6.4)	高	E1	外面縦位刷毛目。内面坏部赤色塗彩、脚部横位筥磨き。	樽式	
第71図 PL.106	19	石製品 磨製石鏃	床直 ほぼ完形	長幅	3.0 2.1	厚重	0.2 2.0	珪質準片岩	縁刃に斜行および直交の線条痕が明瞭に残る。中央部下半に径2mmの孔を両側から穿孔。孔の下部付近欠損。	

7区44号住居出土遺物

第72図 PL.106	1	弥生土器 壺	埋土中 口縁部1/4	口底	(17.2)	高	E2	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施す。施文具5歯11mm。外面口縁部横位・胴部縦位筥磨きで、内面横位筥磨き。灰白色。	樽式	
第72図 PL.106	2	弥生土器 壺	埋土中 頸部片	口底		高	E2	頸部～括れ部に多連止櫛描連簾文と同波状文を施す。施文具7歯12mm。内面横位筥磨き。灰白色。	樽式	
第72図 PL.106	3	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口底		高	G1	頸部～括れ部に等間隔止櫛描連簾文と同波状文を施す。施文具6歯11mm。外面斜位刷毛目、内面横位刷毛目後・横位筥磨き。灰白色。	樽式	
第72図 PL.106	4	弥生土器 壺	埋土中 底部1/4	口底	(9.7)	高	E2	外面縦位筥磨き、内面横位筥磨きで一部被熱剥離。灰白色。	樽式	
第72図 PL.106	5	弥生土器 壺	埋土中 底部1/4	口底	(8.0)	高	E2	底部外面にイネ糊とキビ菓果の圧痕。	樽式	
第72図 PL.106	6	弥生土器 甗	埋土中 口縁部1/4	口底	(13.6)	高	F1	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施し、同波状文を口縁部～頸部に3帯、胴部に1帯施す。外面煤状炭化物付着、内面横位筥磨き。	樽式	
第72図 PL.106	7	弥生土器 甗	埋土中 底部1/4	口底	(8.4)	高	E2	外底面に網代痕。内外面共に横位筥磨き、やや被熱風化。	樽式	
第72図 PL.106	8	剥片石器 石鏃	9cm 2/3	長幅	17.0 9.6	厚重	3.1 473.1	細粒輝石安山岩	右側片の先端部付近に磨滅が認められ使用痕の可能性はある。両側片の中央付近につぶれが認められ着柄痕の可能性はある。	
第72図 PL.106	9	礫石器 砥石	8cm 1/2	長幅	(6.6) 4.5	厚重	3.0 131.0	粗粒輝石安山岩	表面は下方にむかい著しく研ぎ減りする。裏面も下方にむかいやや研ぎ減りする。下部欠損。	

7区1号壺棺葬出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74図 PL.106	1	弥生土器 壺	底直 完形	口 底	14.5 5.6	高 29.3	G1	口唇部内面にLR縄文を横位施文。口縁部に沈線の方形区画文と横線文を施し、外縁部にLR縄文を充填施文。括れ部に3本沈線の横帯文を施す。胴部上半は中央部に瘤状貼付文を持つ円文や縦位方形文を5単位に施文し、LR縄文を充填的に施す。外面頸部縦位磨き、胴下半部に煤状炭化物付着。内面口縁～頸部横位磨き・胴下半被熱剥離。	弥生中期

2区31号土坑出土遺物

第77図 PL.106	1	弥生土器 甕	埋土中 頸部片	口 底		高	G2	櫛波状文を複数帯施す。内面横位磨き。	樽式
----------------	---	-----------	------------	--------	--	---	----	--------------------	----

2区32号土坑出土遺物

第77図 PL.106	1	弥生土器 鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高	E1	縦位方形文や曲線状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第77図 PL.106	2	弥生土器 甕	埋土中 胴部片	口 底		高	I1	櫛波状文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式

2区33号土坑出土遺物

第77図 PL.106	1	弥生土器 高坏	埋土中 脚部片	口 底		高	F3	外面縦位磨き、内面横位磨で。	樽式
第77図 PL.106	2	弥生土器 高坏	埋土中 脚部1/8	口 底		高	G2	外面赤色塗彩、内面横位磨で。	樽式

2区36号土坑出土遺物

第77図 PL.106	1	弥生土器 甕	埋土中 口縁部片	口 底		高	B4	LR縄文を横位・多段に施文。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	弥生中期
第77図 PL.106	2	弥生土器 甕	8cm 胴部片	口 底		高	G2	櫛状具の羽状文を施す。内外面共にやや被熱風化。	弥生中期
第77図 PL.106	3	弥生土器 筒形	埋土中 胴部片	口 底		高	B4	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	弥生中期

7区529号土坑出土遺物

第77図 PL.107	1	弥生土器 壺	18cm 肩部片	口 底		高	I1	肩部に凹線状幅広沈線の横帯文や弧線文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨で。	弥生中期
第77図 PL.107	2	弥生土器 壺	10cm 肩部片	口 底		高	B5	中央部にLR縄文充填の円文を配した結紐文を施し、刺突文を充填施文。内面横位磨で。	弥生中期
第77図 PL.107	3	弥生土器 筒形	3cm 胴部片	口 底		高	B5	胴部上位に縦位や横位の沈線文を施し、刺突文やLR縄文を充填施文。内面横位磨で。	弥生中期
第77図 PL.107	4	弥生土器 筒形	11cm 頸部片	口 底		高	I3	頸部に多条沈線の横帯文を施し、LR縄文や円形刺突文を充填施文。内面横位磨で。	弥生中期
第77図 PL.107	5	弥生土器 筒形	14cm 完形	口 底	7.0 3.0	高 15.2	E1	口縁部と胴部に横線文や交互三角文を施し、外縁部に細密なLR縄文を充填施文。外面頸部縦位磨き、内面横位磨で。口縁部と胴部の各1箇所にイネ粘土痕有り。	弥生中期
第77図 PL.107	6	剥片石器 石鏃	5cm 4/5	長 幅	17.8 10.6	厚 重	2.4 543.9	細粒輝石安山岩	両側面に節理面を大きく残し露頭採取の可能性がある。先端部付近に摩滅が認められ、また先端につぶれがあり使用痕の可能性がある。

7区565号土坑出土石器

第77図 PL.107	1	弥生土器 筒形	埋土中 胴部片	口 底		高	E1	胴部上位に方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面縦位磨で。	弥生中期
第77図 PL.107	2	弥生土器 筒形	埋土中 胴部片	口 底		高	E1	縦位の沈線文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨で。	弥生中期

7区566号土坑出土遺物

第77図 PL.107	1	弥生土器 壺	埋土中 肩部片	口 底		高	E1	沈線横帯文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に一部に煤状炭化物付着、被熱風化。	弥生中期
----------------	---	-----------	------------	--------	--	---	----	--	------

7区571号土坑出土遺物

第77図 PL.107	1	弥生土器 甕	埋土中 口縁部片	口 底		高	E1	横線文を施し、LR縄文を充填施文。直径3mmの焼成前穿孔。内面横位磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第77図 PL.107	2	弥生土器 高坏	埋土中 口縁部～脚部 1/2	口 底	12.7	高	E1	坏部外面縦位磨で、内面赤色塗彩。脚部内外面共に縦位磨で。	樽式
第77図 PL.107	3	弥生土器 高坏	3cm 脚部完存	口 底	11.8	高	J2	坏部内面赤色塗彩。脚部外面縦位磨き、内面横位磨で。	弥生中期

7区576号土坑出土遺物

第77図 PL.107	1	弥生土器 壺	埋土中 胴部片	口 底		高	E1	胴部に同心円状の多条沈線文を施す。内面横位磨で。	弥生中期
----------------	---	-----------	------------	--------	--	---	----	--------------------------	------

7区730号土坑出土遺物

第78図 PL.107	1	弥生土器 筒形	2cm ほぼ完形	口 底	10.3 5.8	高 18.8	B4	口縁部～胴部上半に方形状の入組文を施し、細密なLR縄文を充填施文。外面丁寧な横位磨き、全面に煤状炭化物付着。内面口縁部横位・胴部縦位磨き、胴下半被熱風化・煤状炭化物付着。	弥生中期
第78図 PL.107	2	弥生土器 筒形	2cm ほぼ完形	口 底	10.6 6.4	高 24.0	E1	口縁～胴部上半に鈎手状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、胴下半被熱風化・剥離。内面被熱風化・剥離、胴下半煤状炭化物付着。	弥生中期
第78図 PL.107	3	弥生土器 筒形	2cm 口縁部～底部 4/5	口 底	10.1 4.8	高 18.1	E1	口縁部～胴部上半に方形状の入組文を施し、カナムグラ類の施文具回転による擬似縄文を充填施文。外面やや被熱風化、底面に木葉痕。内面横位磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第78図 PL.107	4	弥生土器 蓋	2cm 口縁部～頂部 3/4	口 底	(18.6)	高 6.6	D5	6単位の双頭状小突起を持つ波状の口縁。1箇所の波頂下に2個の焼成前穿孔を持つ。頂部に円文を、体部に4単位の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面赤色塗彩、内面横位磨き、やや風化。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第78図 PL.107	5	剥片石器 二次加工ある 剥片	底直 完形	長 幅	7.9 5.7	厚 重	1.2 53.6	黒色安山岩	下側辺は自然面であり円礫を利用する。表面の右側辺上方に二次加工が認められる。上側辺は折断面であるが、折断面を打面とする剥離痕が裏面に認められる。表面の左側辺と裏面の右側辺には、微細剥離痕が散在する。	
7区13号集石出土遺物										
第81図 PL.108	1	剥片石器 石鎌	2cm 4/5	長 幅	(14.8) 10.1	厚 重	2.6 492.0	変質安山岩	両側片の中央付近につぶれが認められ着柄痕の可能性はある。	
第81図 PL.108	2	剥片石器 打製石斧	2cm 完形	長 幅	15.3 9.0	厚 重	2.7 342.2	黒色頁岩	裏面に自然面を大きく残り円礫を利用する。先端部付近に摩滅が認められ使用痕の可能性はある。両側片の中央から上方にかけてつぶれが認められ着柄痕の可能性はある。	
第81図 PL.108	3	礫石器 石皿	埋土中 不明	長 幅	(14.2) (8.7)	厚 重	6.3 676.4	粗粒輝石安山岩	正面に浅い凹み状の磨面をもつ。底部には隅丸方形の脚部があり漏斗状の浅い凹みが多数認められる。	
7区21号集石出土遺物										
第81図 PL.108	1	剥片石器 石鎌	底直 4/5	長 幅	(20.8) 12.0	厚 重	2.7 776.7	細粒輝石安山岩	表裏面に大きく節理面を残し露頭採取の可能性はある。表面の先端付近に摩滅が認められ使用痕の可能性はある。その摩滅痕より新しい刃部方向からの剥離痕が認められ、刃部を中心とした再加工が想定される。	
4区30号溝状遺構出土遺物										
第83図 PL.108	1	弥生土器 壺	8cm 口縁部1/5	口 底	(26.2)	高		E2	上面に縦位の刻目を施す3段の複合口縁。内外面共に赤色塗彩するが、外面口縁部と内全面に風化剥離。	樽式
第83図 PL.108	2	弥生土器 壺	埋土中 口縁部片	口 底		高		B4	複合口縁上面や口縁部に櫛描波状文を施す。施文具9歯11mm。胎土内に微量の赤色顔料粒子を含む。内面横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	3	弥生土器 壺	埋土中 胴部～底部1/4	口 底	(6.7)	高		J2	外面縦位磨き、内面横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	4	弥生土器 甕	底直 口縁部～胴部 1/3	口 底	(13.8)	高		E2	幅狭な複合口縁。櫛描波状文を口唇外端に1帯、口縁部～頸部に3帯施す。施文具4歯10mm。内外面共に丁寧な横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	5	弥生土器 甕	9cm 口縁部片	口 底		高		E2	幅狭な複合口縁上面から頸部に櫛描波状文を5帯施す。施文具5歯7mm。内面横位磨き、一部に煤状炭化物付着。	樽式
第83図 PL.108	6	弥生土器 甕	32cm 口縁部1/5	口 底	(14.0)	高		E2	括れ部にやや乱雑な櫛描連簾文を施し、同波状文を口縁部に3帯、胴部上位に1帯施す。施文具4歯10mm。外面縦位刷毛目、煤状炭化物付着。内面横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	7	弥生土器 甕	2cm 口縁部～胴部上 位1/3	口 底	(15.0)	高		E2	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、同波状文を口縁部に2帯、胴部上位に1帯施す。施文具6歯12mm。外面横位磨き、一部に煤状炭化物付着。内面丁寧な横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	8	弥生土器 甕	底直 口縁部片	口 底		高		E2	口縁部に櫛描波状文、括れ部に同連簾文を施し、頸部に斜格子文を施す。施文具6歯9mm。内面丁寧な横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	9	弥生土器 甕	7cm 口縁部～胴部片	口 底		高		E2	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、同波状文を口縁部と胴部上位に各2帯施す。施文具9歯15mm。外面煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	10	弥生土器 甕	底直 口縁部片	口 底		高		E2	括れ部に櫛描連簾文を、胴部上位に同波状文を施す。施文具5歯7mm。内外面共にやや被熱風化、内面やや粗い横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	11	弥生土器 甕	5cm 底部完存	口 底	5.8	高		E2	外面横・縦位磨き。内面横位磨き、一部に煤状炭化物付着。	樽式?
第83図 PL.108	12	弥生土器 甕	22cm 底部完存	口 底	6.9	高		E2	外面縦位磨き、内面丁寧な横位磨き。	樽式?
第83図 PL.108	13	弥生土器 小型台付甕	底直 口縁部1/4	口 底	(12.0)	高		E2	口縁部～胴部上位に櫛描波状文を3帯施し、口唇下と胴部上位に円形貼付文を施す。施文具8歯12mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	14	弥生土器 台付甕	27cm 脚台部2/3	口 底		高		E2	脚部外面縦・横位磨き、一部に煤状炭化物付着。内面横位磨き。壊部内面横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	15	弥生土器 高坏	1cm 坏部2/3	口 底	(21.0)	高		E2	口縁部が強く屈曲・外反。内外面共に赤色塗彩、やや風化。	樽式
第83図 PL.108	16	弥生土器 高坏	埋土中 脚部3/4	口 底	12.6	高		E2	外面赤色塗彩、やや風化。内面横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	17	弥生土器 蓋	30cm 2/3	口 摘	8.0 1.4			E2	表面磨き、裏面刷毛目。	樽式
第83図 PL.108	18	弥生土器 蓋	10cm 摘み部完存	口 底		高		E2	甕蓋。摘み部外面縦位磨き、内面横位磨き。蓋身外面縦位磨き、内面横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	19	弥生土器 片口鉢	14cm 口縁部～底部 1/2	口 底	(9.6) (6.6)	高	7.0	D2	外面比熱剥離、内面やや粗い横位磨き。	樽式
第83図 PL.108	20	礫石器 磨石	15cm 完形	長 幅	9.0 4.8	厚 重	3.9 247.8	粗粒輝石安山岩	小形の円礫を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第83図 PL.108	21	礫石器 石皿	20cm 1/2	長 幅	26.4 (15.0)	厚 重	7.3 3869.9	石英閃緑岩	正面の中央付近にほぼ平坦な磨面が認められ石皿と判断した。	
1区2号土器集中出土遺物										
第84図 PL.109	1	弥生土器 壺	埋土中 頸部～胴上半 3/4	口 底		高		B3	括れ部に2連止櫛描連簾文を施し、肩部にやや乱雑な櫛描波状文を9帯とボタン状貼付文を5単位に施す。施文具8歯20mm。外面横位磨き、内面横位磨き。	樽式
4区1号土器集中出土遺物										
第84図 PL.109	1	弥生土器 筒形	埋土中 頸部～胴上半 完存	口 底		高		D7	頸部～胴部上半にかけて横位や鋸歯状沈線による横帯文を多段に施し、R縄文を充填施す。内面横位磨き。	弥生中期
第84図 PL.109	2	弥生土器 高坏	埋土中 坏部3/4	口 底	22.9	高		J2	口唇外端に刻み目を施す。内外面共に赤色塗彩。	樽式

9区3号土器集中出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第84図 PL.109	1	弥生土器 壺	埋土中 口縁部～頸部完 存	口 底	24.2	高		I1	括れ部に2連止櫛描連簾文と同波状文を施す。施文具10歯 14mm。外面斜位刷毛目・口縁部横撫で、内面赤色塗彩。灰白色。	樽式
第84図 PL.109	2	弥生土器 壺	埋土中 肩部～胴部上位 1/3	口 底		高		I1	外面横位刷毛目後、頸部縦位・胴部横位塗磨き。内面横・ 斜位刷毛目。灰白色。	樽式

1区遺構外出土土器

第89図 PL.109	1	弥生土器 短頸壺	遺構外 口縁部片	口 底		高		G2	口唇部上面にLR縄文を横位施文。胴部にRL縄文を横位施文し、 横線文や羽状文を施す。内面一部に赤色塗彩残る。	弥生中期
第89図 PL.109	2	弥生土器 甗	遺構外 口縁部片	口 底		高		D2	口唇部上面にLR縄文を横位施文し、指頭押圧状の刻目を施す。 口縁部に櫛描羽状文を施す。内面横位刷毛目後、横位 塗磨き。	弥生中期
第89図 PL.109	3	弥生土器 甗	遺構外 口縁部片	口 底		高		G1	口縁部に弧線文または鋸歯文を施し、下位にLR縄文を充填 的に横位施文。内面斜位塗磨き。	弥生中期
第89図 PL.109	4	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口 底		高		E1	隆帯を貼付して横線文や刻目を施す。内外面共にやや被熱 風化、一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第89図 PL.109	5	弥生土器 甗	遺構外 口縁部片	口 底		高		D3	口唇部上面にLR縄文を横位施文し、口縁部に櫛描羽状文を 施す。外面やや被熱風化、内面横位塗磨き。	弥生中期
第89図 PL.109	6	弥生土器 甗	遺構外 胴部片	口 底		高		B1	3本単位沈線で横線文や鋸歯文を施す。外面煤状炭化物付着、 内面被熱風化。	弥生中期
第89図 PL.109	7	弥生土器 小型台付甗	遺構外 口縁2/3	口 底	(10.5)	高		D2	口縁部～胴部上位にやや乱雑な櫛描波状文を4帯施す。施 文具6歯10mm。外面やや被熱風化・一部に煤状炭化物付着、 内面横位塗磨き。	樽式
第89図 PL.109	8	弥生土器 甗	遺構外 胴部片	口 底		高		E1	板小口の斜行文と草木の果穂圧痕文を施す。内面横・斜位 塗磨き。	栗林式
第89図 PL.109	9	弥生土器 甗	遺構外 胴部片	口 底		高		E1	板小口の羽状文と刺突文を施す。外面一部に煤状炭化物付 着、内面横位塗磨き。	栗林式
第89図 PL.109	10	弥生土器 甗	遺構外 胴部下位～底部 完存	口 底	5.6	高		E1	板小口の斜行文と刺突文を施す。外面一部に煤状炭化物付 着、内面横位刷毛目。	栗林式
第89図 PL.110	11	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/4	口 底	(36.0)	高		E4	5段の複合口縁で、篋状具の刻目を施す。内外面共に横位塗 磨き。	樽式
第89図 PL.110	12	弥生土器 壺	遺構外 肩部1/5	口 底		高		E1	矢羽状文を複数帯施し、下位に沈線充填の鋸歯文を施文。 内外面共に風化。	樽式
第89図 PL.110	13	弥生土器 壺	遺構外 口縁～頸部2/3	口 底	(14.5)	高		D2	外面側に折返す複合口縁で篋状具の刻目を施す。括れ部に 3連止櫛描連簾文を施し、下位に同波状文を複数帯に施文。 施文具8歯16mm。外面頸部縦・横位刷毛目後、やや粗い横 位塗磨き。内面口縁部横位塗磨き、胴部横位撫で。	樽式
第89図 PL.110	14	弥生土器 壺	遺構外 胴部中位～底部 1/2	口 底	7.7	高		I1	外面赤色塗彩、内面横位塗撫で・やや風化。	樽式
第89図 PL.110	15	弥生土器 甗	遺構外 口縁部～胴部上 位1/2、胴部下 位～底部ほぼ完 存	口 底	(28.5) 7.9	高	(36.0)	E6	外底面に木葉痕。外面口縁部～胴部上位横位・胴部下位～ 底部縦位塗磨き、内面横位塗磨き。内外面共にやや被熱風 化、外面一部・内面底部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第89図 PL.110	16	弥生土器 甗	遺構外 胴部中位～底部 1/2	口 底	8.5	高		G1	外面胴部2箇所に糊圧痕あり。外面縦位塗磨き・一部に煤状 炭化物付着、内面横位塗撫で後・粗い斜位塗磨き。	樽式
第89図 PL.110	17	弥生土器 甗	遺構外 口縁部～胴部上 半1/2	口 底	(22.0)	高		F2	外面側に折返す複合口縁。口縁部～胴部上位に櫛描波状文 を11帯施す。施文具9歯16mm。外面やや被熱風化、内面横 位塗磨き・一部に煤状炭化物付着。	樽式
第89図 PL.110	18	弥生土器 台付甗	遺構外 脚台部完存	口 底	7.8	高		I2	外面縦位塗磨き、内面横位塗撫で。	樽式
第89図 PL.110	19	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部～底部 1/4	口 底	(15.0) (6.0)	高		D2	口縁部に段を構成。内外面共に赤色塗彩、風化・剥離。	樽式
第89図 PL.110	20	弥生土器 台付甗	遺構外 口縁部片	口 底		高		D2	口縁部～胴部上位に櫛描波状文を7帯施し、口唇部下に円 形貼付文を施文。施文具7歯11mm。内面丁寧な横位塗磨き。	樽式
第89図 PL.110	21	弥生土器 甗	遺構外 口縁部1/3	口 底	(19.0)	高		E1	括れ部に3連止櫛描連簾文を施し、同波状文を口縁部に2帯、 胴部に複数帯施文。施文具12歯17mm。内面丁寧な横位塗磨 き。	樽式

2区遺構外出土土器

第90図 PL.110	22	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口 底		高		G1	横位の沈線文や波状文を施し、LR縄文を充填施文。内面横 位塗撫で。	弥生中期
第90図 PL.110	23	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口 底		高		F2	横線文や波状文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位塗磨 き。	弥生中期
第90図 PL.110	24	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口 底		高		I1	頸部～肩部にLR縄文を横位施文し、2本単位沈線の横線文 や短沈線充填の円文を施す。内面横位塗撫で。	弥生中期
第90図 PL.110	25	弥生土器 小型壺	遺構外 胴部片	口 底		高		D7	円形竹管の単沈線でコ字重ね文を施す。間隙部に瘤状の円 形小突起を貼付し、同工具の刺突文を充填的に施文。外面 一部に煤状炭化物付着、内面横位塗撫で。	弥生中期
第90図 PL.110	26	弥生土器 小型壺	遺構外 底部完存	口 底	5.6	高		K2	瘤状の縦位貼付文を5単位に施し、LR縄文を横位施文後に羽 状沈線文を施す。外底面に木葉痕。内面横位塗撫で。	弥生中期
第90図 PL.110	27	弥生土器 小型壺	遺構外 口縁部片	口 底		高		E6	円形竹管の横線文や刺突文を施し、LR縄文を充填的に横位 施文。内外面共にやや被熱風化。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第90図 PL.110	28	弥生土器 小型壺	遺構外 頸部片	口底	高	K2	刻み目隆帯を縦位に貼付し、斜行沈線文や刺突文を施す。内外面共に風化。	弥生中期
第90図 PL.110	29	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.110	30	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底	高	D2	縦長方形状の沈線文を充填的に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.110	31	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底	高	I1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.110	32	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	J2	口縁部にLR縄文を横位施文し、単沈線の波状文や横線文を施す。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第90図 PL.111	33	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D1	口唇部に沿って沈線文を施し、LR縄文を充填施文。内面口縁部にも同縄文を横位施文。外面口縁部の一部に赤色塗彩残存。内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.111	34	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口唇部上面にLR縄文を横位施文。棒状具の斜位沈線文や刺突文を施す。内面やや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第90図 PL.111	35	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	F3	櫛状具の波状文を複数帯施す。内面横位磨き後、やや粗い横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.111	36	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	口縁部に僅かな段を構成し、LR縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.111	37	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	口唇部上面に押圧状の刻目を施す。櫛状具の斜線文を施文。内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.111	38	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口唇部上面にLR縄文を横位施文し、以下に櫛状具の条痕文を斜位施文。内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.111	39	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	口唇部上面にLR縄文を横位施文し、以下に櫛状具の条痕文を斜位施文。内面横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.111	40	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	口唇部上面に篋状具の刻目を施す。内外面共に斜位刷毛目後・横位磨き。	弥生中期
第90図 PL.111	41	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	カナムグラの疑似縄文を口唇部上面や口縁部に縦位施文。外面口縁部に煤状炭化物付着、内面横位磨き・やや被熱風化。	弥生中期
第90図 PL.111	42	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I1	外側へ折返す複合口縁。口縁部～頸部に櫛描波状文を複数帯施す。施文具8歯13mm。内面丁寧な横位磨き。	樽式
第90図 PL.111	43	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	外側へ折返す複合口縁。口縁部～頸部に大柄な櫛描波状文を複数帯施す。施文具4歯9mm。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式
第90図 PL.111	44	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	B1	括れ部に櫛描連簾文を、口縁部～肩部に同波状文を3帯施す。施文具6歯11mm。内面横位磨き。	樽式
第90図 PL.111	45	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I2	外側へ折返す複合口縁。口縁部～頸部に櫛描波状文を複数帯施す。施文具8歯12mm。内面横位磨き。	樽式
第90図 PL.111	46	弥生土器 甕	遺構外 胴部下位～底部 1/4	口底	高	E2	外面縦位磨き・一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	樽式
第90図 PL.111	47	弥生土器 小型台付甕	遺構外 口縁部～胴部中 位1/4	口底	(14.0) 高	D3	口縁部～頸部に櫛描波状文を3帯施す。施文具7歯9mm。外面胴部横位磨き・一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式
第90図 PL.111	48	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部中 位1/4	口底	(22.0) 高	F3	括れ部に篋状具の刻み状刺突文を施す。外面横位磨きで後・やや粗い横位磨き、煤状炭化物多量に付着。内面横位磨きで後・やや粗い横位磨き、指頭状の押さえ痕残る。	天王山式系

3区遺構外出土器

第91図 PL.111	49	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	F1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。口唇部下に外面→内面への径3mmの焼成前穿孔。内面横位磨き。	弥生中期
第91図 PL.111	50	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	E2	波状文を施し、LR縄文を充填的に施文。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	弥生中期
第91図 PL.111	51	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	外面側に折返す複合口縁。口縁部～頸部に櫛描波状文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式
第91図 PL.111	52	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	F2	頸部に櫛描波状文を、括れ部～肩部に櫛描T字文を施す。施文具10歯14mm。外面縦位刷毛目、内面横位刷毛目後・やや粗い横位磨き。灰白色。	樽式
第91図 PL.111	53	弥生土器 壺	遺構外 底部完存	口底	7.1 高	E1	外面縦位刷毛目、内面横位磨き。	樽式

4区遺構外出土器

第92図 PL.111	54	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	肩部に沈線の重四角文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	55	弥生土器 小型壺	遺構外 口縁部～底部下 半2/3	口底	高	J2	胴部に刺突文を充填したコ字重ね文を4単位に施す。内面横位磨き、内外面共にやや風化。	弥生中期
第92図 PL.111	56	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	方形状の入組文や鋸歯文を多段に施し、LR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	57	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D7	2本単位の沈線鋸歯文を横位に施し、その上下にLR縄文を充填的に施文。内面被熱風化。	弥生中期
第92図 PL.111	58	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D7	複合口縁。鋸歯状の横位沈線文を施し、LR縄文を充填的に施文。内面横位磨き、やや風化。59と同一個体。	弥生中期
第92図 PL.111	59	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D7	複合口縁。鋸歯状の横位沈線文を施し、LR縄文を充填的に施文。内面横位磨き、やや風化。58と同一個体。	弥生中期
第92図 PL.111	60	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	J2	沈線の横帯文を多段に施し、LR縄文を充填施文。内面風化。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第92図 PL.111	61	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底		高	E1	曲線的な沈線入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き・やや被熱風化。	弥生中期
第92図 PL.111	62	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇外端に刻み目を施す。櫛歯状工具の条痕文を重三角文的に施す。内面やや被熱風化。	弥生中期
第92図 PL.111	63	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇上面にLR縄文を横位施文。口縁部に櫛歯状工具の条痕文を斜位に施す。内面横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	64	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	多截竹管の櫛歯状工具により条痕文を縦位に施す。内面横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	65	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	櫛歯状工具の条痕文を羽状に施す。内面煤状炭化物付着、横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	66	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	F1	口唇上面にRL縄文を横位施文。口縁部外→内側への焼成前穿孔がある。外面は擦痕状の磨き、内面横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	67	弥生土器 甕	遺構外 底部1/5	口底	(6.7)	高	H1	底面に網代痕。内外面共にやや被熱風化。	弥生中期
第92図 PL.111	68	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底	(5.0)	高	H1	内外面共に撫で状の横位磨き。	弥生中期？
第92図 PL.111	69	弥生土器 蓋	遺構外 天井部片	口底		高	J2	同心円状の円文やコ字重ね文を施し、LR縄文や刺突文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	70	弥生土器 蓋	遺構外 胴部片	口底		高	H1	曲線的な沈線入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第92図 PL.111	71	弥生土器 蓋	遺構外 体部片	口底		高	F1	体部上位に細沈線の円文を施す。内面は磨き状に細沈線文をやや乱雑に施す。	弥生中期
第92図 PL.112	72	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	D7	ヒトデ状の曲線的な入組文を施し、カナムグラの擬似縄文を充填施文。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第92図 PL.112	73	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底		高	F1	外面斜位刷毛目。肩部に矢羽根状文や鋸歯文を施し、区画内に細い円形竹管工具の刺突文を充填施文。内面横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	74	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底		高	E2	刺突文を充填した鋸歯文を施文。外面縦位刷毛目後、やや粗い縦位磨き。内面横位刷毛目。	樽式
第92図 PL.112	75	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底		高	F1	刷毛目を外面斜位に、内面横位に施す。肩部に櫛描波状文や鋸歯文、ボタン状貼付文を施し、区画内に細い円形竹管工具の刺突文を施文。内面一部に被熱剥離。	樽式
第92図 PL.112	76	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底		高	F1	刺突文を充填した鋸歯文を施文し、ボタン状貼付文を施す。外面縦位刷毛目後、やや粗い縦位磨き。内面横位刷毛目。	樽式
第92図 PL.112	77	弥生土器 甕	遺構外 口縁部1/4	口底	(18.8)	高	H1	複合口縁。口縁部～頸部に櫛描波状文を4帯施文し、括れ部に同工具の簾状文を施文。施文具8歯13mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	78	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部上位1/4	口底	(12.5)	高	F1	口縁部～頸部に櫛描波状文を3帯施文し、括れ部に同工具の簾状文を施文。以下に波状文を2帯以上施す。施文具9歯10mm。内面横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	79	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口縁部と括れ部に櫛描波状文を各1帯施す。施文具8歯14mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	80	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	複合口縁上面と口縁部に櫛描波状文を施す。施文具8歯14mm。内面丁寧な横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	81	弥生土器 甕	遺構外 頸部片	口底		高	F1	括れ部に2連止櫛描連簾文を、以下に波状文を3帯施す。施文具11歯11mm。内面横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	82	弥生土器 甕	遺構外 底部片	口底		高	H1	括れ部に3連止め櫛描連簾文を施し、口縁部と胴部上位に波状文を2～3帯施文。施文具9歯14mm。内面丁寧な横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	83	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	括れ部に櫛描連簾文を、以下に波状文を施す。施文具11歯13mm。外面に糊圧痕、内面横位磨き。	樽式
第92図 PL.112	84	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底	(9.2)	高	H1	内外面共に横位磨き。底外面に糊圧痕あり。	樽式？
第92図 PL.112	85	弥生土器 甕	遺構外 底部完存	口底	7.3	高	E2	外面横・斜位、内面横位の丁寧な磨き。外面一部に煤状炭化物付着。	樽式？
第92図 PL.112	86	弥生土器 甕	遺構外 胴下半～底部2/3	口底	6.1	高	H1	外面縦・斜位磨き、やや被熱風化。内面横位磨き後、縦位磨き。	樽式
第93図 PL.112	87	弥生土器 台付甕	遺構外 口縁部1/5	口底	(17.9)	高	J2	複合口縁。口縁部と括れ部下位にボタン状貼付文を施し、口縁部～括れ部に櫛描波状文を3帯施文。施文具9歯12mm。内面横位磨き。	樽式
第93図 PL.112	88	弥生土器 小型台付甕	遺構外 口縁部～胴部上半1/4	口底	(12.0)	高	H1	口縁部～肩部にかけて櫛描波状文を3帯施す。施文具6歯9mm。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	樽式
第93図 PL.112	89	弥生土器 小型台付甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口縁部～括れ部に櫛描波状文を3帯施す。施文具7歯10mm。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式
第93図 PL.112	90	弥生土器 蓋	遺構外 摘完存	摘径底	4.1	高	J2	摘み部上面磨き。摘み部側面縦位磨き。	樽式？
第93図 PL.112	91	弥生土器 高坏	遺構外 口縁部1/5	口底	(16.2)	高	J2	内外面共に赤色塗彩。内外面共にやや風化。	樽式
第93図 PL.112	92	弥生土器 高坏	遺構外 脚部1/4	口底	(16.4)	高	J2	外面の全てと内面裾端部に赤色塗彩。	樽式
第93図 PL.112	93	弥生土器 高坏	遺構外 脚部3/4	口底	(7.8)	高	J2	外面縦位磨き、内面横位撫で。	樽式

5区遺構外出土器

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高			
第94図 PL.112	94	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	LR縄文を横位多段に施し、口唇上面と括れ部に指頭状の連続圧痕文を施文。	弥生中期
第94図 PL.112	95	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	F1	方形文を多段に施し、LR縄文を充填施文。内外面共に横位磨き。	弥生中期
第94図 PL.112	96	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	櫛歯状工具の縦位羽状沈線文を施す。内面横位磨き。	弥生中期
第94図 PL.112	97	弥生土器 甕	遺構外 底部完存	口底	5.6	E1	櫛歯状工具の条痕文を斜位に施文。外底面に木葉痕。内面被熱風化。	弥生中期
第94図 PL.112	98	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	J2	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施す。外面縦位、内面横位の磨き。	樽式

7区遺構外出土器

第95図 PL.112	99	弥生土器 壺	遺構外 口縁部～頸部完 存	口底	高	E1	細口長頸壺。口頸部に刻目充填の横帯文や重弧文を多段に施す。	弥生中期
第95図 PL.112	100	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	F1	細口長頸壺。口唇下にLR縄文を横位施文し、下位に刺突充填の縦位方形文を施す。内面横位磨で、指頭状の凹凸を残す。	弥生中期
第95図 PL.112	101	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	F1	LR縄文を口唇上面から口縁部に横位施文し、幅広沈線の円文や曲線文を施す。横位磨き。	弥生中期
第95図 PL.112	102	弥生土器 壺	遺構外 口縁部～頸部 1/2	口底	8.5	E2	細口長頸壺。LR縄文を横位・多段に施文し、4単位の縦位短沈線文や横帯文を施す。内外面共にやや風化、内面横位磨で。	弥生中期
第95図 PL.112	103	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/4	口底	(8.6)	K2	横線文や波状文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨で。	弥生中期
第95図 PL.112	104	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	上下交互の三角文を施し、LR縄文や短沈線文を充填施文。内面横位指磨で。	弥生中期
第95図 PL.112	105	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/3	口底	(9.2)	J1	LR縄文を横位・多段に施文し、対弧状の連弧文を施す。内面やや粗い横位磨き。106と同一個体か。	弥生中期
第95図 PL.112	106	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	J1	LR縄文を横位・多段に施文し、三角文・横線文・連弧文等を施す。内面横・斜位の磨き。105と同一個体か。	弥生中期
第95図 PL.112	107	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	C2	横位短沈線を充填した円文や曲線の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第95図 PL.112	108	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	口縁部内面から口唇上面・口縁部にかけてLR縄文を横位施文し、2本組幅広沈線を縦位に施す。内外面共に赤色塗彩。	弥生中期
第95図 PL.112	109	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	やや幅広の複合口縁や口縁部にLR縄文を横位施文し、沈線波状文を施す。内面横位磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第95図 PL.112	110	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	波状文を施し、横位のLR縄文を充填的に施す。内面横位磨で。	弥生中期
第95図 PL.113	111	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	複合口縁に縦位の短沈線文を、下位に横線文を施す。内外面共に燻べ焼き状の黒色を帯びる。	弥生中期
第95図 PL.113	112	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口縁部に櫛状工具の斜線文を施し、横線文を施文。内面横位磨で。	弥生中期
第95図 PL.113	113	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/6	口底	(21.5)	D7	内面に段を作出した受け口状の口縁。口唇下に瘤状の小突起を付す。櫛状工具の弧線文を施し、内面口縁部には刺突文やLR縄文充填の波状文を施文。内面被熱風化・剥離。	弥生中期
第95図 PL.113	114	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口唇上面にLR縄文を施文。口縁部に棒状短隆帯を推定4単位貼付し、両側裾部にLR縄文を施文。また刺突充填の方形文や舌状文、横帯文などを施す。内面風化。	弥生中期
第95図 PL.113	115	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	K2	内面口縁部と口唇上面から頸部にかけてLR縄文を横位多段に施文し、2本組の幅広沈線を縦位に施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨で。	弥生中期
第95図 PL.113	116	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	内面に折り返した複合口縁。口唇上面にLR縄文を横位施文し、波状文を施す。口縁部に列点状の刺突文。内外面共に刷毛目状の横位磨で。	弥生中期
第95図 PL.113	117	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	I1	括れ部から胴部にかけて櫛描の横線文や垂下文を施し、口縁部にLR縄文を充填的に施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨で。	弥生中期
第95図 PL.113	118	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	J2	LR縄文を横位多段に施文し、括れ部に横帯文を施す。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第96図 PL.113	119	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	LR縄文を横位施文し、櫛状具の横線文を施文して有段状の口縁部を作出。頸部から胴部にかけて櫛描の垂下文や縦位羽状文を施す。内外面共にやや被熱風化。	弥生中期
第96図 PL.113	120	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/5	口底	(13.0)	E1	櫛状具の条痕文を横位施文。内外面共に燻べ焼き状で黒色を帯びる。内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	121	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口唇上面にLR縄文を横位施文。櫛歯状工具の条痕文を横位に施す。内面磨で横位の磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	122	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	櫛状具の条痕文を横位に施し、部分的に縦位施文。内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	123	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	D5	口唇部外端に押圧状の刻目を施し、以下に櫛描羽状文を縦位施文。内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	124	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/4	口底	(14.0)	G1	口唇部上面に指頭圧痕状の刻目を施す。外面斜位磨で、内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	125	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/4	口底	(11.0)	B5	やや粗大なLR縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや風化、内面横位磨で。	弥生中期
第96図 PL.113	126	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	G2	LR縄文を横位多段に施文。内面横位磨き。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第96図 PL.113	127	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口唇上面と口縁部以下にLR縄文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面撫で状の横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	128	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口唇上面及び口縁部にLR縄文を横位多段に施文。内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	129	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	LR縄文横位・多段に施文。内外面共にやや風化、内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	130	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	幅狭な複合口縁外端や口縁部にR縄文を横位施文。内面横位磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第96図 PL.113	131	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	複合口縁。無文。内外面共に炭素吸着、内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.113	132	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	外面縦位磨き、内面横位撫で。灰白色。	弥生中期
第96図 PL.113	133	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	B5	括れ部に幅広沈線の横線を、下に三角文や円形貼付文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位撫で。	弥生中期
第96図 PL.113	134	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	J2	頂部に縦位短線を付加した三角文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面横位指撫で後・やや粗い横位磨き、指押さえ状の凹凸を残す。	弥生中期
第96図 PL.113	135	弥生土器 壺	遺構外 肩部～胴部1/2	口底	高	F2	横位刺突文・波状文・波状文を付加した方形文等を施し、LR縄文を充填的に施す。内面被熱風化。	栗林式系
第96図 PL.113	136	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	D5	LR縄文を横位施文。円文を中心に沈線をX字状に施し、下に横帯文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位撫で・やや被熱風化。	弥生中期
第96図 PL.113	137	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	G2	沈線の横線文や対向波状文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面指頭状の圧痕を残した横位磨きで一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第96図 PL.113	138	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	波状文や横線文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位撫で。	弥生中期
第96図 PL.113	139	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	交互の重三角文を施し、LR縄文や刺突文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位撫で。	弥生中期
第96図 PL.114	140	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	G1	波状文を施し、細密なLR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位刷毛目・一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第96図 PL.114	141	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	K1	LR縄文を横位施文し、重四角文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.114	142	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	横帯文や波状文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面横位撫で。	弥生中期
第96図 PL.114	143	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	LR縄文を横位多段に施文し、横帯文や縦・横位の方形文を施す。内面横位撫で、幅15～20mmの輪積痕を残す。	弥生中期
第96図 PL.114	144	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E1	方形状の入組文や波状文・横線文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面撫で状の粗い横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.114	145	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	D7	方形文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面やや粗い横位磨き。	弥生中期
第96図 PL.114	146	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E2	横帯文を施し、LR縄文を充填的に施す。下に櫛状工具の条痕文を斜位に施文。内面横位撫で、指頭状の凹凸を残す。	弥生中期
第96図 PL.114	147	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	E1	横帯文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや粗い横位撫で。	弥生中期
第96図 PL.114	148	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	幅広沈線の横帯文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面縦位撫で後、やや粗い縦位磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	149	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	E1	LR縄文を横位施文し、刺突充填の重三角文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位指撫で。	弥生中期
第97図 PL.114	150	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	G1	刺突充填の円文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面横位磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	151	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	C2	入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや粗い横位磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	152	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	横帯文を施し、LR縄文を充填施文。内面撫で状のやや粗い横位磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	153	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	E1	LR縄文を横位施文し、円文や三角文を施す。内面撫で状の縦位磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	154	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	B5	横帯文を施し、LR縄文を充填施文した後に刻目を持つ棒状の貼付文を縦位に施す。内面風化・剥離。	弥生中期
第97図 PL.114	155	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	D7	波状文や方形文、瘤状貼付文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面横位磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	156	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E1	連弧文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位刷毛目。	弥生中期
第97図 PL.114	157	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	C2	方形状の入組文や刺突文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位指撫で。	弥生中期
第97図 PL.114	158	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	D7	刺突充填の円文や横線文を施し、LR縄文を充填的に施文。外面赤色塗彩、内面縦位撫で。	弥生中期
第97図 PL.114	159	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面赤色塗彩、内面横位磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	160	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	F1	円文を中心にX字状に沈線を施し、LR縄文を充填施文。内面横位撫で。	弥生中期
第97図 PL.114	161	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E1	同心円文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き、やや風化。	弥生中期
第97図 PL.114	162	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	K1	横線文や縦位の沈線文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に燻べ焼き状で黒色を帯びる。内面やや粗い横位磨き。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第97図 PL.114	163	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	C2	方形文や瘤状貼付文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面横位篋磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	164	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	C2	方形状の入組文を施し、やや細密なLR縄文を充填施文。内面横位篋磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	165	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	G1	横帯文を施し、LR縄文を充填的に施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋撫で。	弥生中期
第97図 PL.114	166	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	方形文を施し、LR縄文を充填施文。内面被熱風化。	弥生中期
第97図 PL.114	167	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	G1	幅広隆帯を横位貼付し、横位のLR縄文や三角文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	168	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	J1	同上半部に舌状文を施し、LR縄文を充填施文。胴下半部は櫛状工具の条痕文を横位施文。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化・剥離。	弥生中期
第97図 PL.114	169	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	F1	沈線の横帯文や刺突充填の三角文を施す。内面横位などで、指頭圧痕状の凹凸を残す。	弥生中期
第97図 PL.114	170	弥生土器 壺	遺構外 頸部～肩部片	口底	高	G1	沈線の横帯文間や方形状の区画内に縦位羽状文を施し、LR縄文を充填施文。内面一部に被熱風化・剥離。	弥生中期
第97図 PL.114	171	弥生土器 壺	遺構外 頸～肩部片	口底	高	E2	櫛状工具の条痕文を頸部は横位に、肩部は縦位に施文。横帯文や方形文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋磨き、やや風化。灰白色。	弥生中期
第97図 PL.114	172	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E2	括れ部に横帯文を施し、下位に刺突充填の三角文または鋸歯文を施す。櫛状工具の斜位条痕文を施文。内面やや粗い横位篋撫で。	弥生中期
第97図 PL.114	173	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E1	櫛描沈線を方形状に施し、LR縄文を充填的に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	174	弥生土器 壺	遺構外 頸部～胴部片	口底	高	E1	櫛状工具の横位条線文を施し、胴部に櫛描波状文を複数段に施文。内面横位篋磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	175	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	G2	やや大柄な櫛描波状文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面撫で状の横位篋磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	176	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E4	櫛描波状文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋磨き。	弥生中期
第97図 PL.114	177	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E1	櫛描波状文を複数段に施す。内面風化。	弥生中期
第97図 PL.114	178	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	E1	多截竹管の波状文や横線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	弥生中期
第97図 PL.115	179	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	E2	櫛描の波状文や横線文を施す。内面横位撫で。	弥生中期
第97図 PL.115	180	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	J1	多段の櫛描横線文や刺突充填の三角文を施す。内面縦位篋撫で。	弥生中期
第98図 PL.115	181	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	E1	櫛描の縦・横線文や縦位羽状文および円形竹管文を施す。内面やや粗い縦位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	182	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	D7	縦位の櫛描羽状文を施す。内面横位篋撫で。灰白色。	弥生中期
第98図 PL.115	183	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	E2	単沈線の横線文や鉤手文を施す。内面横位篋撫で。	弥生中期
第98図 PL.115	184	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	F1	単沈線の横帯文を施す。外面横位篋磨き、内面風化。	弥生中期
第98図 PL.115	185	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	D2	棒状工具の横位列点文を多段に施す。内外面共に煤状炭化物付着、被熱風化。	弥生中期
第98図 PL.115	186	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	同心円文を施す。外面横位刷毛目、内面横位刷毛目後、やや粗い横位篋磨き。灰白色。	弥生中期
第98図 PL.115	187	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	J2	重弧状の連弧文を施す。外面斜位刷毛目、内面風化。灰白色。	弥生中期
第98図 PL.115	188	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	G1	同心円文を施し、区画外の刷毛目を磨き消す。内面風化。灰白色。	弥生中期
第98図 PL.115	189	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底	高	D2	大柄な櫛描波状文や弧線文を施す。内面やや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	190	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	E2	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施す。外面縦位刷毛目、内面縦位篋磨き・風化剥離。灰白色。	樽式
第98図 PL.115	191	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底	高	F1	括れ部に横線文を施す。外面斜位刷毛目、内面横位刷毛目。	弥生中期
第98図 PL.115	192	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	I2	器厚4mm。LR縄文を横位・多段に施文。内外面共に燻べ焼き状の黒色を帯びる。内面横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	193	弥生土器 壺	遺構外 頸部片	口底	高	K1	LR縄文を横位施文。内面風化。	弥生中期
第98図 PL.115	194	弥生土器 壺	遺構外 底部1/6	口底	(6.5) 高	E1	横帯文を施し、LR縄文を充填的に施す。内面やや被熱風化。	弥生中期
第98図 PL.115	195	弥生土器 壺	遺構外 底部完存	口底	5.4 高	K2	外底面に織布痕。外面縦位篋磨き、内面横位篋撫で。	弥生中期
第98図 PL.115	196	弥生土器 壺	遺構外 底部1/4	口底	(7.7) 高	G1	櫛状工具の条痕文を斜位に施文。外底面に織布痕。内面横位撫で。	弥生中期
第98図 PL.115	197	弥生土器 壺	遺構外 底部1/2	口底	4.9 高	E1	底外面に網代痕。内面横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	198	弥生土器 壺	遺構外 底部1/4	口底	(7.0) 高	E1	底外面に木葉痕。外面横位篋撫で、内面横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	199	弥生土器 壺	遺構外 底部1/4	口底	5.9 高	K1	底外面に網代痕。内面被熱風化。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第98図 PL.115	200	弥生土器 壺	遺構外 底部完存	口底	5.0	高	D2	外面縦位篋磨き・一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	201	弥生土器 壺	遺構外 底部1/3	口底	(9.8)	高	F2	外面縦位、内面横位の刷毛目。内外面共にやや風化。灰白色。	弥生中期
第98図 PL.115	202	弥生土器 壺	遺構外 底部2/3	口底	6.7	高	F1	外面縦位篋撫で、内面横位刷毛目。	弥生中期
第98図 PL.115	203	弥生土器 壺	遺構外 突起部完存	口底		高	E1	耳状の小突起。両側縁及び稜部に刺突文を施し、直径3mmの焼成前穿孔が側縁部を貫通。	弥生中期
第98図 PL.115	204	弥生土器 広口壺	遺構外 口縁部～胴部下 位1/2	口底	18.0	高	E1	内外面共に丁寧な横位篋磨き後に赤色塗彩。内面口縁部は風化・剥離が著しい。	弥生後期？
第98図 PL.115	205	弥生土器 短頸壺	遺構外 頸部～胴部上半 1/4	口底		高	J2	内外面共に赤色塗彩し、やや被熱風化。	樽式
第98図 PL.115	206	弥生土器 小型台付甗	遺構外 口縁部1/4	口底	(9.0)	高	E1	内外面共に横位篋磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	樽式
第98図 PL.115	207	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	F1	方形状の入組文を施し、RL縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面撫で状の横位篋磨き・やや被熱風化。	弥生中期
第98図 PL.115	208	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	横線文・波状文や鈎手状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	209	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	210	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	F1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第98図 PL.115	211	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面一部に煤状炭化物付着、被熱風化。	弥生中期
第98図 PL.115	212	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文するが、口唇下のみ異なる原体を使用内外面共に燻べ焼き状で黒色を帯びる。内面風化。	弥生中期
第99図 PL.115	213	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位篋撫で。	弥生中期
第99図 PL.116	214	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	D5	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	215	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	I1	沈線の横線文や方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位篋磨き・やや被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	216	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	C6	横帯文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋撫で。	弥生中期
第99図 PL.116	217	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	F2	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	218	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	219	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	F1	方形状の入組文を施し、RL縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	220	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	221	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、やや細密なLR縄文を充填施文。内面横位篋磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	222	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に燻べ焼き状の黒色を帯びる。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	223	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、やや細密なRL縄文を充填施文。内外面共に一部に煤状炭化物付着・やや被熱風化、内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	224	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	D7	口唇外端に波状文を、以下に方形状の入組文を施す。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	225	弥生土器 筒形	遺構外 口縁部片	口底		高	F1	櫛描横線文を施す。内外面共に横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	226	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	G1	LR縄文を横位施文し、幅広沈線のフラスコ文を施す。内面被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	227	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、細密なRL縄文を充填施文。内面横位篋撫で後、やや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	228	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	C6	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面丁寧な横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	229	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	F2	縦位の方形文や入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	230	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E4	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	231	弥生土器 筒形	遺構外 底部片	口底		高	E1	縦位の方形文や蛇行文を施し、LR縄文を充填施文。内面撫で状の横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	232	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	鈎手状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	233	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、やや細密なRL縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	234	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	235	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	曲線的な入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋磨き。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第99図 PL.116	236	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	237	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨きで後、やや粗い縦位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	238	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	K1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨きで後、やや粗い横・斜位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	239	弥生土器 筒形	遺構外 肩部片	口底		高	E1	方形状の入組文を施し、やや細密なLR縄文を充填施文。内面斜位磨きで後、粗い縦位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	240	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	K1	鈎手状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨きで後、やや粗い横・斜位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	241	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E2	縦位方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	242	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	縦位の波状文を施し、LR縄文を縦位を主体に充填的に施す。外面煤状炭化物付着、内面斜位磨きで後、やや粗い横位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	243	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E2	方形状の入組文を施す。内面被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	244	弥生土器 筒形	遺構外 胴部片	口底		高	E1	重三角文を施す。内面やや被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	245	弥生土器 筒形	遺構外 底部1/2	口底	(4.4)	高	E1	入組文を施し、LR縄文を充填施文。外底面に木葉痕。内面横位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	246	弥生土器 筒形	遺構外 胴下半～底部 1/3	口底	(6.0)	高	F2	外底面に網代痕。外面やや粗い縦位磨き、一部に煤状炭化物付着。内面に被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	247	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部片	口底		高	G1	櫛状工具の条痕文を横位施文。内外面共にやや被熱風化、内面やや粗い横位磨き。	弥生中期
第99図 PL.116	248	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇上面に刻目を施し、以下に櫛状工具の条痕文を斜位に施文。内面横位磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第99図 PL.116	249	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇上面にヘラ状工具の刻目を施す。櫛状工具の横位条痕文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	250	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部過 半ほぼ完存	口底	24.4	高	I3	櫛状工具の条痕文を斜位に施文。外全面に煤状炭化物付着、内面横位磨き・胴部下半被熱風化。	弥生中期
第100図 PL.117	251	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部 1/3	口底	(28.4)	高	E2	口唇上面にLR縄文を横位施文。櫛状工具の条痕文を横位施文。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第100図 PL.117	252	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	口唇上面に押圧状の刻目を施し、以下に櫛状工具の条痕文を横位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	253	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	D7	櫛状工具の条痕文を斜位に施文。内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	254	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇上面に刻目を施す。櫛状工具の条痕文を横位施文。内面やや被熱風化。	弥生中期
第100図 PL.117	255	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	櫛状工具の条痕文を横位施文。内面横位磨きで、やや被熱風化。	弥生中期
第100図 PL.117	256	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	櫛状工具の条痕文を横位に施す。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	257	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇上面に刻目を施す。櫛状工具の条痕文を横位施文。内面横位磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第100図 PL.117	258	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口唇上面に指頭圧痕状の刻目を施す。櫛状工具の条痕文を斜位に施文。内面横位磨きで後、やや粗い横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	259	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底		高	I1	櫛状工具の条痕文を斜位に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き・一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第100図 PL.117	260	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底		高	G2	櫛状工具の条痕文を横位施文。内外面共に一部に煤状炭化物付着、被熱風化。	弥生中期
第100図 PL.117	261	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底		高	D2	櫛状工具の条痕文を横位に施す。内面撫で状のやや粗い横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	262	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底		高	E1	櫛状工具の条痕文を横・斜位に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	263	弥生土器 甕	遺構外 頸部片	口底		高	E1	櫛状工具の横位条痕文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	264	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底		高	J2	櫛状工具の斜位条痕文を施す。外面煤状炭化物付着・被熱風化、内面横位磨きで。灰白色。	弥生中期
第100図 PL.117	265	弥生土器 甕	遺構外 底部1/8	口底	6.6	高	G1	櫛状工具の条痕文を斜位に施文。外底面に織布痕。内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	266	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底	(7.2)	高	C6	櫛状工具の条痕文を斜位に施文。内面被熱風化。	弥生中期
第100図 PL.117	267	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部上 半1/6	口底	(13.8)	高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面炭素吸着。内面横位磨きで後、やや粗い横位磨き。268と同一個体。	弥生中期
第100図 PL.117	268	弥生土器 甕	遺構外 口縁部1/4	口底	(14.0)	高	E1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨きで後、やや粗い横位磨き。267と同一個体。	弥生中期
第100図 PL.117	269	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部上 半1/3	口底	(24.8)	高	E1	鈎手状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	270	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	271	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇上面に指頭圧痕状の刻目を施す。波状文を施し、LR縄文を充填的に施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第100図 PL.117	272	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I3	方形の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位篋撫で後、やや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	273	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口縁部にLR縄文を横位施文し、横線文を施す。外面横位篋撫で、内面横位篋磨き。	弥生中期
第100図 PL.117	274	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	C6	口唇上面に小突起を、内面に凹線状の幅広横線文を施す。交互の三角文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	275	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口縁部にLR縄文を横位施文し、横位沈線文を施す。括れ部に沈線の横帯文や上下の交互短沈線を施す。内面横位篋磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	276	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I2	LR縄文を口唇下と括れ部に横位施文し、横線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	277	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I3	LR縄文を横位・多段に施文し、やや大柄な波状文を複数段に施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋撫で。	弥生中期
第101図 PL.118	278	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D7	LR縄文を横位・多段に施文し、やや大柄な櫛描波状文を施す。内面横位篋磨き	弥生中期
第101図 PL.118	279	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	横線文や波状文を施し、LR縄文充填施文。内面被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	280	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I3	波状文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位撫で、やや被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	281	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I2	波状文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	282	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	LR縄文を横位施文し、波状文を施す。内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	283	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D7	口唇上面と口縁部にLR縄文を横位施文し、単沈線の波状文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	284	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口唇上面に刻目を施す。LR縄文を横位・多段に施文。外面煤状炭化物付着、内面横位篋撫で。	弥生中期
第101図 PL.118	285	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部 1/4	口底	(23.2) 高	G1	口縁部に指頭圧痕状の刻目を施す。口縁部に単沈線の波状文を施し、LR縄文を充填的に施す。頸部は櫛描波状文を複数帯施文。外面一部に煤状炭化物付着・被熱剥離、内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	286	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I1	複合口縁部にLR縄文や爪形状の刺突文を横位施文し、下位に波状文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	287	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	折り返し状の複合口縁にLR縄文を横位施文。内面やや粗い撫で状の横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	288	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	櫛描の波状文や横帯文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	289	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	櫛描波状文を複数段施し、LR縄文を充填的に施文後、口縁部に爪形状の刺突文や横帯状の磨消縄文を施す。内面横位篋撫で。	弥生中期
第101図 PL.118	290	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口縁部に櫛描羽状文を縦位に施し、胴部にLR縄文を横位施文。内面横・斜位篋撫で。	弥生中期
第101図 PL.118	291	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	C2	口縁部にやや大柄な櫛描波状文・横線文を施す。内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	292	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	やや大柄な櫛描波状文を多段に施す。内面横位篋磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	293	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	やや大柄な櫛描波状文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	294	弥生土器 甕	遺構外 口縁部1/3	口底	(20.0) 高	F2	口唇上面にLR縄文を横位施文。口縁部に櫛描羽状文を縦位に施文。内面横位篋撫で、やや被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	295	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	櫛描羽状文を縦位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面篋撫で後横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	296	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	I1	口唇上面に刻目を施し、以下に櫛描波状文を複数段に施文。内面撫で状のやや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	297	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	縦位の櫛描羽状文を施す。内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	298	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口唇上面に指頭圧痕状の刻目を施す。括れ部に横線文を施し、上位にLR縄文を充填的に施す。内面やや粗い横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	299	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	G2	櫛状工具の横線文や垂下文を施し、口唇下にLR縄文を充填的に施文。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第101図 PL.118	300	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	J2	口唇外端にLR縄文を横位施文。櫛描文を施す。外面横位篋撫で、内面横位篋磨き・やや被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	301	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～頸部 1/4	口底	(25.4) 高	F2	櫛描の縦・横線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位篋撫で・指頭圧痕状の凹凸を残す。	弥生中期
第101図 PL.118	302	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口唇上面から口縁部に櫛描の縦線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面丁寧な横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	303	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口唇上面にLR縄文を横位施文。口縁部以下に櫛状工具の条痕文を縦位に施す。内面横位篋磨き。	弥生中期
第101図 PL.118	304	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	カナムグラの擬似縄文を横位施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位篋磨き。	弥生中期

挿 図 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第101図 PL.118	305	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	E1	波状文や横線文を複数段に施し、LR縄文を充填施文。内面横位筥撫で。	弥生中期
第101図 PL.118	306	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	ヒトデ文を施し、LR縄文を充填的に施す。外面被熱風化、内面横位筥撫で。	弥生中期
第101図 PL.118	307	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	D7	三角文を施し、LR縄文を充填施文。内面被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	308	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	B4	方形の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	309	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	E1	横線文や波状文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位筥磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第101図 PL.118	310	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	G1	櫛描羽状文を縦位施文。内面横位筥撫で。	弥生中期
第101図 PL.118	311	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	J2	方形の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位筥磨き。	弥生中期
第101図 PL.119	312	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	I2	櫛描羽状文を縦位施文。内面横位撫で、炭素吸着。	弥生中期
第101図 PL.119	313	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	E1	胴部上位に櫛描波状文を施す。外面やや被熱風化、内面横位筥撫で。	弥生中期
第102図 PL.119	314	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	K1	横帯文や三角文を施す。内外面共にやや被熱風化、内面横位筥磨き。317と同一個体か。	弥生中期
第102図 PL.119	315	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	E1	櫛描の垂下文や弧状文を施す。内面撫で状の横位筥磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	316	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	F1	櫛描の波状文や縦・横線文を施す。内面横位筥撫で。	弥生中期
第102図 PL.119	317	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	K1	横帯文や三角文を施す。内外面共にやや被熱風化、内面横位筥磨き。314と同一個体か。	弥生中期
第102図 PL.119	318	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	E2	櫛描の縦・横線文を施文。内面横・縦位撫で。	弥生中期
第102図 PL.119	319	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	K1	縦位の櫛描波状文を施す。施文具3歯8mm。内面横位筥磨き、一部被熱剥離。	弥生中期
第102図 PL.119	320	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	LR縄文を横位多段に施文。内面横位筥撫で。	弥生中期
第102図 PL.119	321	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	やや細密なLR縄文を横位・多段に施文。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	322	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	LR縄文をやや乱雑に縦位施文。内面横位撫で後、やや粗い縦位筥磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	323	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	口唇部上面及び口縁部にLR縄文を横位多段に施文。内面横位筥磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	324	弥生土器 甕	遺構外 口縁部～胴部下 位1/5	口底	(21.7) 高	E1	口縁部から胴部中位にかけてLR縄文を横位・多段に施文し、頸部の施文を横位に撫で消す。外面煤状炭化物付着・被熱風化。内面撫で状の横位筥磨き、胴部煤状炭化物付着・やや被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	325	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口縁部にLR縄文を横位施文。内外面共に横位筥磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	326	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E4	口唇上面から口縁部にカナムグラの擬似縄文を横位施文。内面横位筥磨き、一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第102図 PL.119	327	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	K1	LR縄文を横位多段に施文。内面やや被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	328	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口底	高	E1	LR縄文を横位多段に施文。内面横位筥撫で後、やや粗い横位筥磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	329	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	G2	無文。内外面共に横位筥磨き、炭素吸着。	弥生中期
第102図 PL.119	330	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E4	無文。内外面共に横位筥磨き。補修孔と思しき焼成後穿孔。	弥生中期
第102図 PL.119	331	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	無文。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第102図 PL.119	332	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	無文。内外面共に撫で状の横位筥磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	333	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	無文。外面縦位筥磨き・煤状炭化物付着、内面横位筥撫で後、やや粗い横位筥磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	334	弥生土器 甕	遺構外 底部1/5	口底	(7.4) 高	E1	底外面に網代痕。内面横位筥磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	335	弥生土器 甕	遺構外 底部片	口底	(7.4) 高	E2	底外面に網代痕。外面横位筥撫で、内面煤状炭化物付着・被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	336	弥生土器 甕	遺構外 底部完存	口底	5.8 高	E1	底外面に網代痕。内面被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	337	弥生土器 甕	遺構外 底部2/3	口底	8.9 高	E1	櫛描垂下文を施す。外底面に網代痕、内面被熱風化・一部被熱剥離。	弥生中期
第102図 PL.119	338	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底	(6.2) 高	E1	外底面に網代痕。外面縦位筥磨き、内面横位筥磨き・やや被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	339	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底	(7.0) 高	E4	底外面に網代痕。外面斜位筥撫で、内面横位筥撫で。	弥生中期
第102図 PL.119	340	弥生土器 甕	遺構外 底部片	口底	高	G1	櫛状工具の条痕文を斜位に施文。底外面に織布痕。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	341	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底	(6.5) 高	E2	底外面に織布痕。外面縦位筥磨き、内面一部に煤状炭化物付着・被熱風化。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第102図 PL.119	342	弥生土器 甕	遺構外 底部1/8	口底 (6.0)	高	K1	外底面に織布痕。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	343	弥生土器 甕	遺構外 底部片	口底 (7.0)	高	E1	コ字重ね文を施し、LR縄文を充填施文。底外面に織布痕。内面横位磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	344	弥生土器 甕	遺構外 底部1/5	口底 (9.0)	高	G1	外底面に織布痕。内外面共に横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第102図 PL.119	345	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底 (7.0)	高	B5	LR縄文を横位施文。外底面に木葉痕。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.119	346	弥生土器 甕	遺構外 底部1/2	口底 (6.4)	高	E1	外底面に木葉痕。内外面共に煤状炭化物付着、やや粗い縦位磨き。	弥生中期
第102図 PL.119	347	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底 (9.0)	高	E2	底外面に木葉痕。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.120	348	弥生土器 甕	遺構外 底部1/3	口底 (8.0)	高	D2	底外面に木葉痕。内外面共に被熱風化、内面煤状炭化物付着。	弥生中期
第102図 PL.120	349	弥生土器 甕	遺構外 底部1/2	口底 (10.8)	高	D7	底外面に木葉痕。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	弥生中期
第102図 PL.120	350	弥生土器 甕	遺構外 底部1/4	口底 (5.0)	高	E1	LR縄文を横位施文。底外面に木葉痕。内面横位磨き。	弥生中期
第102図 PL.120	351	弥生土器 甕	遺構外 底部完存	口底 6.0	高	E1	外面縦位磨き、内面横位磨きで・炭素吸着。	弥生中期
第102図 PL.120	352	弥生土器 甕	遺構外 底部1/2	口底 6.2	高	D5	内外面共に横位磨き。底端部に斜め方向の直径3mmの焼成前穿孔。	弥生中期
第102図 PL.120	353	弥生土器 小型甕	遺構外 口縁部片	口底	高	D6	口唇上面や口縁部にLR縄文を横位施文し、円形竹管の斜位刺突により連続爪形文を施文。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第102図 PL.120	354	弥生土器 小型甕	遺構外 底部1/3	口底 4.8	高	E1	LR縄文を横位施文。外底面に木葉痕。内外面共に被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第102図 PL.120	355	弥生土器 台付鉢	遺構外 脚台部1/4	口底 (10.0)	高	E1	LR縄文を横位・多段に施文。左右両側縁に透かし孔。端部内外面共に横位磨き、内面縦位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	356	弥生土器 台付鉢	遺構外 脚台部1/2	口底	高	E1	方形状の沈線文を施し、細密なLR縄文を充填的に施文。最低2個の透かし孔を持つ。内面底部横位磨き、脚部横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	357	弥生土器 台付鉢	遺構外 底部～脚台部 1/4	口底 (9.5)	高	D2	脚台部にLR縄文を縦・横位に施文。脚台部内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	358	弥生土器 台付鉢?	遺構外 脚台部片	口底	高	E4	円形竹管の横位刺突文を多段に施す。脚台部に透かし孔を持つ。底部・脚台部内面共に横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	359	弥生土器 台付鉢	遺構外 底部～脚台部片	口底	高	E1	LR縄文を横位施文。脚台部に推定3箇所の透かし孔を持つ。底内面横位磨き、やや被熱風化。	弥生中期
第103図 PL.120	360	弥生土器 鉢	遺構外 脚台部片	口底	高	G1	脚台部に透かし孔を持つ。外面縦位磨き、内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	361	弥生土器 鉢?	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	沈線の横帯文や波状文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に赤色塗彩、内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	362	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	縦位方角文や曲線状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	363	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	三角文を施し、LR縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	364	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E1	口唇上面に瘤状の小突起を付す。横線文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや被熱風化。	弥生中期
第103図 PL.120	365	弥生土器 鉢	遺構外 胴部片	口底	高	F1	入組文を施し、LR縄文を充填施文。口縁部に2個の直径3mmの焼成前穿孔。外面一部に風化剥離、内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	366	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	367	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	内面口縁部にLR縄文を1段横位施文し、同部位に赤色塗彩。外面は沈線文内に同縄文を充填施文し、赤色塗彩。内面横位磨き。369と同一個体か?	弥生中期
第103図 PL.120	368	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D7	口唇部に山形状の小突起を付す。口縁部の内外面に横帯文を施し、LR縄文を充填施文。	弥生中期
第103図 PL.120	369	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	内面口縁部にLR縄文を1段横位施文し、同部位に赤色塗彩。外面は同縄文を充填した入組文を施し、赤色塗彩。内面横位磨き。376と同一個体か?	弥生中期
第103図 PL.120	370	弥生土器 鉢	遺構外 胴部片	口底	高	K1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面燻べ焼き状に炭素吸着、内面撫で状の斜位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	371	弥生土器 鉢	遺構外 胴部片	口底	高	D2	方形状や曲線状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横・縦位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	372	弥生土器 鉢?	遺構外 胴部片	口底	高	E4	三角形の入組文を施し、LR縄文を充填施文。外面赤色塗彩、内面丁寧な横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	373	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	K1	口縁部に微隆起状の横位隆帯を施す。内外面共に赤色塗彩、一部に煤状炭化物付着。	弥生中期
第103図 PL.120	374	弥生土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G2	やや細密なLR縄文を斜位に施文。内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	375	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部～体部 1/2	口底 22.2	高	E1	楕円や縦位短沈線を付加した方角文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に赤色塗彩。	弥生中期
第103図 PL.120	376	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底	高	I2	入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	377	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底	高	F1	波状文や横線文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第103図 PL.120	378	弥生土器 蓋	遺構外 天井部完存	天底	5.9	高	B5	横位短沈線を付加した方形文を施し、やや細密なLR縄文を 充填的に施す。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第103図 PL.120	379	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	三角形の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面口辺部 横位、体部縦位の磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	380	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	D2	入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き、やや 風化。	弥生中期
第103図 PL.120	381	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	I1	横線文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	382	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	E4	波状文や方形文を施し、やや細密なLR縄文を充填施文。内 面口縁部にも横線文や縄文を施す。内面風化。	弥生中期
第103図 PL.120	383	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	入組文を施し、LR縄文を充填施文。口縁部に直径3mmの焼成 前穿孔。内面丁寧な横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	384	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	F1	入組文を施し、やや細密なLR縄文を充填施文。口縁部2箇所 に直径3mmの焼成前穿孔。内面丁寧な横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	385	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口底		高	I1	方形の入組文を施し、LR縄文を充填施文。口縁部に直 径3mmの焼成前穿孔。内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	386	弥生土器 有孔鉢	遺構外 底部1/4	口底		高孔 (2.4)	I1	内外面共に縦位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	387	弥生土器 高坏	遺構外 脚部1/5	口底		高	K1	5個の透かし孔。脚部外面赤色塗彩・縦位磨き、内面横 位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	388	弥生土器 台付鉢	遺構外 脚部片	口底		高	K2	横線文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	389	弥生土器 台付鉢	遺構外 脚部片	口底		高	E1	横線文を施し、LR縄文を充填施文。複数箇所に直径5mmの透 かし孔。外面縦位磨き、内面端部横位磨き、上部横位 磨き。	弥生中期
第103図 PL.120	390	弥生土器 高坏	遺構外 器受部片	口底		高	E1	内外面に赤色塗彩。3個の透かし孔。底部にほぞ状の接合痕。	弥生中期
第103図 PL.120	391	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	口唇上面にLR縄文を横位施文。括れ部の段状接合部に爪形 状の刺突文を横位施文。内外面共に被熱風化、外面一部に 煤状炭化物付着。	栗林式
第103図 PL.120	392	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	短く外反する口唇部にLR縄文を横位施文。頸部の段状接合 部に木端小口の刺突文を横位施文。内外面共にやや被熱風 化。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	栗林式
第104図 PL.120	393	弥生土器 壺	遺構外 口縁部～肩部 1/2	口底	(24.5)	高	I3	口縁部に同心円文を施す。括れ部に3連止櫛描連簾文を2帯 施し、その上位に上向きの鋸歯文を、下位に鋸歯文を施す。 施文具10歯20mm。口縁部外面にイネ粉殻圧痕。外面口縁部 斜位刷毛目、肩部斜位刷毛目後に縦位磨き。内面横位刷 毛目後に横位磨き、著しい風化剥離。	樽式
第104図 PL.121	394	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/4	口底	(20.4)	高	F2	括れ部に櫛描連簾文を施す。内外面共に風化、内面剥離。 灰白色。	樽式
第104図 PL.121	395	弥生土器 壺	遺構外 口縁部～頸部 1/3	口底	(14.0)	高	J2	受け口状口縁。口縁部に櫛描波状文、括れ部に等間隔止櫛 描連簾文を複数帯施す。施文具9歯17mm。内外面共にやや 風化。灰白色。	樽式
第104図 PL.121	396	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底		高	G2	口縁部に櫛描波状文や斜線充填鋸歯文を施す。外面斜位刷 毛目、内面赤色塗彩。	樽式
第104図 PL.121	397	弥生土器 壺	遺構外 頸部～肩部片	口底		高	E2	斜線充填の横帯文や三角文と等間隔止櫛描連簾文を施す。 施文具6歯14mm。外面斜位刷毛目、内面横位磨き。灰白色。	樽式
第104図 PL.121	398	弥生土器 壺	遺構外 頸～肩部片	口底		高	J2	頸部～肩部にかけて3連止櫛描連簾文や鋸歯文を施す。施 文具11歯21mm。無施文部位や内面口縁部に赤色塗彩。内面 櫛状工具の横位磨き。灰白色。	樽式
第104図 PL.121	399	弥生土器 壺	遺構外 胴部片	口底		高	J2	胴部中位に斜線充填鋸歯文を施し、当部位を除いて赤色塗 彩。内面横位刷毛目。灰白色。	樽式
第104図 PL.121	400	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底		高	D2	櫛描波状文や沈線充填の鋸歯文を施す。施文具9歯14mm。内 面横位刷毛目。	樽式
第104図 PL.121	401	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底		高	E1	括れ部に2連止櫛描連簾文を施す。肩部に同波状文を1帯と ボタン状貼付文を施し、下位に赤色塗彩。内面口縁部から 頸部赤色塗彩・肩部横位刷毛目。	樽式
第104図 PL.121	402	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底		高	J2	斜線文や斜線充填鋸歯文を施し、ボタン状貼付文を施文。 内面やや風化。	樽式
第104図 PL.121	403	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施し、下位に同波状文を2帯 施文。施文具10歯20mm。内外面共に被熱風化、内面刷毛目・ 一部に煤状炭化物付着。	樽式
第104図 PL.121	404	弥生土器 台付甕	遺構外 口縁部～胴部上 半2/3	口底	16.0	高	G2	括れ部に等間隔止櫛描連簾文を施し、口縁部に1帯、胴部に 複数帯の櫛描波状文を施す。施文具11歯17mm。内外面共に やや被熱風化、内面横位磨き。	樽式
第104図 PL.121	405	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	口縁部から頸部にかけて櫛描波状文を複数帯施す。施文具 6歯10mm。内面横位磨き。	樽式
第104図 PL.121	406	弥生土器 甕	遺構外 底部完存	口底	6.8	高	D2	底外面に木葉痕。外面縦位磨き、内面横位磨き・やや 被熱風化。	弥生中期
第104図 PL.121	407	弥生土器 小型台付甕	遺構外 口縁部片	口底		高	K1	口縁部から頸部にかけて櫛描波状文を2帯施す。施文具11歯 15mm。内面横位磨き、やや被熱風化。	樽式
第104図 PL.121	408	弥生土器 台付甕	遺構外 底部完存	口底	5.6	高	I3	底部内面にキビの可能性のある有ふ果圧痕。底部外面縦位 磨き、内面横位磨き。脚部外面縦位磨き、内面横 位磨き。	樽式?
第104図 PL.121	409	弥生土器 鳥形土器	遺構外 後部片	厚	0.4		K1	外面丁寧な縦位磨き、内面縦位の指撫で。	弥生中・後期

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第104図 PL.121	410	弥生土器 土器片加工 溝砥石	遺構外 破片	口 底		高	J2	土器片を加工した砥石。左側縁の表裏面に断面V字形の摩 耗痕。下縁には指抑えによる摩耗痕あり。灰白色。	弥生中・後期
第104図 PL.121	411	弥生土器 土製品	遺構外 体部片	幅 厚	1.5 0.8		K1	環状土製品の破片か？左側縁に櫛状工具の擦痕残る。全面 にやや粗い筥磨き。	弥生中・後期
第104図 PL.121	412	弥生土器 犬笛？	遺構外 一部欠損	直 径	2.0		I1	断面円形の棒状体に、斜め方向から直径5mmの焼成前穿孔を 施す。表面縦位の筥撫で整形。	弥生中・後期

8区遺構外出土器

第105図 PL.121	413	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口 底		高	E1	口唇部外端に刻目を施す。櫛状具の条痕文を横位施文。外面 一部に煤状炭化物付着、内面やや粗い横位筥磨き。	弥生中期
第105図 PL.121	414	弥生土器 甕	遺構外 口縁～肩部片	口 底		高	D5	櫛状具の条痕文を斜位に施文。内面横位筥撫で後、やや粗 い横位筥磨き。	弥生中期
第105図 PL.121	415	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口 底		高	B4	単沈線の方形文を重層的に施し、LR縄文を充填的に施文。 内外面一部に煤状炭化物付着、面被熱風化。	弥生中期
第105図 PL.121	416	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口 底		高	E1	外面側に折返す複合口縁で下端に筥状具の刻目を施し、LR 縄文を充填施文。内面横位撫で。灰白色。	弥生中期
第105図 PL.121	417	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口 底		高	D2	外面側に折返す複合口縁で、LR縄文を横位施文。内面横位 撫で。	弥生中期
第105図 PL.121	418	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口 底		高	D5	口唇部外端に指頭圧痕状の刻目を施す。外面斜位刷毛目、 内面横位筥磨き。	弥生中期
第105図 PL.121	419	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口 底		高	E1	櫛状具の波状文を複数段に施す。外面煤状炭化物付着、内 面やや被熱風化。	弥生中期
第105図 PL.121	420	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口 底		高	D1	口唇部上面に指頭圧痕状の刻目を施す。僅かに肥厚する複 合口縁で、LR縄文を横位施文。内面撫で状の横位筥磨き。	弥生中期
第105図 PL.121	421	弥生土器 甕	遺構外 胴部下位～底部 完存	口 底	3.8	高	D4	沈線懸垂文を3単位に施文。外面縦位筥磨き、内面撫で状の 横位筥磨き。	弥生中期
第105図 PL.121	422	弥生土器 甕	遺構外 胴部片	口 底		高	G1	鋸歯状の単沈線文を重層的に施し、下位にLR縄文を横位・ 多段に施文。内面やや粗い斜位筥磨き。	弥生中期
第105図 PL.121	423	弥生土器 蓋	遺構外 摘み部完存	口 底		高	H1	外面縦・横位の筥磨き、内面摘み部横位筥撫で、体部風化。 弥生中期	
第105図 PL.121	424	弥生土器 蓋	遺構外 口縁部片	口 底		高	F1	方形状の入組文を施し、LR縄文を充填施文。内面口縁部に LR縄文横位施文。内外面共に赤色塗彩、やや被熱風化・一 部に煤状炭化物付着。	弥生中期

9区遺構外出土器

第106図 PL.122	425	弥生土器 壺	遺構外 口縁部～頸部 2/3	口 底	28.5	高	E1	括れ部に櫛描連簾文を3段に施す。施文具9歯15mm。外面斜 位筥撫で後・口縁部横撫で、一部に赤色塗彩残る。内面赤 色塗彩。灰白色。	樽式
第106図 PL.122	426	弥生土器 壺	遺構外 頸部～胴部中位 3/4	口 底		高	E1	括れ部に櫛描きと筥磨きのT字文を、下位に同波状文や斜 線充填の鋸歯文を施す。施文具8歯14mm。外面頸部縦位筥 磨き、胴部横位筥撫で後・縦横位筥磨き。内面横位筥撫で。 灰白色。	樽式
第106図 PL.122	427	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/4	口 底	(21.0)	高	J2	短く内折する口縁部と括れ部に櫛描波状文を施文。括れ部 に外→内面へ径5mmの焼成前穿孔。外面口縁部横位・頸部 縦位刷毛目。内面横位刷毛目後・粗い横位筥磨き、一部に 赤色塗彩残る。	樽式
第106図 PL.122	428	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口 底		高	J2	短く内折する口縁部に櫛描波状文を施文。外面口縁部横位 撫で、頸部縦位刷毛目。内面斜位刷毛目後、口縁部横位撫 で。灰白色。	樽式
第106図 PL.122	429	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/5	口 底	(25.0)	高	E1	内面側へ折返す複合口縁。外面横位筥撫で、内面横位筥磨 き・赤色塗彩。灰白色。	樽式
第106図 PL.122	430	弥生土器 壺	遺構外 口縁部1/6	口 底	(22.0)	高	E1	内面側へ折返す複合口縁で指頭状の押さえ痕あり。外面横 位筥撫で後・縦位筥磨き、内面横位筥撫で。灰白色。	樽式
第106図 PL.122	431	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口 底		高	I1	外側へ折返す複合口縁。外面斜位刷毛目、内面横位刷毛目 後・横位筥磨き。灰白色。	樽式
第106図 PL.122	432	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口 底		高	D4	括れ部に櫛描波状文を施す。外面縦位刷毛目後・横位撫で、 内面横位筥磨き。灰白色。	樽式
第106図 PL.122	433	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口 底		高	D2	大柄な櫛描波状文を施す。内面丁寧な横位筥磨き。灰白色。	樽式
第106図 PL.122	434	弥生土器 壺	遺構外 胴部下位～底部 完存	口 底	5.5	高	G1	外面赤色塗彩、内面横・斜位筥撫で。	樽式
第106図 PL.122	435	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口 底		高	F1	刺突文充填の鋸歯文を施す。外面やや風化、内面横・斜位 筥撫で。	樽式
第107図 PL.122	436	弥生土器 壺	遺構外 頸部～胴部上半 1/3	口 底		高	G2	括れ部に多連止櫛描連簾文を施し、頸部～肩部に櫛描波状 文を施文。施文具9歯16mm。外面縦位筥撫で、内面横位筥 撫で。	樽式
第107図 PL.122	437	弥生土器 壺	遺構外 頸部～肩部1/4	口 底		高	D2	括れ部に櫛描きと筥磨きのT字文を、下位に櫛描波状文を 複数帯施す。施文具11歯12mm。外面頸部縦位筥撫で、内面 頸部横位筥磨き・肩部横位撫で。内外面共に煤状炭化物付 着。	樽式
第107図 PL.122	438	弥生土器 甕	遺構外 口縁部1/5	口 底	(15.0)	高	E1	括れ部に多連止櫛描連簾文を施す。内面横位筥磨き。	樽式
第107図 PL.122	439	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口 底		高	D4	口縁部に櫛描波状文を施し、耳状の貼付文を施す。外面 横位筥撫で、内面横位筥磨き。内外面共にやや被熱風化。	樽式
第107図 PL.122	440	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口 底		高	D2	口縁部～頸部に櫛描波状文を複数帯施す。施文具10歯 14mm。	樽式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第107図 PL.122	441	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	D2	短く内折する口縁部に1帯、括れ部～肩部に3帯の櫛描波状文を施し、等間隔止櫛描連簾文を施文。施文具5歯11mm。内面丁寧な横位磨き。	樽式
第107図 PL.122	442	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	E1	鋸歯文または羽状文を施す。外面斜位刷毛目、内面横位磨き。	樽式
第107図 PL.122	443	弥生土器 甕	遺構外 胴部下位～底部 1/2	口底	6.5	高	D4	外面縦位磨き、内面横位磨き・一部に煤状炭化物付着。	樽式
第107図 PL.122	444	弥生土器 甕	遺構外 底部2/3	口底	7.7	高	D4	外面縦位磨き、内面横位磨き。内外面共に一部に煤状炭化物付着。	樽式
第107図 PL.122	445	弥生土器 甕	遺構外 底部2/3	口底	6.4	高	I1	外面撫で状の縦位磨き、内面やや粗い横位磨き。内外面共にやや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	樽式
第107図 PL.122	446	弥生土器 小型甕	遺構外 胴部下位～底部 完存	口底	4.0	高	D2	外面縦位磨き、内面やや粗い横位磨き。	樽式
第107図 PL.122	447	弥生土器 小型台付甕	遺構外 口縁部～胴部片	口底		高	D2	括れ部に多連止櫛描連簾文を施す。外面横・縦位磨き、内面横位磨き。	樽式
第107図 PL.122	448	弥生土器 高坏	遺構外 脚部上位完存	口底		高	D4	坏部離脱後に受け部を研磨加工し、再利用か。外面赤色塗彩。	樽式
第107図 PL.123	449	弥生土器 高坏	遺構外 坏部下位～脚部 上位1/2	口底		高	D4	外面坏部横位磨き、脚部縦位磨き。内面坏部撫で状の横・斜位磨き、脚部横位磨き。外面一部に煤状炭化物付着。	樽式

10区遺構外出土土器

第108図 PL.123	450	弥生土器 壺	遺構外 口縁部～頸部 1/4	口底	(24.0)	高	F1	括れ部に櫛描連簾文を施す。外面斜位刷毛目、内面横・斜位刷毛目。内面一部に赤色塗彩残存。	樽式
第108図 PL.123	451	弥生土器 壺	遺構外 頸部～肩部1/3	口底		高	E6	括れ部～肩部に櫛描波状文と等間隔止櫛描連簾文を交互施文。施文具7歯14mm。内外面共に風化。	樽式
第108図 PL.123	452	弥生土器 高坏	遺構外 坏部1/8	口底	(26.0)	高	E6	外面口唇部下を除き、内外面共に赤色塗彩。脚部との接合部にホゾ残る。	樽式
第108図 PL.123	453	弥生土器 甕	遺構外 肩部片	口底		高	D3	口唇端部が短く内湾する。口縁部に櫛描波状文を2帯施文後に下部を斜位磨き。施文具7歯11mmか。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	樽式
第108図 PL.123	454	弥生土器 甕	遺構外 肩部片	口底		高	E2	肩部に等間隔止櫛描連簾文と2帯の波状文を施す。施文具7歯12mm。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	樽式
第108図 PL.123	455	弥生土器 壺	遺構外 肩部片	口底		高	D3	篋状具の細沈線により鋸歯文を施文し、その結束部にボタン状貼付文を施す。鋸歯文の外縁部と内面に赤色塗彩を施す。内面横位刷毛目。	樽式
第108図 PL.123	456	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	肩部に櫛描連簾文と2帯の波状文を施す。施文具11歯17mm。外面一部に赤色塗彩、内面横位刷毛目。	樽式
第108図	457	弥生土器 台付甕	遺構外 口縁部～胴部下 位1/3	口底	(13.5)	高	E4	口唇端部が短く内湾する。括れ部に等間隔止櫛描連簾文を、口縁部と胴部上位に同波状文を各1帯施文する。施文具16歯15mm。外面胴部被熱風化・剥離、煤状炭化物付着。内面横位磨き、やや被熱風化。	樽式
第108図	458	弥生土器 高坏	遺構外 坏部1/8	口底		高	E2	坏部内外面に、脚部外面に赤色塗彩。	樽式
第109図 PL.123	459	弥生土器 人形土器	遺構外 頭部～顔上半部 完存	口底		高頭 7.7	E4	粘土貼付の鼻稜と篋掻き穿孔の眼孔を作出し、篋状具の横位沈線を刻み込んだ瘤状装飾6個を貼付する。頭頂部・鼻稜部およびその近縁に赤色塗彩を施す。顔部両側には半月形の耳袋が剥落した痕跡あり。頭部装飾や眉・鼻稜・眼孔は磨きによる造形調整、他は水濡れ状態で篋状具による撫で。頭頂部は生乾き後に丁寧な磨き。	弥生後期

13区遺構外出土土器

第110図 PL.123	460	弥生土器 壺	遺構外 口縁部～頸部 2/3	口底	24.1	高	G1	口縁部にボタン状貼付文を推定12個施し、胴括れ部に櫛描波状文を施文。外面縦位磨き、口縁部横位磨き。内面赤色塗彩。内外面共にやや被熱風化。	樽式
第110図 PL.123	461	弥生土器 壺	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	外面縦位磨き、内面横位磨き。	樽式
第110図 PL.123	462	弥生土器 甕	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	やや乱雑な櫛描波状文を6帯施文。施文具6歯10mm。外面やや粗い横位磨き、内面横位磨き。	樽式
第110図 PL.123	463	弥生土器 高坏	遺構外 口縁部～体部下 位1/2	口底	(16.0)	高	E1	内外面共に赤色塗彩。	樽式

2・4・5・7区遺構外出土土器

第111図 PL.124	1	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 11.7	18.0	厚重 3.3 797.2	細粒輝石安山岩	表裏面と右側面に節理面を大きく残り露頭採取の可能性がある。表裏面の先端付近に著しい摩滅が認められ使用痕の可能性が高い。両側片には全体的につぶれが認められ着柄痕の可能性が高い。
第111図 PL.124	2	剥片石器 石鏃	7区遺構外 2/3	長幅 (9.9)	(15.8)	厚重 (2.0) 502.2	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を大きく残り露頭採取の可能性がある。両側片に部分的なつぶれが認められ使用痕の可能性が高い。
第111図 PL.124	3	剥片石器 石鏃	2区遺構外 2/3	長幅 14.9	(17.3)	厚重 (3.9) 864.7	粗粒輝石安山岩	表裏面に大きく節理面を残し露頭採取の可能性がある。右側片の上方につぶれが認められ着柄痕の可能性が高い。
第111図 PL.124	4	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 10.7	24.0	厚重 2.6 991.3	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を大きく残り露頭採取の可能性がある。表裏面の先端付近には摩滅が認められ使用痕の可能性が高い。両側片には全体的につぶれと摩滅が認められ着柄痕の可能性が高い。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				長 幅	() 幅	厚 重				
第111図 PL.124	5	剥片石器 石鏃	7区遺構外 2/3	長 幅	(13.8) 11.4	厚 重	1.3 224.3	細粒輝石安山岩	表裏面に大きく節理面を残し露頭採取の可能性がある。	
第111図 PL.124	6	剥片石器 石鏃	2区遺構外 1/2	長 幅	(14.9) 15.0	厚 重	1.9 558.9	細粒輝石安山岩	表裏面に大きく節理面を残し露頭採取の可能性がある。表裏面の刃部付近に部分的な摩滅が認められ使用痕の可能性はある。	
第111図 PL.124	7	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長 幅	22.3 12.7	厚 重	4.0 903.7	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を大きく残り露頭採取の可能性がある。表裏面の先端付近には摩滅が認められ使用痕の可能性はある。両側片の中央付近にはつぶれが認められ着柄痕の可能性はある。	
第111図 PL.124	8	剥片石器 石鏃	7区遺構外 4/5	長 幅	15.6 14.8	厚 重	1.7 466.0	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を大きく残り露頭採取の可能性がある。裏面の先端付近には全体的に摩滅が認められ使用痕の可能性はある。表裏面の上方の両側縁付近には部分的な摩滅が認められ着柄痕の可能性はある。	
第111図 PL.124	9	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長 幅	18.5 (13.2)	厚 重	3.4 766.5	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を大きく残り露頭採取の可能性がある。両側片の中央から上方にかけてつぶれが認められ着柄痕の可能性はある。	
第112図 PL.124	10	剥片石器 石核	7区遺構外 完形	長 幅	10.5 9.2	厚 重	7.4 847.1	黒色安山岩	垂円礫を利用する。交互剥離により剥片を剥離する状況が認められる。	
第112図 PL.124	11	剥片石器 石包丁	4区遺構外 1/2	長 幅	(4.5) (6.1)	厚 重	0.8 27.9	黒色頁岩	全体的によく研磨されている。表面と裏面では光沢に著しい差があり裏面の方が全体的に光沢がある。表面は光沢が認められず破損等の後で再度研磨された可能性がある。表面の下方には穿孔途中と判断されるほぼ円形の凹みがあり、破損または変形に伴い孔の位置を変えようとした可能性がある。ほぼ中央に縦方向の折断が認められ、折断面には孔の一部が残存する。孔の内部は中央付近が狭くなっており両面穿孔の可能性はある。	
第112図 PL.124	12	剥片石器 再生剥片	4区遺構外 完形	長 幅	1.6 0.9	厚 重	0.3 0.27	珪質頁岩	背面の大部分に研磨面が認められ、石庖丁等の磨製石器の再生剥片と考えられる。	
第112図 PL.124	13	剥片石器 磨製石斧	4区遺構外 不明	長 幅	(6.0) 6.3	厚 重	(4.0) 209.5	変はんれい岩	全面に研磨が認められ丁寧に加工されている。	大型蛤刃石斧
第112図 PL.124	14	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 完形	長 幅	14.6 6.0	厚 重	3.5 536.6	変はんれい岩	全面に研磨が認められ丁寧に加工されている。	大型蛤刃石斧
第112図 PL.124	15	剥片石器 石槌	7区遺構外 不明	長 幅	(13.1) 6.1	厚 重	4.5 638.5	変はんれい岩	全面に研磨が認められ丁寧に加工されている。下方の折断面と想定される部分には磨面が認められ、磨製石斧からの転用が考えられる。	
第112図 PL.124	16	礫石器 石製研磨具	4区遺構外 完形	長 幅	7.5 3.1	厚 重	1.3 48.9	変玄武岩	扁平な円礫を利用する。側面の四隅にほぼ平坦な作出面があり、細かい線条痕が僅かに認められる。表裏面にも細かい多方向の線条痕が認められる。	
第112図 PL.124	17	礫石器 石錘	7区遺構外 完形	長 幅	6.7 9.5	厚 重	2.8 252.3	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。上下側片のくびれ部の加工は表裏面の磨面より新しく磨石の転用と考えられる。裏面の中央付近には敲打痕が集中する。表裏面の右側片からの剥離痕は敲打に伴うものと考えられる。	
第112図 PL.124	18	礫石器 砥石	5区遺構外 完形	長 幅	10.6 9.7	厚 重	1.6 266.2	テ付付凝灰岩	扁平な円礫を利用する。砥面はほぼ平坦であり多方向の細かい線条痕が認められる。	

●縄文時代の遺物観察表

1区31号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口底	高	厚重				
第117図 PL.125	1	縄文土器 深鉢	炉内 3cm ほぼ完存	口底	30.8 (9.3)	高	30.6	E4	R絡条体を縦位施文し、口縁部の3条横位単沈線文に交互刺突を加えて2条の鋸歯状意匠を作出。下位に単沈線2条の連弧文や懸垂文を施す。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E2式
第117図 PL.125	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部～胴部 2/3	口底	(18.4)	高		H1	口唇部外端に小突起を付す。RL縄文を縦位施文し、上半部に単沈線の横線文や連弧文を、下半部に横線文や蕨手・逆U字状の懸垂文を施す。内外面共に被熱風化。	加曾利E2式
第117図 PL.125	3	縄文土器 深鉢	炉内 3cm 胴部片	口底		高		E4	半截竹管の縦位平行沈線文を条線的に施文し、単沈線の連弧文や横線文を多段に施す。内外面共にやや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	加曾利E2式
第117図 PL.125	4	礫石器 石皿	炉内 1cm 完形	長幅	21.4 19.0	厚重	6.1 2784.1	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面の中央に浅い凹み状の磨面が認められる。	

1区83号住居出土遺物

第117図 PL.125	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		C5	口唇部外端に小突起を付す。内外面共に丁寧な横位磨き。	勝坂2式
第117図 PL.125	2	縄文土器 深鉢	18cm 胴部片	口底		高		E4	渦巻状隆線文の上面やその両側に連続爪形文を施す。内面やや被熱風化。	勝坂2式
第117図 PL.125	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		D4	横位や曲線状の隆線文に沿って、半截竹管の平行沈線文や刺突文、篋状具の爪形文などを施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	勝坂2式
第117図 PL.125	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		D4	やや幅広半截竹管の縦位押し引き平行沈線文や横位の浅い三角押文などを施す。外面煤状炭化物付着、内面丁寧な縦位磨き。	勝坂2式
第117図 PL.125	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		C6	半截竹管の縦線文・方形文・蛇行文などをパネル状に配置。外面一部に煤状炭化物付着、内面縦位磨き。	勝坂2式
第117図 PL.125	6	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		E2	曲隆線文の区画内外にR縄文を充墳的に施文し、曲隆線文に沿って2条単位の単沈線文を施す。内面横位磨き。	新巻類型
第117図 PL.125	7	剥片石器 石鏃	埋土中 ほぼ完形	長幅	(1.6) 1.5	厚重	0.5 0.8	チャート	押圧剥離により整形する。脚部の形態は左右非対称であり右脚部を舌状に作出する。先端部及び右脚部先端欠損。	凹基無茎鏃
第117図 PL.125	8	剥片石器 打製石斧	5cm 完形	長幅	13.5 9.5	厚重	4.4 595.0	細粒輝石安山岩	裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。	

2区14号住居出土遺物

第117図 PL.125	1	縄文土器 深鉢	6cm 胴部片	口底		高		D6	RL縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	諸磯b式
第117図 PL.125	2	礫石器 磨石	1cm 完形	長幅	8.0 7.2	厚重	4.3 335.4	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。裏面の中央付近に磨面が認められる。	

4区34号住居出土遺物

第125図 PL.125	1	縄文土器 深鉢	5cm 口縁部片	口底		高		A4	双頭口の波状口縁。半截竹管の重ね引きによる重層的な鋸歯文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第125図 PL.125	2	縄文土器 深鉢	1cm 胴部片	口底		高		A4	RL縄文を横位施文し、半截竹管の重ね引きによる横・斜位の沈線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第125図 PL.125	3	縄文土器 深鉢	40cm 口縁部片	口底		高		A4	口縁部に半截竹管の平行沈線文2条を横位に施す。0段多条RL縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き、やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第125図 PL.125	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A9	波状口縁。内削ぎ状の口唇部。口縁に縦位の短沈線文や末端環付RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第125図 PL.125	5	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A4	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成し、コンパス文の退嬰化した篋状具の縦位短沈線文を施す。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	6	縄文土器 深鉢	5cm 胴部片	口底		高		A4	波状口縁。0段多条の末端環付RL縄文を横・斜位に施文して、三角形の意匠を構成。内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	7	縄文土器 深鉢	20cm 口縁部片	口底		高		A4	波状口縁。0段多条の末端環付RL縄文を横・斜位に施文して、三角形の意匠を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	8	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A4/直前合2R・2L (0段多条)/	波状口縁。2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	9	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		A4	頸部にRL縄文を、胴部に直前段合攪り縄文を横位施文し、コンパス文の退嬰化した半截竹管背面の縦位短沈線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	10	縄文土器 深鉢	13cm 胴部片	口底		高		A4	0段多条のLR・RL縄文を横位・交互に多段施文して羽状を構成。内外面共に煤状炭化物付着、被熱風化。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	11	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		A4	末端環付RL縄文を横・斜位に施文して三角形を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	12	縄文土器 深鉢	6cm 胴部片	口底		高		A4	0段多条の末端環付RL・LR縄文を横位・交互に施文して羽状を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	13	縄文土器 深鉢	1cm 胴部片	口底		高		A4	0段多条LR・RLの結束縄文を横位・多段に施文。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第125図 PL.126	14	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A4	波状口縁。0段多条の末端環付RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第126図 PL.126	15	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		A4	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第126図 PL.126	17	縄文土器 深鉢	床直 底部完存	口底	7.3	高	A4	上げ底。内外面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
第126図 PL.126	18	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/5	口底	(7.4)	高	A4	上げ底。縄文を施文するが原体不明。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第126図 PL.126	19	縄文土器 深鉢	21cm 胴部片	口底		高	A4	半截竹管の連続爪形文を平行及び菱形に施文するが、部分的に連点状刺突文的な箇所も見られる。内面横・縦位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	20	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A10	波状口縁。口縁部に半截竹管の連続爪形文により菱形意匠を構成。胴部はRL縄文を横位施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	21	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	口縁部にLR縄文を横位施文し、半截竹管の連続爪形文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	22	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A7	波状口縁。内削ぎ状の口唇部。半截竹管の連続爪形文を三角形に施す。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第126図 PL.126	23	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	LR縄文を斜位施文。3本の単沈線を鋸歯状に配し、その下に半截竹管の浅い平行細沈線を縦位に施す。内外面共に被熱風化・剥離。	有尾式
第126図 PL.126	24	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	双頭状の波状口縁。LR・RL縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面丁寧な横位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	25	縄文土器 深鉢	5cm 胴部片	口底		高	A4	上位にRL縄文を横位に、下位に附加条第1種LR+L2本、同RL+R2本縄文を横位・交互に施文。内面横・縦位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	26	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	附加条第2種のLR+R2本と同RL+L2本の縄文を横位に施して羽状を構成。内面横位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	27	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/5	口底	(10.4)	高	A4	LR・RL縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面横位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	28	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	LR縄文を斜位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	29	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部1/5	口底	(21.8)	高	A4	やや粗大なLR縄文を横位施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	有尾式
第126図 PL.126	30	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	L縄文を横位施文。内面一部に被熱剥離。	有尾式
第126図 PL.126	31	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条RL縄文を横位施文。内面一部に煤状炭化物付着、やや被熱風化。	有尾式
第126図 PL.126	32	縄文土器 深鉢	10cm 胴部下半～底部 1/5	口底	9.6	高	A4	RLとLR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第126図 PL.126	33	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	半截竹管の平行沈線文や小振りのコンパス文を交互に多段施文。内面横位磨き。	黒浜式
第126図 PL.126	34	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	沈線文によりやや乱雑な斜格子意匠を構成。外面煤状炭化物付着、内外面共に被熱風化・剥離。	黒浜式?
第126図 PL.127	35	剥片石器 石鏃	埋土中 4/5	長幅	2.2 (1.5)	厚重 0.5 1.0	黒色頁岩	押圧剥離により整形する。右脚部欠損。	凹基無茎鏃
第126図 PL.127	36	剥片石器 削器	2cm ほぼ完形	長幅	(7.7) 4.6	厚重 1.2 31.5	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。縦長剥片を素材とする。両側縁に二次加工が集中するが、左側縁は主要剥離面側に右側縁は主要剥離面側と背面側の両面に二次加工痕が認められる。	
第126図 PL.127	37	礫石器 凹石	埋土中 完形	長幅	11.6 8.5	厚重 4.2 641.4	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面の中央に浅い凹みが認められ、裏面の中央には敲打痕が集中する。表裏面のほぼ全面には磨面が認められ、側面部との境界付近には稜が形成される。側面部には敲打痕が散在する。	
第126図 PL.127	38	礫石器 凹石	埋土中 ほぼ完形	長幅	12.8 (7.6)	厚重 3.4 462.8	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面の中央に、縦方向に小さな凹みが連続する。表裏面の中央付近に磨面が認められる。	
第126図 PL.127	39	礫石器 磨石	床直 完形	長幅	8.3 3.9	厚重 2.9 151.0	粗粒輝石安山岩	小形棒状円礫を利用する。表面のやや上方、裏面のやや下方に敲打痕が集中する。表裏面に磨面が認められる。	

4区35号住居出土遺物

第128図 PL.127	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	双頭状の波状口縁か。半截竹管の梯子状沈線文や貼付文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅰ式
第128図 PL.127	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	波状口縁。半截竹管の梯子状沈線文をV字状に施文。内面横位磨き。	関山Ⅰ式
第128図 PL.127	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	0段多条RL・LR縄文を横位・交互に多段施文して羽状の意匠を構成。外面やや被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅰ式
第128図 PL.127	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A7	RL・LR縄文を横位・交互に施文し、半截竹管の爪形文を施す。内面被熱風化。	関山Ⅰ式
第128図 PL.127	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	RL縄文を横位施文し、隆帯文を横位に施す。内面横位磨き。	関山Ⅰ式
第128図 PL.127	6	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口底		高	A3	LR縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第128図 PL.127	7	縄文土器 深鉢	11cm 胴部片	口底		高	A5	RL・LR縄文を横位・交互に多段施文して羽状の意匠を構成し、半截竹管のコンパス文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第128図 PL.127	8	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	1段縄丸組紐を横位に施文し、櫛歯状工具のコンパス文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第128図 PL.127	9	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互に施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第128図 PL.127	10	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	0段多条のLR・RL縄文を横位・交互に施文。外面被熱風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第128図 PL.127	11	縄文土器 深鉢	12cm 胴部片	口底		高	A8	0段多条LR縄文を横位施文。内外面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
第128図 PL.127	12	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	0段多条RL縄文を横位施文し、櫛歯状工具の連点状刺突沈線文を横位に5条施す。内面横位磨き。	有尾式
第128図 PL.127	13	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	RL・LR縄文を横位施文し、筥状工具の斜位短沈線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	黒浜式
第128図 PL.127	14	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	B2	波状口縁。外削ぎ状の口縁に棒状工具による短沈線状の刻み目を連続施文し、以下にやや低平な刻み目隆帯を横位に施す。内面やや被熱風化。	清水ノ上Ⅱ式系
第128図 PL.127	15	剥片石器 削器	埋土中 完形	長幅	5.7 3.6	厚重 1.4 25.9	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残り、縦長剥片を素材とする。自然面を大きく残す。円礫を利用する。下端部が機能部と想定され、主に片面加工で急角度の二次加工が認められる。	
第128図 PL.127	16	剥片石器 石鏃	埋土中 2/3	長幅	(1.1) 1.3	厚重 0.3 0.3	黒曜石	押圧剥離により整形する。先端部欠損。	凹基無茎鏃

5区16号住居出土遺物

第129図 PL.127	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E4	口縁部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施し、矢羽根状の単沈線文を充填的に施文。胴部はLR縄文を縦位施文し、沈線の横線文や懸垂文を施す。外面口縁部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利E2式
第129図 PL.127	2	縄文土器 深鉢	9cm 口縁部片	口底		高	E2	口縁部に突起状の渦巻文を貼付し、半截竹管の横位平行沈線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	三原田式
第129図 PL.127	3	縄文土器 深鉢	22cm 口縁部片	口底		高	B4	口唇部内面側に隆帯を貼付して複合口縁的に成形。横位の隆帯文を基軸にして棒状工具の半肉彫的な沈線文を施す。	焼町土器
第129図 PL.127	4	縄文土器 深鉢	8cm 口縁部片	口底		高	E2	口唇部がく字状に内折し、外端部に押圧を加えて波状の意匠を構成。RL縄文を斜位・散漫に施文。内面丁寧な横位磨き。	三原田式
第129図 PL.127	5	縄文土器 浅鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E4	無文浅鉢。内外面共に横位磨き。	加曾利E3式
第129図 PL.127	6	縄文土器 深鉢	29cm 突帯部	口底		高	H1	口縁部に付設された縦長の立体的な把手。隆帯のS字状渦巻文を縦位に構成し、棒状工具の背割り状沈線文や短沈線文及びRL縄文を表裏面に施す。	新巻類型
第129図 PL.127	7	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E4	無文深鉢か。外面やや粗い横位磨き、内面やや被熱風化。	加曾利E3式
第129図 PL.127	8	縄文土器 浅鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E4	無文浅鉢。内外面共に横位磨き、やや被熱風化。	加曾利E3式
第129図 PL.127	9	縄文土器 浅鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D5	く字状に内折する口縁部に沈線の円文を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利E1式
第129図 PL.127	10	縄文土器 浅鉢	埋土中 頸部～胴部片	口底		高	G1	口縁部がく字状に外折。頸部に隆帯の楕円区画文を施し、短沈線を充填施文。内面やや被熱風化。	加曾利E2式
第129図 PL.127	11	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D6	胴部にRL・LR縄文を交互に縦位施文して羽状を構成し、横位隆帯文や直線・波状の懸垂文を施す。内面被熱風化。	加曾利E2式
第129図 PL.127	12	剥片石器 打製石斧	埋土中 1/3	長幅	(6.3) (4.3)	厚重 (2.3) 56.7	変質安山岩	裏面に自然面を大きく残り円礫を利用する。	短冊形

5区17A号住居出土遺物

第132図 PL.128	1	縄文土器 深鉢	35cm 口縁～胴部片	口底	(38.8)	高	E4	4単位の波状口縁。口縁部は波頂下の隆帯渦巻文に接続して楕円区画文を施し、RL縄文を充填施文。胴部は楕円区画文や腕手状懸垂文を上下2段に構成し、RL縄文を充填施文。外面胴下半部に煤状炭化物付着。内面口縁-胴部上半横位磨き、胴部下半縦位磨き・やや被熱風化。	加曾利E3式
第132図 PL.128	2	縄文土器 深鉢	22cm 口縁部片	口底		高	E4	RL縄文を縦位施文。口縁部に低平な幅広隆帯の楕円区画文を、胴部に平行・蛇行状懸垂文を交互に施す。外全面、内面一部に煤状炭化物付着。内外面共に被熱風化。	加曾利E3式
第132図 PL.128	3	縄文土器 深鉢	25cm 胴部片	口底		高	E4	平行沈線懸垂文を施し、間隙部にRL縄文を充填的に縦位施文。内外面共にやや被熱風化。外面一部、内面全体に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第132図 PL.128	4	縄文土器 深鉢	26cm 底部1/3	口底	(9.0)	高	E4	平行沈線懸垂文を施し、間隙部にRL縄文を充填的に縦位施文。内面被熱風化、胴部上半煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第132図 PL.128	5	縄文土器 浅鉢	33cm 口縁部片	口底		高	E4	RL縄文を縦位施文し、口縁部に凹線状の幅広沈線を横位に施す。内面横位磨き。	加曾利E3式
第132図 PL.128	6	縄文土器 浅鉢	2cm 口縁部片	口底		高	E5	無文浅鉢。外面にベンガラ状の赤色塗彩。内面横位磨き。	加曾利E3式
第132図 PL.128	7	縄文土器 浅鉢	5cm 口縁部片	口底		高	E4	無文浅鉢。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E3式
第132図 PL.128	8	縄文土器 深鉢	25cm 胴部片	口底		高	E4	櫛歯状工具の蛇行条線文を施す。内面縦位磨き。	加曾利E3式
第132図 PL.128	9	縄文土器 浅鉢	床直 口縁部片	口底		高	C5	無文浅鉢。内外面共に横位磨き。	加曾利E3式
第132図 PL.128	10	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底		高	E4	RL縄文を横位施文し、逆U字状の隆帯懸垂文や隆帯波状文を施す。外面胴部上半に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	曾利式系
第132図 PL.128	11	縄文土器 深鉢	3cm 口縁部片	口底		高	E4	立体的な中空状のS字隆起帯を施し、棒状工具の刻みや円文・直線文などを施文。内面横位磨き。	三原田式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第132図 PL.128	12	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口底		高	E4	RL縄文を縦位施文し、4本沈線の懸垂文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式	
第132図 PL.128	13	縄文土器 深鉢	9cm 口縁部片	口底		高	B4	RL縄文を縦位施文。口縁部に棒状工具の交互刺突で鋸歯状文を描出し、下位に単沈線の連弧文や横線文を施す。内面丁寧な横位磨き。	加曾利E2式	
第133図 PL.128	14	縄文土器 深鉢	炉埋設 底部ほぼ完存	口底	8.1	高	E2	炉埋設土器。L燃糸文を縦位施文。外底面に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E2式	
第133図 PL.128	15	縄文土器 土器片加工 円板	53cm 完存	径厚	4.7 1.9	重	33.8	D6	大型深鉢の胴部破片を円形状に打割整形し、全周に摩耗痕を持つ。	加曾利E3式
第133図 PL.128	16	縄文土器 土器片加工 円板	埋土中 完存	径厚	3.3 0.8	重	10.9	E2	深鉢の胴部破片を円形状に打割整形するが、周縁部に摩耗痕を持たない。	不明
第133図 PL.128	17	剥片石器 打製石斧	8cm 完形	長幅	8.7 4.6	厚重	1.2 54.6	細粒輝石安山岩	裏面に自然面を大きく残す。円礫を利用する。両側縁、下端部は両面加工である。	撥形
第133図 PL.128	18	礫石器 多孔石	12cm 完形	長幅	15.8 12.7	厚重	5.2 1756.3	ひん岩	扁平な亜円礫を利用する。正面の左方に小さな漏斗状の孔が認められる。孔の内部は比較的滑らかである。	

5区17B号住居出土遺物

第133図 PL.129	1	縄文土器 深鉢	27cm 胴部片	口底		高	J1	胴部にRL・LR縄文を交互に縦位施文し、羽状を構成。括れ部に横位隆帯を施す。内面被熱風化。	加曾利E3式	
第133図 PL.129	2	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底		高	H2	胴部にRL縄文を縦位施文し、括れ部に半截竹管の重ね引き横線文を施す。内面横位磨き。	三原田式	
第133図 PL.129	3	縄文土器 深鉢	24cm 口縁部片	口底		高	E4	RL縄文を口縁部に横位、胴部に縦位施文。く字状に緩く内折する口縁部に瘤状の突起を付す。外面口唇部に煤状炭化物付着、内面煤状炭化物付着。	三原田式	
第133図 PL.129	4	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底		高	H2	L燃糸文を縦位施文し、括れ部に半截竹管の横線文を施す。内外面共に被熱風化。	三原田式	
第133図 PL.129	5	縄文土器 深鉢	31cm 胴部片	口底		高	G1	櫛歯状工具の縦位条線文を施し、刺突文を充填した沈線懸垂文や畷手状の文様を施文。内面丁寧な縦位磨き。	曾利式系	
第133図 PL.129	6	縄文土器 浅鉢	15cm 口縁部片	口底		高	J1	無文浅鉢。内外面共に横位磨き。	加曾利E3式	
第133図 PL.129	7	縄文土器 浅鉢	23cm 口縁部片	口底		高	C5	無文浅鉢。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利E2式	
第133図 PL.129	8	剥片石器 打製石斧	37cm 完形	長幅	9.0 4.8	厚重	2.3 114.4	黒色頁岩	片面に自然面を残す。円礫を利用する。右側片の先端部付近に摩滅が認められ使用痕の可能性が高い。中央やや上方に部分的な摩滅があり、両側片の中央付近にはつづれが認められ着柄痕の可能性が高い。	短冊形
第133図 PL.129	9	礫石器 磨石	21cm 1/2	長幅	(8.4) (7.9)	厚重	(4.8) 507.7	粗粒輝石安山岩	小形円礫の両面に磨面が認められる。両面には浅い凹みがそれぞれ1箇所認められる。	
第133図 PL.129	10	礫石器 凹石	32cm 完形	長幅	10.3 9.1	厚重	5.5 663.2	溶結凝灰岩	表裏面の中央に漏斗状の凹みが認められる。側面部に敲打痕が散在する。	
第133図 PL.129	11	礫石器 多孔石	1cm 1/2	長幅	23.6 (17.8)	厚重	8.3 4341.8	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面と裏面に漏斗状の孔と不定形の孔が散在する。孔の内部は細かな凹凸が認められる。	

5区17A・B号住居出土遺物

第133図 PL.129	1	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅	2.8 2.7	厚重	1.0 8.6	黒色安山岩	上下端に両極加撃痕が認められる。右側片に剪断面が認められる。裏面中央の大きな剥離面も剪断面である。	
第133図 PL.129	2	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅	11.1 4.2	厚重	1.5 66.6	細粒輝石安山岩	表裏面に素材剥片の剥離面を大きく残す。大形の横長剥片を素材とする。両側片の中央付近につづれが認められ着柄痕の可能性が高い。先端の刃部には微細剥離痕が認められ使用痕の可能性があり、素材剥片の縁部をそのまま刃部として利用したことが想定される。	短冊形
第133図 PL.129	3	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅	8.4 4.0	厚重	1.6 68.9	細粒輝石安山岩	裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。表面の先端から中央付近を中心に部分的な摩滅が認められる。	短冊形

5区18号住居出土遺物

第136図 PL.129	1	縄文土器 深鉢	28cm 口縁部片	口底		高	E4	胴部にL燃糸文を縦位施文。口縁部に半截竹管の重ね引き横線文を施し、上・下端の沈線に交互刺突を加えて鋸歯状文を描出。内面やや被熱風化。	三原田式
第136図 PL.129	2	縄文土器 深鉢	40cm 胴部片	口底		高	D7	L燃糸文を縦位施文し、隆帯の蛇行状懸垂文を施す。内面やや被熱風化。	加曾利E1式
第136図 PL.129	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部1/3	口底		高	E2	RL縄文を斜位施文し、波状や直線状の隆帯懸垂文を交互に施す。内外面共に被熱風化・煤状炭化物付着。	加曾利E1式
第136図 PL.129	4	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/4	口底	(6.9)	高	E4	RL縄文を縦位施文し、3本沈線懸垂文や蛇行状懸垂文を交互に施す。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E2式
第136図 PL.129	5	縄文土器 深鉢	30cm 口縁部片	口底		高	E4	口縁がく字状に外折する浅鉢。頸部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施し、矢羽根状の短沈線を充填施文。内面横位磨き。	加曾利E2式
第136図 PL.129	6	縄文土器 深鉢	16cm 胴部片	口底		高	E4	RL縄文を縦位施文し、直線・波状の沈線懸垂文や列点状の刺突文を施す。内面被熱風化、煤状炭化物付着。	加曾利E2式
第136図 PL.129	7	縄文土器 小型浅鉢	埋土中 口縁部1/5	口底	(12.8)	高	C5	無頸壺的な小型無文浅鉢。外面一部に煤状炭化物付着、内面被熱剥離。	加曾利E1-E2式
第136図 PL.129	8	縄文土器 浅鉢	39cm 口縁部片	口底		高	E5	無文浅鉢。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利E2式
第136図 PL.129	9	縄文土器 深鉢	30cm 胴部片	口底		高	H2	重弧状の短沈線地文を施す。3本沈線懸垂文を施し、区画内を擦り消す。内外面共に被熱風化。	郷土式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第136図 PL.129	10	縄文土器 深鉢	32cm 胴部片	口底		高	E5	懸垂状や曲線状の隆帯文を基軸にして、半截竹管の重ね引き曲線文を施す。内面被熱風化、煤状炭化物付着。	焼町土器
第136図 PL.129	11	縄文土器 深鉢	53cm 胴部片	口底		高	G1	縦位沈線地文を施し、一部の沈線内に横位の刻目を施文。外面やや被熱風化。	曾利式系
第136図 PL.129	12	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅	10.6 4.3	厚重 1.8 86.1	細粒輝石安山岩	裏面に自然面を大きく残し、円礫を利用する。先端部から右側縁下方にかけて強い摩滅が認められ使用痕の可能性が	短冊形
第136図 PL.129	13	剥片石器 打製石斧	31cm 2/3	長幅	(8.4) (4.5)	厚重 (2.4) 99.6	細粒輝石安山岩	表面中央の稜線上に摩滅が認められ、両側片の中央付近には摩滅とつぶれが認められる。いずれも着柄痕の可能性が	短冊形
第136図 PL.129	14	礫石器 磨石	33cm 1/2	長幅	(6.5) (5.7)	厚重 5.3 270.0	粗粒輝石安山岩	小形棒状礫の両面に磨面が認められる。片面には漏斗状の浅い凹みをもつ。	
第136図 PL.129	15	礫石器 石錘	39cm 完形	長幅	7.6 3.4	厚重 1.7 60.7	砂岩	小形円礫を利用する。上下端に断面V字の刻み状の加工が認められる。加工の内面は滑らかである。	

5区19号住居 出土遺物

第137図 PL.130	1	縄文土器 深鉢	炉埋設 口縁部～胴部上 半完存	口底	20.9	高	E5	炉埋設土器。L燃糸文を口縁部に横位、胴部に縦位施文。口縁部に2本隆帯のS字文や突起状の渦巻文を4単位に施す。内面被熱風化。	加曾利E2式
第137図 PL.130	2	縄文土器 深鉢	12cm 口縁部～胴部中 位1/3	口底	(20.5)	高	G1	口縁部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施し、矢羽根状の短沈線文を充填的に施文。胴部はRL縄文を斜位施文し、横線文や直線・蛇行状の懸垂沈線文を施す。内面煤状炭化物付着。4と同一個体。	加曾利E2式
第137図 PL.130	3	縄文土器 深鉢	1cm 口縁部～胴部1/3	口底		高	E2	小突起を付す波状口縁。RL縄文を口縁部に横位、胴部に縦位施文。口縁部は2本隆帯のS字状渦巻文を施す。外面やや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。内面被熱風化、煤状炭化物付着。	加曾利E2式
第137図 PL.130	4	縄文土器 深鉢	19cm 口縁部片	口底		高	G1	口縁部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施し、矢羽根状の短沈線文を充填的に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。2と同一個体。	加曾利E2式
第137図 PL.130	5	縄文土器 深鉢	16cm 口縁部～底部片	口底	(8.0)	高	E4	LR縄文を縦位施文し、直線状と鋸歯状の沈線懸垂文を交互に施す。内面やや被熱風化。	加曾利E2式
第137図 PL.130	6	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E5	口唇上面に2条の沈線文を施す。口縁部以下にはRL縄文を縦位施文。内面被熱風化。	加曾利E2式
第137図 PL.130	7	縄文土器 深鉢	10cm 口縁部片	口底		高	E5	口縁部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施し、縦位の短沈線文を充填的に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E2式
第137図 PL.130	8	縄文土器 浅鉢	18cm 口縁部片	口底		高	C2	無文浅鉢。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利E2式
第138図 PL.130	9	縄文土器 浅鉢	20cm 口縁部片	口底		高	J1	無文浅鉢。内外面共に赤色塗彩するが、漆塗りの可能性もある。丁寧な横位磨き。	加曾利E2式
第138図 PL.130	10	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口底		高	E2	RL縄文を斜位施文し、括れ部に横位沈線文や横位隆帯を上下方向から押圧した波状文を施す。内面横位磨き。	加曾利E1式
第138図 PL.130	11	縄文土器 深鉢	19cm 頸部1/2	口底		高	E5	RL縄文を斜位施文し、燃糸文的な縦位条を構成。口縁部に棒状工具の交互衝突による鋸歯状文を作出し、下に横位隆帯文を施す。括れ部に半截竹管の重ね引き横線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面被熱風化。	三原田式
第138図 PL.130	12	縄文土器 深鉢	18cm 胴部片	口底		高	E4	RL縄文を斜位施文し、隆帯の横線文や蛇行状懸垂文を施す。内面やや被熱風化。	加曾利E1式
第138図 PL.130	13	縄文土器 深鉢	9cm 底部片	口底	(10.0)	高	E4	L燃糸文を縦位施文。内面やや被熱風化。	加曾利E1-E2式
第138図 PL.130	14	縄文土器 深鉢	4cm 底部4/5	口底	8.2	高	E4	RL縄文を縦位施文。内外面共に被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	加曾利E2式
第138図 PL.130	15	縄文土器 深鉢	18cm 胴部片	口底		高	E2	半截竹管の重ね引き平行沈線文を施し、間隙にRL縄文を充填的に施文。	加曾利E1式併行
第138図 PL.130	16	縄文土器 浅鉢	3cm 口縁部片	口底		高	C4	口縁部に横位沈線文や隆帯渦巻文を施す。内外面共に横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	加曾利E1式
第138図 PL.130	17	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅	4.6 4.0	厚重 1.2 28.5	黒色安山岩	上下端に両極加撃痕が集中する。左右両端にもわずかであるが両極加撃痕が認められる。上面に自然面を大きく残す。円礫を利用する。	
第138図 PL.130	18	剥片石器 打製石斧	13cm 2/3	長幅	(10.3) 6.2	厚重 2.9 262.6	変質玄武岩	裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。先端の刃部はほぼ片面加工でありエンドスクレイパーの刃部形態に類似する。	短冊形?
第138図 PL.130	19	礫石器 凹石	床直 完形	長幅	9.3 7.2	厚重 3.7 346.4	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面のほぼ中央と上方に浅い凹みが認められる。裏面のほぼ中央には浅い凹みが2箇所認められる。右側面には敲打痕が集中する。表面のほぼ全域と裏面の一部には磨面が認められる。	
第138図 PL.130	20	礫石器 石皿	床直 2/3	長幅	(20.0) (16.2)	厚重 (7.2) 2815.4	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面の中央に浅い凹み状の磨面が認められる。	
第138図 PL.130	21	礫石器 多孔石	埋土中 完形?	長幅	19.4 17.7	厚重 13.8 5457.9	粗粒輝石安山岩	下側面と裏面に自然面を大きく残し角礫を利用する。正面と上側面に浅い孔が散在する。	
第138図 PL.130	22	礫石器 多孔石	炉内 不明	長幅	(12.0) (7.7)	厚重 (5.7) 480.4	粗粒輝石安山岩	正面に漏斗状の孔が認められる。正面と裏面は平坦であり石皿あるいは台石からの転用の可能性がある。	

5区22号住居 出土遺物

第139図 PL.131	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、波状の沈線懸垂文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利E2式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	--	--------

5区23号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高				
第140図 PL.131	1	縄文土器 深鉢	20cm 口縁部～胴上位 1/2	口底	(23.8)	高	E5	L燃糸文を口縁部に横位、胴部に縦位施文。口縁部に2本隆帯のS字状渦巻文を4単位に施し、括れ部に横位沈線文を施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E1式
第140図 PL.131	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	櫛歯状工具のやや粗大なコンパス文を施す。内面横位磨き、内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式

5区24号住居出土遺物

第140図 PL.131	1	縄文土器 深鉢	3cm 胴部片	口底		高	F1	いわゆる体部屈曲鉢。内外面共に燻べ焼きの黒色を帯び、横位磨き。	堀之内2式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	---------------------------------	-------

7区49号住居出土遺物

第142図 PL.131	1	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部～胴部 1/4	口底	(40.0)	高	H1	頸部-胴部にL燃糸文を縦位施文。口縁部に隆線の区画文や渦巻文を施し、縦位の短沈線を充填。2本単位隆線を胴括れ部に横位、懸垂文を複数単位施す。	加曾利E2式
第142図 PL.131	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	口縁部に隆線の区画文を施し、縦位や矢羽根状の単沈線を重点。	加曾利E2式
第142図 PL.131	3	縄文土器 深鉢	炉埋設 頸部～胴下半部 充存	口底		高	H1	炉埋設土器。櫛歯状工具の集合沈線を縦位全面施文。頸部に単沈線を5-8本粗雑に周回させ、U字状や直線状の懸垂文を7単位施文。	加曾利E2式
第142図 PL.131	4	縄文土器 深鉢	9cm 口縁部片	口底		高	E5	RL縄文を縦位施文。複数本の単沈線により括れ部や胴部に文様を構成。	加曾利E2式
第142図 PL.131	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文。沈線の逆U字文を施す。	加曾利E2式
第142図 PL.131	6	縄文土器 浅鉢	24cm 口縁部片	口底		高	E5	口縁部が大きく外反する無文浅鉢。内外面共に横位の縦磨き。	加曾利E2式
第142図 PL.131	7	縄文土器 浅鉢	埋土中 頸部片	口底		高	E5	体部中位でく字状に内折する浅鉢。幅広沈線により文様構成。内面横位磨き。	加曾利E2式
第142図 PL.131	8	縄文土器 浅鉢	19cm 口縁部片	口底		高	E5	口縁端部が短く肥厚・外反する無文浅鉢。内外面共に横位磨き。	加曾利E2式
第142図 PL.131	9	剥片石器 石鏃	埋土中 完形	長幅 1.7 1.8	厚重 0.3 0.7		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。片面の中央付近の稜線上に部分的な弱い摩滅が認められる。	凹基無茎鏃
第142図 PL.131	10	剥片石器 石鏃	埋土中 4/5	長幅 (2.4) (1.5)	厚重 0.5 0.7		珪質頁岩	押圧剥離により整形する。先端部及び右脚部欠損。	凹基無茎鏃
第142図 PL.131	11	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅 8.1 4.3	厚重 1.6 59.4		粗粒輝石安山岩	表面の中央に素材剥片の剥離面を大きく残す。裏面には自然面を大きく残す。円礫を利用する。両側片の中央付近にはつづれが認められ着柄痕の可能性ある。	短冊形
第142図 PL.131	12	剥片石器 打製石斧	30cm 1/2	長幅 (7.0) (4.6)	厚重 2.3 94.6		細粒輝石安山岩	裏面に自然面を大きく残す。円礫を利用する。両側片の下半部にはつづれが認められ着柄痕の可能性ある。	短冊形?

7区54号住居出土遺物

第143図 PL.131	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、懸垂文間を磨り消す。内面被熱風化。	加曾利E3式
第143図 PL.131	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	沈線区画文内にLR縄文を充填する。外面に煤炭炭化物付着。	称名寺Ⅰ式
第143図 PL.131	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁。短く内折する口部に横位の太沈線文や刺突文を施す。	堀之内1式
第143図 PL.131	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁。短く内折する口部に横位の太沈線文や押し引き状の連続刺突文を施す。	堀之内1式
第143図 PL.131	5	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	口縁部が無文の深鉢。外面横位磨き、内面横位磨き。	堀之内1式
第143図 PL.131	6	縄文土器 深鉢	1cm 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁。口縁が短く内折する。	堀之内1式
第143図 PL.131	7	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B5	結節沈線の横帯文や懸垂文を施す。外面横・斜位磨き、内面横位磨き。	五領ヶ台式
第143図 PL.131	8	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅 4.9 4.0	厚重 1.3 26.7		黒色頁岩	上下端と左右端に両極加撃痕が認められる。	
第143図 PL.131	9	礫石器 磨石	埋土中 完形	長幅 10.3 5.2	厚重 4.0 280.3		粗粒輝石安山岩	棒状の円礫を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の中央付近に部分的な敲打痕がある。上端に敲打痕が認められる。	

7区55号住居出土遺物

第144図 PL.132	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	口縁部がく字状に屈曲・外反。口縁部に半截竹管の横位平行沈線文を複数条施し、下位の横位隆帯文に指頭状の押圧を連続して加える。頸部にRL縄文を縦・斜位に施文。	三原田式
第144図 PL.132	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文。横位隆線を直線・波状に廻らせる。	加曾利E1式
第144図 PL.132	3	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口底		高	H1	口縁部に単隆線で渦巻文や楕円区画文を施し、羽状沈線文を施文。	加曾利E2式
第144図 PL.132	4	縄文土器 浅鉢	26cm 口縁～胴部片	口底		高	H1	体部中位でく字状に内折する浅鉢。2本単位の隆線文や渦巻文による区画内に縦位の短沈線を充填し、部分的に円形刺突文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式
第144図 PL.132	5	縄文土器 浅鉢	12cm 口縁部片	口底		高	E5	口縁端部が肥厚する無文浅鉢。内外面共に横位磨き。	加曾利E2式
第144図 PL.132	6	礫石器 石皿	17cm 不明	長幅 (18.4) (13.0)	厚重 (7.1) 1915.3		粗粒輝石安山岩	裏面は全体的に自然面が残ると判断され円礫を利用する。裏面には漏斗状の孔が散在する。正面の中央には浅い凹み状の磨面が認められる。正面の外縁部は平滑であり整形痕と判断される。	

7区56号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高さ	重量			
第146図 PL.132	1	縄文土器 深鉢	埋設土器 口縁部～胴部 1/3	口底	23.0	高	H1	頸部-胴部にRL縄文を縦位施文。口縁部に1-2本隆線で渦巻文や楕円区画文を施し、羽状沈線文を施文。頸部-胴部に隆線の平行・蛇行懸垂文を施す。	加曾利E2式
第146図 PL.132	2	縄文土器 深鉢	16cm 口縁部片	口底		高	H1	頸部-胴部にL燃糸文を縦位施文。口縁部に単隆線の渦巻文や沈線区画文を施し、羽状沈線文を施文。括れ部や胴部に幅広沈線の横線文や懸垂文を施す。	加曾利E2式
第146図 PL.132	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	単隆線の区画文を施し、羽状沈線文を施文。	加曾利E2式
第146図 PL.132	4	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口底		高	H1	単隆線の区画文を施し、羽状短沈線文を施文。	加曾利E2式
第146図 PL.132	5	縄文土器 深鉢	24cm 口縁部片	口底		高	H1	胴部にLR縄文を縦位施文。口縁部に幅広隆帯で渦巻文や楕円区画文を施し、羽状沈線文を施文。	加曾利E2式
第146図 PL.132	6	縄文土器 深鉢	7cm 口縁部片	口底		高	H1	頸部-胴部にRL縄文を縦位施文。口縁部に単隆線の渦巻文や区画文を施し、区画内に縦位の短沈線文を施文。	加曾利E2式
第146図 PL.132	7	縄文土器 深鉢	8cm 口縁部片	口底		高	E5	口縁部に単隆線の区画文を施し、羽状沈線文を施文。	加曾利E2式
第147図 PL.132	8	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文。単沈線により横線文や区画文を施す。内外面共に煤状炭化物付着。	加曾利E2式
第147図 PL.132	9	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、3本単位の沈線懸垂文を施す。内面に煤状炭化物付着。	加曾利E2式
第147図 PL.132	10	縄文土器 深鉢	12cm 胴～底部1/3	口底	8.8	高	H1	RLR縄文を縦位施文。内外面共に被熱風化。	加曾利E2式
第147図 PL.132	11	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、半截竹管の平行懸垂文を施す。	加曾利E2式
第147図 PL.132	12	縄文土器 深鉢	18cm 胴部片	口底		高	H1	粗雑なLR縄文を縦位施文。単沈線の横線文や懸垂文を施す。内面やや被熱風化。	加曾利E2式
第147図 PL.132	13	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位に施文し、半截竹管の平行沈線により横線文や懸垂文を施す。	加曾利E2式
第147図 PL.132	14	縄文土器 深鉢	27cm 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦・斜位に施文。3本の単沈線で逆U字状の懸垂文を施す。	加曾利E2式
第147図 PL.132	15	縄文土器 深鉢	12cm 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文し、単沈線の蛇行・平行状懸垂文を施す。	加曾利E2式
第147図 PL.132	16	縄文土器 深鉢	8cm 胴部片	口底		高	H1	R燃糸文を縦位施文。3本単沈線の連弧文を施す。	加曾利E2式
第147図 PL.132	17	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文。3本沈線の渦巻文または横位S字文を構成か。	加曾利E2式
第147図 PL.132	18	縄文土器 深鉢	15cm 底部1/4	口底	(9.6)	高	H1	隆線懸垂文を施す。底外面に網代痕。	加曾利E2式
第147図 PL.133	19	縄文土器 深鉢	16cm 口縁部片	口底		高	H1	口縁部がく字状に内折する深鉢。口縁部RL縄文を斜位施文し、棒状工具の交互刺突による鋸歯文や沈線区画文を施す。	三原田式
第147図 PL.133	20	縄文土器 浅鉢	17cm 胴部片	口底		高	H1	口縁部がく字状に外折する浅鉢。体部にやや幅広隆帯の渦巻文や区画文を施し、LR縄文を横位施文。	加曾利E2式
第147図 PL.133	21	縄文土器 浅鉢	57cm 口縁部片	口底		高	E5	口縁部が外傾する無文浅鉢。内外面共に横位磨き。	加曾利E2式
第147図 PL.133	22	縄文土器 浅鉢	15cm 口縁部片	口底		高	E5	口唇外端が肥厚する浅鉢。口唇上面-内面に赤色塗彩。	加曾利E2式
第147図 PL.133	23	縄文土器 深鉢	15cm 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文。2本の隆線懸垂文を施す。	加曾利E1式
第147図 PL.133	24	縄文土器 土器片加工 円板	埋土中 完存	径厚 3.0 0.7	重	10.1	H1	土器片を円形状に打割整形し、周縁部2箇所磨耗痕を持つ。	諸磯b式
第147図 PL.133	25	剥片石器 打製石斧	埋土中 2/3	長幅 (7.0) (4.2)	厚重 (1.3) 50.6		黒色頁岩	表裏面に素材剥片の剥離面を大きく残す。先端部欠損。	短冊形
第147図 PL.133	26	礫石器 凹石	5cm 完形	長幅 10.4 6.4	厚重 3.2 309.0		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表面のほぼ中央に浅い凹みが2箇所認められる。裏面の中央付近にもわずかに敲打の痕跡が残る。	
第147図 PL.133	27	礫石器 石皿	12cm 不明	長幅 (15.6) (8.6)	厚重 (3.5) 427.2		緑色片岩	正面の中央に浅い凹み状の非常に滑らかな磨面が認められる。	
第147図 PL.133	28	礫石器 石皿	33cm 1/4	長幅 (24.8) (17.2)	厚重 (10.4) 3869.5		粗粒輝石安山岩	正面と裏面の中央に浅い凹み状の磨面が認められ石皿の転用と考えられる。正面と裏面を中心に漏斗状の孔が多数認められる。	

7区57号住居出土遺物

第149図 PL.133	1	縄文土器 深鉢	床直 口縁部～胴部 1/4	口底	(48.0)	高	A4	双頭状の波状口縁で口唇部は内削ぎ状。0段縄丸組紐を横位多段に全面施文。口縁部に半截竹管の重ね引きによる羊角文や弧線文を構成し、頸部-括れ部に横位のコンパス文や連続菱形文を施す。外面に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第149図 PL.133	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	双頭状の波状口縁。附加条第1種LR+Lと同RL+R縄文を横位多段施文し、菱形状以上を構成。半截竹管の平行沈線で鋸歯文やコンパス文を施文。	関山Ⅱ式
第149図 PL.133	3	縄文土器 深鉢	4cm 胴部片	口底	(31.0)	高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文し、胴部下位にコンパス文を施す。	関山Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第149図 PL.133	4	縄文土器 深鉢	9cm 口縁～胴部片	口 底		高	A4	双頭状の小突起を持つ波状口縁。RL環付縄文を4段に横・斜位施文して菱形意匠を構成し、その中央部に半截竹管の菱形文を入れ子状に施す。	関山Ⅱ式	
第149図 PL.133	5	縄文土器 深鉢	12cm 口縁部片	口 底		高	A4	附加条第1種RL+Lと同RL+R縄文を横位多段施文し、菱形意匠を構成。口縁部に半截竹管のコンパス文を施文。	関山Ⅱ式	
第149図 PL.133	6	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部下半～底部 1/2	口 底	(11.0)	高	A4	0段多糸RLとLR環付縄文とRL・LR縄文を交互に横位多段施文し、菱形意匠を構成。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第149図 PL.133	7	縄文土器 深鉢	8cm 胴部片	口 底		高	A4	R縄の丸組紐を横位多段に施文し、胴部下にコンパス文を施す。	関山Ⅱ式	
第149図 PL.134	8	縄文土器 深鉢	3cm 胴部下半～底部 1/2	口 底	(8.0)	高	A4	L縄文を縦位施文。底面やや上げ底。外面被熱風化。	関山Ⅱ式	
第149図 PL.134	9	縄文土器 深鉢	24cm 口縁部～胴部片	口 底	(48.0)	高	G1	平坦な口唇部。L縄文を横位多段に施文。	関山Ⅱ式	
第149図 PL.134	10	剥片石器 石匙	10cm 完形	長 幅	5.4 1.8	厚 重	0.8 6.9	チャート	面的な二次加工により丁寧に整形する。両側縁の下方はわずかに鋸歯状を呈する。	縦型
第149図 PL.134	11	礫石器 凹石	1cm 完形	長 幅	11.4 6.9	厚 重	4.8 426.0	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央に浅い凹みが2箇所認められる。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面に多方向の線条痕が集中する。	
第149図 PL.134	12	礫石器 磨石	4cm 完形	長 幅	12.0 6.5	厚 重	3.9 470.7	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央に、縦方向に敲打痕が連続する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。下端部に敲打痕が集中する。	

7区58号住居出土遺物

第151図 PL.134	1	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高	H1	沈線区画文を施し、各空隙部分にL縄文を充填。外面煤状炭化物付着。	称名寺Ib式	
第151図 PL.134	2	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高	H1	やや粗雑な微隆起線文を施し、空隙部分にLR縄文を充填。	加曾利E5式	
第151図 PL.134	3	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口 底		高	H1	Y字状の沈線区画文内にLR縄文を充填。内外面共にやや風化。	称名寺Ic式	
第151図 PL.134	4	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口 底		高	H1	J字状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填。	称名寺Ic式	
第151図 PL.134	5	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口 底		高	H1	沈線区画文内にLR縄文を充填。内外面共に横磨き。	称名寺Ic式	
第151図 PL.134	6	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部片	口 底		高	H1	沈線区画文内にLR縄文を充填。内外面共にやや風化。	称名寺Ic式	
第151図 PL.134	7	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高	B4	単沈線により文様構成。	称名寺Ⅱ式	
第151図 PL.134	8	縄文土器 深鉢	22cm 胴部片	口 底		高	B4	横位の沈線文や鎖状隆帯文を施す。内面横位磨き。	堀之内1式	
第151図 PL.134	9	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部片	口 底		高	E2	口唇端部が内折。内外面共に横位磨き。	称名寺Ⅱ式	
第151図 PL.134	10	縄文土器 深鉢	床直 口縁部～胴部片 1/6	口 底	(14.0)	高	E2	頸部から口縁部にかけてく字状に屈折する。括れ部と胴部に複数本の単沈線により文様構成。外面一部に煤状炭化物付着、やや被熱風化。	堀之内1式	
第151図 PL.134	11	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口 底		高	E2	口縁が短く内折し、小環状突起を持つ。環状突起の内外面にC字状沈線文を施す。内面やや風化。	称名寺Ⅱ式	
第151図 PL.134	12	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高	E2	口唇部が外削ぎ状で内面口唇下に段を持つ。内面に弧状沈線文を重ねる。	堀之内1式	
第152図 PL.134	13	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高	B4	縦位の鎖状隆帯文や沈線区画文を施す。	称名寺Ⅱ式	
第152図 PL.134	14	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口 底		高	E2	2本単位の単沈線により文様構成。外面やや粗い撫で。	堀之内1式	
第152図 PL.134	15	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高	H1	横位の鎖状隆帯文や沈線区画文を施し、RL縄文を充填。外面一部に煤状炭化物付着、内面風化。	堀之内1式	
第152図 PL.134	16	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高	E2	小波状口縁。短く内折する口縁に沈線文や刺突文を施す。	堀之内1式	
第152図 PL.134	17	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口 底		高	E2	口縁が短く内折する波状口縁。小波頂部下にC字状の隆帯を貼付。	堀之内1式	
第152図 PL.134	18	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口 底		高	H1	口縁部が短く外折。LR縄文を横・斜位に施文し、口縁に横位の沈線文を、胴部に蕨手状の懸垂文を施す。	堀之内1式	
第152図 PL.134	19	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高	E2	やや深い沈線の渦巻状区画文を施し、LR縄文を充填。内面やや風化。	堀之内1式	
第152図 PL.134	20	縄文土器 深鉢	床直 底部1/2	口 底	7.4	高	C5	外面縦位、内面横位磨き。	堀之内1式?	
第152図 PL.134	21	縄文土器 深鉢	床直 底部完存	口 底	9.0	高	B4	櫛歯状工具の懸垂文を施す。内外面共にやや風化。	称名寺Ⅱ式?	
第152図 PL.134	22	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長 幅	9.0 3.9	厚 重	1.7 75.6	細粒輝石安山岩	表面の中央に素材剥片の剥離面を大きく残す。裏面には自然面を大きく残す。円礫を利用する。先端の刃部には部分的な摩滅が認められ使用痕の可能性が有る。	短冊形
第152図 PL.134	23	剥片石器 打製石斧	6cm 4/5	長 幅	8.0 (4.4)	厚 重	1.7 58.4	黒色頁岩	表面の中央に素材剥片の剥離面を大きく残す。裏面には自然面を大きく残す。円礫を利用する。先端部欠損。	
第152図 PL.135	24	礫石器 凹石	床直 完形	長 幅	11.7 8.5	厚 重	4.0 625.5	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面のほぼ中央に小さな漏斗状の凹みがある。表面の上と下方、裏面の中央に敲打痕が認められる。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第152図 PL.135	25	礫石器 多孔石	床直 完形	長 幅	16.6 13.1	厚 重	9.6 2234.9	粗粒輝石安山岩	垂円盤を利用する。正面に漏斗状の孔が散在する。孔の内部は全体的に細かな凹凸が認められる。孔がある正面は全体的に滑らかであり研磨の可能性はある。
第152図 PL.135	26	礫石器 磨石	床直 完形	長 幅	9.9 8.0	厚 重	6.4 809.3	粗粒輝石安山岩	円盤を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面に浅い凹みが2箇所認められる。
第152図 PL.135	27	礫石器 多孔石	15cm 2/3	長 幅	15.9 (13.0)	厚 重	6.2 1634.7	粗粒輝石安山岩	扁平な円盤を利用する。正面と裏面に漏斗状の小さな孔と不定形な孔が認められる。孔の内部は細かな凹凸が認められる。正面と裏面の中央付近に磨面が認められる。

7区59号住居出土遺物

第155図 PL.135	1	縄文土器 片口付深鉢	3cm 口縁～胴上半部 完存	口 底		高		A4	双頭状の4単位波状口縁で、1箇所片口を持つ。波底部に複数の刻目を施す。0段縄丸組紐を横位多段に施文。口縁部に半截竹管の重ね引きによる横線文や渦巻文、鋸歯状文等を施す。内面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	2	縄文土器 深鉢	9cm 口縁～胴部片	口 底		高		A4	波状口縁。0段縄丸組紐を横位多段に施文。口縁部に半截竹管の鋸歯状渦巻文等を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4	R縄丸組紐を横位多段に施文し、口縁部に半截竹管のコンパス文や渦巻文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4	R縄丸組紐を横位多段に施文し、口縁部に半截竹管の粗雑なコンパス文を施す。内面風化。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	5	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口 底		高		A4	R縄丸組紐を横位多段に施文し、横位のコンパス文を施す。内面縦位磨き。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	6	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口 底		高		A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文し、括れ部に半截竹管の鋸歯状文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	7	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口 底		高		A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	8	縄文土器 深鉢	炉内 胴部片	口 底		高		A4	頸部にRL環付縄文を横位に複数段施文。胴部は0段縄丸組紐を横位施文。外面やや風化。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	9	縄文土器 深鉢	21cm 口縁部～胴部 1/6	口 底	(22.0)	高		A4	LR環付縄文を横位および斜位に多段施文して三角形意匠を構成し、その中央部に半截竹管のV字状文やコンパス文を施す。内面やや粗い横位磨き。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	10	縄文土器 鉢	12cm 口縁部～体部 1/3	口 底	(21.0)	高		A4/直前合1L・直前合1R/	平頭状の平口縁。口縁部にRL環付縄文を4段施文。体部に2種類の直前合燃り縄文を交互に横位多段に施文して菱形意匠を構成し、半截竹管のV字状文等を施す。外面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	11	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4/直前合2L・直前合2R/	0段多条RL環付縄文の横位4段施文とコンパス文の1段施文、および2種類の直前合燃り縄文の横位交互2段施文とを複数帯構成。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	12	縄文土器 深鉢	7cm 胴部1/5	口 底		高		A4/直前合2L・直前合2R/	口縁部-胴上半部に2種類の直前合燃り縄文を交互に横位多段に施文して菱形意匠を構成し、半截竹管の鋸歯状文やコンパス文を施す。胴部下半は1段原体の丸組紐を横位多段に施文。内外面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	13	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4/直前合1L/	波状口縁。RL環付縄文を横位に4段、直前合燃り縄文を横位に施文。内面風化。	関山Ⅱ式
第155図 PL.135	14	縄文土器 深鉢	3cm 胴部片	口 底		高		A4	0段多条RL・LR縄文を交互に横位多段に施文して菱形意匠を構成。やや粗雑なコンパス文を施す。内面やや風化。	関山Ⅱ式
第155図 PL.136	15	縄文土器 深鉢	7cm 口縁部～胴部 1/5	口 底	(25.0)	高		A4	0段多条RL縄文を横位多段施文し、口縁部と胴部中位にコンパス文を施す。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	16	縄文土器 深鉢	32cm 胴部片	口 底		高		A4/直前合1R/	直前合燃り縄文を横位に施文し、下位に粗雑なコンパス文を施す。内面撫で状の横位磨き。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	17	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口 底		高		A4	平口縁。R縄丸組紐を横位多段に施文。内面風化。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	18	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4	やや外削ぎ状の平口縁。L縄文を斜位に施文。内外面共にやや風化。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	19	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口 底		高		A4	0段多条RL・LR縄文を施文し、縦撫で状の不連続な幅広沈線を乱雑に施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	20	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	0段多条RL・LR縄文を交互に横位施文。外面一部、内面全体に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	21	縄文土器 深鉢	埋土中 底部完存	口 底	4.6	高		A4	上げ底。手捏ね状の成形でミニチュアの可能性あり。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	22	縄文土器 深鉢	床直 底部1/2	口 底	(9.0)	高		A4	上げ底。0段多条RL・LR縄文を交互に横位多段に施文して菱形意匠を構成。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	23	縄文土器 深鉢	7cm 底部完存	口 底	8.0	高		A4	上げ底。0段縄丸組紐を横位施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第156図 PL.136	24	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4	波状口縁。口縁に沿って櫛歯状工具の連続刺突文や平行沈線文を交互に施す。内面横位磨き。	有尾式
第156図 PL.136	25	剥片石器 石鏃	埋土中 4/5	長 幅	(1.0) (1.0)	厚 重	0.2 0.2	黒曜石	押圧剥離により整形する。両脚部欠損。	凹基無茎鏃
第156図 PL.136	26	剥片石器 石鏃	埋土中 2/3	長 幅	2.5 (0.9)	厚 重	0.4 0.6	黒曜石	押圧剥離により整形する。左側面下方に、下の凹部方向からの加工痕が認められ、この加工により左脚部が除去されたと想定される。	凹基無茎鏃?
第156図 PL.136	27	剥片石器 打製石斧	10cm 完形	長 幅	6.6 4.6	厚 重	2.4 59.9	黒色頁岩	表裏面に素材剥片の剥離面を残す。先端の刃部はほぼ片面加工であり、エンドスクレイパーの刃部に類似する刃部形態である。	撥形

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第156図 PL.136	28	剥片石器 石匙	12cm 完形	長幅 6.8 3.7	厚 1.1 23.5		黒色頁岩	比較的大形の剥片を素材とする。素材剥片の打面を大きく残し自然面打面である。円礫を利用する。側縁部の二次加工は素材剥片の主要剥離面側に集中する。	縦型
第156図 PL.136	29	礫石器 磨石	埋土中 完形	長幅 11.9 8.2	厚 4.5 599.9		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面の中央に、縦方向に連続する敲打痕が認められる。	

7区60A号住居出土遺物

第158図 PL.136	1	縄文土器 深鉢	9cm 口縁～頸部片	口底		高	A4	双頭の波状口縁。口縁部に1段縄丸組紐を横位多段、頸部に0段多条RL環付縄文を横位6段に施文。半截竹管の重ね引きで蕨手状文や横線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第158図 PL.136	2	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文。4本櫛歯状工具のコンパス文や蕨手文を施す。内外面共に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第158図 PL.136	3	縄文土器 深鉢	5cm 口縁部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文。4本櫛歯状工具の横線文やコンパス文と半截竹管の鋸歯文を施す。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第158図 PL.136	4	縄文土器 深鉢	床直 口縁部～胴部片	口底 (37.0)		高	A4	原体長約40mmの0段縄丸組紐を横位多段に施文。口縁部から胴下半部に12-15cmの間隔を置いて、半截竹管の粗雑なコンパス文を3段に施す。内外面共に被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第158図 PL.136	5	縄文土器 深鉢	5cm 口縁～胴部1/2	口底		高	A4	4単位の三頭状の波状口縁。L縄文を横・斜位に施文し、半截竹管2本単位の平行沈線文で粗雑な格子目状意匠を構成。外面被熱風化。	関山Ⅱ式
第158図 PL.136	6	縄文土器 深鉢	8cm 口縁～胴部片	口底		高	A4	原体長約45mmの0段縄丸組紐を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第158図 PL.137	7	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4/直前合2R/	波状口縁。直前段合攪り縄文を横位に施文し、3本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第158図 PL.137	8	縄文土器 深鉢	埋土中 頸部片	口底		高	A4/直前合2L/	直前段合攪り縄文を横位施文し、細沈線格子目文やコンパス文を施す。内面やや風化。	関山Ⅱ式
第159図 PL.137	9	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底		高	A4	原体長約40mmの1段縄丸組紐を横位多段に施文し、頸部に半截竹管2本の鋸歯状文を施す。外面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第159図 PL.137	10	縄文土器 深鉢	17cm 口縁部片	口底		高	A4	双頭の波状口縁。0段縄丸組紐を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第159図 PL.137	11	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	内削ぎ状口縁。RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第159図 PL.137	12	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L/	直前段合攪り縄文を横位に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第159図 PL.137	13	縄文土器 深鉢	13cm 胴部片	口底		高	A4/直前合2L・直前合2R/	2種類の直前段合攪り縄文を横位施文し、半截竹管の縦位集合短沈線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第159図 PL.137	14	縄文土器 深鉢	21cm 胴部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第159図 PL.137	15	剥片石器 石鏃	埋土中 完形	長幅 1.4 1.0	厚 0.4 0.3		黒曜石	押圧剥離により整形する。基部付近には押圧剥離による挟り込みが認められるが、茎部付近を再加工したものと想定される。	有茎鏃?
第159図 PL.137	16	剥片石器 磨製石斧	10cm 不明	長幅 (3.9) 4.4	厚 (1.5) 16.3		蛇紋岩	全面に研磨が認められ丁寧に加工されている。先端部の刃部には先端部方向からの剥離痕が認められるが、剥離痕の内面には著しい摩滅が認められ使用痕の可能性はある。	
第159図 PL.137	17	剥片石器 石匙	2cm 完形	長幅 4.1 4.2	厚 0.9 12.6		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。自然面打面であり、円礫を利用している。先端部には素材剥片の背面側に集中的な二次加工が認められる。	
第159図 PL.137	18	剥片石器 打製石斧	9cm 1/2	長幅 (9.3) 5.6	厚 1.4 101.1		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。大形剥片を素材とする。上部及び先端部欠損。	短冊形
第159図 PL.137	19	礫石器 凹石	埋土中 完形	長幅 9.0 8.5	厚 3.3 361.5		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表面のほぼ中央に浅い凹みが2箇所認められる。裏面の中央付近にもわずかに敲打の痕跡が残る。両面のほぼ全面にわたり磨面が認められる。	
第159図 PL.137	20	礫石器 台石	2cm 完形	長幅 16.7 15.4	厚 4.9 2060.9		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面のほぼ全面に磨面が認められ中央付近は特に滑らかである。	
第159図 PL.137	21	礫石器 石皿	7cm ほぼ完形	長幅 50.4 31.2	厚 13.0 21200		粗粒輝石安山岩	扁平な大形円礫を利用する。正面に浅い凹みが認められ中央付近は磨面となっている。裏面にはタマネギ状風化が顕著であり受熱の可能性はある。	

7区60B号住居出土遺物

第160図 PL.137	1	縄文土器 深鉢	25cm 頸部片	口底		高	A4	LR縄文を横位施文し、半截竹管の平行沈線文や連続爪形文で渦巻意匠を構成。内外面に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第160図 PL.137	2	礫石器 磨石	19cm 完形	長幅 12.9 7.6	厚 4.1 616.4		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面の中央に、縦方向に連続する敲打痕が認められる。	

7区61号住居出土遺物

第162図 PL.137	1	縄文土器 片口付深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	口縁に片口を付す。RL環付縄文を横位多段に施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で横線文やV字状文を施す。	関山Ⅱ式
第162図 PL.137	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L/	直前段合攪り縄文を横位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で鋸歯状の意匠を構成。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.137	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文し、半截竹管の平行沈線文で鋸歯状や渦巻状の文様を施す。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.137	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の鋸歯状文を施す。内面風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.137	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条のRL・LR縄文を交互に横位施文し、菱形意匠を構成。内面やや風化。	関山Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第162図 PL.138	6	縄文土器 深鉢	14cm 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線文を施す。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	7	縄文土器 深鉢	4cm 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	8	縄文土器 深鉢	5cm 口縁部1/4	口底	(17.8)	高	A4	平口縁。RL縄文を横位多段に施文。外面煤状炭化物付着、内面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	9	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部1/4	口底	(12.0)	高	A4	LR縄文を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	10	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。LR縄文を横位多段に施文。内面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	11	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	やや粗雑な1段縄丸組紐を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	12	縄文土器 片口付深鉢	24cm 口縁(注口)片	口底		高	A4	口縁に片口を付す。1段縄丸組紐を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	13	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。1段縄丸組紐やRL環付縄文、0段多条LR縄文などを横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	14	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条RL縄文を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	15	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口底		高	A4	0段多条RL縄文を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	16	縄文土器 深鉢	3cm 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	17	縄文土器 深鉢	3cm 胴下半～底部 1/2	口底	9.0	高	A4	上げ底。底面を含めて1段縄丸組紐をやや乱雑に横・斜位に多段施文。外面やや風化。	関山Ⅱ式
第162図 PL.138	18	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅	2.4 1.9	厚重 0.6 2.5	チャート	上下端に両極加撃痕が認められる。左側片の剥離痕は両極加撃による剪断面である。裏面中央の大きな剥離面も両極加撃による衝撃剥離痕である。	
第162図 PL.138	19	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅	3.9 4.3	厚重 1.1 20.3	黒色頁岩	左右両端に両極加撃痕が認められる。上端と下端の加工痕は片面からの剥離面が中心であり両極加撃でない可能性がある。	
第162図 PL.138	20	剥片石器 石匙	埋土中 完形	長幅	9.1 4.0	厚重 1.1 27.2	黒色頁岩	大形の横長剥片を素材とする。摘み部の挟り状加工はわずかである。素材剥片の打面を大きく残し単剥離面である。	縦型
第162図 PL.138	21	礫石器 磨石	床直 完形	長幅	12.5 7.2	厚重 3.5 486.8	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の中央やや上方から上端にかけて敲打痕が集中する。	

7区62号住居出土遺物

第164図 PL.138	1	縄文土器 深鉢	11cm 口縁部～胴部上 半1/6	口底	(45.0)	高	E2	低平な幅広隆帯文に沿って幅広沈線の区画文や懸垂文を施し、LR縄文を充填施文。内外面やや風化。	加曾利E3式
第164図 PL.138	2	縄文土器 深鉢	8cm 口縁部片	口底		高	E2	幅広沈線文や低平な幅広隆帯文を施し、RL縄文を充填。内面やや粗い撫で状の横位磨き。	加曾利E3式
第164図 PL.138	3	縄文土器 深鉢	7cm 底部	口底		高	H1	口縁部に横位微隆起線文、胴部にV字状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	加曾利E4式
第164図 PL.138	4	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底		高	E2	沈線懸垂文を施し、RL縄文を縦位方向に充填施文。内面風化。	加曾利E3式
第164図 PL.138	5	縄文土器 深鉢	1cm 口縁部1/5	口底	(24.4)	高	E2	篋状工具の単沈線を縦位に密接施文。内面横位磨き。	加曾利E3式
第164図 PL.138	6	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	小突起を付す波状口縁。竹管状工具の沈線区画文内に細密なLR縄文と刺突文を充填施文。小突起頂部に沈線円文を施す。	称名寺Ib式
第164図 PL.138	7	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	口唇部が短く内折。沈線区画文内にL縄文を充填施文。	称名寺Ic式
第164図 PL.138	8	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	小突起を付す波状口縁で、口唇部が短く内折。沈線区画文内にLR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	称名寺Ic式
第164図 PL.138	9	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	やや尖頭丸棒状工具の沈線文や列点状刺突文を施す。内面粗い横位磨き。	称名寺Ⅱ式
第164図 PL.138	10	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/2	口底	(9.0)	高	H1	内外面風化。	加曾利E3式
第164図 PL.138	11	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口底		高	H1	小環状突起を持つ波状口縁。短く内折する口縁や突起部内外面に深い沈線文と刺突文などを施す。	称名寺Ⅱ式
第164図 PL.138	12	縄文土器 深鉢	1cm 口縁部片	口底		高	E2	小環状突起を持つ波状口縁。短く内折する口縁や突起部内外面に沈線文と刺突文などを施す。	堀之内1式
第164図 PL.139	13	縄文土器 深鉢	14cm 口縁部片	口底		高	E2	小環状突起を付す波状口縁。短く内折する口縁に横位沈線文を、頸部に8字状小突起や横線文を施す。内面横位磨き。	堀之内1式
第164図 PL.139	14	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口底		高	E2	小環状突起を持つ波状口縁。短く内折する口縁に凹線状の沈線文と刺突文を施す。	堀之内1式
第164図 PL.139	15	剥片石器 石鏃	埋土中 ほぼ完形	長幅	(2.1) 1.6	厚重 0.5 0.9	黒色頁岩	押圧剥離により整形する。先端部破損。	凹基無茎鏃
第164図 PL.139	16	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅	3.2 3.2	厚重 0.6 8.5	黒色頁岩	上下端に両極加撃痕が集中する。表面中央の大きな剥離面は両極加撃による剥離面の可能性がある。	
第164図 PL.139	17	剥片石器 打製石斧	23cm 2/3	長幅	(9.3) 4.1	厚重 2.4 84.0	黒色頁岩	両側片の中央付近につぶれが認められ着柄痕の可能性がある。	短冊形

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第164図 PL.139	18	礫石器 凹石	4cm 完形	長 幅	17.5 6.6	厚 重	5.5 977.8	粗粒輝石安山岩	棒状の円礫を利用する。表面の中央やや上方に断面V字状の線条の凹みが認められる。表裏面の中央付近に敲打痕が散在する。下端付近にも敲打痕が集中する。表裏面の中央付近に磨面が認められる。	
7区63号住居出土遺物										
第165図 PL.139	1	縄文土器 深鉢	炉埋設 胴下半～底部完 存	口 底	8.5	高		H1	炉埋設土器。附加条第1種RL+R2本縄文を縦位施し、単沈線3本の懸垂文を4単位に施す。外面底部に煤状炭化物付着、内面やや風化。	加曾利E2式
7区64号住居出土遺物										
第166図 PL.139	1	縄文土器 深鉢	2cm 口縁部片	口 底		高		H1	口縁部にRL縄文を横位施し、低平な幅広隆帯で波状渦巻文を施す。外面に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E3式
第166図 PL.139	2	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口 底		高		E2	小突起を付す波状口縁。突起下に沈線渦巻文を施し、櫛歯状工具の縦位波状文を施文。3と同一個体か。外面一部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第166図 PL.139	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		E2	口縁部に横線文を施し、櫛歯状工具の縦位波状文や沈線懸垂文を施文。外面に煤状炭化物付着。2と同一個体か。	加曾利E3式
第166図 PL.139	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		H1	RLR縄文を縦位施し、沈線懸垂文間を磨り消す。	加曾利E3式
第166図 PL.139	5	縄文土器 深鉢	3cm 胴部片	口 底		高		H1	LR縄文を縦位に施し、粗雑な沈線懸垂文を施文。内外面風化。	加曾利E3式
第166図 PL.139	6	縄文土器 深鉢	1cm 胴部片	口 底		高		H1	微隆起線の懸垂文を施し、充填的にL縄文を縦位施文。内外面風化。	加曾利E4式
第166図 PL.139	7	剥片石器 楔形石器	6cm ほぼ完形	長 幅	3.7 3.5	厚 重	0.8 12.0	黒色安山岩	上下端に両極加撃痕が認められる。左右両端にも両極加撃痕が若干認められる。表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。片面には自然面が認められ円礫を利用している。	
第166図 PL.139	8	剥片石器 打製石斧	12cm 完形	長 幅	10.7 8.1	厚 重	2.2 189.2	黒色頁岩	上下端部に摩滅が認められ使用痕の可能性がある。両側片の括れ部はつぶれが著しく、表裏面の中央付近には摩滅が認められ着柄痕の可能性がある。	分銅形
第166図 PL.139	9	礫石器 磨石	炉内 完形	長 幅	14.6 8.4	厚 重	4.4 833.1	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央付近に磨面が認められる。表裏面の中央付近に敲打痕が散在する。	
7区71号住居出土遺物										
第171図 PL.139	1	縄文土器 深鉢	8cm 口縁～胴上半部	口 底		高		A4	波状口縁。0段縄丸組紐を横位多段に施文。口縁-頸部に半截竹管の鋸歯状文・菱形状文・渦巻文や、4本櫛歯状工具のコンパス等を施す。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第171図 PL.139	2	縄文土器 深鉢	15cm 口縁部片	口 底		高		A4	4本櫛歯状工具の縦位波状文を全面施文。内外面風化。	関山Ⅱ式
第171図 PL.139	3	縄文土器 深鉢	29cm 口縁部片	口 底		高		A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線や連続爪形文で蔽手状渦巻文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.139	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4	1段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.139	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で渦巻文やV字状文を施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.139	6	縄文土器 深鉢	23cm 口縁部片	口 底		高		A4	波状口縁。1段縄丸組紐を横位多段に施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.139	7	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4	鋸歯状の小突起を付す波状口縁。0段縄丸組紐を横位多段に施文し、波頂部に沈線渦巻文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	8	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4/直前合2L・直前合2R(0段多条) /	鋸歯状の小突起を付す波状口縁。2種類の直前段合燃り縄文を交互に横位施文し、菱形意匠を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	9	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4	0段多条のRL・LR縄文を交互に横位施文し、口縁部に4本櫛歯状工具のコンパス文を施文。内面風化。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	10	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4/直前合2L・直前合2R(0段多条) /	2種類の直前段合燃り縄文を横位施文して菱形意匠を構成し、5本櫛歯状工具のコンパス文を施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	11	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	0段多条のRL・LR縄文を交互に横位施文し、3本櫛歯状工具のコンパス文を施文。内面風化。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	12	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4/直前合2L・直前合2R(0段多条) /	2種類の直前段合燃り縄文を横位施文して菱形意匠を構成し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施文。内面やや風化。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	13	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	0段多条の1段縄丸組紐を横位に施文し、5本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	14	縄文土器 深鉢	14cm 胴部片	口 底		高		A4	0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管のコンパス文を施文。内面やや風化。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	15	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4/直前合2L・直前合2R(0段多条) /	2種類の直前段合燃り縄文を横位施文して菱形意匠を構成し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	16	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	0段多条のRL・LR縄文を横位に施文し、半截竹管のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	17	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A5	集合細沈線の鋸歯状文を施す。内外面風化。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	18	縄文土器 片口付深鉢	埋土中 口縁部1/5	口 底	20.0	高		A4	平口縁で片口を付す。原体長約40mmの0段縄丸組紐を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第171図 PL.140	19	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4/直前合2L・直前合2R/ /	双頭の波状口縁。2種類の直前段合燃りを交互に横位施文。内外面風化。	関山Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第171図 PL.140	20	縄文土器 深鉢	12cm 胴上部～下部 1/6	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文。内外面やや風化。80号住居16と同一個体か。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	21	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。原体長約40mmの1段縄丸組紐を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	22	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	23	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。RL・LR縄文を交互に横位施文。内面やや粗い横位撫で。外面からの補修孔あり。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	24	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。LR縄文を横位多段に施文。外面風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	25	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	L縄文を横位施文。外面やや風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	26	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	RL環付縄文を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	27	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を交互に横位施文し、口縁部に半截竹管の爪形文を3段に連続刺突する。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	28	縄文土器 深鉢	15cm 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位に交互施文し、菱形意匠を構成。内外面風化。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	29	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位に交互施文。内面やや風化。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	30	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	RLの環付縄文を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	31	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条の1段縄丸組紐を横位に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	32	縄文土器 深鉢	11cm 底部部片	口底		高	A4	底部外面を含めてLR縄文を施文。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	33	縄文土器 深鉢	14cm 底部1/6	口底 (9.0)		高	A4/直前合2L・直前合2R/	2種類の直前段合攪りを交互に横位施文。外面風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第172図 PL.140	34	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部1/2	口底 9.2		高	A4	僅かな上げ底。0段多条のRL・LR縄文を横位に交互施文し、底部外面にも施文。内外面風化。	関山Ⅱ式
第172図 PL.141	35	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅 9.4 5.0	厚 1.6 69.5		黒色頁岩	表裏面に素材剥片の剥離痕を大きく残す。先端部の刃部加工は片面加工であり、エンドスクレイパーの刃部に類似する刃部形態である。	撥形
第172図 PL.141	36	礫石器 磨石	1cm 完形	長幅 9.6 6.6	厚 3.7 359.2		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面に浅い凹みが3箇所認められる。裏面の中央付近にもわずかに敲打の痕跡が残る。両面のほぼ全面にわたり磨面が認められる。	
第172図 PL.141	37	礫石器 凹石	13cm 完形	長幅 15.3 8.9	厚 3.7 716.8		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面の中央に、縦方向に浅い凹みが連続する。表裏面に部分的な磨面が認められる。	
第172図 PL.141	38	礫石器 凹石	埋土中 完形	長幅 13.3 8.6	厚 4.2 613.7		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の中央に浅い凹みが2箇所認められる。裏面の中央付近に敲打痕が認められる。	
第172図 PL.141	39	礫石器 磨石	1cm 完形	長幅 10.7 7.0	厚 4.9 540.9		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全域にわたり磨面が認められる。	
第172図 PL.141	40	礫石器 磨石	3cm 完形	長幅 12.1 7.3	厚 4.1 597.3		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面に敲打痕が散在し、表面の敲打痕の内部にも磨面がある。下端部に敲打痕が集中する。	
第172図 PL.141	41	礫石器 磨石	30cm 完形	長幅 14.5 10.5	厚 4.3 1011.3		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の中央やや上方に小さな漏斗状の凹みが認められる。表裏面の中央に敲打痕が集中する。	
第172図 PL.141	42	礫石器 台石	1cm 完形	長幅 21.8 16.2	厚 6.8 3080.9		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面と裏面の中央付近に敲打を受けた痕跡が集中する。正面には部分的な磨面が認められる。	

7区80号住居出土遺物

第174図 PL.141	1	縄文土器 片口付深鉢	4cm 口縁部～胴部上 半1/3	口底 (38.0)		高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	双頭波状口縁で波底部に片口を付す。口縁部に2種類の直前段合攪り縄文を横位に交互施文して菱形意匠を構成し、半截竹管の重ね引き平行沈線で渦巻文や菱形文を施す。頸部にはLR環付縄文を多段に横位施文。	関山Ⅱ式
第174図 PL.141	2	縄文土器 深鉢	14cm 口縁部～胴部上 半1/2	口底 (19.6)		高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文し、上半部に半截竹管の重ね引き平行沈線で渦巻文やV字状文を施文。下位には6本櫛歯状工具のコンパス文を施す。外面やや風化、内面下半部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第174図 PL.141	3	縄文土器 深鉢	5cm 口縁部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文し、口縁に半截竹管の平行沈線で鋸歯状文を、下位にコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第174図 PL.141	4	縄文土器 片口付深鉢	床直 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	片口を付す平口縁。2種類の直前段合攪り縄文を横位多段に交互施文し、菱形意匠を構成。4本櫛歯状工具の歯手状渦巻文や縦位の集合短沈線文を施す。内外面風化。	関山Ⅱ式
第174図 PL.141	5	縄文土器 深鉢	床直 口縁部～胴部上 半1/2	口底 13.0		高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文し、半截竹管の格子目文やコンパス文を施す。内面口縁部横位、胴部縦位の磨き。	関山Ⅱ式
第174図 PL.141	6	縄文土器 深鉢	10cm 口縁部片	口底		高	A4	0段多条の1段縄丸組紐を横位多段に施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で文様構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第174図 PL.141	7	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	半截竹管の平行沈線文を横位多段に施文。外面風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.141	8	縄文土器 深鉢	5cm 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。4本櫛歯状工具の平行沈線文や押し引き状の沈線文を交互多段に施す。内面やや風化。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.142	9	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部1/5	口底	(23.0)	高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を交互に横位施文し、菱形意匠を構成。口縁部に4本櫛歯状工具のコンパス文を施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.142	10	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	0段多条のRL環付縄文を横位多段に施文。外面煤状炭化物付着。内面やや風化。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.142	11	縄文土器 鉢	8cm 口縁部～胴部上半1/2	口底	16.6	高	A4	RL環付縄文を横位多段に施文し、頸部に4本櫛歯状工具のコンパス文と半截竹管のV字状文を施文。外面風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.142	12	縄文土器 深鉢	10cm 胴上部～下部1/5	口底		高	A4	胴部上半に2種類の直前段合攪り縄文を横位多段に施文して菱形意匠を構成し、括れ部に半截竹管の縦位集合短沈線文を施す。下半に1段縄丸組紐を横位施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.142	13	縄文土器 深鉢	5cm 胴上部～下部1/3	口底		高	A4	胴部上半に2種類の直前段合攪り縄文を横位多段に施文して菱形意匠を構成し、括れ部に4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。下半に1段縄丸組紐を横位施文。内外面やや被熱風化。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.142	14	縄文土器 深鉢	6cm 底部1/2	口底	(9.6)	高	A4	上げ底。1段縄丸組紐を横位施文。内外面やや被熱風化。	関山Ⅱ式	
第174図 PL.142	15	縄文土器 深鉢	埋土中 胴下部～底部2/3	口底	7.5	高	A4	上げ底。0段縄丸組紐を横位多段に施文。外面被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	16	縄文土器 深鉢	5cm 胴上部～下部1/5	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文。内外面やや風化。71号住居20と同一個体か。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	17	縄文土器 深鉢	18cm 胴下半～底部1/2	口底	(7.3)	高	A4	上げ底。RL縄文を横位多段に施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	18	縄文土器 深鉢	12cm 胴下半～底部1/2	口底	(9.1)	高	A4	上げ底。底外面を含め0段多条RL縄文を横位多段に施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	19	縄文土器 深鉢	埋土中 底部完存	口底	7.0	高	A4	上げ底。RL・LR縄文を横位に交互施文。外面被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	20	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	21	縄文土器 深鉢	7cm 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	双頭の波状口縁。2種類の直前段合攪り縄文を横位多段に交互施文し、菱形意匠を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	22	縄文土器 深鉢	2cm 口縁部片	口底		高	A5	波状口縁。RL縄文を横位多段に施文。内外面風化。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	23	縄文土器 深鉢	8cm 口縁部片	口底		高	A4	0段多条RL縄文を横位多段に施文。内外面やや風化。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	24	縄文土器 深鉢	床直 口縁～胴部上半片	口底		高	A4	鋸歯状の小突起を付す平口縁。0段多条LR縄文を横位多段に施文。内面やや風化。	関山Ⅱ式	
第175図 PL.142	25	剥片石器 石鏃	埋土中 完形	長幅	2.0 1.2	厚重	0.5 0.4	黒曜石	押圧剥離により整形する。比較的厚手の剥片を素材とする。脚部は左右非対称である。	凹基無茎鏃
第175図 PL.142	26	剥片石器 石鏃	埋土中 4/5	長幅	(1.6) (1.3)	厚重	0.3 0.4	黒曜石	押圧剥離により整形する。やや挟りを入れることで先端部を尖頭状に作出する。両脚部の先端欠損。	凹基無茎鏃
第175図 PL.142	27	剥片石器 石匙	19cm 完形	長幅	6.4 5.0	厚重	1.1 25.9	黒色頁岩	表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。比較的大形の剥片を素材とする。打面の一部に自然面を残す。円礫を利用する。	
第175図 PL.142	28	剥片石器 石匙	22cm 完形	長幅	4.8 2.5	厚重	0.7 6.0	黒色頁岩	表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。平坦打面であり、縦長剥片を素材とする。	縦型
第175図 PL.142	29	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅	3.6 3.3	厚重	0.8 10.7	黒色安山岩	上下端に両極加撃痕が認められる。左右端にも両極加撃痕が認められるが低調である。表裏面の中央付近の大きな剥離面はともに剪断面の可能性が高い。上端の一部に自然面を残す。円礫を利用する。	
第175図 PL.142	30	礫石器 磨石	8cm 完形	長幅	11.7 9.1	厚重	5.6 861.6	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央やや上方に浅い凹みが認められる。両面のほぼ全面と裏面の中央付近に磨面が認められる。	
第175図 PL.142	31	礫石器 磨石	7cm 完形	長幅	10.4 8.2	厚重	4.8 607.4	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面では敲打痕が散在し、裏面では中央に集中する。	
第175図 PL.142	32	礫石器 凹石	埋土中 完形	長幅	12.3 8.8	厚重	5.4 772.8	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央に、縦方向に連続する凹みが認められる。左側面に磨面が認められる。上端と下端には敲打痕が集中する。	

7区82号住居出土遺物

第176図 PL.143	1	縄文土器 深鉢	8cm 胴部片	口底		高	E2	体部下半に2-3本単位の沈線により渦巻文を施し、その中心部にC字状の隆帯を貼付。外面被熱風化、内面煤状炭化物付着。	称名寺Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	---	-------

8区69号住居出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高				
第177図 PL.143	1	縄文土器 深鉢	1cm 口縁部片	口底		高	H1	幅広沈線による渦巻文や区画文を施し、RL縄文を充填施文。内面やや被熱風化、剥離。	加曾利E3式
第177図 PL.143	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	沈線懸垂文を施し、LR縄文を充填的に横位施文。内面やや被熱風化。	加曾利E4式
第177図 PL.143	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E5	微隆起懸垂文を施し、LR縄文を充填的に施文。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E4式

8区73号住居出土遺物

第178図 PL.143	1	縄文土器 深鉢	炉埋設 胴部中位完存	口底		高	D4	炉埋設土器。胴部中位を輪切り状に打割。RL縄文を縦位施文し、沈線の懸垂文や蛇行文を施す。外面下位に煤状炭化物付着、内面被熱風化。	加曾利E3式
第178図 PL.143	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E5	凹線状の幅広沈線区画文を施す。内面横位磨き。	加曾利E3式
第178図 PL.143	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B4	LR縄文を縦位施文し、低平な隆線懸垂文を施す。内面縦位磨き。	加曾利E3式
第178図 PL.143	4	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口底		高	E5	RL縄文を縦位施文して沈線懸垂文を施す。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E3式
第178図 PL.143	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D4	沈線懸垂文を施し、LR縄文を充填的に縦位施文。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E3式
第178図 PL.143	6	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口底		高	H1	R縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	加曾利E3式
第178図 PL.143	7	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/3	口底 (9.4)		高	B4	内面被熱風化・剥離。	加曾利E3式
第178図 PL.143	8	剥片石器 打製石斧	7cm 完形	長幅 9.1 4.4	厚重 1.2 50.8			細粒輝石安山岩 両側片の括れ部にはつぶれが認められ装着痕の可能性ある、	分銅形
第178図 PL.143	9	剥片石器 打製石斧	8cm 完形	長幅 10.1 4.6	厚重 1.9 114.5			細粒輝石安山岩 裏面に自然面を大きく残し、円礫を利用する。先端部から両側片下部にかけて摩擦が認められ使用痕の可能性ある。両側片のやや上方につぶれが認められ着柄痕の可能性ある。	短冊形
第178図 PL.143	10	剥片石器 打製石斧	7cm 4/5	長幅 (11.4) 4.0	厚重 1.6 78.5			細粒輝石安山岩 表面の中央から上方にかけて部分的な摩擦が認められる。	分銅形
第178図 PL.143	11	剥片石器 打製石斧	7cm ほぼ完形	長幅 13.1 (5.8)	厚重 2.2 198.1			黒色頁岩 裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。表面には全体的に摩擦が認められる。周辺部からの複数の剥離面はこの摩擦より新しい。	分銅形

8区74号住居出土遺物

第180図 PL.143	1	縄文土器 深鉢	炉埋設 口縁部～胴部中 位2/3	口底 (15.0)		高	D4	炉埋設土器。胴部にLR縄文を縦位施文するが、口縁部は被熱風化・剥離により不明。口縁部に隆線の渦巻文や楕円区画文を、胴部は沈線懸垂文を各5単位に施す。胴部下半は意識的に打割。外面被熱風化・剥離、内面縦位磨き・やや被熱風化。	加曾利E3式
第180図 PL.143	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	胴部に幅広の横線区画文を施し、3-4本の単沈線で格子目文を、単沈線で対向弧線文を施す。口縁に浅い横線文を施す。外面口縁横位減れ磨き、胴部斜位鏡撫で。内面横位磨き、やや被熱風化。	加曾利B2式
第180図 PL.143	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部～胴部下 位4/5	口底 30.5		高	D4	全面にRL縄文を縦位施文。口縁部は隆線の渦巻文+楕円区画文を5単位に施す。胴部は10本の沈線懸垂文を施し、縄文を擦り消す。内外面共にやや被熱風化、外面口縁部一部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第180図 PL.143	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部～胴部 1/2	口底		高	H1	口縁部はナゾリ沈線を付随しない隆線のS字状渦巻文を施し、区画内に縦位の短沈線文を充填施文。胴部は沈線懸垂文相互間にR絡条体を充填施文。内外面共にやや被熱風化、外面煤状炭化物付着。	郷土式
第180図 PL.144	5	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	G1	内面への折り返し状口縁に把手状突起を付し、隆線渦巻文を施す。内外面共に一部に煤状炭化物付着。	郷土式
第180図 PL.144	6	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	口唇部にC字状の連続小突起加工を施し、口縁に横線文帯を施文。内外面共に横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B2式
第180図 PL.144	7	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D1	口縁部に隆線の渦巻文や楕円区画文を施す。胴部は沈線懸垂文間にLR縄文を充填施文。内外面共に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第180図 PL.144	8	縄文土器 深鉢	9cm 口縁部片	口底		高	D3	口縁部-胴部にかけてLR縄文を縦位施文。口縁部に隆線の渦巻文や楕円区画文を、胴部に沈線懸垂文を施文。内外面共に被熱風化・煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第180図 PL.144	9	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部～胴部上 位1/4	口底 (22.0)		高	F3	口縁部に隆線の渦巻文や楕円区画文を施し、LR縄文を充填施文。胴部は沈線懸垂文間に同縄文を充填的に縦位施文。外面煤状炭化物付着・被熱剥離、内面横位磨き。	加曾利E3式
第180図 PL.144	10	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D3	口縁部に隆線の楕円区画文を施すが、縄文の施文なし。胴部は無文の可能性あり。内外面共に被熱風化、外面煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第180図 PL.144	11	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部中位1/3	口底		高	D1	LR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文間を擦り消す。内面縦位磨き。	加曾利E3式
第180図 PL.144	12	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D1	隆線の渦巻文や区画文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E3式
第180図 PL.144	13	縄文土器 深鉢	7cm 口縁部片	口底		高	D6	RL縄文を横位施文し、隆帯区画文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利E3式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第180図 PL.144	14	縄文土器 深鉢	2cm 胴部片	口底		高	G1	2種類のRL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。縄文充填の可能性あり。内外面共に被熱風化。	加曾利E3式
第180図 PL.144	15	縄文土器 浅鉢	1cm 口縁部片	口底		高	G1	口縁に横線文や刺突文を施し、胴部は沈線懸垂文間にRL縄文を充填施文か。外面やや被熱風化、内面丁寧な横位磨き。	加曾利E3式
第181図 PL.144	16	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口底		高	D6	RL縄文を縦位施文し、やや粗雑な磨り消し沈線懸垂文を施す。内面煤状炭化物付着・被熱剥離。	加曾利E3式
第181図 PL.144	17	縄文土器 深鉢	4cm 胴部片	口底		高	D4	RLR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内面被熱風化。	加曾利E3式
第181図 PL.144	18	縄文土器 深鉢	2cm 胴部片	口底		高	D4	LR縄文を縦位施文し、横線文間の縄文を擦り消す。内外面共に被熱風化。内面縦位磨き。	加曾利E3式
第181図 PL.144	19	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D6	沈線懸垂文を施し、0段多条RL縄文を縦位に充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化・剥離。	加曾利E3式
第181図 PL.144	20	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RLR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文間を擦り消す。内面縦位磨き。	加曾利E3式
第181図 PL.144	21	縄文土器 鉢	床直 口縁部～体部下 位1/4	口底		高	G1	大柄なS字状の隆帯渦巻文を複数単位に施し、区画内にRL縄文を充填施文。内外面共に被熱風化。	加曾利E3式
第181図 PL.144	22	縄文土器 浅鉢	10cm 口縁部～体部上 位1/5	口底		高	D1	口縁部がく字状に外折。体部上半の隆帯区画内にLR縄文を充填施文。外面被熱風化、内面丁寧な横位磨き。	加曾利E3式
第181図 PL.144	23	剥片石器 打製石斧	11cm 完形	長幅 9.4 4.5	厚重 1.8 92.9		細粒輝石安山岩	裏面に自然面を大きく残り円礫を利用する。表面の右側縁の先端付近と中央やや上方に摩滅が認められる。	短冊形
第181図 PL.144	24	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅 11.1 4.8	厚重 1.7 72.6		細粒輝石安山岩	表面に素材剥片の剥離面を大きく残り大形剥片を素材とする。裏面に自然面を大きく残り円礫を利用する。	撥形
第181図 PL.144	25	剥片石器 石錐	埋土中 完形	長幅 3.3 1.9	厚重 0.7 3.3		珪質頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。小形の横長剥片を素材とする。素材剥片の形態を大きく変えることなく先端部に集中的な二次加工が認められる。	
第181図 PL.144	26	礫石器 凹石	埋土中 完形	長幅 9.4 8.1	厚重 5.6 628.5		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面の中央に浅い凹みが認められる。表裏面の中央付近に磨面が認められる。左側面には部分的な磨面が認められる。	
第181図 PL.144	27	礫石器 凹石	埋土中 ほぼ完形	長幅 11.5 7.7	厚重 4.1 637.3		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央に浅い凹みが認められる。表裏面のほぼ全面に磨面が認められ、側面部との境界付近には稜が形成される。左側面にも磨面が認められる。	

8区75号住居出土遺物

第183図 PL.145	1	縄文土器 深鉢	22cm ほぼ完形	口底 26.8 10.0		高 38.4	A4	上げ底状の底部。RL縄文を横・縦位に交互・多段施文してやや乱雑な菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、外面煤状炭化物付着。	有尾式
第183図 PL.145	2	縄文土器 深鉢	19cm 口縁部～胴部中 位2/3	口底 (22.0)		高	A4	2または3単位の波状口縁。RLとLR縄文を横位・交互に多段施文するが、不整然のため菱形構成せず。内外面共にやや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	有尾式
第183図 PL.145	3	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部～底部 4/5	口底 24.2 (7.8)		高 (25.4)	A4	上げ底状の底部。LR縄文を横位・多段に施文。内外面共に被熱風化・剥離。	有尾式
第183図 PL.145	4	縄文土器 深鉢	14cm 口縁部～胴部下 位2/3	口底 18.2		高	A4	RL・LR縄文を横位・交互に多段施文し、菱形意匠を構成。内面やや被熱風化・剥離。	有尾式
第183図 PL.145	5	縄文土器 深鉢	20cm 口縁部～胴部片	口底		高	A5	L・R縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成し、口縁部に縦位の連点状刺突文を施す。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第183図 PL.145	6	縄文土器 深鉢	14cm 口縁部片	口底		高	A4	LR縄文を横位・多段に施文。内面被熱風化。	有尾式
第183図 PL.145	7	縄文土器 深鉢	25cm 口縁部～頸部片	口底		高	A4	波状口縁。く字状に強く内折する口縁部に縦位及び横位の連点状刺突文を、頸部には同刺突文で菱形意匠を構成。内面横位磨き。	有尾式
第183図 PL.145	8	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口底		高	A4	口縁部に半截竹管の平行沈線文で菱形意匠を構成し、下位にL縄文を横位施文。内面指頭状押圧を残す粗い横位磨き。	有尾式
第183図 PL.145	9	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4/正反合2L・2R (0段多条)/	2種類の正反合燃り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面撫で状の横・斜位磨き。	関山Ⅱ式
第183図 PL.145	10	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A5	1段縄丸組紐を斜位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線文により渦巻き・鋸歯状の意匠を構成。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第183図 PL.145	11	縄文土器 深鉢	23cm 胴部片	口底		高	A4	RL環付縄文を斜位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線文を施す。内面やや被熱風化、煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第183図 PL.145	12	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	0段多条のRL環付縄文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第183図 PL.145	13	縄文土器 深鉢	22cm 胴部片	口底		高	A4	0段多条の1段縄丸組紐を横位・多段に施文。外面煤状炭化物付着、内面縦位磨き。	関山Ⅱ式
第183図 PL.145	14	縄文土器 深鉢	4cm 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、5本櫛歯状具のコンパス文を施す。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化・剥離。	関山Ⅱ式
第183図 PL.145	15	縄文土器 深鉢	28cm 底部完存	口底 4.9		高	A4	RL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化・一部剥離。	有尾式
第183図 PL.145	16	縄文土器 深鉢	埋土中 底部2/3	口底 5.5		高	A4	高台状の上げ底。RL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成か。内面被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第184図 PL.145	17	剥片石器 石匙	埋土中 完形	長 幅	5.1 (6.2)	厚 重	1.0 24.5	黒色頁岩	素材剥片の形態を大きく変えることなく、摘み部と下部側縁に集中した二次加工が認められる。下部側縁の加工は素材剥片の主要剥離面側に集中する。	横型
第184図 PL.145	18	剥片石器 石鏃	埋土中 4/5	長 幅	(1.2) 1.3	厚 重	0.4 0.4	黒曜石	押圧剥離により整形する。両脚部欠損。	凹基無莖鏃
第184図 PL.145	19	剥片石器 石核	埋土中 完形	長 幅	4.6 3.8	厚 重	4.8 86.5	黒曜石	正面、右側面、上面に著しく風化の進んだ平坦な面が認められ自然面と判断した。角礫を利用していると考えられる。打面位置を固定せず、打面転移を繰り返し不定形剥片を剥離する。	
第184図 PL.146	20	礫石器 凹石	27cm 完形	長 幅	8.2 7.3	厚 重	4.3 359.2	粗粒輝石安山岩	小形円礫を利用する。両面のほぼ中央に浅い凹みが2箇所認められる。両面の中央付近には磨面が認められる。表面には断面V字状の線条痕が認められる。	
第184図 PL.146	21	礫石器 磨石	10cm 完形	長 幅	9.2 6.1	厚 重	2.5 228.5	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面のほぼ全面にわたり磨面が認められる。	
第184図 PL.146	22	礫石器 磨石	1cm 完形	長 幅	14.5 9.7	厚 重	5.0 1098.7	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第184図 PL.146	23	礫石器 磨石	17cm 完形	長 幅	14.1 8.0	厚 重	4.2 823	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面の中央に、縦方向に連続する敲打痕が認められる。上端と下端に敲打痕が集中する。	
第184図 PL.146	24	礫石器 磨石	18cm 完形	長 幅	16.2 13.1	厚 重	3.9 1242.8	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	

8区76号住居出土遺物

第185図 PL.146	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合撚り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。コンパス文の弛緩した4本櫛歯状具の鋸歯文を施す。外面一部に煤状炭化物付着・やや被熱風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第185図 PL.146	2	縄文土器 深鉢	18cm 胴部片	口 底		高		A4/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合撚り縄文を横位・交互に施文し、コンパス文の弛緩した半截竹管の縦位沈線文を施す。内外面共に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第185図 PL.146	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	1段縄丸組紐を横位施文。内面縦位磨き。	関山Ⅱ式
第185図 PL.146	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	0段縄丸組紐を横位施文。内面縦位磨き。	関山Ⅱ式

8区78号住居出土遺物

第186図 PL.146	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		A4/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合撚り縄文を横位・交互に施文。内面丁寧な横位磨き。	関山Ⅱ式
第186図 PL.146	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A4	0段多条のRL環付縄文を横位施文し、半截竹管の重ね引き集合沈線文によりく字状の意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第186図 PL.146	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		A2	LR縄文を横位施文し、半截竹管の平行沈線文により菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第186図 PL.146	4	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高		A4	0段縄丸組紐を横位・多段に施文し、括れ部に横線文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第186図 PL.146	5	縄文土器 深鉢	11cm 胴部片	口 底		高		A7	1段縄丸組紐を横位・多段に施文。内面縦位磨き。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第186図 PL.146	6	縄文土器 深鉢	15cm 胴部片	口 底		高		A4	LR縄文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第186図 PL.146	7	剥片石器 石匙	床直 2/3	長 幅	5.7 (5.0)	厚 重	0.9 24.4	黒色頁岩	素材剥片の打面を大きく残す。自然面打面であり、円礫を利用する。下部欠損。	縦型?
第186図 PL.146	8	礫石器 磨石	3cm 完形	長 幅	9.6 7.7	厚 重	3.3 392.2	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面にわたり磨面が認められる。表裏面の左右端部の側面との境には磨りにより稜が形成されている。表裏面の中央付近に敲打痕が認められる。	
第186図 PL.146	9	礫石器 磨石	1cm 完形	長 幅	11.3 10.0	厚 重	5.7 860.3	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。裏面から右側面にかけて磨面が認められる。表面の中央付近の敲打痕が集中する。	

8区79号住居出土遺物

第188図 PL.146	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		B5	懸垂状隆線文に沿って単沈線文や角押文の沈線文を施し、空隙部にRL縄文を充填施文。内面縦位磨き。	新巻類型
第188図 PL.146	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		D4	RL縄文を横・縦位に施し、沈線懸垂文や横位の短沈線文を施す。内面横位磨き。	新巻類型
第188図 PL.146	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		E4	口唇部に環状小突起を付す。曲線状の隆線文に沿って単沈線文や三角陰刻文を施す。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	焼町土器
第188図 PL.146	4	縄文土器 深鉢	15cm 口縁部～胴部 1/5	口 底	(19.0)	高		B5	眼鏡状小突起を連結する隆線文に沿って単沈線文や三角陰刻文を施す。内面横位磨き。	焼町土器
第188図 PL.146	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口 底		高		D4	曲線状の隆線文に沿って半截竹管の半肉彫の平行沈線文を施す。内面丁寧な横位磨き。	焼町土器
第188図 PL.146	6	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口 底		高		J1	RL縄文を口縁部に横位・胴部に縦位施文し、幅広沈線の楕円区画文や沈線懸垂文を施す。内面丁寧な横位磨き。	加曾利E3式
第188図 PL.146	7	縄文土器 浅鉢	埋土中 口縁部片	口 底		高		C6	口縁部が強く内湾する浅鉢。内外面の口縁部上位に赤色塗彩。内外面共に丁寧な横位磨き。	焼町土器
第188図 PL.146	8	縄文土器 深鉢	18cm 胴部片	口 底		高		D4	LR縄文を斜位・多段に施文。内外面共に被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第188図 PL.146	9	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/2	口 底	(11.0)	高		D4	内外面共に被熱風化。外底面に灰付着、内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第188図 PL.146	10	剥片石器 石鏃	埋土中 ほぼ完形	長幅 2.5 1.3	厚重 0.4 0.7		珪質頁岩	片面に素材剥片段階の剥離面を残す。押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第188図 PL.146	11	礫石器 磨石	床直 完形	長幅 9.5 8.5	厚重 5.3 634.6		粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
1区213号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	0段多条1段縄の丸組紐を横位施文し、櫛歯状具のコンパス文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
1区214号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	0段縄丸組紐を横位・多段に施文。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
1区215号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文。外面やや被熱風化、内面横・斜位磨き。	関山Ⅱ式
1区218号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D4	隆帯渦巻文や沈線区画文を施し、区画内に短沈線を充填。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E3式
第223図 PL.147	2	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/5	口底 (8.0)		高	D6	沈線懸垂文を施す。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E3式
1区219号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	やや細密なLR縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第223図 PL.147	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	並行状の沈線懸垂文を施し、LR縄文を充填的に施文。内面横位磨き。	加曾利E3式
1区221号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D6	隆線の渦巻文や区画文に沿って凹線状の幅広沈線文を施し、区画内にRL縄文を充填施文内面横位磨き。	加曾利E3式
1区225号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	沈線区画文内に短沈線を充填的に施文。内面横位磨き。	加曾利E3式
1区237号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D6	RL縄文を横位施文し、低平な浮線文を横位施文。内面やや被熱風化。	諸磯b式
1区238号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D6	凹線状の幅広沈線区画文を施し、RL縄文を充填施文。内面横位磨き。	加曾利E3式
第223図 PL.147	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E5	断面三角形の隆起懸垂文を施し、RLとLR縄文を縦位施文して羽状構成。内面縦位磨き。	加曾利E3式
第223図 PL.147	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部～底部1/2	口底 11.0		高	E4	RL縄文を横位施文し、やや幅狭な沈線懸垂文内を擦り消す。内面縦位磨き。	加曾利E3式
2区37号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	32cm 頸部片	口底		高	A3	横・斜位の連点状刺突沈線文により三角形の意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	有尾式
第223図 PL.147	2	縄文土器 深鉢	26cm 口縁部片	口底		高	A8	波状口縁。連点状刺突沈線文を縦・斜位に施す。内外面共に被熱風化。	有尾式
第223図 PL.147	3	縄文土器 深鉢	20cm 頸部片	口底		高	A8	連続爪形文により菱形意匠を構成。内面被熱風化。	有尾式
第223図 PL.147	4	縄文土器 深鉢	49cm 胴部片	口底		高	A4	0段多条のRLとLR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面横位磨き。	有尾式
2区38号土坑出土遺物									
第223図 PL.147	1	縄文土器 深鉢	1cm 口縁部～底部 1/3	口底 (37.4)		高	A3	波状口縁。RLとLR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第224図 PL.147	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	関山Ⅱ式
第224図 PL.147	3	縄文土器 深鉢	4cm 底部1/3	口底 (9.4)		高	A3	RL縄文を横位施文。上げ底状の底部。内外面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
第224図 PL.147	4	縄文土器 深鉢	4cm 底部1/4	口底 (8.6)		高	A3	内外面共に被熱風化・剥離。	有尾式
第224図 PL.147	5	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口底		高	A3	波状口縁。断面三角形の細隆帯文を横位に施す。内面は半截竹管状工具の条痕文を施文。外面一部に煤状炭化物付着。	早期末葉
第224図 PL.147	6	縄文土器 深鉢	7cm 口縁部片	口底		高	A3	口唇部外端に0段縄の絡条体を上下から交互押圧して少波状を作出。下位に大振りな波状または鋸歯状隆帯文を施し、周辺部を含めて同絡条体圧痕文を施文。内面横位の条痕文。	早期末葉
第224図 PL.147	7	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅 2.1 2.1	厚重 0.8 3.4		チャート	上下両端及び左右両端に両極加撃痕が認められる。	
2区39号土坑出土遺物									
第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	やや幅広半截竹管の平行沈線文で菱形意匠を構成か。内面横位磨き。	有尾式
第224図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	RL縄文を横位・多段に施文。内面やや粗い横・縦位磨き。	有尾式

2区41号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高				
第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部片	口底	高		A3	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文し、菱形意匠を構成。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。内外面共に被熱風化。	有尾式
第224図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A3	RL縄文を横位・多段に施文。内面煤状炭化物付着。	有尾式

2区44号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	18cm 口縁部片	口底	高		A3	半截竹管の重ね引き集合沈線文を横・斜位に施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第224図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	12cm 胴部片	口底	高		A3/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位施文。内外面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
第224図 PL.148	3	弥生土器 甕	埋土中 底部1/4	口底 (9.0)	高		E2	底外面に木葉痕。内外面共に被熱風化。	弥生中期
第224図 PL.148	4	縄文土器 深鉢	14cm 口縁部片	口底	高		A3	RL・LR縄文を横位・交互に施文し、菱形意匠を構成。内面やや粗い撫で状の横位磨き。	有尾式

2区45号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A3	RL縄文を横位施文し、横位の沈線文を施す。内面横位磨き。	有尾式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	------------------------------	-----

2区46号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A3	L縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化、剥離。	有尾式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	------------------------------	-----

2区47A・47B号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口底	高		A3	0段多条のRL・LR縄文を横位・多段に施文し、羽状の意匠を構成。内外面共に被熱風化。	有尾式
第224図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	8cm 胴部片	口底	高		A3	RL縄文を横位施文し、幅広半截竹管の平行沈線文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第224図 PL.148	3	縄文土器 深鉢	5cm 胴部片	口底	高		A3	L縄文と附加条第1種RL+R2本縄を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。	有尾式
第224図 PL.148	4	縄文土器 深鉢	2cm 口縁部片	口底	高		B2	口唇上面に刻目を持つ外削ぎ状の波状口縁。口唇下に2条の横位隆帯を施し、先端が円弧状の窪または貝殻復縁状工具による刻目を連続施文。器厚は薄く灰白色を呈する。内面に指頭押圧状の成形痕。	清水ノ上Ⅱ式

2区48号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	3cm 胴部片	口底	高		A3	内外面共に条痕文を縦位に施文するが、内面の施文は浅い。内外面共に被熱風化。	早期末葉
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---------------------------------------	------

2区49号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	13cm 胴部片	口底	高		A3	RLとLR縄文を横位・交互に施文し、菱形意匠を構成。内面被熱風化。	有尾式
-----------------	---	------------	-------------	----	---	--	----	-----------------------------------	-----

2区50号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	33cm 口縁部片	口底	高		A3	半截竹管の重ね引き平行沈線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第224図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	56cm 胴部片	口底	高		A3/正反合2R/	正・反の合攪り縄文を横位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線文を横位に施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式

2区51号土坑出土遺物

第224図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	7cm 頸部片	口底	高		A5	半截竹管の横位平行沈線文と3本櫛歯状具のコンパス文を施す。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第224図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	15cm 口縁部片	口底	高		A5	やや粗大なRL縄文を横位・多段に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第224図 PL.148	3	剥片石器 打製石斧	7cm 完形	長幅 7.2 4.7	厚重 1.6 59.7		黒色頁岩	表裏面に素材剥片の剥離面を大きく残す。大形の横長剥片を素材とする。先端の刃部は片面加工でありエンドスクレイパーの刃部と類似する刃部形態である。	撥形

2区53号土坑出土遺物

第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高		A3	やや粗大な円形貼付文や斜格子状沈線文、円形刺突文などを施す。内面横位磨き。	関山Ⅰ式
第225図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部片	口底	高		A3	半截竹管の横・縦位平行沈線文や円形刺突文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第225図 PL.148	3	縄文土器 深鉢	5cm 口縁部片	口底	高		A3/直前合2R・2L/	2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互に施文。半截竹管の重ね引き平行沈線文で鋸歯状または菱形の意匠を構成。内外面共に被熱風化・ひび割れ、一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式

2区76号土坑出土遺物

第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高		A3	波状口縁で波底部に小突起を付す。口縁下位に横位隆帯文を施し、以下にRL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成か。口縁部および隆帯に沿って縦・横位の連点状刺突文を施す。内面丁寧な横位磨き。	有尾式
第225図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高		A4	波状口縁。RLとLR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第225図 PL.148	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高		A3	RLとLR縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成か。内面丁寧な横位磨き。	有尾式

2区91号土坑出土遺物

第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A5	RL縄文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面被熱風化・剥離。	有尾式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---------------------------------------	-----

2区106号土坑出土遺物

第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高		A3/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互に施文。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	-------------	----	---	--	------------------------	-------------------------------	------

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第225図 PL.148	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	A3	1段縄丸組紐を横位施文し、7本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式	
2区110号土坑出土遺物									
第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	A3	内割ぎ状口唇部。やや粗大なRL縄文を横位施文。内面丁寧な横位磨き。	有尾式	
2区116号土坑出土遺物									
第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口底	高	A3	0段多条のRL・RL縄文を横位・交互に施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式	
2区117号土坑出土遺物									
第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	底直 口縁部片	口底	高	A3	口唇部外端から上面にかけて相互に接続した小波状隆帯や小突起を付し、下位の横位や鋸歯状の隆帯文上面と共に0段縄の絡糸体圧痕文を施す。内外面共に被熱風化。内面はやや粗い横位撫で。	早期末葉	
2区122号土坑出土遺物									
第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底	高	A3/前々合2R/	前々段合攪り縄文を横位・多段に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
2区136号土坑出土遺物									
第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	2cm 口縁部片	口底	高	A3	波状口縁。櫛歯状工具の連点状刺突文や集合沈線文により菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式	
2区137号土坑出土遺物									
第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底	高	A3	1段縄丸組紐を横位施文し、櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
2区983号土坑出土遺物									
第225図 PL.148	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A3	1段縄丸組紐を横位施文し、櫛歯状工具のコンパス文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式	
4区269号土坑出土遺物									
第226図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	A4	R・L原体側面圧痕や刻み細隆帯、貼付文を施す。内面横位磨き。	二ツ木式	
第226図 PL.149	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A3	半截竹管の幅広連続爪形文を横位多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	有尾式	
第226図 PL.149	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A3	半截竹管の連続爪形文により菱形意匠を構成。内面横位磨き。	有尾式	
第226図 PL.149	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A6	0段多条RL・LR縄文を横位・交互に施文して羽状を構成。内面やや被熱風化。	有尾式	
4区270号土坑出土遺物									
第225図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A3	0段多条RL縄文を横位施文し、半截竹管のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第225図 PL.149	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A3	RL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形を構成か。内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式	
第225図 PL.149	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A3	RL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形を構成か。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
4区271号土坑出土遺物									
第225図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	底直 口縁部～底部 2/3	口底	35.3 (9.4)	高 36.7	A4	L縄文を横位・多段に施文。外面被熱風化・煤状炭化物付着。内面やや被熱風化、胴部下半煤状炭化物付着・被熱剥離。	黒浜式
第225図 PL.149	2	縄文土器 深鉢	底直 胴部片	口底		高	A4	0段多条RL縄文を横位施文。内面一部に煤状炭化物付着、やや被熱風化。	関山Ⅱ式
4区272号土坑出土遺物									
第225図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E3	RL縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	諸磯b式
4区274号土坑出土遺物									
第225図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B1	広義の表裏縄文系土器。LR縄文を横位施文し、内面には指頭状の押圧痕を残す。器厚は3-4mmと薄い。	早期中葉
4区276号土坑出土遺物									
第225図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	内外面共に被熱風化するが、外面にLR縄文を横位に施文。	関山Ⅱ式-有尾式
4区277号土坑出土遺物									
第226図 PL.149	1	縄文土器 土器片加工 円板	埋土中 充存	径 4.8 厚 1.0		重 31.3	C3	L縄文を横位施文した胴部破片を円形状に打割整形するが、周縁部に磨耗痕を持たない。	諸磯b式
第226図 PL.149	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	口唇部上面と口縁部に絡糸体圧痕文を施し、内面には条痕文を横位に施文。	早期末葉
第226図 PL.149	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	LR縄文を横位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で蕨手文や横線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第226図 PL.149	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	附加条第1種RL+L縄文を横位施文し、口縁部に半截竹管の横線文帯を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
4区282号土坑出土遺物									
第225図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	RL縄文を横位・多段に施文。内面やや粗い磨き。	関山Ⅱ式-有尾式
4区284号土坑出土遺物									
第225図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	やや粗雑な0段多条RL縄文を横位に施文。内面やや風化。	関山Ⅱ式

4区285号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高				
第226図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高		A3	波状口縁。口縁部に櫛歯状工具の連点状刺突沈線文により三角形または菱形の意匠を構成。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式

4区287号土坑出土遺物

第226図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A3	0段多条RL縄文を横位施文し、棒状工具2本単位の沈線文をX字状に施す。内面やや粗い横位磨き。	関山Ⅱ式	
第226図 PL.149	2	縄文土器 深鉢	14cm 底部完存	口底	8.1	高	A3	上げ底。1段縄丸組紐を横位に施文。底外面はやや粗い横位磨き、内面被熱風化。	関山Ⅱ式	
第226図 PL.149	3	礫石器 多孔石	埋土中 完形	長幅	19.2 13.9	厚重	8.6 2455.6	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。正面と裏面の中央付近に浅い孔が集中する。孔の内部は比較的滑らかである。	

4区291号土坑出土遺物

第227図 PL.149	1	縄文土器 注口付深鉢	14cm 頸部～胴部3/4	口底	(19.4)	高		A4	波状口縁。附加条第1種RL+LLと同LR+RR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面上半部に煤状炭化物付着、内面縦位磨き。	関山Ⅱ式
第227図 PL.149	2	縄文土器 深鉢	埋土中 底部完存	口底	5.8	高		A4	上げ底状の底部。内面被熱風化・剥離。	関山Ⅱ式
第227図 PL.149	3	礫石器 台石	10cm 1/2	長幅	(16.8) (13.9)	厚重	(5.6) 2077.3	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面の下半部と裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	

4区298号土坑出土遺物

第226図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	底直 頸部～胴部下位 2/3	口底		高		A4/正反合2R・2L (0段多条)/	2種類の正・反合撚り縄文を横位・交互に多段施文して羽状を構成。口縁部に櫛歯状工具の連点状刺突文や平行沈線文により菱形意匠を構成し、下位に隣接して同工具の渦巻文を施文。外面胴部下半被熱風化・剥離、煤状炭化物付着。内面横位磨き、胴部下半被熱風化・ひび割れ、煤状炭化物付着。	有尾式
-----------------	---	------------	----------------------	----	--	---	--	------------------------	--	-----

4区299号土坑出土遺物

第227図 PL.149	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A4	1段縄丸組紐を横位に施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第227図 PL.149	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A4	L縄文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き・やや被熱風化。	関山Ⅱ式

4区301号土坑出土遺物

第226図 PL.150	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A4	RL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面横位磨き。	有尾式
第226図 PL.150	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		A4	RL・LR縄文を横位に交互施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第226図 PL.150	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		E3	RL縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	諸磯b式

4区303号土坑出土遺物

第226図 PL.150	1	縄文土器 片口付深鉢	11cm 口縁部～底部 1/2	口底	(23.0) (11.2)	高	34.8	A4	片口注口。RL縄文と2種類のLR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成し、口縁部-底部にかけた各縄文の収束部4箇所に環付縄文を横位施文。外面胴部下半被熱風化・剥離。内面胴部下半煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第226図 PL.150	2	縄文土器 深鉢	6cm 口縁部片	口底		高		A4	1段縄丸組紐を横位に施文。半截竹管の重ね引きによる横位や鋸歯状・羊角状の平行沈線文を施す。内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第226図 PL.150	3	縄文土器 深鉢	6cm 胴部片	口底		高		A4/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前合撚り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成し、半截竹管の平行沈線文を横位施文。外面一部に被熱剥離、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式

4区305号土坑出土遺物

第227図 PL.150	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		A4	環付縄文を横位施文し、コンパス文の退嬰化した篋状工具の短沈線文を縦位に施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第227図 PL.150	2	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/4	口底	(8.2)	高		A4	高台状の底部。0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。高台部内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第227図 PL.150	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A4	L縄文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第227図 PL.150	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		A4	RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式?
第227図 PL.150	5	剥片石器 石匙	埋土中 完形	長幅	5.9 7.7	厚重	1.1 33.4	珪質変質岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。大形の横長剥片を素材とする。下部側縁部の二次加工は素材剥片の背面側に集中する。	横型

4区306号土坑出土遺物

第227図 PL.150	1	縄文土器 深鉢	2cm 口縁部～胴部片	口底	(37.6)	高		A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文し、口縁部に半截竹管の重ね引きによる蕨手文を施す。内外面共に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化・剥離。	関山Ⅱ式
第227図 PL.150	2	縄文土器 深鉢	21cm 胴部片	口底		高		A3	RL縄文を横位・多段に施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着・被熱風化。	関山Ⅱ式-有尾式
第227図 PL.150	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		A3	縄文を横位施文するが原体不明。口縁-頸部に多截竹管の粗雑なコンパス文を多段に施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第227図 PL.150	4	縄文土器 深鉢	7cm 胴部下半～底部 2/3	口底	7.0	高		A3	底面上げ底状。0段多条RL縄文を横位・多段に施文。内外面共に被熱風化・剥離。	関山Ⅱ式-有尾式

4区307号土坑出土遺物

第227図 PL.150	1	縄文土器 深鉢	埋土中 頸部～胴部片	口底		高		A8	半截竹管の連続爪形文で菱形意匠を構成。内面横位磨き。	有尾式
-----------------	---	------------	---------------	----	--	---	--	----	----------------------------	-----

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第227図 PL.150	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	RL縄文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	諸磯b式
4区308号土坑出土遺物									
第228図 PL.150	1	縄文土器 深鉢	8cm 胴部片	口底		高	A8	RL縄文を横位施文し、半截竹管の平行沈線文により菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化。	有尾式
第228図 PL.150	2	縄文土器 深鉢	埋土中 頸部～胴部片	口底		高	A3	L縄文とR縄文を横位・交互に施文し、菱形意匠を構成。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第228図 PL.150	3	縄文土器 深鉢	15cm 頸部～胴部片	口底		高	A3	半截竹管の連続爪形文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第228図 PL.150	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A6	内削ぎ状口唇部。R縄文とLR縄文を横位・交互に施文し、菱形意匠を構成。内面磨撫で状の横位磨き。	有尾式
第228図 PL.150	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A6	L縄文とR縄文を横位・交互に施文し、菱形意匠を構成。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
4区310号土坑出土遺物									
第227図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	波状口縁。口縁部に櫛歯状工具の縦位連点状刺突文を、下に半截竹管の連続爪形文を施す。内面横位磨き。	有尾式
第227図 PL.151	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	附加条第1種RL+LとLR+R縄文を横位・交互に施文。内面横・斜位磨き。	有尾式
第227図 PL.151	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	RL・LR縄文を横位・交互に施文。内面一部に煤状炭化物付着、やや被熱剥離。	有尾式
4区311号土坑出土遺物									
第228図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の重ね引きによる横位平行沈線文を施す。	関山Ⅱ式
第228図 PL.151	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	末端環付R縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第228図 PL.151	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	RL縄文を横位施文し、7本櫛歯工具によりやや粗大なコンパス文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第228図 PL.151	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部1/6	口底	(35.0)	高	A3/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互施文して羽状を構成。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
4区333号土坑出土遺物									
第228図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A3	LR縄文を横位・多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式-有尾式
4区336号土坑出土遺物									
第228図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A3	RL縄文を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
4区339号土坑出土遺物									
第228図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴下半～底部 1/5	口底	(5.9)	高	A3	LR縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式-有尾式
5区138号土坑出土遺物									
第228図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E4	RL縄文を縦位施文し、波状の沈線懸垂文を施す。内面被熱風化、煤状炭化物付着。	加曾利E2式
5区139号土坑出土遺物									
第228図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	J1	横位の刻み隆帯を口縁部に施す。内外面共に横位磨き。	堀之内2式
第228図 PL.151	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D2	断面三角形の棒状工具により押し引き的に連続刺突文を施す。内面磨撫で状の横位磨き。	後期中葉?
第228図 PL.151	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	櫛歯状工具の条痕文を縦位に施す。内外面共に風化。	後期中葉?
第228図 PL.151	4	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅 2.3	4.2	厚重 1.1 10.5	黒色頁岩	上下端に両極加撃痕が認められる。右側片に両極加撃に伴う剪断面が認められる。表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残し、小形の横長剥片を素材とする。節理面を打面とする。	
5区141号土坑出土遺物									
第228図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	16cm 胴部片	口底		高	H1	LR縄文を縦位施文。内外面共に被熱風化。	加曾利E4式
第228図 PL.151	2	縄文土器 深鉢	24cm 底部1/3	口底	(10.0)	高	E4	RL縄文を縦位施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E3式
7区346号土坑出土遺物									
第229図 PL.151	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	B5	口唇部に刻みを施す波状口縁。波頂下に刻み隆帯文が垂下し、口縁下位にも刻み横位隆帯文が廻る。同区画内には弧線状や側線状に単列の角押文を施文。	阿玉台1b式
第229図 PL.151	2	縄文土器 深鉢	6cm 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を斜位に施文。隆線文を縦・横位に施し、それに沿って沈線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着。	新巻類型
第229図 PL.151	3	縄文土器 深鉢	21cm 胴部片	口底		高	H1	0段多条LR縄文を胴上部に横位、下部に縦位に施文。隆線文の両側に幅広沈線を施す。	新巻類型?
第229図 PL.151	4	縄文土器 深鉢	6cm 胴下半～底部 1/3	口底	(10.4)	高	H1	底部近縁に断面三角形の隆帯を2条廻らせ、上位の隆帯には横位の平行沈線文を施す。外面やや被熱風化。	勝坂2式
第229図 PL.151	5	縄文土器 深鉢	底直 頸部～底部2/3	口底	(18.3)	高 (24.1)	H1	眼鏡状の小突起やそれを連結する懸垂状隆線に沿って沈線文および先端半円形籠状工具の角押文を施す。外面一部に煤状炭化物付着。	勝坂2式
第229図 PL.151	6	縄文土器 深鉢	11cm 口縁部片	口底		高	D6	口唇や口縁部に捻転した眼鏡状小突起を施し、部分的に角押文を沿わせる。	勝坂2式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第229図 PL.151	7	縄文土器 深鉢	21cm 胴部片	口底		高	C4	鋸歯状・曲線状の三角押文を施す。外面に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	勝坂2式	
第229図 PL.151	8	縄文土器 深鉢	9cm 把手2/3	口底		高	H1	嘴状に開口する大形把手。中央部に凹孔を穿ち、周囲に2個の三叉状印刻文を施す。下位には凹形貼付文。内外面共に煤状炭化物付着。	勝坂2式	
第229図 PL.151	9	縄文土器 鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B5	RL縄文を縦位施文。半截竹管の押し引き状の刻みを施す隆線文に沿って同工具の平行沈線文を施文。内面炭素吸着。	勝坂3式併行	
第229図 PL.152	10	縄文土器 深鉢	7cm 口縁部片	口底		高	H1	小突起を付す波状口縁で、波頂部内面に隆帯渦巻文を施す。口縁部に隆帯楕円区画文を配し、頸部に沈線の楕円区画文や三叉状の印刻文を施す。	勝坂3式?	
第229図 PL.152	11	縄文土器 深鉢	13cm 胴下半～底部 2/3	口底	9.2	高	H1	無文。外面煤状炭化物付着、内面やや風化。	勝坂3式	
第229図 PL.152	12	縄文土器 深鉢	9cm 胴下半～底部完 存	口底	7.6	高	H1	2本単位の沈線懸垂文を4単位施す内外面共に煤状炭化物付着。	勝坂3式	
第229図 PL.152	13	縄文土器 深鉢	7cm 胴下半～底部 1/3	口底	(8.6)	高	H1	眼鏡状の小突起やそれを連結する懸垂状隆線に沿って単沈線文や三叉文を施す。内外面一部に煤状炭化物付着。	焼町土器	
第229図 PL.152	14	縄文土器 深鉢	11cm 胴部片	口底		高	H1	眼鏡状小突起や懸垂状隆線に沿ってU字状・渦巻状の単沈線文や印刻文を施す。内面やや被熱風化。	焼町土器	
第230図 PL.152	15	縄文土器 深鉢	8cm 口縁～胴上半片	口底		高	D6	眼鏡状小突起や曲線隆線に沿って沈線文を施す。	焼町土器	
第230図 PL.152	16	礫石器 磨石	3cm 完形	長幅	12.3 8.4	厚重	3.2 517.4	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
7区347号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4/前々合2R/	前々段合振り縄文を横位に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
7区351号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	沈線区画文内にLR縄文を充填施文か。内外面共にやや風化。	加曾利E5式	
第230図 PL.152	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	沈線区画文内にLR縄文を充填施文か。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E5式	
第230図 PL.152	3	縄文土器 深鉢	5cm 胴部片	口底		高	E5	棒状工具のやや深い沈線で区画文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に被熱風化。	加曾利E5式	
第230図 PL.152	4	礫石器 凹石	床直 完形	長幅	12.0 7.8	厚重	7.7 880.4	粗粒輝石安山岩	軟質の石材で、全体的に整形されている可能性がある。表面と左側面に浅い凹みと磨面が認められる。	
7区352号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
7区361号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RLR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文間を磨り消す。内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式	
第230図 PL.152	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	波状口縁。口縁に横位沈線文を廻らせ、櫛歯状工具の条線文を縦位に施文。内面横位磨き。	加曾利E3式	
第230図 PL.152	3	剥片石器 打製石斧	埋土中 1/2	長幅	(6.5) (4.1)	厚重	(1.6) 49.0	細粒輝石安山岩	片面に自然面を大きく残す。円礫を利用する。先端部の刃部付近に部分的な摩滅が認められる。	短冊形
7区362号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第230図 PL.152	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	口縁部に半截竹管の平行沈線文を横・斜位に施文。内面横位磨き。	有尾式	
第230図 PL.152	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E5	沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に風化。	加曾利E4式	
第230図 PL.152	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	B4	外割ぎ状に肥厚する口縁に刺突文を施し、胴部に沈線懸垂文を施文。内外面共にやや風化。	堀之内1式	
7区381号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、幅広の沈線懸垂文を複数条施す。内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式	
第230図 PL.152	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	口縁部無文。内外面横位の磨き。	堀之内1式	
第230図 PL.152	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	G1	幅広の隆帯を斜位に貼付し、2条の短沈線文を施す。内外面共に横位の磨き。	堀之内1式	
7区382号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	口縁突起部の破片。やや深い沈線区画内に短沈線を充填施文。内面粗い撫で。	郷土式	
第230図 PL.152	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内面縦位の磨き。	加曾利E1式	
7区383号土坑出土遺物										
第230図 PL.152	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E5	RL縄文を縦位施文し、縦位の隆帯懸垂文や沈線渦巻文を施す。内面やや風化。	加曾利E1式併行	
第230図 PL.152	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文。内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第230図 PL.152	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	細沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや風化。	加曾利E4式	
7区389号土坑出土遺物										
第231図	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文。内面やや風化。	加曾利E3式	
7区393号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	13cm 底部片	口底		高	C5	内外面共にやや風化。	堀之内2式	
第231図 PL.153	2	縄文土器 注口土器	9cm 底部完存	口底	5.8	高	G1	丸底状の底面。無文。内外面共にやや風化。	後期中葉	
7区395号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	21cm 口縁部片	口底		高	G1	捻転状小突起を付す波状口縁。断面V字状のやや深い横線文を施し、LR縄文を充填施文。内面にも同様の沈線文1条を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利B1式	
第231図 PL.153	2	剥片石器 打製石斧	26cm 完形	長幅	10.3 5.9	厚重	2.5 139.5	黒色頁岩	表面の上端に摩滅が認められる。両側片の括れ部にはつぶれが認められ着柄痕の可能性はある。	分銅形
7区397号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	口唇に刻目を施し、内面に3条の横線文を施文。外面やや風化。	堀之内2式	
7区410号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	捻転状小突起を付す波状口縁。横線文を施し、縦区切文やLR縄文を施文。内外面共に横位磨き。	加曾利B1式	
7区417号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、単沈線の横線文や波状文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式	
第231図 PL.153	2	縄文土器 深鉢	10cm 口縁部片	口底		高	H1	LR縄文を横位施文し、3条の横位単沈線文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式	
7区418号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	櫛歯状工具の条線文を縦位施文し、単沈線の弧線文を施す。内面やや風化。	加曾利E3式	
第231図 PL.153	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	LR縄文を縦位に施し、沈線懸垂文を施文。内外面やや風化。	加曾利E3式	
第231図 PL.153	3	礫石器 磨石	6cm 完形	長幅	12.5 7.5	厚重	4.8 765.1	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面と左側片に磨面が認められる。下端部に敲打痕が集中するがその内部にも磨面が認められる。	
7区419号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内面縦位の磨き。	加曾利E3式	
7区420号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	口縁部に隆線渦巻文や区画文を施し、短沈線文を縦位に充填施文。	加曾利E2式	
第231図 PL.153	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	単沈線文を施す。内面被熱風化。	堀之内1式	
第231図 PL.153	3	剥片石器 打製石斧	埋土中 2/3	長幅	(7.3) (4.2)	厚重	(1.6) 50.1	黒色頁岩	上面に自然面を残す。円礫を利用する。先端部欠損。	短冊形?
7区424号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 鉢	埋土中 口縁部1/4	口底	(15.4)	高	G1	口縁に横線文帯を施し、列点状の縦区切文を施文。内外面共に横位磨き。	加曾利B1式	
第231図 PL.153	2	縄文土器 注口土器	13cm 底部1/4	口底	(6.0)	高	G1	底面に網代痕。内外面共に黒色の光沢ある丁寧な磨き。	加曾利B1式?	
7区426号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	礫石器 磨石	31cm 完形	長幅	14.4 9.8	厚重	4.2 801.6	粗粒輝石安山岩	扁平な垂円礫を利用する。表面と上端の一部に磨面が認められる。上下端と両側片に敲打痕が集中する。右側片には敲打に伴う剥離面が複数認められる。	
7区436号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、単沈線2条の粗雑なコンパス文を施す。内面被熱風化。	関山II式	
第231図 PL.153	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	繊維の粗いLR縄文を横位に施文。内面やや風化。	諸磯b式	
7区507号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	く字状に内折する口縁に沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	堀之内1式	
第231図 PL.153	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	横位削り調整後、横帯状に磨き残した部位を横線文で区画し、格子目文を充填施文。	加曾利B2式?	
第231図 PL.153	3	礫石器 磨石	23cm 完形	長幅	9.2 4.6	厚重	3.1 190.8	粗粒輝石安山岩	小形円礫を利用する。表面のほぼ全面に磨面が認められる。	
7区512号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の平行沈線で渦巻文を施す。内面横位磨き。	関山II式	
7区562号土坑出土遺物										
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	G1	口縁に横線文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面は横位に段を構成。内面丁寧な横位磨き。	加曾利B1式	

7区564号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	E2	深い単沈線文を施す。内面横位磨き。	堀之内1式

7区567号土坑出土遺物

第232図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の平行沈線の重ね引きで鋸歯状文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第232図 PL.153	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A4	0段多条のRL・LR縄文を横位に施文し、半截竹管のコンパス文を施す。内外面共にやや風化。	関山Ⅱ式
第232図 PL.153	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A4	1段縄丸組紐を横位多段に施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第232図 PL.153	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A4	0段多条のRL・LR縄文を交互に横位施文し、菱形意匠を構成。内面被熱風化。	関山Ⅱ式

7区572号土坑出土遺物

第231図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A4	RL縄文を横位施文。内外面に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	---	----	------------------------	------

7区573号土坑出土遺物

第232図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	RL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利E3式
第232図 PL.153	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	幅広の横位隆帯文を施し、LR縄文を充填的に施文。内面やや風化。	加曾利E3式

7区577号土坑出土遺物

第232図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	G1	捻転状小突起を付す波状口縁。口縁に刻み細隆線文を2段に施し、縦位の同隆線文で連結。波頂下に円形刺突文を施文。口縁内面に沈線の曲線文を施す。	堀之内2式
-----------------	---	------------	-------------	----	---	----	---	-------

7区578号土坑出土遺物

第232図 PL.153	1	縄文土器 深鉢	21cm 口縁部～頸部 1/2	口底	(23.6) 高	H1	捻転した渦巻状の小突起を付す平口縁。少突起下に逆U字状の隆線懸垂文を貼付。口縁部に単沈線で幅狭の長楕円形やU字形および円形の区画文を施し、その内側に沈線を付加して半隆起線的に描出。間隙に三角押文や爪形文、細棒6本束工具の刺突文などを施す。頸部に箍状の隆帯を廻らせ、爪形文を沿わせる。	勝坂1式?
-----------------	---	------------	-----------------------	----	----------	----	---	-------

7区580号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	低平・幅広な隆帯の区画文内にRL縄文を充填施文。内外面共にやや風化。	加曾利E3式
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	B4	横線文帯の区画内に櫛歯状工具の横位条線文を充填施文。内面口唇下に横位沈線文を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利B1式

7区581号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A4	1段縄丸組紐を横位施文。外面やや風化、内面縦位磨き。	関山Ⅱ式
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	RL縄文を縦位施文。内外面やや被熱風化。	加曾利E3式

7区582号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	A4	附加条第1種RL+L・LとLR+R・Rの2種類の縄文を横位施文するが、施文が浅いために各軸縄の施文が不明瞭。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	H1	口縁に眼鏡状小突起やそれに接続する隆線文を付し、爪形文を施文。内面横位撫で。	勝坂2式

7区585号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位に交互施文し、半截竹管のコンパス文を施す。外面風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	L縄文を縦位に施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	中期後半

7区589号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部1/4	口底	高	C5	口縁に横線文帯を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に凹線状の横位沈線文を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利B1式
-----------------	---	------------	--------------	----	---	----	---	--------

7区596号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	RL縄文を横位施文し、横位の浮線文を複数段に施す。内面やや粗い撫で状の横位磨き。	諸磯b式
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	RL縄文を縦位施文し、沈線の渦巻懸垂文等を施す。内面やや風化。	加曾利E2式

7区597号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	RL・LR縄文を交互・多段に施文。内面横位撫で。	前期末葉
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	9cm 胴部片	口底	高	H1	RL縄文を縦位施文し、隆線文に沿って単沈線の曲線文を施す。内面被熱風化。	新巻類型

7区606号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高	A4	1段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	-------------	----	---	----	---------------------------------------	------

7区609号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高	H1	櫛歯状工具の条線文を縦位施文し、単沈線の蛇行懸垂文を施す。内面縦位磨き。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	---	----	--------------------------------------	--------

7区615号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B4	懸垂状隆線文に沿って単沈線文を施し、隙間部に沈線文やLR縄文を縦位施文。内面炭素吸着。	新巻類型

7区618号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	G1	口縁に刻み細隆線文を2段施文し、8字状貼付文を付す。下に横帯区画文を施し、LR縄文を縦位施文。内面口唇下に横線文。内外面共に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	埋土中 ほぼ完形(口縁一部欠損)	口底	9.0 6.0	高 11.0	G1	ミニチュア的な小形深鉢。捻転状小突起を推定3単位に付す。口縁に刻み細隆線文を2段施文し、推定6箇所に8字状貼付文を付す。下に楕円区画横帯文を施し、LR縄文を充填施文。口唇内面に刻目と横線文を施す。底外面に網代痕。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きにより黒色の光沢を帯びる。	堀之内2式

7区619号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条のRL・LR縄文を横位施文し、半截竹管のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	--	------

7区620号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	22cm 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に単沈線の横線文や連弧文を施す。外面横位撫で・煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E2式
第232図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	30cm 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文。内外面やや被熱風化、煤状炭化物付着。	加曾利E2式
第232図 PL.154	3	縄文土器 深鉢	20cm 胴部片	口底		高	H1	半截竹管の平行沈線文を横・縦位に施文し、部分的に櫛歯状工具の条線文を縦位に施す。内面横位撫で。	加曾利E2式

7区624号土坑出土遺物

第232図 PL.154	1	剥片石器 石鏃	埋土中 完形	長幅	1.6 (1.6)	厚重	0.3 0.5	黒曜石	片面に素材剥片段階の剥離面を残す。押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
-----------------	---	------------	-----------	----	--------------	----	------------	-----	-------------------------------	-------

7区629号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	剥片石器 打製石斧	23cm 2/3	長幅	(7.9) 4.7	厚重	2.2 81.6	黒色頁岩	裏面に自然面を残し円礫を利用する。下部欠損。	撥形?
-----------------	---	--------------	-------------	----	--------------	----	-------------	------	------------------------	-----

7区633号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条のLR縄文を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第233図 PL.154	2	剥片石器 打製石斧	16cm 完形	長幅	15.8 7.3	厚重	2.5 252.3	黒色頁岩	両側片の中央付近には部分的なつぶれが認められ着柄痕の可能性はある	撥形

7区637号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位に施文し、5本櫛歯状工具のコンパス文を施す。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	--	------

7区638号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A9	波状口縁。0段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	-------------	----	--	---	----	--	------

7区639号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	10cm 口縁部～胴部下 半1/3	口底	(43.0)	高	A4/直前合2L・2R (0段多条)、直前 合1L・1R/	4単位の波状口縁。口縁に0段多条RLの環付縄文を横位施文。その下に4種類の直前段合擦り縄文を横位多段に施文して菱形意匠を構成し、半截竹管のコンパス文を施す。内面やや風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	-------------------------	----	--------	---	-------------------------------------	---	------

7区642号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	縦位の隆線文に沿って連続した爪形文を施す。内面炭素吸着。	勝坂2式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	------------------------------	------

7区643号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	籠状の隆帯文に沿ってキャタピラ状の押圧文と鋸歯状の三角押文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	勝坂2式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	--	------

7区644号土坑出土遺物

第233図 PL.154	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の鋸歯状文を施す。内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第233図 PL.154	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。LR縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第233図 PL.154	3	縄文土器 深鉢	3cm 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文。内面縦位磨き。	関山Ⅱ式	
第233図 PL.154	4	剥片石器 石匙	埋土中 完形	長幅	4.1 3.6	厚重	0.6 9.0	黒色頁岩	素材剥片は自然面打面である。円礫を利用する。両側縁の二次加工は素材剥片の背面側に認められる。	縦型

7区647号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条LR縄文を縦位施文。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	-----------------------	------

7区648号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	粗雑なLR・RL縄文を横位・交互に施文。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第233図 PL.155	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式

7区649号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	やや粗雑なRL縄文を横位施文し、半截竹管の平行沈線文を施す。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	---------------------------------------	------

7区655号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高				
第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4/直前合2L・ 直前合2R(0段多 条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位に交互施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第233図 PL.155	2	縄文土器 深鉢	埋土中 底部	口底	(7.0)	高	A4	高台状の上げ底。RLとLR縄文を横位・交互に施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式

7区657号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	底直 口縁部～胴上半 部1/3	口底	(39.4)	高	A4/直前合2L・ 直前合2R(0段多 条)/	波底部に刻みを施す波状口縁。口縁部-頸部に2種類の直前段合攪り縄文を横位多段に交互施文し、菱形意匠を構成。胴部は0段縄丸組紐を横位多段に施文し、5本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	-----------------------	----	--------	---	-------------------------------	--	------

7区658号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。LRの環付縄文を横位2段に施文し、以下LR縄文を横位に施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第233図 PL.155	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4/直前合2L・ 直前合2R(0段多 条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位に交互施文し、半截竹管のコンパス文を施す。内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第233図 PL.155	3	礫石器 凹石	埋土中 2/3	長 幅	(8.0) 6.5	厚 重	3.5 250.4	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面に浅い凹みが3箇所認められる。表裏面に部分的な磨面が認められる。

7区659号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B5	横位の爪形文を多段に施文。内面煤状炭化物付着。	阿玉台Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	-------------------------	-------

7区660号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	双頭の波状口縁。1段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で弧線文や渦巻文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	-------------	----	--	---	----	---	------

7区662号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文し、半截竹管のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	--	------

7区663号土坑出土遺物

第234図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部～胴上半 部完存	口底	30.8	高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文。内外面の胴下半部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第234図 PL.155	2	縄文土器 深鉢	4cm 口縁部～胴上半 部1/6	口底	(35.5)	高	A4	0段縄丸組紐を横位多段に施文。内外面共に被熱風化、胴下半部煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第234図 PL.155	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部～胴部 1/2	口底	(13.4)	高	A4	0段多条LRの環付縄文を横位4段に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式

7区664号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	細棒状工具7本束の横位鋸歯状文を施し、直前段合攪り縄を横位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	-------------	----	--	---	----	--	------

7区669号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を横位施文し、櫛歯状工具の集合沈線文を施す。内面やや被熱風化。	諸磯b式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	-------------------------------------	------

7区670号土坑出土遺物

第234図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	口唇部がく字状に外折。隆帯で楕円状区画文や渦巻文を施す。内面やや被熱風化。	加曾利E2式
第234図 PL.155	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	曲隆線文に沿って半截竹管の重ね引きによる半肉彫的な平行沈線文を施す。外面やや被熱風化、内面縦位磨き。	焼町土器
第234図 PL.155	3	礫石器 磨石	38cm 完形	長 幅	14.7 9.9	厚 重	3.4 787.5	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。下部部に敲打痕が集中する。

7区672号土坑出土遺物

第233図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	H1	横位の波状隆線文を施す。内面やや被熱風化。	三原田式
第233図 PL.155	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の平行沈線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式

7区673号土坑出土遺物

第234図 PL.155	1	縄文土器 深鉢	17cm 胴部片	口底		高	H1	微隆起懸垂文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利E5式	
第234図 PL.155	2	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口底		高	H1	やや粗雑な微隆起線の横線文や懸垂文を施文し、交点に押圧文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E5式	
第234図 PL.155	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	G1	いわゆる「体部屈曲鉢」で、三角形の区画文内にLR縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き。	堀之内2式	
第234図 PL.155	4	縄文土器 深鉢	34cm 胴部片	口底		高	H1	斜位方向からの連続刺突文を多段に施す。内面やや被熱風化。	三十稲場式	
第234図 PL.155	5	剥片石器 石鏃	埋土中 4/5	長 幅	(1.2) (1.1)	厚 重	0.3 0.3	黒曜石	押圧剥離により整形する。先端部及び左脚部欠損。	凹基無茎鏃
第234図 PL.155	6	礫石器 台石	床直 ほぼ完形	長 幅	(17.9) 16.6	厚 重	4.0 1808.9	変質安山岩	扁平な円礫を利用する。正面と裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	

7区674号土坑出土遺物

第234図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	9cm 口縁部～胴下半 完存	口底	28.7	高	A4	4単位の突起を付した波状口縁。RL・LR縄文を交互・多段に施文し、菱形意匠を構成。外面胴上半部に煤状炭化物付着、内面被熱風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	----------------------	----	------	---	----	---	------

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第234図 PL.156	2	縄文土器 片口付深鉢	2cm 底部欠損	口底	28.7	高	A4/直前合1L・ 直前合1R/	0段多条RL環付縄文を口縁部と胴部中に施文。以下、2種類 の直前段合攪り縄を横位多段に施文し、菱形意匠を構成。 外面胴上半部と内面胴下半部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
7区675号土坑出土遺物										
第233図 PL.156	1	礫石器 磨製石斧	9cm 不明	長幅	(8.6) (6.0)	厚重	(2.3) 174.3	変質蛇紋岩	表面の剥離面(破損面?)は全て研磨後の痕跡であるが、裏面 には剥離面(破損面?)形成後の研磨痕が認められる。	
7区681号土坑出土遺物										
第233図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	LR縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
7区682号土坑出土遺物										
第235図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を 施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第235図 PL.156	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。0段縄丸組紐を横位施文。外面煤状炭化物付着、 内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式	
第235図 PL.156	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
7区683号土坑出土遺物										
第235図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文。内面やや被熱風化、煤状炭化物 付着。	関山Ⅱ式	
7区686号土坑出土遺物										
第235図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
7区688号土坑出土遺物										
第235図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	21cm 胴部片	口底		高	H1	外削ぎ状の口唇上縁およびその下位に横線文を施し、下位 に斜線文を施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	早期沈線文系	
第235図 PL.156	2	縄文土器 深鉢	21cm 口縁部片	口底		高	C3	波状口縁。口縁に沿って集合結節浮線文を多段に施文。内 面横位磨き。	諸磯c式	
第235図 PL.156	3	縄文土器 深鉢	21cm 胴下半～底部 2/3	口底	11.6	高	H1	胴部下半に箍状隆帯文を2段に施し、連続爪形文や三角押文 を施す。内外面共に被熱風化、外面煤状炭化物付着。	勝坂2式	
7区694号土坑出土遺物										
第235図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	12cm 胴下半～底部 1/4	口底	(7.8)	高	A4	上げ底状の底部。0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施 文して菱形意匠を構成。底外面に半截竹管の平行沈線文を 充墳的に施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
第235図 PL.156	2	縄文土器 深鉢	5cm 口縁部片	口底		高	A5	RとL縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面 口縁部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式	
7区705号土坑出土遺物										
第235図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	2本の微隆起線文を施し、RL縄文を充墳施文。内外面共に被 熱風化。	加曾利E4式	
第235図 PL.156	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	く字状に短く内折する口縁。C字状の小突起を付し、刺突及 び横線文を施す。内面横位磨き。	堀之内1式	
第235図 PL.156	3	礫石器 磨石	8cm 完形	長幅	13.2 8.2	厚重	5.2 915.4	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。 表面の中央付近の2箇所に敲打痕が集中する。	
7区709号土坑出土遺物										
第236図 PL.156	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	口縁に横位微隆起線文を施す。下位にV字状の沈線区画文 を施し、LR縄文を充墳施文。内面横位磨き。	加曾利E4式	
第236図 PL.156	2	縄文土器 深鉢	12cm 口縁部片	口底		高	G1	単沈線の区画文を施す。外面に煤状炭化物付着、内面横位 磨き。	称名寺1式	
第236図 PL.156	3	礫石器 多孔石	9cm 不明	長幅	(21.0) (16.2)	厚重	(17.1) 4790.1	粗粒輝石安山岩	正面と右側面に自然面を大きく残り角礫を利用する。自然 面の残る面に漏斗状の孔が多数認められる。	
7区714号土坑出土遺物										
第235図 PL.157	1	縄文土器 深鉢	2cm 完形	口底	31.8 12.0	高	47.9	H1	内削ぎ状の口唇部。粗製の深鉢。外面口縁部横位磨きで、 胴部中位煤状炭化物付着、胴部下位被熱風化・剥離。内面 口縁部横位磨き、胴部被熱風化・剥離。	中期中葉
第235図 PL.157	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B4	曲隆線文に沿って半截竹管の重ね引き平行沈線文を施し、 隙間にLR縄文を充墳施文。内面横位磨き、炭素吸着。	新巻類型	
第235図 PL.157	3	縄文土器 深鉢	2cm 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に橋状小把手を付し、幅狭な沈線区画文を施す。	焼町土器	
第235図 PL.157	4	礫石器 凹石	22cm ほぼ完形	長幅	(23.1) 9.6	厚重	5.3 1635.1	粗粒輝石安山岩	棒状の円礫を利用する。表裏面の上方と下方に線状の凹み が連続する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。上下 端には敲打痕が認められる。	
7区716号土坑出土遺物										
第235図 PL.157	1	縄文土器 深鉢	27cm 胴部片	口底		高	H1	隆線の楕円区画文を多段に施し、連続爪形文を沿わせる。 外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	勝坂2式	
7区717号土坑出土遺物										
第236図 PL.157	1	縄文土器 深鉢	33cm 口縁～胴部片	口底		高	B5	口縁部にRLとLR縄文を横位交互に施文し、鋸歯状意匠を構 成。下位にRL縄文を縦位施文。押圧を付した横位隆線文や 渦巻・弧・懸垂状に角押文を施す。内面横位磨き。	五領ヶ台式	
第236図 PL.157	2	縄文土器 深鉢	31cm 胴部下半～底部 1/3	口底	7.2	高	H1	無文。内外面やや被熱風化。	中期後半	
第236図 PL.157	3	縄文土器 深鉢	33cm 口縁部片	口底		高	B5	口縁に突起を付し、その内外面に隆線の渦巻文を施す。内 面横位磨き。	五領ヶ台式	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第236図 PL.157	4	縄文土器 深鉢	25cm 底部1/3	口底	(14.0)	高	H1	無文。内外面被熱風化。5と同一個体か。	中期後半	
第236図 PL.157	5	縄文土器 深鉢	32cm 頸部片	口底		高	H1	粗製の深鉢か。外面やや粗い撫で、内面横位磨き。4と同一個体か。	中期後半	
第236図 PL.157	6	剥片石器 打製石斧	32cm ほぼ完形	長幅	(10.1)	厚重	1.2 84.5	変質安山岩	表面には素材剥片の剥離面を大きく残し大形の横長剥片を素材とする。裏面には自然面を大きく残し円礫を利用する。	撥形
第236図 PL.157	7	剥片石器 打製石斧	29cm 完形	長幅	9.9	厚重	1.8 87.1	黒色頁岩	表裏面の先端から中央付近にかけて摩滅が認められ使用痕の可能性ある。裏面に自然面を残し円礫を利用する。	短冊形
7区725号土坑出土遺物										
第236図 PL.157	1	縄文土器 深鉢	34cm 胴部片	口底		高	H1	R然糸文を縦位施文。単沈線の横線文や弧状文を施す。内外面共に被熱風化。	新巻類型	
第236図 PL.157	2	剥片石器 打製石斧	床直 完形	長幅	12.7	厚重	3.4 278.4	細粒輝石安山岩	表面の一部に自然面を残し円礫を利用する。表裏面の先端部付近に摩滅が認められ使用痕の可能性ある。この摩滅より新しい複数の剥離面が先端部に認められる。両側片の中央からやや上方につぶれが認められ着柄痕の可能性ある。	短冊形
7区726号土坑出土遺物										
第236図 PL.157	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	L縄文を横・斜位に施文し、撚糸文的な縦位の条方向を意識か。単沈線の横線文を多段に施文して横帯区画し、単沈線波状文の施文帯と三叉状印刻文を上下・交互に配した施文帯とを交互に多段施文。内外面共にやや被熱風化。	新巻類型	
第236図 PL.157	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	眼鏡状の小突起を弧状・渦巻状の隆帯で連結し、それらの両側に単沈線文を沿わせる。隙間部には地文的にL縄文を充填施文し、波状や三叉状の単沈線文を施す。内面横位磨き。	新巻類型	
7区729号土坑出土遺物										
第235図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底		高	A4	0段多条1段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。外面被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式	
7区732号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	起伏の少ない台形状突起を付す平口縁。口縁部にLR縄文を縦位に施文し、胴部に1段縄丸組紐を横位施文。半截竹管の平行沈線文で鋸歯状の意匠を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
7区736号土坑出土遺物										
第236図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	底直 胴部片	口底		高	H1	隆線懸垂文でパネル状に区画した内部に、LR縄文を地文的に充填施文し、懸垂文に沿わせた単沈線文や曲線文等を施す。内面横位磨き。	新巻類型	
7区739号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 浅鉢	26cm 口縁部片	口底		高	H1	無文。外面磨削り後横位磨き、内面横位磨き。	中期後半	
7区747号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 浅鉢	3cm 口縁部片	口底		高	H1	内面に稜を持つ無文浅鉢。内面横位磨き。	中期後半	
第237図 PL.158	2	礫石器 磨石	4cm 完形	長幅	15.9	厚重	4.0 785.0	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められ、両側片との境界付近には稜が形成される。裏面の上方と下方には敲打痕の集中箇所がある。	
7区748号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、隆線懸垂文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式	
7区751号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 注口土器	1cm 口縁部～底部 1/5	口底	(17.0)	高	G1	口縁部-体部上半にかけて単沈線の横線文や弧線文を施す。屈曲部上位に貼付文の剥落あり。内外面上半部共に丁寧な磨きで光沢を帯びる。	加曾利B2式	
7区752号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	8cm 口縁部片	口底		高	A4	双頭の波状口縁。0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で渦巻文等を施す。	関山Ⅱ式	
第237図 PL.158	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	C4	籠状の横位隆帯文を施し、下位に隆線文とその上面や両側に沿って爪形文を施文。	勝坂式	
7区753号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	剥片石器 打製石斧	床直 完形	長幅	11.8	厚重	2.5 179.3	黒色頁岩	裏面に自然面を大きく残し円礫を利用している。両側片に部分的なつぶれが認められる。表面の上方に、両側片からの両極加撃による剥離面が認められる。	撥形
7区754号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B5	RLとLR縄文を交互に縦位施文して羽状を構成。角押文で楕円状の意匠を描く。内面やや風化。	五領ヶ台式	
第237図 PL.158	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文。内外面共にやや風化。	関山Ⅱ式	
第237図 PL.158	3	礫石器 磨石	埋土中 完形	長幅	13.0	厚重	4.5 674.8	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
7区768号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 台付深鉢?	埋土中 脚台部片	口底		高	H1	外面縦位磨き、内面斜位磨き。	中期後半	
7区772号土坑出土遺物										
第237図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式	

7区776号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	高			
第237図 PL.158	1	礫石器 石皿	12cm 不明	22.4 (14.5)	12.1 2300.4		粗粒輝石安山岩	正面と裏面を中心に漏斗状の孔が多数認められる。正面には浅い凹み状の磨面が、裏面には明確な縁をもつ磨面が認められることから石皿の転用と考えられる。	
第237図 PL.158	2	剥片石器 楔形石器	13cm 完形	8.2 7.7	2.6 175.1		黒色頁岩	ほぼ全周にわたり両極加撃と想定される剥離痕が認められる。表面の中央付近に部分的な磨滅が認められる。裏面には自然面を大きく残し円礫を利用する。	

7区786号土坑出土遺物

第237図 PL.158	1	礫石器 台石	埋土中 完形	長幅 14.1	厚重 7.3 3118.9		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面のほぼ全面に磨面が認められ、敲打を受けた痕跡が散在する。	
-----------------	---	-----------	-----------	------------	---------------------	--	---------	---	--

7区788号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	縄文土器 片口付深鉢	5cm 口縁～胴下半部 1/2	口底	高		A4/直前合2L・ 直前合2R(0段 多条)/	波状口縁。口縁-括れ部に1段縄丸組紐を横位・多段に施文。胴部に2種類の直前段合攪り縄を横位多段施文し、菱形意匠を構成。口縁部文様は半截竹管の重ね引き平行沈線で渦巻文・横線文等を描き、5本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内外面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
第238図 PL.159	2	縄文土器 深鉢	10cm 胴部片	口底	高		A4	1段縄丸組紐を横位施文。内外面被熱風化、外面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式

7区789号土坑出土遺物

第237図 PL.158	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4/直前合2R(0 段多条)/	直前段合攪り縄を横位に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	---------------------	-----------------------	------

7区791号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	1段縄丸組紐を横位施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第238図 PL.159	2	縄文土器 深鉢	35cm 口縁部片	口底	高		G1	波状口縁。Y字状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	称名寺Ⅰ式
第238図 PL.159	3	礫石器 磨石	20cm 完形	長幅 15.3 16.0	厚重 11.5 4222.2		粗粒輝石安山岩	極円礫を利用する。表裏面の中央に磨面が認められる。表面には敲打痕が散在する。	

7区885号土坑出土遺物

第237図 PL.159	1	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅 9.2 4.3	厚重 2.0 84.7		黒色頁岩	裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。	短冊形
-----------------	---	--------------	-----------	------------------	-------------------	--	------	----------------------	-----

7区920号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	剥片石器 打製石斧	29cm 完形	長幅 10.0 5.9	厚重 2.6 124.3		黒色頁岩	上端と下端に磨滅が認められ使用痕の可能性はある。裏面上端の磨滅には縦方向の細かい線条痕が伴う。表面の中央付近には磨滅が認められ、柄痕の可能性はある。	分銅形
-----------------	---	--------------	------------	-------------------	--------------------	--	------	--	-----

7区922号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	LR環付縄文を横位・多段に施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第238図 PL.159	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4/直前合2L(0段 多条)/	直前段合攪り縄を横位に施文し、半截竹管の縦位単沈線文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第238図 PL.159	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文し、菱形意匠を構成。外面やや被熱風化、内面縦位磨き。	関山Ⅱ式
第238図 PL.159	4	縄文土器 深鉢	埋土中 胴下半～底部 1/4	口底 (7.6)	高		A4	0段多条のRL・LR縄文を横位に交互施文して羽状を構成。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第238図 PL.159	5	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	波状口縁。口唇下に0段多条のRL・LR縄文を交互に縦位施文。下位に6本櫛歯状工具の押し引き的な列点状刺突文で菱形意匠を構成し、その両側を縁取るように半截竹管の連続爪形文を施す。内面横位磨き。	有尾式
第238図 PL.159	6	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	口縁部に半截竹管の平行沈線文で菱形意匠を構成し、胴部に0段多条のLR縄文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式

7区929号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底	高		H1	単沈線の逆U字状懸垂文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E3式
第238図 PL.159	2	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅 2.0 1.5	厚重 0.6 2.0		黒曜石	上下端に両極加撃痕が認められる。右縁辺にも両極加撃痕があるが、左縁辺には両極加撃による剪断面が認められる。	

7区930号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	0段多条のRL・LR縄文を横位に交互施文し、菱形意匠を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第238図 PL.159	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	半截竹管の連続爪形文を横・斜位に施文。内面横位磨き。	有尾式
第238図 PL.159	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	0段多条のRL・LR縄文を横位施文。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	有尾式

7区933号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		E2	単沈線区画文内にLR縄文を充填施文。内面横位磨き。	称名寺Ⅰ式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---------------------------	-------

7区959号土坑出土遺物

第238図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	1段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第238図 PL.159	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	1段縄丸組紐を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式

7区960号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高				
第238図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4/直前合1L・直 前合1R/	2種類の直前段合捺り縄を横位多段に施文して菱形意匠を構成し、半截竹管の崩れたコンパス文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式

7区966号土坑出土遺物

第228図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/6	口底	高		A4	1段縄丸組紐を横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第228図 PL.159	2	剥片石器 打製石斧	28cm 完形	長幅 5.4	厚 2.7	重 112.3	黒色頁岩	両側片中央の括れ部にはつづれが認められ着柄痕の可能性 がある。	分銅形
第228図 PL.159	3	礫石器 磨石	埋土中 完形	長幅 9.1	厚 5.3	重 722.8	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表表面のほぼ全面に磨面が認められる。	

7区988号土坑出土遺物

第228図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		G1	削り調整部位に単沈線の斜線文を施す。内面丁寧な磨き。	加曾利B2式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	----------------------------	--------

7区989号土坑出土遺物

第228図 PL.159	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		H1	凹線状の幅広沈線懸垂文を施し、RL縄文を縦位に充填施文。 内面被熱風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---	--------

8区721号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		E5	沈線懸垂文を施し、RL縄文を縦位に充填施文。内面被熱風化・剥離。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	----------------------------------	--------

8区722号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		E4	口縁部に隆帯及びそれに沿った沈線の区画文を、胴部にRL 縄文を縦位施文して沈線懸垂文を施す。外面一部に煤状炭 化物付着、内面横位磨き。	加曾利E3式
第239図 PL.160	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		E5	RLR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文や蛇行文を施す。内面や や被熱風化。	加曾利E3式
第239図 PL.160	3	剥片石器 打製石斧	埋土中 完形	長幅 4.5	厚 10.6	重 1.7 87.7	黒色頁岩	表面の先端部に摩滅が認められ使用痕の可能性 がある。剥離面に二重風化が認められる。	短冊形

8区723号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	26cm 口縁部片	口底	高		G1	凹線状の幅広沈線区画文を施す。内面横位磨き。	加曾利E3式
第239図 PL.160	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		D2	縄文を施文するが原体不明。連弧文の崩れた楕円文を施す。 内外面共に被熱風化。	加曾利E3式

8区724号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		H1	LR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内面被熱風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	-----------------------------	--------

8区798号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	剥片石器 磨製石斧	2cm 完形	長幅 2.6	厚 7.7	重 1.5 47.5	変玄武岩	小形でありほぼ全面に研磨が及ぶ。上下両端に両極加撃と 判断される剥離痕があることから楔形石器と類する機能も 想定される。	
-----------------	---	--------------	-----------	-----------	----------	------------------	------	--	--

8区805号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		B4	筐状具のヒダ状圧痕や縦位の鎖状隆帯文を施す。内外面共 にやや被熱風化。	阿玉台1a式?
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	--	---------

8区822号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		D4	RL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内外面共にやや 被熱風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	--------------------------------------	--------

8区830号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	1段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯具のコンパス文を施す。 内外面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	--	------

8区831号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		D4	半截竹管の重ね引き平行沈線の横帯文を施す。内外面共に やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	三原田式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---	------

8区839号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		H1	LR縄文を縦位施文し、3-4本単位の沈線懸垂文を施す。内 外面共に被熱風化、外面煤状炭化物付着。	加曾利E2式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---	--------

8区840号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		H1	LR縄文を縦位施文し、隆線懸垂文を施す。充填縄文の可能 性あり。内外面共にやや被熱風化、内面被熱剥離。	加曾利E3式
第239図 PL.160	2	剥片石器 打製石斧	11cm 完形	長幅 4.8	厚 10.7	重 1.4 85.9	黒色頁岩	表裏面の先端の刃部付近に摩滅が認められる。表面中央の 左側片方向からの大きな剥離面は一部の摩滅よりも新し い。	短冊形

8区842号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		E2	横位隆帯文に沿ってベン先状具の三角押文や横線文を施 す。内面煤状炭化物付着。	勝坂2式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---	------

8区843号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底	高		A4	RL・LRの0段多条環付縄文を横位・交互に多段施文して菱 形意匠を構成。内外面共に被熱風化。	関山Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	---	--	----	---	------

8区846号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 浅鉢	18cm 頸部片	口底	高		J1	口縁部がく字状に強く外折。隆帯区画内に単沈線を縦位 に充填施文。外面赤色塗彩、内面丁寧な横位磨き。	加曾利E2式
第239図 PL.160	2	礫石器 多孔石	23cm 完形	長幅 14.7	厚 16.8	重 7.3 1959.9	粗粒輝石安山岩	亜円礫を利用する。正面の中央に漏斗状の孔が集中する。	

8区850号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	B5	隆帯文に沿って角押文を施す。内面やや粗い横位磨き。	阿玉台Ⅱ式

8区853号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4/直前合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第239図 PL.160	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	L縄文を横位・多段に施文。内外面共に被熱風化、内面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第239図 PL.160	3	縄文土器 深鉢	埋土中 底部1/2	口底	(7.0)	高	A2/直前合2R・2L (0段多条)/	高台状の上げ底。2種類の直前段合攪り縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成か。内面被熱風化。	関山Ⅱ式

8区859号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	剥片石器 打製石斧	18cm 完形	長幅	16.0 5.2	厚重	1.9 115.1	黒色頁岩	表面の先端付近に摩滅が認められ使用痕の可能性ある。両側片の中央付近にはつぶれが認められ着柄痕の可能性ある。全体に薄形である。	短冊形
-----------------	---	--------------	------------	----	-------------	----	--------------	------	--	-----

8区862号土坑出土遺物

第240図 PL.160	1	縄文土器 浅鉢	2cm 口縁部～体部 1/3	口底	(18.0)	高		B4	口唇部にS字の捻転した渦巻き状小突起を付す。口縁部-体部にかけてRL縄文を縦位施文し、口縁部に横位結節沈線文や単沈線の楕円区画文を施す。内外面の口縁部に赤色塗彩。内面丁寧な横位磨き。	阿玉台Ⅰa式
第240図 PL.160	2	縄文土器 浅鉢	1cm 口縁部～底部 2/3	口底	29.8 10.2	高	10.0	C6	口縁部が短く外反。口唇部外端に縦位の刻目を施す。外面横位磨き、内面やや被熱風化・一部に煤状炭化物付着。	阿玉台Ⅰa式
第240図 PL.160	3	礫石器 石皿	14cm 完形	長幅	30.4 34.6	厚重	7.4 17900	粗粒輝石安山岩	正面に比較的深い凹みが認められ中央から下方にかけて磨面となっている。下方側に掃出口がわずかに形成されており掃出口側がより滑らかである。側面と裏面には漏斗状の孔が散在する。側面から裏面にかけては整った形態であり全体的に整形されている可能性がある。	
第240図 PL.160	4	礫石器 磨石	8cm 完形	長幅	13.4 7.9	厚重	4.7 808.6	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。下端部に敲打痕が集中する。	

8区864号土坑出土遺物

第239図 PL.160	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		D4	LR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内面被熱風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	--	----	-----------------------------	--------

8区867号土坑出土遺物

第240図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	23cm 口縁部片	口底		高		B5	口唇部に突起または把手を付すが欠落。隆線文に沿って単沈線文を施し、区画内にRL縄文を充填施文。内面やや被熱風化。	新巻類型
第240図 PL.161	2	縄文土器 深鉢	17cm 口縁部片	口底		高		E2	口縁部に環状把手を付す。下位の隆線文に沿って単沈線文や刺突文を施す。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	新巻類型
第240図 PL.161	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		E2	隆線文に沿って単沈線文を施し、パネル状の区画内に爪形状の刺突文やLR縄文を充填的に施文。外面煤状炭化物付着、内面多量の炭化物付着。	新巻類型
第240図 PL.161	4	縄文土器 深鉢	21cm 胴部片	口底		高		C6	篋状具の爪形文やペン先状具の三角押文、三角陰刻文などを施す。内面横位磨き。	勝坂2式
第240図 PL.161	5	縄文土器 深鉢	17cm 把手	口底		高		G1	環状の大形把手。下位に曲線的な単沈線文を施す。	新巻類型

8区873号土坑出土遺物

第239図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		D4	曲隆線文に沿って半截竹管の半肉彫的平行沈線文を施し、区画内に刺突文を充填施文。内面縦位磨き。	焼町土器
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	--	----	--	------

8区876号土坑出土遺物

第239図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		E1	RL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文内を擦り消す。内面被熱風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	--	----	--------------------------------	--------

8区879号土坑出土遺物

第239図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		A4	RL縄文をやや不整然と横位施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	--	----	------------------------------	-----

8区887号土坑出土遺物

第239図 PL.161	1	縄文土器 両耳壺	埋土中 口縁部片	口底		高		D4	いわゆる両耳壺。内外面共に横位磨き。	加曾利E4式
第239図 PL.161	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高		H1	波状口縁。凹線状の幅広沈線区画文を施す。内面横位磨き。	加曾利E3式

8区889号土坑出土遺物

第240図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	12cm 頸部～胴部1/5	口底		高		A4	胴部にRL縄文を横位・多段に施文。口縁部-頸部に半截竹管の平行沈線文により菱形または三角形の意匠を構成。内面丁寧な横位磨き。	有尾式
第240図 PL.161	2	縄文土器 深鉢	12cm 口縁部～胴部 1/5	口底	(33.2)	高		A4	RL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面口縁部煤状炭化物付着、内面口縁部横位・胴部縦位磨き。	有尾式

8区892号土坑出土遺物

第241図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	3cm 胴部片	口底		高		C6	隆線文の両側に篋状具のやや大振りな爪形文を施す。内面被熱風化・剥離。	勝坂3式
第241図 PL.161	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		E2	RL縄文を横位施文し、曲線状の単沈線文を施す。内面横位磨き。	新巻類型
第241図 PL.161	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高		E2	RL縄文を横位施文し、半截竹管の集合沈線文を横・斜位に施す。内面丁寧な横位磨き。	諸磯b式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第241図 PL.161	4	礫石器 磨石	4cm 完形	長幅 6.6	17.8	厚重 6.0 1141.2	粗粒輝石安山岩	棒状の亜円礫を利用する。表裏面、両側面、上面に磨面が認められる。	
8区893号土坑出土遺物									
第240図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部1/5	口底 (10.0)		高	B5	外面縦位磨き、内面やや被熱風化・煤状炭化物付着。	焼町土器
8区909号土坑出土遺物									
第240図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D4	LR縄文を縦位施文し、沈線懸垂文間を擦り消す。内面縦位磨き、一部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
8区910号土坑出土遺物									
第240図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D4	波状口縁。櫛歯状具の条痕文を縦位に施文し、隆線の渦巻状や楕円区画文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E3式
8区911号土坑出土遺物									
第240図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	RL縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	有尾式
8区914号土坑出土遺物									
第241図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	A4	0段多条のLR環付縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
8区916号土坑出土遺物									
第241図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D4	半円彫的な単沈線文を重層的に施す。内外面共にやや被熱風化。	焼町土器
8区917号土坑出土遺物									
第241図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	6cm 胴部下位～底部 完存	口底 7.2		高	A4	高台状の上げ底。L縄文を横位・多段に施文。内外面共に被熱風化・剥離。	関山Ⅱ式
第241図 PL.161	2	剥片石器 石鏃	埋土中 4/5	長幅 (1.2)	1.7	厚重 0.3 0.3	黒曜石	押圧剥離により整形する。右脚部欠損。	凹基無茎鏃
第241図 PL.161	3	剥片石器 石匙	埋土中 1/2	長幅 2.6	3.6	厚重 0.5 3.7	黒色頁岩	表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。握み部には集中した二次加工が認められるが、先端部の加工は低調である。	横型
第241図 PL.161	4	礫石器 磨石	17cm 完形	長幅 5.8	9.2	厚重 4.7 326.1	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。下端部に敲打痕が集中する。表裏面のほぼ全域にわたり磨面が認められる。	
1区467号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E5	RL縄文を縦位施文して沈線懸垂文を施す。内面やや被熱風化・剥離。	加曾利E3式
7区291号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E4	櫛歯状工具の条線文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。外面やや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式
7区295号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	2種類の直前段合撚り縄を横位施文し、5本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内外面共にやや風化。	関山Ⅱ式
7区346号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	7cm 胴部片	口底		高	H1	細い単沈線文を施す。内面被熱風化。	加曾利E4式
第246図 PL.161	2	剥片石器 打製石斧	10cm 1/2	長幅 5.4	(8.4)	厚重 1.8 112.1	細粒輝石安山岩	両側片の下部には部分的な摩滅とつぶれが認められ柄痕の可能性ある。下部欠損。	短冊形?
7区362号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	沈線区画文内に列点文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	称名寺Ⅱ式
7区454号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内外面共に被熱剥離。	加曾利E3式
7区488号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、4本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第246図 PL.161	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を斜位施文し、沈線懸垂文を施す。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E3式
第246図 PL.161	3	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	微隆起線文を施す。内面やや風化。	加曾利E4式
7区492号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	沈線区画文内に列点文を充填施文。内面やや風化。	称名寺Ⅱ式
7区494号ビット出土遺物									
第246図 PL.161	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	沈線懸垂文を施し、RL縄文を縦位方向に充填施文。内面横位磨き。	加曾利E3式
7区497号ビット出土遺物									
第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	LR縄文を横位施文。内面横位磨き。	加曾利E4式
7区498号ビット出土遺物									
第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	沈線区画文を施す。内面横位磨き。	称名寺Ⅱ式
7区499号ビット出土遺物									
第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	微隆起線文を施し、RL縄文を充填施文。内面やや風化。	加曾利E4式

7区500号ビット出土遺物

挿 図 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第246図 PL.162	1	縄文土器 浅鉢	埋土中 頸部片	口底		高	H1	隆帯の区画文に沿って沈線文を施し、LR縄文を充填施文。 内面横撫で状の磨き。	加曾利E3式

7区501号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	沈線区画文を施す。内面横位磨き。	称名寺Ⅱ式
第246図 PL.162	2	礫石器 磨石	埋土中 完形	長幅	7.8 5.8	厚重	1.9 120.0	細粒輝石安山岩	小形の扁平な円礫の両面に磨面が認められる。

7区506号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	礫石器 磨石	床直 完形	長幅	14.9 11.7	厚重	3.9 1081.5	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面の中央付近に磨面が認められる。
-----------------	---	-----------	----------	----	--------------	----	---------------	---------	-------------------------------

7区508号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	LR縄文を縦位に施文。内外面共にやや風化。	加曾利E4式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	-----------------------	--------

7区510号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	沈線区画文を施す。内面横位磨き。	称名寺Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	------------------	-------

7区512号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	やや幅広の沈線文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	堀之内1式
第246図 PL.162	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	やや深い3本単位の沈線文を施し、間隙にLR縄文を充填施文。 内外面やや被熱風化。	堀之内1式
第246図 PL.162	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	平頭状の口唇部に浅い沈線文を施し、口縁に無文部を置いて横位沈線文を施文。内面横位磨き。	堀之内1式

7区518号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	剥片石器 楔形石器	埋土中 完形	長幅	4.2 2.7	厚重	0.9 6.5	黒色安山岩	上下端に両極加撃痕が認められる。表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。両側片の折断面は両極加撃に伴う剪断面の可能性ある。
-----------------	---	--------------	-----------	----	------------	----	------------	-------	--

7区519号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	C5	低平な隆線懸垂文を施す。内面やや風化。	加曾利E5式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	---------------------	--------

7区531号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴下半～底部 1/2	口底	(6.6)	高	H1	LR縄文を縦位施文し、単沈線の懸垂文を施す。内外面共にやや被熱風化	加曾利E2式
-----------------	---	------------	----------------------	----	-------	---	----	-----------------------------------	--------

7区532号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	口縁部に幅広沈線の区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	-------------	----	--	---	----	-----------------------------------	--------

7区537号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 土器片加工 円板	埋土中 完存	径厚	4.5 0.7	重	13.2	A4	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形するが、周縁部の磨耗痕を持たない。	関山Ⅱ式
-----------------	---	---------------------	-----------	----	------------	---	------	----	------------------------------------	------

7区541号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	6cm 胴部片	口底		高	H1	単沈線で文様構成。内面風化。	称名寺Ⅱ式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	----------------	-------

7区548号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	4cm 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文し、単沈線の懸垂文や弧線文・渦巻文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式
第246図 PL.162	2	縄文土器 深鉢	2cm 胴部片	口底		高	E5	口縁部に隆線渦巻文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式

7区549号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	LR縄文を縦位施文し、単沈線の懸垂文を施す。内外面共にやや被熱剥離。	加曾利E2式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	------------------------------------	--------

7区582号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 突起	口底		高	H1	眼鏡状の口縁部突起。	焼町土器
-----------------	---	------------	-----------	----	--	---	----	------------	------

7区584号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	LR縄文を縦位に施文し、凹線状の幅広沈線懸垂文を施す。 内面被熱風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	--	--------

8区402号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D4	LR縄文を縦位施文し、蛇行状懸垂文を施す。内面丁寧な横位磨き。	加曾利E2式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	---------------------------------	--------

8区432号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D4	LR縄文を横位施文し、隆帯に沿った楕円沈線区画文を施す。 外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	-------------	----	--	---	----	---	--------

8区562号ビット出土遺物

第246図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D6	半截竹管の集合平行沈線文を縦位に施し、円形貼付文や篋状具の器面を抉るような刺突文を施文。内面やや被熱風化。	諸磯c式
-----------------	---	------------	-------------	----	--	---	----	---	------

7区1号配石出土遺物

第250図 PL.162	1	縄文土器 深鉢	底直 口縁部片	口底		高	E2	LR縄文を横位施文し、口縁部に横位微隆起線文を施す。外面やや風化、内面煤状炭化物付着。	加曾利E4式
-----------------	---	------------	------------	----	--	---	----	---	--------

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第250図 PL.162	2	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁で、波頂下に鎖状隆帯文を縦位に付す。口縁に単沈線の楕円区画文を2段に施し、刺突文を充填施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	称名寺Ⅱ式	
第250図 PL.162	3	縄文土器 浅鉢	底直 口縁部～胴部 1/3	口底	(31.0)	高	G1	口縁部に単沈線の対弧文を施し、横線文との交点に貼付文を付す。太さの異なるLR縄文を充填施文。体部下半に羽状沈線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面赤色塗彩。	加曾利B3式	
第250図 PL.162	4	剥片石器 打製石斧	床直 2/3	長幅	(9.2) (5.7)	厚重	(2.7) 146.5	黒色頁岩	先端部の一部に弱い摩滅が認められ使用痕の可能性はある。表面中央の稜線付近と右抉り部に摩滅が認められ着柄痕の可能性はある。一部に自然面を残す。円礫を利用する。上部欠損。	分銅形
第250図 PL.162	5	礫石器 多孔石	床直 不明	長幅	15.7 11.6	厚重	9.7 2491.7	粗粒輝石安山岩	一端に自然面を残し全体的に打割面と判断できる。正面に小さな漏斗状の孔が散在する。孔の内部は細かな凹凸が認められる。	
第250図 PL.162	6	礫石器 凹石	床直 ほぼ完形	長幅	11.6 10.6	厚重	5.2 790.5	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央に浅い凹みが認められる。表裏面の中央付近に磨面が認められる。側面部に敲打痕が散在する。	
第250図 PL.162	7	礫石器 磨石	床直 完形	長幅	12.0 3.7	厚重	3.0 228.3	粗粒輝石安山岩	棒状の小形円礫を利用する。表面と右側面のほぼ全面に磨面が認められる。表面の上方に敲打痕が認められる。裏面の上方と下方に敲打痕が認められる。	
第250図 PL.162	8	礫石器 凹石	床直 完形	長幅	12.3 8.6	厚重	5.0 696.2	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面のやや上方に漏斗状の凹みが認められる。表面の中央付近に磨面が認められる。	

7区2号配石出土遺物

第250図 PL.163	1	縄文土器 深鉢	17cm 胴部片	口底		高	H1	沈線懸垂文を施し、RL縄文を縦位に充填的に施文。内面横位磨き。	加曾利E3式	
第250図 PL.163	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	単沈線の懸垂状区画文を施し、部分的にRL縄文を充填施文。内外面共にやや風化。	称名寺Ⅱ式	
第250図 PL.163	3	縄文土器 深鉢	12cm 口縁部片	口底		高	E2	外反する口縁内面に2本の横線文を施す。外面やや風化、内面横位磨き。	堀之内2式	
第250図 PL.163	4	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	G1	口唇が短く内折。横位沈線区画文内にLR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	堀之内2式	
第250図 PL.163	5	剥片石器 打製石斧	26cm 完形	長幅	8.0 4.1	厚重	1.7 70.5	黒色頁岩	裏面に自然面を残し、円礫を利用する。先端部付近に摩滅が認められ使用痕の可能性はある。両側片の中央付近につぶれが認められ着柄痕の可能性はある。	短冊形
第250図 PL.163	6	礫石器 磨石	13cm 2/3	長幅	13.0 (6.2)	厚重	3.7 533.8	石英閃緑岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面と下端部に磨面が認められる。上端部に敲打痕が認められる。	
第250図 PL.163	7	礫石器 多孔石	17cm 完形	長幅	19.2 16.1	厚重	9.8 3120.5	粗粒輝石安山岩	全体的に自然面に覆われていると判断され垂角礫を利用する。正面と裏面に漏斗状の孔が多数認められる。	

7区3号配石出土遺物

第251図 PL.163	1	縄文土器 深鉢	15cm 口縁部片	口底		高	G1	波状口縁。波頂部に8字状の小突起を付す。沈線区画文内にLR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	称名寺Ⅰ式	
第251図 PL.163	2	縄文土器 深鉢	14cm 胴部片	口底		高	G1	三角形の沈線区画文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	堀之内2式	
第251図 PL.163	3	礫石器 磨石	13cm 完形	長幅	9.4 7.1	厚重	4.6 473.3	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面の中央付近に磨面が認められる。	
第251図 PL.163	4	礫石器 石皿	2cm ほぼ完形	長幅	(27.0) (25.2)	厚重	(10.9) 11200.0	粗粒輝石安山岩	扁平な大形円礫を利用する。正面に浅い凹みが認められ中央付近は磨面となっている。正面と裏面には小さな漏斗状の孔が散在する。孔の内部は細かな凹凸が認められる。	

7区4号配石出土遺物

第251図 PL.163	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	E4	単沈線の渦巻文や区画文を施し、RL縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利E3式	
第251図 PL.163	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内面やや被熱剥離。	加曾利E3式	
第251図 PL.163	3	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	G1	鋸歯状の小突起を付した口唇部。内面に横線文を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利B2式	
第251図 PL.163	4	剥片石器 打製石斧	床直 2/3	長幅	(9.8) (5.7)	厚重	(2.9) 222.1	粗粒輝石安山岩	ほぼ中央付近にある折断面には両極加撃痕が認められ剪断面と考えられる。裏面には自然面を大きく残り円礫を利用する。	短冊形?
第251図 PL.163	5	礫石器 磨石	11cm 完形	長幅	10.7 8.1	厚重	4.4 484.4	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表裏面の中央付近に敲打痕がわずかに認められる。	
第251図 PL.163	6	礫石器 磨石	10cm 完形	長幅	11.2 7.4	厚重	4.3 533.5	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面のほぼ全面と裏面の中央付近に磨面が認められる。	

7区5号配石出土遺物

第251図 PL.163	1	縄文土器 深鉢	底直 胴部片	口底		高	E2	直状・蛇行状の単沈線文を交互に施す。内面横位磨き。	堀之内1式	
第251図 PL.163	2	縄文土器 深鉢	底直 胴部片	口底		高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、5本櫛歯状工具のコンパス文を施す。外面やや風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式	
第251図 PL.163	3	礫石器 磨石	4cm 完形	長幅	15.7 9.7	厚重	5.1 1185.8	変質安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	

7区7号配石出土遺物

第252図 PL.163	1	剥片石器 削器	4cm 完形	長幅	6.5 11.4	厚重	2.0 112.0	黒色頁岩	表裏面に素材剥片の剥離面を大きく残す。大形の横長剥片を素材とする。上面に自然面を残し、円礫を利用する。下端部の刃部と想定される部位は片面加工でやや内湾する。	
-----------------	---	------------	-----------	----	-------------	----	--------------	------	--	--

7区8号配石出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第252図 PL.163	1	縄文土器 深鉢	3cm 口縁部片	口底		高	E2	口縁内面に単沈線の円文または渦巻文を施す。外面縦位、内面横位磨き。	堀之内1式	
第252図 PL.163	2	縄文土器 深鉢	底直 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に隆帯渦巻文や楕円区画文を施し、短沈線を羽状に充填施文。内面風化。	郷土式系	
第252図 PL.163	3	剥片石器 打製石斧	床直 完形	長幅	12.0 5.7	厚重	2.7 193.2	変質安山岩	裏面に自然面を大きく残す。円礫を利用する。上下端の刃部はいずれも片面加工である。両側片の中央付近には著しいつづれが認められ着柄痕の可能性がある。	分銅形
第252図 PL.163	4	礫石器 磨石	床直 完形	長幅	11.6 9.0	厚重	4.4 654.2	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面に敲打痕が散在する。	

7区9号配石出土遺物

第251図 PL.164	1	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	E2	複数本単位の単沈線文を施し、隙間部にLR縄文を充填施文。内面横位磨き。	堀之内1式
第251図 PL.164	2	縄文土器 深鉢	底直 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。0段多条のRL環付縄文を横・斜位に多段施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第251図 PL.164	3	縄文土器 深鉢	底直 胴部片	口底		高	A4	0段多条のRL・LR縄文を横位・多段に交互施文して菱形意匠を構成し、半截竹管のコンパス文を施す。内外面共にやや風化。	関山Ⅱ式

7区10号配石出土遺物

第252図 PL.164	1	縄文土器 深鉢	底直 胴部片	口底		高	H1	RL縄文を縦位施文し、蕨手状や平行状の沈線懸垂文を施す。内面一部被熱剥離。	加曾利E3式	
第252図 PL.164	2	縄文土器 深鉢	底直 口縁部片	口底		高	H1	波状口縁。凹線状の幅広沈線で渦巻文や楕円区画文を施す。内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式	
第252図 PL.164	3	剥片石器 削器	床直 ほぼ完形	長幅	11.3 4.6	厚重	2.1 85.9	珪質頁岩	縦長剥片を素材とする。上方の打面付近と左側片に両面の二次加工が集中する。	

7区19号集石出土遺物

第253図 PL.164	1	剥片石器 打製石斧	12cm 不明	長幅	(13.7) (12.4)	厚重	(2.7) 415.4	細粒輝石安山岩	表裏面に節理面を大きく残し露頭採取の可能性がある。表裏面の先端付近に摩滅が認められ使用痕の可能性がある。先端部方向からは、この摩滅痕より新しい小さな剥離痕がわずかに認められる。上面は折断面(破損面?)であるが、折断面にはわずかに再加工痕が認められる。	撥形?
-----------------	---	--------------	------------	----	------------------	----	----------------	---------	---	-----

8区29号集石出土遺物

第253図 PL.164	1	縄文土器 深鉢	埋土中 口縁部片	口底		高	D4	口縁無文部に直径9mmの焼成前の円錐状凹みを施す。胴部はRL縄文を横位・多段に施文し、半截竹管の平行沈線文を施す。内外面共に一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	勝坂3式
第253図 PL.164	2	縄文土器 深鉢	埋土中 胴部片	口底		高	D4	RL縄文を縦位施文し、凹線状の幅広沈線区画文を施す。内外面共に一部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式

7区1号屋外埋設土器

第254図 PL.164	1	縄文土器 深鉢	2cm 胴下半部完存	口底		高	H1	凹線状の幅広沈線懸垂文を施し、RL縄文を縦位に充填施文。外面胴部中に煤状炭化物付着、下半部やや被熱風化。	加曾利B3式
-----------------	---	------------	---------------	----	--	---	----	--	--------

7区2号屋外埋設土器

第254図 PL.164	1	縄文土器 深鉢	16cm 口縁部～胴上半部完存	口底	32.5	高	H1	口縁に4単位の大形把手を付すがいずれも欠損。口唇部-胴部にかけて3帯の施文域を構成。各施文域ともに眼鏡状小突起を中心にして弧状や懸垂状の隆線文で連結区画され、同文様に沿って半肉彫的な単沈線文を重畳的に施文。内面胴下半部に煤状炭化物付着。	焼町土器	
第254図 PL.164	2	縄文土器 深鉢	16cm 底部欠損	口底	16.2	高	H1	口縁に1個の環状把手と3個の双頭状小突起を付す。口縁部は爪形文を施した隆線の渦巻状弧線文や楕円区画文を、胴部は隆線の三角形区画文を施し、区画内に単沈線の円形文・三角形文や角押文を施文。	勝坂2式	
第254図 PL.164	3	縄文土器 浅鉢	16cm 体部1/6	口底	(45.0)	高	(8.6)	E5	口縁が短く内折する器形と想定される。外面炭素吸着、内面横位磨き。	勝坂2式併行

7区18号焼土出土遺物

第255図 PL.164	1	礫石器 磨石	6cm 完形	長幅	12.6 7.4	厚重	5.3 781.7	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面のほぼ全面と裏面から右側面にかけて磨面が認められる。表面の上方から上端にかけて敲打痕が認められる。	
-----------------	---	-----------	-----------	----	-------------	----	--------------	---------	---	--

7区55A・B溝状遺構出土遺物

第257図 PL.164	1	剥片石器 石匙	埋土中 4/5	長幅	4.5 (5.3)	厚重	1.1 16.8	黒色頁岩	比較的大形の横長剥片を素材とする。素材剥片の打面を大きく残し単剥離面である。下部側縁の二次加工は素材剥片の主要剥離面側に認められる。	横型
第257図 PL.164	2	剥片石器 打製石斧	12cm ほぼ完形	長幅	10.2 7.4	厚重	2.5 189.2	黒色頁岩	表面の上端部付近と下端部付近に摩滅が認められ使用痕の可能性がある。裏面の中央付近に摩滅が認められ着柄痕の可能性がある。	分銅形
第257図 PL.164	3	礫石器 磨石	床直 完形	長幅	12.1 5.9	厚重	4.4 465.9	変質安山岩	垂円礫を利用する。いくつかの平坦な面で構成されるが、各面に磨面が認められる。	

1～3区遺構外出土土器

第271図 PL.165	1	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底		高	A3	内外両面側からの交互押圧により蛇行状の口唇部を作出。口縁部に横位隆帯文を貼付し、絡条体圧痕文を施す。内外面共に横・斜位の条痕文を施文。	早期末葉
第271図 PL.165	2	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底		高	A3	口唇部外端から上面にかけて相互に接続した小波状隆帯や小突起を付し、下位の横位隆帯文上面と共に0段縄1の絡条体圧痕文を施す。内面は貝殻状工具の横位条痕文を施す。4と同一個体か。	早期末葉

挿 函 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第271図 PL.165	3	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	A3	隆帯文を横位鋸歯状に貼付し、0段縄1の絡条体圧痕文を充填的に施文。内面は条痕文を横位に施す。	早期末葉
第271図 PL.165	4	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	口唇部外端から上面にかけて相互に接続した小波状隆帯や小突起を付し、下位の横位隆帯文上面と共に0段縄1の絡条体圧痕文を施す。内面は貝殻状工具の横位条痕文を施す。2と同一個体か。	早期末葉
第271図 PL.165	5	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	A3	隆帯文を鋸歯状に貼付し、1段縄Lの絡条体圧痕文を充填的に施文。内面は横・斜位の条痕文を施す。	早期末葉
第271図 PL.165	6	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	A3	隆帯文を貼付し、0段縄rの絡条体圧痕文を充填的に施文。内面は貝殻状工具の横位条痕文を施す。	早期末葉
第271図 PL.165	7	縄文土器 深鉢	3区遺構外 胴部片	口底	高	A1	条痕文を外面縦位・内面横位に施文。内外面共にやや被熱風化。	早期末葉
第271図 PL.165	8	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	外削ぎ状の複合口縁。口唇部上面に斜位刻目状の刺突文を施す。内外面共に横・斜位の条痕文を施す。	早期末葉
第271図 PL.165	9	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	0段多条のRL環付縄文を横位・多段に施文し、半截竹管の平行沈線文でV字状の意匠を構成。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	10	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	1段縄丸組紐を横位施文。半截竹管の重ね引き集合沈線による横線文や渦巻文を施す。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	11	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	双頭状の小突起を付す波状口縁。1段縄丸組紐を横位施文。半截竹管の重ね引き集合沈線による横線文や渦巻文を施す。外面やや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	12	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	A3/直前合2L/	直前段合撚り縄文を横位施文。半截竹管の重ね引き集合沈線による鋸歯文を施す。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	13	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A4	0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文し、羽状を構成。口縁部下位に半截竹管の爪形文を横位施文。内外面共に被熱風化。	有尾式
第271図 PL.165	14	縄文土器 深鉢	3区遺構外 口縁部片	口底	高	A4	半截竹管の重ね引き横位集合沈線文を施し、RL縄文を充填的に横位施文。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	15	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	C3	波状口縁。円形竹管文や半截竹管の爪形文を施す。	諸磯a式
第271図 PL.165	16	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	半截竹管の平行沈線文や刺突文・爪形文などを施す。内外面共に一部に煤状炭化物付着。	有尾式
第271図 PL.165	17	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	A3	口縁部に円形竹管の刺突文を、括れ部に半截竹管の横線文を施す。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	18	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	A3/直前合2R(0段 多条)/	直前段合撚り縄文を横位施文し、2本持ち半截竹管の粗大なコンパス文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	19	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部下位～底部 完存	口底	8.9 高	A10/直前合2R・2L (0段多条)/	高台状の底部。2種類の直前段合撚り縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第271図 PL.165	20	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	波状口縁。口唇下に連点状刺突沈線文を縦・横位に施し、下位に半截竹管の平行沈線文で菱形状の意匠を構成か。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第271図 PL.165	21	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。口縁部に連点状刺突文を縦・横位に施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第271図 PL.165	22	縄文土器 深鉢	1区遺構外 胴部片	口底	高	A3	波状口縁。口唇下に連点状刺突文を縦位密接施文し、下位に同刺突文を複数横位に施す外面やや被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第271図 PL.165	23	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。櫛歯状具の横位条痕文を施し、連点状刺突文による菱形意匠を構成。内面やや被熱風化。	有尾式
第271図 PL.165	24	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	小突起を付す波状口縁。半截竹管の集合沈線文で菱形意匠を構成。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第272図 PL.165	25	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	波状口縁。幅広半截竹管の平行沈線文で菱形意匠を構成。内外面共にやや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	有尾式
第272図 PL.165	26	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。LR縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第272図 PL.165	27	縄文土器 深鉢	2区遺構外 口縁部片	口底	高	A3	やや大柄なLR縄文を横位・多段に施文。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾-黒浜式
第272図 PL.165	28	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	H1	く字状に内接する波状口縁。低平な浮線文を横位に施すが、縄文原体不明。内面横位磨き。	諸磯b式
第272図 PL.165	29	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	H1	波状口縁。RL縄文を横位に施し、半截竹管の集合沈線文を施文。内面横位磨き。	諸磯b式
第272図 PL.165	30	縄文土器 深鉢	1区遺構外 胴部片	口底	高	D6	RL縄文を横位に施し、半截竹管の集合沈線文を施文。内面横位磨き。	諸磯b式
第272図 PL.165	31	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	D6	波状口縁。結節浮線文を縦・斜位に施す。内外面共にやや被熱風化。	下島式
第272図 PL.165	32	縄文土器 深鉢	2区遺構外 底部1/5	口底	(11.0) 高	A4	LR縄文を横位・多段に施文。内面やや被熱風化。	有尾-黒浜式
第272図 PL.166	33	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	E2	半截竹管の集合沈線により三角形の意匠を構成し、三角陰刻文を施す。内面縦位磨き。	前期末葉
第272図 PL.166	34	縄文土器 深鉢	2区遺構外 胴部片	口底	高	H1	RLとLR縄文を横位・交互に施文。上下両側に三角陰刻状に削ぎ取った横位の鋸歯状隆帯文や結節沈線文を施す。	前期末葉

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第272図 PL.166	35	縄文土器 深鉢	1区遺構外 胴部片	口底	高	B5	隆線文に沿って沈線文を施し、区画内に三角陰刻文や円文を施す。内面やや被熱風化。	新巻類型
第272図 PL.166	36	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	G1	波状口縁。眼鏡状の小把手を付し、篋状工具の連続爪形文や半截竹管の平行沈線文を施す。内面横位磨き。	勝坂2式
第272図 PL.166	37	縄文土器 深鉢	1区遺構外 胴部片	口底	高	B5	曲隆線文に沿って単沈線文を重層的に施文し、区画中央に刺突文を充填。内面被熱風化、剥離。内面被熱風化。	焼町土器
第272図 PL.166	38	縄文土器 深鉢	1区遺構外 口縁部片	口底	高	D2	波状口縁。幅広沈線の楕円区画文を施し、0段多条RL縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化、煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第272図 PL.166	39	縄文土器 深鉢	1区遺構外 胴部片	口底	高	H1	逆U字状の懸垂文を施し、RL縄文を縦位に充填施文か。内面横位磨き。	加曾利E3式
第272図 PL.166	40	縄文土器 深鉢	1区遺構外 胴部片	口底	高	H1	RLとLR縄文を横位・交互に施文。上下両側に三角陰刻状に削ぎ取った横位の鋸歯状隆帯文や結節沈線文を施す。	前期末葉
4区遺構外出土器								
第273図 PL.166	42	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E4	撚糸文Rを縦位に施文。内面被熱風化。	夏島式
第273図 PL.166	43	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A3	条痕文を内外面に横・斜位施文。隆帯文を横位に施し、その上面や間隙に絡条体圧痕文を押捺施文。内面やや被熱風化。	早期末葉
第273図 PL.166	44	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	内外面に条痕文を横・斜位に施し、外面に横位絡条体圧痕文を多段に施す。	早期末葉
第273図 PL.166	45	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	口縁部に横位隆帯文を施し、内外面にアナダラ属の貝殻条痕文を施文。ハマグリ等の貝殻腹縁文を口縁部に斜位、隆帯上とその下部に横位に施文。	早期末葉
第273図 PL.166	46	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。内外面に条痕文を施す。波頂下に隆帯文を菱形状に構成し、口唇上端を含め棒状工具の刻目を施す。内面風化。	早期末葉
第273図 PL.166	47	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A6	内外面に条痕文を縦・斜位に施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	早期末葉
第273図 PL.166	48	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A6	内外面に条痕文を縦位に施す。外面やや被熱風化。	早期末葉
第273図 PL.166	49	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A3	内外面に条痕文を横位施文。内面やや被熱風化。	早期末葉
第273図 PL.166	50	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	内外面共にやや粗い条痕文を縦位に施文。	早期末葉
第273図 PL.166	51	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	口縁部にやや低平な横位隆帯文を2条施文し、縦位の刻目を施す。内面丁寧な横位磨き。	花積下層式
第273図 PL.166	52	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	双頭状の波状口縁。半截竹管の梯子状沈線文により菱形の意匠を構成。内面丁寧な横位磨き。	関山I式
第274図 PL.166	53	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	刻目を加えた細隆起線文を渦巻状に施し、円形貼付文や円形刺突文を施文。内面横位磨き。	関山I式
第274図 PL.166	54	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2/正反合2L(0段 多条)/	直前段の正・反合撚り縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山II式
第274図 PL.166	55	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	原体長10mmの短いRL縄文を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山I式
第274図 PL.166	56	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	半截竹管の重ね引き併行沈線文を施す。内外面共に煤状炭化物付着、やや被熱風化。	関山II式
第274図 PL.166	57	縄文土器 深鉢	遺構外 頸部~胴部1/2	口底	(40.0)高	A4/直前合2R・2L/	2種類の直前段合撚り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。口縁部-頸部に半截竹管の重ね引きによる横・縦位やく字状の平行沈線文を施す。括れ部に2条の横位隆帯を施し、間隙に縦位隆帯を施す。胴部は半截竹管の横位連続爪形文を3条施文。内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第274図 PL.166	58	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の重ね引きによる鋸歯状の沈線文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第274図 PL.166	59	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	0段多条RL縄文を横位施文し、櫛歯状工具の粗大なコンパス文を施す。内面横位磨き。	関山II式
第274図 PL.166	60	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	RL・LR縄文を横位施文し菱形意匠を構成か。括れ部に結節沈線状の横線文を施す。内面被熱風化。	関山II式
第274図 PL.166	61	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4/直前合2R(0段 多条)/	直前段合撚り縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山II式
第274図 PL.166	62	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。0段縄丸組紐を横位に施文。内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第274図 PL.166	63	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2/正反合2R(0段 多条)/	直前段の正・反合撚り縄文を横位施文。内面横位磨き。	関山II式
第274図 PL.166	64	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	0段多条RL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成か。半截竹管端部の横位刺突文を多段・不連続に施す。内面篋撫で状の横位磨き。	関山II式
第274図 PL.166	65	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2/正反合2R・2L (0段多条)/	2種類の直前段の正・反合撚り縄文を横位・交互施文して菱形の意匠を構成。内外面やや風化。	関山II式
第274図 PL.167	66	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4/直前合2R(0段 多条)/	直前段合撚り縄文を横位施文し、半截竹管の粗いコンパス文を横位施文する。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山II式
第274図 PL.167	67	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	0段多条の末端環付RL縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第274図 PL.167	68	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	0段多条の末端環付RLと同LR縄文を横位・交互に多段に施文して羽状を構成。内面縦位磨き、やや被熱風化。	関山II式

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第274図 PL.167	69	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波状口縁。RL・LR縄文を横位・交互に施文して羽状構成。外面やや風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第274図 PL.167	70	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/4	口底	(9.0) 高	A2	上げ底状の底部。RL縄文を横位施文。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第274図 PL.167	71	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	0段多条RL・LR縄文を横位・交互に施文して菱形意匠を構成。内面縦位磨き。	関山Ⅱ式
第274図 PL.167	72	縄文土器 深鉢	遺構外 底部破片	口底	高	A4	上げ底状の底部。RL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成か。底外面にも縄文施文。内面横位磨き、一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第274図 PL.167	73	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	小波状口縁。波頂下の縦位隆帯文下部に接して、口縁部に横位隆帯文を施す。縦位隆帯文を境にLRとRLを横位施文し、羽状を構成。	花積下層式
第274図 PL.167	74	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	連点状刺突文を口唇下に縦位、口縁部に菱形状に施文。外面やや被熱風化、内面やや粗い磨き。	有尾式
第274図 PL.167	75	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波状口縁。口縁部に櫛歯状工具の連点状刺突文を縦位に施し、その下位に同工具の連点状刺突沈線文を施文。外面被熱風化・一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第274図 PL.167	76	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波状口縁。口縁部に櫛歯状工具の縦位連点状刺突文帯を施し、下位に同工具の連続爪形文を2条施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第274図 PL.167	77	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波状口縁。折返し状にやや肥厚した口縁部に櫛歯状工具の縦位連点状刺突文帯を施し、下位にも同刺突文により菱形の意匠を構成か。内外面共に被熱風化。	有尾式
第274図 PL.167	78	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波状口縁。口縁部に櫛歯状工具の縦位連点状刺突文帯を施し、下位にも同刺突文により菱形の意匠を構成か。内面横位磨き。	有尾式
第274図 PL.167	79	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	連点状刺突文を口唇下に横位、口縁部に菱形状に施文。外面やや被熱風化・一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第274図 PL.167	80	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	小突起を付す波状口縁。連点状刺突文を口唇下に横位、口縁部に菱形状に施文。内面横位磨き。	有尾式
第274図 PL.167	81	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A8	口縁部-頸部に櫛歯状工具の連点状刺突文や集合沈線文で菱形意匠を構成し、胴部に附加条第1種RL+LL縄文を横位施文。外面やや被熱風化、内面笠撫で状の横位磨き。	有尾式
第275図 PL.167	82	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	円弧状の波状口縁。LR縄文を横位施文し、口縁に沿って半截竹管の平行沈線文を施す。内面笠撫で状の横位磨き。	有尾式
第275図 PL.167	83	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波状口縁。半截竹管の平行沈線文により菱形の意匠を構成。内面やや風化。	有尾式
第275図 PL.167	84	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波状口縁。口縁部に櫛歯状工具の横位集合沈線文を2帯施文し、各帯に同工具の連点状刺突文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾式
第275図 PL.167	85	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	波底部に小突起を付す波状口縁。口縁部に0段多条のRL・LR縄文を横位・交互に施文し、下位に半截竹管2本単位の連点状刺突文を施す。内面丁寧な横位磨き。	有尾式
第275図 PL.167	86	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	半截竹管の平行沈線文や連続爪形文により、菱形の意匠を構成。内外面共に被熱風化。	有尾式
第275図 PL.167	87	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	半截竹管の横位連続爪形文を複数条施す。内面被熱風化。	有尾式
第275図 PL.167	88	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	89	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	RL・LR縄文を横位・交互に多段施文し、菱形の意匠を構成。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	90	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部～胴部 1/4	口底	(30.0) 高	A4	RL・LR縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第275図 PL.167	91	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	RLとLR縄文を横位に交互施文し、接続部に半截竹管のコンパス文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	92	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	LR+R2本とRL+L2本の附加条第1種を横位施文し、羽状構成。内面やや被熱風化。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	93	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	軸縄は不明だがL・R縄各1条の附加条縄文を横位に施文し、羽状を構成。内面被熱風化。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	94	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/4	口底	高	A2	RL・LR縄文を横位・交互に多段施文し、羽状を構成か。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	95	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	L縄文を斜位施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第275図 PL.167	96	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	RL縄文を横位施文。内面被熱風化。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	97	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	やや粗大な0段多条RL縄文を横位・多段に施文。外面煤状炭化物付着・被熱風化、内面横位磨き。98と同一個体。	有尾-黒浜式
第275図 PL.167	98	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	やや粗大な0段多条RL縄文を横位・多段に施文。外面煤状炭化物付着・被熱風化、内面横位磨き。外面→内面穿孔の補修孔。97と同一個体。	有尾-黒浜式
第275図 PL.168	99	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	RL縄文を横位・多段に施文。外面方向からの補修孔があるが、未穿孔。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第275図 PL.168	100	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁1/6	口底	(15.3) 高	A2	L縄文を横位多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面被熱風化。	有尾-黒浜式

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第275図 PL.168	101	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	有尾-黒浜式
第275図 PL.168	102	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/4	口底	(23.5)高	A4	RL縄文を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾-黒浜式
第275図 PL.168	103	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	RL縄文を口唇上面-口縁部に横位施文。内面指頭圧痕状の凹凸を残し、横位のやや粗い磨き。	有尾式
第275図 PL.168	104	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	0段多条RL縄文を横位・多段に施文。内面磨撫で状の横位磨き。	有尾式
第276図 PL.168	105	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A2	RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第276図 PL.168	106	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	0段多条LR縄文を横位施文。内外面共に被熱風化。	有尾-黒浜式
第276図 PL.168	107	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A2	RL縄文を斜位施文。内面横位磨き。	有尾-黒浜式
第276図 PL.168	108	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	RL縄文を横位施文。内外面共に被熱風化、内面被熱剥離。	有尾-黒浜式
第276図 PL.168	109	縄文土器 深鉢	遺構外 胴下半~底部片	口底	(9.0)高	A4	0段多条のRL縄文を横位・多段に施文。内外面共に一部被熱風化・剥離。	有尾-黒浜式
第276図 PL.168	110	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。口縁部に半截竹管のコンパス文や両端部を同工具刺突の爪形文で閉端した縦・横位の平行沈線文を施す。内面横位磨き。	黒浜式
第276図 PL.168	111	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	摘み状の小突起を付す波状口縁。半截竹管の円文やコンパス文を施す。内外面共にやや被熱風化。	黒浜式
第276図 PL.168	112	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	口縁部に横位の刻み目隆帯文を施し、半截竹管の連続爪形文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	諸磯a式
第276図 PL.168	113	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E3	RL縄文を横位施文し、細めの半截竹管により変形木葉文や円形竹管文を施す。内面丁寧な横位磨き。	諸磯a式
第276図 PL.168	114	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E3	小突起を付した波状口縁。口縁部に半截竹管の爪形文を施した隆帯文を横位に貼付し、その上下位に爪形文を縦・横位に施文。内面丁寧な横位磨き。	諸磯a式
第276図 PL.168	115	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	D2	RL縄文を横位・多段に施文し、半截竹管の連続爪形文を施す。	諸磯a式
第276図 PL.168	116	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	半截竹管の横位平行沈線文と波状文を交互・多段に施文。内面横位磨き。	諸磯a式
第276図 PL.168	117	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	D2	半截竹管の横位平行沈線文や鋸歯文を交互・多段に施文。内面横位磨き。	諸磯a式
第276図 PL.168	118	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	C3	やや繊細なRL縄文を横位施文。内面丁寧な横位磨き。	諸磯a式
第276図 PL.168	119	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D2	波状口縁。RL縄文を横位・多段に施文。内面やや風化。	諸磯a式
第276図 PL.168	120	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E3	RL縄文を横位施文し、浮線文や円形刺突文を施す。内面横位磨き。	諸磯b式
第276図 PL.168	121	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E3	浮線文を横・縦位に施し、円形刺突文を充填。内面被熱風化。	諸磯b式
第276図 PL.168	122	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E4	半截竹管束ね持ちの集合沈線文を横位や鋸歯状に施文。内面横位磨き。	諸磯b式
第276図 PL.168	123	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E3	半截竹管束ね持ちの集合沈線文を横位や鋸歯状に施文。内面丁寧な横位磨き。	諸磯b式
第276図 PL.168	124	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E3	附加条第1種RL+L2本縄文を横位に施文。内面被熱風化・剥離。	諸磯b式
第276図 PL.168	125	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B5	櫛歯状工具の結節沈線文を横位に施す。内面やや被熱風化。	諸磯c式
第276図 PL.168	126	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E4	RL・LRの結束縄文を横位・多段に施文。外面被熱風化、内面横位磨き。127と同一個体。	前期末葉
第276図 PL.168	127	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E4	RL・LRの結束縄文を横位・多段に施文。外面被熱風化、内面横位磨き。126と同一個体。	前期末葉
第276図 PL.168	128	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E4	RL縄文を横位施文し、結節L縄文を横位に施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	前期末葉
第276図 PL.168	129	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E4	小突起を付す波状口縁。波頂部に連接して横位の隆帯文を施し、波頂下に円文を貼付。内面被熱剥離。	堀之内1式
第276図 PL.168	130	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	J1	いわゆる体部屈曲鉢。細沈線の横帯区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。131と同一個体。	堀之内2式
第276図 PL.168	131	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	J1	いわゆる体部屈曲鉢。細沈線の横帯区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。130と同一個体。	堀之内2式
5区遺構外出土土器								
第277図 PL.169	132	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H2	口縁部に背割状隆帯の横位S字文を施し、間隙部にRL縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化、煤状炭化物付着。	加曾利E1式
第277図 PL.169	133	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部~底部1/4	口底	(8.8)高	E4	RL縄文を斜位気味に施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利E1式
第277図 PL.169	134	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D3	無文浅鉢。内面側に折り返した複合口縁上面に、端部に渦巻文を持つ横位沈線文を2条施す。内外面共に横位磨き。	加曾利E1式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第277図 PL.169	135	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部～底部1/3	口底	(6.9)	高	E2	R燃糸文を縦位施文。内外面に煤状炭化物付着、被熱風化。	加曾利E1式	
第277図 PL.169	136	縄文土器 浅鉢?	遺構外 口縁部片	口底		高	E4	口縁がく字状に内接し、上面に2条の沈線文と刻目を施す。頸部はRL縄文を縦位施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E1式	
第277図 PL.169	137	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E4	口縁部が短く内折する無文浅鉢。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利E1式	
第277図 PL.169	138	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/4	口底	(18.6)	高	E5	口縁部に勾玉状の隆線渦巻文を施し、矢羽根状の短沈線文を充填的に施文。頸部にRL縄文を横位施文し、縦・横位の沈線文を施す。内面やや被熱風化、煤状炭化物付着。	郷土式	
第277図 PL.169	139	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E4	櫛歯状工具の条線文を斜格子状に施す。口縁部に単沈線の横線文や連弧文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面削り状の横位撫で。	加曾利E2式	
第277図 PL.169	140	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E5	やや粗大なRL縄文を縦位施文。口縁部に2条単位の単沈線で横線文や連弧文を、胴部に同沈線の懸垂文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式	
第277図 PL.169	141	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁～胴部片	口底		高	E4	無文浅鉢。内外面に横位磨き。	加曾利E2式	
第277図 PL.169	142	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	無文浅鉢。口唇部が折り返し状に肥厚・外折。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利E2式	
第277図 PL.169	143	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	B5	綾杉状の短沈線地文を施し、縦位の2条隆帯懸垂文を施文。内外面共に一部に煤状炭化物付着、やや被熱風化。	郷土式	
第277図 PL.169	144	縄文土器 有孔鏝付土器	遺構外 口縁部1/5	口底	(33.2)	高	G1	鏝の付け根近縁に直径5mmの孔を穿つ。孔に紐擦れ等の痕跡は認められない。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利E2式	
第277図 PL.169	145	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E4	RL縄文を口縁部に横位、胴部に縦位施文。口縁部に低平・幅広隆帯で渦巻文や楕円区画文を施し、幅広沈線文で縁取る。胴部は平行沈線懸垂文を施し、縄文を擦り消す。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E3式	
第277図 PL.169	146	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E4	LR縄文を縦位施文。口縁部に隆帯渦巻文や低平・幅広の隆帯楕円区画文及びそれを縁取る幅広沈線文を施す。胴部は平行沈線懸垂文を施し、区画内の縄文を擦り消す。内外面共に被熱風化。	加曾利E3式	
第277図 PL.169	147	縄文土器 鉢	遺構外 胴部片	口底		高	C5	口縁部に低平・幅広隆帯の楕円区画文を施し、LR縄文を充填施文。胴部は櫛歯状工具の縦位条線文を施す。内面横位磨き。	加曾利E3式	
第278図 PL.169	148	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/3	口底	(22.0)	高	E4	口縁内面に断面三角形の隆帯を巡らせ、受け口状に成形。口縁部にC字状の小突起を推定4単位に施す。内外面共に横位磨き。	称名寺I式?	
第278図 PL.169	149	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E5	内割ぎ状の口唇部下位に段を構成。単沈線によりJ字状の意匠を構成か。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	堀之内1式	
第278図 PL.169	150	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	I1	細沈線の区画内に細密なLR縄文を充填施文し、方形の区画内に重畳的にS字状や弧線状の細沈線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	堀之内1式	
第278図 PL.169	151	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H2	口唇内面に横位沈線文を施す。RL縄文を横・縦位に施文。内面横位磨き。	堀之内2式	
第278図 PL.169	152	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	I1	口唇内面に凹線状の横位沈線文を施す。推定6状の沈線横帯文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に横位磨き。	加曾利B1式	
第278図 PL.169	153	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	I1	口唇内面に凹線状の横位沈線文を施す。沈線横帯文内に櫛歯状工具の横位条線文を充填施文し、弧線文を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利B2式	
第278図 PL.169	154	縄文土器 浅鉢?	遺構外 口縁部片	口底		高	J1	く字状に内折する口縁部の上・下端に2条の横線文を施し、縦位の刻目を附加。頸部にはへら状工具の細沈線文を斜位に施文。内面被熱風化・剥離。	高井東式	
第278図 PL.169	155	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径厚	3.3 0.8	重	8.8	E2	深鉢の胴部破片を円形に打割整形し、周縁の過半部に摩耗痕を持つ。	後期前半

7区遺構外出土土器

第279図 PL.170	156	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	A4	波状口縁。0段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の平行沈線で楕円区画文や渦巻文および連続爪形文を施文。内面横位磨き、内外面共にやや被熱風化。	関山II式
第279図 PL.170	157	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の鋸歯状文や横線文を施す。口唇下の一部に斜位の刻目を施す。内面横位磨き。	関山II式
第279図 PL.170	158	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L(0段 多条)/	直前段合攪り縄文を横位施文し、半截竹管の平行沈線文を施す。内面横位磨き。	関山II式
第279図 PL.170	159	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	A4/直前合2L(0段 多条)/	直前段合攪り縄文を横位施文し、半截竹管の横線文や粗雑なコンパス文を施文した下位に単沈線の格子目文を施す。内外面共に被熱風化。	関山II式
第279図 PL.170	160	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	A9	0段多条の1段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の波状文を施す。内面横位磨き。	関山II式
第279図 PL.170	161	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	A4	1段縄丸組紐を横位施文し、半截竹管の円文・鋸歯状文や3本櫛歯状工具のコンパス文を施す。内外面共にやや被熱風化。	関山II式

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第279図 PL.170	162	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	附加条第1種のRL+L・LとLR+R・Rの2種類縄を横位交互に多段施文して菱形意匠を構成し、7本櫛歯状工具の横線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	163	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	0段多条の直前段合攪り縄文を横位に施文し、篋状工具の連続刺突文を3段に施す。内面横磨き、やや風化。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	164	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4/直前合2L・直前合2R(0段多条)/	口唇部に貼付文を施す波状口縁。2種類の直前段合攪り縄文を横位・多段に施文して菱形意匠を構成。内面やや被熱風化。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	165	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	0段縄丸組紐を横位施文。内外面共に被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	166	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。RL環付縄文を横・斜位に多段施文し、菱形意匠を構成。内面横位磨き	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	167	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	双頭の波状口縁。RLの環付縄文を横位・多段に施文。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	168	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部～底部 1/4	口底 (12.2)	高	A4	0段多条のRL・LR縄文を交互に横位施文し、菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	169	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	鋸歯状の小突起を付す。0段多条のRL・LR縄文を縦位多段に施文して菱形意匠を構成。内面被熱風化。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	170	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	L・R縄文を横位交互に施文して菱形意匠を構成。内外面共に被熱風化、外面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	171	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	LR縄文を横位多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	172	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	A4	0段多条のRL縄文を横位施文し、細棒状束工具の粗雑なコンパス文を施す。外面被熱風化・煤状炭化物付着、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	173	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部下位～底部 1/5	口底 (9.7)	高	A4	0段縄丸組紐を横位施文し、胴部下位にコンパス文を施す。底部外面にも縄文施文。内面縦位磨き、やや風化。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	174	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/3	口底 (8.8)	高	A4	高台状の上げ底。1段縄丸組紐を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第279図 PL.170	175	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/5	口底 (8.0)	高	A4	上げ底状。0段縄丸組紐を横位施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第280図 PL.170	176	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。2本束棒状工具の平行沈線文や同工具の刺突文により菱形または三角形の意匠を構成。内面やや粗い横位磨き。	有尾式
第280図 PL.170	177	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	半截竹管の横位平行沈線文を多段に施文し、同工具の刺突文を施す。外面被熱風化、内面横位磨き。	有尾式
第280図 PL.170	178	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	半截竹管の横位平行沈線文を多段に施文。内外面共にやや被熱風化。	有尾式
第280図 PL.170	179	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	波状口縁。口縁に沿って幅広半截竹管の押し引き状の連続爪形文を4条施す。内面横位磨き。	有尾式
第280図 PL.170	180	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	RL縄文を横位施文。内外面共に被熱風化。	有尾式
第280図 PL.170	181	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	A4	櫛歯状工具の押し引き的な連続刺突により疑似縄文を作成。内外面共にやや被熱風化。内面横位磨きで、粗い横・縦位磨き。	有尾式
第280図 PL.170	182	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	口縁部が強く内折。RL縄文を横・縦位に施文し、口・頸部に横位の浮線文を多段に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	諸磯b式
第280図 PL.170	183	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D6	口縁部がく字状に内折する波状口縁。RL縄文を横位施文し、半截竹管の集合沈線文を施す。内外面共にやや風化。	諸磯b式
第280図 PL.170	184	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	C3	口唇上に刻目を施す。口縁部に半截竹管の横位波状文を施文。内外面共に撫で状の横位磨き。	十三菩提式
第280図 PL.170	185	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B5	波状口縁。波頂下に弧状の隆線文を施文。内面横位磨き。	阿玉台1a式?
第280図 PL.170	186	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B5	波状口縁。波頂下に隆帯を縦位に貼付し、刻目を施す。口縁に沿って半截竹管の角押文を施す。内面丁寧な横位磨き。	阿玉台1b式
第280図 PL.170	187	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B5	外反する波状口縁。口唇部上面に竹管の刻目や水平方向の刺突を施す。下位に角押文を施文。内外面共に横位磨き、やや風化。	阿玉台1b式
第280図 PL.170	188	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	波状口縁。口縁部に隆線の区画文を施し、その上面や区画に沿って角押文を施文。内面横位磨き。	阿玉台1b式
第280図 PL.170	189	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	B4	木っ端状工具のやや粗雑な列状刺突文を施す。外面縦位磨きで、内面横位磨き。	阿玉台1b式
第280図 PL.170	190	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	B5	隆帯の楕円区画文を施し、区画内や上縁にやや粗大な角押文を施文。内外面共にやや風化。	阿玉台1b式
第280図 PL.171	191	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	波状口縁。波頂下に隆帯を縦位に貼付し、口縁に沿って半截竹管の角押文を施す。内外面共にやや風化。	阿玉台Ⅱ式
第280図 PL.171	192	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	隆帯文に沿って連続爪形文や連接弧線文を施し、隙間部に三叉文を施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	勝坂2式
第280図 PL.171	193	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	耳状の把手を付す。篋状工具の連続爪形文や半截竹管の連続弧状刺突文を把手内外面や沈線区画内に施文。内面横位磨き。	勝坂2式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第280図 PL.171	194	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文。箍状や円形状の隆帯文を施し、それに沿って単沈線文を施文。内外面共に被熱風化・剥離、外面煤状炭化物付着。	勝坂3式
第280図 PL.171	195	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	H1	隆線区画文に沿って刻み状の爪形文や半截竹管の平行沈線文を施し、その内部に三叉文を施文。内面横位磨き。	勝坂2式
第280図 PL.171	196	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	H1	上位に半截竹管の横位平行沈線文を、下位に隆帯の楕円区画文や連続弧線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	勝坂2式
第280図 PL.171	197	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	H1	眼鏡状突起に接続する隆帯文の上面やそれに沿って、連続爪形文、半截竹管押圧の連続弧線文・平行沈線文などを施す。内面煤状炭化物付着。	勝坂2式
第280図 PL.171	198	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	E5	細沈線の横位波状文を施し、内側に連続爪形文を施文。下に半截竹管の横位平行沈線文を施す。内面縦位磨き。	勝坂2式
第280図 PL.171	199	縄文土器 深鉢	遺構外 把手2/3	口底		高	H1	口縁部に付された耳状の大形把手。隆帯の渦巻弧線文を中心にして側面を含む隙間部に短沈線を充填施文し、隆帯部分にもLR縄文を施す。内面側は鋸歯状の交互刺突文や三叉状沈線文を施す。	新巻類型
第281図 PL.171	200	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に曲隆線文およびそれに沿う単沈線文を施し、充填的にRL縄文を施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	新巻類型
第281図 PL.171	201	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部下半～底部 1/2	口底	7.4	高	B5	懸垂状の単沈線でパネル状に区画された内部に、三叉文や横線文を施す。内面やや被熱風化。	新巻類型
第281図 PL.171	202	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部から口唇にかけて眼鏡状突起や曲隆線文を施し、それに沿って半肉彫的な単沈線文を施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや粗い横位磨き。	焼町土器
第281図 PL.171	203	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	B5	山形状の突起を付す波状口縁。波頂部に縦位の隆帯を貼付し、口縁に沿って単沈線文を横位に重帯施文。口縁内面に三叉文を施す。内面やや被熱風化。	焼町土器
第281図 PL.171	204	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に眼鏡状の小突起を付し、曲隆線文に沿って単沈線文を重層的に施す。内面横位磨き。	焼町土器
第281図 PL.171	205	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	眼鏡状突起に連結する曲隆線文に沿って、単沈線文を重層的に施文。内外面共にやや被熱風化。	焼町土器
第281図 PL.171	206	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	眼鏡状突起や曲隆線文に沿って、単沈線文を充填的に施文。内面被熱風化、剥離。	焼町土器
第281図 PL.171	207	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	眼鏡状突起に接続する曲隆線文に沿って、単沈線文を重層的に施文。内外面共にやや被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	焼町土器
第281図 PL.171	208	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	B5	口唇内面が隆帯貼付で受け口状。口縁に曲隆線文に沿った半截竹管の平行沈線文を重層的に施文。内面横位磨き、やや風化。	焼町土器
第281図 PL.171	209	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	H1	曲隆線文に沿って半截竹管の半肉彫的な平行沈線文を施す。内面横位磨き。	焼町土器
第281図 PL.171	210	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	H1	渦巻状の曲隆線文に沿って半肉彫的な単沈線文を重層的に施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	焼町土器
第281図 PL.171	211	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口唇部が短く外反。口縁部に角押圧的な連続刺突文を施し、下位に指頭状の押圧を加えた隆帯波状文を施文。	三原田式
第281図 PL.171	212	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	B5	口縁が短く外反。RL縄文を部分的に縦位施文。内面横位磨き、一部被熱剥離。	中期後半
第281図 PL.171	213	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	2本隆帯の渦巻文を施し、区画内にRL縄文を充填施文。内面横位磨き。	加曾利E1式
第281図 PL.171	214	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部がく字状に内湾するキャリパー形。隆帯区画内外に沈線渦巻文を中心とする同心円状の重弧線文を施す。内面横位磨き。	加曾利E1式
第281図 PL.171	215	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	L燃糸文を縦位施文し、隆線懸垂文を施す。内面一部被熱剥離。	加曾利E1式
第281図 PL.171	216	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に隆線渦巻文や区画文を施し、短沈線文を羽状に充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E2式
第281図 PL.171	217	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	B5	波状口縁。外面撫で状のやや粗い横位磨き、内面横位磨き。	加曾利E1式
第281図 PL.171	218	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/2	口底	7.0	高	H1	RL縄文を斜位に施文。内面横位磨き、炭素吸着。	加曾利E1式
第281図 PL.171	219	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部にRL縄文を施文し、隆線の渦巻文や区画文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E2式
第281図 PL.171	220	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に背割り状隆線の渦巻文や区画文を施し、単沈線を縦位に充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利E2式
第281図 PL.171	221	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	2本隆帯の楕円区画文を施し、単沈線文を充填施文。内面横位磨き、内外面一部被熱剥離。	加曾利E2式
第281図 PL.172	222	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部に隆線の渦巻文や区画文を施し、単沈線を充填施文。胴部は渦巻文下に3本単位の沈線懸垂文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式
第281図 PL.172	223	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁部にRL縄文を縦位施文し、隆帯の渦巻文や楕円区画文を施す。内面被熱風化。	加曾利E2式
第282図 PL.172	224	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	隆帯の渦巻文や楕円区画文を施し、単沈線文を羽状に充填施文。外面被熱風化、内面横位磨き。	加曾利E2式

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第282図 PL.172	225	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	RL縄文を横位多段に施し、口縁部に1本隆線の渦巻文や剣先状文を施文。内面横位磨き。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	226	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	RL縄文を縦位に施文し、3本単位の沈線懸垂文を施す。外面やや風化、内面横位磨き。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	227	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	無文地に単沈線の連弧文を施す。外面横位撫で、内面横位磨き。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	228	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	L燃糸文を縦位施文し、3本単位の沈線連弧文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	229	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	LR縄文を横位施文し、単沈線の連弧文や横線文を施す。内外面共にやや風化。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	230	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	LR縄文を横位施文し、3本単位の沈線連弧文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	231	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	C4	口唇部が受け口状に肥厚。内外面共に丁寧な横位磨きで光沢を帯びる。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	232	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E5	口縁が短く外折する。内外面共に横位磨き。	加曾利E2式	
第282図 PL.172	233	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E2	幅広の沈線区画文を縦位に施し、RL縄文を充填施文。内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式	
第282図 PL.172	234	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	RL縄文を横・縦位に施文し、口縁部に隆帯の渦巻状区画文を、胴部に逆U字状の沈線懸垂文を施す。内面やや被熱風化。	加曾利E3式	
第282図 PL.172	235	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	LR縄文を口唇下に横位、以下縦位に施文。横位沈線文や逆U字状懸垂文を施す。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱剥離。	加曾利E3式	
第282図 PL.172	236	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	C4	RL縄文を横位および縦位に施文。口縁に横線文、以下に逆U字状の懸垂文を施す。内面横位磨き。	加曾利E3式	
第282図 PL.172	237	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	LR縄文を横・斜位施文。逆U字状の沈線懸垂文を施す。内面煤状炭化物付着。	加曾利E3式	
第282図 PL.172	238	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	口縁部に横位沈線文を施し、RL縄文を横位施文。内面横位磨き。	加曾利E3式	
第282図 PL.172	239	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	沈線懸垂文や蛇行沈線文を施し、区画内にRL縄文を充填施文。内面縦・横位磨き、やや被熱風化。	加曾利E3式	
第282図 PL.172	240	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	口縁部に横線文を施し、櫛歯状工具の縦位条線文を施文。内外面共に横位磨き。	加曾利E3式	
第282図	241	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部1/3	口底	(43.8)高	C4	口縁部に隆帯の渦巻文や楕円区画文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きで光沢を帯びる。	加曾利E3式	
第283図 PL.172	242	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部下半～底部 2/3	口底	8.0	高	H1	凹線状の幅広沈線懸垂文を施し、RL縄文を充填的に縦位施文。内面被熱剥離、煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第283図 PL.172	243	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	2本の沈線懸垂文を施し、RL縄文を縦位・充填的に施文。内面やや被熱剥離。	加曾利E3式	
第283図 PL.172	244	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部下位～底部 1/2	口底	9.8	高	H1	凹線状の幅広沈線懸垂文を施し、RL縄文を充填的に縦位施文。内外面共にやや被熱風化するが、外面の底面から高さ7cm範囲は風化せず、当部位を埋置して使用か。	加曾利E3式
第283図 PL.173	245	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/3	口底	(27.2)	高	H1	LR縄文を横位施文し、2本単沈線の連弧文や横線文を施す。内面横位磨き、やや風化。	加曾利E3式
第283図 PL.173	246	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	I1	細沈線のV字状区画文内にLR縄文を充填施文。	加曾利E4式	
第283図 PL.173	247	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	D6	口縁部に沈線区画文や横位隆帯文を施し、羽状の短沈線文を施文。内面横位磨き、やや風化。	郷土式	
第283図 PL.173	248	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	波状口縁。波頂下に隆線の渦巻弧線文を横位施文し、それに沿って連続刺突文を施す。渦巻文に接続して腕骨状の隆帯懸垂文を施し、縦位の単沈線を充填的に施文。内面横位磨き。	大木9b式併行	
第283図 PL.173	249	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	口縁部に横位隆帯文を施し単沈線を羽状に施す。内面横位磨き。	郷土式	
第283図 PL.173	250	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	櫛歯状工具の波状条線文を縦位施文し、隆帯文を縦・横位に施す。内面削り状の横位磨きで後、散漫な横位磨き。	郷土式	
第283図 PL.173	251	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	櫛歯状工具の条線文を斜・縦位に施し、隆線文を横・縦位に施文。内面横位磨き。	郷土式	
第283図 PL.173	252	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	隆帯懸垂文に沿って縦位の単沈線文を施し、隙間部を横・斜位の単沈線で充填。内面煤状炭化物付着。	郷土式	
第283図 PL.173	253	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	沈線渦巻文の外縁隙間部に単沈線を縦・横位に充填的に施文。内面炭素吸着。	郷土式	
第283図 PL.173	254	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	粗製の深鉢。波状口縁。半截竹管の平行沈線文を横位乱雑に施文。外面粗い横位磨きで、炭素吸着。内面やや粗い横位磨き。	中期後半	
第283図 PL.173	255	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E5	口縁が短く内折し、2条の横線文を施す。内外面共に横位磨き。	中期後半	
第283図 PL.173	256	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	口縁に微隆起線文を横位施文し、円形貼付文を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利E5式	
第283図 PL.173	257	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	口唇から口縁にかけて微隆起線文を弧状に施し、L縄文を横・斜位に施文。内面やや粗い横位磨き。	加曾利E5式	
第283図 PL.173	258	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁がく字状に内折する粗製の深鉢。口縁に横位の微隆起線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	加曾利E5式	
第283図 PL.173	259	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	単沈線の区画文を施し、L縄文を充填施文。内外面共に被熱風化。	称名寺I式	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第283図 PL.173	260	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	波状口縁。口唇外端に横位隆帯を施し、円形貼付文に接続する短沈線文を施文。胴部に単沈線の区画文を施す。内面横位磨き。	称名寺Ⅱ式
第283図 PL.173	261	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	波状口縁。単沈線の区画文を施す。内外面共に横位磨き、内面一部に煤状炭化物付着。	称名寺Ⅱ式
第284図 PL.173	262	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	波状口縁。波頂部に貼付文を施すが剥落。単沈線の区画文を施す。内外面共に被熱風化、外面煤状炭化物付着。	称名寺Ⅱ式
第284図 PL.173	263	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	単沈線のJ字状区画文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面被熱風化。	称名寺Ⅱ式
第284図 PL.173	264	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	篋状工具による左斜位方向の連続刺突により、多段の刺突文を施す。内外面共にやや被熱風化。	三十稲場式
第284図 PL.173	265	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	波状口縁。口縁に沿って横線文や押圧状の円形刺突文を施し、波頂下に鎖状隆帯文を縦位施文。口縁内面にも穿孔を挟んで2個の押圧状刺突文を施す。内外面共にやや風化。	堀之内1式
第284図 PL.173	266	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	く字状に内折する口縁に小突起を付す。端部に刺突を加えた横線文を施し、波頂下の頸部に鎖状隆帯文を縦位に施文。内面横位磨き。	堀之内1式
第284図 PL.173	267	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁に鎖状隆帯文を縦位施文し、同部位の口縁内面に低平な隆帯を縦位に施す。外面縦位磨き、内面一部に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第284図 PL.173	268	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	波状口縁。複合口縁状に肥厚する口縁波頂部に2個の8字状貼付文を付し、同部位の口唇部内端には刺突文を施す。内外面共にやや風化。	堀之内1式
第284図 PL.173	269	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁に捻転状の小突起を付す波状口縁。口縁内外面に8字状貼付文や同心円状の弧線文を重畳的に施文し、波頂下の頸部に刻み太隆帯文を縦位施文。外面やや風化、内面横位磨き。	堀之内1式
第284図 PL.173	270	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	波状口縁。内折する口縁にC字状の貼付文を施し、中央部に穿孔を加える。内外面共にやや風化。	堀之内1式
第284図 PL.173	271	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	波状口縁。波頂部内面に凹線状の沈線渦巻文を施す。内外面共にやや風化。	堀之内1式
第284図 PL.174	272	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	く字状に内折する波状口縁。内外面共に横位磨き。	堀之内1式
第284図 PL.174	273	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁内面に段を作出し、同心円状の弧線文を施す。内外面共にやや被熱風化。	堀之内1式
第284図 PL.174	274	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁部に篋状工具の爪形文を縦位に施文。内面横位磨き。	堀之内1式?
第284図 PL.174	275	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁内面に段を作出し、同心円状の弧線文や横線文、斜刻文を施す。内外面共に横位磨き、やや風化。	堀之内1式
第284図 PL.174	276	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口唇が短く内折。山形状の小突起を付し、頸部にかけて8字状の縦位隆帯を貼付。括れ部に横位の刻み隆帯文を施す。内外面共にやや風化。	堀之内1式
第284図 PL.174	277	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口唇部がく字状に内折。口縁部から頸部にかけて無文。内外面共に被熱風化。	堀之内1式
第284図 PL.174	278	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	く字状に短く内折する口縁に横線文とその端部に刺突文を施す。内外面共にやや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第284図 PL.174	279	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/3	口底 (32.0)	高	H1	短く直立する口縁外端に単沈線の横線文や弧状の短沈線文、押圧状の刺突文を施す。内外面共に被熱風化、外面煤状炭化物付着。	堀之内1式
第285図 PL.174	280	縄文土器 深鉢	遺構外 頸部片	口底	高	E2	括れ部に横位の刻目隆帯文や8字状貼付文を施す。胴部は沈線区画文を施しLR縄文を充填。	堀之内1式
第285図 PL.174	281	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E2	単沈線の弧状懸垂文や渦巻文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	堀之内1式
第285図 PL.174	282	縄文土器 深鉢	遺構外 頸部～底部1/2	口底 8.0	高	J1	口縁部は欠損するが、大きく反折する鉢的な器形か。長方形の横位沈線区画文を3段・4単位に施し、LR縄文を充填施文。各単位間にX字状の弧線文と指頭状の円形押圧文とを交互に縦位施文。内外面共にやや風化。	堀之内1式
第285図 PL.174	283	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	LR縄文を横位施文。半截竹管の平行沈線文を重ね描き施文。外面に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第285図 PL.174	284	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E2	懸垂状や斜行状の単沈線文を施し、隙間部にLR縄文を浅く充填施文。内面やや被熱風化。	堀之内1式
第285図 PL.174	285	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	B4	沈線懸垂文を施す。内外面共に剥離・風化。	堀之内1式
第285図 PL.174	286	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	3本単位沈線により懸垂文等の文様を構成し、空隙部分にLR縄文を散漫に施文。	堀之内1式
第285図 PL.174	287	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	櫛歯状工具の懸垂文を施す。外面風化、内面横位磨き。	堀之内1式
第285図 PL.174	288	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/4	口底 (21.0)	高	J2	く字状に短く内折する口縁に横線文を施す。頸・胴部にH字状懸垂文を縦位に施し、各懸垂文間に充填的にLR縄文を縦位施文。内外面共に被熱風化。	堀之内1式
第285図 PL.174	289	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	緩く内折する波状口縁。口縁波頂部に円形貼付文的な刺突文を、その周縁に弧状沈線文や横線文を施す。波頂下から垂下する刻み隆帯文を挟んで蕨手状の沈線懸垂文を重畳的に施す。外面炭素吸着、内面横位磨き。	堀之内1式
第285図 PL.174	290	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	括れ部と口縁内面に単沈線の横線文を施す。内外面共に篋削り状の横位撫で後、やや粗い横位磨き。	堀之内1式

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第285図 PL.174	291	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	B4	口唇外端に横線文を施す。外面やや粗い横位磨き。内面横位磨き後、やや粗い横位磨き。	堀之内1式
第285図 PL.174	292	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部下位～底部 1/2	口底	8.0	高	E2	外面縦位磨き、内面やや被熱風化。	堀之内1式?
第285図 PL.174	293	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/4	口底	(9.0)	高	E2	底部外面に網代痕。内外面共にやや被熱風化。	堀之内1式
第285図 PL.174	294	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部1/4	口底	(26.0)	高	E2	強く内湾する口縁に楕円区画文と籐状の横位隆帯文を施し、LR縄文を充填的に横位施文。下位に単沈線の懸垂文等を施す。内面横位磨き。	堀之内1式
第285図 PL.174	295	縄文土器 注口土器?	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	短く外折する口唇部に指頭状の押圧痕。肩部に沈線渦巻文を施す。外面やや風化、内面横位磨き。	堀之内1式
第285図 PL.174	296	縄文土器 注口土器?	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	単沈線の区画文を施し、L縄文を充填施文。外面やや風化、内面横位磨き。	堀之内1式
第285図 PL.174	297	縄文土器 蓋	遺構外 1/3	口底	(7.8)	高	H1	四方から穿孔された橋状の摘み部を持つ。内外面共に風化。	堀之内1式?
第285図 PL.174	298	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E5	無文。内外面共に横位磨き。外面やや被熱風化、内面一部被熱剝離。	堀之内1式
第285図 PL.174	299	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	J1	平頭状の口唇上面および口縁に横線文を施す。内外面共に横位磨き。	堀之内1式
第286図 PL.174	300	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	無頸壺的な無文土器。内外面共に横位磨き、やや風化。	堀之内1式
第286図 PL.174	301	縄文土器 瓢形?	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	所謂「千鳥窪類型」の瓢形土器か。括れ部下に籐状の横位隆帯文を施し、橋状の把手を付すと推定。隙間部に単沈線の楕円文や渦巻文を施す。内面横位磨き。	堀之内1式?
第286図 PL.175	302	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部～胴部 1/6	口底	(27.0)	高	E2	細沈線により頸部に横線文、胴部に懸垂文を施し、隙間部にLR縄文を充填施文。口縁内面に凹線状の浅い幅広横線文を施す。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第286図 PL.174	303	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁に低平・幅広の刻み隆線文を横位施文。以下に沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に横線文を施す。内外面共に横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	304	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口唇部が短く内折し、内面に横位沈線文を施す。外面は口縁に刻み隆線文や横線文を施し、LR縄文を充填施文。内外面横位の磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	305	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	C4	口縁に刻み隆線文や円形貼付文を施文。下位に横線角文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に8字状の小突起を付す。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	306	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁に刻み隆線文を施し、円形刺突文を施文。口縁内面に横線文を施す。内外面共に横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	307	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口縁に刻み隆線文を施し、下位の沈線区画文内にLR縄文を充填施文。口縁内面に円形刺突文を施す。内外面共に横位磨き、内面やや風化。	堀之内2式
第286図 PL.175	308	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁に刻み隆線文と8字状貼付文を施す。下位に三角形の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	309	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	平行する2本の隆帯横線文にLR縄文を横位施文し、鎖状隆帯文を縦位に連結。内外面共に撫で状の粗い横位磨き。粗製の深鉢。	堀之内2式
第286図 PL.175	310	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	G1	口縁にやや幅広の横位隆線文を2条横位施文し、上面にLR縄文を横位に施す。口縁内面に凹線状の横線文を施す。内外面共に横位磨き、やや風化。	堀之内2式
第286図 PL.175	311	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	波状口縁。口縁に刻み隆線文を横位施文し、C字状の貼付文を付す。下位に沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。外面やや風化、内面横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	312	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口唇に小突起を付す。口縁に2本の刻み隆線文を施文。下位に沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に刻目や横線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	堀之内2式
第286図 PL.175	313	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁に2条の刻み隆線文を施し、下位の横線区画文内にLR縄文を充填施文。口縁内面に横線文を施す。内外面共に横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第286図 PL.175	314	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁に刻み隆線文を、下位に及び口縁内面に横線文を施す。内外面共に横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	315	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁に刻み隆線文を横位施文し、縦位の貼付文を施す。下位に沈線区画文を施しLR縄文を充填施文するが、貼付文下は弧線化。内面やや風化。	堀之内2式
第286図 PL.175	316	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	く字状に内折する口縁。刻み隆線文を横位に2条施文し、鎖状の隆線文で連結。内外面共に横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	317	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	8字状の沈線区画文に沿って単沈線を重層的に施文し、区画文内にLRの細密縄文を充填施文。内外面共にやや風化。	堀之内2式
第286図 PL.175	318	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁で口唇上に刻目を施す。刻み隆線文を横位施文し、波頂下のみ円形刺突を付加。口縁内面に横線文を施文。内外面共に横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	319	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部～底部 4/5	口底	17.5 10.5	高 19.7	G1	口縁に小突起や8字状貼付文を付す。胴部上半に単沈線の重菱形区画文を横位4単位に施す。底外面に網代痕。横位磨きで光沢を帯びる。	堀之内2式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第286図 PL.175	320	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に刻み隆線文と円形貼付文を施す。口縁内面に横線文を施文。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第286図 PL.175	321	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	口縁下に横線区画文を施し、LR縄文を充填施文後に単沈線を鋸歯状に施文。口縁内面に横線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.175	322	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口唇に球頭状小突起を付す。口縁に横線区画文を施し、LR縄文を横線文に横線文を施す。口縁内面に横線文を施す。外面横意味履き、一部煤状炭化物付着。内面やや被熱風化。	堀之内2式
第287図 PL.175	323	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	G1	細沈線の横線文帯や結紐状繫絡文を施し、区画内にLR縄文を充填施文。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.175	324	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	G1	三角形状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面やや風化。	堀之内2式
第287図 PL.175	325	縄文土器 鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E2	いわゆる「体部屈曲鉢」で、沈線区画内にLR縄文を充填施文し、その外縁に単沈線の斜線文を施す。内面横位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.175	326	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	篋状工具の細沈線で格子目文を施す。口縁内面に横線文を施文。外面斜位磨削り後、やや粗い横位磨き。内面やや粗い横位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.175	327	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に格子目文を施す。口縁内面に横線文を施文。外面横位磨削り後、やや散漫な横位磨き。内面横位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.175	328	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	無文深鉢か。内外面共に横位磨き、やや風化。	堀之内2式?
第287図 PL.175	329	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/2	口底	9.8	H1	底外面に網代痕。円板状底面との接合部を残す。内外面共にやや被熱風化、内面煤状炭化物付着。	堀之内2式?
第287図 PL.175	330	縄文土器 深鉢	遺構外 底部2/3	口底	7.8	G1	底外面に網代痕を持つが縁辺部を撫で消す。外面横位、内面縦位の磨き。	堀之内2式
第287図 PL.175	331	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁に小突起を付し、LR縄文を横位多段に施文。口縁内面に横線文を施す。内外面共にやや被熱風化。	堀之内2式
第287図 PL.175	332	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	波状口縁か。口縁内面に横線文と円文を施す。外面斜位磨削り後、横位磨き。内面丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.175	333	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に山形状の小突起を付し、浅い刻み状の細沈線を施す。内面は4本の横線文を施文。内外面共に横位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.176	334	縄文土器 注口土器	遺構外 口縁部片	口底	高	C5	口縁部が短く外折し、渦巻状小突起が乗る橋状把手を付す。肩部に沈線区画文を施し、細密なLR縄文を充填施文。内外面共にやや風化。	堀之内2式
第287図 PL.176	335	縄文土器 鉢	遺構外 底部1/4	口底	(6.8)	J1	幾何学的な沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。内面丁寧な横・縦位磨き。	堀之内2式
第287図 PL.176	336	縄文土器 注口土器	遺構外 胴部片	口底	高	E2	低平な隆帯を渦巻状に施し、単沈線文を沿わせると共に上面にLR縄文を充填施文。外面丁寧な磨きで光沢を帯びる。内面横位磨削り。	堀之内2式
第287図 PL.176	337	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	粗製深鉢。外面口縁部横位磨削り後、粗い横位磨き。胴部斜位磨削り後、粗い縦・斜位磨き。内面やや粗い横位磨き、やや被熱風化。	堀之内2式?
第287図 PL.176	338	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	粗製深鉢。内外面共に横位磨削り後、粗い横位磨き。	堀之内2式?
第287図 PL.176	339	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	粗製深鉢。内外面共にやや粗い撫で状の横位磨き、外面炭素吸着。	堀之内2式?
第287図 PL.176	340	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	C2	外削ぎ状口唇部上端に刻目を施す。口縁に横線文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に段を作出し、連続刺突文や横線文を施文。外面やや被熱風化・剥離、内面横位磨き。	加曾利B1式
第287図 PL.176	341	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	外削ぎ状口唇部上端に刻目を施す。口縁に横線区画文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に段を作出し、連続刺突文や横線文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第287図 PL.176	342	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部～胴部 1/3	口底	(13.0)	G1	狭い外削ぎ状口唇部。口縁に横線文を施し、LR縄文を充填施文。内面は斜位刻目や刺突文、横線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第287図 PL.176	343	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	狭い外削ぎ状口唇部に刻目を施す。口縁に横線文や区切縦線文をやや粗雑に施文。内外面共に横位磨き、燻べ焼きで黒色を帯びる。内面一部に煤状炭化物付着。	加曾利B1式
第288図 PL.176	344	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	C5	外削ぎ状の口唇部上端に斜刻文を施す。口縁に横線文帯を施し、LR縄文を充填施文後に区切縦線文を施す。口縁に横線文帯を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.176	345	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口唇部が短く内折し、内面に段を構成。外面に4条以上の横線文を施し、縦区切文やLR縄文を施文。内面に5条の横線文を施す。内外面横位の磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.176	346	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線文帯や区切縦線文を施し、LR縄文を充填施文。内面にも同様の横線文帯を施し、散漫にLR縄文を充填施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.176	347	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線区画文を施し、LR縄文を充填施文。口唇部上端と口縁内面に横線文を施す。	加曾利B1式
第288図 PL.176	348	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁に細沈線の横線文を施し、LR縄文を充填。内面口唇下に横線文。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.176	349	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線文を施し、LR縄文を充填施文後に区切縦線文を施す。口縁内面に横線文を施文。内外面共にやや風化。	加曾利B1式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第288図 PL.176	350	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線文帯を施し、対弧状の区切文やLR縄文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きで、黒色の光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.176	351	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線文帯を施し、区切縦線文や櫛歯状工具の横位条線文を施文。内面横位磨き、一部煤状炭化物付着。	加曾利B1式
第288図 PL.176	352	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	J2	口縁に横線文を施し、櫛歯状工具の条線文を横位に施文。口縁内面にも横線文を施す。内外面共にやや風化。	加曾利B1式?
第288図 PL.176	353	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	小波状口縁で小突起を付すが欠落。口縁に横線文帯を施し、の字文や区切縦線文を施文後にLR縄文を充填施文。口縁内面にも横線文帯と斜刻文を施す。354と同一個体。	加曾利B1式
第288図 PL.176	354	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	8字状の捻転小突起を付す波状口縁。口縁に横線文帯を施し、の字文や区切縦線文を施文後にLR縄文を充填施文。口縁内面にも横線文帯と斜刻文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。353と同一個体。	加曾利B1式
第288図 PL.176	355	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	外削ぎ状口唇部上端に斜刻文を施す波状口縁。口縁に横線文帯を施し、口縁内面に段を作出し、横線文帯や斜刻文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.176	356	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	波状口縁。外削ぎ状口唇部上端に刻目を施す。口縁に横線文帯を施し、LR縄文を充填施文後に区切縦線文を施す。口縁内面に段を作出し、連続刺突文や横線文を施文。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.176	357	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	B4	外削ぎ状口唇部に斜刻文を施す。波状口縁。口縁に横線文帯を施し、LR縄文を浅く充填施文後に区切縦線文を施す。口縁内面に段を作出し、横線文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.176	358	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口唇部が狭い内削ぎ状の波状口縁。口縁に横線文帯を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面は刻目や横線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.177	359	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	小突起を付す波状口縁。口縁に横線文帯を施し、LR縄文を充填施文後に区切縦線文を施す。口縁内面に横線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.177	360	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	波状口縁。口縁に横線文帯を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に段を作出し、横線文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.177	361	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	捻転状の突起部。頂部及び内外面に指頭押圧状の刺突を施す。内外面共に丁寧な磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.177	362	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	捻転状小突起を付す波状口縁。口唇部が短く内折。横線文に縦区切文を施す。内面は4条の横線文を施文。内外面横位の磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.177	363	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	波状口縁。口縁に横線文帯を施す。口縁内面は有段状で、横線文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第288図 PL.177	364	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	口唇に8字状の小突起を付す波状口縁。口唇及び口縁に横線文や区切縦線文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面に1条の横線文。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.177	365	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	E2	横線区画文を施し、LR縄文を充填施文後に区切縦線文を施す。外面煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.177	366	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁の内外面に横線文を施す。内外面共に横位磨き、内面煤状炭化物付着。	加曾利B1式
第288図 PL.177	367	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線文を施し、弧状の区切縦線文を施文。口縁内面に横線文を施文。外面横位磨削り後、散漫な横位磨き。内面横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.177	368	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	H1	口縁外面に4条の横線文を、内面に1条の横線文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	加曾利B1式
第288図 PL.177	369	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線区画文を施し、単沈線を鋸歯状に充填施文。口縁内面に横線文帯を施す。外面被熱剝離、内面横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	370	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口縁に横線区画文を施し、単沈線を鋸歯状に充填施文。内面口唇下に横線文。外面横位磨き、内面やや被熱風化。	加曾利B1式
第289図 PL.177	371	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底	高	H1	横線区画文を施し、格子目文を充填施文。外面やや風化、内面一部に被熱剝離。	加曾利B1式
第289図 PL.177	372	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	粗製的な深鉢。口縁にLR縄文をやや乱雑に横位施文し、横線文を施す。外面横位磨削り後、横位撫で。内面横位磨削り後、やや粗い横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	373	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	口縁にLR縄文を横位施文後、横線文を施す。口縁内面に横線文を施文。内面横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	374	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	やや緩い外削ぎ状口唇部。口縁に横線文を施し、LR縄文を横位施文。口縁内面に横線文を施す。内面やや風化。	加曾利B1式
第289図 PL.177	375	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	外削ぎ状の口唇部。単沈線の区画文を施し、LR縄文を横位施文。口縁内面に横線文を施す。内面横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	376	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	LR縄文を横位・多段に施す。外削ぎ状口唇部内面に横線文を施文。内面丁寧な横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	377	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	E2	LR縄文を横位施文。口縁内面に横線文を施す。内外面共にやや風化。	加曾利B1式
第289図 PL.177	378	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底	高	G1	口唇以下にLR縄文を横位・多段に施文。口縁内面にやや幅広い横線文を施す。内面横位磨き。	加曾利B1式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第289図 PL.177	379	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	波状口縁。口縁内面に横線文を施文。内外面に共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第289図 PL.177	380	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部～胴部 中位1/3	口底	(24.0)	高	G1	半粗製の無文深鉢。外面縦位、内面横位の匏磨き。内面一部煤状炭化物付着、内外面に共に燻べ焼きで黒色を帯びる。	加曾利B1式?
第289図 PL.177	381	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁に幅広の無文部を置いて横線文を施す。口縁内面に横線文を施す。内外面に共に横位磨き、やや被熱風化。	加曾利B1式
第289図 PL.177	382	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	粗製の深鉢。口縁内面に浅い横線文を施す。外面粗い横位磨きで後、横位磨き。内面横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	383	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	横線文を施し、LR縄文を横位に充填施文。内面丁寧な磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	384	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部1/3	口底	(10.6)	高	G1	口縁部-体部に半隆起横線文や沈線横線文を施し、LR縄文を充填施文。内外面に共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第289図 PL.177	385	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口縁に横線文帯を施し、LR縄文を充填施文後に区切縦線文を施す。内面丁寧な横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	386	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	C5	7条以上の横線文にクランク状の縦区切文やLR縄文を充填施文。最上位では刻みを施して擬似刻み隆帯文化する。内外面に共に丁寧な磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	387	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	口縁に横線文帯を施し、区切縦線文や斜位刻目・LR縄文を施文。内外面に共に横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	388	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部～底部 3/4	口底	14.8 6.5	高	11.2 G1	波状口縁。口唇上面と口縁に横線文を施し、区画内にLR縄文を充填施文。底外面に網代痕。内外面に共に丁寧な横位磨きで光沢を帯びる。	加曾利B1式
第289図 PL.177	389	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁に横線文帯を施文し、区切縦線文を施す。下位に斜線文を施文。内外面に共に丁寧な横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.177	390	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口唇上端に斜刻文を施文。口縁に横線文を施し、最上位の半隆起帯状部位に斜刻文を、他はLR縄文を充填施文。口縁に横線文を施す。内外面に共に横位磨き、やや風化。	加曾利B1式
第289図 PL.177	391	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	外削ぎ状口唇部上面に小突起や横線文を施し、斜刻文を施文口縁に横線文帯を施し、区切縦線文を施文。内面丁寧な横位磨きで光沢を帯びる。	加曾利B1式
第289図 PL.178	392	縄文土器 鉢	遺構外 胴部片	口底		高	E2	沈線横帯文に区切縦線文を施す。内外面に共にやや風化。	加曾利B1式
第289図 PL.178	393	縄文土器 鉢	遺構外 胴部片	口底		高	E2	横線文帯を施し、LR縄文を充填施文後に区切縦線文を施す。内面撫で状の横位磨き。	加曾利B1式
第289図 PL.178	394	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	無文。口縁の内外面に1条の横線文を施す。内外面に共に横位磨き。	加曾利B1式?
第289図 PL.178	395	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	B4	無文。内外面に共に丁寧な横位磨き。	加曾利B1式?
第289図 PL.178	396	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口唇上面から口縁内面にかけて円形刺突文や横線文を施文し、クランク状の区切文や匏状工具の細かい斜位刻目を施す。外面横位磨き、黒斑状に炭素吸着。	加曾利B1式
第289図 PL.178	397	縄文土器 台付深鉢?	遺構外 口縁部片	口底		高	B4	波状口縁。竹管状工具の単沈線区画文を施し、区画内に細密なLR縄文を充填施文した後に、区画線に沿って同工具の連続刺突文を施す。隙間部には三角形の沈線文を施文。内面風化。	加曾利B1式併行?
第289図 PL.178	398	縄文土器 注口土器	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	橋状の小突起を付す。外削ぎ状口唇部に横線文を施し、口唇内面は斜刻文施文や受け口状の段を構成。口縁に横線区画文を施し、S字状入組文を連続施文。突起部下位の体部に字文を施す。外面丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B1式
第289図 PL.178	399	縄文土器 注口土器	遺構外 口縁部片	口底		高	I1	橋状の小突起を付す。口唇内面は受け口状の段を構成。短く内折する口縁に横位の細沈線文2本を施す。頸部には短沈線を斜位に充填施文。内外面に共に黒色で光沢ある丁寧な磨き。	加曾利B1式
第290図 PL.178	400	縄文土器 注口土器	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁内面に受け口状の段を構成。口縁に8字状の小突起を付し、口唇上端や外縁に斜刻文を施す。下位には横線文帯を施し、LR縄文を充填施文。突起下には字文を施す。内面横位磨き。	加曾利B1式
第290図 PL.178	401	縄文土器 注口土器	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	内面に段を持つ受け口状口縁。口唇内外端部とやや深い細沈線で作出された半隆線文上に匏状工具の細密刻目を施し、隙間部に横位の連続刺突文を施文。内外面に共に丁寧な横位磨き、外面燻べ焼きの炭素吸着。402・403と同一個体。	加曾利B1式
第290図 PL.178	402	縄文土器 注口土器	遺構外 肩部片	口底		高	G1	櫛歯状工具のS字状連鎖文や横線文・渦巻文を施し、中心部に刺突文や細密なLR縄文を充填施文。外面丁寧な磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯び、内面横位磨き。401・403と同一個体。	加曾利B1式
第290図 PL.178	403	縄文土器 注口土器	遺構外 肩部片	口底		高	G1	櫛歯状工具の渦巻文や細い2本単沈線で縦位のS字状連鎖文を施文。401・402と同一個体。	加曾利B1式
第290図 PL.178	404	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	E2	LR縄文を横位帯状に多段施文し、横線文や対向弧線文を施す。外面やや被熱風化、内面やや被熱剥離。	加曾利B2式
第290図 PL.178	405	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部～胴部 1/3	口底	(28.0)	高	D6	口唇端部に指先の摘み上げ痕が残る。LR縄文を横位多段に施文。半截竹管の平行沈線で横線文や連続弧線文を施す。外面から内面方向の補修孔あり。外面縦位、内面横位の匏撫で。	加曾利B2式?

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第290図 PL.178	406	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	胴部に幅広の横線区画文を施し、3-4本の単沈線で格子目文を、単沈線で対向弧線文を施す。口縁に浅い横線文を施す。外面口縁横位減れ磨き、胴部斜位磨き。内面横位磨き、やや被熱風化。	加曾利B2式
第290図 PL.178	407	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	C5	口縁に横位の鎖状隆帯文や鋸歯状の斜線文を施す。口縁内面に横位磨きによる稜を作出。内外面共にやや風化。	加曾利B2式
第290図 PL.178	408	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口唇部にC字状の連続小突起加工を施し、口縁に横線文帯を施文。内外面共に横位磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。	加曾利B2式
第290図 PL.178	409	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	C2	いわゆる紐線文系土器。LR縄文を横位施文し、口唇上面に横線文を、外端に指頭状押圧の鎖状隆帯文を横位に施す。口縁内面に横線文を施文。外面煤状炭化物付着、内面やや被熱風化。	加曾利B2式
第290図 PL.178	410	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	粗製的な無文深鉢。外面口縁部横位磨で、以下縦位磨削り。内面横位磨き。	加曾利B2式?
第290図 PL.178	411	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	口縁に横線文を施文し、刻目を施す。下位に櫛歯状工具の斜線文を施す。内外面共に横位磨き。	加曾利B2式
第290図 PL.178	412	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	C2	波状口縁。口縁に細沈線を羽状に施すと推定。口縁内面に凹線状の浅い横線文を施す。外面やや粗雑な横位磨き、内面横位磨き。	加曾利B3式
第290図 PL.178	413	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	粗製深鉢。外面横位磨削り後、粗い横位磨き。内面横位磨削り後、粗い横位磨き。内面やや被熱風化。	後期中葉?
第290図 PL.178	414	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	H1	粗製深鉢。外面横位磨削り後、粗い横位磨で。内面横位磨で。内外面共に被熱風化。	後期中葉?
第290図 PL.178	415	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/2	口底	(8.4)	高	E2	底部外面に網代痕。内外面共にやや被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	後期中葉?
第290図 PL.178	416	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/2	口底	6.8	高	B4	底部外面に2種類の網代痕。外面縦位磨削り、内面被熱剥離。	後期中葉
第290図 PL.178	417	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/2	口底	(8.0)	高	G1	底外面に網代痕。外面縦位、内面斜位磨き。	後期中葉
第290図 PL.178	418	縄文土器 深鉢	遺構外 胴下半~底部 1/4	口底	(12.0)	高	H1	底外面に網代痕。外面縦位磨き、内面被熱剥離・煤状炭化物付着。	後期中葉
第290図 PL.178	419	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/2	口底	11.0	高	C5	底部外面に網代痕。内外面共に横位磨き。	後期中葉
第290図 PL.178	420	縄文土器 深鉢	遺構外 底部完存	口底	8.0	高	E2	底部外面に2種類の網代痕。外面横・縦位磨で状の磨き、内面煤状炭化物付着。	後期中葉
第290図 PL.178	421	縄文土器 深鉢	遺構外 底部1/2	口底	8.4	高	E2	粗製的な深鉢か。底部外面に網代痕。内外面共にやや被熱風化・剥離、内面一部に煤状炭化物付着。	後期中葉
第290図 PL.179	422	縄文土器 深鉢	遺構外 底部片	口底	(10.6)	高	H1	底面に網代痕。外面縦位、内面横位磨で。	後期中葉
第290図 PL.179	423	縄文土器 深鉢	遺構外 底部3/4	口底	11.0	高	J2	底外面に網代痕。内面被熱風化。	後期中葉
第290図 PL.179	424	縄文土器 注口土器	遺構外 胴部片	口底		高	G1	注口部。本体との接合基部に接合痕残存。直径約33mmの円筒を心材として、その外周に最大15mm厚に粘土を巻き付け作出。外面丁寧な磨き。	後期中葉
第291図 PL.179	425	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁。内折する口縁波底下にC字状貼付文を付し、短沈線の横線文を施す。胴部に羽状沈線文を施文。内外面共にやや風化。	高井東式
第291図 PL.179	426	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	波状口縁。く字状に内折する口縁部に2本の横線文を施し、下位に羽状沈線文を施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き・炭素吸着。	高井東式
第291図 PL.179	427	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	内削ぎ状の口唇部。短く内折する口縁に沈線区画文や円形貼付文を施す。内外面共に横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	高井東式
第291図 PL.179	428	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	短く内湾する口縁に2条の横線文を施す。外面頸部横位磨削り痕を残す粗い横位磨き。内面やや風化。	高井東式
第291図 PL.179	429	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	G1	波状口縁。く字状に内折する口縁部に単沈線の区画文を施す。内外面共にやや風化。	高井東式
第291図 PL.179	430	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁。く字状に内折する口縁に沈線区画文を施す。内外面共に横位磨き。	高井東式
第291図 PL.179	431	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口縁に2本の単沈線文を横位施文し、それを挟んだ上下にLR縄文を横位施文。内面横位磨き	高井東式
第291図 PL.179	432	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	C2	緩く内折する口縁部にLR縄文を横位施文。外面横位磨削り後、横位磨き。内面横位磨き。	高井東式
第291図 PL.179	433	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	く字状に内折する口縁に細密なLR縄文を充填施文。外面やや風化、内面横位磨き。	高井東式
第291図 PL.179	434	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁。内削ぎ状にやや肥厚する口唇部。内外面共に磨で状のやや粗い磨き。	高井東式
第291図 PL.179	435	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	波状口縁。口唇部が内側に折返し状に肥厚。口縁内面に凹線状の幅広沈線文を施す。外面横・斜位磨き、内面磨で状の横位磨き。	高井東式
第291図 PL.179	436	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口底		高	E2	頸部にやや粗雑な羽状の沈線文を施す。外面縦位磨削り後、やや粗い横位磨き。内面横位磨き、一部被熱剥離。	高井東式
第291図 PL.179	437	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口底		高	E2	口縁に2-3本単位の横位沈線で区画文を施し、沈線交差部位に円形貼付文を施す。内面横位磨き。	高井東式

挿 図 PL.No.	No.	種 類 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第291図 PL.179	438	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部1/4	口 底	(34.0)	高	E2	く字状に内折する口縁に扇状の突起を付し、幅広の横線文や貼付文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きで光沢を帯びる。	高井東式
第291図 PL.179	439	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部1/4	口 底	(25.0)	高	G1	口縁に半円形の小突起を付す。口唇上面に斜刻文を施し、口縁に貼付文を縦位に施文。外面口縁横位磨き一部煤状炭化物付着、頸部横位磨削り痕を残す。内面横位磨き。	高井東式
第291図 PL.179	440	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	E2	低平・幅広い横位隆帯を口唇下と口縁に施し、それに沿って横線文を施文。内外面共にやや風化。	高井東式?
第291図 PL.179	441	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部1/3	口 底	(14.6)	高	J2	口縁部に隆起帯を施し、RL縄文を横位施文。口唇-口縁部に棒状や豚鼻状の貼付文を施す。内外面共にやや風化。	安行2式
第291図 PL.179	442	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	H1	口唇部がやや内削ぎ状に肥厚。所謂「西広型深鉢」か。体部に単沈線の横線文やLR縄文を横位に施す。外面は横位磨削り痕を残す粗い横位磨き。内面横位磨き、一部被熱剥離。	後期後葉?
第291図 PL.179	443	縄文土器 三角柱土製品	遺構外 1/8	長 幅		高	E2	各外面に棒状工具の渦巻状沈線文や刺突文を施す。	後期前半
第291図 PL.179	444	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	2.8 1.1	重 9.5	H1	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、周縁の一部に磨耗痕を持つ。	中期後半?
第291図 PL.179	445	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	2.9 0.7	重 7.5	E2	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、その周縁部に磨耗痕を持つ。	後期前半
第291図 PL.179	446	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	2.5 0.7	重 4.9	E2	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、僅かながら全周縁部に磨耗痕を持つ。	堀之内2式
第291図 PL.179	447	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	6.5 1.2	重 64.9	E2	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形するが、周縁部に磨耗痕を持たない。	堀之内1式
第291図 PL.179	448	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	4.8 1.1	重 27.4	E2	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、ほぼ全周縁部に磨耗痕を持つ。	後期前半
第291図 PL.179	449	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	3.95 9.5	重 21.9	D6	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、全周縁部に磨耗痕を持つ。	諸磯b式
第291図 PL.179	450	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	5.3 1.1	重 32.3	H1	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、周縁の一部に磨耗痕を持つ。	加曾利E3式
第291図 PL.179	451	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	4.0 1.5	重 23.9	H1	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、全周縁部に磨耗痕を持つ。	加曾利E3式
第292図 PL.179	452	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	2.5 1.0	重 7.9	H1	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、全周縁部に磨耗痕を持つ。	後期前半?
第292図 PL.179	453	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	3.0 1.1	重 10.0	E2	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、周縁部のほぼ全周に磨耗痕を持つ。	後期前半
第292図 PL.179	454	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	2.4 0.8	重 7.2	H1	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、全周縁部に磨耗痕を持つ。一部欠損。	後期前半
第292図 PL.179	455	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径 厚	6.0 1.4	重 53.4	E2	深鉢底部土器片を円形状に打割整形するが、周縁部に磨耗痕を持たない。	後期中葉
第292図 PL.179	456	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 1/2	径 厚	3.9 1.3	重 (15)	E2	深鉢の胴部土器片を円形状に打割整形し、欠損部を除く全周縁部に磨耗痕を持つ。	後期前半?
第292図 PL.179	457	縄文土器 円盤状土製品	遺構外 1/4	長 厚	3.3 0.7	重 7.7	G1	竹管状工具の沈線区画文内に同工具の斜位刺突文を充填。破断面に接して直径3mmの焼成前尖孔あり。	堀之内2式?

8区遺構外出土土器

第293図 PL.180	458	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	A4	L縄文を斜位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着。	有尾式
第293図 PL.180	459	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	A4	波状口縁。口縁部に半截竹管の平行沈線文3条により菱形意匠を構成。胴部はRL縄文を横位施文。内面横位磨き。	有尾式
第293図 PL.180	460	縄文土器 深鉢	遺構外 底部片	口 底		高	C6	半截竹管の条痕状横位平行沈線文を施し、4-7本単位の結節浮線文を渦巻状に施文。内面横位磨き。	下島式
第293図 PL.180	461	縄文土器 深鉢	遺構外 把手	口 底		高	B5	外縁端部に刻目を施し、半截竹管の集合沈線文を施文。	前期末葉
第293図 PL.180	462	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	B5	隆線の楕円区画文内に半截竹管の結節沈線文や波状文を施す。外面やや被熱風化、内面横位磨き。	阿玉台Ⅱ式
第293図 PL.180	463	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口 底		高	E4	横位や曲線状の隆線文に沿って篋状具の爪形文やペン先状具の三角押文を施す。内面丁寧な縦位磨き。	勝坂2式
第293図 PL.180	464	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	C1	半截竹管の平行沈線文を横・斜位に施し、それに沿って篋状具の爪形文や三角陰刻文を施文。内面横位磨き。	勝坂3式
第293図 PL.180	465	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	口 底		高	D2	刻目を持つ縦位隆線文の両側に半截竹管の押し引きによる浅い爪形文を施す。内面縦位磨き。	勝坂3式

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第293図 PL.180	466	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口 底		高	H1	眼鏡状小突起に接続する隆線文に沿って半円彫的な単沈線文を施す。内面横位磨き、一部に煤状炭化物付着。	焼町土器
第293図 PL.180	467	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	E2	口縁部に隆線区画内を施し、単沈線を羽状に充填施文。胴部は半截竹管の蛇行状懸垂文を施す。内面横位磨き。	加曾利E2式
第293図 PL.180	468	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	E4	隆帯に沿った凹線状の幅広沈線区画内にRL縄文を充填施文。内面やや粗い横位磨き。	加曾利E3式
第293図 PL.180	469	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	E4	RL縄文を口縁部横位、胴部縦位に施文。隆帯に沿った沈線区画文や沈線懸垂文を施す。内横位磨き。	加曾利E3式
第293図 PL.180	470	縄文土器 浅鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	E1	RL縄文を縦位施文し、2本隆線の渦巻文を施す。内外面共に赤色塗彩、内面丁寧な横位磨き。	加曾利E3式
第293図 PL.180	471	縄文土器 浅鉢	遺構外 頸部片	口 底		高	G1	隆帯渦巻文を幅広沈線文でなぞる。内面横位磨き。	加曾利E3式
第293図 PL.180	472	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部1/3	口 底		高	D1	RL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文間を擦り消す。外面やや被熱風化、内面縦位磨き・一部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第293図 PL.180	473	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口 底		高	D1	LR縄文を横位・多段に施文し、沈線懸垂文間を擦り消す。内面丁寧な縦位磨き。	加曾利E3式
第293図 PL.180	474	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	口 底		高	D4	隆線の懸垂文や曲線文を施し、単沈線文を充填的に施文。内外面共に一部に煤状炭化物付着、内面縦・斜位磨き。	郷土式
第293図 PL.180	475	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	E4	口縁部及び胴部に断面三角形の横位微隆帯や同懸垂文を貼付し、区画内にLR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E4式
第294図 PL.180	476	縄文土器 鉢	遺構外 胴部片	口 底		高	G1	渦巻状の沈線区画内にRL縄文を充填施文。内外面共に赤色塗彩、一部に煤状炭化物付着。	加曾利E5式?
第294図 PL.180	477	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	D1	波状口縁。波頂下にU字状の、口唇部下に楕円状の沈線区画文を施す。内外面共にやや被熱風化。外面一部に煤状炭化物付着、内面塗撫で状のやや粗い横位磨き。	堀之内1式
第294図 PL.180	478	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	D3	口縁部がく字状に短く内折。口縁に横位沈線文を施す。内外面共に横位磨き。	堀之内1式
第294図 PL.180	479	縄文土器 深鉢	遺構外 頸部片	口 底		高	D3	括れ部に横線文や指頭状の刺突文を施し、8字状貼付文を施文。外面煤状炭化物付着、内面被熱風化。	堀之内1式
第294図 PL.180	480	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	D4	櫛状具の斜線文を施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面丁寧な横位磨き。	後期後半
第294図 PL.180	481	縄文土器 鉢	遺構外 口縁部片	口 底		高	E2	口唇部上面に刻目をもつ波状口縁。横線文内に刺突文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利B2式
第294図 PL.180	482	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	口 底		高	E2	いわゆる3単位突起深鉢。突起部に接続して刺突文を施す。外面やや被熱風化、内面丁寧な横位磨き。	加曾利B2式
第294図 PL.180	483	縄文土器 円盤状土製品	遺構外 1/4	径厚 3.4 1.5	重	10.1	E1	最大厚17mmの楕円形状土製品。表裏両面に細沈線のS字状渦巻文を施す。	後期?
第294図 PL.180	484	縄文土器 土器片加工 円板	遺構外 完存	径厚 4.3 1.0	重	19.6	A4	L縄文を横位施文する深鉢土器片を円形状に打割整形し、全周縁部に磨耗痕を持つ。	有尾式?

9・10・13区遺構外出土土器

第295図 PL.180	485	縄文土器 深鉢	9区遺構外 口縁部片	口 底		高	A3	内外面共に条痕文を横位施文するが、内面は微弱。口縁部に横位の隆帯文を施し、口唇部上面と共にアナダラ属の貝殻腹縁文を連続施文。内外面共にやや被熱風化。	早期末葉
第295図 PL.180	486	縄文土器 深鉢	9区遺構外 口縁部片	口 底		高	A4	0段多条のLR環付縄文を横位・多段に施文し、半截竹管の重ね引き平行沈線で横線文や鋸歯文を施す。内外面共にやや被熱風化、外面煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第295図 PL.180	487	縄文土器 深鉢	9区遺構外 口縁部片	口 底		高	A4	口唇部に鋸歯状の小突起を複数個付す。RLの環付縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第295図 PL.180	488	縄文土器 深鉢	9区遺構外 口縁部片	口 底		高	A4	口唇部に鋸歯状の小突起を複数個付す。0段多条のRL環付縄文を横位・多段に施文。内外面共に煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第295図 PL.180	489	縄文土器 深鉢	9区遺構外 口縁部片	口 底		高	A4	波状口縁。0段縄丸組紐を横位・多段に施文。内外面共にやや被熱風化、内面横位磨き。	関山Ⅱ式
第295図 PL.180	490	縄文土器 深鉢	9区遺構外 底部1/2	口 底	(7.8)	高	A4/直前合2R・2L (0段多条)/	高台状の上げ底。2種類の直前合攪り縄文を横位・交互に多段施文して菱形意匠を構成。内面被熱風化、煤状炭化物付着。	関山Ⅱ式
第295図 PL.180	491	縄文土器 深鉢	9区遺構外 底部1/2	口 底	(8.6)	高	A4	上げ底。0段多条LR縄文を横位施文。内外面共に被熱風化・一部剥離。	関山Ⅱ式
第295図 PL.181	492	縄文土器 深鉢	9区遺構外 口縁部片	口 底		高	G1	半截竹管の集合沈線で横線文や波状文を多段に施文。内面横位磨き。	諸磯b式
第295図 PL.181	493	縄文土器 深鉢	13区遺構外 口縁部片	口 底		高	E2	口縁部に2条の横位刻目隆線文を、内面口唇部下に横位沈線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第295図 PL.181	494	縄文土器 深鉢	13区遺構外 口縁部片	口 底		高	D3	口縁部に横位の刻目隆線文を、内面口唇部下に横位沈線文を施す。外面やや風化、内面横位磨き。	堀之内2式
第295図 PL.181	495	縄文土器 深鉢	13区遺構外 口縁部片	口 底		高	D3	口縁部に横位の刻目隆線文と横帯沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面口唇部下に横位沈線文を施す。内面丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第295図 PL.181	496	縄文土器 深鉢	9区遺構外 口縁部片	口 底		高	D3	口縁部がく字状に短く内折。口縁部から頸部にかけてLR縄文を充填施文した横帯文や縦連対弧文を施す。内面丁寧な横位磨き、やや被熱風化。	加曾利B2式
第295図 PL.181	497	縄文土器 鉢	9区遺構外 胴部片	口 底		高	D3	単沈線の羽状文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き、やや風化。	加曾利B2式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第295図 PL.181	498	縄文土器 鉢	10区遺構外 胴部破片	口底		高	C3	RL縄文を横位・多段に施文。内面横位磨き。	諸磯b式
第295図 PL.181	499	縄文土器 深鉢	10区遺構外 口縁部破片	口底		高	E2	口縁部に横位の微隆起帯を施し、LR縄文を横・縦位に施文して部分的な羽状の意匠を構成。内外面共にやや被熱風化。	加曾利E4式
第295図	500	縄文土器 深鉢	10区遺構外 胴部上位～底部 1/3	口底	(7.0)	高	D5	やや幅広の横帯文を2段に施し、その区画内に羽状沈線文を充填施文する。外面やや被熱風化・一部に煤状炭化物付着、内面横位磨き。	加曾利B2式
第295図	501	縄文土器 深鉢	10区遺構外 底部2/3	口底	5.3	高	E1	外面縦位・内面横位の磨きと燻べ焼きにより、黒色光沢を帯びる。	加曾利B2式
第295図 PL.181	502	縄文土器 深鉢	10区遺構外 口縁部1/4	口底	(14.5)	高	G1	いわゆるソロバン玉形土器。口縁部に磨消弧線文を施し、繊細なL縄文を充填施文。屈曲部には篋状具の刻み目を施す。内外面共に一部に煤状炭化物付着、内面輪積み痕や粗い整形痕が残る。	加曾利B2式

1・2・4・5・7・8区遺構外出土石器

第298図 PL.181	1	剥片石器 石鏃	7区遺構外 4/5	長幅 (2.3) (1.4)	厚 0.5 (0.9)		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。両脚部の先端欠損。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	2	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 (2.3) (1.9)	厚 0.3 (0.7)		珪質頁岩	押圧剥離により整形する。先端部及び右脚部先端欠損。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	3	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 (1.7) (1.3)	厚 0.4 (0.6)		黒曜石	押圧剥離により整形する。左脚部先端欠損。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	4	剥片石器 石鏃	7区遺構外 4/5	長幅 2.0 (1.2)	厚 0.3 0.5		黒曜石	押圧剥離により整形する。左脚部欠損。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	5	剥片石器 石鏃	2区遺構外 完形	長幅 1.8 1.3	厚 0.5 0.5		黒曜石	押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	6	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 2.1 1.3	厚 0.5 0.5		黒曜石	押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	7	剥片石器 石鏃	4区遺構外 完形	長幅 2.0 1.5	厚 0.3 0.7		チャート	押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	8	剥片石器 石鏃	1区遺構外 4/5	長幅 2.9 (1.7)	厚 0.4 (1.3)		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。左脚部欠損。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	9	剥片石器 石鏃	7区遺構外 4/5	長幅 (2.4) 1.4	厚 0.5 (1.3)		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。先端部及び左脚部欠損。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	10	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 (2.4) 1.7	厚 0.5 (1.7)		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。先端部及び右脚部欠損。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	11	剥片石器 石鏃	2区遺構外 完形	長幅 2.5 1.5	厚 0.6 1.2		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	12	剥片石器 石鏃	5区遺構外 2/3	長幅 (3.1) 5.0	厚 0.7 (4.1)		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。脚部の形態は左右非対称であり、右脚部をやや舌状に作出する。先端部の折断痕は衝撃剥離の可能性が高い。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	13	剥片石器 石鏃	4区遺構外 4/5	長幅 (2.1) 1.9	厚 0.5 (1.5)		チャート	押圧剥離により整形する。片面の中央付近に摩滅が認められる。先端部の破損は、先端方向から力が加わったことによる衝撃剥離痕の可能性が高い。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	14	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 1.8 1.4	厚 0.3 0.8		黒色安山岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。小形の横長剥片を素材とすると想定される。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	15	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 2.1 1.4	厚 0.5 0.8		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。片面の中央付近の稜線上に部分的な摩滅が認められる。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	16	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 1.8 1.6	厚 0.3 0.6		黒曜石	押圧剥離により整形する。やや挟りを入れることで先端部を尖頭状に作出する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	17	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 1.8 1.9	厚 0.4 0.8		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	18	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 (2.4) 1.8	厚 0.5 1.3		黒曜石	片面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。比較的に大形の厚手の剥片を素材としている。押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	19	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 (1.4) (1.0)	厚 0.2 (0.2)		黒曜石	片面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。小形の横長剥片を素材としている。押圧剥離により整形する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	20	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 1.7 1.1	厚 0.4 0.4		チャート	押圧剥離により整形する。脚部は左右非対称形であり、挟りを入れることで左脚部をやや舌状に作出する。	凹基無茎鏃
第298図 PL.181	21	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 1.7 1.1	厚 0.3 0.4		チャート	押圧剥離により整形する。	平基無茎鏃
第298図 PL.181	22	剥片石器 石鏃	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 (2.8) 1.5	厚 0.5 (1.7)		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。両側縁の下半部は鋸歯状を呈する。先端部の折断痕は衝撃剥離の可能性が高い。	平基無茎鏃
第298図 PL.181	23	剥片石器 石鏃	5区遺構外 完形	長幅 1.7 2.1	厚 0.5 1.5		黒色安山岩	押圧剥離により整形する。かえし部の形態が左右非対称であり、右かえしを挟りを入れることでやや舌状に作出する。	平基無茎鏃
第298図 PL.181	24	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 2.4 1.3	厚 0.4 1.0		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。挟りを入れて先端部を尖頭状に作出する。	凹基有茎鏃
第298図 PL.181	25	剥片石器 石鏃	4区遺構外 ほぼ完形	長幅 2.1 (1.2)	厚 0.5 0.8		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。	凹基有茎鏃
第298図 PL.181	26	剥片石器 石鏃	4区遺構外 4/5	長幅 (2.8) 1.8	厚 0.4 (1.4)		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。両側縁は鋸歯状を呈し、下方がやや広がった形態である。茎部欠損。	平基有茎鏃
第298図 PL.181	27	剥片石器 石鏃	4区遺構外 完形	長幅 3.4 1.5	厚 0.5 1.6		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。両側縁はわずかに鋸歯状を呈し、下方がやや広がった形態である。	平基有茎鏃
第298図 PL.181	28	剥片石器 石鏃	4区遺構外 ほぼ完形	長幅 (3.3) 1.6	厚 0.5 (2.0)		黒色頁岩	押圧剥離により整形する。全体的に風化する。先端部及び茎部先端欠損。	平基有茎鏃
第298図 PL.181	29	剥片石器 石鏃	7区遺構外 完形	長幅 4.9 1.8	厚 0.6 3.1		チャート	押圧剥離により整形する。	凸基有茎鏃

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第298図 PL.181	30	剥片石器 石鏃	4区遺構外 4/5	長 幅	(1.5) 1.0	厚 重	(0.4) (0.5)	黒曜石	押圧剥離により整形する。茎部欠損。	凸基有茎鏃
第298図 PL.181	31	剥片石器 石鏃	7区遺構外 1/3	長 幅	(2.0) (1.7)	厚 重	0.4 (1.0)	黒色安山岩	押圧剥離により整形する。挟りを入れ先端部を尖頭状に作出する。下部欠損。	
第298図 PL.182	32	剥片石器 楔形石器	4区遺構外 完形	長 幅	2.4 1.8	厚 重	1.2 4.8	流紋岩	上下端に両極加撃痕が集中する。	
第298図 PL.182	33	剥片石器 楔形石器	7区遺構外 完形	長 幅	2.8 1.2	厚 重	0.8 2.8	チャート	上下端に両極加撃痕が集中する。	
第298図 PL.182	34	剥片石器 楔形石器	7区遺構外 完形	長 幅	2.0 1.3	厚 重	0.9 1.7	黒曜石	上下両端に両極加撃痕が集中する。片面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。	
第298図 PL.182	35	剥片石器 楔形石器	7区遺構外 完形	長 幅	2.1 1.4	厚 重	1.1 2.8	黒曜石	上下両端に両極加撃痕が集中する。小形剥片生産のための石核として機能した可能性もある。	
第298図 PL.182	36	剥片石器 楔形石器	4区遺構外 完形	長 幅	2.3 2.9	厚 重	0.7 5.4	珪質頁岩	上下端に両極加撃痕が集中する。裏面に素材剥片段階の主要剥離面が大きく残る。	
第298図 PL.182	37	剥片石器 楔形石器	7区遺構外 完形	長 幅	3.0 3.3	厚 重	0.5 4.5	黒色安山岩	左右端に両極加撃痕が集中する。上下端にも両極加撃痕がわずかに認められ、上端には微細剥離痕が集中する。	
第298図 PL.182	38	剥片石器 楔形石器	2区遺構外 完形	長 幅	2.3 2.1	厚 重	1.1 5.1	黒曜石	上下端に両極加撃痕が集中する。左右側片には両極加撃に伴う剪断面が認められる。	
第298図 PL.182	39	剥片石器 楔形石器	7区遺構外 完形	長 幅	3.4 2.2	厚 重	1.0 6.4	黒色頁岩	上下端に両極加撃による剥離痕が認められる。片面に自然面を大きく残す。円礫を利用する。	
第299図 PL.182	40	剥片石器 楔形石器	7区遺構外 完形	長 幅	3.8 3.1	厚 重	1.3 11.9	珪質頁岩	上端に両極加撃痕が集中する。下端は折断面と解釈されるが、両極加撃による衝撃による生じたと考えられる。表面右側片の剥離痕は両極加撃による剪断面である。	
第299図 PL.182	41	剥片石器 楔形石器	8区遺構外 完形	長 幅	3.0 3.3	厚 重	0.9 10.0	黒色安山岩	上下両端と左右両端に両極加撃痕が認められる。片面に自然面を残す。円礫を利用している。	
第299図 PL.182	42	剥片石器 楔形石器	8区遺構外 完形	長 幅	3.5 4.8	厚 重	0.9 22.0	黒色安山岩	上下両端と左右両端に両極加撃痕が認められる。	
第299図 PL.182	43	剥片石器 楔形石器	7区遺構外 完形	長 幅	6.5 4.6	厚 重	1.3 32.0	黒色頁岩	上下端に両極加撃痕が認められる。裏面の左側片から下端にかけての大きな剥離面は両極加撃による剪断面と考えられる。	
第299図 PL.182	44	剥片石器 石匙	4区遺構外 完形	長 幅	2.0 3.3	厚 重	0.7 4.1	赤碧玉	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残し、小形の横長剥片を素材とする。摘み部から縁辺部の二次加工は主要剥離面側に限定される。	横型
第299図 PL.182	45	剥片石器 石匙	7区遺構外 ほぼ完形	長 幅	3.8 (4.3)	厚 重	0.9 10.9	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。摘み部と両側縁の加工は両面加工であるが、下端部は背面側に二次加工が集中する。	横型
第299図 PL.182	46	剥片石器 石匙	5区遺構外 ほぼ完形	長 幅	(3.7) 4.1	厚 重	0.7 8.3	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。一部に自然面が認められる。円礫を利用する。機能部と想定される先端部の二次加工は背面側に限定される。摘み部の一部欠損。	横型
第299図 PL.182	47	剥片石器 石匙	7区遺構外 完形	長 幅	3.7 4.5	厚 重	0.6 9.0	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。横長剥片を素材とし打面は複剥離面である。機能部と想定される先端部の二次加工は主要剥離面側に集中する。	横型
第299図 PL.182	48	剥片石器 石匙	7区遺構外 ほぼ完形	長 幅	3.7 (4.9)	厚 重	0.5 9.0	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。打面は複剥離面。摘み部は主要剥離面側と背面側に二次加工が認められるが、縁辺部は主要剥離面側に二次加工が集中する。	横型
第299図 PL.182	49	剥片石器 石匙	7区遺構外 ほぼ完形	長 幅	3.9 (6.0)	厚 重	0.9 12.3	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。横長剥片を素材とする。平坦打面。素材剥片の形態を大きく変えることなく、摘み部と先端部に集中的な二次加工が認められる。	横型
第299図 PL.182	50	剥片石器 石匙	2区遺構外 完形	長 幅	4.1 4.2	厚 重	0.9 10.1	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。自然面打面。機能部と想定される末端部の加工は背面側に集中する。摘み部の加工は主要剥離面側に集中する。	横型
第299図 PL.182	51	剥片石器 石匙	5区遺構外 2/3	長 幅	(4.4) (3.3)	厚 重	(1.1) 19.9	黒色頁岩	摘み部及び縁辺部に両面加工が認められる。機能部と想定される下端部も両面加工である。	横型
第299図 PL.182	52	剥片石器 石匙	7区遺構外 ほぼ完形	長 幅	5.0 4.1	厚 重	0.7 9.3	黒色頁岩	表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。打面は複剥離面である。素材剥片の形態を大きく変えることなく、摘み部と先端部を中心に二次加工を加える。	縦型
第299図 PL.182	53	剥片石器 石匙	7区遺構外 完形	長 幅	5.6 3.4	厚 重	1.3 17.1	珪化凝灰岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。縦長剥片を使用し、節理面を打面とする。	縦型
第299図 PL.182	54	剥片石器 石匙	5区遺構外 完形	長 幅	6.7 2.4	厚 重	0.5 8.5	珪質頁岩	縦長剥片を素材とする。素材剥片を逆位に用いる。側縁部の二次加工は素材剥片の背面側が中心である。	縦型
第299図 PL.182	55	剥片石器 石匙	7区遺構外 4/5	長 幅	(4.4) 3.2	厚 重	0.4 5.6	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残し、縦長剥片を素材とする。摘み部は両面加工であるが縁辺部は背面側に二次加工が集中する。	縦型
第299図 PL.182	56	剥片石器 石匙	4区遺構外 完形	長 幅	6.0 4.0	厚 重	0.9 16.1	黒色頁岩	表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。摘み部の加工は主要剥離面側に集中し、先端部付近の加工は背面側に集中する。	縦型?
第299図 PL.182	57	剥片石器 搔器	4区遺構外 完形	長 幅	3.7 3.5	厚 重	0.7 6.9	珪質頁岩	表裏面に素材剥片の剥離面を大きく残す。打面は単剥離面である。二次加工は周辺全体に認められ片面加工が主体的である。	
第299図 PL.182	58	剥片石器 削器	7区遺構外 完形	長 幅	5.3 9.8	厚 重	1.2 77.6	黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。縁辺部のほぼ全周に両面加工が認められる。形態的特徴から石包丁の代替え器種の可能性を想定する必要がある。	
第299図 PL.182	59	剥片石器 削器	7区遺構外 完形	長 幅	4.2 8.0	厚 重	0.7 30.0	礫ノフェイス	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。先端部に剥離痕が集中するが散発的であり使用痕の可能性もある。形態的特徴から石包丁の代替え器種の可能性を想定する必要がある。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第299図 PL.182	60	剥片石器 削器	7区遺構外 完形	長幅 3.3 6.7	厚 0.7 34.6		黒色頁岩	上面に自然面を残す。円礫を利用する。下端と左側縁は両面加工である。左側縁は片面加工であり、裏面には上面の自然面を打面とする二次加工が集中する。	
第300図 PL.182	61	剥片石器 削器	7区遺構外 完形	長幅 4.4 7.6	厚 1.1 29.1		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。横長剥片を素材とする。下端部と右側縁部の背面側に二次加工が集中する。尖頭部の作出を意図した加工とも判断できる。	
第300図 PL.182	62	剥片石器 削器	7区遺構外 2/3	長幅 5.8 (8.6)	厚 1.4 76.8		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。大形の横長剥片を素材とする。一端に自然面を残す。円礫を利用する。先端部に両面加工痕が集中する。形態的特徴から石包丁の代替器種の可能性を想定する必要がある。	
第300図 PL.182	63	剥片石器 削器	4区遺構外 完形	長幅 5.4 2.3	厚 1.0 1.7		チャート	上下端に両極加撃痕と想定される剥離痕があることから楔形石器的な使用も想定されるが、左右側縁には入念な二次加工が認められ前段階では削器として機能していた可能性がある。	
第300図 PL.182	64	剥片石器 削器	7区遺構外 完形	長幅 8.0 4.5	厚 1.4 33.9		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。自然面打面であり、円礫を利用する。先端部の剥離痕は微細である。右側縁は内湾し加工は主要剥離面側に集中する。	
第300図 PL.182	65	剥片石器 削器	2区遺構外 完形	長幅 7.5 4.2	厚 1.5 58.4		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。片面に自然面を大きく残す。円礫を利用する。全周に両面加工が入念に施され小形であることから削器とした。	
第300図 PL.183	66	剥片石器 削器	5区遺構外 完形	長幅 12.3 5.1	厚 1.7 130.7		珪質頁岩	大形の横長剥片を素材とする。自然面を大きく残し自然面打面である。円礫を利用する。右側縁は片面加工であるが、左側縁は両面加工である。	
第300図 PL.183	67	剥片石器 三稜石器	7区遺構外 完形	長幅 12.4 2.9	厚 2.7 93.7		黒色頁岩	稜上に両側加工を丁寧に施し断面三角形に整形する。	
第300図 PL.183	68	剥片石器 石錐	2区遺構外 完形	長幅 6.5 6.2	厚 1.8 65.7		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。先端部の作出は、左側縁は片面加工で右側縁は両面加工である。	
第300図 PL.183	69	剥片石器 石錐	7区遺構外 完形	長幅 3.7 2.6	厚 0.6 4.8		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。小形の横長剥片を素材とする。素材剥片の形態を大きく変えることなく先端部付近に集中的な二次加工が認められる。	
第300図 PL.183	70	剥片石器 石錐	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 (3.2) 2.8	厚 0.7 4.0		黒色頁岩	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。小形の横長剥片を素材とし打面は単剥離面である。両面加工により先端部を作出する。	
第300図 PL.183	71	剥片石器 石錐	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 2.3 1.9	厚 0.5 2.8		チャート	両面加工により先端部を作出する。先端部欠損。	
第300図 PL.183	72	剥片石器 打製石斧	2区遺構外 完形	長幅 12.9 5.5	厚 2.8 201.3		珪質頁岩	全体的に表面の風化が著しい。両側片にはつづれが認められ着柄痕の可能性はある。	撥形
第300図 PL.183	73	剥片石器 打製石斧	4区遺構外 完形	長幅 12.5 5.5	厚 2.6 167.3		黒色頁岩	裏面の一部に自然面を残し円礫を利用する。表裏面の右側先端部付近に摩滅が認められ使用痕の可能性はある。右側片の中央から上方にかけてつづれが認められ着柄痕の可能性はある。	撥形
第300図 PL.183	74	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 完形	長幅 11.7 6.7	厚 2.0 220.6		黒色頁岩	裏面に自然面を残し円礫を利用する。表裏面の先端付近の摩滅が著しく使用痕の可能性はある。両側片の中央から上方にかけてつづれが認められ着柄痕の可能性はある。	撥形
第300図 PL.183	75	剥片石器 打製石斧	5区遺構外 完形	長幅 11.5 5.2	厚 2.1 131.1		黒色頁岩	刃部と想定される先端部は片面加工であり、エンドスクレイパーに類似した刃部形態を呈する。	撥形
第300図 PL.183	76	剥片石器 打製石斧	8区遺構外 ほぼ完形	長幅 10.2 5.2	厚 1.7 95.3		黒色頁岩	先端部付近の摩滅痕が著しく、使用痕の可能性はある。	撥形
第301図 PL.183	77	剥片石器 打製石斧	2区遺構外 ほぼ完形	長幅 7.7 4.6	厚 0.9 32.5		黒色頁岩	表裏面の先端付近の摩滅が著しく使用痕の可能性はある。表面の上方に部分的な摩滅が認められ着柄痕の可能性はある。	撥形
第301図 PL.183	78	剥片石器 打製石斧	1区遺構外 完形	長幅 11.3 4.5	厚 2.0 148.7		変質安山岩	表面に部分的な摩滅が認められる。両側片の中央から上部にかけて摩滅とつづれが認められ着柄痕の可能性はある。裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。	短冊形
第301図 PL.183	79	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 完形	長幅 10.6 4.6	厚 2.6 145.6		変質安山岩	裏面には自然面を大きく残し円礫を利用する。両側片の中央付近はつづれており着柄痕の可能性はある、	短冊形
第301図 PL.183	80	剥片石器 打製石斧	8区遺構外 完形	長幅 10.4 4.2	厚 1.5 76.8		細粒輝石安山岩	裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。先端部の刃部は片面加工である。	短冊形
第301図 PL.183	81	剥片石器 打製石斧	5区遺構外 完形	長幅 9.0 4.2	厚 2.1 81.0		砂質頁岩	裏面に大きく自然面を残し円礫を利用する。	短冊形
第301図 PL.183	82	剥片石器 打製石斧	8区遺構外 完形	長幅 9.5 4.1	厚 1.6 65.8		黒色頁岩	裏面の中央に自然面を残し、円礫を利用する。右側片のやや上方につづれが認められ着柄痕の可能性はある。	短冊形
第301図 PL.183	83	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 完形	長幅 11.0 5.2	厚 2.5 189.4		粗粒輝石安山岩	表面の上端付近に摩滅が認められる。右側片の中央付近に摩滅が認められ着柄痕の可能性はある。裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。	短冊形
第301図 PL.183	84	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 2/3	長幅 (9.3) 4.3	厚 1.4 68.9		変質安山岩	裏面に自然面を大きく残し円礫を利用する。	短冊形
第301図 PL.183	85	剥片石器 打製石斧	8遺構外 2/3	長幅 (7.7) 3.8	厚 1.6 52.6		細粒輝石安山岩	裏面に自然面を残し、円礫を利用する。先端部付近に部分的な摩滅が認められ使用痕の可能性はある。両側片の中央付近にはつづれが認められ着柄痕の可能性はある。	短冊形
第301図 PL.183	86	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 完形	長幅 8.7 6.2	厚 1.5 74.5		黒色頁岩	両側片中央の挟り部はつづれが著しく部分的な摩滅も認められ着柄痕の可能性はある。	分銅形
第301図 PL.183	87	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 1/2	長幅 (9.7) (8.4)	厚 (3.0) (294.7)		細粒輝石安山岩	両側片の括れ部には摩滅とつづれが認められ装着痕の可能性はある。裏面には自然面を大きく残し円礫を利用する。	分銅形

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第301図 PL.183	88	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 完形	長幅 9.8 4.3	厚重 1.4 55.9	黒色頁岩	全体的に表面の風化が著しい。	分銅形
第301図 PL.183	89	剥片石器 打製石斧	7区遺構外 完形	長幅 10.5 6.8	厚重 2.2 156.9	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。円礫を利用する。両側片の挟り部には摩滅が認められ着柄痕の可能性はある。	分銅形
第301図 PL.183	90	剥片石器 石核	7区遺構外 完形	長幅 4.7 5.0	厚重 3.0 86.5	黒色安山岩	片面に自然面を大きく残す。小形の円礫を利用する。主に上下端に打面を設定し小形剥片を剥離する。	
第301図 PL.183	91	剥片石器 石核	4区遺構外 完形	長幅 3.8 6.7	厚重 3.4 104.9	黒色安山岩	自然面を大きく残す。小形の円礫を利用する。小形の横長剥片を剥離する状況が認められる。	
第301図 PL.183	92	剥片石器 石核	7区遺構外 完形	長幅 14.9 12.3	厚重 7.9 1532.1	黒色頁岩	右側面と上面の一部に自然面を残し大形の円礫を利用する。打面を固定せず比較的大形の剥片を剥離する。	
第301図 PL.183	93	剥片石器 磨製石斧	4区遺構外 不明	長幅 (7.5) (7.0)	厚重 (2.5) 160.8	蛇紋岩	全体的に研磨され丁寧に仕上げられている。上部欠損。	
第301図 PL.183	94	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 完形	長幅 5.5 1.8	厚重 0.9 16.4	珪質頁岩	全体的に丁寧に研磨されており斧形に整形される。	
第301図 PL.183	95	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 2/3	長幅 (6.5) 3.9	厚重 1.4 (56.7)	変質蛇紋岩	小形でありほぼ全面に研磨が及ぶ。先端の刃部両側に刃部に直交する細かい線条痕が集中し部分的な摩滅も認められ使用痕の可能性はある。基部欠損。	
第301図 PL.183	96	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 2/3	長幅 (7.4) 3.8	厚重 1.2 (53.6)	変質蛇紋岩	全体的に研磨され丁寧に仕上げられている。上部欠損。	
第301図 PL.183	97	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 不明	長幅 (4.2) (3.4)	厚重 (1.5) (35.1)	珪化凝灰岩?	全面に研磨が認められ丁寧に加工されている。	
第302図 PL.183	98	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 2/3	長幅 (12.2) (6.3)	厚重 (4.4) (435.4)	蛇紋岩	全体的に研磨されている。先端に認められる剥離痕には明確な打点が認められ意図的に剥離されている。	
第302図 PL.183	99	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 不明	長幅 (6.5) (5.3)	厚重 (3.4) (173.4)	変質安山岩	全面に研磨が認められ丁寧に加工されている。部分的に敲打の痕跡が認められ加工時の痕跡と想定される。	
第302図 PL.184	100	剥片石器 磨製石斧	7区遺構外 1/2	長幅 3.6 2.6	厚重 0.5 (3.7)	黒色頁岩	表裏面ともに素材剥片段階の剥離面を大きく残す。握み部には集中した二次加工が認められるが、先端部の加工は低調である。	横型
第302図 PL.184	101	剥片石器 石錘	7区遺構外 完形	長幅 4.2 3.6	厚重 0.8 20.2	変質玄武岩	上下端に挟り状の加工が認められる。下端の挟り部には摩滅が認められる。扁平な小形円礫を利用する。	
第302図 PL.184	102	石製品 砥石	7区遺構外 完形	長幅 15.9 9.3	厚重 2.0 383.2	牛伏砂岩	表裏面にわずかに凹凸する砥面が認められる。表面には長さ5mm程度の頁岩の碎片が散在するが、その表面には縦方向の細かい線条痕が認められる。側面部にも部分的な砥面が認められる。	
第302図 PL.184	103	礫石器 磨石	7区遺構外 完形	長幅 16.7 10.0	厚重 4.3 1293	変質安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第302図 PL.184	104	礫石器 磨石	7区遺構外 完形	長幅 14.5 8.5	厚重 4.2 840.0	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面のほぼ中央に敲打痕が集中する。	
第302図 PL.184	105	礫石器 磨石	7区遺構外 完形	長幅 16.7 8.9	厚重 5.1 1258.0	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められ、両側面との境界付近に稜が形成される。表裏面のほぼ中央に敲打痕が集中する。	
第302図 PL.184	106	礫石器 磨石	7区遺構外 完形	長幅 7.0 5.4	厚重 4.6 250.1	粗粒輝石安山岩	小形の極円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第302図 PL.184	107	礫石器 磨石	7区遺構外 完形	長幅 8.0 6.7	厚重 3.1 220.6	石英閃緑岩	扁平な小形円礫を利用する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第302図 PL.184	108	礫石器 凹石	7区遺構外 4/5	長幅 (10.2) 7.8	厚重 3.0 389.2	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面の中央に浅い凹みが認められる。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第302図 PL.184	109	礫石器 磨石	7区遺構外 完形	長幅 11.3 5.9	厚重 2.7 279.2	変質安山岩	扁平な円礫を利用する。表裏面のほぼ全面にわたり磨面が認められる。下端部に敲打痕が認められる。	
第302図 PL.184	110	礫石器 凹石	7区遺構外 4/5	長幅 13.8 8.3	厚重 4.2 690	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面の上方と下方、裏面の下方に浅い凹みが認められる。表面のほぼ全面に磨面が認められる。裏面には上端方向、下端方向、左側片方向からの剥離面が認められるが敲打による可能性がある。	
第302図 PL.184	111	礫石器 凹石	7区遺構外 2/3	長幅 (9.4) 6.4	厚重 3.4 (258.3)	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面の中央に浅い凹みが2箇所認められる。裏面の中央に敲打痕が集中する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第302図 PL.184	112	礫石器 凹石	7区遺構外 完形	長幅 10.9 7.6	厚重 3.4 401.6	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面のほぼ中央に浅い凹みが2箇所認められる。裏面の中央には浅い凹みが縦方向に連続する。両面の中央付近には磨面が認められる。右側面に敲打痕が集中する。	
第302図 PL.184	113	礫石器 凹石	7区遺構外 完形	長幅 11.7 9.9	厚重 5.0 820.8	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。表面の中央に浅い凹みが2箇所認められる。裏面の中央には敲打痕が集中する。表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。	
第303図 PL.184	115	礫石器 石皿	7区遺構外 完形	長幅 25.8 24.1	厚重 7.2 7300.0	粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。正面の中央付近にほぼ平坦な磨面が認められ、敲打を受けた痕跡がわずかに残る。裏面には部分的な剥落が認められる。	
第303図 PL.184	116	礫石器 石皿	7区遺構外 1/4	長幅 (21.6) (13.6)	厚重 (9.7) 2633.8	粗粒輝石安山岩	明確な縁をもつ。正面の中央に浅い凹み状の磨面をもつ。凹み内部は非常に滑らかである。	
第303図 PL.184	117	礫石器 石皿	7区遺構外 1/3	長幅 (20.8) (15.7)	厚重 6.4 2417.3	緑色片岩	正面に比較深い凹み状の磨面をもつ。凹み内部は滑らかである。緑色片岩(結晶片岩)を利用しており、外面部が自然面であるか加工面であるか判断できない。	
第303図 PL.184	118	礫石器 石皿	7区遺構外 1/3	長幅 (20.0) (11.9)	厚重 (6.5) 2031.4	粗粒輝石安山岩	明確な縁をもつ。正面の中央にほぼ平坦な磨面をもつ。外面は整った形態であり全体的に整形されている可能性がある。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/原体/色調 ・石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第303図 PL.184	119	礫石器 石皿	7区遺構外 完形	長幅 14.0 14.4	厚 5.0 1322.4		粗粒輝石安山岩	扁平な円礫を利用する。表面の中央に敲打を受けることで形成されたと想定される浅い凹みが認められる。	
第303図 PL.184	120	石製品 石棒	7区遺構外 不明	長幅 (7.9) (2.3)	厚 (1.9) 40.2		変質玄武岩	全体的に丁寧に研磨整形している。特に上部は滑らかであり縦方向の擦痕が主体的である。中央の括れ部には横方向の擦痕が認められる。	
第303図 PL.184	121	石製品 垂飾?	7区遺構外 ほぼ完形	長幅 4.2 2.9	厚 0.4 5.9		黒色頁岩	全面に研磨痕が認められ丁寧仕上げられている。下端に径約2mmの片側穿孔された孔が1箇所認められるが、孔は中央付近で折断面により切られている。この折断面の一部には研磨の痕跡が認められ、折断面後の研磨作業が還元される。	
第303図 PL.185	122	石製品 垂飾?	7区遺構外 完形	長幅 1.8 1.3	厚 0.9 3.16		緑色透明鉱物	緑灰色。全体的によく研磨されている。孔は表面から裏面にむかい細くなっているが、裏面の孔の周辺部には同心円状の浅い凹みが認められる。表面の孔径約4mm、裏面の孔径約1mm。	
第304図 PL.185	123	石製品 不明	2区遺構外 完形	長幅 8.8 5.4	厚 4.7 63.3		軽石	軽石を利用し多孔質である。反対側に穿孔した孔が下部に1個認められる。他の孔は全て反対側に貫通しておらず7個認められるが深さは一定でない。孔径はいずれも約8mm。	
第304図 PL.185	124	石製品 不明	7区遺構外 完形	長幅 3.8 2.9	厚 1.2 13.7		玉髄	にぶい赤褐色。扁平な小形円礫を利用する。両側片に括れ状の加工が認められ著しくつぶれている。	
第304図 PL.185	125	石製品 不明	7区遺構外 完形	長幅 4.5 5.9	厚 1.9 69.1		変質安山岩	垂円礫を利用する。表裏面は全体的に滑らかであり砥石として利用が想定される。表面上方に漏斗状の凹みがあり、その内部は比較的滑らかである。	
第304図 PL.185	126	礫石器 多孔石	7区遺構外 完形	長幅 20.2 25.3	厚 16.1 6400.0		粗粒輝石安山岩	正面、裏面、下側面を中心に漏斗状の孔が多数認められる。孔の内部は全体的に比較的滑らかである。	
第304図 PL.185	127	礫石器 多孔石	8区遺構外 完形	長幅 46.9 44.2	厚 26.7 52500		粗粒輝石安山岩	裏面には直径2cm以上の孔が14箇所、2cm未満の孔が46箇所に認められる。	
第304図 PL.185	128	礫石器 多孔石	8区遺構外 完形	長幅 25.2 18.5	厚 17.5 6360		粗粒輝石安山岩	石材の性質により、自然孔との分類が不明の小孔多数あり。裏面に孔は認められない。	
第304図 PL.185	129	礫石器 多孔石	8区遺構外 完形	長幅 56.9 45.0	厚 27.0 67300		粗粒輝石安山岩	裏面中央付近の平坦面に孔は認められない。平坦面を除く周縁には大小の孔が全周する。	
第305図 PL.185	130	礫石器 多孔石	7区遺構外 完形	長幅 23.4 25.0	厚 16.4 8000.0		粗粒輝石安山岩	ほぼ全面にわたり漏斗状の孔が多数認められる。孔の内部は、底面付近は比較的滑らかであるが側面部は細かな凹凸が認められる。	
第305図 PL.185	131	礫石器 多孔石	8区遺構外 完形	長幅 36.9 39.4	厚 29.9 52900		粗粒輝石安山岩	裏面は周縁付近に8箇所の浅い孔が認められる。	
第305図 PL.185	132	礫石器 多孔石	8区遺構外 完形	長幅 55.5 47.4	厚 24.9 67800		粗粒輝石安山岩	裏面に孔は認められない。	
第305図 PL.185	133	礫石器 多孔石	8区遺構外 完形	長幅 50.8 27.0	厚 31.2 43240		粗粒輝石安山岩	左側面、右側面はともに6箇所の孔が認められる。左半部裏面には2箇所の孔あり。	